

---

**【完結済】異世界薬局（ E P 4 ） / 【連載中】世界薬局  
（ E P 4 . 1 ）**

---

高山 理図

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【完結済】異世界薬局（EP4） / 【連載中】世界薬局（EP4・1）

### 【Nコード】

N8541CR

### 【作者名】

高山 理図

### 【あらすじ】

西暦2048年。

研究一筋だった日本の薬学者は、過労死をして異世界で目覚めた。

2022/6/15 本編（EP4）完結しました。

2022/6/17 後日譚（EP4・1）連載開始しました。

## 序話 異世界転生 〜頑張りすぎはほどほどに〜（前書き）

### 【読者様へ】

・タイトルのための有償購入した写真素材と、作中説明のための模式図などが挿入されています。

・書籍版はかなり加筆されているので、書籍版と比較するとウェブ版は淡泊な印象を受けるかと思います（序盤も違います）。悪しからずご了承ください。

### 【専門家の方へ】

筆者は医学系研究職で医学博士（Ph.D.）ですが、医師ではなく臨床医学・薬学には精通していませんので、薬学描写で違和感、差し支えがあれば教えてください。

医師、薬剤師、技師その他専門家の方は、査読、考証していただいた場合、ウェブ版、書籍版の謝辞にお名前を掲載させていただきま  
す。DMにてご連絡ください。

本作は、下図のシリーズのEP4です。

<i579462—2496>

## 序話 異世界転生 ～頑張りすぎはほどほど～

果てなき深宇宙の次元の狭間。

そこに、かつて生命であつた存在が辿り着く、生者の知らない場所がある。

無限の広がりを持つ墓地は名前のない墓守に守られ、死者たちが時間のない眠りにについている。

ある日、墓守はまどろむ死者の中から、ひとつの墓を選び出した。

墓守は記憶の核を墓標から引き抜き、宙へと投げ放つ。

それは遥かな宇宙を駆け、さる惑星世界の落雷事故によって死亡した少年に突き刺さった。

少年の心臓は再び拍動をはじめた。

墓守は死者が大切にしていた遺品も、すぐ傍らに贈った。

受肉した死者の核は、まだ死を受容できない少年の肉体に根をおろし、意識の接続が始まった。

強く湿った風が、土埃を含んで彼の肌の上を吹き抜けてゆく。

遠雷がおどろおどろしく鳴り響いていた。

（俺は……どうなったんだ？）

… … …

彼は西暦20XX年の日本を生きる、若き薬学者であつた。

彼は実の妹を幼い頃に脳腫瘍で亡くしてからというものの、薬学の

道を志し、やがて優秀な研究者となった彼は、日夜大学の研究室に泊まり込み研究に明け暮れた。

冴えた頭脳と熱心な性格、精力的な研究が結実し、次々に難病の新薬を世に打ち出した。

その成果が世界中に知れ渡り、世界中の人々は彼の活躍に期待を寄せた。

若くして名を成した彼は、生き急ぐ。

時間が足りない、誰も病気で苦しむことのない、病気によって人々が死に別れることのない世界を造りたい。

もっと、もっと、もっと人を癒したいと。

猪突猛進型の若き薬学者は、理想に燃えた。

一日一秒でも早く、新しい薬を届け、彼の造った薬で地球上からありとあらゆる疫病や疾患をなくしたい。

それは、彼にとっての人生を賭けた闘争だった。

しかし志半ばにして、彼の闘争はあっけなく終焉を迎える。

不眠不休で研究に没頭しすぎたため、肉体が限界を迎えたのだ。

死因は急性心筋梗塞、典型的な過労死だった。

そして彼は、死の記憶も曖昧なまま今に至る。

彼の今生の生は、嵐の過ぎ去った喧騒の中で、無様に倒れ臥したこの時から始まろうとしていた。

ファルマ・ド・メディシス（*Farma de Medicis*）、宮廷薬師見習いの少年として。

これは、前世に日本で過労死した仕事人間のもと薬学者が、生き急がず、頑張りすぎずほどほどに、

第二の人生を異世界の薬師として生きる物語である。

## 1話 シャルロットとの出会いと、水の神術

< i 1 5 7 1 8 9 — 2 4 9 6 >

ひとつずつ、情報は入ってくる。

石造りの部屋の天井は低い。

石壁には朱のタペストリが掛かっている。

窓は小さく、昼間だというのに薄暗い。

部屋の奥では暖炉の火がぱちぱちと薪をはぜさせ、燃えていた。

彼が身を横たえているベッドのシーツはガサガサとして、藁のような匂いがした。

一体どこの洋館に運び込まれたのか、と彼は戸惑った。

「よいしょ、よいしょ」

ベッドサイドには、彼を介抱し甲斐甲斐しく動き回る少女がいる。

「ここは……？」

居心地の悪さを感じつつ、彼は少女に尋ねる。

「ファルマ様は雷に当たってしまったのです！ 記憶、思い出せますか？」

顔を近くに寄せ、彼を心配そうに覗き込む。年の頃は10歳ほどで、あどけない笑みを向けていた。

彼女は簡素なドレスに、白いエプロンをかけている。美しく艶やかなピンクゴールド色の長髪を、肩にするりと流している。頭には白いかぶりものをちょこんと乗せた、吸い込まれそうな碧眼の可憐な美少女だ。

コスプレでもしているだろうか、と想像力に乏しい彼はそんな感想を懷いた。

彼は慌てて起き上がろうとするが、緩みきった全身の筋肉がそれを許さない。

「いや、それが、記憶がはつきりしないんだ……。君は誰？」

それを聞いた少女から笑顔が消え、寂しげな顔を向ける。

「もしかして、私のことも忘れちゃいました、ね？ 普通と違う青い雷に打たれたんですもの、そうですね」

「悪いけどそうらしい。俺は記憶喪失になったのか」

すると彼女は咳払いをし、すました顔を見ると、スカートのすそをちょいと持ち上げ、恭しく一礼する。

「ではでは、改めましてご紹介します。召使いのシャルロットです。いつものようにロツテとお呼びください。旦那様に召抱えていただいた母とともに、小さいころからお屋敷にお仕えてまいりました。何でもお申し付けください、ファルマ様」

この屋敷に住み込みで、母子ともに働いているらしい。子供が召使いだなんて警察に連れて行かなければ、と彼が思索していると。ファルマ様、と再度呼びかけられる。何度も呼ばれるので、彼はハッと気づく。



「ファルマって、俺のこと？」

（何だよその、どっかの製薬会社みたいな名前は）

彼は微妙な気分になる。今彼女につけられたあだ名なのだろうか。

「はい、ファルマ・ド・メディシス様でございます」

ド・メディシス。

中世のフィレンツェの支配者であったメディチ家、そのフランス語読みっぽい姓だな、と彼は感じた。ちなみに、メディチ自体はイタリアの姓だ。

だいたい、日本人顔なのに誰と間違えてるんだよ、とひとしきり突っ込んだ後、

「鏡、見せてもらえる？」

もしかして、人違いではないのかも、と彼は嫌な予感がする。

「今、お持ちしますね」

わざわざ鏡を見ずとも彼の以前の体とは違うのは明白だった。手や腕を見るに、小さすぎる。どう見ても子供のようなのだ。そもそも人種も違う……。

小さな手鏡の中を覗き込むと、金髪碧眼で整った顔立ちをした白人少年が間抜けな顔をしてこちらを見ていた。

「嘘だろ」

言っ事をきかない体に鞭打ってベッドから起き上がり、窓の外を見る。

すると、中世ヨーロッパを彷彿とさせる異国の町並みが視界に飛び込んできた。窓の外に広がるのは、古めかしい衣装を着た人々の往来。活気付く市場。鐘楼から聞こえる鐘の音。

ぼかーん、と彼の口が開いた。

放心状態の彼を心配したロッテが、背後からぽんぽんと軽く背中を叩きに来た。

「大丈夫ですか？」

「ごめん、ちよつと大丈夫じゃない」

（これが夢でないとすれば、俺は生まれ変わったのか？）

転生などという非科学的な現象は信じない彼であつたが、いざ当事者となれば信じないわけにもいかない。

（何で死んだかな。過労死かなあ……だろうなあ）

詳しい死因は思い浮かばなかったが、過労死をしたのかも、ということは真つ先に想像が及んだ。それほど彼の勤務時間はブラックだったからだ。フレックスタイムがどうか、サービス残業がどうか、そういうものの限度を超えていた。

冷静に勤務時間を計算したら、一日20時間を上回っていただろう。研究室の一角で、寝袋で寝起きしていたのだから。とはいえ職場を責めるのもお門違い。自分で好き好んでブラック勤務をしていたのだ、趣味〃仕事という構図の仕事人間のなれの果てである。

死んだ。

そして生まれ変わった。よしとしよう、受け入れなければならぬまい、と彼は観念する。そうは思えど、

（無理！ よしとできない！）

それでもなお、夢ではないかという一縷の希望も捨てられない。

（頼む、夢であってくれ！ 生前に残してきたあのデータを、まだ論文にしていんだ！）

という具合に、前世への未練がありまくりだったからだ。

リアリティチェック、というものを彼は思い出す。その場で起きる現象が夢の中の出来事かどうか、確認する方法だ。息を止める。夢の中なら苦しくならず、呼吸を続けられるのだ。だが彼は一分後、盛大に咽る羽目になった。

「ぷはーっ！ げほっ、ごほっ」

大真面目に息を止める彼の視界に、少女がカットインしてきた。

「何をなさってるんですか？ その遊び、楽しそうですね」

ロツテはきょとんとして、ニコニコと屈託のない笑顔を向ける。召使いという悲惨な印象のある境遇の割りに、明るい子のような。

「いや、遊びではないんだ。そう見えるだろうけど」

（この世界は、リアル？ 落雷に遭って、前世の記憶が戻った？）

思わず頭を抱えていると、か細い少女の手が彼の腕に添えられた。そうされて気づいたが、ファルマの両腕には包帯がぐるぐる巻きにしてあった。

「何だこれ?!」

「あ、ファルマ様！ 急に動かしてはいけません、痛くありませんか？」

包帯を解くと、腕には赤黒い軟膏がぬられている。軟膏を包帯で拭くと、肩から上腕にかけて雷の電流で焼けた痛々しいケロイドが走っていた。両腕ともだ。

傷跡を見たロッテは両手で口を覆い、淡い水色の瞳を大きくした。そしてその傷に向けて祈るようなしぐさをした。

「薬神様の聖紋のようです……落雷の傷跡がそう見えます。薬神様が守ってくださったのでしょうかね」

「落雷でできた傷なら、雷が皮膚を這った火傷でできたりヒテンベルク図形（雷状の模様）だと思うけど」

「はい？」

「ええと、いや」

ロッテがにこやかに首をかしげるので、彼は「雷が通った痕」と言い換えた。ところが彼女は薬神の祝福を受けた聖印だ、と信じて疑わない。雷を受けて人が生きていられるはずがない、と言う。

（まあ、確かにそうだ）

彼女が敬虔な信仰を持っているので、彼は無粋な言葉は濁した。

そして、「薬神の聖紋」に酷似しているという痣は隠しておいたほうが無難だ、と学んだ。

「あ、そうだ。甘いお菓子を持ってきたんです。召し上がってください！ 気分も落ち着きます」

ロッテはウェハースのようなものと、空の銀のコップを彼の前に並べて置いた。

「いただきます。君もどう？」

「いけませんっ！ 召使いが主人を差し置いてこのような高価なものをいただくわけには」

そうは言っても、ロツテは今にもよだれが垂れそうだ。感情が素直に顔に出るようだった。

「遠慮しないでいいよ、色んな意味で胸がいつぱいだ」

「うつつ、もう、ファルマ様がどうしても、どうしてもと仰るならっ！ いただきますっ！」

この世界ではお菓子は高価で、使用人はなかなか口にできないものであったらしい。それだけにロツテの喜びようといったらなかった。

「もう一枚食べる？」

「あつつ、そんなっ！ どうしてもですか？ どうしても？」

「どうしても、でいいよ」

あまりにも美味しそうに食べるので、彼は半分以上を彼女に与えた。その様子を眺めているだけで、現実逃避になつて癒される。

「頬がとろけてしまいそうです……あ、喉、かわきませんかファルマ様。神術は元通りに使えますよね？ 私も生成したお水をいただいているですか？ ファルマ様の造つてくださるお水はとても美味しくて」

ロツテは、粗末な木製のコップを差し出しながらファルマにおねだりをする。小動物のようなしぐさがいちいち可愛らしい。

「何だつて？ 神術？！ 水？」

声が裏返りそうになる。別人に転生した以上、この世界の知識を得てこの世界に馴染む以外に生きるすべはない。彼女に話を合わせなければと彼は思うのだが、知らないものは知らないのだ。

「ファルマ様は水の神術の使い手でした。まさか神術を忘れましたか？」

あんなにお得意でしたのに！ と、彼女の顔がみるみる青ざめてゆく。

神術とやらが使えることが、貴族階級の証なのだそうだ。

「もし、このまま使えなければ俺はどうなる？」

「考えたくありませんが……」

神術を使えなければ貴族として認められず、父親には勘当され、屋敷を追われ平民として放逐されるそうだ。

「私、内緒にしておきます！ 何も知りませんっ！ お菓子をいただいたご恩もありますし！ ああつ、大恩です！」

ロツテは両手を振って目をつぶる。

「そんなに恩にきなくても。どうするかな。少し一人にしてくれない？ 思い出してみるよ、神術ってやつを」

思い出すのが目的というよりは、一人にさせてほしかった。

「そうですね。ゆっくり静養くださいませ」

水の生成は心に水の姿を思い浮かべることによって発動し、その手に湧くと言い残し、洗濯物や言いつけの買物物を済ませてくるからと彼女は部屋を立ち去った。

神術が使えないと周囲にバレようものなら、屋敷を追い出され、食いつばぐれ野たれ死ぬのだろうか。

この世界で、何ができるのだろうか。

もし、屋敷を追い出されるようなことでもあれば、路頭に迷う前に職で身を立てなければならぬ。

というわけで、彼はダメもとで神術の回復に取り組むことにした。

「水……！」

彼はお椀がたにした両手に意識を集中し、水を脳裏にイメージする。

水。

日本の薬学者であった彼の、水分子への造詣は深い。

その元素の形、エネルギー状態図、スピン状態まで手に取るようにわかる。

しかし、その知識が何になるだろう。

（だめか？）

随分と時間が経ったような気がする。

すると、血流によって熱を持ったのだろうか、腕の痣に異変がおきはじめる。

気づけば痣は青白く力強い、ネオンのような強烈な光を放っていた。

（何だ、この発光は）

緊張と驚きで、ファルマの両手に汗が滲み出てくる。  
汗にしては大量だ。

「汗……違う、水、水だ!？」

湧き出す水はとまらない。彼の体内からというより、異次元の力を呼び込んでいるような感覚だ。部屋を水浸しにしてはならないと、彼はあわてて窓の外に走り手を外へ突き出した。気が抜けたと同時に、噴水のように水が噴出する。

「やめ、やめ、ストップ! とまれ!」

ロツテに止め方を教えてもらっていなかった! 水のイメージを脳裏から完全に消すと、ようやくのことで生成は終わった。

「ふう……」

大きな大きな溜息をつく。

「ファルマ様ー!」

外からソプラノの声が聞こえてきた。窓の下をのぞき込むとロツテがハーブ畑の中から見上げて手を振っていた。

「そのお水、もしかして! 思い出せたんですね」

「ごめん、濡れた?」

「濡れましたっ! 涼しくていい気持ちです!」



雨が降ってきたので、日課のハーブの水やり助かりました！と  
ロツテは笑った。

「よかった……」

こうして彼は、水の神術を回復したのだった。

## 2話 転生薬学者 in 医学・薬学暗黒世界

「しかし……何だ、この世界は。どんな原理でこうなっているんだ？」

窓から顔をひっこめて、やはりここは異なる物理法則の働く異世界なのかもしれない、とファルマはまざまざと思い知る。

「それにしてもこの能力って、水だけなのか？」

じつと、わが物とは思えない小さな両手を見る。集中して水の構造式を思い浮かべただけで、水が造れるだなんて。

「イメージで具現化できるなら、ほかの化合物も造れるんじゃないか？」

先ほどより流し込む力をよほど手加減をして、銀のコップの中にあるイメージを送り込む。すると、化合物を受けたコップはたちまち黒く変色を始めた。

銀と反応する、硫化物の証だ。

「……できてるよな。やべっ、黒くなった」

大事な食器を汚してはロツテに迷惑をかける。

場合によっては彼女が毒を盛ったという嫌疑もかかるだろう。

「消えろ、消えろ！」

無意識につかんだ服のすそで磨きながら、何気なく発した言葉だった。

すると、コップの中の硫化物は消え去り、銀の光沢が戻る。拭いたから消えたのではない。勝手に黒ずみが消えた。

「物質を、出せて、消せる？」

何度か硫化物を出して消しているうちに、そう結論付けざるをえなかった。

今度は劇物でなく砂糖を造って舐める。甘かった。

塩を造って舐めてみた。しょっぱい。

鉄塊、鉄の味。

金塊、歯型がつく。

他にも色々と試した。手に送り込んだイメージの量だけ、物質ができる。

化合物の構造が明確にイメージできないものや複雑すぎるものは、具現化できない。

左手の創造で出したものは、右手で念じると消せる。

左手が創造、右手が消去。

出したものでないものも、元素が分かれば消せる。

「すごいな！」

原理は分からないながら、物質創造能力と物質消去能力が備わっているのは間違いないようだ。

「錬金術師みたいだ。日本に持って帰りたい能力だな」

もし日本でこの能力が使えるなら、さぞかし研究が捗っただろうに。あの研究も、この研究も。ああ、その研究だって。待てよ、あの研究はどうだ？

この期に及んで前世に未練が残るまくりの、仕事人間である。

「帰れないか。帰れないんだよな」

いい加減諦めねばなるまい。

どれだけ未練があったとしても、地球に戻れはしないのだ。

「前世のことはすっかり忘れて、切り替えよう」

彼はついにそう決心した。

… … …

「嬉しいです！ これで一安心でございますねっ」

駆け込むようにして部屋に戻ってきたロツテは、ベッドのシーツを取り換える。ファルマの身の回りの世話をやくのが彼女の仕事のようだ。

この世界のベッドは、上流家庭であつても箱の中に干し草を敷いて、そこにシーツをかけるだけの簡素なものだ。ファルマがシーツを敷くのを手伝うと、ロツテは驚いた。

「手伝わないでください、私の仕事ですから」

「そうなんだ？ ごめん。ありがとうございます」

しかし彼女はありがとうございます、と感謝を忘れなかった。

「よかったですね、ファルマ様。神術が戻って。あとは少しずつ思い出しますよ！」

ファルマの洗濯物を引き出しの中にしまいながら、ロツテはファルマを励ます歌など口ずさむのだった。なかなかの美声である。

「ファルマ様の神術が使えなくなっていたらどうしようかって一瞬でも思った私が馬鹿でした」

「そういえば、この家の家業は？」

ロツテは手を止め、背筋をただして誇らしそうに告げる。

「ド・メディシス（de Médicis）家は宮廷薬師のお家柄です」

薬師の家柄。

物質具現化能力が使って、前の世界と物理法則は違っても、科学と薬学の知識はある。

（よし、食いつばぐれはないな）

彼はひとまず安堵した。

その後は召使いの少女ロツテの助けを得て、ファルマは現状把握にかかりきりだった。ロツテからこの世界について説明を受ければ受けるほど、

（なーんかフランスっぽいんだよなあ）

ファルマはそんな印象を懐く。

言語や文化、衣装などは中世時代のフランスのそれを彷彿とさせた。

シャルロットことロッテは、上級使用人（侍女）である母親、カトリーヌの娘。平民だ。

母親がファルマのお世話係で、ロッテは母に付き添ってファルマの部屋に出入りしている。彼女は5歳から屋敷で働き、今は9歳。召使い歴が長いからか、年の割りにしっかりしていた。敬語もできているし、一つ一つの動作には気品すら感じられる。それにしても、「ここだけの話、強制労働とかさせられてない？俺の知らないところでこき使われたり殴られたりしていない？食事はどんなものを食べている？」

ファルマがそんな質問をすると、ロッテは口を尖らせた。

「何のことですか？旦那様によい暮らしをさせてもらっていますよ」

「自由になりたくないのか？学校に行ったりしたくないのか？」「優しいんですね。でも、読み書きはお屋敷で教えていただいていますし、お休みもありますし、私は満足しています」

ファルマは召使いというと奴隷のようなものだと思像していたのだが、どうやら待遇のよい雇用関係にあるようで、母子ともに納得のうえ働いている様子だった。衣食住の保証があつて更に給料もあり。重労働でもないし、屋敷で働くのは苦ではないという。奴隷ではないので、いつ屋敷を出ていくのも自由とのこと。

「ならいいんだけど」

「はいっ！ これまで通りよろしくお願いします！ お屋敷を追い出されたら困ります！」

使用人たちは、執事を筆頭に屋敷の内外に百人近く配置されていることが分かった。屋敷は総石造りでコの字型をしており、バロツク様式の過渡期のそれに酷似している。屋敷は旧く、歴史を感じさせられる。

「ところで、家のことを教えてくれないか？」  
「よろこんで！」

ファルマは屋敷の構造をロッテに尋ねる。建物は3階建てで、これに地下の倉庫と屋根裏部屋が加わる。敷地面積はちよつとした城なみの広さを誇る。

1階は玄関ホールと応接室、大広間、食堂。

2階が両親と子供たちの部屋。父の書斎兼執務室。

つまり、ファルマの部屋は、中庭に面した二階にある。

3階は家令、執事の部屋。図書室、物置、薬草保管庫。

使用人たちは、屋根裏部屋に住んでいる。

屋敷が広すぎると、開かずの間もあつたりで、ロッテも全ての部屋に行った事はない、という。

「確かに、名家だ……」

「はいっ、自慢のお屋敷です！ 築二百年以上になります」

ロッテは何を応えるにも明るく、天真爛漫だった。

「俺についての質問もしていい？」

「分かることなら」

「俺の名前。ファルマ（医薬品）でメデシス（薬師）……凄い名

前だと思わない？」

薬、アピールしすぎだろう！ とファルマは若干気恥ずかしい。

「ふふ。兄様は、パツレ様ですよ？ 旦那様が将来を期待されておられるですよ！ パツレ様もファルマ様も」

パツレとは丸薬という意味のようだ。

（俺よりもつと気の毒な人がいたな）

父の薬学への思い入れの強さに、ファルマは若干引いてしまう。

「今夜はその旦那様がお屋敷にお戻りです、ファルマ様も共に食事。……あつ」

「何？ あつ、て」

ロツテが慌てふためいているようだったので、ファルマは身構える。

「もももしかして、薬学の知識は、すっかり忘れてしまいましたか？」

「忘れてると思うけど」

「まずいです！ それは非常にまずいです！」

ロツテにそう言われてファルマは危機感を覚え、部屋に据え付けられている本棚にずらりと並んだ書物を一冊ずつ手に取り、ぱらぱらと斜め読みする。この世界の書物は全て筆写人の手書きで、それゆえ医学書や薬学書は非常に高価だ、とのこと。にもかかわらず、次男であるファルマの書棚に彼専用の分厚い書物が並んでいるとこ



ろをみると、家は相当に裕福なのだろう。

「旦那様はファルマ様に、薬学のぬきうち試問をよくなさいますので、お氣をつけて」

彼が宿る前のファルマ少年は、幼少時より薬師としての英才教育を施されていたらしい。これらの書物にある薬は全て、記憶に入っているし調査方法も諳んじることができはるはずだ、とロッテは証言する。

それは一大事だ、付け焼刃でも大至急暗記をしなければ、とファルマは焦ったが……、その必要はなかった。

「これ、見た気がするな。思い出してきたぞ」

ファルマ少年の知識の蓄積があったからか、彼は医学書も薬学書も判読できるし、うっすらと内容も思い出すことができた。

「にしても、これは」

「難しいですか？ 難しそうです！」

ロッテが恐ろしそうに首をすくめる。彼女は、文字が書物一面にびっしりだと、難しそうに見えるのだ。そしてそんな小難しそうな本を真面目な顔で読むファルマに、ほんのりと惹かれていたのが彼女だった。

そんな彼女にはお構いなく、ファルマはというと、

（これは、ひどい）

彼の手に取ったさまざまな書物に記されていたのは、はっきりに

つておぞましいものだった。誤った治療法や手術法、毒物だらけの薬のレシピ。もはや医療ですらない（とファルマが考える）神々への祈祷の方法、病を支配する星の見方、数秘術の読み解き方、などなども、間違った方向で充実していた。神術という訳の分からないものがある世界、という前提がなければ完全にまじないだ。

それらが医療としてまかりとおっている。

この世界では「病は神の与えた試練」という考えが根本にあり、医学薬学と宗教、星占術は密接に結びついていた。祈祷にすがったり、星の動きに右往左往してみたり。治療の結果患者が死に至っても、医師や薬師たちはそれを神罰だということにして、患者に責任を負わない。

（いやでも、こんな治療法で異世界人は治るのか？ 地球人と体の構造が違って、神術での治療は効果がある？）

そんな推測をもとに症例報告から実際の患者の治療率を計算しても、治療率はかなり低かった。地球の中世レベルと何ら変わらない。

（効いてないじゃないかよ、これ！）

この世界の医学、薬学の知識は悲惨なものだった。オカルト薬学で治療率が高いならともかく、決してそうではない。誰もかれもこんな怪しげな、呪術まがいの民間療法に傾倒しているのか、と考えるとファルマはぞっとする。

（暗黒時代だな、この世界の医療は）

健康な人でもこんな治療してたら死にそうだ、とファルマは齒がゆい思いだ。

「ファルマ様ー、眼が疲れませんか？ 少しは休憩なさいませう。お茶をいれますよ」

「もう少し読んでからね」

何時間もぶつ通しで書物にかじりついているファルマを邪魔せずそつと見守っていたロッテは、甲斐甲斐しく差し入れ運びつつ、

「お勉強熱心ですねえ、ファルマ様は。そのお姿、素敵です」

と、憧れのまなざしを向けるのだった。

薄暗くなつた部屋で、ファルマは本を閉じた。

「何とかしないと、この世界の人々のためにも」

もしかすると、そのために前世の知識を持って転生したのかもしれない。

そんな考えが彼の脳裏によぎつたのだった。

## 2話 転生薬学者 in 医学・薬学暗黒世界（後書き）

コラ主人公、現地医療見てもないのに決めつけるんかいと思われた方は1章9話までお待ちください。

### 3話 宮廷薬師見習い ファルマ・ド・メディシス

ファンファールが屋敷の中に鳴り響く。

「何が始まるんだ？」

「ファルマ様、お食事の時間ですよ」

彼を呼びにきたロツテが早く早く、とせかす。

「おなかすいたな。ロツテも食べに行く？」

腹は減るものだ、何をしていても。

「使用人はご主人さまが終わったあとです」

「そういうことか！」

育ち盛りのロツテも早く夕食にありつきたいのだろう。それでせかすのだ。

食堂に集まってきた家族の顔を、ファルマは初めて確認する。

「起きたか。よく眠っていたから寝かせておいたのだが」

「はい、ご心配をおかけいたしました」

最初に声をかけてきたのは、金色の顎髭をたくわえた碧眼の男。眼光の鋭い長身痩躯の人物だ。屋敷の主人にしてファルマの父親、ブリュノ・ド・メディシス（Bruno de Médicis、37歳）。

彼は代々王侯貴族を専門に診察し薬を処方する宮廷薬師で、帝国

の中心部にあるサン・フルーヴ帝国薬学校の総長を務めている。水属性の神術使いだ。

この世界では特殊技能を持つ優れた貴族に、「尊爵」という爵位が与えられている。階級は尊爵、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵となっている。

つまり尊爵である彼は大貴族、というわけだ。

「まあ、回復してよかったわ。どうなることかと思ったのよ」

そんな声をかけてきたのは銀髪碧眼の、清楚な雰囲気の貴婦人。ベアトリス（Beatrice 34歳）、母だ。名門貴族の出身で風属性神術の使い手だという。

「兄上ー、もうだいじょうぶ？ 痛くない？」

金髪碧眼で巻き毛を腰まで伸ばし、愛嬌たっぷりなファルマを呼ぶ幼女。ブランシュ（Blanche 4歳）、妹だ。幼いながら父と同じ水属性神術の使い手だ。

幼くしてこの美貌。将来はさぞ美しくなるに違いないと、ファルマは確信する。

ちなみに留守にしている兄パツレ（Pale 16歳）。ファルマが名前の件で同情を寄せる兄は、世界最先端の医薬大学、遠い異国のノバルート医薬大学校で薬学を学んでいるエリート。全寮制のため、年に一度か二度しか帰ってこない。

そんな家族が顔を合わせ、広い食堂の大きなテーブルに着席した。父は机の上に用意された陶器の手洗い用水盤に、水の神術で澄んだ水を注ぐ。

妹のブランシュもいっぱしに自分の水盤に水を張り、母親の水盤も満たす。母親は貴族であるが属性が違うので、水を造るのは娘の

仕事だ。

ファルマも平静を繕いつつ彼の前にある水盤に水をたくわえ、手を洗った。

テーブルクロスの上には、直にパンとナイフとスプーンが置かれている。ブランシュが神々への祈りの言葉を紡ぎ、家族が復唱して食事が始まる。

（あ、食事、意外とおいしい）

香辛料たっぷりの鶏のブルーエをはじめ、野うさぎのシチューなどが次々と給仕される。ファルマはロツテに聞いていたテーブルマナーを守り、ゆっくりと食べるように心がける。彼は生前は食事の時間も惜しんでカロリー イトのようなものばかり食べていたので、その貧乏舌っぷりは異世界でも大いに役立った。

（働きすぎてまともに食事をしたこともなかったな、俺）

一口一口美味しさをかみしめながら、異世界の味覚に舌鼓をうつ。

「ねえファルマ。それでも、体にさわりはないの？ あのような雷に打たれて……」

食事が始まってはどなくして、母がファルマを気遣う。

そつえば家族の中で母だけがブドウ酒を嗜んでいた。父は患者からの呼び出しに備え、水を飲んでいる。彼が自分で拵えたきれいな水をだ。檸檬など絞って香りをつけていた。

「記憶が少し混乱しているようです。じきに思い出すでしょう。ご心配なさらず、母上」

ファルマは落ち着いて応える。両親には敬語で、父上母上呼びだ、とロッテに聞いていた。いかにも大貴族の子息といった二人称である。

「しかし命拾いしたな。脈が完全に止まったのだが、落雷直後にお前に飲ませたポーションがきいたのだろう」

満足そうに口を挟んだ父は、彼の薬師としての腕に自信を深めたようだ。何で心停止して息もしてない人間にポーション（水薬）を飲ませたんだ、とファルマは咽せそうになった。よく窒息しなかったものだ。

（いや、ひよっとするとそのポーションが凄く効いたのかもしれないし）

書物に書いてあった処方を見る限りそんな訳はないな、と思ったけれども。

ファルマという少年は寡黙で物静かな人物だったというから、暫くはそのキャラを壊さないよう振舞わねばならない。

そういえば、もとのファルマ少年はどうなったのだろう。落雷で一度死んだというから、記憶も消えてしまったのかもしれない。そう思うと居たたまれなかった。それに彼の体に乗っ取ってしまったように後ろめたかった。

だがファルマ少年は死んだのだ、ファルマ少年の自我は消えてしまっている。

供養のためにも、彼の分まで生きよう。

と、もと薬学者の彼は心の中でファルマ少年に手を合わせた。

「でも記憶があやふやではいけないわ、心配よ。しっかりと無理をせず養生するのよ。悩みがあれば何でも言いなさい。食べたいものもあれば、作らせましょうね」



ブリュノの亭主関白ぶりに比べ、ベアトリスの気遣いは多少なりと嬉しかった。

「はい、ありがとうございます母上、嬉しいです」

その後、一言二言ファルマと言葉を交わした母は、ファルマの人格が変化したことに違和感を覚えなかったようだ。それもどうかとファルマは思うのだが、とにかく事前にロツテにファルマの普段の様子や口調を聞いていたのが幸いした。

「数日は安静にしておくがよい。次の往診には、ついてこれそうか？」

食事を終えたブリュノが、ナプキンで口を拭いながら思い出したように念押しをする。何のことだろう、とファルマが愛想笑いをすると、ファルマの記憶がまだ曖昧だと察したブリュノは、補足した。

「陛下の往診だ」

「思い出しました。同行いたします」

見習い薬師は師の仕事を見て研修すべきで、宮廷薬師の仕事に同行するものだ。普段のファルマはわずか十歳でありながら、父と共に診察の見学や手伝いを行っていたらしい。

普段は王侯貴族の往診が主だが、今回は父ブリュノの患者の中でももっとも身分の高い、やんごとのない人物。

陛下というと、サン・フルーヴ国皇帝・エリザベートⅠⅠ世しかないだろう。

（それは大仕事だな）

女帝相手にどんな薬を処方するつもりなのだろうと、ファルマは身がすくむ思いだ。治療に失敗して縛り首、なんてことにならないことを祈る。

「ところで、今日お前の両腕の火傷に使った軟膏、ゲオライドの産地と調合方法は？」

出た。ロツテの言っていた抜き打ち薬学試験だ！

「主成分のハーブ、ティンパラの産地はラハラ地方、調合は力テッソの油、トカゲの目玉、こうもりの翅の粉末とともに満月の夜身を清め祈りをささげながら聖水で一晩煮つめたものを、翌日から3日間天日干しし、乾燥したものを細かくすり潰したものです」

考える間もなく、先ほど予習していた書物の知識がファルマの口をついてすらすらと出た。ファルマ少年が暗誦していた記憶を借りたのだ。

思わず調合方法を口走ってしまったが、現代日本の博士号を持つ薬学者であった彼はなんとも言えない、情けない気分だ。

しかし、この場をやり過ごすには仕方がない。屋敷をたたき出されても困るのだ。

「覚えていたか。さすが私の息子だ」

そんな事情は露知らず、父は満足そうに大きく頷く。ちなみにあの怪しげな軟膏は長時間皮膚に触れているとかぶれてくるので、短時間だけ使うのが正解である。その点、彼は早々に薬草を取り除き、腕は水できれいに洗っていた。知らず、父を満足させる行動をとっていたのだ。

「よろしい。体調に特に問題がなければ、明日よりエレオノールの授業を再開してよいか」

（知らない人だな）

後ほどロッテに確認したところによると、

エレオノール・ボヌフォワ。

父の一番弟子の薬師で、ファルマの家庭教師だということだった。

… … …

「おかしい。絶対におかしいわ。別人みたいだもの」

ファルマの目の前の女性はテーブルの上で指を組み、ぽつりと吐いた。

向かい合って座した妙齡の女性の一声にファルマはたじろぐ。

彼女こそはファルマの家庭教師にして父の一番弟子、美貌の一級薬師、エレオノール・ボヌフォワ（Eleonora Bonnefoy 16歳）だ。艶やかな銀髪のを左右にわけサイドに流して涼やかな印象だった。マツトな質感の淡い空色の長くタイトなドレススカートには、活動性を重視してか大胆なスリットが入り、肩は大きくあいている。

目のやり場に困るほどの豊かなバストを組んだ腕の上にぽいんと乗せていた。細いフレームの、銀の眼鏡をずらしてかけてファルマを見つめる。

（服飾がフリーダムすぎるな。メガネもあるのか！）

この世界が中世ヨーロッパに相当するのなら、それ相応の服飾文化なのかとファルマは想定していたが、必ずしもそうではないらしい。いかにも中世ないでたちのド・メディシス家が保守的なだけだった。どちらかというと彼女の装いは、ファンタジー世界の住人のそれで、カジュアルだ。さすが異世界。とファルマは感心する。

「そうですか？ 気のせいだと思いますよ！」

「よそよそしいわ。敬語だし」

エレンとの会話パターンを仕入れていなかったな、とファルマは反省する。師弟関係なのだから、敬語だと決めてかかっていた。

（どう話そう。友達感覚で付き合える先生キャラ、で通してるのか？）

エレオノールとの待ち合わせ場所は、屋敷の敷地に沿って流れる大河の中州。その庭園中央に位置する、白い石造りのガゼボ（西洋式東屋）のような建造物の中。日差しはガゼボのドーム状の屋根によってさえぎられ、庭園を吹き渡る風が優しく心地よい。

ガゼボの下にはベンチと円卓があり、優雅な屋外の学びのスペースだ、そこに二人は向かい合って座っている。

そこは、父の所有する薬草園だった。薬草園が中州にあるなど、洪水で流されてしまわないか、とファルマは気をもんだが、ド・メディシス家は水の神術使いであるため、父が術を使っていて川の氾濫で薬草園が流されることはない。だが、高価な薬草ばかり栽培している、泥棒には狙われる。もちろん、ド・メディシス家の財産が盗まれないよう、薬草園の警備は夜間も万全の体制になっている、そんな薬草園だ。ファルマが待ち合わせ前に薬草園を見て回ったところ、元の世界にあったおなじみのハーブ、漢方で用いる植物

も発見した。異世界ならではの未知のハーブもあった。

「普通に話すよ、エレオノール先生」

呼び方はエレオノールでいいのだろうか？ それとも、ボヌフォア先生？ などと探り探りの会話はすぐに途切れてしまう。

「エレンでしょ？ まーだ、何つか違うわね」

「わかった、白状するよ。雷に打たれて記憶が曖昧なんだ」  
「もう、それ早く言つてよ」

やっぱり、とエレンは拗ねたように口を尖らせた。

「確かに雷に打たれると性格が変わるという言い伝えもあるけど…  
…そのうち戻るかもしれないし、そのままなら仕方ないわ。命が助かっただけでも感謝しないと」

立ち上がり、振り向きざまにエレンはにこっと口角を上げる。透明感のある笑顔は眩しかった。ガゼボから出て、彼女は河辺へと向う。ファルマも後に続く。

「今日の授業は薬学講義ではなく、神技の確認にしましょう」

神技（神術の技）は全て覚えているか、とエレンはファルマに問う。

エレンは以前のファルマ少年に数々の神術を教えてきた。  
カンのよい優秀な生徒だったようだ。

「水を造ってコップに入れることならできるかな！」

「冗談めかしてファルマがそう言っと、エレンは額をおさえて、

「覚えてないってことがよく分かったわ」

ファルマは筆記用具を手に、エレンの講義に聞き入った。

#### 4話 エレオノールの神術講座

エレンことエレオノールの講義を、ファルマは熱心にメモを取ってきていた。

この世界の貴族には全員神術の適性があり、守護神がいる。

守護神と神術の属性は生まれつき決まっていて、神殿の洗礼儀の際に守護神を鑑定される。洗礼儀で守護神を鑑定し祝福を受けると、体内に神脈というものが開き、神術が使えるようになる。神力の多寡は生まれつき決まっており、鍛錬で神力は増えない。

神術には火、水、風、土、無の属性がある。

属性はさらに正、負に分けられる。

稀に、守護神が鑑定できず神脈が開かなかったり適性のなかった貴族の子は、絶縁され平民に没落する。

いわば神術本位の貴族制だ。

（貴族だといっても、なかなかシビアだな）

ファルマは気を引き締める。

父ブリュノ、兄パツレ、ファルマの守護神は薬神で、水・正属性の神術使いだ。とエレンは教えてくれる。

この世界には、百を超える守護神がいるのだという。

よくある太陽神、月神、地母神、風神、海神などにはじまり、医神、薬神、鍛冶などの職業神もいる。

守護神が薬神であり、すぐれた神術使いである薬師は、大陸に何名もない。

それで父ブリュノが尊爵として重用されている訳だ。

ちなみにエレンの守護神は水神である。

（守護神に神術、属性ときたか。ファンタジーの世界だな）

彼は現代日本を生きた薬学者。神も仏も悪魔も魔法も神術であるが非科学的なことは苦手なタチだったが、覚えのないわけにもいらない。

「ここまででは、いいかしら？」

エレンが確認をする。ファルマはメモを取ったノートを見ながら頷いた。

「ありがとう、よくわかった。ところで無属性というのは何？」

「4つの属性では定義できない属性よ。無属性は一応あるにはあるけど、神殿が把握している限りもう三百年も現れていないし」

神殿でも廃止しようか議論されているのよ、とエレンは苦笑する。

（俺はどの属性なんだろう？ 水属性ではないよな、守護神も薬神で合ってるんだろうか？ 転生して別人格が覚醒して、属性が変わってないか？）

ファルマは甚だ疑問だ。水が生成できるので、水の正属性としてふるまう事はできるが……。

「もし、思った通りの物質を創造できる場合は、何の属性？」

「4つの属性にあてはまらないから定義上は無属性だけど、何でも創れる物質創造なんてないわ。造れるものは必ずひとつよ。何でも思い通りに造れるとか、そんなの神術で足りないわ、神様か化物か



何かよ」

（だったら何なんだろう、この能力は）

ファルマは頭を捻るが、とりあえず属性の話は気にしないことにした。

「神術って、何のために習得するんだっけ？」

「あなたにとっては二つの理由があるわ。一つは、自衛のため」

貴族は剣を持たず、剣の代わりに神術を増幅する作用のある神杖を携行する。剣を持つことは恥だとされる。

「これは私たちにとっての剣よ」

腰のベルトに差していた、折り畳み式の杖を握り締めた彼女は、さまになっていた。

戦争になれば平民の兵はものの役にも立たず、作戦級、戦術級の神術使いの撃ち合いとなる。すぐれた術士ともなると、城を水没させたり、地形を変えた者もいたという。

「ってファルマ君！　そういえば貴族の命の次に大事な杖は？」

「あ！」

ノートとテキストは持ってきたが、肝心の杖は忘れた。思い起こせば枕元に置かれていた、豪奢な飾りのついた箱。その中に白銀の杖らしきものがおさめられていた。あれか、とファルマは手を打つ。

「宮廷薬師は聖騎士のように神術や武芸の道を究める必要もないのだけれど、杖は手放してはだめよ」

貴族たるもの、激しい権力闘争の中で殺し屋などから命を狙われることも一度や二度ではない、という。それに、街のゴロツキや盗賊からも常に狙われる。

「神術を学ぶも一つ一つの理由は、神術で造った薬は素晴らしい効果を生むからよ。それは、宮廷薬師にとっては必須の技能なの」

この大陸の薬師は三階級あり、全て、皇帝の支配下にある。

宮廷薬師： 名門貴族階級の薬師。王侯貴族に薬を処方する。登録数3名。

一級・二級薬師： 貴族階級の薬師。貴族に薬を処方する。登録数21名。

三級薬師： 薬師ギルドに所属する、平民の薬師。薬師ギルドが免許を出す。平民に処方する。登録数246名。

父は国に3名しか免許の認められていない、女帝の勅許を持つ宮廷薬師。

宮廷薬師と一級、二級薬師は、薬を売らず治癒に専念する。貴族の薬師は神術で薬を作るので、平民薬師が売っている怪しげな薬とは全く違うのだ、とエレンは胸をはる。

「なるほど……」

そこでファルマは思う。

（この世界の薬草、貴族ってというか神術使いが手を加えると案外効くのかな？）

なにせ神術がある世界だ。

前時代的な薬草療法を、完全に否定するものでもないのかもしれない。屋敷の書棚にあった薬学書の処方方はデタラメなものがほとんどだったが、漢方だって効くものもあるし、いくつかの薬草から有効成分を抽出できるし……と、ファルマは考えをあらためる。

物質創造能力を持つファルマであるが、脳内でイメージできないほど構造が複雑な薬の合成は、彼の能力では難しい。その場合は実験室で合成をおこなったり、植物から抽出する方が効率的かもしれない。

庭園に植えてあった薬草や薬木、たとえばイチイの木からは、抗がん剤の成分であるパクリタキセルが微量ながらとれるし、ケシ類からは、麻薬ができる。ジギタリス抽出物からは強心剤が、などと、捨てたものでもない。エレンがこの薬草園を秘宝の園、というわけだ。

「では、私の杖を貸してあげるからここから河の下流に向けて、水の槍（Lance d'eau）を放ってみて、こんなふうにな！」

「Lance d'eau」

エレンが折り畳み式の杖を組み立てると、それは彼女の背丈ほどの高さになった。それを軽く握り、鋭い言葉を唱えると、突きこむように空に向けて振った。

杖から放たれた激流は、たゆたう穏やかな大河の水表を弾き飛ばしながら数百メートル先まで一直線に迸り、やがてゆるやかな放物線を描き河に落ちて消えた。

「すごい！ 本当に槍みたいだ」

ファルマは歓声を上げた。

「あなたもやるの」

私の杖は、高位神術使いのものだから扱いづらいし、場合によってはうんともすんとも言わないと思うけれど。などと言いながら、ファルマに杖を貸し出す。

ちなみに神技は術を想像し「発動詠唱」を唱えることで発動すること。

「思いつきり振ったほうがいい？」

「そうね、思い切りいくといいわ。待つて、舟はないわね」

この時間帯は川で漁をしてはいけないことになっているのに、よく違反船が浮かんでるのよ、とエレンは遠方を確認する。

「いいわ、思いきりやって。詠唱は”Lance de l'ea  
u”よ」

ファルマは杖に意識を通じるようにして目を瞑ると、そこへ思い切り水のイメージを放った。発動詠唱の言葉は忘れていた。

すると、杖は空中に固定されたように動かなくなり、ファルマの全身から青白い蛍光が立ち上って、杖の先には大河を覆い尽くすほどの巨大な水柱が直線状に上がったのだ。河は大容量の水を受け止めきれずまたたく間に増水し、渦巻く水流は堤防の高さへと迫る。

天は曇り、暴風が吹き荒れた。

「きゃあああつー?!」

ファルマの神技によって発生した風圧と衝撃波で、河原に吹き飛ばされてしまったエレンは、倒れ伏したまま刮目した。水流の威力

がでかすぎる。などと生易しいものではないのだ。これでは堤防を破壊し、のみならず大洪水を起こして下流の街を沈めてしまつ、そんな状態だ。

「うわあっ!？」

ファルマが杖を捨てると、ようやく水の流入は収まった。

「ファルマ君、あなた……どう、しちゃったの？」

眼鏡が斜めにずれたのもそのままに、エレンはふらふらと立ち上がる。

「ごめん、加減ができなくて。怪我してない？」

一方のファルマは、神技の一般的な威力が異世界基準でどれほどのものなのか知らず、コントロールが甘かったことを指摘されたのだと考えた。

（自主トレするときは海でやらないとな。橋や沿岸の家に当たっても危ないし）

などと真面目に反省していると。

「ファルマ君が、ぶっ壊れちゃった……発動詠唱もしてなかったし」「え?」

暫くして、どうやらやりすぎたらしい、というのはフリーズしたエレンの反応で察知した。ぶっ壊れたとはひどい言われようだとファルマは思つが、とりあえず場を取り繕つて、

「エレンの杖ってすごいな！！ さすが高位神術使いの杖だな、びっくりしたよ」

彼はあまりにも白々しい言い訳を繰り返しながら、愛想笑いを浮かべるしかなかった。

## 5話 診眼の発現と、庶民のための薬局構想

「杖がどうかもはや関係ないわ！　あなた、神力どうなってるの？　ていうか、体大丈夫！？」

エレンはバッグを取ってくると、中から金属製の棍棒状の道具を取り出す。温度計のような表示のついている簡易神力計で、握るだけで能力と神力の量に対応する色が出る。

人が一度に使える神力は決まっていて、神力計を見ながら訓練をする。大神術を繰り出したファルマが、力を使い果たして倒れてしまいかもしれない。と、エレンは心配だった。心配しているのだから、涙目になっていた。

「私がついていながら……両手を出して！　ファルマ君。あなた一生分の神力を使ってしまったかもしれないわ！　あんなの無理よ！」

「これは？」  
「いいから。説明はあとよ、握って！」

ファルマが両手でそれを握ると、白く柔らかな光を放ちはじめた。中央の窪みについている水銀温度計に似たゲージが凄まじい勢いで上昇し、一瞬で振り切れた。

「無色の、限界突破……！」

エレンは驚いて後ずさったものだから、メガネが地に落ちてそれを踏んでしまった。高価なレンズが悲しく碎け散ったが、エレンはそれは気にとめなかった。

「あの、メガネ割れたよ」

「それどころじゃないわ」

ファルマはレンズのなくなった眼鏡のフレームを拾った。

「限界突破って、どういうこと？」

要領を得ないファルマに、エレンは戸惑う。

「こつちが聞きたい……ちなみに神力計を振り切った神術使いは過去にはいないわ、一人としてね」

エレンはファルマの腕をまくり、そこに走る雷のあとをしげしげと見つめていた。ファルマは長袖のチュニックで隠していたのだが、服ごしに明らかに発光していたので、ばれたのだ。エレンは見れば見るほど気になるようだ。

「この痣、どうみても薬神の聖紋だし」

「それさ。ロットにも言われたんだけど、気のせいだよ。誰でもこうなるんだって」

薬神の聖紋がどんなものは、ファルマは書物で調べて知った。たしかに酷似していたが、ファルマとしては「だから雷の痕でできるリヒテンベルグ図形だよ」という持論から離れられない。

「神術を使うとき、体の奥が熱くなる感じ、ある？ 息切れや動悸とかしない？」

「そんな感じはなくて、別世界から力が流れ込んでいる感じがな。だから疲れたりはいらないかな」



「だと思った……まるで別世界の術だね。普通はあんな神力を放ったら倒れるか死ぬもの、なのにまだ神力計が振り切れるほど力が残ってるだなんて」

どういふことなのかしら、とエレンは悩ましそうに腕組みをした。

「ファルマ君。今後は絶対に人前で神力計を握ってはだめよ。お父様にも見せてはだめ。あと、神術を全力で使ってもだめよ」

彼女は考え込んだ。眼鏡を割ってしまったので、本を舐めるほどの至近距離で書物を調べ上げ、属性の定義を確認し、とりあえずの感想を述べた。

「あなたは無属性の、正と負の属性みたいだね」

属性は神力計の色で簡易的にわかるらしい。白い光を放ったので、無属性だとのこと。

「無属性って、珍しいんだっけ」

ここ数百年、無属性の使い手は出ていないという話を先ほど聞いたばかりである。

「珍しいなんてもんじゃない。未知の能力なうえに、皇帝よりはるかに強い神力を持っているっていう、ね。あなたってもしかして帝位に興味ある？　そういう話になっちゃうのよ」

「でも、ド・メディシス家は薬師の家系なんだろう？」

何でいきなり帝位の話になるのだろう、とファルマは眼鏡を持つ

たまま立ちすくむ。

「それは関係ないわ」

サン・フルーヴ帝国皇帝の、帝位継承制度。

それは家格や守護神を考慮され神力の強く、能力に秀でた大貴族の嫡子が、神殿の合議によって選定されるものだった。ファルマが皇帝の神力を凌駕してしまった場合、ド・メーシス家は家格からいっても十分で、皇帝の資質に足る。しかしそれでは現皇帝にとっては都合が悪く、現皇帝に暗殺されるかもしれない、という話だった。

「で、興味ある？」

「全然。そもそも、政治とか苦手だし。俺に政治任せたらひどいことになるよ」

根っからの理系人間である彼は、文系的なことはからきしなのだ。慣れないことはするものではない。

「なら、黙っておいたほうがいいわね。今日の授業はここまでにしましょ。後半、授業じゃなかったけど」

エレンはファルマに野心がないと知り、安堵したようだった。

「じゃ、ありがとう。俺はこれで。これ眼鏡、忘れないで帰って。またレンズ入れたら使えると思うから」

しかし、エレンはその場を動こうとしない。

「帰らないの？」

「眼鏡がないと私、何も見えないの。お屋敷には予備の眼鏡があるけれど」

「家まで連れて行こうか？」

ファルマはエレンの手を引いて、薬草園から屋敷へ戻る橋を渡る。エレンの視力はどれほどなのかは分からないが、かなり見えないようだ。

「そこ段差あるから、気をつけて」

彼より背の高い彼女の手を引き、ファルマが彼女を薬草園のある川の中州から、橋を渡って屋敷までエスコートしている。エレンの華奢で繊細な手は、ひんやりとしていた。冷え症なのではないようだ。

「手、震えてるけど大丈夫？」

「そ、そう？」

暫しの沈黙が続き、気まずい空気が流れる。

「ねえ、ファルマ君、落雷を境に力が備わったのよね？」

ファルマは身構える。エレンいわく、昨日は薬神の影響がもっとも強くなる星位だった、とのこと。

「さっきの神術、やっぱり人間のできることじゃないわ」

ファルマははっきりと告げられて不安にかられ、足を止めた。

「あなたの守護神である薬神が、のりうつったのかもしれない。落

雷で確か脈が止まったし、人格も変わってるみたいだし」

（ああ、そういうことなのか）

ファルマにもその畏れは分かる気がした。強すぎる力を具えた人間はもはや人間扱いされなくなる、神がかりとして畏れられるということだった。

「前のままのファルマ君だと信じたいけれどね。全然違うもの」

その気になれば、あるいは神術の加減を間違えただけで瞬殺されてしまう相手の至近距離にいるかと思うと、手が勝手に震えてしまったのだという。

「その力、完全に制御できる？ 暴走したりしない？」

「どうか分からないけど、制御できるようにするよ」

力を授かったとしても、それをむやみに振りかざしたいとはファルマは思わない。

（俺は、人を傷つけるより治すほうが得意なつもりだ）

彼は魂というものを信じてはいないが、転生したとしても性質は同じだ。

「そうだ、眼鏡を落としたときは、こうやるといいよ」

ファルマは思いついてエレンの手をほぐすと、両手の親指と人差し指で二つ輪っかをつくり、眼鏡のように自分の目に当てた。場の空気がほどけて、思わず笑いこぼるエレン。

「ぷつ、何、それ面白い」

「この穴を、細く細くするんだ。騙されたと思ってやってみて」

仕方なく付き合ったエレンは、顔の前で眼鏡の形をつくる。

「もっともつと細く、針穴ぐらいにしていって」

「え？ え、え？ 待って、ええーっ!？」

言つとおりにしたとき、エレンは絶叫した。そして嬉しそうに目を細めた。

「見える！ 遠くまで見える！ どうしてこんなことを知っているの!？」

逆に、何で知らないんだ、とファルマは肩をすばめる。

「視界は狭いけど、とてもよく見える!」

眼鏡ごつこをしながら、二人向かい合って話す。

「あれ?」

（何だ、これ）

不思議がるエレンを眺めながら、ファルマは別のことで驚いていた。輪っかごしにエレンを見ると、エレンの眼と左手の指先が青白く光って見えている。

「私の顔に何かついている?」

エレンは自分の頬のあたりを指で撫でた。思わず彼女の手を取る。

「あっ！」

「何？」

ファルマの指の輪っかを通してエレンを見ると、彼女の左手中指の第二関節が、青白く光って見えたのだ。輪っかをどけると、見えなくなる。左手で作った輪っかだけが、見える。

ファルマはエレンの指の光る部分に軽く触れてみた。

「痛い痛い！ 何するの！？」

エレンは悲鳴を上げて涙目になる。

「え？ そんな強くしてないけど」

「そこ、今朝指を突いて痛いの。どうして突き指してるってわかったの？ 包帯もしていないのに！」

「”捻挫？”」

ファルマがそう言った途端、青白い光は白い光へと色調を転じた。ファルマが色々試した結果、神力の通じた左手で輪っかを作って覗いてみると、患者の患部が青く光って見え、病名を当てると光の色が変わるのだった。

「驚いたなあ」

「それって薬神の神眼みたい。やっぱりファルマ君って、あっ」

薬神は、すべての病を見透かしその症状に応じたあらゆる薬を授けるという言い伝えがある。エレンは恐ろしいものを見たように口

をパクパクさせながら、ファルマの足元を指す。

「ないわ、ない……あなたの影が！」

彼女に正対して立つファルマの足の下に、影はなかった。

「うわあああああー！ー！ー！？」

ファルマはこれにはさすがに絶叫してしまった。

「い、言わないわ。誰にも言わないから、あなたが薬神様の化身か、化け物か何かなんて言わないから、だから……助けてー！ーっ！」

エレンはとうとう身の危険を感じたらしく、時折躓きながら、走って逃げ去っていった。恐ろしかったのだろう、眼鏡のフレームをまたぶん投げて。

「どうすればいいんだ」

ファルマは本格的に窮した。薄暗い屋敷では影が多いのでバレないだろうが、明るい屋外でファルマにだけ影がないのは相当に目立つ。

エレンの口の堅さを信じるしかなかった。

それでもいつか、影がないことがバレて迫害にでも逢うんじゃないか。

そう思つと頭痛がしてきた。

橋を渡り切ったところの段差で、ドテツと盛大に転ぶエレンの姿

が遠目に見えた。

言葉を尽くして誤解を解くには、しばらくの時間がかかりそう  
だ。

… … …

「おかえりなさいませー！」

「ただいまー」

夕方になるまで時間を潰してから屋敷に戻ったファルマは、部屋  
で世話をやいてくれるロッテを「神眼」で眺めてみた。すると、洗  
濯などの水仕事をしている働き者の彼女の手がぼんやりと青く光つ  
ている、手をよく見せてもらうと、無数のあかぎれを発見した。

「あかぎれ」

彼女の手を包んでいた青い光が白色に変わる。正解だったようだ。

彼はすぐに保湿剤を中心としたローションをこしらえ、花の香り  
をつけて、女子の好きそうなかわいらしいリボンを小瓶にかけ、彼  
女に手渡した。

「わあ！ 何ですか、これ？」

「ロッテにはお世話になっているから、プレゼント。寝る前に手に  
塗り込んで。しばらくすると皮膚が滑らかになるから。顔に塗って  
もいいよ」

「やった、嬉しい！」

ロッテはこれ以上ないといっていいほど喜んだ。小躍りしそっ  
つた。



「母も使っていいですか？ 母も手がガサガサなんです」

ロツテは小瓶を高々と掲げてくるりとターンをして、はちきれんばかりの笑顔で無邪気に喜んでいる。

「もちろん」

翌日、ロツテと母親はつるつるになった手を、嬉しそうにファルマに見せにきた。

「すごいですこれ！ 皆が買いたいと思います！」

これまで、ハンドケアというと、高価な油や軟膏しかなかったのだという。それらの高価な薬は、薬師ギルドが販売を独占している。

「母には奥様が時々お薬をくれますが、お薬って平民には手が届かないほど高いんです」

嬉しそうに挨拶をして屋根裏部屋に戻っていったロツテの背を眺めながら、庶民が安心して薬を買える、庶民のために低価格の薬を提供すると人々が喜ぶかもしれない、彼はそう思った。

彼はもともと、人々を癒すことと創薬に人生を賭けた、奉仕精神の強い薬学者だった。今生の生でも持てる技能と知識を尽くして、彼らを助けたいと考えていた。

それに、ファルマは影が薄いどころか影のない、どう考えてもただの人間ではない異端者である。化け物と畏れられたり迫害されて殺されたりしないためにも、いや、最悪バレても周囲の人々に受け入れてもらえるように、彼らに必要とされる存在にならなければならない、という危機感も強く働いた。

貴族相手の家業は兄に任せ、物質創造で資金を得て、ゆくゆくは独立して薬局でも開いて、この世界の人々のために医薬の普及と奉仕をするかな。

ファルマはそんな、将来の展望を考え始めたのだった。

< i 1 5 7 4 5 8 — 2 4 9 6 >

## 6話 エレオノールの続投と取引

その翌日、エレンの伝書鳩から手紙がブリュノ宛に来了。

今日は高熱が出たので授業を休みたい。家庭教師をやめたいということをほのめかしていた。連絡を受けたブリュノはファルマに、

「高熱で休むそうだが、悪夢にも魘されているらしい。あれが休むというなど珍しいが」

悪夢の部分は自分のせいかもしれない、とファルマはいたたまれない。場合によっては、高熱もそうだ。

「家庭教師を辞めるなどと、なにをたわけたことを。弟子を持ち教えることも、薬師の修行の一環だと言い聞かせておったのだが」

エレンのことはそっとしておくのがよいと、ファルマは思う。ところがブリュノは、

「熱にうなされて寝言でも言っておるのだろう、これをお前が届けてやってくれ」

またしても自慢のポーションだという。

ああ……と、ファルマの目が死んだ魚のようになる。

（俺が行ったら、ますます具合が悪くならないか。てか、俺からの薬なんて受け取って貰えないんじゃないか）

そうは思っても、父の命令には逆らえない。

結局、言いつけ通りファルマが馬車に乗って、エレンに届けることになった。

「到着いたしました。ここがボヌフォワ家のお屋敷でございます」

御者がファルマの乗る馬車のドアを叩く。

「ありがとうございます」

馬車に揺られ、たどり着いたのは立派な屋敷だ。エレオノール・ボヌフォワは、伯爵令嬢である。ファルマの家ほどではないが、かなり大きな帝都郊外の屋敷に住んでいた。屋敷はルネサンス様式のようにみえ、洗練されていた。

「ふつつか娘は、ただいま具合がすぐれないようで。少しの時間でしたら、客間までお呼びしましょう」

尊爵の息子がじきじきに出向いたというので、エレンの父親である伯爵が玄関ホールに出てきて応対した。

「いえ、具合が悪いということでしたら、お会いせず帰ります。エレオノール先生にお渡してください」

ブリュノの手紙も添えてある。辞めたいなどと何をたるんだるか、熱がひいたら家庭教師を続ける、という内容だ。

「せっかくご足労いただいて、このままお帰するわけにはいかない、呼んでこさせます」

「でも高熱で」

「這ってでも来させましょう」

ファルマは直接会わないつもりでいたが、ぜひ、と伯爵に客間に通された。

客間のドアが開いてエレンが来たかと思ったら、エレンではなく鉄兜が半分、こちらを覗いていた。

「エレン？ お邪魔してるよ」

「何しにきたの？ まさか、秘密を知る私を消しに来たの！？ そうなんでしょう！？」

「そんなわけないって！とにかく、座ってよ」

ほら。杖も持っていないし、とファルマは両手をあげる。

一方のエレンは完全武装だ。対神術用のプレートアーマーを着て、眼だけが見える状態。性能のよさそうな杖を三本も構えている。やる気だ、彼女は。

部屋の中に入ってもファルマとはかなり距離を取って、壁にへばりつくようにしていた。ファルマはエレンを神眼で診る。風邪ではあるが、高熱というのは本当のようだ。全身を覆い尽くすような重い鎧を着て、中に入っている病人のエレンは相当に辛いはずだ。

「父上が、エレンに薬を渡して来いって。それがこれだけど」

ファルマは怪しい緑色の輝きを放つ薬瓶を、客間のテーブルの上に置く。ファルマが父にレシピを確認したところ、このポジションには栄養ドリンク以上の効果はなさそうだったので、ファルマは中に、風邪の諸症状を和らげる薬を処方しておいた。

「お師匠様だったら……解熱薬なんて私が造れるのに、どうしてわざわざ」

（発熱で家庭教師を辞めるぐらいだから、自分の薬が効いてないと思っただんじゃないのか？）

とファルマは思ったが指摘はしなかった。

「俺からは、湿布を。突き指をしたところに貼ってほしいんだ」

消炎鎮痛成分を練りこんで、湿布を用意して来た。こちらも正真正銘、効果のあるものだ。

「それから、眼鏡のフレームも忘れてたから」

ついでに屋敷に置いてあった予備の眼鏡も持ってきた。

布に包んだ眼鏡と、メガネフレームをファルマは丁寧に机の上に置く。

「あ、ありがとう」

臨戦態勢だったエレンは勢いがしぼむ。

「家庭教師、辞めるんだっけ。急に聞いたから」

「そうよ。だって正直私なんかに教わりたいことなんてある？ あなた薬神の化身なんでしょ？ もう家庭教師なんて必要ないじゃない。神術だって本当は自由自在に使えるんじゃない？」

エレンの中ではファルマは遂に、薬神の化身ということになったらしい。

「いや、俺は人間のつもりだし、神術のことはさっぱり分からない

んだ」

人間だとは言いながらも、ファルマ本人も自信がない状態になってきたが。

「どう言い訳しようかね、人間には影があるものなのよ、ファルマ君。ああ、私は何を当たり前のことを言っているのかしら、しかもそれを知っているのが私だけだなんて。何で誰も気づかないのよ、ド・メディシス家の屋敷の人間は」

家の中が薄暗いからだ、とファルマは心の中で応える。

エレンは兜を脱いでガシャンと机に置いた。中は茹るような暑さなのだろう。

「エレンがよければ、家庭教師を続けてほしいんだ。色々教えてほしい」

「えっ？」

エレンは不意打ちをくらったような顔をした。

神術について、ファルマの家にそれらしいテキストはなかった。

庶民に知られないようにか、戦術的な意味があつてか、神術のスキルは口承で伝えるらしい。ファルマ少年のメモも殆どなかった。だから、ファルマはエレンに家庭教師を続けて欲しかったのだ。そうでないと、ファルマ自身も強大すぎる神力をどう御していいのか分からず困る。

「断つたら、秘密を知る私を消すつもり？」

「まさか、何もしないよ。じゃ、今日はこれで帰るから。あと、それから」

「何？」

「さっきその兜を置いた時、また眼鏡を割ったよ」

止めようとしたが、間に合わなかった。

「きゃーっ!？」

エレンは眼鏡運がないな、などと思いながらファルマはボヌフオワ家の屋敷をあとにした。

翌日。

「ファルマ君、神術の授業に行くわよ！今日はみっちりやるわ！」

朝食が終わった直後、エレンがド・メディシス家の屋敷に単騎で乗り込んできた。プレートアーマーでだ。決闘でも申し込むのかといういでたちだ。

「みっちりって？ 家庭教師は続けるってこと？ それとも、俺と戦いにきた？」

「家庭教師よ。この格好は万が一のときの防御のため。仕方ないじゃないの。もしあなたが神術を知らないというのが本当なら、教えないわけにはいかないわ。帝都が吹っ飛ぶもの、ううん、そんなのって困る。てか私が死ぬわ、死にたくない。人に迷惑かけないように孤島で訓練するわよ」

いつきにそう言い切ったエレンは、アーマーの中でまたしても暑そうだった。

命がけで荒ぶる神の化身を鎮める、女騎士、ぐらいの重装備でやってきたエレンに、丸腰のファルマは非常に申し訳ない気分になった。



「それは助かるよ、体はもうすっかりいいのか？」

「元氣になったわよ。びっくりするほど効いたの、あのポーション。それに、君の造ったあの湿布だって」

エレンは馬を飛び降りて、ファルマに近づいた。

「知らない薬効成分が入っていたわ、あれは何？」

エレンは新しいメガネをずらして、ファルマの瞳を覗きこむ。

「分かったんだな」

無味のはずだがどうやってわかったのだろう。と、ファルマは感心する。

「分かるわよ。これでも一級薬師ですもの。でも、それが何の薬なのか分からないってのが許せない」

だから戻ってきたのか、とファルマは納得する。なかなかのプロ意識だ。

「知りたいの、薬神（Dieu de médecine）の叡智の全てを！」

エレンは遂に薬神よばわりしはじめた。彼女の中でファルマの存在はどんどんスケールアップしているようだ。

「いや、だから、違うから」

「内緒なの？ 影がないなんて、バレバレなのに」

「それに気づいてるの、エレンだけなんだ」

せめて人前では普通にしておし、とファルマは約束を交わした。こうしてエレンが神術をファルマに教え、ファルマが薬学をエレンに教えるという、交換取引が成立して、エレンは何とか続投してくれることになった。

そしてエレンの熱が一晩でおさまり家庭教師に復帰したと知った父は、「そうであろう、そうであろう」と、またしても彼のポーション製作に自信を深めたのだった。

以後、二人の授業の場は、河の中州から孤島に移る。

この時期、サン・フルーヴ帝国沿岸の地図から、消えた小さな孤島がいくつかあったとかなかったとか。

しかしその訓練の甲斐あって、エレンはファルマの傍に臆することなく近づけるようになった。

もう、対神術用フルプレートアーマーを着なくてもいいほどに。

## 7話 ド・メディシス家の診察、そして初仕事へ

エレンの授業がない休日は、ファルマは屋敷内の人間を観察する。エレンには神眼と言われたものの、彼は自身の疾患透視能力を「診眼」とでも名づけることにした。といっても彼の師であるエレン以外、誰も知らない能力。ロツテにも内緒だ。

左手の指で輪っかを作って輪ごしに相手を診ると能力が発動するのだが、眼鏡をつくるような動作は目立ちすぎる。相手をおちよくっているか、気がふれているかのどちらかだと思われるだろう。目上の存在に会うには、失礼にあたるのはまず間違いない。そこで彼は試行錯誤して、眼を挟むように指を添えるだけで診眼を発動できるようにした。これでも違和感のある動作ではあるが、ました。また、集中を要するが人体を透かし見ることもできるようになった。

母は重い腰痛をわずらっており、エレンの時と同じ湿布を作って処方した。

妹は腸が弱く、下し気味だったので整腸剤を処方した。

屋敷の中を歩き回るついでに、会う人一人ずつ、さりげなく診てゆく。

患者を見つけると、診眼ごしに患者の光った部分を診て、病名を当てる。診断前に青かった光は、診断後は白へと変わり、その診断が正しいと分かる。診断が間違っていると、いつまでも白くならない。

正しい処方薬の名前を唱えると、白い光も消える。そしてその処方薬を造る。

それは彼自身の能力と診断力を試す訓練にもなったが、診断はときに困難なものもあった。

ファルマの前世は、世界をリードする天才薬学者であり、医学知識にももちろん通じていたが医師ではない。それゆえ、知識のないマニアックな病名もある。それでも彼は根気よく診て、その人のために症状に応じた薬を調合していった。

「ごきげんよう、お坊ちゃま」

「おはよう、マリアンヌさん」

今日も洗濯係のマリアンヌが、大量の洗濯を抱えて廊下をすれ違う。両親の衣類の洗濯をする中年女性だ。いつも朗らかで、洗濯干場でよく雑談をする。彼女には悪い部分はない。

「外へお出かけになつては。よいお天気ですよ、ファルマ様」

「そうするよ、セザールさん」

よく散歩を誘われる中年男性、庭師のセザールだ、外に出たらどうか、とよく話しかけてくる。彼も健康だ。

（皆、健康が一番だ）

ファルマはうんうん、と頷く。

使用人たちにも適切に診察し、物質創造能力で薬の処置を施すと彼らは涙を流して喜んだ。ご主人様に薬をもらったことなど、なかったのだという。

そしてブリュノとともにせわしなく通り過ぎて行った家令のシモンには、虫歯があるようだ。

虫歯の治療は要検討だな、とファルマは保留にする。

「案外、父上は家の皆のことを診てないんだな」

屋敷の中庭を散歩しながら、ロツテと雑談をする。

使用人も家族のようなものだろうに、とファルマは思うのだが、それはこの世界の常識ではないらしい。

「旦那様は、高貴な方々のための薬師様ですから。下々のことに気を回される余裕はありません」

「薬師の家なのにな？」

「そういうものです」

貴族の薬師は平民を診てはいけないのだという。使用人が重い病気にかかった場合は、民間の薬師ギルドの三級薬師がわざわざ呼ばれて診る。基本的に薬は高価なもので、治療が妖しいということもあり、庶民の死亡率は驚くほど高かった。

この世界の平均寿命は低く、成人したとしても長生きするものは少ないという。

「ファルマ様は、私たち下々の者にも分け隔てなく優しくしてください。よい薬師になれますね」

ロツテは、使用人たちはみなファルマに感謝している。と言って笑顔を向けた。

「患者さんを身分で差別するなんて、ありえないよ」

患者に最善かつ平等な処方を提供するのは、ファルマの現代人の感覚としては当然である。

郷に入れば郷に、とはいえ、譲れないものもある。

そして彼は、右手で作った輪つかにも能力が隠れていたことに気付いた。

輪つかの大きさに応じて、患部を拡大視できるのだ！

つまり、彼的能力をまとめると以下になる。

- ・ 左手…物質創造能力
- ・ 左手の輪…疾患透視・診断能力（診眼）、特效薬探索能力
- ・ 右手…物質消去能力
- ・ 右手の輪…患部拡大視

「本格的に、人間やめちゃってるなあ」

エレンは、ファルマが薬神の化身どころか薬神そのものなのではないかと疑っているが、あながち大げさでもないかもしれない。と、ここまでくればファルマもそう思う。

あまりにも都合のよい能力を得て舞い上がるところだが、ファルマは警戒心のほうが優っていた。それに、能力の代償なのか何なのかファルマ自身の影がないのが一番困る。屋敷の人間は気付いていないようだが、気づかれるのも時間の問題だろう。彼はつとめて物陰を歩くようにした。

こうすれば、自分自身の影がない状態をごまかせる。

「でも、だとしたら何なんだ？」

神がかり的な何かであればまだいいのだが、悪魔つきの何かであった場合。人に話して、それを聞きつけた霊能者にやられてしまつては困るし、とファルマは悩ましい。

（あ、そういえば……）

自身の能力を整理していたファルマはたと気づき、宝石箱の中をあらためた。いずれも高価そうな宝飾品がある。ブローチや指輪などだ。彼は宝石には用がなく、ガラス製品を見繕う。

「あつた！ これでアレができる」

ガラスの宝飾品の一部の、非常に小さな透明の玉を割って集める。そして、細かなガラス片を神術の炎が燃えている暖炉の火であぶって角をとり、球状にした。

それが重要なパーツだ。ファルマはその日、ほんの数時間でガラス球と金属板を使って簡単な工作をして、とある物をこしらえた。その小さな作品は、前世の彼が愛用していたものの簡易版で、これがひとつ手元になればどうしても落ち着かない。

「まあ、今はこんなものかな。もっと性能のいいやつが欲しいけど」  
そのできばえに満足はできなかったが、とりあえず目的は果たせるものだった。

その、地味な工芸品は、彼の手の中できらりと輝いていた。

… … …

「ファルマ様。旦那様がお呼びです」

さらに数日が経って、ファルマが屋敷の生活にも慣れ、使用人たちの顔も覚えた頃のことだった。昼食を終え読書をしながらロツテと庭でくつろいでいると、急ぎの用があると、家令のシモンが部屋に呼びに来た。家令というのは、ド・メディシス家の最上位の使用人にあたる。

「何の用だろう、嫌な予感がする」

ブリュノがファルマを呼びつけるときは、ろくなことがなかった。たいていはオカルト薬学の抜き打ち試験が待っている。

それならまだいい。

以前はブリュノに呼ばれたと思えば、満月の日に例の薬草園に一緒に出向き、ガゼボの中心に描かれた魔法陣らしきものの上で、ブリュノが必死の形相で両手を振り回しながら何か呪文を詠唱するのを傍で見学しているという罰ゲームじみたものがあつた。薬草に神力を注ぎ込むのだといって。

やぶ蚊に刺されまくつたファルマだが、あれほど惨めな思いをしたことはなかった。ブリュノは本当に高名な薬師なのか、と疑わしい。

あんな野外活動に付き合わされるのはまっぴらごめんだ。しかし。

「あなたのお仕事です、宮廷薬師見習いとしての」

仕事。そう言ってシモンがファルマを呼びに来たのは、初めてのことだ。ファルマは気持ちを引き締める。

「皇帝陛下の診察です」

ついにきたか、とファルマは身震いした。

いよいよ初仕事だ。



7話 ド・メディシス家の診察、そして初仕事へ（後書き）

おい主人公！ と思われた方は、1章9話までお待ちください。

## 8話 女帝エリザベート2世の診察

「ファルマです、参りました」

父は入室したファルマにちらりと一瞥をくれ、あわただしそうに書類をまとめたり、薬びんを鞆に詰めたりして身支度を整えていた。何人かの使用人や弟子の薬師たちが集まって父の支度を手伝っていた。その中にエレンはいなかった。父は彼らを下げさせる。

（あれ？）

父の仕事は激務なのだろうか、最近目にみえて痩せたような気がする。

そういえば、乾いた長い咳が続いていた。

（確実にどっか悪そうだな、診てみるか）

ファルマはさりげなく左眼に手を添えたときだった。

「どうした？ どこか痛いのか？」

ファルマは父の言葉で集中力をそがれ、一旦診眼を中断する。こうまじまじ見られてはかなわない。

「私の話は直立不動で聞け、たるんどる！」  
「はいっ」

ファルマは気をつけの姿勢をとる。父親には絶対服従、それがこ

の世界のしきたりなのだ。

「陛下の容態が急変した。体調が優れないなら足手まといだから来るな、そうでないなら急いで身支度をして私の供をしろ」

軽々しく聞かれてはならない話なのだろう、父は人払いをしているにもかかわらず声を潜めた。自信満々の父が、珍しく余裕のなさそうな表情をしていた。

「お供します。陛下のご病気はどのようなものですか？」

「ここで言うわけにはいかない、だが、治癒は難航しそうだ」

ここ数日、女帝陛下の容態が急変したという。主治医である、住み込みの侍医長（宮廷医師）がつきつきりで治療を施しているが、なかなか奏功しないということで、父も毎日のように呼ばれていたようだ。

（一国の君主の容態なんだもんな、病名はトップシークレットか。つてかその診断、合ってるのかな）

ファルマを供に連れて行くつもりでいるらしかった。皇帝の診察は、宮廷薬師とその見習いしかできない。一級薬師以下はお呼びでないのだ。カバン持ちと調合の手伝いと、雑用、診察の見学がファルマの仕事だ。

皇帝の診察や治療に限っては、基本的には侍医と宮廷薬師双方が行い、侍医の処方で宮廷薬師が調剤する。医薬分業を徹底しておかないと皇帝の暗殺などが起こりうるからだ。侍医（宮廷医師）と宮廷薬師のスキルと資格は基本的には変わらない。病気を診断し、薬を処方する。この世界の薬師には、日本と違って、薬師に独立処方権がある。こうすると薬師は医師ではないかという話になるが、し

かし医師は外科的な処置ができる点で異なる。

そんな状況の中で、皇帝は侍医よりも宮廷薬師であるブリュノを信頼し、筆頭宮廷薬師として重用していた。ブリュノが尊爵として叙せられ裕福な暮らしに与っているのも、皇帝の庇護があつてこそだ。

「気を引き締めて参れ」

「はい」

皇帝の治療に失敗をした筆頭侍医（主治医）や筆頭薬師の立場は一転する、とエレンが言っていた。つまり、皇帝の転帰によってド・メディシス家の運命が決まる。失敗すれば家の一大事だ。父が余裕のない顔をしている理由が、ファルマにも分かった。

（つてことは重病なのか？ 皇帝は）

ファルマはそんなことを考えながら、大急ぎで支度をする。もともと準備をしていた、彼のカバンをひとつ持っただけだ。その中には、ファルマが備えていた道具、器具類が入っている。

「ファルマ様、頑張ってくださいね！」

ロッテがファルマに、一張羅のグレーのコートを着せてくれた。

「行つて来るよ」

心配そうなロッテに、ファルマは笑顔で手を振って部屋を後にした。

「行くぞ、ファルマ」

「はい」

馬丁が曳いてきた馬に騎乗し、父ブリュノ・ド・メディシスとその息子ファルマは供を引き連れ女帝の待つ、サン・フルーヴ大宮殿へと馬を走らせた。馬車で宮殿に駆けつけるのでは遅い。

人馬一体となり、父と子、そして数名の従者たちは、暮れなずむ帝都の大路を駆けぬけてゆく。

「尊爵一行のお通りだ！ 道をあけよ！」

先触れの従者がラッパを吹き鳴らす。ブリュノお抱えの信頼のおける凄腕の聖騎士たち数名ががっちりと脇を固め、平民たちは頭を垂れ誰もが道を譲る。

ファルマの馬術は見事なものだ。エレンにも教わったし、基本的には生前のファルマ少年の習得していた技能を、そのまま引き継いだ。

これから診察を行う相手、皇帝陛下の予備知識はエレンに聞いて仕入れていたので、ファルマは情報を整理しながら手綱を握り締める。

サン・フルーヴ帝国皇帝、エリザベート2世。24歳。女帝だ。彼女は大陸全土でもっとも力を持つ神術使い（炎属性）の家系であり、大陸の国々を統べ、大陸全土を掌握するほどの権力を備えた女帝である。病死した先帝の後継者として神殿に選定され、即位後専制政治を継ぎ、在位7年。

武勇の才に優れ、辣腕を発揮し帝国を拡大、僻地を開拓し政情を安定化させた賢君として知られている。ローマ帝国やロシア皇帝のような、絶対王政を敷く君主だと、ファルマは漠然と理解している。

帝位は世襲ではない。実力主義。つまり皇帝（女帝）エリザベー

トは帝国で最も神力を持つ神術使いであり、即位式の時に彼女の握った神力計はゲージの帝国最高値をマークしたという。

生まれながらにして強い神力を授かる「神に王権を認められている」という論法で王権神授が成り立つ、というわけだ。

（皇帝、名ばかりかと思っただら実力で皇位についたんだな……強そう）

ファルマは、彼が神力計のゲージを振り切ったことをすっかり棚にあげて感心していた。もちろん神力一辺倒ではなく、人物も優れていることが皇帝の条件である。

先導の騎士たちが門番に手配して、宮殿の黄金の格子門が仰々しい音を立てて開かれた。

（うちの屋敷よりずいぶん新しい建築様式だな。ベルサイユ宮殿みたいだ）

皇帝の宮殿は、広い庭園を持つバロック様式の壮麗な景観を持つ比較的新しく見える大宮殿だった。中央には黄金の彫刻のある大きな噴水があり、澄んだ水を惜しげもなく吹き上げている。宮殿の背後に広がるのは大庭園。壮観だった。

エントランスには豪華な装束を着た、皇帝の従者たちがずらりと並んでいた。

父とともに馬を降りると、

「お待ちしておりました、尊爵閣下」

女帝の側近に案内され、目も眩むような高価な調度品が飾られた、

大きな一枚鏡の何枚も張られた廊下を、大勢の侍従に囲まれながら足早に抜け、わずかな間待合室に通されたかと思えば、すぐに侍医に呼ばれ女帝の寝室に入ることを許される。

父のあとについて女帝の寝室に入ると、侍医たちが部屋の隅に控えていた。彼らは一様に真っ黒なコートを着ている。医師は施療で衣服に血がついたり汚れるので、黒い装束を着るのだ。そういえば、父も似たような衣装だった。もちろんその装束は滅多に洗ったりはしないようだ。不衛生きわまりない。

「筆頭宮廷薬師、ブリュノ・ド・メディシス尊爵と供の者が参りました」

「入れ」

ファルマも父のあとに控え、作法に則って礼をする。天蓋つきのベッドで体を横たえて休む女帝はげっそりとやせ衰えていた。

ブリュノは侍医たちと言葉を交わす。

ファルマが父のカバンを持ちながらざっと聞き耳を立てていた限りでも、皇帝は咳や痰がとまらず、喀血や血痰にまで進行しているとのこと。彼女は激しい喀血を繰り返し、呼吸困難にもなっているようだ。ブリュノは厳しい顔つきで、食事内容や発熱の記録などに目を通す。

「陛下、失礼いたします」

ブリュノは女帝のベッドに近づくと、時間をかけて彼女を診る。

恭しく礼をして、女帝の肌には直接触れず白い絹布越しに脈をとる。

（いよいよか）

ファルマはすました顔で父のカバンを持ちながら、ブリュノの姿を注視した。宮廷薬師だというのだから、それなりに治療スキルは高いのだろう。お手並拝見だ。

父は砂時計と女帝を交互に見て、脈をとっている。それが終わると、女帝の指先からわずかに血を採取し、シャーレにたらす。唾液や尿をとってつぶさに観察し、神術で造った水に希釈して、試験管に入れ何かと反応させてあらためる。そして、占星盤を真面目な顔つきで睨み付ける。

何を見ているんだ、とファルマは首をかしげる。

（神術か占いで診断しているのか？）

あんな方法で病気が分かるとは思えないファルマだが、エレンの話では、父は優秀な宮廷薬師として宮廷内でも評判だという。とくに診断能力に長けていると。まさか占いの才能に秀でて宮廷薬師になったというのではあるまいな、とファルマは訝る。神術のあるこの世界では、占術の腕も重要なのだろうが。

ブリュノはもったいぶって礼をすると、侍医と目配せをした。侍医も相槌を打って、耳打ちをする。

「貴殿の診たてはどうか」

「は、それが」

ブリュノは沈痛な表情で瞑目した後、書類にサインをしていた。侍医の診断と食い違いがないか、病名を記す必要があるのだろう。

（病名は何なんだ？ 何だと思ってる？ 診断できているのか？）



当然だが、病名はこの世界ならではの病名であり、日本人が聞いたとしても首をかしげる。だが、その異世界の病名が日本語のどの病名に相当するかというのを、ファルマは全て暗記した。だから、彼らが異世界での病名を言えば、ファルマは彼らが正しく診断しているのかどうか分かる。

ファルマが聞き耳をたてていると、どうやら両者とも、これといった診断はついていないようだ。肺が弱っている、占術によれば星のめぐりが悪い、命運がつかけている、というニュアンスの言葉が聞こえてくる。

（病名は分からなかったのか）

ブリュノは「調査室を使わせていただく」と言って寝室を出ていった。ファルマも手伝いについてゆこうとしたが、ブリュノに「これはお前は見なくていい、陛下を見ている」とおし戻された。

宮廷には侍医や薬師が薬の調合をする鍵付きの調合室というものが、皇帝の寝室の近くに設けられている。

そこでブリュノが調合をして丸底フラスコに入れてきたのは、麻醉。ファルマの前を通ればニオイで分かる。

（アヘンとマンドレイクと他のまぜものをした麻薬だな）

ファルマは内容を推測する。見習い薬師は壁や調度品と一体化して、邪魔にならないよう存在を消しながら事の成り行きを見守っていた。そのとき女帝が激しく咳き込んでベッドの上で眼を覚ました。

「陛下、ご気分はいかがですか」

ブリュノが駆け寄り、ベッドサイドで膝をつき女帝に問う。女帝はパジャマ姿だった。やせこけた頬の彼女の肌は乾き威厳はない。彼女は哀れな病人であり、誰の目にも死の影が迫っているのは明白だった。

ファルマは離れた場所からじつと彼女の様子をうかがった。

「正直に申してみよ。余は……もう、助からぬのか」

弱音を吐く女帝を、父は優しく慰める。女帝の忠臣としての父の意外な一面。その姿は、厳格な家父長としての顔しか見ていなかったファルマには新鮮だった。

「ご心配を召されますな、じきによくなりましょう。よく効くお薬を用意してございます」

それは麻薬だ。ブリュノが準備したものは多少毒性はあるが、死に至るようなものではない。積極的な治療を諦め、消極的な治療法に切り替えたのだ。侍医たちも同意のうえで。

調合を見せなかったのはファルマに、治療を諦めた姿を見せたくなかったからだろう。

（そりゃ、陛下も見ると重病そうだけど）

宮廷薬師の技を見せてくれないのか、とファルマは声援を送りたいところだが、当の父はというと断腸の思いで諦めたのか、麻酔の手順に入ろうとした。

「陛下、蒸気を大きくお吸いください。最初は浅く」

麻酔をかけると女帝の苦痛は和らぐだろう。言い換えれば、麻薬

で意識を朦朧とさせてゆくだけだ。

「神官を呼んでくれ、明日の夜がヤマだ」

侍医長のクロードは、大きくひとつため息をつき首を左右に振ると、王の側近と廷臣に密かにそう告げた。既に麻酔の蒸気で、女帝の眼はとろとろとし始めた。安らかな死を迎えられるよう、神官が祈祷を行うのだ。痛みを除きながら、女帝が衰弱してゆくのをただ待っているほかにないようだった。

（治すつもりがないのか、誰も）

一部始終を見ていたファルマはその場でただ一人、その処置を受け入れられずにいた。

ファルマは女帝の治療にかけては、宮廷薬師のブリュノの顔を立て、この場では出しゃばるまいと考えていた。また、薬剤師が医師を差し置いて診察したり、治療方針を立ててはならないという、日本での法律に無意識に縛られ行動できずにいた。

しかし誰もかれも既に治療を放棄してしまっているし、未熟者だと決めてかかっているファルマの言葉に耳を貸しはしないだろう。

（傍観はやめだ）

もはや、お供の少年ではいられない。

ファルマは左眼に左手を軽く添え、神力を指先に通じる。

碧色の瞳の眼光が変わり、僅かに発光を呈する。診眼が発動された瞬間だ。

診眼を発動しているときは、ファルマから見た世界の彩度が下がる。意識が絞り込まれるように集中力が高められていく。病に喘ぐ女帝の両肺は、無数の青白い輝きを放つ病巣が透かし見えた。病魔

に侵された臓器の悲鳴が聞こえるようだった。

（苦しいだろうな……よく耐えている）

ファルマは誰にも聞こえないほどの小声で呟き、病名のあたりをつける。もし彼が日本にいたならば、血液検査や各種画像検査、生検の結果を精査するところだが、各種設備がないのでそれができない。

診眼で青く光って見えているのはあくまでも”病が存在する箇所”であり、必ずしも腫瘍ではない。診眼を通常の画像解析のように考えると失敗する。つまり、風邪や気管支炎などでも反応するのだ。

「”転移性肺腫瘍”」

「”肺気腫”」

「”肺炎”」

可能性の薄そうなものも含めて、ひとつずつ潰してゆく。

光の色は変わらない。光は青いままだ。

（違うのか。この異世界特有の病気か？）

そうだった場合、一筋縄ではいかなくなる。そういや中世ヨーロッパ風異世界だしな、と嘆いたファルマははたと思い出す。

（……そうだった。中世か）

ここは中世ヨーロッパ相当の文化文明レベルの異世界だということとを考慮に入れるべきだった。しかも、現代日本でも、治るとはいえいまだに無視できない病気だ。発展途上国では猛威をふるっている。

女帝が若いので、ファルマは無意識にその可能性を外していた。

「肺結核」

診眼は病名を詳らかにした。病巣を包んでいた青白い、人魂のよ  
うな光が浄化され純白の光へと変わる。

「白死病」という名前が、この世界ではついている。  
かつて地球世界の中世においては、白いペストと呼ばれ、不治と  
された病気だった。

## 9話 筆頭宮廷薬師と転生薬学者、仕事の流儀

侍従の誰かが、エリザベートの病状が思わしくないことを知らせたのだろう。

幼い皇子が、女帝の寝室に駆け込んできた。ブリュノは皇子が来たので、麻酔を一旦止めた。まだ完全に導入には入っていないので、中止することはできる。

女帝の枕元で母の名を呼び、泣きじゃくっている。彼の頭を力なく撫でるエリザベートの手。その手は大陸全土を統べる女帝エリザベート2世のそれではなく、息子を気遣う一人の母のそれだ。

エリザベート亡き後、残された皇子はどうなるのだろう。母の胸にはそんな思いがよぎっているのかもしれない。瀕死の母にしがみつく皇子の姿は、ファルマの心を揺さぶった。

ファルマは左眼に手を添えたまま、治療方針を定める。

結核の治療薬といえば、1943年に発見されたのはストレプトマイシンが最初だ。が、ファルマはこれを却下。注射を使わなければいけないからだ。経口投与（口から飲むもの）できる薬を選ぶ。しかも薬剤耐性を獲得することを用心し、複数の薬剤を組み合わせる。

「イソニアジド」

「ピラジナミド」

「エタンブトール」

候補としている治療薬は3種類。4種類を使いたいところだが、物質創造は目を閉じて完全にイメージできる化合物のみ可能だ。全て彼が構造を確実にイメージできる単純な化合物は3種類になる。

高分子化合物ほど想起しにくい。構造は知っているし構造式を書

けるが、イメージできないものも多い。

3つの名前を挙げたとき、光は一応消えたが、よく見ると薄く光が残っている。それに不安を感じたファルマは、

（一応もう一剤、加えておくか）

彼はやはりダメ押しに、と第四の薬剤を加えた。

（力技でイメージにもっていか。残像で脳に焼き付けてやる）

構造式を紙に書きだしたものを凝視していて、瞼を閉じると脳にそのまま映る。彼は機転をきかせる。

「リファンピシン」

もっとも複雑な構造を持つ、治療のカギとなる薬剤はやはり必要だったようだ。

白い光は消えた。

「陛下」

ファルマは大判のハンカチを折り、口にあて頭の後ろで結び当座のマスクを作る。

意を決し女帝の前に歩み出て立礼をして名乗ると、単刀直入に言葉を継いだ。

「私に、陛下の施療をお許しただけませんか」

女帝エリザベート2世は空虚な表情で、病床からファルマをぼんやりと見据えた。

「何を、申しておるのか」

薬の効果に絶対などというものはない。薬の効果が出る前に容態が急変して亡くなることもありうる。それらを考慮しても、彼は氣迫をこめて、一語一語を発した。

「特效薬があります」

客観的にみて、ファルマ・ド・メディシスは十歳の見習い薬師の少年だ。技能も知識も、父をはじめ、宮廷に仕える高名な薬師たちにははるかに劣る。身の程を知らない見習いが何を言い始めたんだ、侍医団は聞こえよがしに嫌味を言っ、鬱陶しがった。彼らには洩垂れ小僧の戯言にしか聞こえない。

「ファルマ！ 下がっている！」

ブリュノがものすごい剣幕で怒鳴りつける。顔面蒼白のブリュノがファルマに飛びかかり羽交い絞めにして部屋から連れ出そうとする。

頼むからヘタなことを、言ってくるな。

ブリュノの顔にはそう書いてあった。

ブリュノはファルマを引きずりながら弁明する。

「申し訳ありません、陛下、愚息がご無礼を。すぐに下がらせます」  
「しばし待て」

女帝はブリュノを戒めた。

そして、彼女は居並ぶ廷臣、侍医たちをぐるりと眺める。



「それは本当なのか？」

侍医団、薬師団の誰もがきまり悪そうに口をつぐんだ。

「新薬はいつ見つかった。それに、余の病は、一体何なのだ」

大勢の廷臣たちは女帝の言外の圧力から逃れるように視線を伏せる。返事はない。寄る辺を失った女帝は、ファルマをまっすぐに見つめた。

「そなたは知っておるのだな」

「存じております」

ファルマは一礼する。

風前の灯火となった女帝の命、死が間近であるということは、神術使いである彼女が誰よりも識っていた。そしてこれから、彼女がもっとも信頼していた宮廷薬師や侍医たちに殺されるのだろうということも。

殆ど一回きりしか許されない博打を、ふらりと現れた少年の戯言に賭けるようなものだった。

しかしそれでも、彼女は少年の瞳の中にある確固とした自信を読み取った。

あたかも真相を知っているかのような、一片の曇りもない瞳を。

「そなたの手に余の命運を委ねたいと思う」

ファルマと女帝の視線が交わる。

「この通りだ」

女帝は最後の力を振り絞るように頭を下げた。  
その肩のなんと華奢に見えたことだろうか。

「承知いたしました」

ファルマは一人の患者と真正面から向かい合い、彼女の命を請け負った。

後にはひけない。

女帝の寝所にいた侍医団および父ブリュノは、凍りついた。もはや誰もファルマの邪魔しようとするものはない。そんな中でファルマは悠々と女帝から唾液のサンプルを採取すると、「調合室をお借りします」と言い残し、退室していった。そして中から施錠した。

「待つのだ、ファルマ！」

ファルマを追って父も女帝の御前を辞去すると、調合室に駆け込もうとする。しかしドアはびくともしない。

「ここを開けよ！」

ファルマは父が扉を力任せに叩く音が聞こえる中、慣れた手つきで女帝の唾液サンプルをガラス板に塗りつける。小さな瓶に入った薬品を机上に並べ、それをガラス棒で取って上から塗り、さっと広げる。ガラス板をランプの炎で炙り、その後いくつかの薬品の瓶を並べ、サンプルを順に薬品に通してゆく。

ガラス上を擦って金属のおもちゃのような器具を取り出して塗り、それをランプの光に透かし覗きこむ。

（やはり）

ファルマがひとつの確信を得たとき、父はドアを神術で破壊して中に入ってきた。

破られた密室。

燭台の明かりが照らす薄暗い調合室の中に、父子二人。

一触即発の緊張が部屋の空気を重くする。

「言え！ 何をしていた！」

ブリュノからすると、そこでファルマがいがわしい呪術行為を行っているように見えただろう。

「どういっつもりだ、差し出たマネをしおって。手を止める、何をしている！！」

ブリュノは激怒し、声を震わせファルマを厳しく問い詰める。

「陛下の治療の準備をしていま」

「たわけが！」

ブリュノはファルマの説明に怒号をぶつけた。

「世界中からいかな名医を探してきても、白死病を治せる者などおらん！ 新薬などとうそぶきおって」

（ん？ 今、白死病って言ったな）

ファルマは手を止めた。

「驚きました、父上は白死病（結核）だと診断していたわけですね。」

どのようにして知ったのですか」

あの侍医団の中で父だけが、女帝を結核だと見抜いていた。侍医たちは体液がどうか、星座がどうか言って迷走していたが。オカルト薬師だと考えていたファルマが、父の能力を見誤っていたことになる。

「私のポーションと反応させて、白死病の徴が出たのだ。お前こそ、何を根拠に言っているんだ！」

先ほど、父は手作りのポーションと女帝の唾液を混ぜていた。  
(言われてみれば……)

その工程は結核の確定診断のための検査に似ている、とファルマは驚かされる。

偶然だろうか。ファルマの家にあったどの書物にもそのような検査法は載っていないかった。

しかも、あの夜に父が薬草園で踊り狂いながら神力を注いだ薬草をすり潰し、調合してできたポーションだという。

(あれがそんな効果を!?)

ファルマは舌をまく。

「それはどこかの書物に書いてあるものですか？」

「私が開発した新しい神技だ。書物にはない。私を誰だと思っている」

ブリュノ・ド・メディシスは大陸に3名しかいない宮廷薬師。

尊爵でかつ、帝都の薬学大学の総長をつとめている、一線級の薬

師だ。

ファルマが地球で名を馳せた薬学者であるなら、彼もまたこの世界の薬学をリードする学者だった。

神力を薬草に注ぎ込むと、特殊な効力を持つとブリュノとエレンは言う。神術で発揮される効力と薬草の組み合わせを世界ではじめて、体系的に調べ上げていたのがブリュノだった。ブリュノは数多くのオリジナル治療法を編み出していた。

（そうか。ここは異世界なんだっけな……）

ファルマは、これまでオカルトとして父の処方の色眼鏡で見ていたことを申し訳なく思った。ひょっとすると父が命じてエレンに渡していたポーシヨンだって、ファルマが最初に落雷直後に飲まされたポーシヨンだって、効果はあったのかもしれない。なにせ、それらは全て神術で生成した水で造られている。そこをファルマは見落としていた。

この異世界には、神術が存在する。神術でできた水やその他の神術に対しての科学的な検証を行わないままオカルトと断じてしまったのは、薬学者として正しい姿勢ではなかった。

異世界には異世界の流儀がある。

ファルマは感心しながらも、彼の行動には疑問が残る。

「父上はなぜ、先ほど病名が分からない振りをされたんです？ 診断をつけたのはいつです？」

診断は、十日前にしていたという。白死病の反応がその時と比べて30倍以上強くなっていると父は悔しがる。

「何故告げなかったか、だと？ 白死病（結核）は不治の病だから

だ。常に患者によりそうべき薬師が、心細いであろう陛下を嬉々として絶望へと陥れてどうする。お前は未熟者ゆえ、そのようなことが分からぬのだ」

それで彼は診断はついていたにもかかわらず、侍医に話を合わせたというわけだった。

「白死病の治療は、陛下にとつては何の意味もない。陛下のご臨終のうちに恥をかかせるな。それに私は過去、手触れによつて病が癒えたものをみたことがない」

この世界では、結核は王が患者に手を触れる事「お手触れ」により治せるという言い伝えがある。

だから皇帝が結核になつたなどと誰にも言えないし、治療法もないのだ。皇帝を上回る権能を持つのは神だけ。皇帝は神罰を受けているということになるのだ。それは皇帝の名誉にもかかわる。

「新薬などと口からでまかせを言うな。白死病の新薬は、存在せん！ 昨日のノバルートから届いた見解でもそうだ。新薬、それはお前の貧弱で不勉強な妄想にすぎん！」

ブリュノは、この世界最先端のノバルート医薬大学に常に新情報を求め、この世界における最新の知見を常に得ているらしかった。患者に嘘をつくのは不誠実だ、とブリュノはファルマを厳しく諭す。偽薬を処方するのは大罪だ、それならば治せないと白状すべきなのだ、と。

ブリュノは、徹底的に女帝のためを思つて手を尽くしていた。

（ブリュノさん……、本当に偉大な薬師だったんだな）

ファルマは彼を素直に見直し、尊敬の念を懐く。ブリュノがここ最近乾いた咳をしていたのは、結核に感染したからだ。診眼を使わなくても明白だった。彼は女帝が結核だと知りながら傍に寄り添い感染しながらも、自分のためではなく彼女のための治療法を模索していた。自らの命もかえりみず。

ファルマは、再度父に問いかける。

「諒解しました。それでもなお、父上は陛下に安楽死をとお考えです  
ね」

「それが最善の方法だ」

ファルマは頷く。父の手持ちの切り札では最善だ、と同意する。

「特効薬は実在します」

「嘘をつくな！」

「嘘ではありません。そしてそれは、あなたも飲むべきものです」  
「……！」

ブリュノは息子に結核の感染を見抜かれたのか、言葉を失った。  
彼がひた隠しにしてきたことのようなだった。

ファルマは水を生成し念入りに手を洗うと、滅菌しておいた清潔な布で手を拭いて、テーブルに置いたカバンの中から後ろ手で薬瓶とフラスコをとる。

父に見えないよう背を向け、瓶の上に左手をかざした。それらも予め滅菌していた、清潔なものだ。

（甘いシロップにして、飲んでもらうか）

ポーシヨン（水薬）はこの世界ではよく用いられていて馴染みがあるだろう。飲みやすく舌触りに対する抵抗も少なからう。患者は

激しい咳がついて、服薬しにくい状態だ。工夫をする。

「こちらを向けファルマ！　む！？」

ブリュノは青白い光が閃くの見逃さなかった。

それは物質創造の光だが、水の神術発動の印に似ている。

「待て！」

ファルマは構わず3種類の薬剤の構造式を思い浮かべ、治療薬を指定した分量で創造し薬瓶の中に落としこむ。最後に、もつとも複雑な構造を持つ薬剤、リファンピシンを紙に書き出し、残像を利用して脳に刻み付ける。創薬は可能となった。

そして、もう一つの瓶はシロップを満たす。できた治療薬を前に出して父に示した。

「今、神術を使ったのか。何故私に隠すのだ、お前が調合しようとしているものは、何だ！」

フラスコの中に移した薬を振り、よく混和する。透明な粘性のあるシロップの薬ができた。

「どんな調合をしたのか説明できぬなら、それは毒だ！　申し開きをしてみよ」

父は我慢の限界に達したのだろう、金の杖をかざしファルマに直ぐ向けていた。

貴族にとって杖は剣だ。

そう言ったエレンの言葉を思い出す。ブリュノは我が子に白刃を向けているのと同じ。



「杖をおさめてください父上。調合室を水没させるつもりですか」

しかしファルマの言葉に、父は耳を貸さなかった。ファルマはフラスコを机の上に置く。

” Danse d'épée de la glace （氷の剣舞） ”

ブリュノは発動詠唱を打つと、机上のフラスコめがけて攻撃を放つ。

ファルマ自身を傷つける意図はない、という攻撃の軌道だ。

（撃つて来たか！）

至近距離から放たれた氷のナイフ。しかし水の神術使いである父が放つ神術は、状態はどうであれ、水だ。それを知るファルマに、迷いはなかった。

ファルマは、薬を守るように右手をふりかざす。

（消えろ！）

氷の分子状態を正確にイメージし、それを右手に伝え空を払う。

氷のナイフであつたそれは、ファルマの手に触れると跡形もなく消滅した。

そして彼は左手を構え、彼と父とを隔てる分厚い氷の障壁を瞬時に出現させた。

発動詠唱はなく、杖も持たず素手でだ。

それは完全な防御壁となり、もはやブリュノがファルマに攻撃は加えられない、ブリュノは水属性であるが、「正」の術者。氷は水

であるが、属性が「負」ではないので消せないのだ。

「なっ……今、何を」

思わぬ息子の抵抗に、怯えたように目を見開くブリュノ。  
氷の壁を隔て、ファルマは父に宣告する。

「患者である陛下の御前で、特效薬については説明します」

「ああ……」

もはやこれで全てが破滅だ。

そう思ったのだろうか、ブリュノの瞳が絶望の色に染まった。  
そして彼は、ファルマにこう問いかけてきた。

「お前は、誰だ」

9 話 筆頭宮廷薬師と転生薬学者、仕事の流儀（後書き）

ファルマがイメージできないと言っていたリファンピシンの構造式  
< i 1 5 8 0 8 0 — 2 4 9 6 >

## 10話 単レンズ式顕微鏡と、発見された結核菌

ファルマ・ド・メディシスは、尊爵ブリュノの次男である。

彼は長男のパツレと違いド・メディシス家の跡とりとなることなく、将来は屋敷に部屋住みの宮廷薬師になる。父ブリュノは、彼がやりがいを持って一人前の宮廷薬師の重責に耐えられるよう、幼少のころからこれでもかとしごきあげてきた。

危険な薬草を扱わせ、やけどをさせたこともあった。

朝から晩まで勉強に神術の訓練で疲れ果て、遊びたいと泣かれたこともあった。

いつしか、彼は父のことを怯えた目で見えるようになっていた。

愛の鞭ではないが、実の息子にはいついつい厳しくしてしまう。そこで父は直接彼をしごくことをやめ、信頼のおける若き一番弟子、エレオノール・ボヌフォアに神術と薬学の教育を任せた。エレオノールは彼をよく教育してくれたらしい。それで、ここ数年はファルマの様子にブリュノの目が届きにくくなっていた。

薬師は人の命に寄りそう。薬師に必要なのは技術ではなく、心だ。そんな信念のもと患者に真摯に向かい合い、患者の心に触れてきたつもりブリュノだが、息子には父親らしいことなど、何一つしてやっていなかった。子の心を汲み取る努力も怠っていた。息子が何を考えて、どんな思いでいるのかすらも。

ファルマの心情は、ブリュノにはよく分からない。

それでも、目の前の少年が以前のファルマでないことは分かる。いつからそうだったのか、父は記憶にない。それを彼は、深く恥じた。

父はすぐ傍にあったファルマのカバンの上に置かれた彼のノート

を取る。ぱらぱらとめくってみる。氷壁を隔てて父がノートをあらためるのを、ファルマは物理的な障壁に阻まれ制止しなかった。

ブリュノは青ざめてゆく。

…  
…  
…  
…

ファルマは誰にも読めないようノートを日本語で書きつけていた。検査染色の過程を記しておいたノートを抜き打ちで見られ、ファルマは失態を悔いる。が、依然として父が日本語を読めないことには変わらない。それは使用人たちを診たカルテや、投薬の記録、彼がこの世界で刻み始めた足跡のすべてだ。数々の検査データもグラフ化している。数式や化学構造式は、父の目からみれば呪術めいた暗号のように見えただろう。

「繰り返すぞ。お前は誰だ！ 疾く答えよ」

この世界には、チェンジリング（取り替え子）の伝説がある。悪霊がこっそり子供を取り替えてしまうというものだ。取り替えられた子供は人間ではなく、化物の子とされる。見知らぬ文字を書き、杖もなしに神術を操るファルマをチェンジリングではないかと疑った。チェンジリングは人間に見破られると、どこへともなく消えてしまうという言い伝えがある。

息子を失うリスクを一考したが、それで消えるならもう息子ではない。

「この文字は、何だ。これも、これも、これも！ どこでこれを学んだ！」

「薬の知識は落雷の日に見た夢の中で得ました。その文字もそうです」

ファルマが捻り出した釈明は、こうだ。前世を夢の中の出来事だと形容すれば、あながち間違いでもない。ファルマがそうとでも言わなければ、どこで学んだのか、どの書物に書いてあったのかと出典を求められるので不都合がある。

「落雷を境に、か」

「そうです」

仄暗い調合室の中で、コートを脱いだファルマの両腕の傷跡には、脈打つように青白い光が宿っていた。それが、氷壁を透かし父にははつきりと見えた。

「……薬神が宿ったのだな」

「それは……わかりません」

どうしてこうなったのか、自らが何者なのか、人間なのかすらもファルマにも分からない。ファルマはそう言っただけ黙したので、それは婉曲的な肯定の意味を含んで父に伝わった。

「そうか」

医薬の道を究めんと日夜邁進していた父ではなく、薬神はその息子を祝福した。父はそれを受け入れ、彼の敬愛してやまない守護神の意志に随うしかなかった。

「父上。このポーションを陛下に使って下さい。本物の特効薬です」

ブリュノがポーションを調合したということにすれば、治療が成功した場合父の体面も保たれる。宮廷薬師としての立場も守られ、女帝の寵愛も受けるだろう。なにもファルマが出しゃばらなくても、

父がそうしてくれるほうがよいのだ。

「お前が創った薬は、お前が処方するのだ」

父は小さくかぶりを振り、厳かに告げる。

「それが、薬師の責任と誇りというものだ。患者はお前を信じて、命を賭して薬を受けるのだから」

彼は本物の薬師だな、ファルマはそう思った。

そして、未熟なのは自分のほうかもしれないと痛感した。

薬の安全性が何重にも確かめられている現代地球から来た彼は、そんな思いで患者に薬を出したことはなかったからだ。

「分かりました」

ファルマは氷の障壁を右手で消滅させ、ポーションを握ると、父の前を通り過ぎて調合室を出ていった。すれ違いざまに、こんな一言を残して。

「任せてください、父上。救うつもりです、あなたも、陛下も」

その言葉は、父が聞いた事もない重みを持って、声色も以前のファルマとは違って聞こえた。

少年の思い上がりの言葉ではなく、あたかも神の言葉のように聞こえたのだ。

ブリュノは黙して頭を垂れ、その場にくずおれる。

どうして彼を止めることができただろう。

ポーションを持ったファルマは、再び女帝の前に現れた。

女帝はファルマが戻ってくるのを、身を起こしたまま待ちかねていた。大きな期待をその胸に。死の境界線から生の世界へと戻ろうと、彼女は最後の氣力を振り絞って待っていた。

「長かったな、陛下がお待ちかねだ。父上はどうした。逃げ出したか」

侍医長クロードがちくりと待たされた嫌味を刺す。

クロードは、ブリュノならともかく、少年の調査でまともな薬ができるとは考えていなかったようだ。児戯にすぎないと。ブリュノもさっさと戻ってきて女帝に麻酔をかけてしまえばいいものを、とでも言いたげに齒痒そうにしている。

「時間などがまうものか、近う寄れ」

女帝はファルマを近くに呼ぶ。ファルマはマスクをしているので、飛沫感染は免れているはずだ。臆することなく近寄る。

「いいえ。父は逃げてはおりません。陛下のために、父と共に調査しております。これが新薬でございます」

父の薬師としてのこれまでの仕事に敬意を表し、事実とは聊か異なるがそう伝えておいた。

ふらついた足取りで、ブリュノがその場に現れた。でしゃばり息子を諫めなかったのか、と非難の視線が侍医たちから飛ぶ。

しかしもう、ブリュノはファルマのすることを止めようとはしなかった。

止められるはずがなかった。

これから彼の手で行われようとしていることを、目に焼き付けるために。



ただそれをするために彼は戻ってきた。

「新薬の効能を奏上いたします前に、陛下にご覧に入りたいものがあります。少々ご協力いただけますか」

ファルマは、掌サイズの金属の道具を女帝の前に恭しく差し出す。

「何だ、これは」

女帝は首を捻りながら取り上げる。金属製の、小さな器械。ファルマはその場で再び女帝の痰を採取してガラス板に塗り、それを金属の板状の道具にセットした。

「陛下の体液を頂戴してこの器械で観察します。その穴から明るい場所でこれをご覧ください。このように」

器械に開いた針のような穴の中を、女帝にぴつたりと眼を近づけて覗き込むように促す。ファルマは換気のために窓を開けさせ、侍従にランプを持ってこさせて、それを下から当てて光を確保した。女帝は半信半疑でのぞき込んだ。

「何だそれは、陛下を愚弄するのか！」

侍医長クロードが怒りに声を震わせる。

「待て、うるさくするな。静かにしていよ」

侍医長は女帝の一言でかしこまる。

女帝は既に、小さなその器械のとりこになっていた。そして。

「何か見えるぞ」

ファルマは診眼の能力で拡大視ができるが、それは客観性がない。第三者の目に見えるか、もしくは結核菌の存在を証明できてこそ科学である。

誰も見たことのなかったミクロの世界へ、ファルマは女帝をいざなう。

ファルマが差し出したもの。それはピンホールとガラス球、金属片でこしらえた、もつとも構造の単純な顕微鏡であった。よいレンズがなくても十分な性能を持つ、レーウエンフックの発明した単レンズ式顕微鏡。電気系統は一切必要ない、鏡筒などもない、金属板にレンズ、そして試料台がついただけの、全長5cmほどのごくごく小型で単純なものだ。

骨董と侮るなかれ、ファルマのいた前世では、電気のない発展途上国などでも病原菌を特定するために使われていた、約200倍の解像度を得られる現役の顕微鏡である。

倍率は決して十分とはいえなかったが、最低限の性能はある。

その単純な工作の見せる像は、明快な真実を暴き出す。

「陛下、棒状の蠢くものがお分かりでしょうか」

ファルマは指で空に、その形状を描いてみせる。

それこそが、マイコバクテリウム Mycobacterium ツベルクロ tuberculosis イシス Siss.

ヒト型結核菌。

日本では小児期のBCGワクチン予防接種によって予防策が講じられているものだ。

「白死病（結核）の病原となる生物でございます。この生物に、陛下は蝕まれています」

世界に細菌というものが存在するのだと、部屋にいた者たちが知った瞬間であつた。

「皆様もどうぞ、陛下のあとにご覧ください」

争うようにして、侍医たちは顕微鏡をのぞき込んだ。それまで、侍医たちはどんな小さいものも目を対象物に近づければ見えるものだと思つていた。肉眼では見えない世界が、そこにはある。認めざるをえない事実だつた。

「な、なんだこれは！ 虫か！？」

侍医長クロードは、蠢くおぞましいものを見て顔をひきつらせた。

「この装置につきましては、皆様が必要でしたら、作り方も設計図面もお教えます」

彼は顕微鏡を独占するつもりはさらさらない。医学に活用して微生物についての理解を深めてもらえるのであれば。

「なお、これは神技ではありません」

ブリュノは震える手で、それを取りのぞき込んだ。

「なんと……」

そういったきり絶句する。神の見ていた世界を人間が覗き見るところを許されたかのように、未知の興奮に全身を打ちのめされたのだ。全員が結核菌を観察をし、ファルマが用意していた染色済みスライドグラスの染色サンプル、結核菌を染め出したそれを見せたタイミングで、ファルマは切り出した。

場の空気は一変していた。

すでに、それを見戯と呼ぶものは皆無だった。

「今後の治療方針を説明いたします」

ファルマは続けざまに、シロップを取り出しよく女帝に見せる。

「お察しの通りです。陛下のお体に巢食ったこの生物を、完全に殺してゆく治療です」

女帝の目の前で、驚きのあまり、居並ぶ高名な侍医たちは泡をくったのだった。

ブリュノは視線を固定したまま、膝から崩れ落ちた。

「このポーションには4種類の特効薬が入っています。それぞれの薬にはこの生物が増殖するのを防ぐものと、この生物を殺すものがあります。一種類だけだと、それに耐えるものが現れるかもしれませんが。だから多剤を用います」

この薬にその生物を浸せば、死滅するのが見えますよ、もしかしたら断末魔の叫びも聞こえるかもしれません、とファルマは冗談を挟みながら説明する。

「4種類の特効薬で、2か月集中的に殺します。そしてその後は特

効薬を2種類に減らして飲んでいただく補助的な治療を行います。陛下は重症ですので、更に追加の投与が必要かもしれません」

「そなたの説明は、これまでの薬の概念を根底から覆した」

女帝は驚きながらも、そう言った。

口にこそ出さないが、侍医たちも同じ衝撃を受けた。既存の枠組を超えた知識が、彼らに与えられたのである。

「それほどまでに強い薬を飲んで、体に害はないのか」

「人体には影響の少ないものでございますが、副作用も懸念されます。主には肝機能障害です。それについては、私が治療経過をしっかりと監視してゆきます。調合した水薬を半分に分けて、私が先に、半分を飲み干します。陛下はそれをご覧になってから、ご決断をください」

暗殺や偽薬の疑惑を否定するために、ファルマは敢えてそうするのだ。

薬には副作用があり、健康な体にはよいものではないが。

「ご納得いただけるでしょうか」

「うむ、ぜひ、それを飲ませてくれ」

女帝は晴れやかな顔をファルマに向けた。畏れと不安が全て取り去られ、病身でありながら、精神は完全に解き放たれた。皇子の涙は止まっていた。

「じきに症状は改善するでしょう。ですが完治までには、最短でも6ヶ月をいただきたい」

何も治療しない状態で六か月もつものか……と言いたいのだろ

うか、ブリュノや侍医たちは絶句する。  
だかもはや、彼らに出る幕はなかった。

「時間がかかるというのは、分かった」

結核菌を観察し、それが全身に感染しているということをその眼で認識した女帝の理解も好奇心も深まった。

時間をかけて慎重に、じっくり殺してゆく必要があるということ、一気には殺せないこと、少しでも体内に細菌を残してはいけないということとは、ファルマの説明で彼女にも理解できた。

「陛下には毎日、私の目の前で飲んでいただきます」

薬の飲み忘れがないよう、監督者の目の前で薬を飲ませるのが効果的だ。

結核の治療は、根気よく続けなければならない。

少しでも症状が改善したからといって、薬を飲むのをやめてはいけない。

ファルマはフラスコの中のポーションを、均等に3つの試験管にそそいだ。

そして、毒見として最初にファルマがあおる。

「では、陛下」

「うむ」

女帝も最後の一滴まで飲み干すと、やつれた顔で微笑んだ。

「うまかったぞ」

その後、女帝は穏やかな眠りにつき、ファルマは新たな患者のカルテをノートに日本語で書きつけ、調合室に置いていた荷物を片付け、帰りの荷造りを行う。

「屋敷に帰りましょうか、父上。おなががすきました。今日は甘いものが食べたいです」

子供らしいことを言って、父を気遣った。

「それから、これは父上の薬です。もし、その気になっていただければ」

ファルマは残り一本の試験管の中に入っていた薬を、薬瓶に詰めて父に手渡す。

結核菌に侵された父は、長い逡巡のちそれを受け取った。

「今日から、白死病は治ります」

もう不治の病ではありません。

生きて共に医薬の道を究めましょう。

頼もしい言葉を紡ぐ息子が差し出してきたその手を、父は両手で握りしめた。

「ありがとう、わが息子よ」

… … …

ロツテとエレン、そして使用人たちは、ド・メデイシス家の屋敷の門前で、日がとっぷり暮れたあと何時間も、総出で主人二人の帰りを待っていた。もうすっかり準備した夕食も冷めてしまっている

が、誰も手をつけなかった。

皇帝の宮殿に行ったきり、主人とその息子が戻ってこない。

皇帝の病状は宮廷薬師以外には決して知らされはしないが、何か異変が起きているということは、その場にいる全員が察していた。

エレンは一つの可能性を危惧していた。

治療に失敗して、責任をとって二人とも自害したのではないか。

皇帝崩御の折には、主治を務めていた筆頭宮廷薬師、筆頭侍医が共に自害し責任を取る場合もある。

ブリュノは責任感の強く、誇り高い宮廷薬師だ。ありうる話だった。

「お師匠様……ファルマ君」

エレンは眼鏡を外し、最悪のパターンを想定して涙ぐんでいた。ロツテはファルマからもらった薬の小瓶を、お守りのように握りしめている。

どれだけ待っただろうか。一刻一刻が、長く長く感じる。

誰もが彼らの帰りを待っていた。はっとロツテが顔を上げる。山あいに反響する微かなラッパの音が、耳に飛び込んできた。

続いて鮮明に聞こえ始める馬の蹄音。そのリズムがだんだん大きくなってくると、屋敷の騎士たちの馬が見えた。様々な感情を殺していたロツテの、涙腺が崩壊する。

「旦那様、ファルマ様……！」

ロツテは全速力で駆けてゆく。

「よかったわ……本当に。もう、心配したじゃないの……」



眼鏡をしっかりとかけて、エレンもロッテの後に続く。

「ただいま」

馬を降りるなり彼の懷に飛び込んできたロッテを、ファルマは受け止めた。

「おかえりなさいませ」

ロッテは一語一語噛みしめるようにそう言った。  
こうして、激動の一日が終わりを告げたのだ。

## 10話 単レンズ式顕微鏡と、発見された結核菌（後書き）

ファルマが女帝に見せた単レンズ式顕微鏡ってどんな構造？  
という方のために模式図をご用意しました。

< i 1 5 8 0 5 4 — 2 4 9 6 >

球形レンズは、小さければ小さいほど倍率が高くなります（が視野は小さくなります）。

### 【謝辞】

内科医で作家の津田彷徨先生に、1章10話までの査読をしていただきました。

先生本当にありがとうございます。

さらに、本頁は呼吸器内科医のみすと先生にもご指導いただきました。治療薬について修正を加えました。詳しくは活動報告をご覧ください。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/65394/blogkey/1190034/>

## 11話 皇帝陛下の創業勅許

女帝エリザベートの治療は慎重に、そして順調に進んでいった。

ファルマは午前中はエレンの授業、午後は食事をとってから父とともに宮殿に通い、女帝にポーションを献上し服薬を見届ける。というライフスタイルになっていた。

しばらくもしないうち、女帝の病状に改善の兆しが見え始めた。肝障害をはじめとする副作用を警戒し、ファルマはこまめに、数値化はできなかったが簡易的な生化学検査で検査データを取った。女帝の若さと、神術使いという体質も影響していたのだろうか、懸念されていた副作用もなく経過は良好、血痰もおさまり、三か月目には結核菌の存在もほぼ陰性になった。

ファルマは宮廷で働く全ての廷臣にも、予防的に服薬をすすめた。侍医数名と侍従数名、皇子が感染していたので、スケジュールを組んで投薬を開始する。彼らも全員、平民ではなく貴族だったから、ひどい副作用はみられなかった。

もちろん、一番身近な患者である父へのケアも怠らなかった。

見習い薬師ファルマのカルテには、膨大な記録がたまってゆく。

ファルマは父が読めるよう、カルテを日本語ではなく異世界語でつけるようになった。父は、食事を終えると毎晩遅くまで書斎にこもり、じつとファルマのつけたカルテを読む。そして翌朝になれば、どうしてこんなところまで、と思うような細かい部分に至るまで、山のように質問を投げかけてくるのだった。

また、父は廷臣個々人の生活状況、既往歴も把握しており、それはファルマにとって補助的な情報になり、情報の共有は互いの気づきとなった。

ファルマは、十歳にしては忙しく、そして充実した毎日を送って

いる。

しかし無理に働きすぎはせず、何よりも自身が健康でいるよう努めた。

前世で学んだ教訓だ。体を壊さずほどほどに、頑張ること。

ファルマの存在と彼の持つ薬学知識は、女帝の寵愛もあつて宮廷の中で受け入れられはじめた。既存の医療の限界を憂いていた宮廷医師、新進気鋭の宮廷薬師を中心に、ファルマから単式顕微鏡の作り方を教わり、微生物を観察し病原菌と向かい合うものも出始めた。彼らはファルマが独占しているであろう未知の知識を学びたがったが、一介の見習い薬師である彼は、講義が出来る立場になかった。

顕微鏡発明の一報は、すぐに帝国各地の医薬大学に知れ渡っていった。

ある日、遠くノバルート医薬大学から表彰状と記念盾がファルマ宛に送られてきた。

どうという風の吹き回しかと思えば、侍医長のしわざである。そういえば彼はファルマが自ら製作した顕微鏡を高額で買い上げていたが、ファルマを発明者として、顕微鏡の実物を添えて医薬大学に親書を送ったのだ。

サン・フルーヴ帝国の医学は、世界最先端のノバルート医薬大学からすると一段格下にみられているふしがある。新発明で帝国侍医団の失地回復を狙っているんだろ、ブリュノはそんな裏事情を見透かしていた。

こんな世界でまで白い巨塔なんだな、とファルマは呆れるどころか感心した。

ノバルート医薬大学副学長の使節団が、サン・フルーヴ帝国薬学校へ押しかけてきた。

そして、総長であるブリュノに要請するには、女帝の治療にあた

っているファルマという優秀な宮廷薬師に白死病の特効薬のレシピを開示させるとのこと。

クロードは、ファルマがわずか十歳の薬師見習いだとは報告していなかったようである。

ブリュノは彼の直感のもとに、ファルマと彼らを会わせなかった。大学内の権力闘争の道具にされることは目に見えていた。

噂の宮廷薬師に会えず、諦めて帰ってゆく副学長の使節団。その一行の馬車を離れた距離から見送るファルマに、エレンが話しかける。

「ファルマ君の薬、皆がほしいみたいだね。白死病の特効薬でしょう？」

エレンからすれば、それは不治の病を治す神薬のようだ。

「白死病の4つの薬は、今は俺にしか造れないんだ」

「やっぱりそうなんだ。難しい神技を使うのね」

ファルマに宿った薬神こそがなしえる神技なのか、とエレンは思っている。

だから調合過程も合成過程も、ファルマは未だ誰にも見せようと思わない。

私も教えてほしいんだけどな、エレンですらそう言えなかった。それでもエレンは仕方ないと思う。

ファルマの神技によって助かる命があるのなら。

彼にしかできないことであり続けても……、などと考えているとファルマは、

「ゆくゆくは、誰にでも合成できるように伝えようと思うよ」

本格的な研究施設を立ち上げ、有機化学合成が可能になってから  
という意味だ、とファルマは補足する。

「知識を広めるの、惜しくないの？」

新薬を門外不出のレシピとして抱え込んでしまふ薬師も多い。そ  
して特許を高額で売り払うのだ。

「先人の知恵だ。俺のものじゃないから、惜しいものにもないよ」

ファルマは涼しげな表情で、さも当然のことのように答える。薬  
学者であつた彼は、前世ではいくつもの新薬を世に出したが、彼の  
仕事でない発明に権利を主張することは、彼の信念に反した。

それらは人類が長い歴史をかけて蓄積した叡智である。

この無欲な少年に薬神が宿つたのは、偶然ではないとエレンは思  
わされたのだった。

… … …

父と共に毎日のように宮廷へ顔を出すうち、ファルマは女帝の皇  
子ルイ（6歳）に懐かれていた。ファルマを母の命の恩人として、  
日ごとに慕つてつきまとう。しかも、ビリヤードの相手をさせられ  
る。ファルマは適当にルイに勝たせて喜ばせていた。

「殿下の勝ちです。殿下はお強い」

大げさに褒めると、ルイは気を良くする。

「うむ、明日も勝負だぞ、ファルマ。では、出かけてくる」

ファルマは皇子を馬術の訓練に送り出した。はいはい、とファルマは手を振る。

「悪いなファルマ、俺の仕事を代わりにしてもらって」

そしてルイと同様に、女帝の小姓、14歳の少年ノアとも親しくなった。彼の仕事は送迎の案内兼、皇子の遊び相手だ。ファルマは薬師としての仕事のあとは皇子に付きまといられるので、ノアと雑談をする機会も増える。

「君の仕事だろ。たのむよ」

「殿下は俺との相手は飽きたとおっしゃってな。それに、お前も息抜きを楽しんだら」

ノアはしゃあしゃあとそう言うのだった。

（まあ、ビリヤード楽しかったけれども！）

じゃ、とファルマが遊技場から出ていこうとすると、

「まあまああ！ いい情報があるんだ。ここだけの話、もったいなくも陛下は、お前にくれてやる褒美をご検討されておられる。陛下の専任の宮廷薬師としての地位も、約束されたようなものだ。いやあ、羨ましい。俺もお前のように出世したいものだなあ」

ノアは有名な侯爵の公子で、父の命令で幼少時から女帝に仕え、女帝や皇子の身の回りの世話をしているのだそうだ。この少年、女帝の前では恭順な態度を貫き、なかなか気の利いた仕事をするが、

裏では口も悪くしたたかである。

「領地……か」。俺、次男だし、薬学のことだけしてればいいや」

領地と言われても、ファルマには実感がわかない。薬師として仕事をしているときの冴えわたった顔つきが嘘のように、ぽかんとアホ面をしている。

「バカ！ 領地に関心のない貴族がいるか！ 次男でももっとガツガツいけよ。全然興味が無いってわけじゃないんだろ？」

ノアは貴族といえば領地、という思考回路。一方ファルマは薬学ひとすじなのだ。創薬研究になら、すこぶる興味があるけれども、欲しい物はとくに何もない、と返すと。

「このバカ、もらえるものはもらっておけよ」

それでも、何も望むものはないのか、将来の目標はないのか、としつこく尋ねる。

「誰にも言わないから、ここだけの話で教えてくれよ」

口を押さえるジェスチャーをしながら、ノアはファルマに詰め寄る。調子のいい少年だ。

「薬局をひらきたいんだ。庶民のための」

「庶民のための？ お前、宮廷薬師のくせに酔狂なバカたれだな。商売なんて賤業は貴族がするもんじゃないぞ。平民の職業だ」

一言喋るごとにバカとつけるのは、ノアの口癖のようだった。小



姓として女帝や皇子にへこへことうだつの上がない生活をしている反動で、口が悪いのだろう。

薬局と言ったものだから、貴族である彼は眉をひそめる。父のように学者になって大学で教鞭をとってはどうか、などと勧めるのだった。

「だってよ、お前、平民なんて治したって無駄じゃねーか」

「何で？」

「バカお前、平民は何かにつけ病気になる。神力を授かっていないから体が弱いんだ。高価な薬を使っていたら、きりがないだろう」

単純に生活状況や衛生状態が悪いせいだろう、とファルマは内心反論する。

「価格を抑えた安全な薬を創ればいい」

「ははは、バーカバーカ！ 高い原料をどうやって仕入れてくる？」

大赤字だ、いかにお大尽の尊爵の息子であっても、父上の懐具合だって無限じゃないだろう」

薬学に関する知識と発明の才能はあるのだろうか、蓋をあければ世間知らずの子供だな、とノアはファルマを小ばかにする。ファルマは少々頭を捻って考える振りをして、こう返した。

「まあ、薬草を栽培するための領地は、少しだけでも必要かもしれないな」

ファルマの物質創造の能力があれば、原料の値段など気にしないでよいのだが、複雑な化合物を造るには限界があった。そこで、薬草や生薬からの創薬を考えてもよいかもしれない。

「ちなみに、領地貰えるんだったら海と山、砂漠、平野とどれがいい？」

「海かな」

ファルマは特に何も考えずにそう答えた。

「それでいいんだな！ 確かに聞いたぞ！」

ノアの瞳が鋭く輝いた。

… … …

半年の治療期間を終え、ほぼ快癒をした女帝が、父とファルマを正式に宮殿に招いた。薬師としてではなく、賓客として。

事前に、正装をしてくるようにとの達しがあった。ファルマは父とともに女帝の寄越した立派な馬車で宮殿に向かう。杖も忘れずに持つて行く。快気祝いのパーティーのようなもの、と父からファルマには伝えられている。

宮殿に着くと、何やらいつもと宮殿の様子が違った。宮殿は色とりどりの珍しい花々で飾り付けられ、通路には侍従がずらりと総出でお出迎え。通された玉座の広間は、4階吹き抜けのドーム状の大空間で、大理石の階段上に黄金の玉座が据えられていた。

ホールには、帝国内の大貴族や廷臣たちがずらりと坐している。

ファルマは父の隣に座り、姿勢を正して女帝のお目見えを待った。

「皇帝陛下のご入堂！」

廷臣、諸侯は起立をし、荘厳なアンセムが演奏される中、長い深紅のローブを纏った女帝が側近を従えて入室してきた。

サン・フルーヴ帝国皇帝、エリザベートⅠ世だ。

（うわ……綺麗だ……！）

ファルマは目を見張った。普段の彼女と見違えたのだ。

帝冠を戴き、帝杖を持つて玉座に坐し、廷臣たちを睥睨するその様子は、ファルマの言葉に従順な患者のそれではなく、帝王のそれであった。彼女は皇帝としての威厳に満ちあふれている。バラのような頬、瞳、艶やかな銀髪。輝くばかりの美貌を見せつけていた。

女帝は快癒の挨拶を臣下に対して行い、大臣らが祝賀の言葉を述べる。

そして最後に、女帝は筆頭侍従から勅書を受け取り、読み上げる。

「尊爵、宮廷筆頭薬師　ブリュノ・ド・メディシス」

「はっ」

ブリュノは立ち上がり、典雅で格式ばった所作で壇上に上がり、女帝の前で立礼をする。

父が呼ばれてはじめて、ファルマはこれから論功行賞の儀式が始まるのだということに気づいた。

「そのほう、余の施療によく邁進してくれた。褒美として、新たにマーセイル領の統治をゆだねる。特に、公子の新薬の薬草生産と調達に用いよ」

女帝は帝杖の先端をブリュノに差し向け、端をブリュノが握ることにより、支配権がゆだねられる。封土の授与の儀式だ。マーセイル領というと、貿易の盛んな港湾都市。沿岸のなだらかな傾斜を利用した豊かな農地が広がる、薬草の大生産地だった。

「はっ。わが君主に従属する者として、神の名にかけて信義を尽く

し、崇敬を捧げます」

実質、父の名義ではあるが、わざわざファルマに与えられた封土といってもよかった。へえ、とファルマが父の喜びようを自分のことのように眺めていると、

「宮廷薬師見習い、ファルマ・ド・メデイス」

（はっ？）

ファルマは驚きのあまり、にわかには声が出なかった。

廷臣たちはざわざわとどよめく。父が封土を下賜されたばかりでなく、息子にもこれ以上の褒美があるのか、と、羨望のまなざしがどこからともなく向けられた。だが、彼の功績に異を唱えるものはなかった。

「そのほうの活躍めざましく、卓越した知識と見事な治療の手腕を披露してくれた。余の命が今あるのは、ただただ、そなたのおかげだ」

ファルマは立ち上がって女帝の前にでたものの、直立不動で固まっていた。

廷臣に注意されて、彼は混乱しながら立礼を行った。

「見習いから宮廷薬師に昇格を許す。また、特別に帝都での薬局の開業を許可する」

「っ？」

ファルマは今度こそ固まった。見習い期間の終了を決めるのは師である父やエレンなのだが……。

「何を驚いておるのか。そなたの師から、皆伝の許しは出ておるぞ」

女帝はにこやかな笑顔を向ける。父がファルマの宮廷薬師の見習い期間を終了させたと女帝に上奏し、一人前の薬師となることを許可した。そういう意味だった。

ファルマはたと、女帝の隣で恭しく控えているノアと目があつた。ノアはにやりとし、おかしそうにほくそ笑んでいる。バーカ、と口が動いた。

（ここだけの話って言ったのに！ でも……ありがたいか）

ノアがしつこくファルマに尋ねてきたのは、褒美をリサーチしてこいという女帝の差し金だったのだな、とファルマは納得する。

帝国勅許の第一号薬局を開いて、薬を売ってよい。

それはこれ以上なく、ファルマの希望にそった褒美だった。

ノアの女帝へのリークがなければ、かなえられることはなかっただろう。

そればかりでなく……、

（あ、もしかして、ブリュノさんがマーセイル領になったのもあいつの仕業か？）

ファルマはピンときた。ノアの質問で何気なく海側の領地がいい、と答えたが、これは偶然ではなからう。

女帝は驚くファルマに、ほれ、と帝杖を差し出す。

（こういうとき、何ていうんだっけ）

ファルマはあまりのことに頭がパンクしそうだ。あまりに混乱し

たからか、時代劇調で答礼した。

「ははっ、ありがたき幸せにございます。陛下」

父と同じように、ファルマは女帝の杖の先端を握りしめる。下賜の儀式だ。

帝杖はやけに赤みを帯びた赤い光を放っていた。だがファルマが触れた途端、帝杖にしていた宝玉がさあっと白い輝きを放つ。

（あ、油断した！ これ触っちゃだめなやつだ！）

帝杖は神力計の機能を兼ねているようだった。

「むん？」

女帝の表情が一瞬こわばったが、ファルマは慌てて手を離しブリュノの隣席に引き下がった。

ほんの一秒ほどの帝杖が光ったのを、まともに見たものはなからう、そう思い込みたいファルマである。彼女は論功行賞の後のパーティーでもファルマを傍に呼んだが、普段のように接していた。場の空気を読んだのか、見逃したのか、見ていなかったのかは分からない。

エリザベートの周りに多くの貴族たちがあつまり、女帝陛下のご機嫌をうかがう。華やかな宮廷模様が繰り広げられていた。

「この分だと帝政はまだまだ安泰だ」

いつも水ばかりをあおっているブリュノが今日は珍しく高級なワインを飲みながら、宮廷料理に舌鼓を打っていた。彼もすっかり肩の荷が下りたのだろう。

「父上の仕事もひとつ終わりましたね」

「私は何もしていない。お前の仕事だ、情けないことにな」

ファルマがそう言ってねぎらうと、ブリュノはファルマの襟元についた真新しい宮廷薬師の黄金の飾りバッジをあらためた。女帝がファルマに与えたものだ。

「よく似合っている」

「いいのでしょうか」

師匠である父は本当に薬師となることを認めてくれたのだろうか。そう考えたファルマだったが、そんな心配は杞憂だった。

「私から薬学のことでお前に教える事は、もうあまりない。むしろ」

これから一人前となったお前が何をするのか、父は楽しみだ。彼はそう言って新たなワインのグラスを取り上げた。

「乾杯」

ファルマは子供用のジュースの入ったグラスを、父のグラスに当てる。

「皇帝陛下に」

「四人目の宮廷薬師の誕生にもな」

女帝の快復によってサン・フルーヴ国の政情も安定化するだろうな。

父とともにファルマは安堵したのである。

しかし即日、ファルマ宛に一通の親書が届いた。

「誰だ？ 高級そうな封書……」

”そなたの神力量、有史以来比類なきものと見受ける。余から帝位の篡奪を求むる折は、成人し神術を究めたのち正々堂々、余に決闘を申し込むがよい。成人前のそなたと戦うのは公平ではないのでな

”

”サン・フルーヴ帝国皇帝 エリザベートII”

すっかり体調の戻った女帝は脳筋思考というか、やる気満々だった。

「まいった……」

帝位は結構です。

本当です、勘弁してください。

私は薬学にしか興味がないし、ゆくゆく許可をいただいた薬局をやりますので、どうぞ皇帝を続けてください。

という趣旨の返事を、ファルマはオブラートに包みまくって最上級の敬語でしたためて返したのだった。



## 12話 薬師ギルドからの宣戦布告

「ゆくゆくは薬局をやりたいって話だったのに……何で今日？」

見習い薬師から、正式な宮廷薬師へ。

女帝直々の勅許により叙任したばかりのファルマ・ド・メディシス（10歳）は自宅の屋敷で啞然としていた。

ド・メディシス家の屋敷に、熟練工たちが押しかけてきていたのだ。薬局創業の創業資金は帝国が持つ、という女帝の意志を伝える勅使が来たのが、昨日だ。

そして昨日の今日、これである。

（陛下、せつかちすぎるだろ）

ファルマの心の声である。

薬局創業の勅許を与えられたファルマのために、帝国から薬局の施工工事を請け負ってきたのだという。女帝の命令とあつては一大事、皇帝陛下御用達の店から集められた腕利きの石工、石切工や大工、鍛冶屋、材木商人、ガラス職人、屋根職人など、親方から遍歴職人、徒弟までよりぬきの職人たちである。彼らは宮殿の建造にも携わった一流の職人たちだという。

「まだ心の準備も素案もできていないので、一回、お引取り願えませんか？」

ファルマは一度、熟練工たちを追い返そうとするが、彼らは屋敷のドアに足を挟んできた。両者がドアを圧したり引いたりした末に、

「そう言われましても若旦那、皇帝の御下命を賜りましたので。へえ」

このまま戻れませんか、建設予定地も決まっていますし、今日から工事に入らなければ手前どもの首が飛びますので！ とのこと。

（確かに飛びそうだ、首。それも物理的に）

脳筋思考の女帝のことである。

「あらもう来たのね、仕事が早いわ」

ごたごたしているところに、エレンがやってきた。ブリュノに伝書鳩で呼びつけられたのだという。ファルマの薬局創業の手伝いを仰せつかったのだそうだ。女帝が、すぐにでもファルマに薬局をやらせるとブリュノに厳命するので、ブリュノはエレンにファルマのサポートを頼むといってヘルプを求めたのだ。そういえば、ブリュノは今日は別の貴族のもとに往診に行っていた。

「ていうかさあー？」

「うん？」

「ファルマ君の大出世は嬉しいけど、皇帝陛下に何てものをおねだりしたの。あの方、せっかちなんだから。この間も……あ、不敬罪でつかまっちゃう」

ファルマはその面白そうなエピソードを詮索しなくなったが、やめておいた。

「これには深い事情があって、話が長くなるんだ」

薬局創業については、ノアに雑談をすっぱ抜かれたただだ。ノアとしては無事に使い走りを果たして女帝のポイントを稼いだのだらう。

「長い話ね。で、どんな薬局にするの？ だいたいのイメージはあるんでしょう？」

エレンが身を乗り出して尋ねる。

「もう決めるの？ ってか本当に心の準備できてないんだけど。他の薬局も見て回りたいし」

仕事場となるスペースなのだから、じっくり熟考してデザインを決めたいものだ。尻を叩かれて決めるものではない、そうファルマは思う。

「だめよ。すぐやらないと職人たちの首が飛ぶわ、社会的に」

「怖すぎだろ、陛下。使い勝手の問題とか、じっくり検討したいし……」

「気に入らなければ建て替えばよいではないか、って陛下は言うわ」

「陛下、強権発動しすぎ」

ファルマが職人に手渡された、敷地だけ描かれた白紙の図面を見ながらうなっていると、ロットがエレンとファルマにお茶とお茶菓子を持って現れた。

「でも、びっくりしました。皇帝陛下じきじきに、宮廷薬師に叙任していただいたなんてすごすぎます。ファルマ様、大出世です！それに、もう職人さんが来ちゃったんですね、本当に薬局ができ

るんですね！」

ロツテは、ファルマの成功を自分のことのように喜んでいた。

「旦那あ、まだ素案決まらないんですかい。頼みますよう」

「ごめんなさい！」

待たせているギルドの職人たちは、気が立ってきている。  
ファルマは手を動かすしかなかった。

「じゃあもう好き勝手図面を描くよ」

彼はやけくそだ。

父も陛下も好きなように設計していいと言っているからには、もうファルマは腹をくくって、図面をひきはじめた。アウトラインさえあれば、いい感じに施工しますんで、と熟練の棟梁は彼らの仕事に自信をのぞかせる。

薬局の立地は、落ち着いた帝都の大路にある角地の一等地を女帝がおさえてくれている。薬師ギルドの商店街からは離れた場所にあたる。商売敵が鼻を突き合わせないように、との女帝の配慮だろう。

「できた！ 後の細かいところは、工事中に考えるから」

「へえ、どんな感じに……って、え！？ ひょー」

子供のお絵かき程度、希望を聞く程度に思っていたギルドの職人たちは、午後になってファルマから手渡された図面に度肝を抜かされた。きちんと諸々の寸法まで書き込まれて製図されていたからだ。

「こんだけ精密なら、仕事がやりやすいでさ」

その後、ファルマとエレンは職人の親方たちに意見をきいて、他の薬局の内装などを参考に図面を詰めていった。

さて、図面が出来上がると、その日から凄まじい手際によさとスピードで、工事はすすめられた。工期を左右するのは、建築予算である。帝国の発注ということで金に糸目につけられず、最高級の建材に大人数の職人たちが投入されていた。

着工から数日が経って、帝都の一面に新たな店舗の骨格が現れはじめた。

「若旦那。店の名前はどうしますか？」

石工がファルマに薬局の店名を尋ねる。周囲の店を見れば、店名が壁面に大きく彫刻され、刻印には金箔が張られている。

「帝国薬局ですか？」

「それはちよつと仰々しいかな」

帝国勅許店の金のエンブレムが、店の壁にはすでに掲げられている。帝国御用達の店は帝都内に数十店舗あれど、帝国勅許店（*Company à charte*）はもう一つ格が高く、認可されるのはごく稀だ。

格式と実績のある薬局であると、創業前から帝国のお墨付きをもらったわけである。

「工期が遅れるのですぐ決めてください」

「すぐに、ですか？」

「すぐすぐすぐです」

職人の気は短かった。何の捻りもなく名づけければド・メディシス

薬局だが、挑戦的な仕事であるがゆえ、家の名前を大っぴらに使うのはまずい、と彼は悩む。

「いつでも異世界の薬局だからなあ」

ああでもないこうでもないと色々と考えた挙句、結局よい案がなく、ファルマはそんなことを呟いた。しかし数時間後には、見事なまでの装飾を凝らした、金箔を埋め込んだ彫刻の看板が出来上がっていた。

異世界の文字であるその店名を、対応する前世のアルファベットに変換すると、おそらくラテン語風の言語で、「DIVERSIS MUNDI OF PHARMACY」と銘打ってある。

「異世界薬局」というのを直訳したようだ。

これはどうしたことだ、とファルマが目を丸くして眺めていると、

「聖域薬局？ それにしちゃったの？ なんかご大層すぎない？」

現場にやってきたエレンが、できあがったばかりの看板に驚いて一言。それに驚くファルマ。

「聖域って、何でそうなった！？」

ファルマは目をぱちくりさせた。異世界という言葉はこの世界では一般的でないので、聖域と意識されるようだ。

「陛下の勅許があるし庇護も惜しまないと仰せなのだから、確かに同業者からすれば聖域かしら、もしくは薬神様がいる時点で聖域かもしれないけれども」

（しまった、やらかした！）

こんな名前つけたらまた悪目立ちしすぎだ！

とファルマは失態を悔いるが、仕事を終えた石工と彫刻師は、弁当を食べてさっさと帰ってしまった。

「ほかの同業者と波風立てたくないんだ。薬草の融通してくれなくなるかもしれないし」

業務妨害や風評被害も困る。それに店のネーミング的に、この世界でかなり幅をきかせているであろう「神殿」にも真正面から喧嘩を売っているような気がしてならない。なにせ「聖域」だということだから。

「関係ないわよ」

エレンはあっけらかんとしていた。

「へ？」

「名前を変えたって無理でしょう。薬師の同業組合ギルドとは全面対決になると思うわ。だって、貴族が店を出すのよ。真っ向から喧嘩売ってるわ」

扱う薬の種類が全く違うのだから、折り合いがとれるハズがない。とエレンは分析する。

「陛下の庇護があつたとしても、風当りは強くなるに決まってる」

妨害の方法なんて、直接的にも間接的にも、いやというほどあるんだから。

エレンの言葉は予言じみていた。

…  
…  
…  
…

第一号勅許薬局と、帝国最年少の宮廷薬師がどんなものか。

偵察に来るわ来るわ、市民や各ギルドの商工業者たちが。昼間はひっきりなしだった。何か高価なものがないかと建設現場に物盗りが出たので、ファルマは夜間の警備を騎士に依頼した。

ほどなくして、帝国薬師ギルドの幹部たちが出向いて、堂々と店の前で偵察をはじめた。ファルマがばったりその場に居合せると、薬師たちは敵対心をむき出しにして接近してくる。

「これはこれは、店主はどちらに」

ギルド長とみられる恰幅のよい初老の男が、帽子をとって店頭で作業を見ていたファルマに挨拶をする。慇懃無礼な態度であった。

「私が店主です」

ファルマは特に気分を害することもなく応える。子供にしか見えないのだから、腹を立てる道理もない。

「これは失礼！　あまりにお若い。帝国薬師ギルドの長、ベロンでございます」

「はじめましてベロンさん。宮廷薬師　ファルマ・ド・メディシスです、ここに店を構えますので、よろしく願います」

「薬局を創業なさると聞きつけてやってきましたが、勅許印が。なるほど、陛下も酔狂なことをなさる、いえ、失礼」

子供だとみられて完全に侮蔑されている。

しかも皮肉を言っても子供だから気づかないだろうと高をくくられているのだろう。

しかしファルマは機嫌を損ねたりはしなかった。



「たいそうご立派なお名前のついた薬局のようですが、いったいどのようなお薬を販売なさるのですか？　あなたのお年で販売となると、飴玉（Bonbon）ですか？」

ファルマの、宮廷での評判を知らない彼ら。舌を舐めるふりをしておちよくるギルド長ベロンに同調して、取り巻きの薬師たちが含み笑いで煽ってくる。

だが、ファルマは無駄に煽り耐性が高かった。

前世では新しい薬を開発するたびに、寄せられたのは好意的な反応ばかりではない、世界中の研究者たちから反論や疑い、サーカズムにとんだ言葉が飛んできたものである。ライバル研究室との特許競争の戦いもあった。それにいちいち対応していたことを思えば、知性のない煽りなどどうってこともなかった。

「飴玉は売るつもりです」

ファルマはそうそう、と頷いてにこやかに告げた。

「それも薬の一つの剤形ですけれどね」

トローチは、売るつもりだ。汗をかく職人用の塩分、ミネラル補給用に、塩飴もいいかもしれない。

彼は子供らしくはきはきと愛想よく答える。

意に介していないファルマの言葉に、ベロンはもう一言ちくりと刺したくなつたが、勅許印のある宮廷薬師にあからさまな暴言を吐けない。平民の貴族に対する不敬行為は処罰される。許されるのは皮肉どまりだ。

「いやあ、実にご立派なお心がけだ」

ベロンはおおげさに拍手をする。

「ところで、創業するからには薬師ギルドに所属しなければなりませんか？」

たしか、商売をするからには同業組合に登録しなければならない筈だ。ファルマは一応聞いておくことにした。諸手続きは円滑に進めたい。

「あいにくですが、薬師のギルドの薬師は平民のみです」

平民の薬師は長い下積みを経て、ギルドに認められてようやく独立することができるのだという。開業するまでには、少なくとも十年の年季が必要だという。

「どうしても加盟したいのでしたら、受け入れますが。独立までの修行は長く厳しいですよ？」

ベロンはまじめくさった顔をして挑発する。

「そうですか。ではせっかくですが、私も薬師としての最低限の技能はおさめております。薬師ギルド加盟店とは異なる、独自に開発した新薬を販売してまいります」

ファルマは貴族なので、平民のギルドには加盟しないということになった。

「ところで宮廷薬師様のお薬は、さぞかしお高いのでしょうか？  
庶民には、とてもとても手がですまい」

宮廷薬師は、よい原料の薬を使う。薬価の相場を知っているギルドの幹部は、閑古鳥が鳴かなければいいですがねえ、などと露骨に憐れむような表情をして嫌味を言った。ファルマはしらけた心境でそれにこたえる。

「安い薬を提供できると思いますよ」

「安い？ おやおや、さすが高貴な方は庶民の懐事情などご考慮なさらない！ あなたがたの安い、がいかにどなのか」

「それで、一体、何を言いに来たの？ この薬局をぶっ潰したいなら言いなさいよ？」

店の中から顔を出したエレンが腕組をして、臆せず彼らを睨みつけ加勢する。エレンは帝都では名が知れているブリュノの一番弟子。誰もが一目置いていた。

「いえいえ、同業のよしみ、よろしくやりましょう。それでは、これで」

上辺だけの言葉を残して、ベロンは幹部を引き連れ、冷笑しながら去っていった。さながら薬師ギルドからの宣戦布告の様相を呈していた。

真面目な顔で空に視線を漂わせるファルマ。心無い言葉がこたえたのだろうか、と、エレンは彼を気遣う。

「気にしないでいいわ、ファルマ君」

そう言ってフォローしようとしたエレンに、

「飴玉だけじゃくて、鉄分入りのウェハースも売ろうかなと思うんだけどどう思う？ それから、栄養補助食品なんかも」

「もう……好きにしたらいいと思うわ」

ベロンの挑発の中に出てきた「飴玉」という言葉で、商品の着想を得たようだった。

ファルマの強メンタルとポジティブ具合に、拍子抜けすると同時に、脱帽したエレンであった。

「薬師ギルドのことは気にしないでいいわ」

あいつら、たいして処方もできないくせにプライドだけは一人前なんだから。嫌がらせが度を越すようだったら不敬で処罰されるし、私が神術でやつつけて川に浮かべてやるわ、などと物騒なことを言っている。神術で平民を圧倒できる貴族が、気後れする必要はないのよ。と言つて励ます。

ファルマはエレンの激励に気付いて、気にしてないよ、と言う。

「それより、商品のことを考えないと。俺、調剤薬局にしようと思つてたから商品のことを考えてなかったけど、販売スペースもいるよなあ」

彼は、薬師ギルドのことは本当に気にしていなかった。

マスクや包帯、オブラート、絆創膏、栄養ドリンクなどを売ろうか、と頭の中はいっぱいだ。

「そつといえばファルマ君、どこから薬草を調達する？」

真面目な顔をして、エレンが腰に手を当てる。きゅっとくびれたウエストに、細い指先が食い込む。

「お師匠様は学者だから、売るほどの原料は持つておられないわよ。いつまでも原料を借りるつもり？ 独自の販路を作るしかないわ。材料調達、原価計算や、生産コストやら、それにかかる生産者に払う賃金のコストも計算しないと」

「あ、そうか」

「そうよ。うつかりしてたの？」

（物質創造ができるから別に薬草に頼らなくてもいいんだけど）

どこからも原料を買い付けたり調達している様子がないのはさすがに怪しまれるか、とファルマは認識を改める。物質創造ができるということは、誰にもまだ言っていない。父にも、エレンにもだ。

「せっかくだから、陛下からお師匠さまに下賜された領地を少し借りて薬草栽培をしたらいいと思うわ。あなたのために使えと陛下に命じられたって、お師匠様が仰っていたわ」

エレンが提案する。

「そういや、父上の封土が増えたんだ」

「すでにマーセイル領では主要な薬草、珍しいものも生産されているし、新しい薬草も比較的手に入れやすいわ。港があるからイムスーラ圏、インドゥー圏から原料の直輸入もしやすいし」

エレンは地理事情に詳しい。

（え？ イスラム圏とインド圏だって？）

名前の響きが地球世界のそれに似てるな、とファルマは既視感を覚える。

世界地図を、そういえばまだ見ていなかった。

「そうだな。近いうちに、マーセイル領に挨拶に行くよ」

そういえば、フランスのマルセイユ（港湾都市）に似た地名だ。

薬草を生産してくれる領地と領民はどんな人々だろう、と楽しみにするファルマだった。

… … … … …

ファルマは父やエレンの協力を得て、薬局の創業に必要なもろもろの道具を調達した。天秤や薬瓶、薬さじや薬包紙、フラスコにピーカー、薬棚、研究に必要な諸々のガラス器具、薬品、薬草、大鍋に小鍋、筆記用具などなど。

それから、想定される疾患の治療薬を物質創造で創って薬瓶に詰めたりした。

マスクや包帯、サポーターなども、職人に発注して作らせた。のど飴に塩飴、各種ビタミンを含んだウエハースなども、菓子屋に発注した。

「当面は、商品については製造が間に合わないわ」

「調剤がメインだから、患者さんの要望を聞いてから販売用の商品を置こうか」

本末転倒になってはいけないし、とファルマも頷く。

「それがいいと思うわ。商品を置いても、売る時間がないと思うし。そういうのはゆくゆくでいいわ」

その様子を見守っていたロッテは、ファルマと一緒に荷造りや手伝いをしていたが、疎外感を覚えているようだった。

「忙しそうですねファルマ様。日中は薬局のお仕事をなさるんですか？ 夜は帰ってこられますか？」

「夜は家に戻るよ」

ファルマは荷造りの手を止めない。

「そうですか……、頑張ってくださいましね！」

殆ど会えなくなるな……と、薬局創業にともなってファルマと会える時間が減るのが分かって、彼女はしょんぼりと残念そうだった。

「俺がいない昼間は、ロッテも仕事が減るだろうから、休憩したりゆっくりしててよ」

ファルマはロッテを気遣ったつもりだった。

しかしロッテはというと、忙しくしていてもファルマと離れるのは嫌だったようだ。

「調剤や診療に専念したいから、薬局の庶務や財務を任せるために誰か雇いたいんだけど」

という話をファルマがエレンにしていたとき、ロッテがすかさず傍で手をあげた。

「はいっ！」

「ロッテ？」

「私、自薦します！ 計算が得意です。字もきれいなつもりです。掃除も隅々までちゃんとやります。なのでファルマ様に雇われたいです！」

「君が？ まだ9歳だろう？」

「それをいうならファルマ様は10歳ですよ」

えへん、とロッテは小さな胸を張る。彼女は召使でありながら、読み書き計算はお手の物だった。でも、一人で帳簿付けは無理だよ、



とファルマはなだめる。

「では雑用で構いません、ファルマ様のお役に立ちたいです！ 私を！ ぜひこの私、シャルロットをー！」

瞳をキラキラさせてそう言うので、こんな少女に児童労働をさせていいのか、と思いつながらもファルマは断る理由もない。父にロッテを雇用する許可をもらうと、好きにしてい、とのこと。

「じゃあ、あんまりきつくないお手伝いとかお使いを頼もうかな」「びしばし使っていただいていいんです！ 任せてください！」

こうしてファルマは、エレンとロッテの二名を薬局職員として雇用することにした。

そして次の日の朝、

「あれ、セドリックさん」

顔なじみだった使用人が、退職金を貰って荷物をまとめて出ていくとしていた。それを使用人たちが総出で、花束など手渡しして見送っている。ド・メデイス家の財務を引き受けていた、セドリック・リュノーという男だ。男爵だった男である。彼がまさに屋敷を出ていくところに、ファルマは出くわした。

「ファルマ様。私、セドリックめは本日にて退職させていただきました」

長年の労働と酷使で両膝をわずらい、ブリュノに暇を出されたのだという。解雇というと厳しいようだが、ブリュノには彼をお役御

免して田舎でゆつくり静養させたいという目的もあったようだ。それに、父からわざわざばかりの領地をもらったという。

父とは先ほど別れのあいさつをして、いよいよ出ていくところだという。

「ファルマ様にも、旦那様にも長い間お世話になりました」

とはいえ、杖をつき深々と頭を下げるセドリックは40代でまだ引退というには断然若く、ファルマは最後の挨拶とて涙ぐむセドリックに話しかけた。

「セドリックさん、これからどうするんだ？」

「旦那様からの退職金といただいた領地がありますので、田舎で細々暮らしてゆくことはできましよう。まだお屋敷で働く意欲はあるものの、膝がいう事をききませぬ」

セドリックは情けないと言って、彼の両膝を叩く。

「まだ働きたいって？ そう言いました？」

「それはもう」

「じゃあ、一緒に働いてくれないかな」

「私はこの通り膝を悪くして歩くのもままならず、たいして使い物になりませぬが」

彼はさつき叩いた膝をさすりながら答えた。

診眼を使うと、いわゆる膝の関節が炎症を起こして水がたまっている状態だった。

「店に座って事務仕事してくれたらいいよ。得意だろ？ セドリッ

クさん、財務できるし帝国の法律にも詳しいよね。公文書も作れるし。だから知識を借りたいんだ。それに薬で膝はある程度よくなると思うから、俺が定期的に処方するし」

「そんな……旦那様には、この膝の痛みを治す薬はないと。休養が唯一の薬だと」

保存的療法としては、安静にするのは間違っていない。それでブリュノはセドリックに薬を出してはいなかった。

「休養はたしかに薬なんだけど、俺はもうちょっと楽にできると思うから。湿布も出せるし。あなたの希望次第だけど」

「こんな私を使っていたただけるのでしたら、ぜひ！」

セドリックは号泣しながら、二つ返事で了承した。

「頼りにしてるよ、セドリックさん」

こうして、セドリックはファルマが再度召抱えることになり続投となった。

それにしても父がセドリックに暇を出したタイミングがよすぎるな、とファルマはふと勘ぐった。

… … …

創業まであと数日をきったとき、出張から戻ってきた父ブリュノが、書齋にファルマを呼んだ。彼は忙しそうに分厚い書籍に目を通し、何かをしたためているところだった。

「準備は進んでいるか。エレオノールからは、順調だと聞いておる

が」

「はい、概ね順調だと思われます」

「我が家の薬草園にあるものは、根絶やしにせんかぎり使っている。さように聞いているか」

「はい、エレオノール先生から伺っています」

父は手をパンパンと打ち鳴らし、家令のシモンを呼んだ。

「あれを」

「は」

何事かと身構えていると、父の命令で家令のシモンと使用人が三人がかりで大きな箱を持ってきた。そしてシモンがにこにこしながら、ファルマにカギを手渡す。

「あけてみなさい」

戸惑いながらも、開錠された箱の蓋に手をかけるファルマ。

中から出てきたのは、箱いっぱい詰め込まれた、目も眩むような帝国金貨だった。

裕福な父にとっても、それはかなりの財産であることはファルマにも分かる。

「これで、当面の薬局の経営をうまくやりなさい。帝国からの資金援助を受けておることは知っている。だが、偉大な仕事には金が必要」

父は晴れやかな表情で、呆然とするファルマを見つめた。

「金はいくらあっても邪魔になるまい」

たしかにそうだけれども、ファルマは気が引ける。

「セドリックを雇うならば、彼に預けなさい、彼ならうまく資産を管理してくれるだろう。物騒であれば、銀行に預けてもいい」

「こんなにいただくわけには」

「大事な我が子の晴れ舞台だ。たまには父親らしいこともさせてくれ」

「父上……豪邸がたちそうなお金ですよ」

あまりこの世界の通貨事情には詳しくはないが、それは間違いがなかった。

「なに、お前をノバルト医大に入学させようとしておいた分の学費もある。お前には薬神様の天啓があつて大学には行かなくてよさそうだし、陛下からバツジもいただいているし、一人前の薬師だからな」

でも、と言いかけたファルマを、父は引き下がらせる。

「こういうときにいい格好をしたいのが、親というもののなのだ」

ブリュノは顎ひげをいじりながら、そう言って頷いた。

「ありがとうございます、父上。大事に使います」

ファルマは受け取っておくことにした。

後でセドリックに確認してもらつと、ブリュノの財産の5分の1であることが分かった。

大奮発をしてくれたようだ。

… … … …

こうして完成した異世界薬局。

それは店舗、休憩スペース、研究室を兼ねた4階建ての調剤薬局である。その間取りはというと。

1階は店舗。

客のカウンセリングスペース兼待合室と調剤室を備えた、機能的な空間だ。

内装と採光は明るく、光を嫌う薬は遮光瓶や薬棚の中で保存している。医薬品、化粧品などの販売スペースもあるにはあるが、基本はティラーメイドでの調剤を行う。

2階は休憩室、診療室

重病患者や隔離が必要な患者はここで診察と投薬、休息をさせる。経過観察が必要な場合も、ここで容体を見る。診察室がひとつ、隔離室がひとつ、ベッドが4床。そして、風呂がある。

3階は、職員の休憩スペース。

ベッドやソファ、調理のできるリビングダイニングだ。ここで、昼休みなどは一旦薬局を閉めて職員が休憩する。キッチンがついている。

4階は、創薬開発研究室。ファルマが研究に没頭できる鍵付きの部屋だ。薬剤開発などをここで行う。それほど広くもないラボだが、一人なのでスペースはちょうどいい。夜間は厳重に施錠する。

「へー、薬局に座るスペースがあるのね」

快適に座れる長椅子が店のすぐ入口にあるのを見て、エレンが目を丸くした。

「薬を必要とする人は、病人が多いだろう。だから、腰を下ろして待てるのは重要なんだ。足が運びやすくなる」

日本では当然のことなのだが、この世界の薬局はそういう発想はないようだった。

ウォーターサーバーもカウンターの横に据え付けた。来客用だという。

「客はタダできれいな水も飲めるの？ 水もタダじゃないのよ？」  
エレンは目を見開いている。

「買えばね」  
「まさか、神術の生成で？」

そうだよ、とファルマは頷いて水を飲む。すっかりとして、ひんやりとして、のど越しさわやか。ロツテは何杯もおかわりをする美味しさ。あとで継ぎ足しておこう、ロツテは飲み過ぎだ、とファルマは鼻息をもらす。

「水はタダで俺が生成できるし、水分補給が必要な人もいるから。きれいな水が手に入らない世界で飲めるってのは、集客につながると思うて」

「お人よしのねえ。神術で生成した水なんて平民の口にはいらない貴重なものなんだから、水を求めて平民の列ができるわ。生成水の瓶詰には高値がつけられているのよ？」

「基本的には、薬局に用がある人、薬を買ってくれる人に飲んでもらうんだよ。あとは、どうしてもきれいな水が必要な病人に」

水を目当てにやってくる客もいるかもしれないわね、とエレンは感心する。

リピーター率が上がるだろう。

「とても合理的ね、今までにない店になるわ」

いいじゃない、すごくいいじゃない！　とエレンが感心している  
と、

「若旦那、ご依頼のお召し物ができました」

向かいの通りの仕立て屋の店主が、店舗の入り口から顔を出した。

「え、もうできた？　ありがとう」

店主を店舗に迎え入れて水をすすめ、それをあらためる。

「どうです、寸法は。二着ずつこしらえました」

真新しい仕事着に、ファルマは袖を通す。わあ、とそれを見ていたロツテは拍手をする。

「丁度いいよ、ありがとう！」

代金を支払う。ファルマは、つとめて近所の店に、薬局の創業に必要な諸々の品を調達した。挨拶代りにだ。おかげで、顔を覚えてもらうことができた。毎日一度は店舗に顔を出して、御用聞きにやってくる店主もあった。



「ファルマ様、その服変わっていますね。でも、飾り気はないけど真っ白できれいです」

ロツテが、オシャレです！ と連呼しながら見とれていた。  
仕立人にファルマが仕立ててもらったのは、長袖で詰襟の、ケーシー（Casey）型と言われる店舗で着る用の白衣、それから実験着用の長い白衣だ。腕に店の紋章を入れ、宮廷薬師の証である王冠型の金バッジを襟首につける。この世界の医師や薬師は黒系のコートか普段着を着ているようだが、ファルマはやはり白衣がなじむ4階の研究室で実験をするときは裾の長い白衣を上羽織る。店舗に出るときは、薬品や汚れのついた白衣は脱ぐ。  
彼には影がないので、純白の白衣は目にまぶしく、影がないことのカモフラージュになる。多少、だが。

「やっぱり白衣着ると、落ち着くなー」

もと研究者であるファルマにとっては作業着のようなものだ。しみじみとそう言うので、初めて着た服なのに何を言っているのだろう、とロツテとエレンは顔を見合わせるのだった。

「私たちは何着ればいいのか？」

白衣は着なくていいから、汚れがよく目立つ明るめの服を着てくれ、とファルマは二人に注文を出した。

しかし、数日後にはエレンも同じような詰襟の白衣を仕立てさせていた。体のラインがもろにでるものだ。職人が寸法を間違えたのか、きつめに作らせたのかは分からない。

「エレンも白衣、作っただ？」

ファルマが何か言う前に、エレンは言い訳じみた理由を話す。

「だって、皆の服装がバラバラだとお店の統一感がないじゃない。制服として仕立てさせてみたのよ。どうかしら」

「それだけじゃなくて、ファルマ様の白衣が素敵に見えたってエレンが仰っていました」

ロッテが悪気なく暴露する。

「もう、ロッテちゃんっ！ それは言わなくていいの」

ロッテには、明るい白色の機能的なドレスが仕立てられて、フリルのついたエプロンをしていた。セドリックも、白い上着を着てエプロンをしている。エレンのポケットマネーだそうだ。

「ああ、いいね。よく似合ってるよ皆」

「えへへ。気持ちだが、こう、引き締まりますねっ！」

こうして準備も万端整って、オープンの日は目前に迫ってきた。ファルマは薬局をはじめるにあたり、三人の職員の前で訓示を述べた。

「薬局を創業する前に、心に留めておいてほしいことがあるんだ」

いったい何を言われるのかと緊張していた三人。

ファルマは大真面目にこんなことを言った。

「まずは、職員全員が健康でいるようにつとめてくれ」

前世で頑張りすぎて過労死をしてしまった彼は反省し、今度はホワイトな職場を目指すつもりの方だった。営業時間、勤務時間は朝9時から午後5時までを徹底する。週休二日。冬休み、夏休みあり。有給休暇あり。もちろん、ファルマ自身も創薬の研究開発に燃えて徹夜などしてはならない。

「そうね……あんまり働きすぎないでくわ」

困ったように微笑むエレン。ファルマは頷いた。

「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救ふを以て志とすべし」  
「遠い異国に、そんな言葉があるんだ」

「その詩、気に入ったわ。どこの国の詩人が言ったの？」

エレンが出典を尋ねる。この世界のものではなく、養生訓の一節だ。前世の彼が、どんなときも座右の銘としてきた言葉である。

「ここを訪れた病人は分け隔てなく救い、たとえ治せなかったとしても、彼らの心に寄り添う。そういうつもりで働いてほしいんだ」  
「なるほど。理念はしかと心に刻みました。当面の具体的な目標は、ありますかな」

セドリックが戯れに訊ねる。

すると、ファルマは両手に軽く拳をつくり、それをぎゅっと握りしめた。

「帝都市民の平均寿命を、今より十歳引き上げたい」

ファルマは一人一人の顔を見つめた。  
えっ、とエレンとセドリックは素っ頓狂な顔をして顎を突き出し

た。ロツテは平均寿命というものが分からず、きよんとしている。

「な、なに言ってるのよ。平均寿命って上がるものなの？　ずっと変わらないけど」

「できるはずだ」

ファルマは言い切った。本気だ……とエレンは絶句した。今、大陸の民の平均寿命は50歳かそこらだ。貴族も入れた数字である。

「凄いことを考えるのね……発想が人間と違うわ」

ファルマのことを、衆生の救済のために降臨した薬神の化身だと信じているエレンは素直に感動する。神の計画がこれから始まるのか、と。

「そういうことだ。皆でうまくやっていこう」

ファルマが手を差し出すと、

「はいっ！　楽しく頑張りましょう！」

ロツテが元気よく返事をしてファルマの上に手を重ねる。

「大恩におこたえするため、この老骨セドリックめは粉骨碎身、滅私奉公の覚悟でございます」

セドリックは椅子に座ったまま腕まくりをし、手を伸ばした。

「うん、だから、粉骨碎身しないで、心と体に余裕を持って働いて欲しいんだ」

「あはは、これは失敗。そうでしたな！」  
「もう、仕方ないんだから」

エレンが付き合っで、最後に手を載せた。

… … …

翌日、それはよく晴れた日。

異世界薬局創業のセレモニーが行われた。

美しく着飾った皇帝の勅使団が店の前で皇帝からの勅書を読み上げ、勅許薬局であるという許可証の授与が店主に対して行われる。それを、市民たちや商人たちは遠巻きに見ていた。

真新しい銀色の格子門が広く大路へ開け放たれ、白衣を着た二名の薬師、そして手伝い人二名の計四名が、一列に並ぶ。

「……というわけでありまして、私たちが帝都の庶民の皆様の健康で豊かな生活をお支えしたいと存じます。真に患者さんそれぞれのご希望にそった処方を中心掛け、体と心のケアを行い、皆様に選ばれる薬局になるよう、職員一同、技術と精神の研鑽に邁進してまいります」

どう見ても十歳そこらの子どもにしか見えない店主の薬師が、宮廷薬師だと名乗り、そして市民たちに向かって、カンニングペーパーを見ることがなく挨拶をする。

「ド・メディシス尊爵の次男らしいぞ」

「大貴族がこんなところで何やってるんだ。親の権力で勅許薬局なんて建ててもらったのか？」

「敬語だ……平民に対する態度を知らないんだな」

「貴族は召使以外の平民と話さないからな。というか長いな、演説。」

父親が作った文章なんだろうが暗記も大変だったろうな」  
「暗記してきた感じじゃないぞ」

市民たちはファルマの演説に興味津々だった。というのもも少年店主は、患者の希望を中心に、患者がよりよく生きるための医療を、ということ強調していたからである。それは彼らにとつて斬新に聞こえた。十五分ほどの演説が終わった。市民はすっかり聞き入ってしまった。てしまっていた。

「それでは本日より営業開始とさせていただきます」

彼らは声を合わせる。

職員一同が横一列で、市民に深々と頭を下げた。

第一声の挨拶を発する。

「それでは、どなたさまも、いらっしやいませ」

平民たちは、貴族が平民に頭を下げた革命的な光景を目撃し、それはしばらくの間語りぐさになった。

こうしてこの世界では一風かわった薬局が、帝都の片隅で産声をあげる。

宮廷薬師    ファルマ・ド・メディシス（Falma de Mé  
dicis 10歳）

一級薬師    エレオノール・ボヌフォワ（Eléonore Bo  
nnefoi 16歳）

財務・法務    セドリック・リュノー（Cédric Luneau  
42歳）

事務・庶務    シャルロット・ソレル（Charlotte So

l l e r 9 歳)

創業メンバーは上記四名である。

「万民のための薬局」をつたった新進気鋭の帝国勅許薬局、異世  
界薬局(DIVERSIS MUNDI PHARMACY)。  
のちに帝都総本店と呼ばれるその薬局のDepuis(創業)は、  
1145年のことであった。

< i 1 5 8 3 1 7 — 2 4 9 6 >

13話 D e p u i s 1 1 4 5 異世界薬局 帝都総本店 創業  
(後書き)

1章終了です。 2章にお進みください。



## 2章1話 瀉血とファンデーション

< i 1 7 2 0 8 3 — 2 4 9 6 >

創業から一か月。

華々しくオープンした薬局は、閑古鳥が鳴いていた。

懸念されていた薬師ギルドからの嫌がらせは、まだ受けていない。エレン曰く、貴族の店の経営がどんなものか様子をうかがっているから、営業不振なら邪魔はしてこないでしょうね、とのこと。なんと情けない話だった。

万民のための異世界薬局とは謳えど、客層はというと裕福な商人、下級貴族などがまばらに来るぐらいだ。おあつらえむきに、三級薬師の店での買い物は家格にふさわしくないと考えた貴族もいて、ほどよく需要を満たす店となった。

彼らが買い求めにくるのは、化粧品やハンドクリームなどが多い。本格的な病気の場合は、貴族相手に一級薬師、二級薬師や医師が往診に来るので、貴族は敢えて薬を買う必要がない。

しかも彼らは精いっぱい着飾ってやってきた。どこの舞踏会に呼ばれたのか、という服装でだ。勲章をつけた貴族もいた。子供とはいえ尊爵の次男の経営する帝国勅許印のついた店に踏み入るのは、かなり身構えてしまうようだ。

『どなたさまもどうぞ着飾らず普段着で来てください』と看板に書かなければいけないのか、とファルマは悩む。

いや、その前に平民に来てほしいというのが悩みだ。

そんな日々の中、お昼の休憩時間。3階の職員休憩室で、職員た

ちは昼食を食べながら休んでいる。ちなみに、膝の悪いセドリックが3階の休憩室で休めるように、セドリックを雇うと決めた日から突貫工事で急遽カウンターウェイト（つり合い錘）式の手動エレベーターを設置したので、セドリックも3階に楽にあがれる。

昼食を頬張りながら、彼らの話題はほかでもない、どうやって平民に来てもらうかということだった。ランチョンミーティング中である。

「いきなり客が押し寄せてくるわけないわ」

エレンはパンを片手にロツテの絞ったフレッシュジュースを飲んでいた。

「まあ、時間があるから患者さん一人一人をゆっくり診れていいんだけどね。どうも本当に施療を必要としてる人に、薬が届いてないっていうか」

ファルマの期待していた、本当に困窮していそうな患者が来ない。

「そういうこともあるかと思ひまして、私、考えてきました!」

ロツテが、数日かけて異世界薬局について街頭アンケートを取ってきたらしい。職員の中でロツテだけは平民なので、市井の人間と気さくに話しやすいのだ。

「発表します! サン・フルーヴ帝都市民100人に聞きました! 複数回答可」

「頑張ったなロツテ、助かるよ。結果が怖いけど」

ファルマが拍手する。と同時に心構えも必要だ。

「ずばっと発表しちゃって。ロツテちゃん有能！」

エレンが手を振って促す。

「勅許印がこわい 48人」

ずこつ、と三人がコケたふりをした。

「敬語ができないから貴族の薬師と話せない、不敬罪にされそう  
近づけない、こわい 46人」

あーそれかー、と3人は納得する。

「貴族のお店に着ていくエスプリの効いた服がない 25人」

エスプリ必要ないよね、とエレンがつっこむ。

「門番の騎士がこわい 19人」

にこやかにしてたら門番としてどうかと思う、とファルマは門番を弁護したい。

「子どもの薬師に薬出されるのは信用できない 18人」

俺か！ とファルマが机の上につつぶす。

「看板に出ている薬の値段が、応相談になって高そうでこわい  
12人」

「字が読めないので看板が読めず、入りづらい 10人」

「あとはー……店長が子どもだ　8人、です」

俺かー！　とファルマは再度呻いた。

強メンタルのファルマも、多少こたえたようだ。

「ありがとう、わかったわ。予想通りね」

エレンは手を振って眼鏡をなおす。

「なんか根本的なところで躓いてるわね」

「店長が子どもだ、って言われたらもう言い返す言葉もないな」

ファルマはあいたた、と額をおさえている。

「平民は平民のやっている店に行きたがるもののよ、貴族になんて関わりたくないものだわ。私が言うのもなんだけど」

「具体的な薬の値段や診察料を出して、店の外に掲げておいたほうがよかったのでしょうかね」

セドリックが提案する。ファルマは応相談と書いたことを反省した。患者の社会的地位、財産、困窮度に応じて薬の価格を変えようと考えていた彼だが、応相談という一文に警戒されたらしい。

「常連が来てくれるような店にしないとね」

エレンはそう言う。

そんな敬遠されている状況の中で、毎日薬局にやってくるメンタルの強い平民の老人、ジャンがいた。ジャンはカウンターに、我が物顔でやってくる。

「船乗りの飴（Bonbon）をもらおうかのう。今日は3つじゃ

ジャン老人は毎日飴を買いに来て、そしてウォーターサーバーの水を飲んで、散歩コースに戻る。

「はい、3つですね。ありがとうございます」

ファルマは快く応じる。毎日買いに来るぐらいなら、手間になるのでまとめ買いしたらどうだろう、とファルマは思うのだが、毎日律儀に買いにくる。1つだったり、2つだったりするが、とにかく彼は買ってゆく。固定客といえば固定客だ。

ファルマは3つ、キャンディ壺から飴を取って渡した。薬局では各種の飴を用意している。咳止めの飴、風邪予防の飴、船乗りのための飴（壊血症予防の飴）、塩飴（熱中症予防）、など。これらは、菓子屋のキャンディと同程度の価格だったので、裕福な商人の子供も銅貨を握り締めて買いにきたりした。

「じゃあ、わしは商品を買ったし客じゃから、水をいただくぞい！」

彼は得意げだ。いつも“船乗りの飴”を注文するが、目的は飴よりも水なんだろうな、と職員の誰もが気づいている。

「おほほ、これこれ！　これがうまいんじゃあ」

ジャン老人は大手を振ってウォーターサーバーに紙コップを近づける。コップも衛生的に、ロッテが客用に紙コップを折っていた。ファルマに教わった、折り紙で折るコップである。

「たくさん飲んでくださいね。外は乾燥していますから、水分補給を」

ファルマは嫌な顔ひとつせずに、水をすすめる。商品を買ったら、水は無料。商品を買わなければ、小銭程度に有償。ジャン老人はごくごく喉を鳴らしながら、紙コップに5杯は必ず飲む。

「船乗りの飴ということは、海に出るんですか？」

そういえばジャン老人は黒々と日焼けをしている。昔は海の男だったのだろうか、とファルマが尋ねる。

「いや、もう海には出んのじゃ。昔は出たもんじゃが。じゃあもう」  
ジャン老人は乱暴に手をふる、よぼよぼと散歩コースに戻っていった。

（船乗り、関係ないな。まあビタミンCの摂取はいいことだと思うけど）

ジャン老人は、いつも路地で複数の男たちと待ち合わせをしている。男の一人がS・I・Oというロゴのついた鞆を持っていた。

（散歩仲間かな？）

見送りに出たファルマだが、そのぐらいにしか思わなかった。

ジャン老人のすぐ後に、上流貴族の夫婦が店を訪れた。婦人は口ココ調ヘアスタイルで髪を真っ白に粉をはたき、高さも盛り盛りにして、髪の上にはちょこんと羽帽子をのせている。二人とも仮面をつけていた。

（怪しすぎだろう！ この二人！）

明らかに怪しいのに、家つきの騎士の門番もスルーを決め込む。  
店に入ってきた二人に、

「母上、棚の上の商品を御髪でひっかけないようお気をつけて」

ファルマが思わず注意をすると、

「えっ、あらやだ。どうしてわかったの？」

「いらっしやるなら、今朝一言声をかけてくだされば」

両親を真新しい薬局の応接コーナーのソファに座らせ、セドリツクは両親にお茶を出す。両親は気まずそうに仮面を各々の顔から外した。ベネチアンマスクを彷彿とさせる仮面だ。ブリュノとベアトリス、どちらがそれをかぶろうと言ったものか、バレないとも思っていたのか、とファルマは問いただしたい。

「ど、どうしているかと思ったのよ。ほら、あなたまだ子供だし」

心配でたまらないといった様子のベアトリスとは対照的に、ブリュノは落ち着き払って席を立つ。

「店主、店の中を見てもよいだろうか」

「どうぞご自由に。父上」

薬局の隅の隅まで眼を光らせ、調剤室も確認した後、無言でテーブルに戻ってきた。エレンはというとブリュノがいきなり押し付けてきたので、挨拶をしたきり背筋をぴんと伸ばしその場で直立不動である。普段、ファルマにはため口をきくエレンも、ブリュノの前

では緊張しているらしい。ロツテも一言も無駄口を叩かず控えている。

出された茶に一口、口をつけてから、ブリュノは頷いた。さて、評価はどうだろう。とファルマも自然と前のめりになる。

「よい店だな。非常に斬新だが、ひとつひとつ考えてみれば理にかなっている」

ファルマはひとまずブリュノの眼鏡に適ってほつとする。

「分からないことや難しいことがあったら、セドリックさんに聞いていますので、こちらの事は大丈夫です」

「客足は？ 平民は寄り付いて来るのか？」

ブリュノはファルマの泣きどころを、ぐっさり刺してきた。

「来てくれる人もいますが、まだ芳しくありません。商人や貴族はきます」

「そ、そうか」

独立した息子の経営がうまくいっていないとなると、心配なのが親心だ。

かといって、ブリュノのほうはファルマよりもっと金銭感覚や経営感覚が崩壊している。

「平民、平民、平民」と思うからいけないのよ」

ベアトリスが重い空気を払拭し、明るく言った。



「とりあえず、今は貴族向けに化粧品を売ればいいじゃないの？  
貴族の間で流行っていれば、平民も使うでしょう。化粧品に力を入れるの」

一理あった。貴族の間で流行りものを、商人などが使いたがる。

「どんな化粧品が必要だと思いますか？」

エレンは美肌なので化粧をしないし、ロッテはましてや化粧などしないし、ファルマとセドリックは男だしで、化粧品の流行にはてんで詳しくなかった。

「肌のきめを整えるものと、色を白く見せるものであればあるほど、よいでしょうね」

ベアトリスは貴婦人だけあって事情通だ。おしろいに飽き足らず、雪のように白い肌を求めて、瀉血（しゃけつ：血抜き）を繰り返す婦人もいるとのこと。

「白く見えて、肌が赤ちゃんみたいに見えて、つけていて臭くなくて長持ちのするおしろいなら、飛ぶように売れると思うわぁ」

ベアトリスの言うことは、どこぞの女性雑誌に書いてありそうなコメントだった。<sup>かしま</sup>姦しい、と言わんばかりの顔をして聞いていたブリュノだが、

「ファルマ。おしろいを造るなら、白粉だけは売るな」

ブリュノは真剣な顔をして忠告をした。この世界のおしろいには、異世界人の肌にも有毒な鉛白や水銀などが入っているというのは、

ファルマはレシピを見て知っていた。だが、ブリュノはそれが有害であると知らない。

「なぜですか？」

「私の知見によると、白粉を熱心にはたく婦人ほど早死にする。そんなものは医薬の道にもとる、売るな。白いものほど悪い」

（なるほど、ブリュノさんは分かっているんだな）

ブリュノの、この世界の薬に対する経験則は、的を射ていることが多かった。それはファルマがうすうす感じていたことだ。ブリュノは書物を完全には鵜呑みにせず、彼の出合った症例をつぶさに観察している。そして時には、書物を疑うことも厭わなかった。

「もう、あなたがそうおっしゃるから。気のせいよ！ 私だって白いおしろいが欲しいのに」

なので、ベアトリスは白すぎるおしろいを使うことをブリュノに禁じられていた。それがベアトリスの健康を守っていた一面を、ベアトリスは知らないだろう。

「はい、まだおしろいは売っていません」

ファルマが売っているのは、保湿液、ローション、ハンドクリームの基礎化粧品だけだ。

「うむ、それがよかろう」

そのとき、大路で悲鳴が上がり市民が騒ぎ立てはじめた。

「医師か薬師を呼べ、早く!!」

「で、ですがこのあたりには平民の薬師しか……あ!　ここは!」

誰かが看板を見て、貴族の薬局ができたのだと思い出したようだ。従者と思しき服装をした男が、店に飛び込んだ。

「お騒がせいたします薬師様、お嬢様の診察をお願いしますか!」  
「診察?　わかりました」

よしきた、とファルマは腰を上げる。ブリュノは動かない。

「父上、母上、行ってきます。エレンはここに残って。店をよろしく!」

そう言い残すと、エレンと両親を置いて店を飛び出し、人垣の出来ている場所に走っていった。

「あの子、まだいくらも話していないのに」

嘆くベアトリスに、セドリックが声をかける。

「奥様、お待ち間にファルマ様が開発されたこちらの新しい美容液をご覧にいれましょう」

「あら、いい香り」

ベアトリスの興味のツボを知るセドリックが、ご機嫌をとるのだ。  
「た。」

「外の空気を吸ってくる」

ブリュノは無言で席を立て、ふらりと店をあとにした。

「あの人、ファルマのところに行っただのかしら」

「で、ございますね」

ベアトリスとセドリックは頷いた。

「あの人、ファルマに言いたい事があると言っていたのだけど……」

… … …

侍女に支えられて、若い淑女がげっそりと青ざめ、馬車の中で座席にもたれかかっていた。

「ああ、なんとということ、お嬢様、しつかりなさいませ」

ファルマは従者に案内されて人ごみをかきわけ、大人たちに埋もれるようにしながら、声のするほうに近づいてゆく。

「薬師様のお通りだ、道をあける！　こちらです薬師様」

「あ……あなたが薬師様？」

ようやく気分のよくなる薬をもらえと思った彼女は、子供がやってきたので、疑わしげな顔をした。ファルマから彼女を見るに、10代後半の貴族の子女のようだった。侯爵令嬢のようだ。

「道をあげてください、私は宮廷薬師です」

ファルマは襟のバッジを見せる。白衣の襟元の王冠型の宮廷薬師のバッジは、ファルマの仕事には必須だった。身分をひけらかすつ

もりはないにしろ、これがなければ子供とみくびられて診察すらさせてもらえないのだ。

「失礼、馬車の中に入ります。お顔の色がすぐれませんか」

ひと目見るなり、ファルマは彼女が貧血だと気付いた。他の病気も隠れてはいけない、ファルマは神力を通わせた左手を眼に当て、診眼を発動し人体を透視し骨格をつぶさに見てゆく。骨折はなし、光っている部分もない。

「骨は折れていませんね。脱臼などもなさそうです」

しかし、長いドレスの袖に隠されていたが、腕には無数の光が見えた。

「おや」

切開創だ。静脈切開創だとみられる。

（自傷癖か。いや、これは自分でやったんじゃないな、となるとやつぱり）

”鉄欠乏性貧血”

光の色が変わった。ベアトリスとの会話に先ほどのぼったトピックスが、まさに現実であると分かった。

これはただの貧血ではない。

「瀉血をしましたか。貧血になっておられます」

「えっ、そんな。医者がやったのよ？」

元氣なくうつむいていた彼女は驚いて顔を上げた。何が問題なのかと言わんばかりに。この世界では、患者が失神するまで瀉血をするのが標準的だった。度重なる血管の切開で、傷口から感染を起こしてもいる。

「あなたに特に病気はありません。病気でもないのになぜ、瀉血をするのですか？」

彼女はその後、30分ほどファルマと話し込んだ。身の上話から始まり、脇道にそれまくり。ファルマが身の上話を真剣に聞いているのを、ブリュノは遠巻きに見ていた。意中の貴族にこっぴどく振られたのをきっかけに、美の追求のため雪のような白い肌を求めたようだ。よく見れば顔中に、手にもべったりと白いおしろいをはたいている。ブリュノがまさに指摘していた、白すぎるおしろいだ。それに加え、もともとそれほど肌の白くない彼女は、特に熱心に瀉血を行わせた。

地球でも中世から近代に至るまで流行した瀉血。病気にはなにかと、古い血を抜く瀉血が効くと思われる時代があった。現代では瀉血をしなければならぬ状況は、多血症の場合など、ごく限られている。

瀉血は彼女にやってはいけない。

ファルマは薬局に案内する。両親は家に帰っていた。

彼女を暫くの間休ませると、鉄剤を処方、感染症に備えて抗生物質の服用もすすめる。

彼女は小さな溜息をついて、

「ありがとう、これでよくなるのかしら……。御代はいかほど？」

心ばかりでいいと告げると、従者が驚くほど多額の金貨を手渡した。

貴族は心づけに見栄を張りたがるものらしい。

「もう、瀉血をしないでくださいね。それから、そのおしろいはいけません」

ファルマは心配だった。動機が美の追求である限り、彼女はまた調子が戻れば同じことを繰り返すだろう。

「やめるのは、無理よ。だって、女は皆、少しでも美しくなりたいのだもの」

「わかりました」

ファルマは彼女の希望を汲み取ることにした。

「あなたの肌にあった、化粧品セットをご用意して置きます」

一週間後に、薬局にいらしてください。

ファルマはそう約束をして、その日から異世界薬局の4階の研究室にこもった。

美白になれる、害のないファンデーションを創ろう、そう決意して。

## 2章2話 コスメブランド・MEDIQUE

一週間後、また来てください。

そのときには、美白になれるおしろいを用意しておきます。  
ですので、それまでは絶対に瀉血をしないでくださいね。

などと、どこぞで聞いたような約束を、ファルマが若き候爵令嬢クロエとしてから数日後。暗くなってきた帝都では、商店の店じまいが行われていた。

「そろそろ私、帰るけど。ファルマ君はまだ頑張ってるの？」  
「様子を見えますね」

ロツテは4階への階段を上っていった。

「ファルマ様。私たちもお屋敷に戻りましょう、研究は明日にしてはどうですか？ 迎えの馬車が来ています」

ロツテが心配をして、研究室のドアをノックして、ファルマの様子を見にやってきた。ドア越しに、ファルマは「ありがとう、先に帰ってて。今日は泊まるから」と伝える。ロツテはドアの前で暫く待っているようだった。ファルマは研究室には鍵をかけて研究をする。物質創造を見られるわけにはいかないし、うかつに薬品をこぼしたりすると危険だからだ。実験器具の扱い方を心得た人間しか招きいていない。エレンがたまに来るぐらいだ。

「ファルマ様。あまり頑張りすぎないでくださいって、ファルマ様はおっしゃいました。昼食も食べておられません、私は心配です」



しーん、とした後、すぐに研究室のドアが開いた。

「ありがとう、ロッテ。今日の作業は終わりにする。帰ろうか」  
「はいっ！」

また、あやうく没頭しそうになっていたな、とファルマは思い返す。没頭しやすい性分なのだから、気をつけなければいけない。子供の体には、負担も大きい。

今度は、過労死はごめんだ。ゆったりやらなくては、長続きしない。とファルマは自省する。

「今日の夕食は何だろうな」

「はいっ！ おなががすきましたね」

二人は迎えの馬車に乗って、ド・メディシス家の屋敷へと帰ってゆく。

そして無理なく健康的に、営業時間内で研究を続けて更に数日。4階の研究室から職員休憩室に現れたファルマに、職員は飲んでいた飲み物を噴き出した。

「ぶーっ！ どうしたのよ！」

エレンは盛大に噴き出してから、白衣が汚れたので着替えに行く。

「ファルマ様、お顔が美白です！」

ロッテが目丸くしている。

「どう？ 白い？」

恥ずかしそうに聞くファルマに、白衣を着替えて戻ってきたエレンが、もう一度笑いをこらえている。白いと言うか、面白かった。

「何だって自分の肌に塗ったのよ……！ 私か、女性に塗ってもらえばいいのに」

鏡を見ていないが、スケキヨ状態だろうな、とファルマは思う。

「今まで見た中で一番白いわ。しかも透明感があって立体的！」

触れてみたい肌だわ、とエレンが指をふるふるさせている。

「驚きの白さでございますな」

ファルマはもともと、真っ白という肌ではない。神術の訓練があるので外にいる時間も長く、標準的な子供ほどは日焼けをしている。それが、雪のように真っ白なのだ。顔面だけ。

この世界の女性の肌の白さを引き立たせる、本当に白い薬用ファンデーション、彼が目標としていたものができたようだった。

あ、でも……と、エレンは困ったような顔をする。

「お師匠様が、白すぎるものはだめだとおっしゃっていたわ。こんなに白くて大丈夫？」

「心配いらない、これには鉛白も水銀も入っていない。安全なものだ」

（使用前に、彼女にアレルギーテストもすればいいし）

白いおしろいを欲しがっていた母にもあげたほうがいいな、とフアルマは真面目な顔をしながら思い出す。

「ちょっと待って、鉛と水銀がどうして悪いものなの？」

ブリュノは感覚的に分かっていたようだが、エレンにはそれらが毒物だという認識があまりなかった。

「実は毒なんだ、それ」

「皆、おしろいに使ってるわよ！？ 鉛と水銀がいけなかったのあれ！？ 怖いわ〜」

エレンは理由が分かってぞつとしたようだった。

「二人も、肌につけてみる？ 女性の意見も聞きたい」

生まれて初めてファンデーションを塗ったロツテは、鏡を見て歓声を上げた。

「わあ……肌にさつとなじみます！」

「ロツテちゃんは塗らなくてもいいわよー、まだ若いんだからぷるんぷるんだものー」

「ええっ、そんなエレオノール様だって！」

「やだあ、そう？」

と、エレンと二人は齒の浮くような女子トークをしていた。

「ええと、肌、ちくちくする？」

「全然しません」

セドリックまでが手の甲につけてへえ、これは、と感心している。だが独身男性の彼には、まったくといってその用途がなかった。エレンも肌につけて絶賛する。気になっていたそばかす、にきびあとが消えているのだ。

「ファルマ君、これ、私もほしいわ」

手放せなくなりそうだな。と言ってがばっとクリームを抱きしめる。

「ファルマ君って、こんなことまで知ってるのね」

「まあねえ……」

前世で薬学者、薬学大学院の准教授であったファルマのもとには、医薬品会社から共同研究の申し込みが頻繁にあった。コスメの新商品のアレルギーテスト、外部評価などにも協力してきた。そういう経緯で、彼は化粧品にも多少は詳しい。

「だから、前世は薬神だったんでしょ？」

エレンの中では、やはりそうなっている。

「ちがうって」

「で、このクリームはどういうものの？」

「これは、日焼けを防ぐおしろいだ。それで、日焼けを防ぐから素肌も白くなる」

「日焼けを防ぐなんてことができるの？」

あの、満遍なく降り注いでいる太陽の光を？　と言ったきりエレ

ンは腰を抜かしてしまいそうだった。

「できるんだよ」

光は波でできていて、多くの種類があること。この特別な原料には、紫外線を吸収する素材が含まれていると言うこと。ファルマは話して聞かせた。

「途中からよく分からなくなっただわ」

エレンは休憩、といっただくびをした。ロッテはへー、と頷いている。

「平たく言うと、日光を遮る。だから、日光に当たってもいいんだよ。貴族の子女も、日焼けを気にせずに外出できるんだよ」

「でも凄い商品だわ！ 日傘を手放すときがきたのね！」

「いや、日傘は手放さなくてもいいけど」

依頼主の女性の肌が地黒だというよりは、日に焼けやすい体質だった。彼女が買い物好きで外出をする機会が多く、馬車に乗っているとはいえ、地面からの照り返し、窓から差し込む陽で毎日少しずつ焼けていた。それを防ぐだけでも、白くなれるはずだ。

ファルマがそんな彼女に提案しようとしているのは、簡単にメイクのできる、肌に（比較的）やさしいコスメだった。

1、CCクリーム

それは、もともと美容整形外科で使われていた、手術後の炎症を起こした肌を優しくカバーする医療用クリーム（BBクリーム）をベースに、更に改良したものであり、日本や各国ではCCクリームと呼ばれて、各ブランドから発売されていた。このクリームには、

以下の効果を持つ成分が配合されている。

UVカット、肌のトーンアップ、肌の下地を整える、保湿、肌をいたわる各種ビタミン類など。

化粧水のあとすぐにこれを塗るだけ、30秒でメイクは終わる。

このCCクリームを塗っても、肌はのっぺりした印象にはならない。 ”白を塗る”のではなく光の屈折を利用する事により、”光を纏う”と形容できる。肌は立体感と抜けるような透明感を実現する。

2、セリサイト絹雲母を配合した、キラキラ感の出る仕上げ用のルースパウダー  
彼女の求めている「雪のような白さ」を出すために、フィニッシュパウダーを用意した。

3 そして、忘れてはならないのが、肌の補修成分を配合したメイク落とし。

肌についた化粧を毛穴の角栓までしっかり落とす。スキンケアこそが美の基本である。

これを、もともと薬局に置いていた保湿系化粧水、薬用石鹸とセツト販売する。

世界でひとつだけの、彼女のためのコスメセットの出来上がりだ。

そして迎えた約束の日。

侯爵令嬢クロエの馬車が、異世界薬局の近くに朝いちでとまっていた。

「来るの、早っ！」

ファルマもこれには突っ込まずにはいられない。ファルマが出勤するのを、待ち構えていたのだ。

「ごきげんよう薬師様、先週はありがとうございました……おしろいはできましたか？」

「ええできておりますよ」

ファルマはカウンセリングコーナーに彼女を座らせ、箱に入れたメイクアップ5点セットを持ってきた。アレルギーテストをして、小瓶に入れた試供品を渡す。肌に合わなければ、代金はいらないと言って。

「もっと容量がたくさん欲しいわ、失礼だけど、お金ならあるの」

クロエは金貨の入った財布をおしげもなくファルマの前に出す。

「金銭の問題ではありません。肌に合うかのテストをしなければならぬのです。これを使いきるまで、肌に異常が出なければ大容量のものをお売りします。さ、つけてみてください」

ファルマはデパートの美容部員のように、まず丁寧な洗顔を促し、次にコットンに含ませた化粧水をすすめる。

「次はおしろいです」

白いクリームを容器からへらをつかって取り分けるファルマを、彼女は珍しいものを見るように見ていた。

「これがおしろいなだね、粉ではないのね？」

「肌に伸びやすいように、クリームタイプをご用意いたしました。美容成分がふんだんに含まれています。日焼けを防ぐ効果も」

「まあ……信じられない、日焼けがおさまるだなんて！ 肌によさ

そうなおしろいね」

クロエは顔に伸ばす。クリームにしてはべたつかず、油っぽく伸びがよいことに驚いていた。

「仕上げはこのパウダーです。私が塗りましょう」

「まあ、きらきら輝いて見えるわ」

エレンが刷毛でさつと塗ってゆくと、女性の肌は光のベールをまとったように、光を受けて自然に白く輝く。それは、これまでのおしろいのようにただべたつと塗っただけのものとは違っていた。あたかも素肌のように見えた。

「これが……私？」

神話に出てくる美少女のようだと、クロエは自画自賛する。鏡を持ってうつとりと見とれていた。

「全然違うわ……何もかも、昨日までとは全然違う!!」

「気に入って、もらえましたか？ 女性の美を引き出すメイクですよ」

ファルマは美容部員のようなことを言う。

「まあ……っ！ どうでしょうっ！」

彼女は照れに照れて、うつむいてしまった。そして試供品セットを大切そうに握りしめ、毎日医者を呼んで瀉血をするより安いし、以前使っていたおしろいより断然こっちのほうがいいわ、と涙を流して喜んだ。その他、日焼けを防ぐためには帽子や日傘、もしくは



ベールをつけたほうがいいというアドバイスも送った。

「ありがとう、ライバルにも差がつくわ。また買いに来るわ、必ず！」

クロエは嬉しそうに何度も頭を下げて、そして帰っていった。

翌日、異世界薬局の前で、通行人の女性を捕まえて声を張り上げるロッテの姿があった。

「新発売のおしろいとスキンケアセットですよー！ 銅貨3枚でお試し品を買えますよー」

ロッテの発案で、新商品の試供品を銅貨3枚で売った。ロッテが籠をもって路上で配っていると、私も、私も、と女性たちから手が伸びた。

「わしももらえるかのう」

よぼよぼの老婆の手が、銅貨を3枚握り締めている。

「もちろん、全ての女性を美しく、がモットーです」

字の読めない人には、絵で使用手順を描いた使用説明書を店頭に掲示しているので見に来てくださいと伝えた。

誰もかれも、わずかなお金を出せば試供品が入手できるとあって、貴族の店舗で使っている高級な化粧品を一度使ってみたいという欲求を抑えられなかったようだ。

そして異世界薬局では……、

「船乗りの飴を10個」

「はい、いつもありがとうございます」

「じゃあ、わしは水を飲むぞい！」

生成水が目的なのか飴が目的なのかよく分からないジャン老人は、相変わらず手堅い常連だ。しかも、最近は少しずつ飴玉を買う個数が増えていつている。誰かに配っているんだろな、とファルマは察した。

（散歩仲間に配ってるのかな）

ファルマはそんな程度に思っていたが。

しかしそればかりではない、その後、異世界薬局には少しずつ客がきてくれるようになった。女性客を中心に。

美白に敏感な庶民の婦人たちは驚異的なリピート率を叩き出した。ファンデーションセットは飛ぶように売れ、そして基礎化粧品、メイク落としても、同じだけ売れた。

「お客さん、増えましたね」

女性客。その家族、友人。だんだんと客層は広がってゆく。貴族も平民も商人も、同じ店にやってくるようになった。普段着で。

販売カウンターの売り子のロッテは、大忙しだ。

「はい、おしろい、3つですね？ え、5つですか？ まとめ買いは3つまでです！」

ロッテが嬉しそうに接客をしている。庶民だって貴族だって、女性には美の追求に余念がないのだ。

「本日は売り切れですー！」

庶民たちが異世界薬局に足を運んでみれば、陳列棚に並んでいるどの薬も、他の薬局とは比べ物にならないほど安価であることが分かり、平民の間で話題になった。徐々に平民の客も、コスメ以外のものを求めて薬局に顔を出すようになった。そしてウォーターサーバーの前には案の定長蛇の列ができた。

思い切って、ファルマやエレンに調剤を頼むもの、健康相談をするものも出始めた。敬語ができなくても不敬罪にはならなかった。それどころか、彼らのほうが平民に敬語で話しかけたので、彼らは非常に気分よく帰っていった。

調剤料は驚くほど安く、子供店主の処方した薬はとりわけよく効いた。

「じゃあ、第3回のアンケート結果を発表しますー！」

ロツテが大発表する。恒例の、異世界薬局に対する市民アンケート発表会だ。

「今回は少し、期待しておりますぞ」

セドリックは両手を組んで祈るようなしぐさをする。

「薬が安くてよく効く 44票」

「かかりつけの薬屋を変えた 39票」

「もっとコスメを生産して欲しい 36票」

「子供店主を見直した 25票」

「色んな飴玉おいしい 15票」

「お水おいしい 10票」

異世界薬局の顧客満足度も、来客数もだんだんと上昇してきている。

コスメ部門に客が集中し、店の前には婦人たちが群がり、ロツテも客を捌ききれなくなつて困つていたところ、侯爵令嬢クロエが、コスメ部門で子会社を作つて、薬局とは別に売つたらどうかしらと提案した。この頃にはクロエはすっかり美白肌になっていた。

「コスメ部門に100%出資するわ。薬師も専属で雇うし、店主はあなたね」

それは、コスメ部門で手が回らなくなっているファルマと、時々化粧品が売り切れになつて悔しい思いをしている彼女のためでもあったようだ。

「それはよい考えです！ セドリックさん、手続きをすすめていこう」

「お任せくださいファルマ様、急いで書類を作成します」

ファルマは賛同して、化粧品の販売をコスメ部門に任せることにした。そしてクロエの雇つた二級薬師を徹底的に教育し、門外不出でレシピを教え、化粧品の調合、販売とスキンケアができるようにした。化粧品の特殊な原料はファルマが与えた。この、原料だけはファルマにしか生産できなかった。

「二級薬師が、よく雇えたわね」

貴族の薬師は、商売を賤業だと決め付けている。だが、そこは侯爵家の権力で何とかしたのだ、とクロエは胸を張った。財産家のよ

うである。

「でも、すごいじゃない！　これで皆が化粧品を買えるわね！　売り切れもないわ！」

エレンが、早くも2号店ができたことに驚いていた。2号店には、エレンはよく顔を出す。監督のためもあるが、自分の化粧品の調達のためだ。得られた利益は、従業員の給料と、本店、2号店の運転資金に使われる。価格は低く設定していたにもかかわらず、それは莫大な利益をうんだ。

「軌道に乗り始めたのかな」

ひとまず、ほっと胸をなでおろすファルマだった。

こうして異世界薬局のコスメ部門に特化した2号店を出し、まるで天上のコスメ！　と巷で評判のコスメブランド、メイーク（MEIQUE）が創設されたのである。

ブランドパッケージにはMの紋章と、勅許店である印の王冠マークが刻んである。

ちなみに、ファルマが皇帝陛下へ進言したことによって、皇帝の名のもとに、鉛白や水銀、その他の指定有害物質を用いた製品が帝国全土の薬店で販売禁止となったのは、これからほどなくのことである。

## 2章3話 フツ素とキシリトールでオーラルケアを

「ふむ？ …… まずはこれを塗るのか」

鏡を前に、彼女は興味深そうにクリームを手にとった。

「はい、薄く満遍なくお顔に塗ってください。次に、これを。粉ははたかなくても結構です。全体をカバーするように」

卵のような肌に、熱心にパウダーを塗ってゆく。

「5歳は肌の質感が若返りますよ！」

「ときに、ファルマよ。今後、MEDIQUEの新製品は、余への献上物としてまっさきに持ってまいれ」

ルースパウダーを最高級化粧筆で顔に塗りながら、サン・フルーヴ皇帝、エリザベートII世はちくりと釘をさした。

「ははーっ！」

（ああ、皇帝で帝国最強の神術使いとはいえまだ24歳の女性だもんな。ファッションの流行にも敏感だよな）

ファルマは納得する。そこで捻り出した言い訳は、

「陛下は素肌がお美しいので、おしろいなど不要かと思ひまして」

「ははは、そなたの言い訳は齒が浮いておるぞ」

女帝は宝石のちりばめられた高級扇子で優雅に顔を仰ぎながら、

気をよくしたようだ。

『帝国出資の勅許店なのだぞ、発明品は一番に陛下に献上に行ったのだから？』

『えっ！？』

今朝、父とそんなやり取りがあり、ファルマは慌てて女帝に上納しにきたというわけだった。考えてもみれば、珍しい流行りものはコスメブランド2号店を出店する前に陛下に献上すべきだった。今日も女帝の傍に控えた小姓の少年、ノアの口がバーカ、と動いていた。女帝は機嫌よくすべすと頬を撫でながら、鏡から目を離せない。

「うむ……これは素晴らしい！ 次の夜会にはこれで出るぞ。婦女どもに差をつけるのだ」

貴婦人たちも軒並み製品を買ってるから、差はつかないんじゃないかな、とファルマは申し訳ない。もともと女帝は美女だし、女帝への献上用に美容成分をいくつか足しておいたので、それで献上が遅れたことは許して欲しいと恐縮するファルマである。さらにご機嫌取りの材料はある。

「お肌にやさしい薬用口紅もご用意してございます、これは新製品です。これは陛下に一番にお試しいただきたく」

「おお、何だこの輝きは」

ファルマの原案をもとにコスメブランドMEDIQUEの薬師たちと新しく共同開発した薬用リップグロスだ。自然な発色とパール  
の輝き。のっぺりしたのりの悪い紅色とは違う。

「うむ、よいな」

お気に召したようだった。

「陛下、鉛と水銀、その他有害物質の、人体へ使用する製品への規制をありがとうございます」

献上が終わり、ファルマは改めて勅令発布について礼をのべる。ファルマがただちに禁止すべき薬品のリストを作成し、父を通して上申したのだ。女帝の行動力は相変わらずだった。女帝は神力計から、父ブリュノは薬学知識から、それぞれファルマが人智を超えた神がかり的存在なのではないかとうすうす勘付きはじめていて、ファルマの言葉を無下にできなくなったのである。ちなみに、女帝もブリュノも、ファルマに影がないということはまだ気づいていなかった。

「驚いたぞ、あれらが毒だったとは。水銀も鉛も、多くの市販されている薬の中に入っているはずだ」

「おっしゃるとおりです」

「宮廷内で侍女たちが用いていたものはすべて廃棄させよう」  
「それがよろしいかと」

ファルマは進言する。宮廷では、侍女だけでなく乳幼児も毒物まみれの化粧をしているのだ。安全性を考えれば、即刻禁止すべきだった。

「一方、そなたの店の化粧品ブランド、メディアーク MEDIQUEは好調のようだな」

「おかげをもちまして、業績好調でございます、ですが……」



それについては、少々困ったことになっていた。化粧品は香水や石鹸を売る店の取り扱いだったので、一番のライバルである薬師ギルドからの反発はなかった。だが、

「みなまで言うな。化粧品商からは規制緩和の嘆願が毎日のように届いておる。彼らも切実なのだ」

鉛白と水銀を含む製品を禁止したことで、従来品を扱っていた業者が阿鼻叫喚となるのは予想できたことだった。ただ有害成分を抜いただけでは粉っぽくてばさばさした、さほど白くもないおしろいになる。とても商品にならなかった。

「化粧品商には補償金を出しておるが、そなたの生産した化粧品で寡占状態になるのは好ましくない。また、関連業界が大量に倒産されるのも困る。競争は好ましいものだ」

女帝は脳筋思考なわりに、政治感覚はまともだった。

「はい。生産技術の一部、陛下にお預けしますので開示をお願いしたく存じます。また、水銀や鉛白を利用したほかの工業製品の製造法を立案いたします。その安全な取扱いにつきましても、注意事項をまとめます」

ファルマは、UVカット技術のみを企業秘密として、おしろい、基礎化粧品、石鹸のレシピを公開すると約束した。そのレシピを、ファルマの名前は表に出さず女帝の名で公開してもらう。

「それから、何とかして化粧品の価格を上げよ。よいものを叩き売られたのでは、ほかの業者が死ぬ」

ダンピングまがい、とまではいかないが、高く売っていた同業者が倒産する価格ではある。強者である貴族が、弱者である平民を踏みにじるでないぞ、と女帝は指導してくる。

「承知いたしました。化粧品にランクを設けて価格設定いたしましたよう」

それでも業者が瀕死になることが予想されたので、MEDIQUE（異世界薬局のコスメブランド）の利益の一部を、化粧品業者救済のための基金にした。

生存か、撤退か。

各業者は生き残りをかけて新しいおしろいの開発に着手、先駆者であるMEDIQUEの薬師たちの指導のもと、パウダーファンデーション、リキッドファンデーションを生産しはじめた。MEDIQUEのCCクリームとルースパウダーの商品品質には太刀打ちできなかったが、それでも人によってコスメブランドの好み、美容成分、香りの好みがあるように、多種多様なおしろいが生産されはじめ、MEDIQUEより価格を落として廉価販売しはじめた業者も現れた。美容成分の配合には各業者、ハーブなどを配合して工夫をこらし差別化した。従来のように透明感のないのっぺりとした仕上がりをおむ保守的な貴族も多かった。

一方で、基礎化粧品の生産を撤退し、香水などに力をいれる業者もちらほらいた。

こうして、MEDIQUEの独占状態は一応回避された。また、平民が化粧品を使うようになったことから、市場は拡大の一途をたどっている。

さて、行き場のなくなった水銀や鉛白はどうしたかというところ。手

に触れたらすぐに洗い流すことを前提で、油彩用顔料に使うとよく発色するという指南を女帝に出してもらった。

その他の毒物は、工業用に限られた用途があることを教えた。

このころ、正体が分からないながら、女帝が側近に賢者を召し抱え、賢者が女帝に様々な助言をしているらしい、という噂がたちはじめた。

しかし、彼らはそれが誰なのか突き止められなかった。

まさか、異世界薬局の子ども店主が政治の枢要部に入り込んでいるとは、誰も思わなかったのだ。子ども店主は、高名な宮廷薬師である父が発明したもの、父の知識を商品化して売っているだけだ、と依然として思われていた。一度でもファルマの処方を受けた者は、「もしかして、彼が」とは思ったようだが……。

そんなある日、ファルマはいつものように女帝の診察をしたのち、女帝の皇子ルイも診察していた。診眼を発動すると、口の中に青い光がぼつぼつともって見える。

あー……、とファルマは微妙な顔になった。そして恐る恐る心の中で呟く。

「  
”齲蝕”」  
」

青色光は消えた。ファルマが先送りしていた問題。

虫歯、う蝕だ。

この世界では砂糖が貴重品で、砂糖が原因となる虫歯をわずらっている人間は平民では少なかった。しかし、貴族は甘いお菓子を食べる機会が多い。いわば、虫歯は王侯貴族のステータスともいえた。ファルマは毎日歯磨きを怠っていないのでまだ虫歯はないが、歯磨きの重要性を知らない貴族は多かった。

ちなみに、虫歯をわずらっていた家令のシモンは、ついに神経の痛みがきたので歯を抜いたらしい。進行しすぎた虫歯については、ファルマは無力だ。

「殿下は甘いものが好きなのに、歯磨きがお嫌いであらうから」

ノアが、困ったような顔をしていた。不幸中の幸いは、虫歯のある歯が乳歯であるということ。皇子は6歳、抜け替わる時期まで歯がもてばいい。

ビリヤードの遊びに付き合うふりをして、ファルマはルイに話を切り出す。

「殿下、食べ物を食べたときに、歯がしめたり、歯が痛かったりしませんか」

「いや、特にないぞ」

その程度か、軽そうだな、とファルマは見積もる。ビリヤードを終えて、飴を口にしようとする皇子をファルマはとどめた。フルーツ味の飴玉は皇子の好物だ。

「殿下、お口を大きく開けていただけませんか」

ファルマの言葉に、身構える皇子。

「虫歯がある可能性が」

「やめろおおーっ！っ！」

皇子は話を聞かず、あわてふためきながら逃げ出した。

「殿下を捕獲してくる！」

全力ダツシュで駆けてゆく皇子の後を追うノアの後を、さらに廷臣たちが追いかけてゆく。にぎやかなことこの上ない。ノアは、「殿下を追え！ 殿下の虫歯の治療だ！」と叫び廷臣をけしかけた。コントみたいだな、とファルマは圧倒される。日常茶飯事のような。そして宮廷内で大捕物劇が始まった。歯を抜かれてなるものかと、皇子は必死の抵抗を見せた。

「いたか！」「いらつしやらないぞ！」「宮廷を抜け出したのでは！」

噴水の陰に隠れたり、彫刻になり済ましてみたり、植え込みに隠れてみたり。くたびれ果てたルイがとうとう足を滑らせて床で転び、彼の前に立ちはだかったのはファルマだった。

「うつつ、もはやこれまでか！ むねん！」

首級でも取られるかといった一言を発する皇子。

「殿下、お口の中を見せてください。今日は抜きませんから」

ファルマがそう言って約束すると同時のタイミングで、

「殿下、お覚悟を。なにやら騒々しいと思えば、虫歯ですか。私が上手に抜いてさしあげましょう。なあに、すぐにすみます」

どこから聞きつけたか侍医長クロードが、ペンチを持って近づいてきた。抜歯にかけては、自信があるらしい。

「嫌だああーーーー！」

ルイはファルマの背後に回りこんでガタガタ震えている。

「侍医長様。殿下の治療は、今回は私にお任せください」

ファルマが、両手を前にかざしてクロードをなだめる。

「ほう、新人薬師のファルマ君ではないか。ではお手並みを拝見するかな。子供の力で歯は抜けまい」

クロードはそういいながらも、一旦ペンチをおさめることにしたようだ。

ファルマは涙目になっている皇子の口の中をよく観察して、虫歯は黒くなっているがエナメル質にとどまっていることを確認した。

「まだ初期ですので、抜かなくていいかもしれません」

「どんどん進行してゆくぞ。根までいってしまうと、高熱の原因にもなる。命とりになる場合もある」

クロードはなぜ抜かないのだ、と疑わしげな顔になった。

「侍医長様、虫歯の正体は何だと思われませんか？」

ファルマは指をたてて尋ねた。

「それは……あれだ。何だ？」

「それは、糖類を食べて歯を溶かす生物です」

「またあれなのか！」

侍医長は悔しそうな顔をした。

「違う種類ですけどね。顕微鏡で見ると、虫歯は小さな生物への感染症なのだということが分かります」

穴が完全にあいてしまわない早いうちなら、食い止められる気がしてきませんか？　と言うファルマに、侍医長は考えを改めた。

「殿下。明日、虫歯の進行を食い止める薬を準備してまいります」

「抜かなくていいのか？」

皇子が、信じられないというようにファルマを見る。

「ええ、今回は」

翌日、ファルマは薬を用意して宮廷へとやってきた。事情を聞きつけた女帝が、「歯の手入れを怠ったのは自分なのだから、抜けばよいのだ！」などと厳しいことを言っている。女帝は甘いものを殆ど食べないので、虫歯はないようだ。皇子の歯磨きは侍女の仕事だが、皇子が女帝のいないところでは脱走したりわがままを言って、侍女の言う事をきかないことを、女帝はよく知っていた。

「お薬を塗りますね」

皇子は天蓋つき高級ベッドに寝そべりおとなしく口を開け、ファルマに処置を任せる。

初期虫歯は、高濃度のフッ化物を塗ると歯のエナメル質でフルオロapatiteの層を作って再石灰化し、虫歯の進行を抑えることができる。

女帝や侍医団には、虫歯をくいとめて歯を強くする薬です、と説明しておく。

「ほう」

クロードは至近距離から顔を近づけ、疑わしげにファルマの手元を見てメモを取っている。

「今回は抜きません。ですが殿下、次回は抜かなくてはいけないかもしれませんよ」

虫歯部分を削る治療は、歯科の心得のないファルマには難しい。

「うつつ……今日から歯磨きをする！」

皇子はぶるぶると首を横に振った。

「そうおっしゃると思ひまして」

ファルマは我が意を得たりと、がさごそとバッグの中から木箱を取り出す。

「歯のお手入れセットをご用意してまいりました」

この世界では、布や海綿で歯を磨き、爪楊枝で歯の隙間を掃除するのが一般的だ。郷に入ればある程度は郷に従ってきた彼であったが、このたび、よい機会だと思ってオーラルケアセットを作った。

「馬の毛の歯ブラシでございます」



彼がまず取り出したのは歯ブラシ。

ナイロン製の歯ブラシが普及しているが、必ずしもそれがベストというわけではない。日本でも、馬や豚の毛の歯ブラシは売られていた。むしろ、そちらの方が歯茎に優しいというメリットもある。

そして、次々にフッ化物入り歯磨き粉、そしてデンタルフロス、舌クリーナーなどを並べる。皇子に使い方を教えると、彼は熱心に聞いていた。

「ファルマよ、そのセットを余にも献上せんか」

「はっ！ ただちに！」

また女帝への献上を失念して怒られたファルマである。

このセットを、庶民の間に広く普及したいと上申したところ……

女帝は頷き、ゆっくりと首を左右に振った。

（何だ？ キャッチャーサインか？ 配球がまずい?!）

などとファルマが思っていると、

「発明者には利益を享受する権利がある。だが、今回もまた、やりすぎるなよ」

寡占状態にするなよ、という女帝の忠告だった。

「はい、心得ております」

今後も新技術を次々公開してゆく予定がある、というファルマが各業界から反発を買わないよう、女帝は「技術局」を創設させた。技術局で新技術、新発明を一元管理させて、開示要請があれば（企

業秘密となる部分を除いて）開示し、閲覧者は閲覧料を払うのである。技術登録は、匿名でも実名でも行うことができる。ファルマは、顕微鏡、化粧品、そしてフッ化物製品などを、現地の業者のために匿名で登録した。

そして1カ月後、異世界薬局は、「オーラルケアセット」をリリースした。セットのばら売りも用意している。それまで本格的に歯磨きなどしてこなかった人々は、お菓子を好む貴族を中心に飛びついた。虫歯になるたびに歯を抜いて、殆ど歯が残っていない人たちは、残った歯を何とか保たせるためにあの手この手を尽くしていた。

「あのセットは少し高い。もう少しお手ごろなのがほしい」

平民は少しの出費も抑えたいようだ。というわけで、ファルマは廉価版も用意した。江戸時代に使われていた房楊枝（爪楊枝と、その反対側が木のブラシになっている）とフッ化物入り歯磨き、フロスのセットだ。

「これなら、私たちも買える！」

店頭と、そしてMEDIQUEではブラッシング講座と口腔衛生講座が開かれた。講座は大盛況で、連日の満員となった。ファルマが教えるのではなく、エレンに教えて講座を開かせた。ファルマはあくまで、この世界での薬師としての本業である診断、処方、調剤に専念したかったからだ。

店頭で入りきらない人たちのために、エリザベートが宮殿広場を自由に使っているというので、虫歯予防の講習の催しを行った。暇な市民がお祭り感覚で押しかけた。

こうして、平民たちがオーラルケアセットを買い求めたものだから、多くの業者が追隨して後発品を作るようになった。

正しいブラッシングを知る事によって、人々の意識は変わっていった。肺炎などの感染症を予防することもできると聞いて、特に熱心にやりはじめた。

ところで、皇子はというと。女帝の言いつけで、甘いものを我慢させられていた。

「甘いものは暫く我慢しないと。ああ、でも、食べたい……」

そんな皇子の悩みを解決するのに、ファルマに良案が浮かんだ。虫歯にならないキシリトール入りキャンディである。

これもまた、匿名で技術局に登録した。

「虫歯になる砂糖はほとんど含まれていないのです。虫歯になりにくいですよ」

「甘いのか!？」

「ちなみに、食べ過ぎるとくだしますが」

皇子は独特の清涼感のあるそのキャンディを、いたく気に入ったという。

余談だが、薬局常連のジャン老人も、船乗りの飴（キシリトール配合）を好んで食べるようになった。

## 2章3話 フッ素とキシリトールでオーラルケアを（後書き）

### 【謝辞】

現役歯科医のROKI先生に、本頁の査読をしていただきました。  
先生本当にありがとうございます。

## 2章4話 マーセイル領視察と、医薬の未来

「うむ、着いたな」

潮騒の音が聞こえていた。

父ブリュノ、母ベアトリス、妹ブランシュらは、待ちかねたといった様子で馬車から降りる。最後に、ファルマも。からりとした空気を吸って深呼吸をし、石灰質の土を踏みしめる。そこへ飛び込んできたのは、西中海。

帝都よりおよそ一日の馬車の旅で、マーセイル尊爵領に到着したのだ。

真紀元 1146年、異世界薬局創業から半年がたち、ファルマは11歳になっていた。

ド・メディシス家の家族と従者ら一行の前に広がるのは、360度の大パノラマ。

真っ白な山肌とビーチ、海の青が目映え、それらは鮮やかなコントラストをつくっている。海岸沿いには山肌に沿って外壁を真っ白に塗った赤い屋根の、石造りの家々の漁村も点在していた。エメラルドグリーンの海はせわしく貿易船が行きかっている。大きな貿易港に船が停泊しているのが見える。まさに南仏を彷彿とさせる景觀だった。

「お待ちしておりました、新マーセイル尊爵様」

「うむ、しっかりやっておるか、アダムよ。また日に焼けたな」

「は、日夜領地巡回を怠っておりませんので」

ブリュノは、出迎えに来たブリュノの執事（代行領主）アダム、

領地差配人、農民監督官、騎士たちの仰々しい挨拶を受け、高台の領主館に招き入れられ歓待を受けていた。ファルマたちも領主館で軽い食事などを振舞われもてなされる。

ブリュノは在地領主ではないので、マーセイル領は、有能なド・メデイシス家の執事（家令より格下）の一人、若い行儀見習いのアダムを代行領主として着任させて支配させていた。

ほりの深い顔立ちをした浅黒い肌のこげ茶色の髪 of 男だ。ヒスパニック系だろうか、などとファルマはアダムにそんな印象を受ける。

「領地には、21の村、47人の騎士と、635名の農民、938名の薬草生産者がおりまして……」

「領地の俯瞰地図でございます。ここからここが、薬草生産地になりまして、農地と牧草地はこちらで。各地区の生産高はこちらに」「賦役、兵役の際は村ごとに持ち回りで……」

などなど、アダムはてきぱきと資料を見せながらブリュノに報告をする。プレゼン練習を念入りしてきたようだった。緊張しているようだ。

「港はどうなっている」

ブリュノが髭をいじりながら、マーセイル港をさす。

そこは14の航路、31カ国の国と3の植民地の港と連絡する、帝都へと抜ける玄関港の一つだ。

「はっ、マーセイル港はご存知のとおり帝国で二番目の貿易高を誇る貿易港でございます、貿易高は前年とその前年のもの、貿易相手先国上位10カ国の年別推移、輸出入の推移をこちらに」

「ふむ。悪くない。貿易高も税収も増益している」

「なのですが、ここ最近、ネデル国東イドン会社が幅をきかせて

おります。以前は候爵領だったのですが尊爵領になったので、少しは分を弁えてくれるとよいのですが。ネデル国の特許会社であるがゆえに、条約締結権、交戦権を盾に、税の徴収などに応じない例もありまして」

「貿易は、自由にやらせるのが好ましい。関税率は引き下げる。それでもあまり好き勝手やるようだったら追い払え」

「よろしいので？」

「関税率を下げれば、人も物も流れてくる。物流は……ってファルマ、まだいたのか。外で遊んできなさい、砂浜は素晴らしいぞ」

ブリュノは壁と一体化して気配を消しじつと立ち聞きをしていたファルマに気づいた。警戒したのか、外へと追い払う。

「わー、海、見てきます！」

そう言われては、子供らしくはしゃぎながら外へ出ていくしかなかった。

「海には入るなよ！」

「はいー！」

（ネデル国東イドン会社……オランダ東インド会社（V・O・C）をもじりまくってないか……？）

ファルマはいよいよ、元の世界との地理的な共通性を疑わざるをえなかった。

中世欧州風の世界なのだから気にしたら負けのような気もするが、どうしても引っかかりを覚えるのだ。

「ああ、きれい過ぎて目が眩みそうですっ！ ブランシュお嬢様

もそう思われますか!？」

「さらさらー!　さらさらー!」

ブリュノに追い出されたファルマが高台の領主館から外へ出てみると、ロツテと、ブランシュが、眼下の白いビーチを見て大はしゃぎしていた。丘を駆け下りていって、砂浜の上で二人でくるくるとダンスステップを踏んでいる。

（子供だな、二人とも）

ファルマは微笑ましく思った。

（俺も子供か）

案の定というか、ブランシュはどてつとこけて、顔中砂だらけになっている。

「お嬢様!　砂でお城作りましょう!」

潮の香りのする乾いた海風が、気持ちよく吹き抜けていた。ロツテのピンク色の髪を、風がふわりとさらってたなびかせる。ファルマもビーチへと降りていった。ロツテは上手に2階だての城をつくる。途中で壊してしまったブランシュは、指をくわえてロツテを見ていたが、

「兄上ー!　あそこではしゃばしゃしたい!」

ブランシュは砂遊びには飽きたようで、ファルマの服の裾をひっぱる。



「ファルマ様、波を見てきていいですか!？」

ロツテはその場でぴょんぴょん跳ねてそわそわしていた。海に飛び込む前の準備運動でもしているんだろうか、とファルマは思う。

「海に入らないほうがいいと思うよ。二人とも泳げないから。あと、着替えある?」

しかし、二人とも靴を脱ぎ砂浜へと猛ダッシュをしていった。

「ロツテちゃんたら、あんなにはしゃいで。海を見た事がないんだから……」

同行してやってきたエレンは微笑んで、上着を脱ぎ、木陰で飲み物を飲みながら休んでいる。

「あつつい。汗かいちゃう。水浴びでもしようかしら」

ロツテとブランシュは無我夢中で波を追いかけたり、ビーチに足跡をつけて喜んでいる。

エレンは水着代わりにストンとした、透けたチュニッケー一枚になる。生足が目の前に惜しげもなく出てきて、ファルマは戸惑った。エレンは透けていることに気づかないのだろう、体のラインがはっきりと見えて目のやり場に困る。

「ファルマ君もおいで!」

彼女たちは汀で波と戯れていた。近くで見物していたファルマも、ブランシュに「えーい!」と水をかけられて乱入し、水かけ合戦になる。

「はあっ、あはは、おかしいっ！」

「えーい！」

「やりましたね、ブランシュお嬢様！」

その時だった、不意にひととき大きな波が打ち寄せ、一番体重の軽く踏ん張りのきかなかったブランシュが波にさらわれて海中に消えていった。

「大変っ！」

ファルマはエレンとロッテに砂浜に上がるよう指示をし、海へと飛び込んだ。しかし波は高く、小さなブランシュの姿は見当たらない。

「ファルマ君っ！」

エレンも、ロッテの無事を確認すると、いてもたってもいられずファルマを追う。水の神術使いであるエレンは、貴族としては珍しく水泳ができるが、同じ水の神術使いである幼いブランシュは訓練していないのでできない。

ファルマは、意識を失ったまま潮の流れに流されてゆくブランシュの姿を見つけた。泳いで近づこうとするも、風が吹いて潮流は速い。どんどん彼女は遠ざかってゆく。泳いでは追いつかない。

（どうすればいい！）

ファルマは、水をかく右腕の痣が疼くのを感じた。  
興奮したからだろうか、薄く青く発光している。

（やってみるか……！？）

彼は決意した。そしてできるだけ海底へともぐる。

底が深ければ断念するが、幸いビーチは遠浅だ、だから……！

”消去”

水と海水の状態を脳裏に詳細にイメージし、その肌に水の質感を  
テクスチャ  
感じ、水溶液を握りこむ。

手加減をしながら、ファルマは右手の能力を発動させる。

全力でやると海ごと消してしまうかもしれない、と馬鹿な考えが  
よぎった。

すると、ファルマのイメージは具現化され、彼を中心に半径10  
メートル程度の範囲の海水が消え、ファルマは穴の開いた海底の砂  
浜に叩きつけられた。最初はクレーター状に穴があき、そして円柱  
状に水のない領域が海中に穿たれた。

むき出しになった海底の砂浜の上には、魚たちがぴちぴちとた  
うって、海藻はしんなりと横たわっている。

（できた……！ 何だこりゃ！？）

自分でやっておいてなんだが、これは異常だ、とファルマは驚愕  
する。

ファルマは倒れているブランシュを担ぎあげると、陸をめざし歩  
きはじめた。進路に立ち塞がる海水を神力の壁で隔てて流入を防ぐ  
ように、消去してゆきながら。彼は一步步歩いて、海を割りなが  
ら砂浜に戻ってきた。

その姿は海を割るモーセのようだ、と地球人と言ったかもしれ  
ない。

砂浜に横たえると、ブランシュは何度か水を吐いた。

「ブランシュちゃん……！」

エレンとファルマ、二人がかりで処置にうつる。人工呼吸をする前にブランシュは息を吹き返し、大泣きをした。ファルマは気を休めず、診眼で異常がないかを診る。肺水腫になる可能性があるからだ、幸い、水は殆ど飲んでいなかった。

（よかった……子供の体じゃ、泳いで救命なんて無理だった）

ファルマは安堵して気が抜け、砂浜に腰を下ろす。ロツテが、一連の出来事を目撃して、恐ろしさのあまりガタガタと震えていた。ブランシュはファルマに飛びついて号泣した。

しかしファルマは、あることに気づいた。

（あれ、水を消去したのに、海底に塩が析出してなかったな。俺、水分子だけ消さなかったっけ）

そういえば、焦りのあまり、「水分子」と指定をしなかったかもしれない。定かではないが、あれだけの海水を消したのだ、大量の塩やミネラルが海底に析出して当然である。それが海底に堆積していなかったということは……。

（まさか、塩分含めて海水まるごと消したのか）

「ファルマ君。もしかしてと思うけど、今のはあなたが”負”属性だと思っている能力？」

エレンが恐る恐る尋ねる。

「だと思っけど。エレンもそう判定しただろう？」

「勘違いだわ。あんなにくつきり、海を消せる能力なんて存在しないの。負属性は量を減らせる、ぐらいの能力なのよ。領域ごと物質を消せる、ではないの」

エレンはファルマとともに神術を訓練してきたが、負の能力の発動を目撃したことがなかった。孤島のいくつかを消し飛ばしたのは、水の正属性で島を水没させてしまったからで、負の属性は初めてである。なので彼女の表情はひきつっていた。

そしてますます、ファルマ人外説への確信を深めたようだった。

「なんか、説明できればいいんだけど、俺も自分のことよくわかってなくてごめん」

「でも、あなたがいたから助かったわ」

ファルマが消した海水の痕跡は今とはあとかたもなく、海原には巨大な潮の渦だけが残った。

それを丘から見ていた、小さな黒い影があった。

< i 1 5 8 9 3 9 — 2 4 9 6 >

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

翌日、ファルマは父に連れられ、同行したセドリックや従者の騎士たちと共に、3台の馬車に乗り、領主館から一番近い薬草生産地帯を視察した。区画化された耕地には、数々の薬草が植えられている。農夫たちが薬草畑で働いており、新領主とその公子に恭しく挨拶をしにくる。

「薬草の生産は順調か」

「へ、へえ。例年通りの年貢を納めますんで」

領主が直接視察に来るのはよほど珍しいのか、小作人たちは恐縮しきっていた。

「それはよろしい。しっかりと励んでくれ。セドリック」

「はい、旦那様」

杖をついて馬車を下りてきたセドリックが袖をまくり、両手を土の上につけた。ふん、と軽く気合を入れると、彼の手が暖かな橙色の光を発する。

”地母神の祝福 (Bénédiction de la terre nourricière)”

同心円を描くように土がぼこぼこ連鎖的に隆起してゆく。

「えっと、もしかして」

ファルマはその波動が地上を通り過ぎ、勘付いた。

「ファルマ、まさかお前は忘れたのか？」

「ははは、ファルマ様の前ではお見せしなかったもので、お忘れにもなりましょう。私は土属性の神術使いでございますのでな。ただいま、大地に地母神の祝福を与えました」

セドリック・リュノーもれっきとした神術使いである。

「わが屋敷の薬草園の発育促進の大事な任務は、彼に一任しておつた」

「なるほど」

薬草園から肥料のにおいがせず、薬草が驚くべきスピードで生育してゆくのは、そういうことだったのか、とファルマは驚く。何か施肥が行われているのだろうとは思っていたが……。

小作人たちはセドリックに感謝して、やれ、これで仕事が楽になります。今年は豊作間違いなしでしょう、などと樂觀的なことを言っている。土属性の貴族は少なく、重宝されているとのことだった。

「ほかには何か問題があるか？」

と、ブリュノが彼らに問う。

「今年は、やや雨が少なく乾燥しております」

「そうか」

「ではこれは私からそなたらへの贈り物だ」

父が土の上に杖で簡易的な神術陣形を描き、その上で怪しげな舞踏を舞うと、父の体全体に蜃気楼のようなもやが立ちこめる。

”癒しの慈雨 (Douchesymphathique de g  
uérison)”

そうして彼が杖をひと振りすれば、彼の神技は雨雲を呼び大地に恵みをもたらした。薬草に活力を与え、薬草が本来持つ効果を強く引き出すのだそうだ。父は舞踏を踊ると神力と神技の効果が強化されるという、類まれな能力の持ち主だった。父が神術をかけた薬草は、高値で取引されるという。

「これで、よかるう」

父が雨を降らせる姿に、ファルマは見入られていた。まさに神技だ。

「ありがとうございます、領主様！」

農民たちは飛び上がって、恵みの雨に感謝し、歌い踊った。

（神術の効果についても、検証していかないと）

神術がある世界なのだ、それを薬学にどう応用できるかを、そろそろ考えていかなければならない。神術にファルマの未知の効果があるのなら、それを利用しない手はない。

神術で生成した水に医薬品を溶かすと、治療効果が高まるのだ。それを父の知見をもとに気付かされた。父は優れた神術使いであるから、薬草との組み合わせで治療効果の高いポジションを生み出していた。

神術というのは、対象の物性、性質、結果を高めるのではないかと漠然とそんな仮説を立てた。

優しい雨が上がったあとには、神力を含んだ鮮やかな虹が大きなアーチを描いていた。

「あれを見なさい」

父がひと踊りし終えて上着を着終わると、父はファルマを呼んで反対側の土地を指さした。父が指したのは農地ではない、かつての牧草地であったと思われる更の土地だ。平地で、広大で、日当たりがよく、ひらけていた。その土地は、街道に面している。



「さて、向うにアダムに見繕わせた一等地がある」

「はい。よい土地ですね」

「薬草生産地のほかに、あそこをお前にやろう。お前ならば何をする？」

薬草園をつくるか？ とブリュノは問いかけたが、それはすでに生産農家から買い付けてくるだけ、新種の苗は栽培を依頼するで事足りる。現地の産業を生かしながら、さらなる雇用を創出してゆく。この一等地で、今後のために何をするか。この異世界の人々のために、何ができるか。そう考えたときに、ファルマの答えはおのずと見えてきた。

それは抜本的なことでなければいけない。

「私なら、製薬研究所、あるいは製薬工場を建設し、医薬品供給のための研究、生産拠点とします」

製薬工場を造り、領民を雇用して医薬品の生産体制を整え、それを帝都へ輸送する。異世界薬局のみならず、各薬局薬店へも販売をしかけてゆく。

「何故そうしようと思うのだ、薬局の利益はすでに充分に出ておるだろう。まだ稼ぐつもりなのか」

「利益のためではありません。私がいなくなった後も、この世界の人々が助かる病気で苦しまないように、適切な治療を受けられるようにしておきたいと思っています」

息子の姿を借りて、薬神の事業が始まろうとしている。  
世界の変わりゆく兆しを、ブリュノは強く感じていた。

「まるで、何百年か先の医療を見てきたかのような」  
ブリュノがファルマへ投げかけた言葉は、突風と草原のさざめき  
の中へ消えた。

「思うようにやってみなさい。私はあらゆる力を貸す」

息子は燦々と太陽の照り返しを受ける更地を見ながら、ありがと  
うございます、と力強く頷いた。

## 2章5話 銀と、青の伯爵

マーセイルの尊爵領内の視察は続く。

昼はブリュノのあとについて熱心に領民たちの話を聞き、ときにブリュノが神術で力を貸すのを見学し、夜は領民から貢がれた各地の特産品を食べ、食っちゃ視察食っちゃ視察の充実した逗留生活をしながら数日が経った。

そんなある日。

午後になって、領主館で過ごすファルマ達にブリュノから急な通達があった。ブリュノが言うには、

「急遽、今宵シヨン伯爵の屋敷に招かれた。家族と従者も一緒に来ていいそうだ」

シヨン伯爵とは、マーセイル領のすぐ隣の領地シヨンを支配している若い領主だ。

ブリュノは食事を兼ねて、領主代行である執事アダムを紹介するために顔合わせをしておきたいという。

「いつてらっしゃいませ！」

ロツテはお出かけと聞いて、笑顔で送り出そうとする。

「ロツテちゃんも行くのよ」

エレンに苦笑される。

「ええっ、私も行っていいんですか？ 召使ですけど！ いいんで

すか？」

「こういうときは、誰であろうが従者も全員招かれるものなのよ。さあ、おめかししましょうね」

晩餐会というのは、どれだけ領主の懐が広く羽振りがよいかを試される社交の場でもある。

どんなお料理とデザートが食べられるらうと、ロツテはおなかをすかせ、妄想を膨らませている。思わずよだれが垂れそうになっ  
ていて、じゅるりと口を押さえていた。

「はわわわ！ 私ったら。どうしよう、晩餐会に着ていく服がありませんっ」

「ではこれを着ていきなさい。ブランシュに買ったのだけど、まだ大きいのよ」

「いいんですか!？」

ロツテは、ファルマの母ベアトリスからプレゼントされた一張羅のドレスを身に纏い、有頂天になっていた。

「わあっ、奥方様、ありがとうございます!」

「でも……行ってもいいのかしら」

今度は、エレンが眼鏡をずらし、鏡に顔を近づけてMEDIQU  
Eの化粧品でメイクをしながら、ぽつりと、不穏な言葉を漏らした。

「ん？ 何で？ エレンも来ていいと思うよ」

怯えた様子のエレンに、ロツテに服装を整えてもらったファルマが振り返る。

「あの伯爵、よい噂を聞かないのよ。毒を盛られたりしないかしら」  
「ええっ!？」

ロツテがひいつ、と頬を押さえて肩をすくめているので、ファルマは安心をさせるように、

「毒は盛られたら分かるから、心配しなくていいよ」

一級薬師、宮廷薬師一行に毒を盛るなど、下策にもほどがある。

若きシヨン伯は、青の伯爵(Comte bleu)という異名がある。何度も結婚しながら、妻たちはひと月もたたないうちに失踪してしまうのだ。それだけではないのよ、とエレンはファルマに顔を近づけて、メガネをくいつとやる。彼女が、発言を強調したいときにやる癖だった。

「噂では、城内には開かずの間があるらしいの。そこに殺された妻たちの……人影が見えたっていう使用人の話もあるのよ」  
「詳しいんだなあ、エレン」

どう考えてもデマだとファルマは思うのだが。

「そりゃあ、もう。エレンさんはお役立ち情報からつまらない情報まで、色んな情報を仕入れているわよ」

大人の淑女ぶりたい年頃のエレン。エレンも一級薬師とはいえ淑女だ。定期的に開催される舞踏会などの上流貴族の社交の場で、情報交換をしているようだった。今日も、夜会用の露出度の高いドレスで胸元がばっちり強調されている。

殺された妻たちの人影……と聞いてファルマは冷や汗をかいた。  
というのも、

（エピソードが青ひげっばいな……妻がいなくなったり、地下の小部屋とか）

聞いた事がある話だな、とファルマは微妙な心境である。グリム童話の（La Barbe Bleue）に似ているのだ、偶然だ  
と思いたいが。

「それにね、伯はものすごく肌が青いという噂なのよ」

エレンがオシャレ眼鏡をかけて、反対側の手で髪をかきあげヘア  
アレンジを作る。そのしぐさは、妙に色っぽく見えた。

「血の気がないということ？」

「誰が色気がないよ」

むきー、としかめつらをするエレン。

「血の気って言ったよ、俺!？」

冤罪もいいところである。

「あら、空耳だったのね。顔色が青いの、青ざめているとかそんな  
んじゃないくて、青」

「まさか！ 噂だよ」

などと、ファルマはあまり気にしていなかった。

ド・メディシス家の12台の馬車と騎士たちが、湖の中の伯爵の

城に着いたのは、夕暮れのころだった。湖を利用した壕、高い石の城壁に砦、城門に高い塔などを備えた、シンプルだが機能的な城である。

大広間で催された晩餐会は、贅を尽くしたものとなった。形の揃った銀の食器が出され、高級なワインがいくつもあけられ、牛や羊、豚などのロースト肉が気前よくふるまわれ、次々と凝った料理が運ばれてくる。曲芸師やハープ奏者、踊り子などがファルマたちの目や耳を楽しませる。

それだけであれば豪勢な晩餐会、なのだが。

エレンの言う事は正しかった。

伯爵の顔色は、それほど明るくない照明でもわかるほどに青かった。ロツテはあまり気にならないらしく、一番隅の席で、ものすごいスピードで料理を平らげてゆく。テーブルマナーはしっかりと叩き込まれているが、食べるペースが速すぎた。普段口には入らないおもてなし料理は美味というほかになかった、と大きなおなかをさすりながら、後にロツテは語る。

宴の席に、伯爵の妻はいなかった。

「ほら……やっぱり。新しい奥さんも殺されたのよ」

エレンが小声でファルマに耳打ちをする。

ブリュノは素知らぬ顔で、ワインや料理を嗜みながら伯爵と会話をする。領主代任のアダムを紹介し、マーセイル領経営の段取りを話す。薬草生産に力を入れてゆくこと。マーセイル港の貿易黒字を堅調に維持してゆきたいこと。まだ計画段階ではあるが、創薬研究拠点を造る予定があるということを、言葉たくみに伝えた。

「ほう、創薬研究所を、マーセイル領に？ 大学の研究施設があるのでは」

「薬草園も研究所も、帝都ではやや手狭ですのよな」

ファルマの提案でそうするのだ、とはブリュノは言わなかった。ファルマが画策しているというより、尊爵であるブリュノに表に立つてもらった方が、なにかと丸く収まる。それを、ブリュノはファルマと話してよく心得ていた。その後は雑談などを交わし、ブリュノと伯爵も楽団の音楽鑑賞などを楽しんでいたが、酒の酔いも回って、ついに伯爵はブリュノに健康相談をしはじめた。

「尊爵閣下に、折り入ってご相談があるのですが」  
「診察の話ですか」

ブリュノは診察を依頼されない限り、王侯貴族だろうが診ないことにしている。

「年々、肌が青くなってきたいて、困っております」  
「確かに、青いようすな。医者にはかかっておられるのですか」

ブリュノは断定する。社交辞令を言っても患者のためにならない。

「医者にはかかっているのです」

（青いというより、銀色だ……銀でも飲んだか）

ファルマは彼らのやり取りを注視しながら、少し離れた場所から診眼で伯爵を診る。そつと眼に手を添える。伯爵は全身が青い光を放っていた。予想したとおりだ。

「銀皮症」

青色光は消えたが、ぼうつと薄赤い光がもった。



通常、診断後は白い光が残るのだが、今日は様子が違う。

（赤！？）

ファルマは身構える。銀皮症には特効薬というものがない。だが、少しでも有効と思われる、ありったけの薬剤の名を言ってみる。それに加え、溶媒にはファルマがこれまで極力避けてきた、神術で生成した水も加えてみる。それでも赤い光は少し薄くはなるものの、ほぼ変化しなかった。

（治療できる薬が、ない？ 生成水で溶かしてもだめか！ くそっ、レーザーが使えれば）

この場に治療薬が存在しない。そういうときに赤い光になるのだと、ファルマは知った。無慈悲な宣告である。現代医学でも治せなかった病気はいくらでもある。そういう疾患を駆逐してゆくのが生前のファルマの仕事であり、ライフワークだった。

一度体内に入り込んでしまった銀は、体内に蓄積して、そう簡単には外に出てゆかない。

「私はどうなってしまうのでしょうか。領民からも恐れられ、私は外へでることもままなりません。この外見のためか、あらぬ噂も立てられて……医者には外に出て日光を浴びると言われるのですが」

伯爵はとうとうブリュノに泣きごとを言っていた。

「私の知見によりますと、全身が青くなった人は過去にもいました。が、それ自体はそこまで害を及ぼさない。それで寿命が縮んだというものでもありません。長生きした人もいます。あくまで、美容の問題です。美容のためには、日光にはあまり長く当たらないほうが

よろしい、青みが増すので」

（すごいな、ブリュノさんの知見。俺とほぼ同じ見たてだ）

ファルマは以前にもまして感心する。ファルマは、このブリュノのもとに転生して恵まれていた、と心の底から感謝する。ブリュノは、観察した事象の中から真実を見抜く目と、野生的なカンを持っているようだった。

「よい化粧品があるので、それでごまかすこともできましょう」

そしてちゃっかり、MEDIQUEの化粧品を薦めていた。

（までよ……あのときの能力でいけるんじゃないか）

ファルマは”正”の能力は検証し知見を積み重ねてきたが、”負”の能力についてそれほど能力を試したわけではない。先日、ファルマが海水を一定領域ごと消したということは、塩分もミネラルもそして水も、すべて消したということに他ならない。それは何だったのか。

ファルマは確かめたくなった。そつと、大広間の隅に置かれていた桶へ近づく。中に水を張り、左手で創出した塩と砂鉄を沈める。

水に溶ける塩と、溶けない鉄の実験系を作ったのだ。

塩は水溶させ、砂鉄は不溶なので沈む。モデルと構造式は単純な方がいい。簡易的に実験を行う。

「ファルマ君、隅っこで何やってるの？ 食べ過ぎて吐きそうなの？」

ほろ酔いのエレンが近づいてきたので、「おえっ」と言って手を振って遠ざける。

「実験してみるか」

ファルマは検証シナリオを脳内で作り上げ、それにしたがって順々に検証してゆく。

対照区 (Control) 1： 桶を削除      失敗。

対照区 (Control) 2： 水のみを削除      成功。 桶の中には塩と砂鉄が残った。

試験区 (Test) 1： 塩水に手をつけ、塩水を削除      成功。  
桶の中には砂鉄が残る。

ここまでは分かる。だが、

試験区 (Test) 2： 塩水に手をつけ、砂鉄に触れず全てを削除      成功。 桶の中には残留物なし。

「じゃ、これはどうだ」

ファルマは実験の総括に入る。

試験区 (Test) 3： 塩水に手をつけ、砂鉄に触れず砂鉄だけ削除      成功！ 桶の中には塩水のみが残留。  
そして考察。

(水、いや流体を通して”負”の力は伝わるのか)

となれば、空気もまた流体。対象に触れなくても念じた構造式のもの消せるわけで。正確には、遮蔽物の中に対象を置いてみなければ分らないが、今回は用意できる条件が限られているので後に回す。

仮説。

「化合物を念じれば、望んだものを、触れなくても消せる!？」

そして、恐ろしいことに気づいてしまった。右手の”負”の能力を使うとき、ファルマの手は幽霊のように透けて、通そうと思えば物体を透過するのだ。

ファルマの作業は、部屋の隅であまりにも地味々に行われたため、ファルマが吐いていると思って皆が気を使って近づいてこなかった。ロッテが時折、「大丈夫ですか？ 背中さすりましょうか」と声をかけてきたので、ファルマは大丈夫、と返事をしておいた。

「それにしても……」

(ああ、俺、ますます人間から遠ざかっていく)

ファルマはほとほと困り果てたが、未練を残して死に、再びこの世に転生できたのだから文句も言えない。それに、死んだファルマ少年の人生を請け負っている。

「影もないし、透けるし。皆に見える幽霊、ぐらいに思えば気が楽になるのかな」

一度死んだのだし、幽霊だと思えば精神的にも楽かもしれない。とファルマは気の持ちようを変えることにした。

ブリュノはまだ、MEDIQUEの化粧品を伯爵に勧めていた。ファルマは身なりを整えて、ハンカチで口を拭き、伯爵に近づく。そして、二人に声をかけた。

「失礼。私が伯爵にお気に入りいただけの化粧品を見繕いましょう」  
「そうですね、せがれのほうが詳しい」

調合したのはファルマだと聞き、伯爵はファルマの話をくいいるようにして聞く。

「その前に、伯爵は現在服用されている薬をお見せいただけますか。それらとの相性もありますので」

「健康のために医師に処方させて飲んでいる薬がいくつかある」

伯爵は従者に、薬箱を持ってこさせた。

宝石のちりばめられた薬箱の中は、薬で埋め尽くされていた。伯爵はまだ若いのに相当な健康志向だとみえる。健康食品やエナジードリンクのようなものが、これでもかが入っていた。ファルマはひとつずつ薬瓶をあけて、中身をあらためてゆく。

「これは……」

ある薬瓶を持ったファルマの手がとまった。

「ああ、やはり気になりますかな。これは高級な丸薬で、体液の循環を整え、病魔を遠ざけるのです」

銀箔に包まれた、大き目のサイズの丸薬が入っていた。丸薬の名前を聞けば、中に入っているものは問題のないハーブだとわかるが、それを、健康志向の伯爵が、毎日こつこつと10粒ずつ、何年にもわたって飲んでできたという。

「この丸薬を飲むのを、今日からやめてください」

ファルマは伯爵に、真剣な顔つきで言った。

「なぜ、これを飲んでいると調子がいいのだ。手放せない」

「銀は微量なら、健康に害はありません、ですがこれは大量すぎます」

「何だと……!？」

ブリュノも目を見張る。ブリュノも、丸薬を処方するときには銀箔を使うことがある。銀でコーティングした丸薬は腐りにくく、長持ちをするのと、見た目に美しいことから、宮廷医師、薬師の間では流行していた。

「そつえば、貴族にしかない症例だな」

ブリュノは思い起こしたようだった。平民がこの、全身が青くなる症状を患っている例を見たことがない。平民は銀を飲まないからだという。

「この銀箔を毎日少しずつ摂取し続けたことが、あなたの皮膚が青くなった原因です」

「なぜ青くなる」

ブリュノが質問をし、ファルマが即答する。

「銀は日光に当たると、黒ずみます」

「ど、どうやったら治るんです。毎日一粒ならどうです?」

「まず、一旦これを飲むのをやめてください」

ファルマは少し語調を強めた。

「わ、わかりました。しかし、私の肌はもう治らないのか……!」

伯爵はますます青ざめたように見える。それを哀れに思ったのだろうか、ブリュノがある提案をした。

「治るかは分かりませんが……立ってください。体液のバランスを整えておきましょう」

「ぜ、ぜひお願いします。治療代はお支払いします！」  
「お食事をいただいたので無料でかまいません」

ブリュノは杖を持ち、伯爵の後ろに立ち、何らかの発動詠唱を唱え伯爵の背中に杖を押し付けてゆく。ツボでも刺激しているかのようだ。伯爵は気持ちよさそうな顔で施術を受けていた。

（あ、今のドサクサの間にやればいいんだ）

ぼんやりと見ていたファルマは、傍観している場合ではないと、慌てて右腕の服の袖をたくりあげる。脳内で銀を認識し、「負」の能力を発現する。

「ちょっと、ファルマ君何をしてるの……！」

エレンはファルマの右腕が発光していることに気づき、何をするつもりかとハラハラしながら見ていた。それは神術の発動の光であると、はつきり分かった。

ファルマは集中して、伯爵を睨み据えるように見つめていた。

” Ag、Ag+消去”

彼はさきほどの実験と同じように、伯爵一人分ほどの空間を仮想して、ほかのすべての微量元素をいじらず、水分も塩分にも触れず、

銀（Ag<sup>-</sup>、Ag<sup>+</sup>）のみを標的として消去した。

ファルマの杖は銀製なので、近くにあれば消えてしまうところだったが、ブリュノの持っている杖は金でできている。

だが、伯爵の指輪のひとつは消えてしまった。コロン、と指輪についていた宝石が床に落ちた。

ブリュノの施術が終わったところには、シヨン伯爵の顔色にはすっかり赤みが差した。青黒い、宇宙人のような表皮は、美肌に戻っていた。誰も知らなかったが、まじまじと見るとシヨン伯爵は美青年だった。

「おや……顔色がもとに戻りましたぞ」

伯爵家の家令の言葉を聞いたシヨン伯は、

「か、鏡を持ってまいれ！」

と家令に命じる。家令は、久しく使っていなかった伯爵の鏡を持って戻ってきた。鏡を見ることは、伯爵にとって辛い行為になっていた。それで、彼は恐る恐る鏡を見る。

「肌が……もどった！」

伯爵はその場で飛び上がって喜び、そのままの勢いで家令とダンスをした。

「さすが尊爵閣下の神術でございます！」

「は？」

合点がいかないのが、ブリュノである。彼は、彼が伯爵に施した



術の効能をよく知り尽くしている。体調を整え、気分を高揚させるぐらいの効力しかないはずだ。

「これで安心しました。いくらお支払いすればよいのか。実は、妻に愛想をつかされて出て行かれたのです……」

それを聞いたファルマは、

（よかった、青髭みたいに殺された妻はいなかったんだ）

と、胸をなでおろした。

でも、エレンの聞いた小部屋の噂は何だったんだろう？ という疑問が残る。

一段落した後で、ブリュノがファルマに近づいてきた。

「お前の仕業だな」

と、確認するようにそう一言発して、ワインを取りにいった。

その後、気をよくした伯爵は、さらにワインをあけ、盛大な夜会を続行した。快癒パーティーといった趣になってきた。宴会は終わらない。これに痺れを切らしたのが子供たちだ。

「お先に失礼します、おやすみなさい」

ファルマたち子供組が眠気に襲われ、先に寝室に行こうとすると、伯爵は呼び止めた。

「そつだ、きみたちが気に入りそうな場所がある。ぜひついてきてくれ」

「いや、でも、私たちはもう寝なければいけませんので」  
「いいから、すぐだから」

そう言われて、ファルマとブランシュ、ロッテはある場所へと連れて行かれた。地下の石階段を降り、不気味な廊下の突き当たりの小部屋に招き入れられる。

「さあ、遠慮せず」

（まさか……これがエレンの言っていた、殺された妻の死体のある部屋……！？）

いざとなれば神術でどうともなるが、ファルマはブランシュとロッテを庇うように伯爵の前に身をおいて部屋の中へ入った。

部屋の中から、無数の視線を感じた。ファルマは思わず身構える。

「お前たち、お客さんだよ」

伯爵が話しかけていた相手。それは無数の等身大美女ドール。地下の小部屋は、ドールコレクションルームだった。きれいに衣装を着せられた等身大美女ドールたちが、さまざまなシチュエーションでセツトされていた。

（うわー！）

ファルマはその迫力にやられ、思わず絶叫しそうになった。人形がリアルすぎるのだ。伯爵は上機嫌で、ファルマたちに等身大ドールを勧めてくる。

「いやあ、今日は気分がいい。どれでも好きなものを持っていくてくれ。どれも高価なものだが、気に入ったなら惜しくない」

等身大美少女ドールに、伯爵は頬ずりをしてハグをする。

「このアリスちゃんなんて、見たまえ、お勧めだ。肌もしつとりと  
していて。何より生きているかのようにだろう！ ああ、嫁にしたい  
ぐらいだ。添い寝にお勧めだ、今夜から添い寝してもいいぞ」

「は、はあ……」

ロッテとブランシュも、大きすぎるドールは怖いようだった。

「この嫁も悪くない、この嫁も添い寝に。これなんて、前の妻にそ  
っくりに作らせたんだ」

などと説明を続ける伯爵には申し訳ないが、ファルマとロッテは  
口をそろえた。添い寝用のドールもいるらしい。

「遠慮しておきます」

（伯爵の妻が失踪したのって、これに愛想をつかして出ていったの  
かもな）

添い寝用ドールにベッドスペースを占拠されていたとか……と想  
像がつく。

青髭伝説はなかった。

伯爵に殺された妻たちはいなかったよ、「俺の嫁」ならたくさん  
いたけど、とファルマは翌日、エレンに伝えたという。

## 2章6話 影のない少年と異端審問官

「影がない子供がいる？」

「はい」

金の縁取りの刺繍のある、詰襟の白いローブにケープを纏い、特徴的な形の神官帽をかぶった初老の男。彼はマーセイル教区、風の守護神殿の神官長である。

神官長は、教区神官の臨時の報告を受けていた。守護神殿とは、大陸全土の大神殿の管下にあたる各地の神殿組織で、属性ごとに複数の守護神を合祀している。ここは風属性の守護神殿であった。

「はっ、孤児院の孤児が浜辺で一人で目撃しました。孤児の話によると、影のない少年が、溺れた幼児を助けるために杖もなしに海水を一定領域消してしまったということです」

「なんだ、子供の作り話か。すておけ」

神官長はとりあわず、積み上げられた書類に羽ペンでサインをしてゆく。

「で、あればよかったのですが……」

神官は大真面目で説明を始める。

「やけに孤児がうるさくいうので、孤児院の教務神官が、翌日孤児と浜辺に行ったそうです。すると……神力だまりができていたそうです」

神力だまりというのは、強大な神術を行使したあとにその場に残る神力のよどみである。

「翌日なのに、残っていたのか」

神官長は耳を疑う。皇帝レベルの強力な術者が大規模な神術を使えば、多少神力だまりは発生するかもしれないが、それも数時間残る程度だ。一日単位で残っているなど、にわかには信じがたい。

「今も消えずに神力だまりはあるそうです。何人もの神官が確認しています」

異常だ、と神官は興奮する。

「海水を消した……？ 水属性の負の神術使いか」

「そうなのでしょうか？ 円柱状に海水を消したと言っていました。そんなことが、神術でできますか？」

神力だまりが発生しているというのが事実なら、影のない少年の使った術は神術なのだという前提になる。だが、そんな神術は見たことも聞いたこともない。神官長は書類をすみにやり、いつしか神官の話を傾聴していた。

ステンドグラスから漏れたカラフルな光が、薄暗い大神官室の中に幻想的な空気を漂わせている。燭台の炎が厳かにゆらめいていた。

「影がないというのは、そもそも何なんだ」

「悪霊でしょうか」

とはいえ、悪霊が白昼堂々と歩くものではないし、神の加護を受けていない者が神力だまりをつくったりはすまい。そういう結論に

なつた。

「目撃された少年の外見は薄い金髪で、肌はやや白い。マーセイル教区で、金髪の、水の負属性の少年はいないので」

奇妙な話だった。神官長の長い在職期間でも、そのような例は記憶にない。もともと、負属性というのはかなり珍しい属性なので、全属性のマーセイル教区の負属性の術者は、神官長が記憶している。

「目撃者の孤児は、少年の顔を覚えているか。別の教区の神術使いかもしれない」

神官長はたたみかける。

「遠かったので、詳細には見えなかったようです」

常識的に考えれば、影がなかったというのも、一定領域の水を消したというのも子供のホラか見間違いで、ただ強力な負属性を持った術者ということになる。神官長は上層部に連絡をしておくことにした。強大な力を持つ子供の術者は、未熟であるがゆえに、ときに市中で神力の暴走を起こすことがある。そうならないよう、専門機関での集中教育が必要だ。

「異端審問局に連絡を。その少年を探し出すように」  
「仰せのままに」

大神殿の異端審問局。それは悪霊の調伏、異端者の粛清を専門としている部局であった。

その数日後、大陸の全神殿教区で、一人の子供の搜索指令が下さ

れた。

… … …

そんな動向は露知らず。

ファルマたちはマーセイル領視察を終え、帝都に戻ってきた。一週間ほど留守にしていたので、薬局はその間閉めていた。さて、いよいよ営業再開だ、とファルマが出勤の準備をしていたところ、薬局の警備の騎士の一人、警備隊長がド・メディシスの屋敷に駆け込んできた。

「薬局に荷馬車がつつこんだ!？」

ブリュノも起きて、ファルマとともに朝食をとっていたところだった。

「はい、店の扉も、商品の一部も粉々です。私どもが二人体制で警備をしていたのですが、朝になったので格子門をあけたところ、その隙について御者のいない荷馬車が二台、立て続けに、突っ込んできました。止める事はできませんでした。私どもがいながら、申し訳ありません。馬車の持ち主は分かりません。登録番号もありません」

「調剤室は？」

調剤室は、カウンターを隔てて、ある意味仕切られている。調剤室こそが薬局の本体だ。あそこがやられていなければ、とファルマは気にかける。

「調剤室は無事です」

「積み荷は何だった？」

単純化合物ならばファルマは消去して、すぐに営業再開できる。  
地道な営業の甲斐あり顧客もついて、休み明けの今日、薬を取りに  
来る予定だった患者もたくさんいる。

「土砂です」

騎士の報告は無情なものだった。

ああ、これは臨時休業だな、とファルマは営業をあきらめる。営  
業開始時間までに、大急ぎで張り紙を作らなければならない。

「まあ……馬車が無人で突っ込んでくるものなのね」

母が心配をしている。ロツテとセドリックも部屋に入ってきて、  
ただならぬ空気を察して口をつぐんだ。

「営業妨害の一種だな」

食事を終えたブリュノが、ファルマができればそうと言いたくな  
かった言葉を放った。

「奇妙な薬を売る店を、面白くない、恐ろしいと、有害だと思っ  
はたくさんいるのだ」

物理的に営業できなくする。あるいは店舗を物騒な場所だと思わ  
せることで客を店から遠ざける寸法だ。

「もしかして」

いやな予感がした。MEDIQUEもやられるかもしれない。



「できるだけ速く営業を再開するのだ。休めば休むほど、客の足は遠のく」

ブリュノはそう言って、早期の営業再開を促した。

ファルマは、ブリュノが薬局を再開させたがっていることを意外に思った。

「これは」

「ひどいです……お店がぐちゃぐちゃです」

ファルマとロッテ、セドリックが薬局店舗に行ってみると、惨憺たるものだった。店内に流入した土は腐っていたのだろっか、悪臭が立ち込めていた。店舗部分は土砂でほとんど埋まっていた。騎士の言うようにかかるうじて、調剤室は無事である。土の神術使いのセドリックは正の属性なので、土砂を取り除くことはできない。しかし、汚染された土を浄化した土にすることはできた。

”浄化（Purifier）”

セドリックは杖を握り、発動詠唱を打って土を浄化した。

「ありがとうセドリックさん、においがなくなったよ」

「この程度のことしかできませんで」

セドリックは悔しそうに鼻をすすった。

「どうということなの、これは――」

何も知らずにボヌフォア家の屋敷から直接白馬に乗り、出勤してきたエレンの悲鳴が街なかに響き渡る。

「エレン、調剤室からMEDIQUEに薬を持って行って、そこで薬局の営業をしてくれないか。患者さんはそっちに送るから」

ファルマは、壁で隔離されていた清潔な調剤室に入り、今日来るはずだった患者全員の調剤を行い、薬袋に患者の名前を書いてエレンに預けた。それから、調剤セットと薬瓶も渡した。

「これ、今日来るはずの全員分あるから。新しい患者が来たら処方箋を書いてMEDIQUEにまわすから」

「え、ええ。わかったわ」

このころになると、エレンはファルマに聞いてある程度ファルマの治療方針に倣った現代医薬品の調剤をすることができたが、ファルマに聞かなければ、パターン化された疾患以外には対応できなかった。従来の薬学知識での薬草などの処方ではできたが、エレンはファルマの薬のほうがよく効くと思ったので、処方を切り替えつつあった。

「それからエレン、MEDIQUEの表の鉄門は完全に開けてしまわないでくれ」

「なにそれ、そっちも襲撃されるかもってこと？」

「念のため、気をつけて。ロッテもそっちに連れて行ってほしい」

「ええっ、私ここで手伝いますよ！」

ロッテは移動する気はないようだ。

「わかったわ、行こうロッテちゃん。店主の言うことはきくものよ」

「頼んだよ」

「もし不審者が来たら神術で追い払ってやるんだから」

エレンは優れた水の神術使いなので、ファルマは任せることにした。ファルマはこちらに残って、再建のめどをたてなければいけない。

「こりゃあ、どういうことじゃあ……だれじゃあ、わしの鼻根の店にこんなことをしたやつは！」

開店前一番にやってきたジャン老人が、店の有様を見て我が家を潰されたかのように憤慨していた。

「今日からようやく飴が買えると思ったのに！それに、水も飲めんじゃないかー！」

それを聞いたファルマはいたたまれなくなって、商品が土砂に埋もれ散乱した店内で、“船乗りの飴”をさがす。飴の入った瓶は、幸い崩れかけた棚の上に載っていた。ファルマはそれをとって、ジャン老人に瓶ごと手渡した。

「瓶に土はついていますが、中はきれいです。ジャンさんはお得意さんなので差し上げます。またお店を再開する時には、買いに来てくださいね」

「ふおおお……！こんなに、タダでもらっていいのか！？」

ジャン老人は目を輝かせて、瓶ごと抱えて走って行った。老人とは思えない走りっぷりだな、とファルマは思う。

「宮廷薬師様、お気を落とさずに」

「何か手伝えることがありましたら、声をかけてください」

「お手伝いしましょう」

親しくしていた周囲の商店街の店主が、災難を気の毒がって路地に出てきた。荷馬車の残骸を片付けるのに、徒弟を貸そうと言ってきた。

「ありがとうございます、助かります」

ぼつり、ぼつりと片付けの手伝いは増えてゆく。

薬局の営業時間になって、久々の営業を楽しみにしていた客が続々とやってきた。店が営業できる状態にないことを目の当たりにし、口々にファルマに声をかけ、首を振り、沈痛な面持ちで帰ってゆく。薬を必要としていた患者は、2号店の店舗を案内した。新規の患者は、ファルマがその場で処方箋を書いて、これを2号店に持って行くようにと言った。

気がつけば、多くの町の人々が、ボランティアで片付けに手を貸してくれていた。

「皆さん……ありがとうございます！」

ファルマがボランティアたちに頭を下げると、

「この薬局は、私らにとっても必要ですので」

持病をかかえた常連たちが、汗を流しながらにつこりと笑った。セドリックが、「もう、この薬局は地域に根付いていたようですね」と言って目頭を熱くした。

「手伝うぞい」

しばらくして、ジャン老人が戻ってきた。屈強そうな十人ほどの筋骨隆々とした半裸の男たちを連れて。ファルマが面喰らっている。

「このかたがたは誰ですか？」

「うちの若い衆じゃ。船乗りの飴を気に入ってる」

ジャン老人は彼らを顎で使い、ファルマの作業を手伝わせる。腕に碇や港名の刺青が入っている、海の男たちのようだった。彼らはジャン老人には絶対服従といった様子。ジャン老人は引退した漁業関係者なのかな、とファルマは推測したが、詳しいことは何も分かっていなかった。

彼らのおかげで、土囊がみるみる積み上げられ、店の外に運び出された。また、事情を聞きつけた女帝が、兵をよこしてMEDIQUEの警備の増強や、片付けの手伝いにあたらせた。女帝の小姓のノアが、現地を見にやってきた。

「陛下、お怒りだったよ。帝国の勅許印のある店をコケにされたって。徹底的にやるって、怖かったー」

ノアはその怒りっぷりを見て、逃げ出したくなったという。

「何をやるんだろう、報復か？」

「粛清だろうな。犯人の心当たりはあるのかい？」

「心当たりが多すぎて分からない」

薬師ギルドが本命だが、必ずしもそうとは言い切れない。何しろ証拠がないのだ。薬師ギルドかも、などとうかつなことを言うと女帝に叩き潰されそうなので、冤罪を招きかねないことはやめておく。

「陛下が、内装を直す職人をよこすつて。今日中に土砂が片付けば、明日店内を施工して、あさつてには再開できるだろう」

さすが、女帝は行動が早い。女帝の後ろ盾があつて有難いこともあるな、と感謝するファルマであつた。

「お昼なので休憩にしましょう、皆さんお疲れさまでした。ありがとうございます」

「おう、昼からも来るよ」

「ありがとうございます」

昼食休憩をとろうというときだった。午前中、作業をしたただけで服は土砂でドロドロになつていたので着替えて、ファルマとセドリックは路地向かいの食堂で昼を食べ終わった。

「夕方までに終わりそうですね、ファルマ様」

「皆が手伝いにきてくれたおかげだよ」

ファルマとセドリックが店舗の外で、ベンチに腰掛けて休憩をしていると、

「薬師様、患者がいるのです。助けてください！」

狼狽した様子で、若い女がファルマに近づいてきた。

「父が炎天下で作業をしていて、倒れてしまいました。すぐ近くです！ 目をさませません！」

「熱中症かな。分かりました、行きます」

ファルマは店舗に入り、往診バッグを取ってきて自馬に乗る。女も馬に乗せた。

「ファルマ様、一人で大丈夫ですか？」

セドリックが心配そうに声をかける。

「手におえそうになかったら、戻って応援を呼ぶから、すぐ戻るよ」

「では、こちらは作業をすすめておきます」

「ありがとうございます」

女に案内されるまま馬を走らせて、帝都のはずれの丘の上までやってきた。帝都を一望できる、見晴らしのよい丘だった。すぐ近くのはずでは……とファルマは疑問をいだく。人気のない寂しい場所だ。

「ここです」

「ここですか？」

女とともに、ファルマも馬から降りる。

（どこに倒れている人がいるんだろう。こんなところで何をしてたんだろう？）

「あの、患者さんは」

ファルマがそう言い終わるか終わらないか、というときだった。丘の下から、真っ白な装束を着た男たちの騎馬が丘を一列で登ってきた。女はいつの間にかいなくなっていた。

（はめられた！）

多勢に無勢、ファルマは身が竦むようだった。

馬上にいる男たちの全員が杖を持っている。れっきとした神術使いの戦闘だ。チンピラのリンチではない。

「我々は大神殿異端審局の異端審問官である」

全員が、耐神術戦闘服と思われる機能性の高い白い衣装を纏い、神殿聖騎士団の腕章をつけていた。

「何の用ですか」

「大神殿の下命により、影のない、金髪の少年を捜していた」

（俺かよ！ いつからつけられていたんだ！？）

ファルマ以外にそうそう、影のない子供がいるとも思えない。

「あんなに堂々と昼間に歩いているとは、迂闊だったな」

「なぜ、お前には影がない」

よく晴れた、快晴の空の下の丘だった。ファルマの足元には、影がない。厚着をすれば、服には少し影ができる。だが、薄着をしていると、彼のどこにも影はなくなる。男たちの足元には色濃く影が落ちている。

「悪霊か」

「違います。悪霊ではないです！」

最悪、霊なのかもしれないが、せめて悪霊ではない筈だ。とファ



ルマは思っ。

「では何なのだ！」

ファルマが返答に困っていると、痺れをきらした一人の男が、

「手を上げて、10歩後ろに下がれ」

と脅迫した。ファルマは言われるまま10歩下がる。そこは草のない、平らな地面であった。

” 捕縛せよ！（Arrestation） ”

馬から飛び降りた男が叫んで、杖を地面に突き立てて叫んだ。対悪霊の上位結界が発動する。予め地面に描かれていたと思われる精密な神術法陣に、発動コマンドと神力が注ぎ込まれ、地面から赤い光が進り、閃光はファルマに襲い掛かった。しかし、

「な、何だと！？」

大きな爆発音を残し、結界は自壊した。

「対悪霊結界が効かない、だと！？」

「あの、俺、悪霊じゃないです」

その言葉は、なんと間抜けに聞こえただろう。手っ取り早く正体を見破ろうとした一人の男が、

「正体をあらわせ！」

” 炎の嵐（T e m p ê t e d e l a f l a m m e）”

そう言うが早いか、火炎の発動詠唱を打ち、大火炎の攻撃を放ってくる。

唐突に、戦闘が始まった。

ファルマは診療カバンを丘の上に放り投げ、左手を翳し、息を止め無詠唱で大量に窒素を生成。同時に、炎のある領域から酸素も消去。貴族たるものの備え、ということの不測の事態に備えた戦闘訓練は、エレンから受けている。ファルマの体は防御力が高いのか、攻撃が当たってもせいぜいかすり傷程度で、ほとんど傷がつかない。ましてやエレン相手には、血など流したこともなかった。ファルマが心配しているのは「やりすぎて相手を殺したりしないか」ということだ。火炎はファルマに到達する前に消えた。昏倒を防ぐために、窒素も消す。

「なっ……素手で！ 炎の負属性か！」

水の神術使いが放つ氷系の攻撃は、右手で難なく消去する。

「水の負属性も、だと?!」

基本的に、神術使いは複数の属性を持ったりはしないものなので、男たちは混乱しているようだ。

（気化麻酔でも撒いて気絶させるか。あ、それは俺も気絶する）

ならば、負の能力で低血糖や軽い脱水にして失神させるか。

ファルマは何とかこの場を互いに無傷で切り抜ける方法を探ろうとしていたが、この場をやり過ごしたとしても、薬局をやっている限りもう身バレはしたし、何度でも彼らは異端審問にやってくるだ

ろう。この場で残らず彼らを殺せば口封じはできるが、どこかで誰かがそれを見ているかもしれないし、そもそも殺害は選択肢にない。しかし、

「生死は問わんとのお達しだ。殺せ」

（えー！？）

腕章に二重線のあるリーダー格の男から、あっさり殺害指令が出てしまった。

異端、死すべし。の精神のようである。

これはもう、互いに無傷では済みそうにない。

## 2章7話 骨折と薬神の聖域

神殿。

それは大陸内外に支配域を持つ国際的な宗教団体である。

宗教団体といっても、その権力はただの宗教団体の範疇にとどまらない。

神殿は、生後まもなく行われる洗礼儀の際に神術使いの守護神を鑑定し、祝福によって神脈を開き貴族としての資格を与える。また、貴族としての資質に欠けると見做されたものは、強制的に神脈を閉じ、平民身分へ落とすこともできた。神殿へ叛逆を起こした貴族は、永遠に追放された。

各国の国王や皇帝を選定し、権杖、帝杖、王冠、帝冠を授けるのも神殿である。

よって神殿の権力は帝国を上回り、その気になればサン・フルーヴ皇帝との全面戦争もいとわない。

ファルマがサン・フルーヴ国皇帝の擁する薬師団の筆頭薬師であり尊爵の次男だという事実は、一顧だにされることはなかった。

ファルマは人外だと断定され、異端として抹殺されることになった。

馬に騎乗した異端審問官は全部で7名。4属性神術の使い手が揃っていた。

ファルマは水属性の神術使いであるという風を装っているのだから、限られた手数で応戦する。

土属性術師の地面からの攻撃は分厚い氷の層を地面に張り巡らせて防ぎ、炎属性の炎は”負”の能力で消し、氷の防御壁を盾に風属性術師の暴風をやり過ごし、水竜巻で馬を翻弄させて術者を落馬させ、氷の礫を放ち物理的に殴り、杖を破壊して無力化し……熟練の

術者7人を相手にたった一人で、余裕すら見せながら縦横無尽に跳びまわる少年に、異端審問官たちは次第に焦りと恐怖を見せはじめた。

ファルマの神力を含んだ氷の障壁はどんな金属より硬く、火炎の攻撃にも耐え、熱を通さない。

おまけに、神殿の奥義であつた破邪系の攻撃も、彼が悪霊でないため通用せず、十字砲火の陣形を基本とした四属性攻撃だけでは単調になる。7人がかりで調伏できなかった異端者は、これまでになかったのだらう。

ファルマは無詠唱で応戦しているが、物質創造ができることだけは見破られるわけにはいかず、全て水属性だけで対応した。それでも、異端審問官たちは神技を発動させるたびに神力をすり減らしてゆくので、段々と神技の威力は落ちてくる。

「ちょ、これは……」

異端審問官は、消耗していく部隊とは正反対に、ファルマは神術を使えば使うほど、身体能力が高まり、神力だまりがどんどん彼の周囲に渦をつくってゆくのを察知した。それに、神術を使えば神力は減ってくる筈なのに、彼の体からは神力が全くといって出ていかない。

むしろどこからか流入しているのではないかと疑うほどに、膨れ上がってゆく。

「ま、待て……」

先ほどからファルマの体は、神力の昂ぶりに応じて影がないどころか、白く発光しているように見えるのだ。

「ちよつと疲れてきたな」

とはいえ、ファルマも連続攻撃を受けっぱなしで息が上がってきた。このままでは埒が明かない、決着も見えないし。というわけで脅しをかけることにした。

彼は軽く腕を振り上げ、左手で空中に線を描く。

それは最初、空中にちりばめられたほんの小さな氷の結晶の行列

だった。それが、目を見張る速度で轟音とともに巨大化し、瞬く間に冰山ほどに膨れ上がり、もはやどこへも逃れられないほどの上空の面積を覆い尽くした。

それを、少年は異端審問官の頭上に悠然と浮かべているのである。彼がその指先をわずかに振り下ろせば、全員が冰山の下敷きになって圧死するだろうことは、もう疑う余地もなかった。

「あ……うわあああ……！」

馬は暴れ、異端審問官は地面に振り落とされ、空を覆いつくすほどの冰山の圧迫感に戦意を喪失した。苦し紛れに放った大火力の炎も、無限に成長してゆくかに思われる冰山の前に無力である。

（ああ、これでもう完全に悪役だ）

とファルマはげんなりしながらも、ここで挫けてはいけない、脅すからには徹底的に脅す。彼らが逃げられないよう、冰山から氷柱を落として彼らを囲むように地面に突き立て、完全に包囲する。恐怖は増幅されたことだろう。失禁したり、泡を吹いてしまった審問官もいた。

異端審問官は、神殿の誇る神術戦闘のエキスパートである。その彼ら全員が、死を覚悟するほどの圧倒的な力量の差を見せつけられ、もはやこれまでと覚った。もはや彼らの命運はファルマの指先一つにかかっていた。

そのとき、恐怖で全身を痙攣させた異端審問官の男の一人は、冰山を操るファルマの腕が青白く輝き、彼自身が後光を放っているのを見た。

「本当はこんなことはしたくない」

彼はよく通る声で、彼らに呼びかける。

「俺はこの世界に、人を癒すためにきた」

それが、彼が再び生を受け、数々の能力を得たことの使命だと自覚していた。ファルマは杖を持っていない。診療力バンだけ握り締

めて、身を守るための杖すら持つてきていなかったのだ。そこに患者がいると信じて、患者のために、彼はここに一人でやってきた。  
「何もしないから、おとなしく帰ってくれないか」

ファルマの両腕は青く発光している。長袖の白衣ごしにもくつきりと見えた、それは薬神の聖紋と呼ばれるものに酷似していた。神殿に所属する者が、それを知らないわけがない。

「無尽蔵の神力、薬神の聖紋、そして影のない身体……そうか」

異端審問官のリーダーは、何かを覚ったらしかった。

「我々が間違っていた。我々の目が曇っていた、なぜ見抜けなかったのだ……」

「なっ……まさか」

次々と、男たちも勘付いて察知する。

「神体に影はできない。御身が光だからだ……こ、このお方こそが、薬神だったのだ」

あれ、とファルマは男たちが盛大な勘違いをしはじめたことに戸惑った。エレンや父もそうだったが、このリヒテンベルグ模様の落雷の傷痕が、どうしてもそう見えるらしい。ファルマにとっては、雷かカビにしか見えないのだが。

（長袖白衣着てるのに何で傷が見えたんだ？）

そんなファルマをよそに、彼らの罪悪感は一トアップしはじめたいらしい。

「これは大罪だ。全員、命を差し出せ。神を冒瀆したのだからな」

「はっ、ははーっ！」

異端審問官は、地に身を投げてファルマの前に猛然とした勢いでひれ伏した。

「薬神様、我々は大変なことをしてしまいました、誠に申し訳ございませんでした。命をもって贖罪をいたしますので、なにとぞお怒りをお鎮めください」

などと嗚咽しながら言うので、

「いや、あの、一旦落ち着いて。何もないから」

彼らはファルマの話も聞かず、自害のために杖をこめかみに当て始めた。何か失敗を犯せば、即座に自決しろというマニユアルがあるらしい。

「待て、自害しないでいいから！ やめろ！」

彼らの暴走を止めたのはファルマである。

「だから神殿に黙っていて、今後は俺に構わないでいてもらえれば、それでいいから」

ファルマはもう脅迫は十分だろうということで冰山を消去する。

すると、聳え立つ巨大な冰山は跡形もなく消え去り、頭上には快晴の空が現れ、地面に少しばかりの水溜りを残した。まるで悪夢が醒めたかのように、そこに神術の痕跡はなかった。

「なんと、御赦しいただけるのですか！？」

命が惜しくなったのだろうか、一人の男がファルマに懇願のまなざしを向ける。

「そんなわけにはまいりません、神様を冒瀆した贖罪のため私が命をささげます」

地面にひれ伏していたリーダー格の男の決意は固かった。

「こうなっては、もう長くありますまい」

リーダーがローブをたくりあげると、左足の脛の骨が皮膚を貫通しているのが見えた。

落馬したときに、運が悪く骨折したのだろう。

「ここから身体が腐って、遅かれ早かれ、死にましょう。私が責任を取ります」

ファルマは診眼で彼の下肢を診る。

「開放骨折」

ファルマは息を呑んだ。診断後に赤い光が灯れば、ファルマの手にはおえない。しかし、灯った光は……白。しかも、開放部はそれ



ほど大きくはなく、傷口は土に汚れたりしてはいない、太い血管も損傷していない、汚染度合は低いときている。この場合は、十分な処置ができるなら脚を切断しなくてもいい。

「下肢切断」

光は赤。切断すれば、感染症を起こし敗血症に至り治らないということなのか。

「整復」

光は白。治るらしい。

（ああ……これは治るのか）

しかし、ファルマはある葛藤の中にいた。

それは、「医師法 第17条 医師でなければ、医業をなしてはならない」

薬剤師としては、バイタルサインの測定や視診、聴診、触診までは認められている。薬で治せるものは治す、だがそれ以上の一線をこえることは許されていない。日本では禁止されていた犯罪行為なのだ。

（でも、放っておいて死なせていいのか。診眼では治るといつているのに）

しかし、診眼は「ファルマが治せる」といつているのか、「外科医や整形外科医になら治せる」といつているのかまで教えてはくれない。理論上は治る、でも、こうすればいいというのを知っていることと、できることはまったく違う。ファルマは外科手術に関しては完全に素人で、人間相手には当然経験もない。ただ、彼は薬学者である。薬の効果を確かめるには、必ずではないが動物を使う場合もある。動物の手術に関しては経験豊富だった。

「これも神罰でしょう。殺してください、死ぬ前に一目、神様にお会いできてよかった」

苦悶の中にも、異端審問官のリーダーはいつそすがすがしい顔をしていた。

（薬局の処置室はつぶされていて使えない。MEDIQUEまでは遠い。処置が遅れると組織が壊死する、ここでやるか）

ファルマは地面に鉄の一枚板を創造し、負傷者をその上に寝かせ麻酔をかける。

「今から見ることは、全部忘れてくれ」

物質創造を見せることになってしまったが、もはや彼らは恐れはしなかった。疑いもしなかった。

「けが人の迎えの馬車を呼んできて」

「はっ！ 仰せのままに！」

診療力バンを引っつかんできて、ファルマは一言異端審問官らに言い残すと、中から清潔なビニールシートを出してそれでテントを張り、簡易的な処置室を作り中に入る。

神術で水を生成、それで手を洗い、予め創って消毒していたプラスチック手袋をはめアルコールで消毒。蒸留水で作成した生理食塩水の瓶を何本も出し、開放している創傷面を徹底的に洗う。滅菌していたナイフで汚れていた部分を削り、診眼に問いながら準備しておいた広範囲の細菌に効く抗生物質を選んで塗り、骨と骨を滅菌しておいたステンレスのボルトで固定しピンを打ち、体液排出用のチューブを置いたまま傷口を閉じる。

（これでいいんだろうか）

最後に、傷口を再度診眼で診る。

白い光は、完全にではないが、薄くなって消えつつあった。治癒に向かいつつあるのだろうか。ファルマには分からない。

テントから出てきたファルマに、待っていた異端審問官たちはひれ伏し、祈りをささげていたところだった。

「薬神様、我々はあなたのお命を狙ったのに、殺されて当然なのに慈悲をいただけるなんて」

「俺、薬が専門だから助けられるかわからないけど、やれるだけはやったつもりだ。怪我人は麻酔がしばらくは効いてるから、今は寝

てる」

命を落とすかどうかはわからない、見えないレベルで感染しているかどうか。でも、何もしないよりはましだったと彼は思っている。自己満足になるのかもしれないが……技術もないのに手術に手を出すのはこれきりにしたい、これは犯罪だ、とファルマは思った。しかし、この世界で誰が、助かる確率の高い手技を知っているだろう。

誰が手術中に抗生物質を投与でき、傷口を徹底的に洗浄し、感染に配慮して傷口を閉じることができなのか。

残念ながら、彼しかいなかったのだ。

ファルマはこの世界の医師の最新手術データ、ノバルート医大の出した業績集の記録を見たことがある。開放骨折の手術では迷わず、そして素早く下肢を切断し、傷口はガーゼなどで覆い運を天に任せ、傷口は膿むのは全く構わないように、敗血症で7割が死ぬ。痛み止めのポーションや麻薬を大量を飲むが、死亡率に大差はない。それが当たり前の世界だ。宮廷医師、侍医長クロードに診せたとしても、手術成績は一か八か、ということになりかねない。

「それはそうと、今日見たことは他言厳禁。でないと」

神殿の連中をどう脅すのが効果的なのかと悩んだ拳句、

「崇るぞ」

と、真顔でドスを利かせた声で言ってみた。

「ひ、ひいひいー！」

異端審問官たちは震えあがり、口外しようなどという気は根こそぎ殺がれたらしかった。

神を信仰する者には、神（？）の崇りと言うのがてきめんに効くのだ。

ファルマは一言も、薬神を騙った覚えはないのだが。

… … … …

神殿の迎えの馬車が到着したところには、女帝のベイジ小姓、ノアが帝国の近衛師団を率い、全速力で駆けつけてきた。ノアと、近衛師団は武装していた。彼らはいの一番に、ファルマが無傷であることを確認する。ノアは異端審問官たちに向かって名乗りをあげた後、

「神殿の方々が我が国の皇帝の主治薬師に、いったい何の御用でしょうか？」

慇懃だが陰のある口調で、異端審問官たちを牽制する。彼らは顔を見あわせ、返答に困っているようだった。これは何か疚しいことがあるな、とノアが追及しようとしたとき、

「怪我人がいたから、処置をしたんだ」

診療バッグの中に器具類を片付け終わったファルマが明るい声で応えた。

それ以外は何事も、まったく何もなかったかのよう。

「ノアはどうしてここに？」

「あれだ」

近衛兵の一人が、ファルマの馬を牽いてきていた。

「こいつが教えてくれたんだ。さすが尊爵家の馬はよく調教がされている。興奮していたから、何かあったのかと思ってな」

ファルマの馬は主人に何かがあったらすぐに、直前にいた場所に戻り危険を知らせるという調教を受けている。馬だけが薬局に戻ってきたので、それをノアが見つけて兵を率い駆けつけてきたという。もしかして、薬局に荷馬車をつっ込ませたの、おたくら？ だとしたら、うちの皇帝から神殿にお話があると思うけど」

ノアが異端審問官たちに鋭く尋ねるが、それは天地神明に誓って違つと全力で否定した。そんなやり取りがしばらくあったが、ファルマは陽が傾き始めたのを見てはつと薬局のことを思い出して、

「俺、薬局に戻る。セドリックさんや町の皆が待ってるし、片付けをするから」

怪我人はできるだけ動かさないように。

ド・メディシス家の屋敷に馬車で運んで、などとファルマは言っていた。

「じゃ、そういうことで」

と言うと、彼は診療カバンを肩にかけ、疲れ果てたらしく、自馬に乗ってとぼとぼと帰途についた。

ファルマを土下座で、しかも頭を地面に擦り付けるようにして見送る異端審問官たちに、ノアと近衛師団は驚く。異端審問官が尊爵の息子とはいえ一介の貴族に、土下座をしたうえ頭を垂れるというのは、前代未聞の話だったからだ。

「何があっただ？　なあ、ここで何があっただ？！」

ノアは首を捻る。近衛師団たちも不思議そうにそれを見ていた。

その後、ノアは根掘り葉掘り異端審問官たちに訊いたが、誰一人として口を割ろうとはしなかった。

誰もがひどく怯えていた。リアルな意味で腰を抜かしてしまっていた者もいた。

その後、サン・フルーヴ帝都教区の守護神殿の報告書には、「サン・フルーヴ教区には、影のない少年も異端者もなし」と書かれ、大神殿に提出された。

影のない少年の話はうやむやになり、ただの噂話として処理された。「神力だまりがある」などと虚偽の報告をしたとして、マーセイル教区の神官たちは一人残らず降格処分とされ（このころには神力だまりは消えていた）、そしてサン・フルーヴ帝国教区の、ファルマに治療を施された異端審問官は教区神官長に就任し、残る6人の異端審問官たちは、各教区に異動になった。以後、異世界薬局の子供店主に影がない、などという匿名のリークは、全て教区神官長によって握りつぶされることとなった。

異世界薬局は、こうして、その名の通り神殿も認める聖域となった。

サン・フルーヴ帝都の丘には、今でも消えずにひっそりと神力だ  
まりがある。

そこは花が美しく咲き乱れ、草が青々と生い茂り、小さな生命が  
あふれ、訪れた人にとってのヒーリングスポットとなった。

そこで何が起こったのか、もはや語るものはない。

< i 1 5 9 5 4 0 — 2 4 9 6 >

## 2章8話 インフルエンザと、ある薬店の顛末

日の高くのぼった正午のこと。女兒を背負った父親が、サン・フルーヴ帝国帝都のある町医者の門をたたいている。

「診てください！ ドナルド先生！ 診てください！」

しかし町医者の方は硬く閉ざされ、病院の中は静まり返っていた。「お願いします！ うちの子が高熱なんです！ おかしいんです、ぐったりしているんです！」

半狂乱で叫ぶ父親の音が、大路にこだましていた。気の毒そうな顔をするものの、係わり合いになりたくない、と見て見ぬふりする通行人たちが往来を流れてゆく。

「ドナルド先生の診療所は、来週までお休みです」

穏やかな少年の音が、父親の背後から聞こえてきた。パン屋の袋を抱えた買い物帰りの少年が、背後から彼、ピエールに呼びかけた。その姿を見たピエールはあつ、とおののいた。ただの少年ではなかったのだ。

少年は黒いコートを羽織っているが、中には詰襟の白衣を着て、襟元には王冠型の金バッヂをつけている。それは宮廷薬師の証にほかならなかった。異世界薬局の子供店主が、買い物を終えて店に戻るところなのだろう。流行りのパン屋の袋だった。

やれ、よりによって面倒な人物と居合わせてしまった。と、ピエールは一步引く。

「お子さん、大丈夫ですか？」

心配そうに子供店主は近づいて話しかけてくる。

病人をみれば揉み手で近づいてきて、高い薬をすすめるのがこの世界の三級薬師というものだ、だが少年は、心から心配そうな顔をしていた。こういう営業なのか、とピエールは警戒する。

「い、いや……何でも……」

この父親ピエールは、サン・フルーヴ帝国の薬師ギルドに所属する薬師だった。高熱を出した娘のために、店にある高価な薬草や軟膏を使ったが効かず、状態は悪化し意識が朦朧としてきて、呼びかけにも応じなくなっただので、医者をつたよることにしたのだった。

この少年は自分を薬師ギルドの薬師だと知っているのだろうか、と父親は疑う。薬師ギルドはあからさまに異世界薬局を敵対視していたし、ギルド長からは異世界薬局には近づくなという通達が出ていた。また、薬師ギルド長ベロンの仕業だと思われるが、薬局には所有者不明の荷馬車が二台突っ込んで、2日間営業できなくなったと聞く。気の毒なことだ、とそれを聞いたときにはピエールも同情した。

薬師の同業組合であるギルドの方針にそむくことはできない。籍を外されれば即日、店に掲げられた営業許可証が没収されてしまうのだから。

だから、異世界薬局の子供店主に話しかけられて、親しげにしているのを周囲に見られるのは困るのである。

「私がお子さんを診ましょう。異世界薬局の薬師をしております、ファルマです」

彼はコートを開いて、名札を見せた。日本の調剤薬局では薬剤師の名札をつけるのは当たり前なのだが、この世界では一般的ではない。仕事に誇りを持っているのだろくな、とピエールは察した。

子供店主は、薬局に戻るからついてこいと言うが、ピエールは二の足を踏んでしまう。

「どうしました？ お子さん、本当に具合が悪そうですね」

顔が真っ赤になって、ぐったりとしているのは誰の目にも明らかだ。

「いや、でも」

異世界薬局にだけは借りを作るわけにはいかない、ほかの医者を



あたりたいところだ。断ろうとしたが、ファルマに急いだほうがいいと強く諭されたので、彼は帽子を目深にかぶり、往来の人々に見られないようにこそそと子供店長ファルマのあとをついていった。

昼休みということでした。たん門を閉ざしている異世界薬局は、石造りの立派な店構えをしていた。新しく据え付けられた帝国勅許の黄金のエンブレムが眩しい。襲撃に遭ったからだろうか、騎士の門番は、平服ではあるが3名いた。父親の薄汚い木造の、すすけた薬店とは雲泥の差だ。

だが、ファルマは正門から入らず、裏口の通路を目指して歩く。  
「こちらから入ってください」

ああ、ご立派な貴族の店にはみすばらしい身なりの者は正門から入るなというのだな、とピエールは恥じ入る。裏口から店内に入ると、そのまま2階への螺旋階段があった。ベッドの並べられた診察室に入り、ベッドの上に寝かせるように指示された。

「診察をはじめましょう。お父さんは、まずこれをつけて」

ピエールはマスクを手渡される。当然ながら、何のために口を覆うのか彼はわかっていない。しかし診察を行う者には従うのが流儀である。

「裏口から入ったのは、病気をほかの人につつさないようにするためです」

彼は説明する。身分がどうこう、身なりがどうこうという話ではなかったらしい。

ファルマは黒コートを脱ぎ白衣になると、ノートを持ってきた。カルテだ。子供の名前、年齢、病歴、食事はいつしたか、いつから熱があるのか、など詳しく聞いてくる。そんな些細な情報がなぜ必要なのか、といったことに至るまで。きちんと情報を集めているんだな、とピエールは感心した。

ファルマは、診察室の隅の荷台の上に女兒を置いてくださいとピエールに言いつける。ボックス型の荷台に女兒を載せると、なにや

ら箱の側面についていた目盛りが動く。店主はそれを読んでいた。

「何をしているんです？」

「体重を量っています」

重さは天秤で量るのではないのか、と驚くピエール。

「これはばねばかりといえます。ばねの伸び方は、吊り荷の重さに正比例します（フックの法則）。ばねの伸びをテコの長さに変換して、その長さを読んで重さを量ります。体重を量るのは薬の量を決めるためです」

ファルマはさらさらと記録をつけながら、流暢に説明する。子供の説明とは思えなかった。子供薬師から薬を処方されることに一抹の不安があつたが、貴族の英才教育を受けて薬師になったのだろうし、そのあたりの薬師よりよほど頼もしいかもしれない、とピエールは見直す。

「こ、この器械はあなたが発明されたのですか？」

そして三級薬師であるピエールは無学を恥じた。宮廷薬師と平民の三級薬師、教育水準の差を思い知らされたようだ。子供の薬は大人の半分と大雑把に計算するのが三級薬師の間では慣例だった。しかし、

「この器械を作ったのは私ですが、発明者は私ではないですし、帝国技術局に設計図が出ていて誰でも閲覧できますよ」

とファルマは笑う。帝国技術局の設計図を書いたのはファルマだが、体重計を設計したのはファルマではない。地球上の発明者に敬意を払う。

「では、診ますね」

ファルマは打診・視診・触診などを手早く行くと、最後に左目に指先を当てて、娘を見つめながらぶつぶつと何かを唱え始めた。その間、ピエールからみた彼の瞳は青白く輝いて、僅かに色が変わっているようにも見えた。貴族の薬師は神術を使うというのは知っていた。しかし少年が神術を使うのを初めて見て、これが神術か、とピエールは感動すら覚えたのだった。

ものの数十秒で診断がついたらしい。

「重い風邪です」

「へっ!？」

ファルマは断言した。しかし、ピエールは異論がある。ピエールの見立てでは、ただの風邪ではない。

「こんなに熱があつて、全然下がらないんですよ?! 風邪なんですか!? 口から泡を吹いたり、痙攣したりするんですよ!? 悪霊が憑いているのでは!？」

まくしたてるように尋ねると、ファルマは「名前があるのかな?」と首をかしげていた。

「あ、そうだ、あれにしよう」

そんな適当な感じで、病気の名前が決まったらしい。

「特別な名前にしましょうか、G r i p p e (グリップ:インフルエンザのこと)」と

ピエールの聞いたことのない名前だった。この世界では、風邪とインフルエンザは同じように「風邪」と呼ばれていて、区別がついていなかった。新しい病気なのだろうか、とピエールは疑問を飲み込む。

ファルマは1階の調剤室に行き、調剤を済ませて薬を取ってきた。  
「治療方針と薬の説明をします」

真剣な面持ちで説明をはじめた。

思わずピエールの背筋が伸びる。娘は、重い風邪を引き起こす微生物に全身を冒されて、熱を出すことによつて微生物を殺そうと懸命に戦っている。グリップの薬グリップがあり、まだ発症後1日で薬が効くので、まずそれを服用して、その薬が効くと熱が出る期間を短縮できると思いますが、とのこと。

「口から吸い込む粉薬? どうして口から飲む薬じゃないんですか?」

これもまた、聞いたことのない服用方法だった。この世界の薬と

いうと、患部に何かを塗るか飲むか、のほぼ二択だった。

「この薬は口から飲むと体の中に吸収されません。なので吸入して気道粘膜にはりつくようにします、すると吸収されます」

薬は娘さんの体内で起こっている微生物との戦いを助けてくれるでしょう、とファルマは言う。それは小児にも使える抗ウイルス薬で、インフルエンザウイルスが、感染した細胞から外に出られなくする作用を持つ。

「吸入の練習をしましょう。十歳以下の子供さんには、できなくはありませんが少し難しいので」

ファルマは娘にやり方を言って聞かせ、何度か練習をさせたあと、粉薬を吸引させた。

「うまくいったと思います。次です。熱が出ているのは悪いことではないのですが、ずっと熱が上がったままだと体力を消耗してしまいます。これは、少しだけ熱を下げる薬です。あまり下がらないかもしれませんが、高熱が長い時間続いているようですので少し体を休ませましょう。それですね」

子供店主は何の躊躇もなく父に指示をした。

「娘さんのお尻を出して私のほうに突き出させてください。横向きでいいですよ」

「はひ？　って、はい！？」

父親の顎が外れそうになった。

この世界では、病気に対する民間療法として祈禱を行うのは一般的だった。その際に、妙なポーズをとらせるといことも往々にしてある、しかし、しかしである。父にとっては幼いとはいえ、7歳のかわいいわが娘である。仮にも薬師とはいえ異性の前で尻を出せだの、侮辱以外の何ものでもない。

「な、何を言い出すんですか！　そ、そんな治療法が本当に！？」

苦しそうに熱にあえぐ、意識の朦朧とした娘。その娘を見下ろす少年の視線は、ただ彼女をいたわるようにしか見えなかった。よこしまな意図は見えてこなかった。

「熱を下げるお薬を肛門から入れるんですよ。意識がぼんやりしているようなので、飲み薬もあるのですが坐薬を用意しました。お父さんにやっていただいてもいいですが、コツがありますので」

アセトアミノフェンの坐薬だ。7歳なので、小児用のものより少し用量を大きく造り効くようにした。少しでも楽になれば、と彼は思う。

「何のためにそんなことを！ そんなの聞いたことがない！ 口からじゃだめなんですか」

これは娘の純潔を汚すトンデモ療法だ。

ピエールがファルマに娘を診せたことを後悔しはじめたとき、  
「粘膜から吸収された薬はすぐに静脈に入りますので。口からでも構いませんが、意識が朦朧としておられますしね」

子供店主の説明は理論的で、ふざけてなどいないようだった。

「うむう……そうですか」

ピエールが仕方なく娘の尻を出すと、子供店主はすばやく小さな薬を肛門から挿入した。

「はうっ！？」

異物感に娘が驚いて、声が漏れる。

「ああっ………なんと言ったこと。もう嫁の貰い手がなくなるかもしれない……」

しばらく娘をベッドに寝かせたまま、安静にさせる。すると、娘はすうすうと寝息を立て始めた。

その間に、ファルマは吸い飲みで液体をそそいでやってきた。  
「熱が出ると、汗が大量に出ます。乾いた体に優しい飲み物です、あとで飲ませてあげてください」

それはきれいにろ過された水で造った経口補水液であった。ファルマは、まだ神術で生成した水を投薬の限られた場面でしか使わない。ろ過して蒸留した普通の水を使う。神術の生成水は薬効が高まるので、予想外の副作用も生じる危険性があるからだ。

「では、私は薬局の営業がありますので。何かあればこれで呼んで

ください」

店主は、呼び鈴を示して部屋から出て行った。ほどなくして、娘の熱は下がり始めた。そして、いくぶん楽になり、父親の呼びかけにも答えるようになった。

「こんなにすぐ効くのか……」

尻から入れた薬が熱を下げているらしかった。

営業中も、子供店主は何度か様子を見に来た。

そしてピエールと娘の食べ物や飲み物などを運んできては、優しく娘を励まして店舗に戻っていく。夕方になって、店主が薬袋を持ってやってきた。

「もう家で看病しても大丈夫だと思います。もし、どうしても心配だったり急変したら、夜勤の門番に伝えておきますから、ここに来たら私の屋敷に連れてくると思うので、夜間でも夜中でも対応します。解熱剤を入れていきますので、必要に応じて使ってください」

夕方になって店が閉まるのでここで投げ出されるのかとピエールが思えば、夜間も対応してくれる、という。病院も薬店も、夜間診療には対応していないのが普通だった。

そういう理由もあって、夜間に亡くなる平民は多かった。信じられないサービスのよさだ。

「ありがとうございます、御代はおいくらでしょうか。も、もしお支払いできなければ、親戚から借りてきますので」

きちんとした治療をもらったのだから、言い値を払いたい。ピエールはそう思えど、ピエールの薬店は異世界薬局に客をとられたせいで売り上げが激減し、金欠で診察代が工面できないかもしれないかなかった。

「パン一本分ほどでいいですよ」

「そんな、あまりにも安すぎる!」

支払ってから、本当にこれでいいのかと問うと、子供店主は首を

振る。

「子供の料金は、安くしているんです」

以前は子供は無料にしていたのだが、女帝に言われて、わずかばかり診察代と薬代をとることにした。

「お大事に」

店主は愛想よくそう言つて外まで見送る。

薬がよく効いて、店主が謙虚で、店も清潔だ。

「ああ……これは客をとられるわけだ」

「はい？」

「いえ、お世話になりました」

ピエールは敗北の味をかみ締めた。

それは、いつそ清しいまでの敗北だった。

娘を背負ったまま、ピエールは異界の薬局をあとにして雑踏の中に消えていった。

… … …

その一週間後、サン・フルーヴ薬師ギルド本部では、数十人の薬師の代表を会議室に集めた、月定例会が行われていた。

「どの店舗も、軒並み売上げが激減しておるか」

ギルド加盟店の業績低迷を聞いたギルド長ベロンは面白くなかった。

「聖域の薬局のせいですね」

「忌々しい！ 貴族の道楽かもしれないが、こちらは迷惑千万だ」

DIVERSIS MUNDI PHARMACY、聖域の薬局という一風変わった名前の店が創業した当初は、貴族の店などすぐにつぶれるだろう、ぐらいに構えて薬師ギルドは静観の構えをとっていた。ところが蓋を開けてみればどうだろう、相手はなかなか手ごわく、かつてない脅威へと変貌した。

帝国勅許店という格式ばった貴族の店であるにもかかわらず、薬局の中にはいつも平民の客がたえない。調剤を待つて店の外にまで行列ができている。彼らは文句も言わず、世間話をしながらにこにこと並んでいる。店の外にはひさしがあつて、患者用の椅子が並べであつた。待っている間に、水や飴がふるまわれた。

半年も経たないうちに、化粧品・スキンケアに特化した2号店 MEDIQUEを出し、今度は歯のケアグッズに特化した3号店を出すのだという。

屈辱的なことに、ベロンの妻もいつの間にか MEDIQUE の美白化粧品を買つて隠し持っていた。お前最近肌が白くなったと褒めた矢先のことだ。それらは全部叩き割つて捨ててやった。

「営業再開が異様に早かつたな」

「尊爵家の財力で何とかしたんだろう。あの高名な宮廷薬師がバツクについているからな」

「皇帝もだ。あの一件以来、近衛師団が毎日巡回に来るようになった」

ほぼ壊滅状態からわずか2日後に営業再開されたという。馬車が突っ込んだので店内の汚染も激しく、一か月は営業ができなくなる と踏んでいたのに、見通しが甘かつたようだ。もちろん、馬車を突っ込ませたのはベロンの雇った裏稼業の者たちだった。

それを知つてか知らずか、皇帝の勅令で、ベロンの薬店にピンポイントで3週間の営業停止処分がくだつた。取り扱い禁止の鉛入り薬を売つていたのを摘発されたからだ。そればかりか、なぜか神殿がちよくちよく抜き打ち検査にやってくるし、異世界薬局には帝都教区の神官長が頻繁に出入りするようになった。これではもう、手が出せない。

とにかく異世界薬局が創業されてより、薬師ギルド加盟店の売上は急落。

客の実に4割を取られていた。常連だった客も、異世界薬局に流



れた。

おまけに、水銀製品、鉛製品など、数々の材料が帝国勅令によって禁止され、いくつかの薬は取り扱いができなくなってしまった。

「陛下はあの薬局に洗脳されているに違いない」

ベロンは忌々しそうにそう言った。幹部たちも同意する。

「木漏れ日薬店のピエール師はどう思うか」

異世界薬局について罵詈雑言を繰り広げていた薬師たちの中、黙して席に座っていた貧乏薬師ピエールも、意見を求められた。ピエールの店は、異世界薬局からもっとも近く、そのせいか一番売り上げが落ちていた店舗だった。

ピエールはしばしの間沈黙を守ったので、自然と注目が集まる。

「何か意見はないのか。一番被害を受けているのはあなたの店だろう」

ピエールはおもむろに切り出した。

「この中の薬師の誰か、異世界薬局の中に入ったことがありますか？」

「行くわけないだろう、商売敵だぞ」

失笑する薬師たち。

「一度、行ってみるといいです。まるで聖域のように見えました」

ピエールは勢いよく席を立ち上がった。

「一度あそこに入ったら、客がもう二度とわれわれの店に来たくないという気持ちは、よくわかったんです」

「まさかピエール……あの薬局に行ったのか」

近づくな、という通達が出ていたのだ。それを破って、ギルドの方針にそむいた……議場内はざわついた。

「そう、白状しましょう。私はあの店に行きました。そして私がどんな薬草でも手のほどこしようなかった高熱を下げてくれて、痙攣をして意識の朦朧としていた娘をたちどころに癒してくれた」

ピエールは熱く語った。

異世界薬局の子供店主がどんなにより治療をしてくれたかを。娘が快復したのち、ピエールは思い切って薬局を再訪してみた。販売コーナーの品揃えを見て、数々の飴を買った。薬局を訪れた患者から直接話を聞いた。子供店主が「もう娘さんはよくなりましたか」と挨拶をしてきたので、話し込んだ。

そうしてあの店のことを知れば知るほど、あの薬局を排除すべきではないと、すべての薬局はああなるべきだ、とピエールは感じたのだ。薬が安いので儲からないだろうと思いきや、客が大勢来るから結果的に儲かっているのだ。薬師たちは頭を下げて、あそこで売っている薬の作り方や、治療の方法を教えてもらうべきだと力説した。

「それにひきかえ、私たちはどうだ。診断もできない、治療法もわからないまま、慰めにもならない言葉をかけて、患者を癒せるかもわからない薬草を、詐欺まがいの言葉で言いくるめて高い値段で売りつけている」

「なんだと？」

ベロンが眉をひそめた。

「中には治ったという者もいるが、ほとんどまぐれ当たりに近い。死人も多く出る。私たちは神術も使えないから、売りつけているものはただの薬草や、下手をしたら症状を悪化させる毒でしかない」

ピエールは声を大きくした。

「あの薬局の何もかもが、我々の店とは違うんだ！ 合理的で、先進的で、真に患者の身になっている」

「あー、もういい。お前が言いたいことはよくわかった、ギルドを出て行け」

ベロンは意地悪くそう言い捨てた。ピエールはギルド本部からたたき出された。

その日、ピエールの薬店は営業許可証を奪われ、薬草や薬をギル

ドに没収され、即日廃業に追い込まれた。荒れ果てた店を前に、ただ呆然と店先に座り込み、ピエールが男泣きに泣いていると。そこに、パンの袋を抱えた黒いコートの少年と、同い年ぐらいのピンクの髪の少女が通りかかった。

「えへへ、あのレーズンのパン、たくさん買ってしまったね、ファルマ様！」

「一人3つずつね、それからあの患者さんにもひとつあげる約束をしてるんだ」

「わかってます！ 一人3つずつです」

通りがかったのは、異世界薬局の店主と従業員だった。二人はお気に入りのパン屋で買い物をし、嬉しそうに帰ってくる道中だった。

「あれ、どうしたんですか？」

数日前に薬局に来たピエールが地べたにへたり込んでいるのに気づき、ファルマはそっと呼びかける。そして彼はすぐに気づいた。

薬師ギルドの営業許可証がないことに。店の中は荒れ、許可証を奪われて営業ができなくなったのだと、ファルマは察した。そしてその原因が、異世界薬局で治療を受けたからかもしれない、ということにも考えが及んだ。

ピエールは不甲斐なくて、同情されるのも嫌で、ファルマに顔を合わせることもできなかった。

「許可証がなくて、営業ができなくなっただんですね。事情を聞いてもいいですか」

ピエールは、薬師ギルドで起こったことをかいつまんで話した。異世界薬局に置いてあるような新しい薬を、新しい治療法を取り扱わせてもらえたらどんなにいいだろう、と薬師たちに話してしまった。

「そうですか……」

「他国に引っ越して、もぐりの薬師をやります」

ほとんど、それしか道は残されていなかった。それでも、取り扱える薬の種類は限られている。

「ほかのギルドに入れば営業ができるのですよね？」

ファルマは尋ねる。

「ですが、薬を扱うには薬師ギルドしかない。そこに入れないければ、もう入るギルドがありませんので」

と、ピエールは肩を落とす。その言葉を待っていたかのように、ファルマは明るくこんな提案をした。

「先日、新薬を取り扱う調剤薬局ギルドを立ち上げました」

皇帝のギルド創設許可も得ています。異世界薬局と提携して処方の研修を受けながら、店舗を営業することができます。新薬を取り扱いたい薬店は薬師ギルドではなくそちらに入ればいいでしょう、と、ファルマはピエールに話を持ちかけた。

「高い加盟料がいりますか？」

「無料ですよ。脱退も自由です」

「何年もの研修期間が必要ですよね」

「研修を2ヶ月やってもらって、その後はマニュアルを渡しますの  
で、それを見て処方をしてもらえばいいです。そのほかは、定期講習会をやるので出てもらったり、私が定期的に指導をしにお店を回ります」

処方の難しい現代薬を、化学や薬理の知識のない異世界の薬師にすぐに扱わせるのは危険だ。

だが、薬剤師でなくても販売できる、日本で一般用医薬品（市販薬）にあたる薬は、登録販売者がいればコンビニなどでも売っているし、きちんと使い方をマスターしてもらえたら、異世界の各薬店で取り扱ってもらってかまわない。それでも薬師ギルドで取り扱っている薬よりは効果は断然高いだろう。また、安価に供給できる。

「で、では……」

ピエールは信じられない、といったように肩を震わせる。

「はい、それらのことを守ってもらえれば、営業はできます」

「よ、よろ、よろしくお願いします……！」

調剤薬局ギルドに加盟店1号が加わった瞬間だった。

## 2章8話 インフルエンザと、ある薬店の顛末（後書き）

### 【謝辞】

本頁は薬剤師の伊在 美先生、越智屋ノマ 先生、t a m p先生、小児科医のパン粉先生に査読、指導していただきました。ご指導ありがとうございました。

## 2章9話 檻から出た悪霊憑き

異世界薬局の店主、宮廷薬師ファルマ・ド・メデシスをギルド長とする調剤薬局ギルドの第一号加盟店、木漏れ日薬局は、2か月後にリニューアルされた。

今、木漏れ日薬局は改装され真っ白の店舗になり、新装開店の時を待っている。店主ピエールは髭をそり、散髪をして、清潔な白衣を仕立て、登録販売者のバッジと名札をつけている。今日から異世界薬局と提携した新しい薬を販売するのだ。取り扱う薬の知識も学んだ、接客技術も学んだ。店舗の経営方法も学んだ。必要なことは、全て学んできた。

異世界薬局から派遣された騎士の門番が平服で雇われて、嚴重に警備をしている。

薬の盗難を防ぐためと、薬師ギルドからの嫌がらせを牽制するためだ。

木漏れ日薬局の売りは、異世界薬局より豊富な種類ののど飴と、鉄分やカルシウム入りのウェハース、解熱鎮痛薬、目薬、各種ビタミン剤だ。異世界薬局は高度な調剤に特化し重症患者、専門性の高い患者を集め、木漏れ日薬局は風邪や比較的パターン化された疾患、栄養補助食品などを扱い差異化を狙う。異世界薬局は患者数が膨れ上がり、宮廷薬師ファルマと一級薬師エレンだけでは診られない状態になっているので、薬の販売業務の一部を木漏れ日薬局に移すことにしたようだ。

異世界薬局では、数日前から業務提携薬局がオープンするという宣伝チラシが置かれてPRされていた。慢性疾患のある、比較的症状の軽い患者は木漏れ日薬局に送られることになった。

「ああ、いよいよだ。今日からいっただうなってしまうんだろう」

ピエールはふと不安になる、客は来てくれるだろうか。異世界薬局だから客がくるのではないか、同じ薬を扱うとはいえ、ファルマでなくてもいいのだろうか。

経営はうまくいくだろうか。新薬の効能はうまく説明できるだろうか。

不安は尽きなかった。ピエールは、先日は一睡も眠れなかった。

しかし、蓋をあけてみればどうだ。

木漏れ日薬局の門の外には、路地を覆い尽くすほど開店前から多くの客が並んでいた。

ピエールは鼻をすすりながら震える手で門を開き、客に向かって深々と頭を下げた。

「木漏れ日薬局へようこそ」

その後、ピエールはファルマに委任され調剤薬局ギルド長に就任した。新ギルド長ピエールは薬師ギルドのやり方に不満を持っていた薬師や、廃業寸前にまで売上が下がっていた薬師たちを引き抜いて、加盟店を7店舗に増やした。

全ての調剤薬局ギルド加盟店は明るく改装され、門扉は大きく開かれ清潔が行き届き、患者へのサービスも工夫を凝らされた。

これらの調剤薬局ギルドで新薬を扱うようになった薬師たちは澁刺として、充実し、やる気に満ちていた。

何しろ、ファルマの2か月の研修で学んだ通りに処方すれば、薬が効くのだ。

誰にでも薬が効く！

これが、以前は当たり前のことではなかった。



効くか効かないかは、経験則をもとにしたほとんど博打のようなものだった。高い値段を払わせて売った薬が効かずに、店が放火されたり薬師が殺されたりするのも珍しくはなかった。こういった逆恨みのリスクや盗難、高額にふっかけられる賠償金があるので、薬価は必然的に上がり、平民の医者や薬師は金貸しと同じように、嫌われる悪徳稼業だった。

しかし、新装開店して以後、調剤薬局ギルド加盟店はどの店舗もリピーターが増えた。

患者は感謝の言葉とともに薬師に信頼を寄せ、薬師は患者本位の処方をする。

暴利を貪らずとも、利益は出た。

「ファルマ様のおかげだ、もう、患者に後ろめたい思いをしなくていいんだ」

ピエールは、ファルマとの出会いに感謝した。あの日、インフルエンザになった娘にも、たまたま休診だったドナルド医師にも感謝した。

ギルド本部の玄関に功労者ファルマ様の銅像を建てましょう、と意気込んだピエールは定例会で提案したが、あえなくファルマ本人に却下されたのだった。

… … …

一方で、異世界薬局では。

「ファルマ様、忙しくなってきましたね……」

ロツテが心配そうに、カルテを整理しながら居眠りをしてしまったファルマを覗き込む。

「ほんと。急速に手広く事業を広げすぎだわ。……人の子の体に宿ったから、薬神でも疲れるのかしら」

疲労困憊のファルマを見下ろしながら、エレンは、ファルマは人々を癒すが、彼を癒す薬はあるのだろうかと悩む。彼の体には薬も毒も効きにくくなっていると、ファルマは言っていた。

薬神を癒す薬があるとしたらきっと、それは感謝の心だ。そう考えたエレンは、心の中でありがとうと言うのを忘れなかったが。それが効いているのかは全くわからない。

「え、何の話ですかエレオノール様!？」

ロツテが無邪気にエレンに尋ねる。ロツテは、ファルマはファルマだと思っている。

「いいえ、こつちのこと。苦しんでいる患者さんのことを思うと、放っておけなくて無理をしてしまうのでしょうかね」

エレンは言葉を濁す。

「せめて、材料の調達などは私たちが何とかするとして、ファルマ様には診療や調剤に専念していただきたいものです」

セドリックもファルマを案じているようだった。セドリックの膝は、ファルマの薬で長時間でなければ杖なしでも歩けるようにまでに回復していた。

「それが、ファルマ君にしか合成できないものがほとんどなのよ。4階の研究室で一人で合成しているんだろうと思うけど、やり方を教えても見せてもくれないの。何回かそう言ったのだけだね。手伝えればいいのに、悔しいわ」

こここのところ連日のように、ファルマには残業が発生していた。これまで、異世界薬局で処方される薬剤や、関連する店舗で使う薬の原料はファルマが一人で生産していた。マーセイル領から供給されるハーブを配合している薬もあるので、多少は調合をエレンに任せたが、土日も働くこともざらだったし、夜遅くまでの残業に、早朝に薬局に来て研究室にこもり薬の材料を生産したり、急変した患者の夜間診療に対応するのは彼の日課だった。

枯れることのない無限の神力の泉を持つファルマだが、体は疲労するのだ。

「俺、今寝てた？」

額に机のあとをつけて、寝ぼけた顔でファルマがむくりと起き上がった。ロッテが、ファルマの肩にストールをかけて体が冷えないようにしていた。

「長い間うたた寝をしていたわ、意識が飛んでいたの？ 疲れているのね」

エレンが、痕のついたファルマの額を指先でごしごしとこする。生前の彼は、気を抜くとすぐ仕事を集めてしまう性格だった。そして、彼は薬剤師として自分の体調を把握していると過信していた。それは結果的に、大きな間違いだったのだが。

だから今度は働きすぎない人生を送るはずだったのに、これでは

いけない、とファルマは自戒する。

（働き過ぎかな）

ファルマが現在抱えている仕事はというと、

・ エレンの診られない難しい患者を診断し、処方箋を書いてエレンに回す

・ 異世界薬局や調剤薬局ギルド各加盟店、薬用化粧品専門店「MEDIQUE」、オーラルケア専門店「8020」、で使う薬の原料を作る

・ 女帝、皇子や廷臣たちの定期的な診察

不定期に発生するものとしては

- ・ 帝国主催の公衆衛生講座
- ・ 調剤薬局ギルドの運営
- ・ 部下の薬師たちの教育、販売者養成講座の開催
- ・ 調剤薬局ギルド加盟店の店舗を回っての指導

「ねえ、異世界薬局本店の薬師を私以外にも増やしたり、弟子をとってみたい？ 一度体系立てて後進に教えてしまえば、あなたも楽になるわ」

エレンがそんな提案をする。新薬の薬学知識のあるブレインが、この世界でファルマ一人しかいないのは致命的だ。このままではファルマに重荷がかかりすぎて、彼が倒れてしまいか死んでしまう。

「そのつもりではあるんだ。製薬工場ができれば化学合成薬を造り始めるから、それが稼働できそうだったら、色々とかしようにと考えているよ」

製薬工場が立ち上がり次第、国内外の優秀な技術者や研究者を集め、製薬に必要な薬学を少しずつ教えよう、ファルマはそう考えていた。

帝国の資金と尊爵家の財力、神殿の資金援助、そして異世界薬局そのものの売上を惜しげもなくつぎこんだマーセイル領の製薬工場は、急ピッチで建造されつつあった。それができてしまえば、生産拠点を分散させることができ、ファルマも多少時間に余裕ができるはずだ。

「お師匠様が総長をしておられるサン・フルーヴ薬学大学には、優秀な学生がたくさんいるわ。私が抱えている弟子でもいいし」

ブリュノの一番弟子であり、彼女自身がすぐれた一級薬師であるエレンは、3名の弟子を持っていた。今は薬局の手伝いが忙しいので、彼らにはあまり構っておらずブリュノに預けているのだが、彼らを薬局で雇用してもいいのではないか、という。

「そうだな、今度、父上にお話してみるよ」

宮廷薬師として独立した以上、できることは自分で、とファルマは考えていたが、父の力や立場を借りるのもよいかもしれない。それは父にとっても、ファルマにとっても相互に益になることだ。

「ところで、製薬工場に必要なものはないの？　今のうちに私が調達しておくわよ」

先に先に、準備はすすめておきたいのがエレンである。

「高度なガラス細工、それから細かい鍛冶のできる職人を何人か雇いたいんだ」

工場で使う、製薬のための有機合成用実験器具を作ってもらわないといけない。

「売ってるものではだめなの？」

「変わった形のを依頼したいから」

日本では、薬学系や有機化学系の大学出身者であれば、簡単なガラス細工の技能は身につけている。だが、さすがにフラスコや試験管、ガラス管のジョイント部分、ロート類、冷却管などの細工はできない。専門職の技術が必要だ。

「ファルマ君の発想を具現化できる、最高の技術者のほうがいいわね」

エレンは悩む。金に糸目はつけないのだから、ファルマはよい技師を雇いたいだろう。

「最高でなくてもいいけど、高度な細工ができる技師がいいな」

「錬金術師や薬師、医師の実験道具を専門に作っている、尊爵家の医療火炎技術師がいるわ。ガラス器具も作れるし、金属細工もできる。お師匠様の道具も作っているのよ。平民の依頼は受けないのだけど、お師匠様つながりで受けてもらえと思うわ」

早速、ブリュノのつてで紹介してもらったことにした。道具を作るには、時間がかかるからだ。工場はまだ完成していないが、発注はしておかなければ間に合わない。

「メロディ・ル・ルー（Mélodie Le Roux）尊爵よ」

凄腕技術者と思いきや、可愛らしい名前だった。

「女性の尊爵なんだな」

何気なく呟いたら、エレンがあきれたように返す。

「知っていると思うけど、尊爵というのは、家ではなく個人に与えられる最上級の称号なんだからね。男も女も関係ないの」

「そうだったのか」

「だから、一つの家に二人以上の尊爵が出ることもありえなくはないわ。ファルマ君も成人したら、尊爵位を貰うかもしれないわね」

「すごいです、ファルマ様！ もしそうになったら、パーティーしましょう！ 盛大なおごちそうで！」

ロツテが尊爵と聞いて、浮かれていた。おおごちそうの部分に力が入るロツテである。

「もう、ロツテちゃん、あなた気が早いわ」

ファルマもいずれ尊爵として叙されるにきまっている、とエレンは確信しているようだった。ついでにいうと、ファルマの死後は神殿から薬神の化身として列聖、もしくは神格化されるのではないかとエレンは予想している。

郊外に居を構えるメロディ・ル・ルー尊爵は、この一年の間、誰の仕事も受けていないようだった。ファルマとエレンは、立派な城の玄関で、取り次いでもらう家令の老人と言葉を交わす。

「少し、お体をわずらっておられまして、静養しておられます」

と、家令は齒切れの悪い言葉を返す。

「私たちは薬師です、かかりつけの医師や薬師がいなければ、メロディ尊爵のお体を診ましょう」

それはちょうどよいところに来た、とファルマは診察を提案する。

「いえ、そういうわけには……」

「でも、お具合が悪いのでしょうか？　かかりつけ医がおられますの？」

エレンが家令に詰め寄る。具合が悪いと聞けば、何か患者の手当てをしたいのが薬師である。

「メロディ尊爵の病状がどのようなものであっても、私たちは秘密を守ります」

何か複雑な事情が裏にあるのだろうと察したファルマが、秘密の厳守を約束した。

「では……分かりました。もしも、もしもあなたがたがメロディ様をお救いできるのならと願ってやみません。驚かないでくださいね」

城の真ん中にある、高い円塔に案内された。長いらせん階段を登り、ようやくのことで頂上にたどり着く。

「こんなところにおられるんですか？」

そこは、どう見ても塔牢獄だった。二重格子のある石造りの牢の中央に置かれた椅子に、若いメロディ尊爵は鎖で縛りつけられ、が



つくりと頂垂れ、座ったまま眠っていた。後ろ手にされ、体は雁字搦めに椅子に縛られている。

「どうしてこんなことを！？ 彼女が何をしたというんです！？ 病人なのでしょう！」

非人道的な待遇を見たファルマは叫ぶ。

「違うわ、ファルマ君。これは……」

エレンが何かを察して、ファルマを諫める。

「メロディ様には、悪霊が憑いてしまわれました」

ある日、彼女は意味不明なことを叫びはじめた。来客に暴力をふるい、物を壊し、壁に頭をぶつけ、そして暴れた。メロディは、強力な火炎術師である。我を失って暴れるとき、あらゆるものを燃やしてしまうのだという。

「異端審問をされれば、拷問を受けるか殺されてしまいます。ですから……」

仕方なく、こうせざるをえなかったのだ。

「でも、神術は使えるんですね。それは、悪霊が憑いているからではないのでは」

ファルマはずばりと指摘をする。

「それは分かりません……どうしてあの、お優しいメロディ様

が、こんな変わり果てた姿に……私は悪霊が憎くてなりません」

家令はハンカチで目頭を押さえた。

「楽な姿勢で寝かせてさしあげたいのですが、ベッドも、掛物も無意識に燃やしてしまわれます」

メロディの、艶のある銀髪は短く切られていた。暴れたときに、長い髪を燃やしてしまったのだという。

「ずっとこうしているんですか？」

「ずっとではありません。日によって状態が変わります、状態がよいときはこのように……今日は状態がよいのです。発狂中に炎術を使うと、自殺行為につながりますので、格子のある部屋に入っていたいています」

「こんな酷いことをしていたら、ますます悪化してしまいます」

ファルマは家令からメロディの病歴、年齢、食生活や生活習慣等を聞いてカルテを書いたうえで、診眼を発動する。ファルマは脳の疾患を疑っている。

予想通り、脳のあたりに青い光がともっていた。

” 統合失調症、緊張型 ”

光は白くなる。抗精神病薬を組み合わせいくつか唱えると、光は完全に消えた。暴れるタイプの統合失調症には、薬が効きやすいのだ。

「これは治ります、というか完全には治りませんが症状を緩和できます」

ファルマは診療バッグをこそそとあさりながら言った。

「え？」

悪霊憑きになった者は、治せないのがこの世界の常識だった。神殿での異端審問官たちの拷問で悪霊を叩き出すしかなく、これに失敗すれば、回復の見込みは殆どなかった。拷問の途中に命を落とす者もいたが、諦めるしかなかった。

「悪霊をたたきだせるの？ 薬神の力で？」

エレンはファルマに耳打ちする。

「悪霊じゃないし、病気だから。治療薬はあるよ」

「これが、病気！？ 発狂してるのよ！？」

嘘でしょ、とエレンは驚く。

「心の病気だよ。この症状なら、比較的軽度な部類に入る。ですから」

家令に向き直った。

「鎖を解いて、彼女を檻から出してください。そして、温かい食べ物を食べさせて、ベッドで寝かせてあげてください」

ファルマはその日から彼女に最適な、抗精神病薬の治療薬を処方した。

ファルマは毎日のようにメロディのもとに通って彼女の話聞いて、細やかなカウンセリングをし、リハビリプログラムを組み、メ

ロディは少しずつもとの彼女の性格を取り戻しはじめた。暴れることもなくなった。彼女の髪の毛が少しずつ伸びてきたところには、すっかり表情も柔らかくなり、笑顔も見せるようになった。

いま、彼女の病状は急性期から、回復期に入りつつある。エレンは「本当に悪霊憑きじゃなくて病気だったんだ……」と、感服していた。

メロディは家令の言う通り、非常に温和な性格だった。

「ありがとう、薬師様。私はもう、悪霊に憑かれてしまい、我を失ってこのまま死んだほうがいいと思っていました」

「再発予防のために私がフォローアップをして、その兆候があれば適切な薬を処方しますので」

「これで安心しました」

メロディはほっとしたようだった。

「もしかして、薬師様は私に何か御用だったのでしょうか」

と、ある日、メロディはファルマに問いかけた。家令の話だと、ファルマは医療火災技術師としてのメロディをたずねてきたと言っていたから。彼は治療中に、用件を切り出すことはなかった。

「もし、気分が安定しているようでしたら、依頼を受けてくれますか」

メロディから言われてファルマは改めて、用意してきていた依頼書を手渡した。そのとき、二人の関係は患者と薬師ではなく、依頼者と技術者の関係に変わる。

依頼書には、見たこともない形をしたガラス器具や金属の器具が描かれていた。寸法、材料や仕様は正確だったので、何を作ればよいのかはわかる。

「とても難しい器具だと思います。作れないものがあっても、構いません」

ファルマは、彼女に無理難題を言っているというのは自覚していた。作れるものだけでいいから、と念を押した。  
しかし、メロディはいいえ、と首を振る。

「私の火炎神術の粹を尽くして、必ずご依頼にはこたえてみせましよう」

メロディは依頼書をみて、自信を持って断言した。

「全ての品物を納品します」

数週間後、異世界薬局に、依頼をした全ての有機合成に用いる複雑なガラス器具が納品された。それは想像以上に素晴らしい出来栄で、ファルマがイメージしていたものと遜色なかった。

< i 1 6 0 1 8 8 — 2 4 9 6 >

## 2章9話 檻から出た悪霊憑き（後書き）

次の更新は、30か31の12時台です。

### 【謝辞】

2章8話までの査読、考証を「やる気なし英雄譚」の作者で医師の津田彷徨先生がしてくださいました。

本当にありがとうございます。

その他、査読をしてくださった専門家の方は教えてください。

## 2章10話 薬神杖と、パツレ・ド・メデイシスの帰省

「明後日、パツレ様がお戻りだということです。料理長から教えてもらいました！」

ロツテはファルマの部屋の掃除をしながら、楽しそうに伝えた。

「え！？ 兄上が戻ってくる！？」

17歳の兄パツレ・ド・メデイシス、パツレ（丸薬）という気の毒な名前の兄が戻ってくるということだ。

「ほぼ一年ぶりになりますね。勉強や研修が忙しかったとか」

「ですので、明後日はおごちそうですよ！ デザートもたくさんあるそうです」

えへ、料理長に聞いたんです。と、ロツテは満面の笑みを浮かべていた。明日はおなかをすかせておかなきゃ、と意気込んでいる。

料理長は、ごちそうの前にパンをたらふく食べさせようとするけど、今回はおなかをすかせておくんですから、とロツテは警戒していた。

「よかったな、ロツテ。育ち盛りだもんね」

ファルマが微笑ましく思っていると、ロツテに言い返される。

「ファルマ様だって育ち盛りですよ！ パツレ様のことは覚えておられますか？」

「どうだっけ」

ファルマは、以前のファルマ少年の記憶を部分的に思い出すこともあるが、兄については全くといって記憶がない。直接会えば、これまでのように思い出すかもしれないが。

「パツレ様は旦那様譲りの優秀な水の神術使いで、よくファルマ様はしごかれていました。ブランシュ様もです」

おそろしや、おそろしや、とロツテは震える。

手加減なしでボコボコにしたりして、旦那様に「やりすぎだ」と怒られていましたねえ、と恐ろしい事を言っていた。

「しごかれてたのか、俺とブランシュ。俺はともかく、ブランシュまでって」

「パツレ様は愛の鞭と仰っていました。でも、ファルマ様もブランシュ様も、パツレ様のおかげで神術が随分ご上達されたんですよ」  
ノバルート医大から戻るたび、年中行事のように力比べという名のしごきをやるという。

ファルマ的には御免こうむりたいところだが、逃げてても無駄だ、地の底まで追いかけてくるというのがロツテの情報だ。ちなみに、一番ひどかった時はファルマは骨折したという。

「ところで俺、神術はエレンに教わったんじゃないかったのか」

「お二方とも、教えてくださっていましたよ。あ、でもパツレ様とエレオノール様は幼馴染ですが永遠のライバルです。お互いの前では、話題にしないような気を付けてください」

パツレとエレンは同じ年。お互いにプライドが高く、自分の方が薬師としても神術使いとしても上だと思って張り合っているのだそうで。

「貴重な情報をありがとう、ロツテ」  
地雷を踏んでは大変だ。

「そういえば、体が鈍ってたかな」  
一方的にやられても悔しいし、久しぶりに自主トレでもしておくかな、と、庭に出て白銀の杖で水系の神技の試し撃ちを何度かしていたところ。

運の悪いことに、杖が真っ二つに割れてしまった。

… … …

「ええっ！？ 新しい神杖が欲しい？ 持ってたじゃない」

翌日、薬局で話を聞いたエレンが大声をあげる。

「昨日、一人で訓練していたら壊れたんだ。俺、あれ一本しか持ってたから」



杖を持っていないとわかれば兄に半殺しにされる、とロツテが脅かすので、ファルマも今日中に調達しなければと慌てていた。

「上位神術使いの戦闘用神杖じゃないと、また壊れるかもしれないわ」

診療用を兼ね、多少戦闘用にもなる華奢なつくりのものでは、ファルマの神力を受け止められない。そう判断したエレンは、彼に相応しい神杖は帝都にはないのではないか、という結論に達した。

「ファルマ君、何で今更杖が欲しいの？ 杖なくても高度な神術も神技も使えるじゃない。戦闘用神杖は大きいから重いし持ち歩きに邪魔よ？」

確かにエレンはいつも、戦闘用と診療用を兼ねた上位神術使いの大きな杖を持っている。折り畳み式で携行しやすく工夫されたものだった。

「貴族は神杖を持ち歩いてないとダメだと言ってなかった？」

神杖というのは、神術を使う際に神力の伝達や神技の発動を助けるもので、思い通りに神術が使えるなら必要ないものだ、とエレンは説明をする。

「いや、でも欲しいんだよ」

「そんなに欲しいなら、皇帝陛下の杖を作っている神杖店に行ってみる？ 値は張ると思うけど」

「お昼休みに行ってみるよ」

「やけに急ぐのね、神杖は焦って選んでもいいことないわ。色んな店を回って、長い間悩んで決めるものよ」

何故そんな話になったのか、エレンは疑問に思ったようだ。兄が戻ってくるから必要なのだ、ということはエレンに言えなかった。ライバルだというのだから、面倒ごとになったら困る。

「失礼、薬神様。神杖をお探しですか」

口を挟んだのは、薬局の隅で聞き耳を立てていた守護神殿の神官長だ。神殿業務の休憩時間になると毎日のように薬局にやってくる。

そして、何やら（おそらくファルマに）祈りをささげ、薬を買って水を飲み帰っていく。薬を買っているのだけれっきとした客なのだが、日々の祈祷が主な目的のような気がしてならない、とエレンもファルマも思っている。

「あ、はい。その呼び方はやめてください」

何回ファルマが注意しても聞いてはもらえなかった。もちろん、客の前で大声でそう呼ぶことはなかったが。神官長がそう呼ぶたびに、ロッテはきよんとするのだった。

「薬神様に相応しい秘宝を我が神殿に取り寄せてございます。すぐにお持ちしましょう」

四属性神術の使用に耐え、攻撃用、診療、治療用を兼ねた「薬神杖」という秘宝があるという。守護神殿間では各神殿に祀っている秘宝を交換する習慣があるようで、神官長は無理を言って、いくつかの秘宝と引き換えにそれを取り寄せていた。

「貸してもらえますか？ また壊したりしたら怖いな。あと高価そうだから盗難も」

「盗難などありません、真の神杖は人間には触れられないものでございます」

「それ、俺も使えないんじゃない」

ファルマは不安になる。兄の手前、明日までに使える神杖が必要なのだ。人間に使えない杖を貰っても仕方がない。半殺しにされるだけだ。

「はっはっは、まさかまさか。御冗談を。あなたに使っていただけなら、神杖も喜ぶでしょう」

その日のうちに、神官長は20名もの警備の神官を引き連れ、馬車で薬局に乗りつけてきた。話の早い神官長だ。まさに秘宝らしく、警備の人員や厳重さが段違いだった。患者たちは、何事かと騒然とする。

神官長は裏口から店舗に入り、宝箱のようなものを恭しくファルマに献上する。宝箱の内側にはびつちりと幾何学模様が描かれていて、杖には鎖が幾重にもかけられ、神杖を封じているようだった。中身は人間には触れられないのだという。

薬神杖は大人の背丈ほどもあり、青みがかったクリスタル素材でできていて、美麗な装飾と、持ち手の部分にはいくつかの透明な宝玉、そして薬神の聖紋がついていた。

「うっとりするほど綺麗な杖。透明な晶石が5つもついてるし」

エレンは高価な宝石を見るように溜息を洩らした。

「晶石って何？」

ファルマが聞くところによると、晶石は神力をストックしたり、ブーストをかけるときに便利な、神力のバッテリーのようなものだという。大きく、透明に近い晶石が多くついていればいるほど、強大な神術が使えるようだ。そう言われて見ると、石はまったくの透明だった。

「いーなー、これファルマ君が貰えるの？ タダで？ 前の杖壊れてよかったわね」

杖マニアのエレンが大人げなく羨ましがる。彼女は珍しい杖の蒐集に余念がなかったので、羨ましいのだ。今、彼女が普段使いに持っているのは、青い晶石が2つついた長い杖だが、石のサイズはかなり小ぶりだった。

ファルマは宝箱の中に手をつ込んで、嚴重に絡みついている鎖を外し、両手で取り上げる。杖が軽いことに驚く。ファルマが手にした途端、杖は淡く青いネオンのように鮮やかに発光した。

「おお、さすがでございます。これはあなた様のものでございます」神官長は感涙に咽いでいた。杖の使い手が現れたことで何か宗教的な意味があるのだろうか、ファルマは知ったことではない。

「エレンも触ってみる？」

「え、いいの？！ わー！ 少しだけ触らせてー！」

エレンが喜んで手を差し出すのでファルマがそつと手渡すと、杖

は光を失い、エレンの手をすり抜けて床の上にゴトンと落ちた。

「は!？」

ファルマとエレンは同時に声を上げる。エレンは驚いてのけぞり、メガネを床に落としてしまった。

「申し上げましたように、人間には触れられない杖なのです」

神官長は面白そうに笑う。これは現世のものではないので、と言う。伸縮自在で、人の背丈ほどのサイズから、数十センチ程度にもなるらしい。

「なるほどねー。やっぱりファルマ君、そうだったのねー」

居心地悪そうに杖を拾い上げるファルマを眺めながら、エレンは思わせぶりに頷いた。神官長は、ファルマが杖に触れられるかを試したかったようだ。

ロツテが一人だけ意味が分からずに、「どうして人間に触れない杖にファルマ様が触れるのでしょうか」と首をかしげていた。そして、考えても分からなかったので、神官長に出すお茶を用意しにキッチンのある3階に向かった。

「神官長さん。この杖つてもしかして、浮力がある？」

ファルマはすぐに気付いた。手にしていると、体が浮きそうなほどの浮力を感じるのだ。

「はい、強い神力を通じれば飛べるはずです。古文書にはそう書いてあります、誰も試すことはできませんでしたが」

魔女が箒にまたがって空を飛ぶように、杖に乗って飛べるのだろうか。ファルマは神力を通じ、杖に腰かけてみた。すると、ファルマの体は宙に浮く。その場にいた者たちは驚いて、悲鳴に近い大声をあげた。

「杖で空を飛べるなんて、聞いたことないわ」

エレンがふらついて数歩後ずさった。

「人間には出せない出力ですから、前例もないでしょうな」

「それよりエレオノール様、メガネを踏みましたよ」

セドリックが気の毒そうに指摘すると、きゃー、とエレンはお約

束通り悲鳴を上げた。エレンは、集中を切らすとすぐにメガネを落としてしまうらしい。耳に眼鏡のつるがしっぴかりかかる、落ちないメガネが必要なんじゃないか、とファルマは思う。それにしても、「往診に行ったり、マーセイル領に行く移動時間が節約できそうだし馬での移動は時間がかかる。」

「空を飛んで薬師が往診に来たら、患者さんがびっくりして死んでしまわないかしら」

エレンは真面目にそんな心配をしていた。

「いいものをありがとう、神官長さん」

「喜んでいただけは何よりです。大神殿には、貴重な秘宝があります。そうだ、薬神様なら大秘宝の神聖文字が読めるかも。あれが何なのか、学者が何人集まってもまったくわからないのです」

神官長は興奮気味に話す。

「大秘宝……？」

「へー、とエレンもセドリックも感心する。二人とも、その存在すら知らないようだった。」

「一度、大神殿の大秘宝をご覧になってくだされば。小さな板状の半透明の秘宝で、青みがかった色に、黒髪の人物の精巧な絵と、神聖紋章と、神聖文字が刻まれています」

「へー、カードみたいだな」

ファルマは興味をそそられる。そういえば、黒髪の人間にはこの世界ではまだ会ったことがなかった。そこに描かれているのは、アジア系の人種だったりはしないだろうか。

「でも俺、神殿本部に乗り込んで行ったら、また殺されかけるよな」異端審問はもう勘弁してほしい。相手を傷つけないように戦闘したり、脅迫したりのコタゴタは疲れるのだ。神官長は、私が説明すれば異端審問はないでしょうが、と前置きをしたうえで、

「生ける薬神様の御身とわかれば、大神殿にお祀りされる可能性はあります」

「げっ」

ファルマは思わず声が出てしまった。

薬神云々は置いて、大神殿には近づかないほうがいい、とファルマは胸に刻む。

「私の配下の大神殿の技師に大秘宝の精巧な模造品を作らせて取り寄せましょう、ぜひとも一度見ていただいて、神聖文字を判読していただきたい」

レプリカを取り寄せるのは数か月ほどかかる、とのことだった。

… … …

「パツレ・ド・メデイス。ただいま戻りました」

翌日。三名の従者を引き連れ、意気揚々と、軍馬に乗って長旅から戻ってきたファルマの兄パツレ。引き締まった体つきをした精悍な雰囲気、ファルマとはあまり顔立ちの似ていない、長い銀髪をした碧眼の少年だった。

彼は真っ先に両親に挨拶を済ませる。

ブリュノは、ファルマが宮廷薬師として女帝じきじきの赦しを得て独立し、帝国勅許の薬局を創業したということについては、パツレがノバルート医大を卒業し宮廷薬師としての資格を取るまでは伏せておくと言っていた。

パツレの帰省は一週間ほどであるし、嫡男であるパツレを差し置いて、大学も卒業せず先に宮廷薬師になったとわかれば、パツレが勉学の意欲をなくして大学をやめてしまいかねないから、とブリュノは言う。ファルマもその通りだと思ったので、同意した。

何も知らないパツレは、ファルマの部屋にやってきて兄貴風を吹かせまくっていた。

「元気にしていたか、我が弟よ！」

「久しぶりだね、兄上」

ファルマは、ノバルート医大での寮生活、大学で何を習っている

のか、などの土産話を詳しく聞きたかったのだが、まずは兄として、軟弱な弟妹をしごく通過儀礼があるらしい。

「よし、ではさっそく夕食まで兄がしごいてやるぞ！ 少しは齒ごたえが出てきたか？！」

「雨が降ってるから、晴れてる時にしない？」

外は雷鳴轟く豪雨だった。ファルマは風邪をひかないが、兄は本格的に風邪をひくだろう。兄は少し鼻声だったからだ。

「雨ぐらいで勘弁すると思ったか？ 水属性神術使いはどうせ撃ち合えばずぶ濡れになるんだ。エレオノールなんかに教わってるんじゃない、根性まで貧弱だな。その根性、叩き直してやるぞ！」

そして兄は、恐ろしいほどの脳筋というか熱血漢だった。

ファルマは豪雨の中、無理やり兄に連れられてだっ広い領地内の原っぱに連れていかれてしまった。ブランシュは上手く逃げおおせたらしい。普段からロツテとかくれんぼ耐久戦をしているだけある。

（せめて豪雨の中でやりあうのは勘弁してくれ）

ファルマは右手の負の能力で豪雨をびたりとやませてみせた。

「何だ、雨があがったな。これはおあつらえ向きだ。杖を出せ、徹底的にやるぞ」

パツレは赤い晶石が二つついた、高そうな戦闘用の長い黒杖を抜き、ファルマは昨日入手したばかりの、腰に佩いていた薬神杖を、兄の眼を盗み長く伸ばして携えた。その価値を知らないパツレは、「まさかそんな装飾だけ立派なガラスの杖を買ったのか。形から入るやつだなお前は。杖ごとその根性も叩き割ってやる」

とご立腹だ。薬神杖は、持ち手の部分を両手で握ると、5つの透明な晶石を隠すことができた。パツレにはただの長いガラスの棒に見えるというらしい。

「いくぞ、ファルマ。お前の力、見せてみる！」

パツレは黒い杖を高く掲げると、大きく一回転回した。

「水の戯れ（Jeux d'eau）」

兄ははつきりとした滑舌で、杖を振りぬきざま発動詠唱を打つ。ロツテの情報によると、ノバルト医大でもパツレの神術の腕前は学年1、2を争うらしい。

無数の水の弾丸が、音速を超え衝撃波を発生させながらファルマに襲い掛かる。威力は手加減しているようだが、ファルマはひらりと跳んで避け、時に杖で打ち返し、攻撃をさばいた。薬神杖に神力を通じると相手の攻撃が非常に遅く見え、身体能力は高められてゆく。

「歯ごたえがあるじゃないか。どんどんいくぞ」  
それを見たパツレは、戦闘本能が疼いたらしい。

「水の精（Naïade）」  
エレンも手こずっていた上位神技を、難なく撃ってきた。杖より放たれた水は水の巨人となり、ファルマを押しつぶそうと襲い掛かってくる。

「水の竜巻（Tornade de l'eau）」  
ファルマも発動詠唱を打ち、巨人の攻撃は竜巻によって吸収される。巻き上げた水をそのまま手なづけて、

「水聖域（Sanctuaire de l'eau）」  
ファルマは兄を水の結界で包囲した。これで動きを封じたかと思えば、内部から水の砲弾を作り、物量で包囲をぶち破る兄もなかなかのもの。

「パツレ様、ファルマ様。お夕食の時間でございます」  
すっかり日も落ち家令のシモンが馬で彼らを呼びに来たところには、兄弟はまだずぶ濡れになって撃ちあっていた。一時間ほどぶっ続けで戦闘を行っていたのだ。兄は傷だらけになっていたが、ファルマは無傷だ。

「なかなかなやるじゃ……ない……か」



ファルマを指さしながら、兄は大の字になって草原にぶったり倒れてしまった。

顔が真っ赤になり、高熱を出している。ずぶぬれの訓練で本格的に風邪をひいてしまったようだ。ファルマは、その場で傷の手当をしたが、兄の風邪は治療せずしっかり熱を出させたほうがいいと思った。

「ほっほ、今回はファルマ様の勝ちでございますかな」

家令は髭をいじって、目を細めた。

「まだ決着はついてないって言うと思うよ」

その草原には強大な神力だまりが発生していたが、その場に神官がいなかったので誰にも見えなかった。

「はあ、また料理長にやられましたあ」

その日、ロツテは料理長の作戦通り焼きたてのパンを食べてしまった、思うように、彼女の言う「おごちそう」がお腹に入らなかったという。

## 2章11話 サン・フルーヴ大市と黒い噂

「でな、マリーアがどうしてもって言うから俺も付き合ってたんだけど……」

兄パツレの帰省3日目。パツレが9人目の彼女と別れたという話を聞いたところで、ファルマはもういいだろうと話の流れを切った。ブランシュはこっそりと自分の部屋に戻り寝てしまっている。

「そろそろ、ノバルート医大での講義でどんなものを習ったか教えてよ」

兄の大学での優等生ぶり、女性関係での武勇伝を3時間ほど深夜まで辛抱強く聞いた後、ファルマは本題に切り込んだ。脳筋兄は、美青年だということもあり羨ましくて鼻血が出そうになるほど正真正銘のリア充だった。丸薬などという変な名前ぐらいで丁度いいのではないか、というリア充だった。

この世界では、神術が巧みで脳筋であればあるほど男らしい、ステキ！ と女性から称賛されるようである。それでいうと、ファルマは薬学以外のプライベートな部分では積極的な性格ではないので、（俺は年頃になってもモテないんだろうな）

という灰色の青春時代が何となく予想できた。そのファルマにも、実はブリュノ経由で大貴族令嬢との縁談がいくつも舞い込んできていたのだが。本人は知る由もない。

「おう！ 講義か。お前も聞きたかろう。なにせ俺は世界最先端の学問を学んでいるんだからな。わっかんないだろうなー、お前には早いだろうなー。兄上え、ぼくちん全然わかりましえーん、って半泣きになるだろうなー。だーっはっはは、弟はバカなほどかわいいってやつだ」

「教えてくれよ」

繰り返すようだが、ファルマは煽られてもスルーできる性格だった。激昂しやすい性格なら、兄をぶっ飛ばしていただろうが。そして、煽り耐性のないエレンは、以前にパツレに馬鹿にされぶっ飛ばしてしまったのである。それを機に、互いが顔を合わせると果し合いになる、とのことだ。

「これが、ノバルートで今、一番熱い話題だ」

兄は勿体をつけてテキストを取り出した。「神秘元素学」というタイトルだ。ファルマはそれを受け取り、ぱらぱらとめくる。

「……すごいな！」

「だろう、わかるのかお前にも？」

「わかんないけど！」

ファルマは感動していた。世界最先端の頭脳の集まるノバルート医薬大では、神術の基本である従来の四元素説をいったん解体し、錬金術の中で使われていた化合物の神秘言語をより単純な記号の羅列に置き換え、思索ではなく現象の観察に基づいた学問を確立しようという試みが始まっている。

神話、伝承と神術と科学はそれまでは一体であつたのだが、それらを別個に理解を深めたほうがうまく自然界の現象の説明がつくのではと考え始めた学者も現れているようだ。

ノバルートの天才学者たち、医療錬金術師たちは、物質の最小単位を探索しはじめていた。

錬金術から、化学へ。

その萌芽が見えはじめていたのだ。地球の科学史と同じように。（やってくれたじゃないか、ノバルート医大。さすが世界の頭脳が集まってる！）

ファルマはこの動きを歓迎したかった。

化学反応式が書けるようになれば、物質の合成過程をファルマが書いて遠隔地に送ることができる。それらは写本され、レシピを残

すだけで世界各地で現代医薬品の合成ができるのだ。

「今、26の元素が見つかり、それに対応する記号が発明されているんだ」

「へえ！」

（地球上には118個あるけど、26個見つかっただけでもたいしたものだ）

テキストのページには、元素記号の一覧と名前が書いてあった。（あ、でも熱子と光子が入ってるぞ。それは元素じゃない、この4つは元素じゃない、化合物だ。惜しい！見つかったのは20個だな）

地球の化学史と同じ間違いを色々やらかしていた。

テキストの間違いを直せたら……ファルマはもどかしく思ったが、あまりに直す箇所が膨大なため、

（これなら自分でいちから教科書を書いたほうが早いな。その場合はこの世界で決まった記号を使って書いたほうが、受け入れてもらえそうだ。重要な部分は書き写しとくか）

というわけで、

「兄上、この本を筆写させてほしいんだけど、いいだろ？」

「はあ？ お前にはまだ早いぞ。基礎的なことが分かってないんだからな、基本をおろそかにして、応用はないのだ」

馬鹿にしたように弟を見くだす兄。だよな、だから基本を正しときたいんだよ、とファルマは内心反論する。

「頼む兄上、俺も頑張って勉強するから」

仕方ないなー、汚すなよ！ 手垢やインクつけるなよ！ と兄は勿体をつけながらもテキストを貸し出した。おだてればチョロいタイプの兄だった。

地球ではかつて、医学、薬学の新知識の中心はヨーロッパにあった。

しかし、現在の拠点は米国である。

医学、薬学の研究拠点がノバルト医薬大から帝都に移っても、構わないだろう。

父ブリュノが総長をつとめるサン・フルーヴ薬学大に優秀な人材を集め、現代薬学を学んでもらって、専門家を養成する。そうすれば、ファルマー一人に負担がかかることもなくなるだろうし、創薬研究も多くの専門家に任せることができる。仕事も捗る。マンパワーが多いほうが、科学分野は発展していくものだ。

「あとは、画期的な発見といえば顕微鏡（microscope）だな。あの装置が発明されて、これまで目に見えなかった小さな生物が見えるようになった！ 想像できるか、お前！」

「へ、へえー」

「反応が薄いな。お前には価値が分からんか、それとも微小世界を想像できるか。はーっはっは、だろうなー！」

「すごいや。どんな世界が見えるんだろうなー！」

前世では光学顕微鏡から電子顕微鏡まで、あらゆる性能の顕微鏡を操り、その気になれば原子まで観察できた薬学者を相手に、兄は見下して高笑いをしていた。釈迦に説法どころの話ではなかった。

（にしても、バレてなさそうだな）

ファルマがノバルトに単式顕微鏡を輸出したということは、兄には知られていないらしい。ブリュノと、宮廷医師クロードが、ノバルト医大に発明者の素性を探らせないよう圧力をかけたとみて間違いないだろう。

「もう一つ、トピックスがあるぞ。白死病（結核）の特効薬が存在するという噂がある」

ファルマはびくつとした。

「レシピは未公開みたいだけだな。すごいだろう、不治の病、白死病は治る病気になるかもしれんぞ！」

「へー、すごいなー」

探りを入れても、サン・フルーヴ国皇帝が白死病を患っていたと

という話は、ノバルートの学生レベルでは広まってはいないらしい。  
上層部のみ知る秘密なのだろう。

患者の個人情報流出していないようだ。

兄はその後も、ノバルート医薬大の功績をわがことのように自慢  
していた。

母校に誇りを持つのはいいことだ、とファルマは思った。

… … …

「今日は日曜だ、守護神殿に日曜礼拝に行くぞ！」

兄パツレはファルマと妹のブランシュ引き連れ、早朝からサン・フルーヴ帝都教区の、全属性の守護神を合祀する守護神殿に向かった。そういえば、父がファルマを守護神殿に礼拝に連れていったことなど一度もなかったが、兄は、見た目に似合わず信心深いようだ。ファルマはこの世界に来てはじめて、神殿というものの内部に足を踏み入れた。ブランシュは久しぶりだといってきよろきよろしていた。

「守護神様の加護がなければ、神術も勉強もままならんからな！」  
(なるほど、自信満々の兄が優秀な神術使いなのは、地道な礼拝の結果なのかもしれない)

そういえば、薬神杖持ちで身体能力の向上したファルマと熱を出しながらも長時間撃ち合い、それなりにいい勝負をしていた兄である。ファルマは兄の努力を垣間見た。

神殿の聖堂では、日曜礼拝の祭儀が行われていた。神殿には、貴族も平民も訪れる。

祭壇にいるのは、おなじみ、薬局の常連の神官長だ。

祭儀では聖書の朗読が行われ、神官長の説法と祝福儀が行われる。祭儀を終えた神官長はファルマに気付き、嬉しそうに小走りで近づいてきた。

「とうとうお越しただけましたか、ファルマ様。ようこそいらっ

「しゃいました！」

常日頃から、ファルマは神官長から神殿に来てほしいと勧誘されていたものだ。ファルマが守護神殿に入るだけで、神殿が浄化されるだとか聖域になるだとか言っていた。神殿の床に埋め込まれた紋様が、ファルマが床を踏むたびに青白い光を放っている。

（うへえ……なんか光ってる）

何が起こっているのか分からないファルマは、自身が引き起こす変化を見てもただ不気味で、得体のしれない不安を感じるだけだった。

「ちょ、お前っ！？ 何で神官長様がお前なんかの様づけで話しかけてくださったんだ」

兄は、帝都でもっとも権威のある守護神殿の神官長がファルマに恭順な態度で話しかけるので、面くらって耳打ちする。ファルマは、「薬神」という迂闊な言葉が喉から口まで出かけていた神官長を制し、ちよつとこちらへ、と兄妹から少し距離を取った。

「薬神杖の調子はいかがでしたか、気になっていました」

神官長は、薬局がパツレの帰省にあわせて数日休業していたので、聞くに聞けなかったようだ。

「気に入りました。持っているだけで身体能力が高まる感じがして」

「それはよかった。杖は積極的に使ってください」

秘宝と呼ばれる杖をファルマに無料で与えたり、この神官長、氣前がよすぎる。何か裏があるのではとファルマは勘ぐる。骨折の手当をした恩は確かにあるが。

「守護神殿の秘宝を俺が使ってもいいんですか？ 秘宝喪失で上から怒られません？」

「こちらにも益はあります。あなたの周囲には小さな聖域が発生しています。薬神杖は神力をより拡散しますので、聖域も拡大します。それが、秘宝の正しい使い方でございます」

「聖域が発生してる！？」

初耳だった。

「異世界薬局には病人が毎日のように来るにもかかわらず、職員は風邪ひとつひいていませんね。小さな怪我もしていない筈です。薬局の周囲に住む人々もそのはずです」

神官長の話だと、ファルマの周囲は悪霊が近づけず、人間は病気になるにくくなる、というのだ。神官長はそれを観察していたようで、ただ薬を買いに来ていただけではないらしい。

「風邪をひいていないのは、たまたまだと思いますけど。それに、悪霊なんているんですか？」

オカルトにしか思えない。だが、神官長は、  
「何をおっしゃる、悪霊は実在しますよ」

と、さも当然のことにように答えた。

ファルマは真に受けなくなかった。神術が存在する世界なのだから、完全に否定するのも違うような気がする。だが、ファルマは悪霊を見たことがない。

「私には何も隠さなくてよいのですよ。私は神官でございます」  
神官長は、彼なりの気遣いをする。

「はあ」

「そのように正体を隠しておられたら、思うように神力を揮えず窮屈ではありませんか？」

「何のことでしょう」

のらりくらりとはぐらかすファルマを、神官長は気にかけているようだった。

「私も、神学を学んでまいりましたが神官のはしくれでございます。些細な気がかりでもございますれば、この神官長サロモンめにお申し付けください」

何かご助言できることもあるかもしれませんが、とサロモン神官長は言った。

「穢れの多い世ではありますが、できるだけ長く、あなた様に現世



にいらしていただきたいので」

伝説によると、神々とその化身が現世に現れるのはほんの束の間だという。穢れを嫌って隠れるのだと。

ファルマはこの世界で一生生きてゆくつもりだったが、神官長にそう言われて、世界の異物である彼の存在が、いつか消滅してしまう可能性に思いを馳せた。

（俺、割とすぐ消えてしまうんだろうか……）

何ともいえない気分でファルマは兄と妹のもとに戻る。

「何のお話だったんだ」

「たいした話じゃないよ。兄上、悪霊つていると思うか？」

「そういえば、帝都に戻ってから見てないな。神官様が悪霊を退治して下さっているんだろうな」

兄はいわゆる、見える体質のようだった。

「最近、悪霊いないよ。すっかり見なくなったよ」

ブランシュもそう言う。悪霊は黒い影で、そこかしこにいて、人に当たると不幸なことが起きるのだという。悪霊に当たった途端に死んだ人を見た、とブランシュが言う。

（スピリチュアルな兄妹だ……まあ俺の存在もスピリチュアルか）  
ファルマは半信半疑だった。

「それもこれも神様のおかげだ。守護神様にお祈りをするぞ」

「あい」

ブランシュも手をあげる。

神像が祀られている礼拝堂に入る。広く、静かな祈りの場で、ステンドグラスの光が幻想的だった。

兄は薬神の神像の前で目を閉じて熱心に祈りをささげる。兄の守護神は薬神である。ブランシュの守護神は水神なので、少し離れた神像の前に行った。

兄の祈りの言葉に呼応するように、ファルマの隠された両腕の雷状の紋が疼き、薬神杖は輝きを増した。兄の祈りが、ファルマの糧

になっているかのようなだった。薬神とファルマの正体の間に、多少の相関関係はありそうだとファルマも認めざるをえなかった。

（俺はいつたい、この世界の何なんだろう？）

ファルマは、自身のアイデンティティが定まらず、正体すら分からないことに強い不安と孤独を覚えた。

人を癒したいと願い続けて死んだから、異世界の薬神に関係する何かになってしまったのか。

（わからんな。想像するしかないことは、考えるまい）

……ファルマは考えるのを後回しにした。

兄が一週間の帰省を終え、ノバルト医薬大へ帰る日になった。ファルマとブランシュと、母、そして使用人たちが見送る。父は診療で早くに家を出ていた。

「では、母上。また勉学に励んでまいります」

「しっかり勉強するのよ」

母は立派に成長した兄を見送り、目頭を押さえていた。

「ファルマ、ブランシュ、お前たちも達者でな。俺は早く帰らないと」

「何か用があるのか？」

ファルマが問うと。

「一週間も俺に会えないと、ナタリーが寂しくて泣き暮らしているだろうからな！ モテすぎるといいうのも辛いもんだぜ、はーっはっは」

くそう、なんてリア充なんだ、そう思いながらファルマは手を振って馬を見送ろうとすると、

「そうだと、ファルマ。来月には帝都でサン・フルーヴ大市があるんだっただな」

ふと、兄は何かを思い出したように真面目な顔つきになった。サン・フルーヴ大市とは、帝都の商業地区で開催される年に一度の大

市で、一ヶ月間にわたって開催される。世界中の商人が集まる、夜を徹して行われる一大卸売市場であった。

「気を付けるよ」

何に気を付けるというのか、皆目見当がつかない。薬局の評判が国外にも聞こえ始めているので、医薬品の盗難には気をつけなければならなかったが、兄はファルマが薬局を開いていることを知らない。

「ネデル国植民地の大きな島で、流行性の奇病が発生したらしい。千人程度の住民が全滅したようだ」

「現地病か何か？」

「詳しくは分らん。ノバルートの調査団が、試料を持ち帰って大検査をしていたんだ。検査をしていた学者も二人死んだ」

（感染性の何かなのか）

ファルマは警戒を強める。

「学者の遺体と試料を焼却したのもう犠牲は出ていない、島民も全滅したので終息はしたが、気を付けるよファルマ。大市には世界中から商品が集まるからな。その島との交易品を積んだネデル国の船が、行方不明だそうだ」

ネデル国の貿易船の中に紛れ込んで、病原体を積んだ荷物が帝都にやってくるかもしれないということだ。ネデル国の貿易船が就航できるのは、帝都ではマーセイル港だけだ。

（水際で阻止しないとイケないな）

ファルマは気がやる。

「兄上、その、患者から取った試料はもう完全に焼却して残っていないのか？」

「ない、火炎神術で焼却したからな。遺体の骨すら残らんさ。作業をしていた試料室も風の神術で浄化して封鎖した」

ノバルート医大をして手におえない代物だと、判断したということだろう。

サンプルを焼却するのは、確かに安全ではある。ファルマは兄に、

死亡した学者の病状と経過を尋ねてみる。その症状を聞けば聞くほど、ファルマは嫌な予感がした。

（まさか……）

「そういえば、採取された試料に多く存在した生物を顕微鏡でスケッチしたものが残っているな」

ファルマの単式顕微鏡が、図らずもノバルートの地で即戦力として活躍していた。

「兄上。そのスケッチを何とかして筆写して、手紙を伝書鳩で送ってくれないか」

「お前が？ 何のために」

「父上と一緒に、それについて調査してみる」

「そうか。父上になら何か分かるかもしれんな」

尊爵である父のことを、兄は大いに尊敬しているらしい。彼の名声はノバルートにも聞こえているという。

薬神杖でノバルートに飛んで行くには、遠すぎた。ファルマはただ杖で浮くのが精一杯だったので、遠距離飛行用の伝書鳩を飛ばせたほうが速い。

「学長の許可が出たら、筆写させてもらおう」

ファルマは、大事な情報の収集を兄に託した。

… … …

サン・フルーヴ大市の開催まで、あと2週間。皇帝に大市の中止を今から進言したとしても、積み荷は世界中から集まってくる。

それが杞憂であっても、事前に打てる限りの感染症対策を講じ始めるべきだとファルマは思った。感染が終息したようにみえて、荷の到着とともに帝都でアウトブレイクが始まってはいけない。

ファルマは通常の薬局業務に戻り、重症の患者だけ診て軽症の患者はギルド提携薬局に送りながら、マーセイル港に検疫所を設ける

よう指示した。また、基礎化学、現代薬学のテキストの編纂を急いだ。ファルマがこの世界から消滅してしまったとしても、テキストがあれば、この世界の人々を癒し続けることができるだろう。そう思ったからだ。

待ちわびていた兄からの伝書鳩はすぐに届いた。手紙を開いてみる。ファルマは固まった。

（この世界にも、こいつがいたのか……）

確定はできない。病原体の試料は焼却してしまったというし、似たような形の細菌はほかにもあるし、異世界の病原体だ、別の種類かもしれない。診眼にかけるまでは断定的なことは言いたくない。

それでも、ファルマには見覚えがある。

兄に聞いた患者の症状から総合的に推察すれば、そこに描かれていた細長い棒状の細菌のスケッチは。

ペスト菌（*Yersinia pestis*）。

それはかつて地球上では黒死病として恐れられ、14世紀の中世ヨーロッパで大流行し、人口の3割を死に至らしめ、史上もつとも人類を苛んだ悪夢の病原体であった。

腺ペストの死亡率は50〜70%、そして重症化し肺ペストを発症した場合。

死亡率は100%である。

## 2章11話 サン・フルーヴ大市と黒い噂（後書き）

次の更新は3日か4日の12時です。

ペスト菌イメージ（実物ではありません）、実物の色は透明です。  
グラム染色をすると陰性（赤色）になります。

<i160558—2496>

## 2章12話 黒死病の上陸

「素晴らしい偉業だ、まだ一年も経っていないというのに」

皇帝、エリザベートⅠ世は、宮廷内の大会議場の席で側近たちから帝都の出生率、死亡率の年次統計報告を受け感嘆の声を上げた。皇帝はご満悦だった。帝都の今年の死者数が前年比2割ちかくも減っていたからだ。

各地方都市での死者数統計は例年通りの水準であるが、帝都だけ激変している。

「帝都だけこの数字なのは、異世界薬局と、業務提携している調剤薬局ギルドの成果ではないのか？」

臍原目に見なくても明らかではないか、とエリザベートは言いたげだ。

薬師ファルマが宮廷薬師となつてから、顕微鏡の発明を皮切りにこの一年たらずでやったことかというと。

異世界薬局・総本店の創業と、数々の新薬の発明。

水銀、鉛などの毒物を含む製品の人体使用への規制。

薬用化粧品専門店「MEDIQUE」、オーラルケア専門店「8020」の開店。

調剤薬局ギルドの設立、ギルド加盟店での新薬販売。

公衆衛生講座の開催。

さらには帝国の運営する施療院を往診し、患者たちに薬を処方したり、医師たちに治療の指導をしたりもした。

どれひとつとっても、功労賞級である。それを僅か一年そこらで同時にやってのけるのは、人間わざではない。

それに、公衆衛生講座や顕微鏡の発明によって微生物の概念が生じたことが功を奏したか、人々は清潔を心がけるようになり、帝都

での流行性疫病の発生件数はかなり低くなっていた。毎年のように流行性の風邪にも悩まされていたが、これも今年は小規模にとどまった。

「はっ、軽々には申し上げられませんが、私も同感でございます」  
気難しく保守的な老臣、国務卿フィリップもとうとうファルマの業績を認めた。

「卿らもそう思わんか」

「ごもつともでございます。帝都での成功が各地方都市にも広まれば、帝国の繁栄はゆるぎないものに」

内務卿ヨアンも、女帝の問いに首を縦に振る。ヨアンは、子供店主が経営するという薬局に帝国勅許を与えることを決っていた大臣だ。

女帝の小姓から準騎士に昇格したノアは、これまでは何かと女帝に強気な進言をして側近たちに鬱陶しがられていたファルマの功績が、ひとまず公の場で認められほつとしていた。

そうとなればまた何か褒美をやらねば、と皇帝は会議をそっちのけで頭を悩ませはじめた。

「ファルマに尊爵位は早いかのう、ベレニス？」

「ファルマ師はまだ成人しておられませんので、帝国法では未成年の爵位の授与は認められておりません」

今年就任したばかりの、美貌の女性司法卿ベレニスが、慌てて皇帝をいさめる。帝国法をコロナ変えてもらってはこまります、と。ちなみにベレニスは、MEDIQUEの薬用石鹼を愛用していた。

「うむ、やはり早いかな」

女帝は勇み足だったかと反省したようだ。

「帝都市民からの評判も上々でございます」

国務卿フィリップは、市井の評判を耳に入れていた。異世界薬局にかかった患者については、瀕死の重病人を除けば死者は殆どいな



い。また、フィリッポ自身も痛風という持病を持ち、かかりつけ薬局になっていた。毎週のように薬を取りに行く患者の立場で、主治薬師の批判などできるわけがないのである。

少年薬師ファルマに、人外のものが憑いた。

エリザベートは徐々にその確信を得つつあった。エリザベートは、父ブリュノについて修行のために宮廷に出入りしていたファルマを8歳の頃から知っている。だが、その頃の彼とは人格そのものが違うように見えて仕方がない。

何が憑いているかは定かにすべきではない、というのがエリザベートの見解だ。彼に秘められた規格外の神力は決して邪悪なものではないことを保証しているし、神や聖霊が憑いているのであれば、人間に正体を暴かれるのを嫌う。正体を暴いたがために、人界を去られてしまっただけではない。

そこでエリザベートは、ファルマが帝都で動きやすいようあらゆる便宜を計らってきた。彼の意向に沿っていけば、早くもこの成果である。

「さて、サン・フルーヴ大市の準備は整っておるか」

「はっ、例年通りに。帝都のギルドや商人たちは、商品の準備に余念がありません。外国の商人も続々と集まってきました」

大蔵卿エルマンが、黒縁メガネに手を添えながら、部下の大市監督官とともに準備状況を女帝に奏上する。女帝は、ふと思いついて念押しをする。

「帝都の風紀に乱れないように。また、問題を起こした者は身分を問わず帝都から叩き出せ」

「は、厳しく取り締まります。ひとつ、気になることが」

エルマンは事前に、例年にはなかった兆候を見抜いていた。

「事前の行商人登録簿を見るに、今年は外国の薬問屋や上級薬師の数が多くございます」

「異世界薬局とその提携薬局に、医薬品を買い付けにくるのだろう」  
医薬品を国に持ち帰り、王侯貴族へ高く転売するのが目的だとみえる。だが、ファルマを店主とする異世界薬局は調剤薬局であるので、患者を診て直接処方する。患者でなければ処方しない、売らない。

いっぽう調剤薬局ギルドでは、総本店の異世界薬局ほど効果は高くないもののよく効く新薬を扱っているので、それを買って帰る目算だろう。

「大市の開催中、異世界薬局の薬は各国の薬師に狙われるだろう。あの薬局は我が帝国の至宝であり、財産だ。薬師ファルマともども、手放してはならん。ファルマ個人には最高の護衛を、薬局の職員一人一人にも警備をつける」

皇帝はファルマを囲い込み、自由に医薬品を製造させつつ、帝国の対外競争力と国益を維持する目論見だ。異世界薬局とその関連薬局の医薬品は、帝国に巨万の富を齎すだろう。

「御意」

側近たちは全面的に女帝に賛同した。

… … …

「黒死病がサン・フルーヴ大市の荷に混じって、押し寄せてくるかもしれません」

そのころファルマは、サン・フルーヴ医薬大学の総長室に乗り込んで、父に迫りくる大疫病の危機を伝えていた。父は総長としての事務と研究で忙しく、屋敷に戻ってこなかったのだ。

「うむ、ネデル国植民地島が謎の疫病によって全滅したのだな。私の耳にも入っておる。まだ、ノバルトでも病原の見当がついておらんが、お前は黒死病だと思うのか」

ペスト、この世界で言う黒死病は、210年前に流行したのが最後だった。ブリュノは過去の文献を読み解き、黒死病の恐ろしさを認識していた。患者の皮膚に紫黒色の出血斑を残すことから、黒死病と呼ばれたその感染力は凄まじく、いくつかの都市を患者ごと火炎神術で焼き滅ぼしようやく収束したという。

「私は黒死病だと考えます」

「黒死病は根深い。収束したとみえて、何度も再燃すると文献にはある。死病の島と取引された船荷の一部は、陸路で帝都に入ってくるかもしれない。植民地から直接サン・フルーヴ大市に売りつけにしようとする商人の船は、マーセイル港に着くだろう」

「事後報告になってしまいましたが、マーセイル港に検疫所を設けるよう指示しました」

「うむ、よい判断だ」

ブリュノはファルマの措置を評価した。

「黒死病が帝都に入ってきたら、帝都は終わりだ」

黒死病に効く薬は存在しない、医師や薬師にできることは死者を数えることぐらいだと、ブリュノは言う。人口密集地である帝都で黒死病が発生すれば、帝国滅亡も現実味を増す。

帝都の災禍を神術の炎によって焼き払わねばなくなる。

「なにしろ我々には、黒死病と戦うすべがない」

「いいえ、戦えます」

ファルマは即答した。

「本当か！？ 誰もその本性を知らぬ不治の死病だぞ」

ブリュノはファルマの言葉におののいているようだった。

「戦えます。白死病のときと同じように、私には武器があります」  
ペストに有効な薬は抗生物質（抗菌薬）であり、地球ではいくつもの薬剤が開発されており、選択肢も多い。……なのだが、マーセイル製薬工場が完成していない状況で、わずか数日で準備でき、こ

の世界の実験室レベルで大量に合成できる薬は今はなかった。抗生物質は、カビや菌などの微生物から抽出することができるものなので、この世界でも培養技術が整えば、どの国でも扱えるようになるだろう。

だが、今回の準備期間はわずか数日。ファルマの物質創造能力で備えるしかなかった。

「ど、どのようにして戦うのだ……」

ブリュノには見当もつかなかった。黒死病が何を媒介にして広がるのかすら、この世界のどの学者もわかっていなかった。

「特効薬はもう、準備しました」

ファルマは、合成抗菌薬を準備した。

彼が選んだのは、スパルフロキサシン（SPFX）だ。

ペスト菌のDNA合成を阻害することによって、細菌の増殖を妨げる薬剤である。

注射ではなく、口から飲める、それが都合がよかった。注射を扱うにはリスクが大きいので、技術基盤が整わないうちはファルマは使いたくない。この薬は一日一回飲めばそれでいい。副作用が起これる場合もあるが、それは光線過敏症で、日光になるべく当たらないければ、薬剤師が服薬管理する限りはそれほど重大なものはない。これなら、日々研鑽を積んでいる調剤薬局ギルドの薬師たちに服薬指導を任せることもできる。

ファルマは事前に、このスパルフロキサシンを物質創造で創っていた。

構造が複雑であるため集中力を切らし、へとへとになりながら、それでも患者1000人分が完治できるだけの量を用意した。

さっそく、新薬の処方研修会を行い、患者の診断方法、処方の仕方薬師たちに教え込んだ。どの薬師にも、というわけにはいかない。ギルドに加盟したばかりで、知識や技術が未熟な薬師には取扱

いを禁じた。

もし、ペストが出た場合、新薬スパルフロキサシンは無償で提供することを厳命した。ペストほど強力な感染症には、薬価など気にせず、躊躇なく処方することが大切だ。

現在、関連薬局に薬を配布し、分包を任せているところだ。もしペストが発症せず今回は必要なくとも、ほかの感染症にも使える薬なので、薬は決して無駄にはならない。

調剤薬局ギルドの薬師たちは、かつての悪夢、黒死病が再来するかもしれないと聞き、戦々恐々としていた。

「帝都の薬局薬店に、治療薬は備えました。感染者が出ないようにすることが、最初の戦いです」

ファルマとブリュノは、予防策をとりまとめ皇帝に進言をした。

・ サン・フルーヴ帝都の城門を制限し、帝都に入ってくる商隊の陸路を数箇所限定する。

・ 城門の関に顕微鏡微生物検査部を備えた検疫所を設ける。

・ 帝都の市民は水の神術使いの生成した水を配給し、それで手洗い、入浴をし清潔を徹底する。

・ 各家庭、店舗等のネズミ、ノミを駆除する。

ファルマと女帝の日頃の信頼関係があったからだろう。女帝は「すぐやるぞ、今やるぞ」の精神で、すみやかに勅令の発布を行った。もともとエレンを講師とする異世界薬局の公衆衛生講座によって庶民に啓蒙され、改善されつつあった帝都の衛生環境は、土壇場になってさらに改善された。ネズミの駆除は、地下用水路の水まで浚って行われた。子供たちや猫たちは、こぞってネズミを捕まえた。

検疫所には、常日頃から講習を受けさせた調剤薬局ギルドの薬師を、持ち回りで派遣した。彼らは帝国に臨時に雇われ、ファルマの

用意した簡易検査キットと顕微鏡で、ペスト菌を発見できるよう訓練されていた。調剤薬局ギルド加盟店は、このときまでに19店舗になっていた。彼らは行商人たちとその荷の検査を行い、帝都への病原体の侵入を阻止し続けるだろう。ギルド長ピエールが先頭にたって彼らを監督し、検査を助けた。

ファルマから事情を聞いた神殿、帝都教区のサロモン神官長は、浄化術にすぐれた風の神術使いを各地の守護神殿から集め、帝都をくまなく浄化して回った。

そしてファルマとエレンは、マーセイル領に張り付いていた。ネデル国船の入港してくるのはマーセイル港のみだったが、サン・フルーヴ大市に間に合うよう、世界中から船に乗って積荷が集まってきているからだ。

そのマーセイル港では、船主や乗組員たちの不満が爆発していた。ファルマは、マーセイル港に入港しようとしていた全ての船舶を海上にとどめ、接岸させず、検査を行っていたからだ。

地球では常識となっている、海上検査である。

ファルマは、海上に停泊している全国各地の大型帆船に小舟で乗りつける。乗組員全員、診眼を使ってペストに感染していないかを診察し、あらかじめ抗菌薬の予防服薬をしたエレンと手伝いの一級薬師、父の配下の火炎術師は防護服を着て積荷の微生物検査を行った。

そして、ネデル国籍の船舶を中心に、およそ2%の船からペスト菌は検出された。すでに発症していた乗組員も、死亡していたものもいた。ファルマはすぐに帝都に伝書鳩を飛ばし、ブリュノにこの一報を知らせた。検査を強化しろと。

ペスト菌が発見されると、火炎術師が焼却を行い、ファルマが薬神杖で神力を当てペスト菌を死滅させる。

保菌者は隔離され、抗菌薬の投与が行われた。

「信じられないわ、本当に黒死病が蘇ってしまったただなんて」

エレンは、ファルマの抗菌薬がなければマーセイル港はとくに死の玄関港となっていただろう、と戦慄を禁じ得ない。それを、ほぼ綱渡りの状態で水際で食い止めている。

だが、彼らの奮闘とは裏腹に、何のための検疫なのかすら、船乗りたちには理解ができていなかった。2日も停泊をしている船や、荷揚げを焦っている者たちからは、囂々たる非難の声がファルマたちに浴びせられる。

「早く荷をおろさせてくれ。去年まで検疫なんてなかっただろう、今年のマーセイル領主はどうかしてる」

「今日中に荷物を揚げたいんだ。馬車の手配をしている」

「こつちを先にしてくれ、果物なんだ、積荷が腐る」

「何で検疫をする薬師に子供が混ざっているんだ、どうなってるんだサン・フルーヴ帝国は」

「順番を守らんか！」

ファルマたちはほぼ働き通しで検疫を行っていたが、検疫は一日に20隻もできればいいほうで、それなのにサン・フルーヴ大市を目指す帆船は次々にやってくる。マーセイル港に入港しようとする船舶は膨れ上がり、船乗りたちの不満はやがて、抑えられないものになっていった。

「うるさいわねえ……ちょっと口をつぐんでいてもらおうかしら」

エレンが杖を構え、我儘を通す船に水の神技をお見舞いしようとしていたところ、海上に砲弾がぶち込まれ、大きな水柱が上がった。エレンはまだ神技を放っていない。

「へ？」

エレンは眼鏡をかけなおす。ファルマも大きな音に耳を塞いだ。

「ごたごた言うな！ 帝国の港に入るからには、帝国の流儀に随え！」

大声で一喝。砲撃のあつた方角に注目が集まる。すると、帝国の紋章とS・I・Oという文字のあしらわれた艦旗をはためかせた、美しい4隻の大型帆船が悠然と現れた。マストの上には狙撃手が銃口を向け、砲門は開いている。

数十門の砲門を搭載した旗艦の艦首から、サン・フルーヴ帝国勅許 東イドウン会社（S・I・O） 連合艦隊提督、ジャン・アラ・ン・ギャバンが腕組みをして見下ろしていた。

異世界薬局の常連、”船乗りの飴”の愛好者、ジャン老人である。彼は泣く子も黙る、東イドウン会社の提督であつた。異世界薬局の子供店主ファルマが、サン・フルーヴ港の海上検疫のために、海の荒くれ者たち相手に奮闘していると聞き、戦艦を出したのだ。

「いいかてめえら、耳の穴あかつぽじつてよくきけ！」

ジャン老人の声はよく海上に響いた。小舟から彼を見上げたファルマは、提督服を着たジャン老人を見違えた。いつもはボロのシャツ一枚で、ひよこひよこことやってくる気のいい常連客が、鬼提督に豹変していたのだから。

「積み荷を海にぶちまけられたい船から名乗りをあげろやあ  
てー！」

また砲門が火を噴き、水柱が上がった。

丁度、ファルマは紅茶を積んでいた船の検疫をしようとしていたところだ。このままではボストン茶会事件ならぬ、マーセイル茶会事件が起こってしまう。

大戦艦の提督に、もはや反抗的な態度を見せる船はなかった。こうして、帝国艦隊がにらみをきかせ続けたことにより、各国の中小の帆船はおとなしく検疫を受けることになった。

「ジャンさん、……いえ、ジャン提督。お世話になりました」  
ファルマは区切りのよいところで、ジャン提督の船に乗り、感謝



の言葉を述べる。

「なあに、いいってことよ。それよりいつまで薬局を休むんかのう。わしゃあ、寂しいでの中」

船乗りの飴を、ジャン提督はほかの提携店ではなく異世界薬局で買いたいようだった。

「お前さんの飴のおかげで、壊血病になる船乗りが減ったんじゃ。今度、長い航海にでる船の船員のために、飴を大量発注しようと思うんじゃがのう」

いい笑顔でそう言ったジャン提督は、彼の趣味で飴を買っていたわけではないようだった。長期航海に出た少数の船乗りに与えて、その予防効果を確かめていたようだ。

「注文、お待ちしておりますね」

それは、サン・フルーヴ大市が終わってからにしてください、とファルマは言った。

マーセイル港に入ってくる船も、海上検疫もピークを過ぎ始めたころ、

「ファルマ様、エスターク村の村人に、高熱を出したものが多数と」  
マーセイル領主館の代行領主アダムのもとに、ある報告が入ってきた。

玄関港マーセイル港からの入港が遅れると踏んで、小さな漁村の港から夜間に密入国をし、積み荷を陸揚げしたネデル国船が現れたというのだ。

最初は、村人の誰もが高熱だと考えていたが、死者が一人、二人と出始め、やがて一気に流行が始まった。最初の死者発生から二日たって、村長がアダムに報告に来たのである。

積み荷の中に紛れていたネズミのノミに刺されたのだろうか。感染ルートはもう、特定できまい。

「分かっていたのに、阻止できなかったか……」

ファルマは悔しさをにじませる。彼を全力で支えてきたエレンも、

疲労困憊のファルマにかけける言葉が見つからなかった。

「すぐ行くよ」

「行くの？ 黒死病におかされた村に！？ あなたも感染して死んでしまうかもしれないのよ！？」

エレンは、ファルマが全く躊躇なく村に入ろうとしていることに驚きの声を上げた。ファルマは静かに答えた。

「行くよ。俺は多分感染しないから……したとしても、自分で治すから」

「私がいくわ、ファルマ君に言われたとおりに薬を処方すればいいんでしょ？」

この大災厄に、一人の薬師として、背を向けて逃げたくない。エレンはそう思った。黒死病を見分けられるのは、ファルマだけだ。だから、検疫を続けるのは彼でなくてはならない。

「エレンはここにて検疫を続けて、海の玄関を守ってくれ。時間はかかるけど、地道に検査をしていけば見つかる。たのむ」

ファルマは言い残すと、薬神杖に神力を通じ空に舞い上がった。

「ファルマ君！ だめよ！」

エレンの彼を呼ぶ声が、マーセイルの青い空に響いた。

かくして、ペスト菌は大陸に上陸した。

最初の流行地は、人口524人のマーセイル領の漁村だった。

薬師ファルマ・ド・メデシスはエスターク村に向かった。

< i 1 6 0 7 7 8 — 2 4 9 6 >

## 2章12話 黒死病の上陸（後書き）

次の更新日は5日か6日のお昼ぐらいです。

< i 1 6 0 7 7 7 — 2 4 9 6 >

ペストの治療薬、スパルフロキサシン（SPFX）

ペストに有効な薬は、ストレプトマイシンなどほかにもいろいろあります。

## 2章13話 脚光を浴びた放線菌と、エスターク村の奇蹟

ファルマとエレンが、海上検疫で最初の黒死病患者を発見した数日前の話になる。

ブリュノ・ド・メディシスは、サン・フルーヴ帝国薬学校にいた。帝国の各都市、世界各地の医薬大学に、黒死病に関する防疫、検疫指南の書簡を、夜を徹して書いていたのだ。各地の実情に応じた内容で、地形、人種、生活文化、風習、宗教などを考慮し、それぞれに内容を変えて簡潔にしたためた。ファルマの言葉を中心に、もし黒死病が発生したらどうするか、隔離地域の設け方、患者との接し方、顕微鏡がある場合とない場合の黒死病の見分け方、患者の安楽死の迎えさせ方、死体の処理方法など。

これらの黒死病対策案に加え、全属性のすぐれた神術使いが防疫に積極的に参加するようにと強く要請した。指南書を書くのは、日頃から各地の研究機関、病院、有力者たちと信頼関係を築き、各地の医療事情を知っていたブリュノにしかできない仕事だった。

ファルマは治療薬を持っているが、帝都に供給するのが精いっぱい、世界中に供給するだけの生産能力はないという。

だから、帝国以外の国々は薬なしでアウトブレイクを防がねばならなかった。

「ファルマはああ言うが、本当に210年前に終わった黒死病が来るんだろうか」

そんな疑いもある。しかしファルマの擁いていた危機感は並々ならぬものだった。ブリュノはファルマを信じようとつとめた。

ファルマとエレン、そして弟子たちがマーセイル領で検疫を続けているということは知っていたし、彼らに手を貸したいのはやまやまだったが、有事の際、国の中枢に疫病の手が及び国が崩壊しないよう、帝都に詰めて対処にあたるのが宮廷薬師本来の仕事だ。ブリ

ユノは帝都を動かない。

「総長、キャスパー教授がおみえです」

ブリュノの秘書が、総長室の外から声をかける。

「うむ、入りなさい」

ブリュノは総長室に、ある変わりものの老女教授を呼んだ。

彼女は全身黒ずくめの魔女のような風貌の風属性の神術使いで、カビや胞子の研究をしていた、キャスパー・ルーズ教授だ。役に立たない研究をして、ろくに業績を出していないと後ろ指をさされ、大学内でも研究費は殆ど配分されていなかった。彼女の研究は日の目をみないまま、来年、定年での退官を迎えようとしていた。

彼女の研究は、カビを中心としたもののフィールドワーク採集と分類学だった。だが、ノバルト医大にはもつと高度なカビの研究室があり、先のない分野だと思われるのだらう、研究室に学生は殆どはいなかった。今、彼女は僅かに2名の学生を抱えるのみである。

ほかの教授や事務長から、もう潰してよいのではないかと突き上げをくらっていた彼女の研究室に予算をつけて何とか細々と残してきたのは、ブリュノだ。

役に立たないと思われた研究が、いつか思わぬ成果を出すと、彼は信じていた。

「総長様、もう私はすぐにクビでしょうか。今から研究室を片付けても、ひと月はいたできた」

すぐに研究室を出てゆけと言われるのかと、彼女はすっかり怖気づき、うつすら涙ぐんでいた。深く皺の刻まれた両手を重ね、沙汰を待って萎縮してしまっている。

「いや。そういう話ではない。大きな仕事をしてほしいのだ」

「私に……今から仕事を？」

老女は、鼻に載せた老眼鏡をかけなおした。いったい誰が、窓際教授である彼女に大きな仕事を任せようというのだらう。ブリュノ

は力強く彼女を励ます。

「この帝国であなたにしかできない、世界を救う仕事だ！」

「おお、おお……そんな」

老教授は、世界という言葉のスケールにふらついてしまった。ブリュノは常に世界を意識して仕事をしていたが、彼女がいつ、世界を意識して研究をしただろう。帝国内のカビだけに、彼女の視線はそそがれていた。

「ある新種の微生物を探し出してほしい。そしてそれを、大量に増やし、そこから薬効成分を抽出してほしい」

ファルマが探していた、しかし見つけられなかった、抗菌薬を生産するとある微生物。

放線菌（アクチノマイセス：Actinomycetes）。

菌糸を放射状に伸ばしてカビのように成長することから、その名がつけられた細菌である。

ブリュノは彼女の功名心と知的好奇心を呼び起こそうと呼びかける。

「その生物種の一部のものが、不治の病、黒死病や恐ろしい不治の疫病を殺す薬になる」

「ええ？」

「これをよく読んでくれ」

ファルマの残した、放線菌そのものの特徴、そしてスケッチを見せる。顕微鏡でどう見えるのかというスケッチも示す。ファルマの残した情報は、ブリュノを啓蒙し続けていた。

「これはどこの大先生が……？　そ、そんな大変な薬の原料になるものが……」

キャスパー教授は、ファルマのスケッチやメモをよく読んだ。眼鏡を上げ下げして、そして何度もぶつぶつと呟いて。彼女の長年蓄積してきた知識と、ひとつひとつ照らし合わせるかのように。

そして、彼女は唾をのみ、震え声で応えた。

「こ、こ、このカビでしたら、なな何年も前から私の研究室で、フ、

フラスコの中で飼っていま……す」

定年間際の冴えない老教授が、ずっと以前から救世主を手に入れていた。

「でかしたぞ、キヤスパー教授！」

大学の総力をあげ、その微生物から新薬を造りだすことが決まった。

ただちにキヤスパー教授の研究室には学内で最高額の研究予算がつき、有機合成系の設備を備えた3つの研究室がキヤスパー教授のために確保され、大勢の学者、錬金術師、技術者が動員された。

この日から、抗菌薬のテスト製造が行われ、キヤスパー教授はそのプロジェクトの指揮をとることになった。

「キヤスパー教授の退官講演は、にぎやかになるかもしれんぞ」

ブリュノは激励の言葉をかける。

「そう、なるようにしたいです」

黒死病の克服が現実となれば、夢にまで見た、学会からの喝采を浴びる日も遠くないかもしれない。

千載一遇の機会だ。キヤスパー教授はブリュノの期待にこたえようと、力を振り絞ることを決めた。

今すぐにとりかかったとしても、すぐには生産できないだろう。

だが、今すぐに研究を始めなければ、助かる命も助からなくなる。

ブリュノが、マーセイル領から「黒死病を発見した」という一報を託された伝書鳩を受け取ったのは、そんな頃のことだった。

…  
…  
…  
…

ファルマは診療道具や薬、マスクその他の入った大きな袋を肩に

かけ、マーセイル港から西に位置するエスターク村へと、中高度を飛翔していた。

薬神杖に神力を通じて推進力を与え、浮力をコントロールし意のままに御し姿勢制御をさせるのには、相当な集中力を要し、ファルマは何度も高木や鳥にぶつかりそうになった。

地上の人々が、かなりのスピードで飛び去る未確認飛行物体に驚き、悲鳴をあげていた。ファルマの薬神杖は透明で、可視光を透過するので、地上から杖は見えず、ただ人が空を飛んでいるように見えているのだろう。薬神杖の前の所有者って誰だったんだろう、とファルマは疑問だ。

人が空を飛んでいたら異端として神殿に密告されるかも知れないが、検疫用の白いローブのような防護服のフードをしっかりとかがれば、誰が飛んでいるかわかるまい。目立つだの目立たないだの、小さいことは後だ。

マーセイル領の漁村、エスターク村の上空。

そこに到着したファルマは、かなり高度をとったままで空中に浮遊する。海を見ると、桟橋にはヨットや小さな漁船ばかり。密入国をした大型船舶は、沖合いにはなかった。どこか岩場の地形に隠しているか、ネデル国に戻ったのだろう。

ネデル国に戻ったら戻ったでまずい。

ほぼ確実に、乗組員が全滅して難破船になる。

（くそつ、船はどこだ。船ごと滅菌して、中の乗組員も助けないと）  
「こういふときの聖域か……」

ファルマは、サロモン神官長に薬神杖の取り扱い説明書を古代文字から翻訳してもらって、全てではないが簡単にできるいくつかの神術を覚えていた。その一つに、聖域の発生がある。

杖を神力で満たし、杖の端を持ってハンマー投げの要領で数回ぶん回すのだ。すると、杖全体から浄化神術が発揮され、同心円状に



放射される。

ファルマが聖域を発動させると、青い衝撃波が空気を歪ませ、爆発的に周囲に拡散してゆくのが見えた。

「便利だな、聖域」

ファルマが放ったのは、薬神杖固有の、「滅疫聖域」めつえきせいいきという、舌を噛みそうな神技らしい。ちなみに、神術の中でも技の名前のついた、発動詠唱を必要とする高度な技を神技という。無詠唱ができるのでファルマは神術も神技も区別なしに使えるのだが、本来は長つたらしい発動詠唱が必要とのことだった。

滅疫聖域内では、病原体は空中を浮遊することができなくなり、未感染者に対しては病原体の感染がきわめて成立しにくくなるようだ。

今、ファルマはエスターク村全体を滅疫聖域で庇護した。

そのうえでファルマは薬神杖から飛び降り、速度をコントロールしてエスターク村に急降下する。

「な、なんだ……！？」

空から陽光を背負って舞い降りてきた白衣の少年に、村人たちは眼を奪われた。

エスターク村では、施療院に重症患者が集められ、村人の大多数は患者を放り出して疫病から逃れようと大慌てで村を脱出しようとしていたところだった。

「待ってください！」

ファルマは村の出口に立ち、両手を広げて彼らの行く手を阻んだ。そして勢いよく杖を地面に突き立てると、神術が発動し、エスターク村は分厚い氷壁でぐるりと完全に包囲された。

これだけ大規模な神術を、田舎の村民が目にする機会は殆どとあってなかった。

「うわああーっ！ 氷の壁だ！ 何だお前はっ！」

「そ、空から飛んできたぞ！ バケモノかつ！」

「氷の壁に閉じ込められたー！！ 出られないぞー！」

怪物が殺戮にやってきたと勘違いした村人たちは、パニック状態に陥った。

（飛ぶところ見られたけど、仕方ない、顔出しするか）

飛翔を見られたのでできれば顔を隠しておきたかったが、さすがにこのままでは怪しすぎる。ファルマはマスクをつけると防護服のフードを取り、彼らに呼びかけた。

「私は帝都の宮廷薬師です。あなたがたを助けにきました」

「化け物じゃなくて人間か？」

「こ、子供じゃないか」

「あ、あんた教えてくれ、この病気は何なんだ！？」

「黒死病です」

ファルマは即断定した。まずは、最大限の危機感を持ってもらわなければならない。

「やっぱりそうだ！ 死ぬんだ！ 村人全員！」

210年前の悪夢を知る村民たちが恐慌状態に陥りそうになったとき、ファルマは大声で彼らを叱咤激励した。

「助かりたければ、今から言うことを聞いてください！」

ファルマは村人たちを見渡しながら、よくとおる声で言葉をつなぐ。

「黒死病は、目に見えない小さな生物が体の中に入り込むことによつて起こる病です。ほうつておけば、死者は増えます。黒死病をわずらったままここから逃げたとしても死にます。村の外に出たとしても、黒死病を持ったノミに刺されれば黒死病になります」

「どうすればいいんだ！ 何をしても死ぬじゃないか！ そして何でお前は俺たちを閉じ込めている！？」

半狂乱になった猟師の男が、ファルマにナイフを向け怒号を浴び

せる。

「ですから、黒死病と戦う薬を持つてきました」

「黒死病の薬が、あるというのか……」

村から真つ先に逃げようとしてた村の三級薬師が、信じられないといったようにふらふらと歩み出てきた。

「全員を助けられるとは約束できません。ですが、死者を最小限に抑えるために、ともに戦いましょう。この村を氷壁で包囲したのは、あなたがたを助けるためでもあります。死病は誰だって怖い、でも逃げずに、治療を受けてください」

ファルマは村役人の助けを借り、村全体の人数を把握する。

エスターク村の人口は524人。

村の二箇所の施療院に運ばれた者が、93人。

死者は15人。

すでに村を出て逃げてしまったものが、8人。

村の外にたまたま外出しているものが、18人。

この場にいる村人は、390人。

氷で囲んだ村の中にさらに氷壁で仕切り、ファルマは3区画に分けた。氷壁の一部を消去し、小さな出入り口を作る。

「感染者と非感染者に分け、重症区画、感染区画、非感染区画に分けます」

トリアージを行う。診眼でその場にいる390人の村人を診て、重症度別に各区画に分ける。その際に、マスクを配り、生成水で手洗いを促した。

非感染区画に入れた者は喜び、感染区画に入れられた者は肩を落として一喜一憂する。

「区画わけは、感染の拡大を防ぐための措置です。全員に治療薬は配ります」

ファルマは予め分包して準備していたスパルフロキサシンを、区

画ごとに村役人や村の薬師の力を借りて一人ずつ与え、ファルマの手渡したマニユアルにしたがって服薬を指導した。

「妊婦、子供、乳幼児は私のもとへ」

ファルマは、服薬に注意の必要な村人を集め、直接相手を診て量を調整し薬を与える。

こうして薬の処方が始まると、特効薬を我先に手に入れようと小競り合いになり、刃物が出る一幕もあった。

「てめえら、薬師様が薬をくださっているのにいい加減にしろよ！今死にてえやつは誰だ！」

気のたつた村役人たちが剣を抜いたので、小競り合いはなくなつた。

「落ち着いてください、全員分準備してあります。まだ発病していない人も飲んでもらいますから」

ファルマは彼らを元氣付け、落ち着けさせる。

彼はその場にいる全員に薬を配り終え、薬を飲ませ、村人の人数を把握させた。ひとまず、薬をもらった彼らは人心地ついたようだ。ファルマは、神術で生成水を創り水がめに水をため、その水で体を拭かせた。そして、ペスト菌のついた衣服を脱がせ焼却し、以前にタンスにしまっていた古いもの、ペスト菌がこの村にいなかった頃の服に着替えさせた。

次に、ファルマは重症者の集められた施療院に向かい、重症者の処置にあたった。大きなスペースにベッドが並べられ、そこに患者たちが寝かされている。床のうえも患者らが埋め尽くしていた。慈善奉仕をしていた神殿の医療神官や神官が施療院にはわずかに残っていたが、高熱に魘された感染者や、出血斑の表れはじめた患者の前に、なすすべもない。

彼らは不気味な鳥の形のマスクを顔につけて、分厚いフードの白い保護衣を着て、手袋をしていた。鳥のくちばしには、香気の強い

ハーブを悪霊よけのフィルター代わりに詰め、目の部分はガラスで覆っている。杖を持って、患者に直接触れずに診察にあたっていた。地球上にかつていた、中世のペスト医師に似た異様な姿である。

この装束は、ファルマが見るに、決して充分ではなかったがペスト菌対策として多少合理的な衣装だった。ただし、すべて使い捨てでなければ意味がないが。

ファルマは施療院に入ると、薬神杖に力を注いでその場を聖域で満たし、それ以上の空気感染を阻止する。突如として聖域が出現したことに気づいて、反応した神官もいた。

「空気が浄化された気配が……」

「あつ！ 薬神様ではないですか！！」

以前、帝都のはずれの丘で一戦交えた異端審問官の一人が、たまその場に居合わせていた。マーセイル教区から、疫病が発生したと聞いて派遣されてきたらしい。

「子供は来るな、外に出なさい！」

「無礼者、この方はただの子供ではない！」

彼がいたおかげで、話はスムーズに通った。

彼らはファルマの指示で手分けをして患者全員に薬を飲ませてゆく。ファルマは、そのままでは助かる見込みのなさそうな患者には、神術によって生成した水を使って薬の効果を高め服薬させた。重症者の処置から急ぐ。敗血症になった患者には、抗生物質の投与とともに数々の処置を行わなければならない。大量の輸液や、壊死組織の外科的な切除なども行わなければならない。諸々の全身状態の管理などもしなければならないだろう。

錯乱する患者、暴れる気力もなく、ぐったりと意識を失ったままの患者。うめき声、すすり泣く声がそこかしこから聞こえてきた。

施療院の中は、さながら地獄絵図だ。聖域でありながら、死の気配に満ちていた。

診眼で彼らを見ると、全身を覆いつくす真つ青な発光が人魂のように見える。

ファルマは生成水を使い輸液を創り、敗血症患者に大量輸液をはじめた。生成水は無菌であり、輸液の溶質は物質創造によって作り出す。ファルマは注射をはじめ患者に針を刺すことを自ら禁じていたが、この場においてはあらゆる手を尽くす。それでも、たとえ設備の整い近代化された近代日本の病院でも、重症敗血症患者の30%は死ぬのだ。

（だめだ……俺の力では助けられない！）

薬の処方でどうにかなる問題ではない。いち薬学者が手におえる段階を超えていた。

ファルマは自らの薬師としての能力の限界を知っている。

だが、彼はあることを忘れていた。

彼は薬神杖を持った、薬神の力が使える人外の神術使いであるということを。

（あれを、やってみるか）

彼は薬神杖を両手で掲げ患者にかざし、サロモン神官長に翻訳してもらい教えてもらった”始原の救援”という秘術をかけた。それは患者が本来持っている免疫力を呼び起こし、処方した薬の効果を最大限に高め副作用は打ち消すチート神技だと聞いているが、何がどうなっただけ免疫力を高めるのかについてはまったくわからない。この神技は、先に特效薬を与えていなければ発動しない、投薬なしの状態ではできないと聞いている。

ファルマはその効果を疑わしく思っていたので一度も試してみることがなかったし、試す場面もなかったのである。

それでも、最後の手段として全員に薬神杖で秘技を施してゆく。

ファルマが患者に神技を放つと、患者の体表面に薬神の聖紋というものが現れ、患者の全身は白いベールに守られるよう薄く発光を始めた。

（この凄そうな神術、効果あるのか？）

すぐに効果が見えるものではないので、一見してはよくわからない。まじない程度にしかならないかもしれないが。

（効果があればいいな。にしても）

ファルマは焦っていた。こうして重症患者にかかりきりになっている間にも、密入国者とその積荷は、ペスト菌を撒き散らしながら帝都へと向かっているのだ。父に黒死病発見の一報は伝えた。帝都の検疫所を突破することができなくても、帝都にいたるまでの村や町、そして野山を感染源が通り過ぎる。

多くの人や動物が感染するだろう。

神官たちは目の前で行われた奇跡にどう反応してよいか分からず、啞然としていた。

ファルマの起こす人の技とは思えない神技を目の当たりにした神官たちは、彼が元異端審問官の証言どおり薬神であると信じ込んだ。そして、信仰心と忠誠心が最高値に達した彼らは、

「薬神様。何か、私たちにお手伝いできることはありませんか」

と、ファルマに声をかけてきた。

「ありがとうございます。お願いしたい。水と炎の神術の使い手はいませんか」

「私です」

「私も、何なりとお申し付けください」

二名の神官が出てきた。彼らは非感染者だった。

「この病気を侵入させた密入国者とその積荷が帝都へ向かっています。感染者を見つけたら、氷の壁で囲んで捕え、積荷を完全に焼却し、感染者に薬を飲ませてください。私も、ここの患者の処置をしたらあとを追います」

感染者と感染源に触れることになるが、彼らは予防服薬をしている。

火炎術師と水術師を中心のユニットとして、4つのユニットの追討隊が組まれることになった。

それから半日が経過した。

少年薬師は真夜中を過ぎ、神官たちと共に、疲労しきって施療院から出てきた。村人たちは大量の墓穴を用意していたが、施療院の中から運ばれてきた死体は96人中、わずかに3人だった。彼らはもう心停止をしていて、薬を与えるのが間に合わなかった患者だ。出血斑の消えた患者が何人か出てきて、食べ物と水をねだった。

現代医薬品とファルマの神術が相乗効果を生み、犠牲者を最小限にとどめ、多くの患者を救ったのだった。

「また戻ってきます」

氷壁の内部は聖域だから、数日間その中にいるように。氷壁が解けて外に出られるようになってもネズミや小動物とは、できるだけ接しない、触らないように。村に入り込んだネズミをはじめとする害獣、ノミなどの害虫は駆除するように。

その他の注意事項を伝えると、彼は薬神杖を手に彼の助けを待つ次なる土地に飛び立った。村人たちはファルマの飛び去った方向に手を合わせた。

施療院でファルマの神技を受けた者は全員に治癒の兆しが見え始め、出血斑も薄くなり、もはや半死半生の重症患者はいなかった。今にも死にそうになっていた患者も、一命をとりとめている。

氷壁の外から、小さな出入り口を通って村人たちが戻ってきたので、彼らにも予防薬が配られた。

「人の姿をした薬神様があらわれた」

小さな漁村を襲った悲劇は、一つの神話に変わった。



## 2章14話 狙われたサン・フルーヴ帝都

「密入国を一隻も許すな！ 密入国船は容赦なく積荷ごと海底に沈める！」

ジャン提督は戦艦を出し、沿岸をパトロールしていた。また、帝国各地の東イドウン会社の支社に中継を挟リッんで複数羽ツつ伝書海鳥を飛ばし、沿岸警備を強化するよう指示した。拿捕した船員、作業員が発病した時のために、伝書海鳥には特効薬を積んで飛ばした。沖合で、漂流し続けるネデル船籍の大型帆船が遭難船の状態で見つかった。ファルマが見つけれなかったものだ。それは予想外なほど外洋に出ていた。

船の中にいた船員は全員、黒死病にかかってそこかしこで倒れ、力尽きて死んでいた。ネデル国に戻ろうとしたが、ついに操舵できなくなったのだろう。

「これがその密入国船か？」

ジャン提督は難破船をさらに沖合いへと曳航し、船内に大量の火薬を積み、船ごと隈なく爆破した。船を海溝に沈めるのだ。

「おとなしく検疫を受けていれば、殆どが助かっただろうにな。愚か者め」

商人の自由を奪ったり締め付けのためではなく、人命を救うための検疫だ、とファルマは言っていた。彼らはあまりにも無知で、哀れだ。

ネデル国国旗を掲げたマストが大きく傾き海中へ没し、長い航海を終えた。

ジャン提督は甲板で帽子をとり、悪疫の元凶となりさがったそれが海上に大きな渦を作るのをじっと眺めていた。

その頃、マーセイル港の検疫に残されたエレンは、細心の注意を

払いながら彼女の弟子や火炎術師らとともに検疫を続けた。各船舶から集めたサンプルの、技師からあがってきた検査結果を見比べる。

「全員合格、20番まで入港していいわ」

「師匠、検疫にも慣れてこられましたね」

彼女に付き添っていたエレンの弟子が感心する。エレンはメガネを布で拭いて一息ついた。

「わかんないわよ、見逃してるかもしれないし。ファルマ君みたいな特殊能力持っていないから、完璧には見抜けないんだから」

一隻一隻、検査に時間がかかって入港が遅くなっても見逃さないように。ファルマに言われた通りの検査法を守り、積荷のサンプルから検査をしていった。感染者が発見されると、隔離し投薬を行った。初期で投与した者は助けられたが、重症者は助けられなかった。でも、それが黒死病というものなのだ。100%を助けるのは無理だ、できることをしよう、とファルマは言っていた。

ファルマの特殊能力での検疫は速かったが、エレンが地道に検査をして結果を得た場合と黒死病病原体の発見率は変わらなかった。

「ファルマ師の薬は、本当に効果があるんですね」

「現に私たち、防護服を着ているとはいえ、これだけ患者と接しているけど発病していないしね。悔しいけれど、過去これほどまでにひとつの薬が命を守ってくれていると実感したことはないわ」

「ファルマ師は、同じ効果のあるものが微生物からも抽出できると仰っていましたね」

「ええ、それは私も興味深いわ。頑張りましょう、終わりが見えてきたわ」

残る船はあと6隻。

「ファルマ君も頑張っているんだから……大丈夫かしら、あの子」

エレンは、死病の村に一人で向かったファルマを案じていた。彼女がその場に行けなかったことが、悔しくてたまらなかった。だが、エレンが彼らに何をしてやれただろう。

その日、代行領主アダムとエレンはエスターク村で起きた奇跡を

耳に入れることになる。

「私も、あんなふうになりたいわ」

エレンは薬師としての能力不足と無力感を、強く感じていた。このところ、ファルマの開発するまったく新しい薬と、彼の、別世界からやってきたとしか思えない知識に頼りきりになっていたからだ。そのせいで、ファルマ一人に重い負担がのしかかっている。彼は何でも一人でやろうとする。そんな状態になっけていても、エレンは彼を助けてやれずにいた。

「もつと貪欲に、初歩の初歩からファルマ君の薬学を学んで、彼を支えられるようにならなきゃ」

エレンは改めてそう思った。かつてはファルマの、薬学と神術の師匠であつたエレン。もと師匠としての立場もあつて、もう一步踏み込んで彼からすべてを教えてくれとは言えずにいた。

それはおそらく、ブリュノもそうだ。ブリュノは彼の立場もあり、ファルマに「教えてくれ」とは言いにくいのだ。  
(黒死病の危機を遠ざけられたら、無垢な生徒となつて学ぶしかないわ)

そしてそれを帝国、のみならず各国の薬師に教え広めるのは、自分にだつてできる仕事だ、エレンは改めてそう自覚した。

知識は、力だ (Scientia est potentia)。それは、サン・フルーヴ帝国薬学校の正門に刻まれた校訓だつた。

… … …

真夜中になり、夜の気配が濃くなつてきた。

エスターク村を出たファルマは、村から脱走した8人の家族を帝都に至る道中の廃屋の中で見つけた。彼らのうち3人が高熱を出して、その場で子供たちもろとも身動きがとれなくなつて暗闇の中で身を寄せ合つていた。子供たちはぐっすりと寝ていた。彼らは、発熱が始まつたので怖くなつて村を逃げ出したのだ。

彼は廃屋の中に聖域を作る。浄化されたテリトリーは、やぶ蚊や小さな羽虫も追い払う。彼らはファルマの足音で目覚める。

「お、お前は発病した俺たちを追ってきたんだろう!？」

父親は怯えた声でよろよろと立ち上がると、短剣を向け、病苦に喘ぎながらファルマに問う。

彼らから見たファルマは、発光して見えたのだ。薬神杖を持つと特に、彼は暗いところでは発光して見える。ファルマもそれを知っていたが、隠すこともできない。

「殺しにきたの!？ そうなんでしょう!？」

母親が子供たちをかばう。

「いやだ、死にたくない!」

彼らの緊張がクライマックスになったとき、侵入者は言った。

「助けにきました」

「へ？」

「エスターク村の、エルマンさんですね」

ファルマは生成水とともに全員に治療薬を与え、そして念のために”始原の救援”という神術を施す。

術をかけ終えたとき、ファルマはふらついて、朽ち果てた椅子に腰を下ろした。

「薬を飲んで、具合がよくなったらエスターク村に戻ってください。できるだけ、人にも動物にも触らないで。歩いて帰るのが辛ければ、街道で荷車を借りて」

ファルマは路銀といって金貨を彼らに渡した。

「エスターク村はどうなっているんだ？」

「18人が亡くなりました。ですが皆さん薬を飲みましたので、あと数日もすれば落ち着くと思います」

「あ、あんたはいったい誰だ!」

「ただの薬師です」

ファルマは静かに答えた。

そのとき、轟音が夜の森に響き渡り、数キロ先で火炎神術の火柱

があがったのが見えた。

ファルマは廃屋を出ると、杖を片手に急浮揚し、十分な高度をとって炎に向かって目を眇め、飛び去っていった。

森に残された患者たちは互いに顔を見合わせるばかりだった。

「人か？ 飛んだぞ……」

「人が飛ぶわけないだろう」

熱に魘されて幻覚を見たのではないのか、と誰かが言った。

そしてそのまま、彼らは眠りについた。それでも、彼らの体内に入った薬は、確かな効果を発揮し続けた。

「あそこか」

ファルマは薬神杖の飛翔で急降下し、その場に駆けつける。エスタークから出た第3追討隊の神官たちが荷車と運搬人たちを包囲し、焼却していた。死骸と荷物はすでに炭化し、火の粉が上がっていた。「もう死んでたんですか？」

「はい薬神様、すでに息絶えていました。死後間もなかったようですが。ですので遺体ごと荷を焼却しています。国籍はネデル国です」

積荷をその場に残し、ネデル国の運搬人たちは黒死病に斃れて死んでしまったようだった。運搬証書が残っていて、神官はそれをファルマに見せる。

「荷は何だった？」

「証書によりますと、植民地からの高級毛織物や、珍しい染料でございます。が、中の荷だけ抜かれていますな。別の荷車にまとめたのでしょうか」

「これで終わりではないでしょう、他にも運搬人がいるはず。追討隊を先に送っています」

「ここも清めておきますね」

ファルマは空中に浮遊し、神技”滅疫聖域”を使う。術を発動させると、青い光波が空中をオーロラのように駆け抜けた。これで半

径数キ口はカバーできる。

神技を発動し地上に降りると、ファルマはがっくりと膝をついた。息が上がっていた。

「お具合が悪いのでございますか」

「あ、いえ、それは、たぶん、ない……と……」

（疲労度が上がってる？　なんかいつもと違うな）

呼吸が整わない。薬神杖で神技を打つても、これまでは特に疲れたりはしなかった。だが、何かが違う。ペストに感染したのか、という一抹の不安がよぎった。万一に備えて、ペストに感染しないよう予防薬はしているものの……。

「神力切れではないのですか」

「え？　そうなんでしょうか」

火属性の女神官キアラがあることに気づいて、携帯型神力計でそとファルマの背に触れた。神力計は神術使いなら誰でも持っているもので、神術使いは残りゲージを見ながら神技を使うのだ。手で握るのが一番正確だが、体のどこに触れてもはかれる。ゲージは透明で、振り切れた。

「ん？　何かしました？」

ファルマは密かに神力を測られたことに気づかず、凍りついた表情を浮かべる女神官を不思議そうに眺める。

「失礼、神力はまったく尽きていないようです。少しお休みください。お疲れなのでしょう」

神力はいつこうに減っている感じがしないので、ファルマの神力は無限なのだと思っていた。

（よく考えたら、エネルギーを使っているのに無限なんてことはないか）

物理的に考えれば、当然のことだった。力を使えば、どこから減っているのだ。

（帝都の神官長に協力してもらって、本格的に神術のことも研究しないとな。野放図に使ってぼっくり死んでしまったりするかもしれない）

ないし)

一度過労死したのに、さらにもう一回死ぬのだろうか。とファルマは疑問だ。

(まあ、死ぬと仮定して)

帝都での庶民への薬の普及にかまけて、神術の追究、自身のことはついつい後回しになっていた。うまく薬と組み合わせれば、ファルマが薬で治せない人々に対しても治療効果が発揮できるということはこの一日で学んだ。この難局を乗り越えたら、やってみる価値はある。

「薬神様への供物としてこんな粗末なものしかなくて恐縮ですが、これをどうぞ」

パンと水、そしてりんごがファルマの前に出てきた。ほぼ一日、彼は何も口にしていないし休んでもいなかった。硬いパンだったが、人の親切と施されたパンの美味しさが身に染みた。

「いいんですか？　ありがとうございます」

ファルマは疲労のあまり飛翔できなくなったので、キアラの馬に乗せてもらい帝都を目指す。

「人間だったら、という注釈がつきますが」

キアラは、彼女の後ろに乗り、ぐったり体をキアラの背にもたせかけているファルマに呼びかける。

「大神技は連続しては使えないものです。神技は神力ですが、精神も消耗します。失礼ですが、子供にはまず大神技は使えません、お体を休めないで。今日、何回神技を使いました？」

彼女は若いが、母親のような口調で話す神官だった。患者の補助的な治療のためと、”滅疫聖域”で相当な回数使ったな、とファルマは思い出す。

「百回ぐらい、かな。もつと使ったかも、覚えてないですけど」

「そんなに使ったのですか。もう！　そんなの無茶です、子供なのに何考えてるんですか！　誰がそんなに使っていいといいました、死んでしまいますよ！？」

とヒートアップして、周囲の神官に「薬神様に無礼なことを言うな」、とたしなめられていた。

「ありがとう、キアラさん」

言葉は強いが、心配してくれているんだろうな、とファルマは感謝し、馬上で少し仮眠をとらせてもらった。キアラはロープでファルマと自身をしっかりと結んでいた。

しばらく馬を走らせると、前方にまた新たな火の手が上がった。

ファルマは火の気配を察して起きる。

「見つかったようですね」

馬で駆けつけてみると、生存している運搬人4人が第2追討隊に捕らえられ、荷は焼かれていたところだった。運搬人たちはおとなしくお縄についていた。すでに発熱していて、反抗するだけの体力がないのだ。

「お、俺たちは雇い主と契約して雇われたただけだ！」

「荷のことは何もしらねえ」

お縄になった運搬人たちは言い訳をはじめた。

ネデル国訛りの男たちだった。

ファルマは馬を降り、彼らに近づく。彼らは子供が登場したので怪訝な顔をした。

「帝都には何台の荷車が向かっている？ それらの荷は何だ？ 言えば薬を出す、言わないならこのまま死ぬぞ」

淡々とした口調で脅迫する。

「帝都には、あと4台の荷車が向かっている。2台が毛織物、1台が香辛料、そして最後は動物だ」

彼らは命が惜しくなったのだろう、喋り始めた。道中で荷馬を買って曳かせているので、帝都に着くのは明日になるだろうと。

「動物……？」

ファルマは嫌な予感がした。

「パンテ島にいる白いリスだ」



（げっ歯類か。ペストのキャリアになる）

ファルマの直感が警鐘を鳴らしていた。ペスト菌はネズミ、リスなどのげっ歯類についたノミを介して人に感染するのだ。今回の荷物の、主要な感染源になっているかもしれない。

「パンテ島の住民は全滅した。それをわかっていただろう？ 何で疫病の島の動物を持ってくる。お前たちもそれに冒されているんだ、仲間だって死んだだろう！」

ファルマは静かな怒りを抑えながら、4人の運搬人たちに問う。

「し、知らねえよ、一体どう関係があるんだ。あいつらは長い船旅に耐えられずに死んだだけだろう、陸に上がれば関係ねえ！」

運搬人は開き直った。瘴気や悪霊が病気を引き起こしていると信じている世界である。

動物から動物に小さな病原体が感染するという発想は、帝都の民ならともかく、他国の庶民にはまったくといってないのだ。

高く売れそうな商品を積んできただけだ、と彼らは言った。彼らのせいで18人も人間が死んだとは、言ってもわからないだろう。彼らもまた、被害者なのだ。

「帝都に向かったのは何人だ」

「運搬人が24人、聖騎士が5人だ」

「聖騎士？」

聖騎士というのは、一般的には貴族と主従関係を結んでいる神術使いの騎士だ。

「風属性が3名、水属性が2名だ。王国の騎士だ」

「何でただの商隊を王国の聖騎士が警備している！」

運搬人を警護するのは、通常は平民の用心棒だ。神術使い、つまり貴族が商人を警護することなどありえない。

「知らねえよ、途中の港で乗ってきたんだ……」

「これは……何かありますね。普通は、死病の島から荷揚げして、いわくのついた商品を強引に売ったりはしません。その国の商隊は来年はサン・フルーヴ市には入れないでしょう。信用問題になるか

らす」

キアラが陰謀の気配を感じ取った。ファルマも同感だった。  
（帝国に疫病を広めることが、ネデル国つきの聖騎士の任務だった？）

思えば、以前におかしいと思ったことはあった。女帝エリザベトは、一人だけ結核を発症したのだ。通常、一人だけ結核を発症というのは不自然だ。感染源がわからない。ファルマは疑った。女帝への貢物にまぎれて、結核菌が入ってきたのではないかと。その計略が破綻して、今度は確実に帝都に疫病を蔓延させようとしているのでは、そんな予感がした。ペスト菌に感染した大量のリスが、帝都で放たれたなら……。

まさか、ネデル国が故意にペストを蔓延させ、帝国を滅ぼそうとしているのでは……ファルマが焦りを強めていると、

「もう十分喋っただろう。薬をくれよ、あるんだろう？」

運搬人が命乞いをする。彼らは鉄砲玉だ。黒死病を運ぶための……。

「薬神様、こんなクズどもに薬をやらなくていいのでは」

キアラが唾棄する。

ファルマも薬を与えたくない、という気持ちがなかったといえは嘘になる。それでも、彼は薬師である限り、どの人に対しても等しく治療を行わなければならないと自らを戒めた。だからファルマは彼らに薬を与えた。

彼らの証言は、感染した積荷の物流の把握と、密入国の再発防止のために役立つだろう。

「快復したら帝国に引渡し、帝国法の裁判にかけて処罰してください」

ファルマはそう言うと、薬神杖を握った。馬上で仮眠を取ったので、もう飛べそうだ。

「帝都が危ない」

浮力を操り朝焼けの空へ消えた少年に、神官たちは感謝の祈りをささげたのだった。

… … …

帝都に詰めるブリュノのもとに、マーセイル領にいるファルマからの第一報の伝書鳩が2羽届いた。

黒死病に感染していた船の積荷と、感染した船員が発見された。

黒死病は検疫によって水際で上陸を防いでいるが、他国を経由しての陸上からの帝都への侵入は確実だろう。

帝都の検疫の強化を図り、城壁の外から戻ってきた者は数日間隔離地区で隔離すること。

ファルマからの指南が書かれていた。

「きたか！ ファルマ、エレオノール……無事なのか」

ファルマやエレンは黒死病に感染したのだろうか。ブリュノは彼らの安否が気がかりだ。しかしそれでも、たとえ二人が倒れていたとしても、ブリュノはサン・フルーヴ帝国の公僕として義務を果たさねばならない。

黒死病が発生した旨をブリュノが奏上すると、宮廷のエリザベトは、

「悪夢が、現実となったのか。公子とともによく備えてくれた」

と、ブリュノの働きをねぎらった。

「いかがでしたしょう陛下。即刻、帝都へ至るすべての城門を閉ざしますか」

国務卿フィリップが、女帝に伺いをたてる。サン・フルーヴ（Saint Fleuve）帝都は、3つの大河が流れており、帝都に入る城門は12箇所、水門は8箇所だ。すべての城門に検疫所が設けられており、厳しく検査が行われている。水門を通る船も厳しく制限されている。

「おそれながら、城水門を完全に閉ざせば、城門の外が疫病であふれかえります」

ブリュノは渋った。城門と水門をいったん閉ざせば帝都は免れるが、城門の外には商人たちとその積荷が滞る。城門の外で感染者が増えれば、帝都の物流は途絶えてしまう。帝都の食糧の殆どは城門の外から入ってくる。門を閉ざせば開けられなくなる。

人口密集地で、ペスト菌が蔓延するのがまずい。帝都の城壁の内부는浄化されている、ペスト菌に感染していないとわかった者から帝都の中に入れるべきだ。とブリュノは奏上した。

その指示は、検疫所にすぐに伝達された。

異世界薬局、2号店、3号店、そして薬師ギルド加盟店の職員たちは、検疫所に詰めていた。ロツテとセドリック、そして手伝いの薬師たちは、帝都に入ってくる商人たちに防護用のマスクを配布した。

「みなさーん！ 悪い病気をー！ 予防しましゅー！」

ロツテは声を張る。

「微小な生物を吸い込まないようにするためのマスクです」

「微小な生物？」

商人たちは理解できなかったが、帝都の衛兵たちの手前、言うとおりに従った。

「んん……！？」

中央検疫所の調剤薬局ギルド長ピエールは、第六検疫所から寄せられた検査結果を確認した。

「はい……ピエール師、これは」

技師の声に緊張が走る。

「間違いない、陽性だ！」

白いリスを積んだ商隊が、検疫に引っかかったという。

誰も見たことがない、黒死病の病原菌。

だが、ファルマに言われたとおりの検査法で、陽性と出ている。

ピエールは迷わなかった、ファルマを信じた。商人たちは皆陽性、そして護衛は神術使いだっただが、発熱していた。

「隔離だ！ 即刻隔離ーっ！ 第六検疫所に急げー！！」  
しかし、ピエールらが検疫所に駆けつけたそのとき、

”水の槍（Spear van water）”

第六検疫所に、ネデル国の聖騎士からの神技が放たれたところだった。

## 2章15話 ある邪悪な男の話

調剤薬局ギルド長、ピエールがペスト菌感染者の存在を確信しながら駆けつけたとき、第六城門前に設営されていた第六検疫場のテントは神技で吹っ飛んでいた。

「敵襲だー！ 外門を閉ませー！」

門番が叫び、門扉を閉め跳ね橋を跳ね上げようとしたが、跳ね橋に飛び移られ失敗。落とし格子を落とすも、水属性聖騎士は岩ほどの氷塊を格子間に挟み込み、身を滑り込ませスライディングしながら城門をかくぐった。5人の聖騎士らは黒死病に感染しながらもかなりの力量があるようで、並み居る武装した騎士たちを風術で吹き飛ばし、内壁に叩きつけ潰死させる。その神力量と、部隊としての練度は王国親衛隊クラスとみえる。

「こいつら、強いぞ！」

帝都の衛兵は銃を構え、サン・フルーヴ聖騎士団は杖を抜き、統率のもとに各属性の神技を仕掛ける。

「射撃用意！ 第一隊、撃て！」

マスケット銃部隊が門の上から発砲するも、氷の防壁を張られては仕留められない。

「第二隊、撃て！」

実際に普通の氷でも銃弾、砲弾を貫通させないのだが、上位の神術使いの氷は薄くとも十分な防御力を持っていた。

「くそっ、高位水属性か！」

ネデル国 の聖騎士のうち3人はとうとう城門の内部に覆いのついた檻を運び込み、被いを取り檻を開くと、帝都の内部に白い小動物の群れが放たれた。半数が黒死病に耐えられず死滅していたが、

生き残ったそれらは一目散に大市のある市街地へと散ってゆく。

「リスが、飛んだ!？」

人々はリスの予想外の行動に、悲鳴を上げる。

それらのいくつかは樋を伝って登ると、飛んで屋根から屋根へ飛び移ったものもいた。

白いリスとネデル国の商人たちは言っていたが、モモンガだったのだ。モモンガもまた、げっ歯類である。サン・フルーヴ大市で最初に取り扱われる商品は織物だ。

ペスト感染モモンガのノミが入り込むと、あっという間に感染媒体となる。

「これはいかん、非常事態だ! 第二門を閉ませ!」

帝都は広大な城塞都市であり、城下町とははつきり区切られていないものの、皇帝、貴族、軍人たちの住まう枢要部区画と平民の住まう一般区画に分けられている。郊外に居を構える貴族もいたが、軍人は帝都の枢要に暮らしていた。防衛上の観点から、路地はわざと全体が見渡せないよう雁行状に組まれている。外郭の第一門が突破されても、二重の門が敵の行く手を阻む。

宮廷、枢要部へと至る第二門はただちに閉ざされた。

「家の中に入ってドアを閉めろ! 疫病を持ち込むリスに、中に入られるな!」

第六門の塔から敵襲を示す通信用の花火が空に打ち上げられ、サン・フルーヴ国宮廷や帝都陸軍に一斉に通達される。帝都各所の鐘塔の番人たちが、けたたましく警鐘を鳴らし始めた。

警鐘が鳴ると帝都中の店は門扉を閉めて、人々は店の中に籠るこ  
とになっている。通行人も物乞いも店内に入れてもらえる取り決め  
になっている。人々は迅速に退避行動をはじめた。

「くっそ!!」

潰された検疫所のテントの下から這いだしたギルド長。ピエールは、傷だらけになりながらも、後生大事に守っていた薬箱を開ける。

「今か！」

分包された特効薬、スパルフロキサシンを開封するときがきた。

ファルマが言っていた。

身分の貴賤を問わず、たとえ罪人であっても必ず、生きている患者には全員に薬を与えて隔離すること。一人でも治療せずに残したり、感染者を自由に行動させれば、感染源となり黒死病をまき散らすのだ。

「お前ら！ 全員！ まず！ 薬を飲め！」

ピエールはその場にいた者たちを怒鳴りつける。

彼は門番も野次馬も商人も片っ端から薬を処方し、道具箱のインク壺に筆を浸し、その場にいた衛兵も商人も、全員の頬にインクを塗りつけてマークする。ファルマから支給された消えないインクで、感染者を識別しておくのだ。そして彼らを、隔離区画へと連れてゆかなければならない。

「神術でここに氷の防壁を作ってくれ！ これ以上拡大しないように、防壁だ！」

ピエールは神術使いに指示をし、マニュアル通りに隔離策を講じてゆく。

破られた防衛線を再度立て直す。

敵襲よりも、黒死病の侵入をこそ防がなければならない。この敵は人類よりよほど恐ろしい敵なのだ。ファルマの予想によると、もし帝都の人間が一人でも感染すれば、帝都の6割超の人間が死ぬとのこと。

「黒死病なんかに、やられてたまるか！ 生きるんだ！」  
それはピエールの魂の叫びだった。



帝都内部ではペストを媒介するといわれるネズミ、そしてノミの殆どは駆除している。人々も清潔に心掛けてきた。だから、帝都の中は各都市と比較すると世界一清潔なのだ。

住民たちは手洗い、うがいを励行し、マスクも配っている。そう簡単に、黒死病は広がらない。感染拡大を許さない。それでもなお、恐ろしい悪疫である。

「今が瀬戸際だ！ 急いで対策を打て！」

ピエールは惜しげもなく薬を使い、第六検疫所で91人分の薬を消費した。

「薬が足りなくなる、最小限に食い止める！」

ピエール自身も忘れずに薬を飲み、ガスマスクのような装備をする。

城門の外に放置されたネデル国の一運搬人たちはこの混乱に乗り、荷物をその場に放り出し、元来た街道へと逃げ出そうとした。

「そこまでだ！」

だが、すでにエスタークから出発した神殿の第一追討隊が追いついて背後に回り込んでいた。

騎馬に退路をふさがれた商人たちは、怯えた表情を浮かべる。

「ひいつ、お助けえっ！」

「密入国者どもは降伏しろ！ 降伏すれば命はやる、だが降伏しなければ容赦せず討つ！」

神官の声は断固としたものだ。怖気づいた商人は膝を折り、彼らは捕縛されたが、黒死病で発狂し正常な判断能力を欠いた何人かの商人は正面突破しようとする大声を上げナイフを振り回したので、その場で神官らに殺害された。神殿の教義では、罪人は断罪するが、悔い改めた者は助けることになっている。

全員が発熱をしていたので、降伏した商人たちは神官たちに投薬されてただちに隔離され、彼らが持ってきた荷と、反抗した商人の遺体は焼却された。

「どけーっ！ 道をあけるーっ！」

城門の中へ侵入したネデル国聖騎士団を討ち取ろうと、帝国陸軍の聖騎士団と、皇帝直属の近衛師団が駆けつけてきた。

ネデル国聖騎士団に向けて、馬上から先制攻撃を放つ。

「灼熱の燃焼（Enfer de brûlure）」

紅蓮の炎がネデル国の精鋭たちに襲い掛かり、辺りは火柱に包まれる。神術の炎は攻撃対象に絡みつく。

「風の防壁（Barrière van wind）」

それを風の神技で打ち消し、侵入者は反撃を繰り出す。

両者一步もひかず鬨ぎあう死闘が繰り広げられてゆく。帝国騎士団も、街の被害など考えず怒濤の大神技ラッシュをかける。

帝国の沽券にかけて、ネデル国聖騎士たちを仕留めねばならない。

だが、四方八方に帝国軍に囲まれ、追い詰められ死を覚悟したネデル国の聖騎士らは最後の抵抗を試みる。そして、

「忿怒の暴風（Storm van woede）」

ネデル国聖騎士たちはモモンガの檻を完全に開封し、死骸へ向け、風属性聖騎士全員で風の大神術を放つ。空高く打ち上げられるモモンガの腐りかけた死骸。

帝都市民の間を、ペスト菌を孕んだ爆風が駆け抜ける。爆風は家々の門扉や窓を破り、家屋の中へ風を舞い込ませた。倒壊した商家が、瓦礫をまき散らす。

爆風で煽り、帝都中にペスト菌を蔓延させるつもりのようなのだ。

「清めの風（Vent de la purge）」

「大地の祓え（Purification de la terre）」

遅れて駆けつけたサン・フルーヴ帝都教区の騎士団が、サロモン神官長の号令で風属性、土属性浄化神術で迎え撃つ。神力を孕んだ

風は唸り、旋風を巻く。帝都の路地は周囲数十メートルにわたり、悪疫を寄せつけない浄域と化す。

「汝らもはや神の術を使うにあたわず。神脈を剥奪する！」

サロモン神官長が毅然として一声、断罪した。

神殿の持つ特権。それは、神術使いの神脈の開閉をつかさどる権限だ。これは、教区神官長にだけ伝えられている秘儀で、相手の名前が分からなければ神脈を閉じることとはできないが、簡易的な方法で一時的に神術を使えなくすることはできる。神脈を閉じられた神術使いはただの平民に成り下がる。

「おおっ！」

武装神官たちは陣形を組み、聖騎士らを囲い込む。

神官長が神脈の切断のための長詠唱を始めた。それを皮切りに、ネデル国聖騎士らは神官長への一斉攻撃を浴びせる。これに対し、神殿の精鋭部隊や帝国騎士団らが神官長の詠唱を援護する。

「火炎の牢獄（Prison de la flamme）」

帝国近衛師団の上位火炎神術使いらが大神技を発動、ネデル国聖騎士らを火焰の壁で囲い込んだ。

「聖泉の水涸（Fermé le Puits sacré）」

”

サロモン神官長の秘儀が完成した。

杖から放たれた光輪が侵入者に襲い掛かり、彼らの体内に吸収されてゆく。そこに追い打ちをかけるように浴びせかけられる、無数の氷矢。

神術を失った侵入者は防ぐこともできず、彼らに突き刺さる。

黒死病のもつとも進行した聖騎士の一人が、敢え無く地に倒れ伏しそのまま事切れた。

火焰壁を作っていた炎が死体を飲み込み、骨も残らず焼き尽くした。

… … …

「陛下！ 第六検疫所が突破され、ネデル国の聖騎士が攻め込んできたとのことです」

「兵力は！？」

女帝は興奮して問う。敵襲と聞いて、彼女は愉しんでいるようだった。

「5名です」

聖騎士は一人で百人程度の平民兵士に相当する。だが、女帝は落胆した。

「警鐘を鳴らして大騒ぎするほどのことでもあるまい」

しかし、随分と長い間警鐘は鳴り続けていた。それに業を煮やした皇帝は、

「どれ、余が直々に捻り潰しに行くかのう」

彼女は愉快そうに微笑むと、玉座から腰をあげようとした。

「へ、陛下、それは……」

「なに、殺しはせん。半殺しにはするがのう」

大陸最強の炎術使いであるエリザベートが出ていけば、あつという間に片付くだろう。それを側近や廷臣らも疑わなかった。女帝は敵襲と聞けば恐れるどころか、どのように華麗に掃討してやるかと血わき肉躍る性格だった。だが……、

「お待ちください、陛下」

ブリュノが女帝を諫める。

「皇帝陛下が前線にお出ましになるのは危険でございます」

「そんな心配をされるとは、余も見くびられたものよのう」

女帝はブリュノの言葉で、逆に闘志がわいてきたようだ。彼女の

周囲を神気が回り、神力の層によって塵気楼が見える。

「マーセイルの黒死病が、帝都に入ってきたのでしょうか」

「なんだと」

黒死病は死亡率がとりわけ高く、疫病の王としての地位を築いている。どれほどの被害を出すのか、と女帝の顔が青ざめる。最強の女帝も、病原体には抗うすべを持たない。彼女は結核で死にかけたのだ。

「ネデル国のお惑いが見えませんが、宮廷でお過ごしくださいませ」  
国務卿フィリップもブリュノに口をそろえた。

「陛下には黒死病の特効薬の予防服薬を始めていただきます」

皇帝が黒死病に感染しては、国家が立ち行かなくなる。

ブリュノは主要な廷臣らに、ファルマから預かっていた薬を処方した。ブリュノとファルマを信頼をしていた彼らは、迷わずそれを飲んだ。

「にしても、何故ネデルが帝都に攻め込んでくるのだ」

女帝は薬を飲み干すと、苛立たしげにパチンと扇を開閉する。陸続きで繋がっている帝国の隣国、ネデル国はサン・フルーヴ帝国の従属国となつて久しい。そして帝国とは保護国として同盟関係を結んでおり、敵対国家ではない。

先王は崩御したばかりで、ネデル国は4歳の幼君をいただいている。幼王のもとで摂政ら補佐役の反乱、陰謀、権力争いが巻き起こり、その結果の帝国への謀反だとしても、なにも5名の兵で奇襲をかけてはこないだろう。

となると、

「首謀者は誰だ？」

「黒死病の性質をよく理解していますね……教養のない者にはまず立案できません。錬金術師か、医師か、薬師か、学者です」

「心当たりがあるのか」

「ええ……」

ブリュノは過去の記憶を引っ張り出していた。

ネデル国は3年前、優秀な平民の薬師を迎えたという話を聞いていた。薬師の名は分からなかったが、聞き及んだ薬師の特徴、施した治療法が、さる忌まわしい人物とそっくりだったのだ。

それは、ノバルト医大で天才の名をほしいままにし、ブリュノと同様に数々の治療法を確立し名声を博したとある薬師。だが人間性と道徳観念に著しく欠如し、数々の残虐な人体実験を繰り返した。彼が追放される前、彼はネデル国のある大貴族から資金を受けて、効率的に多くの人間を殺す毒物を研究していた。そして、彼の開発した毒物は数々の国家元首の暗殺に使われたという。

研究のためなら、彼は何でもした。大量の捕虜を実験に使いもした。

それは邪悪すぎて神殿に神脈を閉鎖され平民へと落とされた一人の学者の昔話だ。

ブリュノはかつて彼の罪を暴き、彼を追放した一人だった。

「先王が崩御されたのも、何か関連があつたのかもしれませんが」

だから、強力な毒物の研究をしていた彼が、人々に感染して拡大してゆく毒、つまり疫病を広めて国を亡ぼすことも、視野に入れていてまったく不思議ではない。

感染症が細菌によつて引き起こされること。動物から動物、人から人へと感染すること、それが病原となること、それらの病原をどう扱えばよいのか。それらを彼は、部分的にもファルマより先に知っていたのかもしれない。

そして、顕微鏡が彼の仮説に確証を与えたことだろう。彼は見ただろうか、瀕死の患者や死者の体液の中でうごめく細菌というものを。それを薄気味悪い笑みを浮かべ、冷酷に観察しただろうか。

『メデイシス、まだわからんのか。美しいこの世の真理が』

神脈を閉ざされ、二度と神術を振るえないように烙印を押され、平民として追放されたその日に聞いた彼の言葉が、ブリュノには忘

れられない。

『治しても治しても人間は死ぬ、だがな、死んでも死んでも人間は再生するんだよ』

邪悪な薬師の名は、カミュといった。

善意で広めたファルマの知識、ブリュノが飛ばした書簡が国境を越え、

悪意の色に染められて戻ってきたのだとしたら……

『そう簡単に、世界は滅びはしないのさ』

カミュには悪霊が憑いていた、ブリュノはそう考えている。

「あの男だけは、殺しておくべきでした」

ブリュノは彼を叩き潰しておかなかったことを悔いた。

「ネデル国とその国民は今、どうなっている？」

女帝はごく単純な疑問をブリュノに投げかけた。

「壊滅的な状況下にあるのではないでしょうか」

ブリュノは応えた。ネデル国もまた、奇襲、そしてクーデターのさなかにあるのではないだろうか。

彼はいとも簡単に人間を殺す。そして、また増えることを愉しんでいるのだ。

「ようくわかった」

女帝は今度こそ立ち上がった。短い言葉、その声色すらも帝王の威厳を放つ。

「ネデル国に遠征をしかける。斥候を出せ。その間に……」

帝都を何とかせねばな、女帝はそう言つてノアを呼び、真紅の帝杖を携えた。

… … …

「セドリックさん、どうしましょう。こんな鐘の音、はじめて」

ロツテはマスクを二重にして、凱旋門のある第一検疫所から、ほかの薬師たちとともに火の手の上がる方角を見ていた。

「この鐘の打ち方は、敵襲だな。人数は、待つて…… ああ、多くない。十人かそこらだ」

セドリックは、鐘の打ち方で敵の規模、迎撃している兵力、市街の破壊状況なども大体把握ができた。

「だが、神術使いだ。手練れの者だよ」

彼はぎりつと奥歯をかみ締める。老いた身でなければ、駆けつけて援護をすることもできたものを。はつきりいつて、セドリックは行つても役に立たない。彼我の力量の差は分かる。

「もしかして皆さん、あそこで薬を必要としてるんじゃないでしょうか。怪我をしている人はいないでしょうか」

市街地で発生した神術での派手な戦闘に、平民たちの区画は大きな被害を受けていた。木造家屋の屋根は吹き飛び、潰され、ほうばうで火事も起こりはじめた。平民や商人の悲鳴や怒号も、風に乗つて聞こえてくるかのようだ。

「第六門の近くには、異世界薬局があります。ファルマ様の危険な薬品がたくさんあります。爆発するものもあります」

ロツテは気が気ではないといった様子だ。

異世界薬局が燃えていないか見に行きたいのだ、とロツテはセドリックに必死に訴える。

「やめなさい。神術使い同士の戦闘が起こっているときには、誰も近づいてはならない。足手まといだ」

平民などは邪魔者でしかなく、せいぜい敵に人質に取られたり肉



の壁にされるだけだ。

「でも！ ファルマ様が戻ってこられたときに、薬局が燃えていたら悲しまれると思います！」

ロツテは目にいっぱい涙をためている。

「あなたに何かがあったほうが、ファルマ様は悲しむぞ」

ロツテは反論できなかった。そして悔しそうに火の粉をまき散らす空を見上げる。同じ空の下で、ファルマとエレンは今マーセイルで人の命を救うために戦っている。

「あつ？ あれ」

ロツテはおもむろに空を指さした。彼方の空から飛行物体が猛スピードで迫ってきて、帝都上空で急停止した。

「鳥？ いいえ、人みたい……誰だろう」

ロツテの言葉を聞き、セドリツクはぽかんと口を開けた。

ファルマは帝都上空に戻り、帝都でもひとときわ高い守護神殿の尖塔に降りる。

帝都中を耳が割れんばかりの音量で、警鐘が鳴り響いている。頭痛がしそうだった。

（まさか……もう?!）

精神力を極限まですり減らし、全速力で戻ってきた。それでも、（もう突破されてしまったのか!? ペスト菌が、帝都に入った!?）

帝都の第六門のあたりが騒々しい。エスターク村から帝都に至る主要な街道のある方向であり、異世界薬局のある方角だ。

帝都上空から全体に診眼をかけて見渡す。

すると、青光りする発光体の塊が、第六門のあたりに集中して見えた。

それなりの速度で不規則に移動してゆく、小さな強い発光体がある。

ファルマは尖塔を蹴って薬神杖で飛翔し、第六門へと近づく。近づくと、帝都の屋根から屋根へと飛び移ったそれが、青白く発光していることに気付く。

「リスじゃない。なんか新種っぽいモモンガだ……」

ファルマは衝撃を受けた。やはりげっ歯類だ。そして、モモンガは空を飛ぶ分、さらにタチが悪い。

（ネデル国は、ペスト菌がげっ歯類のノミを介して感染することを知っているのか？）

運ばれてきたモモンガは黒死病に冒され、檻の中で死骸となる。

現在進行形で空気感染も起こっているだろう。おそらく今、感染経路は空気感染が中心となっている。

空気感染はペストのもっとも凶悪な感染経路であり、致死率100%の肺ペストを発症させる。

「始まった……」

帝都に放たれたモモンガは帝都の神術使いら神術、弓兵隊によって一匹ずつ仕留められ駆除されてゆく。死骸はマスクと手袋をつけた処理部隊が一箇所に集め、焼却してゆく。

だが。

ぽつぽつ、ぽつぽつ。

青い光は帝都の人々に降り注ぎ、拡大してゆく。

感染した人間たちにとる光は、さながら海ほたるのようだ。ざっと見ただけでも、感染者は無数、数千人にのぼる。

発症すれば必ず死に至る病。

このまま手をこまねいて見ていれば、やがて黒い死病はたちまちのうちに大陸中を多い尽くす。

数百万人が死ぬだろう、かつての地球の中世史をなぞらえるかのように。

だが……、だが！ その光は、

「まだ青い！」

青い光は、ファルマが治癒できる疫病なのだ。  
できなければ赤い光が見える。これはファルマの手の届く疫病なのだ。

天がファルマに課した試練のようにも見える。

「治してやる！ 俺の力が及ぶかぎり！」

宇宙と世界を超えて生まれ変わり、彼は人外的能力を授かった。  
戦うすべを持たない、異世界の人間を助けるための能力だ。

（今、使わなくていつ使う！）

たとえ神力を使い果たして命が潰えたとしても、大勢の人間を救うために死ねるなら、二度目の死を受け入れる価値はある。

彼はそんな思いを胸に、ざわざわと肌が粟立つのを感じながら杖を握り、それを一気に大きく振りぬいて帝都全体に聖域を広げる。  
過去最大の神力量を振り絞って。

「滅疫聖域！」

地平線の先まではカバーできた。空気感染は免れるだろう。じわじわと侵食が続けていた青い光の勢いは衰え、増えなくなった。しかし、一度感染した人間の光は消えない。

「わかってる、わかってるんだ」

除染、次に感染源、感染者の治療だ。街中の除染をしなければならぬ。  
すぐに思いついたのは、消毒薬の空中散布だ。人がいない場合に

はそれでいい。だが、下には人がいて、人体への害が懸念される。

「そうか」

なによりも強力な消毒効果を発揮するものがあつた。

神術による生成水だ。

神術使いが神術で生成した水はもともと腐りにくいだが、ファルマが生成した水は、完全に腐らない。菌が繁殖しないどころか、死滅する。それを、薬局にウォーターサーバーを設置したときに細菌テストをしていて知っていた。

有益な腸内細菌も殺して客が下痢になるかと思いきや、下痢はしないようだ。有益な細菌に対しては殺菌的には働かないのかもしれない。確かめたわけではないが。

「薬神杖で生成した水なら……」

ファルマは薬神杖を振り、天にかざす。別世界から力を呼び込むようにして大量に水を生成し、それを霧状に大気に打ち上げた。高度で冷却された水蒸気の塊は水滴をつくり、急激に集合して雨粒へ、そして豪雨となつて地上に降り注いだ。

神殿に伝わる古文書の翻訳が難解すぎて神官長が訳せなかったの  
でファルマは知らなかったし発動詠唱すら打たなかったが、”浄化  
の白雨”という薬神杖固有の秘儀だった。

生けるものも、死せるものも、子供も大人も、人間も動物も植物  
も、浄化の雨に打たれてゆく。

人々は空を見上げ、目を細めた。

白い人型の発光体が、帝都上空を眩く照らしている。

ファルマの放った神技は屋外にあつては慈雨となり、たちまちの  
うちに民家を苛む火災を鎮め、屋内にあつては霧となり、その水滴

の内部にペスト菌を閉じ込めて殺菌し、帝都の大気を清め尽くした。  
ファルマは強い視線で第六門の方向を睨む。

次は感染源の根絶だ。

## 2章16話 彼が治せなかったもの

サン・フルーヴ帝国帝都、その街の一角。

大勢の帝都の騎士団、武装神官らが、黒死病を帝都に持ち込んだネデル国<sup>ネデル</sup>の聖騎士らを取り囲んでいた。

彼らは氷の矢を受け、肺ペストを患い、さらに重傷だ。

大失血が始まり、血だまりが石畳を赤黒く染めてゆく。死を間近に控えていた。

「黒死病を帝都に持ち込めば、ネデル国は帝国の隣国だ。ネデル国も滅ぶんだぞ！」

帝国軍の少将が聖騎士を叱りつける。

「黒死病……なの……か？」

激しい吐血に咽びながら、彼らの一人が目を見開く。

聖騎士たちは驚いたようだった。そして、黒死病がどうやって感染してゆくかということもわかっていないようだった。今や、帝都では衛兵レベルでまで公衆衛生指導が行き届き、感染予防の知識を持っている。だが、聖騎士らにはその知識がなかった。

「私たちはあの男に言われたことを、言われたようにやっただけだ」  
「目的は分らない……」

聖騎士の一人が力尽きた。

「馬鹿なことを！」

帝都上空より降下してきたファルマは、ネデル国の聖騎士らを取り囲まれている現場を見下ろす低い店舗の屋上に立った。保護衣のフードを目深にかぶる。

ネデル国の聖騎士らに診眼を使うと、全員赤。そしてたった今、一人が死亡し残りは二人になった。  
手遅れだ。

「われわれの任務は終わった」

聖騎士二人は血に咽ながらも、語り始めた。

作戦は全て、ある一人の人物によってたてられたという。

「国民を人質にとられているんだ……」

千人もの人間を一ヶ月で滅ぼすほどの疫病を操る力がある、それを誇示するためだけに植民地は滅ぼされたのだという。

「ネデル国民の大虐殺を避けたければ、動物とその死骸を帝都に放り込んで、風を使つて騒動を起こせと」

それが何を意味しているのか、二人とも分からないようだった。帝都を少しばかり汚染するだけなら、それでネデル国民が全員が救われるなら、言われた通りにやってやろうと思ったという。

既に、王や王族らは毒殺され、政府は機能しておらず、冷静な判断のできるものはなかった。

「我らは、言われた通りの荷を運んだ。その間に、運搬人たちがほとんど死んで……」

それで、聖騎士らは作戦の遂行を焦った。神力のある貴族は、平民より免疫力が高い。それでも、黒死病は彼らを蝕んだ。

体中に氷の矢が突き刺さり、いよいよ瀕死となったネデル国の精鋭ともいえる聖騎士らは呼吸を荒げながら、悔しそうに吐露する。ネデル国にはまだ、黒死病は広まっていない。

だが、いう事を聞かなければネデル国民の運命は終わる。仕方なかったのだという。

「何でその男を殺さない！ お前たちほどの腕を持つ者が！？ なぜ言いなりになる！」

近衛師団の師団長が、苛立たしそうに問い詰める。

「殺せないんだ……殺せない……あいつは、あの男には悪霊が憑いている」

人間には殺せないんだ、と聖騎士は意味不明なことを言った。

何度も、殺そうとしたんだ、と彼らは言う。

「殺そうとした瞬間、もう殺されているんだ……」

「なんということだ、ネデルの守護神殿は悪霊を抜えなかったのか！」

神官長サロモンが苛立たしそうに問う。そもそも、大神殿にネデル国の惨状は報告されていない。救援も呼ばれていないのだ。

「神殿は……二ヶ月前から封鎖されている。神官たちも皆殺しにされた、鳩も馬も殺された」

神官長サロモンの知らない情報だった。

「それは厄介なものにとりつかれたな……」

「神殿をもともせず、国家に憑くほどの大悪霊を引き剥がすには、並大抵のことではない」

神官たちも警戒をあらわにする。

「その男の名はなんという」

威圧を含んだ声で、問いかけがあった。ブリュノが現れたのだ。現場を直接確認するために、馬を走らせてきた。

「名はわからない」

ブリュノは特徴を挙げてゆく。

「カミュ・ド・サド。青髪、左頬に大きな火傷の跡がある、隻眼の、狡猾かつ邪悪な男だ」

聖騎士は驚いたように目を見開いた。

凶星だったのだ。

「そうだ……名は知らないが、そうだ。あの疫病神の言う通りにした。これで、ネデル国は助かった……の……だ」

息のあった最後の聖騎士は遺言のように言い残すと、満足そうな表情を浮かべ……そしてこと切れた。彼らの遺体はただちに、火の神術使用によってその場で念入りに焼却され始めた。

（そういうことだったのか……）

ファルマはその一部始終を見下ろしながら、ようやく事情を把握



した。悪霊というのがまだ理解できないが、相当に凶悪な人物がネデル国の枢要部で恐怖政治を敷いているということなのだろうか。ブリュノが知っているようなので、後で詳しい話を聞こう、とファルマは心に留める。

ネデル国に対してもあれこれと対策が必要なのだろうが、（俺はまず、帝都のペストを食い止めないと。今のままでは薬が足りない）

それが先決だった。優先順位をつけなければならない。

ファルマにしか特効薬スパロフロキサシンは造れないのだ。

（まずは全感染者数の把握、次に不足分の生産）

ファルマは薬神杖に神力を通じると、集まった人々に見つからないよう、音も立てず静かに飛び上がった。

敵襲の心配がなくなったということで、わんわんと帝都中に重なり合っていた警鐘は、すうっと潮がひくように鳴りやんでいった。しかし、ネデル国の聖騎士らを焼く炎を見つめながら考え込んでいたブリュノが、重大なことに気付いた。ブリュノは視線を据えたまま、口の中で小さく呟く。

「いかん」

あの男は、心が壊れている。人を全くといって信用しない。

「ネデル国の聖騎士が仕事をしたかどうか、自らの目で確かめる筈だ……」

彼にとって、病に冒され死にゆく人間は美しいのだ。

衰弱と絶望と死、そして、病に耐えた少数の人間によって始まる再生。

そこにカミュは美を感じている。

人々に疫病が蔓延して死に絶えてゆくさまを愉しもうとするだろう。

それも、すぐ間近で。

「屑が！」

ブリュノは杖を握り、怒りを爆発させた。強い神力が迸る。

「警鐘を止めるな！！ 警鐘を鳴らし続ける！」

彼は叫ぶ。

「カミュは帝都の中にいる！」

見つけ次第、討たねばならぬ。

… … …

第一検疫所に詰めている者たちは、見張りの兵が凱旋門の上で市内の様子を伝えるのを耳にしながら、事の成り行きを見守っていた。けたたましく鳴っていた警鐘は段々と落ち着いた調子になり、間延びしていつて、ついに鳴りやんだ。

「警鐘が鳴りやみました！ 薬局に戻ってみませんか？」

ロツテがセドリックを誘う。

「そうだな。帝都の衛兵たちが敵を倒したようだ、ひとまず、危機は去ったか」

第一検疫所から、ひっきりなしに往来する帝国の衛兵らとすれ違いながら、ロツテとセドリックは異世界薬局へと急ぐ。帝都の中は神術戦闘によって物が倒れたり、地面が陥没していたりでところどころ荒れ、各店舗や家屋から顔を出した帝都民は混乱に陥っていた。やっとのことで第六門方向にたどり着くと、帝都の路地の角地にある大きな門構えの異世界薬局は、以前と同じように佇んでいた。

「よかった、燃えてない！ よかったあ」

ロツテは嬉しさ余ってぴょんぴょんと跳ねる。そんな彼女に冷や水をかけるように、再び警鐘が鳴り始めた。

「ええっ！？　また警鐘が！」

「おかしいな。新たな敵か？　警鐘が終わるまで薬局の中に入っていないよう、薬局は安全だ」

薬局の植え込みや立て看板などは、風でやられている。しかしロツテは、薬局の外観にくまなく目を配っていて不自然な点に気付いた。

「あれ、東側の窓が開いている……」

「風術使いの爆風で開いたのだろう、施錠が甘かったのかもな」  
セドリックもそれを見上げた。

「私、ちゃんと鍵かけたんだけど。閉めに行ってきます」

薬局の中に入ると、開け放たれた窓から風が入り込んで、書類を散らしていた。それをセドリックとロツテは一つ一つ塞いで、散乱したものを片付けてゆく。

ロツテは三階に上がっていった。ガタン、と四階から物音がする。

「あ、ファルマ様が帰ってこられたみたいです！」

二階にいるセドリックに、ロツテが呼びかける。

「それは変だ。ドアにも門にも鍵がかかっていたぞ、動物ではないか？」

ロツテはセドリックの話の途中に、四階の研究室へと階段を駆け上がっていった。

「待ちなさい、ロツテ！　私が確認する！　黒死病のリスの残りが入ってるかもしれん！」

嫌な予感のしたセドリックはロツテを追う。彼は膝が少しずつつ治ってきたのでエレベーターを使わなくても階段を上がれるようになっていたが、どうしても若いロツテよりは遅くなる。

ファルマに会いたい一心で息せき切って駆け上がるロツテには、セドリックの声は聞こえなかった。四階に到着すると、研究室の扉は開いていた。

「ファルマ様！」

ロツテは嬉しそうに研究室の中に駆け込む。

研究室の中には、危険な薬品がたくさんあるので入ってはいけな  
いと言われていたのも、すっかり忘れていた。

「あれ……ファルマ様？」

ファルマはいなかった。開かれた窓から、ひゅうひゅうと風が吹  
き込んでくる。研究室にあるのは、数々の薬品類、そしてガラス器  
具、何に使うともれない実験道具、そして大量の実験ノートだ。  
「気のせいだったのかな。でも、ここも閉めなきゃ、ホコリが研  
究室の中に入って大事な薬品がいたんじゃない？」

ロツテは背伸びをして、開放になっていた窓を施錠して閉めよう  
とした。

だが、それより先に後ろの扉の閉まる音が聞こえる。

「え？」

彼女は無防備に振り向いた。

「シャルロツト！ 待ちなさい」

セドリックが四階にようやくのことたどり着くと、ロツテが研  
究室の床の上に倒れ伏していた。

「ど、どうしたんだ！」

セドリックが研究室の中に入り、ロツテの肩に手をかけると、背  
後から人の気配がする。

彼が振り向くと、背後から背中に衝撃が走った。

「っ！！？」

熱い一撃が、セドリックの背を直撃する。そのまま、背中に硬い  
ものをねじ込まれる。

侵入者はドアの裏に潜んでいたのだ。セドリックは杖を抜こうと  
したが痛みで手が震える、そのうち、その手ははつきりと痙攣を始  
めた。

「……うぐっ！」

呼吸ができない。

… … …

その頃、ファルマは帝都上空に滞空していた。ペストに感染した患者の全数把握のためだ。

診眼で市街を見通すと、建物も貫通して患者に宿る青い光は見える。

感染は成立しているが、全員潜伏期間だ。まだ症状は出ていない。ペスト菌は、早期に投薬を開始すれば、そう怖いものではない。

1日、ないし2日以内、潜伏期間中に全員に薬を配り、飲んでもらうことができ、疫滅聖域をかけつづけ、検疫所が機能し続ければ、帝都の黒死病は一ヶ月以内には終息させることができるだろう。

犠牲者も、……ひよつとすると出るかもしれないが、最小限に抑えられるはずだ。

「発症する前に、終わらせてやる！」

悲観的な状況にはならないはずだ、理論上は。希望的観測も込めてだが。

「ん？」

身を刺されるような悪寒と胸騒ぎがして、ファルマは視線を異世界薬局の方向に向ける。

四階に大小二つの、強烈な点状の青い光、そしてそこから滲み出すように人型の薄い光がもった。

たった今だ。

「何で、四階が！？」

一も二もなくその場に駆けつけようとして、ファルマは絶句する。四階に、真っ黒な影が佇んでいるのが見えたのだ。

この世の影という影を凝縮した、目を合わせただけで吸い込まれそうな虚無の深淵だった。

「何だ、あれは……！ 黒い、影だ……」

（あれが、兄や妹、そして神官たちの言っていた悪霊なのか？）  
ファルマは怯んだ。悪霊がいたとして、どうすれば払うことができるのか知識がない。

神官の領分だ。

だが、薬局の四階でじっと動かなくなっている患者にともる青い光は紫へ、段々と赤くなるうとしている。ものの数分で手遅れになる、そんな危険な兆候だ。

「何でこんなに速い！ ペストじゃないぞ。何だ！？ 毒か！？」

異世界薬局の四階には、確かに実験の合成過程に必要な毒劇物が薬品庫に数多く取り揃えてある。それでも、万一の事態や盗難などを考えて即効性の毒は置いていない。危険なものは鍵付きの、頑丈な薬品庫に入れてある。

黒い影をした悪霊が、研究室にある何かを飲ませたのだろうか。  
そんな馬鹿な、そう思いながらも、ファルマは診眼に問う。考えなしに近づくのは愚策だ。

「中毒！」

青い光の輝きに反応があった。やはり、毒物を飲まれたようだ。

「シアン化カリウム」

即効性から青酸カリを疑ったが、違う。やり直した。

「無機化合物」

違う。

「有機化合物」

反応あり。

「アルカロイド」

大まかなくくりから分類して、細かなくくりへと絞ってゆけば必ず見つかるのだが、毒の種類というものは、膨大なのだ。適当に言いまくってあたるものではない。傷口状に青い光が見えることから、矢毒、もしくは傷口を通して入った毒だと見当をつける。

彼はアルカロイドを更に絞り込んでゆく。あてずっぽうではない。彼の記憶にある限りの、即効性のアルカロイド（天然由来含窒素有機化合物）の猛毒を挙げてゆく。

しかも、この世界で入手しやすいものを中心に。

「アコニチン」

青い光は薄くなった。アコニチンとは、トリカブトに含まれる有毒成分である。父が解熱剤として患者に限定的に使っていた猛毒だが、ファルマの実験室にはなかったものだ。

そして、この毒に対する解毒方法は存在しない！

「くそっ！」

解毒剤は造れない。胃洗浄も手遅れだろう。対症療法では遅すぎる。

「だったら……！」

右手の消去の能力を使う。

「アコニチン（ $C_{34}H_{47}NO_{11}$ ）を消去！」

遠隔で猛毒を消去。

悪霊を倒してから、接近して毒の治療をしていては間に合わない、患者が死ぬ。

だから遠隔で解毒したのち、悪霊を抜い（？）にいくのだ。

アコニチンの構造は複雑極まりないが、幸い創造の能力と違って、消去の能力は化学式もしくは化合物の通称名を唱えるだけで消える。だが、まだ青い光は消えない。薄くはなったものの。

「まだあるのか！」

複数の毒が組み合わされているようだ。

次は矢毒として用いられているものを中心に挙げてゆく。まさか、思いながらもその中の一つを挙げる、

「バトラコトキシン」

ヤドクガエルの神経毒がヒットした。この毒は、この世界ではどの医学書でも知られていない。

この世界には、ヤドクガエルがないからだ。

（何でこんなものが。思いつかないし、できないぞこんなの………）

ファルマは悪寒がしてきた。毒と薬は紙一重である。正しい薬の知識を悪用すれば、毒殺も自在なのだ。

黒い影は、この世界の人間の常識を超えた悪霊なのかもしれない。

「バトラコトキシン（C31H42N2O6）を消去！」

解毒は完了。人型だった青い光は消え、局所だけにぼつんと光が点る。二人は一命をとりとめた、小さな傷はあるものの。

ファルマは覚悟を決め、今度こそ悪霊をめがけて猛進する。

開いている四階の窓から研究室の窓をけ破るようにして突入した。黒いフードとローブで全身を被った長身の侵入者が、ファルマに背をむけてそこにいた。

『嫌な気配だ。強い光の気配がする』

男は体が軋む音が聞こえてきそうなほどぎこちない動作で振り向くと、口を開いた。ねっとりとした、耳にこびり付くような声だった。腐敗臭を思わせる、強烈な臭気を放っている。

『邪魔をしにきたのか？ 愚かだな、人は誰しも死ぬというのに』

男は気味の悪い問いかけをしてきた。男は片手でするりとフードを取る。

男の顔面の左半分は骸骨が見え、皮膚は真っ青で腐っていた。左眼がない青髪の男だった。

その外見に、ファルマは思い当たる。

「お前……まさか、カミュか」

先ほど、父が犯人だと見当をつけていた人物。ネデル国の聖騎士らが、悪霊と断じていたもの。

『いかにも、我輩はそうだ』

彼はほぼ骨格だけになった指で、愉快そうにファルマを指す。



人間ではない、人の形をした死骸だった。

「う……う」

研究室の床に倒れていたのは、セドリツクとロッテだ。セドリツクは、ロッテをかばうようにして倒れていた。うめき声が聞こえる。解毒は遠隔でできたが、背中に小さな刺し傷がある。

致命傷ではない。この悪霊を倒したら、二人の処置に取り掛かる。なんてことを……」

ファルマが視線を彼らに向けた隙に、次の瞬間、カミュは蓋をあけた薬瓶を持っていた。

『この実験室は素晴らしい。未知の毒物がこんなにもある……これは何だ？ 興味深い』

薬瓶の中にはたつぷりの液体と、そして結晶が入っていた。ファルマが合成のために用意していた白リンの粉、これはファルマが物質創造を行って薬品庫に鍵をかけてストックしていたものだ。白リンは、空気に触れると自然発火するので、今は薬瓶の中の水に漬けてある。

『帝都での死病拡散の実験を見に来たのだが、もののついでだ。この毒で皮膚がどうなるのか、”実験”してやろうか』

その白リンの入った薬瓶を、ロッテの顔の上にかざしていた。その瓶を傾ければ、ロッテの顔は白リンで燃えて、その炎は消えない。白リンの火傷は深く、治りにくい。重度の化学火傷を負ってしまうだろう。

どのように有毒なのか、カミュはすぐに試したいと考えたようだ。彼女が生きているうちに。

それを、ファルマは許さなかった。

カミュの手が動く前に、ファルマは白リンに向け手をかざす。

「白リン（P4）消去」

結晶は消え去った。もはや薬瓶の中に入っているものは、有毒ではない。

「俺の試薬で人を傷つけるな！　そういうのは……」 実験”とは言わないんだよ」

猛毒の薬品を使って、ただその効果を人に試す。  
それはただのおぞましい加虐であり、科学と薬学への冒涇だ。

「無理だ。お前だけは……」

静かな憤りを抑えつけ、ファルマの声は震えた。

毒が体から抜けたことで意識が戻り、瞼をもたげたロツテは、ファルマの声にびくつと肩をすくめた。

「お前は治せない」

ロツテは見えない力で射すくめられたような錯覚に陥る。場の空気の重みが増す。ロツテは声をかけることもできず、伏したままこくりと唾を飲み込んだ。ファルマの声のようでなかったからだ。別の人物が発したかのような、悲しみと怒りを極限にまで圧縮した、そんな声だった。

ロツテは彼が怒ったのを、見たことがない。

それでも、今ははつきりと感じた。彼は怒っているのだと。

『だったらどうす……うぶっ！？』

ファルマは拳を握りしめると、神速で踏み込む。カミュが猛毒を塗り込めたナイフを振りかざすより速く、考えるより先にカミュの顔を殴り飛ばした。

全身全霊をこめて、この邪悪な存在を消さなければならないとファルマは感じた。

無言で神力を圧縮された拳を叩き込まれた悪霊は、顔を失う。

悪霊に対して、右手の消去の能力が自動的に働いていた。

カミュは凄まじい勢いで四階の研究室の反対側の窓を突き破り、多くの瓦礫や破片とともに薬局の外へと吹き飛ばされた。

薬神杖で飛翔し、その加速に身をゆだねる。

空中でもう一度、ファルマは拳に力をこめる。

拳を受けたその瞬間からその体躯は衝撃で破壊され、歪に変形する。

ファルマの右腕が脈打ち、疼く。

胴体を粉碎。

体はほてり、熱を帯びて、その拳で、もう一撃。

彼は殴り潰した。腐った肉片が脆く飛び散り、灰燼となって、白い浄光に包まれ消えていく。

「消える！」

ファルマは空高くから衝撃波を纏う薬神杖を振りかぶり、空中で一気に貫通させる。

悪霊に一切の抵抗も反撃の余地も与えず、その存在の本質をとらえ貫き通して、内部から徹底的に破裂させる。

垂直落下で串刺しに、地面へと縫いつけた。

『うぐあ……ひいっ……』

ファルマの神力に屈した地面は波打ち、終に圧力に耐えられず一瞬おいて巨大なクレーターが穿たれる。

カミュを貫いた薬神杖は鋭く発光し、虹色の超高温の炎でカミュを完全に包み込んだ。

路地の岩盤すら、真っ赤に焼ける。

『……これが死か』

カミュは炎に包まれながら、最後の言葉を遺した。

それは悪霊に憑かれた男にとって、待ちわびていたものだった。カミュに宿っていた影は薬神杖に貫かれ、暫くのたうっていたが、薄くなって消えた。

黒い塊を失うとともに、男の体は灰となって崩れ、風に散ってゆく。

「馬鹿……やろう」

彼を葬り去ったあと、ファルマは虚しさを感じていた。

カミュの頭脳と才能はこの世界の基準をはるかに超えていた。その知識、知見、発見を使えばどれほどの人々の病を癒せただろう。後世に名を残す、すぐれた薬師になれたはずだ。

ただ、彼はそうではなかった。

彼はあまりに邪悪だったのだ。その邪悪な心に、更に悪しきものがとりついた。

警鐘が鳴ったので再び店舗の中に避難していた街の人々が、すぐ外で聞こえた大きな物音と地震のような衝撃に驚き、恐る恐る窓をあけてみると、巨大なクレーターの中央に、保護衣をすっぽりと着て、フードで顔の見えない子供が透明な杖を持ち、ぽつねんと立っていた。

「な、何が起こったんだ？」

真相を知るものはなかった。

太陽の光が雲間から差し込み、空は晴れ上がってゆく。優しく暖かな風が、サン・フルーヴ帝都を癒すように天上から吹き降りてきた。

「ファルマ様」

刺された背中での痛みをこらえながら、ロッテが薬局の階段を下り

る。一歩ずつ、その足取りを確かめるようにファルマに近づいてきた。ぽた、ぽた、と血痕が彼女のあとを追う。

ファルマはうなだれていた。

そして、ロッテは眼にいっぱい涙をため彼を見上げると、ひしつと抱きしめた。

「おかえりなさいませ」

それ以上の言葉は、今は必要なかった。

## 2章16話 彼が治せなかったもの（後書き）

### 【謝辞】

本項は、アルカロイドにつきまして大学教員の S o - h a p p u 先生に指摘をいただきました、ありがとうございます。

## 2章17話 黒死病終息とそれぞれの後日譚

カミュを葬り去ったあと、異世界薬局前の帝都の大路には大きなクレーターがぽっかりとあいていた。

何が起ったのかと、街の人々が集まって遠巻きに覗き込むが、フードつきのローブを頭からすっぽりと被った子供の正体は一見しては分からなかったし、声をかける者もいなかった。

「どいたどいた、危険だ！」

「規制線の外に出るんだ！」

帝都教区の神官たちがクレーターの周囲に規制線を張り、野次馬を追い出す。

「ありがとうございました、薬神様。われわれの手にはおえなかったでしょう」

真っ先にやってきたサロモンは、ファルマに深々と頭を下げる。

ファルマは負傷したロッテを支えて抱きかかえていた。ロッテは安心したのか、立ったまま眠ってしまった。

「悪霊つて、いたんですね」

（普段、神官たちはこんなものを相手に戦っていたのか……）

ファルマはカミュの”命”を奪っただろうか。いや、カミュは随分前から死んでいたのだろう、少なくとも、生きてはいなかった。と、ファルマは自分を納得させる。

「ご存知なかったんですね」

悪霊の相手は日常茶飯事でしてね、とサロモンは相槌を打つ。

「最近、薬神様の聖域のおかげで暇をさせていただいていました」  
「知りませんでした。見たこともなかったのです」

ファルマは彼ら神官の仕事に、大いに理解を示すことになった。

「ええ、それはそうでしょう。薬神様のもとに、多少の悪霊が寄つてこれようもありませんから。しかし聖域をもおそれぬ大悪霊でし

たな」

「これに憑かれたら帝都は滅んでいたやもしれません」

「ネデル国が心配ですね」

神官たちは聖水を振りまいてクレーターの中を浄化しながら、ファルマに感謝の言葉を述べた。悪霊を祓った後にも、後始末があるのだろう。

「凄い威力ですね」

「この穴ですか、やりすぎました。すみません」

ファルマが頭を下げると、神官らはとんでもない、と手を振った。人に憑依した悪霊を追い払うことしかできず、逃げた悪霊はまた別の人間の中に入り込む。

それを完全に消滅させてしまう神力は凄い威力だと言いたかったようだ、人間業ではないらしい。

「いやはや、この悪霊は二度と復活できないでしょう」

地面にこびりついた影を見ながら、サロモンは薬神杖でこんなことができるのかと呆れていた。そこにはカミュの遺体すらなかったのだ。

「あの、この子を薬局の二階へ運んでもらっていいですか。あと、四階にも倒れている人がいるのでその人も運んでください」

ファルマの体格では、だらんと脱力したロッテ、そして四階のセドリックを運ぶのは厳しい。

「はいっ！ お安い御用です、薬神様」

神官たちは整列し、ファルマへの忠誠度最大で口を揃えた。

「やめてくださいその呼び方」

やりづらさを感じ、人目を気にしてフードを深く被りなおすファルマだった。

… … … …

「あっ」



背中をはだけたロツテが、短く声をあげる。彼女ははにかみながら、脱いだエプロンで前面を隠していた。ここはカーテンを引いた薬局の二階の処置室で、神官たちが彼らを運んでくれたのだ。

「局所麻酔をかけたからね」

ファルマはロツテに鎮痛剤を飲ませ、局所麻酔を施し処置をしていた。ロツテはじつと動かずに眼を閉じている。隣のベッドには、セドリックが座っていた。

「セドリックさんはどう？」

「私はまったく痛みません」

「じゃ、二人ともうつぶせになって。傷口を洗うよ。傷口に少し汚れが入っているから」

ファルマは休まず、薬局の2階の処置室で二人をベッドにうつぶせに寝かせて同時に手当を行う。

「何が起こったのでしょうか。私たち、背中を刺されて息ができなくなって、気を失ったのですが……」

セドリックは、なぜ自分が倒れたのか理解に苦しんでいた。

「二人とも即死毒の塗られたナイフで刺されていたんだ。それで意識がなくなったんだと思う」

（致死毒二つとか、凶悪だったなあ。傷は深くなくてよかった）

ファルマは今になって恐ろしくなる。

必死で解毒したが、毒の種類を特定できなければ数分で死んでいた毒だ。カミュが毒の研究をしていた、というだけのことはある。

「なんと、そうだったのですか」

セドリックが事情を聞いて、命拾いしたと青ざめる。

「助けてくださったんですね……」

ロツテはじーんと感謝のまなざしでファルマを見つめる。

「でもごめんなさい、私、四階に入るなって言われてたのに、物音がしたからファルマ様がお戻りになったのかと思ってつい……言いつけを破ってごめんなさい！」

軽率な行動を反省するロツテは、肩を落として猛省している。

「私も彼女を止めたのですが、間に合いませんでした。神術使いの端くれでありながら、不意を襲われ杖すら持てず……」

不甲斐ない、とセドリックは悔しそうに告げる。

「二人とも、危険な目に遭わせて悪かった」

「あなたが仰ることではありません。こちらが申し訳ありません、ファルマ様」

「俺の責任もあるから、四階の試薬の管理を徹底するよ。二人はゆっくり回復に専念してくれ」

消去の能力があつてよかった、とファルマはつくづく思う。創造の能力だけでは、二人とも死亡していた頃だ。それに街中の異世界薬局の研究室に、有毒物質があるのは問題だ。次から実験をするとき以外は有毒な試薬を消去して研究室を出よう、とファルマは肝に銘じた。

マーセイル領から夜通し馬を走らせ帝都に戻ったエレンが、薬局へと駆け込んできた。

エレンが二階へ駆け上がつてくると、ロッテとセドリックがベツドに横たわり、ファルマは彼らの容態を見守っていた。

「ファルマ君、生きていたの！ 無事でよかった…… ロッテちゃん、セドリックはどうしたのこれ？」

「ナイフで刺されたんだ、命には別状ないと思う。マーセイル港は？」

「ああ、それならもう終わったわよ」

エレンはサン・フルーヴ大市を目指した船舶を検疫し、海の玄関からの死病の流入は防ぎきっていた。領主代行アダムは、マーセイル港を国内の船舶のみの入港に制限した。なお、予定外に港に乗り入れてきた船に対応するため、いつでも検疫ができるように弟子たちを港に常駐させている。

「ありがとうエレン。エレンだったから、あそこを任せることができたんだ」

数々の能力を持っていたても、ファルマも何でも一人ではできない、彼の事を理解してくれている存在と、そして腕のよく信頼できる薬師がファルマには必要だった。エレンはその二つを兼ね備えていた、だからファルマはエレンに感謝しているのだ。

「うっん。大したことはしていないわ。ていうか店の前のクレーターは何？　ファルマ君が？」

大悪霊を滅ぼした際にできた、巨大な神力だまりが発生している、と店の前に大勢詰め掛けていた神官たちが言っていた。

「殴ったことしか覚えてないな。あんな大穴あけたら、通行人が危険だよな、修理費も払わないと」

逆上して、カミュに何をしたのかファルマは殆ど覚えていない。

「そういえば、瓦礫で怪我をした人とかいなかったんだろうか。ほかの店も神力で壊したら弁償しないと」

自らが命の危険に遇ったというのに、周辺住民のことまで気にするファルマにエレンは、

「あなたって、ほかの人のことは本当によく気が回るのね。自分のことは気にしないのに」

といって脱帽する。そしてこの少年を改めて尊敬するのだった。

「まだ、終わってないんだ」

ファルマは、ともすれば緩んでしまいそうになる気を引き締めた。「私も手伝わせて」

二人でロツテとセドリツクの傷口の念入りの洗浄を終え、ファルマとエレンは傷口に白色ワセリンを塗り、そのうえに清潔なフィルム片を貼る。

「こんなもので本当に治るの？　もっとほら、きれいな布とか当てて包帯とかしなくていいの？」

もう少し治療らしいことをしないの？　とエレンは物足りなさそうな顔をしている。

「止血をしたあとの、あまり深くない外傷の処置の基本を言うよ。  
一つ目。傷は消毒しない、乾燥させない。それは傷口の細胞を殺すことになるだけだから。」

二つ目。傷はとにかくきれいな水で洗い、異物も徹底的に除去する。それは傷口についている細菌の数を減らすため。

三つ目。傷口に布をあてて体液を吸わない。体液には傷口を治そうとする物質や免疫細胞が含まれているからむやみに取り除かない。  
四つ目。かさぶたを造らないように、傷口は湿らせて免疫細胞が活動できるようにしておく」

ファルマはひとつずつ指を折って、要点を絞りエレンに伝える。

エレンは、眼鏡がずれたまま啞然としていた。

「何にでもこの治療法を使えばいいってわけじゃない。感染していないか、状況をみながらでないといけない」

「あなたの言っていること、私には非常識に聞こえるわ。それこそ腕の悪い医者みたい。傷口には何もせず、焼きごてで焼くのよ？」

「傷口が浅ければまだわかるけど、それだと傷が深ければ細菌を傷口の中に閉じ込めたまま傷をふさぐことになる。それに火傷も増える、大量出血していないときにはやらなくていいんだ」

「なるほどね……」

エレンは、おぼろげながら納得する。確かにこの世界では体に傷を負うと、傷口を焼いても焼かなくても傷口は化膿し、敗血症になっってしまうのが常だった。

場合によっては傷が原因で命も落とす。

「でも、かさぶたができないと治らないじゃないの」

彼女にはまだ、疑問が残る。

実際、かさぶたがきれいにできれば傷はじきに治ると考えられていた。

「かさぶたは、確かに細菌から傷を守ってくれるし出血も抑えてく

れるけど、傷の回復の指標ではない。むしろ、それがあることによって治りが遅くなるんだよ」

それがわかったのは、地球の医学でもここ最近のことだろうか。「傷口を洗って傷口からしみだして来る体液を除かず、湿らせて保護するようにしていれば治るんだ」

これを湿潤療法といい、21世紀の治療法だ。

かつて、地球でも前世紀までは傷口には消毒薬を振りかけて乾かしていたものだが、それは細菌を殺すより傷口の細胞を多く殺すだけだった。

殆どの場合、消毒薬は傷口には必要なかったのだ。

傷口に消毒薬は全く必要ないわけではないが、傷口に大量に細菌が入り込んだときや予防的な消毒など、限られた場面で使われる。

この場合は、当てはまらない。

「二次感染予防に、黒死病の薬も飲んでもらおうかな」

ファルマは診療バッグから、黒死病の薬として準備していたスバルフロキサシンを取り出す。

「黒死病の薬が、刺し傷の感染予防にも役立つの!？」

「うん、この薬は抗菌スペクトルが広いから外傷の二次感染予防に使っていい」

「その知識は、いったいどこから」

「やっぱり薬神だから？」

とエレンはもう何度目になるともしれない質問を投げかける。

「多分前世の知識だよ。それに俺、薬神じゃないから」

だが、そう言いきれぬ自信は、そろそろファルマにはなかった。それでも人間でないと認めてしまうと、心まで人外のそれに変わってしまいそうでファルマは拒絶したい心境である。

彼は前世も今生も、彼を必要とする傷ついた人間、病んだ人々に寄り添いたいと考えていた。

「あなたって、本当によくわからない存在ね」

ほぼ定型化しつつあるエレンの言葉に、

「俺もよくわからない」

とファルマはいつものように返した。二人がそれぞれの処置を終えたころには、ロッテとセドリックは寝入ってしまった。

その日のうちに、ファルマは実に七千人分のスパルフロキサシンを追加で創薬した。

力を使いすぎたのか、あるいは疲労がピークに達したのか、ファルマは物質創造の発動後一時間ほど、気絶してうんともすんとも起きなかった。

エレンらが「もう目覚めないんじゃない……」と心配しているとむっくりと起き上がって、調剤薬局ギルドの薬師、あるいは暇をもてあましていた量り売りの商人に、量を計って分包するように指示した。「へえ、むしろ薬売りじゃないんですが、いいんですかい」

「お願いします、助かります」

子供店長を手伝うため、薬袋を折る紙職人も、ボランティアで集まってきた。

「今日中に配り終えないといけないんだ」

「できた薬の計数はこっちだ！」

「この薬に、帝都の存亡がかかっているんだ」

「てめえら薬を中抜きするなよ！ 盗人はぶち殺すぞ」

調剤薬局ギルドの薬師、MEDIQUEや8020の薬師らにより、住民への新薬の無料配布が開始された。異世界薬局とその関連薬局の従業員、薬師たちは黒死病撲滅のための作戦本部を立ち上げ、帝国で中心的な役割を担った。

帝都は清浄区、感染区、重症感染区に分けられ、重症感染区への立ち入り制限は行われる。

服薬した人間の大部分はペストを発症しなかったし、発症したとしても軽症に終わった。

既に発症していたネデル国の商人の感染者も、懸命の治療によ

り、ほとんどは一命をとりとめることとなった。

当然ながら薬師ギルドの薬師たちにも、薬は無料で配られる。それを彼らに届けるのは、調剤薬局ギルドの仕事だ。

「こんなことは言いたくないが、あいつらには配りたくないですな」  
ピエールが本音を覗かせた。彼は店を破壊され、罵声を浴びせられたのだ。

「ピエールさんの気持ちはわかるけど、全員に配らないとそこが感染源になるから」

薬師ギルドから散々妨害を受けてきたファルマだったが、感情と理性は切り分けることを徹底していた。

「ほんとその通りなのよね、仕方ないわ」  
エレンもため息交じりに同調する。

だが、受け取りたくないのは薬師ギルドも同じだった。かつてギルドを追放した、鼻つまみ者として見下していた薬師たちから、あるいは子供店主から薬師らは薬を受け取らなければならなかったのだから。それは惨めなものだった。

「これを飲め。家族全員分の薬が入っている」

ピエールは、以前彼に嘲笑を浴びせた薬師の店を訪れ、薬袋を押し付けた。投げつけてやりたいという衝動を抑えながら。

「そんなもの、いらん！ この店の薬で治してやる！」

しかし薬師が拒絶しようとも、新薬の効果は既に確実なものだ。半死半生だったネデル国の黒死病をわずらった商人にも効いているというのだから。

「黒死病に、この店にあるどの薬が効くと思うんだ？」

ピエールは薄汚い店舗の中を見渡し、静かに彼に問いかけた。

「くっ……」

「いったいどれだ」

ピエールは辛抱強く待ったが、答えはなかった。

「わかつたら飲め。お前だけの問題じゃないんだ。家族も見殺しにするな」

薬師ギルドの薬師は、耳まで真っ赤になっていた。羞恥心なのか、怒りなのか、そのどちらともつかないような顔をしていた。

「生きる」

ピエールは薬を置くと、返事も待たず店をあとにした。

薬師は後ろめたそうに薬袋をとりあげた。

女帝がネデル国に送った斥候が戻ってきた。

情報によると、黒死病はネデル国ではまだ蔓延していなかった。カミュの消滅により敵対勢力はなくなったことから、武力、政治、経済のすべてにおいて世界最大の超大国であるサン・フルーヴ帝国は、ネデル国の国政を立て直すため一時的な占領を行う旨を周辺諸国に告げた。女帝は五千の帝国軍をネデル国へと派兵。王侯貴族らはカミュの毒殺によって死にたえ、役人や軍人らが原因不明の毒物による中毒症状に苛まれていた。カミュが政府関連施設の井戸に、毒を投げ込んでいたのだ。それで、行政機関は崩壊し、物流は寸断され、国の機能は麻痺していた。

帝国軍は女帝の勅令によってネデル国に進駐し暫定政府を組織させ、無政府状態から政治機能の回復にとりかかった。

疲弊しきっていたネデル国民は、保護国である帝国軍の進駐を歓迎した。このまま帝国に併合されてもいい、と言い始めた過激派もいたが、それは帝国は望まなかった。多くの植民地で名産品を持つ貿易相手国として、ネデル国は重要だったからだ。

しばらくして、皇帝に派遣された一人の腕利きの薬師が帝国軍とともにネデル国に入るといふ噂が立った。

どんな治療をしてもらえるのか、その薬師はどこだ、と薬物中毒者の期待は高まったものの、その日を境にネデル国から薬物中毒者はいなくなっていた。

これは妙なことだ、と彼らは首を捻ったが、帝国軍がよい運氣を



運んできた大層恩にきたという。

ネデル国に帝国にと、各地を飛び回り、ファルマはまた超というほど多忙な毎日を送っていた。

そんなある日、異世界薬局の前に、黒死病の脅威から免れ生還した薬師ギルドの薬師たちが作業着姿で集まってきた。その徒弟たちも、不景気な顔をしてやってきた。

門番の騎士が、店内にいたファルマを呼ぶ。こんな忙しいときに何の用だろうか、また嫌がらせをしにきたのか、とファルマは訝りながら店の外に出る。

「どうしたんですか？」

「手伝いを……させてくれ」

聞こえないほどの小さな声で、彼らはファルマに言った。

「え？ 何ですか？」

「手伝わせてくれ！」

「わかりました。では、よろしくお願いします。人手が必要なんです」

「あ、ああ。なんでもする」

彼らはファルマの指示に従い、街の除染を手伝い始めた。

黒死病の患者たちに何もしなかった薬師ギルド加盟店は、帝都民の非難と不買運動を受け、経営悪化で軒並み倒産した。ギルド長ベロンや幹部たちは、支給されたファルマの治療薬を服薬するのをととう拒み、従来のありとあらゆる薬草を服用したが効かず、隔離された先でペスト敗血症により惨めな最期を迎えることになった。しかし彼らは、隔離される前の段階で家族にはファルマの薬を飲ませていた。

助かった家族らは悲嘆にくれた。

放線菌から有用な抗生物質を取り出すというキャスパー教授の研究は、ファルマの指導もあり、多くの研究者たちの手によって着々

と進んでいる。抗生物質ストレプトマイシンや、その他の抗生物質を生産する菌を発見し、現在それを分離、培養しているところだ。

一大プロジェクトの総指揮を務める、もと窓際教授であるキャスパー教授は、

「次に黒死病が来たら、サン・フルーヴ帝国薬学校の薬を配れるようにしないとねえ」

と、自信をのぞかせる。

さて、台無しになるかと思われたサン・フルーヴ大市。

世界中の商人が集う年に一度の大イベントであり、帝都の商工業者にとっても書き入れ時である。

せっかく商人が集まったのに開催しないのは国の信用問題になる、という女帝の意向により、念入りな検疫を行ったあと、小規模ながら、認められた品物から順次開催された。

テントを広げ、品物を前に張り切って声を張り上げる商人。品定めをする客や仲買人の往来。不正を摘発する声。大量に取引される硬貨の音。弾かれる計算盤。むせ返るような香辛料のにおい。そこかしこで始まる喧嘩。酒場には人が集まる。

少しずつ、帝都にはいつもの賑わいと活気が戻り始めていた。

「本日より異世界薬局、営業再開します」

異世界薬局は、実に一月ぶりに営業を再開した。

「休みすぎたわね。それどころじゃなかったんだけど。皆、この薬局のこと忘れてないかしら」

ぱりっとした白衣に袖を通したエレンは、嬉しそうだった。

「うん、もう臨時休業しなくていいように願うよ」

ファルマはつくづくそう思う。薬局を営業できるということは、帝都が平和であるということだ。

総本店の営業再開に追隨するかのよう、調剤薬局ギルド加盟店も、次々と営業を再開した。調剤薬局ギルド加盟店の市販薬は、外

国の薬師、仲買人に対しては少量のみ販売された。

「あ、ジャン提督」

ボロのシャツ一枚を着て、ひよこひよこことジャン老人が顔を出した。彼が一番乗りだ。

「提督はよしてくれんかのう」

「そのせつはお世話になりました」

今日もジャン老人は船乗りの飴を買い、生成水を飲みに来る。

「皆さん、お久しぶりです！」

「ロッテちゃん、会いたかったよー」

「セドリックや、お前さん刺されたと聞いたが無事だったのかい」  
常連も戻ってきていた。

「はは、おかげさまで。老骨ですが、まだまだ死ねませんな！」

ロッテとセドリックの傷もすっかり癒えて、店頭で忙しく対応をしていた。

神官長も、それが仕事のように毎日薬局にやってくる。

穏やかで慌ただしい日々が戻ってきた。

そして二か月後、サン・フルーヴ帝都でペストによる死者は一人も発生しなくなった。

これをもって皇帝は、黒死病の終息宣言を出すに至り、サン・フルーヴ帝国は世界で初めて、有史以来最悪の疫病、黒死病の特効薬を創り、最小限の犠牲によって駆逐したという偉業を達成したのである。

その栄光の陰には、一人の少年の活躍があった。

あの日、天空より舞い降り帝都の大路に大穴をあけた小さな救世主の正体と、薬神杖を携えた影のない異世界薬局の店主の正体は、まだ誰も知らない。

「ファルマ、また陛下がお前への褒美を検討しておられるんだが、

次はこの領地が欲しい？」

女帝の差し金で、ノアが薬局にやってきた。もう直接、ファルマに希望を聞きにきたらしい。

「もう領地はいらないよ、父上も俺も管理しきれない」

もともと、ド・メデイス家は広大な領土を所有している。これ以上は持て余すし管理も杜撰になるだけだ、いらん、とブリュノは貴族にあるまじきことを言っていた。

「じゃ、金か」

異世界薬局の資金は潤沢だった。何もしなくても売上が膨らみ、ド・メデイス家への献金は各所から集まってくる。

「お金もいいよ」

「つまらんな。じゃ、仕事のことは忘れよう。休みがあつたらどこに行く？ 俺、次の休暇は鷹狩りに行くんだけど、お前も行きたい？」

「俺は温泉にでも入ってゆっくりしたいな」

ファルマはしみじみとそう言ってしまった。

「なるほど、公衆浴場がほしいんだな、っと」

「あっ！」

「バーカバーカ！ 脇が甘いんだよバーカ！」

誘導尋問に引っかけってしまった。ノアがまた女帝に告げ口をし、帝都内五か所に立派な公衆浴場が建てられることになった。温泉旅行で外国を飛びまわられては困る、というのだろう。

「まあいつか、帝都民の清潔や癒しのためにもテルマエ（Term aux）は……感染症予防にもいいし」

「テルマエ楽しみです！ 皆が裸だとちょっと恥ずかしいけど。あつ、平民も入っていいんでしょうか。平民用の小さいテルマエもありますかね、すみつこのほうでいいので」

ロツテは、まだ見ぬテルマエにときめき、思いを馳せている。

「陛下に、平民も貴族も両方入れるようお願いしてみるよ」

「やったー！」

ファルマにも楽しみが増えた。

それは、温泉大好き日本人であった彼にとって、領土や金貨より嬉しい褒美だった。

エスターク村では、由来の知らない少年神が病魔をしりぞけるイメージで制作された黄金の神像の除幕式が行われた。黒死病終息の記念碑である。

ファルマは後ほどそれを目撃し、大層恥ずかしがったという。

< i 1 6 2 1 8 8 — 2 4 9 6 >

## 2章17話 黒死病終息とそれぞれの後日譚（後書き）

2章終了です。3章へお進みください。

（最後の写真は大阪市に集まった香辛料のイメージです）

### 参考資料

日本皮膚科学会ガイドライン

外傷時には自己判断せず、自己流の手当をせず、病院の受診をお願いします。湿潤療法は一定の条件のときに有効です。

### 3章1話 サン・フルーヴ帝国薬学校からの依頼

< i 1 6 2 4 0 0 — 2 4 9 6 >

女帝の黒死病終息宣言から2週間後。

帝都ではまだ混乱や疫病の爪痕は残るものの、サン・フルーヴ大市も予定のスケジュールを延長して開催され、日常の風景を取り戻しつつあった。

ちなみに異世界薬局の四階にあいた、というか対力ミュ戦でファルマが明けた風穴は、職人が大勢やってきて一週間で塞がれた。ファルマが薬局の前の大路にこしらえた大きなクレーターも、女帝が強権を発動し、土の神術使いが何人か動員されすっかり補修されている。ネデル国の子騎士の風の神術によってなぎ倒された平民の民家や商店も、帝国の資金にものを言わせて大量の職人、物資が投入され、急ピッチで復興が進んでいる。

それは天気の良い、ある日の正午だった。

ファルマは、ロッテとエレンと連れ立って大市をぶらりと歩いていた。市場は活気にあふれ、客引き合戦が熾烈を極めている。スパイスのきいた焼き鳥のような串と珍しい種類の焼き芋を買って屋台で昼食を済ませ、三人とも腹がふくれたところだ。エレンが薬草店のテントの前で足を止める。

「あつ、ちよつと見て。あつたー！ 今年もあつたわー、ナバールの薬草、なかなか手に入らないのよねー」

珍しい薬草を見つければ即買い求めるエレン。薬師にとって、年に一度世界中から貴重な薬草、水薬、調剤材料が集まるこの市場は、遠くへと足を運ばなくても楽に原材料を調達できる、買い付けのチャンスだった。

そして、ケーキ屋の屋台の前で立ち止まり、その場を離れないピンク髪の美少女。店主と大きな商談をするかのように真剣に話している。

「もう一回聞きますね。このケーキは何味でしたっけ」

ずらりと並べられた焼き菓子を前に、どちらがおいしそうか見繕っている。

「オレンジとナッツが入っています」

「あのレーズンのケーキも気になるな。じゃあ、両方2本ずつ買います！」

ロッテは、異世界薬局で働いて得た給料をうまくやりくりしてお菓子を買っていた。それを、ド・メディシス家の屋敷の母や使用人仲間に分けるために持ち帰るので、サン・フルーヴ大市が開催されてからというもの、毎日大量に買い付けている。まるで仲買業者じゃないか、とファルマは思う。

「じゃ、俺もそのあたりの店見てくるから」

彼女らが楽しそうに買い物をしている間に、ファルマも買い物をした。

「贈り物があるんだ」

今回の黒死病騒ぎで活躍した職員たちの慰労のため、彼らにひとつずつプレゼントを買ったのだ。ファルマの言葉にロッテの背筋が伸びて、目が大きくなる。ファルマが一つずつ、彼女らに袋を手渡す。

「二人とも、いつも支えてくれてありがとう。これ、感謝の気持ちを込めて」

感謝の気持ちは、言葉に出さなければ伝わらない。だからファルマは、彼らにはいつもありがとこの言葉をかかさないように気を付けていた。突然のことに驚きながら、きれいな袋をあけてみる二人。エレンには王侯貴族に人気の香水。ロッテには凝った刺繍の可愛いエプロンを。ちなみに、店で留守番をするセドリックには、シッ



くなデザインの高価な杖を用意している。

「ありがとうファルマくん。この香水、気になってたやつなの、どうして私の好きなのがあったの？」

「なんか人気がたいだから、エレンも好きそうだと思って」

エレンが、手首につけてうつとりとした表情で香りを楽しむ。すつきりとした甘い香りに、エレンは弱い。リサーチ済みだった。

「もう、ファルマくんって時々子供とは思えない気遣いするわね」

（まあ、子供じゃないからな）

「女性にそつなくプレゼントを選べるなんて、将来どうなるのかしら。浮名を流すのはやめてよね」

とエレンは言うが、その表情は浮かれていた。

そつなくできる、とはファルマは思っていないが、前世で学会や会議、研究などで世界中を飛び回っていた彼は、研究室スタッフへのお土産を兼ねたプレゼントを欠かさなかった。プレゼントは日頃からの好みのリサーチがものをいう、というのはよくいったもので、彼はそういう人間関係の努力も意外と怠らない人間だった。薬谷先生のプレゼントはセンスがいい、など評され喜ばれたものだ。

「こんなに綺麗なお花の刺繍のついているエプロン、平民は誰もしてないですよ！」

ロッテが嬉しくて、さつきから袋の中のエプロンをこっそりと覗き見しては溜息をもらしている。召使が刺繍のついたものを主人から買ってもらえるのは滅多にないことのようにだ。

「ファルマくんは欲しいものないの？ 私たちからも店主にプレゼントをさせて？」

エレンが、お返しに何か、と気を回す。

「私もお返ししたいですー！」

ロッテも、財布の中身を見てぺろつと舌を出したあと、手をあげる。どうやら菓子買い付けで使いすぎたらしい。

「自分のはいいいんだ。欲しいものは買ったから。香辛料と、あとは、

質のいい紙を」

「といって、ファルマは戦利品を詰めたバッグの中をのぞき込む。  
「あら、ほんと。随分買ったのね」

市場で上質の紙が見つかったので、彼はここぞとばかりに大量に購入した。研究ノートに使ったり、書物の執筆に使ったり、何かと入用だ。何百年もの時間に耐える、高級紙を求めた。

「にしてもファルマくんが香辛料？ 新薬を造るのに使うの？ いつもいつも、薬、薬、薬！ほんとファルマ（薬）って名前の通りじゃない、真面目なのねー」

「といってエレンが感心するので、ファルマは後ろめたくなって俯く。

（いえ、薬のためではなくてカレーのためです）

「とはいい出せなかった。大市の香辛料屋台でクミン、ターメリックなどの香辛料が手に入ったので、彼は四階の実験室でこっそりカレーを作るつもりだった。香辛料はあるものの、この世界にはカレーらしき料理はないようだ。香辛料を見るとカレー、という発想になってしまうのは、カレー大好き日本人の悲しいさである。

（ニオイで異臭騒動になるかな。米はこの世界にはないから小麦粉でナンでも焼くか……）

作るタイミングを見計らわなければならぬが、目下楽しみにしている秘密の計画だ。ちなみに、前世では主食が栄養補助食品だった彼の料理スキルは、料理が多少なりとも実験と共通するということもあり、大して練習もしていないのに無駄にレベルが高かった。

（におうから内緒は無理だな。"カレーパ"して皆で作って食べればいいか）

カレーパーティーをしよう、と思うファルマだった。

お昼休みを終えて三人は薬局に戻り、ファルマは「私は市場で買いたいものはありませんからな」といって留守番をしていたセドリ

ツクにもプレゼントをする。琥珀色の晶石が二つついている、高級杖だ。

「セドリックさん、いつもありがとう。これ、ほんの気持ちだけど」「ほう……これは！ よいのですか。見ただけでわかります、とても高価で高性能な杖です、材質は総ドウエル木仕立てで晶石はフルガン黄、デザインもエレガントだ。持ち手の能力を150%引き出してくれるでしょう」

神杖店の店主が言っていたような口上がセドリックの口からマシンガンのような速さで出てきた。エレンと同じく、杖マニアの一面を見せた。ファルマは詳しくないので、店主には「この中で一番頑丈で高性能なのを」と注文しただけだ。

「き、気に入ってもらえてよかったです」

セドリックの杖は、神術のためだけではなく、多少、歩行の補助も兼ねている。彼の持っていた杖は古くて持ち手が欠けていたので、大層喜んだ。

「気に入りましたとも。神術の練習にも励まなければなりません」ド・メディシス家の薬草園の施肥や土壌の維持に全てをかけていたセドリックは、一般的な攻撃的神術はあまり得意ではないようだ。それでも、せっかく杖をいただいたので今後の有事のために特訓をしておきます、と笑顔をのぞかせた。

薬局の午後の営業をしているところに、父ブリュノの弟子の薬師が馬で薬局にやってきた。

「ファルマ様。本日夕刻、薬学校に来ていただけますか。総長からのお呼び出しです」

「父上から？ 家に帰ってから用事を聞くのじゃ遅いって事ですか？」

父はいくら遅くとも朝には屋敷でファルマに予定を伝えておくものだ。それが今日の今日、ということになると、今日の今日決まった、急な用件での呼び出しなのだろう。

「エレオノール様もです」

「私も？ うっそ」

他人事のように話を聞いていたエレオノールの顔が真顔になり、緊張に包まれる。直属の師匠の呼び出しは、一級薬師といえども怖いらしい。

「もともと今日は夕方からキャスパ教授の放線菌の研究の進捗を見に行くことにしていますので、どちらにしても大学に行きます」

ファルマはスケジュール帳を開き予定を確認する。ファルマのスケジュールは、びっちり埋まっていた。薬局の営業、そしてキャスパ教授への研究協力、マーセイル領の製薬工場の施工プロセス確認などでファルマのスケジュール帳は真っ黒だ。ネデル国への出張もぼつぼつ入っている。それから、薬学の教科書の執筆なども。

「それはよかった」

弟子たちはほっとした様子だ。

「新しい病気が見つかったんですか？」

ファルマは、薬を準備して持っていくべきか聞いた。

「持ち物は必要ありません」

「そうですか？」

なら何だろう、と首を捻るファルマとエレンだった。

… … …

ファルマとエレンは夕方、早めに薬局を閉め、サン・フルーヴ帝国薬学校へと馬で出向く。

そこは、帝都のブリュノ・ド・メディシスが総長（学長のようなもの）を務める広大な敷地面積を誇る帝国最高水準の薬学大学で、帝国全土の一級、二級薬師の養成機関だ。

帝国で認められている宮廷薬師（皇帝を含む王侯貴族を診察できる薬師）は現在、ファルマも入れて4名。王侯貴族を診察できる一級、二級薬師を合わせても21名しかいない。ごく一部だ。帝国の

上級薬師の合格基準は厳しく、薬学校の卒業生は帝都で無資格営業をしながら上級薬師試験を受けているか、もしくは国外の緩い基準で上級薬師をしている。

総長ブリュノの一番弟子であり、神術と薬学の才能を兼ね備え、あまりに優秀すぎるため一級薬師試験にわずか十五歳で合格したエレンは、今は大学には直接関わりがない。彼女は研究室にこもるよりも患者と向き合いたいタイプで、研究メインではなく、以前は貴族の診療をメインに行っていた。このところは、ブリュノから命じられて異世界薬局にかかりつきりになっていたものの。

大学の敷地内には薬草園、研究棟、講義棟、神術実験棟、食堂、学生寮などの立派な建物が建っている。ファルマとエレンは馬から降り、大噴水が涼しげな音を立てる、美しく整えられた中庭を抜ける。エレンを知る薬学生たちが、まるでアイドルの追っかけをするように後ろから彼女の後をつけてきた。握手をして去って行った学生もいた。

「人気者なんだね、エレン」

どうやら在学中は、エレンのファンクラブのようなものがあつたらしい。

「もう卒業して2年も経っているのにねー。どうして知っているんだか。にしても懐かしいわー、母校」

エレンは久しぶりに来た母校が懐かしいらしい。

「お待ちしておりました、ド・メデイス師、ボヌフォア女史」

二人は弟子に案内されるまま、研究棟の大会議室に呼ばれた。呼び出されたのが総長室ではないことに、ファルマは疑問を覚える。大会議室は天井の高い大部屋で、シャンデリアがかかっている。多くの紳士淑女らが出席していた。いずれも、大のつくほどの貴族階級の人間ばかりだ。

「これから教授会が始まるみたいよ」

エレンは扉の隙間から中を確認した。彼女の知っている教授ばか

りだった。

「会議が終わったらまた来ましようか？ 邪魔になりますし」

ファルマは弟子に問う。会議が始まるのであれば、今から個人的にブリュノを呼び出すのも悪い。ブリュノは総長なので、教授会の進行も兼ねている。キャスパー教授も中にいるようなので、学内をぶらぶらしていようか、そう思っていた時、

「いいえ、そのままお入りください。皆様、ファルマ様とエレオノール様をお待ちかねです」

「ええ？ いいんですか？」

「ちよつと、聞いてないわよ！？」

「どうぞどうぞ。ド・メディシス師とボヌフォア師がいらっしゃいました！」

弟子は大声で中に告げると、会議室の扉を勢いよく開けてしまった。会議室の中から一斉に視線が集まる。

「入りましたえ」

「え、はい」

仕方なく、教授陣の前に出てゆくファルマとエレン。

「来たか」

ブリュノの声がした。緩いアーチを描く、長い会議机の前にずらりと座っていたのは、帝国薬学校の一流教授や講師陣。その一番奥に、総長であるブリュノは座っていた。

「会議中に失礼いたします」

ファルマとエレンは教授陣に会釈をする。

「実はな……」

ブリュノは歯切れが悪い。

「総長」

恰幅のよい腹をした、髪の爆発した白髪の個性的な副総長が席を立ち上がった。

「お父上から御子息に申し上げにくいことと存じますので、ここは私が」

まったく関係のなさそうな副総長に何を言われるのか、とファルマは身構える。

「前置きもよろしかろう。ようこそいらっしやいました、お二人とも。本学では、来年より総合薬学科を新設することになりました。ファルマ師にはそこで主任教授として教鞭をとっていただきたいのです」

「はい……？」

ファルマはあらゆる想定が外れて思考停止しそうになった。

「平たく申しますと、帝国薬学校の教授を引き受けていただけませんか、ということですよ」

と、別の教授が断言した。

「そしてボヌフォア女史には、同研究室で多忙な師のサポートをお願いしたい。講師の籍をあけております」

エレンも口を大きく開けて硬直していた。

二人に期待を込めた多くのまなざしが注がれ、ファルマはどうしたものかと悩む。

「私は大学を出ていませんし、まだ成人すらしていない子供です。で、ご期待に添いかねるか」と

あまり効果的ではない言い訳だとは、彼も思った。だがファルマは、今すぐに大学に所属して本格的に教鞭をとりたいとは思っていなかったのだ。

「あなたがお若いというのは承知の上です。ですが、輝かしいまでの業績に鑑みれば当然だといえるでしょう。この一年の間に、顕微鏡なるものを発明し、白死病の特効薬を開発し、そればかりでなく黒死病の蔓延すらその新薬の発明によって食い止めたのです。不治の病を次々と治癒してみせたその功績は、大いに称賛されるべきです」

皇帝が白死病を患っていたとは知られていないが、その治療薬を

ファルマが創ったということは噂になっているらしい。

副総長は「素晴らしい！」と言いながら一人で拍手をはじめると、教授陣はそれに続いた。拍手喝采である。ブリュノは咳払いをして、彼らを一步引いた目で見ていたようだった。

「常人のなしえる技ではありません。あなたは神童です」

「趣味としかいいようのなかった私の研究から薬ができるだなんて、誰が考え付くでしょう」

キャスパー教授も興奮気味に発言する。確かに、キャスパー教授の研究についてはファルマが直接指導してきた。

「いえ、あの……」

教授陣から大のつくほどの絶賛だ。お世辞以外で、本気でおだてられることに慣れないファルマは段々と恐縮しはじめた。これまでファルマの新薬は色々父の功績ということにして真相をうやむやにしてきたのだが、遂に父が教授陣に暴露したのかもしれない。

（やられた……動きにくくなるぞ、これは）

ファルマは臍を噛む思いだった。逆に言うところまでファルマを全面的に支援し、自由に行動させていた父が遂に、尊爵であり大学総長という社会的な立場を利用してファルマを困い込みに入ったということだ。

「ここにいる教授陣は国内最高の頭脳だと自負していますが、おそらく束になっても、情けないことですがあなたの知識と創薬技術にはかないません」

副総長が情けないコメントを出した。だが、その言葉に対して憚然とする者もなかった。

まったくその通りだと、彼らは口々に同意していた。

「真に勝手ながら、大学としてはあなたの知識を学びたいのです。あなたが11歳だとか、成人してないだとか、そういう非学問的な問題は、この際論じるつもりはございません」

父はおそらく、さきの教授会でファルマを薬神憑きか何かだと言



ってしまったのだろう。若しくは、噂かなにかが広まりすぎて、ファルマが人外だということを隠せなくなってしまったのかもしれない。

そして全員が、ファルマに影がないことをその眼で今も確認しているのだ。言い逃れはできない。

ファルマは逃げ道を塞がれた。だが、「薬神憑きか」と本人に聞かず、「影がないじゃないか」とも指摘せず、そういったファルマの神秘性には敢えて触れてこない筋立ては、父の意向なのだろう。（どういふつもりなんだ、父）

ファルマは父を見据え、真意を探ろうとするが父の表情は読めなかった。

ファルマも前世では大学の准教授だった男である、大学に所属し研究生活を送るのはやぶさかではない。後進の教育も、むしろこちらから望むところだ。だが、この世界の薬学界を牽引するにしろ、表舞台に立つには11歳の子供の姿では悪目立ちしすぎる。

自身の身に降りかかる危険と、薬局の従業員たちへの危険が大きすぎるのだ。

だから少年である彼が今できることといえば、著者の名を伏せたまま薬学のテキストを水面下で執筆することだった。それを読めば誰にでも、それこそ百年後でも二百年後でも薬学を志す人間には理解できるようにして、薬学大での基礎教育にでも使ってもらいたいと思っていた。

そしてファルマ自身は、今生の人生では研究室にこもり薬と向かい合うのではなく、人間と人間の関係で患者と向き合いたいと思っていた。薬神扱いされ信仰されたりするのも、本当に勘弁してほしいところだ。

だが、父は父で考えがあるのだろう。

目の前に未知の知識があるのなら、それが手に届くというのなら。どんな手段をもってしても、その全てを明るみに出したいと思う

だろう。それが学者というものの性だ。

「無理に、というつもりはない、と思う」

父がファルマに向かつて、静かな口調で尋ねる。

決して嫌だ、というわけではない。今それを受けていいのかということを、よほど慎重に考えないといけない、ファルマはそう思うだけだ。

「ふむ。ではボヌフォア女史に先に聞こう、どうする」

「私？ 私は、師匠の御命令であれば、謹んでお受けさせていただきます」

ブリュノはあらかじめエレンに目配せをして牽制していた。エレンに許される返事はYESだけだ。返答によつてはただではおかないぞ、という威圧感をブリュノが出しまくっていた。師匠であるブリュノの前では萎縮するエレンである。

「だそうだ。ファルマよ、お前は どうする」

「では私も、講師であれば」

教授というのは、あんまりにあんまりだ。目立ちすぎだ。非常勤講師ぐらいで丁度いい。

「残念だが講師の枠は今、埋まった。あいているのは教授のポストだ」

新設学部のポストなのに、そんなわけないだろう、とファルマはつつこみたかったがどうしようもない。

「私は異世界薬局の店主でもありますので、薬局業務に差支えますし……」

「学生に講義をしてもらっただけでも構いません、勤務時間は自由です。一日に数時間だけでも構いません」

副総長がかさず譲歩する。あれやこれやと言いつつ訳をすると、言った端から「ご自由にしていただいて構いませんので」と潰されて

しまった。となれば、

（まあ、直接学生を育てたら、彼らがあとあと専門家になってくれて、結果的にはそっちのほうがいいか……）

それも一理あるな、と腹をくくったファルマである。

場合によっては、有事の際には異世界薬局そのものの診療を任せられることもできるかもしれない。

「ではお受けします。が、常勤の教授というのは気が引けます。期限付き雇用にしてください」

ファルマは苦し紛れにそう言った。

「では、よろしくお願いいたします、ファルマ・ド・メディシス教授。エレオノール・ボヌフォア講師」

「は、はい……」

こうしてあれよあれよという間に、話は纏まってしまった。

よってサン・フルーヴ帝国薬学校は、異例の人事により、11歳の特任教授、そして一人の講師を招聘することになった。

< i 1 6 2 4 5 9 — 2 4 9 6 >

### 3章2話 腱鞘炎と謄写版

「歴史は繰り返す」

一年先まで埋まりつつあるスケジュール帳を見つめながら、異世界薬局の店主は神妙な面持ちで格言じみたことを呟いた。

「何の歴史を？ 薬学史のこと？」

エレンが尋ねる。エレンは、ブリュノの手前薬学校講師を引き受けたものの、学生を教える自信がないと言ってどんより沈んでいたところだった。それで、薬学の書物を大学図書館から引っぱり出してきて復習をしているのだった。

（俺の過労死の歴史、もとい過労史だ……）

ファルマの、雪だるま式に仕事を引き寄せる体質は、今回の人生でも変わらないらしい。それどころか、前世と違って他に投げられない分悪化しているといつてよかった。

（いや、他人のせいじゃないぞ、自分で仕事を増やしてるし。まずいなこれ。今でさえスケジュールパンパンなのに、教授なんて引き受けたら絶対死ぬ）

頑張り過ぎない人生、そして人助けというのをモットーにしようと思った彼の今回の人生。なのに転生後一年あまりで早速オーバーワーク気味となり、危機感を覚えていた。失敗は二度と繰り返したくない。

（次、死んだらもう転生なんてしないだろうしな）

幸い、サン・フルーヴ帝国薬学校で教授として教鞭を取るのは、来年からでよいということになった。準備期間中に、大学では新学部開設の段取りや研究室、実験室の設備を整えたり、学生募集など

をするという。特に優秀な学生を帝国全土、そして世界中から集めるため、学費無料の特別枠での入試を行うそうだ。大変な気合の入れようである。

その間に、ファルマは抱えている仕事のめどをつけなければいけない。

（ペースダウンをしよう。仕事を減らそう、とりあえず今は黒死病の危機は去ったことだし）

皆の健康もだが自分の健康も大事だ、とファルマは大きく深呼吸をする。

ペストのアウトブレイクの前には何よりも感染拡大を防ぐことが最優先であったが、目下の大規模な危機はないのだ。前世であればやらなければならない仕事は全て同時進行、というデスマーチものともしなかったが、今回は過労死を警戒している。

「過労死って知ってる？」

「どういう意味？」

エレンがメガネを拭きながらくると首を捻る。

無理しすぎない、労働時間は日没までという国民性なので、過労死そのものの言葉がなかったようだ。疲れたら休む、それが当たり前。明かりが貴重なので、夜を徹して仕事はしない、それも当たり前だ。

「エレンは疲れてない？」

「そういえば私も頭が痛くなってきた」

「働きすぎで？」

「私はメガネ酔いよ、仕方ないわ」

度のきついメガネを長くかけていると、エレンは頭が痛くなるようだ。彼女にコンタクトがあれば楽になるだろうな、とファルマは思うが、現実には加工が難しいだろう。

（いや待てよ、コンタクトの素材は作れるわけだし……加工だってそんな無理な話じゃ……）

また仕事を増やそうとしてるファルマだった。

「で、過労死って何？」

「働きすぎて死ぬやつだよ」

「確かに、ファルマ君は働きすぎだわね……でも、ファルマ君って死ぬの？」

エレンはファルマを神格化しているので、その発想はなかったよ  
うだ。

「私が知る限り、君、落雷を受けてからものすごく丈夫になってるわよ。中身も体も入れ替わったんじゃないかと思うぐらい」

ももとのファルマ少年は、水系統の神術の訓練でずぶ濡れになるからか、年に何度も風邪をひいたり、不意の怪我也多かつたという。体調を崩しベッドから起きられなくて授業に出来ないこともあったし、だからあまり無理をさせられなかったらしい。それが今はどうだ、あらゆる病気にもならなければ、怪我也しない。訓練でも多少かすり傷がつくぐらいで、流血もないときている。

（過労死したらどうなるんだろ。もし、死んで俺の意識がこのファルマから離れたら、この子の意識が戻ったりするんだろつか）

そう思うと、ファルマは後ろめたくなってしまふ。

（いやでも、俺が寝てる間にファルマ少年が覚醒したりしなかったしな。やっぱ死んだんだよな、この子の意識は）

とにかく、ファルマ少年の体は酷使しないよう大事に使わせてもらおう、と彼は思いながらストレッチをしていると。

「そうなのよね、私たちもファルマ君の力に守られているみたい。感謝してるわ、ありがとう。守ってくれて」

エレンはファルマの手を取り、しっとりとした視線で、少しでも照れくさそうに頬を赤らめファルマを見つめる。彼はどきとした。いつもは同僚として見ていたので何も感じないが、エレンを改めて見ると色っぽさを感じた。

（エレン、前はこんな顔見せてくれなかったのにな……）

どちらかというと、転生後のファルマは人外としてエレンから恐

れられていた。時間を重ねるうちに、だんだんと心を許し信頼をしてくれているということなのだろうか、とファルマは嬉しくなる。

「ファルマ様のおかげです！　いつもお世話になってます！」

エレンの言葉の意味がよく分からないながら、ロッテもエレンに同調した。

「来年からは大学教授も引き受けちゃったしね、私が君をサポートできるかしら？」

エレンは不憫そうにファルマを気遣う。

「大学教授だなんてファルマ様はどこまで偉くなるのでしょうか。まだお若いのに凄いですよねー、天才でしょうか、天才じゃないでしょうか！」

両手に拳を作りながら興奮するロッテの絶賛が追いつかない。お世辞ではなく本気だ。学校などというと、平民であるロッテはまったく知らない世界、その全く知らない世界のエライ人、エライ先生たちから注目され認められるファルマに、ロッテは尊敬のまなざしを向ける。もちろんロッテは、カミュとの一戦があっても、ファルマをただの人間だと思っている。

「異例尽くめですな、ファルマ様はますますお忙しくなるでしょうが」

セドリックも懸念していた。

「皆に心配かけられないな、自分のスケジュール、見直してみるよ」  
ときに人の命にかかわる内容であるために、仕事量はなかなか減らせない。となると、必要なのは効率化である。大学の講義が始まる前に、効率化して短時間で仕事をこなせるようにならないと死ぬと、ファルマが思っていたところ、午後の診療になって……、仮面をかぶり帽子を目深に被った怪しすぎる兄妹がやってきた。声の感じからして、十代後半だ。

「どうして仮面をしているんですか？　取ってください」

極度の恥ずかしがり屋なのか、もしくは叩けば埃の出る身なのか。ファルマだから診眼を使えば診られるが、普通は顔を隠して診療はできない。

「聞いちゃだめよ。顔を知られちゃいけない、そういう仕事なのよ」と、ファルマに耳打ちするエレン。患者のプライベートには深入りしないのが礼儀よ、と言う。エレンはそういう空気を読むのは上手い薬師だった。ファルマはそれもそうかと納得して、

「で、今日はどうしましたか」

「薬師様、俺たち手首や骨が痛くてたまらないのです、何か薬はありませんか」

「”狭窄性腱鞘炎”」

診眼で診るまでもなかったが、彼は一応確認をする。診眼は画像診断のように補助的に使っている。親指の付け根の部分が炎症を起こしているようだった。

「手を酷使したのですね、お二人ともです。腱鞘炎といいます」

「けんしょうえん？」

兄妹は同じような、間の抜けた声で問い返す。

「はい、親指のけんが炎症を起こしていますね。痛み止めを出しておきましょう。サポーターも使うといいです。それから、手を休めることはできませんか？」

「無理です。食い扶持がなくなってしまうます。俺たち、多額の借金を抱えていて……」

「えーと……お二人は何のお仕事ですか？ それは聞いてもいいです？」

すると二人は声をそろえた。

「手書新聞屋です」

「手書新聞！？」

（何だその職業は……?!）

聞いただけで腱鞘炎になりそうなイメージの職業だった。

「詳しく聞いてもいいですか？」



「集めた情報を紙に書いて、必要とする人たちに売る仕事です。内容は言えませんが……」

妹が言葉を濁す。

（はあ……なるほどね）

きわどい取材活動をして、一介の街の薬師にでも顔を知られるわけにはいかないのだろう、もしくは商用情報や軍事情報を扱っているのか……とファルマは推察する。借金を抱えているというのも、その筋の稼業で危険な橋を渡っているのかもしれない。すべて憶測だが。

腱鞘炎の痛みが酷くなると、ステロイド注射や手術をする場合もあるのだが、基本的には安静が一番だ。

「新聞屋さんたちは、何部筆写するんですか？」

「一人50部は書きます、調子のいいときはもう少し……でも書き損じもできるので、それは売れませんし、もっと書いています」

「新聞を50部！ ですか」

（あーそれはなるわ、腱鞘炎）

「書けば書くほど利益が上がるんですよね？ 写しているのは同じ情報ですか？」

「そうです」「はい」 手首を涙目でさすりながら、兄妹は頷く。

「その新聞は、必ずしも手書きでなくてもいいんです？」

ふと、ファルマはあることを思いついて確認する。手書き以外で何があるのか、と顔を見合わせる兄妹。

「もちろん、情報が相手に読めれば、新聞は売れます。誤報があれば賠償しなければなりません……」

妹が肩を落とす。

「おい、よさないか。はは、今は忘れてください」

誤報をやらかしたことがあるようだ。

（飛ばし記事を書いたことがあるのか？ 大変なんだな、情報屋）  
それで借金を負って、新聞屋を抜けられないのかもしれない。フ

アルマはひとつの案が浮かんでいた。

「一週間後、もう一度ここに来てください。仕事が楽になるようにしますよ」

「は、はい……ではまたきます」

兄妹は半信半疑で、それでも必ず来ますと言って薬局の手首のサポーターを買い、鎮痛剤を持って帰っていった。

（これもいい機会だな）

「エレン。ひとつ聞いてみるんだけど、この世界で書物や文章を複写するには筆写するしかない？」

版画もないのだろうか。活版印刷はどうだ？ と、ファルマは確認する。

「うーん。ないわけではないわ、木版、石版印刷はあったしね。でも今は廃れてしまったのよ」

エレンが人差し指を立ててこめかみに当てて思い出すしぐさをする。

「確かに……版を作るのが大変そうだな。大掛かりだし」

「版を作るのにはかなり時間がかかるわ。情報屋は速さが命。それにそんなに大量に刷る必要もないから、版を作っている間に筆写できてしまうわ、さっきの新聞屋はそういうことでしょう」

そんな事情を聞いて、ファルマはやはりあれがいいと思った。

「謄写版（とうしゃばん：ronéotype）を作ってみるよ」

日本でも1960年代まで教育現場などでよく使われていた、電気のいらない印刷法だ。さすがにファルマも現役で知っているわけではない。いわゆるガリ版というやつである。

「また、新発明のアイデアがあるの？ ファルマ君、自分で仕事を増やして……あなた人がいいからってそんな無限に仕事を増やしたらだめよ。新聞屋は手首が痛いなら、仕事を変えればいいのだから。もしくは、痛み止めを飲みながらも続けられるし」

エレンがファルマを氣遣う。「仕事ができないなら別の仕事をすればいいじゃない」という発想のエレンはやはり伯爵令嬢であった。職業選択の自由は、ないわけではないが、家業などもあり変えづらいのが平民の事情だ。

「いや、これは俺の仕事を減らすためでもあるんだ」

ファルマのスケジュールの中で何が時間を圧迫しているかという、診療業務、そしてほかのテキストの執筆、薬学講義資料の準備だ。前世のファルマは講義スライドを作って、それを何年も薬学部の授業で使い回していた。そこで思いついたのが、テキストと、講義のハンドアウトを同時に作るという方法だ。

筆写の問題点は、そのスピードもさることながら人為的なミスと、意図しない解釈の挿入がある。ファルマのテキストは図やグラフ、化学式を多用するために、図がいい加減だと些細なニュアンスも伝わらない。ファルマが書いたとおりにコピーすることは、これからを考えれば必要な技術だ。

「薬局の薬の説明のハンドアウトにもできるな」

患者への薬の説明にかなりの時間を割いていたのだが、薬の説明のプリントがあればそれを読んでもらえばいいので、情報も患者に正確に伝わるし時間の節約になる。そのぶん多くの患者を診療でき、そしてほかの薬師に説明を任せることができ、診療時間を短縮できる。

「善は急げだ」

ファルマは蠟やワセリンを塗った薄紙、原紙を紙屋に特別発注し、3日で取り寄せた。

「それで何をするの？」

エレンとロツテが興味津々で近づいてくる。面白そうなのが始まるのを期待して……。

「みんなでお絵かきをしよう」

「わあ！ やりたいですー！」

ロツテが手を挙げた。予め作っておいた鉄筆を、やすりの台の上に載せて原紙を引っかくように絵を描く。すると、原紙に傷ができる。その原紙を、絹を張った木枠に固定し、ローラーにインクをつけ印刷紙に印刷する。原紙で削られた部分からインクがにじみ出て紙に転写できるのだ。

「すごい！　こんなに簡単に印刷ができるなんて！」

エレンは刷りあがった印刷物のできばえに感動した。

「エレン、それは何を描いたの？」

エレンは何やら前衛的なアートを刷っている。失礼ながら、とファルマは思うのだが、人なのか動物なのかすらもよく分からなかった。

「ファルマくんよ！　どう？」

「これが、俺？　そうなんだ……はは、ありがとう」

「何、その反応！」

エレンには絵心がなかった一方で、ロツテはかなり絵の才能があるようだった。薬局に飾られたブーケを模写したそれはアルデコ調の装飾画になっており、まさにアート作品のようだった。

「ロツテちゃん、すごいきれいな花のイラスト！　画家になったらどう？　売れるわよこれ！」

「ええっ！？　そうですか！　売ります！　とっても面白いですこれ！　楽しいっ！」

鼻歌交じりに無邪気にローラーを転がしせつせとプリントを続けるロツテを見て、ファルマは可愛すぎだと癒される。

「ロツテちゃん、刷りすぎよ？　売りさばく気？」

あっという間に、作品の山ができてしまった。

「ちなみに、インクの色を変えれば多色刷りもできるから」

もし版画がやりたければ工夫してみればいいかもね、とファルマはロツテにすすめた。ロツテは大層気に入り、本格的な趣味となりそうだった。

一週間後、約束通り新聞屋の兄妹がやってきた。今度はベネチアンマスクのような仮面をつけてだ。

「手首の痛みはどうですか？」

「お薬のおかげで、痛みはないです」

それでもこの一週間、痛み止めを飲みながら新聞を書き続ける作業量は変わらなかったようだ。

「お待たせしました。謄写版を作りましたので、今日からこれを使ってください」

「とうしゃばん？」

ファルマは要領を得ないといった様子の彼らに使い方を教える。教えの通りに謄写版を実際に使ってみた兄妹たちは、その使い勝手のよさと、刷り上がる印刷のクオリティに驚愕していた。

「面白いように印刷できていきます！ 画期的だ！ この謄写版の発明だけで明日の新聞の記事になる！」

兄が絶賛する。きちんと文字も判読できるし、細かな描写も絵もそのままプリントしてくれる。

「これはあなたが発明したんですか！？」

「いえ、私じゃないです」

偉大なる発明家、トーマス・エジソンさんの発明です。とファルマは言いたかったが彼はこの世界では架空の人物ということになっている。

「こ、こ、ここれから一部だけ書けばいいってことです！？」

妹がおそろおそろファルマに尋ねる。

「そうですね、二人で一部書けばいいんですよ。ですから、腱鞘炎も少しは良くなるでしょうし、借金も片付けばと思ひまして」

「うおおおっ！？」

兄は奇声を発した。

「ああ、なんてことでしょう、信じられないわ！ 兄さん」

「やったな、妹……あ、ありがとうございます薬師様、いえただの

薬師様じゃありませんね！」

兄妹は手を取り合った。喜びようが大げさだが、彼らにとっては大発明の文明の利器なのだ。

「助けになりそうでよかったです。その後の作業は利き手でなくてもできますからね、ほかの人に任せてもいいですし」

ファルマは、インクと原紙を格安で彼らに売ることにした。彼らは大喜びで大量に買い込んだ。

「これだったら、一部作れば百部でも二百部でも刷れますね！」  
信じられないです、と兄妹は感動して咽び泣いていた。

「あまり大量には刷れないと思います。原紙が破れてくるので、百部はいけると思いますが……」

と言うと、それでも収入が大幅アップになるといつて喜んでいた。借金も返していけそうだと、明るい見通しが立ったという。

「でも、飛ばし記事には気をつけて」

刷った分だけ借金をかぶることになるから、とファルマは釘を刺した。

「はい、取材に時間をかけることができそうです。元版も今までは殴り書きでしたが、綺麗な記事にできます」

「このセツトはいくらで買ったらいいですか？」

「材料費だけいただきます。それと、ですね……その新聞、異世界薬局にも一部売ってくれます？」

「もちろん、情報を外に漏らさないと約束していただけるなら、無料でお届けします」

兄妹は覆面と帽子を取り、改めて名乗った。アンドレ・ミッテランとエメ・ミッテラン兄妹だ。彼らはげっそりと痩せていたものの、緑の髪に緑の瞳で、美男美女の兄妹で非常によく目立った。

異世界薬局は手書新聞「帝都秘報（Le secret de la Cité impériale）」を無料で購読することになった。

購読してわかったが、この新聞は貴族社会の裏情報、軍事情報、

決して表には出てこない秘密の商業情報を満載している有益な新聞だった。その筋の人間がほしがるわけである。二人は高く売れる情報を小部数手書きで書いて富豪に売りつけるという営業方針だったので、どう考えても取ってくるのに骨の折れそうなきわどい情報も扱っていた。

彼らの腱鞘炎の軽減にと開発された謄写版は、異世界薬局にも導入された。そして業務の流れは、目覚しく効率化された。まず、ファルマが患者の診察を行い処方箋を書く。エレンとバイトの一級薬師が薬を調合する。

「はい、そのお薬はですね……」

エレンらの用意した薬の説明を、これまた説明係の薬師らが引き受ける。彼らはファルマの書いた服薬指導の薬の説明書のコピーをもとに、患者に丁寧に説明を行う。いわば日本での薬剤情報提供文書の添付だ。これを謄写版で刷りに刷った。

患者の状態の細やかなカウンセリングも説明係の薬師が行い、疑問があればまとめてファルマに戻し、指導を受ける。説明書は患者にそのまま渡す。

この案は業務の効率化だけでなく、患者とファルマ、そして薬師たち全員にとって大きなメリットがあった。

何しろこれまでは、高齢者は物忘れもしやすかったし、高齢者でなくとも服薬指導をいい加減に聞いている者もいた。何度も聞きなおしたり、忘れたりする。だから説明書に薬の飲み方やその効果、どうやってその薬が効くのかということが予め紙に書いてあると、患者にも親切だ。

「あら、わかりやすいわ。いいじゃないこれ、すぐ忘れちゃうのよね」

薬の説明書を初めてもらった患者たちは、満足して帰ってゆく。

「おやおや、こういう副作用があるのかい。知らなかったねえ」

「え、この薬は一日二回だったのかい!? 一回しか飲んでいなか

ったよ！」

今までのミスに気づかされたりする者も。謄写版の発明は例によって、帝国技術局に登録した。

「おかげで、こんなに早く借金を返せたんです」

暫くして、ミッテラン兄妹が薬局を訪れた。今度は素顔でやってきた。より大衆向けの情報も売れるとわかって帝都民向けの「週刊帝都」を創刊したところ、これも軌道に乗り始めたのだそうだ。それで、際どい情報の取材からは徐々に手を引いてゆこうと思う、とのこと。

「それはよかったです。腱鞘炎はどうですか？」

借金返済が終わったと聞いて、ファルマも一安心だ。何しろ彼らは、以前は痩せていたものの、多少肉付きも健康的に戻ってきている。食うや食わずの生活は脱したのだろう。

「もう痛みはありません、よくなりました。今度は、ローラーをかけるので肩こりが」

「はは、湿布を買って刷り部数を落としてください」

とファルマが言うと、

「おっしゃるとおりで」

と、彼らもばつが悪そうに笑った。

以後、ミッテラン兄妹は仮面を外し表通りを歩くようになったという。

その後ロッテは、謄写版で刷ったアーティスティックな薬局のチラシを街頭で配るようになった。

その効果もあって異世界薬局にはどつと客が押し寄せ、有難いやら、有難くないやらでファルマは頭を抱えたという。



### 3章3話 テルマエと、未完成の火神紋

「お前の発明した謄写版とやらを、陛下に献上したのか？」

ある朝のことだった。ファルマは、自宅でブリュノに指摘され、大変な失態を思い出した。

（失敗史も繰り返す……か）

ファルマはそういうところが、すっぱりと抜け落ちていた。

「失念しておりました。すぐ陛下に献上に参ります」

「発明もよいが、仕事を抱え過ぎて無理をせんようにな」

ブリュノはコートに袖を通してながら、ファルマを気遣う。

（いや、父にも仕事振られてるんですけど。大学教授とか）

どの口がそれを言うのか、とファルマは反論したい気分だ。そこで、

「父上にひとつ、お伺いしたいことが」

これもいい機会だ、そう思ってファルマは尋ねる。食卓ではなかなか聞けなかった。

「どうして私を大学教授に推しました？」

「ああ……それに関しては私が推したわけではないが、教授どもがお前を薬局で働かせているのを黙っていなくてな。私に関してはお前が思っているように、時期尚早だとは思っている」

ブリュノは視線をはぐらかし、言葉を濁した。

子供が教授などと、本来ならばふざけるのもいい加減にしろと言われるところだ。

せめて成人してからにしてほしかった、とはファルマも思う。

「だが、お前がいつまでその状態を保っているかと、私は懸念している」

ブリュノの答えはこうだった。

（そういうことか……神官長も言ってたな）

彼がいつまで前世の記憶を持ったままこの世界にいるのか、それはファルマにも分からなかった。神官長の言ったように、「神々とその化身が現世に現れるのは一瞬」だという前例を調べて、ブリュノのみならず、教授陣も不安になったのだろう。

ファルマは返事をするのができなかった。確信がないからだ。ひよっとすると、明日にでも彼の自我は消えてしまうのかもしれない。

「もし、時間が有限であるなら、お前には大きな仕事に専念してもらいたい」

患者一人一人を診るのは時間を取られる。

その時間で研究に打ち込み、数々の新薬を世に打ち出し、薬学の体系を完成させ、すぐれた後継者を多く残してからこの世を去ってほしいというブリュノの合理的な思考が垣間見えた。

それは非人間的でもなんでもない、実に学者らしい発想だった。ファルマ少年の父親としての立場からいうと非人道的に見えるが、公益のためにそうせざるをえないのだ。

「今、世界に生きている目の届く範囲の数千人を助けるより、時代を超えて残る偉業を残してほしい。そのほうが、目の前の人間のみを救うより結果的に多くの人間を救える。私はそう思う」

「……時代を超えて残る……？」

ブリュノのいう事ももつともだった。

（わかるよ、父、わかる。その思いは……俺も前世で直面したジレンマだ）

父はつまりファルマに、前世のように生きてほしいと言っているのだ。

前世のファルマは、彼が一生のうちに会おうであろう患者より、

未来で助かる何万、何百万人の為に新薬を開発してきたといつても過言でない。その結果、彼は研究室で寝起きをし、データと向かい合い、患者と向かい合う事ができなかった。その生き方が、間違っていたとは思わない。

ただ、過労死をしたのだけは間違っていた。彼がもう少しだけ自分の体をいたわっていれば、まだ多くの人々の為に働けたかと思うと、悔しくて仕方がない。

（でもな……今回は、それだけで終わりにたくないんだ）

それは、この世界に来てから決めたことだ。

「私は、自分の手で患者さんを助けたいと思っています」

（今度は患者さんに寄り添って、その生と死をしつかり見届けながら生きていきたいんだ）

それを聞いたブリュノは、ファルマの目を見つめてゆっくりと頷く。

「お前の人生だ。お前の好きにするがよい。まだ小さな身に大きな負担をかけて、申し訳ないとは思っている」

父は頭を下げた。そして、だが、と言って言葉を繋ぐ。

「もしお前が効果を試したい薬ができれば、ぜひとも私の体を使ってくれ」

父は、ただファルマに責任と仕事を押し付けたわけではなかった。私は喜んでお前の薬を受ける。そう言って父は背を向けると、後ろを振り返りもせずシモンを従えて馬車に乗った。

彼もまた、大学の総長でありながら、日々の診療のために患者のもとに向かうのだろう。

エントランスに残されたファルマは、前世での記憶、ブリュノの思いなど色々な感情が胸に迫ってきて、ぼんやりとその場に佇

んでいた。

そんな彼をめがけて、パタパタと後ろから小さな足音が聞こえてくる。

「兄上！」

妹のブランシュが後ろから声をかけてきた。振り向くと、彼女は予想に反して精一杯の変顔をしていた。

「ぶっ、あっははは」

まさかそんな顔をしているとは思わず、素で嘖きだすファルマ。母が見たら「まあ、はしたない！ やめなさい！」と叱られること間違いなしだろう。彼女はファルマが思い切り笑ったのを見て、嬉しそうに「あはは」と、一緒に笑った。

「父上と一緒にむずかしいことばかり考えてるの、よくないよ。あたまがわーってなっちゃうよ。あたまがわーってなったら、よくないと思うんだもん」

「そうだな」

ファルマは癒されてブランシュを抱き上げる。するとブランシュは手を伸ばしてきて、ファルマの口角を両人差し指で無理やりぎゅっと上げようとするのだった。

「ほら、兄上。につこり」

「うん、ありがとうブランシュ」

ブランシュは抱き上げられたまま、ファルマにぎゅっとやって頬ずりしてきた。

… … …

その後のサン・フルーヴ帝国宮廷にて。

皇帝、エリザベートⅡ世は恭しく納められた発明品をあらためていた。

ますます洗練されたロツテデザインの超美麗多色刷りイラストカ

ードと謄写版一式を持って、皇帝への献上にやってきたファルマを前に。

「献上が遅れまして申し訳ございません」

ファルマは冷や汗を流しながら平謝りだった。多忙にしているうちに女帝への献上をすぐ忘れてしまうので、発明品献上係を専属に雇いたいぐらいだ、と思う。だが、女帝はファルマが直接説明に来なければ許さないだろう。それが皇帝というものだ。

皇帝はイラストカードをかわるがわるに眺めて、しばし沈黙を保っていた。「真っ先に持ってまいれ」と言われていたのに献上が遅れたので首が飛ぶのではないかとファルマが冷や冷やしていると「ふむ、見事な発明品と印刷物の出来栄えだ。というか誰だこのシヤルロットという画家は、余の耳に入っておらんぞ。画壇にはまだ出ておらんのか」

謄写版の発明もだが、女帝はロットのイラストに興味を示した。ロットのもともとの作風なのだろう、どう見てもアールヌーボー、アールデコ調で描かれた美麗人物イラスト五枚セット、大いにお気に召したようだ。ファルマから見ても、素晴らしいできればえだと思う。

女帝の機嫌を損ねないよう、ロットにはイラスト製作を頑張ってもらった。ロットは鼻歌まじりにささ々と描いて楽しそうに製作していたが、才能が開花しはじめていた。「ロットは絵の天才じゃないのか!」と褒めると、「私、天才でしょうか!」とその気になっていた。無邪気なロットである。

というわけで、

「当薬局の職員の、趣味の製作でございます。画家ではありません」  
「うむ、見れば見るほど味わい深い。気に入った。その者は平民か」  
「はっ」

「平民だろうがかまわん、近日中につれてまいれ。よいな」

女帝曰く、宮廷画家として召抱え、宮廷内のステンドグラスやガラス工芸品のデザインをさせたいというのだ。皇帝の気に入ったものは手に入れる、それが物であっても人であっても。

（うわあ、ロツテが大変なことになった！）

写実的な油彩が全盛の画壇で、デザイン画に価値を見出すあたり、女帝の美的感覚、流行感覚はすぐれていた。以後、女帝のお気に入りであつてサン・フルーヴ帝都でアールヌーボーが流行りそうな気配がプンプンだ。

（ロツテの人生での最大事件、もとい美術史の重大事件がおきたぞ……）

ロツテは尊爵家の屋敷で幼少時より行儀見習いはしているので、たとえ皇帝の前に出て粗相はないと思うが、皇帝お抱えの画家になるなどと伝えると、本人が気絶してしまうかもしれない。

「この絵をもとに、ステンドグラスを作らせよう。その者はどんな褒美を所望するだろうか」

とりあえず一枚、気に入ったイラストで、お抱えのガラス職人にステンドグラスの試作をさせたいという。気の早い女帝のことだから、今日にでも作らせたいのだろう。

（ロツテの褒美か……ロツテはわかりやすいよな）

「お菓子がいいと思います」

本人に聞かなくても、絶対に間違いないはずだ。女帝や皇子が時々つまんでいる高級菓子、シヨコラなど食べたらもう昇天してしまうだろう。そして、ドはまりしてしまうだろう。

「うむ、では最高級の菓子を作るよう料理長に命じておこう。それから、朗報だ」

褒美と言つて、女帝はあることを思い出したらしい。

「と、申しますと？」

「そなたが褒美にと所望しておったテルマエのひとつが完成した」

ファルマが所望したと言ったが、ファルマは直接所望していない。「温泉に行きたい」と言っただけなのだが、ノアの告げ口の仕業だ。ノアは準騎士となり、もう小姓<sup>ペイジ</sup>ではないのだが、なんだかんだで皇帝の側近としてまだまだ使いつ走りをしている。それが出世の近道だと知っているからだろ。今だって、この献上式の場にしれっと紛れ込んでいるのだ。

「は、早いですね……さすが陛下」

女帝は帝都に五つのテルマエの建設を命じたが、そのうちの一つがもう完成したという。まだ一か月あまりしか経っていない。照明も惜しまず、夜を徹して造らせたという。

（このあたりが、皇帝だよなあ）

「そうであろう、そうであろう」

あつはつはつは、と豪快に笑う女帝。

「帝国の功労者への褒賞を急がせるのは当然である」

男らしいことを言う、脳筋女帝であった。

「余はそなたに、新浴場を一番に見せたくてな！」

女帝は上から目線でファルマを見下ろす。

（あつ、陛下そんな、献上が遅れた俺にあてつけのように……！）

「そういうことだ、これから浴場にまいるぞ」

玉座から立ち上がる女帝に、廷臣たちも追従する。今日一日、浴場は彼女のために貸切だという。

「こ、これからですか！？」

ファルマが献上式のために宮廷に来るというので、驚かせようと思つて湯船の支度をさせていたのだという。まだ浴場はオープンしていないが、当然、皇帝が一番先に貸しきって入浴する。貴族、庶民はその後だ。ちなみに、ロッテの希望通り、平民も貴族と同じように、浴場は分けられているが入浴できることになった。

皇帝が宮殿から出るのは久しぶりということ、浴場まで盛大な

パレードが行われた。騎馬隊に守られ、豪華な白馬の10頭牽きの馬車でだ。宮廷の正門が開き、女帝が民衆の前に姿を現す。

そしてファルマは、よりもよって女帝と同じ、白馬の牽く特別な帝室馬車に同乗させられた。皇帝の馬車には民衆の熱い視線が向けられる。天気がよいので、ホ口もあげられていて丸見えだ。陛下の隣にいるのは異世界薬局の子供店主ではないか、と大騒動になっているようだ。つた。

「陛下！ 陛下！」

熱烈な陛下コールで耳が痛いぐらいだ。

（ああ、なんてこった……）

顔を真っ赤にしながら女帝の隣で縮こまるファルマだが、女帝は意に介していない。

「ほれ、平民どもが見ておるぞ。しゃきつとせんか」

「は、はい」

民衆の視線や拍手を受けながら、ようやくのことで馬車は帝都浴場（Thermes de Cité Impériale）に到着した。

「わあ、すごい！ 立派ですね！」

ファルマはできるだけ大き目のリアクションを心掛ける。女帝は、ファルマのリアクションが見たくて浴場に連れ出したと言っているのだから。

「うむ、なかなかだな」

真新しい公衆浴場は、大貴族の屋敷を改装して造成されたもので、かなりの敷地面積を持っていた。外観は宮殿のようにしか見えない。その構造には女帝が直々に数々の注文をつけたという、一大娯楽施設である。浴場の職員が外でずらりと皇帝の到着を待っていた。それだけでも、皇帝の権力の強さがうかがえる。

女帝と共に馬車を降り、高価なガラスを惜しげもなく使った立派なエントランスホールを抜けると、脱衣場の入り口が見えてきた。



入口は二つある。

「あの、ちなみにお伺いしたいのですが……その浴場は男湯と女湯、わかれています？」

「うむ、きちんと分けてあるぞ。風紀の乱れはゆゆしきことだ」

（よかった……だから、男女別に貴族と平民用で4つの浴場があるってことだよな）

紳士の彫刻のある男湯らしき入口へ向かおうとすると、女帝に呼び止められた。

「そなたは余と一緒に王族専用の浴場に入るのだ。女湯から入れるぞ」

「な、なぜですか陛下あ！？」

声が裏返ったファルマである。

「せっかく造らせたのだ、別々ではつまらんではないか」

「お、恐れ多いです……陛下と二人きりで入浴だなんて……」

この浴場の客は、今、二人しかない。

皇帝と、ファルマである。女帝はあくまで、ファルマの驚きと称賛とリアクションを見たいようである。

「はっはっは、そなたはまだ11歳、男女もへったくれもなからう。ませたことを言いおって」

ファルマは力強く腕を握られると、強引に女湯の入り口へと連れてゆかれる。

脱衣場はかなり広いスペースがとられて、数百人は収容できそうだ。休憩スペース、マッサージルームもある。

「こちらだ、いくぞ」

女帝は何の躊躇もなく素っ裸になると、ズンズンと大股で歩きながら浴場へと向かった。ぷりつとした形のよい生尻が目飛び込んできて、ファルマは顔をそむける。

（何だこれ、陛下の無自覚サービスかよ）

服を着たお付きの侍女が数名、彼女の後を追った。ファルマは脱衣場に取り残されるのも困るので、布で前を隠しながら慌てて浴場

へ向かう。

大浴場は素晴らしかった。広いドームの中に、かけ流しの湯が張られた、現代でいう25メートルプール一杯分の面積もある、円や長方形の大浴槽が複数。それぞれ温度が違ったり、デザインが違ったり、噴水のようなものがあつたり、入浴剤が入っていたり。内装も贅沢で、大浴場の中には大理石で作られた彫像や、観葉植物などがセンスよく配置されていた。高くそびえる太い白柱が、ローマ風を思わせた。女帝は中庭にある、総ガラス張りの皇帝専用の浴場へと向かう。

浴場に入ると、透明な湯をたたえた湯船に真紅のバラの花びらが惜しげもなく浮かべられていた。バラが香り立つ。

「うわー……さすがです」

ファルマがあまりの壮観に言葉を失っていると、女帝は満足そうに腰に手を当て、くるりと後ろを振り返る。全くの無防備にだ。

（ああっ、陛下そんないきなり振り向いたら、み、見えてしまうではないですか！）

ファルマが顔を覆おうとすると、さっ、とお付きの侍女が二人、シルクの布で女帝の前面をファルマから遮った。

（ありがとう侍女の皆さん！ いい仕事してくれて）

危ないところだった。25歳の女帝の肌は若々しく、腰は細くくびれ、胸は豊で（シルクごしにシルエツトが見えるだけだが）そのスタイルはパーフェクトだった。皇帝には恥ずかしい部分がないので、下々の者のようにこそこそと隠さないのだ。

そこで、神聖な皇帝の玉体が誰かの目に触れないよう、侍女が隠すのである。

体を洗って湯で流し、バラ風呂に浸かる。湯の音が室内に響き渡る。湯煙が立ち込めて、侍女がゆつくりと扇で二人を煽ぐ。恐れ多くも大帝国の皇帝と二人、同じ湯に。

「どうだ、気に入ったか。そなたの保養のために造らせたのだ、ゆるりと休むがよいぞ」

（皇帝の権力、凄すぎます……）

すっかり温泉に行きたいと言ってしまったことに端を発し、こうなってしまったかと思うと、恐れ多すぎるファルマである。

「あの、ありがとうございます」

「うむ。そなたが喜べば、余も満足である」

女帝はルビー色の瞳を細めて、にっこりとほほ笑んだ。バラの花びらが彩る彼女の肌は、大人の女性の色気を感じさせた。金のメッシュの混ざる銀髪を無造作にかきあげた彼女は、メイクを落としても超絶がつくほどの美人だ。帝王の衣装を脱いでみれば、そこにいるのは可憐な一人の女性だった。女帝は未亡人だという。エレンに聞けば、夫（王配）は結婚後まもなく、戦地の流行り病で亡くしたとのこと。それ以来細腕（？）一つで、立派に帝国を支えているのだ。けなげでもあるな、とファルマは思いなおす。

ぼんやりと女帝と並んで、時間を忘れ浴室の外の庭の景色や、小鳥が舞い降り遊ぶ様子を楽しんでいると、ふと女帝がファルマの上腕に目をとめていた。

「えっ？」

そして女帝は、どんどん距離を詰め、食い入るように見詰めてくる。すっかりしていた。両腕の傷を見られてはならなかったのだ。

「謎が解けた、そうであつたか」

女帝は目を見張った。そしてそのまなざしは、羨望の色をはらんでいた。

「これは聖紋ではないか」

（やべっ……！）

今更隠そうにもどうしようもならない。

「完全な薬神紋だ」

女帝はそうであることを確かめるように、深く頷いた。ファルマの傷は、暗闇で少しでも光を放つ。

「あの、これって、やっぱりそうなんでしょうか」

ファルマは女帝が聖紋の正体を知っているようだったので、観念して聞いてみた。

彼女は帝国最強の神術使い、今更隠しても何もかもお見通しだろう。

「これを見るがよい」

女帝はすつと右足を湯船から出す。ふくらはぎの内側に、燃え上がる炎のような痣があった。

「えっ！？　もしかして聖紋ですか！？」

（聖紋持ち、俺以外にもいるのかよ！）

ファルマは少しだけ女帝に親近感を覚える。

「火神の聖紋だ……完成していればな。およそ1/4が欠けておるう」

女帝は細い指で、滑らかな曲線を描く細いふくらはぎを示す。

確かに、彼女の脚の痣を火神のエンブレムとして見ると、欠けているような気もする。

「余が10歳のとき、やけどを負ってこうなった」

その時から、彼女は神殿に見いだされ、帝王としての道を歩み始めたという。彼女の強さの前に、立ちふさがる者はなかった、彼女是最強の名をほしいままにし、名だたる神術使いを凌駕し、帝冠を戴いた。

「俺も10歳のときです、落雷でこうなりました」

ファルマと彼女の境遇には、奇妙な一致があった。

「聖紋の一部が体に刻まれただけでも、強い神力を持つと言われておる」

それで、彼女は皇帝になることができたのだ。望む、望まないにかかわらず。選ばれた者として。

「聖紋が完成すれば、神が宿ると言われておる。まだ少女だった頃、余はそれが齒がゆかった。完成した紋であればどれほどよかったかとな」

ファルマはじつと彼女の言葉を聞いていた。

「だが、今は不完全でよかったと思うのだ。もし紋が完成していれば、余の意識は消えてしまうのではないかと恐れた」

だから、と言って女帝は、ある意味憐れみを込めた視線をファルマに向けた。ファルマは彼女の言葉を受け止め、見つめ返す。

「今、そなたの体には、二つの薬神紋があつてどちらも完全だ。偉大な薬神が宿り、比類なき力と智慧を得たのであろう、だが」

女帝の指が、ファルマの両腕の紋を優しくなぞってゆく。影を失い人のそれではなくなったファルマ少年の体を、いたわるかのように。

「はたして薬神となつたそなた、ファルマ・ド・メデイシスの心は、以前のままであろうか？」

女帝は素朴だが残酷な疑問を投げかけると、「湯あたりしたので先に出る」と言って湯船からあがった。ファルマは女帝の去った浴室で、ガラス越しに差し込む、地球のそれと同じ輝きを持つ陽光に身をさらす。

いつか、体が透けて光となつて、自我もろとも分解されてなくなってしまう錯覚に陥った。

その後、ファルマは何も考えず全ての浴槽を巡った。  
難しいことは考えまい、とブランシュの言葉を思い出す。

どの湯も心地よく、体がほぐれるようで、働きづめで体のこわばっていた彼にはよいリフレッシュになった。

「ふう……いい湯加減だった。そろそろあがるか」

ファルマが湯船から上がるうとすると、なにやら脱衣所が騒がしい。そのうち、大浴場にはぞろぞろと女性客数十人が入ってきた。

異世界薬局の一級薬師や、エレンやロッテの声も聞こえてきた。

「へ？」

ファルマの頭に載せていたタオルがずり落ちた。顔が赤らむ。

「きゃーエレオノール様ってやっぱりお胸大きいー！」

ロッテの興奮した声が、浴場に響き渡る。彼女らは布で前を隠してはいるものの、体のラインは遠目にもファルマにはつきりと見えた。ファルマは観葉植物の陰になって、彼女らからは丁度見えない位置にいる。

「あらら、ロッテちゃんも膨らんできたんじゃないの？」

「きゃー！ やめてくださーい！ くすぐったーい！」

「あらー、ロッテちゃんたらピンク！？」

（き、気になる！ どこがピンクなんだ！？ か、髪か。髪だよな

……）

気になるが、覗きは犯罪、覗きは犯罪だ、と自らに言い聞かせるファルマは緊張と興奮で段々と血圧が上がってきた。

「陛下ったら、太っ腹よねー。オープン前に、私たちだけに特別招待をしてくださるなんて」

彼らの話を盗み聞きしていると、皇帝が薬局職員の慰労のために招待をしたのだそうだ。

「ファルマ様も招かれていますかねー？ 入口では姿が見えませんでしたけど」

「陛下と一緒に先に入ったそうよ。男湯でゆつくりしているんですよ」

調剤薬局ギルドの女薬師もいることから、男湯でも招かれている者はいるだろう。

（つていうか、こうしてる場合じゃない。やべえ！）

女湯の中に、ファルマが一人取り残された形だ。そして脱衣場は塞がれている。

（陛下、何で俺がまだ出てないのに俺を置き去りにして客入れるんだよ！ わざとか！？）

鉢合わせでもしようものなら、女性客に囲まれてボコボコにされる。いや、されはしないかもしれないが、どうなるかわからない。

これは参った、と、ファルマは彫刻の影に身を隠した。

だが、だからといって脱衣場に出ることもできず行き場をなくし、彼女らの目を盗み皇帝専用の浴室の中に逃げ帰る。

湯船の中に飛び込み、顔だけを水面に出すと、バラの花が彼の存在をカモフラージュしてくれた。

「ここでやり過ごすか……」

そして湯船から上がるに上がれなくなったファルマの運命はとうと……。

すっかりのぼせてバラ風呂の中に浮かんでいるのを、後ほど掃除人に発見されたという。

なお、正式にオープンした帝都浴場では。

女湯に浸かると、腰痛、肩こりその他の病気が治るらしいという噂がまことしやかに囁かれた。

### 3章4話 緑内障と宮廷画家ダレ

皇室を示す金の紋章の入った、可愛らしいラッピングのされた宝箱が緊張でカチコチになったロッテの前にコトリと置かれる。

異世界薬局に宮廷からの使者がやってきた。

ある高貴な人物から、ロッテへの贈り物だという。

「陛下からだな」

封蝋のされた立派な封筒には、エリザベートⅠⅠ世の直筆サインがあつた。

「陛下から！？ 陛下ってどういうことですか？」

「皇帝から、ロッテ宛てにだって」

腰を抜かしそうになったロッテが震える手で真紅のリボンとラッピングを解くと、宝箱は二段の引き出しになっている。彼女は緊張しながら上段の引き出しを引っ張り、中を取り出してみた。

「こつ、これはあああつ！？ ああ、噂のおおつ！？」

ロッテは新大陸でも発見したかのような驚愕っぷりだ。

「何でしょうファルマ様？」

「知らなかったのか」

彼女は物憂げな顔でファルマを見つめた。

「知ってるわけじゃないですかあ……私、召使いですよあ」

ロッテ自身、高級菓子とは縁がなかった。ド・メディシス家のブランドシユやファルマにお菓子の給仕をするときに羨望の眼差しとともに、鼻をひくひくさせながら運ぶぐらいだ。ファルマからおすそ分けをもらったり、薬局の従業員となつてからは自分の給料で買えるようになったとはいえ、あくまで庶民に手の届くレベルのものである。



「あら、ロツテちゃんこれはプ拉里ネ・シヨコラよ、おいしいのよね。あ、狙ってないわよ、ロツテちゃんが大事に食べたらいわ」

エレンがロツテの肩越しに、宝石箱の中身を覗きこんだ。大事な一粒を巻き上げるほど、エレンは鬼ではない。

「プ拉里ネ！ 知らない言葉ですエレオノール様！」

プ拉里ネ・シヨコラとは、一口チョコのことだ。バレンタインデーの時にやり取りされるあの某高級チョコに似たものである。

「下も開けてみますね」

ロツテは二段目の引き出しを引く。すると、円盤状のカラフルな菓子が整列して顔をのぞかせた。

「これはこれは、マカロンだね。甘くてふわつとしておいしいわよね」

エレンがロツテの食欲を刺激する。

「えへへ、プ拉里ネにマカロン！」

ロツテは頬が緩みつばなしかった。ロツテの褒美にということならお菓子しかない、と進言したのは間違っていなかった、と振り返るファルマである。

「ああ、これ食べられるんですか？ 食べるなんて勿体無いです、宝石みたいなのに！」

ロツテは大切な宝物の入った引き出しを閉めた。はあ……と残り香を楽しむ。

「お菓子は早く食べたほうがいいよ、マカロンはそんなに日もちしないよ」

ファルマが苦笑する。

「こんなかわいいの、食べるなんて無理ですよー！」

彼女は宝箱にしがみつき、首を左右に振る。

「ていうかロツテちゃん、まず陛下からの手紙を読んだ方がいいんじゃない？」

読み終えたロツテは、手紙を取り落とした。

「私が、きゅ、きゅ、きゅー！ー！宮廷画家に！？」

ロツテの声が裏返し、そのまま後ろにひっくり返ってしまいそうだった。召使であった彼女からみた世界一の大国、サン・フルーヴ国皇帝というと、それはもう雲の上の存在だ。その皇帝に請われて一足飛びに宮廷画家に栄達という誉れは、奇跡としか言いようのない出来事だった。

「ロツテは絵の天才じゃないかな！」

常日頃ロツテから持ち上げられているファルマは、お返しとばかりにロツテを誉めそやす。

「きゃー！ そんなー！ 本当ですかー？ 私って天才ですかね！」  
多少演技じみていたにもかかわらず、ロツテは真に受ける。

「で、引き受けるの？ ロツテちゃん」

「だめです、怖いですよ、宮廷画家なんて……無理ですよ」

「陛下のお誘いを断るほうが怖いと思うけど。それに、断るならこのお菓子、食べないほうがいいと思うよ」

「ぴゃー！」

お菓子と手紙を交互に見比べ、変な声が出たロツテだった。

「もし、宮廷画家に専念したかったら、薬局の手伝いはしなくていいよ」

ファルマは多忙になるであろうロツテを気遣う。ロツテにとって宮廷画家としての抜擢は荣誉だと思うが、ファルマも手放しで喜んでいるわけではない。名誉ではあるが、ファルマと同じようにしながらみが多くなるだろう。それに、仕事量は激増するに違いない。画家などというクリエイティブな仕事には、終わりというものがないのだ。無限に時間を消費する。

自分を棚に上げてだが、過労は厳禁だ。

「私は薬局のお手伝いは、やりがいがあります。そして陛下からのご依頼も大変な誉れです。もし迷惑でなければ、どちらもお手伝い

させてもらいたいです」

ロツテは屈託のない笑顔で答えた。

「せめて、屋敷の仕事は免除してもらえるように言っておくよ。かけもちなんてできるわけがない」

「いえいえ、お屋敷の仕事も私の務めですから」

彼女には労働という意識がないのだ。

「免除してもらうから、いいね」

「あうう、そんなー。私のやりがいがいー」

（こりゃ、ロツテは俺と似た人種かもしれないぞ）

彼女の仕事量を注視しておかなければ、とファルマは警戒を強めるのだった。

… … …

数日後、女帝への拝謁のため、ファルマはロツテと共に宮廷へ赴いた。

ロツテは、薬局の給料を工面して新品のドレスをあつらえていた。拝謁の場にふさわしいドレスをということで、高級裁縫店でロツテの母親が身銭を切って値の張るものを手配したようだ。気の利く女帝のことだから後ほど、十分な支度金が下賜されるだろうが。

宮殿へと到着した二人は、女帝の執務室へと通される。

女帝は山積みの書類と格闘しつつ、國務卿ら大臣を侍らせ凄まじいスピードでサインを書いていた。

「陛下、新しい宮廷画家が参りました」

「おお、そなたがシャルロツトか」

女帝が執務の手を止め、笑顔でロツテを迎える。

ロツテはスカートを両手で持って頭を下げ、深く腰を落とすお辞儀<sup>デシ</sup>をする。普段、屋敷で見る彼女のお辞儀より一段と深く丁寧だ。少女ながらに大貴族の召使であるロツテの礼儀作法は洗練されている

る。

「はい、皇帝陛下。シャルロット・ソレルと申します。このたびは宮廷画家へのご指名を賜り真に光栄にございます。また、素晴らしい贈り物を拝領し、感謝にたえません」

「うむ、そなたの作品には余人を以って替えがたい無垢と曲線美の魅力が凝縮しておる」

「お褒めにあずかり、恐悦至極にございます」

宮廷御用達の美術工房への出入りを許すので、陶磁やタペストリ、ステンドグラスなどの原画を制作して職人にそれを作らせてほしいとのことだった。

「そなたは年若く、無理はさせとうない。気が向いた時にデザインを持ち込んでよいし、作品の制作は工房でなくともよいぞ」

ノルマではないし、在宅ワークも可能ということだった。かなりの厚遇である。

「陛下にご満足いただける作品の制作に取り組む所存にございます」  
ロットは女帝から宮廷画家のステータスを示す、クロスした絵筆をあしらったバッヂを与えられ胸元につけた。以後は自由に工房に出入りしてよいという。

「緊張しました〜！ 陛下ってお綺麗ですね、女神様みたいでした！」

執務室を退室したロットは、はあ〜と言いながら心臓を押さえていた。心臓がバクバクして血の気が引いていたという。

「緊張してた？ なかなかだったよ」

ファルマはほっとする。皇帝の前に出しても恥ずかしくない振る舞いだといって、國務卿も感心していた。引き続き、ロットは宮殿の敷地内にある宮廷工房の見学に訪れた。ファルマも同行する。

「工房長のユベールだ、しっかり励んでくれ」

若い工房長には歓迎された。

「よろしくお願いいたします」

工房の中では多くの宮廷画家、職人たちが家具、調度品などの依頼品の製作をしている。その中の一人の老画家が、真剣な面持ちで王家の肖像画の制作に取り組んでいた。

「うちの工房の筆頭肖像画家、ダレ男爵だ」

ファルマとロッテが、少し離れた場所から制作の様子を見学している。

「おや」

画家、ダレ男爵はロッテからの熱視線に気付いた。

「シャルロット・ソレルと申します。お上手ですね、生きているみたいです」

圧倒的技量に恐れをなすロッテである。

「なに、上手いだけの肖像画家の代わりはきく」

美化する技量が多少あるだけだな、と彼は賛辞には慣れきつているといった様子で答えた。

しかし、帝国最高の大画家としての地位を得ているからこそ、彼は女帝の肖像を描くことを許された肖像画家なのだと、ロッテは尊敬する。

「お前がシャルロットかね。お前の絵を見たよ」

「はい、ありがとうございます」

「はつきり言うが、お前の絵は稚拙で、お世辞にも上手くはない」  
技法も何も勉強したわけでもないロッテは言い返す言葉をもなく、耳まで真っ赤になって羞恥し俯いた。宮廷画家と名乗るにもおこがましい、そんなことはロッテにもわかっていて。

「お、仰る通りでございます」

ロッテはすっかり萎縮していた。

「それでよかったのだな」

しかし彼は明るい声で、何かを払拭したように彼女に告げた。

「わしは長年画力の向上に努めてきた。実物と遜色のない絵を求め

てきた、だからお前の作品を見て力が抜けたよ。巧拙ではなく、優劣でもない、芸術は自由だということを思い出させてくれた」

女帝の心をとらえたものは、老画家の描いてきたものと正反対だった。

それは彼の人生の全否定のように感じ、彼を初心にかえらせてくれたと自嘲する。

「かといってこの年で、新たな挑戦はできん。この絵は未完のまま、献上をせず引退をしようと思う」

「えっ、それは何故？」

かなり描き進んでいて、ここで諦めるのは勿体無いとファルマもロツテも惜しむ。

工房長も引退するとは初耳だと驚き荒てる。

「わしは悪霊に憑かれてしまったようだからな」

悪霊に憑かれてしまった者の描いた絵を宮廷に飾れば、皇帝に災いを呼びこんでしまうかもしれない。だから、身を引くべきだと彼は言う。

「話を聞かせてください」

以前であれば「そんなまさか」と、一步引いて聞いていたファルマだが、カミュとの遭遇以来、この世界には本当に悪霊らしきものがあるというわり、彼の話に傾聴する。

しかし男爵は悪霊憑きだと自称する割りに、ファルマは嫌な気配を感じない。さらにファルマは診眼を使ってみたが、特に異常は見えなかった。そこで事情聴取に戻る。

「たとえばそれは、どんな悪霊なんですか？」

… … …

ファルマはダレ男爵の話を聞くと、サン・フルーヴ帝都教区の神官長を訪ねた。

神官長はファルマの来訪にテンションが上がりまくり、熱烈な歓迎をみせた。ファルマが神殿を訪れると、聖域が強化されるのだというから、嬉しいのだろう。

「ようこそお越しくださいました。今日はこういったご用件で」

「神官長さんに相談がありました」

「この私に、ご相談でございますか！ ああ、なんと恐れ多い」

神官長と神官たちの感謝の祈祷がはじまったので、長居せず話を手短に切り上げることにした。

「人体が消えたり、現れたり、生首が浮かんでいたり、空間が歪んで見えたりするみたいなんですけど、そういう悪さをする悪霊がいるんでしょうか。男爵には黒い影は見えなかったんですが……」

「いえ、悪霊というのはそういうものではございません」

サロモン神官長はきっぱり否定した。

「多少の悪霊であれば薬神様の聖域で消し飛ばされてしまうでしょうし、凶悪な大悪霊であれば神術使いならば誰の目にも見えます」

「ということは、悪霊じゃないんですね」

「そのはずです」

（じゃ、何が起こってるんだ？ 脳の病気じゃなかったしなあ、男爵の気のせい？ 疲れて幻覚を見た？）

「あ、そうか。眼病だ」

薬局に戻ったファルマはぽんと手を打った。眼の病気という言葉にロツテが反応する。

「でも、眼の病気でそんな事が起こるんでしょうか」

「人の脳は、見えていない部分を無意識のうちに補うんだよ。実験してみる？」

「何をするんです？ 私、目の病気なんですか？」

「ロツテは違うけど、誰でも体験できることだよ」

ファルマは柄物のハンカチの上にファルマの薬師のバッヂと、ロツテの宮廷画家のバッヂを並行に刺し、それをロツテに向けてひら

りと掲げる。

「片目を閉じて、目を動かさずにロッテのバッチを見ていて。ハンカチをゆっくりロッテに近づけていくよ。俺のバッチが消えるところがあるから」

「ファルマ様のバッチが消えました！」

「それが”盲点”だ。で、バッチがあつた部分、今どうなってる？」「ハンカチの柄があります！ どうして！？」

「その現象な。ロッテは見えない部分があるのはおかしいと思って、周囲の模様でバッチの部分の”穴”を埋めたんだ」

「わぁーっ？！ 私、絶対そんなことしてないです！」

「無意識にやつてることだからな。普段、両目でものを見ている限り、お互いの目が盲点を補い合つて完全な像になっているんだ」「ということは」

ロッテははつと息をのむ。気付いたようだ。

「ダレ男爵も多分、脳の中で同じことをやつてる。ただ、その視野の欠けが大きくて認識に齟齬をきたしているんだろうな」

「なるほど……！」

「明日、男爵を薬局に来るように言つてくれないか？ 治療を急いだ方がいい」

「悪霊に憑かれたわけではなくて、病気なんですな」

「そうだよ、現時点では憶測だけど」

「男爵は来てくださるでしょうか」

ロッテは不安だった。病気だから来てくださいなどと小娘に言われるのは気分を害さないか、それよりなにより不躰ではないかと。

「俺が手紙を書くよ」

翌日、ロッテがダレ男爵におそるおそるファルマからの手紙を渡した。

彼が手紙を開くと、格子模様の図柄が描かれている。

「何だこれは」



”この格子のどこかが歪んで見えたり、欠けていたら異世界薬局に来てください”

そんな注釈がついていた。

不機嫌な顔をしながら、それでもその日のうちにダレ男爵は薬局にやってきた。

「いったい何が分かるというんだ。最近の薬局は悪霊憑きも診るのか？ 神殿に行った方がましだ」

「まあまあ、それも含めての診察です」

ぐちぐちと言っているダレ男爵に対して、ファルマは真正面から診眼を発動する。すると彼の両目にほんの小さく、赤い光が点っていた。光が小さすぎて以前は見落としていたようだった。

ファルマはいくつかの病名を絞り込んでゆく。

「げんばつかいほうぐうかくりよくないしょう”原発開放隅角緑内障”」

ヒットした。眼圧が上昇することにより目の神経が傷つけられ、視野を失ってゆく目の病気だ。地球では、失明の原因の第2位にあたる。

「男爵、これは緑内障という病気です」

「何だと？ 聞いたことがないぞ」

「今名付けましたからね」

ファルマはあらかじめ準備していた道具と拡大視を使って、眼底検査、視野検査を行う。

「左の視野は半分見えています。右はかなり欠けていますね。ほうつておけば段々と欠けていって、最悪の場合失明します」

ファルマは視野検査の結果を彼に見せる。

「なっ、治せるのか？ 薬はあるのか？ 謝礼ならいくらでも出すぞ」

ダレ男爵は怯えていた。失明したら廃業どころか日常生活もままならない。ファルマはゆっくりと首を左右に振った。

「残念ですが、今の状態よりよくなることはまずありません」

ファルマは治せないことを正直に伝える。診眼でも赤が出ている。一度死んだ視神経は回復しない。iPS細胞などを使えばまだ可能性は見いだせるが、この世界では実験環境と眼科医がないので無理だ。早期発見が鍵となる。

「わしはこれから、暗闇の中で生きるのか…… ああ、何の神罰だ」  
男爵は奈落の底に突き落とされたような、絶望を体現した顔をしていた。

「ですが、薬を使えばこのままで進行を止めることはできます」  
「本当か!？」

ファルマは緑内障の進行を食い止め眼圧を下げる目薬を処方して、彼に手渡した。失明は防げると思うが、治療を始めてみなければ薬の効果が出るか分からない、とファルマは説明する。

「残った視野を大切にしましょう」

「ありがとうございます。わしは残りの余生を、田舎で静かに過ごすことにする」

「薬は取りに来てくださいよ」

「ああ、分かった」

ダレ男爵は薬袋を持ってファルマに懇ろに礼を述べた。そのくたびれた後ろ姿に、ファルマは言葉を投げかける。

「あの。男爵。引退せずにそのままの世界を描いてみればいいのではないでしょうか、あなたは悪霊に憑かれてはいませんか」

「そのままの世界が見えていないのだ、どうして肖像画など描けようか」

彼の画家生命はもう閉ざされてしまったと、彼は自分の可能性に見切りをつけてしまっている。口から出るのは溜息ばかりだ。

「肖像画ではなくて、変容した世界を描けばよいのではないのでしょうか」

ファルマはふと思いついて、提案してみた。

「あなたが手に入れた新たな世界を、キャンバスに起こしてみてもどうでしょう」

ファルマに励まされ、男爵は制作意欲が湧いてきた。

「……自信がないが……目が見えるうちに試してみよう。後悔はしたくない」

というのもひょっとすると、肖像画は描けなくなったとしても、現代美術として価値があるのではないのかとファルマは考えたのだ。

完成したダレ男爵の作品は、女帝に献上された。

しかし男爵は、その絵に価値が生まれるとは思っていなかった。

それでも彼の魂を込めて、今の彼が表現できる精いっぱい、画家人生の集大成といえる作品を女帝に捧げた。

駄作だと罵倒される恐怖に震えながら、男爵は平伏しつつ女帝の言葉を待った。

作品と対峙した女帝は、暫くの間無言で鑑賞していた。そして最後に一つ、唸った。

「面白いではないか」

それは、賛辞なのか罵倒なのか分からないコメントだった。

「この絵は理解できぬが、心を揺さぶられる。どこかで見たことのあるような、それでいて斬新な世界観だ。嫌いではない、いや、むしろよいではないか」

女帝は作品に釘づけになっていた。

そこにあっただのは、現実がふとした瞬間に非現実と繋がってしまったかのようなインパクトを持つ、現実にはありえないオブジェクトの組み合わせ、デペイズマンと地球では呼ばれるであろう技巧によって描かれた絵画、新たな芸術だった。

その後、宮廷肖像画家を引退したダレ男爵は、宮廷画家として引き続き召し抱えられた。彼は宮廷の手厚い庇護を受けてキャンバスの中に夢の世界のような異空間を映し出す、非現実的なアートの制作に取り組んでゆく。それは時に歪んだ空間であったり、デフォルメされた人体であったり、全く異質のもの、異なる概念の組み合わせ

さった、常識を打ち破るアートであった。

その斬新な表現手法は不思議な魅力を持ち、国際サロンを席卷し、ダレ・ムーブメントとなった。個展は連日客が押し寄せ、大盛況である。そして彼の個展には、ロッテがデザインし職人に作らせた陶磁、工芸品なども共に展示され、同様に好評を博した。

「ファルマ殿には本当にお世話になった。この成功もあなたのおかげだ、ぜひこれをおさめてほしい」

そんな手紙と共に、時価総額にして大変な額になるであろう彼の300号寸法の油彩が、メデイシス家に届けられた。掛布を取ると、そこには、誰かの夢の中の世界をそのまま映しとったような空想的な絵が描かれていた。超大作だ。

「あ、ありがとうございます。父も喜ぶでしょう」

特大サイズなので、玄関に飾るしかない。

「うーん、この感じ……」

（なんか見たことあるんだよな、この画風。マグリッドとかダリとか、あんなの）

メデイシス家の玄関に飾られることになったダレ男爵のシユールすぎる、少々とは言えないほどグロテスクだが、ダレの心の向くまま描かれた素朴な作品を眺めながら、ひよっとすると、彼はこの世界におけるシユルレアリスムの画法の先駆けなのではないかと考えるファルマだった。

あまりに個性が強すぎたからか、ロッテとブランシュは夜中、玄関の絵の前を通れなくなったという。

### 3章5話 カレーとラッシーと腸内フローラ

よく晴れたある秋の日、ド・メデシス家の所有する大河の中州で、異世界薬局総本店主催のオートムパーティー（Fête d'automne）イベントが開催されていた。

このイベントには薬局の職員や常連客らが招待された、野外のシークレットイベントだ。

しかしちやっかり神官長や神官たちも、常連チケットを取って紛れ込んでいる。

このパーティーに、招待客の未知の料理が出てきた。カレーである。

ファルマが4階の研究室で調査していたカレーのレシピで食べられそうなものができたので、ド・メデシス家の料理人に再現してもらってそれを供している。

（カレーパがこんなに大々的になるとは）

カレーが苦手な人、口に合わない人にも配慮して、普通のご馳走もオープンテーブルには食べ切れないほど並んでいた。

楽団の野外演奏が流れる中、優雅で大規模な催しとなった。

「とっても美味しいわ」

令嬢らしくロココ調のスカイブルーのドレスで着飾ったエレンは、貴重な香辛料をふんだんに使ったカレーに舌鼓を打っていた。ナイフとフォークで切り分けて、上品にカレーにつけて食べる。

「ドレスに飛ばさないようにね」

「キヤーツ！ 散ったわー！」

ファルマの忠告もむなしく、早速散らしてしまったようである。

「取れないの？ このカリーの黄色？」

「さっと洗って天日干しすれば取れるよ、黄色を出している成分は

日光に当てると分解されるから」

ファルマはこんなこともあるのかと、黒をベースにした盛装でその場に来ていた。

「そ、ならよかったわ」

「外で食べると気分も晴れておいしいよね」

外で食べるという習慣があまりないこの世界の人々には、少々斬新だったようだ。

「このレシピを教えてくださいませんか」

いつものシャツ一枚ではなく盛装でパリッとしたいでたちでやってきた常連のジャン提督は、このカレーを船乗りの食事として採用したいと言った。ファルマは謄写版でコピーしてきた資料を手渡す。「香辛料は日持ちするので、船乗りの食事としては適していると思います」

そのうち海軍カレー的なものができるんじゃないか、とファルマは楽しみだ。

「ファルマ様ー、これ未知の料理ですっ！」

ロッテはテーブルマナーを守りながらも、全カレーを制覇し味くらべをするのに忙しい。

用意したカレーは鶏ひき肉のカレー（キーマカレー）、ほうれん草とジャガイモのカレー（アルパラク）、野菜や肉、ハーブ、ブイヨンなどで取ったダシに牛乳を加えた欧風カレー、ホワイトカレーなどだ。好き嫌いが分かれるかとファルマは思ったが、彼らの口にはあったようだ。口の周りにカレーがついているのを、ナプキンで上品にぬぐった。そしてロッテも白いエプロンスカーツにカレーを散らしていた。ロッテはホクホク顔だ。

「このパンと食べると最高ですね、このパンは何ですか？ えへへっ、何枚でもいいけちやいます」

「ナンだよ」

ファルマはナンにつけてカレーを食べる。

「何？」

エレンが聞き返す。

「分厚いのが精製小麦で作ったナンだよ、薄いのが全粒粉で作ったチャパティ」

「カレーが進むわー」

エレンや常連客たちと談笑しつつ、スローペースで食事は進む。  
満足な食卓だった、が、ファルマは……、

（ああ……俺はライスがあればと思うんだけどなあ……）

ファルマ的には大皿でカレーライスを胃にがーっとかつこみたい衝動にかられるが、それはこの世界のマナーとしてはお下品だし、そもそもライスだってこの世界にはないのだ。

「これ、何の香辛料を使っているの？ 家でも作らせたいわ」

香辛料は湯水のように使えるほどは手に入らなかった、最低限の種類を使ったレシピだ。

「このレシピだと、玉ねぎや野菜をみじん切りにしてよく炒めて、肉とともにターメリック（色付け）、コリアンダー（香りづけ）、レッドペッパーにカイエンペッパー（辛さ）、クミン（香り）、シヨウガ、にんにくと煮込む感じだな」

もっと多くのスパイスを使えば、もちろん奥行きの高い味になるのだが、ファルマがそういったスパイスの調合にはあまり詳しくなく、スパイスを使いこなせないため、手堅く失敗しにくいレシピにした。

カレーの辛さは、レッドペッパー、カイエンペッパーなどの唐辛子の量で決まる。

それらの量を調節すれば自分の好みの辛さにできるので、辛さは子供用から大人用まで、甘口、中辛と設定した。激辛は胃腸に刺激が強いので、今回は外した。異世界薬局のパーティーの料理を食べ、胃腸を壊した、などということがあってはいけない。

「カレーって、健康によさそうですね」

ロツテが手ではたばたと顔を仰いでいた。そういえば体があったまってきたわね、とエレンも頷く。

「健康にいい面もあるかな」

確かにターメリックに含まれる色素であるクルクミンには強い抗酸化作用があり、がんの抑制効果もあるとされ研究が進められている。が、この食材がこの病気に効くという、よく巷で聞かれる謳い文句には注意が必要だ。ファルマはカレーが健康にいい、と吹聴するつもりは全くない。

食べ過ぎてはいけないし、個人の健康状態も考慮しなければならなかった。香辛料を取りすぎると胃腸への負担が大きいという側面もある。

「何なのよその慎重な物言いは」

エレンが、ファルマの大人じみた玉虫色の言葉の選択に苦笑する。

「ああでも、体は温まるし食欲増進効果はあるよ」

「これって作ってどのくらいもつの？ 数日は食べられる？」

「その日のうちに食べてくれ」

作り置きして一晩寝かせて熟成したカレーは美味しい、と一般には思われているが、一晩おいたカレーには加熱してもウェルシュ菌という菌が増殖して食中毒の原因となる場合もある。

冷蔵庫で保管すれば翌日も食べてよいが、この世界では食べないほうがいいだろう。

食事が終わると、薬局職員や常連たちと談笑をしたり、ジュ・ド・ポーム（jeu de paume）と呼ばれるテニスの源流のようなラケットスポーツをしたり。完全にレクリエーションパーティーで、ファルマも招待客も大いに楽しんだ。

「ファルマ君、一曲踊らない？ 私、ダンス好きだから踊りたくなってきたわ」

軽やかな楽団の演奏が聞こえてきた。エレンがファルマを誘う。



貴族の踊るバロックダンスが始まろうとしていた。貴族のたしなみとして、サロンで踊るダンスのような教育は一通り受けている。

「いいよ。エレン、ダンス好きだったんだな」

（俺、踊れるんだっけ。恥かかなければいいけど）

不安を抱えつつファルマはエレンとともに参加すると、ファルマ少年の肉体の記憶があつたのか、ステップと動作を体が思い出す。ドレスアップをしてバロックダンスを踊り、視線を無意識に絡ませたりはぐらかすエレンは優雅で、いつもより美しく洗練され、そして何より魅力的に見えた。

（エレンもこうしてみると、大人びてきたなあ、最近ますます綺麗になってきたし）

以前は彼女を少女のように思っていたファルマも、エレンを一人の女性としてみるようになってきたのかもしれناと思う。ファルマの中に芽生えたエレンへの気持ちの正体がよく分からないまま、ダンスは終わった。

召使であるがゆえにバロックダンスを踊れないロッテが、羨ましそうに戻ってくる二人を拍手で出迎えた。心からの賛辞を送る。

「ふわー、お上手でしたー！ お二人とも、こうして拝見していると大貴族ですよー、美しかったですー！」

「そうね、貴族だものね。昔からこういうのをやらされてきたのよ」  
エレンが、ロッテの天然なコメントに笑う。

「あれ、ブランシュは？」

しかしその頃、ブランシュがベンチに座り前かがみになっていた。

「どうしました、ブランシュお嬢様」

「ぼんぼんいたいー」

トイレを済ませて、ベンチに戻ってきた彼女は、

「あにうえー膝枕ー！」

と、ファルマに膝枕をねだる。ブランシュはファルマの膝の上で

くの字になっていた。

「大丈夫でございますか？ お嬢様のお腹が大変ですっ」

ロツテが甲斐甲斐しく飲み物を持ってきたり、掛け布を持ってきたりと世話をやく。彼女は宮廷画家として拔擢されてからも、メデイシス家の召使としての自覚を持って屋敷の人間には奉仕していた。「カリィが合わなかったのかなあ。悪いことをしたなあ」

ブランシュはもともと下しやすい体質で、スパイスの殆ど含まれていないカレーにしていたのだが、それでも子供には刺激が強かったのかもしれない、とファルマは反省する。

「ブランシュはもう、カリィを食べるのはやめておいたほうがいいな」

「せっかく美味しいのに、もう食べちゃだめ？ カリィ」

ブランシュは残念そうに唇を尖らせて人差し指をくわえる。

「やめとこう」

「ううん、カリィのせいじゃないの、前からくだしていたの！ ちがうの！」

ブランシュはカレーが食べられなくなつては大変、と抵抗する。

ファルマは診眼で診る。重大な病気は潜んでいなかった。

潰瘍性大腸炎、クローン病などの病気や感染症でもない。乳糖不耐症などでもない。

そうこうしているうち、膝の上でブランシュがくうくうと寝入ってしまったので、膝を貸していたファルマはその場から動けなくなった。ベンチの周りには、まだロツテとエレンが心配そうに様子を見に来ている。

「可哀想に、そうして少し休むといいわ」

「そうだな。俺もここで付き合うよ」

ファルマもブランシュの髪の毛をくしけずり、頬を撫でる。陽光の中でまどろむブランシュは透き通るような美少女だ。ファルマにとって、彼女は血のつながった大事な妹だ。早くよくなってほしいと思う。

「腸内フローラのバランスが崩れているのかもなあ」

「腸内フローラってなに？ 花畑（Fleurs）のこと？」

フローラというのは英語で花畑という意味だ。この世界には英語はないのだが、エレンは察しがよい。

「腸の中に細菌の花畑のようなものがあるんだ」

ちょうど、パーティーの催されている川の中州には、離れた場所に花畑が広がっていた。そこには白や黄色の花々が小さな群落を作って美しい光景をなしている。

「ほら、花畑を見ると、その眺めは常に変化しているだろう？ 白い花が増えたり黄色が増えたり、雑草優勢になったりさ」

ファルマは白い花の群落と、黄色い花の群落を指差す。

「そうね、ずっと同じ状態ではないわ」

エレンは納得する。手入れをせずそのままの状態では、植物は生存競争を始めるだろう。

「それと同じように腸の中には多くの細菌がいて、たえず増えたり減ったりしているんだよ。善玉菌と悪玉菌が常に生息域を広げたり減らしたり、この花畑のようにね。腸内フローラの細菌の状態は、人によってまったく違うし、常に一定でもないんだ。ブランシュは今、この状態がよくないんだろうと思う」

「というか、細菌が腸の中にそんなにたくさんいるわけないわ。ほんのちよつとでしょ？」

大げさじゃないの？ とエレンは笑う。

「汚い話になるけど、便は食べ物のカスだと思う？」

そういえば、とファルマはエレンに問う。話題的に話してはいけない気もするが、もう全員食べ終わったから許してほしいと、ファルマは思う。

「もちろんよ」

エレンは断言し、ロツテも「食べ物しか出てこないですよね！ だって食べ物しか食べてないですもんね！」と疑わない。

「それが違っんだよ」

ファルマは首を振って一本ずつ指を折る。

「水分を除いた便の成分を多い順に並べると、1位 腸の粘膜の細胞 2位 腸内細菌、そして3位が食べ物のカスの順番になる」

「食べ物の比率、そんなに少ないの!？」

エレンは衝撃を受けたようだった。

「食べ物の比率は4〜5%だね」

「少なっ!」

腸内細菌の総量は、成人一人あたり1〜1.5kgにもなる。腸内細菌がどういうものか、ファルマはエレンとロッテに教える。ロッテは自然とおへそのあたりを見つめた。

「そんなに、重要なね。はー見直したわ、腸の細菌。よい細菌を増やさないとね。腸内環境を甘くみていたわ」

エレンも腸内細菌に感謝するかのようにお腹をさすった。

「きれいな花には肥料をやり、雑草は減らすようにしないと。腸の中もしかりだ」

「賛成ですっ!」

ロッテははーいつ、と元気に手を挙げた。エレンとロッテは便乗して、今日から早速腸内環境の改善に取り組むつもりようだ。エレンも勢い込んでみたものの、

「で、善玉菌はどうやって増やすの?」

善玉菌は乳酸菌や乳酸桿菌で構成されている。ブランシユの腸内で、これらを増やす努力をしなければいけない。

「目の前の花畑がまっさらの土地だったとすると、最初に植えた花はよく増えるだろ?」

「そうね、邪魔者がいないからその植物で覆いつくされるかもしれないわね」

誕生したその日から、人の赤子は母親の常在菌から善玉菌を取り込む。そしてゆっくりとほかの菌も取り込み、菌は腸の中で増殖を

はじめ、そうして腸内フローラはできあがってゆく。

「だけど、今このギチギチに生えた状態では難しい」

「うーん、ほかの植物に負けてしまっわ。どうすればいいの？」

複雑な要因が絡まり合って人体って複雑なのねー、とエレンは頭をかかえる。

「だから、乳酸菌を含む食材をただ食べればよい、というわけではないんだよ」

乳酸菌が何に含まれているかという点、ヨーグルトやチーズなどの発酵食品などだ。これらをそのまま食べると、胃酸などで腸につく頃には死んでしまう。たとえ生きたまま腸まで届くと謳われた特別な乳酸菌であっても、腸内に届くかもしれないが、殆ど定着しない。それを食べるのをやめると、便（死菌）になって外に出てしまう。

腸内フローラが既にできた状態では、たとえ善玉菌を口から摂取したとしても、新たに入り込むスペースの確保が難しいというわけだ。しかし、乳酸菌そのものには、たとえ生きて増殖しなくても免疫力を高め、悪玉菌を駆逐する働きがある。だから乳酸菌を食べるのにはそれなりに意味がある。

「だったら、増えてほしいものだけ増えるような肥料をやればいいのかしら。でもそんな肥料ってあるの？」

エレンがひらめいた。

「正解、いい発想だな」

エレンが言っているのは、プレバイオティクスという新しい考え方だ。善玉菌を外部から取り込むとともに、もともと腸内フローラにいた善玉菌の増殖を助けるものを摂れば良い。

プレバイオティクス食品はオリゴ糖や、食物繊維がそれにあたる。

「ブランシュが好きそうなメニューを考えてみるよ」

そこでファルマが考案したのが、ラッシーだ。ヨーグルト、牛乳、

そしてレモンとはちみつを混ぜれば、簡単に作れる。はちみつにはオリゴ糖が含まれるし、ヨーグルトは乳酸菌が含まれる。

それを、屋敷に戻り、オリゴ糖の含まれたぶどうと共に夕食のあとブランシュに出してみると、

「やーん、ミルクは苦手なの」

ブランシュはカップパ口になってうつむき、拒絶した。

「何で苦手なの？」

「味がなんか苦手、何かだめなの」

生臭く感じるらしい。よほどいやなのだろう、体がのけぞっていた。

「そう言うかと思って、はちみつで甘くしてるよ。はちみつ、大好きだろ？」

ファルマがブランシュを誘う。

「あいい……」

ブランシュはしぶしぶと言った様子で、ラッシーに口をつけた。

「甘くておいしい！ ミルクじゃないみたい！」

それはまるで、お菓子のような特別な飲み物だった。

彼女の牛乳嫌いは一瞬にして克服できたようだった。チョコロイもんだな、とファルマもあきれる。

ラッシーはその後、薬局でロツテたちにもふるまわれた。

「カレーのお供にいいですね！ 辛さが和らぐっていうか」

「あ、忘れてたその組み合わせ！ カレー屋で出てくるコンビだ」

というわけで、カレーを食べるときにはラッシーも共に食卓にのぼることになった。

ブランシュはというといつのまにか下痢はおさまり、次はラッシー片手に存分にカレーを食べても下すことはなかったという。そしてカレーは、ド・メディシス家の定番メニューになった。

母ベアトリスと父ブリュノはこのメニューがいたく気に入り、普段おかわりをしないというのに、珍しくおかわりをしたという。

### 3章5話 カレーとラッシーと腸内フローラ（後書き）

【謝辞】オータムパーティーのフラ語訳の間違いを「朱き強弓のエ  
トランジェ」の甘木智彬先生に修正していただきました。ありがと  
うございました。



### 3章6話 異世界薬局マーセイル工場の操業準備

異世界薬局で通常業務を営むファルマのもとに、待望の知らせが伝書鳩により届けられた。

マーセイル領の製薬工場が完成したのだ。

「完成、早かったなあ」

ファルマ的には年単位で待たなければならぬかと覚悟していたのだが、蓋をあけてみれば着工から半年近くで完成した。

「ファルマ君、御曹司だから違うわねー。あと、帝国や神殿の出資が凄いし」

尊爵家の財力に頼らず、自力で稼いだ財力で必要なものは何でも調達してしまうファルマを、エレンは未恐ろしく思う。

そのくせ、自分の個人的な娯楽のためには殆ど金を使わないのだ。その無欲っぷりがますます賛同者、崇拝者を集めているのだろう、とエレンは分析する。

私腹を肥やす貴族の多い中で、ファルマは驚くほどの無欲だった。ただ単に子供で世間知らずで、私腹の肥やし方を知らないから、というのではない。

「工場って何を作るんですか？ おか……」

ロツテが思わずお菓子、と言いかけて口を押さえた。無意識のコメントだったようだ。

「お菓子じゃないよ、薬だよ」

ファルマはベタな発想に笑う。

「でっ、ですよね！」

ロツテは恥ずかしくて耳まで真っ赤になった。

完成から間もなく、実験や製造に必要な器械や道具を業者に発注し、ファルマ自身も薬神杖での飛翔を使って精密機器を素早く運搬したり、大型器械は馬車で運ばせたり、現地で物質創造を行ったりして準備を整えていた。まだ内部は完成していないが、建物、設備自体は完成したのだ。

また、マーセイル領主代行のアダムに頼んで、工場労働者2000人を現地雇用した。ファルマは工場の設備をあらかじめ整え終わると、サン・フルーヴ帝国薬学校に出向く。

キヤスパー教授から抗生物質生産のために選り出されたいくつかの放線菌の菌株を預かり、それを大量生産のために運搬するのだ。

ファルマと会ったキヤスパー教授は、自信を持って選んだ3つの株をファルマに託す。名残惜しそうにしていた。

「よろしく願いますわ、ド・メーシス教授。この子たちが患者さんの役に立ちますように」

教授就任前から、すでに教授呼ばわりはファルマには慣れない。

それでも、訂正するのも無粋だ。

「確かにお預かりしました、キヤスパー教授。私がこれらの菌を責任を持ってスケールアップを行い、抗生物質製剤にしてゆきます。

その薬は、患者さんのもとへ必ず」

「皆で見つけた菌です、たのみましたよ」

キヤスパー教授は我が子を託すような心境だったのだろう、箱にはリボンでラッピングがされていた。

そして蓋に名前が書いてあった。

”キヤスパーちゃん1番”

”エリックくん2番”

”アレクシスくん3番”

マーセイル行きの馬車の中で揺られながら、エレンがキヤスパイ教授から託された箱を大事そうに抱えたファルマにふと尋ねる。

「なにこれ、誰？」

蓋の上部に書かれた、3人の名前が見えたのだ。

「放線菌の株の名前じゃないかな。発見者の名前と、発見された順番が書いてある。エリック教授もアレクシス助手も今回の研究の共同研究者だ」

研究に携わった研究者の名前を思い浮かべながら、ファルマは何とか解釈した。

「え！？ 菌に名前をつけてるの？」

発見者の名前と、発見された順番が書いてある。

別添付の説明の手紙を見ると、やはりキヤスパイ教授、そしてほかの発見者たちの命名した菌株の名前だった。

「面白い名前の付け方ね」

愛嬌のある教授たちだ、とエレンは笑う。

「うん、まあ発明品、発見したものに名前をつけたい気持ちは分かるよ」

（命名法はそのうち統一すればいいか、せめて属名を追加してくれ、キヤスパイ属でもいいから）

キヤスパイ教授たちが張り切って名前を付けたのだから、ファルマはひとまず黙認することにした。

発見者の名前を付けるのは、名誉であり特権だ。それに、こうでなければならぬということもない。ここは異世界なのだから、地球の流儀に従う道理もないのだ。

かくいうファルマも前世で、彼の名前のついたいくつかの新規抗生物質の菌株（薬谷株シリーズ）を持っている、彼は命名法に従って名前をつけていたが、キヤスパイ教授のことは言えないし、嬉しい気持ちもわかる。

「確かにね。この菌って特別なんでしょう？　きっとその菌を見つけて出して増やすのに大変苦労されたのでしょうかね」

エレンがそう言って、キヤスパー教授への賛辞を述べる。

「キヤスパー教授たちのしたことは大偉業だよ」

「ちなみに放線菌ってどこにいるものなの？」

「待ってて」

ファルマはいたずらっぽく笑うと、馬車を止めさせ外に降り、そのまま迷いなく道端へと向かう。

「なに？　トイレ？」

あらどうしよう、とエレンが顔を背けようとする、ファルマは靴でざつざつと地表面を除き、身をかがめてひと掬いの土を掴みを拾ってきて馬車の中のエレンに見せる。

土くれを見せ付けられたエレンは、まさか……と身構える。

「ほら、いるよ」

「え、この中にもいるかもしれない？　放線菌が？」

「いるかも、なんてものじゃないよ。うっじゃうじゃいるよ」

ファルマは土を掴んだ手をわきわきとやった。エレンは背中がむず痒くなったようだった。

「ひいー！　よく持っていてられるわね、ファルマ君！　気色悪くない？」

エレンは気持ち悪くならしく、ぶるつと身震いする。ファルマは土を捨て、神術の生成水で手をよく洗って馬車に戻ってきた。馬車は走り出す。

馬車の内部では、ロッテが気持ちよさそうによだれを垂らして寝入っていた。お約束なことに「ファルマさまったら、私もう食べられませんかようにやむにやむ」と言っては「やっぱり少しだけむにや」という寝言を繰り返していた。

もうそっとしておくのがよいだろう。

「いやまあ、土ってそういうもんだ、多くの細菌やカビ、微生物がどこにでも住んでいるんだよ。というか、俺たちの皮膚にだって数えきれないほど細菌がついているからな」

ちなみに、そういった微生物の働きがあつて、土壌には浄化作用があるんだ、とファルマは説明する。

「でも、キャスパ教授が選別した株は特別優秀な精鋭たちだ」

キャスパ教授たちは、その菌の有効成分の抽出物が薬となって、実際に患者に投薬されるのを楽しみにしていた。

キャスパ教授たちが発見したのは以下の3種だ。

”キャスパーちゃん1番” / Caspar, No.1  
地球の学名はストレプトマイセス・グリセウス (Streptomyces griseus)。

ストレプトマイシン (streptomycin) 生産菌候補。  
∴ 抗結核薬。結核、らい (ハンセン) 病、ペスト等に有効

”エリックくん2番” / Eric, No.2  
地球での学名はストレプトマイセス・メディテツラネイ (Streptomyces mediterranei)

リファマイシン (rifamycin) 生産菌候補。  
∴ 半合成してリファンピシンにすると結核、ハンセン病等に有効

”アレクシスくん3番” / Alexis, No.3  
地球での学名はストレプトマイセス・ペウセティウス (Streptomyces peucetius)

ドキシルビシン (doxorubicin) 生成菌候補

∴ 抗腫瘍剤 (悪性リンパ腫、肺がん、消化器がん、乳がん、膀胱腫瘍、骨肉腫など幅広く効く)

キャスパー教授らは正確な薬の効果を知らないだろうが、ファルマには分かる。

「凄い効能ね。白死病に黒死病にらい病、癌までが治るなんて嘘みたい」

「嘘じゃないんだよ。放線菌にはその力があるんだ」

「ファルマ君がキャスパー教授、どうやってその菌がその薬を作るってわかったの？　そしてこの3種に絞り込んだの？」

「どうやって同定（その薬剤だとわかる）したのかというと、ファルマが複雑な分析をしたわけではない。

彼のチート能力の一つである拡大視では、化合物の構造までは見えない。

そこでただ単純に、消去の能力を使った。

消去能力を逆手に取れば、薬剤の判別にも使える。

ファルマが心当たりのある抗生物質の名前を片っ端から唱えていて、薬が消えたものがそれだ。この同定方法は正確極まりなかった。

だがファルマはこれで満足することなく、現地の人々のために、他の検査方法を考えなければ、とも考えていた。

「何でなの？」

「え？　あ、それはまだ秘密。その時が来たら教えるから」

エレンの素朴な疑問に、ファルマは答えを用意していなかった。

「何よーこんなところだけ水臭いじゃないのー、どういことなのよー」

「はは、ごめん」

笑ってごまかすしかなかった。

「もう……、じゃあ、またその時つてのが来たら教えてね」

「まあとにかく、キャスパー教授と薬学校の研究者の皆、短期間で

よくこれだけ見つけたと思うよ、本当に。抗菌剤が2つに、抗がん剤が1つだ！」

ファルマは仕切り直して感心する。

ファルマとキャスパー教授が陣頭指揮を執ったとはいえ、短期間で立派に有用な抗生物質が3つも見つかったのだから。キャスパー教授個人で研究をしていたら、10年単位で必要だったことだろう。

（これで、たとえ俺が消えていなくなっても、この世界の人たちだけでかなりの病氣と闘えるようになったぞ）

ファルマは嬉しくてたまらない。彼の仕事も一つずつ減ってゆくだろう。

だがこれで喜んでいてはいけない。

大量生産ができるようにもっていかないと！ とファルマは気を引き締める。

「大学の総力を挙げて、一致団結して一つの研究に大量の研究者が投入されたっていうんだからすごいわよね」

こんなのって前代未聞よ、とエレンは呻る。

研究者の殆どが、自分の研究を中断して参加していたという。これもありえない。

だが、さながら宝探しの様相を呈していた。

第一発見者となれば、名前がつくのだ。その名誉に目がくらんだのだろう。

「薬に自分の名前がつくって、憧れちゃうわー」

エレンはうつとりとする。サン・フルーヴ帝国薬学校の意地にかけて、というブリュノの本気を見た思いだ。その他の抗生物質を生ずる菌もじゃんじゃん発見すべく、サン・フルーヴ帝国薬学校での一大プロジェクトは継続中だ。あのノバルト医薬大も、帝国薬学校の動向を注視しているという。

「探せばいいよ、” エレンちゃん4番菌”を。やりかたは教えてあげるから」

ファルマは真面目な顔をしてエレンに勧める。

「菌じゃないものを探すわ」

菌が気持ち悪くて苦手なエレンは、両手を振って即却下だった。

「エレンらしいな」

そんなこんなしつつ、異世界薬局の職員たちは一日がかりでマーセイル領へと出張し完成したばかりの工場を視察した。

その名も、「異世界薬局マーセイル工場」という、そのまんまなネーミングである。

工場の前の門をくぐると、ファルマ、エレン、ロッテ、セドリツクを、工場建設を一任された代行領主アダムが直立不動で出迎えた。

「ファルマ様。長旅、御苦労さまでございます」

「色々な手配をありがとう、アダムさん」

ファルマは薬神杖で帝都とマーセイルを行き来して工場の完成を見ていたのだが、他の職員たちにとっては初めてのお披露目だ。

広大な敷地面積を誇る、石造りの工場が彼らの目の前に威風堂々とした趣で広がる。

「わーっ！ この工場、すごく広いです！」

ロッテは、工場の端から端まで、工場を一周走ってみたいと言い出して、バテてしまうぞとセドリツクに止められる。工場一周は3キロはあるだろうからそのよそいきの靴じゃだめだ、とファルマもお勧めできない。

「ちよつとした宮殿みたい、すごいわ！ ファルマ君の屋敷より広いわよ？」

エレンも感嘆の声をあげた。

ド・メディシス家の敷地より広いというのは、かなりのものだった。

いったい世界中のどこで、官民一体となってこれほど大規模な生



産拠点を築き、患者のための薬を造ろうとしている薬局、薬店、薬屋があるだろう。そう言つて、ここまできるとエレンはファルマの偉業を素直に称賛する。

「立派なものでございますな」

セドリックも感動していた。

外観も、彼がこれまで見たこともない巨大な施設だ。

製薬工場の前庭から、工場の玄関に入った。

「ぶーっ！」

先頭だったファルマは、玄関に入るなり噴き出した。

ホテルのエントランスホールと見まがう開放的なスペースには、創業者ファルマ・ド・メデイシスの等身大の銅像が！

「何ですかこれ！ 何日か前までなかったのに！」

必死に抗議するファルマに、エレンとロッテはくすくすと笑う。

「ああ、エスターク村からの寄贈でございます。先日完成いたしました。喜んでいただければと、運ばせました」

領主代行アダムがすましてこたえる。

エスターク村から「これで工場の創業者の銅像を」と金貨の寄付があつたので、アダムが創らせたという。

「やっぱりエスターク村か！」

彼らのことだからやりかねないか、とファルマは諦める。

「ファルマ様、銅像の横に並んでみてください」

ロッテに言われて、ファルマは横にたつ。銅像はかなり美化されていた。銅像は白衣の裾がたなびいて、腕組みをしながら遠くを見ている。

ファルマも銅像を参考に同じポーズをした。顔もつくる。

「どう？」

渋い顔をしながら、ファルマは3人に尋ねた。

「銅像の方が美形だね」

エレンとロッテが笑って顔を見合わせ、セドリックはにこにこ  
ほほ笑んでいる。創業者はたじたじだった。

「余計なお世話だって！」

「ここでは不都合があるようでしたら、銅像は工場の庭に運びま  
しようか」

アダムは気を回す。しかし、自分の銅像が庭で雨ざらしというの  
も、我がことながらなんだか可哀想になってくるのであるファルマ  
であつた。

「ここでいいです」

冗談はほどほどに、工場見学にうつる。

石造りの製薬工場の内部は、工程ごとに部屋がわかれ、塵ひとつ  
なくすように徹底的に清掃と清潔が保たれていた。そのうえ、ファ  
ルマが事前に疫滅聖域をかけたので更に清浄度は上がっている。今  
後は放線菌を持ち込んできたので、聖域を展開するときに、放線菌  
まで”殺菌”して殺してしまわないようにファルマは地味に気を使  
わなければならなかつた。

菌を子供のようにかわいがっている教授に怒られる。

電気系統はないものの、異世界薬局のささやかな研究設備、帝国  
薬学校と比べるとかなり近代化されている。放線菌の大量培養のた  
めにはいくつもの大型タンクとパイプラインから成る、医薬品製造  
プラントが必要だつた。パイロットプラントのテストについては、  
帝国薬学校で無害な菌種で試験を行った。今、職人と技術者を大量  
に雇い、5基のプラントを造らせている。これらのプラントが完成  
し本格稼働するには、まだ時間がかかるだろう。

敷地の中にある、製薬工場附属の研究室にやってきた一行。無菌  
室のある研究設備だ。

「キヤスパー教授の菌、見せて！」

手を洗い、手袋をつけ、クリーン服を着て無菌室の中に入ると、

エレンが興味津々だ。ロツテとセドリツクはよくわからないながらに着替えて見学だ。

「俺も見たい。開けてみようか」

アルコールで箱を拭き、ピンクリボンを解いて、キャスパー教授の子供たちの入った箱を開ける。

中から出てきたのは、6枚のシャーレだ。放線菌の種菌を植えたプレート。それから、抗生物質としてのテストプレート。細菌を全体的に塗りたくった寒天シャーレのど真ん中に、各種の放線菌が植えてある。

その放線菌を囲むように、他の菌の増殖していない円ができていた。

放線菌は抗生物質を産生してほかの細菌に対しては発育抑制をし、ほかの細菌が生育できない抗生物質産生領域、”発育阻止円”という円を展開する。

「なんかこの円、かつこいいわね」

エレンはその意味を理解して、頷く。

「だろ」

「この周り、どうしてモワモワが生えてないんですか？」

ロツテも疑問に思ったようだ。

エレンは放線菌に対する見方を変えたようだ。

それは放線菌の生存競争のために、進化の過程で獲得した能力だ。

「この円の周囲で、今まさに抗生物質を生産できているの？」

眼で見えてわかりやすいわね、とエレンは感心する。

「そういうこと」

はたから見れば、カビの生えた皿を覗き込む変な集団だろう。だがここは製薬工場の内部なので問題ない。

「放線菌さまさまね」

エレンが熱視線を送る。

「この菌を大量に増やし、そこから抗生物質を抽出、精製する」  
ファルマの後に、ロッテが言葉を繋いだ。

「すると、困っている皆さんのために、たくさんお薬が創れますね  
！」

テンションが上がってその場で飛び跳ねながらそう言うロッテの  
いう事は、まさにそのままだった。

（そう、これからたくさん薬を造るんだよ。俺のチートじゃなくて  
この世界の人の力で）

ファルマの気も引き締まる。

それは製薬技術を、この世界に根付かせるための最初の足掛かり  
であった。

### 3章6話 異世界薬局マーセイル工場の操業準備（後書き）

発育阻止円で画像検索すると面白いと思います。

### 3章7話 工場労働者と集合写真

「新規採用工場労働者200人うち199名、予定通り招集しております」

マーセイル領の工場を訪れていたファルマに、アダムが新規採用された工場労働者の名簿を見せた。一人は体調不良で来れなかった労働者だ。

労働者の内訳は8割が男性、2割が女性だという。

職別には、事務職、技術職、製造職だ。つまり一般の工場労働者だ。

生産管理職は、医薬知識がなければならぬので、帝都で採用しファルマが教育した一級薬師、もしくは帝国薬学校から人員を回すことになっている。

「ありがとう、よく集まったな」

「こんなに大量に一斉雇用する雇い主ってファルマ君ぐらいしかないわよ。普通は雇えないもの」

エレンがファルマの豪快さと財力に感心する。

「よくわからないですけど、ファルマ様ってすごいですねえ」

ファルマがやろうと決めたことには不可能なことは何もないのではないかと、ロッテは尊敬する。ロッテのリアクションは大きすぎ、彼女は本気なのだ。

「読み書き計算のできる健康な者ということでしたので、ご希望に沿うようにいたしました。いずれも優秀な労働者です。ワイン工場でのノウハウを持った技術者もいます」

アダムが名簿を見せながら説明する。

マーセイル領で募集をかけたところ、賃金がよいので応募が殺到

したようだ。アダムが適性試験を行い、厳しい目でかなり絞ったという。

「皆に挨拶に行くよ」

ざわざわとした大勢の人々の声の聞こえる、新規採用者たちの集まった真新しい講堂に、アダムはファルマらを案内した。講堂は小学校の体育館ほどの広さで、講習会や朝礼と終礼、会議などを行う場だ。

「創業者がいらつしゃいました」

そんな先づれとともにアダムが扉を開けると、講堂は静まり返った。

講堂の前方にはステージが備え付けられていたので、アダムはファルマとエレンを登壇させ、そして簡単な紹介をする。ロッテとセドリックは、薬師ではないので講堂の後ろで彼らを見守っている。

「こちらにいらつしゃいましたのは、異世界薬局店主にして宮廷薬師、本工場の創業者でもあるファルマ・ド・メデイス様、そして同薬局の一級薬師のエレオノール・ボヌフォア様でございます」

アダムの紹介に、エレンもファルマから少し距離を取って会釈をする。

「よろしく願います」

ファルマも彼らに会釈をした。

（ん？ 何だこの感じ）

ざわつとした、値踏みするような視線と空気をファルマは感じる。彼らはそれなりの教育を受けアダムの試験をパスした優秀な人材で、無知な労働者ではない。それなりにプライドも高いのだ。

子供じゃないか、という迂闊な一言が聞こえてきた。

アダムがきつとそちらをにらみつけるが、誰が言ったのかは分からない。

（まあ、子供だしな）

当然、強メンタルのファルマはどう言われようと全く気にしていない。

外見が子供なので、見くびられて当然だと思っている。

アダムは、子供とはいえ主人を蔑ろにされカチンときたのだろう、ごほんと仰々しく咳払いをして、

「なお、ファルマ様におかれましては来年より、帝国薬学校教授への就任が決まっております」

よい笑顔で、非礼な言葉の聞こえた方へ向けそう述べた。

アダムはどうやら煽り耐性が低かったようだ。

労働者たちはそれを聞いてしんと静まりかえり、口を閉ざした。

大学教授というのは、知識階級インテリの中でも最上級の名誉職だ。いくら尊爵の息子でも、裏金を積んだとしても業績と能力がなければ就任できるものではない。

形ばかりの凡くらでなく、薬学校も認める本物の天才少年だったのかという空気に変わる。

ファルマの資質を問う者は一人もいなくなった。

（皆、肩書きに弱いんだな）

「えーと、紹介に与りました、異世界薬局店主にして経営者のファルマです」

多少やりづらさを感じながら、ファルマが改めて挨拶をしようとする、

「薬神様！」

驚きを含んだ声が、ある一団から突然に上がった。

「うわーっ!？」

それを聞いたファルマは思わず悲鳴を上げる。声の上がった方を見ると、エスターク村の村民たちが採用されていた。誰か一人が気付いて騒ぎ、それで全員が気付いたようだ。



エスターク村を訪れた時、ファルマはマスクをしていたので容姿は隠していたが、声を発したのでバレてしまったのだ。

そのまま彼らは壇上まで押しかけてきて、ファルマを胴上げでもしそうな勢이었다。

「どうして皆さんエスターク村から出稼ぎに来たんですか!? 結構遠いですよここ!」

ファルマのやりづらはここに極まる。

「薬神様に黒死病を癒していただいたあの日以来、薬の重要さというものが身に染みてわかりまして、製薬を通して社会貢献をしたいと思った次第でございます」

村人の一人が鼻息を荒くしている。

村に黒死病が押し寄せたことにより、公衆衛生に対する意識改革になつたらしい。

とはいえ、エスターク村は漁業の村なので、出稼ぎに来すぎて主力産業である漁業が寂れないようにしてほしい、と思うファルマである。

「いやあ、まさか再び薬神様に会えるとは! 握手してください!」

「バカ、握手なんて恐れ多い!」

「奇遇だなあ。あの、黒死病の薬もこの工場でおつくりになるご予定で?」

彼らは壇の前に集まってやあやあ言いながら大声でファルマの功績を吹聴しはじめたので、マーセイル港周辺の村人たちも、何だ、何だとざわつき始めた。

「いや、ちょ、やめてください。まず挨拶をさせてください、そういうのは後で」

エスターク村の連中の熱気にあてられたじたじになるファルマを、エレンが生温かい笑顔で微笑ましそうに見ている。セドリックは穏

やかに微笑み、ロツテは相変わらず意味が分からず、会話も部分的にしか聞こえなくて、指をくわえて眺めていた。

「わがエスターク村にお越しく下さい、急ぎ黄金の神像を造りました。気に入っていただけるかと」

満面の笑みで誘う彼らにファルマは、

（それ、もう見ました）

とは言い出せなかった。

「おい、エスターク村の連中。薬神ってどういうことなんだ？  
何で店主をそう呼んでいるんだ？ 何かの渾名か？」

事情を知らない地元労働者が話題についていきたそうに尋ねる。

「いやあ、聞いてくださいよ。実はですね！」

「こうこうこうでして！」

そして彼らエスターク村の面々により、一瞬にしてファルマの素性がばらされてしまったのである。人の口に戸は立てられないというのは本当だ、とファルマは頭が痛くなった。

「というわけでして、黒死病から救っていただいたんですよ」

「見てくださいこのグッズを！ いいでしょう」

エスターク村の人々は、グッズとやらをファルマに見せる。金の神像がミニチュアとなってキャラクター化して、全員がそれを持っていた。

「なんですかそれ！」

おひとつどうぞ、とチャームをつかんだ手をファルマに向けて一生懸命伸ばす者も。

「薬神さまチャームです。これが、売れに売れまして」

村民たちはお守りとしてたくさん神像のチャームを作ってバッグにつけたり、ネックレスにしていたりした。ファルマは顎が外れそうになった。どうみても大量生産をはじめているようだ。

「お願いしますからやめてくださいさういふの！」

エスターク村は薬神伝説で村おこしをはじめたようだ。

「やかましいぞ！ 番号順に整列ーっ！」

ぐだぐだになってきたところでアダムが彼らをもとのように並ばせて、仕切り直した。

「私はただの経営者で、私が薬神などというのはまったくの勘違いですので、誤解のないようにお願いします」

面倒になるので、最初ぐらいはつきり否定しておこう、とファルマは思う。

うやむやにしているから尾ひれはひれがついて大変なことになるのだ。エスターク村の村民は納得しなかったが。

ファルマは気を取り直して挨拶をし、企業理念を述べ、長ったらしい訓示を述べる。ファルマの挨拶は薬学への熱意に溢れ、丁寧すぎるほど丁寧で、一切端折らないので長かった。野外での夏場の挨拶だったら、一人や二人倒れる労働者が出ただろう。小学校の校長に向かない人材ランキングがあるとすれば、かなりの上位に食い込むに違いない、そんなことを前世では学生たちに囁かれたほどだ。

「というわけで、異世界薬局は、創薬を通じて世界の人々の生命を守ります」

話が長かったのだろう、エレンも目をこすっていた。

それを見たファルマは欠伸や居眠りをしはじめた不届きな労働者たちの目をさますために、

「元気ですかーっ！」

と、大声で叫んでみた。

はい、という威勢の良い声が労働者たちから返ってきた。

「では、健康ですかーっ!？」

はい、と先ほどと同じだけの声が上がった。

「私は健康です！」

ファルマは手を胸にあてて断言した。

「ではあなたがたに聞きます。自分が健康だと思う人は、手を挙げてください」

一本調子の返事で、相変わらず全員が勢いよく手を上げた。

「よろしい！ わかりました！」

ファルマは約200人の労働者全員を見渡した。診眼を発動しながらだ。労働者はみな、職員番号と名前の書かれた名札をつけている。

ファルマは彼らをじつと見渡すと、おもむろに壇上の掲示板に貼られた大判紙に、怒涛の勢いで番号を書きつけはじめた。

「何の番号だ？」

「ゲームかな」

「成績優秀者かもしれないぞ」

「監督者候補かも。昇給もありか？」

労働者たちは互いに首をかしげながら、思い思いの楽観的な妄想を広げる。ファルマは番号を書き終えると、掲示板を背負うようにして立った。

「はい、ではここに番号のある人は前に出てきてください」

労働者たちは社員番号と黒板の番号を見比べ、適合したものは前に出される。

「ひっ、落ちた！」

「合格だ！」

受験生の合格発表じゃないんだから、とファルマは内心つつこむ。

「今、前に出てもらった人が、健康な体を持った人です」

「えっ!？」

彼らはどよめく。前に出てきたのは、わずか3割弱だった。

ファルマに言わせると、大多数が健康ではない、ということになる。労働者はみな、大なり小なりの健康問題を抱えていた。小さいところは虫歯から、生活習慣病までだ。

前に出られなかった労働者たちは青ざめた。

「そんなバカな、俺は健康です!　どこも悪いところなんてありません!」

勢い余って抗議した男を、ファルマは冷静に見下ろす。

「あなたは肝炎ですね、肝臓が炎症を起こしています」

ぴしゃりと、ファルマは残酷な事実を伝える。

肝臓は沈黙の臓器。病状の進行に気付かないのだ。

「肝臓って何ですか？」

男は尋ねた。労働者に基本的な解剖学、生理学、薬学などの知識をざっとでも教えるところから始めないといけないのか、とファルマは今後の課題を思い知る。男に肝炎というものが何なのかを丁寧に説明した後、

「このように、たとえ自分で健康だと思っても、病は知らぬ間に忍び寄ってくるものです。ですから、自分の体の状態を知り、健康になろうとする努力を日々怠らないください。そのうえで、患者さんを救うお薬を私と一緒に創るうではありませんか」

ファルマは挨拶を締めくくった。

早速操業開始までに、全員が健康になっておくことが宿題となった。

「それはそれとして」

どんよりムードになってしまったところで、彼らの気分を変える。全員講堂の外に出てください、とファルマが言つので、彼らは職員番号順に外へと出る。

「いい天気ですね、リラックスしててください」

ファルマは彼らに声をかけ、馬車に戻り、アダムと共に荷物を抱えて戻ってくる。

彼が屋敷でこしらえて、用意してきていた木箱を取り出した。

「ファルマ君それなに？」

「これは写真機（Camera）だよ」

「なにそれ？」

エレンはもう一度同じことを尋ねた。

「この世界の風景を紙に写し取る方法だ」

ファルマはエレンとロッテ、セドリックに小さな紙を見せた。お試し用に撮ったファルマの自分撮りのセルフポートレートだ。窓際で満面の笑みである。白黒写真だった。

「これ、絵ですか？」

白黒とはいえ、何てうまい画家なんだとロッテがくいつく。そしてそれに筆のあとがないことに驚く。

「絵じゃないよ、写真だ」

「って？」

ファルマは写真の原理を手短に説明する。

彼が採用したのはピンホールカメラ。完全に光の入らない箱に針穴をあけ、黒く中を塗りつぶした箱の中に、ガラスの写真乾板をセツトする。写真乾板には、ガラスに臭化カリウムや硝酸銀などを含む感光材料をゼラチンと混ぜたものを塗ってある。

「もー、そういうの作ってたならどうして私たちを撮ってくれなかったのよー」

エレンが冗談交じりにファルマに尋ねる。

「いや、その。うまくいくか分からなかったし、今日はいい具合の日射量だから、きれいな写真が撮れるんじゃないかと思って。というわけで、写真を撮ろう。ここがいいな」

工場の正面から、工場の全景が見える場所をファルマは選んだ。場所が定まると、様々な場所の距離を測って三脚スタンドに木箱を取り付ける。ファルマは約200人の工場労働者を40人ずつ5グループに分けた。何をするのかと労働者たちが不審に思っている、第一グループから10人ずつ4列に並ばされる。

「前列は地べたに座って。中2列は中腰、後列は立ったままをお願いします」

ファルマは木箱のあたりに立って、全体を眺めながら彼らに指示を出す。

日照から露光時間を概算する。ピンホールは露光量が少ないが、写真乾板は感光がよいので、露光時間は数秒でいい。

「今から、それぞれのグループの集合写真を撮ります。この箱を見て、指定された秒数動かないでください」

動くなと言われたものだから、彼らの顔はひきつる。

露光と撮影はアダムに任せて、ファルマ、エレン、ロッテとセドリックが画面中央におさまった。

「皆、笑顔で」

多少不自然な写り方になったが、それでも写真は撮れた。写真乾板をたくさん用意していないので、二枚ずつ。動いたとしてもやり直しはなしだ。

それらしく、集合写真が撮影できた。彼らは全てのグループを無事に撮影し終えた。

「ありがとうございました。ではこれで解散です」

ファルマは謄写機でコピーした異世界薬局版の養生訓を、アダムに配布してもらう。

「その資料をよく読んでおいてください」

病気と診断された人々は後ほど改めて診察と治療をするので、アダムからの呼び出しと指示を待つように、と言って解散した。

労働者はアダムから新しい職員証を受け取ると、三々五々、家に帰ってゆく。

エスターク村の村民に囲まれたりしながら写真を片付けるファルマを、ロッテとセドリックが手伝う。

「さっき撮れたのを見せて！　どんな風に映っているのかしら」

エレンはファルマに尋ねる。

「楽しみですね！」

ロッテはわくわくしている。木箱相手におすましのポーズをして映ったのだから、どんな状態になっているのか、誰もが気になるようだった。

「まだみえないよ、現像しないと」

これからの作業工程を指折り説明するファルマに、エレンはげんなりする。

「ファルマ君、そのゲンゾーという作業に加えて大量に労働者の診察なんてして。あなたまた仕事が増えたじゃない、大丈夫なの？」

エレンが苦笑しつつ、どうしていつもこうなっちゃうのかしらねえ、と嘆く。

「労働者の健康管理は必要なことだよ、工場労働者が感染症にかかっていると工場の製品ごとやられてしまうからね。それに、従業員の写真を撮っておかないと、不審者が入ってきたときにだれがうちの労働者か分からないだろう」

「そんなの、身分証明を発行すればよいのだわ」

「写真つきのね」

ファルマは集合写真を一枚ずつ切り取って、写真つき身分証を発行するようだった。工場では、毒物も可燃物も多く扱う。不審者の侵入を許すわけにはいかない。セキュリティは徹底しておかなければならなかった。



ファルマたちがそんなやり取りをしていると、

「お久しぶりでございます、薬神様」

どこかで聞いたことのある声がファルマの耳を打った。

火属性の女神官キアラだ。彼女は、エスターク村を出て帝都を目指していたときに馬に載せてくれ、ファルマに食料をめぐんでくれた神官だった。

「あつ、キアラさん。そのせつは、お世話になりました」

「いつ、いえ、とんでもない」

ファルマがぺこりと頭を下げると、キアラはコメツキバッタのようにつまみこみ頭を下げた。

「こんなところでお会いするとは。あなたは神官なのでは」

ファルマは再会を嬉しく思うと同時に、彼女が神官をクビになったのでは、などと余計な心配をする。

「私もエスターク村の人々と同じく、製薬工場で修行をしたいと思って労働者に応募しました。あつ、修行と勉強になりますのでお給料はいらないです、ご奉仕させていただきます」

キアラは医療神官で、もともと施療院で慈善奉仕をしているものだ。

医療神官といっても治癒能力の特殊技能があつたりするわけではないが、看護職といってよかった。神殿の許可を取つての修行なので、クビになつたわけではないという。

「修行ですか！」

「あら、ファルマ君の知り合い？」

エレンが口を挟んだ。

キアラが畏まりすぎているので、エレンは不思議そうだ。

「あ、キアラさんて火属性の神官さんですね」

「さようございます」

キアラはすつと胸に手をあててひかえる。

「ほかにも医療神官さんって来てます？」

全属性の医療神官が修行に来ているという。

「それはよかった！ 神技で手伝ってほしいことがあるんですけど」  
ファルマは閃いた。  
神術使いがいれば、かなり製薬の工程が捗り、コストも節約できそうだと。

火の神術使いは原薬の加熱や滅菌処理をすることもできるだろうし、風の神術使いは薬の乾燥を担当したり、水の神術使いが水を冷却しパイプに通すことによって冷却したり、氷の神術で製品を低温で保管することもできるだろう。ファルマはこれまで製薬工程に神術を使うという発想がなかったのだが、考えてもみれば神術のある世界だ。

それらは電力のない前近代的な工場の欠点を補うことができる。

「はいっ、ぜひお手伝いさせていただきます」  
キアラは嬉しそうだった。

「よろしくお願いいたします。シフト制にできるように神術使いの雇用枠を拡大しましょう」

数日後、異世界薬局マーセイル工場の玄関には、職員全員が映った白黒の大集合写真が額に入れられて掲示され、

工場労働者たちは自分の写真の入った身分証を受け取り、家族に大自慢したという。

「写真って楽しいですね、エレオノール様！」  
「現像してみるまでわからないっていうのが、わくわくするわよね」  
「ファルマ君ももっと撮ったらいいのに。せっかく美少年なんだから」

「俺、写真苦手なんだよ」

「えー、発明者なのに!？」

エレンとロツテはカメラがいたく気に入り、ポーズを変え場所を変え撮影しあい、大量の写真を撮った。セドリックは毎日のように撮影に付き合わされたからか、かなり写真撮影の腕が向上したという。しかし撮ったはいいものの、現像が間に合わない。ファルマに現像の手間をかけさせるわけにはいかないと考えたのか、彼らは現像技術を習得し、せっせとプリントをはじめたのだ。

いつの時代も、女子は自撮り写真が好きなんだな、とファルマは感心する。

「世界初の写真集ができるんじゃないか」

もう謄写板と組み合わせ、写真雑誌にして売れば買う人もいるんじゃないかな。二人の写真のあまりの溜まりっぷりに、そんな冗談とともに笑いながらファルマが提案すると、

「その前に、陛下の写真集じゃないの？」

エレンの言葉に、ファルマは青くなった。

「あっ」

「忘れてたの？ 恐れ多くも陛下より先に写真集を出す、なんてありえないわ」

「陛下のことは忘れてないって!」

マーセイルから戻ったら忘れずにカメラを女帝に献上しなければ、と肝に銘じるファルマであった。

### 3章8話 薬神の悩み相談と、薬神伝説

マーセイル領から戻ってきたファルマは、製薬工場の従業員の診断と投薬にも精を出していた。

彼は処方と経過観察、そして工場の内部のプラントの施工状況を確認するため薬神杖でマーセイルと帝都を往復している。

そして、忘れずに女帝にカメラと写真を献上した。

宮廷では、ファルマは宮廷薬師というより発明家のポジションにおさまってきたようだ。

女帝は写真をいたく気に入って、家族写真やグラビアのようなものを何枚も廷臣に撮らせていたので、写真集が発売されるのも本当に時間の問題かもしれない。

女帝監修の皇子ルイのフォトブックができそうだというのは、ファルマも耳にしたところだ。

案外、女帝はカメラ女子になるかもしれない。そんな暢気なことを考えた彼であるが、彼女はただのカメラ女子ではなかった。

帝都の街並みを記録させはじめたのだ。

そういえば、写真が発明されてすぐ、地球の歴史でもフランスの街並みを記録させはじめたという。

ロツテの話だと、写真の発明によって宮廷工房では肖像画家たちがお役御免になるのではないかと、戦々恐々としているそうだ。当然ながら、写真を発明したファルマに恨みの矛先が向けられ始めているという。女帝の手前もあり、大っぴらな態度にはできないようだが。

（やらかしてしまっただかなあ……画家には悪かったな）

女帝への献上が義務化しているので、彼が個人的な目的で行った発明は、すぐに帝都の中枢部を揺るがしてしまう。多少想像できたことではあったので、ファルマは肖像画家たちには申し訳ないこと

をしたと思う。それでも、写真が登場したことにより、地球史では印象派やポスト印象派、キュビズムなどが出てきたので、こちらの世界の画壇でも何らかの変化は生じるだろう。

写真によって生じる利害のうち、利はかなり大きいはずだ。

となると緑内障の宮廷画家ダレのシュルレアリスムの画法や、ロッセのオールヌーボー的画風がさらに見直され評価を受けるわけで、独自性の高く写実的でない画法を研究に取り掛かる肖像画家もちらほら出始めるかもしれない。というのは、ロッセの話の中でファルマが今後を予測したことだ。

技術史の変遷とともに、芸術も移り変わるのだ。だが、わずか2年あまりで、というのはいささか急すぎたかもしれない。

（カラー写真の再現はしばらくやめとこう）

ひよっとすると、写真を着色する画家も出てくるかもしれないし、余計な恨みを買って刺されたりしたくはないものである。

… … … … …

少し手がすいて休日がとれたので、ファルマはその日、一人で出かける支度をしていた。

「ファルマ様、こんな早くにどこに行かれるんです？」

「いや、ちよつとね」

ロッセは早起きなので、身支度もきちんとして召使の服を着てエプロンをしている。彼女は相変わらず、仕事をファルマが減らしたとはいえド・メディシス家の召使をやっていて、ファルマとブランシュのお世話係をしていた。「おはようございます」とファルマを起こして着替えを持ってくるのがロッセなので、朝いちばんに出

ようとしても、ロツテを出し抜くことは難しい。一人で身支度ぐら  
いできるし、と思えど、そういうわけにはいかないのが上流貴族だ  
った。

ロツテにブーツを磨いてもらい、コートを着せてもらいながら、  
ファルマは何とか彼らをまく方法を考えていた。ロツテは手を抜か  
ず身支度をしてくれる。ほかの使用人に任せるより、ロツテの仕事  
は丁寧だった。

「あにうえー、ブランシュもつれてってー」

まだパジャマで出てきたブランシュは、大胆に寝癖がついたまま  
人形を抱きしめている。

「ブランシュ様、少々お待ちくださいね。今お着換えをお持ちしま  
す。そのあと、朝食にしましょう。お嬢様のお好きなラッシーも  
出しますよ」

ロツテがブランシュに微笑みかけた。

「あい」

ブランシュは眠たいのか、こくと頷いたまま目がとろんとして  
いる。

「ねーあにうえ、どこにいくの？」

ブランシュはファルマが行先を告げないので行先を知りたがる。

「ちよつと散歩！ 昼までには帰るから」

「いやー！ ブランシュも行くー！」

「ばいばい、二人とも！」

「行つてらっしゃいませ。お気をつけて」

ロツテは玄関口まで出てきてお辞儀をする。

何とか二人を振り切った。早朝の帝都に、愛馬を走らせる。目的  
地はサン・フルーヴ帝都の守護神殿だ。

神官長は毎日のように薬局に来るし、神官に見つかるちょつと  
した騒ぎになるので、彼が自発的に神殿に通うことはあまりなかつ  
たのだが、今日は日ごろの悩みを相談しようと考えてきたのだ。

その悩みはというと、

（どこ方面からも薬神薬神言われすぎでキツイ）

という切実なものだ。

ファルマは数々の特殊能力は備わっているものの、彼は「薬神」ではないと考えていた。

しかしこのところ、確かに脇が甘かったような気もするが、ほぼ全方位から薬神扱いされて辛さも募る。

ロッテとブランシュと母ぐらいだ。彼を人間扱いしてくれるのはだから、彼は彼女らと接するのが一番気兼ねがなかった。

女帝やエレンは事情を知ったうえでファルマのことを理解してくれているので、数少ない理解者という、これまた大切な存在なのだが。

であるからには、薬神ではないと否定できる材料がほしかったし、もし本物の薬神だというのなら、それなりの心構えがいる。中途半端な状態が一番モヤモヤするのだ。

守護神殿は、帝都の中央部、女帝の宮殿にほど近い場所にある。

「おはようございますー」

「はああっ！ ファルマ様ではないですか、よくぞいらっしゃいました」

神官長サロモンは、午前中の祭儀を前に祭壇や祭具を整えていたところだったが、何もかも放ってわたわたとファルマを出迎えに来る。ファルマの来訪を受けた神官たちはソワソワしはじめ、ことのほか嬉しそうだ。その過剰な崇拜も、多少鬱陶しいというか悩ましい理由だ。

「今日は神官長さんにお話を聞きたくて」

ファルマが神殿に入ると、相変わらず神殿の床が青白く光る。

（やっぱりづらいな、神殿は……）

別室に通され、神官長自ら茶と菓子を出された。

「あの、おかまいなく」

黙っていたら「供物」がどんどん出てくるのではないかと、ファルマはストップをかける。

「で、今日は何のお話で」

「折り入って薬神の伝承について聞きにきたんですけど」

「それを御身がご存じないというのも妙な話ですが」

サロモンは、むしろあなたのほうが詳しいでしょう、と目をしばたかせた。

「いやあの、俺はそういうのじゃないんです」

とはいっても、状況証拠は揃いつつある。

人間には使えないという薬神杖を使い、数々のチート能力を持ち、おまけに影がない。

でも、ファルマは薬神になるという天啓を聞いた覚えもなければ、それという自覚もさっぱりない。

「ご自身がそうだと、認めたくないということですか。私と初めてお会いした時には、”祟るぞ”と脅されましたので、ご自覚があるのかと思いましたが」

神官長は穏やかに笑った。

「あれは勢いとその場の雰囲気です。はったりというやつです」

ファルマは過去の黒歴史をほじくり返され、恥ずかしくなった。

「さようでございましたか」

神官長は納得する。

「伝承では薬神ってどんな神だったんです？　まず、薬神には影がなかったんですか？」

「守護神は光そのものだ」と聖典に記述がありますので、必然的に影がないという解釈です」

「なるほど」

（直接的にそう書いてあったわけじゃないのか）

神官長はどっこいしょ、別室から分厚い聖典を運んできて、ファルマの目の前に置いた。華美な装飾の施された聖典は辞書ほどの分



厚さがあり、筆写本であり原典ではないという。

神官長は薬神について書かれている聖典の一部分を要約した。

薬神は突然、流行病の前の年にあらわれた。

少女の姿を借りた神は「薬神だ」と名乗り、流行り病をたちこるにせずめ、人々の病を診て病める者にふさわしい薬を与えたという。

右手に雷の形をした完全な聖紋を持ち、薬神杖で空を飛んだのだそう。

薬神は不死身で、物質をすり抜ける神体を持っていた。

天と地を往き来する力があり、聖なる泉の力を使って時々天界に帰った。

薬神は段々と地上に戻ってこなくなり、ある時、天界に戻ったとき帰ってこなかった。

薬神が現れた期間は約一年間、一度きりだったそう。

そして、薬神杖だけが秘宝として残っている。

「そういう話だったんですか……ありがとうございます」

（転生してもう、一年は過ぎてる）

とりあえずのところ、ファルマが消える気配はない。それが、なによりありがたいことだ。

「薬神は何歳ぐらいでした？」

聖紋が出たのが10歳なのではないか、と女帝の話を聞いたファルマは疑う。

「そこまではわかりません、少女としか伝わっておりません」

結局、薬神というものがその少女に何かが憑依したものだっただか、もともと少女神だったものが地上に降りたのかまではわからなかった。

（うーむ……世界的な流行病が蔓延するかもしれない少し前に転生した俺の状況は、途中まで一言一句伝承のまんまだな。不死身なの

かは分からないけど)

ファルマの能力と聖紋を見た者が、ファルマを薬神認定してしまう理由もなんとなく理解できた。

というか、結構前からかなりの一致をみていたので、言い逃れができない。

(俺が不死身なのかどうかはさておき、俺には”天界”に行く方法なんてわからないぞ?)

もしかして、その”天界”というのが地球だったりしないだろうか、という希望も働いた。

(地球から来た神憑きは、地球に帰ってしまったんじゃない?)

そうであれば、ファルマ自身も地球に戻るのではないかと考えてしまう。

「あ、そうだ。そういえば薬神のほかの神も、頻繁に地上に来るんです?」

(ほかの神憑きにも相談してみたいよな。もしかしたら、中身地球人かもしれないし)

「あなたが降りておられる時は、ほかの神は降りませんよ」

「そうなんですか!」

ファルマはがつくりきた。

それぞれの守護神は、一柱ずつ地上に降りるのだそうだ。薬神が降りている間はほかの神は降りない。数百年前までは、入れかわり立ち代わり頻繁に降りていたそうだが、最近はめっきりと降りなくなっただけという。神憑きは、消える前に秘宝を残して地上を去る。それで多くの秘宝が地上には残されて、それらは総じて人間には触れられず使えないので、聖遺物となっているだけのようだ。

「なので、今、この世界に降りているのはファルマ様、つまり薬神だけです。ファルマ様が地上においでになっていただけでも感激ですし、こう何というか、あなたはとても人間味があると申しますか、普通に暮らしておられる姿を拝見できるだけでも奇跡です」

サロモンの評価でいうと、ファルマは人間くさい神、ということになっているらしい。

「俺のこと、観察しているんですか？」

「それはもう、あなたがこの世界で成したすべてのことは、その時代の神官が記録してゆく義務があります。そうやって、聖典は新たなページを増やしてゆくのです」

ファルマの業績の記録。それも、神官としてのサロモンの仕事らしい。

「それに、神様にこう言うのも変ですが、あなたはお人柄がいい」  
サロモンいわく、地上に降りてくる神が必ずしもよい神だとは限らないようで、中には一国を焦土に変えたり、人々を虐殺した邪神もいたという。それを思えば、益神の降臨は大歓迎といったところだ、と神官長は言う。

「もし俺がそうだったとして、薬神の仕事って何だと思います？」

「あなたがまさに、今なさっていることではないでしょうか。数々の薬を創り出し、人々を癒すことです」

サロモンは、ファルマが”薬神としての仕事”をしているのだと勘違いしているらしい。

「仕事だと思っでしているわけではないです」

「つまり……病氣の人を見ると放っておけないからそうしているというわけですか。ふむ」

神官長はようやく、ファルマの葛藤を少し理解したようだった。

「ともかく、あなたが肩身の狭い思いをせず、できるだけ長く現世にとどまっていたきたいのです」

「俺だってもう死にたくない、この世界で健康に長生きしたいです」  
それはファルマの心からの叫びだった。

「それが辛いのであれば、薬神だと言われて気負わなくてもよいのではないかと思います。そう呼ばれても、あだ名ぐらいに思っていれば」

「俺の気の持ちよう、ということですか」

かつて地球上でヒポクラテスが医聖などと呼ばれたように、そういう二つ名だと思っていればいい、と神官長は言っているようだった。

「あだ名かあ」

それは、ファルマの心をすつと一つ楽にした。

「なんだか肩の荷が下りたような気がします」

「あなたのお心に沿うように帝都神殿ははからいますし、お悩みがあればいつでも神殿へ」

神殿は本来、悩める者に力を貸す場ですのでな、とサロモンは笑った。

過剰に騒ぎすぎないように、普通に接するように神官たちには申し伝えておくとサロモンは約束した。勿論、サロモン自身も。

「そろそろ祭儀が始まりますので、私はこれで。それから大秘宝のレプリカがようやく明日、神殿に届きます」

「レプリカまた見に来ます」

「いえいえ、お持ちいたしますよ」

などと会話を交わしながらファルマが応接室を出て、礼拝堂を通り抜け外に出ようとすると、

「うわーっ!」

ファルマは、集ってきた神殿の信者たちを見てのけぞってしまった。信者たちの目が充血していたのだ。5割ぐらいになるだろうか。無意識に目をかいている人もいる。その、目をかいた手で席や神殿の扉をいじったりする。そうやってウイルス感染が拡大してゆくのだ。

「みんな目が赤いじゃないですか」

診眼を使わなくとも明らかだった。

「流行性角結膜炎」

（あー。完全に流行っちゃってる）

熱心な信者ほど祭儀や礼拝への参加率が高く、感染したのだろう。  
「今日はお説教を長めにしてください。終わっても誰も外に出さないように」

「はい、何か病気が見えましたか」

確かに目が赤いな、と神官長も気付く。

「目の病気ですよ。これは流行ります」

一人とてそのまま家に帰してはならない。

神官たちにも、「祭儀が終わるまで誰も出さないように」と伝え  
ると、祭儀が終わるまでにファルマは馬でひとつ走りして人数分の  
抗菌目薬を用意してきた。

ファルマは祭儀が終わると、聖堂の入り口に陣取り、帰りの信者  
たちの中から患者を見つけては結婚式の二次会のプチギフトのよう  
に配ってゆく。

点眼薬の使用説明書。目が赤い間の日々の過ごし方、できるだけ  
他人との接触をしない、目を触った手でどこにでも触れない、など  
の指南のプリントと一緒にだ。

流行性結膜炎はアデノウイルスの感染によっておこり、非常に感  
染力が強いので、感染を広げないように気を付けなければならない。  
アデノウイルスに効く薬は存在しないが、抗生剤やステロイドを点  
眼することで症状を和らげることができる。症状のひどい人を見極  
めて、ファルマは薬を配ってゆく。

「これは何？」

目を真っ赤にしている老婦人が尋ねる。

「目薬です。あなたは流行り目を患っているのです。これは人にうつ  
ります」

「そういえば妻に目が赤いといわれたな」

紳士が、目薬とプリントを受け取っていった。

「私も目が赤いみたいだ」

目薬というものは帝都の薬店ではこれまでも一般的だったので、

特に抵抗もなく彼らは受け取っていった。

「いやあ、ありがとうございます。助かりました」

患者全員に配り終え、ほっと一息ついているファルマに、サロモンは懇ろに礼を述べた。

「神殿が感染場所になっていたら、せっかく来てくださった信者さんにも気の毒ですからね」

ファルマは答えた。

「こうやって、放って置けないんですね、あなたは」

神官長は、同情を禁じ得ないようだった。

「俺と同じことを、皆もできるようになればね」

「それには、教育ですか」

それまでの道のりは果てしなく遠そうだ。

そして翌日。

「先日は、どうもありがとうございました。やっと例のものが届きました」

今回は警備の神官なども連れず、神官長がわざわざ大秘宝のレプリカを異世界薬局に届けに来た。本物であれば警備が必要だが、レプリカなので気楽である。

「これ……」

ファルマは木箱に入れられた大秘宝のレプリカをあけて見て、思わず頬をつねってしまった。

「材質を再現できなかったのですが、実際には半透明のものです。三千年前の地層から発掘されました」

（嘘だろ……どうということなんだ）

「大秘宝というからには、何か凄い神力があるんですか？」

「はい、神力を蓄えているようですが、使い方が全くわからないのです」

神官長は首を振る。ひょっとするとファルマならば使い方がわかるのではないかと思い、見てほしかったという。エレンとロツテ、

そしてセドリックも順番に回し見た。

ファルマは、やはりこの世界は夢なのではないか、と本気で思ってしまった。

そのレプリカには、日本語と英語で薬谷 完治（KANJII YAKUTANI）と書いてある。

さらにいうと、T大学大学院 薬学研究科 x 講座と書いてある。

サロモンの言っていた大秘宝とは、ファルマの前世で使っていた大学の職員証だったのだ。

もちろん、それは磁気データが入っている何の変哲もない身分証だった。大学の各施設に出入りするためのデータも入ってはいるだろうが。

「あの、この文字は何と書いてあるのでしょうか？」

神官長は期待を込めたまなざしで、職員証に記された所属学部の記述のあたりをなぞる。

「あー、見覚えがあるような気もしますが……少し時間を下さい」  
「教えたとしても、特に意味はないだろう。ただの名前なのだから、よろしく願います！」

神官長は、レプリカを渡して帰っていった。

（三千年前の地層から見つかったって……何でそうなってるんだ？）  
エレンは近づけたり遠ざけたり、片目をつぶってみたりして、身分証についていた写真、つまりファルマの前世の姿を見つめた。何を言われるのかとファルマがドキドキしていると、

「黒髪だなんて珍しいわね。神族なのかしら」

「神像ですかね」

なんて凄いものを見てしまったと、ロツテも手で口を押さえる。

「うん。何でかしら、やっぱり他人の気がしないわ」

「神様に向かって恐れ多いですよ、エレオノール様！」

「そうね、気のせいよね」

エレンの勘の良さに一瞬ドキッとしたファルマだったが、バレずに済みそうだったのでほっと息をつく。

（何であるんだろう、職員証。地球とこっちの世界を繋ぐ唯一のものだ）

何としてもその実物を見に行かなければならない、ファルマはそう思った。



### 3章9話 パツレ・ド・メデシスと異世界薬局

真紀元1147年、サン・フルーヴ帝都のド・メデシス家の屋敷にも新年が訪れた。

この頃ファルマは12歳に、そしてロッテは10歳になっていた。

「おはようございますファルマ様」

「ふわ……おはよう。何してるの？」

朝目が覚めると、目の前10cmのベッドサイドにロッテの顔があった。ベッドの上に折りたたんだ腕の上に顎をちょこんと載せて、顔が左右に揺れている。

「えへへ、見てただけですつ。ファルマ様の寝顔」

ピンク色の睫毛が目を瞬かせると、ぱたぱたと揺れる。変態じゃないのか、と一瞬思ってしまったファルマだが、彼女的にはファルマと一緒に空間にいられるだけで幸せらしい。

「こっちは何だ？」

腰のあたりがもそもぞすると思ったら、ブランシュが布団の中に潜り込んでいた。いつ忍び込んでいたものか、気付かなかった。ブランシュの甘えん坊っぷりはなかなか治らない。

「今日は寒かったからではないでしょうか」

ロッテはぱあっとファルマの部屋の鎧戸を開け放つ。

すると外は一面の銀世界、雪化粧をしたサン・フルーヴ帝都が広がっていた。

（あー今日雪か。綺麗なんだけど、消去したい）

思わずそう思ってしまうほど、ファルマは雪が苦手だった。

去年の冬、ファルマの愛馬が凍った路面で滑ったのだ。おかげで落馬して腰を打って一日寝込んでしまった。馬は四駆だからと謎の理屈で油断して、雪道を甘くみていた。

「外は雪か、今日は家でゆっくりするかな。ロツテは今日何する予定？」

「お庭の風景が素晴らしくて、絵を描こうかと思っています」

目をキラキラさせながら、ロツテは庭を眺めていた。

（こりやうつかり雪を消したりできないな）

危うくロツテの絵画制作の邪魔をするところだった。

「お休みなので、ファルマ様もゆっくりできますね」

（店頭の仕事からデスクワークになるだけ、って話だけだな）

デスクワークをしようと思って、新年だということにかこつけて、薬局の営業も休みを数日もらっている。

なのでファルマも久しぶりに家で過ごすことにした。

「ファルマ様ー。今日は何をお召しになれますか？」

「普段着でいいよ、家にいるからリラックスできるやつで」

「かしこまりました」

ロツテが服をタンスから出してくれる。彼女はTPOをわきまえて服を揃えてくれるので、フォーマルな場に参加する時には助かる。だが、お任せでという趣味に走り、ビジュアル系にされてしまうのが困りものだった。

「それじゃないやつで」

ロツテが今、満面の笑みで手に持っている、派手な襷襟や袖口にフリルがついた服をひっこめさせる。ロツテは召使なので、自分が派手に飾り立てられない分、ファルマやブランシュのファッションに興味があるのだろう。

「えーっ、わかりました」

（というか、ロツテはいつまで俺の召使やるつもりなんだろう）

ボタンを留めてもらいながら、ファルマは視線に困る。一応、まだ子供だからで通る年ではあるが、お互いに年頃になってくると着替えをロツテに見られるのは恥ずかしいし、ロツテ本人もやりづらだろう。

（着替えぐらい一人でできるって言っても、御曹司が一人で着替えちゃ駄目なんだろうしな）

ファルマの世話係は男性使用人もしくはロッテの母に代わってもらったほうがいいのではないかと、気を回す。貴族生活が窮屈なことに変わりはない。

「さ、ブランシュお嬢様もお着替えしますよ」

「あい！」

ファルマはロッテにシンプルな服を着せてもらった。ブランシュはフリフリのドレスを着せてもらって、ファルマとブランシュは食堂へ向かう。その際に、ふと机の上の木箱の中から、職員証のレプリカをとった。

「兄上、いつもそれ持ってる」

螺旋階段を下りながら、ブランシュが不思議そうに指摘する。

「これはなあ……」

「兄上の大事なものの？」

「大事なものだよ」

前世では、白衣の胸ポケットに職員証を入れておくのが常だった。研究室はカードキーになっていたので、部屋を移動するときは必ず必要だったそのころの癖で、なんとなく肌身離さず持ち歩いてしまう。ただのレプリカなのだが、それが心の隅で気になっている証拠だ。

（早いうちに、行かないと）

ファルマは、大神殿に行って大秘室の実物を見ようと考えていた。秘室化しているというから、以前の職員証とは違う状態になっているのかもしれない。

大神殿は、サン・フルーヴ帝国にはない。

神殿の総本山は「神聖国」という小さな市国にある。

神聖国というのはヴァチカン市国のような、まるごとひとつの国が神殿組織になっており、そこには神官のみが住んでいる。

国境を越えなければならぬというのもあるが、どうしても大神殿へ行くための踏ん切りがつかない。

大神殿に行くのは一筋縄ではいかない、というのは神官長の話だ。いわく、大神殿にファルマの存在はまだ知られていないが、存在を知られたら、貴重な神憑きということでまず軟禁状態にされるかもしれないし、大神殿を取り仕切る大神官ともなると、厄介な神封じの秘術を持っているという。だから夜間、警備が手薄な時に忍び込んで盗み見るほかにない、という犯罪じみた計画を話し始めた。

大神殿はダンジョンのようになってるので、普通に夜盗に入っても大秘宝のありかまでたどり着くことができない。手引きならする、と神官長は言っていた。手引きだなんて、泥棒じゃないんだから、とファルマは心が痛む。

（神官長のサロモンさんに危ない橋渡らせるわけにもなあ、クビにされそうだし。神官しかいない国って、3歩歩いただけで正体バレしそう）

それに、そんな裏口からコソコソやっていて、普通に不法侵入でつかまってしまうのも不名誉だ。

食堂のホールに入り、朝食のために席に着く。

両親はすでに起きてファルマとブランシュが起きてくるのを待っていた。家族揃っての食卓が基本だ。

「パツレが帰るようだ」

給仕たちによって食事が運ばれてくる間に、帝都新聞を見ながら、父がファルマにさらっと重大なことを告げた。

「パ？」

パツの音を聞いただけで、ファルマとブランシュは身構えてしまった。

そして兄妹は顔を見合わせる。（どうしよう）（どうする？）（逃げる？）（逃げる！）（ちょ、そんな）と、お互いにアイコンタクトを交わしはじめる。兄の愛の鞭から、ブランシュは逃げる気満

々のようだ。ファルマは動揺を覚られないよう、咳払いをする。

「それは楽しみです。あの、兄上はいつ帰るのでしょうか？」

「今日、知らせが来たのよ。今日帰るんですって」

母ベアトリスは機嫌がよかった。母は息子に久しぶりに会えるので嬉しいようだ。パツレは両親にとっては品行方正で従順で、かわいい息子のようだ。ちなみに両親は、パツレがノバルートで浮名を流しまくっているというのは知らない。

「驚かせたかったようだね」

（そういうサプライズじゃないから！）

ファルマは新年で薬局を休んでおいてよかったと、心底そう思った。使用人にファルマの居場所を聞いて、いきなり薬局に押し付けてきたりされかねない。

ファルマとブランシュは朝食後、暖炉の周囲に集まって落ち着かなかった。

ロツテは服を着こんで、テラスで庭のスケッチをしている。雪景色をモチーフにした、よいデザインが思い浮かんだのだそうだ。

「今日は雪だから、大丈夫かな。大きい兄上特訓だなんて言い出さないよね」

ブランシュは淡い期待を擁いた。

「前は大雨でもしばかれたよ。嵐が来た日もな」

ファルマは兄との対決を忘れない。兄は半年に一度帰省するので、あの後も何度か帰ってくるたびにファルマは対決を持ち掛けられた。とはいえ薬神杖の前に結局パツレは一度も勝つことはできなかったのだが、それでも1時間〜2時間は本気の戦闘を挑まれる。

何が面倒だといって、戦闘行為そのものではない。戦闘そのものはよい運動になっていいのだが、しぶといパツレはKOするまで諦めない。兄弟対決が終わったあとのドロドロになったパツレの治療が大変なのだ。

（今回は開始直後、ワンパンで意識飛ばしてやろうかな）

などと物騒なことを考えはじめたファルマである。それが負傷を最小限に抑えられるような気がしてきた。そして、ファルマがいつも偶然を味方につけて勝っていると感じているので、パツレは兄弟対決をやめようとしなない。

午後、従者を引き連れ帰ってきた兄を、家族と使用人総出で玄関で出迎える。

「ただいま帰りました」

パツレはまた一回り大きくなっていた。ブリュノもそうだが、高身長の家系のようだ。また一段と遅しくなっている。

「よく帰ったな、我が息子よ」

ブリュノも息子の成長ぶりに目を細める。

「お久しぶりです。早速ですが、父上に報告があります」  
勿体ぶって、パツレが言う。

「ノバルトを首席で卒業し、一級薬師の試験に合格しました」

パツレは鞆の中から卒業証書と、小さな箱に入った一級薬師のバッジを両親に誇らしげに見せた。全寮制のノバルト医薬大で過酷な勉強と神術訓練の日々を過ごした彼の何年間かの努力の集大成だ。  
「さすが私の息子だ」

「まあ、よく頑張ったわね。立派になって」

ブリュノとベアトリスは心から兄の栄誉を喜ぶ。パツレは嬉しそうだった。素直な兄である。

「お前たちにも見せてやろう。どうだ、羨ましいだろう」

鼻高々にファルマとブランシュに見せてくれるので、ファルマは「これが一級薬師のバッジかーすごいなー」と褒める。同じ一級薬師であるエレンの襟元についているバッジは帝国薬学校の印章の入ったバッジで、ノバルト医薬大のロゴの入ったバッジと若干形状は異なり、格式はパツレの方が高い。ちなみに宮廷薬師となれば王冠型なので、出身校は問われない。

「卒業をしたら、どうするつもりだ。留学するのか」

ブリュノがパツレに今後の進路を問う。嫡男であるパツレはゆくゆく、宮廷薬師であろうがなかるうが、尊爵位を授かるうが授かるまいが、ド・メディシス家を継ぐことになっている。なので、いずれは帝都に戻ってくるのだらうが、一級薬師としての修行や留学に出るといつてもそれはそれで珍しくない。

「はい、屋敷に戻って研鑽を積み、父上の助手を務めながら宮廷薬師を目指します」

パツレは決然として告げた。

（げー！ 兄が戻ってくるのか！）

ファルマは白目になった。同じく、ブランシュでもある。

「これからは毎日朝練だぞ、兄に相手をしてもらえて嬉しいだらう。ファルマ！」

（出た・やる気満々だ！）

スパルタ兄の相手を務めなければならないようである。ファルマも神術の腕が鈍らないよう、神術の訓練をおろそかにしたことはないが、毎朝兄と、となるとかなりの時間的な負担だ。

それを聞いていたブランシュがさつとファルマとパツレの間に割って入った。

「んーとねー大きい兄上ー。小さい兄上はねー」

「なんだ？」

パツレが怪訝な顔をする。

（ちよ、何言うんだやめろブランシュ）

ファルマはパツレが戻ってくる前、ブランシュにファルマの近況を絶対に兄に報告しないように、と念押しをしておいた。だが、子供との約束である、反故にされたとしても責めることはできない。

「とっても忙しいから、邪魔しちゃだめなのー」

にこつと天使の微笑みを向けるブランシュに、兄も骨抜きにされる。

「仕方がない、ではお前から先に鍛えてやるか。ピーピー泣いても

知らんぞ」

「ひどくしたらやなのー。優しくしてほしいのー」

目を潤ませて懇願するブランシュの頭を、兄はわしわしと撫でた。ひとまず、ファルマ自身の毎朝の特訓は回避できそうだが、

（骨は拾うからな、頑張ってくれブランシュ）

ファルマはブランシュに感謝するとともに、彼女の無事を祈った。とはいえその日の午後、大雪の降りしきる中、兄弟対決を持ち掛けられてしまって、ファルマは結局雪の中を3時間、兄に付き合うことになった。

それから数日の間、兄はファルマとブランシュ、そしてロッテを引き連れ帝都の遊び場を遊びつくした。脳筋と熱血漢なことを除けば、彼は弟妹思いの、面倒見のよい兄だ。女帝のはからいで帝都に公衆浴場ができたと聞いて、兄は喜んで入浴し、終始テンションが上がりっぱなしだったようだ。雪合戦、そり遊び、冬山登山なども遊びつくした。

そうして遊び倒したあと、パツレは卒業の手続きや引っ越しの準備のために大学へ戻っていった。

「はー、もうしばらく帰ってこなくていいよ兄」

パツレの目をかいくぐるように、ファルマは異世界薬局の新年の行事始め式を行い、新年の営業を始めた。いつもの常連たちが、開店前の門の前に押し寄せている。

「新年おめでとうファルマ君」

エレンはたくさんの手土産を提げて出勤だ。

薬局のカウンターの上に顎を載せているファルマと、突っ伏しているロッテとブランシュを見て、

「どうしたの三人とも、新年早々ぐったりして」

「遊び過ぎて」

「珍しいわねファルマ君が遊びすぎ、だなんて」



「エレオノール様、美味しそうなおいがします！」

すんすん、と死体化したロッテの鼻がひくひく動いた。

「あら、匂う？ ロツテちゃんたら。ズイスを満喫してきたわー」

エレンは休暇の間、エレンの父の領地「ズイス伯爵領」に行ってきたようだ。珍しいチーズやお菓子をファルマとロッテ、そしてセドリック、薬局職員に配った。エレンの父の領地はスイスのような山間の領地で、放牧と観光によって領民は生計をたてている。

「おいしいです！ つーんとした濃厚なおいがまた」

ロッテは我慢できずにチーズを頬張ってしまった。

「あつ、歯磨きしてきます」

開店前にチーズを食べてしまつて、接客時のおいを気にして口ツテは歯磨きに行った。エチケツト習慣が身についてきたようである。

「へえ、あいつが帰ってきていたの。ノバ大卒業したんだ？」

エレンはパツレという名を聞いて、複雑な顔をした。彼らは幼馴染であり、長年のライバルなのだ。尊爵家の嫡男をあいつ呼ばわりできるのも、エレンぐらいのものだろう。ここ数年、顔を合わせてはいなかったが。

「うん、首席で卒業だつて。卒業と同時に一級薬師の試験にも受かったみたいだよ」

「へー、やるじゃない。でもこれでやつと私と同格つてわけね」

確かに、エレンのほうが一級薬師になった時期は早い。しかし名門ノバルート医薬学校を卒業して一級薬師になると、帝都の薬学校を卒業して一級薬師になるのでは同じ資格でも格が違う。

「ねえ。ファルマ君が宮廷薬師になって、陛下の主治薬師で、帝国勅許の異世界薬局をやっていて、しかも薬神だつていうのはあいつ知っているの？」

「知るわけないよ」

ファルマは何を恐ろしいことを、と左右に首を振った。

「実家に戻ってきたなら、隠すのって無理じゃない？」

「ばれたらどうなると思う？」

「そうね。あいつのことだから、弟に負けるなんてプライドが許さないと思うわ。それよりなにより、弟のほうが出来がいいと、嫡男の立場が危ないのよ。家督のこともあるし、揉めるでしょうね」

「まあ、そう簡単にバレはしないだろう。宮廷薬師になるために家で勉強したり、父の診療について回るって言ってるし」

「それは難しいかもしれませんが」

セドリックが新年になって新調した帳簿に会計のための罫線を引きながら、不穏なことを言う。

「帝都に評判のいい薬局ができたそうだが、それはどこにあるかと私にお尋ねになりました」

「セドリックさん、何て答えたの？」

「ファルマが凍り付く。」

「どの薬局も評判がよいので、どこのことでしょう、とお答えしておきましたが」

最近、調剤薬局ギルドに加盟する帝都の薬局は、全て異世界薬局と業務提携している。販売する薬もシェアしているし、業績も患者からの評判も上々だ。

「パツレ様はその、帝都で評判の薬局が販売する新しい薬のことが気になっておられるようです」

「嘘だろ……」

「そろそろ開店の時間ですね」

セドリックは窓の外を覗く。そして、あつ、と言ったきり絶句していた。

「何？ どうしたの？」

エレンがセドリックに尋ねる。

「パツレ様が行列に並んでおられます」

「げっ、大学に戻ったんじゃないのかよ、兄！」

「薬局に寄ってから、あちらに戻られるのでしょうか」

セドリックが彼の行動を読む。

ファルマは魂が抜けそうになった。

このときファルマの頭上に、『揉めそう』という副音声<sup>（1）</sup>が吹き出しで見えた。エレンは後に語るのだった。

### 3章10話 白血病

「ファルマ君。あいつ並んでるけど」

ファルマの兄パツレは、新年の営業を待つ最後尾に並んでいた。平民の間に交じって行儀よく順番を待っているあたりが憎めない。ファルマが宮廷薬師になっていること。異世界薬局の創業者であること。彼がこの一年あまりで行ってきた数々のこと。それらはパツレにはまだ話していないことだ。

「そのバツチは隠しておいたほうがいいんじゃない？」

エレンはファルマの宮廷薬師のバツチを指す。

「隠したり言い訳をしようと思えば何とでもなるけど……ファルマ君が2階に上がってればバレないんだし」

どうする？ とエレンはファルマをうかがう。パツレと一時的に顔を合わせなかったとしても、ずっとそれで通るわけではない。

「あれがあるしモロばれたよなあ……」

ファルマが視線を向けた方向には、薬師と従業員の名が刻まれたボードがある。でかでかと名前が載っているのだ、店主として。あれはすぐには外せない。

そうね……と考え込んでいたエレンは、彼女の杖を握りしめた。

「任せといて。私が話をつけてくるわね」

「やめてくれエレン、絶対こじれるって」

エレンとパツレはライバルなのだ。薬局内か、帝都の街路で神術戦闘が始まってもおかしくなかった。

「薬局の中にゴタゴタを持ち込みたくないでしょ。客も来てるし、兄弟げんかで店が吹っ飛んでも困るじゃない。私がうまいこと言うから、ファルマ君は何も気にせず接客をしていて」

エレンの言葉は物騒きわまりない。エレンは薬局のドアを開け雪を踏みしめ、格子門の前に出て行った。そして営業用の笑顔で客の

前に立つ。

「皆さま新年おめでとうございます。ようこそいらっしやいました。今年も異世界薬局をよろしくお願いいたします」

エレンは深々と頭を下げ、警備の騎士たちに正門を開けさせる。エレンは愛想よく客を迎え入れながら、パツレの前に立ちふさがった。

「あら、久しぶりじゃないパツレ君！」

腕組みをしているので、自然と胸を強調するポーズになり挑発的だ。

「エレオノールか！」

パツレは気まずそうな顔をした。

「何でお前がここにいる！？」

「何で、ですって？ 雇われているからに決まっているわ」

エレンは令嬢らしく演技がかった高笑いを披露する。

「貴族のくせに下賤の者のやる商売の真似事か、そんなに貧しいのかお前の家は。下級貴族は大変だな？」

そしてパツレは口が達者だった。

「誰の家が貧しいですって？」

エレオノールは裕福な伯爵令嬢であつた。尊爵家嫡男のパツレからすれば下級なのかもしれないが、わざわざ下級と呼ばれる筋合いはない。

「じゃあその皇帝陛下の保護を受けているこの帝国勅許の賤しい店に？ 何を買うに來たのかしら？」

脳筋につける薬かしらね、などと売り言葉に買い言葉で、お互いに棘のある言葉の応酬となつた。

「わかつた。ゆっくり話をしようじゃないか、エレオノール！」

この場合の話とは、肉体言語でということである。

「あらあら。前のように私に負けてほえ面かかないようにね！」

上位神術使いであるエレンも、全くひかない。

「おい、負けた覚えはないぞ！」

売り言葉に買い言葉でどっちも引かず、二人は馬に乗り、連れ立って郊外の方角へと出かけてゆく。

「あーあーあーあー！……ちょ、どこ行くんだ二人とも！」

勝手にヒートアップする二人の水属性神術使いを接客しながら覗いていたファルマが、急な展開に啞然としていた。

「パツレ様がエレオノール様の足元にハンカチを叩きつけていましたから、これは決闘ですね」

ロツテが人差し指を立てて解説する。ブランシュはガタガタ震えながら両手を組んで神に祈りを捧げている。

「勘弁してくれよ！」

ファルマは勢いよく席を立つ。患者がびくつとして怯えた。

「楽しみですね、決闘！どっちを応援します？」

ロツテは決闘の意味がよくわかってないらしい。

「決闘って死人が出るやつだから！楽しみにするやつじゃないから！」

診察をしながら窓の外から彼らを見ていたファルマは、やっぱりエレンが出て行ったほうがこじれてるじゃないか、と頭が痛くなつた。

「あーもう！」

（沸点低すぎだろう、二人とも！）

ファルマは怒涛の勢いで列に並んでいた全員分の処方箋を書いて、薬局にバイトに来ていた一級薬師に「よろしく」と投げ、「昼までには戻るから！」といって白衣を脱ぎ、コートを羽織って薬局を飛び出していった。

処方を書いてすぐに薬局を飛び出して見たものの、二人とも馬に乗って果し合い会場に出かけていったため見失ってしまった。

途方に暮れかけていたファルマに、ロツテが背後から呼びかける。「大丈夫ですよ、お二人とも薬師ですから。怪我をしたとしても見

捨てておけません。お互いに手当をしようと思います。そして  
らほら、めでたく仲直り！　なんて」

ロツテがファルマを励ますように、暢気なことを言った。そんな  
わけないだろうとファルマは思うのだが、ロツテは素でそう言っ  
ているようだ。

「それで仲直りはないよ」

最初から自分が出ていけばよかったと後悔したファルマである。

… … …

パツレとエレンは、ボヌフォア家の所有する更地にやってきた。  
馬を降り、互いに距離をとる。

二人とも水属性神術の使い手で実力は伯仲し、二人とも上位神術  
使いなので、水属性（水、雪、氷、霧、熱水）の全ての神技が使える。  
る。

「さて、勝負だ」

パツレはばさつとコートを脱いで放り投げた。

真冬にもかかわらず、鎧のような筋肉に覆われた腕をさらけ出し  
た暑苦しい男だ。

「どちらかが倒れるまで、でいいのかしら？」

エレンも白衣を汚さないように脱いでおく。白衣の下からきゅつ  
と細くくびれた腰と、上品な大きさの胸、一切の妥協もなく整った  
ボディラインが現れた。彼女は戦闘のためにロングスカートの前ボ  
タンを開けハイスリットをつくる。適度に筋肉のついた女性らしい  
脚は、気持ちいいほどの脚線美を描いていた。

「泣いても知らんぞ」

パツレは手に持っていた小石を高く放り投げた。

小石が地面に触れた瞬間が、戦闘開始の合図だ。

エレンとパツレは石が地面に落ちると同時に駆けだした。一所に

とどまって標的となるのを避けるためだ。

「濃霧の壁」(Mur de brouillard)「

エレンはパツレとの間に濃霧を生成し、目くらましをする。

座標を攪乱するのは、水属性神術戦闘の基本だ。そこへ、エレンは横一閃に杖を振る。

「逆さ雨」(Pluie inversée)！「

地面に分厚い水の幕を張り、地からの逆豪雨を浴びせようとしたエレンに対して、パツレも発動詠唱をうち迎え撃つ。

「氷捕縛」(Capture de glace)「

パツレはエレンの水を利用して、地面凍結からの捕縛を使ってくる。

氷の塊がエレンの足をとらえ、エレンの体を凍てつかせてゆく。しかしエレンは神杖を突き立て、エレンの杖の晶石が鋭い輝きを放った。

「迅速融解」(Fonte rapide)「

氷塊は水に変わり蒸発する。

「水の精」(Naiade)「

足を地面に踏ん張り、パツレは大水流放出の反動に備える。得意の上位水属性神技だ。

パツレの杖から生み出された大水流は水の巨人となり、エレンに襲い掛かる。神力によって硬化した氷の拳を地面に打ち込めば、地面が激しく抉れクレーターができるほどの威力だ。

そんな代物をエレンに対して容赦なく差し向けるパツレは、一切手加減をしていなかった。

全力疾走で縦一直線に逃げていたエレンは急に振り返り、まっすぐ巨人に杖を向けた。

杖の先から生じた氷柱によって、エレンの身長より巨大な、透明な氷の蕾が出来上がってゆく。



それが大きく膨れ上がった頃合いに、エレンのアクア色の瞳は氷のように冷ややかに眇められる。

「咲け”(floraison)”

二段階の発動詠唱。

「氷の華”(Fleurs de glace)”

対物理防御シールド、大輪の氷の花は眩い閃光とともに積層状に咲き乱れた。

大きく振りかぶって拳を撃ちおろしてきた巨人の攻撃を受け止め、その拳を花卉が飲み込み、凍結の波動をもって巨人を内部から破壊する。

ダイヤモンドダストのように砕かれた巨人の氷の屑がふわりと風に流され、大気中に優しく乱反射している。

濃霧は晴れ上がって二人は再び対峙する。

「やるじゃないか、エレオノール。俺は強い女は嫌いじゃないぞ、お前は嫌いだな！ はーっはっはっ！」

パツレは、手ごたえのある同属性のケンカ相手に会えて嬉しそうだった。

ファルマとの兄弟対決は、勝敗はともかくパツレにとっては物足りなかった。ファルマはどうも受け流しすぎで、真っ向からぶつかってこない。おまけに早く終わりたいそうな顔をしているのも不満だった。

パツレからするとエレオノールとのケンカはとことん、という意味で好感が持てた。

「馬鹿じゃないの！？ パツレ君に褒められても嬉しくないわよ」  
エレンは神杖を握りなおす。

「ガサツで、意地っぱりで、何か気に入らないことがあればすぐ暴力。ちつとも変わらないわね、あなたは。いつも穏やかなファルマ君とは正反対」

どうしてこうも兄弟で違うのかしらと、エレンは嘆かわしい。

エレンは神術を「自衛のため」と割り切って学んできた。だが、パツレは相手に対して優越感を得るため、自己顕示欲のために神術を使っている。エレンはそう思っていた。

「お前も似たようなもんじゃないか？」

ファルマに言わせると、煽り耐性が低い部分では二人は似たもの同士なのだが。

何故バトルに発展しているのかは当事者たちも理解に苦しむところだったが、決着をつけなければという雰囲気になってしまっていた。

「パツレ君と一緒にしないでくれる!？」

「お前なんかを雇ってる薬局の店主も大変だろうな」

「余計なお世話よ、だいたい、薬局に何しにきたよのよ？」

「薬局には薬を買いにくるもんだろ? 俺は客だぞ? 何しにきたと思っただんだ」

杖を脇にはさんだまま、どうだとふんぞりかえるパツレ。

「確かに、そうだったわね」

エレンはぐつと返答に詰まる。最初に絡んだのはエレンだ。

「おあいにく様だけど、よく効く薬ほどあの薬局には”売って”ないわよ。薬がほしいなら、患者を連れてこないと」

エレンはもってまわった言い方をした。

異世界薬局の販売コーナーにはサポーターや絆創膏、飴などはあるが、薬らしきものは売っていない。

「まず患者を診てから薬を出すというのが店主の方針だね。だから元気な人に”売る”薬はこの店にはないわ」

なるほど、とパツレは納得する。

「患者は俺だ」

パツレはあっさりと白状した。

「えっ、ちょ、何の病気なのよ」

薬局に冷やかしに来たのではないとわかり、とたんに決闘ムード

ではなくなってしまった。

エレンとパツレはひとまず杖をおさめた。

「俺にはまだ、診断がつかない。多分、誰にも分らんだろう」

この世界で最高といわれるノバルート医薬大を首席で卒業した彼が、それでも分からない病気。

「だがわかることもある。俺の命は多分、もう長くない」

パツレは力なく笑った。その歯茎から出血しているのが見えた。

「どうしたのその血。私、まだ殴ってないわよ」

エレンはまだダメージを与える攻撃はしていないはずだ。

「これもその症状の一つだ」

パツレは口に溜まった血を忌々しそうに吐き捨てる。すぐ出血して、すぐ血が出て、なかなか止まらないんだ、そう言った。それが異常であることを、パツレは知っている。

「家庭教師をやっているお前はファルマと会うこともあるだろうが、この件は内緒にしてくれ。特にファルマやブランシュはまだ小さいからな」

「父上は？ 母上はご存知なの？」

「誰も知らない、お前が初めてだ。薬局に来たのを見られては、白状するよりないだろう」

「ちょ、何なのよ」

「この数日で、弟妹には思い残すこともないほど遊んでやった」

ファルマたちは、確かにこの連休中パツレに連れまわされてへとへだったと言っていた、とエレンは思い出す。

弟妹への思い出づくりのつもりだったのだろうか、彼女にはそう思えた。

ファルマは少し離れた場所から物陰に隠れ、二人の様子をうかがっていた。

エレンとパツレの派手な神術戦闘が始まったので、その神力の流

れを辿って果し合い会場を見つけたのだ。どちらかが怪我をしそうになれば、ファルマが消去の能力を使って割って入るつもりだった。それが、意外な展開になっている。

「弱気なこと言っていないでしっかりしなさいよ」

エレンがパツレを励ます。

「万一のことがあれば家はファルマが継ぐだろう。あいつも大した奴じゃないが、俺がいなくなればしゃきつとするかもしれないさ」

「自分で診断がつけられて、治療方針が立てられるの？ どうするのよ、その診断のつかない病気」

エレンはパツレを問いつめる。エレンはパツレと長年のライバル関係ではあるが、パツレがつかかってくるのと気が合わないからであって、特に憎んでいるわけではない。

ファルマは離れた場所からそつと診眼を使ってパツレを診た。

パツレの全身が、青白く輝いていた。骨の一部、そして血管という血管に沿って、その蛍光は脈打ちながら流れてゆく。ファルマは光が動くことから、骨や血液系の疾患にあたりをつけ、かたっぱしから病名を唱えてゆく。

そして、ファルマが恐れていた一つの疾患に反応した。

「白血病」

ファルマは背筋が凍えた。

それは、血液のガンと呼ばれるものだ。

感染症と違って、治せるかどうかからなかった。確信をもって治療ができる、というものではないのだ。

（嘘だろ。すまない……兄。見落としていた、俺がちゃんと診眼を使っていれば……）

半年前の帰省でファルマが診たときには、パツレには全く異常はなかった。

だが、今回の帰省では兄にこれでもかと遊びに連れまわされ、いつもより何割増しかで間断ないマシンガントークが続いていたので、ファルマもくたびれて診眼を使うのを忘れていた。

白血病細胞は一個の造血細胞の変異からの白血病細胞の誕生によって始まる。

前回、その一個、ないし数個、数十個を見逃していたのだろうか……などと考えても、ファルマは反省しどおしだ。

（兄が帰省してから狂ったように俺たちを連れまわして遊んだのは、もしかして……）

自らに忍び寄る死の影を覚ったからかもしれないと、ファルマはエレンと同じように思った。

振り返ってみれば、兄弟対決のあと兄の怪我を治療したときに、手足に青あざがいくつもあった。

だが脳筋な兄のことなので、自己鍛錬やケンカ、女性にひっぱたかれたりで青あざを作ったのだろっ、ぐらいにファルマは軽く考えていた。

この世界では、先進国日本のようにがんを患う人は少ない。

そもそもこの世界の平民は寿命が短いことと、ほかの感染症などで死んでしまう確率が高いので、薬局に来た帝都市民の中でもがん患者はあまり目立たなかった。

貴族は神力によって免疫力が高められているからか、遺伝子系の疾患に強く余計に症例が少ない。

なので、強い神力を持つ貴族であるパツレが白血病を患う状況は非常に珍しいといえた。

（あるいは、兄は俺と一緒に暮らしていたらもしかして発症しなかったのかも）

そう思うと、ファルマは悔しくてならない。

神官長いわく、ファルマの周囲にいと聖域が発生しているために病気になるということ。

不運にも兄は遠隔地ノバルトで寄宿生活を行っていたので、ファルマの聖域も効果がなかったのかもしれない。

白血病には、4つのタイプがあり、慢性と急性に分かれる。

「急性」

急性のほうで反応があった。今すぐに治療に入らなければ、数カ月でパツレは死亡してしまうということを意味していた。

「急性骨髄性白血病」

白血病では、鼻血や歯肉からの出血、痣ができやすくなる、感染症にかかりやすくなったり、貧血になるなどの症状が次々とあらわれ、それはやがて多くの臓器に影響が及ぶ厄介な病気だった。急性骨髄性白血病と唱えても、反応はあるものの、光が消えない。ファルマは病名を変えた。

「急性前骨髄球性白血病」

この病名が明らかになった時点で、彼をノバルトに戻してはいけなかった。

このタイプは、脳の血管内で出血を起こしやすいのだ。今にでも出血を起こせば、ファルマには手術もできないし、脳内のことはほぼ手が出せなくなる。パツレの死を見届けるしかなくなる。

パツレが薬局に立ち寄ろうとしなければ、彼はそのままノバルトで倒れてしまったかもしれない。

（もはや、迷っている時間はないぞ）

パツレの命にかかわる状況になっている。

ファルマも正体バレなど気にしている場合ではなくなった。

「兄上」

ファルマは一声かけ、エレンとパツレのいる前に歩んでいった。深刻な話をしていた場面での突然の弟の登場に、パツレはどこまで話を聞かれたかと動揺を見せたものの、

「なんだ、お前どうしてこんなところに？ エレンを探してきたの

か？　今日は家庭教師の日なのか」

パツレは明るい表情でファルマに手をあげて呼びかける。

彼の態度からするとあくまで、ファルマには病状を知らせないつもりのようなのだ。

だが、ファルマはそんな場合ではないだろう、と首を左右に振った。

「話は聞かせてもらった」

「ファルマ……その、なんだ。お前は、お前のすべきことをしていればいい。父上と母上、それから……」

「やめろよ」

パツレはファルマに何か言葉をかけようとしたが、ファルマはそれを遮った。

兄の遺言など、聞きたくもなかったからだ。

「戦おう、兄上」

それが現実になってしまわないように、ファルマはパツレを直視する。

「効くかもしれない薬ならある」

その一語一語に気迫のようなものを読み取って、弟の気休めの言葉ではない、とパツレは悟った。

「お前の薬って……なあ」

気持ちだけはうれしいぞ、とげんなりするパツレに、ファルマは彼を突き刺すに十分な一言を一気に言い放った。

「異世界薬局の店主は、俺だ」

「なんだ……と……」

兄は力が抜けて、脇に挟んでいた杖を取り落とした。

### 3章11話 診断と手順

「何をやっているんだエレオノール、見習い薬師として修行中のファルマを薬局の店主なんかにして」

パツレは取り落した杖を拾い、腰に佩きながらエレンを叱った。

エレンはパツレが勘違いをしているので、何を言っているのかと聞き返す。

「はい？」

パツレは、ファルマはまだ無資格の見習い薬師だと信じている。だから、彼の師であるエレンがファルマに薬局をやらせたり非常識なことをさせているものと決めつけていた。パツレは嘆かわしい、と言わんばかりに大きなため息をつく。

「まだ資格もなく未熟なのに、お飾りだけ店主に据えて邪道なことをさせると後々苦勞するだけだぞ」

ファルマとエレンは顔を見合わせた。

（どうしよう？）（ファルマ君がうまいこと答えてよ）という視線のやり取りがあった後、ファルマは無難な返事をする。

「俺が店主をやらせてもらってるのはエレンに言われて、とかじゃないよ」

「ちよつとファルマ君……またそんなお茶を濁しちゃって。パツレ君には本当のことを言った方がいいと思うわ」

エレンがファルマをたしなめる。

真相は早めに打ち明けないと余計に話がこじれてゆくだけだと、エレンは心配していた。そんなエレンの気遣いもお構いなしに、パツレはというと、

「ぶらぶらしていないで、お前も早く学校に入った方がいいぞファルマ。一度体系立てて薬学を学ばないと、独学だと修学までの期間が遠のく。ノバルートでなくても帝国薬学校でもいいから、家庭教



師だけでなく学校に行け」

パツレはファルマの行く末を本気で心配しているようだった。

「え？ ああ、帝国薬学校には行こうと思うよ」

ファルマはどうしたものかと悩みながら相槌を打った。

ファルマがサン・フルーヴ帝国薬学校に入るとしたら、それは学生としてではなく教授としてののだが、兄は知る由もない。エレンはやれやれ、と肩で息をした。

「それはそれとして、兄上、俺に治療を任せてくれないか？ 薬局に行ってから兄上の病気について説明するから」

「では一応事前に聞いてみるが、お前は何の病気だと思っているんだ……？」

パツレはファルマに尋ねる。ファルマは迷わずに即答した。

「白血病（leucémie）だ」

病名の由来は、19世紀のドイツの病理学者の、ある脾腫を患った患者の血が白っぽくなって死亡したという最初の発見に基づいている。

「何だそれは、お前の所見か？ ろくすっぱ俺を診てもいないのに？」

パツレからすると聞いたこともない病気だった。

遂に自分で病名まで創作するようになったかと、パツレは愕然としてしまった。

「見当はつくんだよ」

「お前メチャクチャなことやってんだな。病名は何となくで勝手に創作してはいけない、きちんとした手順の診断に基づかないと。そんな調子で薬局を運営してるのか？」

パツレはファルマを諭す。

「いいか、診断ができないことは恥じゃない。世の中には未知の奇病だってたくさんある。適当な病名をつけるほうが薬師として恥ずかしいことなんだぞ」

「俺もそう思うよ」

ファルマはパツレに全面的に同意した。

エレンは、ファルマ君の茶番劇にはつきあってられないわ、と額に手を載せてあきれ顔だ。だが、ファルマは決してパツレを馬鹿にしているのではなかった。むしろ、病氣と真摯に向かい合い、客觀的に病氣を診て、それをこの世界の薬学では手に負えないものとして死を受け入れようとする彼の姿勢を、素直に尊敬していた。闇雲にはなく彼の持てる限りの知識と経験に基づいて余命を覚ったパツレは、すぐれた薬師だとファルマは思う。

それに対してファルマは、診眼であたりをつけただけだ。

「薬局に戻ってからにしよう、話が長くなるし、手順に基づいて診断をするよ。エレン、俺は薬局で色々準備をしているから、兄上と一緒に馬車で帰ってきてくれ。ここに馬車を寄こすから」

「ええっ、何で私がパツレ君と一緒に馬車で帰らないといけないの？ 馬で帰るわよ」

エレンは露骨に嫌そうな顔をする。

馬車を待つのも嫌だし、パツレと帰るのはもつと嫌なのだ。

「いや、何を勝手に言っているんだ。俺はノバルートに戻らねばならんと言っただろう」

これからの予定を弟に勝手に決められてしまって、パツレもうんざりだ。そして言われた通りに従うつもりもさらさらなかった。

「だめだ。今、兄上は脳出血をしやすくなっているから馬には乗るな」

兄にそう言いつけたファルマは、ドタバタと馬に乗り、薬局に戻っていった。

「だってさ、弟くんがそう言ってるわよ」

エレンは馬の手綱をとり、パツレに呼びかける。エレンの馬もパツレの馬も、放せば勝手に自宅に戻る。

「しかも自分は馬で帰りやがったな」

「パツレ君のためを思ってたのよ、きつと。多分」

「なんなんだあいつは。バカか？」

付き合っていられないとパツレは馬に乗ろうとする。  
それをエレンが制止した。

「駄目よ、馬車を待つわ」

ここから薬局まで、徒歩で帰ったとしても30分といったところだ。しかし地面は雪で濡れてグズグズになっている。徒歩よりはまだ馬車を待ったほうがいいだろう。

「そうね……馬に曳かせるソリでも持つてくればよかったかしら」  
エレンの冗談に、パツレは説教で返す。

「お前なあ、何でファルマの我儘に付き合う。お前も仮にも一級薬師なんだろう？ そんな中途半端な態度のお前が師だとファルマがいつまでも一人前になれないんじゃないか？ あいつは次男とはいえ、薬師として独り立ちをしないといけないんだぞ」

「お小言なら聞くわ、馬車を待つ間にね」  
「くそっ」

エレンとパツレは結局馬車を待つ羽目になった。ファルマが手配した馬車はすぐにやってきた。

帰りの道で、パツレは彼の弟のことをしきりに嘆いていた。

「弟がバカで俺は悲しい。俺が病死したらド・メデイス家はどうなってしまうんだ、バカな弟に家が潰されてしまふ。なんて不運だ、こんなじゃ死ぬに死にきれないぞ」

パツレはファルマとド・メデイス家の将来について、もうお先真っ暗と言わんばかりだった。ブランシュも勉強嫌いだし、ファルマは思い込みの激しいバカだし、とパツレは呻る。

「そうかしら？ あなたはとーっても運がいいと思うけど」  
エレンはいたずらっぽい笑顔でパツレにそう言った。

「死病をわずらった俺のことがそんなに愉快か？ ん？」

パツレは反射的に挑発するが、エレンは受け流す。

「ねえ。パツレ君って、昔から何に対しても脳筋だけど守護神に対

して暑苦しいほど信心深いじゃない」

彼が物心ついた頃から、帝都にいる間、神殿に毎日のように通って礼拝を欠かさなかった。

家族が行かなくても、毎朝一人で礼拝に通っていた。

雨が降っても雪が降っても、大風邪をひいてもふらふらになりながら通ったもので、それをエレンが「そうまでして何で行くの？ 休めばいいじゃない」と言って大喧嘩になったことがある。

「当然だ。俺たちが神術を使えるのも、神力を与えてくださった守護神の加護があつてこそなんだぞ。お前は水神への信心が足りなさすぎだ！ 神罰が下つて神術が使えなくなつてしまえばいい！」

「ほら、そんなところとか」

エレンの守護神は水神だが、月に一度も神殿を訪れて礼拝をすればまだいいほうだ。信心がないわけではないが、熱心に信仰したからといって、生まれつき定まっている神力量が増えるわけでもない。守護神への祈りは朝に晩に欠してはならないというのが常識ではあつても、なかなか守れている貴族は少ない。

そんな状況からすれば、パツレは模範的すぎるほど模範的な薬神の信徒だった。

「相変わらずね」

エレンは楽しそうに微笑む。

「そんなに信仰熱心だから、今までの祈りが通じて守護神がパツレ君の傍にきてくれたんじゃない？」

「どういうことだ？」

エレンの守護神は水神であるが、パツレの守護神は薬神であり、宮廷薬師となるべく天命を背負つて生まれてきたような男だった。パツレは、自身の守護神が薬神であることを誇りに思っている。エレンがどれだけ薬師として努力をしたとしても絶対に埋められない、守護神の差。

守護神が薬神であればこそ、エレンはなれないがパツレは宮廷薬師にもなれる。

生まれつき薬神の庇護を持つパツレを、エレンが羨ましいと思ったことがないかという嘘になる。

「ううん、なんでもない」

エレンは言葉を濁した。それは羨んでも仕方がないことなのだ。当の薬神が白状しないのだから、エレンが打ち明けることでもないかと思ったのだ。

パツレとエレンが薬局に戻ると、ファルマが客をさばきつつ薬局を閉め、玄関の前に立って二人を待っていた。

「おかえり、二人とも」

「ご希望通り馬車で帰ってやったぞ、これで満足か？」

ファルマは兄のコートを受け取り、履物を二人分用意する。ちなみに、ブランシュは兄が戻る前に屋敷に帰らせていた。

「異世界薬局へようこそ、兄上。どうぞ中に入ってよ」

「お、おう」

パツレは薬局の内部に足を踏み入れる。

「これが……薬局なのか」

薬局は従来の薬局の概念を覆す間取りをしていた。また、パツレの知らない、使い道の分からない商品を置いていることにも彼は驚かされる。薬の保管方法も一風変わっていた。薬草や生薬の入った薬ビンは殆ど見当たらない。パツレは薬局一階の間取りや調剤室を見学すると、それなりに感心していた。

エレンの指導の結果ではない、ということとは明白だった。

「じゃ、二人はこっちへ」

ファルマは一階の応接机にパツレとエレンを並べて座らせる。

パツレとエレンの前には、テキストが一部ずつ配られ、飲みものと茶菓子が置かれていた。

「はいはい、気の利くことだな」

「改めて、兄上の病気の説明をするよ」

ファルマは彼らに向かい合って座る。

「何で俺がお前に講義をされんといかんだ」

パツレは不機嫌だ。

「まあ、何か言うのは最後まで話を聞いてからにしてよ。納得したら、俺の治療を受けてくれ」

「ああ。俺を納得させられればな、お前のトンデモ学説をきかせてみる」

馬鹿らしい、ノバルート医大首席のこの俺の前で何を言い出すのか、という言葉が喉にまで出てきたが、まあ最後まで聞いてからコテンパンにやつつける方がいいか、と思いなおしたパツレは茶をがぶ飲みすると、おかわりは自分で生成水を造って喉を潤した。

「その前に、二人とも腕を出してくれ」

ファルマはガラス製の注射器と試験管、駆血帯などの採血セットを取り出した。

「ってファルマ君何するの？」

針を見たエレンが、テーブルの上に出していた両手をひっこめる。  
「採血だよ、針を腕に刺して血管から血液を採る。怖かったら目をつぶってるといいよ」

「ちよっと待って、私もやるの!？」

私、何の関係ある？ とファルマにエレンは尋ねるが、健康な人間のサンプルとして協力してくれとファルマは言う。この世界では血液の状態を診るときは手に軽く傷をつけて血を出して調べるのが普通だった。それが、ナイフではなく針が登場したものだから、何をされるものかとエレンは身構える。それはパツレも同様だった。

「俺の血を取ってもいいけど、自分で採血できないから協力してよ」

「ファルマ君、そのサイケツって手技てしぎの経験あるの？」

「ある。その点は安心してくれ」

採血の経験というなら前世では経験豊富な熟練者といってよかつ

た。

先にパツレの上腕に駆血帯を巻き、静脈を浮き上がらせてすみやかに針を刺す。パツレは血管が見えにくかったので、アルコール綿でさつと拭くと、血管が怒張して見えやすくなる。

「ただ、人間の経験はないから動物実験でだけどね」

ファルマは後出しで白状した。

倫理的に、薬学者が人間の採血をしてはならないということはファルマにも分かっている。だがもう、パツレの病状が悪化して今にも脳出血が起こるかもしれないという状況にある以上、四の五の言っている場合ではないのだ。できることは、するしかない。

「おいちよつと待てお前！ やめろ！ 俺を実験台にするな！」

それを聞いて慌てたパツレが立ち上がろうとするが、ファルマは既に採血を終えてさつさと針を抜いた。

「もう終わつたよ、腕がしびれてない？」

一瞬の出来事だった。ファルマは注射器の中の血液を、抗凝固剤を入れた試験管の中に入れて涼しい顔をして振る。嫌がっていたエレンも、パツレの反応を見て渋々採血に応じた。

ファルマはスライドグラスに注射器からパツレの血液を一滴たらし、カバーグラス代わりの薄いガラスでそれを引き延ばす。すぐにスライドグラスの両端をもって振るようにして乾かす。それをメタノールというアルコールの一種の入ったガラス容器に浸ける。

「それは何のためにやっている作業だ？」

「固定といって、血球成分を、形が崩れないようにしたままガラスに貼り付けてる」

エレンの血液もスライドグラスに貼り付け、同じように処理をした。

「この状態で観察してみよう。兄上は、血液を見たことがあるか？」

「ああ、それも顕微鏡でな」

パツレは得意げに鼻を鳴らす。パツレの自慢が始まろうとしているが、ファルマは出鼻をくじく。

「それはよかった。色んな形の粒子が見えたはずだ」

ファルマの作った単式顕微鏡がなかった頃であれば、血液に細胞という粒子が含まれているといっても、パツレは信じはしなかっただろう。だが、今は誰でも信じざるをえない。

「種類が違ふものが見えたな。スケッチもしたぞ」

「それは、こんな感じの粒子じゃなかったか？ テキスト10ページを開いて」

配布されたテキストの10Pは、丸い粒子のイラストがたくさん描かれていた。エレンとパツレのテキストは全く同じものだった。手書きの筆写にしては精緻なスケッチで、微細構造まで描き込まれている。パツレは感心した。確かに、顕微鏡でそう見えたとおりに描かれている。

ファルマが帝国薬学校総合薬学部の創設にむけて、テキストを作った膳写板で複製しておいたものが役立っていた。

「ちよつと待て。こんなに細かい構造が、どうやって見えたんだ？」

「倍率の高い顕微鏡で見れば見えるよ」

ファルマは箱に入った顕微鏡をパツレとエレンの前にすつと出す。それは、メロディ尊爵に依頼した質の良いレンズによって500倍の倍率を実現した、真鍮製の複式光学顕微鏡だった。

ステージの下に鏡をセットして、集光機能もついている。

「なっ、何だこれは！」

「これは単式顕微鏡のレンズ部分を更に拡大して見えるようにした複式顕微鏡だ」

「何でお前がそれを持っている！ 父上に取り寄せてもらったのか？」

帝国薬学校の総長であるブリュノのコネで性能のよいものを取り寄せたのだらうと、パツレは信じて疑わない。

「まあ色々あってさ」

実際はファルマが設計図をひいて職人に作らせたものなのだが、ひとまず話が進まないのうやむやにしておいた。



「ところで、血液が全身に運んでいるものは何だと思う？」

「栄養だろう」

パツレは少し考えて答えた。人間の体液は血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の4つからできているという四体液説を、ノバルト医薬大では教わっている。そして、血液を容器に入れて放置しておく、透明な上澄みと、赤黒い沈殿に分かれることも知られていた。血液は脾臓できれいに浄化されていると考えられていた。この体液のバランスが悪霊によって崩れて、人は病気になるのだと教わってきた。「その通り。栄養と、それから呼吸によって体内に取り込んでいる酸素だ」

酸素という元素は、パツレも知っている。

「血液は大きくわけて血球成分と、血漿成分と、そのほかの成分から成っているんだ。

血が赤く見える原因となる赤血球…これは体のすみずみにまで酸素を運ぶ役割を果たす粒子だ。

無色の白血球…これは細菌を殺したり、免疫に関係する粒子。あ、免疫はまた別の機会に説明するよ。

そして血小板…血液を凝固させて出血を止める成分だ」

なるほど、とエレンは頷きながらテキストを読み込む。できたてほやほやのテキストを読んで、エレンはファルマの努力の成果に感動した。

「へー！ そうなんですネー、ただ赤い液体に見えて、すごいんですね！」

ロツテが絶妙なタイミングで相槌を打つ。

セドリツクとロツテも、少し離れた場所からテキストを片手に講義に耳を傾けていた。

「これらの粒子を細胞という。血液成分だけじゃなく、ありとあらゆる生き物は細胞という構造を持っているんだ」  
「なるほど」

パツレは顕微鏡での観察によつて、植物であろつが動物であろつが、あらゆる組織片は確かにファルマの言う小さな小部屋のような構造を持つてゐることを知つていた。それを卒業論文の実験の中で検討したこともある。

生物は細胞からできていると言われても、納得できることだつた。「でも、多種多様な血液の各成分を作り出しているおおもとの、血液のもととなる細胞は、たった一種類なんだ」

ファルマは、様々な血液中の成分が描かれてゐる中の、一番上流に描いた粒子を指さした。

「それは血液を造る幹細胞、造血幹細胞と呼ばれてゐる。その幹細胞が赤血球、白血球、血小板などの血液成分を作つてゐる」

「ふむ」

作り話にしてはよくできている、とパツレは聞き入る。

「じゃ、今の話を聞いて、兄上の出血が止まりにくくなつてゐる原因は何だと思ふ？」

ファルマはパツレに逆に質問をする。

パツレはファルマに付き合うことにした。歯茎から出血しやすく、そして血がとまりにくく、痣がでやすくなつてゐる原因だ。

「血小板……出血を止めるはずの成分が、できなくなつてゐる？」

「その通りだ」

ファルマは大きく頷いた。兄の飲み込みがよくて助かつた。

「造血幹細胞から各血液成分に成熟してゆくルート、兄上の場合には好中球（白血球の一種）を作り出すルートに、異常が生じてゐるんだ」

「それじゃ説明がつかないぞ」

パツレはすかさず指摘をする。

「そんなことが原因なら、何故ほかの成分が減るんだ？ 異常が起こつてゐるのは一部分のルートなんだろう？ 血小板や赤血球とやらを造るルート、ほかの種類の赤血球や白血球を造るルートは無事なんだろう？」

すぐに知識を吸収して反論してくるあたりは、さすが優秀な兄である。

「異常な白血病細胞は無制限に増えまくる。そいつらに造血の場所……主には骨髄なんだけど、そこが占拠されてしまつてスペースが足りず、ほかの成分が作れないからだよ。だから、赤血球が減つて貧血になり、酸素が体中に運ばずに息切れがする、白血球が減つて細菌に感染しやすくなる、血小板が減つて出血が止まりにくくなる」

「……！」

すべての理屈がぴたりとあつて、パツレは震えがきた。

「今、言ったことが本当かどうか、兄上の血液成分とエレンの血液成分を比較して調べてみよう。とはいっても、血球成分が透明な状態では見えにくくて観察しづらい。そこで、細胞に色をつける。これを染色というんだけど、時間がかかるから昼食でも食べよう」

ファルマはパツレを3階の職員休憩室に通す。

ロッテとセドリックによつて、昼食が準備されていた。

五人で食卓を囲み、ファルマも歓談しながら時々実験室に染色の作業に行く。パツレはいつもの饒舌ぶりがどこへやら、口数は少なくむつとりとしていた。新たな知識に触れ、ショックを受けているのだらう。

そんなパツレの心境を慮つたエレンが場を和ませる。

「このオニオングラタンスープ（soupe à l'oignon gratinée）、体が温まるわー。ロッテちゃん料理も上手になつたわよねー、寒い日にぴったり」

「えへへ、セドリックさんにも手伝ってもらいました！ おかわり、たくさんありますよ！」

褒められたロッテが照れていた。彼女は最近、薬局のランチづくりにハマっている。食事を終えたところで、エレンとパツレはファルマを待つ。

ファルマは四階の実験室から三階へスライドグラスを持って降りてきて、結果を説明しはじめた。

「うまく染まったよ。赤血球が赤、血小板が青、白血球のうち好中球が赤紫、好酸球が赤、好塩基球が青紫に染まっている、こっちがエレンの血液。こっちが兄上の血液だ」

「そんなに都合よく染まるものなのか？」

などと半信半疑だったパツレは、顕微鏡を覗いて絶句した。

確かに、染色という工程によって細胞には着色がなされている。適当に色をつけたというのではなく、きちんとむらなく色分けがされているのだ。

「エレンの血液と、兄上の血液。違いが一目瞭然なのがわかるか？ 紫色をした血球の内部に、針が集まったような構造が見えるだろう。それは、アウエル小体という構造で、エレンの血液にはない。見えるか？」

「……ああ、確かに。見える」

パツレの声はかすれていた。

「それが、白血球になりそこなった白血病細胞なんだ」

< i 1 6 6 4 3 5 — 2 4 9 6 >

パツレはまた、エレンのものと比べて、全体的に赤血球や血小板が減っていることにも気づく。パツレは自身の血液の拡大像をその眼に焼き付けていた。いやというほどの証拠を突き付けられて。

「皆で食事をしている間に、俺は兄上の全血球を計算していたよ。赤血球、白血球、血小板が減少、そして特徴的な白血病細胞がみられた。骨髓を刺して診断するのが本当のところだけど、痛みもあるし、もう末梢血にまで白血病細胞があらわれている。だからこの結果と合わせて」

淡々と、逃げる隙も与えず理論的に話を詰めてゆくファルマに、パツレの手足はだんだんと冷たくなってゆく。

「俺は急性前骨髄球性白血病と診断する」

「……」

エレンもまた、言葉を失っていた。ファルマは患者を診るとき、大抵の場合は診眼を使っている。それは診療の簡略化に繋がるからだ。

だが、診眼を使わなくても病気を立証してみせ、患者に納得させることができる、診断の方法を知っている。何でもかんでも薬神の神力で片付けてしまわなくとも、たとえ神力を失ったとしても彼は診断ができるのだとエレンは見せつけられた思いがした。

「兄上、この病気を治療しなければ、兄上は数か月以内に死ぬ」

ファルマが無言になったパツレの肩にぼんと手を添えると、パツレは脱力し、椅子から崩れ落ちてしまった。パツレはもう完全に、ファルマの示した結果に反論することはできなかった。

人智をはるかに超えた神の知識、パツレにはそうとしか思えなかった。

既に口を差しはさめる段階ではなくなっている。

「これから治療方針を説明する。100%効くとは保証できない。治療は辛いだろう。それでももし、兄上が俺のいう事を信じてくれて、納得ができれば……」

もはや、ファルマの中には頼りない弟の面影はない。

パツレにはファルマがすっかり別人になってしまったかのように感じられた。

「今すぐ治療をさせてくれ」

### 3章11話 診断と手順（後書き）

エレオノーラと書いていましたが、以後エレンの本名はエレオノーラにします。

本頁は津田彷徨先生に考証をしていただきました。ありがとうございました。

#### 【9 / 26 追記】

エレンとパツレは散歩をして帰ったという記述がありました。これも脳出血のリスクから考えると危険なので削除して、馬車で帰ったということになりました。

### 3章12話 寛解導入療法開始（1～4病日目）

「治療方針を説明……いや、一緒に考えよう、兄上」

ファルマは椅子から落ちたパツレを助け起こす。

パツレの薬師としての立場を尊重して、一方的でおしつけの治療にならないように配慮した。

「あ、ああ……」

「お茶を淹れましょうね」

セドリックが気をきかせて、温かいお茶をパツレとファルマたちに給する。ロツテがささずシヨコラを出した。とっておきのやつだ。パツレはそれを飲んでようやく心地ついた。

「お前、本当にファルマなのか？」

「そうだよ」

「どこでそんな知識を。エレオノールに習った訳じゃないだろう？」

「落雷を受けた時に、夢を見たんだ」

ファルマは無難な説明にしておいた。

物質創造能力や神力を見られなければ、それで誤魔化せる筈だと考えたからだ。

パツレはシヨックを隠し切れない。

「それは、天啓ってやつじゃないのか……何の神から天啓を受けたんだ」

「俺にもよくわからないんだ」

パツレは思いつめたように立ち上がる。そしておもむろに外に出てゆこうとした。エレンが彼の背に呼びかける。

「ちよつとどこに行くの!？」

「俺も雷に当たってくる!」

「そんなの死ぬわよパツレ君!」

本当にバカなんだから、とエレンはツツコミが間に合わない。だ

が、パツレはやりきれないのだ。

「そんな簡単に雷には当たらないよ」

ファルマはパツレの一途さに心を抉られながら、彼が外に出ていこうとするのをとどめた。

「エレオノール、お前は何とも思わないのか？　今まで俺たちが学んできた薬学は……一体何なんだ。ひよつとすると、無意味だったんじゃない」

「無意味じゃないよ。無意味なんかじゃない」

ファルマはパツレの言葉の上からかぶせて否定した。

「今までの薬でも、効いたものもあるだろう？」

「ファルマ君の言う通りよ。でも、効かないことのほうが多いわ……」

エレンはパツレを代弁した。

「ファルマ、お前が夢に見たことを全部書き出せ。それを俺たちに聞かせろ」

「うん、だからそれを今やってる。そのテキストがそうだ」

ファルマは、二人の一級薬師の前で講義を続けることにした。

「じゃ、続けて説明するよ。白血病には慢性と急性がある。急性の期間が長くなって慢性になるわけじゃない。まったく違う病気だ。慢性は、造血幹細胞自体に問題が生じている状態。急性は、造血幹細胞から各血液成分になる途中に異常が生じている状態だ、兄上の場合はどっちだ？」

出題形式にすることによって、記憶にひっかかりをつくり理解を深める。

パツレは一度言ったことはすぐに吸収してしまう優秀な学生だった。「急性だ」とパツレが答え、「慢性じゃないの？」と、エレンは逆を述べた。

「急性が正解だ。この白血病細胞を取り除く方法は二つある。それは何だと思う？」



ファルマはテキストの、造血幹細胞から血球やその他の成分が成熟してゆくイラストを示した。

「悪さをしている白血病患者細胞を殺す」

パツレはすぐ、そちらの方法を思いついたようだ。

「正解だ。そしてもう一つの方法は？ エレンも考えてくれ」

「降参、どうすればいいの？」

エレンは諦めが早かった。二人とも答えに詰まったので、ファルマが答えを出した。

「白血病患者細胞が正常な白血球になれるようにする」

「そんなことができるのか」

パツレが興奮して身を乗り出す。

「異常な白血病患者細胞が、正常な白血球になれるの？ 異常だったんでしょ？」

エレンはそんなのでいいのかしら、とファルマの方針を疑っている。

「白血球になれない状態の細胞が異常なわけで、白血球になればそれは正常なんだよ」

白血病患者細胞を全て白血球にしてしまえば、それが結果的に白血病患者細胞を取り除いてゆく。白血病患者細胞が白血球へ成熟を促す薬剤は、全トランス型レチノイン酸（ATRA）という物質だと説明を加える。

「そうなの！？」

賢くなった気がするわね、とエレンは眼鏡を拭きながら頷く。

「ちょっと待て、正常とはいえ白血球が血液の中に増えすぎるのはまずいんじゃないか？」

パツレは察しがよかった。

「造り出された血球細胞はずっと血液中に溜まるわけじゃない。血球細胞には寿命がある。白血球も数日で死ぬ、脾臓で破壊されてね。でも、それがうまくいかなかったら、レチノイン酸症候群という状態になる」

この急性骨髄球性白血病（APL）の特効薬であるATRAには、副作用がある。

白血病細胞からATRAによって分化（成熟すること）を促され大量に作られた白血球は、パツレの言うように血管を傷害したり、心不全などの原因となることがある。

稀に起こる、命にかかわる副作用だ。

「そうか……」

しかし、薬に副作用はつきものだ。恐れていては、治療することができない。

「というわけだ。まず、白血球への分化誘導（成熟を促すこと）をするATRAを飲む」

ファルマは二人の前に右掌を差し出した。

「それと共に、抗がん剤を注射で投与して白血病細胞を破壊する」  
左掌も差し出した。

診眼では、パツレの場合ATRAだけでも治ると判定が出ている。だが抗がん剤を併用することで再発リスクを極力下げておきたい。ファルマはそう考えた。

「二つの治療薬で、徹底的に白血病細胞を叩く」

そう言いながら、ファルマは両手を合わせばんと合わせた。

「これがこの白血病の治療方針だ」

詳しい投薬スケジュールは後ほど説明する、とファルマは言い添えた。

大まかな流れから順を追って説明してゆけば、頭のよいパツレは理解するだろう。ファルマはそう思った。

「つまり、どうなの？」

エレンが結論を尋ねる。

「つまり、完治の可能性は十分にある」

ほっとしたエレンが頬を緩ませて嬉しそうだった。パツレも、少

なからず希望を持てたようだった。

ロツテとセドリックも、顔を見合わせて笑った。

「じゃ、寛解導入療法に入るよ」

ファルマは薬局内でパツレに薬と水を差し出す。カプセル剤にしたATRAだ。

「これから毎食後に飲んで。とりあえず今、昼食後だから」

「もう飲むのか！？ 心の準備が……」

と言いながらも、パツレは差し出された薬を飲み干した。食道のあたりを不安そうにさすっている。

「よし、これで治療は始まった。帰ろう、兄上、ロツテ。今日は馬車でのんびりとね」

パツレには脳出血が起こりやすくなっているので、そうするのだという。

「ATRAを飲んで数日で出血症状は改善するはずだよ。でもATRAが効いてくるまでは、絶対安静だ」

「ATRAだけで、抗がん剤とやらは飲まなくていいのか？」

パツレが、処方忘れではないかとファルマに問う。

「イダルビシンは注射で投与する、これは自宅でやろう」

安静にして、雑踏に面した場所ではなく清浄な部屋でやるべきだとファルマは説明する。帰り道、疲れきった様子で馬車に揺られるパツレに、ファルマが遠慮のない質問を投げかけた。

「兄上つて、今彼女いる？」

「何で今その話を？」

「必要な情報だから」

「先週別れたな。25人目だ、いい女だったが、あっちの方がおとなしすぎて不満でな。ああ、ちなみに避妊はしているぞ」

（あっちの方の話は聞いてないよ兄）

いずれにしろ、パツレが充実した私生活を送っていたことには変わりないようだった。それはパツレが死期をさとり彼女のためを思

って別れたのかもしれないし、ただ単に別れたかっただけかもしれないが。とにかく、ノバルートに残して帝都にまで追いかけてくる彼女はいないようで安心したファルマだった。

パツレの彼女や避妊と聞いて、同じ馬車に乗っているロッテはぼうつと顔が赤くなつて、話を聞いていないふりをした。

「ATRAを飲んでいる間、彼女と付き合わないでくれ。投薬中に彼女を妊娠させると、子供に奇形が生じる可能性がある」

ATRAは催奇性（奇形を生じる可能性）がある薬だった。

投薬中は女性はもちろんのこと、男性も避妊をしなければいけない。

「そうなのか、今いないから気にしなくていいぞ」

「約二年間だ」

二年間の禁欲生活を強いられるが、命にかえることはできない。

とパツレを諭すファルマだったが、パツレはそれを気に掛ける余裕はなかったようだ。

… … …

「何だと、パツレがそんな奇病に……」

大学から戻ったところを見計らって書斎にやってきたファルマの報告を、ブリュノは耳に入れた。ファルマは白血病がどのようなものか、幹細胞や白血球の型とは何かなどをはじめ、その治療方針もブリュノに詳しく解説した。基礎知識のあるブリュノは、パツレに説明するより短時間でパツレの病状を把握した。

そして話を聞くほど、ブリュノは狼狽していた。

命にかかわる病気なのだな、というブリュノの問いに、ファルマは頷く。

「出血が起これば明日の命も知れない状態です。一刻を争う状況でしたので、既にATRAを服用する治療に入っています」

「そうか……そのような血液の病気があることは知っておったが…

「まさか元気だったパツレが」

「兄上のことは、私に任せてください」

「ああ。ではお前が治療にあたってくれ、頼む」

父親として、そして一人の薬師として愛する息子の治療にあたりたい気持ちとぐつと抑えて、ファルマに治療をゆだねる。そのほうがパツレの生存確率は上がる。

「何か、私にできることはないか。用意すべきものはないか、私の手は必要ないか。何でもしよう」

「あります。屋敷の使用人の中で、兄上と血液の型が一致している者からの採血をお許しください。不足した血小板や血液凝固因子を補うための輸血に使えます。使わないかもしれませんが、備えのためです」

（人外の俺の血を輸血すると、何が起こるかわからないからな……）  
切実な問題だった。最悪、ショック死してしまうこともありえる。

血縁者の輸血はパツレの免疫が反応してしまう可能性があるので、リスクを避けるためにブリュノからの献血はパツレに使えない、非血縁者の使用人の血液を使う。

「うむ。彼らからの同意があれば許そう」

「それから、化学療法が効かなかった場合、もしくは再発した場合、造血幹細胞移植を行わなければいけないかもしれませんが。父上と兄上の白血球の型は、適合率1%と非常に珍しいのですが一致していません。また、ブランシュも一致しています。ですので、もし移植をすることになった場合、まず父上、次にブランシュの順で協力してもらえますか」

父親、母親の白血球の型がパツレのそれと一致している確率は珍しいのだが、近親婚なども珍しくない貴族社会では、父子で一致する確率も高くなっているのだろう、とファルマは考察する。ブランシュはまだ子供なので、採血の負担が大きく、できればドナーとするのは避けたい。

「勿論だ。薬学の発展と患者の治療のためには命など惜しくない、

そう以前に言っただろう」

ブリュノは思い切りよく快諾する。ブリュノが理解のある人間でよかった、とファルマは思う。ブリュノからはいつも精神的な支えを得ていた。

「お前の計画している治療で、どのくらいの割合で完治が見込めるのか」

いちかばちか。数%だろうかとブリュノは覚悟を決めていた。

ファルマは包み隠さず、ありのままの知見を伝える。

「まったく予想外の出来事が起こらず、予定通りに進めば、80%の確率で完全寛解に入るかと思えます。完全寛解というのは完治という意味ではありません。白血病細胞が減って症状が消え、普通の生活ができる状態になる、ということです」

「9割だと？ そんなに期待ができるものなのか！」

「はい。ATRAは分子標的治療薬といって、抗がん剤と違って狙い撃ちで白血病細胞に効きます、他の正常な細胞を傷つけない、画期的な薬といえるでしょう。ですが完全寛解に入っても、白血病細胞が一つ残らず完全に消えるわけではありません。再発の可能性もありますし」

「難しいのだな……」

「困難です。それ以前に投薬中に脳や重要な臓器で出血が起これば、私には手がつけられません。病態を制御できるかは断言できませんが……治らない病気ではない、ということです」

ファルマは医者ではないし、臨床の経験も知見もほぼないといっている。前世の経歴からいって彼は薬剤師としてより薬学者としての側面が強く、治療より創薬の方が得意だった。だから細かい疾患の部分は分らないところもあるし、探り探り立ち向かわなければならぬ部分もある。

がん治療は油断がならず、決して楽観視はしない。薬はあっても、未経験だ。

気を引き締め、全身全霊で治療に当たる。

「家族全員の協力が不可欠です。根気強く治療にあたり、免疫力を失うであろう兄上が感染症にかからないようにしなければいけません」

「ああ、わかった。家族全員でパツレの完全寛解を目指そう」  
ブリュノが言った。

父の部屋を辞去しファルマが自室に戻ろうとしたとき、パツレが自室を出てこそそと使用人の目を盗み、ド・メディシス家の屋敷内のある場所へ向かう現場を見かけた。

（兄？ いったいどこに行くんだ？）

ファルマは気になって、あとをつける。人目を気にしている様子から、やましさが伝わってくる。

彼が入っていったのは、屋敷の一角にある礼拝堂だった。そこには、守護神の像が安置されている。外出禁止と言われて神殿に行けないので、家の礼拝堂で薬神に祈るようだ。

（本当に信仰熱心だな……兄。恐れ入るよ）

礼拝堂へと入ってゆくパツレの後をファルマは追った。

パツレは薬神の神像の前に跪いた。

ファルマは目を閉じて祈る彼の背後をそつと通り過ぎ、薬神の神像の真裏に隠れた。祈りが聞こえてくる。

「守護神様、薬神様。何故……俺をこんな目に遭わせるのですか……薬神様への俺の信心が足りなかったのでしょうか、体に力が入らず、日に日にいうことを聞かなくなってきました、呼吸も困難になるし、弟の薬は本当に効くのでしょうか。話を聞けば聞くほど、俺にはそう思えません……」

ファルマはパツレの思いつめた言葉を聞いて、パツレは家族の前でこそ気丈にふるまっていたが、彼は相当に病気で苦しい思いをしているのだと知った。

がん治療は、患者が生きることが諦めたらうまくいかなくなる。ファルマは、パツレをどうすれば元気づけられるのかを思案した。

そして、

（兄を励ませるのは、俺じゃだめか……薬神じゃないと）

ファルマは薬神の神像の裏に隠れたまま、神像に手を触れる。手が触れた途端、神像は青白く輝いて反応する。神殿の彫刻と同じ素材でできた神像は、ファルマの気配に反応するのだった。

パツレは、目の前の薬神の神像がいきなりぼうつと光りはじめたので飛び上がった。

「なっ!？」

そんなパツレを神像の裏から見守っていたファルマは、両手を丸く丸めたその中に6フツ化硫黄を物質創造し、それを20%の酸素と混ぜ、共にゆっくりと吸い込んだ。

そして、ゆったりとした口調でパツレに話しかける。

『パツレ……、聞こえるか』

威厳のある低い声が、無人の礼拝堂の神像から発せられた。

神像が喋りだしたように感じたパツレは、驚いて神像を見上げる。

「こ、これは……薬神様!？」

『汝のことは、いつも見ておるぞ』

パツレは床に頭をこすりつけた。6フツ化硫黄を吸い込んで声を出す、声が低くなるのだ。ヘリウムガスとは逆である。

「守護神である薬神様のなさることには間違いがないことは存じています、ですが何故、俺にはなく弟に天啓を授けたのですか。この試練は何のために……」

俺だって、弟のように天啓を受けたかったです、とパツレは言葉を読み込んだ。

『汝の治療は、汝にはできぬであろう。難病を克服し、生還して、すぐれた薬師となるのだ……』

全てを聞き終わらないうちに、パツレはばつと起き上ろうとして意識を失った。ファルマが神像の裏から出てきてパツレを支えた。

「起立性低血圧か」

ファルマはパツレの身を案じた。



次にパツレの目が覚めたときには朝になっていた。彼はベッドの上で呆然としながら起きあがる。

「夢だったのか……？」

パツレはがつくりと肩を落とした。

「ん？」

しかしそれが夢ではないということは、礼拝堂で膝をついた時にできたであろう両膝の青あざによって確認できた。

「俺の夢にも薬神様が来てくださった……？」

パツレは、じんわりと感動がこみあげてくるのを感じていた。

「はっ、そうか！」

パツレは天啓を思い返して気付いた。謎めいた薬神の天啓、「汝の治療は、汝にはできぬ」という言葉の意味。確かに、注射も採血も、自分の腕にはできない。この病気の患者は自分自身で治療ができないのだ。だからファルマに天啓を授け、パツレのために治療にあたらせようとしている。

「俺を救済するために……それで俺ではなくファルマに天啓を！？  
そういうことだったのか」

守護神からの庇護と激励をつけたからには、もう少しだけ諦めずに頑張ろう。そう思い直したパツレだった。

「今日の気分はどう？」

ファルマは2病日目の午後、パツレのために抗がん剤と注射を準備してやってきた。

「悪くなっている気はしない。でも、よくなっている気もしない」  
「午前の採血の結果を見たよ。少しずつ、白血病細胞は減り始めているよ。ATRAによる白血病細胞の分化誘導は、ちゃんと効き始めている」

ファルマはパツレを励ました。

「大きい兄上、元気だして？　はやく神術の特訓できるようにし

よ？」

「ブランシユもマスクやエプロンに帽子をかぶって、手指を消毒し、感染症対策を施されファルマに付き添ってパツレの部屋にやってきた。」

「お前らをしごけなくて残念だよ」

パツレは強がり言うが、その声には張りが無い。

「今日から、抗がん剤イダルビシンの投与を追加で始める。白血病細胞のうちATRAに耐性を持ったものがでるかもしれないから、それを叩く。分子標的治療薬であるATRAと違って、抗がん剤には細胞毒性がある。だから白血病細胞も殺すし正常な細胞も殺す」

「正常な細胞を殺す……だと？」

「副作用が出るかもしれない、それは覚悟してくれ」

投与した後、数日で現れる副作用は悪心、嘔吐、口内炎、骨髄抑制、脱毛などだとファルマは言う。副作用といっても全部が全部出るとは限らない、個人の体の状態による。まったく平気な人もいれば、苦しむ人もいる、とファルマは伝える。リスクばかりを告げられて、パツレは溜息をつく。

「強い薬なんだな……でも、それだけ効くのか。そんな薬がこの世にあるだなんて」

治療を受けることになるパツレは同意したものの、気が滅入ったらしく俯いた。

「ああ。それから、今から始まる抗がん剤の投与中は安静にして、この屋敷から出ないでくれ」

「ずっと監禁生活か？」

「いや、ずっとじゃないけど、投薬時はね。これから抗がん剤によって造血が抑えられる。つまり、白血球が減るからありとあらゆる病原体に感染しやすくなる。俺が屋敷全体をきれいにしておいたから、屋敷の中は比較的安全だけど」

「屋敷の中をきれいに……？ どうやって」

パツレの就寝中に、ファルマは薬神杖で疫滅聖域を展開していた。

空気中の細菌、ウイルスを殺す神技だ。ド・メディシス家が巨大な無菌病棟と化したわけである。

「どうやって屋敷全体の病原を殺した？」

「いや、その……」

ファルマは今度説明するといつてはぐらかした。

「とにかく、まあ屋敷の中は安全だ。どうしても外に出たいときは、俺と一緒に出かけよう」

（俺の周りの聖域が、空気中の細菌やウイルスを殺してくれるはずだからな）

無自覚に聖域を展開しているファルマは、歩く無菌室のようなものである。

「何でお前と？」

「あ、いや、急変したらいけないから付き添うよ」

「お前には世話になるな……」

パツレはしみじみと言った。

「小さい兄上だけじゃなくて、私にもきつとお世話になるよ？」

ブランシュが横から口を挟んだ。

「ああ、お前にもな」

パツレはブランシュの頭を撫でた。えっへん、とブランシュは胸を張る。

「そう水臭い事いうなよ、俺たち家族じゃないか。お互い様だ。兄上だって、俺が病気になったら頼むよ」

「ああ、任せる。にしても、薬師として何もできないこの二年間は痛いな……」

「兄上は頭がいいからすぐ挽回できるよ。それに、投薬と休薬を繰り返すから、外出もできないわけじゃない」

「ファルマ。治療で軟禁状態の間、暇だ」

「エレンがお見舞い兼看病に来るって言ってたよ。ゲームでもしたら？」

ファルマは薬局の業務があるので、昼間はエレンがパツレに付き

添う日もありそうだ。

「お前の書いた薬学の本を暇つぶしに読ませてくれ」

「分かった、読んでよ。どんどん書くから」

薬学を学ぶことがパツレの励みになるのなら、急いでテキストを執筆しようとファルマは思った。

「でも、この病気になって一つだけいいこともある。これで、どんな実習でも学べなかった難病患者の苦しみが、これから身をもってわかるってわけだ」

そういう考え方もあるのか、とファルマは衝撃を受けた。

パツレはすっかり、持ち前のポジティブさを取り戻していた。

「どんな薬師も、患者になれるわけじゃない」

そう告げたパツレはいい笑顔をしていた。眩しいな、とファルマは思う。

「何事も勉強だ」

「一緒に頑張ろう、兄上」

ファルマは、ブリュノと交代でパツレの部屋で寝るようになった。急変に対応するためだ。ATRAと抗がん剤併用の寛解導入療法4病日目のことだった。

夜中、ファルマは嫌な予感がしてがばっと目覚めた。

パツレのもとに駆け寄ると、呼吸に異変が起こっている。パツレは苦しそうに呻いていたところだった。

「兄上！」

迷う間もなく、診眼を使う。

パツレの両肺に、光が見えた。

（出たか……！）

ATRA（全トランス型レチノイン酸）の副作用が出たのだ。パツレが懸念した通り、ATRAによって白血病細胞から一斉に分化した大量の白血球が、肺の血管をおかす場合がある。

それが原因となって、肺出血があらわれた。

肺出血は呼吸困難となり、致命的となりうる。

ファルマはパツレの口に手を当てた。

「酸素合成」

肺に酸素を送り込んで、呼吸を助ける。それと同時に、副作用に備えて準備をしておいたステロイド剤をパツレに緊急に点滴で大量に投与し、白血球による炎症を抑えるステロイドパルス療法を始める。

たった一人で処置をしている間に、ファルマは恐ろしくなってきた。

（もし、出血がおさまらなければ……死亡？）

大切な家族を失うかもしれない。

パツレの肺にともった光の色は、紫。

生死の境界線上を彷徨っている色だった。だんだんとその光は赤みを帯びてくる。

ブリュノを呼ぶために、枕元に置いておいたハンドベルを鳴らした。人手が必要だ。

「赤くなるな！ 生きてくれ……！」

ファルマはパツレに叫ぶ。

彼の手の下で、一つの命がといえる音が聞こえてくるかのようだった。

### 3章12話 寛解導入療法開始（1）4病日目（後書き）

#### 【謝辞】

本頁の一部は医学系研究職の珠樹先生に査読・考証いただきました。また、下記訂正事項について *missima* 様にもご指導いただきました。

どうもありがとうございました。

訂正（10/1）：父からの輸血をと当初書いてありましたが、父から輸血を受ける場合は白血球による免疫反応（移植片対宿主病）が起きるので、非血縁者からの輸血に訂正しました。造血幹細胞移植の場合は、HLA型が合っている場合は移植ができます。

### 3章13話 寛解導入療法（4～6病日目）

パツレが急性性前骨髄性白血病であると診断をつけ、すぐに治療を開始したファルマは、手始めに白血病細胞を減少させる寛解導入療法を行っていた。

診断後一日よりATRAを飲み始める。白血病細胞を正常な白血球へと変える分化誘導の目的でだ。

二日目より、ATRAの補助としてイダルビシン（抗がん剤）を投与。

その、ATRAとイダルビシン併用療法から二日後、つまり治療四日目のことだった。

順調に白血病細胞の数を減らしていたパツレに重篤な副作用がおこった。

ATRAによって一斉に白血病細胞が白血球へと成熟。血中に急激に増えた白血球は炎症物質を出し、パツレの肺をおかし、肺出血と呼吸困難を引き起こしたのだ。

ATRAの副作用、およそ20%強の患者に発生すると言われる、レチノイン酸症候群（分化症候群）の発生である。

パツレの肺では出血が起こり、ファルマはメチルプレドニゾロン（ステロイドの一種）の大量投与（パルス療法）を開始している。

これを切り抜けたとしても、肺出血が起こった患者の五年生存率、つまり治療開始から五年後生存している割合は、30%程度だ。短期的にも長期的にも、危険な状態にあることがわかる。

「ほかに何かできることはないのか、俺は！」

薬だけしか使えない自分はなんて無力だ、とファルマは痛切に思った。

ファルマは左手で物質創造を行い酸素をパツレに供給し続ける。無尽蔵の神力によって不眠不休で持続すれば数日単位では酸素を供

給することはできるだろう。

その間に、ステロイドが出血を止めるのを祈る。  
でも、それだけでパツレが快復するとは思えない。

「そうか……」

パツレの呼吸音を聞きながら、ファルマは思い出したことがある。  
薄暗い室内で、ファルマは右手を前に突き出した。肝心なものを、  
自分の部屋に置きっ放しにしていた。

手放してはならなかったものだ。

「……来い！」

薬神杖は屋敷の内壁を透過し、猛烈な勢いで飛んできてファルマ  
の掌に吸いついた。ぱしっと軽快な音がした。持ち主のもとに参じ  
た杖を、彼は握りしめる。

（これはできれば使いたくはないけれど……やるしかない）

ファルマは、“免疫力を高め薬の効果を最大限に発揮する”とい  
う、薬神杖固有の秘術を思い出した。

免疫力の増強は、感染症であつたペストの時には非常に有効だつ  
た。

しかし白血病において、免疫力の増強というニュアンスがさらに  
白血球を活性化させるといふ文脈でとらえると、状況は悪化の一途  
をたどる。

肺出血は強く現れるだろう。

「やるしかない」

それでももう、試してみるかみないかの判断の瀬戸際まできてい  
た。迷っている時間はない、放っておけばパツレは力尽きるという  
ことを、診眼は明らかにしている。

ファルマは診眼を通して、治療法としての秘儀の効果を事前に諮  
ることにした。

これまでファルマは治療薬を決定するために診眼を用いてきたが、  
秘儀の効果も見積もりができるのではないかと考えたのだ。

「頼む、薬神杖。教えてくれ」



（”始原の救援”を使うとどうなるか教えてくれ）  
診眼を通して、物言わぬ薬神杖は応えた。赤かった光が青へと転じる。

状態は改善するらしい。

薬神杖の力は、やはり患者の延命を図るようだった。

「よっし！」

秘儀は効く。ファルマは恐れずにパツレの体軸に対して水平に杖を構え、パツレに押し付ける。

そして静かに瞑目した。

「”始原の救援”」

薬神杖が輝き、パツレの体表に薬神の聖紋が現れる。

それはパツレを優しく包み込むかのように薄く発光を始めた。

「う……う」

パツレが呻き声をあげ喀血した。それでも出血が少しおさまってきたのか、パツレの呼吸の粗さがとれてきている。

（よし……処置のための時間は確保できたぞ）

ステロイド療法を行っているので、肺出血は2〜3日でおさまるはずだ、そう信じたい。

「ファルマ様、何かお手伝いを。お部屋に入ってよいでしょうか」

先ほどハンドベルを鳴らしたので、真夜中にもかかわらず使用人たちが起きてきた。ロッテの声も聞こえる。

「一人二人、手伝ってほしい」

「かしこまりました」

ブリュノも飛び起きてやってきた。パツレの免疫力が低下している状態がブリュノにはよくわかっていたので、感染対策として手洗いと着替えをしてやってきた。

「父上、手がふさがっていますので手伝って下さい」

ファルマはブリュノに指示をする。彼は左手でパツレに酸素を供給しているので、片手がふさがっているのだった。

「ああ、任せろ。お前はパツレの口に手を当てて何をしているのだ

？」

「呼吸がしやすいよう助けています」

本当は挿管（チューブを挿して気道確保をすること）したほうがよいのかもしれないが、人間相手にやったことがないので躊躇した。薬神杖を持ったファルマは、ブリュノには全身が発光して見えた。その神秘的な光景に、ブリュノは圧倒された。

「言う通りに準備して下さい」

ファルマはパツレの前から離れず輸血、輸液の準備や器具の準備をブリュノに言いつける。ブリュノは有能で、ファルマが用意していた麻酔を打つ準備などを手際よくこなす。

「ありがとうございます、助かります」

助手の存在の有難さを、ファルマは思い知る。

鶏鳴が夜明けを告げる頃には、不眠不休で処置にあたってきたファルマは疲労困憊だった。

その甲斐あって、パツレの容体は少しずつ落ち着いてきている。

ファルマがうつらうつらすると、物質創造が途切れる。

すると酸素不足になったパツレの呼吸が苦しそうになる。また、時折血痰を吐いたり喀血するので、それで喉を詰まらせないようにする必要もあった。

「ファルマ」

ブリュノの声にはつと目を覚まし、物質創造を再開する。

「すみません、意識が落ちていました」

「無理をしているから……これを飲め」

手製の体力回復を図るポーションを調合し、ファルマに差し出した。薬の効きにくい身体になっているファルマだが、喉を潤すためにありがたく貰う。

「嬉しいです、ありがとうございます」

（あれ……？）

暫くすると眠気が吹き飛び、気力が充実しはじめた。気のせいで

はない。

「効いた……」

（エレンのは効かなかったのに？）

過労のため薬局での居眠りが多かったファルマに、栄養ドリンクだといってエレンから同じ組成のものを貰ったことがある。だがエレンのものは、精神的なものより大きな効果を感じられなかった。「どうした」

「いえ、父上の薬はよく効きますね」

ブリュノの守護神は薬神。だからファルマと相性がいいのだろうかとファルマは首を捻る。

「薬の調合は神術の領域だ、熟練者の薬はよく効き、未熟者の薬は効かん」

彼の言っていることは本当なのかもしれない、とファルマはブリュノを一層見直した。

「私にはお前の術のほうがよほど興味深い。その、お前がパツレに飲ませているという酸素はどうやって作っている？」

ブリュノには、ファルマがパツレの口に手を当てているだけに見えない。

何なら手で口を覆っているので息苦しいのではないかとブリュノは懸念する。ブリュノになら言ってもいいか、というか隠せないか……とファルマは部分的に白状した。

「父上が水を出せるように、私は酸素やその他の物質を出すことができます」

「なんと！」

ブリュノの目が驚きに見開かれた。

「やはりそうであったか。今までの薬もそうやって創っていたのだな。隠さなくていい、それで合点がいく」

「はい、実は……」

「本格的な合成をしている様子がない、原料も買い付けている形跡がないので、何か秘密があるとは思っていた。そうであったか……」

ブリュノはこれまで、詳しく追及しなかったが、どうやって新薬を調達をしているのか怪しんでいた。ファルマの説明を聞いて腑に落ちたようだった。

「手をかざしているだけにしか見えないのに、そんな高度な神術を使っているとは……やはりお前は、薬神の力を授かっているのだな」

「薬神の力がどうかはわかりませんが、そういうことができます。でもこの方法も効率が悪いと思いますので、酸素の工業生産も必要ですね……マーセイル工場でそのうち生産できるようにしようと思います」

酸素ボンベの必要性を痛感したファルマである。でないと、ファルマが生きた酸素ボンベとして患者に寄り添わなくてはならなくなるし、三人以上の患者を抱えた場合に供給不可能になる。

それを聞いてブリュノは前のめりになる。

「酸素はどうやって作るのだ、今からでも大学の実験室で作れないのか」

ファルマが何日もぶっ通しで酸素供給できるわけがない、逆にファルマが倒れてしまう。

彼を気遣う意味合いもあった。

「実験室で作れる酸素は微々たるものですので、工業的には空気を圧縮して一旦液体にしてから、それを分別蒸留して酸素を取り出します。今、薬学校にある設備では耐圧性から困難ですね」

ファルマが物質合成した液体酸素をボンベに詰めてもいいが、ボンベがない。

「空気が液体に……そんな馬鹿なこと」

「圧力をかければ空気は液体になります」

物質の三態について、ファルマは手短かに解説する。こんな時にも説明してしまうのは、学者としての性だろうか。そんな雑談をはさみながら、容体を見る。

「メロディに、そのボンベとやらを造らせよう」

「……メロディ尊爵なら、できますかね」

「およそ金属加工において、彼女にできないものはない。私はそう思っている」

その日のうちに、ブリュノはメロディに、ファルマの言う通りのものを発注した。

パツレは少し症状がおさまりはじめたので、点滴による麻酔の量を減らしてゆく。

麻酔の量が最小限になったところで、パツレの意識が戻った。

「気づいたか、パツレ」

ブリュノがベッドサイドでパツレの手を握る。

「何が起こったのでしょうか……急に呼吸ができなくな……ぐっ」

パツレの口の前にファルマの手がある。無意識に払いのけると、途端に息苦しくなった。

「手を当てるよ。息が楽になるから」

ファルマが元の状態に戻る。

「息苦しくない……どうなっているんだ」

状況を確認すると、パツレは点滴に繋がれていた。ファルマは何を点滴しているのかを教え、これまでの経過を話す。

「副作用が出たんだ」

「肺出血だと……？ よく生還できたもんだ」

パツレは話を聞いて、ぞっとしたようだった。パツレの常識では、重篤な肺出血を起こせば窒息してまず助からない。パツレやブリュノの手持ちのあらゆる薬でも治せないし、その治療法は確立していなかった。激しい副作用が生じるかもしれないという説明はファルマから聞いていたものの、真に受けていなかったが、まさか自分の身にふりかかるとは、とパツレは竦む。そして、この病気の恐ろしさを思い知った。

「ファルマのおかげだ、ファルマがいなければ、この病気は助かるものではなかった」

ブリュノが素直に認めた。しかしファルマは、  
「ステロイドが効いてよかったよ」

自分の手柄ではなくて薬のおかげだというファルマの謙虚な姿勢は、パツレも見習うところがあると感心する。それはブリュノも同感だった。

「ファルマ、お前は偉大な薬師だな……そして、いいやつだ」

パツレはファルマを認めざるをえなかった。照れも何もなく、ストリートにファルマに伝えた。

「頑張ろう、兄上。今が正念場だ」

「ああ、頑張るさ」

パツレは力強く頷いた。治療に前向きな患者は助かる、とファルマは信じた。

翌日の午後のことだった。

「これ、もしお気に召していただければ、パツレ様のお部屋に飾っていただけですしょうか」

ロツテが、ブリュノの交代で今日も病室に入るファルマを呼び止めて、額縁に入れた絵をファルマに手渡した。掛布をとると、キジの遊ぶ川辺の風景画だ。素晴らしい出来栄だった。数日で描き上げたようだ。

「すごい……何でこの題材を？」

「はい、パツレ様のお好きなフルーヴ河のせせらぎと水車小屋、*Faisande colchide*<sup>コライキジ</sup>の油彩でございます。パツレ様のお気に入りの場所で、おひとりでよくそこへお出かけでしたから。懐かしいかなと思ひまして」

「ありがとう、兄上の部屋は殺風景だったから飾ってくれると思う。お気に召すとよいのですが、と謙遜するロツテに、ファルマは感謝の言葉をかける。病室の中に入れないながら、ロツテもパツレのことを気にかけているのだ。

「それから、皆からの激励のお手紙でございます」

使用人たち、そしてベアトリスやブランシュたちからの寄せ書き、サン・フルーヴ帝都の写真集をまとめて、表紙にロツテが装画を付

けたものだった。

「いいね、これ……元気出ると思うよ」

「この絵は？」

「はい、パツレ様の守護神の薬神様をイメージした装画でございます。加護がありますようにと」

表紙に描かれた優美な少女神の装画を見て、ファルマはたじつと目が泳いだ。ロッテの中では、薬神のイメージは神殿での伝説の通りの美少女神らしい。

「薬神ってこんなイメージなんだ？」

「はい、優しくて清らかで、それでいて気品のある子供の女神さまかなと！ パツレ様の守護神ですから、お顔にはこだわりました！」

「えっと……うん、いいね！ 喜ぶと思うよ」

ファルマはあたりさわりのないコメントでやり過ぎす。やはり口ツテには色々とかミングアウトできないと思うファルマである。

「ファルマ様も、心身ともにご無理のないよう、パツレ様の治療をよろしくお願いいたします。付き添いが私ではだめなのは分かっています、でも私ができることであれば何でも申しつけください」

それではっ！ と言ってロッテは小走りに走っていった。いい子だな、とファルマは改めて実感する。

「ああ、この絵は素晴らしいな。元気が出る、それにこの精巧な白黒の絵は何だ？」

「写真だよ。帝都の街並みや、家族の写真だ」

「これはいいものだ……」

パツレの顔に、久しぶりに笑顔が浮かんだ。かくも孤独な闘いかと思っていたパツレに、彼の快復を願っている人間が大勢いるということを分からせてくれたロッテのプレゼントは、まさに差し入れとしてうってつけだった。

「ロッテは元気の塊だからな。皆応援しているんだ、あと一息、頑張ろう」

ファルマもパツレの喜ぶ顔を見て笑う。  
そしてロツテと使用人たちからのプレゼントは、パツレの目を折  
々に楽しませ、勇気づけた。

< i 1 6 8 1 1 2 — 2 4 9 6 >



**3章13話 寛解導入療法（4～6病日目）（後書き）**

本日は昼12時にも更新しますのでよろしく願いいたします。

### 3章 14話 血液学的完全寛解

それから二日が経つ頃には、パツレの肺出血は落ち着いてきた。

ファルマの献身的な看病と、おそらくは薬神杖の秘術の効果もあって、パツレは酸素吸入を必要とせず呼吸することができるようになっていた。どうやら、準備しておいた輸血をするまでではないようだ。

それでも、貧血のせいでちょっと立ち上がるだけでもせいぜいと息切れがして、清潔を保つため風呂に入って戻ってくるだけでもパツレにとっては一仕事だった。

容体の急変があつてからは、ファルマはパツレのもとから離れないように心掛けた。パツレに付き添っている間、ファルマは薬局を閉めず、エレンと一級薬師に任せた。異世界薬局では薬の処方記録をつけているので、慢性疾患の以前と同じ状況の患者には同じ薬をその日に訪れた新患や調子の悪い急患は、ド・メディシス家に送ってもらった。感染症の持ち込みのリスクを考えて、患者は隔離した部屋で診療した。

メロディ尊爵は、発注から一日で銅を加工してポンペを納品した。インジゲーターは取り付けてないが、ファルマの物質構築能力によってボンベ内の絶対圧やゲージ圧は計算できるし、流速も診眼を通して計算できるので問題なかった。バルブも指定した通りに作ってきた。ファルマが液体酸素を充填し、診眼を使いながら酸素を流してゆくと、それは立派に酸素ボンベとして機能した。これで、パツレは苦しい時には自分で酸素マスクを使えるようになり、ファルマがびったり張り付いていなくてもよくなった。

パツレの病室への面会の人数も制限した。

一日一回まで、家族のみ。疫滅聖域で屋敷全体を浄化しているとはいえ、使用人たちの屋敷の内外への出入りが激しいので無菌状態

も破られる。だから、基本的にパツレには自室から出ないでいてもらった。窓の開閉も制限という、厳しい管理体制だ。

パツレは何故そうしなければならぬかというファルマの合理的な説明を聞いて、納得して受け入れた。

ブランシュや母が、毎日一回、一人ずつ交代で面会にやってくる。マスクや保護衣などの完全防備でだ。パツレは母や妹の前では「たいたことないから」と、病状を軽く装ったり、強がったり、冗談を言ったりして余裕を装った。

薬局を閉めた後、エレンがパツレの病状を聞きに見舞いにやってきた。

「パツレ君、調子はどう？」

大きな花束とパティスリーで注文した豪華なケーキを持ってきたエレンだが、生花は感染リスクから病室に入れることはできないので、玄関に飾ることになった。ケーキも生のフルーツを使っているので、家族がいただくことになった。手ぶらになってしまったことを申し訳なさそうにしながら、エレンが病室に入る。

エレンは馬に乗っているの、感染を防ぐために服を全部着替えて、手を消毒し、靴も履き替えてこの場に臨んだ。

「ああ、順調だ。悪いな、ファルマを借りて薬局を仕切らせて。薬局に出勤しろと言っているのに、どうしてもいってな」

パツレは、ファルマに「大丈夫だから出勤しろ」と何度も伝えたのだが、ファルマは頑としてパツレのもとを離れようとしなかった。容体の急変があるから、そうなって駆けつけても間に合わないから、といって。

「ううん、いいのよ。ファルマ君がパツレ君のもとにいてあげたいんだろーし。こっちは何とかやってるわ。治療は辛いのかしら？」  
想像もつかない、白血病治療の苦しみ。点滴に繋がれたパツレは痛々しく、エレンはパツレの身を案じる。

「まあ、思っていたよりはたいしたことないぞ。余裕綽々だ」

パツレはあつけらんとして言った。

「そうなの　ファルマ君は大変そうに言っていたけど」

「あいつは大げさだからな、まったく」

「そうなのね、……ならよかったわ」

エレンはパツレの強がりの言葉を真に受けた。エレンは相手の嘘に敏感な部類に入る。だが、それでもパツレの内心を見抜けなかったのは、パツレの演技が巧妙すぎたからだ。

「おう、早く快復してお前との決着をつけないとな。こてんぱんにしてやるぞ、はーっはっは！」

「そんな大笑いする気力があるなら、大丈夫そうね」

エレンはほっと胸を撫でおろした。

「じゃ、頑張つてね。元気になったら決着をつけましょ」

エレンがドアを閉めると同時に、パツレはベッドの上に崩れ落ちた。長い時間話していて、消耗したようだ。

別室で患者の診療をしていたファルマが、消毒を終えてエレンと入れ違いに病室に入ってきた。

「兄上、息が苦しいんだろ。笑い声が下の階まで聞こえてたぞ。あんなに大声で喋ったら息切れもするよ」

「まあそう言うな、強がりぐらい言わせてくれ」

「強がりすぎだ、エレンは心配してたんだぞ」

「ド・メディシス家の男子たるもの、女子供の前で弱音を吐いても仕方がないからな」

これが大貴族の嫡男としての誇りと自覚なのか、とファルマは彼の生き方を見た気がした。

治療開始七日目の朝、パツレは病室兼自室でどろどろに煮込まれたスープを喉に流し込んでいた。パツレに供されていたのは生の食物、香辛料、油脂、乳製品の抜かれたメニューだったが、それは感染症や消化管への負担を軽減させるためである。

「抗がん剤投与中は、食事にまで気を使うんだな」

長引く治療に、パツレは憔悴しきっていた。飲み物も生のジュースではなく、生ものを避けて湯冷ましの水、あるいは生成水であるベッドで過ごす生活が続いたために、脚の筋力も衰えてきていた。「感染しやすくなっているし、用心にこしたことはないからね」ファルマもパツレと同じ食事を、同じ病室でとる。それはパツレへの気遣いのためだ。そういえば、抗がん剤による白血球の減少とともにほとんど起こるといい、パツレの感染は免れていた。ファルマの聖域の中に取り込んでしまえば、細菌感染のリスクは極度に低下している。

「お前まで付き合っただけ同じ食事をとることはないぞ。ちゃんと食べる、肉も魚も。倒れてしまう」

そんなところまで気を使うな、とパツレは苦笑する。

「疲れているだろうから、昼間はしっかり寝ているといい」

「それがあまり疲れてないんだよ。父上のポジションが効いているんだ、どうしたのか……」

ブリュノの栄養ドリンクは麻薬でも入っているのではないかと思うほど、効果覲面だった。それを聞いたパツレは、何を当り前なことを、と妙な顔をする。

「ああ、父上の薬はよく効くからな。大陸で一番効くと言われている、俺は父上のような薬師になるのが目標だった。だが、目標が変わった」

そういつて、彼はもくもくと味気のない食事を続けた。

「目標が変わったってどうなったんだ？」

ファルマがすつとぼける。パツレはもごもと言った。

「まあその、失言だ」

「分かった、聞かなかったことにする」

ファルマは流す。

「だが！ このままで済むと思うなよ、お前に追いつき、薬神の知識を吸収し、追い越してやるんだからな！ はーっはっは！ げぼっ、がはっ」

カラ元氣もいいところだな、とファルマは切なくなる。だが、パツレの明るく強気な性格はファルマの心労を軽減させた。彼はファルマの前では殆ど弱音を吐くこともなかったし、強い兄を演じ続けた。

「咳が出るからやめろよ兄上。じゃあ、元氣になってきたなら。肺出血の症状が消えたから、A T R Aを再開したいと思うんだ」

ファルマは寛解導入療法、A T R Aの再開の頃合いを見計らっていた。

A T R Aを早く再開しなければ、白血病細胞はまた増殖を始めるうえ、A T R Aの副作用とは別の、この白血病特有の症状である各臓器からの出血が懸念されるのだ。

脳の出血が一番怖い、とファルマは危惧している。

「また同じことになるんじゃないのか……？」

先ほどまで高笑いをしていたパツレは、ごくりと唾をのみ、警戒する。

「そのリスクはある。だから次は、75%の量から少しずつ増やしていく」

パツレの脳裏にまたあの苦しみが蘇る。いつそ殺してほしいと思っただけなのだ。

「やらなければ、いけないんだ……分かってる。やろう」

パツレは腹を決める。これほど恐ろしい治療があるだろうか。がんとは一筋縄ではいかない恐ろしい病気だ、とパツレは胸に刻む。

ファルマをして、病の王だと形容したがんというものの。

治せるか治せないか、まったく想像もつかないという病だ。

がんというものがどんな病気であるか、ノバルートでは殆ど知られていなかった。その、パツレにとっては全く未知のがんを見つめ、迷うことなく治療方針を打ち出し、いくつもの薬と薬神の力を使って治療にあたる弟に、パツレは感謝してもしきれなかった。

「自分が生み出したモノ（細胞）の戦いなのか……」

「だからこそ、手ごわいんだ。」非自己”ならば、免疫系が攻撃す

る。でも、”自己”だから攻撃できない」

かつて自分の一部であったものだから、それを叩くのは難しいとファルマは語る。

「本当は最初から化学療法をやればよかったんだ。俺の判断ミスだった。次はATRAと共に化学療法も同時にいく」

ファルマは後悔の言葉と今後の方針を述べた。

化学療法の負担が患者に大きいので、ATRAと同時投与ではなく一日遅らせて、ATRAの効果を見てから化学療法を実施しようとしたファルマの判断は、結果的には間違っていたことになる。だが、状況に応じてはATRA単独療法という治療法もあったりで、そこは判断が難しい。前世が薬剤師であるがゆえの臨床経験のなさ、歯がゆかった。

副作用が酷いかもしれない、でも覚悟してほしい、とファルマは毅然としてパツレに告げる。その真剣なまなざしに射抜かれて、パツレは受けて立つぞと奮い立った。

「お前が最善だと思う方法をとれ。俺がきついのは一切考慮しなくていい」

「じゃ、そうさせてもらう。吐き気が強く出たら、吐き気止めを使うから言ってくれ。発熱もするかもしれないし、口内炎も出るだろう、倦怠感もひどくなるかもしれない、でも、やるぞ。いいんだな？」

「おうよ！」

薬師と薬師、薬師と患者との間の、相互の立場を明白にしておく。どこまで治療をしているのか、それを決めるのは患者自身でなければならぬ。

生還したい、生還してみせて、医学会にこの症例と、ファルマの治療法の正しさを知らしめてやる、とパツレは強い意志を胸にいだいた。

六日目、A T R A の服薬を再開。

そして、同時に抗がん剤イダルビシンを点滴で投与開始。

点滴瓶にイダルビシンを充填し、エアーのための針を刺し点滴のルートをとるファルマを、パツレは力強いまなざしで見守っていた。「その、点滴や注射というもののひとつにしても、誰も見たことがない。画期的な発明だ。いろんな使い方ができるんだろぅな」

さすが薬神の天啓だ、人間には思いつかない智慧だ、とパツレは絶賛する。

「とはいえ点滴の経験は、俺は動物実験以外にはないんだ」

「ふむ……今恐ろしいことをさらっと聞いたな。動物で練習したのか、いつだ？」

「兄上がいない間だ」

前世での話だが、パツレには言わないほうがいい。

「人体と動物の体の構造は殆ど同じだから。異論はあると思うけど」  
「なるほど。……にしても抗がん剤とやらは毒々しい、嫌な色だ。尿も赤くなるし……」

赤褐色の点滴が自らの体に入ってくるのを、パツレは受け入れるしかなかった。

「前回とは違う場所に点滴するんだな、敢えてそうするのか？」

パツレはファルマの執った、ほんの些細な相違点にも目をとめる。「同じ血管を使わないほうがいい、抗がん剤は血管を傷つけるから」「そういえば細胞毒性があると言っていたか？ 抗がん剤に触れると血管までボロボロになるのか。なるほど……」

投与後六時間ほどして、猛烈な吐き気がパツレを襲った。最初はまだ冗談を言う余裕のあったパツレも、何度か嘔吐するうち胃の中はカラになってしまつて、胃酸が食道を刺激する。繰り返す嘔吐は著しくパツレの体力を消耗した。

「兄上、吐き気止めを変えよう。ほかの吐き気止めを試してみよう」  
吐き気は患者のQOLを著しく下げるため、改善を図らねばならなかった。だが、パツレの体に合う吐き気止めに関しては、診眼で



は分からない。ファルマはあたりをつけて、数ある吐き気止めの中から組み合わせを変えて彼に差し出す。

「わかった、飲もう」

吐き気止めを飲んでも、パツレはその吐き気止めそのものを吐いてしまった。吐き気止めは口からではなく点滴に混ぜて、吐き気は一旦収まる。吐き気には、精神的な不安も反映されるため、一概に薬で緩和できるものとは限らなかった。

「服も着替えたほうがいい」

締め付けの少ない、ゆったりとした服に着替えさせる。

「ふう…… よくなった。次から次へ、めまぐるしいな。何で吐き気が出る？」

「抗がん剤が脳の嘔吐を司る部分を刺激するから。実際に吐きたいわけではないんだ、吐きたい気がするだけだよ」

「体内で複雑な反応が起こっているんだな。吐き気止めなら、俺も調べられるぞ」

パツレは手持無沙汰に吐き気止めを調合しようとしたが、ファルマはそれを制した。

「薬の組み合わせには相性があるから、俺が作ったやつにしてくれ」「お、おう……」

ファルマの前で完全に患者にならなければならないことは、パツレにはもどかしかった。

「そのかわり、俺が病気になったら兄上に任せるよ」

「口が上手いな、お前は」

当てになんてしないくせに、と言うのはやめておいたパツレだった。

十二日目、白血病細胞の数は順調に減っていた。喜ばしい状態だが、パツレの気力をなえさせる出来事が起こった。長い銀髪の手が、抗がん剤の影響で抜け始めたのだ。

手でくしけずるたびに、するりと抜ける。抜け毛が止まらない。

抜け毛で枕がびっしりと覆い尽くされた。

「髪が抜け始めたな」

異変を感じつつ黙ってごみ箱に、むしった毛を放り込むパツレに、ファルマは声をかけた。

「これでいいんだな？」

「想定通りだよ」

ファルマは頷く。

「わかった」

パツレは弱音を吐かなかった。

「これは全部抜けるのか？ 全部抜けるのなら、もう全部毛ってしまいたい」

「抜けないかもしれないけど、まばらになると思う。毛らずに一回全部剃ったほうがいい。細胞分裂の速い、毛根のような細胞は分裂が停まりやすいから抜けるんだよ」

「一生ハゲたままなのか？」

パツレはまだ人生を謳歌して間もない十八歳だ。髪のない状態が一生続くとなると辛い。

それでも、命あつての物種だとパツレは覚悟していた。

「いや、抗がん剤をやめたら生えてくる。今だけの辛抱だ」

「そうか。仕方ないとはいえ、治療中は誰にも会いたくないな……」

パツレは弱気な一言を漏らす。その彼の言葉をブランシュが、ドアの裏で聞いていた。それからほどなくして……、

「きやーっ！！」

ロッテの悲鳴が屋敷に響き渡った。

「お嬢様、何をなさったのですか！？」

ファルマが駆けつけてみると、ブランシュが彼女の長いブロンドの髪を束ねて、ざっくりとナイフでそぎ落としていた。

「どうしてこんなことを……美しい御髪でしたのに！」

ロッテはブランシュの手からナイフを取り上げ、もう切らせまいとブランシュを抱きしめる。

「ブランシュ……何をしているんだ！」

ファルマは、自分の髪の毛の束を握りしめて茫然としているブランシュに、かける言葉が見つからない。貴族の子女にとって、美しく長い髪は財産だ。勝手に切っていいものではない、彼女の母親のベアトリスからはどやされるだろう。

「これでね、大きい兄上にかつらをつくってあげてほしくて……大きい兄上の髪の毛は銀色で、私は金色で、色が違うけど……それでも、いるかなと思ったから」

ブランシュは口をとがらせて俯き、髪の毛の束を差し出した。

「だめだったかな？」

これから、パツレの髪の毛は抗がん剤の影響で抜け落ちるので、それに備えて髪は剃ることになるだろう。その間、ブランシュの毛でできたカツラをかぶれば、パツレも外出したり人と会うのに抵抗がないかもしれない。ブランシュはそう思ったようだった。

「切る前に相談してほしかったとは思っけどな」

ナイフは危ないし、怪我でもしたら、と思うとファルマはやりきれない。

「だって。大きい兄上も小さい兄上も、がんばってるんだもん……」  
何かできることがないかと、彼女なりに考えた末のことだった。

「ああ、喜んでくれるさ。後はきれいに整えてもらうんだよ」

「あいい……」

ファルマは短くなったブランシュの毛をあらため、頭を撫でた。ブランシュの想いのこもった髪の毛は、すぐにかつら職人に届けられた。職人は、これは上等の髪なので、きれいなブロードのウィッグになるでしょう、と自信を覗かせた。

事情を聞いたベアトリスもブリュノも、彼女の勝手な行動を叱らなかつた。

そうして治療開始十八日目のことだった。

「喜んでくれ、兄上」

パツレの採血をして、血液を調べていたファルマが、声を弾ませた。ブリュノもファルマと共に入ってきた。心なしか、口角が上がっている。

「いい知らせだぞ」

ブリュノも言葉を続けた。

「いい知らせ？」

副作用のひどい貧血と倦怠感で、パツレは疲れ切っていた。それに、頭を丸坊主に剃ってしまったせいで、心なしか気力もなえてきている。

「兄上の白血病細胞は、治療開始から16日目で2桁減った、血液中に占める白血病細胞は、3%だ」

「……それはどういう意味なんだ？ でもまだ、残っているんだろう？」

それでいいんだ、とファルマは首を左右に振る。血球中の白血病細胞は、すぐにゼロにはならない。それでも、ATRAと抗がん剤併用療法で少しずつ減少して5%を切れば、ある基準の枠組みの中に入る。それは……。

「血液学的完全寛解だ。喜んでいい」

「おめでとう、大きい兄上」

ファルマの言葉に続くように、ブランシュも大きな箱を抱えて病室に入ってくる。

「何を抱えているんだ？」

パツレはその箱とブランシュの顔を見比べる。

「えっとねー、これねー。大きい兄上が頑張ったから、私からのプレゼント」

「開けてもいいのか？」

「あい」

「これは……」

ブランシュの手でウィッグをプレゼントされたパツレは、すっかり短くなった彼女の髪の毛を惜しみ、複雑な表情をして、彼女の想

いを汲み、「皆、ありがとうな」と感謝の言葉を述べた。

治療十八日目にして、寛解導入療法は成功した。

パツレはファルマと家族の助けもあり、最初の難関を乗り越えたのだった。

死の淵から生還したパツレは、社会復帰に向けての第一歩を踏み出した。

### 3章15話 パツレの安息と医薬連携強化

尊爵家ド・メディシス家2階のある一室にて。

「ふむ……俺ときたら何をしても似合うな。ハゲても美男とは。美しいというのも罪なもんだ、はーっはっは！」

パツレは、ブランシュの髪の毛で作られたブロンドのウィッグを装着して鏡の前でポーズを決め、ご満悦だった。ブランシュの髪は艶々として非の打ちどころがない。髪型をセットしている途中だ。

「大きい兄上ー、ブランシュとおそろいなー」

ブランシュは短くなった髪を両手で引っ張って、お揃いの髪色であることを強調していた。

「はっはっは、どうだーおそろいだぞー！ お前の髪だからな！

そりゃそうだ、あーっはっは！」

パツレも髪の毛を両手でつまんで上に引っ張ると、カツラが浮いた。

「もうだめだ。笑かさないでくれよ兄上」

自分のものではない髪を見てしんみり。という場面になるかと思えば、ファルマが吹き出しそうになるほど、今日も陽気なパツレである。

以前はクールな印象の銀髪美青年だったパツレは、金髪ウェーブに変身し、甘い印象になっていた。

辛い白血病治療に耐え、脱毛に備えて丸坊主にしたわりには、悲観的にもならず思ったより前向きな兄で助かったと思うファルマである。

「兄上はいつもこう、攻めの姿勢だな」

見習いたくはないが、とファルマは思う。

「お前は何でそう控えめなんだ？ 後ろ向きな男はモテないぞ？」  
積極的な方が女受けがいいのだ、などと指導されて閉口するわけ

である。

「あのねー、私知ってるよ。小さい兄上はモテてるって母上が言ってた」

「何それ初耳なんだけど。ちょっと聞かせてよ」

「ぜひとも詳しく話を聞きたいファルマである。」

「んーとね。ダメー!」

「きゃっきやと面白がって部屋を出て行ったブランシュを、ファルマは形だけ追いかける真似をする。」

「そういえば、とパツレは急に真面目な顔になり、ウィッグを装着したままファルマに質問を振ってきた。」

「完全寛解といっても、白血病細胞が残っているんだらう?」

「その通り。兄上の状態は、“血液学的”完全寛解、つまり顕微鏡観察をして殆ど細胞が残っていない状態。とはいえ、体内には計算上、10億個の白血病細胞が残っている」

「ファルマはグラフを書いて、パツレに説明する。」

「なっ、そんなにあるのか!」

「全然安心できないじゃないか、むしろ何が寛解なんだとパツレは危機感を煽られる。ブランシュは、10億と聞いてもぴんとこず、ぽかんと口をあけていた。」

「気を抜けないことがわかっただらう? とはいえ、1兆個から減ったんだからいい経過だよ」

「おう……まだまだだな。こうしちゃいられない、次はどうすればいいんだ」

「パツレは神妙な顔になった。治療を急ぎたいのだ。」

「顕微鏡で見える白血病細胞が0%になったあと、更に100万個レベルまで減った状態を目指そう。それが“分子的”完全寛解だ」

「んー、また同じ薬をやるのか」

「パツレはごくりと唾を飲み込む。」

「ああ、同じ薬をあと3クールやる。ATRAの服用と抗がん剤は

続けよう。3年間再発しなければまず安心、5年間再発しなければもう再発しないと考えていい」

そうすれば、白血病細胞は0個になることはないが、治癒といってもいい状態になる。

「道のりは遠そうだ。それで、すぐ次の治療にうつるのか？」

薬神様の試練だと思って艱難辛苦を乗り越えればきっといいことがあるさ、とパツレは前向きだ。

「休憩だよ。骨髄で正常な細胞が回復してくるまで休憩」

ここが病院であれば一時帰宅可、という状態だ。

でも、ここはパツレにとっての実家なので休憩ということになる。

「やった……」

ただでさえ陽気なパツレの表情が更に明るくなった。

「やったね兄上！ 高い高いしてー！」

パツレは、部屋に戻ってきたブランシュを高い高いする。

「外にはいつから出られる？」

「外出していいよ。俺もついていていいなら」

パツレはパジャマを脱ぎ捨て、こうしちやいられないと服を着替え始めた。感染のリスクを考え、ファルマが同伴することになった。ブランシュも暇なのでお供する。

というわけで、兄妹三人で帝都散策である。

パツレは久しぶりの市街の空気を楽しんでいた。一か月近く治療をしていたので、もう、二月になろうとしていた。

「あー、街の空気がうまいな」

「どこに行きたい？」

「そりゃ、あそこに決まってる」

ブランシュが行先を尋ねると、パツレが真っ先に目指したのは神殿だった。

「えーまたー？ 美味しいもの食べに行こうよー」

パツレは礼拝堂に入ると跪き、薬神の像の前で祈りはじめる。ブ



ランシュは水神の方にぶらぶらと出かける。

「おかげさまで、試練を乗り越えることができました」

パツレはしみじみと彼の守護神に報告をした。『よくやったな』などと声をかけたいファルマだが、今回は薬神のフリをして腹話術で兄を騙すのはやめておいた。それに、神官長が柱の影から覗き見しているのがバレバレだ。

「弟の手を通じて、お救いいただき感謝しております」

その時、ハプニングが起こった。

（兄の頭が危ないっ！）

パツレが平伏するものだから、カツラがずれてきている。ファルマは後ろからカツラのポジションを直したい気分だったが堪える。「重症患者になるという、またとない経験ができました。これは私の成長のために薬神様が課された試練だったのですね！」

勢いよく頭を上げた瞬間にカツラが滑り落ちた。パツレは辺りを見回して、誰にも見られなかったことを確認し何事もなかったかのように再び装着する。

ファルマも見なかったことにした。

「大きい兄上、小さい兄上ー、お祈り終わったー」

「もう終わったのか。ブランシュ、お前はお祈りが雑すぎだぞ！」

ファルマは薬神様に祈ったのか？

「ん？ あ、うん……」

ファルマの周りの神殿の床が光っているのには気づかなかったようだ。

市内を散策するパツレに付き合いブランシュと共に屋敷に送り届けた後ファルマは、本当に久々に異世界薬局に戻ってきた。

「懐かしき職場だ」

職員たちはお昼休憩中だったので裏口から二階に上がる。

ファルマが部屋に入ると、三人が一斉に振り返った。

「あつ、ファルマ様！ きゃー久しぶりです！」

ロッテが駆け寄ってきた。

「ただいま、はいこれ。美味しい紅茶を買ってきたから皆で飲もう」  
ファルマが差し入れをロッテに手渡すと、ロッテは嬉しすぎて紅茶の缶を抱きしめて喜びを表す。

「紅茶に合う美味しいお菓子も用意しますね！」

「おかえり、ファルマ君」

エレンがほつとしたようにファルマを見つめる。

「今までありがとうエレン、ロッテ、セドリックさん。任せきりにして悪かったな」

「はーっ、あなたがいないと心細かったわ。不思議ね、子供店長が主戦力の薬局だなんて」

エレンはメガネを拭きながら、じみじみとファルマの出勤を歓迎する。彼女はほつとしたようだった。

ファルマが休んでいる間、薬を調査したりするアルバイトの一級薬師はいるが、診断をつけられるのはエレンだけという状態だった。だから、きちんと診療がこなせるか、毎日が緊張の連続だった。確実に効く薬を求めて患者がやってくる。患者の期待を裏切るわけにもいかなかったし、子供店長以外の薬師はダメだという悪評を立てられるのも本意である。

「エレン、ちょっとやせたな」

「瘦せたわよー！ 毎日胃が痛くて」

ストレスで瘦せたようだった。悪い事をしたな、とファルマは申し訳なく思う。

「胃薬いる？」

「そうじゃなくて」

「エレンだから任せたんだ」

「ほらすぐそうやってファルマ君は買いかぶるから」

とはいえ、ファルマと共に働いてきたエレンは、数多くの症例に出会ったうち、難しい症例に遭遇しない限り、だいたいのところは診

られるようになっていた。また、ファルマから疾患鑑別フロイチヤートを渡されていたので、それを頼りに留守番はこなせた。

「ロツテちゃんもよく手伝ってくれてたし、セドリックさんにも助けられたわ」

「ファルマ様とパツレ様はずっと頑張っておられましたもんね。そしてエレオノール様も奮闘しておられました」

ファルマの来ない間、屋敷と薬局を行き来するロツテが、ファルマとエレンの間の連絡係のような役割を負っていた。

「はいっ、みなさん！ できました、フルーツガレットですよ！ファルマ様の買ってきてくださった高級なお紅茶といただきましょっ」

ロツテは、ガレットというクレープのようなお菓子をささっと焼いて、フルーツを包み、ティーセットにしてファルマたちの前に出す。ロツテが趣味にしているお菓子作りも、段々と手際がよくなってきた。

「ファルマ様のおかえりなさいませ会ですね！ わあっ、いい香りです」

ロツテが紅茶をそそぐ。

「ありがとっ。今日からちゃんと働くよ」

最近のはのっぴきならない事情で不在にすることが多かったが、できれば薬局に腰を据えたいファルマである。

「それで、もうすっかりいいのね。パツレ君は」

「すっかりではないけど、もう生死の境をさまようなんてことはない筈だ」

生死の境ときいて驚いたのはエレンである。

「えっ、そんな大事になっていたの？ 本人は大したことないって言ってたのに？」

「危うく死ぬところだったよ」

想像以上に深刻だったと聞き、エレンは狼狽した。

「もう……強がりなんだから。パツレ君は。元気になってもらわな

いと張り合いがないわ」

とエレンは勝気な言葉を述べる。

「で、そのパツレ君は家で何してるの？ 屋敷の中で静養？」

「俺がこれまで書いた教科書を読んで、誤字脱字や言い換えがないかチェックしてくれてる。それから、まだ書いていない部分の代筆」  
ファルマの書いた教科書は地球の医学薬学知識をもとに書いたオリジナル語彙満載なテキストなので、それをこの世界で馴染み深い言語に置き換える、という作業をパツレがやってくれている。

ファルマも一応、この世界の言語は問題なく使えているつもりだが、やはり異世界語なのでやや口語的だったり、回りくどかったり、医学的にみて一般的ではない表現もちらほらあるらしい。そういう部分は、パツレから見て違和感があるようだ。

そこをパツレがブラッシュアップして、より学術的かつ専門的な格式の高いテキストに仕上げる改稿案を練ってくれている。これは、ファルマにとっては何より大きな助けとなった。しかも、パツレはファルマが書いた部分まで全部読んでしまって、続きはまだかと催促してくる。

「え、代筆って言った？ 何でパツレ君が教科書書けるのよ」

エレンはパツレがちゃっかりファルマから薬学知識を学んで、教科書が書けるまでになっているのがショックだ。

「俺が口頭で教えた部分を、書いてもらっているんだよ。だから代筆」

パツレに口頭で薬学知識を伝えてパツレがテキストを書き、書いたものをファルマが確認し加筆するという作業工程は効率的だった。

口語はともかく書き言葉に関しては、ファルマに書けない事はないが書くスピードが遅かった。さらにパツレはノバールトで化学のはしりを習ってきているので、化学式や構造式も教えれば理解する。こうなると、パツレに新しいセクションを説明しては代筆してもらった方が速かった。

ファルマの仕事はぐつと軽減されたし、パツレも「ふはは、これが最新知識か！」といって喜んでいる。更に、パツレは謄写機の謄写紙のガリを切る作業も楽しんでた。

「メデイス家の兄弟薬師様は、本当にすごいですね」

とロツテが二人を褒めると、

「……お師匠様も入れて、メデイス家の三人よね。さすが名門薬師の家柄だわー。で、その教科書は大学で使うの？」

「そのつもり。今回の兄上の治療のときに思っただけど、新しく開設する総合薬学部必修課程として、薬学に加えて、注射や採血、その他の処置が必須科目だと思うんだ。白血病のような病気の治療は、ただ薬を飲んで天命に任せて効果を待つ、というものでは無理だ」

「ファルマ君の言っている処置って医者やるんじゃないの？」

「薬を扱う以上、薬師もできたほうがいい。もちろん医師との連携も強化しないと思う、あと、各種の検査部、技師の養成もいずれ必要だ」

薬師の教育だけでなく、医師や技師との連携を図らなければならぬというのは、ファルマが常々思っていたことだ。薬学だけ進んでも、医学が旧態依然として追いついてこなければちぐはぐだ。

「そうねえ……サン・フルーヴ帝都に医学校はあるんだけど。影が薄いわねえ」

帝都にはサルレノ医学校という医学校はあるにはあるが、教育水準はあまり高くなく、存在感も薄く、結局優秀な学生はノバルート医薬大に国外流出している始末だった。名門、ノバルート医薬大が強すぎなのだ。ちなみに帝国薬学校と、サルレノ医学校は立地的にはかなり近いのだが……。

「お父上に頼んで、総合薬学部でそういう教育が出来るようにしてもらったら？ それに、新たな学部の裁量は、学部長であるあなたが握っているんでしょう？」

エレンが思い切ったことを言った。

「薬師は人に針を刺したり切ったりしてはいけなかったよな」

「それは医業ね、でも法律で決まっているわけではないわ」

「そうなんだ！」

ファルマは目からうるこが落ちる思いだった。

その日の夕食の席で、ファルマはブリュノに相談してみた。

「確かに、薬学校の限界を感じる場面は多々あった」

「はい、薬を処方するだけでは限界があります。注射や点滴などの処置のできる薬師の養成が必要だと」

ブリュノは気難しそうに髭をいじる。新しい概念の治療法には、新しい枠組みが必要なのだということは、ブリュノには理解できた。パツレは信じられないといった顔をしていたが、ブリュノは賛成に回った。

「早速、教授会に諮ってみよう」

その後の教授会と、サルレノ医学校との協議により、サルレノ医学校、帝国薬学校は統合されることになった。

新体制では、

医学部 旧サルレノ医学校

薬学部 従来の神術と薬草をベースとした薬学を教える学部

総合医薬学部 ファルマが学部長を務める、新薬を取り扱う学部

臨床検査学部 臨床検査技師（微生物、血液、病理学検査などの臨床検査を行う技術者）の養成学部

の四学部を擁する。

全学部共通の教養課程の二年間のカリキュラムは、ファルマが担当することになった。これに関しては、特にファルマの負担は増えなかった。

もともと予定していた総合薬学部の講義を、教室ではなく大講堂で教えればいいだけだ。

医学・薬学の基礎知識を全学生が共有した後、その後は学部独自

のカリキュラムに専門化してゆけばよい。医学・薬学の基礎がわかれば、なんでもかんでも悪霊のせいにしていたこの世界の医学薬学の何が合っていて、何が間違っているのか、学生たちが独自で検証して取捨選択してゆけるようになる。

神術との組み合わせを試すのもよいだろう。そして数年後には、多くの専門家を誕生させるだろう。

「思ったより大規模な話になったな」

ファルマは舌を巻く。エレンも驚く事態となった。

「それだけ、お師匠様がファルマ君に賭けているのよ」

そのうち、現代地球と同等水準の学生、薬師を輩出できるようになるかもしれない。そうして大陸全土で、あるいはこの異世界のいたるところで、帝都と同水準の医療を提供できるようになればいい。そんな希望を抱いたファルマである。

「ぼちぼち頑張るよ」

ということで薬師育成校であったサン・フルーヴ帝国薬学校は、二年後からサン・フルーヴ帝国医薬大学校へと名称を変え、サン・フルーヴ帝国の一大医学薬学拠点として生まれ変わることが決まった。

< i 1 6 8 5 6 4 — 2 4 9 6 >

### 3章15話 パツレの安息と医薬連携強化（後書き）

3章終了です。4章へおすすみください。



#### 4章1話 尋常性疣贅とヒトパピローマウイルス

< i 1 6 9 1 8 5 — 2 4 9 6 >

それから日が経ち、1147年2月の半ばになった。  
帝都には寒気が降り、その日も例によってどか雪だった。

白血病から生還し、一命を取り留めたパツレは、白血病の血液学的完全寛解後の再発予防のための化学療法を行っている。彼の経過は順調で、白血病細胞も顕微鏡では見えないまでになった。

感染症予防のため外出を控えているパツレが闘病中に驚異的なスピードで代筆をし、その筆の速さに助けられ、ファルマは「メデイスの新・基礎医薬生物学」というシリーズの教科書を作り上げた。本の厚みは、ファルマの第二関節ほどの分厚さになっていた。ブリュノのはからいで教科書は製本され、各地の医学系・薬学系大学に販売されることになった。

（著書の書籍化は久しぶりだなあ）

前世では何冊となく薬学のテキストを出版してきたファルマであるが、ガリ版で大量に刷られた立派な装丁の書籍を手に取り、紙とインクのおいを嗅ぐと、感慨深いものがあつた。

ファルマは真っ先に、刷りあがつた教科書をエレンに見てもらおう。エレンはラッピングされた本を受け取り、あらたまって眼鏡をかけなおした。

「謹んで拝読させていただきますわ、これからもご指導ご鞭撻くださいませ、ファルマ教授」

「どうしたんだ、変なモノでも食べたのかよ」

エレンの茶番劇が始まったので、ファルマは苦笑する。

「だって大偉業だわ、ファルマ君とパツレ君二人でこれだけの量を書いたんでしょ？」

「それぞれ半々ぐらいだよ。あと、ロツテにも人体の絵を描いてもらったよ」

宮廷画家であるロツテの人体イラストは、テキストから素人っぽさを抜いて本格的にしてくれた。

「ロツテちゃんもお手柄ね。大学が始まる前に、何回か通して勉強しておかないとね」

「そうだよ、エレンにも講座を持ってもらっただから。読んでおいてよ。……これができたからもう、半分ぐらいは人生で思い残すことはないよ」

兄弟二人で魂を削って書いた、といっても過言ではなかった。ファルマの知りうる薬学知識のうち、最低限のこと、ものの考え方はパツレに伝えた。あれほど膨大な知識を一気に伝えてパツレに大きな負担をかけたが、パツレの頭の出来が良くて助かった、とファルマは今では思う。

パツレが凡才であれば、ファルマは代筆を頼むこともできず、全部教科書を書かなければならなくなる。二度目の過労死まっしぐらだっただろう。ノバルートから半年に一回帰ってきて、何かと面倒くさい兄だったのだが、今ではすっかり頼れる兄となっていた。また、パツレもファルマを尊敬してくれていた。

「まだ12歳でそんなこと言わないのよ」

既に人生を達観してしまっているファルマを、エレンがたしなめる。

「そうですよっ、人生これからですよっ！」

ロツテがファルマを勇気づける。

もし今、自分がこの世から消えてしまっても、最低限の知識は残せそう。そう思うと燃え尽きそうになるファルマだった。医学、

生物学に関しては総論から各論まで、薬学はさらに詳しく、ファルマの知る薬の全構造式は記しておいたし、合成経路もしたためた。科学技術が発展して創薬が可能になったら、一つ一つクリアしてゆけばいいだろう。

そして願わくば、ファルマの知る現時点までの「地球の現代薬学」を超えて、新たなページを刻んでいてほしい。そう思うのだった。

「ロッテにもあるよ、セドリックさんも、よければ見てください」  
ファルマはロッテとセドリックにも同じものを手渡す。

「ありがとうございます、ファルマ様」  
セドリックも謹んで受け取った。

「えっ、そんな貴重なものを、いいんですか！？ 内容は多分、分らないですけど！ 私には勿体ないですけど！」

ロッテはまさか自分がもらえるとは思わなかったので、満面の笑みになる。

「ロッテも挿絵を担当したじゃないか、勿論受け取ってよ。それから、ロッテが読んでおいたほうがいい項目もある。応急処置の部分とかね、しおりを挟んでおいたから」

三人がラッピングをほどこしてみると、それぞれ三人の好みの色の宝石のついた皮のしおりが入っていた。ファルマからのプレゼントだ。

「ファルマ君ってこういうところ、本当にマメよね」

「できる男と言ってほしい」

「できる男でございますな」

セドリックが、茶目っ気たっぷりにほめそやす。

「あらっ、できる男ファルマさん。アンプロワーズさんに渡すハズのお薬、渡し忘れてるわよ」

アンプロワーズとは、慢性の胃炎を患っている商人の患者だ。

「しまった！ 渡しに行ってくる」

ファルマが黒いコートを羽織り、外に出ようとすると、その薬袋をさっとロッテが受け取った。

「私がおつかい行ってきます！ アンプロワーズさんのお屋敷なら分かります」

「そう？ じゃ、ありがとう。お願いするよ」

ロッテは風のように薬局を出ていった。

ファルマは一階に降りて、バイトの薬師たちにも教科書を手渡した。今、異世界薬局では三名のアルバイトを採用している。ファルマとエレンの都合に合わせて、ヘルプで入ってくれている。ファルマの姿を見かけると、休憩時間でだべっていた三人は起立した。

「教科書……でございますか」

彼らも、仕事の合間に読んでおいてくれると助かる。

「俺と兄が書いたんだ。少しずつでいいから、読んでおいてくれ」

「ありがとうございマス。謹んで拝読いたしマース」

一級薬師ロジェ。彼は失業中だったのをネデル国からファルマが引つ張ってきた青年薬師で、サン・フルーヴ国の言葉は片言なのだが、腕は良い。

「あ、あ、ありがとうございます、店主様。必ず暗記してきますっ！」

大学を卒業したての新人、女性二級薬師レベッカも嬉しそうだ。彼女は奥手な性格で、特にファルマを見ると緊張してしまつてまともに話せなくなるのだった。

「んー、暗記は無理かな。読んで理解してくれたらそれでいいよ」

「これは難しくて大変そうですね。子供を寝かせてから少しずつ勉強しましょう」

子だくさんでアルバイトをいくつもかけもっている、肝っ玉母さ

ん薬師のセルスト。彼女も二級薬師で、調剤が速い。しかも彼女はノバルート医薬大の出身である。

「ぼちぼちでいいよ」

負担になってはいけない、と思うファルマである。

「ファルマ君、薬師足りてるわよね。私ちょっと診療に出てくるわ」「気を付けて」

エレンにも、もとの自分の受け持ちの患者がいる。彼女の診る患者は、有力な貴族たちだ。彼女は週に一回、半日、診療日を定めている。

「さて、午後も頑張るかな」

まだお昼の休憩時間も終わらないうち、薬局の前に馬車が止まった。ロッテがお使いに出て行ってすぐのことだ。門番の騎士がファルマ呼びに来たので、ファルマも大貴族の来訪だと分かる。ファルマは普通、重病人でもない限り、相手が大貴族だからといって出迎に出たりしないが、恩人については身分がどうあるうが出迎える。

「ごめんなさい、まだお休み時間中だったかしら」

「これはメロディ・ル・ルー（Melodie Le Roux）尊爵閣下。構いませんよ、ようこそ」

ファルマは会釈をする。帝国いちの金属、ガラス加工技術を持つ医療火炎技術師、メロディ尊爵が馬車から出てきた。メロディが薬局に足を運ぶのは初めてである。

メロディは髪もすっかり伸び、化粧もばっちりとして身なりも整え、いちだと美しくなっていた。今日は巷で流行している、ウエストを細く絞り後ろ腰にだけボリュウムのある、いわゆるバスルスタイルの白いドレスを着用している。ドレスのフリルを彩る紺色の大きなリボンがおしゃれで眼にも楽しい。メロディ尊爵が外出し

たりドレスで着飾れるのは、病状が安定している証拠だった。ふっさふさの羽根帽子を取って、メロディは会釈した。

「薬師ファルマ様、ごきげんよう。先日はお礼の手紙と心づくしの贈り物をありがとうございました」

パツレの治療のために酸素ボンベの容器を作ってもらったあと、ファルマはメロディに礼状を送るのを忘れていなかった。

「こちらこそ、ボンベの依頼でお世話になりました。あのように複雑で大掛かりなものを、たった一日で作ってきてくださって……おかげで兄の命が助かりました。兄も大変感謝しております」

メロディの仕事の速さに、ファルマもパツレも助けられた。

「あれでよかったでしょうか。内部の圧力に耐えられたでしょうか」「ええ、問題ありませんでした。素晴らしい加工品でした」「そうですか。では安心しました。お手すきのときに私の診察をお願いしてもよろしいでしょうか」

メロディがとりにきたのは、統合失調症の治療薬だ。

久しぶりに見た彼女は、統合失調症・緊張型の発作も薬で制御でき、調子がよさそうだった。ファルマはメロディの問診と診察し、同行した家令にも普段の様子を聞く。

「はい、メロディ様はともにお加減がよさそうにお見受けいたします。お仕事も充実しておられますし……日中はお散歩に、領地の視察、そして依頼品の制作、最近は夜会にもお出かけでございます」

家令は喜ばしそくに、メロディの日ごろの様子を報告する。統合失調症の治療過程で、無気力になっていたり、認知機能障害が現れたりすることがあるが、メロディはそのような症状もないようだ。そして、この治癒寸前という時期に再発したり、ほかのタイプの精神疾患になりやすい。

「そうですね。よさそうですね。お薬を減らしましょう」

薬の組み合わせも変える。それで、家令に、何か変わったことがあればすぐ教えてください、と申し伝えておく。患者だけでなく、周囲の見守りが必要な病気である。

「完全にお薬を飲まなくてもよくなることはありますか？」

「今の状態なら、飲まなくても大丈夫です」

ほっとした表情を浮かべるメロディ尊爵。これでやっと”普通の”生活が送れるようになる、そんな期待が胸に迫ったのだ。しかしファルマは、

「が」

と、言葉が続ける。診眼を使っても、ほぼ治っていると判断できる。それでもまだ手放して喜ぶ段階ではない。

「統合失調症は、急に薬をやめるとかなりの確率で再発します。予防をかねて、服薬は続けましょう」

「わかりました」

メロディは納得する。せっかく良い経過をたどってきたので、もうひとつ我慢のしどころだ、とファルマは説明した。

「もう檻の中で過ごす生活に逆戻りしたくありません。ファルマ師のお薬のおかげで、私はこうして健やかに過ごすことができます。

あなたは恩人です、あなたが私の正気を取り戻してくださいました」  
「いえいえ、こちらこそ」

ファルマからすれば、常々マーセイル製薬工場で使う器具類を大量に発注しそれを要求通りに仕上げてくれること、それから今回の無理難題を聞いてくれたメロディには頭が上がらない。

「では、他のお客様に差支えますし、これで失礼いたしますわ」

につこりとほほ笑み、席を立つ前にメロディが髪をかきあげたしぐさを見た時、ファルマははっと違和感に気付いた。

「お待ちください。メロディ様、お手を拝見してよろしいでしょうか」

「まあ、どうして？ 恥ずかしい」

メロディは指をひっこめようとした。

「どうして恥ずかしいのですか？」

「職人の手です。道具を持ちますのでタコがたくさんできています」

恥じらってから、おずおずと両手をファルマの前に差し出す。

「最近、それは増えていませんか？」

「納期の早い発注が続いたからかしら」

メロディは思い当たるふしがないわけではなさそうだ。だが、ファルマはにっこりとほ笑んだ。

「違いますよ。タコもありますが、半分ほどはイボです。それからここ、削りましたか？」

いぼが平らになっている部分があった。

「はい、具合が悪かったのでナイフで削りました……」  
何がいけなかったのかと返すメロディ。

「それも、増える原因になったかもしれないですね」

「じんじょうせいゆうぜい  
”尋常性疣贅”」

念のため、診眼で確定する。疣贅というのは、いぼのことだ。ファルマはメロディの手を取って、顔を近づけいぼの下にある血管の様子を確かめた。

「これはですね、ウイルスによってできたいぼです」

ウイルスというものの存在を、ファルマはメロディに説明してきかせる。このいぼは、皮膚の傷つきやすい部位によくできる。職人であるメロディは手を傷つけることも多かった筈だ。

「このウイルスを殺す薬は、今のところありません」



メロディ尊爵の掌のパピローマウイルスは、皮膚の比較的深くまで感染している。

「そんな……治らないのでしょうか。これ以上増えたら困ります」  
「治療は薬で治せる場合もありますが……ちよつと待つてくださいね」

液体窒素を用いた治療については、それで効果があるか診眼では判定できなかった。そして念のため、ファルマは薬を唱えて診眼ではかる。

「”サリチル酸”」

「”グルタルアルデヒド”」

いぼのできている部分の角質をふやかしてとる方法もあるのだが、必ずしも効果があるわけでなく、メロディ尊爵に対してはこれらの薬は効かないようだ。

「あなたには薬は効かないみたいです」

その時、おつかいから薬局に戻ってきたロッテは、思いがけずファルマがメロディの手を握り、掌に顔を近づけているのを目撃した。彼女はぎょつとして、思わず薬局の陰に隠れてしまった。

「えっ……今の……もしかしてキ……？」

キス？

パツと見、そう見えたのだ。男性から女性への、手の甲ではなくて掌のキス。それは、プロポーズを意味していた。ファルマとメロディはそんな仲だったのか……と、ロッテは混乱する。そういえば、メロディの治療のために、何度かメロディの屋敷にファルマが通っていた時期があった。

「その時に、少しずつ親密になられたのかな……全然知らなかったな」

というのも、ファルマが異性の体に触れるのは珍しかった。診察

の時以外は、必要に迫られない限り殆ど触らない。それに、メロディは手の病気ではなかったはずだ。ロッテだって、ファルマに触れたことはほばないといっている。それが、あんなに親しそうに……。

考えてもみれば、ファルマとメロディはお互いに大貴族。メロディは尊爵でもあり、年の差はあってもファルマの結婚相手としても申し分ないだろう。

「そうだよね……」

彼にとつてのロッテは、ただの召使でしかない。分かっていたことだが、そう思うと彼女は惨めな気持ちになった。ロッテはじつと自分の手に視線を落とす。ファルマが定期的に作ってくれるローションのおかげで、水仕事をしていてもいつも手はすべすべだ。これ以上高望みなんて、できるはずがないのに……。

「ご結婚されたら、ド・メディシス家のお屋敷を出ていかれるのかな。……ファルマ様とはもう、薬局でしか会えなくなるのかな」

はあ……、とため息がこぼれる。ロッテは目の前が真つ暗になった。そして、手持無沙汰にその辺りにあつた雪を集めてこね始めた。

そんなこととはつゆ知らず、メロディの手を観察し終えたファルマは、メロディに治療方針を説明していた。

「仕方ありません、液体室素でイボを焼きましょう。それから、お屋敷に戻ってお茶を飲んでもらいます」

この、尋常性疣贅に対して、絶対に治る治療法はない。標準的なのは、液体室素で皮膚ごとウイルスを焼き、皮膚組織が壊死するのを待ち、ウイルスを少しずつ削ってゆく。そういう治療になる。液体室素での処置の時に麻酔なしでやるのが標準的だ。激痛を伴うので興奮して火炎を出されてもいけない。

相手は火炎術師。液体室素を蒸発させてしまったら、治療ができなくなる。

「はいっ」

メロディはきょとんとする。

「痛いかもしれないけど回数が少なくて済む治療と、痛くないけど回数が多い治療、どちらがいいですか？」

「私は痛がりなので、痛くないほうがいいです」

メロディは怖気づいた。

「分かりました、今日は痛くない治療のほうにしておきますね。麻醉をかけましょう」

ファルマはリドカインを含む軟膏をメロディの指に塗った。

「手の感覚がなくなるまで待って、麻醉が効いて来たら教えてください。はい、次の人どうぞ」

その間に、ファルマは少しずつ増え始めた他の患者の診察をこなしてゆく。メロディは患者の邪魔をしないよう薬局のカウンセリングコーナーに座って、行儀よくその時を待っていた。次第に指先の感覚がなくなってくる。ファルマは次から次へと患者を診ていった。子供ながらに確かな目と腕を持った薬師なのだ、とメロディは改めて感服した。

「麻醉が効いたと思います」

メロディがファルマの前に手を見せにやってきた。

「分かりました」

ファルマは調剤室に引込む。

「液体窒素」

そして、物質創造で液体窒素を作り出し耐低温容器に入れ、綿を巻いた棒の先端を、-196度の液体窒素に浸す。綿棒の先端は凍結し、超低温を維持している。

「さて、焼きますよ」

店舗に戻ったファルマはメロディの手を取り、全てのいぼに液体

室素の綿棒を押し当ててゆく。液体室素に触れると激痛を伴うが、押し当てる時間が短ければ、痛みはそれほどでもない。それに、麻酔もかかっている。メロディは殆ど痛みを感じなかった。

「もう終わりですか？」

「はい、これでいいです。5日後にまた来てください、ウイルスの勢いが盛り返してくる前に、また焼きます。一気に切り切ってしまうでしょう」

処置はすぐに終わった。そして、ファルマははとむぎ茶を渡す。

パピローマウイルスのいぼには、はとむぎ茶が効く場合がある。ファルマはあらかじめマーセイル領で栽培させておいたものを、薬局に仕入れてストックしていた。

「ありがとうございます。これで安心です」

ほっとしたメロディは、代金を支払い、ファルマに懇ろに礼を述べた。

「お大事に」

エレンが診療から戻ってくると、ロッテが薬局の前の階段に腰かけていた。そして……、

「どうしちゃったの、ロッテちゃんたら。この作品たち」

薬局の前に、周囲に積もった雪でこしらえたと思しき雪だるまがたくさん並んでいた。ロッテが何も考えまい、考えまいと思っているうちに、店の前一行にたくさん作ってしまったのだ。それがまた、アーティスティックで、今にも動き出しそうなほど素晴らしい造形になっている。

それと引き換えにロッテの手は、赤く腫れあがっていた。

「あらあら、水属性神術使いでもないのに、素手でそんなことするもんだから……何があったのよ」

「夢中になって作ってしまいました。手が痛がゆいですっしゅんと鼻をすするロッテ。」

「当り前よ。しもやけになっているわ。もう……仕方ないわね。メ  
ディークのクリームを塗ってあげるわ、一週間もすれば治るから」  
エレンが薬局の中に薬を取りに行こうとすると、ロッテがエレン  
のコートを引っ張る。

「ああっ、中に入っではいけませんっ、エレオノール様！」

「あら、どうして？」

「そのっ。今、メロディ様がお越しなので……ファルマ様と……」

「診療中なのでしょ？ それがどうしたの」

ロッテは慌てふためいていた。

「ファルマ様、今、プロポーズ中で……お二人の時間のお邪魔をし  
てはいけないと思って」

「えっ？ プロポーズ？」

エレンは思わぬ言葉に、声が裏返り脱力した。

「ファルマ君が、プロポーズねえ……好きな人、いたの！ むっつ  
りなんだからあの子」

ファルマをまだ子供だと思っていたのはエレンだけで、十二歳の  
ファルマといえど、確かに結婚相手を考えてもおかしくない時期に  
なっている。結婚問題に関しては、父親である伯爵からエレンもお  
見合い話を少しずつ薦められはじめたので、彼女もようやく結婚を  
意識をしはじめたころだ。

「進んでるわねえ、ファルマ君たら」

噂をすれば、メロディが薬局から家令と共に出てきた。心なしか  
嬉しそうに。そして、ロッテとエレンに「ごきげんよう、お世話に  
なっただわ」と弾んだ声で挨拶をして馬車で屋敷に帰っていった。

「どう思っ？」

エレンがロッテに耳打ちする。

「お嬉しそうでしたね。当然だと思いますっ、ああ、メロディ様は

ファルマ様のプロポーズをお受けになったのでしょうか。ファルマ様は素敵なお方ですから、メロディ様だって……」

ロッテの口から魂が抜けかけていた。そんな二人の背後から、間が悪くファルマが声をかける。

「ロッテ、お使いありがとう。遅かったけど何かあった？ あ、エレンもお帰り」

「なんでもないですっ、薬局に来た子供たちが楽しんでくれるかなー、って雪だるまを造っていただけで」

ロッテはファルマに話を聞かれたのではないかと、驚いて飛び上がり、言い訳をはじめめる。

「ロッテちゃんたら、雪だるま作りすぎてしもやけになっちゃってるわ」

「ええっ……ちょっと診せて」

ファルマは呆れながらも、ロッテの両手をとった。さりげなく差し出されたその手の温かさに、ロッテの鼓動が跳ねる。

「だめですっ、ファルマ様にはメロディ様というお方が……」

だが、それはメロディを傷つけるからと、ロッテはぐいっとファルマの手を押し戻す。

「そうよそうよファルマ君。二股はやめなさいよ」

エレンも加勢した。

「何を言ってるんだ？」

話を聞いて、ファルマはバツが悪そうに笑った。笑い話もいいところだった。

「あれは手を診ていただけだよ。メロディ尊爵にはイボができていたからね」

「本当ですかっ！ 本当なんですっねっ！？」

ロッテが信じて、嬉しそうな声を上げた。

「でも何でそう思った？」

「なんでもないですっ！」

その日、ロツテは上機嫌で、食べきれないほどの豪華なおやつをふるまったという。

## 4章2話 動き出した神聖国

ある日のサン・フルーヴ帝国宮殿、皇帝の執務室にて。

メイシスの新・基礎医薬生物学、と表紙に書かれた分厚い教科書を手にし、エリザベートⅠⅠ世はそれをぺらぺらとめくっていた。ページは風をはらんで、女帝の、清楚にまとめあげた髪の毛をふわりとさせる。

顔を近づけたり遠ざけたり。ふむふむ、ともっともらしく感心してみせたり。

「なるほど」

ばたん、と女帝は教科書を閉じた。

ごくりと生唾を飲むのは、ファルマとパツレ。

女帝の手に持つ教科書の第一著者と、第二著者だ。

「わからぬ」

（申し訳ないけど、そうでしょうよ）

ファルマは心の中で相槌を打った。

「謄写機で刷られた医学・薬学書とな。余にはさっぱり分かんが」  
完成した教科書も目新しい発明品のうちに入るのだろうか。入るのだろうな、と念のため女帝に献上にきたファルマとパツレである。パツレは「陛下への献上なんて一生に一度あるかないか分からない！俺にも行かせる！」と暴れ、宮殿ではインフルエンザが流行っていたので、化学療法中の彼は感染症のリスクを考えて行かせないようにしようと思っていたのだが、まあファルマと一緒に行動している限りは聖域があるので大丈夫かと考え直し、二人で献上式の間



に臨んだわけである。

一世一代の晴れ舞台で、パツレの緊張がファルマにも伝わってくる。

「メデイス兄弟。そなたら、見事な働きである」

「ははっ」

「光栄に存じます」

ファルマとパツレは畏まり、二人で一礼する。

（あっ、そういえば！ 頭！）

深々と頭を下げるパツレの頭に思わず注目をしてしまうファルマだが、パツレはウィッグが取れないように固定していたらしい。神殿での失敗に学んだようである。ファルマはいらない気を回した。

「クロード」

「は」

女帝は、献上式に立ち会っていた侍医長クロードを手招きし、教科書を手渡した。クロードは相変わらず、襷襟のついた真っ黒なコートを着ている。

「侍医長としてこの書籍の価値を評せ」

「は、ただいま拝読させていただきました」

クロードが厳しいまなざしで、教科書をあらためる。デタラメを書いていないか、学術的に正しいか否かを。

「お二人はこちらへ」

ファルマとパツレは執務室の隅に用意された椅子に腰かけるよう、侍僕にすすめられる。クロードが目を通して間、女帝は國務卿を呼びてきばきとほかの執務をこなす。

クロードの査読にはしばしの時間を要した。涼しい顔をして待つファルマとは対照的に、侍医長という帝国いちの医師に、ファルマの代筆とはいえ著書を審査されて恐縮しまくるパツレは、今にも倒れそうだった。そんなパツレを見かねて、ファルマは耳打ちする。  
「気分悪そうだけど大丈夫か？」

「あ、ああ…… お前よく平気だな。心臓に毛が生えてるんじゃないか？」

皇帝や侍医長の前でも堂々としているファルマに、圧倒されるパツレだった。

「生えてないよ」

「誰がハゲてるって？」

「言っていない」

ごほん、とクロードから咳払いが聞こえたので、ファルマもパツレも私語を慎む。皇帝の前で私語など厳禁である。

国務卿と一仕事を終えた女帝は、執務机に置いてあった紅茶を優雅に飲み干し、腹部をさする。

「昼になった、小腹がすいたのう。さて、そなたらも空腹であろう。余と食事でもせぬか」

ファルマとパツレ、そしてクロードは昼食(déjeuner)に誘われた。

「光栄にございます」

皇帝の傍に座ることを許され、食事を共にするということは至上の名誉であり、その榮譽に浴すパツレは一生の自慢にしたいと言って興奮していた。ファルマは診察の後、いつも女帝と一緒に食事をしているのだが、それは敢えて言わないことにした。

皇帝の食事は、宮廷人たちに公開されるものである。

皇帝は準備の整った非公式の食事部屋の円卓の窓際に座し、窓は開け放っている。皇帝の着座を見届けた後、ファルマとパツレも席につく。濡れたナプキンを給仕たちが持ってきてパツレやファルマに差し出し、手を拭く。ファルマとパツレはフィンガーボールに、神術の生成水で水を張り、コップも満たす。

女帝は火属性神術使いなので、専属の水属性神術使いが水を給し

た。

女帝の周りには大勢の宮廷人が控えていた。衆人環視の中食事をするあたり、フランスのルイ14世の宮廷生活に似ていると、ファルマは思わないでもない。

「ファルマ、来ていたのか！ 母君の診察に来たのか？」

皇子が入室してきて、ファルマの来訪を歓迎した。

「うさぎ狩りに行くぞ」

「お久しぶりです、殿下。後ほど、うさぎ狩りの前に診察をさせていただきます」

何で皇子がお前を知っているんだ、とパツレが目で尋ねる。それに何で無資格のお前が皇族を診察できる！ とでも言わんばかりだ。（もはやこれまでか）

ファルマはさりげなくコートを脱ぐ。コート下のファルマのベストには、王冠型のバッジがついていた。宮廷薬師のバッジである。帝国で四人目の宮廷薬師、ということになる。

「ひ！？」

初めてそれを目にしたパツレは、顎が外れそうになっていた。ファルマが宮廷薬師であるということをパツレが知ったのも、まさにこの瞬間だったのである。

ファルマは完全に、自らの立場と所有している資格をパツレに言いそびれていた。

「どうした、料理が口に合わんか？」

奇声を発したので女帝に声をかけられ、パツレは畏まる。

「い、いえ。大変美味しうございます」

「それはよかった。心行くまで堪能してくれ」

「ありがとうございます」

ファルマの宮廷での立ち位置を理解し、ロイヤルファミリーぐるみでファルマを重用して親しくしていると知ったパツレは、もはや言葉もなかった。

もう帰りたい、宮廷についてくるんじゃない、と思ったパツ

レである。

オードブルが10皿、肉が3皿、魚が2皿、4皿のアントルメ（デザート）が、毒見のあと、素晴らしい細工の施された銀の食器に載せられ運ばれてきた。ド・メデシス家の食卓よりさらに、宮廷料理というべき豪華で贅沢な料理である。ゆつくりと食事をすすめ、皇子や女帝と気の利いた会話を挟みつつファルマたちが満腹になってきた頃には、別室で査読をしていたクロードは、教科書に一通り目を通していた。

「御苦労、そなたも食事をするといいぞ」

「はっ、ありがとうございます。ざっとですが拝読させていただきました。一つ疑問なのは、ファルマ師はどこでこの知識を修めたのですか？」

ファルマとクロードの視線がかちあった。ファルマはしばし答えに詰まる。

「……お教えいただくわけにはまいりませんか？」

真綿で首を締めるかのように、攻めの姿勢に入るクロード。それを見た女帝は、ファルマに助け船を出した。

「あー、クロードよ。あまり少年を困らせるでない」

「そうですね。これは教科書というより私の妄想の編纂物にすぎません、現時点では」

ところが、ファルマは唐突にクロードに同調した。

「っ、ファルマ」

何を言い出すんだ、そう思ったのだらう。パツレは慌ててファルマをたしなめようとした。しかしファルマの言葉は続く。

「症例を集め、多くの医学者と薬学者の医学的手法に基づいて統計解析がなされ、これらの治療法が有効であると評価され、この知識が今後も更新され続けるとき」

そこでファルマはクロードから女帝に視線をうつす。

「これははじめて本当の教科書となります」

「ほう……」

女帝はファルマの言葉に圧倒された。

「はっ、白血病の項は、私が一例の症例として、身をもって検証しました」

パツレはすかさずファルマを弁護した。

それを聞いたクロードは、冷やかな笑みを浮かべたあと、恭しく教科書を女帝に捧げた。そういえばと思い出したファルマは、

「侍医長様にも一冊、用意してございます。ぜひお目通しいただければと」

「用意がいいな、感謝する」

クロードは教科書をファルマから受け取り、所感を述べた。

「できればもつと時間をかけて精読させていただきたく、医学的な検証を必要としますが、これは未知の知識の宝庫でございます。これらが創作知識やデタラメではなく全て正しいとすると、これまでの医学史を覆さねばなりません。旧来の医学、薬学は過去のものとなり、無用のものとなりかねません」

クロードはそう言い切ってしまうと、手持無沙汰になったらしく、かけていた眼鏡をポケットにしまった。

「検証には百年以上、いや二百年はかかりそうです」

クロードの感覚は正しい、とファルマは頷いた。今、この世界ではどうやっても再現、検証できない技術も教科書の記述に含まれているからだ。

ファルマはクロードの学問へ向き合う真摯な態度を評価したいと思った。

女帝はクロードの話を聞いて少し考え込んでいたが、

「ではそなたと宮廷侍医団に、この医薬学書の検証を任せる。客観性を重視し、過ちはただちに暴き出し訂正をさせよ。二百年かかるものならば、すぐにでも始めねばならぬ」

「仰せのままに。私も、この書物とは無関係ではられませんからな」

クロードはファルマに目配せをする。

何のことを言っているのか要領を得ないファルマと、さらに意味が分からないパツレが目をしばたかせる。

「再編される帝国医薬大学校の医学部長にならないかと、君の父上に誘われてな」

（そうだったのか。知らなかった……）

ブリュノも水面下でいろいろと動いているようである。

最近、大学に詰めたきりで、殆ど家に帰ってこない。ちなみに、クロードとブリュノは、お互いに尊爵でかつ侍医長と筆頭宮廷薬師でよきライバル関係にあるのだが、ここにきて手を組むことになったようだ。

医師と薬師、医学部と薬学部の連携はこのうえなく強力なタッグだった。

「それは心強く存じます。ありがとうございます」

「君も総合医薬学部長、教授になるのだろう」

それを聞いたパツレは目が飛び出そうになった。そして実際にむせた。宮廷に來た以上、もうパツレに隠せはしない。

「僭越ではございますが」

「だから話を受けたのだ。君が学生たちに何を話すのか、同じ大学にいれば聞けるだろう」

ちなみにこの侍医長であるが、手術が上手い、というのはほかの

侍医やブリュノに聞いたところ、本当のようだ。雑菌だらけの素手で手術をするためにこの世界ではほぼ必ず起こるといい、手術後の感染症で死亡させてしまう確率が高いだけで、細い血管を縫ったりするのもお手の物、手術中も殆ど血を出さないし、神術を使いなから細やかな仕事をするという。

この世界の平均的な外科医の手術より、彼の手術の成功率は高い。そのあたりの問題であれば、清潔の概念を教え、術後に抗生物質などを使いクロードの手術をサポートするだけでぐつと患者の生存率も向上するだろう。クロードは名医となれるはずだ。

「君の父上は、帝都と帝国医薬大学校を世界一の医療拠点にしたいようだな。随分と大それたことを考えたものだが……」

面白いじゃないか、とクロードは不敵な笑みを浮かべる。

それを聞いた女帝は、ナプキンで口を拭って食事を終え、彼に尋ねた。

「クロードよ、そなたはファルマを支援するのだな」

「私は医師であり、医学者でもあり、いつも真理の僕です。正しい学説を受け入れます」

過去の常識にはとらわれない、とクロードは述べた。

「白死病のみならず黒死病を退けた全く新しい学問体系であれば、患者のために受け入れるべきでしょう」

「うむ」

ファルマの薬学のおかげで一命をとりとめた女帝も、大きく頷いた。ファルマがいなければ、今頃女帝はあの世行きだったのだ。

「陛下。一つ御赦しをいただきたいことが」

全員が食事を終えた後、クロードは女帝にある提案をした。

「帝国で処刑された罪人を解剖することをお許しただけですでしょうか」

これまでは、医学生の実習を動物での解剖で済ませるか教

師の解剖を見て学ぶというものだった。だが、これでは解剖学の理解には程遠い、とクロードは考えたようだ。

「医学生は一人一体、人体を解剖すべきだと考えています。それに、ファルマ師の教科書を拝見して、これまでの解剖学の教科書は使えないことが分かりましたから、もっと詳細かつ正確な解剖学の教科書を、教授と学生で作リ直す必要があります」

「侍医長様……」

ファルマは意外な人物から心強いバックアップを受けることになり、彼の計らいに感動していた。ファルマはブリュノが帝国薬学校を再編する態勢に入っただため、既得権益の権化ともいえるクロードとは敵対しかねないのではないかと思っていた。

「うむ、許そう」

銃殺刑ではなく、絞首刑での処刑にしてほしい、という要望もクロードから出された。

遺体がきれいな状態の方が、実習教材として助かるからだ。

「よろしくお願いいたします、侍医長様」

ファルマは深く頭を下げた。

… … …

1147年2月下旬。厳冬の頃。

サン・フルーヴ帝国から遠く離れた神殿の総本山。神聖国の礼拝堂からは神官たちの歌声が響き、神官や神官見習い、巫女たちがせわしなく広場を行き交い、大小の聖堂の屋根には雪が降り積もっている。玄関廊や回廊に荘厳に並ぶ神像にも霜がつき、等間隔に配置された聖騎士たちは警備の目を光らせていた。

神殿組織は、地上ではなく地下に枢要部がある。地上に見えている壮麗な建築は、主に観光客や信者の為のおかざりの建築だ。大



神殿の地下には強力な破邪結界の張られた迷宮があり、それは世界中の悪霊の襲撃にも耐えうる地下要塞である。

だが、このたびは大神殿地上部の大会議室で、年に一度の世界中の守護神殿の神官長を集めた枢機会議が行われていた。神殿組織は最高指導者である大神官を頂点に、十名の枢機神官長、その監視下に各地の守護神殿の神官長が各神官を束ねるという形になっている。

今、会議に参加しているのは、世界各地から集った百名を超える神官長たちだ。すり鉢状の大会議場で、中央に祭壇、そして枢機神官長と大神官の席がもうけられていた。

枢機会議では大神官ピウスの挨拶と祈祷のあと、各国の教区の近況と信徒の様子、悪霊の活動状況を報告するのが次第である。

「諸卿らに伝えておかねばならぬことがある」

会議の冒頭に、司会をつとめる枢機神官長の一人が爆弾発言を放った。

「今、何らかの守護神が現世に降りている可能性がある」

「なっ、……それは真にございますか」

当然ながら、各地の神官長がざわめく。

「どの守護神がご降臨召されているのですか？」

「それは定かではない」

神官長たちが騒然となる中、サン・フルーヴ帝都教区神官長サロモンは黙して議席に座していた。現在、どの守護神が地上に降りているのか。知っているのは場ではサロモンだけだ。

サロモンは身じろぎひとつせず、平静を装っていた。しかし、枢機神官長はそんな彼の心を見透かしたかのように、祭壇の上に掲げられた世界地図の一点を、杖で示した。

「おそらくは、サン・フルーヴ帝国に降りている。この二年間、サン・フルーヴ帝国の悪霊の活動は悉く抑えられ、目撃情報が皆無だ」  
悪霊は偏在することはあれ、いなくなるということは珍しい。だ

から、各地の悪霊の出現の様子をつぶさに観察していれば、異変がわかる。

追い出された悪霊たちは、辺境や隣国へと移動していた。帝都を避けるかのように。

それに、サン・フルーヴ帝国の帝都はあの黒死病を退けたという報告が入っている。神の加護があったとは思えない。そう、枢機神官長は説明した。

「サロモン神官長 前へ」

「はっ」

もはやこれまでとサロモンが席を立ち、どう答えたものかと思案しながら、中央の壇上へと上がる。

彼は大注目を集めた。サロモンは決められた所作で大神官の前に跪く。

「サン・フルーヴ国帝都での悪霊の目撃例はほぼ皆無だ。守護神がサン・フルーヴ帝都を守っておられるのではないか。事情を知っておるな、サロモン」

大神官ピウスが静かに口を開く。有無を言わせぬ威圧を伴ってだ。ピウスは世界各国の国王、皇帝すら屈服はせると言われる神殿の最高宗教指導者である。元異端審問官であり恐れを知らないサロモンも、この男の視線には射竦められる。

一言一言には、神力が宿っているように錯覚された。

「いいえ、寡聞にして……」

「守護神に誓ってそう言えるのか？ 宣誓せよ」

サロモンは聖典に手を当てての宣誓を強要された。

世界中の神官長の見守る前で、サロモンの信仰を試される。この上ない屈辱であり、サロモンは固まった。偽りの宣誓を行った者は、神の怒りをかうとされる。

「どうした、できないのか。宣誓してみよ」

大神官が厳かに命じる。サロモンは自らの信仰に従順であろうと

すれば、黙するのが最善だと考えた。ピウスの眼光が鋭くなる。

「知っているのだな。……帝都のどこに降りておられる」

「天上に戻られては困るのだぞ、早く大神殿にお迎えせねば」

神殿枢機部は、守護神を拘束しようとしている。

やはりそうだ……と、サロモンは言外に察した。そこで彼は堂々と答えた。

「仮に帝都にいらっしゃったとしても、不干渉が最善だと考えます。神殿が守護神様に対して、守護神様のなさることの邪魔をする以外に、いったい何ができるでしょうか」

「何を言うか！ 下界の汚い場所ではなく、清浄な大神殿でお過ごしただくよう計らうのが神官のつとめというもの、すぐにでも大神殿にお迎えすべきなのだ！」

枢機神官長は激昂した。

だがそれは建前だ。昔から大神殿のやってきたことといえば守護神を拘束し、神力を搾り取って禁じられた秘儀に使おうとするか、守護神を匿っているという大義名分を手に入れ、世界各国への支配を強めただけだ。

そして大抵は、守護神はそんな人間たちに愛想を尽かせ、消えてしまつか天上に戻ってしまう。何度繰り返しても、神殿は学ばないようだ。

サロモンは静かに溜息をついた。

「守護神様が滞在しておられる場所が、一番のお気に入りなのです。神様は故あってそこにいらっしゃる。神様の居場所を人間が決めるべきではない」

今、この世界に降りている守護神は一柱しかない。

少年ファルマ・ド・メデイスに憑いている薬神だ。彼はこれま

での守護神とは一線を画し、世界各地を漂泊するでも信仰を強要するでもなく、少なくとももう二年も現世にいて薬局などひらいて、庶民と交流している。

守護神の地上への滞在としては異例の長さだった。

そして地上に降りた彼は、これまでの守護神と違い神であることを自覚しておらず、それを受け入れられない、少し風変りな神格である。異端審問官であったサロモンが彼を卑劣な方法で襲撃したにもかかわらず、許すどころか、手当をほどこすような温厚な性格、そして薬神として人を救うことの重責を思い悩んで、サロモンに相談しにくるような素朴な神格だ。

最近ではファルマにも頼りにされている、よい関係を築けているのでは、とサロモンは思っていた。

人々はファルマから返しきれないほどの恩恵を受けるが、神殿が彼に対してできることは何もない。ただ彼のしたいようにさせ、彼の足跡を記し、彼が心地よいと思っている居場所を守り、できるだけ長くそこにいてもらうだけだ。

そんな事情を話したところで、大神官が理解できとも思えなかった。彼らはファルマの神格や思いを無視し、神力の塊としてしか見なしていないのだから。

「白状するつもりはないのか」

ピウスの言葉に、怒りが滲んでいた。

「ならば反逆とみなすぞ」

サロモンに詰め寄る枢機神官長たち。サロモンの事実隠蔽行為は、神殿への反逆罪にあたる。聖典に手を当てての宣誓もできず、ファルマの事を話せもしないサロモン、彼には異端審問官による拷問か、神脈の閉鎖が待っているということは明らかだった。

「調べはついているのだ。幾つもの神殿の秘宝を間に噛ませて小賢

しく工作しながら、秘宝 薬神杖と、月神の聖剣を交換したようだな。また、帝都では薬学分野やその他の分野で目覚ましい発見が相次いでおると各地から報告があがっている。帝都に降りているのは薬神なのか」

「猊下……」

サロモンはピウスに怯えた視線を向け、そして言葉を失った。

「そのようだな」

ピウスが断じる。

「なに。帝都で最近”現れた”薬師を探せばよいのだ、お前に聞くまでもない」

帝都で二年以内に名を上げた薬師というと、ファルマ以外にいない。明日にでもバレてしまいそうだった。

「黒死病を退けた、腕利きの薬師がいるはずだ。すぐにでも探し出せ」

どうやら、ファルマは目立ちすぎたのだ。

#### 4章3話 シヌクレイン症候群と、帝都神殿の異変

「お前宮廷薬師になってたのか！ 何で言わなかった！」

「言いそびれたんだ、悪気はなかったんだよ」

宮殿からの帰り支度をしながら、メデイス兄弟は控室でちょっとした言い合いになっていた。もう二年も宮廷薬師をしていたのに、パツレをわずか10歳で出し抜いた形になり、申し訳ないと思うファルマである。

「弟に先越されるとか萎えるだろうが！」

パツレは少々荒れた。そんな彼にファルマは平謝りだ。

「悪かったよ」

（というか何で謝ってるんだ、俺）

多少、腑に落ちない部分もあったが。パツレはもうこれ以上遅れをとってたまるか、と言いながら鼻息を荒くしていた。

「まあいい、五年で追いついてやる！」

「五年もかかるかな。教科書を書いたという実績もあるし、とりあえず宮廷薬師の試問を受けてみたら？」

宮廷薬師になるには、厳しい条件がいくつもついているが、大前提として試験を受けなければならない。ファルマは侍医たちによって、ちよつとしたテストという名目で無理やり受けさせられたものだが、さして難しいとは思えなかった。

「受かるわけないだろ！ 父上でさえ十五年かかったんだぞ！ 全問正解できずに失敗したら三年間受けられなくなるんだから、そうそう簡単に受けられるか！」

パツレにとつてブリュノは簡単には乗り越えられる筈のない大きな目標なのだろうな、とファルマは思う。

「そうかなあ……兄上なら簡単に受かると思うけど、あれそんなに

難しくなかったし」

「あーそうかい。嫌味なやつだなお前は！」

「悪かったって」

ファルマが教え込んだ今のパツレの知識があれば、あとは治療実績があれば一年で宮廷薬師になれるのではないかとファルマは思う。メデイシス一族が栄誉ある宮廷薬師の資格を独占することには風当たりも強いかもしれないが、とにかくパツレは高いポテンシャルを持っていた。パツレはあまり理解していないようだったが。

「だいたいお前はだな……」

兄弟が言い合いながら大廊下を歩いていると、すれ違った女官が躓いた。

「きゃっ」

「大丈夫ですか？」

ファルマが思わず声をかける。彼女は宮廷人として出仕している上流貴族のお世話役の、三十代ぐらいの女官だった。ファルマのなじみのない顔だ。彼女はファルマにぺこりと会釈をする。

「あら、これはお恥ずかしい。昨日宮廷に来たばかりでして、緊張しておりました」

「お足元お気をつけて」

ぺこぺことしながら去ってゆく彼女の後姿を、パツレがしげしげと眺めていた。

「帰ろう、兄上」

「変だ。躓くような場所じゃない」

「ぼうつとしていたか、ドレスの裾をひっかけたんだろう。躓くこともあるさ」

「お待ちください」

パツレは女官を呼び止めた。パツレが彼女を背後から見ていると、もう一度ふらついたからだ。パツレは前に回り込んで彼女と対面し、今度はもっと注意深く彼女を眺めた。

「な、何でございましょう」

パツレにまじまじと見られるので、彼女は出仕して早々何か無礼や粗相をしたのかと身構えている。パツレは戸惑う彼女の体に遠慮せず、くまなく視線を配った。これほどじろじろ見るのは、相手が女官といえど失礼にあたる。彼女はパツレに視診されている間、段々と指先が震えてきた。

パツレは美青年だが背が高く、威圧感があるといえはある。

「どうしたんだ兄上……すみせんマダム……」

パツレはファルマをそっちのけで、彼女に問いかける。

「失礼、マダム。このような震えは最近ひどくなってきましたか？ 躓いたりすることもある」

パツレは問診に入っていた。彼は一級薬師なので皇帝や王族、皇族は診れないが、廷臣や宮廷人を診ることはできる。

彼女を診ることを禁止されてはいない。

「はい……そういえば」

「何か見つけたのか」

ファルマはパツレの見立てに興味がわいた。そして、ファルマも彼女の症状をみてパツレが彼女に目を止めた理由を解した。

「おそらくはシヌクレイン病、でも脳梗塞や水頭症の可能性も否定できない」

パツレの述べた病名は、ファルマの見立てと一致した。

「パーキンソン病」

更にファルマは、ほかの病気の可能性を排除し診眼で確定する。

パーキンソン病はシヌクレイン病と同義だ。ファルマは教科書で疾患を紹介する際に、時折地球上の病名とは違う病名をつけている。特に、人名のついた病名はそのままこの世界に持ち込むわけにはいかない。病態や病因を顕す単語に代えている。

たとえばパーキンソン病は、誤った構造を持つ シヌクレインというタンパク質の脳内への蓄積を一因として起きるシヌクレイン病



と総称されており、ファルマはそちらの名前をつけていた。

パーキンソン病は、何もしていない安静時にも震えがきてしまったり、転びやすい。動作が緩慢になる。ほかにも症状があるのだが、その特徴的な症状を、パツレは見逃さなかった。

「何か、重大な病気なんですか。やだわ……どうしましょう」

突如始まった問診に、ますます震える女官。緊張が、震えの症状を酷くするのだ。

「そうですね。シヌクレイン病という進行性の病気です。すぐに治療薬を飲み始めましょう」

パツレの説明のあとに、ファルマが割り込むようにして続ける。

「すぐに命に関わる病気ではありませんが、もう少し詳しいお話を聞かせてください。検査と薬の処方をお願いしますので、明日外出許可をもらって異世界薬局に来てください、私は異世界薬局の店主、ファルマと申します。それから侍医長様にこの書類を手渡してください。これから年齢、ご出身、家族構成などお伺いしますが、お時間ありますか？」

ファルマは薬師控室に彼女を連れ込み、問診をするとその場で診断書を書いて、クロードのサインを貰うよう指示した。宮廷薬師と侍医が認めれば宮廷人は治療に入ることができ、治療のための外出も許される。

この場では詳しい検査ができないので、女官を薬局に呼ぶことにした。

「心配いりません、適切な治療をしていきましょう」

不安そうな女官に、パツレは明るく声をかけた。

「兄上のおかげで、患者が見つかったよ」

ファルマはパツレに感謝した。戻って彼女のぶんの新しいカルテを書かなければいけない。ファルマは三か月に一度宮廷人を全員診ているが、いつも診眼を使って歩いている訳でもなく、廷臣全員に会える訳でもないの、新患者はこうやって取りこぼす場合もある。

「薬は、シヌクレインが蓄積することによって不足するドーパミンを補うような薬、もしくはシヌクレインが蓄積しないような薬を出せばいいんだよな」

教科書を執筆したパツレは、この疾患の治療薬を忘れていないようだ。

「若年性での発症だから、まずL-ドーパとドーパミンアゴニスト（作動薬）を主体とした薬にしたほうがいいかも」

「L-ドーパ？ ドーパミンそのものでは駄目なのか」

「ドーパミンは飲んでも脳まで入っていけない。脳に入る血管には血液脳関門という特定の物質の侵入を防ぐ関門があつて排除されるからだ。L-ドーパ（L-3,4-ジヒドロキシフェニルアラニン）は、血液脳関門を通れるように加工したドーパミンと同じ働きをする薬なんだ。あとのことは検査結果を見てから考えよう。そして家族性かもしれないから、家族も調べたほうがいい」

「なるほど……この病気に対してその薬を、というのが薬神の天啓なんだな」

パツレは考え込んだ。

「うん、まあ……」

（そう言われると後ろめたいけど）

しかしパツレは、疑問に思ったようだ。

「何故、蓄積しているシヌクレインを分解してしまえる薬ではないんだ。そこが病因なんだろう？ 根本を叩かないでその下流を叩いたって対症療法でしかないじゃないか。俺はそれを最善だとは思わない」

「いいところに気付いたな」

（というか、かなり科学的なものの見方ができるようになってきている）

これは頼もしいぞ、とファルマは感動した。

ほかの方法としては、iPS細胞などの人工幹細胞を脳に注入してドーパミンを産生させてやることもできる。この世界の設備では

現実的ではないが……その方法も、根本的な治療ではないのだ。

「兄上の言う通りだ。あの教科書は決して完全ではない。知っての通り、治せない病気だつてある」

そう、ファルマが知っているのは地球の21世紀までの薬学でしかない。この先の知見は、この世界の人々が一丸となって積み上げてゆくべきものだ。

「俺は守護神である薬神を心から信仰しているし、薬神は完全な薬学をご存知だと思っている。だからこそ、それを教えてくださらないのはなぜなのかと思つてな。人間に課された次なる試練なのか……」

パツレは守護神の真意の理解に苦しんでいるようだった。

「守護神の思し召しはいつも深淵だ」

パツレはしみじみとそう言った。

「じゃ、俺、薬局に寄つてさっきの患者の薬の準備するから」

ファルマが屋敷に戻る馬車を途中下車して薬局に寄ると、メロディ尊爵がファルマを待っていた。五日に一度ほど薬局にイボを焼きにきていた彼女は、朗らかにファルマを迎える。

「おかえりなさいませ、店主様」

「申し訳ありません、お待たせしましたね」

「いいえ、お待ちしていた間ロツテさんと打ち合わせをしていたので、楽しかったわ」

ロツテはなんだかんだでメロディと打ち解けていた。

「打ち合わせ？」

ファルマは怪訝な顔をする。

「えへへ、メロディ様とたくさんお話しました！」

ロツテも上機嫌だった。メロディは芸術に造詣が深く、ガラスアートに興味を持っていたため、ガラスアートの話をしているうちロツテと二人意気投合し、仲良くデザイン画を描いたりガラス細工の

共同制作の予定をたてていたのだという。

見ればそこかしこに、ガラスブローチやガラスの花瓶などのデザイン画が散らかっていた。いわく、二人で展示即売会を開きたいそうである。

（俺がない間に、そんな話に……）

「作品展、楽しみだよ」

常連客と職員の仲がいいのはいいことだ、とファルマは歓迎した。

「では、今日も焼きますね」

早速、液体窒素でイボを焼く治療を行う。

「もう、あと一息ですね。あと一回でうまくいけば治ると思います」

「ありがとうございます。早いうちに治療をしていただいて助かりました」

「これ以上増えたら大変ですからね」

「麻酔をかけていただいたので、痛みもなくてよかったです」

液体窒素というと辛い治療だが、一般的には使わない表面麻酔をかけることによって、苦痛はなかったようだ。液体窒素で焼くさじ加減はファルマが決めている。イボのできていた箇所が多いので根気よく取り組まなければならないが、着実に効果は出ていた。また、彼女はハト麦茶を飲むようになったので、それによる治療効果も期待している。

「今日はこれで患者さんは終わりかしら」

エレンが一日の仕事を終え、大きく伸びをした。肩をほぐすしぐさをしていると、ロッテが気を利かせて肩もみをする。

「お疲れさまですつ。今日もたくさん患者さんが来られましたね！」

「あー気持ちいいわ、ありがとうございます。ロッテちゃん。ロッテちゃんは肩こらないの？」

「私はこらない体質なんです」

ファルマが留守の間、エレンは薬局を上手くまわせるようになった

ていた。三人のアルバイトの薬師たちもエレンの指示のもとよく働いている。

「そういえばサロモンさん、今日薬局にきた？」

ファルマがふと思い出してそう言つと、事務をしていたセドリックがペンを持つ手を止める。

「いいえ。お見えになっていません」

「どうしたんでしょう、風邪でもひかれましたかね」

ロッテもそういえば、と気を回す。もう、一週間は顔を見ていない。

雨の日も風の日も通つてきていたサロモンが来ないのは、よほどの事情があるのではないかとファルマは考えた。パツレの治療に専念するためにファルマが薬局にいなかった時期があったので足が遠のいてしまったのだろうか、そうも考えたが……ファルマの復帰後は、毎日顔を出していた。

「うーん、風邪じゃないと思うな」

サロモンは薬局の常連なので、風邪をひきにくくなっているはずなのだ。それに、風邪だとしても長すぎる。いつも薬局にやってきてファルマのすることをじっと見守っているのは少し鬱陶しく思っていたのだが、来なくなると寂しいものだ。

「神官長様はお忙しいのでは」

セドリックはあまり気にしていなかった。

「帰りに神殿に様子を見に寄つてみようかな」

「気になるなら、そうしてみたら？ 私も暫く神殿に行っていないかったから、一緒に行くわ。ロッテちゃんも行く？」

「私はメロディ様と、ガラス作品の打ち合わせの続きを……」

ロッテはメロディの屋敷の夕食会に呼ばれたようで、どんなごちそうが出るのだろうと思いを馳せていた。

「そう。じゃ、二人で行きましょ、ファルマ君」

夕方、薬局を閉めたあと、ファルマはエレンと一緒に神殿を訪れる。ファルマとエレンが神殿に到着すると、神殿に立ち入る前に、中から出てきた神官らの顔ぶれが一新されていることに気付いた。ファルマは胸騒ぎがして足を止める。

エレンはあまり神殿に立ち寄らないので、気づかないようだ。

「神官さんたち、大規模に異動したのかな」

「ちよつと待つて、ファルマ君」

ファルマの言葉を不審に思ったエレンが、ファルマの袖を引いてまわれ右をさせた。

「今、なんて言った？」

「神官さんたち、全員顔ぶれが変わってる。神官長も変わってるみたいだ」

特徴的な帽子をかぶっているのが神官長だ。

見知らぬ神官が、神官長の帽子をかぶっていた。

「サロモンさんはこの前着任したばかりなのだから、まだ交代の時期ではないわ。神官長が変わったら、陛下に挨拶に行っている筈」

…それに、ファルマ君に黙って帝都を去るとは思えないわ」

エレンの言葉に、ファルマは表情を陰しくした。

「何かあったみたいだ」

#### 4章3話 シヌクレイン症候群と、帝都神殿の異変（後書き）

##### 【謝辞】

薬剤師のセイメイ先生より、血液脳関門の記載についてご指導をいただきました。

#### 4章4話 神聖国への潜入（前書き）

本日は2話同時投稿しています。前の話を読んでいない方はご確認  
お願いいたします。



#### 4章4話 神聖国への潜入

神殿前の様子を見ていたエレンとファルマは、いつも神殿で見かける熱心な信者の一人が神殿から出てきたので、呼び止めた。

「あ、異世界薬局の店主様。ボヌフォア様も」

信者の老女は薬局をかりつけにしているので、ファルマの顔を見知っていた。エレンとも知り合いである。

「こんにちは。神官長様は、交代されたんですか？」

「そのようですよ。つい一週間前のことですね」

「交代の理由は？」

「なんでも、前の神官長様が神殿への反逆を起こして……投獄されたとのうわさです。新しい神官長は大神殿から直接派遣されていた方のようです」

あくまで噂ですがね、と声をひそめて老女は打ち明けた。前の神官長さん、よい方だと思っていたのに残念です、と彼女は首をふつた。

「何の反逆ですか？」

ファルマがさらに問い詰める。

「さあ、そこまでは……」

老女は詳しい事情は知らないようだった。

「背信ではなくて反逆というと、かなり罪が重いわ。死刑か神脈の閉鎖ぐらいやられるかも」

どうやら深刻そうね、とエレンは更に沈鬱な表情になる。

「それ、もしかして俺のせいなんじゃないかな」

ファルマはぽつりとこぼした。

これだけ帝都で大っぴらになっているファルマの存在、その正体が、どこから大神殿に漏れても不思議ではない状態ではあった。そ

の情報が大神殿へ伝わらないよう、サロモンが情報を根こそぎ握りつぶしていたというのは、エレンも知るところだった。それでも、風のうわさなどが広まり、サロモンも隠し切れなくなったということなのだろう。

「前に、影のない子供を探せって指令が大神殿から出てたんだし」

「どうなのかしらねえ……」

エレンも、ファルマの存在が大神殿に気取られるのは時間の問題だとは思っていた。考えても仕方がないことなので、考えないようにしていたのだが……。

「でも、場合によっては死刑って、そこまでやるのか？ 宗教団体なんだろう？」

ちよつと無慈悲すぎるんじゃないか、とファルマは糾弾したい。

「神殿組織つてもものすごい縦割り社会だし、神脈の開閉をいじれる立場にある神官長の裏切りには、特に厳しいのよ」

それを聞いたファルマは腰の薬神杖に手をかけた。

「反逆者扱いされた原因はこれかな……秘宝がなくなった罪は重そうだな……」

反逆という言葉はあてはまるだろう。

よく手になじんだ薬神杖は、ファルマの神力を含んで輝いていた。ファルマの神術に耐え、さらなる力を引き出してくれた、この世にたった一振りの特別な杖。愛着がないという嘘になるし、他の杖には代えられない。それでも、ファルマは杖がなくても一通りの神術は使えるし、サロモンを釈放してもらう方が重要だった。人命にまさるものではない。

ファルマは迷わなかった。

「この杖、神殿に返すよ。サロモンさんに貸してもらっているものだし、秘宝をなくしたことで嫌疑がかかっているんだろ？ つか」

「でも、薬神杖はあなたにしか使えないのよ？ 宝の持ち腐れじゃない。許可をもらって所有させてもらった方がいいわ」

使えないものを返したって……と、エレンは渋る。大神殿からすれば盗難に遭ったような状態になっていることは否めない、とファルマは言う。

「サロモンさんの厚意で使わせてもらっていたけど、大神殿は知らないわけだし、俺が占有するのもまずいと思う。返却して、それと引き換えにサロモンさんの釈放をお願いしてくるよ」

ファルマは腹を据えて、サン・フルーヴ帝都の守護神殿へと乗り込んでいった。サロモンが神官長を務めていた時とは、神殿の空気が一変していた。「一人で行くと危険よ」と、エレンもついてきた。ファルマが一步神殿に踏み込むと、神殿の床が青白く脈打つように発光する。

ファルマの神力を床材が検出し、神殿全体が聖域と化す瞬間だ。

「えっ？」

それを見たエレンは絶句する。まさか、神殿がファルマに反応して光るとは思わなかったのだ。

「そうなんだよ。凄いよな、神殿」

「これじゃ、隠そうだったてすぐ見つかったちゃうわねえ……」

ファルマに対する神殿の反応を見たのは初めてだったので、エレンは驚いていた。エレンのリアクションに構わず、ファルマは新任の神官長を探す。礼拝堂にいないことを確認すると、彼はまっすぐ神官長室へと踏み込んでいった。エレンも後から続く。神官長室の扉の中から光が漏れている。新しい神官長は在室のようだ。ファルマは声を張って呼びかけた。

「こんにちは、お忙しいところ失礼いたします。神官長様、少しお話をさせていただきませんか」

「なっ、何だ！」

新しい神官長は、ピリピリしながら杖を構えてドアを開けて出てきた。

神殿全体に異変が起こったので、警戒したのだ。おそらく、神力を検出して燃え盛る燭台の炎も炎上していただろう。しかし彼は薬神杖を持ったファルマと発光する神殿の床を見て、全てを理解したようだった。彼はファルマを頭からつま先まで眺め、満面の笑みを浮かべた。

「これはこれは。こちらからご挨拶を申し上げようと思っていまして、そちらからいらっしやるとは、光栄です」

新神官長は眼鏡をかけた中年の男だった。

「お初にお目見えいたします、私は新しく赴任した神官長のコームです。お見知りおきを、薬神様」

「薬神ではなくてファルマ・ド・メディスと申します。私のことをお探したと思ったので、これをお返しに来ました、長い間お借りしていて申し訳ありませんでした」

薬神杖を両手でコームに返すが、コームは受け取ろうとしない。

そして、彼はこういふのだった。

「おそれいますが、大神殿に直接来て戻していただけますか。私ども人間には持てませんので」

コームの言葉に、ファルマは違和感を覚えた。

「失礼。大神殿というと、神聖国にですか？」

エレンがコームに確認する。帝都を簡単に離れるわけにいかないファルマは、それは都合が悪い。

「鞘がなければ持てないかもしれませんが、鞘を持てば杖に触れなくても誰でも持てます。ここにお返しするのではまずいでしょうか」

薬神杖は有機物をすりぬけるので、人間には使うことも直接持つこともできない。だが、無機物の箱などに入れば持ち運びができるということは分かっていた。そうやってサロモンは杖を薬局に持ってきたのだ。ファルマだっていつでも薬神杖を手に持っていたわけではない。石の床に置いたり立てかけたり、鞘に入れて腰に佩いたりしていた。

「それでも、直接大神殿にいらして、あなたが所有しておられた事情を説明してくださいとありがたいです」

大神殿という言葉に、ファルマは警戒した。守護神が憑いていると分かれば、大神殿に拘束されるかもしれないとサロモンが言っていたからだ。守護神がどうこうはさておき、神聖国に行けばややこしいことになるのは目に見えていたので、ファルマとしてはご免こうむりたいところだ。

「神聖国にまで行くのは、彼も仕事があるので難しいです……」  
やけに大神殿に来てくれと言ったな、とエレンも不審に思ったように固辞しようとする。

「サロモンさんにお会いしたいのですが、今どこにいらっしゃいますか？　大神殿に行けば会えますか？」

ファルマは慎重に言葉を選ぶ。

一旦神聖国に向く構えをみせて譲歩し、サロモンの居場所を聞き出さなければいけない。

「はい、お会いできると思います」

「サロモンさんはお元気にしておられますか？」

コームの視線がコンマ数秒泳いだのを、ファルマは見逃さなかった。そこでファルマはすかさず釘をさした。

「御存命ですよね？」

「ええ、もちろんです。一連の責任をとらせるために、神脈は閉鎖されたと思いますが……」

「そんな……神脈の閉鎖だなんて」

エレンはサロモンに同情した。神力を失ったサロモンは平民として神殿からはじき出され、悲惨な境遇が待っているに違いない。ファルマはコームにこう言い放った。

「伝書鳩を神聖国に飛ばしてください。薬神杖を返還し、サロモンさんに会うために神聖国に行きますと、そうお伝えください。もしサロモンさんに会えないのでしたら、俺は神聖国に行きません」

こう伝えておけば、たとえ死刑が決まってもすぐには処刑されまい。サロモンは人質にとられているようなものだった。ファルマにとってサロモンはよき理解者だった、彼を庇いたい気持ちがいみじくもあがてくる。

「承知いたしました。馬車は私どもで手配します」

コームは、ファルマの神聖国行きを急ぎたがっていた。

「行きはいいとして……ファルマ君、どうやって帰ってくるの？」

薬神杖がなければ、神聖国から戻ってくるのに馬で一週間かかるわよ」

何かあつてはいけないから、私もついていくわ、といってエレンは心配する。ファルマはエレンの心遣いに感謝した。そこでコームに尋ねる。

「診療が一段落ついてからでいいでしょうか。私もたくさんの患者を抱えています、私が不在にすると命にかかわる患者もいます」

その患者の中には、化学療法中のパツレもいる。パツレはもうある程度自分で判断して薬を使えるようになってるが、それでもファルマが傍にいないことには様々な感染リスクに曝され、すぐに感染症にかかってしまうだろう。

サロモンの命も大切だが、パツレの命も、そして彼が受け持っている患者の命も大切である。

「一週間程度ならお待ちできます」

コームは譲歩した。そのあたりは、多少柔軟に対応してくれるようだ。

「では、神聖国に行きます。秘宝を勝手に使わせていただいていたって申し訳ありませんでした」

「なに、あなたが気にやまれることはない。サロモンの責任です」

コームは上機嫌で頷く。しかし直後、ファルマの次の発言に凍り付くことになった。

「ただ、エリザベート皇帝陛下にお伝えした後にまいります」

「な、何故皇帝陛下に…… 皇帝陛下が何の関係があるのですか」

喜色満面だったコームの顔は青ざめ、狼狽した。

「着任されたばかりでご存じないと思いますが、私の経営している薬局は、帝国出資なおかつ帝国勅許の店です。陛下に報告をせずに、私が国外に出ることは禁じられております」

「なんですと……！」

サン・フルーヴ帝国というと、現在世界で最も力を持つ大帝国、その帝国に君臨する皇帝といえば、それはもう絶大な権力を持っていた。

今、サン・フルーヴ帝国と真っ向から戦争をして勝てる国家は、世界中のどこにもない。それは、神術の秘儀を独占し世界の覇権を握っているとされる神聖国も例外ではなかった。神官たちがサン・フルーヴ帝国貴族全員の神脈を閉鎖し無力化したとしても、平民兵の兵力差だけで、小さな神聖国などすり潰されてしまう。それほど軍事大国でもあった。

その、泣く子も黙る皇帝に一言こわってから正式に出国という運びになると、神殿といえどファルマを無事に返さないわけにはいなくなる。一人ぐらいなくなっても問題にならない、神殿の権限でどうしても消してしまえる「ただの薬師」、ではなかったのだ。愕然とするコームに、エレンはとどめをさした。

「と同時に、彼は筆頭宮廷薬師。つまり、陛下の主治薬師でもあり、数日はともかく簡単に陛下のおひざ元から離れることはできませんの」

主治薬師というのは、国でもっとも信用されている立場にある薬師である。

この女帝は気が短いことで知られている、筆頭宮廷薬師を勝手に神聖国に奪われては、逆鱗に触れるだろう。

「さ、さようでございますか……」

コームの顔が引きつった。皇帝の名前が出て恐れをなしたのだ。薬神憑きが自分からのこの神殿にやってきてこれ幸いと思ったら、一筋縄ではいかなかった。

彼の考えていた以上に、ファルマの帝国内での立場は確固としたものだったのだ。

「だっ…… 大神殿に判断を仰いでみます」

ひとまず、ファルマの大神殿行きは保留になり、その判断が下るまでは薬神杖はファルマが所持していてよいということになった。

「サロモンさん、神脈を閉鎖されたって言ってたよな」

神殿から帰る途中、ファルマはエレンに確認する。

「酷いことをするわね…… サロモン神官長にとっては、死ぬより辛いと思うわ」

はつきり言って、神術使いとしては再起不能の処遇である。

「神脈って、開閉できるんだっけ」

「そうだけど、二度と開けないようにする方法もあるみたい…… さつきの言いようだと、やられたのはたぶんそっちね。ものすごく不名誉なことだから、早まって自殺なんてしないといいけど……」

誇り高い神官長だから、その方が心配だわ、とエレンは頭を抱えていた。

その日の夜…… 屋敷に帰ったファルマは眠れなかった。自分のせいでサロモンが神官長の立場を追われ、神脈まで閉鎖され、今どんな待遇を受けているか分からない……。

どうすればよかったのか分からないが、彼を巻き込んでしまったことに責任を感じた。

「俺が神聖国に入ったら、何か起きるかな」

日頃から交わしてきたサロモンの言葉を思い出す。

夜闇に紛れて、大神殿の大秘宝を見に行くといい、それは可能だ



と言っていた。サロモンからすれば、警備の手薄な夜ならば潜入はできなくもない、という認識だ。ファルマの存在を鋭敏に暴きだす神殿であるが、床に直接触れなければ、神殿は反応しない。つまり、床に足をつけたり、壁に手をついたりしなければいいのだ。

コームが、ファルマの存在を知らしめるべく伝書鳩を帝国から神聖国に飛ばしても、まだ手紙は神聖国に着いていないだろう。その間に、サロモンの身に何かがあったら……そう思うと、悠長に寝てなどいられなかった。

ファルマはベッドから起きて薬神杖を握り、窓を開けた。

「乗り込んでいこうか」

彼の無事を確認したかった。

サロモンがどこにしようとも、どんな場所に閉じ込められていようと、診眼を使えばサロモンを神聖国上空から一瞬で見つけ出せる自信はあった。

なぜなら、サロモンには先天性の異常がある。診眼では見えていたが、日常生活に支障はないので特に気にしていなかった。サロモンの特徴は、およそ七千人に一人。

神官の数からして、神聖国では一人しかいないであろう。

彼は、すべての内臓の位置が正常とは逆の、完全内臓逆位であった。

… … …

「サロモンさん」

深夜。雪に閉ざされた神聖国の収容所の独房の中で、寒さに身を震わせながら薄い掛布にくるまっていたサロモンは、窓の外から小さな囁き声を聴いた。

「何者……っ!？」

「ファルマです」

格子のはめられた窓の外を見ると、薬神杖に乗り、浮遊している

少年がいる。闇に紛れ、ファルマが収容所の窓の外にまでやってきたのだ。

「おお……こ、これはなんとしたこと……ファルマ様」

サロモンは、ファルマの出現に驚愕する。

どうやってここまでやってきたのか、なぜサロモンが投獄されていることを知っているのか、考えてもただただ理解不能だった。

「事情は殆ど知りません、ですが、俺のせいでこんなことになったのではと……そう思ってます」

帝都から神聖国までは、かなりの距離がある。

ファルマは飛翔を使って薬神杖を使ってひとつとびにして来たのだ。ファルマは冬の上空を飛ぶために、かなり厚着をしてきた。それでも、体が冷え切ってガタガタと震えていたが。

「どうしてここが分かったのです？」

「あなたには少し、特徴がありましてね。心配しました、無事でよかったです」

ファルマは種明かしをしつつ、無事を喜ぶ。予想通り、神聖国上空から完全内臓逆位の人間を探してみたら、一人しかいなかったのだ。

「こ、こんな取るに足らない男の事を……申し訳ありません」

サロモンは嬉しいやら、申し訳ないやらで男泣きに泣いた。

「サロモンさんにはお世話になっていきますし、とるに足らないなんてことないです」

「ありがとうございます……」

サロモンは恐縮して、最後は言葉にならなかった。

「この房の中に入ったら、何か特殊な術で俺の存在を検出されてしまいますか」

「いえ、この独房は杖を取り上げられた神官を留置する場所で、そういう素材ではできていません」

ファルマは鉄格子を消去の能力で消して、小窓から身を滑り込ま

せて独房の中に入った。

さらにサロモンを戒めていた鉄製の手錠、足枷を消去する。

「こっ、これは何の神術ですか？」

サロモンは驚いたが、ファルマはもうサロモンに手の内を見せたとしても構わなかった。彼は信用できる男だった。

「それにしても……私は本当に神術使いではなくなつたとみえる。あなたの神力を感じる事ができなくなつてしまいました」

「やっぱり神脈を閉鎖されたんですね。もう一度開くことはできないのでしょうか」

ファルマはやるせない気分になる。サロモンにとっては取り返しのつかないことになってしまった。

「閉じ方によります。……私がかけられたものは、三日経つと二度と開かないものです」

サロモンはうなだれた。もう、術をかけられて五日目だという。

「神脈を開く詠唱を教えてくださいませんか？ やってみます」

ファルマは試してみたいと思った。

時間を経て閉じるのであれば、薬神杖で無理やりこじ開けられないだろうか。そう考えたのだ。

「無理なものは無理だと思いますが……」

「やってみたいんです。教えてください」

ファルマはサロモンの長詠唱を復唱して、最後に発動詠唱をしかけた。

「 聖泉せいせんの湧出ゆうしゅつ ” ”

薬神杖の先端をサロモンの胸に当て、ファルマはサロモンに神力を戻すイメージを与える。神脈の開閉は、頭か心臓に杖を当てて行うのだそうだ。心臓の方が開きやすいという。

「……だめです、ね」

とはいえ、そう簡単には開くものではなかった。神脈の開閉の術式は完成したもので、綻びが見つからない。

「そうだ！ 杖を突っ込んでみますね」

ファルマは思い立って、杖の先端でサロモンの心臓をひと思いにつき刺した。

内臓逆位なので、右側に刺す。

「ひっ」

薬神杖はどこに刺しても人体を傷つけず貫通することができる、というのはファルマは知っていた。だから、直接心臓に刺してみたら神力を呼び込むことができるかと思ったのだ。

突き通したまま、ファルマが同じ長詠唱を繰り返す前に、青白い閃光が迸った。

「ふおおっ これはあつ！」

今度は事情が一変した。ファルマがサロモンの神脈を開こうと念じた瞬間から、サロモンに神力が戻りはじめたのだ。

そして、彼には神力がみなぎり、どこからともなく以前を上回る力が流れ込んでくるのだった。

「きつ、奇跡です……ありがとうございます」

サロモンは開いた口がふさがらなかった。ついでに、神脈も開きっぱなしだった。サロモンが欲しただけ、神力が湧きあがってきた杖を持たなければその威力は実感できないが、ただことではないというのはサロモンにも分かった。

「よかった、神力が戻って。無理やりこじ開けたからもう閉じられませんかよね」

また閉ざされてしまったては困るが、それは心配いらないうだった。

「はい、無詠唱で開かれたので、閉じる詠唱がありません」

神脈の開閉の詠唱は、閉じるときと開くときで一対の詠唱を成している。片方が無詠唱だと、閉じるときも無詠唱でなくてはならない。つまり、ファルマにしか閉させないのだ。

「朝になる前に逃げましょう」

#### 4章5話 神聖国からの生還と、大秘宝との対峙

朝になつて神官たちに見つかったら、神力を回復したサロモンがどんな目に遭うともしれない。サロモンは神殿に住み込み勤務の神官長だったので彼の居場所がないところだが、ド・メディシス家に一時的に匿うことはできる。

とにかくここにおいては、サロモンの身の安全が保証できない。

「見回りが頻繁に来ます、せいぜい数時間でしよう」

「ではなおさら急ぎましょう。陸路で帰ると追いつかれるので、飛んで帰りましょう。薬神杖には二人分ぐらいは支えられそうですが、杖自体にサロモンさんは触れないし、俺の腕力ではあなたの体重を支えるのは無理なので…… こうしましょう」

ファルマは、ちょうど鉄格子の独房の入り口にかかっているアルファベットのDの形をしている真鍮製の錠前に目をつけた。独房の鉄格子を消すことで錠前を取りはずし、サロモンの足枷を繋いでいた鎖を輪っかにして錠前で束ね、それを薬神杖に通した。

輪の部分に腰かけてもらって、つりさげるようにしてサロモンを運ぶ予定だ。

「これでよしと。その掛け布は防寒に持っていきましょう」

ファルマが鉄格子の一部を消せることを知ったサロモンが、ファルマに頼み事をする。

「ファルマ様、この鉄格子で短い杖を作っただけませんか」

「あ、はい。でも鉄格子で、杖？」

こう、もっと神杖といえば特殊な素材でできているというかありがたいものだ。ファルマは思っていた。

「力を増幅させるための晶石こそありませんが、聖別詠唱を唱えて聖別すれば最低限の杖にはなります」

神杖は、神官が聖別して杖にするのだ、とサロモンは言った。そ

の気になれば棒切れでも杖になるらしい。ただ、聖別詠唱は神殿の外部の人間には知られていない。

サロモンが神殿で独占していた秘儀をファルマに明かしてくれるのは、ファルマにとってありがたかったが、口外したと神殿に知られてしまえば、ますますもってサロモンの身が危険だ。神殿からすれば、サロモンを生かしておくわけにはいかないだろう。

「知らないことがたくさんあるなあ……もしかして、その聖別詠唱を唱えたら俺にも杖は作れるのでしょうか」

「人間ならまず修行を積み神官になり身を清める必要がありますが、ファルマ様の御身はもともと清浄なので可能だと思います。その薬神杖も、先代の薬神様がご自身で作られたものですし」

「薬神は聖別詠唱を使ってこれを作ったのでしょうか」

「半実体の杖ですので、素材からして特別なもののように思えます」  
「なるほど」

（薬神杖に関しては、まだ何の素材でできているのかすら分からないからな……）

薬神杖の素材には、ファルマの知っている地球の元素は使われていない。

それに、ファルマが杖を作れたとして、薬神杖固有の神術を発動できるような杖になるだろうかという点、自信がなかった。

「俺も自分で杖を作ってみたいです。この杖、返す約束をしてしまったので」

次も同じような性能が出せるやつを、とファルマは希望する。

「なんとまあ……人間には持てない杖を神殿に返却したとて、何になりましょうか。あなたはこの杖を使って多くの人間を、そして帝都をも救ってきた。あなたにこそふさわしい杖だというのに」

サロモンは嘆かわしいといって額をおさえた。

「今はとにかく逃げましょうか。あー！」

ファルマは独房の窓から出ようとして、その独房の真正面に五人ほど見張りがいるのを見つけた。

夜警の神官が巡回に来て、ちょうど牢のあたりに居ついていた。独房の窓から脱出したら、間違いなく発見されてしまう。

「ここからは出られそうにないです」

二人は錠前のなくなつた独房の扉を普通にあけて、独房の並ぶ監獄の通路に出る。

「仕方ありません、階下にある地下神殿の通路を通過して脱出しましょう。地下神殿の非常口を通過して出れば脱出できます。ファルマ様、申し訳ありませんがここを開けてください」

ファルマは非常階段に続く施錠された鉄扉を消去し、二人で非常階段を下りる。階段をかけ下りながら、ファルマはふと思い出した。「そういえば、地下神殿には大秘宝があるって言っていましたよね」「はい」

「ちらつと見て帰ることってできそうです？」

次に地下神殿に来る機会はなさそうだと思うので、せっかく地下神殿を通るのなら一目見て帰りたいという思いはある。

「あと一時間もすれば追っ手がつくと思いますので、ごく短時間でしたら」

「ほんのチラ見でいいんです」

「ここです」

大秘宝がおさめられているという、地下深くの特別な宝物庫に二人で潜入する。

ファルマは嚴重に施錠されている大扉の鍵を消去した。

部屋の中央の豪華な装飾の施された台座に、大秘宝はガラスケースにおさめられて展示されていた。ファルマが部屋の中に踏み込む前に、サロモンは忠告する。

「床を踏みますとファルマ様の神力に床が反応しますので、浮遊し



て近づいてください」

神殿内部の事情に通じているサロモンの的確な内部情報は、ファルマにとってありがたかった。

「おっと、そういう場所なんですね」

ファルマは薬神杖に腰かけて浮遊して大秘宝に近づく。サロモンは入り口で、見張りを兼ねながらファルマを見守っている。

「大秘宝に触れると反応します？」

「大秘宝は人間にはどうできませんから、大秘宝を取りあげた時ではなく、ガラスケースが開けられた時に反応するようになっています」

（怪盗にでもなった気分だな）

「それなら、触れそうですね」

「え？ ケースを開けずにどうやって大秘宝に触れるというのですか？」

ファルマは腕まくりをし、ガラスケースを貫通するイメージと共に手を伸ばすと、彼の手は物質をすりぬけガラスを貫通する。物音に気を付けながら中の大秘宝を取り上げ、ガラスケースからすり抜けて大秘宝を取り出す。

「おお……そんなことが！ さすがでございます」

ファルマが手にしたもの。

それは、半透明になり秘宝化してしまっただけだが紛れもなく……。

（俺の職員証だ……）

彼の生前の職員証。彼の記憶が正しければ、これを胸ポケットに入れたまま息を引き取ったはずだ。生前の彼、薬谷完治が肌身離さず持っていたもの。

「それはどんな奇跡が起こるんです？ 薬神ゆかりの大秘宝ですから、奇跡を起こす筈です」

「と、言われましても。これはただの身分証なんです」

職員証などではなく、何かほかのものと共に死ねばよかった、とファルマは思う。例えば携帯やPCなどだ。電力さえ生産できれば、様々な用途に使えたのに……と無念だ。何でよりによって職員証なんてこっちに來ちゃったのかと彼は溜息をつく。

「いったいどんな機能があるのでしょぅ」

サロモンがワクワクしながら職員証の使い道を聞くので、

「身分証としての用途のほかは、そうですね。まあ、ある施設の鍵を開いたり……」

研究室のね、と、ファルマは面白くない回答を口の中で補足した。  
「ある施設とは、どこにある施設なんですか？」

サロモンはさらに問い詰める。大秘宝の秘密が今、明かされようとしていた。

「ああ、それはこの世界にはないです」

「この世界にはない場所の鍵が開く……なるほど」

サロモンは考え込んだ。

「前、サロモンさん。薬神は聖なる泉の力を使って天上に帰ったと言いましたっけ」

ファルマはサロモンの言葉を思い出した。

「その泉ってどこだと思います？」

「それは私も教区神官長が閲覧できる聖典には書かれていません。大神官のみ閲覧できる、原典にはあるのかもしれませんが……」

そこまで話したサロモンは、はつとして耳を欹てた。

「声が聞こえた気がします、追っ手がきたようです。ここから出ましょう」

「そうですね」

（この職員証をもっと調べたいなあ……借りて帰ろうか）

ファルマはポケットに入れておいたレプリカを取り出し、見比べた。

（レプリカ置いて帰ったらバレるかな？ 半透明にすればバレなさそうだよな）

レプリカのカードは、鉄板に精巧に絵付けをしたものだ。ファルマはその場でSiO<sub>2</sub>でガラスを作り、カードサイズにし、その上に鉄製のレプリカを置き、鉄を消去する。すると、ガラス板に絵のみが転写される。

そしてさらに、本物に似せるために反射しやすい素材で表面をコーティングをし、神力を含ませ、適度にすりガラス加工を施した。カードはファルマの神力で輝き、半透明を保っている。

「できた。どうです？ 大秘宝とそっくりですよね」

サロモンは呆れていた。

「いやはや、あなたという方は……」

ファルマは両手でレプリカを包み込み、ガラスを透過させてケースの中に戻した。ファルマが手の中に完全に握り込んだものは、ファルマの体の一部となって半実体と化し、集中すれば物体を透過するのだ。

（肉体じゃない体って、便利なこともあるな）

普段、影がなくて苦労しているぶん、存分に半実体の体のアドバンテージを利用する。

「ちょっとお借りするだけです。返す予定です、一時的とはいえ窃盗っっちゃ窃盗ですけど……」

ファルマは言い訳のようにそう言う。後ろめたそうにしているファルマに、サロモンはフォローの言葉をかけた。

「そもそも秘宝は全て守護神様のものです。人間がお預かりしているに過ぎないのです」

その時だ。

「こっちから声がしたぞ！」

追っ手の神官たちが押し寄せてきた。武装し杖を構えた神官の一

団は、十名。

「あ、もたもたしていて追いつかれてしまいましたね」

ファルマは振り向きざまフードをかぶって顔を隠し、大秘室はポケットに入れる。

サロモンも、独房の中から持ってきた掛布で顔を隠した。

「賊か 何者だ！」

「残念だったな、大秘室には触れはせん！」

暗がりの中で、互いに相手の顔は見えない。ファルマは薬神杖を持っているので多少の発光を隠せはしないが、サロモンの脱獄に氣付いて追ってきた者たちではないようだ。

「 氷の矢（Flèche de la glace）」

追っ手の神官の一人から詠唱が打たれ、無数の氷矢が飛んできた。（危なっ！）

ファルマは無詠唱で、杖に乗ったまま矢を溶かすイメージで手をかざすと、氷の矢は蒸発する。

エレンの教えてくれた、加熱という水属性神術の一技法だ。しかし無詠唱というものが珍しいのか、相手はファルマがどんな神術を使ったのか理解できない。

「な、なにをした！」

二人の神官が杖の先端を合わせる。攻撃の威力を増す共鳴神術の前動作だ。

「 灼熱の燃焼（Enfer de brûlure）」

ファルマたちに向けて、大火炎が浴びせられる。

（こんな密室で大火炎系使うのか）

酸素の大量消費で酸欠になったらどうするんだ、と思いながらファルマは薄い水の壁で防ぐ。

「退いてください！」

ファルマはサロモンに鋭く呼びかける。

「敵は水属性だ！」

神官たちは叫んだ。

「ここは私にお任せを」

サロモンは杖を構えて真横に駆け抜け、鉄格子で作った即席の杖で石床に直線を引く。サロモンの神術によって神力を与えられた床石は床から浮き上がる。

「ゆけ、」 大地の怒り (Colère de la terre)

”

指向性を与えられると、一斉に床石は神官めがけて飛んでゆく。

「うわあっ！」

水属性の神官が氷の防壁を展開するも、薄い防壁は易々と打ち碎かれる。

「土属性の上位神術使いだ！」

サロモンが意識的に彼らに命中はさせなかったが、その威力はさまざま、大神殿の柱が数本破損した。十分な威嚇にはなったようだ。

「悪いが、沈んでもらおう」

サロモンはそんな一言とともにぐつと神力を杖に込め、鉄杖を神官たちに投げつけた。杖は神官たちの前で石床につき刺さる。そのタイミングを見計らい、サロモンは発動詠唱を打つ。

「」 流砂世界 (Espace du sable de dérive) ”

杖を一本失うが効果は抜群の、土属性の高等神技を放った。

詠唱と同時に神殿の床が脆く崩れ、瓦解し細かい砂になってゆく。更に細かく分解され流砂と化した。

「う、うわあっ！」

「これは！」

神官たちは逃れようとするが、術の領域を標す白線が床上に刻まれる。

白線の内側の砂地獄に脚を捕らわれ、神官たちは一人残らず足場を失い、階下へと滑り落ちていった。

「そう簡単には上がってこれますまい」

サロモンは杖を失ったが、相手はきつちりと行動不能にした。

「あの、彼ら二度と出られないとかじゃないですよ」

ファルマは薬神杖を持って浮遊したまま、床にぽっかり空いた大穴から階下を覗き込む。

神殿から逃走するために神官を砂の中に生き埋めにしてしまってもりはない。診眼で暗闇を見ても、打撲程度しかダメージはなさそうなのでファルマはほっとした。

「ああ、問題ありません。地上へ通じる通路があります。一日もあれば出られるでしょう」

「一日……！」

ちゃんと出られるのかな、とファルマは心配するが、穴が開いているのでそのうち救援が来るだろう。

「こうしてはいられません、私たちも脱出せねば。出口はこちらです、ファルマ様」

「サロモンさんって、結構やる時はやる人ですよ」

「それでも、元異端審問官ですから。可能ならどんな手でも使いますよ」

サロモンはファルマを手引きし、長い地下用水路に沿って歩く。明かりひとつない暗闇の中だったが、薬神杖を持ったファルマは薬神杖の効果で自然と発光するので照明がわりになった。そして彼らは遂に出口を見つけた。

「第六地下水路です。神聖国の大神殿の南東出口になりますな」

二人が地下用水路と地上水路を繋ぐ扉を開けると、明るくなり始めた空が見えた。

「では、飛びますよ」

ファルマは薬神杖とループ状の鎖を錠前を介して接続し、サロモンを杖からぶら下げた。

「重くないでしょうか」

サロモンは不安がる。

「全然いけますよ」

薬神杖の浮力がファルマの神力である限り、何十人でも運べる自信がある。

「ひいっ！」

朝日が昇るとともにファルマは空へ急浮上し、そのまま加速してゆく。

どんどんと小さく遠ざかってゆく神聖国。高所恐怖症のサロモンは下を見ないようにずっと上を見ていた。

こうして、冬空の寒さに耐えられなくなれば地上に降り、何度かの休憩をはさみながら、数時間後には無事サン・フルーヴ帝都へと帰り着いたのであった。

そして、彼はメディシス家の窓から、倒れ込むようにして自室に戻った。

… … …

「薬神は既に皇帝に見出されていたか……サロモンめ、隠し立てをしおって」

大神官ピウスは、サン・フルーヴ帝都守護神殿の神官長、コームから送られてきた伝書鳩での手紙を片手で握りつぶした。コームからの報告によれば、薬神憑きの少年は薬神杖を持っていて、サロモンとの面会を条件に薬神杖を返すと言っている。そして、神聖国へ

ゆくのは構わないが、自らが主治薬師を務めている皇帝に挨拶をしてから正式な手続きを踏んで行く、とのことだった。

「その場合、薬神を神聖国へおびき寄せ、そのまま大神殿に封印することはできそうにない」

「神聖国が薬神一柱のためにサン・フルーヴ皇帝と帝国全土と事を構えるのでは、割りに合いませんな」

ピウスに手紙を取り次いだ枢機神官長が嘆息する。皇帝、エリザベートⅠⅠ世は全ての階層の国民から慕われている。国内で皇帝の権力を脅かす敵対勢力も、継嗣問題も特にないので、間接的に皇帝を脅迫することもできなかった。

神脈閉鎖という最終奥義を持つピウスは、皇帝との一対一での戦闘を怖れはしない。

だが、皇帝を慕う帝国全土の神術使いを敵に回すとなると、少々骨が折れる。

薬神が皇帝のお気に入りとなれば、そうそう簡単に大神殿におびき寄せることもままならない。

「足を踏み入れただけで守護神殿全体が発光したそうだから、このたびの薬神の神力はとりわけ強いようだ。それに、降臨期間も非常に長い」

「ほう……それほどまでの神力を持っていた守護神は過去に例がありません。歴代の守護神であっても、一部が発光する程度です。一度、薬神の順番が抜けましたが、その反動でしょうか」

かつては入れ代わり立ち代わり地上に降りてきていた守護神。守護神が地上に降臨する順番は、だいたい決まっている。この守護神が下りたら次はこの守護神が来るというのも周期を計算すれば推測できる。だが、前回は薬神が降臨せず、スキップして次の守護神が降臨してきた。ピウスは前例と合わせて、こう推測した。

「二柱分の神力を持つて降りてきたのだろうか……もしくは、守護神が長らく降臨しなかった期間に天上に溜った神力を全て集めて降



りてきた」

「それは野放しにしておくには惜しいですな……ただでさえ守護神の降臨が珍しい時世ですので。次、いつ降りてくるかわかりませんし」

「薬を創り、人を癒すことしかできない薬神に、何故そんな神力が……」

「その薬神の神力を完全に搾り切れば、”鎚の齒車（Cramp machinulis）”を大きく巻き戻すことができますな。ああ……その神力を無駄遣いさせるのも惜しい」

「ああ……時間が稼げそうだ。問題はどやって神力を搾り取るかだ、守護神は気まぐれだ。世界の存亡を意に介してもおらん」

大神殿が歴代の守護神の神力を集めているのには、とある事情があった。

だが、とにかく、薬神が薬神杖を大神殿まで返却してくるということは約束されている。

何故、薬神がサロモンにこだわるのかピウスには疑問だったが、サロモンという神官が交渉カードとして使えるのならば、使わない手はない。ピウスはそう考えた。

「サロモンから目を離すな。自殺などさせ……」

そう言い終わりもしない時だった。

あわただしくやってきた大神殿聖騎士団長が、大神官室の外から驚愕の事実を告げた。

「大神官様！ サロモンが脱獄しました！」

看守をつとめていた聖騎士の報告を伝える騎士団長に、枢機神官が吠える。

「なんだと 神脈の閉鎖は完全だったというのに、何故脱獄ができる！」

「窓の鉄格子がはずされていました。また、錠前もなくなっており……。申し訳ありません！」

「探せ！　まだ神聖国の門は出られない！　そう遠くには行けない筈だ」

その日、神聖国は神官総出でサロモン搜索のために大騒ぎとなった。

しかし、サロモンが見つかることはなかった。土属性と水属性の二人組の賊が地下神殿に入ったという報告はあったが、大秘宝も無事で特に盗難もなかったことから、夜警の神官が譴責を受けるにとどまった。

「これだけ探してもいないということは、サロモンは自殺したのではないか……」

「サロモンが行方不明になったと知ったら、薬神は怒り狂うだろうか」

ピウスの頭痛の種が増えた。これでは、薬神を神聖国に呼べない。

… … …

ファルマとサロモンが帝都に戻って二日後。

帝都の守護神殿のコーム神官長の使いの神官が、メディシス家に神聖国からの親書を携えてやってきた。

「大神殿の判断を仰いだ結果、暫くは薬神杖を所持されていて構わない、ということになりました」

気まずそうな顔で報告する神官にファルマは驚いた顔で、

「えっ、どうしてですか？　陛下に報告をして、旅程を組もうと思っていたのですが」

と、すつとぼける。

「サロモンが少し、体調を崩しておりまして。すぐにお会いできないと申すものですから」

「深刻なんですか？　神脈を閉鎖されて、体を壊してしまったとか」  
いかにも気の毒だ、といったような顔をするファルマである。

「いえっ、決してそのような。それでは、また大神殿から連絡があ

りましたらまいります。失礼いたしました！」

神官が逃げ帰るのを見届けた後……ファルマは背後を振り返った。私服を着たサロモンがゆっくりと現れた。

「だって、サロモンさん」

「そのサロモンとやらの体調は、永久に回復しないでしょうな」  
二人は顔を見合わせて、ぷつと吹き出した。

#### 4章6話 ロッテのはじめてのランジュ

「ふむ、大体の事情は分かった。よくぞ報告してくれた」

女帝は大きく頷く。サロモンは、女帝にこれまでのあらましを話した。

ファルマとサロモンと一緒に馬車で宮殿に赴けば神殿にサロモンを発見されてしまうかもしれないので、別々に馬車を出し、別々に宮殿にやってきたのだ。

先に来たファルマが報告し、後から来たサロモンが詳しい事情を話した。

ファルマは薬局の営業に戻っていた。

「神聖国がファルマを大神殿に封印しようと画策している、そういうことでいいのかな」

「はい、おそれながら」

サロモンはファルマの居場所を吐かず、彼を庇ったがために投獄されたのである。ちなみにサロモンの配下の神官たちは特に咎めはなかったが、他国の神殿に異動になり、監視をされていた。

「ファルマは薬神なのか」

エリザベートは改めて尋ねる。

元神官長の口から、どう言っのか聞きたかった。

「薬神の化身あるいは、薬神憑きであらせられるかは分かりませんが、間違いありません。御身は否定しておられますが」

「ああ、ファルマは少し変わっておる」

女帝は口元を緩める。

「人の世に必死に馴染もうとしておられて、人間に近付こうとして

おられる神様です。あのお方には世界を創り変える力すらありますが、ご自分の真の力も、発揮したことがないのでご存じない。それもお人柄でしょう、今までの守護神様とはまったく違います」

危険を冒しながらも、私のような男を二度も助けて下さいました、そう語るサロモンの言葉には熱がこもっていた。

「神殿は今もファルマを狙っておるのかの？」

「おそらくは……ファルマ様の神力は無限、歴代の守護神と比しても類なきものでございます。誘拐してでも、人質を取ってでも、ファルマ様を大神殿に迎えようとしております。現在においても神官によってファルマ様の尾行はされているでしょう。薬局もお屋敷もまったく安全ではありません、ファルマ様のご家族も危険です」

手段を択ばない神殿のことだ、そのうち強硬な手段をとるのではないかとサロモンは懸念している。

「それは由々しきことだ。神殿はファルマを捕らえてどうするのだ」  
「表向きには守護神を大神殿に封じ、お祀りすると言われています」  
「封じるといのはどうやる」

神殿の機密にかかわる話だった。神官としてそれを俗世間の女帝に話すなどもつてのほかだ。

彼は神殿を裏切った。だが、彼に後悔はない。

「至聖所と呼ばれる場所で監禁状態です。一度入ったら神封じの術が敷かれていますので、守護神様は神力を失い二度と出られません。至聖所は神力を吸収する空間ですので、ファルマ様の神力は常時搾取されることになります。至聖所の暮らしは宮殿のように快適で、大勢の神官に崇められ衣食住にも不自由はしませんが、自由は奪われます」

ファルマに神封じの術が効けば、とサロモンは注釈した。

強い神には神封じが効かないということも、過去に例があるにはあった。サロモンは、ファルマならば大神殿に囚われても難なく脱出できるのではとも考えた。

女帝は神殿の計略を聞いて不快感をあらわにした。

「守護神を囚えるなど、神殿が聞いてあきれる。神官どもに信仰はないのか」

「仰せの通りです」

サロモンは畏まって頭を下げた。

「あれだけ薬学と患者に執着しておるファルマが、神殿に閉じ込められ患者を癒せなくなったら、どうなるかわからんぞ」

発狂するのでは、とエリザベートはいたましく思う。

彼にはやりたいようにやらせたい。ファルマには封土の授与や資金援助こそすれ、女帝であっても薬局への介入は最小限にしてきた。あの薬局は聖域なのだ。人間が土足で踏んではならない場所、そうであるべきだとエリザベートは考えていた。

「神殿はそうまでしてファルマの神力を搾取し、一体何に使おうとしておる」

「私めは一介の神官長。真相は枢機神官のみが知りえます」

「ふむ……よくぞ打ち明けてくれた」

次、神殿に捕らえられたら、サロモンの命はないだろう。しかしサロモンは屈託なくこう言い切った。

「私は神様に仕えるものでございます、神殿に仕えるものではございません」

つまり、サロモンは何よりもファルマに信仰を捧げているということだった。

そしてサロモンは、実力と権力からしてファルマを守れるのは皇帝しかない、そう考えたのだ。

「して、そなたはどうするのだ。還俗させるには惜しい」

「ド・メディシス家の客人として滞在させていただいておりますが、ご迷惑となりますので頃合いを見て出て行くつもりです。私には探したいものがあります」

その後は、サロモンは放浪の旅に出るつもりだった。

ファルマのために”聖なる泉”の伝説を辿って、それを探しに行こうと考えていた。

「その、探したいものとやらは余が探させるから、そなたは廷臣となるつもりはないか」

女帝がそんなことを言った。サロモンはかしこまる。

「神殿が監視しているのであれば、一時的にでも尊爵家でそなたを匿うには人目につきすぎる。その点、余の宮殿ならば、招かざれば帝都の神官は立ち入ることはできん。人を匿うにはうってつけの場所なのだ。元神官長であるそなたの知識は有用だ。余や帝国の神術顧問としても大いに力を貸してほしい。特に、神脈の開閉の秘儀は、神聖国に対抗するための切り札となるであろう。さらに、ここにいればそなたの信仰するファルマも宮廷薬師としてやってくる」

「仰せのままに。ご高配を賜り、感謝にたえません」

それは身の安全に加え、サロモンにとっては申しぶんのない条件だった。

… … …

その頃。ファルマは一足先に薬局に戻って、休憩時間を迎えていた。

「謎だなあ……」

（俺の職員証なのに、どうしてこうなっちゃったんだ）

数日が経っても、大神殿の地下に大秘宝として祀られてしまっていた職員証に一体どんな効力があるものか、ファルマは手がかりすらつかめなかった。

「ファルマ君でも使用法がわからないのね」

エレンが、宝石のように美しく輝く職員証を透かし見る。

勿論これも、秘宝であるためエレンには手に取ることすらできな

い。

秘室は有機物を貫通しポケットに入れることはできないので、アルミ箔で包んで持っている。

とりあえず、使い方を思いついた時のためにお守りにして肌身離さず持つておこう。ファルマはそんな事を考えもした。

そんなファルマたちの横で、ロッテがひそかに大きなため息をついていた。

「はああつ……どうしよう、もうだめだあ……」

聞こえないほどの音量だったが、ファルマは聞き逃さなかった。

「どうしたのロッテ？ どうしようって聞こえたけど。困ったことがあったら何でも言つてよ」

エレンが優しくロッテの肩を叩く。

「血が止まらないんです……」

消え入りそうな声で、ロッテが白状した。

「切り傷かなんか？ どこ？ 診てみようか？」

ファルマが素で尋ねると、やけにロッテが逃げ腰になる。診眼を使つても、どこにも異常はない。

「いえ、やめてくださいっ！」

ファルマは迂闊に聞いてしまつてから、後悔した。

（ロッテぐらいの歳で、診眼で病気が検出できなくて血が止まらないつていたら）

あれだろうか、とファルマは想像する。

「ははん、もしかして」

エレンが咳払いをして、ロッテに耳打ちをする。

「……、でしょ？」

エレンの問いかけに、ロッテは俯いてこくと首肯した。どうやら凶星だったらしい。



「ロツテちゃん、それはね。大人の女性への仲間入りを果たしたのよ」

ロツテは初潮を迎えたのだった。

「大人ですか」

エレンは、ロツテの身体に起こった変化を説明する。

「知らなかったです……こんなことになるなんて!」

「あらら、ロツテちゃん。お母さんから聞いたことなかった? いっ  
つからなかったの?」

「昨日からです。どんどん量が増えてきて、私もうこのまま死ぬか  
も思つて……」

「二日目なのね。二日目は誰でも多くなるのよ」

この世界で、庶民の女性の体についての教育は遅れているといっ  
たものではなかった。性について語ることは恥ずかしいことだとさ  
れていた。そんな背景もあつてか、ロツテの母カトリーヌもロツテ  
にまだ初潮のことを教えていなかったという。

ロツテが腰を気にしながらそわそわとしている。ロツテは自己流  
の慣れない処置をしているものだから、経血が漏れていないか、気  
になつて仕方がないのだ。

特に、薬局の制服は白いエプロンドレスでよく目立つ。

「どうしましょう」

「どうつて、おめでたいと思うけど」

ファルマは祝福する。

「めでたくはないわ」

エレンが苦笑した。赤飯を炊いたりして成長を祝う日本とは文化  
が違ったためか、初潮でおめでたいという感覚は、この世界にはない  
ようだ。

「気になるなら、赤いドレスでも買つてきて着る? 私は月のもの  
が来た日は、私服では黒を着て目立たないようにしているわ」

エレンが冗談めかす。

（そうだったのか）

ファルマは余計な情報を仕入れてしまった。

「で、ロツテちゃんが一番の心配ごとは何？」

エレンはファルマの冷たい視線を感じたのか、脱線しかけた話題をもとに戻す。

「とりあえず、腰がとっても痛いんです。それから、服が汚れるのが心配です」

「腰が痛いのはリラキシンのせいだな」

ファルマが口を挟む。卵巣ホルモンの一種、リラキシンは全身の関節を緩める働きをする。恥骨あたりのけんが緩められると、特に腰回りが痛く感じるだろう。

ファルマはその痛みを想像することすらできないので、尋ねてみた。

「痛み止め、欲しい？ 出してあげられる薬はあるけど」

「我慢できないほどじゃないです」

ロツテは首を振った。

「今からちよつと踏み込んだ話をするけど、やらしい話じゃないかな」

若干居心地の悪い思いをしながら、ファルマは尋ねてみる。

「わ、私は席をはずしましょう、銀行にお金を預けに行つてまいります」

何やら女性の性に関する話題になりそうだと知ったセドリックが、あわてふためきながら退場した。

「決して変な目的で聞いてるんじゃないから」

ファルマは念を押す。

「そんなに予防線張り巡らさなくてもいいわ」

あまりにももって回った言い方をするので、エレンはくすつとほほ笑んで眼鏡をかけなおした。ロツテはエレンの後ろに隠れた。

「女性の性教育って、どうなってるんだっけ。俺、男だから女性の実情を聞いてみたいんだ」

ファルマに対してもだが、メデイス家では男性側の性教育は全くといって行われなかった。

それはブリュノがファルマに知識を教えることを躊躇しているからかもしれないし、ずっと以前に教えたのかもしれない、あるいは、まだファルマに教えるのは早いので教えていないという判断かもしれない。

パツレに関しては、かなり性に奔放だったといえるが、彼女を作っても避妊はしていると言っていた。パツレは医学校で学んだのだろう。

「じゃ、下着や生理用品はどんなものをつけてる？」

ちなみに、ファルマの下着はシャツとパンツが一体化したものだ。これは男女共用で、王侯貴族であっても同じだ。

そして、現代日本での女性の生理用品というと、

ナプキン (Sanitary towel)

綿を円筒状にして、アプリーケーターで膣に挿入するタンポン (Tampon)、

これに加えて、海外では直接膣に挿入する月経カップ (Menstrual cup) というものもある。ヨーロッパ圏では、現在でもタンポンが主流だ。

「下着なんて穿いてないわ」

エレンはノーパンだった。それはエレンだけではなく、老いも若きも皆がそうなのだという。

「生理用品って何ですか？」

ロッテはエレンの後ろにますます隠れながら、ちよこんと首だけ出している。

話を聞いてみると、どうやらタンポンに近い詰め物をしているようだった。材質は、貴族は絹や動物の毛。庶民は木綿などを詰める。

「その詰め物は、どのくらいの時間つけてるの？」

ファルマは、気まずさからなるべく二人と目を合わさないようにメモ取りに集中する。

「その人が自分が交換した方がいいと思うまでよ、一般的にはね。人によるわ」

血液が漏れなければ気にしないので、庶民は一日以上つけていることも稀ではないという。生理用品も、売っていないことはないが高いいのでできるだけ交換しないようにするらしい。

「エレンならもう分かんと思うけど、長時間それをつけていると雑菌の温床になったり、感染症の原因になったり、最悪敗血症につながったりもするよ。それから、清潔でないものを詰めるのも危ない」

「怖いこと言わないでよ、じゃあどうすればいいの？ ファルマ君の求める清潔レベルは高すぎるわ、庶民には無理よ。どうせ捨てるものなんだし」

エレンはのけぞる。メモをまとめて、ファルマは言った。

「安価で清潔で使いやすい生理用品を開発して、MEDIQUEと調剤薬局ギルドで取り扱うようにしてもらおう」

ファルマが提案したのは、より安全に管理できるとされる下着とナプキンのセットだ。

清潔な製法で作りの衛生的なものを。それから、それが軌道に乗り始めたら、タンポンも作るという。

「その……できたら試着してもらってもいいかな。自分でも試着してみるけど」

「いや　　！！」

ロッテは悲鳴を上げて薬局の外に走り去っていった。

恥ずかしさが極まったのだろっな、とファルマは申し訳なく思う。

「もう、ファルマ君が変なこと言うから、ロッテちゃん、とりあえず間に合わせに脱脂綿をあげるから戻っておいでー」

「変なこと言ったか……？ 言ったかもな」

（確かに、男薬師が踏み込むべき問題じゃないよな）

こういうことは、男が立ち入るとうまくいなくなる。

「ロッテのためにも、ちよっとナプキンの試作品作ってくる。エレンも協力してくれないか？ 俺一人だとその、こういうのはやりづらい。開発もそうだけど、普及は特に女性薬師にやってほしい」

エレンは恥ずかしがるかもしれないが、ファルマにはできない、必要なことだ。

「デリケートな問題だものねえ。ファルマ君は子供だからまだギリギリ許されるけど、大人の男がそんな事言い出したらぶっ飛ばされるわ」

「はは……」

（中身、大人の男だなんて言えないな……）

ファルマは内心怯えながら、エレンと共に四階の研究室に入る。

生理ナプキンの構造は、下着に接する部分から、防水フィルム、吸水体、そして表面素材という順に積層状になっている。ファルマはエレンに、アイデアスケッチを描いて渡す。

「いいわね、これ。試してみたくなるわ」

吸水力の高いナプキンには、吸水体として親水性の高吸水ポリマー（SAP）が欠かせない。

「そういうことで、吸水体となる高吸水ポリマーから合成するか」  
高吸水ポリマーは重さの10倍以上もの吸水力を持ち、一度水を吸うと押しても水が出ない。これで経血漏れを防ぐことができる。ロッテも安心できるだろう。

吸水ポリマーは高分子化合物なので、ファルマのイメージのできないものはいきなり化合物を作ることはできない。なので、アクリル酸、アクリル酸塩、架橋性モノマー（重合剤）を別々に作り、そ

れを加えて、重合、正確には共重合させる。

重合を終えると、それはポリアクリル酸ナトリウムとなる。と説明しながらファルマが作業を続けていたところで、

「なあに、重合って」

重合の作業を見ながら、エレンが聞きなれない言葉に戸惑っていた。

「同じ構造の物質がつながるように化学反応させることだよ」

「真珠のネックレスみたいに？」

「そんな感じの直線的な重合もある。これは格子の網目状に重合させるんだ」

ジャングルジム状というと分かりやすいだろうか、とファルマが説明しようとして、ジャングルジムがエレンに通じないのでやめておいた。

「できた。これが、吸水ポリマーだ」

「ただの白い粉だわ」

「まあそう言うなよ」

研究室から降りてきた二人。ファルマは薬局のテーブルにコップ一杯の水を勢いよくこぼす。

「ちょっと、何するのファルマ君」

「あつ、こぼれましたね。タオル取ってきますね」

ロッテがタオルを取ってくる前に、ファルマはポリマーをほんのひとつまみ、水たまりの上にかけた。すると、白い粉はみるみる水を吸収してゆくではないか。

「ええつ、コップ一杯の水を、ちょっとの粉が吸い尽くしてしまっ  
たわ」

エレンとロッテは目を見張った。見ていて気持ちよいほど、水分を吸収してしまったのだ。

「それを押してみて」

ファルマが促す。ロッテがゼリー状になったポリマーを、ぎゅっ

と押してみた。

「水が出てきません！」

「これを挟み込んだ布をあてておけば、服が汚れるのを気にしないでいいよ。これができたからには、赤ちゃん用や老人用のおむつもナプキンと同時に開発できる筈だ」

用途はナプキンにとどまらない。

「おむつを作って、セルストさんの赤ちゃんにも試着をしてもらおうかな」

肝っ玉母さん薬師のセルストにも協力を仰ぎたいと申し出たところ、セルストは快諾した。

「ところでファルマ君、ナプキンはできたけど、それをつけるショーツってどんなものの？ 絵に描いてくれないと分からないわ」「うん、じゃあ明日までにデザインしてくるよ」

その夜、徹夜でロッテのショーツをはじめ、数パターンの下着デザインを描き上げたファルマは、過去最高に”薬師としてどうかと思う残業”をしているな、と、何とも言えない気分になったのだ。

翌々日、高級仕立て屋に急遽作らせたレース付きの可愛いショーツと、ファルマ謹製のナプキンが完成した。それらはファルマの手でプレゼント用の箱に入れられ、ロッテに手渡された。奇しくもそれは、3月15日。ロッテの11歳の誕生日だったので、誕生日のケーキと共にプレゼントになった。

「誕生日おめでとう、ロッテ！ それから、これも受け取ってくださいかな。下着だから今じゃなくて、あとで開けてね」

「あっ、ありがとうございます！」

ロッテはその言葉を聞き、恥ずかしそうに下着セットを受け取った。

「ファルマ君って、間が悪いわよね」

何とも微妙な空気になりながら手渡した後で、エレンが嘆く。

「俺だって誕生日プレゼントにしたつもりはないよ。たまたまそうなったんだよ」

とはいえ、当のロツテ本人は、その頃にはロツテの月経は終わりに近づきつつあったが、これで来月からも安心ですと言って喜んだ。「どうやら赤いドレスを着なくてよさそうです、付け心地も最高です！」

「私も試してみたいわ」

ロツテの評判を聞いて、エレンがほほ笑む。その後、薬局の女性職員、エレン、バイトの女性二級薬師セルストとレベツカにも試供品が支給された。ファルマにナプキンを手渡しされた恥ずかしがり屋のレベツカは、恥ずかしすぎて卒倒した。そして、

「はああつ、店主様がぁーっ！」

そう言って帰ったきり、翌日熱を出して薬局を休んだ。

「私が渡せばよかったわ」

エレンが後で、ファルマにわびた。

「俺もそう思うよ」

変態だと思われたのではないか、とファルマは胸がいたい。

小さなおむつを、バイト薬師のセルストの赤ちゃんを連れてきてもらって試着してもらった。

六か月になるという赤ん坊バジルは、紙おむつを履かせても嫌がりはず、機嫌よく過ごした。

「バジルも快適のようです。育児が楽になります！ うんちをする、全部着替えさせなくてはいけなくて、大変なんです」

母親のセルストは喜んだ。

「たくさん作るから、使つてよ」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

セルストは、給料袋を受け取る時よりもうれしそうだった。

その後、清潔なナプキン、赤ちゃん用と老人用おむつに加え、男



性用、女性用下着がMEDIQUEや調剤薬局各店で取り扱えるように、マーセイル工場では下着の量産体制が敷かれることになった。ポリマーの原料に関しては、ファルマが合成したものを提供した。また、ポリマーにかぶれる敏感肌の人用に、ナプキン素材としてコットン製のものも併売した。ポリマー製のはゴミ処理がしにくいものであるので、専用ゴミ袋を配布し、薬局や調剤ギルド各店にゴミ回収ボックスを設け、火災神術使いを雇って、ダイオキシンを出不さないようフィルターを通し、環境に配慮しつつ処分させた。

「ふう、俺の下半身もようやく落ち着いたな」

ファルマもついでにブリーフラしきものを作ってもらって、ようやく下半身のおさまりの悪さを解消した。ブリュノやセドリック、バイトの一級薬師ロジエにも配ったが、穿いたかどうかは聞いていない。パツレは「これはいいな」、と洗い替えを追加注文をしてきた。母親のベアトリスは、早速MEDIQUEに新作を買い付けに走った。ブランシュは、お気に入りのショーツを仕立ててもらって履くと、スカートをまくりあげて無邪気にファルマに見せにくる。ファルマとしては勘弁してほしかった。

これは間違いなく女帝に報告すべき発明に当たると考えたファルマは、躊躇しつつも下着と生理用品のセットを女帝に献上に行くのを忘れなかった。

さすがにデリケートすぎる問題なので、エレンが代役をつとめたが。

「あの薬神は自分の身が危ないというときに、いったい何をバカなことをやっとするんだ」

そう言って呆れた女帝も、試着してみるといたく気に入って愛用し、帝都にLingge（ランジュ：下着）専門店を作るよう命じ、常に新作を取り寄せるようになったという。

そして女帝愛用ということで、流行に敏感な貴婦人や庶民たちの

間で、これらはひそかなブームとなるのだった。

## 4章6話 ロッテのはじめてのランジュ（後書き）

書籍化情報の追報がありますので、活動報告をご覧ください。 11  
/25追記

#### 4章7話 ロタウイルス感染症と捨て子

女帝の投げ放った帝杖が、快晴の空を滑る。

「火炎の蹂躪”(Les violations de la flamme)”

発動詠唱を唱えた瞬間、場は火の海と化した。

大火炎の旋風が帝都のはずれの原野を嘗め尽くし、みるみるうちに広大な範囲を焼き潰してゆく。その場に立ち会った者の中には酸素の大量消費に、息苦しさを覚える者もいた。風上から焼いているので術者は煙に巻かれたりはしないが、あの炎に人間が絡めとられれば、骨も影も残らない。

「しかし凄まじい。またたく間にこれだけの面積の大地が焦土と化しましたな……」

帝国の神術顧問となり女帝に随っていたサロモンは、そこに芽吹いていた生命が悉く奪い尽くされ炭化した光景を目の当たりにする。その大火炎は、側近の水の神術使いの氷防壁がなければ、身に纏う衣服をも焦がしつくしてしまうほどだった。

女帝が大火炎を放ったあと、草木一本も残らないだろう。

僅かにだが、神力だまりの発生も観測された。女帝は紛うことなく、現在も世界最強の神術使いであった。薬神憑きのファルマを除き、人類のなかでは。

「ふう、焼き尽くしてやったわ」

熱風に晒され額にうっすらと汗を浮かべる女帝は、満足そうに水を飲み干し、まとめ髪をほどこし、上着を羽織る。その容赦のない神

技の美しさに、サロモンをはじめ側近は息をのんだ。

在位中、まったく衰えのない強さ。誰が帝国を、いや女帝個人を敵に回せるだろう。開戦と同時に、一国が炎の海に沈む。

そしてその恐るべき神技は、サロモンの細やかな指導によって更に洗練され、威力を増していた。

さて、ここは血なまぐさい戦場……ではなく、

「皇帝陛下、野焼きをありがとうございます！」「

これで、よい牧草が生えるでしょう。牛も若芽が生えれば喜びます！」

牧場主が偉大な神技を間近で見て、感激していた。

「うむ、牛どもが煙たがらぬよう、遠ざけておれ」

直轄地の牧場を、年に一度野焼きするのは女帝にとって恒例行事だった。

超広域火炎神術を使える女帝の神術訓練の場は、砂漠、海上、牧場などに限られる。

あまりに強力な女帝の神技はたいいていの場合、平和利用されていた。

「陛下の実力のうち、今の神技はいかほどでございましょうか」

サロモンが尋ねる。彼女は神力計を兼ねた帝杖のゲージを見て、

「7割だそうだ。よい運動になった」

とにこやかに笑った。無邪気な少女のようだ。

「そういえば、ファルマはどれほどのことができるのだろう。あや

つは薬学にかまけて、さっぱり訓練をせんと聞く。体が鈍らぬだろうか」

「ファルマ様の場合は、1%でも出力すれば帝国が滅びますからな  
神術使いの日頃の鍛錬は必要だが、難しいところだ、とサロモンは溜息をつく。

「なぜファルマの力がわかる」

「聖典にある歴代の守護神の力と比較すれば分かります」

サロモンはかしこまる。

「ならばファルマの力を、神聖国も持て余すのではないかのう」

そのファルマは、のこのこと薬神杖を大神殿に返却しに行く、などと言うので、女帝は先手を打って大神殿に通告を入れたところだった。その内容は、

『秘宝の杖を必要としているようだが、ファルマは帝国の要人であり余の主治薬師であるから神聖国へ行かせるつもりはない。返却が必要ならば、使いの者に届けさせる。もしファルマが予告なく帝国から消え、ファルマの周囲に危害が及んだなら、即日神聖国へ宣戦布告する。ファルマを拘束しうる者は神聖国以外に存在しないため、証拠がなくても神聖国の仕業と見做す。ファルマに用があるなら、余の立ち合いのもとでファルマに会え』（意識）というものだ。

こうまで強気に出られてしまつては、神聖国は承諾するほかになかったのだろう。

女帝がファルマを主治薬師に据えている期間は返却をしなくてよいという返事が返ってきた。

女帝がそれをファルマに伝えたと、彼は驚いていた。女帝の権力は、神殿を黙らせるのだ。また、後にひけなくなつたのか、サロモンは無事だとも言ってきた。これに関しては、のちのちどう帳尻を合わせるのが女帝は疑問だ。

これで、大神殿はファルマに接触することはできなくなった。女帝は、側近に聖泉の手がかりを探させている。

ところで、帝都の神官が、薬局に薬を買いにくるようになったとファルマは言っていたが……。

… … …

1147年4月になった。

この頃、パツレの白血病の化学療法のうち、再発を予防する地固

め療法の経過は良好だった。パツレは、体調のよい日はブリュノの患者の診察に出かけるようになった。そして、少しずつブリュノやファルマの患者の主治薬師を引き継ぎはじめた。ブリュノは大学の運営に没頭したかったし、ファルマも薬局や他のことに手が取られていたので、パツレが最適な後継者となった。

パツレの腕はよく、知識も豊富で、話術にも長け、ブリュノと比較しても全く評判を落とさなかった。また、ブリュノが診ても治らなかった患者を、ファルマの新薬を使う事で治療してみせ実績を積み始めた。

パツレはファルマの薬局にもよく顔を出す。主に、新しい薬を仕入れにだ。

「こういう病気だと思っただが、この薬が欲しい」

といった具合に。そこで、ファルマは症状や各種の検査結果を確認し、その通りだと思えば薬を出す。その病状の説明に、写真は非常に役立った。診断に疑問があれば、ファルマが直接患者を診に行つて、パツレに伝える。パツレもファルマからは二年遅れてだが、一級薬師として患者に向かい合う修行の日々を送り始めた。パツレは充実していた。

そのパツレがある日の午後、薬局にやってきた。珍しく、薬局の裏口から。

いつもは正面玄関から入ってくるのだが、何か事情があるとみえる。そして小声で話しかける。

「ファルマ、いるか？」

「どうしたのその子。パツレ君の隠し子？」

パツレの腕に抱えられた、生後数か月と思しき女の乳児を発見してエレンが言った。しかし、赤ん坊は元気に泣くわけでもなく、ぐったりとして衰弱していた。更に、顔や髪の毛は汚物で汚れていた。「アホか、捨て子だ。脱水症状を起こしてるんだ」

かいまきを取ると、嘔吐物が口のまわりについていた。肌にも張

りがなく、目のまわりが落ちくぼんでいる。パツレは赤子の手の甲の皮膚を軽くつまむと、皮膚がもとのように戻らず山形になったままだ。これは脱水症状をみるひとつの方法だ。

息はか細く、心もとない。ファルマはその場に押しかけていた患者たちの処方箋を全員分書いて、バイトの薬師たちに手渡す。紫色がかった産毛の巻き毛は、ぺったりと頭部に張り付いている。

「これ、薬を調合して渡しておいて、診られなければ待つていてもらつて」

「分かりました、店主様」

セルストがまとめて処方箋を受け取り、大きく頷いた。

「お詫びに飴をどうぞ。はいどうぞ、はいどうぞ」

「あら、ありがとう」

ロツテが気を利かせて飴を配ったので、患者たちからは不満は出なかった。

「とりあえず、兄上はそのまま二階に上がって」

赤子は感染している、そう判断したファルマは、二階の診療室の一室にある隔離室に案内する。そこに、ファルマ、パツレ、エレンがなだれ込んで患児を診る。

「パツレ君が捨て子を拾ってくるなんて、意外だわ」

「放っておけなくてな。貴族の子だが、平民になりそうだ」

パツレは毛布に包まれたままベッドに横たえ、不憫そうに彼女を見下ろす。

「そう……神脈が開かなかったのね。不幸な子だわ」

エレンは同情する。貴族の子供であっても、神脈が開かない場合は神力が使えず、貴族となれない。そんな子供が生まれたのは家の恥だと考え、赤ん坊のうちに人知れず捨ててしまう大貴族も少なくない。

とはいっても、赤ん坊は殺されてしまうわけではなく、神殿の前に置かれ、神殿が保護し孤児院に引き取られるが、帝都の神殿は人



目が多いので、適当な家の軒先に置かれている場合もある。

神脈が開いた貴族の子は、神力計で神力をはかることができる。だが、開いていない子供には、神力計のゲージは動かない。

エレンは念のため神力計を持ってきて測定したが、うんともすんともだ。

「だめね……もし助かったら、使用人としてうちで雇ってもいいわ。これも何かの縁だし。今の神殿に引き渡したくないわ」

エレンは、伯爵家で引き取ることを検討しはじめた。

「うーん……ていうかこの子、神力ありそうだけど」

二人の見解に反して、ファルマは呟く。

ファルマには見えるのだ、彼女の体の奥にほのかなきらめきがあるのを。手つかずの源泉が。

「まあいつか、今は治療が先だ」

ファルマはきれいな水を用意し、体を清めて服を着替えさせる。

そして、最近開発したばかりの赤ちゃん用のおむつもはかせた。

「あら、ぴったりね」

下痢はひとまずおさまっているが、それは脱水症状が酷いからだ。もう、体から出てゆく水分も殆ど残っていないと思われる。こうなると、重症の感染症である可能性が高い。それに、涙も汗も出なくなっていた。

「嘔吐があり、白っぽい下痢をしている、微熱もあるのでロタウイルスの感染じゃないかと思う」

パツレは所見を述べた。ウイルス感染によって、便に胆汁の色（茶色）がつかなくなることがある。彼はそこに着目していた。

「治せそうか？」

ところでパツレは今、化学療法中で白血球が減少しており、比較的感染しやすい状態になっている。自らの体の状態を正確に分かっていて、ウイルスに感染したと疑われる赤子を感染リスクも恐れず

保護して連れてきた。感染すれば、命にかかわる。患者の行動としては褒められたことではないが、ファルマはパツレの善意を無駄にしたいくないと思った。

「白色便か」

ファルマは最初は診眼を使わず、視診してゆく。

全員、防護用のビニールケープをまとい、手袋とマスクを着用する。赤子を運んできたパツレは、感染予防のため着ていたものを全て捨てて、ファルマがバイト用の白衣を貸し出して着替えた。

「白い便ということは、胆汁がでていないわけでしょ。胆道閉鎖症じゃないかしら」

エレンはもう一つの可能性を述べる。白色便にも色々理由がある、必ずしもウイルス感染が理由というわけでもない。ファルマは、かいまきに残っていた女兒の便のにおいをかく。

「エレン、においをかいでみて」

しかめつらになりながらも、エレンが手であおいで便のにおいを確認する。パツレは感染のリスクを考慮し、ファルマはひかえるように言った。

「酸っぱい感じがするわ」

「生臭いときは細菌性の下痢、酸っぱいにおいがするときはウイルス性の下痢だったな。だったらロタだ」

パツレの知識はかなりのものだ。ファルマは頷きながら言った。

「その通り、ロタの可能性が高い」

ファルマはここで診眼を使う。ウイルスはサイズが小さいので、細菌のように顕微鏡では見えない。確定診断のためにだ。確かにロタウイルス感染と出ている。全身に感染しているようだが、消化管に沿って、光は強くなっている。ファルマの診眼を通して見える光は、限りなく赤に近い、赤紫だ。

治療可能だが、かなり危険な状態。

決して予断を許さない。

ロタウイルス感染症は、小児仮性コレラとも言われていた。現代日本でも、このウイルスには殆どの乳幼児が感染しているが、適切な処置を受けられるために重症化はほとんどなく、死亡率は著しく低い。

（でも、日本のつもりで甘く見ると痛い目を見るからな）  
ファルマはそう思って気を引き締める。

先進国であれば、この病気で死ぬことは稀。だが、地球全体では、五歳までの重症下痢症の4割がロタウイルスに起因する下痢症であり、死者数は50万人にのぼる。

乳児死亡率の見逃せない原因の一つだ。このウイルスによる感染症は嘔吐下痢の中でもっとも重症化しやすく、そして現に女兒は重症である。急性脳炎や多臓器不全も起こりうる。

そして、ロタウイルスに特效薬はない。

#### 4章8話 豊かな水をきれいな水へ（前書き）

本日は二話投稿です。まだ読んでおられない方は、前の話をご確認ください。

#### 4章8話 豊かな水をきれいな水へ

「対症療法しかないんだ」

ファルマは脱水症状に対する水分補給のために、点滴を始めた。それから、経口補水液も飲ませる。この経口補水液については、重症では飲ませないほうがよいという報告もあるが、完全に便が出きっていないという判断から、ウイルスを体から出てゆかせるために飲ませた。

「本当に対症療法しかないの？ 何とかできない？」

エレンがもどかしそうに尋ねる。何か、ひとつでも生存の確率を上げられる方法はないのか。手探りでもいいから……彼女はそううつたえる。

「ああ……完全にこの子の体力と運次第だ。このウイルスに対する薬はないんだ」

ファルマはそう答えるしかなかった。それ以上の治療は難しい。

「俺たちも感染しないように気を付けよう。このウイルスの感染力は強い、エレンもだけど、兄上は特に気を付けて。看病する人間が感染したら、元も子もない」

「感染経路は糞口感染だったな」

つまり、患者の排泄物を処理した手でつまんだ食べ物などが、口の中に入ると感染する。

また、ロタウイルスは非常に感染力が強く、わずか数個のウイルスを口から取り込んだだけでも感染する。次の感染者を出さないように、排泄物に対して細心の注意を払わなければならない。ファルマの聖域は空気感染には強いが、経口感染には比較的效果が弱い。

「アルコールにも強いから、アルコール消毒も効かないんだ」

「ええっ、そうなの!？」

アルコールを万能の消毒液だと思っていたエレンは驚く。

「エレン。四階の実験室から次亜塩素酸ナトリウムの瓶をとってきて。消毒薬を作るから」

「わかったわ、パツレ君が手で触れた場所、全て拭いてまわったほうがいいわね」

「ありがとう、よろしく。兄上はロツテに言っておムツの替えと、この子の着替えをもってきてくれ」

「ああ、まかせろ」

ファルマは適当な口実をつけて二人を隔離室から追い出したその隙に、薬神杖で「始原の救援」をかける。薬神杖固有の神技を、あまり見られたくはなかった。

「頑張れよ……」

これで、多少体力を持ち直すはずだ。

診眼で診ると、光はより青みがかった紫へと変色していた。状態はよくなってきたている。

ひとまずの処置が終わり、消毒も終わると、ファルマは二人をねぎらった。

「手伝ってくれてありがとう。今夜は、ここに泊まりだな。俺が泊まるよ。兄上は感染してはいけないから、俺がやる」

看病のために、ファルマが薬局に泊まりこむと申し出た。三人の中で唯一、ファルマだけが感染しないのだから、看病は買って出る。「屋敷に連れて帰ると感染が拡大するか……しかし、何もできることがないだなんて」

捨て子を拾ってきたパツレは悔しそうだ。

「いいよ、ここは俺に任せてくれ。二人とも家に帰ってよ」

エレンは後ろ髪を、パツレはカツラをひかれる思いで隔離室を立ち去った。

二人が帰ってから、もうひとつできる治療をファルマは考えていた。それは神脈の開闢だ。

そこでファルマはそつと、薬神杖の先端を赤ん坊の心臓に差し込んだ。サロモンにそうしたように。赤子は眠りについていて、不快そうな様子はない。

薬神杖の先端から青白い光が漏れてくる。その時だ、

「やっぱり手伝うわ、ファルマ君」

立ち去った筈のエレンが戻って急に隔離室のドアを開けた。ファルマがぶつすりと、薬神杖の先端を赤子の胸に刺していたときだ。

「わー！」

ファルマは慌てて薬神杖を引っこ抜いた。

「それ、その子に何しようとしてたの？」

どう見ても、危害を加えようとしているようにしか見えない。

「いや、違うんだ。これは……誤解なんだよ」

「病気の子に何てことするの！ まさか何かの薬の実験台にでもするつもり！？」

エレンは最悪の事態を想定したのか、杖に手をかけている。

「俺がそんなことすると思うか？」

「思わないけど、何してるのよ！？」

「わかった、白状するよ。神脈を開こうとしてた」

「はあ、とエレンは力ない声を出し、脱力した。」

「守護神が鑑定できないと、神脈は開かないわよ。適当にやっていってもんじゃないの」

「ていうか、もう開いたみたいだ」

エレンは絶句した。ファルマがこんな状態で患児の神脈を開いたのは、神力が湧くと免疫力が高まるという確信があったからだ。平民より貴族の方が免疫力が高いのは確かだった。

始原の救援に加え、さらに神力の加護があれば、症状が重篤化し

ないようにできるかと考えたのだ。

「嘘でしょ?! 神脈が開いたっていうの?」

エレンが神力計をカバンの中から取り出して近づけると、ゲージがふれていた。それも、かなり強い神力を持っている。先ほど計測した時はゼロだったのだが、明らかに変化が起きている……。

「神官が開けなかった神脈を開くだなんて、いつからそんなことができるようになったの? 特に詠唱も聞こえなかったし」

「いや、この子は神脈が見えてたよ。俺のやり方は無詠唱なんだ」  
神官には開けなかったのかもしれないけど、まあ開けたから、とファルマは付け加える。

「ということはこの子、ちょっと変わった属性を持ってるんじゃないかしら」

「とにかく、これで持ち直してくれたらいいんだけど。鑑定はサロモンさんにやってもらおうかな」

「順番がめちゃくちゃね。鑑定してから神脈を開くのよ」

「はは……ごめん」

その夜、ファルマはエレンと共に薬局に泊まり込み、交代で女兒の看病にあたった。二人で交代で簡単な食事を取り、

「沐浴するから、入ってこないでね」

そういつて、エレンは沐浴室に入っていた。

水の神術使いは自分できれいな湯を生成し、シャワーを浴びるのだ。ファルマは慌ててエレンの背中に声をかけた。

「入らないよ」

少しずつ快復してくる女兒の傍に付き添い、エレンがシャワーを浴びる水音を聞きながら、ファルマは考えた。

（ロタで亡くなる子、今までにもたくさんいたんだろうな……ロタウイルスのワクチンがあれば、こんなに重症化しなかったかもしれないのに）

ワクチンは、現時点で上下水道のないサン・フルーヴ帝国でとり



うる現実的な予防策であった。感染症の多発する地域は、上下水道の設備が不十分で、衛生状態が悪いことが多い。

（ワクチン……それから、水だ）

貴族はきれいな水に不自由しない環境にあつて、平民のことを考えると、ファルマは放っておけないと思つた。

一つ一つの病気を治すのは大変な労力を要する。薬師の力が及ばないこともある。ロタウイルスのように、治療薬がないという病気も稀ではない。

だったら、病気になつたら治すというばかりでなく、予防できるものは予防しなければならぬのだ。

ファルマはそう考えた。

「ふう……ファルマ君も沐浴してすつきりしたら？」

「なあ、エレン。俺たちはきれいな湯や水を使える」

ぐずり泣きをはじめた女兒を腕に抱えてあやしながら、ファルマはエレンにしみじみと言う。

「どうしたのあらたまつて。当然じゃない、私たち水の神術使いなのよ？」

エレンは湯上りでホカホカと湯気をたて、絹のようにしなやかな銀髪をタオルで拭っていた。上気した頬がファルマには艶っぽく見えた。

「でも、平民はそうじゃない」

「水は買えるわ、お金を出せば。そんなに高い金額じゃないし」

エレンの金銭感覚は、まったくもって伯爵令嬢だった。

「俺たちにとってはね。高くて手が出せない人もいる。それに、飲料水は買えても生活用水は買えてない。根本的な部分を、何とかしないと。きれいな水が必要だ、貴族だけでなく、平民たちにも。それは彼らの命を守るためでもあるし、感染症の予防のためでもある」

各家庭に水道を通そうと思えば、その建築には莫大な予算と年月がかかる。

水道を建設したとしても、ただちに帝国全土にきれいな水を供給することは難しい。かといって水の神術使いの神術でも、平民まで含めた生活用水を供給できるだけの水の量は供給できない。

ひるがえってみればサン・フルーヴ帝国、そして帝都は、水の豊かな帝国である。

河の水をひいて、それを各家庭で利用している。公共の水汲み場もある。

水は、足りていた。だが、それらの水は濁って本当にきれいで安全な水ではない。

煮沸しなければ直接は飲めないし、顔や体を洗えば、感染症にかかる。

さらにサン・フルーヴ河には、生活用水が流れ込んでいる。それが、結果的に乳児死亡率や、感染症による死亡率を上げている原因になっていた。

ファルマがサン・フルーヴ帝都に転生してからというもの、彼を中心に聖域が発生しているので、彼の屋敷に面した河の水は清められ、帝都中心部の水は比較的浄化されている。だが、メディシス家の屋敷より河の上流の地区や帝都の中心から少し外れると、やはり状況は同じだった。

帝都全域に疫滅聖域を乱発しても、ずっとは維持できない。それに、ファルマがこの世界から去れば、また元の木阿弥だ。人々は疫病に苦しむことになる。

「水は命のもとだ。きれいな水を皆が飲めるようにしよう」

ファルマは現実的な措置として帝国全土、そして諸外国の公共の全ての水汲み場に、浄水設備を建築すべきだと考えた。大規模な

浄水設備を建設することは難しい。そこで、濾過膜を使えば省スペースですむし、細菌やウイルスを排除することもできる。濾過膜は、化学的な手法で生産することができる。濾過の方法を技術者に伝え、水質を維持できるように技術を維持してゆく。

それが、病気を排除する確実かつ着実な方法である。

「この世界のどこにいても、その水を飲むことによって微生物に感染して命を落したりしないように。それと並行して、ワクチンで病気を予防できるようにしたい。何年か、何十年かかるだろう、でも、今からやりはじめないと」

他国も視野にいれた、これまでとは比較にならないほど遠大な計画だった。

「あなたの思い付きは、いつだって人間にはどだい無理だと思うけど」  
有言実行しちゃうのよね、これが、とエレンは困ったように言った。

また少し、世界がよくなってゆく、そんな気配をエレンは感じた。

翌日から、神脈を開かれた女兒はぐいぐいと回復をはじめた。

そして異世界薬局ではしばらくの間、ファルマやエレンが背中に赤子を背負って接客するという、珍妙な光景がみられた。

貴族としての資質を満たした女兒は、エレンの実家、ボヌフォウ家に養子として迎えられ、ソフィと名付けられた。今やみすばらしかった捨て子の面影はまったくくない。身なりをととのえ、綺麗になれば、輝くばかりの令嬢へと変貌した。

エレンの父であるボヌフォウ伯爵は、ソフィを養子に迎えたいそう喜んだ。

エレンは一人っ子だったからだ。

後日サロモンが鑑定した結果、彼女の属性は世にも珍しい、四属

性以外の無の正属性、守護神は雷神だった。彼女の神力は電力に変換される。

暫くの間、ソフィはロタウィルスの後遺症がないかを確認するために、エレンと共に薬局に通った。そして薬局でソフィが興奮するたび、世話をやいていたファルマは微弱電流で感電することになった。なぜか、ファルマを好んで電撃を食らわせるのだ。

「あててて！ ソフィ、電撃やめ！ やめて！」

薬局の休憩中にソフィをあやしていたファルマが悲鳴を上げる。

感情が昂ると電撃が繰り出される癖があるらしい。

「ソフィちゃん、落ち着いて！ ぎゃー」

ソフィをなだめようとして、ついでに感電するエレンもお約束だった。

「きゃっきゃ！」

無邪気に電撃を放ってくるソフィに、ファルマもたじたじだ。ファルマやエレンが悲鳴をあげるほど、遊んでくれていると思って面白いらしい。

「ロツテ、ちょっと下からセルストさん呼んできて！」

「はいっ！ ただいま！」

ファルマがギブアップする。子たくさん母さん薬師のセルストが呼ばれた。

「はいはい、寝かしつけはお安い御用です。ソフィ様、ねんねの間ですよ。おうた歌いましょうね」

そんなときセルストが子守歌を歌うと、ソフィは一瞬で眠りについた。

「ファルマ様、最近あまり悲鳴をあげなくなりましたね。今も地味に電撃を受けておられますよね？」

さらに数日後、ロツテがおそるおそるファルマに尋ねる。相変わらず、彼とソフィは一心同体と化していた。ソフィはファルマの膝の上に居座っている。

「あ”ー、イタキモチイイ」

白目をむいてまんざらでもなさそうなファルマは、感電しながら遂にそんな変態発言をするまでになった。

「段々訓練されてきたわね、ファルマ君」

「薬局に来た患者さんの腰痛治療に、低周波電流はいいかも」

「わかったから、その顔何とかしたら？」

とても客には見せられないような店主の呆け切った顔に、困惑するエレンだった。

#### 4章9話 錬金術師(?) ファルマ・ド・メディシス

「ボヌフォア家の養子とした、雷神術の素養を持つ赤子は元気にしておるのか」

宮廷での定期診察、その際に、女帝がソフィの現況をファルマに確認する。

こう見えて女帝、一児の母だけあって子供好きだった。

「はい、今日も元気に雷撃を繰り返しています。その電撃も、慣れると気持ちよくなります」

どちらかというと調教されてきたのはファルマとエレンだった。

「ふははは、それは将来有望な神術使いだな」

確かに、ソフィに関しては誘拐の心配はなさそうだった。

泣いた瞬間に誘拐犯が感電してしまうだろうし、感情の昂った彼女の周囲には放電が見える。それがまた派手なので、うかつに近づくものはないだろう。

「早く手合わせがしてみたいものだ、早く大きくならんかのう」

そして気の早い女帝に、ファルマは乾いた笑いを浮かべた。

「陛下のお相手をつとめるには、せめてあと十年はお待ちください」

「うむ、今度ソフィを連れてまいれとエレオノールに伝えておけ」

みすばらしい捨て子から一転、大帝国の皇帝に目をつけられてしまった0歳児のソフィである。女帝はソフィに雷術使いとして期待をかけているのだろうが、ファルマとしては彼女には穏やかな幼少期を過ごさせてやりたかった。無属性という希少な属性であるために、物珍しげに扱われてしまうことに、神脈を開いたファルマとしては責任も感じる。

「そういえば電撃は攻撃だけでなく、人命救助にも！」

女帝の命令で戦闘的な英才教育を施されてしまっただけで、  
そう思ったファルマは、穏健な能力の活用法をPRした。

「ははは、さすがにそれは買いかぶりすぎというものだぞ。赤子に  
何ができる」

「というのはですね……」

ファルマは説明を始めた。

一週間前、薬局の近くに平民の老人が行き倒れた。

ファルマが市民に呼ばれて駆けつけたが、既に心停止をして心筋  
が不規則な拍動を起こし、診眼で視ても真っ赤で、手の施しようも  
ない状態だった。

誰もが彼の命を諦めた時、エレンがソフィをおぶってきていたの  
で、思いついてソフィを下ろし、その小さな手と足を平民の胸にほ  
どよいポジションで置かせ、彼女のワキをくすぐってみた。

すると、何も知らないソフィは大喜びで電撃を放ち、平民は電気  
ショックで除細動され、さらに心肺蘇生を再開することにより息を  
吹き返したのだった。

完全にAEDだ……、とファルマは驚いた。

「なに？ 心臓の止まった人間を生き返らせた、だとう？！」

話を耳にした女帝は玉座から転がり落ちそうになるほど興奮して  
いた。

「そんな神術使いの話は聞いたことがない！」

「厳密には”心臓の止まった”というのは違います。鼓動をやめた  
心臓ではなく、鼓動が正常でなくなった心臓、というべきです」

ファルマは細かい部分を訂正する。誤解があつてはいけない。

心静止と心停止は違って、ソフィの電撃が有効かもしれないのは、  
心停止の時だ。

「ええい、そんな微妙な違いを言われてもわからん。どうしてそん  
なことが起こる！」

女帝エリザベートは気が短い。三十秒以上の説明は求められてい

ないのだ。

「私たちの肉体の筋肉は、全て電気信号で動いております。電流を流せば、心臓の信号が整うこともあります」

ふむ……と女帝は考え込んだ。

「まさか、今までに貴族出身で神脈が開かず平民と判定された者ども。無属性だったので見落とされていただけなのでは」

女帝の言葉に、女帝の執務室の中で宮廷人たちと共に話を聞いていたサロモンは萎縮する。

「いやはや面目ない。無属性の鑑定は難しいのです、どの属性でも開かなければ、そのまま見落とされる可能性はありますな」

「もしそうなのだとしたら、無属性の神術使いの神脈を眠ったままにしておくのは帝国にとって大きな損失だ」

「いかにも」

サロモンは同意する。

「ファルマよ、そなたには神術使いの鑑定ができるのか」

「いえ、神脈が見えるだけで、鑑定はできません」

また仕事が増えそうな予感がするファルマである。しかしファルマとしても、彼らの名誉の回復のために協力するのは吝かではなかった。

「神脈が見えるのならば、見てはくれぬか」

「わかりました。やってみましょう。そのあとのことはサロモンさんにお願ひします」

女帝は思いついて、帝国中から秘密裡に貴族出身の平民を集めさせた。

日時をずらして宮殿に招かれてやってきた平民たちはのべ三百名を超えたが、ファルマはその中の五名が無属性の神術使いであると見抜き、その場で神脈を開いてみせた。

ファルマは神脈を開けるが、属性の鑑定ができないのでサロモン



が鑑定を行うと、無属性の商神、音楽神、時神、旅神、農業神など、ここ数百年見つかったくない非常に珍しい守護神を持つ者が見つかった。彼らは十五歳から四十八歳まで、全員が親から捨てられそれぞれ神殿附属の孤児院に預けられて苦難の人生を歩んでいたが、新しい姓とともに子爵や男爵に叙され、帝都周辺に女帝より直々に封土を与えられることになった。

「探してみるもんだのう、思わぬ宝が見つかった」

女帝はほくほくだった。すぐれた神術使いは帝国の財産である。適材を適所に配することにより、その分野においてすぐれた効果が見込める。

「はい、間接的に神官の神脈発掘能力の低下を指摘されることにもなり、耳の痛いことです。しかしこれを神聖国が知れば……」

サロモンは帝都神殿の神官たちがこの情報をかぎつけないか不安だった。

無属性の神術使いの神脈を発掘し、その神脈を開けるのがファルマだけだというのなら。神殿はますますもってファルマを欲しがるだろう。

「気取られぬようにせねばならん。まったく、あの少年はどれだけ帝国に恩恵をもたらしてくれるのか」

「ありがたいことでございます。ファルマ様の世直しのご計画は、帝国のみにとどまってはおりません」

自らの住処が快適ならばそれでよいというのではなく、ファルマは他国の民のことも考えてやまない。

「まあよい、好きにさせれば」

それが最善だ、と女帝は考えている。

「ぜひ、この調子で平穩にお過ごしいただきたいことですね」

女帝はド・メディシス家の警備を強化していた。

通行人を装い、帝都軍の聖騎士を配備したり、薬局やド・メディ

シス家に忍び込もうとしていた二ケタではきかないほどの不審者を、ファルマには気付かれないよう捕らえ尋問をし、帝国からたたき出したりもしていた。もちろん、ブリュノも屋敷や大学の警備のために聖騎士を増員し、家族や使用人たちに危害が及ばないよう夜間の巡視を強化させていた。ブリュノのおさめるいくつかの封土のうち、マーセイル領との連携も特に緊密に行っていた。

女帝とブリュノの手回しがあつてはじめて、ファルマは一見なにごともなく日常生活を送れているのである。

… … …

「ファルマ様、ごきげんよう」

異世界薬局に調剤薬局ギルドの長、ピエールがやってきた。娘も一緒だ。

木漏れ日薬局のピエールは定期的に、荷馬車をひいて薬局へ薬を仕入れにやってくる。まとめて買い上げて、ファルマの服薬、処方指導を伝えながら各調剤薬局加盟店へと配るのだ。風邪薬や解熱剤などの、日本では薬剤師がいなくても販売できる市販薬や、日々の健康食品、オーラルケア商品、各種生理用品など手広く取り扱っている。

「これ、お前。挨拶をしなさい」

「おや、君は……」

ファルマが声をかけると、ピエールの娘がピエールの背後から顔をだし、ぺこりと一礼した。そして恥ずかしそうにファルマを見る。ピエールいわく、インフルエンザの時にファルマに坐薬を入れられてからというもの、ファルマに複雑な思いをいだいているらしい。ファルマは誰にどんな処置をしたかは覚えているが、あくまで投薬という認識だったので、何故彼女が顔を赤らめているのかぴんときなかつた。

「ええと、飴いる？」

ファルマが飴のビンを持って声をかけると、彼女はさっとピエールの後ろに隠れた。

「ロツテ、手があいていたら三階でこの子とおやつ食べて休憩して」

「ええっ、いいんですか？ どうしてもですか？ どうしても!？」

「はいはい、どうしても」

「はいっ!」

ロツテはスキップしてティーセットを取りに行った。今日はオレンジケーキを焼いていたはずだ。

「どうですか、そちらのほうは」

定期的開催される調剤薬局ギルドの定例会に、ファルマも時々顔を出すようにはしているが、基本的にギルドの経営はピエールに任せている。

「どの店舗も、右肩がりの売上でございます。生理用品、オムツ、下着の需要は特に」

「それはよかった。生理用品を扱う店舗には女性薬師を配置してください」

生理用品はデリケートな問題なので、男性薬師からは買いづらいだろう。

「はい、女薬師を一名は雇用するように言っております。そしてオムツに関しては、若い騎士の需要が多いです」

鎧を着る場合、簡単に着脱できないので特に重宝するとか。綿素材のオムツも飛ぶように売れているとのことだった。

「ははは……意外ですね。介護用のつもりだったんですが。長時間の着用は控えるように言ってください、衛生面で支障がありますので」

そのあとも、景気の良い話を聞く。最近の調剤薬局ギルドは順調

そのものだった。

薬師の登録販売者数も増え、加盟店は軒並み業績好調である。薬価を下げたことにより、帝都民の潜在需要を掘り起こした。調剤薬局ギルド加盟店はきちんと処方ルールを守り、問題を起こすことは少なかった。異世界薬局から仕入れるか、関連工場から買い付ける以外に医薬品の入手経路がないからだ。ピエールやファルマの機嫌を損ねてギルドを脱退させられては困るわけである。

「調剤薬局ギルドは好調なんですね。薬師ギルド加盟店はどうですか？」

「かわいそうなほど客が減っていますね。最初はいい気味に思っていましたけど、こうも差がつくと……」

かつてベロンがギルド長を務めていた薬師ギルドは、ファルマが新規に立ち上げた調剤薬局ギルドに大半の薬師を吸収されてしまったとはいえ、新たなギルド長を立ててまだ細々とだが存在する。とはいえ、危険で有毒な薬の取り扱いが女帝の勅令が下り軒並み廃止になったので、扱える薬はハーブやポーション、キノコ類や動植物の干物などの生薬がメインだ。

「そうですか……」

それを聞いて、ファルマも申し訳なく思う。

「伝統薬を愛用する市民もまだいる筈だけど……帝都ではもう、生き残りは難しいかしら」

エレンも同情した。

「経営難の薬店には資金、技術援助をしてあげてください」

調剤薬局ギルドは現代薬や健康グッズを、薬師ギルドは伝統薬を扱うよう、今では棲みわけができています。が、調剤薬局ギルドに客を取られたぶん、薬師たちの実入りは少ない。

「は？ はあ、ファルマ様がよろしいのですしたらそのようにします」  
敵に塩を送るようなものだが、ピエールからしてみれば、今更売上の差が埋められるとは思わなかった。

「彼らにも生活がありますからね。経営がうまくいかないようなら、俺のところ相談に来るよう言ってください」

ファルマも薬師ギルドを潰したかったわけではなく、庶民が粗悪でいかがわしい薬を高値で売りつけられることがないようにしたかっただけで、むしろファルマと敵対していたギルド幹部たちがこっそりと組織を抜けたあと、個別に異世界薬局を訪れた薬店の店主には、生薬やハーブの効能についてアドバイスをしたり、日々の食卓で使えるレシピ、薬茶の調合法を教えたりもしていた。

「そんな時勢もあつてか……もと薬師ギルド所属の薬師の錬金術師が、帝都の錬金術師や薬師たちを集めて、怪しいことをしているようです」

「錬金術師……」

錬金術は、地球においては自然科学のはしりだ。錬金術師たちの膨大な試行錯誤によって化学は発展してきたといつてもいい。錬金術師たちによって多くの化合物が発見され、それが創薬に応用されることもある。薬学との相性はよい。

だが、ブリュノは錬金術には否定的だったらしく、ファルマ少年の書棚には錬金術関連の書籍は揃えられていなかった。したがって、ファルマにとってはほぼ初耳に近い言葉だった。

「錬金術師って、えーっと……卑金属から金を取り出すことを究極の目的としているんですっけ。普段は何をしている人たちなんですか？」

研究資金はどこから得ているのか、などとファルマは疑問だ。

「あまり商売にならない職業なので、錬金術師自体はそれほど人数は多くありません。普段は、化合物の合成を行って生計をたてています。それを薬師に売ったり、錬金術師が薬師を兼ねていたりもします。ですが、究極のところは人間を不老不死にしたり、金を合成することを目的としています」

「賢者の石があればできると言われているけどね。その存在はお師

匠様が否定されたわ」

エレンが口を挟む。

「賢者の石は合成できない、という有名な論文をあなたのお父上、ブリュノ・ド・メディシス尊爵が七年前に発表して以降、国内外の薬師や錬金術師の間では金の合成に絶望的でした。ですが、その錬金術師は賢者の石を合成したというのです」

（この世界にも賢者の石っていう概念があるのか……）

ブリュノの功績を聞きながら、ファルマは「賢者の石」という言葉聞いて感慨深い。

賢者の石というのは、不老不死の妙薬を作ったり、金の触媒ともなる。薬の中の薬、というイメージだ。勿論、地球上では伝説上のものののだが。

「なんでも、ホムンクルスの生成に成功したこともあるとか」

（また、錬金術師の心を驚づかみにしそうな名前が出てきたな）

ホムンクルスは、蒸留瓶の中で錬金術師が作るという人造人間の小人である。

「それを見た人はいるんでしょうか」

もしそんなものがいるのなら、お目にかかってみたいものだ、とファルマは思う。

「いいえ、ホムンクルスの生成には40週以上という時間がかかりますので。すでにできたものを展示しているようすな。おそらくは人の胎児の死体をガラス容器の中に入れて動くように見せかけて見世物にし、その見物料をとっているのではないかと」

見物人たちは、詐欺に遇っているとは気づいていないのだ、とピエールは言う。

「悪質ね……完全に詐欺じゃないの。目的は何なの？ 賢者の石といい、ホムンクルスといい、そんなのすぐバレちゃうじゃない」

エレンが嘆かわしいといったように眼鏡をはずす。

「だいたい、生命がガラス瓶の中でなんて育つわけないわ。ファル

「マ君もそう思うでしょ？」

エレンに同意を求められ、ファルマは困る。

「理論的には、不可能じゃないんだけど」

「また、よくわからないこと言ってる……」

（受精卵は胚盤胞までなら体外で育つし、生殖工学の話なら話せば長くなるけどな）

むしろそのあたりはファルマの得意分野だったが、話がややこしくなるので口をつぐんでおいた。胚盤胞までは胎盤がなくても育ち、人工胎盤があれば体外で胎児を育てることも理論的には可能で、地球では研究開発も進んでいた。

「その錬金術師は帝都の錬金術師たちを集めて、毎週集会を開いているようです。薬師の1割ほどは錬金術師でもありますので、薬師たちも傾倒しています。ああ、そういえば私も錬金術師でした」

ピーエルは錬金術師のバッジを持っていると言った。

「その集会では、どんなことをしてるんでしょう？」

「それは、賢者の石を使って錬金を成功させる様子を実演して見せているようです。あとは、ホームクルスを見せたりとか。その秘儀を、薬師や錬金術師が破産するほど高額で売っているのですな」

「その技術を売ったとして、誰か他に成功した人がいるのかしら。失敗する人間が多ければ、気付きそうなものでしょうに」

エレンは胡散臭そうに眉をひそめた。

「それが、成功者がいるのだとか」

「仕込みなんじゃないの？」

その成功者がサクラの可能性もある、とエレンは疑っている。

「その集会の場所、分かります？」

百聞は一見にしかずだ、とファルマは興味を持つ。

「はい。調べはついていますが、集会に参加できるのは錬金術師とその弟子のみです」

「じゃ、俺が錬金術師のピエールさんの弟子ってことにして、一緒に行ってみませんか？」

「危険ではありませんか。ファルマ様の名は帝都中に知られています、おそらくは、お姿も」

「変装すればいいんですよ」

ファルマは事もなく言った。

「ファルマ君とピエールさんじゃ心配ね。私もついていくわ」

「エレオノール様の名も帝都中に知られておりますな」

「そうなの？」

エレンは尊爵にして宮廷薬師ブリュノの一番弟子という立場を、自覚していなかった。

「じゃ、私が男装して、ファルマ君が女装すればいいんじゃない？ それならバレないでしょう」

エレンはノリノリだ。普段、伯爵令嬢としての立ち居ふるまいが求められているだけに、その反動で男装の麗人コスプレを試してみたいようである。

「そんなことしなくても、普通にフード被って覆面していけばいいんじゃないの？」

女装趣味のないファルマは勘弁してほしかった。

「やるなら完璧にやりたいわ、男装よ！ ファルマ君は女装ね！」

「エレンは好きにしたらいいよ。俺は断固として女装なんてしないからな！」

こうして、ファルマとエレンは、ピエールと共に怪しい錬金術師の集会に潜入することにした。

「ところで、潜入してどうするのですか？」

ピエールが訊ねる。

「もし、錬金術のからくりを暴けば、その業界から追放できますよね。暴いてみせます」

「少なくとも詐欺師だという証拠が出れば、商売はできなくなるで



しょう。しかし、錬金術師の集会の規模はだんだんと大きくなってきているので、やはり信じるに足る何かはあるのでしょうか。水銀と硫黄を用いて、金を合成したと聞きます、ファルマ様には勝算がありますか？」

「水銀を使うのは、合ってるんですけどね」

「どうということなの？」

エレンが耳を疑った。事務作業に精を出すセドリックや他のバイトの薬師らも聞き耳を立てている。

「錬金というか、金の合成は可能なことは可能なんだ。といっても金は原子だから、化合物としてはできない。水銀、つまり原子番号80の原子にガンマ線を照射して、原子核を崩壊させ陽子を剥がせばいずれは原子番号79の金になるよ」

「え?!」

「は!?! 錬金は不可能じゃないってことなの？」

エレンとピエールは椅子から立ち上がって大声で叫んだ。エレンは持っていた眼鏡を落として踏みそうになるのを、ファルマがさととキャッチした。

「もう、また落とす! メガネ落とすなよ」

もはやお約束すぎて、わざとやっているのではないかと疑う。エレンには割れないようにプラスチック製の眼鏡を作ったあげたほうがよいのではとファルマは考えるほどだった。

お茶会をしていたロツテとピエールの娘が、二人が大声を出したので三階から降りてきた。

「どうしましたか？」

「あ、何でもないよ。お茶会続けてて」

ファルマは二人に手を振る。ロツテは口のまわりにケーキの粉がついていたのを恥ずかしそうに拭って三階に戻っていった。

「二人とも落ち着いて。でも、この世界の技術では無理、膨大なエネルギーが必要なんだ」

金を合成できないことはないが、1回の反応でできる金原子は数

個もなく、現代の地球の科学技術で小匙1杯ほどの金を合成しようと思えば、とても現実的ではないほどの膨大な電力と時間と予算がかかる。

「そうよねー、びっくりしたわ。ファルマ君が神力で金を合成できるって言うてるのかと思って」

エレンはふう、と落ち着いて着席した。そして眼鏡をかけなおす。「俺の神力を使って水銀をどうにかしようと思って、多分エネルギー不足で無理だよ」

「はは、もしもそんなことができるのならば大儲けですな、その秘術を教えていただきたいですよ」

ピエールが冗談めかして豪快に笑う。

「ははは……そんなことできるわけないよ」

ファルマはピエールと一緒に笑った後で、冷や汗をかく。  
あることを思い出したからだ。

（あ、そういう俺、物質創造を使えば金の合成できたわ）

あらゆる物質を左手の能力で創ることのできるファルマは、金のみならずもちろん金属や宝石類などを合成することもできたが、異世界薬局の利益だけで潤沢な資本を有しているので、ちまちま金策に走る必要もなく考えたこともなかったが。

（……そのくくりでいくと、俺も錬金術師かな）

ファルマはある意味、この世界でただ一人の真の錬金術師といえなくもなかった。

「いやー楽しみだな、錬金術。どうやって錬金をするのかな？」

ファルマは不敵な笑みを浮かべる。

「あなたのほうが悪い錬金術師みたいな顔になってるわよ、ファルマ君」

しかしその表情をみて、悪徳錬金術師を手ひどくやり込める気満

ただ、とエレンはぞくりとした。

## 4章10話 エルメスの錬金の真贋

疑惑の錬金術師の集会の開催される日がやってきた。集会に参加するために、業務を終えて薬局を閉めると、エレンは予告通り男装に着替えて職員たちの前に現れた。

「わー、エレオノール様、素敵です！ 美青年です。かつこいいです！」

ロツテが無邪気にほめたたえる。

「そう？ せっかくだから写真撮つといて、ロツテちゃん」

「はいっ！ たくさん撮りましょう！」

エレンは膝上までのブーツを穿き、丈の長いマントを羽織り、フエルトのトリコルヌ（三角帽子）をかぶっていた。長い髪も帽子の中に入れ込んで無骨な鼻眼鏡をかけ、つけひげをたくわえた美青年に見える。

ポーズをつけて写真撮影を始めた二人を横目に、ファルマは簡単な変装をする。

（エレンはコスプレしたかっただけじゃないのか？ 似合ってるけど）

凜々しさ際立つが、ファルマの印象はそうだ。

「やあやあ、今日はよろしくお願いしますぞ」

薬局のドアを開け、勝手知ったる様子で入ってくる老紳士が現れた。

「誰？」

「はっはっは、私ですよ」

ピエールはメガネをかけ、白髪のかつらをかぶって変装してきた。パツと見、誰なのか分からない。

「え、ファルマ様はそれだけですか？」

ロツテが目丸くする。

「ファルマ君の変装にはやる感じが感じられないわね」

エレンも渋い顔をする。一方、ファルマは覆面をしてローブを着用し、フードを目深にかぶっていた。

「別に、バレなきゃいいんだから」

彼は合理性重視だ。

「うーん、バレバレよ？ 試しに、その恰好で表通り歩いてきたら？ 気づかれなかったらその恰好で行っていいわ」

暫くして、薬局を出て行ったファルマが戻ってきた。フードを取って、気恥ずかしそうに。

「なんでバレたんだろ？」

「声かけられまくったの？」

「うん。十人ぐらいに声かけられた」

ファルマは手鏡を見ながら、本気で首をかしげていた。

「雑すぎるのよ変装が……もうちょっとバレないように頑張らないと」

エレンは呆れて言葉もない。

「仕方がないわね、ファルマ君。そういうことだからロツテちゃん、私服、貸してあげて？」

「ええっ！？ じよ、女装だなんてどういことですか？」

ファルマ以上にロツテは慌てる。

そして若干、怖いもの見たさという雰囲気も醸し出していた。

「変装よ。屋敷で着ている服がいいわ、くたびれたのでいい、貸してあげて」

ロツテがエレンがファルマの肩に手をかける。ファルマとロツテの身長差は最近になって少しずつひらいてきたが、スカートならばサイズが少々小さくても着用できる。

「大きめのものがありますので、お貸しします！」

ロツテは颯爽と裏切った。

「やめろー！」

「仕方ありません、ファルマ様。お着替えお手伝いしますね！」

ファルマの抵抗むなく、ロッテに着替えさせられてしまった。

普段、屋敷で召使いとしてファルマの着付けをしているロッテは、ファルマの体のサイズを知っている。ぴったりのサイズの召使い用エプロンドレスを着せられた。

「これなら絶対ばれないわ」

あっという間にロッテの服を着させられたかと思えば、いつ準備したのか、エレンに帽子とロングヘアのかつらをつけられ、アルバイトの薬師たちが手早くメイクを施す。

「やだファルマ君……かわいいじゃない。美少女よ？」

ロッテも首を縦に振って同意している。しかしファルマはというと、ふてくされていた。

「最悪だ。こんな錬金術師の弟子って、いるか？ スカートなんて、もぐりだつて言ってるようなもんじゃないか」

スカートを穿いた錬金術師はもぐり、というのはファルマの感想である。素足の出たスカートで錬金術をやるうというのがまず、いだけない。危険な薬品を扱う化学者は、身を守るために肌を出してはいけなからだ。

「あら、大丈夫よ、鏡で見てみる？」

「見たくない」

ファルマは全力で首を振った。ロッテはすかさず二人の写真を撮った。

「やめろー撮るなー！」

「哀れ、ファルマ様……」

ピエールが、笑いを噛み殺しながら形ばかりの同情をみせた。

「さ、これでいいわ。行きましょ」

行く前にどつと疲れたファルマである。

ピエールの荷馬車に乗り、三人の錬金術師一行は、錬金勉強会という名の集会の会場へと向かう。集会は帝都郊外の大きな建物で行われるそうだ。集った錬金術師や薬師たちが会場の建物の地下入り口で呼び止められ会費を徴収されて中に入ってゆくのを、ファルマたちは遠目に見た。

短時間観察していただけても、三十人は入っていったらどうか。盛況しているとみえる。

「繁盛していますね。会費はおいくらです？」

ファルマは小声でピエールに訊ねる。ピエールが指を折って金額を示す。

「へえ、そんなに取るんですか。それなのに、あんなに盛況と……」  
「入場料だけでこの金額ですね、秘儀の販売はもっと高いです。大丈夫です、お金をおろしてきましたから。ここは私が出しますのでお任せください」

料金が高額すぎて、ピエールは涙目になっていた。  
勉強会と称して高額な会費を徴収するのだ、とピエールは話す。しかし、破産してでも勉強会に参加している薬師や錬金術師は少なくないらしい。

賢者の石の合成法を習得し、大金を掴んで一発逆転、に賭けているのだという。

「ここは俺が支払いしますね」

ファルマはピエールに三人分の代金を渡した。エレンの分もおこる。

「私の分はいいわよ、ファルマ君。お金には困っていないわ」

「それはわかってるけど、俺が誘ったから俺が払う」

妙に男らしさを発揮しようとするファルマだった。

「そう？　ありがとう。じゃ、ありがたくおこってもらっわ」

「やや、これは申し訳ない」

ピエールは嬉しそうに財布のヒモを固く結ぶと、さっさとしまった。彼はほっとしたように見えた。

「では、いよいよですぞ」

ピエールについて、ファルマたちも会場へと向かう。

「こんばんは、まだ入れるかい？」

ピエールはしゃがれ声をつくり、入場料金の徴収人に挨拶をする。  
「もうすぐ定員だ。錬金術師のバッジを見せろ」

ほかの錬金術師たちと同じように、ピエールは胸元のバッジを取り出して見せた。真正なバッジには、登録番号がついている。

「この者たちはバッジがないが、弟子だ。勉強のために入れてやってくれ。入場料金は三人分支払う」

ピエールは何食わぬ顔で答え、先ほどファルマに手渡された金で料金を払った。

ファルマとエレンははい、と控え目に頷く。あくまでも目立たないように。

（エレンの男装といい、俺の女装といい逆に怪しい集団だろこれ！）  
徴収人はファルマとエレンの顔を間近でジロジロ見ていたが、入れ、と許可を出した。

ファルマの心配もなんのその、素通りできた。

「あれ？」

「ほらね、余裕よ」

肩透かしをくらったファルマに、エレンは得意げに言った。帽子を取れともいわれなかった。

地下会場はただっ広い催し物場で、無数のろうそくが燃え盛っていたものの、全体的に照明は暗い。その広間に錬金術師たちがギューグユウ詰めになっている。

ファルマやピエールの知っている、薬師ギルドの薬師も少なからずいたが、誰もファルマたちには気付かなかった。変装のたまものである。ファルマが耳を澄ますと、周囲の声が聞こえてきた。

「エルメス師は本当に素晴らしい。それに秘術を売ってくれるだな



んて気前がいいじゃないか」

エルメス（Hermes）だなんて錬金術師っぽい名前だな、そんなことを思いながら、ファルマはさらに聞き耳を立てる。

「エルメス師の秘術を買って、錬金に成功した術師もいるらしいが、そんな話を盗み聞いていたファルマは、

（錬金術師が錬成術を披露するのに暗がり好み、昼間は術を見せないってというのは、まあ定番だよな）

場合によっては、照明によって水銀が金に見えたりもするだろう。地球史を紐解けば、実際にそういう錬金詐欺もあった。

その話だけ聞けば詐欺の香りがする、そう思うファルマだが、完全に詐欺と疑ってかかるわけにもいかない。なにせ、神術がある世界だ。ファルマと同じく、物質創造のような未知の能力を持つ錬金術師がいても、まったく不思議ではない。

定刻通りに、問題とされている錬金術師が現れた。

弟子の女錬金術師と共に入場してきたのは、朱色のローブを着て、白いマスクをかぶった男だ。

「何で、師はマスクをかぶっているんです？」

ピエールが、隣に居合わせた錬金術師に訊ねた。

「金を湯水のように生み出す本物の錬金術は危険だからな、身元が分かれば、国中の賊に狙われる。金の価値が変わりうるため、国家も放っておかないだろう、顔を隠すのはその術が本物だからだ」「なるほど」

単に詐欺だから顔を見せられないんじゃないの？ とエレンは疑っていた。

「エルメス師、お願いします」

「第八回を数えました、錬金勉強会へようこそ。今宵も多くの術師にお集まりいただき、光栄です」

穏やかな口調の男だった。しかし、その声を聴いたファルマは……

（ん……？ 聞いたことある声だな……どこで聞いたっけな）

だが、どこで聞いたものか思い出せない。薬局へ来たことがある客だろうか、と首を捻る。

「彼は平民なの？ 言葉遣いが貴族みたいね」

エレンも疑問に思ったのか、ピエールに尋ねる。

「はい。神術使いのようですね……正体は分かりませんが。言葉に訛りがないので、帝都出身の貴族だと目されます。ですが、金銭への執着が激しいことから、下流貴族なのではないかと」

上流貴族は、あまり金にはこだわらないが、領地の拡大にこだわる。そういう理由で、ピエールは下流貴族だろうと踏んでいた。

「一応、正体は隠してるんですね」

「詐欺をしている自覚があるんじゃないかしら。そんなに凄い錬金術師なら、堂々と秘術を皇帝陛下の前で披露するでしょうし、帝国の保護を受けるでしょう？」

「それでは、賢者の石と鉛から錬金を行います」

錬金の実演が始まった。エルメスは、女助手にこぶし大の賢者の石と呼ばれる赤色の鉱物を持ってこさせた。それを砕いてみせると、中まで赤い鉱物だ。炎に照らされ、それはルビーのように怪しく輝いていた。

観衆はエルメスの一挙手一投足に夢中になる。

「割つても中まで赤いことが、お分かりいただけだと思います。それでは賢者の石を溶かし、鉛を入れて反応させます。賢者の石は、物質をよりよい状態にします」

そう言つてエルメスはその鉱物をガラス蒸留器の中で加熱し、蒸気を冷やして液体金属にする。

その様子を見ていたファルマは、ふわりと漂い始めた硫黄のにおいに気付いた。

（エルメスの言ってる賢者の石って、辰砂（cinnabar）じゃないのか）

ファルマはほぼ確信を持っていた。

辰砂とは、硫化水銀（HgS）のことで、加熱すれば硫黄と水銀を取り出せる。

仮説が正しければ、加熱によって水銀が生成されている筈だ。

「あれ、賢者の石じゃなくて辰砂ですよね」

ファルマはこっそりピエールに尋ねてみたが、ピエールは目をぱちくりとしている。

「というのは、何です？」

「硫黄と水銀の化合物なんですけど。ほら、水銀はあの状態で採掘されるじゃないですか」

すると、エレンが困ったように笑った。

「水銀は液体でとれるものだわ、あんな赤い結晶ではないでしょ。どうして赤い結晶から銀色の水銀が出てくるの？」

自然水銀の状態、つまり液体で採れるものだ、とエレンは主張する。

「そうなのか……」

（まあ、液体で採掘できる場合もあるけど……この世界はそうやって水銀を採るのか。産出状況が地球と違うんだな）

「さて、これで賢者の石は溶けました。鉛を持ってきた術師はいませんか」

毎回、鉛を金に変えてもらおうと、鉛を持ってくる術師が少なからずいるらしい。

「この鉛を使ってくれ、できた金はくれるんだろうな!？」

「ええ差し上げましょう」

エルメスは液体になった賢者の石と鉛をるつぼの中に入れようとした。

「るつぼの中を見せてくれ」

会場から声があがった。

「よろしいですよ」

るつぼの中に何も入っていないことを確認させるため、手前にいた錬金術師たちによくあらためさせた。

「何もない……」

「賢者の石と鉛を入れていいですね」

会場が再び静寂を取り戻したところで、エルメスはるつぼに材料を投入する。

「今から金を取り出します。贗金とすりかえないように、るつぼには指一本触れません」

エルメスはるつぼを火にかけ、加熱しはじめた。

そして、なにやら呪文を唱え、あやしげなまじないをかける。

（ただ呪文を唱えてるだけだな。あれは神術じゃない）

ファルマには分かる、エルメスの唱える長詠唱は、発動詠唱でもなければ、神力も込められていなかった。神術使いではあるのかもしれないが、この場では神術は使っていなかった。

錬金術師たちが固唾をのんで見守るなか、エルメスの詠唱が続く。暫くの間が経過した。

「そのあなた、手伝って」

エルメスは手前にいた錬金術師の老人に、火バサミのようなものを使ってるつぼを観衆に向けて傾けるように指示する。彼はエルメスの指示に従った。

「こ、こうか？」

「傾けて中をよく見えるようにしてもらいます、ご覧ください」  
炎が消えてしまった頃、るつぼの中には大匙何杯分もの金があった。

「このように、金の錬成に成功いたしました」

エルメスは得意げに観衆に告げた。どっと歓声がわき起こる。

「エルメス師は天才だ！ 大賢者だ！」

「真の錬金術師だ！ 入れた鉛の何倍もの金になったぞ」

錬金術師たちは心酔し、称賛の聲が飛び交い、拍手は鳴りやまない。

古今東西、錬金に成功した錬金術師はいない。会場の中には熱気がこもる。

「どうですか、ファルマ様」

全く手がかりも得られなかったピエールが、ファルマをうかがう。ファルマは、

「水銀は加熱で飛びますので消えるのは当然ですが、加熱した水銀から金ができる理由が分かりませんでしたね……」

水銀に混ぜ物がしてあったのかと疑ったが、硫化水銀と思しき賢者の石を加熱し、蒸留によって得られた水銀は純粹である。

それを、ガラスフラスコに入れていたから、ガラスフラスコの壁面に何か塗っていない限り、混ぜ物ができるはずがない。仮に、混ぜ物があったなら、るつぼの中に不純物が残る。

だが、るつぼの底には黄金以外に何もなかったのだ。

（んー……ニセモノとすりかえてもいなかったし、るつぼの中には何も入ってなかったしな）

ファルマは腕組みをして呻る。神術を使っていなかった以上、タネも仕掛けもあるハズだ。

どちらかというと、秘術を暴くというよりマジックのタネを見破るという方がファルマの感覚的には近い。

「ではあの賢者の石は無から黄金を生み出す、本物だつていうの？ エレンが納得のいかない、といったように口をとがらせる。

「とても信じられません……」

ピエールも頷いた。

「どうでしょうね、俺は賢者の石つてのは硫化水銀だと思っ  
ていま  
すが」

二人はあやうく賢者の石の存在を信じそうになったが、ファルマ  
は同意しない。

（一目見ては分からなかったな。でも、析出してきた金の形状をみ  
るに、一回溶けたことは間違いない。水銀に溶けていたのかな）

金は水銀に溶け、アマルガムという水銀化合物を作る。

その水銀化合物である金アマルガムを加熱してやれば、水銀が蒸  
気となって飛び、金が残る。

そしてその際に大量の水銀蒸気をまき散らしたはずである。

「水銀消去」

ファルマはエルメスに代わって会場内に飛散した汚染物質の後始  
末をしておいた。

水銀蒸気を吸い込むことは、非常によろしくない。そんな事情も  
知らず、エルメスは称賛の嵐に浴していた。

「あなたがたの中には、こう考える方がいるかもしれません。贋金  
だと」

エルメスは不敵な笑みを浮かべながら、その場にいた錬金術師た  
ちが喉につつかえているであろう言葉を投げかけた。錬金術師たち  
の中には、半信半疑という者もいた。

「金ができたということを確認したい術師はいますか？ 存分に確  
認ください」

エルメスが会場を見渡すと、何とピエールが手を挙げた。

「試金石を使ってもいいんでしょうね？」

錬金術師でもあるピエールは、試金石を持ってきたあたり準備が  
いい。試金石とは、金の純度をはかるための鉱石だ。試金石に金を

こすりつけると、その純度に応じて色が違う。贋金は贋金と分かる。  
「もちろんですよ」

エルメスは余裕綽々だった。ピエールはわざと金塊の表面を磨き、中からでてきた真新しい面の金塊を試金石にこすりつけると、確かに金ができていると分かった。最高純度ではなかったが、その問題は精錬しなおせばよいだけだ。

金ができたということに意義がある。

「表面だけ金なのかもしれない、金を割ってもいいか」

ピエールが引き下がると、他の錬金術師が進み出てきた。分厚いめっきだと疑った者もいるらしい。

「構いませんよ。比重をはかってもいいです」

ナイフで割ると、中からは見事な輝きの黄金が姿を現した。

「確かに金だ……！」

「賢者の石と鉛から金ができたぞ……！ その秘術を俺に売ってくれ！」

もはや、疑う者は殆どなかった。

「賢者の石が本物だと分かったところで、賢者の石合成の秘術を買いたい方は、後ほど私の弟子のもとへ申し出てください。今夜参加してください。皆さまに限定で、少しお安く提供しましょう」

既にエルメスはセールストークに入っている。

「俺は買っぞ」

「賢者の石は本物だ！」

全財産ではないかというような、なけなしの金貨を握りしめてやってきた術師も一人や二人ではなかった。

「どうするの、ファルマ君。まさか本物だったってことはないわよね？」

エレンも反証できない。

大量の被害者が生まれようとしている現場であるが、ファルマは決め手に欠いている。

「気になることがあるから、近くで見に行ってくる。証拠を隠滅される前にね」

ファルマはエレンとピエールに告げると、観衆の間をすりりと縫って前に行き行った。

実演に用いた器具類を助手が片付けようとしていたところで、ファルマの扮する召使風の美少女が前に進み出てきた。

「どうしたのかな、お嬢さん」

エルメスが気付いて、ファルマに振り返る。

「もう一度、るつぼを見せてもらえませんかしら？」

ファルマがエルメスに声をかけた。できるだけ高い裏声を使っただ。まだ12歳で声変わりをしていないファルマは、その気になって女言葉で話し、裏声を使えば少年だとバレはしなかった。事情を知っているピエールやエレンでさえ、違和感を覚えなかったほどだ。

「ああ、いいよ」

（るつぼの表面、スラスカの多孔質なんだな）

ファルマは細かい部分に目をとめ、るつぼを火バサミで軽くで叩いてみた。すると、叩く場所によって音が変わった。ファルマの予想した通りの感触があった。

（ははあ……なるほどね）

「何か、気になる部分が？ 先ほど、るつぼは他の術師があらためたでしょう」

やや口早に尋ねるエルメスを観察して、ファルマは疑いを深めながら尋ねる。

「ええそうですね、気のせいだったようです。賢者の石から抽出した液体金属にはまだ残りがあるようですので、もう一度だけ素晴らしい秘術を見せてもらえませんか？」

ファルマはエルメスをほめそやしながら、再実演をもちかける。

「何度やっても同じ結果になるだけだよ、やってもいいが、新しいるつぼを用意させましょう」



エルメスはファルマを笑った。無知な錬金術師の徒弟の戯言のようには聞こえたのだろう、だがファルマは笑ってなどいなかった。

「いえ、このるつぼで構いません」

仮面から見えるエルメスの視線が少し泳いだのを、ファルマは見逃さなかった。同じるつぼでは、二度と再現できないはずだ。ファルマはそれを知っていた。

「私の予想では、このるつぼではもう金はできません」

「邪魔だ、お嬢さん。すっこんでな」

観衆から、ファルマにブーイングが飛んだ。

「子供は前に出てくるな、同じ術を見たって同じことだ。早く次の術を見せてくれ」

「ほら、ひっこめ！」

せつかちな男の一人にファルマは首根っこを掴まれてひっこめられてしまった。その際のどさくさに紛れてファルマは、髪留めのピンでるつぼの内壁を軽くこそいで、エレン達のいる場所に戻った。

「確かに、勉強会の時間は限られています、時間が惜しい。次の秘術にいきましょう、次はホムンクルスをお見せします」

エルメスは咳払いをして、ショーを進行した。心なしか、ほっとしているようにも見えた。ホムンクルスはこのイベントの目玉ともいえる見世物だ。

「ただいま」

「何かわかったの？」

エレンが尋ねる。

「鉛消去」

ファルマはピンに残った残渣の状態を確認した。そして……、あつけらかんとして言った。

「ほぼ、わかったよ」

「ええっ！？ 説明してくれる？」

るつぼの底面は、孔が開いていてスカスカだった。

この場合、水銀は非常に強い表面張力を持っているので、本来ならばるつぼの中に入れても孔の中には入っていかない。だが、穴の下に金粉や鉛などの金属が高密度に含まれていた場合は別だ。吸い寄せられるように穴の中に入ってゆく。

るつぼには、あらかじめ金粉と鉛、もしくはそれらの合金が仕込まれていた。

水銀を加えると水銀は底に空いた穴から空洞の中へ流れ込み、穴の中で鉛、金、水銀のアマルガム（合金）を作る。

そこで加熱。このアマルガムは低温で融解し液状化する。液状化した状態で、るつぼを傾けることによって、るつぼの孔からは金鉛アマルガムが出てくる。

そして加熱により酸化鉛となった鉛は毛管現象によりるつぼの表面に吸収されるが、金はるつぼの中へと残る。

そして、水銀は加熱によって蒸気となり飛び、何もなくなる。

「……というわけで、るつぼの中には黄金が残る」

「そうだったの……！ 途中の説明が全然分からなかったけど！」

先ほど、ファルマが火バサミでるつぼを叩き、内部をピンでこそいでみたところ、底部は空隙ができており、鉛はるつぼの表面に吸着されていた。

「仮説だけだね、もう一回実演してくればわかるよ」

エルメスはここでつるし上げず、次の集会まで泳がせておくのがいい、とファルマは思った。

「さて、これからどうしようかな」

次はるつぼをこちらが用意していつて、それを使って再実演をしてみようのがベストだ。

今のままでは、証拠がなく逃げられてしまう。

（詐欺にしては凝っているな）

とファルマは感心しながらも、野放しにしておくつもりはなかった。

これ以上の被害者を生まないためにも……。

「ついでだから、ホムンクルスも見えて帰ろうか」

<i 1 7 4 7 0 4 — 2 4 9 6 >

#### 4章10話 エルメスの錬金の真贋（後書き）

謝辞：本項化学パートを執筆するにあたり、現役化学科の蔵元拓彬ノクロザネ様、医学博士 きりん様にご協力していただきました。ありがとうございます。

#### 4章11話 錬金術勉強会とホムンクルスの疑義

錬金術師エルメスの主催する怪しい夜会。

錬金勉強会では錬金術の披露に引き続き、ホムンクルスの見世物が始まった。

助手が持ってきた大きなガラスフラスコの上には、黒い布がかけられている。

エルメスの説明を要約するところによると、ホムンクルスとは人の精液やら血液を蒸留瓶に入れてそれを腐敗させ、そこから現れた人工生命を人間の血液と混ぜながら、馬の体温ほどで40週培養して得られた人工生命なのだそうだ。

「そこから生まれたっていう証拠がないわよねえ……成長の過程を写真にでもおさめてくれなきゃ」

と、エレンが小さな声でつつこんでいた。

「あのフラスコはつまり、母胎を再現しようとしたんだな」  
ファルマはのんきにそんなことを言っている。

人工子宮、人工胎盤などを創り、精子から人を育てようという試みだとなると、ファルマは理解できなくもない。ただ、受精卵ではなく精子のみを培養しようとするのが間違っている。

それもそのはず、人間の卵というものが知られていない世界である。

地球人が聞くと耳を疑ってしまう話だが、女性も男性と同じように精子を膣から出すものだと思われていた。

「そつえば、エルメス師は人間の子供ができるって言うんですか？  
それとも、ホムンクルスという、人ではない生物？」

ファルマはピエールに尋ねる。

「小人、とだけ聞いていますが」

ピエールもさっぱり詳しくはない。とにかく観衆からは、フランス  
コの中身に期待感が高まる。

「一つ聞いてみるんだけど、ファルマ君の説によると、卵と精子が  
揃ってなければ生命ができるわけないわよね？」

パツレほどではないとはいえファルマの医学・薬学の教科書の、  
まずまず熱心な読者であるエレンもそれは知るところだ。

エレンは最初、卵の存在というものには半信半疑だったが、ファ  
ルマの教科書に触発された侍医クロードの始めた死体解剖を見学し、  
卵胞や卵丘の実物を見た後は、卵の存在を信じざるをえなかった。

そして、卵巣や精巣の生殖器官としての機能的重要性を改めて思  
い知ることになった。一つの卵を巡って数億の精子たちの熾烈な闘  
いがあり、そしてようやく選ばれた一つから奇跡的に誕生するのが  
人間なのだと知り、エレンは守護神の祝福とは別の意味で、生命の  
誕生というものに神秘を感じたようだ。

そんな、神秘めいた生命の発生と誕生の話をエレンが知って感動  
した一方で、

「うん、できないとは言わないけど、あの状態ではできるわけない  
よ」

などと、ファルマはのたまう。

「できないとは言わないんだ？」

「まあね。生殖工学を駆使すればいつかは」

ファルマの意味深な言葉に、エレンは「ファルマ君の世界観で、  
どうなってるのかしら」と恐れ入った様子だった。

そうこうしていると、エルメスの張り上げた声が会場に響きわた  
った。

「さあ、これがホムンクルスです。とくとご覧あれ」

「いよいよだわ」

エレンの期待とは裏腹に、黒布の除かれたフラスコを見たファルマから気の抜けた声が漏れた。

「あのさあ、それは反則だろう」

呆れてものも言えない、とはこの状態だ、とファルマは思う。  
フラスコの中に入っていたのは、一見、指一本分ほどのサイズの服を着た小人に見える。だが、ファルマの目から見れば、実際はそうではない。

「おお……確かに小人は動いている……」

そうとは知らない観衆は大盛り上がりだ。

「人間のようだ……」

エルメスは前のめりになる観衆に注意した。

「神経質なので、見られることを嫌います。あまり近づきすぎないでください」

「生きていましたな。むむ、これは予想外でした」

死体を使ったトリックだと疑っていたピエールも、ちょこまかと動き回る小人の動作を見て、生きていることは認めざるを得ない。

「胎児の死体なんかじゃないわね。ファルマ君はどう思う？」

エレンがファルマをつかがった。

「がっかりすることですよ」

ファルマは彼らを失望させる前に一度前置きした。

「無毛症か、毛のない種類の猿が特殊メイクしてカツラかぶって服着てる」

エレンとピエールは絶叫しそうになった。

「あんな小さい猿、いるわけないわ！ 指ぐらいの大きさよ？ それに、手や顔なんて人間そのものよ？」

「毛ありませんし！」

エレンの言葉に、ピエールも頷いて口をそろえる。

「まだ知られてないだけじゃないかな」

地球では、という注釈はつくがピグミーマーモセットという猿は指ほどのサイズしかない。この世界の動物は世界のすみずみまで知られているわけではないようなので、異世界ならではのまだ一般に知られていない小さな猿を使えば、信じ込ませることは容易いだろう。

「そう断言されてしまうと、反論できないけど……猿だったとしたら、毛は？ 肌、指先までつるつるよ？ 剃ってる感じでもないわ」「どんなに人間っぽく見えても、白目がないだろ？ 猿かほかの野生動物だよ、人間じゃない」

（この手品のタネはしょぼかったな……）

やはり偽物だったかと思うとファルマは気が抜けた。

「スカートの下にはしっぽがあるはずだ。切られていたとしても、痕跡は残ってる。うーん、スカートどうにかしてめくれないかな」

スカートをめくりたいなどと、遂に変態じみた発言を始めたファルマである。

ホムンクルスは容器の外に出すと死んでしまうので出られない、と言った伝説はよく考えられている、とファルマは感心した。手に触れて確認することもできないのだ。

しかし、その時だった。

『……………！……………！』

（ん？）

ホムンクルスとされるコスプレ猿の口が動いていた。

まるで言葉を話すかのような口の動きだ。そして……フラスコの中からは声が伝わらないと悟ったのか、フラスコの壁面に息を吹きかけ、文字らしきものを書きはじめたではないか。



” 助けてくれ、この男が ……”  
ファルマは戦慄した。

「おや。……もう、いいでしょう」

エルメスはそれを遮るようにして黒幕をかけた。

そして助手の錬金術師にホムンクルスの入ったフラスコを手渡し、下げさせた。

「今……何か書いていた!？」

ファルマは糾弾すべく声をあげたが、観衆の熱気の中にかき消えてしまった。

「ホムンクルスは人語を解すると言いますが……ただの落書きのようには見えませんでした。なんと書いてあったのですか？」

ピエールにはそう見えたらしい。

「いや、意味はあった」

猿に人間と同等の知性を見たファルマは、常識が瓦解した思いだ。エルメスはホムンクルスが人語を書くことが分かっていたかのように、最後まで書かせなかった。

（猿はエルメスに何かをされたと言いたかったんだ。そして助けを求めていた。だから、エルメスはそれを語らせまいとさりげなく邪魔をした）

地球上において意味のある文字を書く猿を、ファルマはまだ知らない。

地球でも、無限の時間を使って猿に無作為に（キーボードで）文章を作らせたら、確率的にいつか必ず意味のある言葉が出来上がるという「無限の猿定理」は存在した。

だがそれは、僅か十数文字の意味のある言葉を書かせるだけでも、宇宙が終わってしまうほどの途方もない時間が必要だ。

つまりホムンクルスに扮した猿の書いた言葉は、偶然の産物では

ないのだ。

（やっぱり変だ！）

「今、何か字のようなものを書いていなかったか？」

ファルマ以外にも気づいた観衆はパラパラといたらしい。

「もう一度見せてくれ！」

それを聞いて好奇心を掻き立てられたほかの客も同調して声をあげた。

「残念ながら、長時間は見せられないのです。脆弱な生き物ですの  
でね、大勢の人間の前に長時間いると、自傷してしまうのです」

エルメスはもっともらしい理由を付けて、見せようとはしない。

「代わりと言ってはなんです、もう一つ面白いものをお見せしましょう。ここにバラの種があります。そこへ賢者の石を入れます。

種から、10秒で花を咲かせてみせましょう」

花の種が一面に敷き詰められた木箱を見せ、蓋を閉める。

その箱を揺さぶりながらエルメスは力を加えるふりをし、呪文を唱える。

そして、大げさな呪文を終え、箱を開けると……。見事なまでの、  
花開いたバラのつぼみが中に敷き詰められていたのだった。

「おおおっ！？」

拍手喝采である。

先ほどのホムンクルスの話をぶりかえすものはいなくなった。

「どうなってるの！？ 種から花を咲かせる力があるの！？ あれ  
はどういうこと？」

エレンも例外ではなく驚き、眼鏡をかけなおす。

「振ってたじゃないか。これに關しては子供だましたよ」

ファルマはエルメスの些細な動きも見逃さなかった。

エルメスの中には触れなかったが、箱を振っていた。

「振っていた……振っていたらどうして花になるの？」

「つばみの上に、種がびつしり敷き詰められていたんだよ。容器を振ると、ブラジルナッツ効果で粉粒体は粒子の大きなものが上にくるんだ。実際にやってみたらわかるよ」

大きな違う粒子を容器の中に入れて振ると、一番上に一番大きな粒子が集まる現象だ。

それを、地球ではブラジルナッツ効果と言った。

「ブラジル？ それどういう意味？」

（あ、この世界にはブラジルがないからブラジルナッツもないや）  
とにかく、そうなるんだ。

と、ファルマは適当にごまかした。

「そうやって、最後に賢者の石を売り込んで買わせる寸法ですな」  
ピエールは危うく引つかかるところだった、と冷や汗を拭いた。

その他にもいくつかの見世物があつたが、どれもファルマからしてみれば、タネを予想できる手品の範疇を出なかった。

エルメスはキメラ動物なるものも仰々しく披露し、それを開発するまでの苦労話を面白おかしくでっちあげた。

「見てファルマ君、へびに足をくつつけたキメラよ？！ 双頭のへびもいるわ。すごいわ、ちゃんと生きてる」

「足の生えたへびと、双頭のへびだね。キメラじゃなくて生まれつきあだつたんだよ。たまに起こる奇形的一种だ」

ファルマは顔色も変えず答える。当り前のものを、当たり前だとコメントする。

「驚かないのね」

「見たことのある奇形だから。へびは昔、脚をもっていたし」

（奇形動物の蒐集をしているのかもしれない……ブリーダーとしての知識はありそうだ）

エルメスがそれなりに能力や知識のある人物なのだということは、これまでの見世物の中から窺い知ることができた。

「ファルマ君！ 人体浮遊よ！？」

次にカーテンが開くと、エルメスの体の前に催眠をかけられたという女錬金術師が水平に浮遊していた。天井から糸やワイヤでつり下げられていないことを示すために、観衆に女錬金術師の周りをおためさせる。

「本当に浮いているの！？」

「曲がった金属棒をエルメスの腹部あたりから女性の体の下側に通して、支えているね。同じトリックを使えば、エレンにもできるはずだよ」

やはり、タネの知られた手品の一種だ。ファルマは棒読みで説明する。

「もしかして、本当に浮いてるかもしれないんじゃない？ ファルマ君だって飛べるんだし」

当初、完全にエルメスを疑っていたエレンを半信半疑ぐらいにさせてしまうあたり、エルメスは詐欺師としては一流だった。

この調子だと、詐欺被害者は膨れ上がってゆくだろう。

そうして錬金術勉強会という名の集会は、大盛況のうちに終わった。

「どうも皆様、今宵は最後までお楽しみいただき、ありがとうございました。またのお越しを」

そう言って締めくくったエルメスの周りには、秘術を買いたい錬金術師がわっと群がった。

（これは、毎回集会の参加者が増えていくのもわかるな）

見世物として純粋に見ると、客観的に満足のいく内容だった。

高い入場料を取るだけあり、さらにエルメスの巧みな話術もあり、エンターテイメント性にも優れていた。客もおおむね満足そうだ。

「これで見世物は終わったみたいですよ、ファルマ様。見応えがありましたね」

ピエールの言葉に、ファルマは頷く。全部で六つの見世物があつた。

「不覚にも面白かったわ。全部が全部、タネがあるとされても分からなかったし、何でファルマ君は全部わかるのよ」

エレンはタネが見破れないことが悔しいらしい。

「分かるけど、皆には分かりにくいと思うよ」

「それで、ファルマ様から見たこれらの見世物は、全てインチキだったということですか？」

ピエールが総括する。

「インチキっていうか、手品や一般人が知らない現象や、先入観を逆手に取って錬金術つてことにしてるだけですかね」

一つファルマがいえるのは、エルメスは詐欺師なんてやるより、イリユージョニストや興行師をやった方が正々堂々と、しかも白昼堂々がつぼりと稼げるのではないか、ということだ。

でも……とファルマは考え込んで眉根を寄せた。

「ホムンクルスだけは……猿だけど、ただの猿じゃなかった」

ホムンクルスに関しては、ただの手品ではなく、疑惑が残った。というより、ファルマとしてはホムンクルスを買値上げるかも一度見せてもらうかして、さっき途切れてしまった文章を最後まで書かせてみたい。

あれがただの偶然だったのか何だったのか、曖昧にしておきたくない。とファルマは思った。

「どうする？ バケの皮をはぎに行くの？ 私は構わないけど」

エレンは杖に手をかけた。どうやら、やる気のようなのだ。

対してファルマは丸腰だ。いかんせん薬神杖を持つと彼自身が暗闇で発光してしまうので、夜間ということもあり持つて来なかった。たとえ素手だったとしても、特に危険は感じない。

「ホムンクルスの正体を見極めてから帰ろうかな」

「そこなくちゃね」

客が引けるのを待っていると、ファルマたちは背後からふと声をかけられた。

「こんばんは。どれかの秘術に、ご興味がおりでしょうか」

誰かと思えば、助手を務めていた女錬金術師である。

「エルメス師より、もし御用があればあなた方を別室へお通しするように申し付けられました」

「私たちを特別に、ですか？」

ピエールの声に陰が混ざり、警戒心をあらわにする。しかしファルマはあからさまに怪しい誘いにもお構いなしで、相手の話に乗るのだった。

「今宵の秘術には感動しました。もう一度、ホムンクルスを見せてもらいたいです。秘術の購入を検討しています」

「……ホムンクルス、ですか」

暫くの沈黙があつたが、女錬金術師は承諾した。

「わかりました、こちらです。お見せしましょう」

「ありがとうございます！」

## 4章12話 湖底にて

複雑に入り組んだ建物の中の通路を抜け、地下へと続く長い螺旋階段を、女錬金術師の後についてファルマたちは下る。

カッーン、カッーンと靴音が不気味に反響した。

次第に空気がひんやりとして、地下に降りるにつれ湿気を帯びてきた。

そして、大きな空洞が足元に見えてきた。

「あれ？　ここ、どこ？」

エレンが一定の歩調を崩さず、ファルマに耳打ちする。

「洞窟だな」

階段は地下洞窟の中へと下ってゆく。洞窟全体は広い鍾乳洞のようになっている、地底湖があるようだ。

どれほど下っただろうか。地の底へと取り込まれてゆくような嫌な感覚を味わっているうちに、階段は宙ぶらりんで途切れていた。女錬金術師は無言で立ち止まった。

「これ以上進めませんが、こんなところにホムンクルスがいるんですか？」

「どうということなの？」

ファルマに続き、エレンも畳みかける。どう考えても怪しい。不穏な空気を三人が感じ取った時、ふっ、と女錬金術師の持っていたランプの火が消えた。

完全に明かりをそのみに頼っていた一同の視界はゼロになる。「ぐあっ！？」

ふいにピエールの悲鳴がして、大きな水音と飛沫が飛び散った。

地底湖に落ちたのだ。何者かに突き落とされて……！

「ピエールさん！？」

（やられたか！？）

ファルマは薬神杖を持ってきていなかったことを一瞬悔いたが、直後には思考を切り替え、大秘宝と呼ばれる半物質化した職員証をポケットから素早く取り出した。ファルマが大秘宝に神力を通じ手にすると、ファルマ自身が強く発光し、揚力やら浮力やら分からない力を生じさせる。

ファルマの後光は、洞窟の隅々まで明るく照らした。

遙か下の地底湖の水面には、ピエールが仰向けに浮かんでいた。

まだ、息はしている。診眼で見ても外傷はない。やはり突き落されたようだ。

「エレン！？」

そして光を取り戻したファルマの目に飛び込んできたのは、まさにエレンに襲い掛かり喉を掻っ切るうとする女錬金術師の姿。ファルマは大秘宝を刃物にぶつけるようにして突きを繰り出し凶刃を粉碎した。

女錬金術師は驚愕し、怯えたようにファルマから距離を取った。

「何をするんだ……！」

エレンが殺されていたかもしれない、そう認識した刹那、ファルマの頭に血が上った。

「水の槍」

ファルマの声に気付いたエレンは素早く杖を抜き、神技で女錬金術師を吹き飛ばした。

女錬金術師はエレンの至近距離からの攻撃に耐え、片手で階段の縁を掴み、地底湖には落ちていない。彼女は体をばねのようにしながら宙返りをうち、エレンとファルマより階段の高い位置に着地した。

彼女は黒い長剣を抜いていた。



「どういうことかしら。私たちをこの湖の底へ沈める気?!」

その時、ぬ……っと、地底湖の底から巨大な、黒い異形の影が現れた。

全貌は見せず、水面に落ちたピエールを飲み込もうと大顎を開きはじめた。

開口すれば、クジラほどのサイズはあるだろうか。

「ひっ……」

身の危険を感じピエールの顔が恐怖にゆがんだとき、ファルマは階段を蹴って宙に飛び、急降下する。

「ピエールさん!」

彼の手を掴み、危機一髪というところで水面から引き上げる。

だが、今にも怪物の口の中へ飲み込まれそうになった時、地底湖の水に触れたファルマの手にピリッと痛覚が走った。そして、ほのかに漂う刺激臭に気付く。

(この地底湖、強酸湖だ!)

ファルマはぴんときた。

PH1を切る強酸性の硫酸湖は、地球上の火山帯にも少なからず存在する。だが、何故この帝都に!? それ以上を考える余裕はファルマにはなかった。

ピエールの手を右手で握ったまま、消去の能力を使う。

「硫酸消去」

ファルマが消去の能力を使うと硫酸湖ごと消滅し、まさに顎を閉じようとしていた異形は深い湖底へと落下していった。ピエールやファルマの体についた硫酸を消去し、ついでに怪物の襲撃をやりすごすことに成功した。

ファルマはその間にピエールとの二人分の重みに耐えながら大秘宝の浮力によって飛翔し、足場へと戻る。

「飛んだ……だと……!?」

女錬金術師は、啞然としていた。

彼女からは、ファルマが手の中に握り込んでいる秘宝は見えないのだ。また、見えたとしてもそれが何かは分からないだろう。

「硫酸湖に落として溶かそうとしたんだろうが、あいにくだったな」  
女錬金術師のピールへの殺意を見たファルマは、すでに臨戦態勢に入っている。

「覚悟はできているんでしょうね」

エレンは杖で既に彼女を階段の端に追い詰めていた。

女は長剣を持っているが、後一步でも後ろにひけば、下は奈落だ。エレンが突き落せば。

「降参して武器を捨てて、ゆっくりこっちに来るんだ」

ファルマは言った。捕縛し、悪事を洗いざらいに吐かせ衛兵に突き出すつもりだった。

しかし女は悪あがきに、素早く手を伸ばしてエレンの杖の先を掴み、エレンの体勢を崩して奈落へ突き落そうとした。ファルマはエレンの腰をさつと引き寄せ、手すりを掴んで踏みとどまった。だが、ファルマのフォローによって逆にバランスを崩した女は、小さな悲鳴を上げ、真つ逆さまに湖底へと落ちて行った。

ファルマは秘宝を握りしめ、女を追って湖底へと飛び降りた。

「くそっ！」

だが、ファルマが彼女の手を掴むことはなかった。湖底すれすれで、ファルマは秘宝の浮力を調整して急ブレーキをかける。

そこでは真つ黒な体軀をした、ナマズに似た異形の巨大魚が、湖底に叩きつけられ息絶えていた。すぐ横に、原型をとどめないほどの衝撃をその身に受けた女の死体を見つける。

（間に合わなかった……！）

即死だった。

ファルマは何とも言えない気分になった。

ファルマが硫酸湖を消去しなければ命は助かっていた、そう思うとやりきれなかった。

瀕死であれば始原の救援を使い延命できたが、死亡してしまえばファルマは無力である。彼女はピエールやエレンを殺そうとした相手だ。因果応報というもの、そう思っても、罪悪感が消えない。彼女の遺体は、やがて硫酸湖の中に飲み込まれてゆくだろう。彼は、遺品となるであろう彼女の指輪を取った。

呆然自失としたまま意識を湖底に向けていると、彼はあることに気付いた。湖底にクリスタルの層がびつしりと露出している。さながら水晶鉱山のようにであり、しかしその透明な輝きには、覚えがあった。

ファルマが目を奪われていると、死んだ女の遺体を包むように、ふわっと薄い光の膜が現れた。その膜は数秒もせずクリスタルの湖底にすうっと吸い込まれていった。人間に魂というものがあるのなら、魂がクリスタルに吸い込まれたように見えた。ファルマは目を見張る。

（これ、薬神杖と同じ素材？）

ファルマが湖底のクリスタルの層の上に着地すると同時に、ファルマの神力を受けてあたり一面が発光する。

クリスタルの中には、ひととき透明な結晶も散見された。ファルマは礫となって落ちていた透明な結晶を一つ、手にとってみた。神力を込めると、神力が増幅する。

（晶石だ……薬神杖についてるやつか。こんなところにあったのか……ん？ あれは何だ？）

びつしりと湖底に広がるクリスタルのちょうど中央部に、人一人

分サイズの四辺の、正方形の石板が埋め込まれていた。その石板には一面に水滴がついていて、水滴はだんだんと大きくなり、おそらくは硫酸がにじみ出てきていた。

（この石板が、この巨大な硫酸湖を作っていたのか……）

ほんの少しずつ、数十年、いや数百年という途方もない時間が経過して、この洞窟内で硫酸湖が形成されたのだろう。ファルマの知らない神術で作られた石板なのか、まだかすかに神力を含んでいるのが分かった。

「引力が？」

その石板と、ファルマの手の中の秘宝が惹かれあっている。

無視できないほどの、吸い寄せられるような力を感じた。ファルマはゆっくりと近づき、注意深く石板を覗き込んだ。

「これは……」

まるでファルマの訪れを待っていたかのように、石板には、光で編まれた薬神紋の刻印があらわれた。

そして、薬神紋の下に、「ここは彷徨える魂の住処。果ての地の泉にて、しかるべきものの訪れを待つ」と、古めかしい言語で光の文字が走り、跡形もなく消えてしまった。ファルマが引力のままに石板に秘宝を近づけ石板と接触させた途端、秘宝を包んでいた白い発光は瞬時に光線へと変わる。

限りなく直線で透明な光は、目も醒めるほどの美しい煌めきを残しながら、とある方角を示していた。

神秘的な光景に、ファルマは圧倒された。

（もしかしてこの光を辿っていけば、薬神ゆかりの遺跡にたどり着く？）

おそらく、その光が示すものはサロモンの言っていた聖泉。

発光は一瞬のことで、秘宝から放たれたレーザーじみた人工的な光線はすうっと消え、秘宝の中に吸収されてしまった。

ファルマは、地上部分の建物の間取りから素早く位置を計算し、石板と秘宝が光線で示した方角を胸に刻み付けた。

「即死だった。遺体は、持って上がれない。……でも、聖泉の手がかりが、見つかったよ」

飛翔してエレンとピエールのもとに戻り、彼らに事の顛末を告げたファルマは、静かな興奮を秘めていた。そんなファルマを、エレンは不安そうな目で見つめた。先ほど救出したピエールは、恐怖とショックからか、その場で眠り込んでいた。

「戻ろうか」

その時、階段の上のほうから、何者かが階段を駆け上がる音が聞こえた。

「誰かいたわ！」

「エルメスかも！ ピエールさん起きて！」

ファルマは逃がすまじと秘宝を握り、飛翔で螺旋階段をほぼ垂直に飛び上がってゆく。しかし猛スピードで階段を突っ切り、通路へ出て人影はなかった。

ファルマは診眼を発動し、建物全体を透視して生体反応をみる。エルメスに重い疾患はなかったが虫歯と遠視があつて、ファルマは虫歯の個数や場所を個人識別の手がかりにしている。もちろん、錬金術のシヨアの時にじつくりと、診眼ごしにエルメスの特徴は入手していた。それを踏まえてあたりを診るに、その反応さえもない。どこかの秘密の通路から素早く逃げ出し、馬にでも乗ったのか、建物の中はもぬけのからだだった。

暫くして、カンカンと階段から二人の靴音が聞こえてきて、へばった様子で階段をかけ上がってきたエレンとピエールが追いついた。特に、運動不足のピエールにはこたえたようだ。膝をおさえていた。

「お疲れさま、二人とも。人影は分からなかったよ。でも、エルメスだ、いなくなってるし」

ファルマは二人を労う。彼らはファルマとは違って、地下階段を百メートル近くを自分の足で昇ってきたのだ。

「ふう、ひい……ファルマ様はいつたいどうやってあんなに素早く階段を上ったのですか？」

ピエールはファルマが飛翔していたとは知らず、若くて体力があつて羨ましいと唸っていた。

「気付かれたのかしら……手下に氣を取られている間に、逃げられたわね。失敗したわ」

エレンが悔しさを滲ませ、杖を地面に打ち付ける。

「いや、逃げられてはない。こちらは変装していたし、バレてない。エルメスには、たぶん早ければ明日にでも会える」

「ええっ、どうということなの？」

「思い出したんだよ、あの声をどこで聞いたかを」

直接対決をして必ず不正を暴き、錬金術師たちを騙した罰を受けさせ、ホムンクルスの謎を解いてやる。

ファルマはそう決心したのだった。

#### 4章13話 魂の器（前書き）

今日は2話更新します。次があります。

#### 4章13話 魂の器

錬金術師エルメスとファルマが対峙した夜から、数日が経ったあの日の夕刻。

「じゃ、そろそろピエールさんのところに行ってくるよ」

「気を付けてね」

ロツテとエレンに、セドリックらが店じまいをしながら見送る。

「エレンもロツテも、暗くなる前に帰ってよ」

異世界薬局の警備は強化しているが、エルメスを逃がした後、彼らは何者かに襲われるのではという心配はあった。特に、エレンは馬車ではなく白馬で通勤しているので、伯爵家に戻るまでの間に襲われた場合は、ファルマはすぐに駆けつけることができない。

「心配しないで、私を誰だと思っているの？ 返り討ちにして氷漬けにしてやるわ」

エレンはファルマを安心させるように強がる。エレンは水の神術使いとしてはかなり優秀で、少々相手は潰してしまうだろうが、それでも、エルメス相手となると、ファルマは不安だ。

「私も、セドリックさんと早めにお屋敷に帰ります。ところで、ピエールさんはご無事ですか？」

ピエールの身を案じるロツテの言葉に、ファルマは曖昧に頷く。

「二週間ぐらいかかりそうかな」

ファルマは普段通りの営業を続ける異世界薬局を出て、供の騎士を連れ夕方には木漏れ日薬局のピエールのもとへ出かけてゆく。

木漏れ日薬局の門をくぐり、裏口からピエールの病室へと向かう。ピエールの娘は、門の前でファルマの来訪を待っていた。長時間待っていたことがうかがえる。

「い、いらっしやいませ、ファルマ様」



「こんにちは。お父さんの具合はどう？」

「はい、いくらかよくなりました」

その後、女錬金術師の奇襲によって硫酸の湖に転落してしまったピエールがどうなったかというところ……それなりに深刻な化学熱傷を負っていた。ファルマはピエールの店に毎日往診をし、注意深く火傷の処置を施している。

「ファルマです、お邪魔します」

「おお、これはファルマ様。いつも申し訳ない」

創傷被覆材を貼られ痛々しい姿をさらしつつも、ベッドの上で調剤薬局ギルドの帳簿をつけていたピエールは、ファルマの声に顔をあげる。彼の髪の毛も眉毛も、ボロボロに朽ちていた。

化学熱傷はその深さに応じてⅠ度Ⅱ度Ⅲ度まで分類され、Ⅰ度が表皮、Ⅱ度が真皮に達しており、Ⅲ度は真皮全体に損傷が及んでいる。ピエールはⅠ度Ⅱ度の間だ。

実際にピエールが硫酸に浸っていた時間は数十秒あまり。ファルマの迅速な硫酸“消去”で大事には至らなかったものの、皮のブーツやズボンなど下半身、薄着だった部分に広範囲に化学熱傷を受けたために全身の毛という毛、部分的に真皮にまで硫酸が浸透していた。

さらには失明には至らなかったが、眼球や粘膜にも炎症は広がっていた。

受傷後一日は全身炎症反応が起こることが懸念されたため、ファルマは彼をメイシス家に運び、すぐに輸液を開始してパツレと協力し二十四時間の処置にあたった。

幸い、念のために“始原の救援”をかけた直後から、ピエールの傷は治癒をはじめた。

傷口の洗浄のあとワセリンや創傷被覆材を用いて創傷面を保護し、抗菌薬や副腎皮質ステロイドも適宜使用した。疼痛の軽減のため、痛み止めも投薬して様子をみている。

そうして数日が経って、疼痛もいくらか軽減してきたようだった。

「どうですか、今日は」

ファルマはノートを出して問診をする。ファルマを連れて病室まで案内したピエールの娘も心配そうに部屋の隅でファルマとピエールの顔を交互に眺めていた。父の容体が気になるのだ。

「今日は昨日よりだいぶいいです。思ったよりひどくなくて驚いています。ファルマ様の神術で何かしていただいたからでしょうか」

「多少はそれもあります。硫酸は皮膚に浸透して表皮、真皮組織を壊していきますが、それほど濃度が高くなく、硫酸ごと消し去ったので、最小限で済んだのだろうと思います。ピエールさんの身の安全のため、傷が治りきるまではこの火傷を人に見せないでください」  
「たしかに、エルメスに気付かれてはいけませんからな。くっそ、あいつ、ぶっ殺してやりたいくらいだ……ファルマ様はエルメスの正体は分かったのでしょうか」

「だいたいわかっていますが、もう一つ確証が欲しい。明日にはわかるでしょう。木漏れ日薬局はいつも通り営業を続けてください、変わったことをしてはいけない。店番代わりのアルバイトの薬師を派遣しますので」

全身を硫酸で火傷をした錬金術師がいたとすれば、エルメスは探し出して始末しようとするはずだ。負傷したという情報が外にでることは、ピエールにとっても危険だった。

「何から何まで、ありがとうございます」

ファルマは翌日、宮殿へと出向いた。

その日は宮廷薬師としての仕事は非番だったのだが、宮殿にいる筈の人物に用があった。

目的の人物は薬師控室の前を歩いていて、いともたやすく見つかった。

ファルマはその男を遠目から確認すると、声をかけずに物陰に隠

れ、診眼を通して透視する。虫歯のある場所、骨格や特徴、そして何より声を確認し、個人を識別した。

ファルマはこの頃には実際に目標とする人物に会わなくても、遠隔から診眼による透視を使って相手を見分けることができるようになっていた。診断をかねて、便利に使っている。

その人物とは、サン・フルーヴ帝国の宮廷薬師の一人だ。

ファルマが目星をつけていたのは宮廷薬師、ユーゴー・ド・ラ・トレモイユ（Hugod de La Trémouille）。ブリュノと同じ、尊爵の称号を持つ宮廷薬師だった。ブリュノより年上だが、年の割に若く見える薬師だった。

もう一人の女宮廷薬師フランソワーズと合わせ、ユーゴー、ブリュノ、ファルマの四人の宮廷薬師は基本的に毎日交代で宮殿に詰めるため、ファルマが当番の時はユーゴーは来ない。顔を合わせるとすれば、女帝主催のパーティーや、数か月に一度の宮廷薬師の皇族や廷臣の治療方針を決める会議で会う程度だ。

そして、ユーゴーは帝国医薬大学校に所属してもおらず、プライドのためか王侯貴族しか診ないので、宮廷に出入りしていないエレンとも面識がない。あの錬金術勉強会で、ファルマだけは声に聞き覚えがあつたが、エレンもピエールも錬金術師たちも気づかなかつたわけである。

ユーゴーは、ファルマが宮殿で頭角を現し女帝に筆頭薬師として重用されるようになった時期から、女帝への診察の当番を減らしていた。ファルマとも、積極的にかかわるうともしなかった。要するに、ファルマの存在を煙たく思っていたとされる薬師の一人だ。

（でも、ユーゴーが犯人だったとして、薬学や錬金術の知識を悪用して何であんな小金稼ぎなんか……）

ユーゴーは大貴族なので、少々の金策に走らなければならないと

いう経済状況にはない。

ちなみに、ファルマがユーゴーの仕事を奪ったかというところ、帝国から宮廷薬師に支払われる給金は固定給だったし、ユーゴーは女帝のほかの王侯貴族の顧客も抱えていて、ファルマが女帝に重用されているからといって、ユーゴーの給料が減っているわけでもない。金に困っているわけではないのだ。

（なら、何でだ？）

ファルマが思索していると、

「おや、ファルマ様。何をなさっているのですか？　壁の模様をじつとご覧になって……」

偶然にもサロモンが廊下を通りがかり、壁にへばりつき、真剣な面持ちで壁を凝視しているファルマを見つけた。

「あ、いや、これは違ふんです」

「壁の格子模様を数えておられた？　お気の毒に、お疲れなのでですね……」

かわいそうな人を見る視線で見られたファルマは、誤解を解くため、サロモンには硫酸湖の存在と聖泉の手がかりを見つけたことを話した。

「ひょんなことから聖泉の情報を得られたのは、大きな収穫ですね。喜ばしいことです。搜索隊も奮闘しているようですが。ファルマ様と聖泉は惹かれ合っているのでしょうか」

「そうなんでしょうか。手がかりが見つかったことは、陛下にも端折って報告しておきますね」

必要な情報を出さずにいて、搜索隊が空振りをしてはいけない。と、ファルマは気遣う。

「怪魚の守る酸の湖の底に聖泉への道しるべがあったということは、その石板はファルマ様のような人ならざる者の訪れを待っていたのでしょうか」

神殿所属の神官ではなくなったサロモンだが、まだ守護神への信仰心にはあつく、興奮していた。また聖典に新たな1ページを刻ま

なければならぬと、使命感に燃えているようだ。

「そういえば、不思議なことがありました」

ファルマはふと、サロモンに尋ねてみた。

「どのような」

「その湖底のクリスタルの層が晶石に、死んだばかりの人から光が出て、その光が飲み込まれていったように見えたんです」

あの、魂を吸われたようにしか見えなかった不気味な現象が何だったのか、ファルマはサロモンに聞いてみたかった。

「さて…… ということでしょう。秘宝の原材料となる鉱物に、そのような性質が……。それに加えて石板には、彷徨える魂の住処と書かれていたと……」

サロモンは難しそうな顔をして腕組みをし、髭をいじりながら目を眇めた。

「ところでその、硫酸湖の底に眠るクリスタルと晶石は取ってこれましたかな？」

「はい、翌日取ってきました」

ファルマは硫酸湖の底から削りだしたクリスタルと晶石をつかって、新しい杖を作り出そうと考えていた。薬神杖はいずれ大神殿に返さなければならぬのだから。

その晶石を加工しているうちに、更に不可解なことに気付いた。削ったり折ったりするたびに、幻聴のようなものが聞こえるのだ。

それは人の声に聞こえなくもなかった。

「秘宝の原材料となるものが、人命を奪ったとしても何ら不思議ではありません。その死者は、晶石の中に呼び込まれたのでは」

「ええっ!？」

秘宝はそんなに危険な代物だったのか、とファルマは今更のように薬神杖を持つのが怖くなる。薬神杖は先代の薬神と呼ばれた人物によって、人助けのために作られた杖だとばかり思っていた。それを知れば、ある懸念が頭をよぎった。

「もしかして、俺が薬神杖を使って人を助けただけどこかで人が死ぬってことですか？」

その人魂を、他の秘宝が吸っているのでは……ファルマは動揺のあまり、そうも考えた。

「それは難しい質問です。理屈は知れませんが……歴史を大局的に見ますと、あなたのように人を助けてくださる守護神もいらっしやれば、また逆に秘宝を用いて多くの人命を奪うだけの守護神もおられました。守護神には人智の及ばぬ宿命があり、人間の味方でも敵でもないのです」

「そんな……俺はどうすれば」

（守護神の存在によって、トータルでこの世界の人々の生死のバランスが取れているってことなのか……）

自分がしてきたことは間違っていて、何もかもが無意味になるのでは。

そう考えると、ファルマは足元から崩れそうになる。それを見たサロモンはファルマを宥める。

「そう、お気を落とされますな。あなたがなさってきたことは決して無意味ではありませんし、薬神杖に人を殺めるような機能はありません」

ファルマはしばし考え込んだ。そして、クリスタルと死者の記憶の関係を考察しているうちに、ある問題の答えが見つかったような気がした。

「まさか……」

背筋がぞくりとした。

「ホムンクルスはもしかして……そうだったのか」

そこにはまさに、錬金術の闇が凝縮されていた。

#### 4章14話 錬金術師エルメスの破滅（前書き）

本日は2話あります。前の話がありますのでご確認ください。

#### 4章14話 錬金術師エルメスの破滅

恐ろしい事実に気付いたファルマがサロモンと別れ、真相を確かめるためにユーゴーのいる宮殿の薬師控室に入ろうとすると、何も知らない薬師と廷臣がちょうど帝都で評判の錬金術師の噂話をして盛り上がっているのが部屋の中から聞こえてきた。

（お、もってこいのタイミングで話が出たな）

ファルマから話題を切り出さなくてもよさそうだ。

「……それで、実演で錬金に成功したそうですね」

「先日も帝都某所で実演会が行われ、どうやら盛況だったようですよ。なんでも、またホムンクルスを見せたとか」

錬金術師エルメスの噂は、ついに宮廷にも聞こえるようになったらしい。

「一度、見に行ってみたいものですな」

「錬金術師かその弟子でなければ会場に入れないようですよ。貴族の錬金術師は門前払いを食らっているようですから、平民の錬金術師となると伝手がありませんな……」

エルメスはうまくしたもので、詐欺の露見を恐れてか、教養のありそうな貴族の錬金術師を会場からシャットアウトしているのとのことだった。

（そうか、ピエールさんは平民の錬金術師だったから入れてもらえたのか）

「皆さん、こんにちは」

ファルマは何食わぬ顔で彼らの会話の途中で薬師控室に入ったので、二人の薬師たちが振り向く。

「おや、ファルマ師。こんにちは。今日は非番では」



「少々残務がありまして。仕事が終わったら、すぐに帰ります」

ファルマは適当な理由をでっちあげる。

すると、丁度良かったとばかり一級薬師の一人がファルマとユーゴーに話を振った。

「ご苦勞様です。そうだ、尊爵様とファルマ師はその錬金術師の話をご存知ですか？」

廷臣の診察を終え、カルテをつけ終わり帰り支度をしていたユーゴーは、不意を突かれた様子だった。

「ああ。耳には入れてはいますが、ワシが術を見ることはできませんし、ペテンに興味はありません」

関与を疑われないように、エルメスの錬金術をペテンと切って捨てた。

「ペテンなんですかね、夢のある話ではありますが。ファルマ師は錬金は理論的に可能だと思われませんか？」

暢気な薬師は、興味本位でファルマにさらに突っ込んだ質問をする。

「金は元素ですので、合成して新たにできるものではないのです。何か特殊な神術を使ったのでなければ、確実に詐欺ですね」

ファルマがあっさりと本質をついた説明をすると、ぴくつ、とユーゴーの動きが止まった。そしてユーゴーはファルマを疑わしげにじろりと眺める。

「どうかしましたか？ 尊爵様」

と、ファルマはすまして視線を返す。

「いや……」

あの夜は女装をしていたからか、ユーゴーはファルマが錬金術の集会に立ち会っていたことに気付いていないようだった。

「そうですね、ではけしからん詐欺師ですね。帝国は取り締まるべきだ」

詐欺と聞いて失望した薬師は、早く懲らしめなければと鼻息を荒げる。

「金なんてできるわけがないよな」

薬師と廷臣が笑っていたところで、ファルマは言った。

「金を見せるだけでよいのならできますよ」

「ええつ、本当ですか?!」

薬師たちは喜んだ。

「さあ、皆さんも目を閉じて念じてください、金よ出ると」

ファルマは右手を軽くかざし、眼を閉じて呪文らしき言葉を唱える。

そして、思いつきのままに適当な詠唱を終えると、すっと目を開けた。

「出ましたよ」

そんな言葉と共に、ファルマは自信たっぷりに両手を広げる。

なぜか得意げなファルマに対し、薬師たちはからかわれたのかと失笑した。ユーゴーも、やれやれといった様子で溜息をつく。

「何もないぞ」

「はは、これは一杯くわされました。ファルマ師は私たちをからかっ  
つておいでだ」

ファルマは彼らと一緒にになって笑ってから、ふと指を後ろに向けた。

「後ろですよ」

ふわりと金粉が舞い、彼らの視界の隅に黄金が入り込んだ。

「えっ!?!」

彼らがはじかれたように振り返ると、部屋を埋め尽くすほどの砂金の山が鎮座していた。黄金の山の表面からは金が湧き出し、さらさらと表面を滑り落ちていた。

それは帝国中の金を集めたかのような、有無を言わせぬ金の量だ

った。

薬師は目をぱちくりとさせると、思わず砂金の山の中に手を突っ込み、その質感を確かめる。

「さて、見ましたね？」

彼らがそれを目に入れたのを見届けたファルマがパチンと指を鳴らすと、黄金は跡形もなく消滅した。

「なっ……今の黄金は一体……!?」

薬師たちもユーゴーもあつけにとられていたが、薬師たちは次に拍手を送った。

「本物だと思いましたか？」

ファルマはユーゴーの反応を窺いながら冗談めかして尋ねる。

「今、何をどうやった!?」

「気になりますか。ただの手品です」

ファルマは涼しい顔をして答えるのだった。

「手品？　これが？　いやあ、これはお見事。どうやったのか、教えてくださいよ」

「これは余興にいいですね。件の錬金術師もほんの一握りほどの金を出すのが精いっぱいだったと聞きますから、ファルマ師の見世物は規模が違っ！」

「手品のタネは秘密にしておかないと、興ざめですからね」

ファルマはもつともらしく理由をつけて種明かしを断った。そのからくりは、物質創造で金を創り出し、消去できれいさっぱり消したのだ。タネも仕掛けもない本当の意味での錬金を披露し、エルメスとは逆に手品だと称した。錬金ショーを無価値なものにしたのだ。「ファルマ様にはかないませんな」

上手い見世物を見たばかり、薬師たちは喜んだ。

だが、ユーゴーは顔を引きつらせ、笑わなかった。タネを仕込む時間はなかった、既存のどんなトリックを使っても、今の見世物は

不可能。手品ではないと勘付いたからだ。

「もし、これ以上詐欺を続けるのであれば、全てのトリックを暴いて裁きを受けさせます」

ファルマは、場にいた全員に話しながら、その実ユーゴー一人に釘をさした。

「おお、それは胸がすくでしょうな。是非やっつけてください」

薬師たちも、面白そうだとはやしたてる。

「悪事がバレるのは時間の問題です」

ファルマが放った言葉は、そのままユーゴーにとっての直接的な脅威となった。

そしてユーゴーはファルマの指に、見覚えのある指輪がはめられているのを見たのだった。

ファルマがユーゴーを牽制して宮殿を去り、馬を走らせド・メデシス家へと戻る途中、背後をつけられていることに気付いた。そのまま家へは戻らず、帝都郊外の荒地へと馬を走らせる。

ファルマが振り返ると、仮面の男が馬に乗って尾行していた。

その正体は、もうファルマの知るところだ。

「仮面を取ってはどうか、尊爵様。隠さなくてもわかっています」

手っ取り早く、ファルマは仮面の男に呼びかける。

「錬金術師エルメスは、あなたですね。もう、こんなことはやめたらどうですか？」

全てを見通したかのようなファルマの口ぶりに、ユーゴーは豹変し、邪悪な微笑を向けた。

「やれやれ。余計な首をつっこまなければ、よかったものを……もはや生かしてはおけなくなった」

ユーゴーは晶石の3つついた金の杖を抜いた。ユーゴーの神術使いとしての腕は、上々だ。

彼の行動に呼応し、ファルマも薬神杖を抜く。

ファルマの手に、すらりとしたフォルムの美しく透明な杖が握られた。それを見たユーゴーは後ずさりする。

ファルマは常に薬神杖を帯びていたが鞘に入れており、宮廷で杖を抜いたことはなかった。

「何だ、その杖は……！ 薬神杖……なぜそれがここにある！？

人間には触れられん杖のハズだ」

「おや、ご存じですか」

ファルマはくるりとそれを回転して見せびらかす。

宮廷薬師ユーゴーの守護神は薬神、それだからか、薬神の薬神杖を知っていた。

もし、ファルマが薬神の聖紋の刻まれた腕を見せたら、その意味を知るユーゴーは悲鳴を上げてひれ伏しただろう。

「私も知っていることがありますよ」

ファルマは一呼吸置いた。

「この杖の晶石と同じ硫酸湖の底の晶石には、死者の魂が封じ込められている。それを発見したあなたは、晶石を溶かして猿に死者の魂をとりつかせ、ホムンクルスなどとうそぶき、多くの人を騙した。また、豊富な知識を悪用して、生活に困窮している平民錬金術師を相手に詐欺を働いた。……違いますか？」

ユーゴーからの反論はなかった。

多少かまをかけてみたところはあったが、ある程度凶星だったようだ。

「どうしてあんなことをしたんです？ あなたの詐欺のために、大事な部下も一人失ったでしょう」

「部下？ あれは生きた死体だ。もともと死んでいたのだ、構いません」

ユーゴーはファルマに杖を向ける。

（生きた死体？ どういう意味だ？）

あの女錬金術師に体温はあったし、息遣いもあった。死体でも悪霊でもなかった。どういう意味なのかと、ファルマは勘ぐる。

「ワシの崇高なる計画を、お前などに分かってたまるか……」  
そして、怨恨というものを噛み殺したような声を出した。

「お前などに分かってたまるか！ ファルマー！ お前などに  
ーッ！！」

目を剥き、口角泡を飛ばしながら絶叫する。

温和で上品な紳士だったかつての宮廷薬師の姿は見る影もなかった。憎悪にとりつかれ我を失った、哀れで醜い男がそこにいた。

（完全に逆恨みだな）

ファルマは、薬神杖を手にもわりと浮遊した。と同時に、普段は抑え気味にしていた神力を半分ほど解放する。場には瞬時にして神力だまりが発生し、神力の渦を作った。

雷鳴が轟き、暴風に揉まれ、大気が震える。

「水の槍……」

格の違いを思い知ったのだろう、恐慌状態になったユーゴーが神術を放とうとしたが、ファルマの神力に押しつぶされ、神力を杖に呼び込むことすらできず、発動すらしなかった。ユーゴーは水属性神術使いだ、同系統の術を使うことで、ファルマに力を喰われてしまった。

ファルマはわざとらしく大きな動作で薬神杖を振る。杖を振り切ると、ユーゴーのすぐ傍を掠めるように、氷の柱が幾重にも空へと突き立った。だが、ユーゴーに氷柱は当たらなかった。

間接的に神力をぶつけられた圧力で、ユーゴーの杖は粉々に破壊された。

「どうした？ 撃てないのか？」

膝から崩れ落ちガタガタと怯えるユーゴーに、ファルマは上空から悠然と彼を見下ろし声をかける。手を出してはいけない相手だったと、ユーゴーは遅まきながら気づいた。

パニック状態になったユーゴーは、まだあまり帝国では出回っていないかったりボルバー式拳銃を取り出し、複数弾ファルマをめがけがむしゃらに発砲した。

（最新式拳銃か。大貴族が聞いてあきれな）

弾丸の軌跡は、ファルマの目にはやけに遅く見えた。

ファルマの神経伝達速度が、一気に加速しているのだ。

（受けるか）

貴族は、杖一本あればそれで戦う。

剣や銃はたとえそこにあつて、自分が瀕死であつたとしても絶対に使わないものだ。

エレンにそう聞いていたファルマは、ユーゴーを見損なう。

「やった……！」

思わずユーゴーが叫んでしまうほど、射撃は正確だった。三発がファルマの胸部に命中したかと思いきや、服に穴が開いたただけで、弾丸はファルマの体を貫通して無傷だった。

ファルマは全くガードをせず、神術も使わず全ての弾丸をその身に受けた。

速度と質量を持ってぶつかってきたものの、認識したものは半実体化することによって回避できる。そんな、自らの体の特性を知っているからだ。

「お前は……何者だ！　ば、化け物か……っ！」

弾丸はファルマに当たっている。当たっているが倒れない。ぴくりもしない。

ユーゴーがようやく震える唇で紡いだ、罵倒にもならない言葉がそれだった。

「さあ、何者なんだろうな？」

自分が何なのかだなんて、ファルマにも分からないのだ。

「いくぞ」

ファルマが軽く指先をはじくと、ユーゴーの下半身を分厚い氷が覆い、土壌ごと凍り付き、まったく動かなくなった。悲鳴を上げてもがくユーゴーに、ファルマは浮遊しつつゆっくりと近づくと、薬神杖を逆手に持って振りかぶり、ユーゴーの恐怖心を煽って一気に杖を振り下ろした。

刺される……と察知したユーゴーはガードも中途半端に、体をこわばらせ目を閉ざす。

しかし、死への一撃はなく、薬神杖はユーゴーの頭蓋を貫通していた。

「聖泉の衰涸」

ファルマの声がユーゴーの脳内に響き、杖で脳をかき回されたかのような感触がして、カチン、とユーゴーの体奥で何かが閉ざされた音がした。神脈の閉鎖は無詠唱でできるのだが、何をしたか分からせるために、ファルマは敢えて発動詠唱を発音して彼の耳に刻み付けた。

そのまま、ファルマは彼に囁くように話しかける。

「お前の神脈は俺が閉じた。詐欺被害者に賠償をし、二度と詐欺をしないのであれば罪は不問にし、もう一度神脈を開いてやる。さもなければ、お前は破滅だ」

そう言い終えると、ユーゴーの半身の凍結を解除する。

「ひ……い」

子どもとは思えないほどの絶対的な威圧と強制力を含んだ言葉に、ユーゴーは歯の根が合わず、失禁していた。ファルマは彼を荒野に残して馬に乗り、屋敷へと帰って行った。

結局、ユーゴーはまったくの無傷だったが、精神的には深刻なトラウマを負った。



その後、帝都で錬金術勉強会は二度と開催されることなく、エルメスという錬金術師は闇の中に消えた。ファルマにやりこめられたユーゴーは、財産を切り崩し錬金術師たちに賠償をした。尊爵家の財力をもつてすれば、錬金術師から集めた金は大した金額ではなかった。錬金術師たちは、差出人不明の金塊を受け取り、たいそう喜んだという。

言った通りにしたので、そろそろ神脈を開いてやろうかとファルマが考えていたところ、それから暫くもしないうち、ユーゴーは女帝に宮廷薬師を辞退する旨を告げ、バツジを返却して領地へ逃げ帰った。

この間、ユーゴーはファルマから徹底的に逃げ続け、一度も顔を合わさなかった。廷臣たちに聞けば、宮廷でファルマの名が出ようものなら、奇声を上げてどこかへ走り去ってしまったという。廷臣たちの間では、尊爵はファルマへの嫉妬のあまり発狂してしまった、ということになっていた。

その頃には、ピエールの火傷は癒えて元気に営業を再開した。

「やつちまった……」

多少、脅しすぎてしまったかなとファルマは猛省した。神脈を閉じたままだと、領地に戻ってもすぐ神術が使えなくなったことがバシテ大貴族の地位を追われて困るだろうし、あの精神状態では平民の薬師としても再起不能だろう、そう思ったファルマは、

「もう牙を抜かれて反省してるだろうし、神脈開きがてら訪ねてみようか」

また、あの場では明かされなかったユーゴーの本当の目的も気になるところだった。

そこでファルマは、慰問を兼ねてユーゴーの領地を訪ねてみることにした。

#### 4章15話 賢者の石の真相へ

ド・メデイシス家でのある日の夕食後。

ファルマがパツレと共に担当患者の症例検討をしていると、ファルマはブリュノの執務室に呼び出された。

「何だろう」

「どうしたファルマ、何かやらかしたか？」

パツレに冷やかされ、ファルマは首を捻りながらブリュノの部屋を訪れる。

「お呼びでしょうか、父上」

ブリュノの表情は険しかった。

「トレモイユ尊爵が宮廷薬師を辞したそうだが、お前がやり込めたのか？」

ブリュノはじつと、ファルマの言葉を待ちながら彼を一瞥する。

ファルマとしてはユーゴーが襲撃してきたので返り討ちにしてやっただけだ、と言いたいところだが、言葉を濁す。

「さ、さあ……どうでしょう」

心当たりありません、とは言えなかった。

だが、その様子から背景を汲み取ったのか、ブリュノはファルマに諭して聞かせた。

「多くの薬師が認めるよう、お前の薬師としての知識と腕は一人前かそれ以上だ。陛下の覚えもめでたい。だが、たとえお前のいう事が正論だったとしても、宮廷では必ずしも正論を振りがざすことがふさわしいとは限らん。お前はまだ人間としては常に半人前と心得よ。特に、絶大な政治的影響力を持つ尊爵家を敵に回したのであれば下策の極みだ」

「はい。仰る通りです」

ファルマはブリュノの言葉を素直に聞き入れる。ユーゴー引退の裏で、ブリュノに迷惑がかかったのだろくな、とファルマは察する。宮廷薬師が自主的に引退という例は今までになかったため、ブリュノの陰謀なのでは、という疑惑もほうぼうから向けられたことだろう。

「少々腹に据えかねることがあったとしても、宮廷人とは争わぬよう。恥をかかせたり、手ひどく批判したり、むやみに排してはならん。争えば敵をつくり、回り回って足元をすくわれる。特にお前はまだ子供だ、不遜な口を利くものではない」

「肝に銘じます」

何があつたか洗いざらい話せば、ブリュノの態度も違うだろうし、ファルマの行動に理解を示してくれるだろうが、ブリュノがファルマのゆきすぎを案じていたようなので、素直に受け入れる。

「トレモイユ尊爵には私が詫び状を送っておく」

普段は寡黙なブリュノに灸を据えられ、もともと予定していたことだが、ファルマは早めにユーゴーのフォローに回ることにした。

… … …

「ファルマ様、誰に手紙書いておられるんですか？」

そんなこんなあつて薬局での休憩時間、珍しく熱心に手紙をしたためていたファルマに、ロットがお茶と菓子を出しながら悪気もなく宛先を尋ねる。

手紙は、伝書鳩が使えない地域に送るものだ。

鳩の帰巢本能を利用した伝書鳩は基本的に一方通行なので、頻繁に行き来をしている相手先にしか使えない。さらに、一回飛ばした伝書鳩は自分で発信先に戻ることはないのです、手紙の方が便利な場合もある。それにしても、手紙は珍しい。

「ファルマ君が、手紙ねえ……」

エレンも首をかしげる。

「ユーゴー尊爵のところに行こうと思うから、予告しようと思って、エレンには一部、事情を伏せてユーゴーとの顛末を伝えていた。

「そんなにこてんぱんにファルマ君にやつつけられちゃったら、訪ねて行っても怖いと思うわ……追いうちに来たかと思うし」

しかしファルマは特に気にするそぶりもなく、

「そう思っで、手紙を出すんだよ。別に身構えなくていいからっていきなり行くと驚くかと思っで」

ファルマのファの字すら出るとパニックに陥ると宮廷人から聞いていたので、ファルマなりの氣遣いだった。

「驚くっでいうか、それ逆に脅し以外の何物でもないわ」

あまり悪びれている様子のないファルマに、エレンはぼそつと呟いた。

「私もついていくわ。敵の本拠地に行っで何が起こるかわかったものじゃないし」

（うーん。エレンがついてきた方が危ないと思っただけど）

ファルマはエレンの同行を足手まといだとは思わないが、エレンに危険が及ぶのは避けたいところだ。

「相手はもう神術を使えなくなっでいるから、心配いらないよ」

ユーゴーのように神術に頼りつきりだった神術使いが神術を奪われてしまうと、平民の兵士以上に何もできないものだ。ましてや、ユーゴーは体力の衰えてきた中年男性、危機を察すると感覚が鋭敏になり思考の加速化するファルマと比べると、実力差は天と地の差だった。

「でも、物理的な攻撃を仕掛けられたらどうする？ 銃撃とか」

「これ見てよ」

ファルマはエレン以外誰も見ていないことを確認すると、持っでいたペン先を自身の腕に勢いよく突き立てた。だが、そのペン先はファルマの腕を貫通して机に刺さった。

「ひっ！？　どうなってるの！？　あなたの体」

「どうなってるんだろうな」

こっちが聞きたいぐらいだよ、というのがファルマの本音だ。ファルマの体は実体のようできて実体ではないので、物理攻撃はすり抜ける。

「そうは言っても、油断大敵よ。心配だわ」

エレンは心底心配をしているようだった。それを読み取ったファルマは、

「ありがとう。じゃ、ついてきてもらおうかな。ところで一つ聞いてみるんだけどエレンって、高いところ得意？」

「どういう意味？」

エレンは嫌な予感がして顔が引きつった。

「一応聞いと思うて」

そこはかとなく、同行すると言ったことを後悔したエレンだった。

「きゃー！　やっぱりこういう意味だったー！？」

翌日、二人は澄み渡る青空のさらにその上空を猛烈なスピードで飛翔していた。

ファルマの背後では、エレンの悲鳴が上がりっぱなしだ。エレンは薬神杖に直接触れられないが、エレンはファルマの肩につかまって、薬神杖に二人乗り状態で飛行していた。

「おろしてー！　落ちるー！」

二人きりで空中デートという雰囲気でもなかった。

「もうおろせないよ。低速で飛翔してるんだけど、速く感じる？」

ファルマは飛翔には慣れたもので、スピード感覚が常軌を逸していた。

「ひい　っ！」

「まあ、もうちょっとだから我慢してよ。しっかり俺の肩に掴まってて、下見るのが怖いなら上を見てたら？」

エレンがひいひい言うのを聞き流しながら、地図を見ながらユーゴの領地まで直線距離で飛翔し、二人は目的地付近に到着した。人目を盗んで地上に降り立つと、エレンは「き、休憩……」と掠れた声を出し、へたり込んで神術で水を出し、渴いた喉を潤していた。

水の神術使いの水分補給は自給自足だ。

そんなエレンを横目に、城の外観を見てファルマが一言。

「モンサンミッシェルかよ……なんだってこんな海上に」

ユーゴの居城は、まさにそれを彷彿とさせる海上要塞だった。海上に浮かぶ小島を要塞化して、高い城壁で周囲を固めている。中に聳える城部分は複雑に入り組んだ高層建築だ。

城壁には砲門も見える。出入口は、陸から続く幅広い巨大な正門一つのみ。

「水を臨んだ立地にするのは、防衛のためよ。水の神術使いは、水の神術陣で防御態勢を敷くからよ」

エレンが水を飲みながら説明する。

そういえばド・メディシス家の屋敷も河に面していたし、薬草園は河の中州だったな、とファルマは思い出す。

「神術陣って何？」

説明しなかったかしら、とエレンは神術陣について教えてくれる。詠唱と神力を図形や文字に込めておき、発動条件を設定しておく自動的に発動する神術だという。

（魔法陣みたいなもんか）

と、ファルマはざっくり理解する。

「あらかじめ神術陣を敷いておくと、正門から入ってこない侵入者を見つけた時、自動的に水属性神術で攻撃するの。ド・メディシス家のお屋敷にも敷かれているわ」

「そうだったのか。便利だな」

（サロモンさんたちが使ってたやつの変種か）

そういえば、異端審問官であったサロモンたちと最初に出会い戦闘になった時、後に破邪系と判明した神術封陣のトラップをいくつか仕掛けられたのをファルマは思い出した。

「じゃあ、正門から行く？」

侵入を試みてわざわざ神術陣に引っかかるのも無様だ。

「それしかないわね。そうしないと神術陣の餌食になるわ。ところでファルマ君の送った手紙より、私たちが早く着いちゃったりしてない？」

帝都では国営郵便事業が行われていて、手紙は配達人によって朝に配達される。

大貴族専用の特急郵便で送ったので、配達時間は正確に計算できた。

「俺の計算だと、手紙を読み終えたちよつとあとぐらいだよ」

「ユーゴー尊爵の逃げる暇を与えないってことね」

エレンはファルマの抜かりなさに背筋が凍った。

二人は、怪しまれないよう水上要塞の正門へ徒歩で近づく。

ファルマは城に近づくにつれ、何か得体のしれない嫌な気配を感じた。

（気になるな、この感じ。どろつとしてる）

そんなことを考えながら、ファルマは槍を構え直立不動の門番二人に先に声をかける。ユーゴーの城は厳重警戒中のようで、城壁の上には多くの見張りがいた。

「こんにちは。お手紙は差し上げたのですが、突然の訪問で申し訳ありません、私は宮廷薬師のファルマ・ド・メディシスと申します。トレモイユ尊爵にお会いできますでしょうか」

「城主はただいまご不在にてございます」

門番たちは少年が宮廷薬師と聞いて驚き、丁寧な対応で応じた。「わかりました。いつお戻りですか？」

「長期になるとしか、うかがっておりません」

長期不在だというので、ファルマは一旦引き下がるそぶりをする。  
「仕方ないですね、また出直してまいります」

心なしか門番がほっとした顔になった時。ファルマは僅かな物音を聞き分け、高くそびえ立つ城を見上げていた。

そして薬神杖に神力を通じ、エレンの手をとる。

「どうしたの？」

エレンがファルマに耳打ちをする。

「なんだ、いるじゃないか」

ファルマはエレンを連れ、半開きになった窓からユーゴーの居室へとひとつ飛びにして舞い込んだ。あまりに速くて、門番には何が起ったのか見えなかった。

「今、何が起った？」

二人の門番は顔を見合わせた。

「うわあああー！ー！！」

そのころ、思わぬ距離からファルマたちに急襲されたユーゴーは立ち上がって奇声を発し、部屋の壁に走って行って衝突して倒れた。  
「ごきげんよう、トレモイユ尊爵」

ファルマが声をかける。ユーゴーは逃げ出そうにも、ファルマに出口扉の前に立たれて逃げ道をふさがれてしまった。

「な、何故ここが分かった！」

ユーゴーはファルマの姿を見るだけで既に涙目だ。

「手紙で予告した通り、伺っただけです。窓を開けて見ていましたね。居留守を使うなら私を見ないことです、視線で気付かれますよ」  
ファルマはブリュノの忠告を念頭に置き、以前のことは水に流してユーゴーに丁寧な言葉で話しかける。

「そ……そんなことまで、わかるのか……」

恐怖の元凶を前に、ユーゴーは返す言葉もない。

そしてエレンは、ユーゴーを相手にまったく引けを取らないファ



ルマの度胸におそれいる。

「……このうえワシに何をしにきたというのだ！」  
額にたんこぶをつくったユーゴーは、頭を抱えて震えていた。

さすがに気の毒になったファルマは、「手紙にも書きましたが、今日は怯えなくていいです」と前置きして、言葉をかける。

「あなたが騙した錬金術師たちへの弁償を済ませたことは知っていますのでそれでよしとします、陛下に申し上げるつもりもありません」

精神的にやられてしまったと噂されるユーゴーを案じて見舞いに来た、それは本当だ。診眼に問うと、ユーゴーの脳には青い光がともっていた。

## “急性ストレス障害”

ファルマの予感的中した。

一番懸念していたことであるが、ユーゴーは急性ストレス障害を発症していた。

急性ストレス障害とは、強い心的外傷を受けたあとにあらわれる、体験のフラッシュバックや回避行動、過覚醒などのストレス反応である。彼はファルマを見るとパニックを起こし、深刻な不眠に陥っていた。この状態が長く続けば、PTSDに発展する可能性もある。自業自得というところまでも、ファルマは再起不能になるほど懲らしめようと思っていない。

ユーゴーの薬師としてのスキルは無視できないものだった、一度引退した以上宮廷薬師には戻れないが、ここで完全にリタイアさせるのは惜しい。

「もう、頼むから許してくれ……」

これ以上どうやって許しを乞えばいいのかと、ユーゴーは涙ながらに降参する。これをネタに一生強請られるとでも思っているのだ

ろうか、ファルマはそう思うとげんなりだ。

「今日は、そろそろ懲りたでしょうから、神脈を開く頃合いかと思っただけです、神力を失ったことを周囲にいつまでも隠し通せはしないでしょう」

それで、門番にすら実情を伏せて城内に引きこもっていたのだらう。

「どうしても聞いておきたいのは、何のために詐欺をしたんです？ 真相を話していただければ、神力を開きますよ」

ファルマは交換条件をもちかけた。

「……賢者の石のためだ」

「賢者の石なら、偽物だったでしょう」  
エレンがすかさずつつこむ。

「賢者の石を合成した者がいないか、見極めたかった」  
ファルマがユーゴーから聞き出した話はこうだった。

まず、帝都中の錬金術師たちの間に賢者の石を合成したというホラ話を吹聴する。すると賢者の石に興味がある有象無象が一堂に集まる。もし真に賢者の石を合成したことのある者がいるのなら、錬金術師エルメスの手にした賢者の石は偽モノだと見破ることができ、その見破った人間に接触する、ということだった。

（意味わかんないな。でもそれって……）

「何でそんな迂遠なことをして賢者の石を合成した錬金術師を探していたんですか？ 賢者の石が実在するとも思ってるんですか？ ますますもってファルマは困惑する。」

「賢者の石の合成は可能だ。ただ、合成には大いなる危険を伴う」  
ユーゴーは確信めいた口調で断定し、手近にあったワインを瓶ごとあおった。

今度ばかりは、嘘を言っている口調ではなかった。

#### 4章16話 不老不死への道（前書き）

本日は2話あります。前話がありますのでご注意ください。

#### 4章16話 不老不死への道

ファルマとエレンは固唾をのみ、ユーゴーの話に耳を傾ける。

「錬金術師の間で語り継がれてきた賢者の石の存在については、当初はワシも懐疑的だった。だが、あの地底湖の底にあった晶石を見て、考えが変わった」

ユーゴーは知り合いの帝都の地主が、建材を急激に腐食させる呪われた土地があると話していたのを聞いて、興味本位でその土地を買ったという。

そして地下に何かがあるのではと地面を掘り進めて硫酸の湖を見つけ、その時に晶石やクリスタルの層を発見したのだそうだ。

（それだけでも大発見だよ）

ユーゴーの所業は悪どいが、功績としては評価できる。

「あれは死者の記憶が入っている特別な晶石、賢者の石の前の段階の物質だ。晶石を砕いて神術の炎で燃やしそれを生きた死者に吸わせれば、その記憶は死者の中で再生される、お前が見破った通りだ」  
「なるほど……よくそんな性質を見つけましたね」

「ワシが見つけたのは偶然だった、だが以前から発見され、錬金術師の間で細々と語り継がれていたのだろう」

ユーゴーがホムンクルスと称したものはファルマも見た。  
人の意識が乗り移ったとしか思えなかった小さな猿。

そして、地底湖に落ちて死んだ女もまた、生きた死者だ。

「生きた死者のほうはどうやって作ったんです？」

おぞましさに身震いしながら、エレンが尋ねる。

「作ってはいない、つてを通じて集めさせたのだ」

「そうか。脳死や植物状態の人を……」

ファルマはぴんときた。

「脳死？ それは何だ」

ユーゴーは脳死という言葉こそ知らなかったが、原因不明の昏睡状態に陥った者だと説明するとそうだと認めた。宮廷薬師であるユーゴーをもつてすれば、帝都の情報網から昏睡状態になった人間の情報を得るのは容易だ。ユーゴーは回復の見込みがないことを患者の家族に伝え、引き取ったとみとめた。

「そして晶石の記憶を得た死者は、不死と化するのだ」

ユーゴーは陶醉気味に語る。

「お言葉ですが、あの女性なら、地底湖に落ちて亡くなりましたけど」

エレンが話のコシを折り、間髪容れず指摘する。

「あれは時間切れだ。記憶を入れたばかりの死者であれば、死ぬことはなかった」

（死者が死なないとか……あ、俺の状態か）

薬谷完治という死者の記憶＋仮死状態となったファルマ少年の体から成り立ち、

物理攻撃、薬物で死なないという性質を持つ。それが今のファルマだ。似ていなくもない。そう考えると、ユーゴーの言っていることは部分的には間違っていない。

「お前は知っているのではないのか」

ユーゴーはそう言ってじろりとファルマを睨む。

物理攻撃の効かなかったファルマを、生きた死者なのではないかと疑っているようだ。

「ファルマ君はそんなじゃないです」

エレンが、相手が尊爵にもかかわらず憤然として否定する。

「晶石に封じられた死者の記憶は長くもたん、もって三日だ。あの女に宿らせた記憶は、もうすぐ消えるところだった」

死者の記憶は数日で体から出ていき、体は元の状態に戻るというのだ。

ユーゴーは膨大な試行錯誤の末にそこまで突き止めていた。

（この人、尊爵の称号は伊達じゃないな。非人道的な実験だけど）  
「大量の晶石から賢者の石ができる、という錬金術師の間に伝わる古文書がある。ならば賢者の石を合成し、記憶を賢者の石に封じ、生きた死体に宿らせれば」

ユーゴーは興奮したのか、ドン、と拳を机の上に叩きつける。

「不老不死は可能だ」

ファルマは、定番の話だなと思いながら聞いていた。

それは、富も名声も得た権力者が最後に追い求めるものだ。

「そう……可能な筈だった……」

ユーゴーは苦々しく呟いた。

（つまり、晶石を賢者の石にする方法は見つからなかったってことだよな）

ファルマは察する。

「話してくださったので、約束を守りましょう。目を閉じてください」

ファルマがユーゴーに近づくと、ユーゴーは後ずさる。

「何をするつもりだ！」

「さっき言った通り、神脈を開くだけです」

ファルマはトラウマを悪化させないよう、薬神杖を見せないように目を瞑らせて、薬神杖をユーゴーの胸部に突っ込み、発動詠唱もせずさつさと神脈を開いた。

が、ペナルティとして開いた神脈はごくわずかで、強力な神力は与えないようにしておいた。

あくまで、貴族を追放されないだけの申し訳程度にだ。

神力が皆無でなければ、貴族としては一応認められる。

「あ……ああ……」

眼を瞑ったユーゴーに、杖が体内を通った感触はない。

「終わりました。前と同じにすることはできませんが、当面これでいいでしょう」

少ないながら神力がじわじわと回復してきたユーゴーは、やっと生きた心地がしたのだろう。大きなため息を漏らし、言葉もなく地面に伏した。彼は精も根も尽き果てたという顔をしていた。

傍から口出しもできず見ていたエレンは、いい年をした大貴族、それも尊爵を完全に屈服させるファルマにさらに閉口する。

「ファルマ君って、時々恐ろしいわよね……」

エレンはファルマだけは敵に回してはいけない、と自分を納得させるように頷く。

ユーゴーの告白は終わったように見えた。だが、ファルマはさらに追及する。

「それで、まだ話すことがあるのでは？」

「……な、何のことだ」

「この城の地下で何かやってますね。内心、あなたはその件で誰かに助けを求めている」

ユーゴーの肩がギクッと震えた。

「そうですね？」

ファルマはたたみかける。ファルマは城の地下深くに眠る、恐ろしい気配の存在を気取っていた。

それは、悪霊に似た質感でありながら、もつと生理的な嫌悪を催すものだ。ファルマがユーゴーの城に足を踏み入れた時から気付いていたもの。

「賢者の石を造ろうとした実験の過程でできたものでしょうか。あ

れをあなたが制御できるんですか？」

「待て、あれは………触れてはならん！ その扉はもう開かん、二度と開かぬよう封印した」

ユーゴーはやましい部分を指摘され、狼狽しはじめた。

「これだけ外に気配が漏れてきてるので、中にあるものは封印されてないと思いますよ。悪霊に似た、いやもっと邪悪な気配を感じますしね」

臭いものにふたをして問題を先送りしているにすぎない、とファルマは厳しく指摘する。

「ええっ、この城にいるの?!」

エレンは肩をこわばらせ、ぞくつとしたようだ。

「あれはどうにもならんのだ」

無数の晶石から抽出した記憶を蓄えていた容器の中で、ある日何らかの反応が起こり、ある時から制御できなくなつたという。

既に手に負えない状態になりつつあるようだ。ただでさえ暴走気味だった記憶の塊が、ファルマに神脈を止められていた間に更に不規則に融合し制御が緩んだのだという。

「あなたが片づけられないのなら、俺が終わらせてきます。ここで待つててください」

「まっ、待て！ あの容器を破壊してはならん、合成霊は生きた人間にも憑依する！」

（まさに悪霊じゃないか……）

ますますもって、放っておくわけにはいかない。

「ちよつと、ファルマ君！ 危険よ！」

ファルマは宣言通りエレンとユーゴーをその場に置き去りにし、飛翔を使い一気に地下を目指す。

邪悪な気配を頼りに突き進み、行き止まりの大型の鉄扉の中の前に降り立った。

扉は中からの爆発などに備えた、耐圧性を持つと思しき頑強な造



りだった。

ファルマは診眼を使って扉の向こう側を透視する。

（やばそうだ）

「疫滅聖域」

ファルマは手にした薬神杖で、扉ごとに疫滅聖域をかける。悪霊らしき気配はファルマの聖域に反応しやや収縮した。その隙にファルマは頑強な鉄扉に向かって全力で走り込み、三重扉をすり抜けて内部へ潜入する。エレンとユーゴー、そして使用人たちが追いかけてきたようだが、人間には誰も扉をすり抜けて中へは入れない。エレンがファルマの名を呼ぶ声が、扉越しに聞こえる。

その先に何があるうとも、ファルマは恐怖を感じなかった。ただ、内部にある禍々しいものを、決して外に出してはならないという思いが勝っていた。

そこは地下洞を改装した広いユーゴーの地下実験室で、呪術めいた錬金術の実験道具であふれかえっていた。普段、宮廷で見るユーゴーが扱っている道具とはまるきり違う。濃く邪悪な気配が、薬品の刺激臭が充満している。

ユーゴーは宮廷薬師としての表の顔、そして闇の研究に魅入られた、生と死を弄ぶ錬金術師としての裏の顔を持っていた。

実験室中央には大小さまざまな晶石を集めた瓶、反応を続ける重金属などがある。その中でもひときわ目を引くのは、巨大な蒸留器の先に接続された、恐るべき大きさの筒状のクリスタル製透明容器だ。

その中に充填された不定形の赤黒い液体が、新たな生物のようにうごめいている。

それはひっきりなしに怨念を凝縮したようなおぞましい音を発し、脈々と悪意が渦巻いているようだった。

（これか……気配の元凶は）

分厚いガラスにはびつしりと神術陣が刻まれていたが、ファルマが素人目に見てもほころびは始めている。

（これを外に出したら、最悪な事態になる……）

黒死病をまき散らしたカミュに憑いていた悪霊。それを上回る邪悪な気配がする。

これをあとたった一日でも放置しておいては危険だ、とファルマは本能的に察知した。

「消し飛ばしてやる」

ファルマは薬神杖に、込められるだけの神力を込める。

極限にまで集中力を高め、歯を食いしばり、容器に傷をつけず杖を貫通させて流体を一気に砕いた。流体は人間の声に似た不快な絶叫を放ち、黒い蒸気となって一瞬にして蒸発する。

分解された黒霧は透明の液体となって、薬神杖の晶石の中に吸い込まれた。

（しまった！）

悪霊が杖に乗り移ってしまったか！

そう危惧したか、杖を振っても眺めてもいつもの薬神杖と変わりはない。

ただ、側面についていた晶石が一つ増えて六つになった。

「へ？」

素っ頓狂な声を出すファルマ。

晶石に封じ込められた記憶は、再び晶石になるのだろうか。

邪悪な気配はなくなった。

悲鳴に似たエレンの声に我にかえったファルマは、物質消去で内側から鉄扉を消し去る。外には、混乱をきわめたエレンとユーゴーらの姿があった。

「ファルマ君！ あなた一人で入って行って……無鉄砲すぎるわよ」

エレンがファルマに飛びついてきた。

「お前、正気か……！ 中のは？！」

無傷のファルマを見たユーゴーは、死者の記憶がファルマに乗り移ったのではないかと危惧した。

「この通り、消しましたよ」

ファルマは実験室の内部をあらためさせる。

人間の手ではどうにもならないものだと考えていたユーゴーは、茫然自失としていた。

「は……消えた………」

一瞬、心の緩んだような表情を見たファルマは、厳しい口調でくぎを刺す。

「いいですかトレモイユ尊爵。もう二度と、晶石の実験には手を出さないと約束してください。生きた人間が死者の記憶を弄んだから、こうなったんです」

ユーゴーは悪いことがすっかり消え、ただ力なく頷いた。

「……すまなかった。私の手におえるものではなかった……感謝する」

歪な過程を踏んだが、ユーゴーはこの悪霊をどうにかしたくて晶石の謎を知る錬金術師に助けを求めていたのかもしれない、そう思ったファルマだった。

「あなたは以後、錬金術ではなく薬学に専念することです」

不老不死に執着するのではなく、初心にかえり、人間の生と死を薬学を通して見つめなおしてはどうか。うなだれるユーゴーにファルマはそう伝えた後、

「それであれば、俺はいつだって協力します。あなたと対等な薬師

としてね」

ファルマはそう言い残し、エレンと共にユーゴ・の城をあとにした。

日もとっぷり暮れた帝都への帰り道。

薬神杖に乗ったエレンはもう、悲鳴は上げなかった。そして、

「星と月が近いわ。ありがとう、こんな景色を見せてくれて」

恥ずかしそうにそんなことを言って、ファルマの背中に顔を伏せた。

#### 4章17話 聖泉から原点へ

「今日はお疲れさま、エレン。寒かったと思うから、入浴して温ま  
って」

ユーゴーの城からエレンの屋敷に送り届けた頃には、深夜になっ  
ていた。

「エレンの家って門限あるんだっけ」

年頃の女性を深夜まで連れまわして悪いことをした、とファルマ  
は申し訳なく思う。そういえば、エレンの家庭事情をファルマは詳  
しく聞いたことがない。

「泊りがけの診療や実験もあるから、門限はないわ。ただ、ソフィ  
ちゃんが目覚ますといけないから、音を立てずに入らないといけ  
ないけど」

ボヌフォア家の門限は緩いようだった。

「ソフィは敏感だからな」

ボヌフォア伯爵家で養子にしたソフィについては、エレンが面倒  
を見れない時は専属の乳母がついて面倒を見てくれているという。

「ファルマ君も今日はお疲れさま。しっかり休んでね……つくし！」  
エレンからくしゃみと鼻水が出た。

季節は四月で、それほど寒くはないのだが、上空を飛んだことで  
体の芯まで冷え切ったエレンである。彼女の眼鏡は真っ白に曇って  
いた。

「ファルマ君はいつも空飛ぶ時、寒くないの？ 薄着よね」

「うん、寒いといえば寒い気もするけど、別に……」

そういえば、ファルマは飛翔している間の寒さについては気にな  
らなかった。

寒すぎるという、エレンの反応が普通なのだ。

「風邪ひかないようにね、おやすみ」

風邪とは無縁のファルマは手を振って、エレンの屋敷をあとにした。

エレンを下ろすと、実体があるやらないやらのファルマはいっそう軽やかに飛翔できた。

晶石の増えた薬神杖は絶好調だ。パワーアップしているような気にさえなる。

（俺には分からないことだらけだけど……ひとつ、今日中にはつきりさせておくか）

もう、とつくに屋敷の人間は寝静まっている時間だ。ド・メディシス家の就寝時刻は早い。遅くなるかもしれないが、心配しないでくれとはロツテに伝えていた。なのでファルマはそのままド・メディシス家へは戻らず、聖泉のあると思しき方向を目指すことにした。かといってやみくもに探すのではない。あてはあった。

ユーゴー尊爵からいくつかの聖泉に関するヒントを聞いたのだ。長年にわたり錬金術師の間で伝わる古文書を紐解いて確実な情報を集め、さらに神術にも詳しいユーゴーの知識は地に足がついていた。聖泉かもしれないという予測のもとに、ユーゴーが印をつけた地図をファルマは平和的に借り受けた。決して脅し取ったわけではない。

その地図と、帝都の地下洞窟の底で石板と秘宝が光線で示した方角を頼りに、絞り込んだ三か所の場所をあたる。

一か所は数々の伝説のあるいわくつきの場所。だが、晶石の層のないただの酸の泉だった。

もう一か所は山中の濁った沼で、底には大量の人骨があったが、聖泉ではなさそうだ。

ファルマは最後に、帝都から最も遠い、切り立った台地の中央に位置するその場所にやってきた。

台地全体は雲で覆いつくされ、人の目から隠されているようだ。生物の気配はなく、風の音だけが不気味に聞こえ幽境という言葉がしっくりくる。あまりに断崖絶壁なので、人間には辿り着けない場所とされたのも確かに頷ける。

ファルマが台地に降り立つと、台地を覆い隠していた分厚い雲の層はかき消えた。

「お。探しやすいな。……あれか？」

ファルマが見つけたのは、井戸を少し大きくしたような、見逃すほどの小さな泉だった。

ファルマの神力を受けてか、泉の底が輝いて反射している。晶石の層がある。

「これが聖泉か……」

と、ファルマは水面を覗き込む。

「また、硫酸湖じゃないよな」

泉になみなみ湛えられていたのは、硫酸などではなくただの水だ。前回のようには泉の番人の怪魚もいない。だからといって、怪しげな水の中に入るのはためらわれた。

「“水消去”」

そこでファルマは以前と同じように、泉から水を消し去る。

薬神杖で浮遊しながら泉の底をあらためると、帝都の地下で見たそれと同じように、分厚い晶石の層があった。

湖の底にはやはり、おなじみの石板が見えた。

（あつた！　なんて書いてある？）

石板の文字を読む。

【ここは聖泉、異界の扉の真裏。天をみよ】

ファルマの判読できる言語では、その一言だけ。その他にはファルマの知らない言語でつらつらと説明のようなものが刻まれている。大秘宝と呼ばれるファルマの生前の職員証を近づけると、石板から白い光があふれ、その光は一直線に天を指した。

（今度はどこだ、どこを指した！？）

とファルマは期待を込めて夜空を見上げる。

「何も……ないじゃないか」

収穫のないままふらふらと屋敷に帰り着くと、朝になってしまった。

（まずいぞ、朝帰りだ）

「おかえりなさいませ、ファルマ様」

ファルマが忍び込むように屋敷に戻ると、きちんと身支度を整えたロッテ、そして起き抜けのブランシュと玄関で鉢合わせた。

（うわぁ……）

三人の間に、気まずい空気が流れる。

しばしの気まずい沈黙のあと、口を開いたのはブランシュだった。「あにうえー、どこいったのー？ 待ってたのに遅いのー。昨日は一緒にお風呂入る約束してたのにー」

ブランシュがぬいぐるみを両手に抱えながら上目遣いで甘い声を出す。ファルマが帰ってこなかったのが気に入らない様子だ。

「そんな約束してないだろ！？」

変な話をしないでくれ、とファルマはロッテの視線を気にしながら赤面する。そのロッテはロッテで、

「ファルマ様はエレオノール様とお泊りだったのですか？ あっ…

…なんでもありません」

前日にエレンとファルマが二人で出かけて行ったのを見たロッテは、詮索しすぎたことに気付き、恥ずかしそうに俯いた。



「まあ、ちよつとね。ユーゴー尊爵の領地に出かけていたんだよ」  
ロツテに心配をかけてはいけないと思いつつも、全てを隠してしまつと余計に心配させてしまつと考へたファルマは、言葉を濁すにとどめた。

「あつ。そ、そうですね。失礼いたしましたっ!」

ロツテの視点では、ファルマと二人でお泊りデートに出ていたように見えたのだ。

お泊りで何をするのかはロツテには想像できないが、エレンとの親密ぶりを見せつけられることになった。

(あーすごい勘違いされてるなー)

ファルマが白目になっていた微妙なタイミングで、パツレも起きてきた。

「おやおやおや。どうしたんだ、ファルマ。お前もいつちよまえに朝帰りか？ まさかエレオノールと何かあつたんじゃないだろうな。やめておけ、エレオノールなんか」

パツレは意味深な言葉を発する。やはりエレンとパツレは犬猿の仲だ。

「何もないって！ あるわけないだろ!」

「何故そんなに必死に否定をする。余計に怪しいぞ……ん？ お前」  
茶化していたパツレは、ファルマの神力に変化が生じたことを見抜いたようだ。

「お前、ちよつと雰囲気が変わつたな」

ユーゴーの城の地下室で、大量の晶石の記憶を相手にした時を境にだ。

「そう？ 気のせいだよ。エレンとは深夜に別れて、その後は一人で探し物をしていたんだ」

ファルマは誤解のないよう正直に打ち明けた。

「なんだって夜中に、そんなに大事なものだつたのか？」  
パツレが苦笑する。

「探し物は見つかりましたか？」

ロツテがきょとんと首を傾げる。

「見つからなかったよ」

がつくりとした様子のファルマを見たロツテは、にっこりとほほ笑む。

「明るくなってから、ファルマ様が探した他の場所も探してみましよう。私でよければお手伝いします。探すの、得意なんです」

ロツテは、ブランシュのなくしたものをあつという間に発見する特技を持っていた。ロツテの言葉には説得力がある。

（そうか……時間をずらせば、違うものが見えるかもしれないな）  
ロツテの言葉に、ファルマは諦めるのはまだ早いと気を取り直した。

「まあなんだ、あんまりフラフラして家族を心配させんな、な？」

パツレはロツテやブランシュの思いを代弁する。

「ごめん」

それを重く受け止めたファルマは、悪びれる。

「私は、ファルマ様が無事に戻ってきてくださったてよかったです」

ロツテはファルマによりいつそう明るい笑顔を向けた。その笑顔にファルマは今日も癒される。ファルマを質問攻めにしたいだろうに、彼女は黙って受け入れてくれる。いつだってそうだ。

（俺の居場所はここだな）

ここにいていいのだと言われたような気がした。

翌日、ファルマは休日だったのでまだ日が高いうちに、聖泉を再訪問してみた。一緒に探してくれると言ったロツテも連れていきたかったが、ロツテには飛翔ができるということを明かしていないので、驚かせてしまう。悩んだ挙句、一人でやってきた。

昼食後一時間ほど飛翔をして、目的地にたどり着く。

一日経って訪れた聖泉には、また水がたつぷりと張られている。

「水が溜まるの、異様に早いな、水消……」

水消去と言いかけて、ロッテの言葉を思い出す。前とは違う方法を試すならば、水を消去しない方がいいのでは、と考え直したのだ。

「もしかして、水の中から違う景色が見えるんだろうか。光の屈折もあるしな」

ファルマはそうかと気付くと、濡れるのもかまわず、頭から水底へ潜った。

四苦八苦しながら泉の底へたどり着き、職員証を石板にかざす。

そして、石板の放った光を追いかけるように振り返り、水底からゆらめく青空を見つめてみた。

水面に、今ファルマが作ったばかりのさざ波が見えた。

そして 彼は見たのだ。

泉の水面に映り、ゆらめいていたもの。

彼の生前務めていた大学の、研究室の入り口の扉があった。

（えっ……？）

幻覚ではないかと、ファルマは目を疑う。

『異界の扉の真裏』という、泉底の石板に刻まれた文字の意味が理解できた。

ファルマは注意深く浮上し、水面に近づく。

（なんてこった…… ロッテに感謝だな）

泉の水面を、水を張った状態で、真裏から見なければ見えなかったものだ。

ファルマは水面に手を差し入れた。しかし、ファルマが手を伸ばして少しでも水面がさざめくと、異界の映像は消えてしまう。

（くそつ、もどかしい。どうすれば……）

そうだ。凍結だ、とファルマは思った。彼は素手で神術を使い、水面に透明な氷を張る。次は水面に氷が張った状態で、氷を壊さず裏側からアプローチをする。

これならば、もう水面は揺らめかない。彼は恐る恐る、右手を氷の表面に突っ込む。氷の向こうに、そして異界へとファルマの手は通った。

（抜けた！ 思ってみれば、氷の神術を使えないと入れないな……）  
水の神術を使える偶然は、この時のために用意されていた必然のようにも思えた。

その手で研究室のドアのレバーを引いてみたが、びくともしない扉に取り付けられた防犯のための電子認証装置が作動していた。

（まさか……こんなときのためのこれか！）

ファルマは職員証を扉にかざした。

ウィーン……ガチン。

機械的な音とともに電子錠が外れ、研究室の扉が中開きになる。

ファルマはそろりそろりと頭を突っ込み、半身だけ異界の扉の向こうへと入りこんだ。

遂に研究室の中に入り込むと、すぐに戻るように入った扉は開いたまま、ドアストッパーを噛ませる。これで、行き来はできるはずだ。

「俺は……夢を見ているのか」

カチツ、カチツ、研究室の中で時計が秒針を刻む音が聞こえる。

そしてファルマの視界に、見たくなかった光景が飛び込んできた。白衣を着た一人の男が、寝袋にくるまって研究室の隅のソファに寝ていた。

（いた……）

Ｔ大学薬学研究科 准教授 薬谷<sup>やくたに</sup> 完治<sup>かんじ</sup>、生前のファルマである。  
「おい、俺！」

ファルマは思わず男の肩に触れたが、男はファルマに気付かない。強く叩いても、びくともしない。目を開こうと瞼をいじっても頬をつねろうとしても肉をつまめず、ファルマは男に触れることも干渉することもできなかった。

ファルマは何とも言えない心境で男を見つめる。

（この俺自身に、ファルマは干渉できないのか……）

その男は自分でありながら、自分ではないかのようだ。

ファルマは薬谷のデスクに置いてある、日付付きの時計を見る。

日付は、彼の命日となったであろう日の当日。

午前三時五十分。

薬谷准教授は研究室で仮眠をとったまま、そのまま睡眠中に他界してしまうのだ。

この男が、もう二度と目を覚ますことはない。

だが、まだ生きていた。

ファルマは男が机の上に置いていたスマートフォンを取り上げ、外部と連絡が取れるかを試みた。

無常にも電波は圏外。飛んでいるハズのWi-Fiにもアクセスできない。

研究室内の固定電話も内線もつながらない。

PCは動くものの、やはり回線は途切れている。

ブラインド越しに見えた窓の外は、真っ暗だ。夜、ではない。そこは暗黒だった。

そこになければならない街の明かりすら見えない。

（異界なのか、ここは……）

ファルマは生前の記憶を手繰り寄せながら、研究室の中を見て回った。

室内はまったくあの時、最後に眠りにつく直前の状態のまま。稼働中の装置超低温冷凍庫のモーター音が耳に懐かしい。超遠心分離機はあと4時間連続稼働するはずだ。彼が最後にセットした大規模ゲノム解析装置のワークステーションが何台も稼働している。実験台の上に置かれた試薬類、積み上げられたノート。主亡きあとでも動き続けるであろう、無数の精密実験機器に囲まれた部屋。

研究室内の全てのものに、ふれることはできた。

今、これが夢であったとしても。この場でできることは何か。ファルマは口腔粘膜細胞を採取し、前処理をして全ゲノム情報解析装置にセットした。

まず、知るべきものは自分。

このファルマという存在が何者なのかを、現代科学の粋を集め、データにして暴き出す。

（くそ、データが出るまでに時間がかかる。扉はまだ繋がっているのか？）

彼は、ドアロックをかけた泉の入り口を見た。

ドアは先ほどファルマが開いたままで、閉まる気配はない。

彼はせき立てられるようにいくつかの試薬と、サンプル入りのチューブを冷凍庫から取り出し、発泡スチロールケースに入れた。次

に、この世界への縁ある人々への遺書をしたためようかと思案した時点で、

「うつつ、ぐううーっ！」

ソファに横たわる薬谷の呼吸が荒くなり、もがき苦しみはじめた。診眼をとおとしたが、この部屋の中ではファルマの能力は使えなかった。

遂にこのときが来たか、とファルマは動揺する。

（助けるべきか、どうする！？）

診眼に問えなくても、助ける方法はある。心肺蘇生（CPR）をしつつ、研究室内にあるアドレナリンを投与すればいい。

だが、ファルマに彼の心肺蘇生はできなかった。

全体重をかけて押しても、胸骨がへこまないのだ。さきほど試したように、やはり薬谷の肉体に、ファルマは干渉できない。薬剤を投与しようにも注射針も皮膚に通らない。それ以上の対処を施す猶予は与えられなかった。

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ……。

アラームが鳴った。深夜の実験中だった生前の薬谷が、仮眠のために午前三時四十二分の一時間後、つまり四時四十二分にセットしていたものだ。

それがけたたましく鳴った。

（四時……四十二分！）

……それを引き金にしたかのように、ファルマの意識は研究室の扉の外にはじき飛ばされた。

視界ごとホワイトアウトして、どれほどの時間が経っただろうか。気が付けば彼はもとの世界の聖泉に浮いていた。

「ああ……」

泉の表面に張られていたであろう氷は、すっかり解けていた。夢から覚めたのだろうか。それとも、こちらの世界こそが夢の世界で、ファルマはまだ夢を見続けているのか。彼は酩酊とする。意識を繋ぎとめ、状況を整理しようと努めた。

ふと、いつもより陽光を眩く感じて、手を太陽にかざす。

その時、研究室内から取ってきた試薬入り発泡スチロールケースが泉の水面にプカプカと浮いていることに気付いた。とっさに握ってきたのだろう。おぼつかない手つきでケースに触れる。

「夢じゃない……のか」

ファルマは一気に目が覚めた。そしてさらに、無意識に太陽にかざした手を見てはつと息を飲んだ。

異界を往復した代償なのか、ファルマの手は、聖泉に入る前より明らかに透けていた。

「……これは……」

ファルマはサロモンから聞いた薬神の伝説を思い出す。

先代の薬神は聖泉から天上の世界への出入りを繰り返すうち、ある日を境にそのまま戻ってこなくなったと。

（彼女は……、どんどん実体を失い、この世界から消えたんだろうか）

今のファルマになら、先代の薬神に何が起こったのか分かる。

「ここは、どこだ……この世界は、いったい何なんだ」

その答えを得るために、ファルマは泉から出た。

発泡スチロールのケースを目立つ場所に置くと、薬神杖一本を手



に天をめがけて飛翔をし、どこまでも昇った。

猛スピードで、垂直に、薬神杖に身を任せ空気がなくなるまで、空がやがて宙になるまで。宇宙に届く距離へ、ひたすら空を駆けのぼった。

凍てつく寒さが彼を襲い、彼の体表についた水滴が凍るが、彼の身は凍らず、酸素が薄くなっても息苦しくすらない。

息を肺の中から吐ききった。

空気を溜めたままこれ以上上昇すると、肺が破裂してしまう。そう考えたのだ。

だが、人間らしくそんな気を回している自分をファルマは滑稽に思った。

もう、とつくに人間ではないのに、自己防衛本能がまだ働くのだ。

生きた死者は死ないと、分かっているのに……。

（天辺まで行って、世界を見てやる！）

半分は八つ当たり。半分は現実逃避だ。ただただ何も考えず、もう戻れないのではと思うほど遠く高い場所へ到達した。

そしてファルマははじめて、その惑星の宇宙空間から地上を見た。分かっていたことだが、彼が見た青い惑星、それは地球とはまったく似ても似つかない、ファルマの知らない星だ。海洋の形も、陸の形も、彼の記憶にあった地球のそれとは違う。

（なんだよ、これ……）

宇宙と向かい合うことは、自己と向かい合うことでもある。恐ろしいまでの無音の中で、聞こえるのは体内の音だけだ。

何千年も、何万年もの時を超えたような、途方もない孤独を感じ

た。

そこから見える宇宙には、無数の星々がひしめきあっている。だが、どれだけ探しても、見渡す限りに太陽系の惑星はない。太陽に似た星があり、月があっても、似ているようで宇宙のありようはまったく違う。

極限の低温、そして猛烈な宇宙線の放射が彼を苛む。

太陽ではない恒星が、ファルマのいた惑星に影を作っていた。

（地球ではない。惑星だった……。でも、ならここは、どこだ）

これまで後回しにしていた大きな謎を、ファルマは改めて突きつけられた思いだ。

八方ふさがりになったような気がして、あらんかぎり無音の絶叫をしたあと、惑星の自転に置いてゆかれないよう、重力に任せてゆっくりと地上を目指す。

大気圏に入っても、ファルマの体は燃えたりしない。

この惑星を包む大気にすら、存在を拒絶されているような気がした。

近づいてくる地面を見据え、ファルマは落ちてゆく。

今は戻るしかなかった。

ファルマ・ド・メーシスとなった今の彼に、相応しい居場所へと。

#### 4章17話 聖泉から原点へ（後書き）

4章終了です。5章へお進みください。  
また、書籍一巻発売しました。

## 5章1話 ファルマと生殖機能検査

< i 1 8 0 5 7 9 — 2 4 9 6 >

ファルマが聖泉から戻って時は1147年5月になった。

ファルマはすっかり忘れていたのだが、最初の浴場オープンから遅れること半年、帝都の五つの浴場のうち一つがオープンした。黒死病を防いだファルマへの褒美として女帝が着々と建造を命じたものだ。

彼が招かれたのは、帝都のはずれの小高い丘の上にある露天風呂。見渡す限りに広がるのは、長い年月をかけ石灰質の沈着した純白の石灰華段丘。

そこへ豊かに温泉が湧き出してお湯が太陽光で真っ青に反射し、優美で壮大な光景を造り上げている。雨天に備え棚田の一部を覆うように大型のドームが備え付けられ、各種の内風呂もあり、全天候対応型のスパのようになっていた。

（なんかこの感じ、ヒエラポリス・パムツカレみたいだな）  
その優美な光景に、ファルマは圧倒される。

「どうだ、ファルマよ。素晴らしい保養地であろう」

そんな彼の隣で全裸で入浴中のサン・フルーヴ帝国女帝は、今日も見事な肢体を見せつけながら、新たなテルマエの自慢を始める。

（うつつ、どっちかっていうと俺の目の保養だ……！）

「はい、これもまた自然美あふれる結構なテルマエでございます」  
女帝の後ろには侍女たちがぐるりと取り囲むように控えて、多くの視線がファルマたちに集まっている。この場でたった一人の男性であるファルマは、居心地悪いことこの上なかった。

（何でまた陛下と一緒に入浴しないといけないんだ……！ しかも何で毎度混浴しようとするんだよ。まさか残す三つのテルマエも混浴……？）

ファルマはゴクリと唾をのむ。

どこに視線を向けていたらいいのかと、挙動不審になってしまう。それというのも、前回と同じシチュエーションでは面白くないという女帝が、今回はさらに過激なサプライズを用意していたからだ。

「ああ、真つ青なお湯と白い棚田の対比が鮮やかで美しいこと！ 絶景です陛下！」

聞きなれた声が聞こえてくる。

（ていうか、なんてこった……）

そう、女帝の招待に預かったのはファルマだけではない。エレンもだ。前回、ファルマのテルマエに対するリアクションが薄めだったので、女帝の自己顕示欲を満たす褒め要員として動員されたのだった。

（何でちゃっかり呼ばれてるんだ、勘弁してくれよ！嫌がらせかよ……！）

「ってああっ、眼鏡がすぐ曇りますわ！」

（だろっね！ わざと曇らせてないかもっ！？）

エレンはひっきりなしに眼鏡の曇りを気にしている。

「そなたは愉快だな、エレオノール」  
女帝はエレンにほほ笑んだ。

「まあ、光栄ですわ。陛下にお褒めいただけるなんて……！」  
（今のはお褒めいただいたのかな）

ファルマは首をかしげる。エレンはファルマの存在をあまり気にしていないのかすっかりテルマエを堪能していた。

「と言う割りにはエレオノールよ、そなたの胸は遠慮というものを知らんようだが」

「きゃっ、陛下！ どこをご覧に！」

「中身がしつかり詰まっとなるのか、感触はどうなのか。どれ、少し揉ませてみよ」

女帝はエレンの、女神の祝福を受けたかのような豊満なバストと自らの、これまた形の良い美乳を見比べて、ささやかな対抗意識を燃やしていた。

女帝が両手が明らかに胸を揉みにかかる手つきだ。

「きゃー！ 陛下、ご無体な〜！！」

「減るものではないぞ、よいではないか」

「減るものではありませんけれども！」

身の危険を感じたエレンが立ち上がったのでさっさと目を背けたフアルマは、今度はもう一人の少女と目が合う。彼はロツテとも混浴中だった。

（ああーこっちもー！）

生まれてこのかた人前で肌を出すなどもつてのほか、と言われていたロツテは羞恥心と、女帝と一緒に入浴という恐れ多さから隅の方で固まっている。発育途中の自らの体型に自信がなく、誰にも見られてはなるものと、体を抱え込んでいた。

そんなロツテは髪の毛をあげて、うなじを出し非日常的な色気を漂わせている。

「ロツテちゃん、何でさっきからすみっこにいるの？ こっちにおいでよ」

「そうだ。フアルマが喜ぶぞ？」

女帝も面白がって口をそろえる。

「む、無理です〜！」

ロツテの恥じらう様子はいじらしくて、ファルマに平常心でいると言われても無理だ。

「シャルロツトの胸の発育のほうはどうだ？　ん？　確認しておかねばな？」

「おおおおお許してください陛下、お先に失礼いたします！」

ロツテはパニックに陥り、大慌てで風呂を出て行った。

（あーもう！　何やってんだこの人たち。目の毒、耳の毒だ！）

どの方向にも直視できないファルマは発狂寸前だった。

「ファルマよ、何を目をそらして真っ赤になっておるのだ？」

女帝はファルマをからかって上機嫌だ。

「何というかその、困ります」

心を込めて、ファルマはうったえた。

「そうか、そなたは奥手なのだな」

「温泉に混浴なんて、慣れませんからね」

「……温泉といえば、そうだ。聖泉はどのような泉だったのか」

女帝は思い出したかのように声を落とし、ファルマに尋ねる。

伝説の聖泉を見つけたという話は、場所は教えなかったが女帝やサロモン、そしてエレンには通しておいた。行きにくい場所といっても、人間にはまず無理だろう、そうも考えたからだ。

「聖泉の向こう側へは、行けたのか？」

「はい、一応は」

ファルマの歯ぎれは悪い。

「余も天上界を見ることはできませんか」

「大変無礼を申し上げますが、陛下には向こう側には入れないと思います」

「む、そう冷たいことを申すな」

あっさりと断られ、女帝は頬をふくらませて拗ねた。

「私も、入れはしたものの、すぐにこちらの世界へ戻されましたし」

女帝はがっかりするに違いないな、と思いながらファルマは言葉を濁す。

「……詳しくは説明いたしかねますが、部屋のような場所でした」  
ファルマの生前の職場などと言っても理解しても貰えないだろう。

「写真に撮ってくればよいではないか。文明の利器を使わんか」

「ま、まあ、今度機会があれば……」

異界の研究室が写真に写るとは思わないが……。

（ああ、そういえば写真はともかくとして、PCやスマホを持ち出してくればよかったな）

こちらに持ち込んですぐ聖泉に水没することになるが、それはビール袋の中に入れて戻ればいい。

ちなみにファルマが異界の研究室から持ち出してきた試薬類は、こちらの世界に入った時点で秘宝化したようだ。問題なく使えると分かるまで安易に使用せず、メイシス家の冷凍倉庫に厳重に保管し、多忙な時間の合間を縫って、ファルマは少しずつ性状試験を行っている。

「ファルマよ」

今度は真面目くさった表情で女帝がファルマを見つめる。

「はい？」

「完全に向こう側へ行ってしまうつもりはないのだろうか？」

「……それは……」

あの異界に、ファルマの居場所はなかった。薬谷を助けて彼がそもそも過労死で死ななければ、今ファルマの中に宿っている自我が転生した事実が消える、そう推測できる。

（だったら俺はどうなる？ あの時時間の先に戻れるのか。それとも俺が死んだ前世の俺、薬谷 完治を助けたら……過去が分岐してし



まっつて、まったく違う世界を生きることになるのか)

それが自分に、そしてこの世界と元の世界にどんな影響を与えるのか、ファルマには見えない。

返事に詰まるファルマを、女帝は残念そうに眺めていた。

「まあ、そなたの決めたことを余が止められるとは思わん、だが、どうしても往かねばならぬなら、できるだけこちらでゆっくりとしてから往け」

「陛下のご希望は承りました」

ファルマは何とも言い返せなくて、視線を伏せる。

彼女と出会ってからこのかた、何度となく乞われた希望だった。

「辛気臭い話は終わりだ。個人的な話になるが、そなたの結婚相手はどうなっておるのか。いっこうに報告がないが」

「な、何のことでしょうか」

ファルマの顔がひきつる。触れられたくないというか、デリケートすぎる問題だった。

「ブリュノに相手を決められてはおらんのか。あれは悠長だな、そなたへの縁談は山のように持ち込まれていると聞いておるのだが」

(縁談が山のようにって何だ? 誰の話だよ)

ファルマの耳がぴくりとする。浮いた話の一つもないと思っていたのはファルマだけだったようだ。

「薬師としての仕事に邁進しろとは言われておりますが。結婚は早いかたと……存じておりまして」

この時世、家督相続の問題が常に付きまとうので、貴族の子息の結婚問題については親同士の話しあいによって決められ、恋愛結婚はあり得ない。ブリュノは今のファルマに嫁は必要ないとシャットアウトしているのだろうが、女帝はファルマを諭す。

「そなたも立派な結婚適齢期だぞ」

（そうなのか？！ 早すぎないか？）

貴族の結婚適齢期は13歳からだという。男子の場合は何歳までに結婚しなければならぬ、というものではないが、女帝は結婚を急がせたいようだった。

「兄の結婚もまだですし、兄を差し置いては……」

「兄は兄、弟は弟だ。めばしい相手がおらぬのなら、余が見繕ってやるぞ。ありがたく思え。才色兼備のとおきおきの美女をな！ どうか」

（ひいー！ それ困る！）

「ははは……そのうち陛下のお力添えをいただければ」

ファルマがどうにかやり過ごそうと笑顔でごまかしていると、

「笑いごとではないぞ。はよう妻を娶り、子をもつけよ。そなたの子は破格の神力を持つであろうことは必至、子は帝国の宝だ」

（そういうことか……困ったな。だいたい、12歳で結婚相手を決めないといけないなんて、相手に責任持てないよ）

ファルマの状況としては、今は結婚どころではない。

手つかずの懸案が盛りたくさんだし、ファルマもいつまでこの、ファルマ少年への憑依状態を続けていられるのか分からない。

平均寿命の短い世界ならではの事情なのだろうが、子供が子供を持つ、だなんて、元日本人のファルマにとっては考えられない。色々と落ち着いてから身の振り方を考えたい。

とはいえ、女帝の手前もある。

「帝国法では一妻が原則だが、そなたは特別に二人や三人は正妻として娶るがよい。余が許し、家族の保障もする。最低でも一人は娶るのだ」

今度は、希望ではなく勅令だった。

聖泉を出入りするようになったファルマが不測の事態で消滅してしまった時に備え、薬神の血を引く子孫を一人でも多く残せ。女帝

は直截的にそう言っていた。

（この人も、さすが皇帝だけあってしたたかだな。だいたい、子孫を残すために結婚しろって……）

ファルマはどんよりした気分になった。女帝はそんなファルマの心情を汲み取ったのか、

「子孫を確実に残すということに関しては、帝国貴族の自由意志ではないぞ。それは義務だ」

「陛下のご命令は承りました。ですが生物学的な部分で完全な人間かどうか怪しい私は、子孫を残せない体かもしれません。かりに私の子供を未来の妻が身ごもったとしても、母体にも生命の危険が及びます」

リスクを考えずに子孫を残そうとするのは、ファルマとしては無責任だと思う。

相手の女性を傷つけ、子供の命を弄ぶ。

恋愛感情があって相手を尊く思ってこそ、家族を持ちたいと思うべきだ。ファルマはそう思う。

「過去、守護神憑きが子孫を残した例はある。今では全ての血統が途絶えておるが」

（そうなのか……てか子供、できるんだ）

「神力は遺伝するものですか？」

「高い確率で遺伝する。だからそう言っておるのだ」

両親ともに優秀な神術使いの子は、やはり優秀だという。

「とはいえ、余がせっついて無理にくつつけてもその気になれんだらう。エレオノールとはどうなのだ」

じつと、ファルマの顔を至近距離から覗き込む女帝。

エレンも神力は強く家格もそれなりで、優秀な神術使いであるといえた。女帝の覚えもよい。

「ボヌフオワ嬢は、引く手あまたですし。年下の私など、釣り合わないのでは」

すぐ後ろにいる相手の名前が飛び出し、これにはまいって、ファルマもしどろもどろになり小声で答える。

（エレンに聞こえてやしないか？ 何でこんなところで）

「そうか。そなたは年の近いシャルロットとも仲睦まじくしておると聞くが」

その反応を好意的に受け止めた女帝は、さらにロットとの仲も詮索する。調べはついているようだった。

「陛下！」

「ふう、まあよい。楽しみにしておるぞ。来年、遅くとも再来年をめどに妻を娶るのだ。先に出る。喉が渴いた」

女帝はにこやかな笑顔を向けて、風呂から上がる。ファルマが妻を娶り帝国にとどまるのなら、特に聖泉への立ち入りは制限しないと去り際に告げた。

「ファルマ君」

女帝との話を聞かないように距離を取っていたエレンが、湯の中を泳ぐようにしてファルマに近づいてきた。エレンの先ほどまで上気していた顔は、すっかりと青ざめていた。

今、結婚の話などしていたので、エレンを意識してしまう。

「どうしたんだ、エレン。温泉入ってるのに顔色悪いぞ、湯あたりしたなら出た方がいい」

「そうじゃなくて！ ねえ。きみの体、前より透けてるわ。見間違いないじゃない、それって聖泉に行ったからなの？」

エレンはいよいよ心配そうだ。

「どのくらい透けてる？ 人としてまずいくらい透けてる？」

「う、うん……ごめん、そうね」

「気を使わなくていいよ、正直に言ってくれ」

「部屋の中ではまだしも、外に出ると気付く人はいると思うわ」

（客観的に見ても気付くのか……まずいな、これは）

太陽の下での半透明化は顕著だ。あと何回か異界に出入りすると存在そのものが消滅するのではないか。そんな懸念がファルマの頭をよぎった。それより以前に、帝都で生活できなくなる。

ファルマにとっては切実な問題だ。

「神力が強すぎてそうなってるのよ、でも減らそうにもファルマ君の場合、神力無尽蔵でちよつとやそつとじゃ減らないだろうし……」  
神脈を塞ぐ方法は、とてもではないがファルマには効きそうになり。

（懸案が増えたな……）

テルマエをそれなりに堪能し薬局に戻ったファルマは、自分自身の透明化と、女帝の話を重く受け止めていた。

来年か再来年をめどに妻を娶れというあの話は、なかなか重い。うんうんと悩んでいると、

「何を悩んでいらつしやるんですか？」

事情を知らないロツテが無邪気に尋ねる。

「なんでも！　ないよ」

（そもそも俺、こんな状態で人を妊娠させる能力あるのか？　人外の俺の遺伝子なんて残しても大丈夫か？　危険すぎるだろう）

子供どころか、母体にも悪影響を与えるのでは……というのも結婚を尻込みする理由だ。

ファルマ少年の体に憑依しているとはいっても、もはや元の性質を失っている。

異種交配にあたるのでは、と。そんなレベルだ。

「一応、男性妊孕能の一部だけでも調べとくか」

たとえ結婚するつもりはなかったとしても、せめて自分の体の事

は把握しておきたい。

前世でも、自分の生殖機能の検査は自分でやったものだ。薬局の研究室では設備も不十分だが、最低限の機能は調べておきたかった。

「ってこれ、検査するには自分で採精するしかないのか」

自分の精巢めがけて針をぶっ挿すのは色々辛いものがあるが、幸い、精通はついこの前あったばかりだ。自然に採取できる。エレンやロットに手伝ってもらったら採精もはかどるだろうが、白い目で見られるのがオチだ。

（いかんいかん、何考えてんだ俺。言えるわけない、変態だろう！）  
標準的な手法というわけで二日待って、実行することにした。

その日、ファルマは夕方、薬局を閉めてから四階の研究室で採精した。閉店後にしたのは、さすがにエレンやロット、バイトの薬師たちが階下にいる状況では落ち着かないからだ。

「はあ……俺何やってるんだろう」

事後。虚脱感で若干賢者モードになりながら、自前の検体<sup>サンプル</sup>を処理する。

まずは顕微鏡下でできる検査からだ。生理食塩水で懸濁し、手動の遠心分離をしたあと洗浄する。

「とりあえず、精液検査から」

ファルマは、精液量、精子濃度、総精子数、前進運動率、総運動率を顕微鏡下で調べてゆく。普段慣れているだけあって、おそろしく手際はよかった。

「総精子数はこんなもんな」

ファルマはまだ子供なので、精液量は大人より少なめだ。

「精子生存率は……」

さらに生存している精子は、エオシンという色素で染めると染まらないので、染色を行って精子の生存率を計算する。その他も、時

間をかけないよう処理を行う。

「生存率にも運動にも問題なさそうだ。あとは、一応精子DNAどうなってるのか調べたいな。宇宙にも行っただし宇宙放射線でダメージ受けてそうだよ」

もし、その環境があるならば詳細な精子DNAのゲノム解析をやりたいところだ。

しかしそれが無い環境、簡易的な検査法を用いるしかなかった。

「電気ないから、電気を使ったコメットアッセイなんかのゲル電気泳動法もできないしな。どうすっかな」

そこで選んだのが、ハロースパムテスト（Halospem Test）だ。染色液で精子を染色すると、精子頭部の回りに青紫の環（Halo）が現れる。DNAにダメージのある精子では、環が出ない。いくつかの染色工程のあと、結果を確認する。

「ほとんど全部染まってる。DNA断片化もなさそう、正常だ」

塩基レベルでどうなっているのかは分からないが、とりあえずDNA本体のクロマチン構造は無事だ。

自分の体に何かしらの異常が起きているとは分かり切っていたが、ひとまず検査できる範囲では正常のようで、ファルマもほっとする。

「あとは……ヒト動物交雑胚を造ればある程度のが分かるけど」

マウスなどの哺乳類の卵を用意し、顕微授精（ICSI）によって注入したヒト精子と受精させ、胚として途中まで発生させることができるか、という方法で妊娠能力を確認する方法もある。ちなみに、人とマウスの精子と卵を受精させたからといってマウス獣人ができたりはせず、たいていの場合、発生は途中でとまる。

日本では、受精後の胚の胎内移植は禁じられていたが、その前段階では精子機能検査として用いる場合に限り、届け出をすれば合法ではあった。

「ま、それは今度でいいか。マウスもないし。今日は帰ろつと」  
また採精するのも嫌なので、残りの精子懸濁液はガラス管に充填して炎で口を閉じ、静かに液体窒素の中に沈めて凍結する。これでほかの実験を数回実施するだけの量は確保できた。

作業を終えたファルマがガチャッと研究室のドアを開け、

（あ、研究室出る前に白衣脱がなきゃ）

羽織っていた長白衣の前ボタンをはずし、ぱつと脱ぐ。悲劇は起こった。

ファルマの目の前で、ロッテの悲鳴が上がったのだ。

「キヤーっ！ ファルマ様、下穿いてくださいーっ！」

「うわっ、ロッテ！ 下って！？」

そういえば採精をした後、すぐにサンプルを処理しようと夢中になるあまり、パンツを穿くのを忘れていたようだ。

「そ、そんな恰好で何をなさっていたんですか！？」

長白衣を脱ぎ下半身が丸出しになったファルマと、忘れ物を取りに戻ってきたロッテが階段で鉢合わせ。

最悪の状況だった。

「いや、あの、これは違うんだ！ ただ、俺の精子を……」

誰もいないと思って検査に夢中になるあまり、ファルマはやらかった。長白衣を羽織っていたので、下半身はあまりスースーしなかったので気付かなかったのだ。

（俺の精子をつて何だよ、言葉のアヤにもほどがあるだろう。こりや何を言ってもだめだ、痛恨の極み……）

しかもコートを脱いで下半身を見せつけている変態のような構図



になっていた。

憲兵さんこの人です、と憲兵の前に突き出されてもおかしくない。

「キヤー！ 何も見ていませんっ！」

ロッテは後ろも振り返らず、ダッシュで屋敷まで逃げ帰った。

その日から暫く、ファルマは非常に気まずく、ロッテと顔を合わせられなくなったという。

## 5章2話 カモガヤと神炎の七日間

1147年6月。興味本位から自身の生殖機能検査など行ったファルマだったが、一か月もすると日々の忙しさに忙殺され、女帝から出された妻を娶れという宿題はすっかり忘れつつあった。

元日本人薬学者が憑依する、肉体年齢12歳のファルマとしては、結婚問題は子供が子供を持つようであらねないものだった。

ちなみに、ロッテの前で憲兵に通報されても文句の言えない露出狂行為をやらかして一時は自害したくなったファルマだったが、ロッテは後をひかない性格なので、一週間もすれば忘れてくれた。彼女の性質に助けられた恰好だ。

そんなある休日。その日は天気がいいので、ファルマとロッテは馬車を使わず、仲良くのんびりと河原を歩いていて、サン・フルーヴ河のほとりには多くの人々が寝そべったり散歩を楽しみ、水際に憩っている。

両河岸には草花が青々と生い茂る、新緑の季節だ。

（サン・フルーヴ帝国には梅雨がないから過ごしやすくていいなあ。ヨーロッパと同じ感じの気候だよな）

もともと湿度の低い帝国は、年中温暖でカラッとしている。ファルマは湿度が高いのが苦手だったので、心地よく感じた。

「わあ、お花きれいですねー。ちよっと摘んできます」

ロッテは野花の花束を手際よく作って、ファルマに見せにっこりとほほ笑む。

「薬局の受付に飾りましょう。それから、いい画題にもなります」  
「いいね。ロッテの絵は薬局に彩を添えてくれて、ありがたいよ」

ロッテの画のうち何枚かは、ファルマが薬局に飾らせてもらっていた。それは色鮮やかで心安らく色彩で、訪れた患者の目を楽しませる。

「今日はこのまま歩いて宮廷工房に行きます。絵具を取りに行きたくて」

宮廷画家としてのロッテの画業と、デザイン制作は順調だった。メロディとの合同の個展も企画している。ロッテの作品の制作拠点はメディシス家の自室だったが、薬局の勤務が終わるとファルマは大学へ、ロッテは宮廷工房へ顔を出す。

「あ、宮殿に行くなら俺も一緒に行くよ」

「本当ですか！？ では一緒に」

ロッテはファルマに寄り添って歩く。少しだけ、ロッテと体が当たる。

（ん、距離が近いな）

以前のロッテは三步下がって歩いていたのだが、距離感が縮まってきたのを感じるファルマだった。

ファルマがロッテとともに宮殿に向かったのは、サロモンに会うためだ。

サロモンは、神術顧問として高度な神術を教える仕事を任され、会議室での講義を終えた直後だった。

「え？ 太陽の下で透けるので透けないようにしたい、と。ははは、御冗談を、いくら何でも透けるわけ……」

「本当ですし切実なんです」

これまで、ファルマは影ができないのを誤魔化すため、神力を力ツトする護符をサロモンにもらってそれを胸ポケットに入れ身に帯びてきた。それで影のできない状況を緩和できていた。だが、もはやそれだけでは影のできない状況や透明化を防げなくなっている。

「前にいただいた神力抑制護符では、抑えられなくなってきたみたいですよ」

「それは困りましたね。これ以上きついものとなると神封じの術になりますよ、まさかファルマ様相手にそういう訳にもいきませんし……」

「神封じというのは、何なんですか？」

ファルマの問いに、サロモンは説明しにくそうに口を開く。

「守護神を封印する禁術の体系です。ファルマ様にはおそろしく効果があるかもしれませんが。それはさすがに……！」

「よかった。それ、やってくれませんか」

話を聞くなり乗り気のファルマに、サロモンはきよとした。

「ファルマ様に、神封じをしろと仰るのですか？ この私めに？」

「そうです。難しいですか？」

どうやらファルマは本気らしいと知り、サロモンは慌てた。

「いいいいけません、いけません。信仰に反します、私が封じるのは悪霊でこそあれ、守護神であるファルマ様を封じるなど………とんでもない！」

「俺なら構いません。体が透けてるのを見られて、薬局に来た人や町の人に怖がられるよりよほどいいですし、そういうわけなのでお願いします」

「うつ……ファルマ様の頼みでしたら致し方ありませんが……痛みますよ？」

というわけで、サロモンは気が進まないと言いながらも、ファルマに禁断の呪符を書いて渡した。

「これを肌に貼ってください。腕の薬神紋に直接貼るのがいいでしょう。薬神紋を封じれば、かなり神力を抑える事ができます。でも我慢ができれば、剥がしたほうがよろしいかと。なにしろ、守護神に激痛を与え弱体化させると言われている禁忌の符、破戒符と呼ばれるものですから。ああ、そんなものをファルマ様にお渡ししなければならぬとは」

「おっ、ありがとうございますー」

ファルマは怖れ慄くサロモンを横目に気楽なもので、無防備に袖をめくり、両腕の薬神紋にペタッと呪符を貼り付けて包帯で腕ごと巻いた。

「ひっ！？ そんな一気に！」

サロモンが悲鳴を飲み込み、飛び上がる。

「あ……ピリピリしてきました。痛いっていうか、どっちかっという気持ちいいです」

サロモンはファルマが恍惚としているのには触れない事にした。

「げ、激痛の筈ですが……」

「ソフィの電撃に比べれば全然」

ファルマはいろんな意味で訓練されていた。

「そ、それはよろしゅうございました」

ファルマの神力は減弱し、透明化は解消。しかしサロモンから見たファルマの変態力も一緒に上昇した。

「もしかすると、大神殿の神封じの秘術も、ファルマ様にはさして効かないかもしれませんね」

大神殿を警戒しすぎることもないのかもしれない、とサロモンは心の片隅で考えた。

「ありがとう、サロモンさん。いつも助かってます」

「ど、どういたしまして。神封じにかかってもきちんと神術が使えるかどうかは、あとでご確認ください」

「はい。確認します」

（もしかして、いまの呪符貼ったら物質創造や消去の能力も使えなくなってるのかな。それは困るな）

そんなことを考えながら宮廷工房にロッテを迎えに行くと、絵画制作中のロッテが身をかがめて、小さく鼻をかんでいた。

「ロッテも帰れる？ それとも俺が先に帰ったほうがいい？」

「あっ、一緒に帰ります。ちよっと体調が悪いみたいで……」

鼻をかみすぎたのか、鼻の下が赤くなっている。

「鼻水がとまらなくて。風邪みたいですよー」

話しているうちに、またつーっと鼻水が流れてきたらしい。くるりと後ろを向いて、鼻をかむ。

「今日は早く帰って休もつか」

ファルマがロッテを気遣う。大して酷くはなさそうなので、安静が一番だ。

「はい、ありがとうございます。そういえば、陛下もお風邪ですって」

「へー」

帰宅したファルマがサロモンの忠告に従いざっと自身の能力をチェックしたところ、物質創造能力、物質消去能力はこれまでと同じように発動した。

（神術に問題は起きてないか、よかった）

ファルマはほっとした。

「風邪か……ん？ レベツカ？」

翌日、ロッテは出勤したものの、風邪は治る気配はない。そしてレベツカまでも鼻の下を赤くしていた。

「レベツカまで風邪？ 流行ってるのかな。早くあがっていいよ」

ファルマは二人を気にかける。

「はいっ、でも元気です！ 店主様！」

レベツカは恥ずかしそうにした。

「そういえば、ファルマ君の近くににいるのに二人とも風邪って、珍しいわね」

ほら、聖域があるのに。とエレンはファルマに耳打ちする。聖域の秘密を知っているのは、エレンとセドリックだけだ。

「確かに……変だな」

エレンは風邪をひいてはいない。セドリック、肝っ玉母さん薬師セルスト、青年薬師のロジエもだ。聖域というのは、ファルマが存

在するだけでファルマの周囲数キロで発動しているというパッシブスキルのようなものだ。圏内にいる人間は、感染症や病気になるにくくなる。それにしても、とファルマは考えた。

（二人も、風邪？）

ファルマはどうもひっかかる。自分の能力に絶対の信頼を置いているわけではないが、長期間薬局の従業員が風邪をひかないという現状からすると変だ。

（神封じの術にかかって、俺の聖域が働いていない？ いやでも破戒符を貼ったのは昨日の今日だし）

一抹の不安を覚えた彼は、迷わず二人に対して診眼を使う。そして病名をあたってみる。

「細菌感染」

「ウイルス感染」

そんなファルマと視線が合ったタイミングで、「くちゅん」と小さくロツテが可愛らしいくしゃみをした。くしゃみというのは、風邪の症状の一部でありながら、とある疾患にも特徴的な症状だ。

（ああ、わかった）

ファルマはほぼ断定する。

「季節性アレルギー性鼻炎」

青い光が白くなった。季節性アレルギー性鼻炎とは、花粉症のことだ。そうと分かればアレルギー源まで一気に特定しにかかる。

「この時期に、帝都に生えている植物といえば……」

地球における世界三大花粉症というと、スギ、イネ、ブタクサだ。ファルマが帝都の景観を見るに、スギはイトスギがあるものの、帝都には殆ど生えていない。

「カバノキ、カシワ、ハシバミ……」

あてずっぽうに挙げてゆくと、それらの中でいくつかの植物が強く反応した。一番疑わしかった植物を挙げると、白い光は強さを増した。

「カモガヤ。ん、カモガヤか」

（あー。河原にたくさん生えてたもんなー。あんだけ生えてりゃない）

ファルマには心当たりがある。先日目にしたばかりだ。

「二人とも、鼻水が出て？」「はい」

「くしゃみもあり？」「はい」

「鼻づまりも？」「はい！」

ファルマの問いに、二人が競うように答える。

「私は目もかゆくて」

ロツテのほうに症状がひどいようだ。

「えーっと。ひとつ二人に聞きたいんだけど、症状は今日から？」

「いいえ、今日ではないです。そういえば毎年……春になると」  
レベツカが恥ずかしそうに手を挙げる。

（俺の聖域どうこうじゃなかったのか……聖域はアレルギーには干渉しないんだな）

ファルマはひとまず胸を撫でおろす。透明化を誤魔化すために聖域を削って、罹患率が上がったら本末転倒だ。

「花粉症だね」

「花粉症というのは何ですか？」

ロツテの初めて耳にする言葉だった。

「うん、まあすごくざっくり言ってしまうと、君たちの体が花粉を病原体だと誤って認識し、抗体を作って体から排除しようとしているんだ」

「排除？」



「そう排除。くしゃみで追い出し、涙や鼻水で洗い流し、鼻の奥の血管を拡張させて鼻づまりで侵入を防ごうとするんだよ。理にかなってるだろ？」

「アレルギーの項についてはファルマ君の教科書読んだらちゃんと書いてあるわよ。レベツカちゃん、あんまり読んでないわね」

エレンがロッテの後ろで苦笑して補足する。

「そ、そうでしたっけ！ すみません教科書あまり進んでなくてレベツカはギクつとする。

「どうやったら治ります？ 鼻をかみすぎて、鼻の下が痛いんです、ヒリヒリします」

ロッテは鼻の下を両手で覆っている。赤くなっているのが恥ずかしいのだ。

「悪いけど、一度発症したらそうそう治らない。花粉症は毎年なるよ」

ファルマの無慈悲な宣告に、ロッテは後ずさる。

「毎年ですか！ 無理です」

「花粉の飛散量に依存するけどね。カモガヤの生えていない国に行ったら治るけど、そうもいかないだろう。薬を出そうか」

ファルマは二人のカルテを引っ張り出してきて、すらすらと書き加えた。久しぶりのカルテだ。

「わあっ、ファルマ様のお薬、楽しみです！」

ロッテが思わず喜んでしまったように、ファルマがセドリック以外の従業員に薬を出すのは久々のことだった。

「ロッテちゃんたら、薬は楽しみにするもんじゃないわよ」

エレンが笑った。

「ヒスタミンを抑える薬を出すね。フェキソフェナジンにするよ」

「ステロイドの内服は出さないのね。感染症や副腎機能の低下を防ぐため？」

エレンが質問する。教科書によると、大人で症状が酷い場合はステロイドを出すことになっていた。

「15歳以下のロツテは小児だし、重篤でない限りステロイドは内服で出さないよ」

「点眼、点鼻薬ならいいのね？」

治療薬はヒスタミン受容体拮抗剤の抗ヒスタミン薬フェキソフェナジンを、ロツテは1回30mgを1日2回、レベツカは一回60mgで、ステロイドのモメタゾン点鼻薬とともに処方した。

「花粉症の薬は、人によって合う合わないがあるから、これで効かなければまた検討しよう」

「お薬を出すのに体重をはからないといけないですか？」

ロツテとレベツカが、しり込みする。

「うん、今回は体重は体型を見ればわかるからいいよ」

「ええっ！？ どれぐらいの重さだと思ってるんですか？！」

「そうですよファルマ様！」

「というのは冗談で、年齢に応じた薬用量計算法があるから、今回は大丈夫だよ。それから二人はカモガヤのある時期は小麦、メロン、スイカ、キウイは食べ過ぎない方がいいよ」

調剤室からファルマが忠告する。イネ科植物の花粉症を発症すると、食べるだけで免疫系が花粉と誤認識してアレルギーを起こす食物があるのだ、とファルマは説明した。

「キウイってなに？」

エレンが尋ねる。

「あ、ここにはキウイはないのか。品種改良植物だもんな、そっか」  
「そんなあファルマ様、ほかのフルーツはともかく、小麦を控えるなんて死んでしまいます！ 小麦なんて主食なのに……」

ロツテの悲しみようといったらなかった。パンはもちろん、小麦を使った焼き菓子などは、ロツテの好物だ。

「食べ過ぎないようにすることね。花粉症になると、食物アレルギー

「も一定の確率で併発するからね、危険なんだよ」

「それでも食べていたらどうなるんです？」

「最悪だとアナフィラキシーショックを起こして死ぬかな。脅しじゃないよ」

「ひーっ!？」

ロツテとレベツカは震えあがった。

「アナフィラキシーショックを和らげるには、アドレナリンの注射だったわよね」

エレンが思い出しながらつぶやく。

「エレン正解。それ、用意していたほうがいいな」

ファルマは真面目にそう思った。

「はあ……カモガヤなんてこの世からなくなればいいのにです……」  
ロツテが薬局のカウンターにもたれかかり、深い深いため息をついた。その突つ伏した頭の上にファルマは薬袋を載せる。

「元気出してよ。ほら。ロツテの花粉症はそんなにひどくないからレベツカもだけど」

「ありがとうございます……ファルマ様」

ロツテの手は薬袋とファルマの手に同時に触れ、その感触に驚き慌ててひっこめた。

「仕方がないわね。カモガヤはなくならないから、うまく付き合っていくしかないのよ」

エレンが慰めにもならない言葉をロツテとレベツカにかける。

「へええ、どうすればいいんですかあ。この時期は外歩かないようにするしかないんですかあ!？」

「可哀想にねえロツテちゃん、レベツカちゃん……もう一生治らない花粉症になっちゃっただなんて」

「他人事だと思ってるかい？ エレンもいつなるか分からないんだぞ。というか、全ての人は花粉症になる可能性があるからな。俺だ

つてなるかもしれない」

ファルマがエレンにも忠告する。

「ファルマ君は、ならないわよ」

「可能性はある。あるよな？」

「はいはい、そうねそうね。マスクよ、ロツテちゃん。防御のためにはマスクと眼鏡！」

エレンが花粉症防御策を指南し、自分の眼鏡をくいと上げる。

ファルマの教科書で見た知識の受け売りだ。

「あ、待てよ。そういえば、陛下も花粉症かも……ロツテ、昨日陛下が風邪って言ってたよな？ もしそうなら陛下にも薬出さなきゃ」  
ファルマはふと思い出す。風邪だと思いきや、花粉症だったのかもしれない。そして翌日、気になって宮殿へと診察に出かけていくと、予想は的中した。

その日から数日後、帝都からカモガヤというカモガヤが消えた。

女帝の勅令が出され、牧草地を除くカモガヤの野は火炎神術使いに焼き尽くされたのだ。脳筋女帝の強権発動、である。

「楽になりました。ファルマ様の薬のおかげですね！」

その恩恵を受け、花粉症の症状が劇的に軽減したロツテとレベツ力はたいそう喜んだ。

「それはよかったね。うん、どうしたんだろうね、カモガヤ。なくなっただね」

そんな相槌を打ちながら、真相を知るファルマは女帝の行動力に怯えた。

（薬が効いてるのもあるけど……もう、帝都には殆ど見ないもんな。着々と駆除されてるし、カモガヤが帝都でレッドデータブック入りする日も近いんじゃないか）

帝都のいたる場所から、カモガヤを焼くために七日間にわたって  
立ち上がっていた神術の火炎。

それらの光景を称して、帝都民は神炎の七日間と呼んだ。

## 5章2話 カモガヤと神炎の七日間（後書き）

### 【謝辞】

本項の一部は、小児科医のパン粉先生にご指導いただきました。  
ここまでを薬剤師の越智屋ノマ（おちゃ）先生に査読いただきました。

薬剤師のセイメイ先生より、処方の修正案を指導いただきました。  
どうもありがとうございます。

## 5章3話 牛乳売りの少年と、少年薬師

1147年7月のある日の昼すぎ。

薬局から大学へ出かけようとしていたファルマは、薬局の前を手押しの荷車を押しながら横切った少年にばったりと体が当たってしまった。

少年は派手に転んですりむき、荷車が傾いて荷の一部がひっくり返った。

「いてえっ！ どこ見て歩いてんだこのクソガキ！ ……げっ！」

少年は相手をよく見ずに怒鳴ってしまってから、相手が異世界薬局の店主だったと知る。

「言葉を慎め、無礼者！」

薬局の門番の騎士が凄むが、ファルマが制する。

「いえ、俺のせいです。確かに俺の不注意だった、悪かった。怪我はない？」

「それより、荷物！」

少年がそう言うのでファルマは少年の押していた荷車を覗き込むと、衝突の衝撃で、整然と並べられていた売り物の牛乳瓶から牛乳がこぼれてしまっている。

「ああ、これは弁償しないとな」

ファルマと少年は、微妙に顔見知りだ。少年は早朝から帝都の街頭で牛乳を売り、薬局が昼休憩になる頃、いつもくたびれた顔をして前を通り過ぎる。それを、ファルマは時々見ていたものだ。

「そうだぞ、弁償ものだ！」

少年は起き上がり、荷を確認して吠える。

彼はファルマと同じ歳の少年で、貧民といえる状況の平民だった。（そういえば、急に痩せたな、この子。食事、十分に食べられてい

ないのかな)

起き上がった少年を真正面から見て、ファルマは内心首をかしげる。

「からかったつもりはなかった。ぶつかったお詫びに、全部買っよ」  
ファルマは財布を出し、商品を弁償しようとした。

「どうせ捨てるんだろ!？」

「いや。飲む」

「……宮廷薬師のお貴族様が牛乳なんて飲むのかよ」  
門番に聞こえないように煽ってくる少年に、ファルマはすまして言った。

「飲むよ。君も飲んだ方がいいんじゃないか？」

シリアルを入れて食べようと、ファルマは思いつく。

「酸っぱいんだぞ、これ」

「正直だな。いいよ、ならヨーグルトにするから」

ファルマは買うと言った言葉に一言なく、積み荷にあった全ての牛乳を買った。ファルマの財布まるごと引き換えに。

財布の中には、少年の年収の数分ほどの金額が入っていた。

「お釣りはいらなから」

「ああ!？ 喧嘩売ってんのか! こんな受け取れるかへボ薬師!」

少年は既に喧嘩ごしだ。何か適当な理由はないものかと考えたファルマは、少年が擦りむいたときにズボンが破れたのを見つけた。

「なら、服が破れたから、新しい服を買うといい。それから衛生に気を付けると売り上げが上がると思うよ。余計なお世話かもしれないけど」

「余計なお世話だったの!」

「何の騒ぎ? ファルマ君、なに喧嘩してるの?」

大きな声を聞きつけたエレンが仲裁に入ろうかと外に出てきた。



「牛乳を買っただけだよ」

子供の喧嘩じゃあるまいし、と言いかけて、ファルマは子供だったことに気付く。少年は結局ファルマの財布の中から代金ぶんだけ抜いて、それを薬局に投げつけて帰って行った。

それから数日、ファルマは薬局の外を牛乳売りの少年が通りかかるのを注視し、その都度呼び止めて牛乳を買った。しかし、その日は姿を見せない。

「今日はあいつが通るのが遅いな」

「あの牛乳売りの男の子ですよ。私、通りを見えていますね」

ロッテも協力してくれる。

ようやくの時間になって通りがかった少年を、ロッテが薬局店内から見つけてファルマを呼ぶ。

「ファルマ様！ 来られました！ 待ってー、牛乳買いますー！」

少年から牛乳を買おうとファルマが近づくと、少年には目に見えて元気がなかった。

「……またお前か」

少年は数日前よりますますげっそりとしていた。ファルマはますますもって、少年の急激な変化が気になった。

「遅かったじゃないか。なんなら数日仕事を休んだ方がいい、調子が悪そうだ」

牛乳を買い代金を支払いながら、ファルマは少年を気遣う。

「ああ……喉がかわいて、気分が悪いんだ。売り物には手を付けられないし」

「そうか。水をあげるよ、その空瓶をかして」

ファルマは今、牛乳の入っていた瓶を神術の生成水で洗浄し、中に冷たい水を生成し充填して少年に手渡した。ぐびぐびと喉を鳴らして飲む。

「まだ飲むのか？」

二本、三本とがぶ飲みをする少年を、ファルマは注意深く観察し

た。

「今日一日中喉がかわいて仕方がないんだ」

「それは変だぞ？ 今日とは別に暑くもない」

（脱水にしては……呼吸がおかしいな）

異常に深い呼吸が、規則的に続いている。ファルマは嫌な予感を感じた。

（吸気のほうが、呼気より長い……これってクスマウル呼吸じゃないのか）

これは普通ではない。不審に思ったファルマは診眼を使う。すると、少年の体液全体が青く発光していた。

（何だ！？）

その状態を見るなり、ファルマは深刻な病態に息を飲む。

脱水症状はある、だがそれだけでは説明がつかない。

少年の吐息から感じる、独特の果物のようなおい。それに併せて、異常な呼吸。

「糖尿病性ケトアシドーシス」

反応があった。

糖尿病性ケトアシドーシス（diabetic ketoacidosis : DKA）というのは、血糖を下げる（組織内に血糖を取り込むことのできる）唯一のホルモンであるインスリンが欠乏することにより引き起こされるアシドーシス（血液が酸性になる合併症）だ。

インスリンの欠乏が起ると、血糖を血中から各組織、臓器へと取りこむことができず血中の血糖値が上昇し、各臓器はエネルギー不足から飢餓状態に陥り、筋肉などを分解してエネルギーを得ようとする。その結果、タンパク質や脂質の代謝産物のケトン体が血液中

で増加し（ケトosis）、動脈血のpHが酸性に傾くのだ。

（ケトアシドーシスまで進んでいるってことは！）

「1型糖尿病」

的中だった。

2型糖尿病は徐々に進行するので、ケトアシドーシスにまでなる可能性は高くない。だが、インスリンが分泌されなくなることによって急激に進行する1型糖尿病では、起こりうる。

ちなみに、1型糖尿病は生活習慣などで起こる2型糖尿病とは異なり、自己免疫の破たんによっておこるものである。したがって富裕層、貧困層問わず発症する。1型糖尿病の発症に関しては、本人には責任はないのだ。

日本では、糖尿病「生活習慣によるもの」とよく誤解され、患者は時折、周囲からの誤解によって苦しめられたものだったな、とファルマは思い出す。

（ケトン体を消去……するわけにもいかないしな）

ケトン体は全て、単純化合物。ファルマに消去できるものだ。ファルマはケトアシドーシスを改善するため、消去能力によって彼の体内のケトン体全てを消去しようかとも考えた。しかし、インスリンが絶対的に欠乏している彼の肉体が栄養源としているのは、糖ではなくケトン体であろう。そのケトン体を急激に消去した場合、彼は昏睡状態に陥るのではなかろうか。

そんな懸念を払拭できなかったので、応急処置としてケトン体の一部 すなわち彼が代謝に利用していないアセトンを消去能力で消去した。容態は多少、落ち着くはずだ。

「1型糖尿病ですって？」

エレンがファルマに耳打ちをする。患者には聞こえないようにだ。  
「ファルマ君は患者を診れば直感でわかるのかもしれないけど。それ、私たちはどうやって見つけなければならないの？」

「ケトアシドーシスは検査をすればエレンたちにもわかる。針でちよつと指先を刺して血をとってpHをはかる。pH試験紙でもわかるようだともずい」

血糖値をはかる方法もあるのだが、まだこの世界では実用化できていない。

「何ごちやごちや言って……」

「入院だ、即入院！ 重症だぞ」

ファルマは少年の説得をはじめた。

「は？ 家にかえって寝れば治……」

少年はぼかんとして言い返そうとしたところを、ファルマは一喝する。

「……らない、死ぬぞ！ ケトアシドーシスが起こってる。つまり、血液が酸性になっているんだ」

少年がぼかんとしていたので、ファルマは危機感をあおる。

「牛乳がヨーグルトになるみたいに？」

「そんなもんだ」

「嫌だ、どうせ高い薬をふっかけられるんだろう！」

少年は全力で拒否しようとしていた。

「請求する治療費は牛乳3本分！ それ以上は絶対に取らない、はい契約書！」

ファルマは警戒する少年に契約書をさらさらと書いて少年に見せた。

「くそつ、字がよめねえ」

それを聞いたセドリックが出てきて、契約書を読み上げる。

「確かに、患者に請求する診療報酬は牛乳三本、それ以上の費用は

薬局が全額負担し、患者には請求しないと書いてありますな。薬局の印鑑とともに、正式な契約書です。あなたがサインをすれば、有効です」

「しっ、信じられねえ。サインなんてできるか！ 治せる自信だつてないんだろ？ ヘボ薬師、俺は知ってたぞ！」

「あなたがファルマ君の何を知ってるっていうのよ」

エレンは怒るところか呆れて眉を顰める。

「どう思われてもいいけど、この病気は治らない。治らないが、症状を和らげることはできる。ちなみにあと数日ほっとくと本当に死ぬぞ。治療してほしいのかしてほしくないのか！ 死にたくないんだろ？」

「おっ、おう……」

「じゃあ入院だ！ 今そうやって立つてるのもギリギリなんだぞ！」  
ファルマは同意を得たが早いか、ばたばたと二階の処置室へと連れてゆく。

「ファルマ君がキレたわ」

エレンの眼鏡がずれた。

「ファルマ様が声を荒げるのは初めて見ました。本当に、緊急なのでしょうな」

セドリックが書類を揃えながら呟く。

二階の処置室にて、少年は身長と体重を計測した後、ベッドに寝かせられて暴れていた。

その間にファルマは診眼の結果をもとに血漿浸透圧を求め脱水推定量を見積もり、体液補正のために必要な諸々の計算を済ませる。

「離せー！ 針さすなんて聞いてねーぞ！ 何する気だー！ 薬師は信じらんねえ！」

「ロジエさん、この子暴れると危ないからおさえについて」  
ファルマは男手を呼んできた。

「輸液デスネ。オマカセクダサーイ」

ネデル国出身、アルバイトの青年薬師ロジエは、筋肉で解決するタイプの薬師でもあった。

「ファルマ君、輸液は何を？」

エレンが輸液製剤を準備する。

ファルマは既に、点滴を何種類か作ってパッケージングしていた。  
「0・9%生理食塩水。2時間ほど、時間をはかって。そのあとは0・45%に。その後は容体を診ながらカリウムを適宜補っていく」  
「俺が死んだら、悪霊になってお前ら呪ってやる！」

少年が左手を振り回して暴れているので、ファルマは利き手なのだと推察する。

「利き手は左だな。じゃ、右手に刺すぞ」

ゴムの駆血帯を少年の腕に巻き、少年の右手に静脈留置針を刺入する。留置した針に、点滴との延長チューブを接続した。

「流速は早くなっていいの？ 早くアシドーシスを解消したほうがいいわよね」

というのは、エレンの質問だ。

「脱水を起こしている可能性が高いから速めがいいけど、速すぎると脳浮腫を起こす可能性があるから速すぎないようにね。気を付けてしっかり管理しないと」

急なアシドーシスの補正や血糖の低下が脳浮腫の原因になるはずだから、補正のための重炭酸ナトリウムは使わないようにねと、ファルマは思い出しながら付け加えた。特に子供は脳浮腫を起こしやすいため、脱水の補正が終わってから、インスリンの投与につづる。

「脳がむくむのデスね、それは大変デース」

ファルマ、エレン、ロジエの三人が輸液について話し合う。

針を刺された頃になると、三人の薬師にベッドサイドをがっちり固められた少年は観念しはじめた。

「針を抜くなよ。今日は入院だ、いや、二週間ほど入院してもらおう。」

親御さんや連絡すべき人がいるなら、薬局から使いを出して連絡するから教えてくれ」

「親方だけだ」

「わかった」

親方の住所を聞き、ファルマは少年の病状と暫く入院する旨を伝える使いを送った。

「ファルマ君。1型糖尿病の治療薬は……インスリンだったわよね。ケトアシドーシスが改善されはじめたら、投与すべきなんじゃないの？」

エレンがファルマの教科書を片手に質問をする。

「ああ。そうだ……その通りだよ」

ファルマは頷くが、その言葉は歯切れが悪い。

「もしかして、インスリン、ないの？」

エレンの顔が青ざめた。

（……ついに、このときがきたか）

ファルマは固く拳を握りしめる。

「ないといえはないし、あると言えばある」

「どっちなの」

「数回分はある、でも足りないんだ。だからといって、すぐには造れないものなんだ……」

そう、インスリンは単純にファルマの物質創造能力では創れない薬なのだ。

歴史的に、インスリン製剤はブタやウシから精製されて実用に使われてきた。しかし、歴史的には初期の抽出、精製技術は未熟で、患者に投与するとひどいアレルギーを引き起こし、また収量も安定

しなかった。ファルマの研究室の研究設備は、近世初頭のそれとさほど変わらないため、抽出、精製技術を過信できない。

これからウシやブタを探して悠長にすり潰していたのでは到底間に合わない。また、一回こっきりではなく、継続的に抽出してゆかなければならないとなると、ファルマの選択肢からは外れた。異界の研究室から持ち帰った試薬を用いて遺伝子工学的に大腸菌などにインスリンを大量合成させることもできないではないが、配列がわかっていたとしても数日はかかる。配列がわからない場合は、この方法は使えない。

インスリンは今、必要なのだ。

「インスリンは、単純な化合物ではないから」

「タンパク質だったわよね」

エレンは、ファルマの教科書を広げて、アミノ酸の項をアルバイトの薬師たちに見せる。おさらいをかねて、だ。薬局の患者の処方を終えた二人のバイトの薬師たちも、処置室に上がってきていた。

「そう。これが、人の体で使われているアミノ酸だ」

ファルマはそれらの一覧を見ながら、渋い顔をしている。

< i 1 8 3 3 2 5 — 2 4 9 6 >

「タンパク質はこれらのアミノ酸ひとつひとつを、決まった順番で数珠つなぎにしたもの、ペプチドから成っている。簡単に言えば、決まった順番にアミノ酸をつなげて折りたためばタンパク質なのだけど……」

ファルマが薬師たちに説明し、エレンが言葉をつづける。エレンはかなり教科書を読み込み、自習をしていた。

「問題はその順番なのね。インスリンの順番は分かっているの？」  
インスリンのアミノ酸配列は数十もある。

さすがのファルマも、その配列がどうだったかまで記憶してはい



ない。

（迂闊だったな、サンガーのやったDNP化による構造解析を再現してでも配列を解析しておけばよかった）

そんな後悔をしても遅い、

「覚えてはいない」

ファルマはまいったというように額に手を当てた。

（研究室にもう一度行けたら、インスリンの配列ぐらい調べられるけど……）

今から聖泉の裏の異界の研究室に行くのでは、かなり時間の無駄になる。

「何とかして順番が分かる方法はないのかしら。インスリンは顕微鏡では見えないのでしょうし」

エレンの言葉を聞いたファルマは、はっとあることに気付いた。

「でも……分かる、かもしれない。ちょっと待っててくれ」

ヒントをありがとう、エレン！ とファルマは叫んで飛び出していった。

ファルマは四階の実験室へと駆け上がる。

エレンのおかげでひらめいたのだ。ファルマは異界の研究室を訪れたとき、数々の試薬と共にインスリン製剤のバイアルも一本だけ持ち出して帰っていた。

だからといって、それは一本ぽつきり。

数回投与してしまえば、なくなってしまう。

インスリンを数日以内に合成できなければ、少年は死ぬのだ。

四階の研究室の試薬保管庫の中から、インスリンバイアルを取り出した。

ファルマは白衣をまくりあげ包帯の巻かれた腕をあらわにし、サロモンから与えられていた神封じの破戒符を取り除く。能力を全開

にしなければ、おそらくそれは見えない。

「見えてくれ！」

久しく使っていなかった特殊能力を使う。

右手を環状にし、対象を観ることによって発動する「拡大視」を使い、インスリンのアミノ酸配列を直接その目で観に行く。かなり無茶をしているような気もするが、原子間力顕微鏡や、X線構造解析だと思えば、できなくなさそうだ。これ以上拡大できなくなった最大倍率に到達したところで、さらに光学顕微鏡を間にかませて拡大視を試みる。

「見え……た！」

ファルマはアミノ酸をひとつずつ読み取り、配列をノートに書きとり始めた。といえは簡単に聞こえるが、読み取るといっても、明らかに構造が特徴的であるものを除き、アミノ酸配列は非常に似通っていて肉眼では殆ど区別がつかないものもある。そこで彼は、ジニトロフェニル化を使って先頭にあるアミノ酸だけを標識し物質消去を組み合わせて、パズルを解くように消えたものを順に繋ぎ合わせ推測し、配列を決定していった。

そして最後に、できたアミノ酸配列を物質消去で消していった、合成が正しくできたことを確認した。

そして一時間後、ファルマは研究室から降りてきた。

「できた……これがインスリンだ」

「こんなに大量に！　どうやって合成したの？」

「原理的には、ペプチド固相合成法……つまり、アミノ酸一個を固定して、そこから順番にアミノ酸を一個一個くっつけていったんだよ」

「でも、違うやりかたで作ったのね」

サロモンが封じてくれたと言っていた腕の薬神紋が白衣の下からまるまる透けて見えることから、エレンはファルマが薬神の能力を使ったのだと察する。元に戻すのを忘れていたらしい。

「緊急だからね。集中力使い果たして死ぬかと思った」

「細かい作業だったってことは伝わるわ。目が血走ってるわよ、ファルマ君」

エレンがファルマをねぎらう。

「おつかれさまです」

すみのほうで緊迫のやりとりをうかがっていたロッテが、そっと蒸しタオルをファルマに手渡した。薬師たち全員にもだ。

それを有難く目の上に載せながら、ファルマは、一つの思いを胸にいだく。

（やっぱりアレを使わないといけないな）

今回、ペプチド結合で繋いだのが数十のアミノ酸だったからよかったようなものの、配列が数百にもなれば、ファルマの集中力がもたない。また、ミスもありうる。今、ファルマが汗水たらしてやった方法を、いとも簡単にやってみせるものがある……のだ。

（化学合成じゃなくて、バイオ医薬品の開発も進めないと）

バイオテクノロジーを使えば、化学合成では不可能だった数々の創薬が可能となるのだ。薬学者であったファルマは、ありとあらゆるノウハウを知っていた。

「ファルマ様。インスリンを投与なさらないのですか？」

レベッカの言葉で、ファルマはわれにかえる。

「ああ、やるよ」

その日、1型糖尿病の少年に対し、異世界薬局初のペプチド薬であるインスリンの投与が行われた。

「これでひとまず安心だ……」

少年にいたわりの声をかけながら、薬師たちは交代で彼の容体を観察する。泊まりの番は、ファルマとエレンが引き受けることになった。常勤薬師の定めだ。

夜半になるころには少年の親方も見舞いに来て、牛乳売りの仕事は暫く自分が代わりにやる、と言って少年を励まし帰っていった。

「いい人じゃないか、親方」

宵の口、しばし少年とふたりきりになったファルマが、少年に話を向ける。

「すぐ怒鳴るけどな」

「ひとつ聞きたかったんだけど……君は薬師に相当な恨みがあるんだな。何でだ？」

聞けば、効かない薬を三級薬師に売りつけられた拳句、母親を亡くしたのだという。

（よくある話だ……）

この少年に限らず、この世界ではどこもかしこもそんな話が転がっていた。

ファルマが帝都市民に現代医薬品を供給し始める前は、平民の医薬事情はそれはもう酷いありさまだったのだ。

「薬師は信じられないか」

少年はばつが悪そうにして、そっぽをむいた。

「俺のことを信用しないなら、それでもいい。でも薬を打って、楽になったとしたら。それが答えだ」

「……」

少年は唇を噛んで、悔しそうに黙りこくる。

「今後はこの薬を自分で管理して自分で投与してもらう。毎日な。そう、君自身が主治薬師になるんだ」

ファルマはインスリンの投与方法を少年に教えた。インスリンの

溶かし方、注射器と針の扱い方、投与のタイミング、その他彼に必要な知識を、必要なだけ。

ディスプレイの注射器と注射針を渡す。

自分で血糖値をはかることができないので、炭水化物量の計算をして、インスリンの投与量を決める。その方法、食物リストを渡して教え込んだ。

「どう？ 難しくないだろう。この注射とは、一生の付き合いになると思ってくれ。量を減らすことはできるかもしれない、でも、注射をやめることは、基本的にはできない」

「一生……」

減らず口を叩いていた少年はその途方もない時間に思いをはせ、絶句する。

「でも、他の方法が見つければ、一番に君に教える。必ず見つけるつもりだ。だからそれまでは、約束だ」

「お前……いいやつなのな」

少年は、ファルマに聞こえるか聞こえないかの音量の声で、ぽつりと呟いた。

「これで一安心なの？」

エレンが尋ねる。

「いや、かなり心配だよ。簡易血糖測定機も作らないとな。超速効型や持効型のインスリンアナログも今後に備えて用意しておいたほうがいいな」

課題は山積みだった。

二週間後、元気に薬局を退院した少年から、ファルマは三分の牛乳を報酬として受け取った。

「確かに治療費は受け取った、本当の治療はここからだけだな」

自らが自らの責任で、自らの健康と命を守る。少年にはその自覚が芽生えていた。

「世話になったな…… 宮廷薬師。インスリンだったか、薬は忘れずに打つ」

「はは、宮廷薬師か。当初のヘボ薬師呼びから進歩したもんだ」

「うるせえ！」

「できれば毎日診察に来るんだぞ。薬はその時に渡すからな」

「わかったよ」

その翌日も、薬局には牛乳が三本届いた。

毎日、三本ずつ。ファルマの診察のついでに。ファルマは彼の持ってくる牛乳と引き換えに、低血糖予防にすぐ飲めるようスティックタイプでブドウ糖を渡している。また、インスリンもその日使うものを調製して渡している。

「診察に来いとはいったけど、牛乳も毎日持ってくるとは」

それならばと薬局職員たちが仕事前に飲み、ときにロツテが美味しく調理に使った。

ファルマは少年に、帝都民が安全に牛乳を飲めるようにと低温殺菌、生乳からの管理の方法を教えた。少年は親方につけて販売用の制服をつくり、身だしなみに気を付け清潔感を出した。ファルマの指南の受け売りだ。

ファルマが美味しくなったその牛乳を女帝にすすめ、女帝はいたく気に入った。

少年の売る牛乳は「宮廷御用達の高級牛乳」として、今では人々の人気を博している。少年はますます忙しく、きれいに改造した手押し車を押して、元気に帝都を駆けまわっていた。

## 5章3話 牛乳売りの少年と、少年薬師（後書き）

### 【謝辞】

本項は、「やる気なし英雄譚」の作者で内科医の津田彷徨先生、医師の風水狂先生、糖尿病内分泌科医のnekojita先生、薬剤師の児島悠史先生、看護師の禅先生にご指導いただきました。ご協力ありがとうございました。

## 5章4話 鎧の齒車

神聖国の大神殿に附属する大神官執務室。

そこでは、サン・フルーヴ帝都教区神官長コームが大神官ピウスへ、ファルマの近況を報告していた。

「あの件以来皇帝が神殿を目の敵にしております。薬神と接触するのが難しくなっております。皇帝は神殿の内情に詳しい者を側近に置いているのではと。こちらの動きを手取るように読まれておりまして」

神殿の帝都での活動は制限され、神殿密偵の諜報活動にもかなりの支障が出ていた。

神殿の動きは帝国の監視下にあるので、ファルマの尾行も難しければ、ド・メディシス家への密偵も女帝の親衛隊に潰される。

大神殿の息のかかった神官たちがファルマと出会える場合は、皮肉にも異世界薬局のみであった。

そこで帝都教区の神官は、ファルマに警戒されながらも、毎日のように薬局に通って薬を買っており、ただの常連客と化しつつあった。最近、常連客として馴染んできたのか、ファルマに直接声をかけられるようにもなつて、偵察に送った一部の神官は「声をかけていただいた！」と喜んで帰ってきた。

「それで？」

「薬神の神力量に、わずかながら日周期的な変動があるのです」

「ほう、それはどのように」

ピウスは興味深そうに聞き入った。平日昼間はファルマの神力量が抑えられている、とコームは話す。高感度型神力計で帝都全域に及ぶファルマの神力を測定したところによると、夜間は神力が強く、昼間は減弱するという。

減弱とはいっても、一般的な基準からすれば人間離れた凄まじ



い出力であつた。

彼の行動範囲を中心に、悪霊の近づけない一大聖域を形成している。

「よくぞ調べた。ということは、日中は不調なのだろうか」

「このところ、腕を押さえたり気になさるしぐさが目立ちますので、腕に何らかの術を施しているのではと。例えば、神力封じ込めを行う術のような」

コームは、ファルマがここ数週間、やたらと腕を気にするようになったという報告を部下から受けていた。

「薬神が神封じを知っていて、わざわざ自分に施すだろうか」

神封じの術を知られているということは、神殿の手の内を完全に読まれているということになる。ピウスは苦々しそうに顔をしかめ、頬杖をついた。

「神力が有り余っておられるか、人の姿を保つためにそうしておられるのではと」

「勿体無いことだ、その神力を僅かずつでも集めればかなりの神力が絞れるだろうに」

ピウスは、大神殿が各地の守護神殿で所有する秘宝リストに目を通していた。

「これがいい」

リストをあらため縦に滑らせていたピウスの指先が、とある秘宝の上で止まった。

… … … … …

穏やかな陽気の朝、ファルマ、ロット、セドリックがいつも通りに薬局に出勤すると、薬局の前のベンチに座って途方にくれている帽子を目深にかぶった一人の若い女を見かけた。

長く黒いローブを着たいでたちから、旅の薬師のようであつた。

「おはようございます。お待たせしました、今店を開けますね」

てつきり彼女を、新たな薬草などを売り込みに来た売人と考えたファルマは朗らかに声をかける。

「おはようございます、あのっ、違うのです。私、旅の二級薬師でジュリアナと申します。道中で強盗に遭ってしまって、薬とお金を全部失ってしまって。町の人に聞いたところ、このお店に相談に行くといいとお聞きして……」

ジュリアナは薬を盗られた恐怖を思い出したのか、瞳に涙を浮かべていた。

「ああ、事情は中で聞きましょう」

ファルマは店を開け、彼女を招き入れた。

話を聞けば彼女は下流貴族の薬師で、修行のために旅に出ていたのだという。

（女薬師が薬を持って、そんな一目で薬師ってわかる格好で一人旅って…… 帝国はまだこれでも安全なほうだけど、道中危なすぎだろ。薬なんて高価なんだから金づるだぞ）

ファルマは彼女のあまりに無防備な様子に、襲われたのも無理はないなと推し量る。

薬局薬店は高価な薬を取り扱っているため、他国では強盗に遭わないよう用心棒が必要なぐらいなのだ。

異世界薬局でも襲撃に遭わないよう騎士の門番を置いている。それでも、襲撃に遭うこともある。

「それは災難でしたね。何の薬を盗られたんです？」

「はい、腹痛の薬と、頭痛の薬と、解熱剤です」

「サリマナカルビネス、イトメールと、月見草のポーションなどですか？ 当店にもありますよ」

ファルマがジュリアナの話を聞きながら薬品庫の鍵を開けて物色していると、エレンも出勤してきた。

「おはよー、あら、どうしたのファルマ君。今日は開店が早かった

のね」

「お客さんではありません。お気の毒な旅の薬師さんのジュリアナさんですっ、盗難だなんて許せないと思います！」

ロッテがエレンに経緯を話しながら、掃除や開店準備をてきぱきと行う。

ジュリアナは応接コーナーに案内され、居心地が悪そうに萎縮して座っていた。

「薬、全部ありましたよ。こんな感じでいいですか？」

ファルマは、二級薬師が各地で一般的に扱っていると思われる伝統薬を一式引っ張り出してきた。一級薬師、宮廷薬師にしか扱えない薬は省く。

現代薬の処方が主流の異世界薬局だが、どうしても伝統薬の処方を希望する患者や不定愁訴の患者のために、在庫は揃えていた。大抵は現代薬も同時に処方したものだ。

「あのっ、そんなわけには。これ、どれも高価な薬ばかりです」

ファルマが薬を手渡そうとすると、ジュリアナは首を振って慌てた。しかしファルマは薬を手ごろなカバンに詰めながら、すっかり贈呈モードに入っている。

「困った時はお互いさまです。これだけあれば売って路銀にはなると思います。再度の盗難に気を付けて、お国元まで無事におかえりください。それから、服は薬師のコートでなく平服がいいですよ、薬師だと分かるとまた襲われます。服がそれしかなければ、お貸しますけど」

「そんな……これほどのご厚意に、ただで甘えるわけにはまいりません、では、代金は体でお支払いします」

ジュリアナはすっかり畏まってしまった。

「あなた旅人だから知らないと思うけど、ファルマ君は超がつくほどのお金持ちだから、彼にとっては大した金額じゃないのよ。思い切り甘えたらいいわ」

エレンが冗談めかして、ジュリアナが遠慮をしないようにフオロ―する。

この頃のファルマはというと、ブリュノの資産を含めず関連薬局、薬店の売上を連結しなくとも、異世界薬局の売上と、宮廷薬師としての給料だけで帝都で五本の指にも入る財産家になっていた。

帝都の納税者番付にも個人名でランクインしている始末だ。

最近では、総資産でブリュノを抜くのではないかとファルマはひやひやしている。

稼ぎに稼ぎまくっているファルマだが、黒死病の特効薬を創り帝都を守り、なおかつ数々の新薬を世に生み出し続ける薬師としての名が次第に広まり、恨みを買ったり僻まれたりということも最近ではなくなっていた。

「体で……？」

そしてそんな帝国有数の大資産家のファルマであるが、妙齡の女性の放った「体で」という爆弾発言の破壊力にやられて固まってしまった。

「あらら、真に受けちゃった。ファルマ君そういうの耐性ないんだから、からかつちゃだめよ」

エレンが面白がる。

「ご迷惑でなければ、この薬局で働かせてください。私、掃除でも雑用でも何でもしますので！」

ジュリアナは床にひれ伏しそうな勢いで懇願する。

「礼とか気にしないでいいですから、薬を持って帰ったらいいですよ」

異世界薬局の職員は六人もいたし、最近では人手も足りていた。

ジュリアナの素性も知らないし、現代医薬品の知識の欠片もない薬師はこの薬局では通用しない。

「働かせてください！ 勉強させてください、お願いします！ それとも、お、お邪魔ですか……？」

（うーん、職員足りてるしな）

ファルマとしては、正直なところ帰ってほしかった。

これまでも、異世界薬局へ弟子入りを申し込んでくる薬師は星の数ほどいたが、彼は軒並み、秋から教授を務める帝国医薬大学校に入学し、あるいは聴講手続きを取って薬学を学ぶようにと断ってきたのだ。現代薬学は、一朝一夕で教えられるものではないし、中途半端な知識で薬を取り扱わせるのは危険だ。

職員以外の人間に、薬局の裏方を見られたくもない。

「そんなに言うなら、どうするファルマ君？ 他国の薬師の仕事を見たいって気持ちも分からないでもないし」

それに対して、エレンはジュリアナに同情的だ。

「うーん……」

ファルマはエレンが強く押すのでファルマは仕方なしに許可することにした。

「まあ、数日ならいいんじゃない？ でも、君は薬を処方したらだめだよ」

「はいっ！ 薬は処方しません。精一杯働きますっ！」

ジュリアナは薬局の手伝いをはじめた。

彼女は働き者で、きわめて真面目だった。雑用や掃除から始まり、どんな言いつけにも手を抜かず、そのうちアルバイトの薬師やエレンから少しずつ現代薬の調剤を習いはじめると、計量も計算も完璧で、事務もそつなくこなし、ファルマの教科書を熱心に読み込み、時に職員たちと食事や買い物をして打ち解けはじめた。

何をやらせても飲み込みが早く、足手まといにはならなかった。

（ただの薬師にしては能力高いな、この子。これだけできる子が、二級薬師なのか）

見どころがあるな、とファルマは高く見込んだ。

無一文になってしまったというジュリアナであったが、彼女の修

めていた薬師としては珍しいスキルに、神術按摩があった。

杖を通して神力を患者に注ぎかけながら体をもみほぐし、体液のめぐりを整えるというものだ。ジュリアナは薬局の休憩中、職員たちの慰労のために按摩を施した。

ジュリアナの施術を終えたエレンは蕩けそうな顔をしていた。

「あー、いいわ。肩周りの調子いいのよね。ジュリアナちゃん、薬なくてもこれだけでも食べていけるわよ！」

「はいっ、エレオノール様に褒めていただけるのは光栄です」

エレンはジュリアナの按摩を気に入っていた。

「ですよねっ、体全体が踊り出しそうですよねっ！」

ロツテは目をらんとさせている。

「うふふ、ロツテちゃん、神力を注がれるのは初体験ね、刺激的だったかしら」

（ロツテはオーバーチャージだな。何かの薬キメたみたいになってる）

生まれつき神力を持たない平民へ神力を当てるのは、加減がいりそうだ。

ファルマが傍観していると、エレンが彼を誘った。

「ファルマ君もやってもらったら？」

「体がほぐれますよ」

よほど気持ちよかったのか、エレンとロツテが交互に薦めるので、ファルマも試してみることにした。

「じゃ、俺もお願いしようかな」

診察室の個室ベッドの上にファルマが俯せになると、ジュリアナは杖全体をローラーのように使ってもみほぐし、杖の先端でぐりぐりと体の各部を押すマッサージをはじめた。

ファルマの神力が強すぎてジュリアナから注がれる神力は微塵も感じなかったが、マッサージ効果だけは体感できた。

（あーこれいいな。体全体がパン生地になったみたいだ）

「ジュリアナさんのこの神術には何か体系があるの？ 詳しく聞き

たいんだけど」

「はい、神術按摩の修練課程を修めておりますので」

「へー……不定愁訴の治療にいいかもな」

「というのは何でしょう」

「薬では治らない症状のことだよ」

「はい、そういった場合にもこの神術を使っています」

薬局を訪れる患者の中には、診眼で視てもどこも悪くなく、診断がつかないケースがある。

いわゆる、頭痛、肩こり、腰痛、腹痛、不調などの、患者からの訴え、主訴ははっきりとあるが検査をしてもはっきりした原因のない不定愁訴というものだ。痛みというのは主観的なものであるため、不安やストレスでも増幅されたりと、第三者が介入することが難しい。

医学、薬学的には、治療の適用範囲外であれば治療ができない。

気休めの治療をしてはならないからだ。

主訴の原因が分からないので検査のために各診療科をたらい回しにされ、漫然とリハビリプログラムなどを受けるも改善なく、そのうちに現代医学に失望し民間療法やその他の方法に手を出したり、効果のない薬をつかまされる、というパターンも、現代日本ですらまある。

そういった患者の愁訴に対して、ファルマは最近、ある部分では神術が有効なのかもしれない、と思うようになった。特に、肩こりや腰痛、頭痛その他の愁訴に対しては、神力を込めて患部をさすることと気休め以上の効果があった。この世界の薬師、医師はそうやって患者の痛みを取ることもあった。エレンは言う。神力の強い神術使いは得意としているようで、ブリュノはその分野でも有名人だと聞いた。

以前のファルマであれば「オカルト」と片づけてしまっただろうが、杖で神力を増幅して患者に注ぎかけるこのジュリアナの施術の効果を医学的に検討して、効果があるようなら異世界薬局でも応用

した方がいいかな、とそんなことを考えた。

「ランダム化比較試験で効果判定してバイアスを除き、プラセボ以上の効果があるかを調べるかな」

「ぶらせぼ……？」

プラセボ効果というのは、本来効果のないものであるにも拘わらず、暗示によって体に効果が出てしまうことだ、と説明する。例えば、薬としては効果のないものを飲んでも、本人が薬だと思い込むことによって体調がよくなる、といった具合に。

「新たな薬にしても治療にしても、きちんと効果があるかを統計学的に調べないと、それは思い込みによる偏った結果でしかないからね。患者さんのためにも、データはしっかり取っていかないと」

統計学的解析についても、かいつまんでジュリアナに話す。

「ファルマ様は、幼く見えますのに数多くの物事をご存じなのですね」

ファルマがジュリアナとそんなことを話しながら、施術を受け気持ちよさにまかせてまどろんでいた時だった、

「ん？」

ファルマは不穏な気配を感じ、ぞくりとして背後を振り向いた。

「どうしたの？」

「いつ、いえ！」

「俺、なんか変なこと言った？」

ジュリアナは怯えたように肩をすくめた。彼女は持っていた杖を手放していた。

「ごめんなさい。集中が途切れました、つ、続けます」

その後のジュリアナは、日に何度か思いつめたような表情をすることがあった。また、彼女は相変わらず完璧な働きぶりを崩さなかったが、表情は曇り、段々と口数が少なくなっていた。

（どうしたんだろう）

ファルマが彼女の様子を気かけはじめ、そんな日が続いたあ



る日のこと。

薬局から、ジュリアナの姿が突然消えた。

「あれ、ジュリアナちゃんは？」

薬局の職員たちは、帝都で迷ったのかもしれないと搜索をはじめた。だが、思い当たる場所を探しても彼女は見当たらない。ママさん薬師セルストの情報ネットワークを駆使しても、新聞屋に聞いても情報は上がってこなかった。

「サン・フルーヴ帝都は広いデス、搜索は無理デスね」

ロジエは帝都中を馬で走り回って目視で探して、くたびれていた。「私が迷いましたーひーん、ごめんなさいー！」

レベッカも、ほうぼう探して逆に自分が迷って憲兵に連れられて戻ってきた。レベッカはどうやら方向音痴のようだ。

（何か身体的な特徴がないか、診てればよかったな）

ジュリアナに持病があれば、ファルマは診眼で屋内、屋外を問わず帝都の人間を透視して彼女を見つけることができた。だが、彼女を診眼で診てはいなかったのだ。

「もうお国に帰ったのでしょうか。お別れ会、したかったです」

ロツテは名残惜しそうだ。

「黙って帰る子には見えなかったから、何かトラブルに巻き込まれてないといいけど」

エレンは最悪の想像を紛らわせるように自分の眼鏡を布でふく。

「途中から何か、悩んでるように見えたな……」

ファルマはカルテをそろえながら、窓の外の帝都の景色を眺めた。

その日、ジュリアナは見つからないまま、薬局を閉める時間になった。

帝都の空を分厚い雲が覆い、激しく雨が降り始めた。

「帰ろうか」

セドリック、ロツテと共にファルマが馬車で自宅に帰ろうとして

いたとき、ロツテが足を止める。

「私、ジュリアナさんを探したいです。雨が降ってきましたし……もし、まだ帝都のどこかで迷っているのなら……」

今頃ずぶ濡れになっていないでしょうか、とロツテは彼女を案じている。

「そうだね、もう少し探して帰ろう」

三人は帝都の通行人を捕まえて聞き込みをしたり、憲兵に尋ねた。そしてようやくのことで、ジュリアナに似た若い女性が、帝都で一番高い建築物を探していたかもしれない、という情報を仕入れた。(まさか……思いつめて?!)

「ロツテ、セドリックさん、家に戻ってて!」

ファルマは二人をその場に残し、駆け出して帝都の路地を曲がった。

「ファルマ様!？」

ロツテがファルマを追って路地を曲がると、ファルマの姿はそこにはなかった。

「あれ、ファルマ……様?」

ファルマは薬神杖で飛翔し、帝都の鐘塔の全てを空中から調べてまわった。

そして、帝都で最も高い鐘塔の隅に、一人の女性の姿を見つけた。ファルマは雨音に紛れ、音を立てず彼女の背後に降りたち、ゆっくり近づく。鐘塔の鉄柵を乗り越えて、彼女は雨に打たれながら一人うずくまっていた。彼女の目の前には手すりも柵もなく、落ちれば即死の高さだ。足を半分、塔の縁にかけている。

飛び降りる躊躇っているようにも見えた。

「何も話さなくていいから、そこを動かないで」

ファルマは静かに声をかけた。彼女ははっと顔を上げ、慌てて立

ち上がった。

「……ファルマ様……」

「動くなよ、そこを」

「来ないでください……合わせる顔がありません。嘘なんです」

彼女はファルマに正対し今にも飛びそうな状態になったまま、自白した。

「私、旅の薬師でもなければ、盗難にも遭っていません」

「それがどうした」

ファルマはまるで意に介さず答えた。

「そんなの全然構うもんか、何の事情があつたからといって、君が飛び降りないといけない理由はないだろう」

ファルマは薬神杖を握り込んだ。

もし、彼女が早まって身を投げたとしても空中で受け止められる準備は整えた。

「もしそのつもりがあるのなら、話を聞いてからでも遅くない」

彼女は泣き崩れた。

「私は、大神殿の医療枢機神官でございます」

鐘塔の柵の内側に彼女を連れ込み、彼女の語るのを聞いた。

彼女は苦しそうに口を開く。

「ファルマ様に近づき、籠絡し神力を奪ってくるというのが、私の使命でした。でも、あなた様のことを知れば知るほど、……それができなくなりました。守護神様から神力を奪うなど、そもそも信仰に反します。できません。けれどもそれは神殿を裏切ることになり……もう、私は飛び降りるしかありません」

「何でそうなる？」

「飛び降りなくても命はありません……私には呪いがかけられています。じわじわと呪いに蝕まれて、やがて人の心を失って……他の人を傷つける前に、死にたいと思いました」

ファルマがさらに詳しく事情を聞いてみると、

「神殿枢機部の秘密を知る枢機神官は、叙任時から神殿を裏切れないように呪いを刻まれています。大神殿に戻って呪いを浄化する薬を飲み続けなければ、人の心を失って死ぬのが定めです」

（そんなエグイものがあるのか……前から思ってたけど、神殿上層部ってヤバすぎるな）

「その呪いの印はどこにある？」

彼女は首を振って言おうとしない。ファルマが診眼で視ると、うなじに青黒い紋様が刻まれていた。その紋様は彼女の肌に根を伸ばし始めていた。

「酷いことをする」

大神殿のやり口の汚さに、ファルマは怒りを覚える。だが、そうまでして組織力を高め、一体何をしようとしているのか。薄気味悪くもあった。

「触るよ」

ファルマはそう言うなり、濡れた彼女のうなじをいきなり鷺掴みにした。

「ひうつ……ん！」

いきなり掴まれたので思わず悲鳴を上げ、彼女は目を瞑る。ファルマが呪紋に神力を押し付けるようにすると、呪いは完全に消滅した。

「消えたよ。君はもう自由だ」

「え……えっ!？」

彼女は放心状態になった。

「この呪いを消せる術はこの世のどこにも存在しないのに……」

「じゃ、俺だけできるんだろ」

「ファルマ様は、やはり歴代の守護神様の中でも飛びぬけて強大なお力を持つておられます……ここ何百年、守護神様は現世に降りてこられなかった。数柱の守護神様の神力を一身に宿したかのようなそれを聞いて、つまり現れなかった何代かぶんの守護神の神力がキャリアオーバーされたってことだろうか、などとファルマは理解

する。

「俺、そんな大層なものでないから、身構えないでいいよ。中身は君と同じ人間だと思ってくれると嬉しい」

薬神の力は宿っていても、ファルマの心境としては徹頭徹尾人間のつもりでいるのだ。

「大神殿は俺の神力を使って何をしようとしているんだ？」

「壊れゆく世界を、“かすがい銕の齒車”で繋ぎとめています。世界と世界を繋ぐ銕が外れないようにするために、齒車で締め上げているのです。その器械を動かすには、守護神様の神力が必要です。たとえ守護神様を傷つけ信仰に反することをしてでも、浸食されゆく世界の崩壊を食い止めるためにはどうしようもないのです……」

「壊れゆく、世界？」

彼女が大神殿の枢機部に所属するが故の、予想外の大暴露。

サロモンは、大神殿は歴代の守護神をおびきよせ、消滅するまで大神殿に封印してきたと言っていたが、その裏にはそんな事情があったらしい。

神殿上層部を狂信者の集団だ、とばかり思っていたファルマは混乱する。

（本当なのかその話？）

ファルマは診眼を使って、彼女が嘘をついたか手がかりを得ようとした。脳への血流、脈拍、体温等に変化はない。それだけを測定する、いわゆる嘘発見器ポリグラフは科学的に全く根拠のないものだ、とはいえ、嘘をついている時に活性化される脳領域を診れば彼女が嘘をついているかの手がかりになる。

彼女の脳生理学的な状態はいくつかの質問を終えた後も変わらない。  
い。

（本当なのかもな……だとしたら、神殿が俺を拘束して神力を搾り取ろうとしているのも、やむを得ない理由があるのか）

「君はどうやって俺の神力を奪って帰ろうとしていた？ まさか俺を倒して引きずって帰れるとは思ってないだろ？」

「神力を吸う性質の秘宝があるので……でも、それはもうできません」

「杖の横に挿してるそれが秘宝か？」

「っ、これは……」

「借りるよ」

ファルマはジュリアナから宝剣を取り上げると、すっと鞘から剣を抜いた。柄からは二本の細い刃が平行に出ている。果物ナイフほどの形状だ。

「プラグみたいな形だな。神力はどうやって吸わせる？」

指先で刃をなぞってみても、血は出ない。刃を握っても変わらない。

「お返してください、絶対だめですっ……ファルマ様を傷つけるなんてできません、こんな間違っています」

ジュリアナは必死で宝剣を奪い返そうとする。

（傷つける？ ……てことは、刺すんだな）

ファルマは思い切って大腿に刃を突き立てた。

ファルマの体は実体ではないので、やはり血は出ない。

多少虚脱感と痛みらしきものはあるにはあるが、耐えられないほどではない。

「きゃああっ！？ ファルマ様！」

「これ、ある種のバッテリーなのかな？」

神力を剣に込めるようなイメージを浮かべると、剣は発光しはじめ激しく明滅を始めた。そして、神力は一定の容量に達すると詰められなくなった。

「これでフルチャージだな。はい、できたよ。もうほかに宝剣はないの？ あと何本かいけそうだけど」

鞘におさめて彼女に手渡す。

その間、ものの二十秒。

「え！？ え？ なんともない、のですか？ この剣には守護神様に激痛を与え、神力を悉く奪い尽くしてしまうという伝承が」

「全然何ともないし、俺の体にある神力も全然減ってないよ。これで君も任務を果たして神殿に帰れるのかな？ なら神力が足りなかったらまた取りにおいで、今渡したぶんですぐ銚の歯車ってやつはもつのか？」

歯車なんだか銚なんだかよくわからない装置だな、とファルマは疑問だ。

「はっ、はい……信じられません」

かなりの期間の歯車の駆動力になるだろう、と彼女は答える。

「その銚の歯車っていうのは神聖国にあるのか？」

「地下神殿の奥深くに、異界への入り口があります。そこから……」  
「じゃ、今度様子を見に行くって伝えといて。それで世界の存亡？ が何とかなるなら協力するから」

騙し打ちみたいなことせずに、普通に話し合いに来てくれたら普通に応じる、と彼はジュリアナに告げた。

「話してくれなければ分からないけど、話せばわかることもあるよ」  
そう言つて、ファルマは笑った。

ジュリアナは翌日、神聖国に戻ることにした。

早く戻らなければ、ジュリアナがしくじったとしてまた新たな刺客がファルマに放たれるかもしれない、とジュリアナは気にしていた。薬局職員は、そんな裏話は知らない。

彼女は最後に、薬局職員全員に心を込めた神術按摩を行った。神術按摩は医療神官がおさめている術だ、とのことだった。そして口ツテの発案で、ささやかなお別れ会もした。

「短い間ですが、皆さまにはお世話になりました」

「もうちょっとゆつくりしたらいいのに……」

エレンはジュリアナを引き止めたがついていた。神術按摩の気持ちよさがやみつきになったのだろう。

「まあ、今回は帰るとして、また遊びに来てよ」

ファルマはあっさりと、屈託なくそう言った。昨日の出来事など、なかったかのように。

「これまで神殿は、人間は守護神様と意思疎通ができないものと考えてきました。でも、……それは大きな間違いでした。ファルマ様が人の心をもっていまして、多くの人のことを考えてくださっていると、お預かりした秘宝とともに、大神官に伝えてまいります」

去り際、ジュリアナはファルマにそんな心境を打ち明け、神聖国へ戻っていった。



## 5章5話 とある公爵家の家庭問題

医療枢機神官のジュリアナは、帝都神殿の用意した馬に乗り、無事に神聖国に帰還した。

彼女が心配したように、すんでのところで、ファルマに次の刺客が放たれようとしていたところだった。彼女の帰還をうけ、ただちに大神殿枢機部で緊急集会が開催される。枢機神官たちの前に出たジュリアナには称賛が集まったが、彼女の表情は暗く、俯いていた。「薬神に取り入り、神力を手に入れてきたと申すか。よくやった」上級の枢機神官に、次々に労われる。

「ありがとうございます」

「どうやって宝剣を薬神に刺した。薬神から反撃に遭わなかったのか」

一人の神官が、至極まっとうな疑問を口にする。

「い、いいえ」

詳しいことは何も言うなど、去り際、ファルマに釘を刺されていた。

洗いざらい話してしまうと、ジュリアナが自殺を試みたこと、神殿を裏切りかけたことを話さなければならなくなるからだ。

「反撃に遭わなかったというのか。では寝込みを襲ったのか？」

「……それは……その」

ジュリアナが返答に困っていると、他の神官が邪推をした。

「やれやれ、薬神といえど色仕掛けでほだされのたか」

ジュリアナの頬がかあつと熱くなる。

「違っ……違います！」

ファルマと、そしてジュリアナへの軽蔑の視線を受け、ジュリアナは悲しみに沈む。自分が侮蔑されるのは構わないが、ファルマを

蔑まれるのは許せなかった。

「で、薬神に取り入った際に見つけた弱点、神力の秘密などはあったか？」

ジュリアナは心無い質問に胸をいためながら、ファルマの人となりを話す。

「ファルマ様はまるで人間のようで、お優しい方でした。私が騙したにもかかわらず、無償でお薬や、温かい言葉も下さいました」

それは幸せな日々だった、と彼女は思い起こす。

「無一文の私をお屋敷で手厚くもてなしていただいて。短い間でしたが、画期的な薬学の知識も学ばせていただきました」

嬉しそうに語るジュリアナを、枢機神官たちは不審な顔をして眺めていた。まるで、ジュリアナがファルマに懐柔されてしまったかのように聞こえたからだ。

「守護神には情がない、あるように見えるなら人間界で過ごすための処世術にすぎん。守護神らは人間を虫けらほどにも思っていない。見かけで判断してはならん。それに過去何度、神殿が騙され人々が虐殺されたことか……」

ピウスが神殿と守護神の過去の争いを振り返る。神殿と守護神の熾烈な攻防の歴史も、神殿の保管する禁書には記されている。禁書の内容を詳しく知らない下級神官は守護神を崇敬しているが、枢機神官たちは守護神を敵とみなす傾向が強かった。

「今までの守護神様がそうでなかったとしても、ファルマ様にはお心があると思います……きっと」

「黙れ！！ 愚か者め！」

ピウスは忌々しそうに一喝する。

「でも、ファルマ様は既に多くの人々の命を救ってこられました……ピウス様も直接ファルマ様とお会いになればお心が変わります」

「ええい、そんなことはどうでもよい、宝剣を出せ」

ジュリアナから宝剣を受け取った神官は、用意された円盤型の、

秘宝用精密神力計に、布に包んでいた宝剣をコトリと置く。神官が手を放した瞬間から神力計が瞬く間に変色してゆき、完全に透明になった。その色が意味するところは……、

「完全充填状態?!」

これ以上含めないほどに神力を吸っている、ということを示す。

「これだけの神力を奪って……薬神はどうなった!? 人型をとどめていられはすまい」

消滅したのではないか、と神官たちが騒然とした。

ジュリアナはどうやって神力を奪ったかという説明は省き、ファルマにはまだ余力があったことを報告する。

「平然となさっていました」

他の神官が神力量を計算する。

「これだけの神力があれば、鎡の歯車を175年分を巻き戻すことができます」

「ふ……ふは、ふはは……アハハハハ! このたびの薬神は化け物だ……ハハハ!」

ピウスは狂ったように笑い続けた。

「確かに。今までの守護神とは神力量の次元が違いますな。これは由々しきことだ、抵抗されれば封神計画が総崩れだ」

他の神官が頭を抱える。

「もし、大神殿に誘い出して封印に失敗し、怒りをかえば……」

「これだけの神力の持ち主ならば、これまでの神封じは効かんぞ」

今回、何のためにこのように強大な神力を持つ守護神が下りてきたのか。

過去数柱分どころか、今後数柱分の神力も吸いつくして降りてきたかのような、と神官たちは口々に話す。

「新たな封印術を構築せねばならん。それも早急に！」

ピウスの裁断が下った。ジュリアナは、それでもトファルマの意志を伝える。

「封印は無効です。それに、こちらが誠実に接する限り、大神殿に協力するとファルマ様は仰せでした。神殿はファルマ様を敵視しすぎだと存じます」

「守護神が、神殿側に歩み寄ってきただと？」

議場内に戸惑いの空気が流れる。そのとき、一人の枢機神官が大声を上げた。

「待て、ジュリアナ。枢機神官の証たる首の聖呪紋が消えているではないか、それはどういうことだ！」

ジュリアナのうなじに刻まれていた呪いの印が消えているのが、見つかったのだ。

枢機神官たちは騒然となった。神殿に忠誠を誓うために枢機神官がその身に刻む、生涯解けない呪い、聖呪、その呪いが完全に消えてしまったとなれば、人間のなせる業ではない。

ファルマにやられたのだ、と糾弾の声が上がる。

「聖呪紋を浄化できるのは薬神しかない！　そもそも、薬神は浄化神術が得意中の得意だ」

「逆に薬神に手籠めにされ眷属にされたか……」

「違います！　ファルマ様はそんな方では」

ジュリアナは必死で否定した。

しかし、彼女が釈明すればするほど、神官たちは疑いを強めてゆく。

「話にならん、完全に洗脳されたな。違うというならば、神殿に忠誠を捧げよ」

ピウスが鼻息をつく。ジュリアナはその場で再度、首に焼きこてで聖呪印を刻まれることになった。火炎神術使いが、聖呪印の烙印

を穿つ杖を持ち、発動詠唱を始める。

杖の先端が真っ赤に燃えている。

「ひざまずき、悔い改めよ」

髪の毛を掴まれ、蹴飛ばされてジュリアナは跪かされる。

「っ……」

膚を焼く痛みに耐えようとぎゅっと閉じたジュリアナの双眸から、大粒の涙が零れ落ちる。しかし、

「なっ！？ 聖呪紋が」

何度やっても、ジュリアナの肌は傷つかなかった。

火傷のあとではなく、呪いはジュリアナの体に入っていかなかったのだ。

「薬神に守られているのか……」

ピウスは、聖呪印すら消し去る薬神の浄化能力の凄まじさを目の当たりにし、圧倒されながらも、その口元には不敵な笑みを浮かべた。

「どうやらお前を、薬神はいたくお気に召したようだ」

利用価値がある、ピウスは側近にばそりとそう言った。

「また、薬神から神力を奪いに行つてこい」

その日からジュリアナは、24時間、神殿の監視下に置かれることになった。

ファルマの意向は大神官に伝えた。だが、相手は「守護神は人間の敵」と疑心暗鬼に凝り固まってしまっていて、聞く耳を持っていなかったのだ。

… … …

「おいファルマ、邪魔するぞー」

薬局の職員たちの装いが半袖になり、汗ばむ季節になってきたころ、薬局に予定外にパツレが馬でやってきた。患者に薬の説明を終え、昼休憩のために店を閉めようとしていたファルマは手を止める。「兄上、どうしたんだ？」

「わっ、パツレ君じゃないの。何しにきたのよ、果し合い？ 仕方ないわね今日という今日は決着つけるわよ！」

エレンは身構え、手が杖にかかっていた。兄と聞こえたからか、店内の患者たちの注目が一気に集まる。ロッテはパツレと聞いて驚いて書類をぶちまけてしまっていた。ロッテは、ロッテのしゃつくりを止めるためにパツレに逆さづりにされそうになって以来、パツレを何となく苦手になっていた。

「あら。店主さんのお兄さん？ 美青年ね」

「店主様とは印象が違いますな」

ファルマの耳にボソボソと、パツレの評判が聞こえてくる。また、若い女性客からは黄色い声が上がっていた。パツレはこんな場所でもモテているようである。

パツレはそんな声に構わず薬局のウォーターサーバーで水を飲み、一息ついてファルマに話しかけた。エレンや他の薬師は眼中にないようだ。そしてカウンターごしのファルマを見おろす。

「お前はいつも忙しそうだな、ファルマ」

「繁盛してますから」

エレンが気取って答える。

「お前には聞いてないぞ」

「あら、失礼」

「そんなところで心苦しいんだが、患者お前に回してもいいか？ 俺には手に負えん」

薬をくれと言うことはあるが、患者を回すとは珍しいな、とファルマは疑問に思う。患者を一人手放すことは、それなりの収入源を失うことでもある。パツレは駆け出しの一級薬師なので、担当する患者もブリュノから引き継いだぐらいでそれほど多くなく、薬の調

達などにコストがかかっていることから、一人の患者でも大事にしたい時期だろう、とファルマは思う。

「何の病気が教えてくれたら、薬を分けるよ。兄上が主治薬師なら、兄上が処方した方がいい。患者さんも安心するだろうし」

ファルマは調剤室に足を運ぶ。ファルマはパツレの疾患鑑別能力には信頼を置いていたので、薬が出せないだけなら患者を回すまでもないと考えた。

「いいや病気じゃないんだ、病気なら俺が何とかする」

「じゃ、何なの？」

パツレのもつたいぶつた言い回しに、エレンがしびれを切らしたように尋ねた。

「家庭問題だ。離婚問題にも発展して、かなり込み入ってる」

パツレは疲れたと言って大きな溜息をつく。

「そんなの、俺に回されても困るよ。俺、まだ12歳だよ？ 離婚問題まで扱えないよ……ん？」

患者や客がさあつと移動した気配がしたので、ファルマが薬局の入り口に視線を向けると、一人の若い貴婦人が侍女たちと共に薬局に来店していた。

「あ、あの奥さま……知ってるわ。公爵夫人。とっても有名よ！」

エレンはサロンで見たことがあると言う。

「マダム、お見えでしたか」

パツレが慌てて立ち上がり、恭しく礼を送り、カウンターまでエスコートをしてくる。

「例の患者さん？」とファルマが視線を送ると、パツレは視線で頷いた。

「こちらに行かれると聞いて……もう、どうしていいか分からないので、ついてまいりましたわ」

「お気持ち、お察しします。この通り、弟は優秀な宮廷薬師でして、弟がマダムのお悩みに答えてくれるでしょう」

パツレは患者である貴婦人に対しては、薬師として態度を変えているようだった。

（ちよ、何言い出すんだこの）

パツレが言外のジェスチャーでお前に任せると言うので、ファルマは仕方なくカウンセリングコーナーに通す。

エレンの情報通り、若い母親は公爵夫人、長男出産後まもなくの状態で重い貧血を抱えていた。貧血の治療自体はパツレが行っているという。悩みの種は貧血ではなく、子供だ。父親に似ていない子供が生まれてしまったというのだ。目の色も髪の色も違う。しかも極めつけに、貴族の子供であるにも拘わらず神力もなかったという。神力のない子供が出たとなると、受け入れがたいのだろうと夫人は言う。

侍女が、ファルマに赤子を見せに来た。確かに、公爵夫人は青髪で夫は赤髪であるのに、子供は黒髪だ。

「可愛いじゃないですか、お子さん。でもそれは……お困りですね」  
ファルマは沈痛な面持ちになる。

「でも、お子さんのお顔は公爵様と似ていると思いますわ」

公爵のことも知るエレンは、似ていると言う。

「私もそう思うのですが、主人からは、神力のない子供を授かったというので、離縁するのですね屋敷を出て行けと……」

不義を疑われた彼女は、子供ともども家を追い出されそうになっているとのこと。

「もう無念で、悔しくて。守護神である風神様に誓ってこの子は主人の子です。たとえ神力がなくても、髪の毛や目の色が違ってても。

何か、それを示す方法はないでしょうか」

「分かりました」

ファルマは頷いた。あまりに痛切な言葉に、彼は夫人を信じることにした。

「外見が似ている似ていないが、親子関係を示す全てではありませんん」



神力を持たない不義の子供と決めつけられてしまえば、孤児院に捨てられる可能性が高い。なんとしても、公爵に自分の子供だと認知してもらわなければならない。

「親子鑑定を行います。それで、この子の父親が誰なのかを立証することができます。客観的に、そして中立的にです」

「お願いしますわ」

公爵夫人ははらはらと涙を流しながらファルマの手を取った。

ファルマは改めて赤子をよく見る。

（ん……？）

「神脈は、ありそうですよ」

以前やったように神脈をさぐると、ファルマには見えた。弱弱しいが、確かに神脈は赤子の中に眠っている。

「ええっ、本当ですか？」

「失礼、ちよつとお子さんをお預かりします。体重を量ってきますね」

そう言って赤子を抱きあげ処置室に行き杖を握り、赤子の心臓のあたりに杖を挿し入れる。無詠唱で「聖泉の湧出」の神技をかけ、赤子の神脈を開いた。神力が溢れ出す。

「うん、脈が細いな」

公爵の子供としては神力量が少ないが、なんとか貴族としての名目は立つだろう。

痛みは無いはずだ、赤子は気持ちよさそうに眠っている。そして、言った通り体重を計って戻ってきた。

「エレン、神力計を持ってきて」

「わかったわ」

エレンの持つてきた神力計のゲージが、わずかに触れた。

「神力が、ある……神殿では、この子に神力はない、神脈が見えないと言われましたのに」

公爵夫人はほつとしたように、薬局を訪れて初めて笑顔になった。「神脈をいじる神術をほんの少し使いました。見間違えたのかもし

れませんね。のちほど、神殿に行つて属性の鑑定をしてもらつてください」

とにかく、神力があればその神力が強かろうと弱かろうと貴族と認められるのだ。赤子は身分を回復することが出来るだろう、と夫人は喜ぶ。

「さ、ではあとは親子鑑定だけです。ここに公爵を連れてきていただけませんか。それから、完全に第三者である証人を」

「主人が、来てくれるかしら……もう顔も見たくないと言われていきますのに」

親子鑑定は、親と子の三者と証人の立会いがなければ無効なのだ。三者の立会いのない親子鑑定をしてその結果をもとに離婚問題に発展しているケースもあるが、そんなの他人のDNAを混ぜればいくらでも偽造できるからな、とファルマは言いたい。

「来てもらえなければ、結果を信用してもらうことができません、無効ですからとお伝えください」

「承知しましたわ。呼んで参ります」

公爵夫人は大きくひとつ頷くと、帰つていった。

「ファルマ君、DNAを解析できるの？ 今は試作・実験段階で、患者さんにやったことないわよね」

エレンが心配そうにファルマに声をかける。彼はまだ、患者にDNA鑑定を行った経験はなかった。彼の手に一つの家族の運命がかっている。

「読みに行くしかない。すべての答えは、その中にあるんだから」

## 5章6話 親子鑑定

「おつ、やるのか親子鑑定。こりゃ勉強になる、ゲノム情報を見るんだろう?」

パツレが身を乗り出してきた。

ファルマは異界の研究室から持ち帰った試薬をもとにバイオテクノロジーを利用した創薬、検査を確立しつつある段階であるが、まだ、親子鑑定を引き受けたことは無い。実際の検査をどのようにするのかは、パツレにも興味があるのだろう。

「一応、手持ちの設備と試薬でできる。兄上、そういうわけで」  
ファルマはパツレに向き直る。

「親子鑑定の準備をしようと思うんだけど、今日はバイトの薬師さんたちに往診や研修に行ってもらっていて俺とエレンしかないんだ。人手が足りない、店の方を手伝ってくれないか」

「じゃあ俺が手伝ってやる」

パツレが親指をぐつと自分に向けた。ファルマはあっけらかんとしたもので、パツレにカルテを渡す。

「ええっ、私が一人でやるわよ」

エレンがのけぞる。

「エレン一人じゃ大変だから、兄上頼む」

ファルマはセドリックに指示をして、薬局の壁の本日の担当薬師を掲げているコーナーに「一級薬師 パツレ・ド・メディシス」の札を新たに掛けてもらった。そして、胸につける名札を渡す。それに待ったをかけたのがエレンだ。

「待つて、パツレ君がこの店にある新薬扱えるの? まず教科書ぐらい読まないと、いくら一級薬師だからって適当に処方されたんじや困るわ。用法用量も、間違えると危ないし」

「その教科書を書いたの、どーこの誰だと思ってるんだあ？」

パツレが嫌味たっぷりに言う。

「俺と兄上の共著だな。心配いらないよエレン、兄上は新人薬師だけど診療をしてもらっても調剤を頼んでも大丈夫だ」

ファルマが相槌をうつ。エレンは薬学のバイブルの著者の一人がパツレだと思い出し、渋々引き下がった。

「あ、そうだ。エレン、ソフィを呼んできてくれない？」

「いいけど、どうして？」

エレンが首をかしげる。

「ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ」

ファルマは、できればこの手を使いたくはなかったが、一部の実験をソフィに頼むしかないと説明した。エレンはボヌフォワ家に使いをやつて、ソフィを呼んでこさせた。

そして……。

「診療が遅いぞエレオノール。診療と調剤を代われ」

ファルマが実験室と調剤室を往復しながら準備をし、エレンが診療をし、調剤をパツレに依頼していると、調剤室のパツレから苦情が飛んだ。パツレは早く患者を終えて、ファルマの作業を見たいのだ。

「なんですって？ そんなに早くできるもんならやってみなさいよ」

エレンはぴくりと眉を上げる。パツレは黒いコートを脱いで調剤室から患者たちの前に出た。パツレの診療スタイルは白衣ではなく私服である。

「早さはどうでもいいから、二人で丁寧にやってよ」

ファルマが作業の手を止めず調剤室から苦言を呈す。

「んなもんだ。一級薬師に診てもらえるんなら有難く思えよ平民ども？」

ファルマたちの腰の低い接客に慣れていた患者たちは、見慣れな

い青年薬師の登場と横柄な態度に戸惑う。

「いきなり何言ってくれてんのよ、パツレ君ってほんつと接客態度が悪いわね……すみません皆様、今日入ったばかりの新人で、緊張しているようで」

「ああ？ 文句があるのかエレオノール？ 表でろ表！」

「望むところよ！」

二人が杖を持って表に出て行こうとしたのでファルマがげんなりした。

「何やってるんだよ二人とも！ 患者さんほつたらかしてたら俺準備できないじゃないかよ」

脳筋過ぎる兄を持つと困るな、とファルマは嘆かわしい。

「ごめんなさい、うちの兄が失礼をして。それでも、腕は確かです。ノバルート医大を首席で卒業してまして、少し自信過剰なところもありますが」

ファルマは患者たちに謝罪がてら紹介した。

「店主さんの兄上か」

「なら、安心だ」

仕切り直しとなり、パツレは視診、触診、聴診おまけにポーションと患者の唾液を混ぜ、反応後のポーションの色と沈殿物、濁り、におい、粘りなどで疾患のタイプを見抜く鑑別神術と、現代医薬品の処方を組み合わせたスピード診療を行ってゆく。

「あんな速さで診て、やつつけ仕事して……ちょっとファルマ君、いいのあれ」

「エレン」

ファルマが調剤室のエレンにメモ用紙を渡す。ファルマがざっと診眼で見た患者の病名と、パツレが神術で鑑定した病名が一致しているか見ているというのだ。

「すご……合ってる」

パツレの診断は、ファルマの診断とまったく一致していた。そして、パツレが手に負えない、薬では治らないものだとなかると、迷

わずファルマに投げた。自分の能力を把握していて、客観視できているということだ。

「悔しいけどさすが、血筋ね。診断能力に長けているところ」

お師匠様の息子だけあるわ、とエレンは悔しそうだ。パツレの守護神が薬神であることも、薬師の能力を左右する。パツレ、そしてブリュノはファルマの聖域の中にいると加護を受けるらしく、神力ももろの能力が上がる。高速診断能力もその一つだ、ファルマが側にいると勘が冴えわたり、集中力も高まる。

「エレンは正確で丁寧な仕事をしてくれるから、俺は助かるけど接客態度もエレンは丁寧だし」

「態度はともかく、パツレ君、速くても間違えないじゃない。新人薬師なのに」

エレンは自信喪失気味だ。

「血筋って凄いわぁ」

（血筋だけじゃないよ）

パツレが、薬学にしっかり神術にばかり、血のにじむような努力をしているというのは、ファルマは知っている。ファルマが白血病を治癒してからというもの、パツレは現代薬学の有効性をその身で思い知り、より一層薬学の勉強に取り組むようになった。

薬学の教科書をほぼ覚えつつあるエレンも努力家だが、どちらかというと天才肌だ。

「なんだ、こんなところに呼びつけて」

大勢の従者を引き連れて、公爵が不機嫌そうに薬局にやってきた。その後に、公爵夫人が入ってくる。ファルマは起立し調剤室から出て公爵を迎える。

「よくぞいらつしゃいました、公爵様。私は宮廷薬師ファルマと申します、この店の店主です」

互いに会釈をする。

「奥様のご依頼により、これからあなたと、奥様と、お子様の三者

間で親子鑑定を行います。鑑定は公平に行います、証人もおいでですか？」

「む、……あなたは、尊爵のご令息で、皇帝陛下の主治薬師の……」  
こんなところ、と言ってしまったからか、公爵の言葉の歯切れが悪くなる。論功行賞の場で、ファルマの名前と顔は知れ渡っている、ファルマとも面識があった。

一行を、カーテンで仕切ったカウンセリングブースに案内し座らせる。

「親と子、その外見というものは、主観的なものでしかありません。だから、人体の設計図がどうなっているかを調べましょう」

「設計図？」

「頬の内側を、この綿棒で二本分こすってください。力はいりません。赤ちゃんは、証人の方が行ってください」

ファルマは三者から綿棒で採取した口腔粘膜の細胞を、誰のものが分かるようにはつきり名前を書いたスライドグラスに載せ、顕微鏡のステージにセットし、細胞を見せた。

「丸い、部屋のようなものがある」

「それが細胞（小部屋の意味）です。全ての動物の体は、これら一つ一つの細胞からできています。生物の最小単位です」

「ほう……」

「その細胞の中には核という部分があり、中には色素に浸すと染まる、染色体クロモソームと言うものが入っています。染色体はデオキシリボ核酸、DNAという物質でできています」

ファルマは、細胞を破裂させて細胞核の中をむき出しにする処理を施し、処理にしばし時間がかかったので、その間にロツテがお茶とお菓子をふるまう。気まずい空気になっていた。ファルマはプレパラートを彼らに見せる。

「なんだ……この、紐のようなものは、こんなものが、私の体の中に」

「それが染色体です」

顕微鏡を覗き込んだ公爵は、紫色に染まった、X型の染色体を見て、舌を巻いていた。

夫人は赤子とともに不安そうになりゆきを見守っている。

「染色体は大きい順に並べ、それを番号順で呼んで、何番染色体と  
いうように区別します」

人間には22対の男女共通の染色体があり、そして性別を決定する2本の性染色体がありますね、とファルマは補足する。

「全部で46本ある……」

公爵は律儀に数えたようだった。

「そうです。この染色体に刻まれた人体の設計図、つまり全ての遺伝情報を、ゲノムと言います」

「情報はどうやって読む」

公爵がファルマのペースに乗ってきたので、ファルマはにこりと芝居掛かった笑顔を見せた。

「それでは私と一緒に、ゲノム情報を読み解いてゆきましょう」

そこでファルマは教科書を見せた。ロッテのイラストつきのファルマの教科書は、説明にも便利だ。

「この染色体のゲノム情報は人間ならば個人間で殆ど同じですが、僅かに違う部分があります。その違いを父に由来するもの、母に由来するものを子供が併せ持っているかを調べます」

「どんな違いがあるんだね」

「ゲノムの中には、同じ暗号を数回〜数十回と繰り返し返している、反復配列と呼ばれる場所があります。その暗号の反復回数を調べます」

そこで、と言いながらファルマは準備してきたものを取り出す。

「ここに、ゲノムを複写してくれる酵素があります」

ファルマは、神術で氷漬けにした、指先ほどの小さなチューブを示す。

異界の研究室から持ち帰った酵素、DNA合成酵素（DNAポリ



メラゼ)だ。バイオテクノロジーの技術の基本となる酵素である。「この酵素はゲノムの二か所に短い核酸断片の配列をはめると、その範囲の配列を複製してくれる働き者です。核酸断片はゲノム情報のごく一部で、こちらに数種類用意しています」

ファルマは現代ではプライマーと呼ばれるDNA断片の入ったチューブを見せる。説明はかなりかいつまんで話した。本当は色々と話しておかなければならない前提があるのだが、一般人に話すには難易度が高い。

「酵素、核酸断片、そしてゲノム。これらを一緒に混ぜ、反応温度を制御することによって、DNAは指数関数的に増幅してゆきます。これを、ポリメラーゼ連鎖反応(Polymerase Chain Reaction)、PCRと言います」

「何のために増幅させる？」

「一本では見えなくても、量があればDNAが見えるようになるからですよ、肉眼で」

「肉眼で！」

夫人はまあ、と口を押さえた。

「さて、個人の特徴である反復配列をPCR法で増幅させます。しかる後に、その回数を見ましょう。反応に時間がかかるのでお時間をいただきますね、散歩でもされますか」

ファルマは、二時間をかけPCR反応を行った。薬局の門番が腕の良い火属性の神術使いだったので、ファルマの指示のもと、サンブルに対して加熱と冷却の厳密な温度調節を行ってもらい、反応を進行させた。

「できました。ここに、PCR反応によって特定領域のみ複製された配列があります」

ファルマは、反応の終わったチューブを見せる。公爵たちは軽い食事をして戻ってきた。

「回数はどうやって調べる」

待ちかねた公爵一家は、早く結果を見たいようだ。

「長さで比べます。さて、ここで問題。巨漢と小さな子供がいたとします。この二人が人込みの中を通り抜けるとすると、どちらが先に人込みを抜けられるでしょう」

「子供だ。巨漢は人にぶつかって遅くなる」

夫人もそうだと頷く。

「はい。ではそういう状況を作りましょう」

用意しておいた長方形の寒天を、バットのの中に張った溶液中に沈め、寒天の一辺に反応後のDNA溶液を埋め込む。そして、バットに電極と配線をセットする。

「ソフィ、手伝ってくれ」

ファルマはソフィを呼んできて、両手に電極を握らせお気に入りのおもちやであやした。すると、寒天全体に、一方向に電気が流れる。

「この寒天の中は網目状になっていて、目には見えないサイズのごみが再現されています。あとは、こちらの端から電気をかけますと、DNAは負に帯電していますので、極から+極へ引つ張られ、サイズの小さいDNAから順にゴールへ向かいます。これは電気泳動という方法です」

「うん？ うん」

公爵は電気の話が出た頃から少し混乱してきたようだが、何度も説明すると飲み込めたようだった。ソフィが電気をかけ、DNAの分離が始まった。DNAが帯状になって、寒天の中をゴールへ向けて移動してゆく、とファルマは言う。

「何も動いている様子が見えないぞ？　というか、DNAが見えない」

肉眼で見えるようにするために、PCR反応を行った筈なのに、見えないじゃないかと公爵はうつたえる。

「DNAは透明で、まだ色がついていませんからね。さあ、結果が出ました、私たちにも見えるようにDNAに色をつけてみましょう、

どうなっているかな」

25分経過したのち、DNAを肉眼で見えるように染色を行う。ファルマは可視光で色が見える染色試薬を使った。父、母、子供のそれぞれのDNAの結果を比較する。DNAの移動距離を比べるのだ。染めてみると、最初にDNAを埋め込んだ部分から随分離した場所に、帯状の線が移動していた。

「このDNAの塊、帯状になっているのでバンドと言います、サイズごとに電気によって引つ張られて移動したものです。これが公爵様由来のもの、そしてこのバンドが、奥様のもの」

ファルマは三つの試料の、DNAの帯の移動距離を比較する。

「この二つのバンドと同じ移動距離のバンドを、お子様は二つとも持っています。今回、DNAの大きさに分離していますので、移動距離が同じであればDNAは同じ大きさである、つまり同じ繰り返し回数の配列を持っている、ということを示します。このパターンを持つのは、10人に1人ぐらいです」

「ふむ……」

DNAの移動距離が一致しているというのは公爵にも夫人にも分かる。

「10人にひとりでは偶然の一致、かもしれませんよね？」

ファルマは先手を打つ。

「なので、今回は数か所調べてあります。そうですね……全部一致しているようです。なので、この場合の累積確率を計算してみると、3万人に1人です」

帝都の貴族は、3万人もいない。

「つまり、帝都の中ではたったひとりですね」

ファルマは公爵の顔を見る。公爵は、ぽかんと口を開けていた。「御納得いただけないなら、調べる場所を増やしますか？」

ファルマがちらりと夫人にも視線を向ける。

「い……いや、いい……済まなかった。お前、……酷いことを言っ

てすまなかつた」

公爵は、夫人にかけた疑いと心無い言葉をわびた。夫人はファルマの鮮やかな証明に救われて、涙ぐんでいた。

「あなたの子よ。間違いないわ、抱いてやって」

赤子を一度も抱こうとしなかった公爵に、妻が赤子を近づける。

「私もそう思います。確率的には、あなたの子である可能性が高い」  
ファルマは断定を避けながらも、公爵を諭すように言った。

「名前をつけてやろうな……」

公爵はぎこちない手つきで、しかしいとおしそうに我が子を抱き上げた。

寄り添って薬局を出ていく三人を見送る。夫人は高額報酬をファルマに支払った。ファルマはありがたく受け取ることにした。

「今回もまた、借りを作つたな」

パツレは全ての診療を済ませ、薬も出し終えていた。何人か、パツレを気に入って主治薬師としての往診の契約をした貴族の患者もいたという。多くの患者を抱えるファルマ的には患者の横取りは有難くこそあれ気にしないが、ちゃっかりしているな、とファルマは笑った。

「それにしても、遺伝子は正直なのね」

エレンが安堵したようにファルマに声をかける。

「万能ではないけれどね。太古からの生命の記録が刻まれているんだ」

そう言つてファルマも頷く。

「上手くいくといいわね、あの家族」

「いつてくれないとな」

遺伝子検査によって、一つの家族の絆が守られたのだった。

## 5章6話 親子鑑定（後書き）

本頁は、医学博士のきりん先生、山下敦先生に査読、ご指導いただきました。ご協力、ご指導ありがとうございました。

○ゲノムに何を書いてあり、現在どこまでわかっているかは、以下のサイトが分かりやすいです。

ヒトゲノムマップ（京都大学）

<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/genomemap/>

一家に一枚、ヒトゲノムマップ（文部科学省）

<http://stw.next.go.jp/common/pdf/series/genomemap/genomemap2013/A2.pdf>

### 電気泳動説明

<i186906—2496>

薬局キャラクターの人気投票を設置してみました。各ページ下部より投票できますので、もしよければご協力いただければと思います。キャラの選択肢がなければ追加してください。

## 5章7話 マーセイル工場と神術陣風力発電システム（前書き）

本日は2話あります、次がありますのでご注意ください。

## 5章7話 マーセイル工場と神術陣風力発電システム

1147年8月、二頭の駿馬が、マーセイル領地内の平原を駆けていた。

一頭にはパツレとブランシュ、もう一頭にはファルマとロッテが乗っている。ファルマたちは、土地の物色と製薬工場の視察を兼ねてマーセイルへ出かけていた。今回、マーセイル領へ向かったのはメデイス家の面々のみだ。

というのも、エレンは診療を引き受けてくれるというので、バイトの薬師と共に店を任せ、異世界薬局は営業を続けている。

「あにうえー、馬が早すぎるのー。危ないからゆっくりしてほしいのー！」

パツレの前に座ってぴよぴよ尻が浮いて、パツレに首根っこを掴まれているブランシュは恐怖に顔が引きつっていた。パツレの馬は軍馬なのでかなりスピードが出て、ブランシュは振り落とされるかと怯えているのだった。必死に馬のたてがみにしがみついている。

「ファルマ様っ、今どこですか？ もう着きましたか!？」

そしてロッテは目を閉じたままファルマの腰のあたりにしがみついている。ロッテは乗馬が苦手というか殆ど経験がないので、必要以上に体に力が入っている。

「目を開けなよロッテ。腰をしっかり持ってたら落ちないよ」

顔をファルマの背にうずめたまま、「無理、無理です」と首を左右に振っている。ぴったりとファルマにくっつけてみたり、密着するのが恥ずかしくなって離れたりと忙しい。

ロッテの思春期ももうすぐかな、とファルマは微笑ましくなる。

「それで、ファルマ。こんな田舎でいいのか？」

パツレが馬を走らせながら、大声でファルマに尋ねる。

「誰もいないほうがいい。この谷あいなんていいと思うよ。ほら、見えてきた」

ファルマは地図を見ながら応じる。マーセイル領の中の、製薬工場にほど近い海風の抜ける谷間に目をつけた。代行領主アダムに見繕ってもらった、無人の荒地だ。ここに試作の大型風車を立てて、手始めにマーセイル製薬工場の電力を賄う風力発電基地にしようという算段だ。

「ソフィ様のビリビリができる場所なんですネー。また、ファルマ様が気持ちよくなるんですね」

ロッテの電気に対する雑な理解に、ファルマは苦笑する。

「俺が気持ちよくなるって人聞きわるいな」

「あう、そうですか？」

「発電に適した場所は風が通る場所、あるいは高低差のある安定した水源だったな。お前の言う電気の必要性が、俺には分からないが……なにせ、それがなくても世界は回ってるからな」

パツレはやれやれ、と言って馬の手綱を握り直す。またお前の思いつきか、などと口では言っている、彼は弟の思いつきを全面的に支援してくれる。

「電気があることで、かなりの事ができるようになるんだよ」

「神術じゃだめなのか？ 晶石は使えないのか？」

パツレが根本的な部分に立ち返る。

「神術でもできるし開発の余地もあるのかもしれないけど、貴族のみならず平民も使えてこそその技術だからね。貴族だけに使えても、それは使えるうちに入らないよ」

遺伝子検査を行ったとき、電力がないことの不便さをファルマは痛感したものだ。電気が使えないからといって必ずソフィの協力が必要だったり、ファルマの他に追試のできない技術など、はつきり言っていない。

それに、電気があればと思う場面がこの世界に転生して多々あつ



た。X線、心電計、生化学分析、ペースメーカー、超音波診断装置、人工心臓。電気が医療にもたらす恩恵は数知れない。

電気を知らない文明に電気をもたらすことについては、ファルマも悩む部分ではあった。というか、これまでその問題のために、腰を上げてこなかった。電気のある生活は世界を一変させるだろう。これまで何とか電気を使わずにきたが、より高度な医療を提供しようと思えば電気は必須だ。

「ファルマ様って薬学以外にも色々御存じなんですね」

ロツテが賞賛する。

「化学や物理学は薬学の基礎だからね」

（生物学以外の数学、物理、化学は関係なさそうに見えるけど、普通は薬学部のカリキュラムの中でみっちりやるからな……）

そして、何故ファルマが電気にまで詳しいかというと、彼は薬学部と大学院出身なので、物理、化学、数学や情報科学はもろんのこと、電気工学的な知識も教養課程と専門課程、そして個人的にも学んでいる。

すぐ先に大学教授の仕事が入ってくるので、発電システムの立ちあげを急ぎたかった。そのために、まず土地を確保だ。

「まあ、こないだの遺伝子検査で言うと、PCRも電気泳動も、誰でもできるようになるしね。神術使いだけでなく、ロツテにだって」

「私にもですか？ 私もやりたいです！ 何をやるんでしたっけ」

ロツテが嬉しそうに声を上げる。

「知識がない者にも誰にでもできるというのも、俺は危険だと思うがね」

パツレは、無知な大衆が電気を使うことの危険性を考えてはいるようだ。

「だから、一般人が使っても安全な装置を作ればいい」

「なるほどな」

「発電というのは、火力、水力、風力、原子力と色々あるけど、どれも原理は似たり寄ったり。金属線を何重にも巻き付けたコイルの

中に磁石を出し入れすると電気が取り出せる。コイルが磁石を動かす……どっちかを回転させるのが効率的だけど、その力があれば何を使っても電気はできる」

水車だって、風車だって、蒸気で回すタービンだっていい、とファルマは説明する。

「随分単純に言うんだな」

それならばあまり難しくはなさそうだとパツレは納得した。「私は分かりません」と、ロツテは切なげな顔になった。

「その電気を工場までもってきて、製薬や実験に利用する。それがうまくいけば、帝都でも発電システムが動くようにしたい」

「風力か……確かに風車は回転力になるな。しかし、この谷あいでは風が弱くないか？」

そよ風程度で、大型の風車が回るとは思えない、というのはパツレの見解だ。

「そこで。兄上についてきてもらっただよ」

「は？ 俺？」

付き合い程度に考えていたらしいパツレの声が裏返る。

「兄上は全属性の神術陣を敷けるらしいじゃないか。風を呼び込む神術陣を、ここに書いてほしいんだ」

気圧を下げるような神術があると、ファルマはエレンから聞いた。エレンは水属性しか書けないが、パツレは全属性の神術陣を書けるのだという事前情報だ。

「俺は水の神術使いだから、書いたって術が発動しないぞ」

発動しないものをわざわざ勉強しているのは、神術使いの教養というものらしい。

「いいから、いいから」

「まあ、いいが」

パツレは馬から降り、大型の黒杖を組み立てて地面に突き刺し、長詠唱をはじめた。彼が詠唱を開始してしばらくすると、円と七芒星で作られた光の魔法陣のような、風属性の神術陣が編みあがって

ゆく。その神術陣をパツレは大地に固定する。神術陣は大地に縫い付けられ完成した様子だが、属性が違うからか風は吹かない。

「できたぞ。でも動かない陣を作ってどうするんだ？」

パツレは再度尋ねる。

「ありがとう。じゃ、俺が動かしてみる」

パツレが神術陣を立ち上げるところまで済ませると、ファルマは神術陣の核に持ってきていた大型の晶石を据えた。その晶石に、ファルマが神力を圧縮する。

神術陣は光を含んで動き出し、谷あいには海から吹き込む強風が流れ始めた。

しかも、風速は常に一定だ。

ファルマの神力は属性にとられないニュートラルなものである、どんな属性の神術でも発動するのではないかとエレンは言っていたが、その通りになった。

「ファルマお前、何やったんだ？！ 何で風属性の陣が動く！ 水属性じゃなかったのかお前！？」

パツレが驚愕して固まっていた。

「たまたまじゃないかな」

「神術陣に注がれた神力が完全充填状態だ……これだと、数か月はもつぞ！ お前本当に何をやったんだ？」

神術陣の持久性は、普通はもって一週間というところらしい。

（晶石に詰めた神力が尽きるまで、何十年かはもつんじゃないかな）  
ファルマは思ったが口にはしなかった。

「一回神術陣を立ち上げたら、ずっと同じ条件で風が吹くんだけ」

「ああ、変わらないはずだ。夜間だろうが、周囲が無風だろうが、嵐が来ようがな」

（変圧装置を作って送電網に繋がればいいよな）

「ここを風力発電基地にしよう」

その後、パツレはブリュノと共に領地の視察へ行き、ファルマ

とロッテは製薬工場の視察に赴いた。工場の医薬品製造プラントは完成し、簡単な有機化学合成実験が始まり、帝国医薬大学から届けられたキヤスパー教授らの放線菌の大量培養などが行われていた。「工場の稼働状況、製品の生産はどうですか？」

工場につくと、ファルマはキアラを呼び出した。

高度な神術を使え、もともと医療神官であつた彼女を、ファルマは製薬工場の管理主任に据えていた。

「はい、薬品の生産、出荷体制は整いつつあります。こちらに、資料が……」

キアラは真っ白な防護服を脱ぎながら答える。

「キヤスパー教授や帝国医薬大学で開発されている抗生物質をはじめ、酸素ボンベ、一部の有機合成薬などの生産も軌道に乗っています」

「品質管理のほうは徹底してもらっていますか？」

ファルマは確認する。

「はい、バリデーション試験による製品の無菌性の確認や、清浄な作業が必要な工場内部は風属性の神術使いの従業員を雇用し、神術で清浄度を厳密に維持しています。清浄度はクラス100を維持しています」

清浄度とは、空調の用語で、空气中に浮遊する0.1 $\mu$ m以上の塵が1立方フィート当たりの空气中に何個あるかということを示している、とファルマは以前にキアラに教えた。その指標でいくと、クラス100というのは現代地球の製薬工場、どこか最も清浄度を必要とする半導体工場とほぼ変わらない清浄度である。これにはファルマも驚いた。

「それはかなり清浄ですね！ キアラさんや従業員の方の努力の賜物だと思います、ありがとうございます」

神術を使えば清浄な空間が出来上がるのだと知り、ファルマは神術の利点を見直す。だが、24時間交代で神術使いがその環境を維

持しているということ、やはり電力の安定供給を行い、労働者の負担軽減を図るのが必要だとファルマは思う。

「負担をかけてすみませんね、電気を確保して、空調を自動でできるようにしますから」

ファルマは詫びる。

「そうしていただければありがたいですが、神術使い班は、意識を高くもって頑張っています。ファルマ様や他の先生方が開発してくださった大事なお薬を、汚染するわけにいきませんので」

事務職、技術職、製造職の従業員たちはもともと能力で選抜されていて、そのうえ十分な賃金が与えられやる気満々ですから、とキアラは誇らしそうに語る。

「神術使い以外のほかの従業員の方々は、どうですか？」

「楽しく、充実して働いているようです。ファルマ様のお言葉に刺激されて、従業員たちは健康にも気を付けているんですよ」

採用当初ファルマに持病を暴かれた者たちも、治療を継続することにより健康を取り戻しつつあるという。

工場の操業が一段落した頃合いで、ファルマは工場従業員たちとレクリエーションと称したパーティーを開催した。ファルマが個人的に雇って連れてきていた帝都のパティシエにスイーツを作らせ、野外スイーツパーティーを楽しむ。カヌレにマカロン、フォンダン・オ・ショコラ、新作のクレーム・ブリュレ、フルーツ盛りにチョコレートフォンデュなど、庶民には見たこともない高級スイーツの目白押しに、工場従業員たちの手が伸びるのは止まらなかった。

「これは美味しい！ 頬が落ちそうです！」

大の男も子供のように喜んで驚掴みにしていた。

「ファルマ様、家族に持って帰ってもいいですか？ 子供たちに一生に一度きりでも食べさせてやりたくて……」

母親らしい従業員が、ファルマに懇願する。

「いいですけど、今日中に食べてくださいね」

その言葉を契機に、そこかしこでスイーツ争奪戦が始まり、とうとう喧嘩まで勃発した。

「みなさん。あの、慌てずに。ちゃんとありますから」

「はあ……私、甘いものを食べている時が一番幸せです。あつ、でも薬局で働いているときも幸せですよ、それから、絵を描いているときも、お散歩をしている時も……お昼寝も捨てがたいですね」

ロツテはしっかりと自分のスイーツを確保し、舌鼓を打って満足そうだった。文字通り骨抜きになって、恍惚としている。そのまま蕩けてしまいそうだった。

「ロツテには楽しい事がたくさんあっていいな、口の周りにシヨコラがついてるよ」

「きゃーっ、ファルマ様。見ないでくださいーっ!？」

ロツテは慌てて口元を手で隠しながら、スイーツの皿は忘れずに持って逃げた。

パーティーがお開きになると、従業員全員で工場の庭に整列し、創業者であるファルマと記念写真を撮影した。従業員も増えた。

前回撮影時からすると、随分と労働者の表情もほぐれ、自然に笑顔が出た。

「毎年、写真を撮っていきましょう」

写真撮影は恒例行事にするつもりだ。

現像が終わると、従業員全員に写真を配った。

「ありがとうございます、創業者様」

「ここで働かせていただいて、とても誇らしいです」

彼らは感謝の言葉とともに写真を受け取った。

たとえファルマがいなくなってしまうても、創薬拠点となるマールセイル製薬工場が長く、多くの人々の手に支えられながら発展し、その薬が帝国や世界へと届き人々を癒してゆけばいい。

ファルマはそんなことを思った。

## 5章8話 船乗りとビタミン、そして合格発表（前書き）

本日は2話あります。前話がありますのでご注意ください。



## 5章8話 船乗りとビタミン、そして合格発表

「ファルマ様。マーセイル港から伝書鳩が届いています」

工場労働者たちと談笑していたファルマたちを、代行領主のアダムが呼びにきた。

「誰からだろう？」

海上と聞いて、ファルマは一瞬嫌な予感がする。まさか、検疫に引っかけた船がいる、などという報告ではあるまいか。毎年8月から9月に開催される恒例のサン・フルーヴ大市に向けて世界各地から商船が集まってくるというので、ファルマは今年も一級薬師を雇い、検査方法を教えて港での検疫を行わせていた。

「東イドン会社 サン・フルーヴ・ロワイヤル号のジャン提督が急用とのことです。至急、マーセイル港三番ドックへお越しください」と

「ジャン提督が……何だろう」

「ファルマ様、急用ですか？」

「えーあにうえー行っちゃうのー？」

ロツテとブランシュがファルマに尋ねる。

「今からマーセイル港に行ってくるよ。それとも、二人とも来る？」

「はい、ご一緒します」

ロツテが快諾する。ファルマたちが直ちにマーセイル港に馬で駆けつけると、フリゲートに守られ、ひととき大きな帆船の戦艦がマーセイル港に入港したところだった。

「お、お前も来たのかファルマ」

パツレもブリュノと共に、たまたま港に視察に来ていた。

パツレは戦艦を見に来たらしい。ブリュノは東イドン会社の重役に案内を受けていた。

「おい」

船が近づくとともに、甲板からひとりの男の声が聞こえてくる。ファルマも手を振った。東イドン会社第1等戦列艦の緋色の旗が、晴れた空に眩しい。ジャン提督の艦だ。

船乗りの飴を大量に買い付けたジャン提督が、部下を引き連れ艦から降りてきた。ジャン提督はまず、マーセイル領主のブリュノの姿が見えたので、ブリュノに先に挨拶をする。ブリュノもこれに応じた。

「長期の航海ご苦労であつた、提督」

「船に尊爵のお弟子の薬師をお借りして、助かりました」

遠洋航海に、ブリュノの弟子を連れて行つたらしい。

「私の弟子も修行になつてよかつただろう。御社からのマーセイル領への献金と、海賊の取り締まりなどの協力にはいつも助けられている」

ブリュノはジャンを労う。

「なあに、港を使わせてもらつてゐるんだから当然のことです」

東イドン会社は、代行領主アダムと上手く折り合いをつけてマーセイル港を利用しているらしい。

「船員ともども、しっかりと休養し長旅の疲れを癒されるよう」

「ありがとうございます」

ジャン提督はブリュノに敬礼を送った。ブリュノに挨拶を終えて、ジャン提督はひょこひょこことファルマのもとに近寄つてきた。

「呼び立てて悪かつたな、店主さんよ。マーセイル領に来たと聞いたんでな」

「ジャンさん。最近、薬局にお見えにならないと思つたら」

ファルマも懐かしがる。かれこれ二か月は、ジャン提督の顔を見なかった気がする。

「てーとくさん、かつこいい」

一緒についてきたブランシュが目キラキラさせてジャンを見て

いる。

「ジャンさんだよ。ブランシュも会ったことあるじゃないか」

「えー知らない人！」

ブランシュは、薬局の常連のジャン老人だと気づかないようだ。紺の上着の袖口と襟元に金のレースをあしらひ、金の肩章、白いインナーの提督の正装で近づいてきたジャンを、ブランシュは見違えた様子だった。

（ビコルヌの帽子と制服に弱いからな、女子は）

ファルマは、ブランシュの属性に一定の理解を示す。

「やーっと長旅から戻ってきて、さっき検疫を終えたところじゃ。ふう、やっぱり陸はええのう。人間は陸に住む生き物じゃわい」

「暫くお会いしていませんでしたが、お体はお変わりないです？」

長期航海は老人には大変だろう、とファルマは心配になる。

「あまり調子もよくないが、そうも言っておられんのでう。今年は胡椒の生産地で大規模な病害が発生して不作じゃったし、既存の植民地をめぐる争いも勃発しておるから、陛下のご下命で新たな土地を目指して航路を開拓しておったんじゃ」

「新航路の開拓ですか」

ファルマはジャンのバイタリティに驚かされながら話を聞く。

ブリュノは黙ってそのやり取りを見守り、パツレは泣く子も黙るジャン提督と聞いて一步引いていた。ロツテに至っては、遠目からではあのジャン老人だとは気付かず、恐れ多いと物陰に隠れてしまっている。

「お前さんのおかげで新大陸を発見したぞい。帝都で話してもらっては困る、ここだけの話じゃがのう」

海の男ジャンは、あごひげをいじりながら誇らしげに言ってみせた。

「だっ、大発見じゃないですか！ 偉業ですよ！」

ファルマは興奮する。島ではなくて大陸とくれば、地球でいうところのアメリカ大陸発見級の大偉業である。しかしジャンははにかんだように「まあおう」とだけ答えた。そして、

「いやあ、それもこれもお前さんのおかげじゃあ！ 悪霊の住まう呪われた海域、”船の墓場”を抜けねばならんかったり、島が全く見えなくなる海域もあつたりで航海自体にも苦勞が多いが、航海の一番の敵は食糧事情じゃった。今回はそれが劇的に改善され誰も死ななかつたんで、思い切つて遠くに足を伸ばすことができたんじゃない！」

船から降りてきた航海士たちも、ジャン提督の後ろで首を縦に振っている。

（悪霊の住まう船の墓場つて何だ、凄いな。この世界のことだから、比喻でなくて本当に悪霊がいるんだろうしな）

ファルマは別の部分で衝撃を受けていた。

「びたみんしいとやらを豊富に含む船乗りの飴は、腐りもせんし場所もとらん画期的な発明品じゃ。それに、指示通りに神術の生成水の入った水樽にあんたのくれたカルキつちゅう薬を入れたら、水が腐らんようになった。他にもあんたの言う通りに肉や魚をビンに詰めて航海に出たら、腐らんかったのう」

ファルマはジャンの相談を受けて、遠洋航海での食糧や水の保存に関する注意事項をいくつか伝えていた。さらに、風属性神術使いを雇用することで、帆船に安定した風を孕ませて加速し、水属性神術使いに新鮮な水を給させるといい、とも意見していた。

それを丸飲みで実践したジャンは、これまでになく上質の食事と、高速での航海が可能となったと喜ぶ。

船員が栄養不良や病気にかかり次々に倒れれば、航海を中止し戻つてこざるをえなくなる。これまでは、食糧と水などが腐敗する事

情で何か月もの遠洋航海ができなかった。

「これはわしの航海のお守りじゃ」

ジャン提督は大絶賛しながら、ポケットから取り出した愛用の飴を頬張り始めた。

「店主さんのおかげだ。今回の航海は陸とあまり変わりなく、快適だった」

「提督が絶賛する通り、あんたは凄い薬師だな」

船員たちも口々に感謝の言葉を述べた。彼らは、異世界薬局がベロンの手先によって襲撃されたときに、片づけを手伝ってくれた船員たちで、ファルマも見覚えがあった。

そんな小さなアドバイスで激変するほど、帆船での遠洋航海は命がけなのだと、ファルマは改めて実感した。

「それはよかったです。少しでも航海が安全になったのであれば」  
「で、おかげで死人は出なかったんじゃが、長期航海で壊血病以外の奇病にかかり、死にそうになったる船員が数人おるんじゃ。もしかしたら悪霊のせいなのかもしれんが、そいつらをみてやってもらえんかのう？」

「わかりました。それで呼ばれたのですね」

荷おろし作業の始まる中、担架で運ばれてきた患者たちは三名。

彼らは下痢が止まらず、体中の皮膚という皮膚が荒れ、意識も朦朧とし、もつとも酷い者は幻覚まで見ているという。ファルマは三人が同じ症状と聞いて、パツレと共に視診をはじめた。

「確かに。皮膚がボロボロになって荒れていますね。水疱もひどい、皮膚には赤黒く色素も沈着してますし」

ファルマは患者の服の袖をめくる。

興味深いことに、服で隠れている部分に炎症は生じていない。

「日の当たる部分だけかな、炎症が起きているのは」

ファルマはカルテに書き込む。

「なら光線過敏症か？ いやでも、それだけでは他の症状が説明がつかない」

ファルマと同じように症状を診たパツレが言った。

「兄上、よく見てくれ」

ファルマが発疹の生じた部位を示す。

「左右対称に発赤が出てるんだな……じゃあ、この症状はもしかして、あれの不足か」

舌も確認すると、赤茶けて炎症を起こしていた。

「そう、あれだ」

ファルマは頷いた。

「ペラグラ、つまりナイアシン欠乏症でしょう」

ファルマは患者に診断を伝える。診眼で確認しても間違いない。

「そりゃなんじゃあ？ 治るんかのう」

後ろで話を聞いていたジャン老人は聞きなれない病名だったからか、船員の身を案じるような言葉をかけた。

「船員さんたちはアルコールをよく飲みますか？」

ファルマは患者らの背景を尋ねる。

「大酒のみばかりだのう」

意識のおぼつかない船員に代わって、ジャン提督が答えた。

「それでしたら」

アルコールを過剰に摂取する人では、特に起こりやすい病気なのだということをファルマは説明した。

「うぐつ、酒がそんなに悪いんかつ！ ラム酒をたしなむぐらいじやー！」

ジャン老人は胸に手を当てて苦しげに呻く。

大酒を飲んだ心当たりがあるらしい。

「ジャン提督に申し上げたのではないですよ」

「そ、そうか」

「何事も飲み過ぎ、食べ過ぎ、食べなさすぎはいけません。この方々はナイアシン欠乏症と考えられます。長旅での慢性的な栄養不足に加えて、日光に当たることによって発症します」

ブリュノはファルマの説明を聞いてメモをつけていた。

「びたみんしい、じゃないやつなんか」

ジャンはしょんぼりとした顔で首をひねる。

「同じビタミンの仲間です」

ナイアシンは、発見当初ビタミンB3と呼ばれていたこともあった。ちなみに、ビタミンは以前、発見順にA、B、Cと命名されていたが、化合物の構造が明らかになった今では、ビタミンB3という名称は正式には使われていない。

現在、発見されているビタミンは全13種類。

ビタミンA（レチノール）、ビタミンD（カルシフェロール）、ビタミンE（トコフェロール）、ビタミンK（フィロキノン）、ビタミンB1（チアミン）、ビタミンB2（リボフラビン）、ビタミンB6（ピリドキシン）、ビタミンB12（シアノコバラミン）、パントテン酸、ビオチン、葉酸、そしてビタミンC（アスコルビン酸）とナイアシンである、とファルマは説明する。

「なるほど……また新しいびたみんが足りんかったんか。そして13種類もあるんか！　びたみんを取るのは大変じゃのう。……それに船上では、日光は避けられんからのう。治療法はあるんかいの？」

「不足しているナイアシンを摂取すれば治ります。他の症状も徐々におさまってくるでしょう。三人分、同じ症状のようですので、錠剤を処方しておきますね」

ファルマの診眼では、手遅れというほどではなかった。そこで彼はニコチン酸アミドを大量に処方し、ビタミンB群の服用を経口摂取で行い、また同時にアルコール性の肝障害が起こっていると懸念されたので、酒を控えるようにと注意を促した。

「おお、それは助かった！　栄養は大切なんじやのう」

ジャン提督の背筋が伸びた。

しゃっきりと腰を伸ばしたその拍子にぎっくり腰をやって部下に担がれていた。しゃっきり、ぎっくりのコンボに、ファルマは湿布の処方も追加する。

「ぐおお、痛いのが。ここまで帰ってきてやってもうたあ」

「船乗りや旅人のために、栄養学的に人体に必須の各種のビタミンの入った飴か錠剤を造りましょうかね。あと、ジャン提督はカルシウムも必要でしょうね」

ビタミンとミネラルを合わせたサプリメントの開発を、東イドン会社と約束したファルマだった。

「助かるのう！ サン・フルーヴ大市が終わったら、新大陸に調査隊を派遣せねばならんし、その時まで頼むの！」

「わかりました、間に合うようにしましょう」

商船が安全に航路を通行できるように、サン・フルーヴ大市が終わるまでは帝国からの依頼を受けて帝国湾岸の警備につくという。東イドン会社は、帝国海軍のような役割も担っているのだそうだ。

それを聞いたファルマは、重要なことを思い出した。

「あ、そういえば新大陸には、人は住んでいましたか？」

「いや、まだ見つかってないがのう。見たこともない植物はあったが、いきなり探検するのは危険じゃから、大陸には数時間ほど上陸しただけで何も手をつけず、焦らずに一度戻ってきたんじゃ」

ジャン提督の判断は正しかった、とファルマは絶賛したい。

「もし先住民を見つけたら、どうしますか？」

「先住民がおったら、侵略は国際条約で禁止されておるから、貿易じゃのう」

住民がない場合は帝国の旗を立て、開拓要員を駐留させ入植地にする、ということだった。ファルマはとりあえず新天地を侵略、という流れにならないことにほっとした後、嚴重に注意した。

「新大陸の先住民、動物、植物との接触には細心の注意を払ってく



ださい。未知の病気を持っている可能性がありますから。未知というのは、あなた方の免疫にない病気という意味です。最悪では、死病となります」

かつて地球では、アメリカ大陸発見とともに、天然痘、麻疹や流行性耳下腺炎などがヨーロッパからアメリカ大陸にもたらされることになった。アメリカ先住民たちには特に、天然痘の免疫がまったくなかったため疫病が流行し、多くの人々が病で命を落とした。

ファルマは念のために、船員全員の検疫を診眼を使って行ったものの、新大陸からもたらされた病原菌などに感染した者などはいなかった。

（にしても、新大陸か……夢が広がるな）

トウモロコシやかぼちゃ、トマトが発見されたらいいな……などとファルマはひそかに期待を寄せた。

ファルマは帝都に戻り、薬局の営業の合間を縫って、10月から同じ講座で働くことになるエレンと、帝国医薬大学校で諸々の手続きや準備、運営会議、委員会などをコツコツ済ませてゆく。

彼が研究科長を務めることになる総合薬学科の新しい研究棟は完成し、研究室の立ち上げにかかわる数々の設備や器具などの調達などを行った。秘書と研究助手も、多数の応募者の中から一名ずつ採用した。

彼の執筆した教科書も大学の売店に並び、新学期から必修の教科書となりつつある。

サン・フルーヴ帝国薬学校は、サン・フルーヴ帝国医薬大学校として生まれ変わり、学部は旧サルレノ医学校が母体となる医学部、従来の神術と薬草をベースとした薬学を教える薬学部、ファルマが学部長を務め新薬を取り扱う総合医薬学部、臨床検査学部へと再編されたのだった。

その日も帰宅の準備をし、エレンと大学構内を歩いていたところ

だ。

「……あれから一年か。あつという間だよな」

時が経つのは早い、とファルマはしみじみ思う。ファルマが黒死病を駆逐してから一年、サン・フルーヴ帝国医薬大学から教授への就任を依頼されてからも、はや一年だ。

「そうね。かなり前から準備してきたのに、土壇場になってバタバタしちゃうわね」

エレンは大量の書類の山をバッグに詰め込みながら歩いている。

「仕方ないよ、研究棟が完成したのが先月だったし。大学もいよいよ来月からか、学生に会えるのは楽しみだな」

講義や学生との討論、研究会、指導など、学生と関わるのはファルマが生前、薬谷だった頃から嫌いではなかった。

優秀な学生との出会いは、自身の研究の刺激にもなる。自分の研究室を出た教え子が各地に巣立ってゆき、一線で活躍するのは感慨深く、教官冥利につきるというものだ。しかしエレンは緊張もあり、不安そうだった。

「ファルマ君は相変わらずね、私はちゃんと講義ができるか分からないし、学生は口もたつでしょうから、しり込みしちゃうわ」

珍しくエレンが自信喪失している。

「大丈夫だって。学生にとって食われるわけでもないし」

二人がそんな会話を交わしながらぶらぶら歩いていると、大学の正面玄関のほうに人だかりができていた。

彼らは、大学の玄関に掲示された掲示物を囲んでいるようだった。

「どうしたんだろう？」

ファルマが近づいて彼らは何を見ているのかを確認しようとする  
と、エレンが彼の腕をとった。

「思い出したわ。今日は午後から新入生の合格発表の日よ。ファルマ君が指導する学生たちがいるわね」

今年は、サン・フルーヴ帝国医薬大学校、略して医薬大は学費無

料の特別枠をもつけ、四学部の新入生を帝国内外から広く募っていた。その入試の結果が発表されているのだという。

「へー。って、何百人見に来てるんだ、これ？」

合格発表は実名で行われ、掲示板に名前があるかどうかを受験者たちは確認し、泣いたり笑ったりしている。

「今年の倍率、20倍ぐらいだったんだっけ」

ファルマはうる覚えだ。

「25・8倍ね。こんなの、大学始まって以来だわ。ノバルート医薬大を途中退学して新規入学してこようとする学生も少なくないとか」

「へー、大人気だな、この大学」

「この大学じゃなくて、ファルマ君の講座が人気なのよ？」

学生たちはどんな顔ぶれなのだろう、と気になったファルマは、少し離れた場所から彼らを見守ることにした。何度探しても名前がなく、失神してしまった学生。嬉しくて小躍りしはじめた学生、親と一緒に見に来た学生など、悲喜こもももだ。

「つざけんな！ 馬鹿にしてるのか！」

受験者の群れの中から、ふいに怒声が聞こえて来た。

「大学まで来て、子供なんかに薬学を教わるなんざ、俺はまっぴらごめんだ！」

異国なまりの青年だった。海外からの学生で、教授が子供だと知らなかった者がいるらしい。

そういえば、玄関わきの掲示板には、伝統的に全ての教授の肖像画が掲げられている。

そこでたった今、ファルマの名前と顔を確認した学生のようなだ。

どうやら、合格者たちの話を聞いていると、ファルマを名前だけでしか知らない学生は少なからずいるようだった。ファルマは薬学生や医学者、薬学者の間では世界規模で名が知られていたが、彼が子供だと知っているのは、異世界薬局を訪れる帝都民ぐらいのも

のだ。

「歯ごたえがありそうな学生たちね、嬉しくて涙が出ちゃうわ、私」  
どうなることやら、とエレンは嘆く。

「ファルマ君の講義って、必修なのよね」  
文句があつて講義を受けなければ、進級の単位を落とすことにな  
るわ、とエレンは言う。

「こりゃ、しよっぱなから波乱含みな気配がするな」  
ファルマは苦笑し、小さくため息をついた。

## 5章8話 船乗りとビタミン、そして合格発表（後書き）

### 【謝辞】

本項は薬剤師のnene先生にご指導いただきました、どうもありがとうございます。

## 5章9話 サン・フルーヴ大市と駆虫薬

「思っていたよりずっと大きいわ」

製品の先端から先端まで歩いて、エレンが一言感想を述べた。

「これがどのように回るのか、楽しみですね」

ファルマから預かった設計図を手に、目を細めるのはメロディ・ル・ルー尊爵だ。

彼女の視線の先にはファルマの発注で製作した、工房に入りきらないサイズの大型部品がある。それを屋外で工房の弟子たちに組み立てさせて、仕様通りになっているかファルマに確認を取っていた。ファルマはそれに触れたり、なでたり、メロディに促されてハンマーでたたいてみたりしていた。エレンも強度検査をしてみると言われて、神術の氷をぶつけたりしていた。それでも、メロディの製品はびくともしなかった。

「素晴らしいと思います。メロディ尊爵に依頼してよいものかどうか、迷ったのですが……あなたに依頼したのは正解でした」

エレンとともにメロディの屋敷を訪れたファルマは、忙しいメロディに詫びを入れる。

壊れない製品を作る、という意味ではメロディの腕は比類ない。何しろ彼女が納品したガラスは落としても割れず、金属製品は歪むこともなかった。そこで今回の素材には、ガラス強化繊維を使ってもらった。

「ええ、ちょっと戸惑いましたが。ファルマ様のお願いでしたら。面白いものでしたね」

メロディ尊爵は手のひらサイズの風車の模型を風上に向けて回しながら、そう言って穏やかに微笑む。彼女は医療用ガラス器具、金属製の実験器具などを製作してきたが、これほど大型の金属製品の

依頼は初めてだという。

「プロペラ部分は全て、来週までには納品できます、他の工房からも弟子を借り出してきておりますので」

メロディは予定より速いペースで製作してくれているらしい。

「ありがとうございます。随分と急がせてしまいました」

ファルマは、注文を優先してくれたメロディの心遣いに感謝した。もちろん、納期を急いでくれたので、報酬は上乘せするつもりである。

「分解して、マーセイルまで搬送できるようにしてありますわ。基礎部分は、他の職人が？」

「はい、それぞれ依頼をしております」

ファルマが注文していたのは、風力発電に必要な大型風車だ。

まずは、試作に小型のものを一基。そして大型のものを一基、準備してもらっている。

風車は、一般に大型のものであれば低速でも大出力の電力を得ることができのだが、そこそこ小型であつても何基も立てれば大型の風車に匹敵する。試作機を作り、発電効率を確認する必要がある。プロペラとハブ、ギアを使った増速器、そして減速機、発電機、風車から工場へ電気を送る送電システム、効率のよい送電のためコイルを利用したトランスを用い、それぞれの部品を発注し、出来上がったものの動作を随時実験で確認しながら計画を進めている。

「もつと大型のものが必要でしたら、ご用命ください」

「ええ、このサイズで十分です」

（そういえば地球上では、風力発電の風車は巨大化してゆく傾向にあったな）

大型化した結果、全長100メートルを超える風車も珍しくはなかった。

ファルマはマーセイル領の荒地に神術陣で一定方向に風の吹く場

所を確保したので、常に一定の電力を得ることができる筈だ、と考えていた。

「ところで、風車を工場から少し離れた場所に設置しようとしているのは、どうして？」

エレンの質問だ。送電効率を考えれば至極まっとうな質問だ、とファルマも思う。

「風車の音が騒音になるし、羽根が落下し工場に直撃する事故があつてはいけなからね。また、変電が上手くいかずショートするこゝとがあつても。さらに、落雷も起こったりするし」

「まあ、確かにそうですね。羽根が壊れたら、かなり重量がありますもの。危険ですわ」

メロディはそういうことか、と目を丸くする。

「いえ、メロディ様の作品が壊れるということではなくて」

エレンがフォローしてくれたので、ファルマも言葉をつづける。

「そうです。安全のためというものです」

実際、風力発電でプロペラが飛んだという事故は地球ではあり、ファルマは人的被害が起こらないかどうか気にしていた。

「引き続き、製作のほうよろしくお願いいたします」

「承知しましたわ」

ファルマとエレンはメロディの屋敷を後にし、お昼休みになっていたのでロツテと合流してサン・フルーヴ大市の買い回りをはじめた。

「週間帝都です。号外です！ 号外！」

街路に屋気楼が立ちのぼり始めた猛暑のサン・フルーヴ帝都の大路では、元気のよい声が響いていた。市民たちは号外を手にし、人だかりを作り沸き立っていた。「週間帝都」で好評を博していたミッテラン兄妹の切り盛りする新聞が、創業後はじめて無料の号外を出したらしい。



大見出しとともに、ジャン提督は大きな勲章を胸につけて威厳たっぷりに記事の写真に写っていた。

ジャン提督が発見した新大陸の存在を、エリザベートが帝国民に公式発表したのだ。

「新大陸だつて？」

「大陸つてどれくらい広いんだ。島とどう違う？」

「何か珍しい鉱物が……金や銀が眠っているかも？」

帝都民の夢は膨らむいっぽうである。

「もう、何百年、何千年と誰も発見したことがなかったつてのになあ。何で急に見つかったんだらう」

「西廻り航路で発見したつて書いてある」

新聞を読みながら、市民から感心の声があがる。

「西に行けば世界の果てがあるんじゃないやなかったのか。あと、船の墓場もあるつて……誰がそんな発想を思いついたんだ、おつかない」

「ジャン提督じゃないのか？ さすがサン・フルーヴ東イドン会社の偉大な提督だなあ。誰もできなかったことを、さらつとやってみせる」

帝都市民の間では、ジャン提督は偉大だということになった。

「へえ、報道されたんだ。他国への牽制もあるかもね」

エレンも号外を一部受け取り、ファルマと一緒に帝都大路を歩きながら、新聞のななめ読みをしていた。大陸の名前は、発見者の名前を取つて、ギャバン大陸（Le continent Gabi n）という名称が申請された。ジャン提督は叙爵され、神力がない平民であるにもかかわらず名誉男爵として貴族の仲間入りを果たすことになった。

「第一発見者は帝国国民であると、国際的に知らしめないといけないつてこと？」

「そうね。でもそれを聞いた不心得な船乗りが海に出て、遭難しな

いいけど。栄養状態を完璧にして、ファルマ君の数々のアドバイスがあつて、さらにジャン提督の経験があつてやつと成功した航海なんでしょ？」

エレンはファルマのアドバイスの重要さを強調する。

「うん、普通の船乗りが普通の準備で行くと危ないよな…… それもあるし」

ファルマはそれも心配だったが、別の心配をしていた。

ジャン提督の凱旋を受け、新大陸に本当に人がいないのかを確認するため、薬神杖で大陸に飛び、彼は宇宙から大陸を俯瞰した。すると、新大陸は、形こそ違うがアメリカ大陸のように北半球と南半球に大きくまたがっており、背骨のように高い山脈が連なっていた。平地に不自然にひらけている場所があつたので偶々見つけたのだが、少なくとも西海岸側には、先住民が小規模な農耕文明を築いているようだった。ジャン提督は東海岸にたどり着いたので、無人のように見えたのだらうが、実際は違う。遠くから見たところ、アジア人系、モンゴロイドのような顔立ちをして、服飾文化は中国やチベット、南北のアメリカの原住民のそれがごちゃまぜになった状態を彷彿とさせた。

ファルマは、サン・フルーヴ帝国をはじめ各国が原住民たちの生活を脅かすのではないかと考えると憂鬱だった。広大な大陸であるがゆえに、資源も多く発見されるだろう。

（侵略の歴史は繰り返すかなあ……）

いくら国際条約で侵略が禁止されているからといって、資源や土地がある限り略奪者や海賊は出るものだし、国際条約を律儀に守つていられるほど豊かな国ばかりではない。ひそかに侵略を始めたとしても、それは海の果ての出来事。伝書鳩も飛ばせる距離ではないとあれば、簡単に確認するすべはないのだ。

「発表しないほうがよかったかもしれない」

「あら、どうして？ おめでたいことじゃない。同じ帝国民として

も、新大陸の発見は誇らしいわ」

（先住民がいなければね……）

最初はおめでたいと思っていたファルマの声のトーンは暗い。どちらかという、自らの行動の責任を感じていた。

ジャン提督が『世界の果てはどうなっているのか、いつも考えるんじゃない』と悩んでいたのも、この大地は丸い球体の上にありまして、と言ってしまったのはファルマだ。航海の助けになればと思つての助言であつたが、ジャン提督に西廻り航路のヒントを与えることになつてしまった。

大陸間の人的、物的な交流が、相互に利益になればいい。

片方ばかりが得をするのではなく、誰かが虐げられることも略奪されることもなく……そう願うファルマであつた。とはいえ、悠長なこととも言つてられない。

（女帝に話を通して、もし悲惨なことになりそうなら、俺が先住民の居住地を先行買収して、断固として他国・自国ともに手を触れさせないよう庇護に動くしかないな。今の財力があればなんとかないざとなつたら金も出せるし。……女帝は協力してくれるだろうか。ああ見えて平和主義者なんだろうけど）

そんなことも視野に入ればじめた。

「ファルマ様がまた難しいお顔をしておられますね……」

ロツテは心配そうに指をくわえてみていた。

「今度は何の悩みが増えたのかしらね？」

エレンは、いつものことだわ、と言いながら眼鏡をくいつとあげた。

「辛気臭い顔しないで、市場を楽しみましょう。買い物をするれば、気がまぎれるわ」

うたりそんな暑さの中で、帝都では恒例のサン・フルーヴ大市が開催されている。去年よりさらに露天商、行商人の登録は増え、薬の仲買人や上級薬師たちがとりわけ大勢集つてきていた。スパイス

のにおいも漂ってくる。そろそろカレーパーティーの時期だな、とファルマは思い出す。

「二人はこの売り場に行きたい？」

「私は生薬かな。あとは、眼鏡のフレームとレンズね、必需品だから」

エレンの言葉に、ファルマは噴き出しそうになるのを抑えるので精いっぱいだった。

「た、ったしかに眼鏡はたくさん買わないといけないな」

「何よー」

「さつき、メロディ尊爵に割れないメガネを依頼すべきだったね」

「尊爵様はお忙しいわ」

エレンが眼鏡を割ったり落とす頻度は決して減ったりはせず、ファルマはこの先が思いやられる。

（つるの角度が浅いのと、鼻あてがないから外れるんだよね……）

ファルマはエレンの眼鏡については何とか割れない方向に改善したいのだが、おしゃれではないと言われ毎回断られるので、もう彼女の顔の一部だと考えて、割れるのまで含めてお約束だと考えて敢えて触れないことにしている。

「ロツテはお菓子だよな」

「はい！ 珍しいお菓子の噂を聞いたんです！ あとで皆さんで食べましょう！」

ロツテはすでに大振りの買い物袋を握りしめている。買い込むつもりのようなのだ。

「気合入ってるね。じゃ、時間もないし皆それぞれ見たいものを見ようか。休憩が終わったら、それぞれ薬局に戻ろう」

ファルマはエレンとロツテと別れると、事前にチェックをしていた露店の配置図をもとにここぞとばかりに書き物をするための上質紙を買いあさる。高品質濾紙も、上質なインクも、この大市でしか手に入らない。

「いやあ、買った買った。カレー材料の仕入れは明日にするか。においが紙にうつるしな」

昨年は、スパイスの香りが上質紙にうつってしばらく残念なことになったのだ。

ファルマがホクホク顔で大きな荷物を持って歩いていると、ぱったりとロツテと出くわした。

「おや、お菓子屋の前じゃないんだな」

ロツテが珍しく、スイーツ店ではない露店を見ながらしゃがみこんでいた。

「ファルマ様見てください、動物屋さんです〜！」

大型のテントの下には、愛玩動物を扱う商人の店があった。愛玩用の犬や猫、オウムやインコなど、ペットショップのようだ。

「去年は、動物屋はなかったからな」

黒死病の流行があったので、動物商の営業は去年は禁止されていたが、今年は販売しているらしい。

敷地に小さな木製の囲いがしてあり、犬がドッグランで展示されていた。プードルやテリア、パピヨン、グレートピレニーズなど、バラエティに富んでいる。猫はペルシャ猫、雑種猫、ベンガルなど、さまざまだ。鳥かごにはカラフルなオウムやインコなどが止まり木でさえずっている。

「ワンちゃんかわいいです！」

ロツテは犬派だったのかと、ここに来て初めて知ったファルマである。

「この子たちがかわいくてかわいくて、ずっと見てたんです！」

ロツテの手をペロペロなめている、プードルやパピヨンの仔犬に、彼女は心を奪われていた。

（仔犬ってかわいいよなあ。ロツテもかわいいけどさ）

殺人的な可愛らしさだ、とファルマもロツテの気持ち理解できる。そういえばロツテも仔犬に似ているな、と気づいたファルマである。

「ああつ、目が！ ワンちゃんの目が！ 連れて帰ってって言つて  
ませんか？！」

「気のせいだよ。そんなに好きなら飼つてあげたいけど」

ド・メデイス家には騎乗用の馬はいる。その他、ミルクを絞る  
牛やヤギ、鴨などは屋敷から離れた小屋で飼っている。犬や猫など  
のペットは敷地内にはいないし、ブリュノが衛生のために動物を屋  
敷に近づけさせなかった。

「いいんですファルマ様……。ド・メデイス家は薬師のお家柄で  
すから、毛が抜けてお屋敷が散らかってもいけませんし、とてもと  
てもほしいだなんて言えません」

使用人たちは、ブリュノが潔癖なので普段の掃除も手ぬかりなく  
行っていた。仔犬が粗相などをすると、旦那様がどれほどお怒りに  
なるか、とロツテは首を横に振る。

「でも、かわいいですねっ！ この動物たち！ 癒されますねっ」

「そっか。じゃ、気が済んだら薬局に戻っておいで」

ファルマは立ち上がり、一足先に薬局に戻ることにした。しかし、  
ロツテはファルマのコートの裾を掴む。

「あつ、待つてくださいいファルマ様。さっきから元気ない子がいる  
んですけど、気になって……」

ロツテが指をさすのでファルマが視線を向けると、奥の犬小屋に  
いる仔犬が、ぐったりとしている様子だ。そのやり取りを見ていた  
ペットショップの店主が、体裁悪そうに答える。

「ああ、あの子かね。今、獣医を呼んだところだよ、心配いらない」

「そうですか、なら安心ですねっ！」

ロツテは心強く思ったのか、大きく頷いた。

「おお、獣医の先生がいらした」

店主はちょうどよいタイミングで来たと、店先まで出て今来たば  
かりの獣医を出迎える。獣医と思しき女性はまだ若く、小柄だがす  
つきりとした印象の美人の女医だった。胸元には馬蹄型の一級獣医

のバッジをつけている。ファルマも彼女を見ていたので、ばつたりと目が合う。その途端、彼女の顔色が変わった。

「はっ、教授！ ファルマ・ド・メディシス教授ですよ！ きゃーっ、どうしましょう」

ファルマと出くわしたことに、彼女は驚いたようだった。そしてぱあっと頬を赤らめる。

「ん？ え？」

ファルマは面識がない。ロッテも首をかしげている。

「はじめまして、私は獣医のジョセフィーヌ・バリエと申します。ここで出会えるとは光栄です、教授！」

「どこかでお会いしました？」

ファルマのことを子供店主と呼ぶ者は多いが、教授と呼ぶ者はいない。

「大学の掲示板の肖像画で、私が一方的に存じ上げているだけですが」

「ということは……」

ファルマはぴんときた。

「来月から帝国医薬大学校の新生になります」

「現獣医でかつ、人間相手の薬師にもなりたいてことです？」

なかなか勉強熱心でバイタリテイの溢れる女性だ、とファルマは感心する。

「はい。いちから薬学を学びたくなりまして。人間だけではなく、動物の薬も扱えるかなと思ひまして、なにより、メディシス教授の講義を受けたくて受験しました！」

「そういうことなら。よろしく、ジョセフィーヌさん。今からこの犬の診察をするところ？ なら見学させてもらおうかな」

「はい、教授の前で緊張しますが」

「ファルマ様、新しい生徒さんにお会いできて楽しそうですね」  
「ロッテまでわくわくしている。」

彼女は診察道具を用意しながら、ファルマへの感謝を打ち明けた。

「ファルマ教授が発明したとされている顕微鏡のおかげで、獣医としてもできる検査が増えました。また、数々の画期的な新薬を開発中とか。教授は私にとって憧れの師です」

「はは、まいったな……」

ジョセフィーヌには、顕微鏡の発明者がファルマだと知られているようだ。ファルマはくすぐったい。そして彼女は診療用の杖を手に取りながら診察をはじめ。

「下痢をして、毛並みも悪く、衰弱しているようですね。失礼、おしりを……あ、これは条虫症ですね」

ジョセフィーヌは犬の尻を見て、肛門に白い米粒のようなものが見えているのを見抜いた。

寄生虫、条虫の体の一部である。

「もともと体が弱い子だったのかもしれませんが、寄生虫自体はそれほど悪さをしませんので、経過観察でいいでしょう。仔犬には栄養剤を出しておきますので、それを飲ませてやってください」

「そうですか、安心しました」

店主が謝礼を払おうとすると、ジョセフィーヌは受け取らない。

「というのが私の診断と治療方針ですが、教授はどうなさいますか？」

ジョセフィーヌはファルマを振り返り、指導をと仰ぐ。ファルマも犬に近づいた。

「診たての通り、犬条虫です。栄養障害を起こしているから、栄養を補給しようとするのはよいと思います。ですが人にも感染しますし、濃厚感染している場合は消耗も激しいので、駆虫薬を使います」

瓜実条虫（うつつねぢこうちゅう）は、サナダムシの仲間であり、頭部は腸管に吸盤と鉤でくっついていて、卵を含んだ尾部が少しずつぎれて肛門から出てくる。肛門だけきれいにしても、下剤を使っても駆除はできない。「虫下しですか。ニガヨモギでよいでしょうか」

ジョセフィーヌには準備があるようで、ポーションの瓶を診療バ



ツグから取り出そうとする。

「確かに駆虫薬として用いられてきたハーブではあるけど、回虫には効果があるけど条虫には効果がないよ」

ファルマは自分のカバンの中をごそごそとする振りをしながら、条虫にも効果を発揮するプラジカンテルを薬包紙の中に物質創造で造り出す。

「条虫を麻痺させる薬、プラジカンテルです。これを、一回、餌に混ぜて飲ませてください」

飲ませ方を詳しく店主に説明する。それを、ジョセフィーヌは大きく頷きながらメモを取っていた。

「それから、ノミの駆除もしっかりしないと、またノミを介して感染するから」

「ノミを殺すハーブですか。ではミントやラベンダーの香油を毛に塗り付けるように処方しておきますね。あとは、浄化術をこの周囲にかけておきます」

てきばきと判断をくだすジョセフィーヌに、ファルマは目を見張る。

「“限局浄化”」

ジョセフィーヌは風属性の神術使いのようだった。

「ご指導ありがとうございました、教授」

ジョセフィーヌはファルマと握手をした。

「じゃあ、今度は大学で会おう」

ファルマが全て現代薬で解決しなくてもよいかもしれない、と考えさせられた場面だった。

その後、ロットテはやはりケーキを買い揃え、エレンは売りに出すほどメガネを仕入れていた。

数日後、駆虫薬の効果を見届けたファルマ、そしてロットテがぶらりと宮殿に出勤すると、女帝がお待ちかねだといって側近がロットテを呼びに来た。

「陛下が至急、とのことですよ」

「美術作品の制作依頼でしょうか？」

ロツテだけに用だとも言われなかったので、ファルマも何となく彼女のあとをついていく。

「陛下、お待ちせいたしました。シャルロット・ソレルめがここに……」

宮殿の庭のベンチで寛いでいた女帝は、待ちかねていたという様子でくるとロツテを振り返る。

「来たか。どうだ、見よ。猫と犬だぞ！ シャルロット」

女帝は広い庭園にトラやライオン、オオカミなどの猛獣を放ち、犬猫のように従えていた。よく見れば、猛禽類もベンチに何羽かとまっている。

まさに今、見事な毛並みをしたオオカミに、犬のようにボールを取ってこさせていたところだ。

「存分に触れ合うがよい！ そなたが可愛い犬猫と触れ合いたがっておると、ちょっと小耳にはさんでのう」

（どこから小耳に挟んだんだよ陛下！ そしてなんだって猛獣ばかりなんだ）

ファルマの心の声はともかく、ロツテは愛想笑いを浮かべながらファルマに小声で尋ねた。

「可愛い犬と猫、どこにいます？ ファルマ様……私の知ってる犬猫と違うんですが」

「ライオン、トラは猫の仲間、狼は犬の祖先なんだ。可愛いかわからないかはロツテの感性に任せるかな……」

女帝のペット観の庶民感覚とのズレは豪快にもほどがある。

猛獣たちもボスが誰なのかよくわかつているようで、借りてきた犬猫のようにおとなしい。

女帝直々に神術で調教したんだろうな、とファルマはおっかない。「遠慮するでないぞ、余の粹な計らいというものだ。火の輪くぐりをさせてもよいぞ」

女帝なりの、ロツテへの福利厚生のもりらしい。

「は、はい……光栄でございます陛下」

ロツテの血の気が引いていた。

（百獣の王だな陛下……）

ドン引きのファルマが一つロツテに忠告できることというと、

「触れ合うときに手がなくならないようにね、ロツテ」

「や、やめてくださいよう！」

「動物と触れ合いたくなったら、今後はいつでも言うがいいぞ」

ロツテの身の安全のためにも、ロツテがささやかなペットを飼う許可をブリュノに得た方がよいのではないかと思うファルマだった。

< i 1 9 0 8 2 0 — 2 4 9 6 >

## 5章10話 ジュリアナとの再会と、新学期

9月下旬。サン・フルーヴ大市で仕入れた香辛料をふんだんに使い、ファルマは薬局職員や得意客、関係者を招いて行っ恒例の野外シークレットカレーパーティーを開催していた。

今年も河原で開催されたオープンパーティだが、招待人数も増えシークレットとはいかない規模になってしまった。

これほど規模が大きくなれば女帝に隠れてという訳にもいくまい、ファルマは気を遣い女帝を誘ってみたが、辛いものが苦手との理由で辞退されたので内心ほっとしたものだ。女帝が参加すると参加者たちが萎縮してしまい、日頃の感謝を伝える会にならない。さらに、食事の後に企画している舞踏会も気軽なものではなく「皇帝の大舞踏会（Le Grand Bal）」というものになって格式が上がり、おそらく作法を知らず踊れない者が続出することになる。

しかし、ほっとしたのもつかの間、女帝が来ない代わりに当日になつてルイ皇子が送られてきた。庶民がお目にかかることのできない皇子がパーティーにやってきたので、皇子を接待して点数稼ぎをしようとする常連客もちらほらいた。とはいえ、皇子の周囲は護衛に近づかせてもらえなかったが……。

「ようこそおいでくださいました。私どもの料理は、殿下のお口には合いましたでしょうか」

無心でカレーを頼張る皇子に、ファルマは挨拶をする。気さくにファルマが皇子と言葉を交わす様子を見た常連客たちは驚いていたが、大帝国の皇子であろうがファルマの受け持ちの患者なのだということを思い知ったらしく、「そんな薬師様に自分たちも診ていただいているなんて！」と誇らしそうにしていた。単純なものである。「うん、気に入った。メデイス家の料理人を連れて帰るぞ」

（お、好物じゃないか。子供はカレー好きなもんだよな）

よかった、と思いながらもファルマは当たり前障りのない回答を送っておいた。

「それは困りました。料理人がいなくなったら今日の我が家の夕食をどうしましょう」

「ははは、冗談だぞ」

ファルマの弱った顔を見て、皇子は自尊心を満たしたようだ。

前菜、メインのカレー、数々のオードブル、スイーツを振る舞ったあと、楽団の演奏と舞踏会が始まる。去年と同様、エレンを誘うべきかと思ったファルマだが、当のエレンはパツレと派手に喧嘩をしていた最中だった。腹ごなしなのか、河原で神術戦闘になっている。

「今日という今日は、色々とはつきりさせておかないといけないようね！」

「それはこっちのセリフだ。口を動かすより杖を振れ！ ずぶ濡れにしてやる！」

（もう。ほどほどにしてよ、二人とも……皇子もご臨席なんだからさ）

ファルマは氷で彼らと招待客との間に防壁を張った。

二人の水属性神術使いの戦闘で皇子や客がずぶ濡れになってはいけない。

（何ですぐ示し合わせたように果し合いになるんだろうな、あの二人は……仲がいいやら悪いやら）

ファルマが軽く首を振りながら踵を返すと、ロツテと視線が合った。

こちらは、デザートのショコラを食べすぎて頬がリスのように膨らんでいる。

「もひかひてヒョコラひります？」

何を言っているか分からないほど、酷い状態だった。

「シヨコラはいらないけど、今年はロッテを誘ってもいいのかな」  
バロックダンスの心得がなくて踊れないであろうロッテに恥をかかせてはいけない、去年はそう思って誘えなかったファルマだが、今年はどうだろう、と誘ってみるとロッテは大喜びで、

「はりがとうございます！ ひひんへふか？ ほっぺも嬉ひいれす」  
（とっても嬉しいって言っただよな？）

「お相手いただけますか？ お嬢さん」

ファルマが作法通りにダンスに誘ってみると、ロッテは真っ赤になつた顔を両手で仰ぐ。

「へひ！」

（ぜひって言っただよな？）

彼女は口の中ものを片付けると、嬉しそうにファルマのエスコートを受けた。

「えへ、薬局のお昼休みなどにエレオノール様に教えていただいた甲斐がありましたあ！」

今年はエレンの特訓を受けて、バロックダンスを習得していたというロッテである。

ダンススペースでは円陣になつて踊るフォークダンスのようなガヴオットが終わり、オーケストラはペアダンスのメヌエットを流し始める。メヌエットは複数のペアで踊るダンスで、厳密なフォーメーションがあり、一人でも下手だったりステップを間違えると台無しになってしまう宮廷舞踊だ。とはいえ、誰もが踊れるように、よく知られた有名なものばかりを集めた構成になっていた。

「上手だな、ロッテ」

軽やかなステップを踏み、くると踊るロッテの手を握りしめながら、ファルマは微笑む。公式の場で踊るのが初めてとは思えないほどの熟練ぶりだ。日ごろの練習の成果がうかがえる。

「まさかファルマ様にお相手をしていただけるなんて、夢のようです」

「まさか？　じゃあ誰と踊るつもりだった？」

「……っ、そんな」

ロツテは動揺しすぎて躓いてしまったので、ファルマは彼女が転んでしまう前にそつと腰に手を回して受け止めた。

「あっ、ありがとうございます！」

曲が終わった頃には、エレンとパツレの果し合いは終わっていた。二人ともくたばっていたので、担架と馬車でそれぞれの屋敷へと運んでもらった。

「あいたたた。もう、パツレ君たら全然手加減ないんだから！」

翌日、いつそ清々しいほどパツレと果たしあったエレンは全身ガチガチになりながら出勤してきた。

「兄上に手加減なんてものはないよ」

ファルマは実感のこもった言葉を返す。

患者には手加減するだろうが、女子供にも容赦ないのがパツレである。

「ああ、体が石のよう！　こんなときにジュリアナちゃんの神術按摩があればほくれるのに……あの子今度はいつ遊びに来るのかしら」

「ジュリアナか……ここに戻ってこれるのかな」

ファルマは神聖国のジュリアナ宛に何度か手紙を送ったが、梨のつぶてだ。そろそろ帝都の神官に催促をした方がいいと思っていた頃合いだった。

「そんなに深刻な感じで言わなくても。あの子はある子で忙しんですよ」

エレンが、大げさな言いながら眼鏡をかけなおす。

「ファルマ様、ジュリアナさんに会いたいですね。懐かしいですものね、私もお会いしたいです」

ロツテがジュリアナの代わりにエレンの肩を揉みながら懐かしがる。薬局職員は事情を知らず、ただジュリアナは国元に帰っただけ

と思っているからだ。

（心配になってきたな、まさか神聖国で酷い目に遭ったりしていないよな）

ファルマに肩入れをしたばかりに、神殿で憂き目に遭ったりはしていないだろうか、神聖国までの道中は無事に帰れただろうか……。諸々のことが気になったファルマは、こうしていても埒が明かないと考え、ぶらりと帝都の神殿を訪れた。監視対象がこのこやつてきたので神殿は大騒ぎになり、平静を取り繕いながら神官長のコームが対応する。ファルマは神殿の中には入らず、神官長を外に呼び出して用件を告げた。

「こんにちは。神聖国にいますと思われるジュリアナさんに連絡が取りたいんですが、何度手紙を送っても返事が来ないんです。神官長さんから問い合わせていただけませんか？」

「これはこれは、薬神様。彼女に何の御用で」

ジュリアナの名が出てきて、コームはあからさまに挙動不審になった。

慌てる様子を見えますます不審に思ったファルマは、毅然として尋ねる。

「彼女に預けたものを、大神殿にきちんと届けてもらえたかなと思ひまして」

宝剣に込めた神力をジュリアナがきちんと大神官に渡したかどうか確認したい、とファルマは言い渡す。

「もう一つは彼女に神術按摩をやってもらいたいなと思ひまして」

「神術按摩でしたら、帝都神殿にも得意な者がおりますので、呼んでまいりましょうか」

「ジュリアナさんを指名したいんです」

ジュリアナさんの具合がよくてですね。と、ファルマは強調する。



ファルマは断固として譲らなかつたが、あまりにも彼がジュリアナに固執するので、

「さては特殊なマッサージをご希望ですか」

アレが具合がいい、ということとは、なるほど……と、神官たちがひそひそ話していた。失礼極まりない話である。

「違います！」

（そつち系の嬢の指名みたいになつちやつたじゃないか……）

妙な詮索をされて微妙な空気になったものの、ジュリアナの安否をばかされたまま引き下がるわけにもいかなかったので、ファルマはすたすたと歩いて行つて神殿の外壁にぴたりと手を当てた。

「？ どうなさいましたかな」

「この外壁、大神殿と同じ素材でできていますよね？」

「そうです」

コームは立派な外壁に手をかけたファルマを眺める。ファルマはコームを見据えながら、右手に集中した。

（「炭酸カルシウムを消去」）

ファルマが消去の能力を使うと、外壁の素材の中から主成分である炭酸カルシウムが消滅し、神殿の囲いが一瞬で蒸発した。

「ひっ、……ひいっ！ なっ、何をなさつたのです！？」

ファルマのさりげない脅迫に、コームは震えあがつた。

コームはファルマの物質創造と消去の能力を知らないのです、守護神ならではの秘術を使って壁を破壊したものだと思ひ込んだ。

大神殿は神力を吸収するように神術のかけられた単一素材でできている、というのはサロモンの言葉だ。単一の素材であるなら何だ消せるじゃないか、とファルマは考えて実行してみただけである。

「噂によると、大神殿は地下が何十層もあるんですっけ？」

ファルマはすつとぼけながら尋ねる。

「なら、大神殿の全ての床が抜けたらどうなりますかね？」

神聖国にいる神官全員、ファルマが術を使つた瞬間何十メートル

も落下して最下層に叩きつけられ、戦わずして即死だ。コームは鼻水を垂らして頷いた。

「俺、その気になれば1時間もあれば神聖国に行けますけど」

「し、神聖国にかけあってみます……」

数日後、神官二人に脇を固められて、異世界薬局の前に一人の女性が連れられてきた。

ベールを被っていて顔はよく見えないが、それが誰かはファルマにはすぐにわかった。どうやら、神聖国がファルマの脅迫に屈し、ジュリアナを差し出してきたらしい。

（ちよろすぎるな、神聖国）

などと思いながら、ファルマは再会を喜ぶ。

「ジュリアナ、元気にしてた？ 中に入って」

「きゃーっ、ジュリアナちゃんじゃない！」

エレンは大歓迎だ。按摩をやってももらいたいのだろう。しかし、ファルマから見たジュリアナは、やつれたように見えた。お付きの神官は店舗の隅に居座り、ジュリアナが逃亡しないかを監視している。

「あの、話が済んだら彼女は安全に神殿に送っていきますけど」

ファルマが暗に神官たちを厄介払いをしようとすると、神官たちは首を左右に振った。

「お待ちしていますのでお気になさらずごゆっくりお話してくださいませ」

「あ、そうですか」

カウンセリングルームに通したジュリアナが沈んでいる様子だったので、ファルマが先に声をかけた。

「なんかの歯車を動かす神力は足りた？」

それを聞いた途端、ジュリアナにじわりと涙が込み上げてくるのを見て、ファルマは二階の感染隔離者用の診察室に場所を移すこと

にした。神官たちは話を盗み聞きできなくなつて舌打ちをしたが、知つたことではない。

「ここなら安全だ。窓もないし防音がしてあるから声も階下には聞こえない、何か話せることがあつたら聞かせてほしい」

ファルマはジュリアスのボトルを開封し、ジュリアナに飲み物をすすめながら彼女に質問する。

「ファルマ様の神力のおかげで、鎡の歯車を175年分巻き戻すことには成功しました」

「それは何よりだ」

ファルマはジュリアナが目的を果たすことができたと聞き、ほつとした。

「ですが……私は世間知らずで、バカでした」

ジュリアナはぼつりぼつりと打ち明けた。大神官はファルマと話し合いをするつもりはないようで、大神殿の地下に封印しようとしていることを。そのためにより威力の高い神封じの術の開発を急がせていること。ファルマに危険が差し迫っていると。ジュリアナは悔しそうに話した。

「そうか。よく話してくれた……でも、大丈夫だよ。相手がどんな手できても、そうそう封印されるつもりないし。俺もそんなに馬鹿じゃないつもりだ」

「そして私はまた例の宝剣を持たされています……」

「ははあ、さつそく君が刺客なのか。それを正直に言ってくれる刺客もどうかと思うけどな」

まいったな、と言いながらファルマは苦笑する。すると俯いていた彼女のベールの下に、顔を殴られたような痕があることに気付いた。顔だけではなく、体にも痣が見えていた。ファルマはすぐに、ジュリアナに手当てを施す。

「想像以上に酷い目に遭っているんじゃないか？俺は協力するつて言つたのに、何でそうなるんだろうな」

「守護神様と人間は話が通じない、信用できないと、大神殿ははなから思い込んでいるようなのです」

（確かに、神殿ぶっ壊すって脅したけどさ。それとこれとは別だろ  
う）

ファルマは頭が痛いところだ。

「ところでこういう経緯で君は、話が通じないと思われている俺から神力を取ってくる係になったんだっけ？」

枢機神官、つまり異端審問官であったサロモンより上位の神官だと言つわりには、ジュリアナは神力などもサロモンと比べても見劣りがするので、ファルマは疑問に思う。

そんな彼女に秘宝ともいえる宝剣を預け、火中の栗を拾わせるのもいかなものか。それほど神殿は人材不足なのかと問いたいファルマである。

「私は鎡の歯車の啓示を受けた者として選ばれましたから……。それ以来、選ばれしものとして特別な教育を受けてきました」

「啓示はどんなものだった？」

「何度か、世界が歪んで見えない歯車が現れるのを見たことがあります。それも、何度も。他には、体中が痙攣して憑依状態になったり。そういう体質なので、見出されたのだと思います」

（へー……）

ファルマは意外な言葉に、少し考え込んだ。そしてまさかとは思  
いながらも尋ねてみる。

「啓示のあと……強烈に頭が痛くなったりしてない？ 長ければ数  
時間ほど」

ジュリアナは目を丸くする。

「しました！ 必ずといってそうでした！ 神官たちは、それこそ  
がまさに守護神様からの天啓だと……！」

症状を見て来たかのようにぴたりと言い当てたファルマに驚き、  
ジュリアナは興奮気味に頷く。

「それだつたら、閃輝暗点せんきあんてんじゃないかな。あと、てんかんもあつたんだろう」

ファルマは診療机に突つ伏しそうになりそうなほど脱力しながら彼女に告げた。

そういう症状を見た第三者が、神がかりや悪魔憑きのような話を吹聴するのだから、とファルマは嘆かわしい。ジュリアナの状態を診眼で診る限り、今はおさまっているようだ。

「閃輝暗点というのは偏頭痛の前兆現象のことだよ。脳の血管が収縮し、それから拡張して視覚野に影響を及ぼしたときに、チ力チ力する歯車や渦巻き、空間が歪んだように見える。神秘現象ではなくて誰にでも起こりうる生理現象だけど、ジュリアナさんは偏頭痛がひどい人なんだろうな」

ファルマの話を理解できないジュリアナの首が、どんどん傾いていった。

「つまり、誰でも見える、ということですか？」

「もし、それだとすればね。その歯車、子供の頃は何回も見ただけ、今は段々減ってきてるだろ？　そしててんかんは憑依とか関係なくて脳が興奮した状態なんだけど、それも今はないんだろ？」

閃輝暗点は成長するにつれ、なくなる場合がある。てんかんもだ。今現在悩んでいるのなら、予防のために薬を処方してもいい。

「そうだったのですか！　まさか守護神様に、お前は選ばれしものではないと教えていただくことになるうとは……」

ジュリアナは複雑な顔をした。

選ばれし者としての修行や苦労は水の泡ではある。だが、清々しそつでもあつた。

「胸のつかえがとれました」

「それはよかった。君のような子は他にもいるのか？」

基本的に枢機神官になるには神術の腕が優れていることが条件なのだそうだが、ジュリアナのような境遇で枢機神官になってしまった人間は、他に数人いるという。かといってジュリアナを再び神殿に戻せば、どんな仕打ちが待っているか分からない。彼女は枢機部の秘密を知り過ぎてしまったのだ。

「神聖国を抜けて、帝国民になる意志はある？」

「それができたら、どんなにいいか……ですが、国籍を捨てることは容易ではありません、ましてや、神聖国を抜けたら殺されます」

「そっか。じゃ、任せて」

ファルマはそう言って一階へ降り、一直線に神官たちの方へと歩み寄った。神官たちは話が終わったのかと立ち上がる。

「ジュリアナさんを保護しますので、神聖国へお引き取りください。本人も帝国に残ることを希望しています」

神官たちは面食らった。そして、強硬姿勢を向けられ言葉に詰まる。

「な、何をおっしゃっている。そんなわけにはまいりません、彼女は神官であり神聖国の臣民だ」

ファルマはしかし怯まなかった。

「彼女の体に、無数の痣や傷がありました。彼女は“迫害を受けて母国に居住できなくなった者”に該当します、ならば彼女は難民です。セドリックさん、国際法・難民保護条約ではそうですね」

「国際条約では、迫害を受けていると認定された場合、その人の生命や自由が脅かされる国へ返してはいけないとありますな」

何の事情も知らないセドリックが、法に照らし合わせて即答する。セドリックの頭の中には帝国法や国際法が完璧に入っていて、まさに生き字引といえる存在だった。話を聞いていたエレンはジュリアナの窮状を即座に察し、こう言って加勢した。

「神聖国も国際条約を締結しているのではなかったですか？」

神官たちはどうすることもできず食い下がったが、ファルマが頑

としてジュリアナを出さなかったので、手ぶらで帰るしかなかった。

ジュリアナは神聖国の国籍を放棄し、難民として認められた。神聖国が不当だと抗議してきたが、ファルマは先手を打ってジュリアナの体にできた傷跡を写真におさめ、帝国と神聖国に中立な第三国の医師を呼んで診断させ、報告書を作成させていたので引き渡しには応じなかった。

ファルマが女帝にかけあつたおかげで、一週間後には帝国籍が与えられ、宮殿で手厚く保護されることになった。そして宮殿でサロモンの姿を見ると、ジュリアナは幽霊にでも会ったような顔をしたという。

「しかし大神殿はけしからんな。帝都から追い出してもよいのではないか」

女帝はジュリアナの境遇や、ファルマがジュリアナに襲撃された旨を聞いて憤慨していた。

「神術を掌握しておるため、そうもいかないのが実情でございます」サロモンが女帝に応える。

帝国を含め神聖国以外の国々が神殿に強く出れない理由は、神脈を開閉する術を神聖国が独占していて、神官たちがいなくなればその年の新生児から一人も神術使いになれなくなるからだ。

帝都だけ追放しても、帝国は広大だ。帝国各地の神殿が一斉に引き上げてしまつては、帝国は一気に無力化する。実際、過去の歴史を見ても神聖国に刃向かつて神術を捨てた国はすぐに弱体化し他国に蹂躪され、再び神聖国に服従することになった。

しかし今や帝国は、それまで呪紋で縛られ神殿を裏切ることのできなかった神殿の枢機部の秘密を知る枢機神官がファルマの解呪で寝がえり、神術の全体系を知る元異端審問官であるサロモンを手に入れている。二つの手札を得て、動くなら今だ、と女帝は心を決めたい。

「サロモン、ジュリアナ。そなたらに密命を下す」

女帝から二人の元神官に下った密命。それは守護神を敬い、虚礼を廃止し神殿本来の教義に則った実践的な正教を創始し、優秀な神術使いを神官として育てるというものだった。

「守護神は我が国にあり、もはや神聖国の好きにはさせぬ」

神聖国に知られてしまえば、国際的に帝国討伐を呼びかけるための口実にされかねない危うさを孕んだ行為だった。

ファルマはそんな動きがあるとはつゆ知らず、遂にサン・フルーヴ帝国医薬大学の新学期を迎えていた。ファルマはセレモニー用の大学指定の教授用の角帽を被り、学部章と金の細工のついたローブをつける。エレンがきゃーきゃー言って写真を撮った。

「絶対面白半分だろ」

「そんなことないわ、似合ってるわよ」、ファルマ教授。そのサイズの小さいアカデミックガウンは特注ね、きつと」

「そりゃ特注だろうな。ってか俺の入学式じゃないし何枚写真撮ってるんだよ！」

他にそうそう子供教授がいてたまるか、とファルマは思う。

「入学式って何？ 卒業式は盛大にやるけど」

「そっか。入学式はやらないんだっただな」

エレンが笑う。日本人の感覚的には入学式は盛大にやるものだが、欧米には殆ど入学式はないというのをファルマは思い出す。入学の時期がバラバラだからだ。

指定された時間にエレンと大講堂に赴くと、既に学生が集まりはじめていた。ファルマは教員側なので他の教授陣らと共に壇上に上がり、決められた席に着席する。

定刻通りに大学の鐘が鳴り、国歌演奏のあと、ブリュノが登壇し、総長告辞を行う。副学長が入学者全員の名前を読みあげると、学生たちは起立する。



第一回生は、

医学部 30名

薬学部 20名

総合医薬学部 30名

臨床検査学部 20名だ。

「以上、100名がサン・フルーヴ帝国医薬大学校一回生である。諸君らの入学を許可する。代表者、首席、エメリツヒ・バウアー」緊張気味にブリュノから入学許可証を受け取った首席の青年は、ファルマの見覚えのある学生だった。

（あの子が医薬学部の首席だったのか。ドイツ人っぽい名前だな）ファルマからしてみれば、あの”子”である。

合格発表の日、「子供に教わるなんて聞いてない」と逆上しファルマの講義を受講することを拒否していた青年だ。

（優秀な学生があんなことでぶちギレて退学なんてことにならなくてよかった）

その後、制服はないが、伝統的に学部章の刻まれた帯杖ベルトを付ける決まりになっており、贈呈セレモニーが行われた。受験という難関を潜り抜けてそれを手にした学生たちは感動して、感慨深そうにベルトを握りしめていた。

今年はファルマの強い希望で、神術の使えない平民学生の特別選抜枠ももうけてもらったので、杖帯ベルトではない大学指定のベルトを貰っただけの平民もいるが、同じ学部の学生だ、神力の有無や人種で、差別はしない。

「今学期より大学の新編成により、全学部の体制が刷新された。各学部長からそれぞれ挨拶を」

各学部長挨拶の場面になった。勿論、ファルマも挨拶をしなければならぬ。

ファルマは高揚してくるのを感じていた。

## 5章11話 エメリツヒ・パワーとの個人授業

医学部長にして宮廷侍医長クロード、薬学部長にして大学総長のブリュノの挨拶に引き続き、総合医薬学部長のファルマが壇上に立ち、新入生の注目を浴びる。

子供ならではの事情で演台の高さが不似合いだったが、ファルマは少し背伸びをして意に介さない。ファルマは大講堂の隅で、何かしでかさないと心配そうに見守るエレンと目が合ったので、にこっと口角を上げる。ファルマが平常心であることを、エレンは覺つたようだった。

「はじめまして。今年より学部長を拝命しました宮廷薬師のファルマ・ド・メイシスと申します。以後、お見知りおきを」

「さて、サン・フルーヴ帝国医薬大学校は教育課程の刷新、学部統廃合が行われ、世界に通用する医学薬学教育拠点、研究拠点として力強く生まれ変わろうとしています」

ファルマは、例の首席の青年が壇上の彼を睨み据えていることに気付いたが、そちらには視線をくれず話を続ける。彼は一刻も話を聞きたくないという感情が顔に出ていた。

「あなたがたの扱う一つ一つの薬が、世界中の同じ病気の患者さんを癒す可能性を秘めています。薬には人を癒す力があります、それは薬と人体との間に起きる連鎖的生化学反応です。その反応を理解し、そこから俯瞰して生体で起こっている現象を理解しなければなりません。薬師は確かな知識と高度な技能を手に薬の力を引き出し、全学部の治療者と緊密に連携し、それをどうか適切に使って下さい。その方法を徹底的に教えてゆこうと思います、具体的には……」

例によってファルマの訓示が長くなったので、エレンがファルマ

に手振りで合図を送った。ファルマは薬学への情熱のあまり、こういう訓示ではついつい話が長くなってしまふのが常だ。学生たちはブリュノの「座っていい」というジェスチャーを見て、着席しながら話を聞いた。

ファルマのスピーチは終わらない。学生たちも聞き入っていた。そして総合医薬学部以外の学生たちは、ファルマのわずかなスピーチの間に心を動かされ、また、彼が碩学であることに驚き、特に薬学部の学生は、総合医薬学部に移転したいと考える者も続出した。勿論、一部では話の長さにうんざりする者もいたが。

「貴重な話で結構だが、続きは講義の中で。ファルマ教授」

遂にブリュノが強制中断させた。話に没頭していたファルマは反省しつつ頭をかく。

「失礼しました。ついつい話が過ぎたようですね。では、本学での学びの時間を有意義な時間としてください。私は一年次共通カリキュラム基礎医学概論、医学薬学生物学、二年次の専門講座ほか、五つの講義を担当しますので、皆さんとの講義や実習を楽しみにしています」

大講堂で開催されるファルマの担当講義は、全学部共通の必修科目に組み込まれていた。

1、2年次に教養課程を行い、3、4年次は専門課程になる。

5年次は実習を行い、5年後に一級・二級薬師への受験資格を得る。入学は14歳から認められている。学費は帝国が負担し、卒後は帝国の医療従事者として5年働くということを条件に無償であった。

「一年次の私の講義は全て必修ですので、単位を取らなければ即留年です。くれぐれも、履修漏れのないように」

新学期一発目の総合ガイダンスが終了し、リンゴーン、リンゴ

ーンと中央時計台の鐘が鮮やかな音色を奏でる。開け放った窓から園庭の小川のせせらぎと小鳥のさえずりが聞こえてきた。ファルマにあてがわれた立派な学部長室兼教授室では、教授秘書とエレンと三人で会話を交わしていた。

「あれだけの教員と学生の前で、挨拶も慣れたものね、驚いたわ」  
「学生の相手は慣れてるよ。エレンは意外に上がり症なんだな、いつも勝気なのに」

「ほ、ほっといてよ」

ファルマは笑う。前世では何年も講義を受け持っていたのだ、板についていると言われても「だろうね」ぐらいの感想しか出てこないファルマである。

「どこかで教授をなさっていたのですか？」

ティーセットを運んできたゾエ・ド・デュノワが驚いたようにファルマに問う。彼女は面接の際にファルマが口頭試問をし、聡明で気配りのできると見込んだ、今学期から採用されたばかりの美貌の教授秘書だった。水色の長い髪をコサージュでまとめあげ、立襟とバスルススタイルドレスの、いかにも上品な淑女といった佇まいだ。  
「教授をやったことはないよ」

准教授ならあるけれど、と補足はしなかった。どういう意味なのかと、ゾエは首をかしげる。

「ああ、彼ちよっと人と違うのよ。人間離れているというか」  
エレンはそんな言葉で濁した。

三人でお茶を飲んでほっと一息していると、教授室の外からノックの音が聞こえる。

「突然の訪問失礼いたします、エメリツヒ・バウアーです」

「どうぞ」

「失礼いたします」

エメリツヒは教授室に通されソファに着座すると、開口一番、こう息巻いた。

「メデイシス総合医薬学部長。退学申請の受理をお願いしたく、ま  
いりました」

「え？ 退学？ もう？」

何を言っているのか、といわんばかりにエレンのメガネがずれる。  
「随分と急だね。受験や入学する前に辞退できなかったのか？」

ファルマはやりわりとだが、エメリッヒの要望を撥ね付けた。

「今日まで悩んだ末のことです。私には時間がありません、もう決  
めました」

「どうしてもというなら、教授会に出す理由書を作成しないといけ  
ない。受理されるか分からないけどね。単に気が変わったというだ  
けなら、却下だ」

「理由ですか。決定的な理由として、進路選択を間違えました。こ  
の教科書を誰が書いたのか、よく見極めるべきでした。兄上のもと  
を訪ね、個人的に師事したいと存じます」

エメリッヒはファルマが教科書を書けるはずがないと決めてかか  
っている。それで、共著者として名前の記載されているパツレを、  
第一著者だと思い込んだのだ。随分あけすけなことを言うものであ  
る。しかしファルマは気分を害することもなく、穏やかに尋ねた。

「それはつまり、私が書けるわけないと思ってる。そういうこと？」

「いえ、そのようなことは」

彼の兄たるパツレの心証を害さないように上辺ではそう言ってい  
るが、その緑色の瞳の奥には強い肯定の意思を見て取ることができ  
た。ファルマはまだ12歳、いっぱしの学問を修めているようには  
見えないのだろう。

「あいにくと兄は弟子をとっていない。兄は優秀な薬師だけれど、  
半年前に一級薬師になったばかりだからね。それでもいいなら、受  
理するよ」

ファルマはインク壺にインクを付け、サインをして忠告をする。

「ちょっと待つて。あなた、ファルマ君、いえ教授の外見だけでそんなこと言ってるの？」

黙って聞いていたエレンが、呆れながらファルマを弁護した。

「エレン、いいんだ。彼の決めた進路だ、教員としては支援するだけだよ。受理されるかわからないけど、君がそこまで意欲を失っているなら、教授会に諮ってみるよ」

ファルマがエレンを制止する。

エメリツヒは確かに優秀だが、学びたくないのなら無理強いするものでもない。嫌々続けたところで、先は知れている。それに、ゾエから見せてもらった資料を見るに、彼はすでに異国の一級薬師である。国元に帰れば、仕事も存分にあるだろう。

（大学に入ろうとしていたのに時間がないって、どういうことだ？）  
ファルマは少々気になった。

「じゃあもう何も言わないけど。人を外見で判断しないほうがいいと思うわ」

エメリツヒはエレンの言葉を聞いて、ブリュノの一番弟子として学内や学生の間でも高名なエレンがそこまで彼を弁護することに何かを感じたらしく、何を思ったのかファルマに向き直った。

「では、もしよろしければ構わないのですが、ご指導を賜ってもよろしいですか、神術試合で」

「何で神術で実力をはかりたがる？」

ファルマは総合薬学部創設の意図を噛んで含めるように言い聞かせた。神術を使わなくとも学べる学部なのだと。その教授に、何故神術での力比べを申し込むのか。そう尋ねた。

しかしエメリツヒは頑として首を横に振る。

「よい薬師は、よい神術使いでありますので。これは世間の常識であります。お受けいただけないなら、致し方ありませんが」

「あなた……自分が何言ってるか分かってるの？」

エレンがエメリツヒをたしなめる。神術試合を断るということは、真剣勝負から逃げたということになり、成人した貴族にとっては不名誉なことなのだ。

まだ未成年のファルマを子ども扱いして恥をかかせようとしている、ということは行間に読んでとれた。それに、従来の常識だと、すぐれた薬師は必ずといってすぐれた神術使いである。

「退学したいなら止めないけど、まあいいよ」

ファルマは上着とベストを脱ぎ、立ち上がった。

「ゾエさん。事務に言って闘技場を借り切ってもらえる？」

「今からですか？ 使用目的は何と」

「個人授業かな」

「かしこまりました。隔壁生成用神術陣の展開と、応急処置のための医師の待機を申請しますか？」

ゾエが気を回して尋ねるが、ファルマはきよんとする。

「隔壁生成用神術陣って何？」

「そのまんまの意味。ギャラリーに攻撃が当たらないようにする防壁のようなものよ。絶対準備したほうがいいわ」

エレンがファルマに教える。エメリツヒの腕はかなりのものだと見込まれる。学内の設備や器物を破壊した場合、神術戦闘を行った当事者に請求されるので、防護しておいたほうがいい、彼女はそう言った。

「じゃあ、その準備をお願いします」

「お手柔らかに。さすがは帝国最年少教授だ、肝がすわっておられる」

エメリツヒは自分の思い通りの展開になったからか、したり顔をした。

「先生と呼ばれるほどのバカでなし」って言葉があつてね。君は退学するのだから、心にもないことを言わなくてもいいんだよ」

ファルマは川柳を引き合いに出して、エメリツヒの皮肉を切り返

す。

「でも、一つだけ心に刻んで帰ってもらうことがある」

ファルマはそう言い残し、エメリツヒに背を向けて部屋を出て行った。

… … … … …

「神術試合だ！ 神術試合が始まるぞ！」

その速報は熱気を帯びて、大学中を瞬く間に駆け巡った。

学生も教員も、構内に居合わせ話を聞いた、誰からともなく屋外闘技場に集まりはじめた。

「何事だ、騒々しい」

ブリュノが総長室の窓から庭を見下ろし、顔をしかめる。

「新学期そうそう神術戦闘訓練とは、今年の新入生は元気が有り余っているようすな」

副学長がブリュノのサインの入った決裁書類をまとめ、各委員会の資料を作成している。

「試合をご覧になりますか、総長」

「あいにくと私は暇ではない。今年は死者が出ぬよう、各部局によく通達しておけ」

例年、神術試合によって一人や二人は死者が出るものだ。

貴族同士の戦闘となれば、安全な試合とはいかない。殺意がなくとも、命がけになる。

しかし、彼の息子の試合だとは、ブリュノは夢にも思わなかった。

… … … … …

闘技場の舞台を覆う、透明な円筒状の神術陣が編み上げられ、起動した。



青い光柱の囲いの中に入り、ファルマとエメリツヒは相対する。

「お相手いただき、感謝します」

エメリツヒは余裕の笑みを浮かべる。ファルマは腕を伸ばして準備運動をしていた。

両者杖を抜いたが、エメリツヒは一本の長い杖を中央から二本に分解した。両杖使いのようだ。ファルマはそれを見ても特に動揺の素振りは見せない。杖を軽く握る。

「神術戦闘のルールを確認する。時間無制限。相手が杖を手放し降参の意思を見せるか、審判が止めるか、戦闘不能になるまでだ」

審判の腕章をつけた屋外闘技場を管理する職員が、ルールを確認する。審判がいないと殺し合いになるケースもあり、ブリュノの言いつけで、神術試合が行われる際には必ずといって立ち会うことになっていた。

「わかりました」

ファルマははっきりと答え頷く。

エレンやパツレと経験した神術の実戦訓練とルールは一緒だ。

「始め！」

エメリツヒは審判の開始の合図と同時に発動詠唱を打って出た。

「室息領域」(Erstickendes Bereichs)

「

”聖界の竜巻”(Heilige Tornado)」

二杖による連続詠唱。両方とも風属性神術だ。そして、詠唱言語はサン・フルーヴ帝国のそれではなく、プロセン王国の言葉だった。

「ほう、二杖同刻詠唱ですか。珍しい」

「なかなかの使い手ですな」

その場で見守っていた教員たちからは、感心の声上がる。

室息技で意識を飛ばし、竜巻で空に打ち上げ地にたたきつける戦

法のようなだが、窒息技はファルマには無効だ。審判は吹き飛ばされ、場外に投げ出された。竜巻の威力は凄まじかったが、ファルマは敢えて吹き飛ばされた振りをして地を蹴って大きく飛び上がり、上空からのポジションを取った。

ファルマが手にしている杖は一点ものだが、帝都の杖職人の作品だ。薬神杖がなくても、胸ポケットに入れていた職員証が浮力を生じている。

ふわりとファルマの体が風を孕む。

「滞空時間が長い……！ エメリッヒの竜巻の効果か？」

「違う！ 教授は逆に風を利用している」

ギャラリーはファルマにエメリッヒの術が効いていないことに気付き叫んだ。

「質問」

上空から投げかけられたファルマの声は、闘技場のすみずみまでよく響いた。

「私は何属性でしょう？」

ファルマは人差し指をずっと立て、見下ろしながら質問する。そしてその直後、

「"水の大鎚" (l'énorme marteau d'eau)」

ファルマは杖の先でくると正円を描くと、水柱をその中に召喚するかのようにエメリッヒめがけて高水圧の攻撃を振り落とした。

「くっ！ そんなの水属性に決まっています！」

エメリッヒは攻撃を見切り、素早くステップを踏んで回避するが、ファルマはエメリッヒの動線を完全に読んで、彼がギリギリ回避できるようにゆっくりと降下しながら水柱を操る。エメリッヒはさながら猛禽に狙われた小動物のように回避に徹するしかなかった。武闘場は激しく破損し、ファルマの攻撃で小さなクレーターがあいていた。

「何だあの水圧は……！ 神術陣の敷かれた舞台を粉々に……水の  
大鎚はあんな神技でしたか？」

見物に来ていた教員同士が言葉を交わす。

「いや違います。それにファルマ教授の詠唱音が控えめだ、あんな  
威力が出る筈が……」

声高らかに詠唱しなくても、呟くだけでも発動詠唱は成立し、神  
技は発動する。だが、詠唱の発音が悪いと、一般的には神術の威力  
は落ちる。

「発動詠唱をささやく程度であの威力って……」

ギャラリーは常軌を逸した神術に理解が追いつかず、騒然としは  
じめた。

エメリツヒは一連の空中からの攻撃を受け反撃をし、すんでのこ  
とで回避しながら、ファルマがただ脅しをかけているだけというこ  
とに気付いた。

「当てるつもりがありませんでしたね、教授！」

「そうかな」

ファルマは地上にふわりと降り立つ。

重力から逃れたかのような軽やかな着地に、エメリツヒが警戒を  
強めている様子がファルマからも見て取れた。

「互いに合意のあった神術試合で、あなたが私に怪我をさせずほ  
どに相手をしようとしておられるのなら、私としては不本意です。  
私を殺すつもりで来てください」

教員たるもの、生徒に殴られても反撃してはならないという日本  
人の感覚であったファルマは、エメリツヒの言葉を意外そうに聞い  
ていた。

「そうなんだ。じゃ、遠慮しないよ」

ファルマが瞳を眇めると、エメリツヒは一瞬たじろいだ。

ファルマはぼそりと何かを呟くと、指先にたった一つの氷を作りだした。

その粒が成長し、二つになり、四つになる。

「氷の剣ですか？」

水属性の基本の術で、エメリッヒも知っている。十六本の氷のナイフで対象に斬りかかる術だ。しかし、ファルマの生成は終わらず、指数関数的に増殖しはじめた。ファルマの周囲には既に、無数ともいえる凶器が浮かんでいる。

これを全部ぶつけられたら、物量だけで逃げられない！ エメリッヒはそう感じたのだろうか、エメリッヒの顔からは完全に余裕が消えた。

ファルマは恐怖を煽るようにしてゆつくりと人差し指をエメリッヒに向け、ほんの軽く爪先をはじいた。

「こ、こんな術……神術じゃ……ない……」

いかなる回避も許されないほどの密度のそれに襲われながら、エメリッヒは悲鳴を飲み込んだ。

氷のナイフは猛スピードでエメリッヒを目掛け、同刻に射出されてゆく。

「逃げられ……」

エメリッヒが張った風の防壁は、完成する前に完全破壊された。彼が死を悟ったとき、全てのナイフはエメリッヒから数ミリの距離で停止していた。彼が微動でもすれば、即死は免れない。

「”氷の捕縛”（Capture de glace）」

「うわあああああつ！」

動けなくなつたエメリッヒを、巨大な氷山の中に埋め込むように拘束する。

そしてファルマは彼をめがけて、杖をあたかもビリヤードのシヨ

ットを打つように構えた。

「憤怒の暴風」(la tempête en colère)  
「なっ!？」

エメリッヒの顔がさらに恐怖に引きつった。

何しろ、水属性神術使いだと思っていた相手が、風属性神術を放ってきたのである。攻撃を放つ直前に氷山は蒸発し消えたが、エメリッヒに逃げる時間を与えなかった。爆風がエメリッヒを打ち付け、視界を奪う。

そしてエメリッヒは、恐るべき言葉を聞いた。

「灼熱の燃焼」(Enfer de brûlure)「

ファルマは立て続けに、怯んだエメリッヒをまるごと爆炎の円でぐるりと囲んでいた。エメリッヒは即座に強風を呼び込み、何とか炎を吹き飛ばして消火する。しかし、彼はさらなる攻撃にさらされていた。

「天の断罪」(la conviction du ciel)「

炎を纏った土礫が上から雨のように降り注いでくる、土属性の最上級神術だ。今度はエメリッヒにも命中し集中砲火を受ける。エメリッヒは激痛に耐え兼ね風で吹き飛ばそうとするが、彼は自身の神力が急速に目減りしていることに気付いたようだ。

エメリッヒの守護神は薬神。

ファルマを相手にすると共鳴してファルマに神力を奪われてしま

う。  
「はっ……神力が……何故……」  
「どうした？」

ファルマの全てを見透かしたかのような言葉に、エメリッヒはファルマが何かを知っていると気付いた。

「体調を整えてくるべきだったね」

エメリツヒの守護神が薬神である限り、ファルマに勝てるわけがない。エメリツヒが神術を使おうとすればするほど、守護神の加護を必要とする。

薬神への祈念は、ファルマを加持し力を与えることに他ならない。パツレはもとも規格外に神力量が多く薬神杖を相手に一時間程度持ちこたえることができたが、エメリツヒはあつという間に体内の神力を使い果たしてしまった。しかしエメリツヒも、学内でも屈指の神術使いであろうことは、入学時に査定された神力計の数値を見ても明らかだった。

「さあ、同じ質問をしようか。私の属性は何だ？」

ファルマは、神術を撃つ余力もなく肩で息をするエメリツヒを休憩させるために質問する。ファルマが四属性全ての神術を正確な発動詠唱とともに撃つてみせたからか、エメリツヒは動揺し答えられなかった。

観衆たちも、しだいにファルマの神術が異常であることに気付き始めた。金属性を使える神術使いなど存在しないからだ。エメリツヒは絶句したまま、細かく震えていた。虚脱感に襲われている筈だ。

「最初、私が水を使った攻撃を仕掛けたとき、君はこう言った。水属性だと」

エメリツヒの唇は震えたが、何も言い返すことができなかった。

「でも、騙されたよな」

ファルマは全て物質創造と消去で、他属性神術を偽装していたのだ。

炎属性は起爆性物質と可燃物の創造。

風属性は巨大氷山の創造と消去で真空を作り出し、気圧を下げ暴風を呼び込み、

地属性は物質創造で鉱石を降らせた。

それに既存の神術の発動詠唱を添えることで、それらしく見せたのである。

しかしそうとは知らないエメリッヒは、大賢者を見るようなまなざしを向ける。

「ファルマ教授、あなたはもしかして……全属性の神術を使えるのですか？」

「そんなわけないだろう」

ファルマは真相を曖昧にしながら笑った。

「うそだ……全属性使えたではないですか。では一体何の属性が正解なんですか？」

「分からなくなっただろう？ それこそが、学んで帰ってほしいことだ。君がこの大学を去つてどこで何をして生きていくにしろ、これまでの常識に照らし合わせて物事を軽くみてはだめだ」

ファルマは舞台の端に追い詰められていたエメリッヒの手前に、杖で真つすぐに仕切り線を描く。

すると、その線を境に舞台は忽然と消え、エメリッヒは場外へと落ちた。

「大きな仕事をして、より多くの人を助けたいならね」

エメリッヒは場外でなおかつバランスを崩し杖を手放していたので、戦闘意欲を喪失したとみなされる。

「フ、ファルマ・ド・メデイシス教授の勝利……です！」

審判が判定を下し、ファルマも杖をおさめる。

「君の退学届けは受理する、退学を教授会に諮るがそれでいいの？」

ファルマはサインの入った一枚の羊皮紙をポケットから出して掲げ、エメリッヒに見せた。

「取り下げても…… よろしいでしょうか」

エメリッヒはふるふると首を振り、掠れた声でファルマに懇願する。

「あなたに学びたいです、私が間違っていました…… ファルマ教授。どうか、非礼をお許してください」

ファルマはエメリッヒの意思を聞き、発火性物質を創造し退学届けを清々しそうに燃やした。

「個人授業は終わり。続きの授業は教室で」

神術陣が解除され、青い光の屑が砕け散る。

エメリッヒは立ち上がり、ファルマが闘技場から完全に見えなくなるまで頭を低く下げていた。



## 5章12話 薬神の呪い

「教授、大事なお話があります」

新学期二日目、ゾエが事務からの報告書を持ってファルマの学部長室に現れた。心なしか、青い顔をして。

「落ち着いてお聞きください」

「え、はい……どうしたの？ 真顔になってるけど……」

ファルマはエレンと共に、せっせと講義資料を作り、精を出していたところだった。そして、ああでもないこうでもない指導方針について論じていたところである。

「昨日、神術試合によって破壊された舞台の修理費の見積もりが来ました。舞台は総張り替えで、特殊神術加工を施しますので、しめて3300万フルンの請求です」

「ええーっ！？ あれそんなにお高いの!？」

エレンの絶叫が教授室に響き渡った。

フルンというのは、サン・フルーヴ帝国の通貨単位である。

1フルンは日本円に換算すると20円ほどなので、概算6億6000万円の修理費が発生したわけである。

「ああ……そっか舞台をやっちゃったんだ……」

ファルマは先日のことを思い出して机に突っ伏した。

「舞台が総張り替えになるというのは、どんな神術を使われたのですか？ いえ、教授の神術でそうなったのですか？ 相手の学生ですか？ 特殊加工が施しており、多少のことでは傷つかないようになっている筈ですが」

何度も状況を確認しようとするゾエは、信じられないようである。彼女は事務仕事を立て込んでいて、ファルマとエメリッヒの対決を

目撃していなかった。エレンはゾエの驚きももつともだ、と言って肩を叩く。

「こういう子なのよ、ファルマ君って。おとなしく見えるでしょ？騙されてるわよ」ゾエちゃん。結構ね、非常識なの。秘書は苦勞するわね」

エレンは現実逃避をしていた。

「エレンだって人のこといえる？」

パツレの顔を見ると果し合いになるエレンにだけは、言われたくなかったファルマである。

「は、はあ……さようでございますか」

ゾエは呆れ気味だ。彼女は風属性の神術使いだが、あまり戦闘に向いていないおっとりとした文系タイプだ。少なくとも、ファルマのように着任早々大学に損害を発生させはしない。

「私、場所を変えるよう提案するべきだったわね……途中で舞台を壊さないでって外から言ってたけど、神術陣に遮蔽されて声が聞こえなかったみたいだし。学生や教員の神術試合ならともかく、ファルマ君が相手だもの。舞台もありえない壊れ方をするわ……孤島を買い取ってやるぐらいの勢いでないと。それでも決して誇張しすぎではないわ」

エレンは昨日、エメリツヒとファルマの行動を読めなかったことを後悔した。

「ファルマ君ったら、学生に怪我をさせないように戦うので精一杯で、神術のコントロールがきかなかった？」

「舞台を破壊したのは仕方なくだよ。威力を知って避けてもらいたかったから。真正面から受けると怪我するし」

「わーざーとー！？それはなおさら悪いわ！」

破壊しても問題ない場所でやるべきだった。エレンがファルマと訓練をするときには、消えてもよい孤島で、周囲の船が通行してい

ないことを確認してからやったものだ。

「悪手だったよ、ごめん。次はもうやらないよ」

ゾエは帳簿を出してきて、メモをつけながら概算する。

「教授の講座に与えられた研究費が1億フルン、学部長裁量費が8000万フルン、昨年の繰越金が500万フルンですので、研究費で支払う場合はかなりの出費です。外部寄付金が更に5億4000万フルンありますが、これを使いますか？」

「ちよつと待つて。外部寄付金、増えてないか？」

以前は1億フルン程度だった筈である。

「皇帝陛下の寄付金が5億です。先日付けで口座に振り込まれました」

もう、皇室からの寄付金はいらないと思うファルマだが、断るわけにもいかない。「余の厚意を無碍にするか」と逆鱗に触れば大変なことになり、ブリュノと共に宮殿に謝罪に行かなければならなくなる。

「陛下に御礼を言いに行かないといけないな。でもこんなことに研究費も寄付金も使えない、1フルンでも学生のために残しておきたい。修理費は俺の財布から出すよ。神術試合がやりたい他の学生が暫く舞台を使えなくなってしまうたな……」

「主に、武術部と杖術研究部が困るわね」

エレンが口をとがらせる。帝国薬学校のOGのエレンは詳しい。

「そういえば、部活があるんだったよな。どうしよう、部活動や試合をやりたいなら、うちの河原の敷地を使っていいって学生に伝えておいて」

ファルマはゾエに指示する。

「畏まりました。ド・メディシス家の4番地の空地ですね、そのように事務に伝えます。また、私費振替の書式を取り寄せます。それ

から、最後になりましたが総長からお呼び出しです」

ゾエが言いにくそうに付け加えた。

「ゾエちゃんそれ最初に言って？ 言い出しにくいのが分かるけど！」

エレンが魂が抜けたような顔になっていた。

怒られるのは目に見えていた。ついてこようとするエレンとゾエに、部屋で待っているよう告げ、ファルマは单身総長室を訪れる。

「ばかもの！」

総長室に行ってみると、ブリュノは憤慨していた。

「申し訳ありません……」

ファルマは平謝りだ。

「どこの世界に、着任初日に学生の安い挑発に乗って3300万フ  
ルの損害を発生させる新任教授があるか！ まったく採用初日か  
ら、大人げのな……いや、思慮分別のないことを」

大人げがないと言いかけて、息子は大人ではなかったとブリュノ  
は思いなおしたのだろう。

「しかし総長。相手の学生も悪かったと聞いております。ですので、  
ここは教育の一環ということだ」

あまりの剣幕に驚いたブリュノの秘書が、ブリュノを宥める。

「相手が何を言ってきたとしてもだ。神術試合をやったまで、学生  
をやり込めなければならなかったのか」

ブリュノはファルマの神力が、屋外闘技場の神術陣では抑え切れ  
なかったであろうことを見透かしていた。最悪、観衆にも被害が及ん  
でいたし、相手の学生も無事では済まなかった。

「舞台につきましては私が破壊しましたので、私費で修繕します。

エメリッヒ君は傷ひとつつけていません」

修理費は試合を行った者が折半するのが規則だが、折半するにし  
ても、エメリッヒに修理費を請求すれば、エメリッヒが学業どころ

ではなくなってしまう。彼の実家がいかに裕福だったとしても、莫大な修理費を支払う事情を説明せねばなくなる。

次に試合を申し込まれるようなことがあれば、砂漠か荒地か孤島を買い取ってやるべきだな、とファルマは反省した。屋外闘技場は学生同士の訓練や試合を想定しているので、強度が十分ではない。

「それから、これを見なさい」

ブリュノは、羊皮紙の束をファルマに寄越した。

「転科願いだ」

全学部から、20名以上の転科希望が出ていた。

最も多かったのは、ブリュノが学部長を務め旧来の伝統薬学を教える学部である薬学部から総合医薬学部への転科願いだ。

「わずか一日でこれだ。転科は基本的に認めていないが、お前のもとで学びたい者は多い。それとは逆に、総合医薬学部から別の科への転科を申し出るものもあった。申請理由を読んでみる」

ファルマにとってはまったく予想外の出来事だった。

総合医薬学部への転科希望者のコメントは、

・素晴らしい神術使いであり、大賢者であられる教授のもとで学びたい

・ガイダンスの訓示に心をうたれました

・見たこともない神術を扱われる教授の、これまでにない革新的な薬学を学びたいです

などというものに対し、総合医薬学部からの転科希望者のコメントは、

・ファルマ教授の神術の授業についていけそうにありません

・ファルマ教授がエメリツヒを打ち負かした時に、これが教授の教育方針なのかと恐怖を感じた

・教授の機嫌を損ねたらどうなるかと思うと、授業に集中できそ

うにない

「退学希望者も一人だ。」やはり神術を使えないと薬師として認めてもらえないのかと思いました。卒業できる自信がありません」、  
だと」

ファルマは返す言葉も見つからなかった。

「あの場でエメリツヒ・バウアーとやり合ったのは私刑だったのか、教育だったのか。相手に怪我がなかった、手加減をしていたとはいえ、全属性を使えるお前の力は圧倒的だ。恐怖政治のようなことをやるつもりはないのだろうか？」

ブリュノはファルマの意図をくみ取ったうえで、多くの学生の間で誤解を生じたことが無念だ、と述べた。

「私は全属性の神術は使えません、手品のようなものです」

ファルマの言い分を聞いて、ブリュノは困ったように頷く。

「お前が神術や薬を使って手品とやらを演じたとしても、お前の人となり知らぬ学生はそうは思わん。お前が未知の神術を使って、未熟な学生をやり込め、晒し者にしたとしか、な」

ブリュノの言葉が突き刺さる。

下手を打った、とファルマは猛省した。

「転科希望は総長裁量で全て却下だ。そもそも、入学後の転科は認めておらんな」

ブリュノは転科願いの束に、既に不許可とサインを書いていた。

「転科、退学希望者にはお前が面談をして信頼を回復し、元の状態に戻すように」

ファルマの科への転科希望者を納得させる材料として、希望学部の講義、実験、実習も見学してよいということにする。他の学部の必修講義とできるだけ時間がかぶらないように時間割を組む、と妥

協案をブリュノと話し合った。

「こつてり絞られた？」

「カラツカラだよ」

干からびたファルマに、エレンもつられて乾いた微笑を浮かべる。  
「お師匠様のお説教はグサグサくるわよね。干からびて水属性神術使えなくなっちゃったんじゃないの？」

エレンは冗談交じりに、ファルマを励ましているということが伝わってきた。

「転科希望の学生を説得しないと」

ファルマはその日、大学に出てきている学生には個別面談にかかりきりだった。無断欠席をしている学生には一人一人の家を訪ね、家庭訪問を行った。ファルマ単身で行くと警戒されるという見通しから、エレンが全ての訪問に付き合った。エレンが先に話をつけることによって、学生や保護者がファルマに萎縮して態度を硬化させることは避けられた。

「やつと最後の一人ね。住所はここで合ってるかしら」

帝都のはずれの下宿を二人で訪れる。すでに辺りは暗くなってきた。

「ありがとうエレン、結局付き合わせてしまったな。今日は用があると言っていたのに、悪かった」

「何言ってるのよ、同じ職場のよしみでしょう。往診は代診をたてたから構わないわよ。それに、ファルマ君ひとりでなんて行かせられないわ」

（エレン、何だかんだで付き合いいいよな。俺の後始末なのに……）

あつさりしているように見えて、彼女の言動にはさりげない優しさと思いやりがある。ファルマはエレンが同じ時間を共有してくれることに感謝した。

「おひ、お引き取りくださいっ！」

最後に訪れた退学希望者の平民は、完全にトラウマになる寸前だった。

ファルマとエレンは学生の下宿の中にも入れてもらえず、ドア越しから説得した。

「夜分に申し訳ない、話がしたいんだ」

「お引き取り下さい。もう私は大学には行かないんです、大学とは関係ありません、ですから」

学生の声はかすれていた。極度の緊張状態にあることがうかがえる。

「退学、考え直してくれないかな。神術が使えなくても何も問題ないから、この学部は。君は優秀な成績で入学しているし、授業についていけないなんてことはないよ」

「信じられませんっ……やっぱり帝国医薬大学校は貴族の学校なんです、平民が行く場所じゃなかったんです。平等に学べるものと思いがつていました。でも、目が覚めました」

ドアの裏側にへばりついていると思われる学生は、涙声になっていた。

「神術が使えない者は体術の授業に互換できるから。ついでに言うのと、神術の使えない学生に私が杖を向けることは何があっても絶対はないから」

「……本当ですか？」

門をはずす音がして、ドアがじわりと開いた。

陽がとっぷりくれて何とか全員の説得が終わり、転科希望者は収まるべき場所におさまった。

「じゃあね、エレン。今日はありがとう、この埋め合わせはどこかでするよ」

ファルマは疲労困憊のエレンを気遣う。



「何言ってるの。私も学生たちの顔が覚えられたからよかったわ、今日は早く寝るのよファルマ君、おやすみ」

エレンはにこっと微笑んで、何かを言いかけ、白馬にまたがり、帰途に就いた。

（神術のある世界での教育って、難しいなあ……まだまだ俺も未熟だ）

ファルマも夜道に馬を走らせながら、つくづく身につまされていた。

彼は大学教授を安請け合いして、少し安易に、甘く考えていた。前世では毎年のように好評を博していた薬学教育にはちよつとばかり自信と自負があった。

しかし、今回は現代日本の大学で現代の価値観を持った、同レベルの学力の学生に教えるのはちよいと事情が違う。学力で評価されるだけでなく、神術を使える者と使えない者がいて、神術の腕は提供できる医療の腕に直結する、そんな世界だ。

最初から平等ではない背景のものを、ファルマが平等に扱い、教えようとする。

それは間違っていたのだろうか、そんな思いにも悩まされる。学生たちの説得を終えて明かりの落ちた屋敷に帰宅し、誰も起こさないようにそっと正面玄関から中に入ると、夫婦の部屋に明かりがともっていた。

「おかえり、ファルマ。疲れたでしょう。食事はしてきたの？」

ベアトリスが、中から顔を覗かせる。

「一杯やるか」

ブリュノが誘った。明日は休日で、ベアトリスもブリュノと一緒に晩酌に付き合いっていたところだ。

ブリュノとベアトリスは葡萄酒を、ファルマは葡萄ジュース、チーズのおつまみで一息つく。

酒でも飲んで酔いつぶれたい気分だ、とファルマは思う。

（でも、どうせ飲んでも酔わないけどな……）

毒も薬も殆ど効かない体だ。酔いつぶれることもなければ、記憶が飛ぶこともなかった。

「学生の誤解は解けたか」

「はい。何とか大学にきてくれることにはなりました。エレオノール先生も付き合ってくれましたし」

「いかに業績を積もうと、信用を失うのは一瞬だ」

とりわけ、新しいことをしようとする者には、常に周囲の猜疑と疑念の目がつきまとう。ブリュノはそう言いながら葡萄酒に口をつける。ベアトリスは黙って耳を傾けた。

「エメリッヒ・バウアーはお前につっかかってきたのか」

「ええ、まあ。ですが彼の気持ちは分かります。なにしろ、私は子供です」

ファルマは自嘲気味に話す。

「彼は時間がないと言っていました。次に彼に会ったら、そのことについて詳しく聞いてみようと思います、一つの動機になったのでしよう」

エメリッヒは焦っていたのかもしれない、とファルマは思い返した。

「お前が聞かずとも、エメリッヒはお前にすがってくるだろう。その時に少しはましな答えを出せるように、お前には伝えておく」

ファルマは、ブリュノが何を知っているのかと訝りながら首をかしげる。

「調べたところによると、彼は歴史的に有名な、神に呪われし血筋

の者だ」

ブリュノの言葉に一拍遅れて、ファルマがオウム返しにする。

「呪い、ですか」

（……それがある世界だからな）

「まあ、大変！　どうか、彼に神様の加護を」

ベアトリスは呪いと聞いて守護神に祈るようなしぐさをしていた。以前のファルマであれば、そんな馬鹿な、と一笑に付してしまっただけだが、この世界には神術があり、呪いもあり、悪霊もいる。だから呪いがあると言われても、否定できるだけの材料がない。

「とはいえ、彼が呪われている証拠は私の鑑定・検査では出なかった。エメリツヒもすでに薬師であるから、私と同じ見解を得ているだろう。呪いを解こうと神官に見せれば、異端審問官が呼ばれるかもしれないがな……」

「父上は、既にお調べに？」

ポーションによる診断術を使うブリュノであれば、悪霊による呪いなのか病気なのかどうなのかは、区別がつくという。

悪霊なのか、病気なのかの鑑別診断。

この世界で神術を使う薬師が最も長けていなければならない技能だ、とブリュノは言葉を添えた。

「エメリツヒの一族にまつわる呪いの正体から、探らねばならぬ」

ブリュノは先手を打っていた。ブリュノはエメリツヒにだけ、入学手続きに必要なからといって、それが流出しないように細心の注意を払うという条件で、四代前までの家系図を提出するようにと命じていた。もし、彼が呪われているのだとすれば、その呪いを大学に持ち込むことはこの上なく大きなリスクだ。呪いの正体を探ることとは、エメリツヒの入学を許可したブリュノの責任でもあった、と

ブリュノは言う。確かに、彼の家の系譜を調べることは、エメリツヒから直接聞きださなければならぬにしろ、必須の作業ではあった。

「バウアーというのは、偽名ですか」

ファルマは家系図に記された姓を見て唸った。

彼の一族はプロセン王国の出ですらく、スパイン王国の大貴族を起源に持っていた。正しくは、スパイン王国でありふれた姓、S o l é (ソラ) というものだ。

「そうだ。彼の身上を知った私は、彼が偽名を名乗ることを認めた。エメリツヒは一族にかけられた呪いから逃れるために真の姓を隠している。……苦肉の策なのだ」

ファルマはエメリツヒの苦悩を推し量る。

彼の一族は呪いのせいでは有名となり、スパイン王国にいらなくなり、プロセン王国に逃れたとみられる。

「呪いとはどういうものなのですか？」

「恐るべきものだと聞く。どんな悪霊扱いも効果がなく、一年以内にじわじわと狂い、昼も夜もなく、体は痙攣し、発狂したまま最後は力尽きて死ぬと言われているが、真実は闇の中だ。彼は既に、父親と親類の殆どをその呪いで亡くしている。家は没落しているが、彼には弟妹がいる。自分と兄弟たちを、待ち受ける運命から救いたい。時間がないと考えたのは至極まっとうなことだ」

家系図の名前の横には、通常は神殿のシンボルマークが付されている。

マークがついている者が死亡者だが、ファルマの見たことのない変わったマークだった。ファルマは目を見張った。

「この印は……普通の死亡者とは違いますか」

「さよう。悪霊による呪死を示す印だ。通常の死亡とは違う。呪死は神殿にとって重要な出来事なので、ごまかせないことになってお

るのだ。エメリツヒは隠したかっただろうがな、彼は私を信用して、開示してくれたよ」

曾祖父は呪死、曾祖父の三人の妹は三人中二人が呪死。

一人は神脈が開かず平民であったので放逐、家系図から外れ不明。祖母も呪死。祖母の五人の兄弟は、四人が呪死。

父も呪死。父の兄弟は、四人中三人が呪死。生き残った一人の属性は、水神・正属性。

そして、エメリツヒは五人の妹弟がいる。エメリツヒは長男だ。

（25歳のエメリツヒに時間がないというわけだ……皆、40代を過ぎると発動する呪いなのかな）

「壮絶ですね……」

ファルマは痛ましく思った。

呪死した者たちの守護神は全て薬神、正の水属性または正の風属性であった。

「呪死者は全員、薬神が守護神だったのですね」

「そうだ。古い記録を調べたところ、薬神の呪い……とも言われたそう。彼の一族がどれほどの偏見に曝されたかと思うと、同じ属性を持つ者として胸が痛む。提出させた四代前でこの状態だが、更に遡っても同じことが繰り返されている、というのはスパイン王国の歴史書にある通りだ」

（俺も胸が痛いよ。彼の一族が何をしたってんだ）

薬神杖を手にし、薬神の神術や秘術を使い、聖紋を二つも持ち、薬神と因縁浅からぬ、あるいは薬神そのものと神殿から見做されているファルマはなおさらだった。

（でもおかしいんだよな。エメリツヒに黒い影は見えなかった。とすると、彼は呪われていない）

もしも悪霊がとり憑いているならば、サロモンのいうファルマの聖域のせいで、エメリッヒに憑いた悪霊はファルマの前には出てこない。

ファルマの存在を恐れない大悪霊だったとしても、エメリッヒに重なる黒い影として見える。

影は、エメリッヒには見られなかった。

「それに、彼は強力な神術を使いました。呪われている者は神術が使えなくなるのでは……だから、彼の思い過ごしであることを、祈るばかりですね」

ファルマの意見に、うむ。とブリュノは頷き、さらに葡萄酒を嗜む。

ブリュノも同一の見解を持っているようだった。

ベアトリスの声が聞こえないと思ったら、既にソファで寝てしまっていた。

「それに彼は、呪いだと思っていないと思います」

ファルマは力強く言った。

エメリッヒはブリュノと同じ、呪いか病気かを見分ける鑑別診断を行ってそこで、陰性という結果を見たかもしれない。あるいは、自らが強力な神術を使えたことで、薬神の加護を実感したことだろう。

本物の呪いだった場合は、薬神杖の出番だ。

呪いの浄化に多少の自信がないわけではない。

でも……ファルマはエメリッヒの顔写真を見ながら、それは違うと首を振る。

「でなければ、総合医薬学部には来ません。彼は薬師で、それは病気だと考えている」

「ほう、そうだとすれば、エメリッヒと直接会ったお前でも診断が

つかんか」

「一見しては分かりませんでした」

何か重大な見落としをしていたのかもしれない。ファルマは思った。

ファルマがエメリツヒとやりあった時、診眼でエメリツヒを診ることはした。その時には何の疾患も発見できなかった、エメリツヒの体は至って健康で、どこも悪くなかった。

せいぜい腰痛を抱えていたぐらいだ。そこで、ファルマは一つの仮説をぶちあげる。

（俺の診眼は、発病前の患者の病気は診えていないんじゃないか……）

発病しなければ、ファルマには分からない。ファルマの能力は、治癒しなければならない人間が発生した時にはじめて発動する。

これまでは発病していない状態でも診えると考えていたが、ありえそうではある。

エメリツヒに会い、とことん追究する必要があるそうだ。

先入観にとらわれず、あらゆる手段を使って彼の生ある時間を繋ぎ留めなければならぬ。

「ファルマよ。お前に彼の一族にかけられた”薬神の呪い”が解けるか？」

ブリュノが興味深そうに目を細めた。呪いというのは、そのままの意味ではない。

息子を信頼している、という言外のメッセージを、ファルマはそのまなざしの中に感じた。

「解いてみせますよ……必ず。私は彼の指導教官ですからね」  
ファルマは少しばかりの強がりを出す。

「それに、以前に現れたという薬神がどのような神格であったとしても、過去にエメリツヒの祖先が薬神に何をしたとしても、何代にもわたって人間を呪ったりはしないと思います。世代を超えて罰を下すなど、ナンセンスです。子孫に罪はない」

「ああ……私もそう信じたい。呪いはまやかしであってほしい」  
ブリュノは頷いて目を閉じた。

手探りの状態のまま頭の整理がつかないまま、ブリュノに礼を言う、家系図を借りて自分の寝室へと戻っていった。

ファルマはその家系図を見て、睨み合って、メモ用紙に何ごとかを書つけ、ある一つの可能性を思った。すなわち、これは……。

「致死的な常染色体優性遺伝性病……じゃないのか？」

ファルマは逸る心を抑えつけながら、興奮気味にゆっくりとペンを置いた。

そして現時点でファルマの診眼が、エメリツヒの遺伝子に刻まれた呪いを診<sup>みぬ</sup>抜けなくても、未然にそれを発見し、時限爆弾の針を止め、永遠に封じ込める方法があるかもしれない。

あの、異界と現世が繋がれた研究室の中に　　。



## 5章13話 治療法：なし

サン・フルーヴ帝国医薬大学校の新学期が始まり、講義初日がやってきた。

新任教授でもあり薬局店主でもあるファルマはというと、一日中大学に詰めているわけにもいかない。午前中は薬局の営業を行い、大学の全ての講義は午後から組んでいた。

「じゃ、あとはよろしくね。今日は午後になったらエレンが戻ってくると思うから。着替えて大学に行くね」

午前中の診療を終え、ファルマはアルバイトの薬師に申し送りを終える。

容体が急変する可能性のある重篤な患者の予約は、午前中に入れて診療をすませていた。

「はい店主様。行つてらっしゃいませ。こちらはお任せください」と、レベルカが律儀に席を立ちながらファルマを見送る。

「講義、頑張ってください！ うるさい学生はしばいてやればいいんですっ！ なめられないように気を付けてくださいね」

拳を握りしめながら力を込め、物騒な応援をしてくれるセルスト。「はい、いつてらっしゃい」

欠伸をしながら、手を振るロジエ。留守番をしてくれるバイトの薬師たちは頼りになるのだから、ならないのだから。などと思いながらも、エレンが午後から代打をしてくれるというので、ファルマは一応安心はしている。

「もしエレンにも手の負えない重症の患者さんが来たら、患者さんを大学に送って」

「分かりました！ 私たちに分からない患者が来たらすぐ送ります！」

「すぐ送りますよう」

「手遅れにならないうちにすぐね」

(……なんて諦めが早い三人なんだ……)

ファルマは微妙な心境になりながら、支度を始める。

「ファルマ様、大学はとうですか？ お友達は100人ぐらいできましたか？」

薬局の二階に上がり、診療室の一室で慌だしく白衣から私服に着替えるファルマの白衣を袖をそろえて畳みながら、ロッテは楽しそうに声をかける。

(友達100人って、小学生じゃないんだから……でもその発想がロッテらしいな)

「学生や職員とは、うまくやっていくつもりだよ。最初はちょっと……、まあ、色々あったけど」

エメリツヒや学生たちのことを思い出しながら、ファルマはカバンに諸々の書類やプリントを詰め込んでいた。

「授業中、居眠りはしていませんか？ 眠たくなったらほったてをつねってみるといいですよ。痛くて涙が出ますけどねっ」

「俺が？ 授業中に居眠りなんてしないよ」

「ほら、ファルマ様寝不足ですし。ついうとうとしてしまうかなって」

「俺が寝てる学生を起こすほうなんだけどな」

「どんな場所なんでしょうねー、ファルマ様の大学って」

とはいえ、彼女がファルマの職場に興味がありそうだといっても、ロッテを職場に連れて行くわけにもいかない。

(あ、でも食堂なら一般に開放されてるし。一緒に食べに行くかー)  
「昼休みの間に大学の食堂に行ってみる？ パンが美味しいし、デザートも充実しているよ。学外の人も食べていいから」

「わあっ！ えっ、でもそんないんですか？ もしいいのでしたら連れて行ってください！ 歩いて帰ります！」

「行こっか」

炭水化物とフルーツには目がないというロツテを自馬に寄せ、ファルマは帝都の大路を抜け、帝国医薬大へと向かう。

学生二人の通学に見えるかもしれないが、これでも通勤だ。

「わあー！ 凄く立派な学校です！ 広すぎて移動が大変ですねっ！」

初めて学校というものに連れてきてもらったロツテは、ぴよんぴよんと飛び跳ねて興奮していた。

「学部が統合されたり新設されて新しくなったからね」

ファルマは学内を散策しつつ、ロツテに簡単に大学を案内する。

ロツテがとりわけ興味を示したのは、大学附属の薬草園だ。そこでは様々なハーブが栽培され、睡蓮の咲く大きな池を中心に、風光明媚な水辺の景観を作っていた。

「ここで絵を描いたら、きっと素敵な風景画になります！ 陛下もお喜びに！」

「キャンバスを持ってきて、描いたらいいよ」

最近のロツテの絵は流行を取り入れて印象派のようになってきていたので、モネの睡蓮のような絵になるのではないかとファルマは楽しみだ。

「ごきげんよう、メディシス教授」

「今日の講義、楽しみにしております」

学内で出会う学生たちはファルマを見かけると、すぐに挨拶をしたり声をかけてきた。

中には先日的一件事があったからか、ファルマに出くわすと緊張して冷や汗が止まらない学生もいた。

そんな学生は、ファルマはそつとしておくことにした。

講義の中で、警戒に値する人物ではないと理解してもらえることを祈りながら。

「皆さんファルマ様のことをご存じのようです。お仕事始まったば

かりなのに、慕われておられるのですね」

そんな微妙な現況を知らないロツテは、ファルマが一見学生たちから大人気なので、自分のことのように喜んでいた。

「はは……そうかな」

（どつちかつていうと怯えられている、が正しいよな）

とは言い出せなかったファルマである。

「ファルマ様が、大人の学生の方に先生として接していらっしやるの、なんだか不思議な感じです」

「俺も不思議だよ。どうしてこうなったんだか。とにかく、お昼食べよう。講義まで時間がないから」

ロツテと二人で、大学の中央に位置する食堂に向かう。

去年まではサン・フルーヴ帝国薬学校に学食はなく、各自弁当を持ってきたり学外の店で済ませていたものだが、今年、ブリュノが私財を投じて学食を建設させ、食堂は大いに賑わっていた。

今年から平民の入学を許したということもあり、苦学生が粗末な食事をすることなく、良質の栄養をつけて勉学に専念してもらいたい、という理由だそうだ。ファルマはブリュノの配慮に感心する。

学食は、ビュッフェ形式で、僅かな代金を払えば食べ放題である。真新しい食堂のホールを見たロツテの喜びようといったらなかった。

「わあ、何十種類のお料理があるんでしょう！ このロールパンなんて、真っ白でおいしそうです。このオレンジジュースも、しばらくたてなんですか？ あっ、宮殿御用達の美味しい高級牛乳も！」

ロツテの皿にはパンが山盛りに積まれ、さらに、おかずも全種類取ってきていた。

「それ全部食べられるの？ お腹大丈夫？ 手伝おうか？」

「えへ。取り過ぎちゃいました！ でもゆっくり味わって全部食べます」

ロツテは一口ずつ味わい、目を閉じ食事の喜びをかみしめている。

「君はいつも幸せそうだな。悩みなんてなさそうな……」

そもそもロッテに悩みなんてあるんだろうか、とファルマは思う。  
「私はこうしてファルマ様のお傍にいられて、そしておいしい食事とデザートがあればもっと幸せです。悩みですか？　そうですね」

ロッテの目がきよきよと泳ぐ。

「……うーん、考えてみましたけど、ありませんでしたあ！」

「はは、そりゃよかった。また学食こよっか」

ロッテは満面の笑みで大きく頷く。

「はいっ！　おなががぼんぼんになるのでお料理を全部食べてから歩いて薬局に戻りますっ！　ファルマ様はお仕事頑張ってくださいねっ！　お戻りになったら美味しい紅茶を準備してお待ちしていますっ」

「ロッテには癒されるよ」

ファルマとロッテが食事していると、エメリツヒ・バウアーが学食の窓の外を通りがかった。

そしてロッテの顔をまじまじ見て何度も首をかしげ、通り過ぎて行った。

「今の学生と知り合い？」

ファルマがロッテに尋ねる。

「いいえ？　どうなさったのでしょうか。薬局のお客さんでもなさそうでした」

ロッテも首をかしげながら、それでもパンを食べ続けていた。

「みなさんこんにちは。えー、それでは基礎医学概論Ⅰをはじめます」

ファルマの講義は全学部的一年生が受講するため、大講堂で行われる。

さらにいくつかの講義に関しては、公開講座にして、およそ帝国中の薬師の資格を持つものは受講資格を与えた。

そんな背景もあって、その日の朝は聴講券を求め、ファルマの知

らない間に早朝から正門前で一級薬師から三級薬師まで、先着順とはいえ問答無用の熾烈な争いが繰り広げられていた。

聴講券を手に入れた者は、勝ち誇ったような顔をして着座していた。調剤薬局ギルドの面々やギルド長のピエールの顔も見えた。

（ちよつとこれは満員御礼ってレベルじゃないな……）

ファルマは困惑気味だ。

「……座れてますか？ 全員が座れるように、席を詰めてください。荷物は机の下に置いて」

ファルマが席を詰めるようジェスチャーを送る。

それでも予定していた座席数では足りず、自前で椅子を持ってきた座る教員もいた。

彼らは売店で買い求めたらしい教科書を机に広げている。

「ここにいらっしゃる皆さんは、現役の、あるいは未来の医師、薬師、そして技師、もしくは研究者となる方々です。病気の発症原因を追究し、病気を診断・治療し、あるいは病気を社会的に予防する、そのいずれの仕事においても、人という生命現象と向かい合ってゆくことになります」

エメリツヒは一番前に陣取ってノートをとっていた。

獣医のジョセフィーヌも、比較的前のほうで頷きながら聴いている。

ファルマは黒板に簡単な人間の図を描いた。何の面白みもない、のっぺらぼうの模式図としてだ。

「そう、人です。でもこれというものは、いったい何からできているでしょうか」

ファルマは学生と聴衆に向き直り、問いを投げかけた。

「人体は、全て化学物質から構成されています。原子にはじまり分子となり、タンパク質、糖質、脂質、核酸などの高分子が立体構造を作り、それらは細胞という生命の最小単位を構成します。細胞の中では実に体重の60%を占める水を触媒とし、たえず複雑な生化学反応が進行しています」

「私たちが人体で起こる全ての化学反応を理解することはできません。ですが生命現象は、自然科学の法則にいたがいます。疾患を理解し、その治療法を確立するにあたっては、これらの法則を最初に考慮する必要があります」

ファルマの言葉を猛烈なスピードで記録してゆく者がいる。

ブリュノの雇った薬師の速記士だ。彼らに全ての講義を一言逃さず記録させ、板書を全て写真撮影させてゆくのだそうだ。講義録として大学の資料にするのだという。

ブリュノはファルマがいつか消滅してしまうと仮定し、万事抜かりない。

（ブリュノさんのおかげで、これを数年続けて全部の講義録がそろえば、俺がいなくなっても大丈夫だし、他の講師に引き継ぎができる）

それだけでも、教授を引き受けた意味はあったとファルマは思う。

「病気を治すための薬剤の設計を行うためには、その薬、すなわち化学物質が生体化学反応のどこに作用するかを知る必要がありますね？」

何故、医学、薬学を学ぶにあたり、基礎科学がどうしても必要なのかをファルマは最初に述べる。

医学・薬学というのは応用科学の一分野であり、したがって基礎を学ばねば応用はない。

「では最初に、タンパク質の構造についてお話をしましょう」

その日は、生体を構成する生体物質の理解に講義の時間を割いた。学生たちは必死でノートを取る。

ファルマのもとで手っ取り早く、難病に効果的な治療法、よく効く薬を学べるものと考えていた一部の学生たちは、医学・薬学の入り口に到達するまでの遙かな道のりに絶望し、ファルマの薬学を簡単に修められるなどという甘い考えが吹っ飛んだような顔をしていた。

これではついていけなくて単位が取れないかもしれない、と嘆く学生の声も聞こえて来た。

そして、何故ファルマの薬が病気に”効く”のか、おぼろげながら理解しはじめたようだった。

「質問がある場合は、講義のあとで」

講義修了の鐘が鳴ると同時に、学生や薬師たちが競い合うように何人も立ち上がった。

「教授、質問が！」

「メデイシス教授！ 後半が分かりませんでした」

「教授、教授！ ペプチド鎖の結合についてもっと教えてください」  
教壇には人だかりができ、ファルマはあつという間に学生たちに取り囲まれてしまった。彼らに一人ずつ対応している間、ファルマはエメリツヒが講堂の隅でじっと待っていることに気付いた。

ファルマは全員の相手を終えてから、エメリツヒを呼ぶ。

「バウアー君も何か？」

「教授、お話があります。少しお時間よろしいでしょうか」

学生がいなくなると、エメリツヒが思いつめた様子でファルマのもとに近づいてきた。

「まずは謝罪をしなければなりません。先日、私が仕掛けてしまっ



た神術試合で出た修理費を、教授が立て替えてくださったと聞きました。本来ならば私も負担すべきところを。どのようにお詫びをしてよいか……」

エメリッヒからは数日前の勝気で不遜な態度は消え、すっかりしゅんとして別人のようになっていた。

「それは私が壊したのだから、君が修理費をかぶらなくていいんだ。それより怪我がなかったかな」

エメリッヒに怪我はないようだった。怪我をさせないようにしていたつもりの方アルマだが、それがなによりだ。

「で、話というのは」

「かなり先の単元になりますが、遺伝病についての相談をしてもよろしいでしょうか」

エメリッヒは教科書を持ち出してきた。

「質問ではなくて相談なのか、いいよ」

ファルマとエメリッヒは、薄暗くなってきた講堂の座席に座りなおす。

エメリッヒは教科書を読み込みすぎたのか、既にボロボロになっていた。

「教授の教科書をすみずみまで拝読いたしました。講義を聞かなければ分らないことだらけですが、この教科書は本当に素晴らしい。診断の役に立ちましたし、いくつか試してみた治療法もあります」

「それはよかった。にしても凄い読み込みようだな……まだ発売して半年ほどしか経ってないのに」

教科書を書いたファルマも驚くほどの根性をみせたエメリッヒだった。

「実は、私は遺伝病の家系にある者だと考えています……一族の者は、一族にかけられた逃れえぬ呪いだと言っています……」

「呪いではないと思うよ。だって君はあんなに巧みに神術を使えるわけだし。呪われていたら神術を使えないだろう?」

エメリツヒが「呪い」ではないと分かっているならば話が早い、と考えながらファルマはエメリツヒに味方する。

「私は、一体何の遺伝病なのかを知り、私の一族をこの病から解放したいのです」

「なるほど。家族歴を教えてもらってもいい? まず、その病気によって亡くなったと考えられる人を」

ファルマは、ブリュノに聞いて知っていた家族歴と照らし合わせつつ、エメリツヒの開示した新たな情報と統合していった。

「じゃ、次に患者と思われる人に共通する症状を教えてください」

「はい」

エメリツヒいわく、一族の者は中年を過ぎた頃、”呪い”にかかると体がほてって仕方がなくなる。次に、脈が早まり、瞳孔が収縮し、みるみるうちに体はいうことをきかなくなり自立歩行もままならず、夜とも昼ともなく一睡もできなくなるのだという。眠りを奪われた彼らは衰弱が激しく、いくら目を閉じても睡眠薬などを使っても、まったく眠ることができない。

そして一年もしないうちに体は消耗し果て、必ず亡くなるのだ……。

話を聞いた限りでは、ファルマには思い当たる病気があった。

ファルマの書いた教科書には、きわめてまれな常染色体優性遺伝の疾患として記載されていた項目であり、遺伝性のプリオン病の一種である。

この病気を発症する家系にある患者は、正常プリオンをコードする遺伝子に異常があり、異常プリオンをつくり出す。異常プリオンが脳内の視床へと蓄積し、それが神経細胞を破壊することによって、脳が神経細胞を通じて睡眠の指令を体に出すことができなくなり、

不眠となる。

「教授は、症状から推測して何だと思われますか？」

「君の話を聞いたただだと、致死性家族性不眠症を疑うな」

「やはり、教授もそうお考えですか……」

エメリツヒの血の気がざあつと引いた。

それは死刑宣告でも受けたかのような表情だった。

「いやでも、そうと決まったわけじゃない。それにこの病気だとしたら、常染色体優性遺伝だ。それにしても、発症率が高くないか？」  
常染色体優性遺伝というのは、一つの遺伝子のうち、父方と母方のペアとなっているもののいずれかに変異があると必ず発症する遺伝様式で、男女問わず50%の確率で発症することになる。

なのに、家系図を見るとどの世代でも、殆どの者が発症しているのだ。

「もしかして、書かれていないだけでこの家系図に載っていない子孫はもつという？」

彼らをカウントすれば、50%にもつと近い割合になる筈だ、とファルマは考えた。

エメリツヒはどうして知っているのか、と目を大きくしながら頷いた。

「はい。放逐された者もいると聞いたことがあります。神脈が開かなかったとかで、孤児院などに送られました……」

大貴族であるほど、神脈の開かない子が生まれるというのは不名誉なことなので、判明し次第、平民落ちした子供は放逐し除籍にする場合が多い。

「その子孫と連絡がとれないかな。神脈が開かなかった者でも発病したのかどうか知りたい、たぶん、発病しなかったんじゃないか」

もし、エメリツヒの一族が致死性家族性不眠症だったとすると、除籍になっていない者の発症率から逆算して、神脈が開かなかった者は発病しなかった可能性が高い。

「どの孤児院に預けたとの記録はありますので、孤児院が記録を保管していれば……」

孤児院の記録を辿って、放逐された子孫に会うことは不可能ではないとエメリツヒは言う。

「君は今発症していないわけだし、そもそも変異が遺伝しているかどうかもわからない。確定診断は難しいな。現在、発症している一族の誰かは？」

「今、一族で発症している者はいません。直近では、父でした……三年前に亡くなりました……」

エメリツヒは、彼の父の最後の日までのカルテをファルマに手渡した。

そして、思い返すのも辛くなったらしく、涙で言葉を詰まらせた。

ファルマはエメリツヒのカルテに目を通してゆく。

それは、闘病というにはあまりにも一方的な、一人の父親が荒廃し、絶望のうちに亡くなってゆく残酷で壮絶な記録だった……。

「薬師であつた父は、一睡もできなくなり消耗しながらも、それでも最後まで生きようとしていました。私も、自分の持てる限りの知識をもとに、副作用も構わず薬を父に投与しました」

エメリツヒの処方記録を見ると、ほぼ破れかぶれ、あてずっぽうといったものだった。

彼は毎日毎夜、ありとあらゆるポーション、ハーブや重金属の組み合わせを試していた。

治療というよりは人体実験さながらだ。

それでも、ひとときも、たった一日、数時間たりとも彼の父を熟睡させることはできなかった。

「あなたに、もっと早く出会えばよかった」

エメリツヒの家族が死病に喘いでいたとき、まだファルマはこの世界にいなかった。

「教授。教えてください。次は私と、私の妹弟の番なのです」

エメリツヒは一語一語かみしめるように、ファルマに尋ねた。

「この病を治せる薬が」

最後は、何かに祈るように。

「ありますか？」

ファルマはエメリツヒの視線に真つすぐに射抜かれながら、より強い視線で見返した。

「ない」

その二語を、ファルマは言いきった。

あまりにも無慈悲に、一片の迷いもなく。

「ああ……終わった……」

エメリツヒは教科書を抱えたまま床の上に崩れ落ちる。これから彼を待ち受ける運命に、彼と彼の妹弟たちが絡めとられ、奈落に落とされてしまうことを覚ったのだ。

エメリツヒの手から力なく落ちたカルテが、ひらりひらりと無残に講堂の床にぶちまけられた。

彼はすっかり項垂れながら、それでもファルマに遺言めいた言葉を残す。

「お願いがあります。もし私が発症したら、症状が進行する前に自

殺します。ですから教授は私を解剖して、私の体を切り刻んで、この病気のことを調べてください……」

ファルマはエメリツヒの悲痛な訴えを聞きながら、一枚ずつカルテを拾い集めて束ねる。

「治療法だけど、”今は”ないって現状を言ったただだよ」

ファルマは束ねたカルテを揃え、大事そうにエメリツヒに手渡した。

この教科書をこんなにボロボロになるまで読み込んだエメリツヒにも、ひよつとすると創薬の構想は見えはじめているのではないか、そう考えたファルマは彼に逆に質問を試してみた。

「この、現時点では不治の病に対して、どんな薬を創れば効くと思う？」

「分かりません……途方に暮れてしまいます。ただ……この病が異常プリオンの蓄積によって神経細胞が障害されて発症するのなら……まず、発症を遅らせる。発症後はプリオンを分解、あるいは神経細胞を障害するのを阻害するような薬を創ればいいのでしょうか」  
エメリツヒの発想や感覚は、現代地球の薬学者のそれに近づいてきていた。

実際、そういうアプローチでも、この疾患に臨床研究は進んでいる。

「うん、いいね。方法はいくつかある。発症を遅らせる薬を探索すること。異常プリオンを破壊するか機能でなくすること。もっというと、発症する前に遺伝子変異を治してしまえばいい」

「遺伝子……生命の設計図を、どうやって……」

七十兆もの体細胞の中にある遺伝子の異常を、すべて改変することなどできっこない。

簡単にはできないから、現代医学の粋をもつてしても、現状「治療法なし」、なのだ。

プリオン病の解明と治療薬の開発については、ファルマも生前から取り組んでいた難課題の一つだったが、なかなか一筋縄でいくものではなかった。

とはいえ、遺伝子に変異がある限り、そこを治さねば、あらゆる治療は対症療法に過ぎない。

不安そうなエメリッヒを励ますように、ファルマは告げる。

「治療薬がない。それは、創薬の出発点でもあるんだ」

自殺するより、君自身の手で研究をし、数々の手段を試して克服できるように取り組んでゆこう。

ファルマはそんな、気休めともとれる言葉でエメリッヒを励ました。

そしてファルマは、決して気休めで済ますつもりはなかった。

「では、さっそく君の遺伝子に異常があるか調べてみようか。君の妹と弟たちとは連絡が取れる？」

「はい、とれます。近くに引っ越してきました」

「全員、研究室に連れてきてもらえるかな。細胞からDNAをとってそれを分析したいから。まず、私たちの推測が正しいのか、本当に致死性家族性不眠症の遺伝子変異が起こっているのか確認しよう」

異界の研究室にある最先端機器を使えば、わずか一時間の間しか滞在できないが、現世と異界を往復しながら遺伝子変異の有無を調べることができるかもしれない。異界へ行くことはファルマの現世での実在を危うくするため、できれば近づきたくなかったが、教えるの一大事とあってはそうも言っていられない。

「わかりました、すぐ連れてきます」

エメリッヒは、自らを蝕み、死に至らしめるかもしれない病と、臆することなく向き合うことにしたようだ。

時間は刻一刻となくなっていく。

いつ発症するか分からない。

発症すれば死ぬ。

でも、諦めるには、まだ早い。

「あの、そういえば、教授が先ほど一緒に食事をしておられた女の子は、ご友人ですか？」

エメリッヒは妹弟と言われて何かを思い出したらしく、ファルマに尋ねる。

「ロッテのこと？　メデイシス家の使用人で、薬局の職員だけど。どうしたの？」

「いえ……その、他人の空似とは思えないほど、あまりにも私の妹に似ていて……」

「へー。珍しいことがあるもんだな」

ファルマは何の気なしに聞いていた。だが、エメリッヒはどうも引がかかったのだろう。

「ちなみに、彼女の名前を聞いてもいいですか？」

「シャルロット・ソレルだけど」

「ソレル？」

エメリッヒの手が止まった。そして、彼は申し訳なさそうな顔をしてファルマに告げる。

「私の家系と、同じ姓ですね……厳密には違いますが、私の一族の姓の Soiré（ソラ）の、サン・フルーヴ帝国読みがソレルです。この帝国では珍しい姓だと思います。私どもの一族と、彼女の間に血縁がなければいいのですが……」

「それは、つまり……」

ファルマは背筋がぞくりと凍り付くような思いをした。

ロッテから聞いた話が頭を過ったのだ。

ロッテの父親は平民だが、ロッテが生まれて間もなく、原因不明



の難病で亡くなったということを……。

## 5章13話 治療法：なし（後書き）

5月25日、異世界薬局2巻の発売日です。ウェブ版、書籍版ともどもよろしくお願いいたします。

### 【謝辞】

本項は、内科医の中崎実先生にご指導いただきました。先生ありがとうございました。

### 【参考資料】

「眠れない一族」食人の痕跡と殺人タンパクの謎」ダニエル・T・マックス著

## 5章14話 異界の研究室の異変

エメリツヒの話を聞いた後、ロツテの父親が致死性家族性不眠症の家系にあつたのではないかと疑いド・メデイシス家の屋敷に戻つたファルマは、庭で洗濯物を取り込んでいたロツテの母であり侍女であるカトリーヌを呼んだ。

「カトリーヌさん。忙しいところごめん、手があいたらちよつと話があるんだけど」

「はい、ファルマお坊ちやま。構いませんよ。何なりと。今日はよい天気でございますね」

カトリーヌは仕事が早く終わつたらしく、上機嫌だった。

「いきなりで悪いんだけど、亡くなつた旦那さんのこと、聞かせてもらつてもいい？」

「坊ちやま……どうしてそんな。それは、どうしてもでございますか？」

あまり思い出したくない記憶なのか、カトリーヌの顔がこわばつた。

「うん、気になることがあるんだ。思い出させてごめん」

「坊っちゃんがそう仰るのであれば、わかりました……」

ファルマの部屋にカトリーヌを案内し、ドアに鍵をかけた。うつかりロツテが入ってきて、話を耳にしてはショックが大きいだろう。メモを取りながらカトリーヌの話を聴く。

「旦那さんが患つた病気ってどんなのだつた？」

「そうですね。お話ししたこと、ございませんでしたね……」

カトリーヌは大きく深呼吸し、時々言い淀みながら、古い記憶をたどるように話をはじめた。

「私と主人は、サン・フルーヴ辺境で暮らしており、主人は仕立て

屋を営んでいました。ええ、シャルロットを授かり、幸せに暮らしていました。1138年まで、主人は健在でしたよ。しかし1138年の冬ごろからだったでしょう。主人が少しずつ人が変わったようになっちゃったのは……彼は日に日に正気を失って、うまく歩けなくなり、大量に汗をかき……人が変わったようになってしまいました。何か、主人に異変が起こったということは分かりました」

カトリーヌは俯き、深い悲しみに沈んでいるようだった。

「仕事もできなければ体を横たえても眠れず、日々疲れ果て、何を思ったか一点を見つめることが多くなりました……シャルロットはまだ幼かったので、主人のことをあまり覚えていないと思います。お医者様にも有名な薬師の先生にも診せましたが、分からないと首を振るばかり。主人は最後は意識を失い、1139年6月に息をひきとりました。42歳でした」

弱ってゆく夫の傍に寄り添っているのは辛かった、胸が裂けそうだったと涙をこぼす。

（42歳か……それに症状を聞くと、どうやら当たりっばいな）

ファルマは、苦しげに語るカトリーヌにかける言葉が見つからない。

「ありがとう、話してくれて」

「主人が亡くなったあと、葬儀をしてもらったために神官様を呼んだのですが、悪霊にとり殺されたのだと言われました。私がいけなかったのです、もっと早くに神官様に悪霊払いをしてもらっていれば……」

「俺はそうは思わないな。旦那さんは病気だったと思う、診ていないから断言はできないけれど」

ファルマはカトリーヌの罪悪感を払拭しようと慰めるが、カトリーヌは自責の念にかられているようだった。

「このことを、シャルロットには話したことはありません。聴けば辛いと思いますので……どうか」

「うん、彼女には言わないよ」

その後、治療や投薬で高額の借金のできたので、カトリーヌは仕立て屋の店舗と家売り、まだ幼いロツテを連れ、身一つで貴族の屋敷に奉公に出るしかなかったという。神殿に死因を呪死と断定されてしまったがために、身上調査をしたどの奉公先からも気味悪がられ不採用となった。

そんな中、当たって砕けると門を叩いたのが大貴族のメデイス家だった。

ブリュノは事情を知っても嫌がらずに雇ってくれたのだという。それどころか、「もし呪われているのならば、面白い。解呪の研究ができて好都合だ」と言ったそうだ。また、カトリーヌに裁縫の技術があつたことも幸いした。

（強気すぎるな、ブリュノさん……）

ブリュノに拾われ、ロツテの母がロツテと共にメデイス家の屋敷に出仕にやってきたのは、ロツテが四歳になったばかりの時だった。

「と、いう経緯なのでございます」

「そうだったのか……それは気の毒だったね。旦那さんのご両親のことは、聞いたことがある？ やはり早くに亡くなったとか」

ファルマはさらなる家族歴を聞き取る。カトリーヌは古い記憶を引っ張り出す。

「はい、父方が早逝したとは聞いております」

「その人は、もしかして孤児院の出だった？」

「……さあ、そこまでは……何故、そう思われるのですか？」

カトリーヌは首をかしげる。ファルマはカトリーヌの境遇とロツテの生い立ちを聞いて、沈痛な表情をみせる。それを見たカトリーヌはファルマを氣遣ってか、無理に笑顔を作るのだった。

「坊ちゃま！ そんなお顔をなさらないでくださいまし。旦那様が拾ってくださらなければ、私とシャルロットは母子ともに路頭に

迷っていたことでしょう。旦那様には感謝しております、よい暮らしをさせていただいておりますし。でも……」

カトリーヌは、ファルマがロッテの生い立ちを探ってきたのを不審に思っているようだ。

「もしや、シャルロットに何かあったのでしょうか」

「ううん、ないよ。ちよつと気になっただけ。何かあれば言うよ」  
ファルマはしっかりと頷いてカトリーヌと約束を交わした。

次にファルマはロッテとカトリーヌが共用で使っている使用人部屋を訪れる。

「ロッテ、今大丈夫？ 部屋に入っている？」

「ふんふんふふーん、ってあつ、何でしょうファルマ様！ どうぞ」

ロッテは屋根裏部屋の窓を開け放ち、窓辺に果物を置いて静物画のスケッチ練習をしていたところだったが、陽気に鼻歌を歌っていたのを恥ずかしく思ったらしい。

「それ描いた後でいいから、血を採らせてもらってもいいかな。

ロッテの血液が健康かどうか、調べようと思ってるんだ」

「血、採るとき痛いです？」

「痛くないようにするよ。すぐ終わるから」

「そうですか？ ではぜひ調べてください！ 私のことまで気にかけてくださって、ありがとうございます。ちよつど絵の練習が終わりました。どうですか？」

天真爛漫な笑顔でずいずいと腕を差し出してくるロッテに、ファルマは多少の罪悪感を覚えながらも、ちゃっかり用意してきた採血セットの支度をする。そして、予告通り氷を創造して腕に当て針を刺すときに痛みが少なくなるようにした。

ロッテは緊張してぎゅっと眼をつぶり、肩をこわばらせていた。しばしの間があつて、

「終わったよ。お疲れさま」

ファルマは採血管を転倒させてロツテの血液を振り、凝固防止剤と反応させながらロツテに呼びかける。

「えっ、痛くありませんでした。でもこんなにたくさん血が取れる。うわあ、私の血です……ぞわぞわします」

ロツテは血を見るのは苦手なようだ。

「協力してくれてありがとうね。腕がピリピリしたり、ふわっとしたりしない？」

「なんともないです。ファルマ様」

ロツテがファルマの前に回り込んで腰をかがめ、俯き加減になっていたファルマの顔を下から上目遣いに見上げる。

「な、なに？」

「なんだか、ファルマ様のご様子が変わります。いつもとご様子が変わります」

ロツテに、現代薬学では不治とされる致死性家族性不眠症が、ひよつとすると遺伝しているかもしれない。ファルマが抱え込んでいたそんな懸念と不安は、どうやらロツテに伝わってしまったようだ。彼女は鈍感なように見えて、ファルマのことをよく見ていた。言葉には出さなかったが……。

「そんなことないよ」

「そうですか。では、お仕事頑張ってくださいまし」

ロツテは、緩んでいたファルマの襟のリボンをしゅるりと解き、きゅっと結びなおした。

「ありがとう、ロツテ」

ファルマはエメリッヒが弟妹を集めたということで、早速全員に研究室に集まってもらった。エメリッヒを入れて、六人。そろそろと集まった一族に、秘書のゾエは茶と茶菓子を振る舞う。エレンも研究室に出勤してきた。

「教授、家族を連れてまいりました」

「ありがとっ、助かるよ。バウアー家の皆さん、お集まりください」

てありがとうございます。にしても妹さん、本当にロッテと似てるな……」

妹のうちの二人は、確かにエメリツヒのいうよう、ロッテとかなり似た顔だちをしていた。あどけない顔をした、人懐っこそうな妹たち。声までどこことなく似ていて、ロッテの親族だと言われても納得してしまう。

「ね、似てますよね！？ 教授もそう言ってくださると思いましたよ！」

エメリツヒはファルマの同意を得られて嬉しそうだ。

「確かに、似てるわねえ。見た目でわかるとは思わなかったけど、これは血縁あるんじゃないの？」

エレンも頷いた。しかし、ファルマにとってはあまり嬉しい情報ではなかった。

（他人の空似かもしれないけど。これだけ似てると、ひよっとするとひよっとするな……）

「で、病気があるかどうか、どうやって調べるんだっけ。またPCRで？」

エレンが首をひねる。

「うん、それでいける」

ロッテとエメリツヒの一族の間に血縁関係があるかどうかを調べるには、以前ファルマが親子鑑定をやったように、PCR法を行えばいい。

そのうえで、彼らの一族のうち、致死性家族性不眠症を発症する可能性のある遺伝子変異があるかどうかを調べるために、PCR法を少し応用させる。現代日本では、DNAシーケンサーという塩基配列を高速に読み取る装置によって簡単に、膨大なDNAの情報、変異の情報を読み取ることができるが、ごく一部の変異を検出するだけなら、電気泳動を使ったアナログな手法でも検出できないことはない。



この研究室でも十分に再現できる方法であり、エレンとエメリッヒには後日そちらを教えることにする。

「えっと、ご家族にはどこから話せばいい？」

「だいたい事情は説明してきました」

「なら話が早い。血液からDNAを採るから採血してもいいかな？」

ファルマはエメリッヒと妹弟たち全員の協力を得て、ロツテと同じように採血の準備をする。解析に十分な量のDNAを取ろうと考えると、口腔粘膜細胞などではなく血液から取る方法が望ましい。

「駆血帯を締めたら、血管を選ぶ。しっかり見極めてね。触ってみてふれる血管がいい。表面に色がついて見える血管は、あまりいいものではないものが多い」

「うーん、ねえねえ、ファルマ君これなんてどう？」

血管を吟味していたエレンが弟の腕によい血管を見つけ、ファルマに確認をとる。

「お！ いいのつけたねエレン」

「ねえ、血を採ってみていい？ 前からやってみたいと思ってたのよねー」

エレンは採血をやってみたいようだ。人の腕だと思って……、とファルマは苦笑する。

「それでしたら私もやってみたいです」

エメリッヒも前のめりになってきた。

「二人ともいきなりはまずいよ。初めてだろ！？ 妹さん弟さんの腕が真っ青になるからやめよう。今度、模擬腕で採血の練習してからね」

「なに、多少のことでしたら我慢させれば」

エメリッヒが過激な発言をはじめたので、ロツテに瓜二つの妹たちはファルマの後ろに隠れ、口を揃えた。

「私たち、メディシス教授に採血してもらいたいです。ね、ねえ？」

「え、ええ。姉さま。腕が血だらけになったら大変なもの」

「私がやりますよ、ご心配なく」

「それなら安心だわ」

ファルマは採血をやってみせながら、ついでに見学をする二人に教える。

「注射針の切り口は上に向けて、皮膚を刺して血管までいく。血管をぶちつと破る感覚があつて、次に黒っぽい静脈血が返ってくるから、薬指と小指でシリンジをひく。手がぶれないようにね。引き終わったら駆血帯を解く。そして針をすつと抜く。そうそう、駆血帯を先に解かないと血が噴き出すよ」

「言われてみると結構難しそうね」

エレンはひとまず自力での採血を諦め、エメリツヒは次々と採血をしてゆくファルマを見よう見まねで、イメージトレーニングに励んでいた。

（さすが一級薬師で首席だけあつて、熱心な学生だな）

ファルマはエメリツヒに一目おく。

「今日は採血はいきなりはさせられないけど、血液からのDNAを抽出やつてみる？」

ファルマはエレンとエメリツヒに声をかける。

まず、小さな試験管内で細胞を破裂させたのち、細胞を溶かす酵素を加えて加熱する。酵素反応が終わるのを待って、細胞が溶解したら、フェノールとクロロフォルムを加えてよく攪拌する。それを手動遠心分離機で遠心分離し、上澄み部分を取って、そこへさらにアルコールを加える。

すると、攪拌した途端試験管内のアルコールの中にふわふわとした白透明の糸のようなものが漂い始めた。

「メデイシス教授、これは……もしかして」

「そう、DNAだ。君のだよ」

白い糸の塊のようなもの。そう表現するしかない物質が、アルコ

ール中にふわふわと漂っている。

「何ていうか、脆い綿みたいなのね。すぐちぎれてしまいそう」

エレンが、あまり有難くなさそうに眺めるが、

「こ、これが……人体の設計図……実在したなんて……」

エメリツヒのチューブを持つ手が震えている。

エメリツヒにとっては禁断の聖域のように見えるのだろう。

「もう。大げさねえ！ DNAなんだから私たちの体細胞にいくらでも実在しているわよ」

エレンがエメリツヒの背中をぽんと叩くと、エメリツヒは驚いて手を滑らせ、チューブがポロリと落ちて転がっていった。

「あーッ！ ボヌフォワ先生何するんですかーっ！」

「チューブ落とさないでよ二人とも、ひっくり返したらまた何時間か前からやり直しだよ」

大切なサンプルを捨てられてはかなわないと、ファルマが冷や汗をかく。

「じゃ、これを明日解析してみよう。今日はこれで解散。そろそろ講義の時間だ、続きは明日ね」

「わかったわ」

ファルマはエメリツヒと共に講義へと向かった。

（さて……と）

ファルマはその日の講義を終え、エレンとエメリツヒと共に抽出した家族全員分のDNA、そしてファルマがあらかじめ抽出していたロットのサンプルを氷で冷却したままバッグに詰めた。そして、サロモンがファルマに定期的に供してくれる、神力を吸収する呪符をありったけ準備した。

前回、異界から帰った際に、かなり肉体の透明化が進んでしまった。もう一度異界を往復すると、消滅のリスクは上がる。

（どうなるか分からないから行きたくないけど、行くしかないか。  
あの場所へ……）

あれ以来、聖泉から行ける異界の研究室には近づかないことにしていたが、高度な解析をしようと思えば研究室の設備が必要だ。そうも言っていない。

異界の研究室に行く目的はというと、

- ・ 解析装置を使い、患者の正確な遺伝情報を得る
- ・ 研究に必要な試薬、書籍、道具を取ってくる

主にはこの二点だ。教え子とロッテの為、少しでも早くより詳細な遺伝子診断を行い、現代薬学をもつてしても不治である病の治療法を確立しなければならない。

「よし、行くか」

ファルマは薬神杖を握り締め、腹をくくる。

「どこへ行くの？ ファルマ君。あれ……そのサンプル？」

エレンが背後から声をかけ、教授室の隣の研究室から顔を出す。

ファルマはエレンが帰ったとばかり思っていたが、彼女はファルマのことを気にして大学に残っていたようだ。

「エレン。まだ残っていたのか、わざわざ？」

「ううん、講義の準備もしていたわ。どこに行こうとしていたの？ 明日解析しようって言ったDNAのサンプルを持って……もしかして、戻ってこれなくなる場所じゃない？ こないだ言っていた、聖泉から行ける異界とか」

ロッテ絡みのことだと知ったエレンには、すっかりお見通しだったわけだ。

「うん、まあね。どうしても必要なものがあるんだ、それを取ってきたい」

ロッテのため、そしてエメリツヒとその家族のためだ。と、ファルマは説明する。

「安全に帰ってこれるって確信がないんでしょう？ 危険すぎるわ」

エレンは涙ぐんでいた。

「そりゃね。でも俺は、尽くせたはずの最善を尽くさなくて後悔したくないんだ。ロッテや身近な人がもし不治の遺伝病を患っていたらと思うと、一刻も早く何とかしたい」

エメリツヒは40代から死病が発症するものと思っているようだが、必ずしもそうではない。幼少期に発症して亡くなるケースもある。何歳までは安全、という保証はないのだ。

「それに、俺は普通の人間とは違うし、いつまでもこの世界にいられるとは思えない、明日消えるかもしれない。ならどこで何をしたいって同じ。だから行くよ、今日」

「ファルマ君、どうしてそんなに急ぐの。せめてあと一年や二年、待ったっていいでしょう？」

「それじゃ遅いんだ、またね、エレン」

エレンの返事を待たず、ファルマは窓を開けて飛び出した。引き留められたからといって、決心は変わらない。

教科書を書き終えた時点で、この世界に最低限の知識と概念は残した。

今、消えてしまったとしても、心残りは……ないわけではないが、以前よりは少ない。

（ごめん、エレン。俺は行くよ）

ファルマは心の中でエレンに詫び、薬神杖に神力を通じる。

彼は風となり、帝都の上空を駆け抜けた。

ファルマが、霧の立ち込める切り立った台地の中央に位置する件の聖泉にたどり着いた頃には、既に真っ暗になっていた。

以前と比較して、聖泉に変化はない。あの時と同じように清らかな水を湛えている。ファルマは躊躇なく夜の泉に飛び込んだ。

そしてそれほど深くは潜らず、水面の裏側から神術で水面に氷を張る。

すると、異界への入り口が見えた。

異界の研究室への入り口の扉だ。

ファルマは職員証を取り出し、電子認証装置にそれをかざす。

（あれ？）

一度、二度かざしたが、読み取りの反応が鈍くなっていた。

「……ピッ」

三度目でようやく電子錠が外れ、研究室の扉が中開きになる。

少し、以前と比較して扉の開く動きがスムーズではないような気がした。

（……錆びている？）

微妙な変化すぎて、以前もそうだったのか思い出せない。

（過敏になってるみたいだな、俺。気のせいだな）

以前と同じように体を滑らせ、研究室の内部に潜入する。

中に入ると、研究室の空調のにおい、冷凍庫や装置の稼働音が懐かしい。全ての装置は正常に動いていた。

据え付けの時計を確認する。午前三時五十分。ここまでは、前回と変わらない。

入った瞬間に、時計は進んでゆく。

ここは、薬谷准教授がなくなる前のおよそ一時間を繰り返しているかのように見えた。

（つまり、残り滞在可能時間は約一時間か）

そして、ファルマはできるだけ視界に入れたくなかったものを確認する。

薬谷完治、生前の自分自身は、ソファの上で寝袋にくるまり、すやすやと眠っていた。

（俺も、前のままか。俺が死ぬ前に自力で部屋を出たいな）

過労死を目前にした、自分の姿。できれば自分の断末魔を二度も聴きたくないものだ。

前回はおそらく薬谷の心臓が止まった瞬間に、ファルマもこの研究室から強制パージされた。でも、もし彼が死ぬ前なら、普通に出口から出られるのだろうか。

今回はそうしたい、と思うファルマだった。彼が苦しみ始めたら、彼を見捨てて迷わず研究室を出なければならぬ。他人の治療はできるのに、薬谷の肉体には干渉できず自分の治療はできない。

……もどかしいが、仕方がない。皮肉なものだった。

ファルマは真つ先に大型解析装置の隣の制御PCに近づく。

（ゲノム解析データが……できている！ やっぱりだ！）

ファルマが前回研究室に入った際に仕掛けて帰った自分のゲノム情報のデータだ。

普通に解析をすれば一週間はかかる解析だが、時空を超え、データの解析は終わっていた。同じ死の前の一時間を繰り返ししているようでありながら、解析装置の時間は進んでいた。

（時間軸がやばいことになってるな）

わずか一時間滞在しただけで、肉体の透明化が進む。

一時間しかいられないからいいようなものの、長時間滞在すればどうなるか、ファルマは考えたくもない。繰り返し来れば、肉体もただでは済まないだろう。しかしその代償に……

（今、はつきりするわけだ。異世界人の遺伝情報がどうなっているのか、俺が人間なのか、どうか）

ファルマはデータを紐解いてゆく。

そして、種名が判定された。そのゲノム情報は、人間のそれだとファルマは感動すら覚えた。

（……異世界人は、やはり地球の水モ・サピエンスの近縁種だったのか）

ファルマ・ド・メディシスの肉体の遺伝情報は、99.9%以上

の確率で地球人の遺伝情報と同じだった。この差というのは、せいぜい性差や人種ぐらいの違いでしかない。ファルマは興奮気味にデータを精査してゆく。

ファルマの遺伝情報は、おそらくファルマ少年のままだ。影がないなどの、人間離れた特性を持っているファルマの体だが、その遺伝情報は人間とさほど変わっていなかったのだ。

（凄い、凄いぞこのデータは！……神脈の発現を司る遺伝子があるはずだ。どれだ？）

地球人としてはありえない、未知の遺伝子もいくつか検出されていた。

それは、ファルマが検索にかけても見も知らない遺伝子によって発現が制御されていた。

その数は、5つ。おそらくその中に、神脈を司る遺伝子の候補がある。

ファルマは愛用していたノートPCに、いくつかのデータをコピーした。これを異世界へ持って帰れば、電源さえ確保すれば更に解析ができるはず。また、彼が必要だと思う医学的・薬学情報も論文もコピーをかけた。

さらにファルマは、医学書、薬学書をビニール袋に入れ、大型の手提げに詰め込み、PCもスマホも、ビニール袋に入れて、リュックのようにして背負った。

（これで、どのタイミングでパージされてもひとまず安心）

そして、この研究室を訪問した当初の目的を果たす。

エメリッヒの一族とロッテのDNAをゲノム解析装置にセットする。簡易解析であっても、データが出るまでには時間がかかる。一度異界を出て、もう一度データを取りに来なければならぬだろう。研究室を見ていて、ファルマはある違和感を覚えた。



（あれ？ 培養室の扉が開いて、電気がついている……）

研究室に隣接する細胞培養室の扉が開き、隙間が空いていた。そして、室内に電気もついている。

前回来た時には、押しても引いてもびくとも開かなかった部屋だった。

（異界が広がっている？）

異界の研究室には、見過ごせない変化が起こっていた。

## 5章15話 保因者診断とその結果（前書き）

不調で書けませんでした、更新間隔があいて申し訳ありません。

## 5章15話 保因者診断とその結果

異界の研究室に隣接する培養室の扉の隙間が、わずかに開いていた。

前は扉が開かなかったことを確認していた部屋だ。

ファルマは微妙な変化に緊張する。誰かが中にいたとしても、今のファルマには神力も神術もない。この空間は、地球での物理法則に随うからだ。

（異界の研究室の、出入りできる領域が拡大している。前来たときと、同じ状態ではないぞ……この扉、ドアクローザーがついてて勝手に閉まるようにできているのに、何で勝手に開いている？）

ファルマは、ドアが閉まってしまわないよう気を付けながら培養室に足を踏み入れてみた。中が無人であることを確認し、いつものくせで律儀に、土足禁止の部分はスリッパに履き替えた。

培養室らしき空間の内部を、白みがかった蛍光灯、クリーンベンチに灯るUVランプが無機質に青く照らし、装置のモーター音が室内に響き渡っている。小型冷蔵庫のような形をした培養器の扉を開けると、中に各種の細胞の入ったシャーレが整然と並んでいた。

シャーレの日付を見ると、薬谷が死んだ日に培養していたものだ。二年の歳月を経て、それらは懐かしくすら感じた。

（培養グッズも必要だよな。持って帰ろうか）

ファルマは、培養のための実験器具や、物質創造での合成の困難な特殊な試薬類を失敬してバッグに詰めた。また、培養細胞も冷凍庫から凍結状態でストックを持ち出した。

致死性家族性不眠症の研究のためには、神経幹細胞の培養環境が必要だ。

これらの分離には時間と手間暇がかかるので、持っていく。

（培養室に入れる。ってことは、その隣の廊下にも出られる？）

彼の記憶が定かなら、培養室のさらに奥はもう一つ扉があって、研究棟の廊下に繋がっていたはずだ。

培養室を突っ切り、廊下への扉を開こうとした。

しかし、培養室から廊下へ繋がる扉は押しても引いてもびくともしない。立て付けが悪い、というものではなく、物理的に空間が閉ざされているかのようだった。

ファルマは首を傾げながら、背伸びをして扉にはめ込まれた窓から、本来廊下がなければならぬ空間を覗く。

ガラスの向こうに見える、そこにあるはずの廊下は暗闇だった。

一瞬、元の世界に戻れるのでは、という淡い期待がよぎるが、よくよく目を凝らせば、深淵の濃淡が一方方向へと、遅々とした速度で均質に回転している。

この研究室が何かの精緻な機巧の内側にあつて、その内部から装置の心臓部を眺めているかのようだった。

（回ってる……空間が？ しかも廊下が、ない……やっぱり外には出られないのか。この先の空間はいつたい……）

空間が不安定化していると考えたファルマは、外に出る気力を根こそぎ奪われた。

仕方なく、踵を返し研究室へと戻る。出口は一か所だけなのだ。

（空間全体が変わっているということは、もしかして、俺自身も変わってる？）

ファルマはふと思い立ち、あらためてソファで寝息を立てている前世の自分、薬谷に近づいてみた。何か変わった部分はないだろう

か。まじまじと見つめていたその時、薬谷の瞼がぴくぴくと立て続けに動いた。ファルマは驚いて後ずさる。

（意識が、浅い！ 前より！）

おい、と声をかけようにも、ファルマの声は出ない。音が、空気を伝導しないのだ。

薬谷に触れようとしても、ファルマの手は幽霊になったかのように、薬谷の体を透けるのだ。

（なんてこった。ファルマはこの部屋のものに触れることはできるでも、薬谷自身の体には触れない……。ファルマの声もこの空間の中では上手く出ない）

ワーカーホリックだった生前の自分。

その彼を起こす方法を考えてみる。

（なら、これでどうだ）

そう考えたファルマは、研究室内にあったサンプル保管用の超低温冷凍庫の扉を開け放つ。

「ピーッ ピーッ ピーッ」

冷凍庫から温度上昇ブザーが鳴った直後、薬谷 完治は覚醒した。

「うわあああー！ 冷凍庫の故障かつ！？」

そして取り乱す。

冷凍庫の故障による保管サンプルの全滅、それは薬学者にとって致命的な出来事ともいえる。

（お、起きた…… ははっ、やっぱり俺は俺だな）

苦笑するファルマの前を素通りして冷凍庫に駆け寄った薬谷には、ファルマの姿は見えていないらしい。存在を無視されているという

よりは、気配すら感じられないようだった。

「冷凍庫のドアを開けっぱなしに？ 俺が？ ……してないぞ。誰がやったんだ？」

薬谷は冷凍庫に異常がなかったことを念入りに確認すると、部屋の時計がまだ起床予定時間になっていないのを見て、再びソファに転がって寝袋を着込もうとした。そのとき、

「おや……なんだ？」

薬谷は、狐につままれたかのような顔で頭をかきながらゆっくりと研究室を見回した。

研究室の内部が一変していることに気付いたのだろうか、とファルマは予想する。

なにしろいくつかの重要な実験器具が、ファルマに盗まれているのだ。

薬谷のモバイルすら盗られているありさまである。

さらに、彼が丹念に準備していたであろう試薬類も根こそぎ消滅している。

（おい。見えるか、これ。俺が盗ったぞー）

ファルマは薬谷の傍に近づいて薬谷に手をふってみたが、さっぱり視線が合わない。

そして、ファルマがまさに手にしている盗品は、薬谷の目には見えないようなのである。

（……どうなってるんだ。俺の姿だけでなく、手にしたものも見えなくなるのか）

ファルマが途方にくれていると、前回ファルマが現実世界に引き

戻される契機となったストップウォッチのアラームが鳴った。

それを合図に、研究室全体にファルマを研究室の外へ排出しようとする圧力が働く。

ファルマはパージされるのを覚悟し、荷物を握りしめた。

（しまった！ 時間切れだ！）

彼が目を開いた直後、聖泉へと放り出され、研究室に入る前に水面に張っていた氷上に降り立っていた。異界では失われていた神力が、ファルマの全身にじんわりと戻ってくる。

彼は自身の体に異変がないかを確認する。

前回は、研究室から出ると神力が強くなり、体が透けていたものだが、透けてはいない。

どちらかというと神力が減っているような気がする。

「そういえば、今回はあいつ死ななかったよな！？ あいつじゃないかって薬谷、俺だ。だからか？」

前回研究室に潜入したとき、薬谷はもがき苦しんで死に、ファルマの意識が異界から強制パージされたが、今回はファルマがブザーを鳴らすなどの小細工をして薬谷を覚醒させたために、何かの因果関係が変化し、薬谷に心不全は起こらなかった、というわけだ。

そしておそらく、彼は死ななかった。

少なくともファルマが見届けた間は。

「……もしかして今、同一時間軸に薬谷が生存したルートができたのか？ ……まさか、あのまま死なずに日常生活に戻ったのか……？ 翌日も、研究漬けの日々を……」

ファルマは脱力しながら、それでも考え込む。

（あの異界に俺が干渉すれば、発生した事象の数だけ因果が元の時空と乖離してゆく。それを続けてゆくと、最終的にどちらかが破綻する……？）

それで、異界から出たファルマの体が透けたり、透けなかったりするのだろうか。

「でも、あと一回だけあそこに戻らないと」

ロッテをはじめ、エメリツヒらの遺伝子解析をあの研究室に仕掛けてきたからには、結果を取りに行く必要がある。怯んでもいられない。

ファルマは時間を置かず研究室に再突入することにした。

薬谷が死ななかつた以上、時間の経過に伴ってファルマに何らかの影響が出かねない。

ファルマは聖泉の岸に盗品を置くと、再度聖泉へ潜り、裏側から異界へ再突入を試みる。

今日だけで通算三度目の異界への侵入だ。

カードキー認証システムに、秘宝化した職員証をかざすと、開錠までかなりの時間を要した。また、扉の可動域も徐々に狭まり、全開にはできなくなってきた。嫌な予感がしたが、それでも扉をこじあげると、薬谷完治は再三、ソファの上で寝袋にくるまり眠っていた。

ファルマはそこで、部屋の時計を見る。

（はっ！？）

午前3時50分……ではなく、4時10分。

（……！ 進んでる！ 20分も！）

ファルマが研究室に入った瞬間から、時計は時を刻み始めている。



今度は滞在できる時間が40分しかないのだ。これ以上この異界を変容させるといふリスクは取りたくない。

薬谷は起こさずそのままにしておく。

（くそつ、40分で遺伝子発現のデータ解析なんてできるもんか！無理だ、部屋の外で解析しないと）

さきほど仕掛けたばかりの遺伝子解析は、再侵入した今、既に終わっていた。

とはいっても、ファルマが研究室を出てから、ものの十分も経っていない。その間に、一週間程度解析装置を稼働し続けなければ終わらないはずの遺伝子解析が終了している。

ファルマには、時空の歪みが起こっているとしか考えられなかった。それでも、ただちに解析結果を大容量ストレージにコピーして持ち出そうと試みる。

（おっせえ！ だよな……データでかすぎるもん）

データをコピーしているダイアログボックスの進捗バーは、遅々として動かない。

（40分でコピーが終わるかな?!）

経験上、一時間以上かかる。なにせ、全ゲノムの解析結果というのは大容量のデータだ。1回解析をすると、百ギガバイト程度になる場合もある。コピーするだけでも時間的に間に合わない。

「優先順位をつけて、必要な部分から最低限コピーしよう」

コピーを走らせながら、データを解析ソフトにかけ、極力データサイズを圧縮。

全情報は取得できないまでも必要な部分だけコピーすることに成功した。

そして、タイムリミットを迎え強制ページされる前、すなわち薬谷が苦しみはじめ、心不全で死亡する直前に、入ってきた研究室の扉を自力で脱出し、もとの異世界へと戻った。

その時、入り口の扉は、半開き程度しか開かなくなっていた。異界の扉を閉じると、ファルマの神力はもとに戻る。

「ふう……帰れた」

ようやく声も出せる。

「って……神力が……やばいやばい、もういいって！ 戻りすぎだつて！」

こちらの世界に戻った途端、堰を切ったように体内に神力が流れ込んでくる。

「つく……やつぱりこうなるかよ」

暴力的なまでに増幅する神力量。吐き気、眩暈がして、意識が遠のきはじめた。神力の流入はとどまるところを知らない。

まずい、まずい。

ファルマは悪寒がする。

許容量以上の神力を無理やり圧縮され、充填されるかのような感覚は最悪を通り越して死にたくなるほどだった。

肌の透明化が始まり、進行してゆく。神力の爆発的流入による消滅の危機を覚えたファルマは、バッグをまさぐる。

（こんなことも、あるうかと）

サロモンの呪符をありつたけ引つ張りだす。全身に張り付けて神力を封じ、ジュリアナに借り受けていた宝剣を突き立て、職員証、そして薬神杖に神力を吸収させる。

そこまでやって神力を分散させて、ようやく普段の状態に戻すことができた。

それでも、普段より少し透明に見えないこともないが……。

「はあ……なんとか……人間に戻れた、か……？」

ファルマは改めて、自分が化け物なのだと、この世のものではないのだと思い知る。

今、間違いない消滅の寸前までいきかけた。

この世界から消えるときはこうやって消えるのだ、とファルマははつきりイメージを持つに至った。

「薬神関連に限らず、秘宝を集めないといけないな」

秘宝になら一時的に、神力を貯めて置ける。

ストックできる神力は微々たるもの。対症療法に過ぎないのだが……。

「なんなんだ、あの場所は？ あの世界から戻るたび神力が高まっていく、神力のエネルギースポットなのか……」

ファルマは思い出す。培養室の奥に見えた、不気味に渦巻く、底知れぬ深さの闇を。

この世界の成り立ちの不安定さを垣間見た気分だった。

死の直前の自分が同じ時間を無限に繰り返し、時空を漂流する異界の中に閉じ込められ、因果が変化し続けているのだとしたら……。

この異世界で受けた生は何回目の試行の結果を反映したものだろうか。

……などと思うと憂鬱になる。

「俺が死ぬ確率と、死なない確率が重なり合っている。……シユレデインガーの猫じゃないっつーのよ」

自嘲気味に呟きながら、聖泉の岸に戻り、研究室からくすねてきた荷物を手にする。

「次、研究室に入った時。もつと時間が進んだ状態でスタートだったら、そのうち入れなくなりそうだな」

名も知らぬ異世界の空をファルマは見上げながら、事態を憂慮した。

この惑星の空は、どの宇宙へと繋がっているのだろうか。

押し寄せる疑問を飲み込み、彼は薬神杖を大きく一振りし同時に重力を振り切ると、サン・フルーヴの空を目指した。

… … …

ファルマは、聖泉から直接、メディシス家には戻らず帝国医薬大の自分の研究室に戻ってきた。

深夜になっていたので誰もいないだろうと思いきや、研究室の鍵があいていて、中には人の気配がする。

エレンがまだ研究室に残っていて、机の上に突っ伏して寝ていた。ファルマはそっと、彼女の肩にコートをかける、体が冷えないように。

（エレン、待ってたのか。ここに帰ってくるかどうかもわからないのに）

ファルマはエレンを起こさないよう物音をたてず異界から持ち帰った荷物を研究室でばらし、試薬や器具類は厳重に保管。ノートPCを起動する。

内蔵バッテリーがまだあるうちに、解析作業を行う。

バッテリーが尽きたら、充電する方法がないことはないが、研究室から持ち帰った非常電源を改造してお手製のバッテリーから電源を取るには、時間も労力もくう。

推定残り時間、10時間。一気に片を付ける。

二つの家系を、それぞれの遺伝子解析結果のファイルからマッピ

ング。

各種パラメータを設定し、配列を既知の遺伝情報に重ね合わせる。こうして差異を比較することで、患者の遺伝子変異が分かる。

すなわち、この致死性家族性不眠症……進行性の不眠症によって衰弱死する、現代では不治とされるプリオン病が、エメリツヒの家族の誰に、そしてロッテにも遺伝しているのか。

ファルマは淡々と、デジタル化された遺伝情報をもとに解析をすすめてゆく。

転生してからのブランクを、ものともせずに。コマンドを操り、不足した情報はコードを書いて。

結果が見えてきた。

この病気に関連するプリオン遺伝子の178番のコドンに変異があれば、致死性家族性不眠症の保因者だ。

エメリツヒは、残念ながら保因者で間違いない。

次男、三男、四男、長女 次女も保因者。つまり、

「全員……遺伝しているのかよ……」

しかも、遺伝子発現解析も合わせて分析したところ、次男に至っては、既に異常プリオンタンパク質が蓄積し始めている。次男が数年以内に命を落とす可能性は極めて高い。

ファルマが思っていたより、事態は深刻だった。

この病気の遺伝確率は通常50%だが、神力を持っていることが影響しているのか、高貴な家系であるがゆえに近親相姦などが行われた結果なのか、エメリツヒの世代では、遺伝子変異の保因者は100%だ。

つまり、全員がこの病を発症することになる。

「じゃあ、ロッテは……」

ファルマは昂る心を落ち着かせ、最後に回していたデータを紐解く。

彼らと、ロッテの違いはいくらかある。同じ先祖を持ちながら、かたや貴族で、かたや平民だ。

エメリツヒの家系と、ロッテは血縁関係にあるということも、遺伝子を見れば分かった。

ファルマはひとまずのデータを見て、溜息をついた。

ロッテは、母方に平民の血が入ったためか、神術に関する遺伝子のいくつか欠け、神術使いではなくなっていた。だから今、ロッテは平民だ。

そして、致死性家族性不眠症は……。

「ロッテには遺伝していない」

つかの間の安堵。だが、エメリツヒたちの事を思えば、解析を休んでいる暇はなかった。診断がほぼ確定したあとも、ファルマは自分を追い込むように徹夜でコードを読み解く。他の遺伝子の情報から、この病気の治療法を探るためだ。電源が切れてしまうまで、できるだけ情報を引き出したい。

そして、ファルマはあれ、と電源オフションを見て首をかしげた。

（うん？ PCのバッテリーが減らないぞ。もしかして……）

異界からこちらの世界に持ち込んだものは、秘宝化する。それは職員証もしく、他の試薬類もしく。PCも例外ではなかったように、PCも秘宝化していた。

おそらく、バッテリーのインジゲータが異常なのではなく、無尽蔵になっている。

「そっか……減らないのか。じゃ、もう寝よ」

ファルマはソファにどっかりと腰をおろし、疲れに任せてそこで眠ってしまった。

翌日から、すぐにでもこの病についての治療法を探索しなければならなかった。

すでに病魔は、彼らの一族に逃れえない呪いを刻み付けていた。

混濁した意識の中で、小鳥の囁きが聞こえてくる。

生ぬるい日差しが肌を温める。

ファルマの腕に、柔らかいものが触れていた。目を覚ますとエレンが隣にいて、腕を絡めファルマに寄りかかるように寝ていた。ファルマが起きると、エレンもつられて目を覚ます。

「おはよ、ファルマ君」

エレンはにっこりとほほ笑む。

「エレン、俺のこと見えてる？」

「見えるわよ」

エレンの言葉を聞いて、ファルマはようやく生きた心地がした。

エレンはファルマにひしつと抱きついた。豊かなバストが、ファルマの顔を押しつぶして息苦しい。

「あの、エレン？ 苦しい、くるひいつて……」

宇宙空間でも生存していた過去もあり、ファルマとしては特に呼吸をしなくても問題ないのだが、ファルマは唐突な状況に硬直してしまった。エレンは普段、こんなことをしてくるようなキャラではないのだ。

「遠いところに行ってきたのね……戻ってきてくれて本当によかった。あなたがいなくなったら、私……」

耳元で、エレンは涙ぐんでいるのか言葉を詰まらせる。

「しかも、帰ってきた君、暗いところで発光して見えたわ……無茶をしてきたんじゃないの？ 体は大丈夫？」

「うん、まあ……ごめん」

ファルマもエレンに心痛させたと思い知り、大人しく叱られるこ

とにしてエレンに寄りかかった。そんなタイミングだった。

ガチャツ。

エレンとファルマがしっぽりしていたところ、間が悪く教授室の扉が開いた。

「お、おはようございます……あつ、失礼しました。私、何も見ていません！」

教授秘書のゾエは通勤バッグを取り落としていた。

「ちょ、ゾエさん……！？」

ファルマは予想外のタイミングでゾエに見られて慌てる。

二人とも疚しいことはしていないのだが、咄嗟に慌てたものだから、またゾエに変な勘繰りを生じさせる。

「あら、おはようゾエちゃん。今日は早いわねー、私たち、昨晩はちよつと立て込んでいて泊まっていたの。色々あったから、お風呂に入ってきたいわー」

エレンはあっけらかんとしている。そしてさらっと、誤解を深めるような発言をしている。本人は自覚がないようだが。

「お、お邪魔しましたーっ！」

出勤してきた秘書のゾエは、ファルマとエレンの仲に気を遣ったのか、それから30分ほど姿を消し、戻ってこなかった。

ファルマはゾエを探して学内を奔走し、その朝は気まずい空気の中勤務を始める羽目になった。



## 5章16話 ゲノム編集技術と、薬神からの宿題

早朝、教授室で一夜を明かしたファルマとエレンと鉢合わせした秘書ゾエの誤解をやつと解き、彼女が秘書室に戻っていったのを見届けたファルマは、ふと教授室の時計を見て慌てはじめた。

「まずい、薬局の営業が始まる時間だ。エレン今日講義あるっけ？」

「え、私午前中は神術実習の授業があるから薬局に出勤できないわよ？ どうしよう、バイトの薬師たちだけで店をあけられる？」

エレンは週に一度、午前中に神術実習の講義を受け持っていて、それを楽しみにしていた。

従来通りの貴族向けの体育、に相当する授業だ。初回の授業では全員を相手にして神術試合をしたわ、などと言っていたから神術実習はデスクワークが増え運動不足を感じているエレンの、ちよつとした気分転換の場になっているのだろう、とファルマは思う。ちなみに、平民出身者は神術が使えないので別メニューのエクササイズが用意されている。

「俺も今ちよつと実験を仕掛けているから手が離せないな。今日は兄上が暇だつて言つてたから、代診を頼もう」

ファルマは思い出してメモを書く、大学の伝書鳩を借りてメデイシス家へと手紙を飛ばした。大学の講義や準備などで忙しい時には、パツレが薬局の診療を手伝ってくれたり、講義の代理をしてくれたりもする。

「いいの？ パツレ君にそんな気安くお願いしても、後で怒られたりしない？」

「兄上は症例数が必要だから、回してくれつて言われてるんだ」

パツレは一級薬師なので、往診で王侯貴族を診るのが常だが、薬局で診療するとメリットがある。一級薬師には、年間症例数いくら

診なければならぬ、という診療ノルマがあるからだ。

特に事情もなくそのノルマを大きく下回るようだと、経験不足として二級薬師に降格になる場合もある。パツレは白血病を患っていた間診療ができなかったので、患者が足を運んでくれて一気に症例数を稼げる異世界薬局でのバイトを重宝していた。

「ああ、症例数は確かに。私も薬局で働き始めてから困ったことないわね。毎日百人以上来るものね、実務経験はたくさん積みまわせてもらったわ」

エレンも、常日頃から感謝していた部分だった。

ほどなく屋敷の鳩から返事がきて、パツレは今日一日、診療を引き受けてくれるようだ。

「ところでファルマ君、聖泉はどうだったの？ 危険なことはなかった？」

二人はようやくそれぞれの仕事にとりかかり、エレンがファルマに昨夜の経緯を尋ねる。聖泉に何があって、何をする場所であるか、ということはエレンは知らない。ただ、守護神の秘密にまつわる重大な聖跡だということは、彼女の頭に入っている。

「危険といえば危険だったけど……それより思いがけないことが色々あつてさ」

ファルマは異界の研究室の話をうまく伏せながら、エメリツヒ一族の遺伝子解析結果をエレンに伝え、彼女は大混乱していた。

「え？ エメリツヒ君たちの全ゲノム情報を読んできた？」

「うん。PCRでもできるけど、もっと大規模に遺伝情報を読む方法があるんだ」

ファルマは異界から持ち帰ったPCを触り、遺伝子解析を急ぎながらエレンと言葉を交わす。ファルマはカタカタとキーボードを打つ感触が懐かしい。

久しぶりのPC画面での作業で、眼精疲労がひどいが、これまでのアナログ生活から考えれば、捗るといったレベルを超えている。

ファルマとしても、文明の利器にアクセスできることに感謝するばかりだった。

エレンは教科書を見直しながら、信じられないといったように中腰になる。

「ま、待つて……ヒトのゲノム情報つて30億塩基対とかあるのよね。それを全部読んだつてこと？ どうやって？」

エレンはメガネがずり落ちて床に落ちてしまった。

幸い、教授室にはカーペットが敷かれていたのでメガネは割れなかった。

「メガネ気を付けて」

「ねえ、聖泉にそういうことができる秘宝があるの？ そう？」

「まあ、そんなところ」

研究室にあつた大規模解析のできる遺伝子解析装置についての、詳細は濁しておく。

エレンは秘宝と聞いて受け入れられたのか、驚愕から絶望の表情へと変わる。

「そっか……エメリツヒ君の一族は全員遺伝してたのね……ロツテちゃんは遺伝してなくてよかったけど、今後の経過が分かるだけに辛いわね。彼、発症する前に自殺するって思い詰めてたし、結果をどう伝えたらいいのかしら」

ロツテに遺伝していないと分かったのが、不幸中の幸い。

だが、エレンも、教え子が死病に苦しめられるのをなすすべなく見守るしかない、というのはやるせないようだ。

「だな……次男はもう発病しているみたいだよ。症状が出ていないだけで」

と言いながら、ファルマは持ち帰ったノートPCのモニタ部分を凝視している。

エレンはファルマの視線の先に気付き、目を凝らした。

「ところでファルマ君が見ている、そのうーっすら見える光って何？」

「え、エレンこれ見えるのか？」

「見えるわ。発光してて、四角形で半透明の。それ、聖泉から持ってきた？」

エレンは、立ち上げたままのノートPCをファルマの後ろから覗き込む。エレンに聞いてみると、不思議なことに液晶面だけは見えているようだ。

「聖泉から持ってきたんだ。秘宝化してしまつてちよつとモニタが透けすぎて見づらいけどな。じゃ、これは見えない？」

ファルマはノートPCのディスプレイ部分をパタンと閉じてみた。「あれ、見えないわ。どこに隠したの？ 不思議！」

エレンはきよきよきよしているが、ファルマにはもちろん見えている。液晶ディスプレイ以外は人に見えないうえに、触れないようだ。盗難防止にはもってこいだつた。

ファルマは安心してディスプレイを開く。誰にでも見えてしまうと困る。

「本当はこういう形をしているんだよ」

ファルマは紙にノートPCの模式図を書く。

エレンはへえ、全然見えないわ、と唸った。彼女はそれを秘宝だと思っているので、詳しい仕組みなどは聞いてこない。逆にそれが、ファルマにはありがたい。

「見たことのない文字が宙に浮かんでいるわ……ファルマ君これ読める？ 何してるの？」

「計算してるんだよ。遺伝情報を解析してる」

「ファルマ君って。いったいどんな高度文明の知識持ってるのよ……」

「本当に何でも知ってるのね」

エレンになれば見られてもいいから、とファルマは特に警戒もなく説明しながらコマンドラインを打つ。

「知らないことの方が多いし、買いかぶりすぎだよ。今回の病気に ついてもね」

「そうだったわね。ファルマ君、致死性家族性不眠症の治療法思いついた？ 私も、色々考えてみたんだけど……見てくれる？」

エレンは、徹夜で考えていたらしいアイデアノートをファルマに見せてくれる。

かなり時間をかけて考えたのだろう、何十ページも、様々なアイデアが精一杯捻り出されていたが、採用できそうなものはなかった。とはいえ現代の地球においても、ファルマが転生するすぐ前までは治療法は見つかっていなかったので、エレンの行き詰まりも妥当といえる。

「どう？ 使えそうなのあった？」

エレンは、何かヒントがあつたかしら、と無邪気に訊いてくる。

エレンはこの世界の薬師としてはエリートだが、ファルマに対してだけは全く相手にならないので学生モードになる。

「あー……うん、ありがとう。参考になるよ」

ファルマの反応が芳しくないなので、エレンは恥ずかしそうにアイデアノートを奪い返す。

「その。ごめんね、力になれなくて……」

エレンはしょんぼりと両手で顔を覆う。それはもう、赤点をとった学生のように落ち込んでいた。

「いや、惜しかったのもあったよ。助かるよ！」

ファルマはエレンを励ますが、歯切れは悪い。

エレンは一つため息をついて、気を取り直した。

「じゃあ、ファルマ教授の回答を聞こうかな。ファルマ君、エメリッヒ君に”発症する前に遺伝子変異を治してしまえばいい”なんて言ってたでしょ？ あれってどうやるの？」

遺伝子が生体の設計図の原本だとすると、遺伝子変異は情報の誤った原本だ。

その情報通りにタンパク質を作ったら、病原性プリオンができ続ける。

原本を直さないといけない、というのはエレンにも理解できていたようだった。

「ああ、それはね。教科書には書いていなかったんだけど……思い通りの部位のゲノムDNAを削除、置換、挿入ができる、クリスパー・キャス9（CRISPR/Cas9）っていう技術を使う」

その技術を遂行する試薬一式は、既に研究室から持ち出してファルマの手元にある。

この新技術が見出されたのは2010年代に入ってからのもので、ゲノム編集技術として急速に普及が進み、生前のファルマもその研究にどっぷり絡んでいた。

「エメリツヒ君たちが苦しんでいる病気の原因となる遺伝子変異を、書き換えて治せる方法があるってこと？」

「うん、まあざっくり言うとな。そのシステムを積んだウイルスを患者の全身の細胞に感染させて働かせる。これが準備段階」

「ウイルスを全身感染なんてさせたら、感染症で死んでしまうんじゃない!？」

「病原性のあるウイルスはそうだね。でもアデノ随伴ウイルスっていうウイルスがあつて、それは殆ど病原性がないんだ。それを使う」  
「ウイルスには毒性のないものもあるのね……」

エレンはウイルスによって病原性に違いがあることを、思い出したらしい。

とはいえ、ファルマも全くウイルスの危険性を心配していないわけではない。

もし万が一、ウイルス感染が重症化しそうになったら、ファルマはウイルスに目印をつけておいて、その物質めがけて消去の能力を

使えばウイルスごと消えるので、一応安全策は用意できる。

「ていうか、ウイルスを増やしたりする操作は、俺以外の人にやってもらわないといけないけどな」

「え、私？　だめよ、自信ないわ」

エレンがファルマと目があつて、無理無理、と首を振っている。

「やらかしそうだもの。ウイルスひっくり返してぶちまけちゃいそう、そしてほかの皆を感染させちゃいそう」

メガネの取り扱いを見てみると、確かに心配だ……と思うファルマだった。

「慎重に頼むよ。俺、ウイルスも細菌も聖域で殺しちゃうから、もう増やせないし取り扱いえないんだ、悔しいけど」

ファルマが持っている聖域も、困ったもので、ウイルスや細菌の性質を利用して遺伝子操作をする研究には、ファルマはもう携われそうにない。

「なんか、ファルマ君かわいそう」

エレンに同情されるが、薬学者泣かせの能力だ、とファルマは切ない。

「まあ、ウイルスの話は置いておいて。ちょっと複雑になるから、ゲノム編集の仕組みはこのヒモを使って説明しようかな」

ファルマは手近にあった荷物用のヒモを、エレンに説明するために二重にして持った。

紐の真ん中あたりに印をつけ、そこをエメリッヒ一族の持つ遺伝子変異部分と仮定する。

「ウイルスが全身感染したら、ウイルスに搭載していた遺伝子変異を検出するようにデザインしておいたRNAがゲノムに結合して、それを目印に酵素が遺伝子の変異部分を切断する」

ファルマはエレンに紐を見せながら、ナイフで、遺伝子変異部分

を挟むように二本の紐をぎっくりと切る。

「あれ？ この紐、切りっぱなしでいいの？ DNAが切れたってことになるわよ？ これって遺伝子が破壊されたことになって大問題よね？」

エレンが切られた紐の切れ端に視線を向ける。

「もちろん切りっぱなしだとまずいよ。でも、生体のシステムは偉大なもんで、遺伝子修復システムが勝手に修復してくれる。DNAの修復をしてもらう時に、変えたい配列を紛れ込ませると、それも取り込んでもらえる」

切り取られた遺伝子変異部分に相当する領域に、ファルマは短いリボンをあてがい、抜け落ちた情報を補うように紐と紐の間に、正常な遺伝子領域にみためたりボンを結んで繋いだ。

「この、ドサクサに紛れてゲノムに組み込む用のリボンはどこから出て来たわけ？」

「これもウイルスに積んでおくんだ。さて、これでゲノムは正しい配列に修復されて正常なプリオン遺伝子になったよ。悪いところはもう、どこにもない」

「えっ、まさかそれで終わり？」

エレンは目を大きくした。

「まだ病気を発症してない人はそれで根治するね」

「もう、患者ではなくなるってことよね？」

エレンは念入りに確認する。

「これで本人も、そして子孫も呪いから解き放たれる」

< i201188—2496 >

彼女はファルマの切り貼りした、ゲノムに見立てた紐を受け取り、ぴんと張って確認した。

「それって治った……ってことになるの？ 遺伝子を書き換えただってことに？ もう、ファルマ君ったら。治療法、知ってるんじゃない



い。もったいぶって」

とエレンが、ほっとしたようにファルマをなじっていると、

「そうなければいいよね」

ファルマはそう言って悩ましげに頬杖をついた。

「実際には、多分こうはいかないんだよ」

樂觀視できない理由はあった。

「うまくいきそうにないと思っっている点はどこ？ 私からすると完璧に聞こえるけど」

「脳や脊髄、各臓器にはウイルスを排除する生体防御機構があるし、ウイルスが全身の100%の臓器や組織に感染できるわけじゃないし、さらに細胞に入ったとしても遺伝子が改変できる効率は100%じゃないんだ。つまり、どうしても遺伝子改変できない、取りこぼしができる」

「ってことは、遺伝子治療ができていない細胞が残って異常プリオンは未治療の遺伝子からでき続けるってわけね」

さらに付け加えると、ターゲット以外の、ターゲットに似た遺伝子配列も書き換えてしまうリスクもあったが、それについてはファルマは従来よりエラーの数千倍少ない改良型の酵素を作製していたためさほど問題にはならないので、それについては黙っておいた。

「ところで、全身の細胞にそのゲノム編集用の酵素一式が行き届けばいいわけよね？ そのために別にウイルスを使う必要はないんでしょ？」

「ウイルスを使わないと、全身の細胞に入れるのは至難の業だよ。なにせ、薬剤は拡散して薄くなるからね」

薬剤や治療因子を全身にいきわたらせる、それが遺伝子治療の難しいところなのだ。

「あるじゃない、他にも方法が」

エレンはファルマの教授机に近づいてきて、真正面から彼を覗き込んだ。

あまりに意味深にファルマを見るので、ファルマはしかめつらになる。

「何？」

エレンはもったいぶってファルマの手を取り、鎖骨のあたりに彼の手をあてがわせた。

「へっ？　ちょ、何やってんの？」

ファルマはびくつとし、彼女の肌の感触に戸惑う。エレンは照れくさそうにしながら、ファルマの手を、彼女の体に強く押し付けた。

「あ……」

ファルマの手は透けて、エレンの体内に入る。

「ほら、こんなふうに」

エレンは甘ったるい声を出した。

「君の手の中に治療薬を握って、患者さんの体の中に手をつっ込んできき混ぜれば、全身の細胞に薬がいきわたるんじゃない？　物理的に。それでも遺伝子改変効率が悪いなら、一回では治しきれなくても、何度かやれば累積で100%に近づくんじゃない？」

凄いことを考えたものだ、とファルマは圧倒される。

ファルマの中では固まっていた遺伝子治療の常識を覆らせ、その発想はぶっ飛んでいた。

「確かに、ありだ。治療法じゃないけど」

えげつないほどのチートを使ったアイデアだったが、効果は絶大だ。

現代医療でネックとなっていた部分を、解決できるかもしれない「よかった。一つアイデアが採用されたわ、ちよつとズルだと思うけど」

エレンは嬉しそうだった。

「次男さんは既に異常プリオンが蓄積し始めているから、產生された異常プリオンも何とかしないとイケないな」

異常プリオンは、正常プリオンを異常型に変えてしまうので、異常型プリオンは全て取り除かなければならない。異常型プリオンの除去については、エレンのアイデアで克服できそうだった。

異常プリオンを標識して結合する抗体を、ファルマが患者の体到手を突っ込んで全身に拡散させる。その抗体に、人体にはない特殊な目印となる物質をつけていれば、ファルマはその物質に対して消去の能力を使って、異常プリオンごと消せる。

正常プリオンも異常プリオンも一時的に全身から消えるが、遺伝子治療によって正常になったプリオンタンパク質がすぐに產生され始めるだろう。

次男も、これで治療ができそうだ。

時間はかかるだろうが、エメリツヒの一族はうまくゆけば、これで全員が救われることになる。

生殖細胞も全て治癒することで、彼らの子や孫も、発病の恐怖に怯えなくて済む。

（かなりリスクを甘く見積もって、けどな……神頼みより少しいくらい、だ）

投与方法に前例がないため、失敗すれば何が起こるか想像もつかない。

全身遺伝子治療は、動物実験でようやく始まったばかり。人間ではまだ成功していない。

それでも、次男に関しては、やるよりほかに選択肢がないし、やらないよりはいいだろう。それに、最悪ゲノム編集の効率が期待していたより悪くても、異常プリオンタンパク質をファルマが消し続ける限り、症状の進行を、ほぼ健常人と変わらないほどに遅らせることはできる。

ファルマは遺伝子解析の結果をまとめ、治療方針とあわせてエメリッヒを教授室に呼び出し説明した。エレンも同席してくれた。エメリッヒは一族全員に死の遺伝病が遺伝していたと分かりシヨックを隠せない様子だったが、ファルマの提示した治療法に、希望の光を見出したようだった。

「教授の神術と、その遺伝子を改変する技術を組み合わせたら、根治ができるかもしれないということですか?！」

エメリッヒはよほど嬉しかったのだろう、椅子から飛び上がり、全身で喜びを表した。

「かもしれない、だけどね」

ファルマはぬか喜びにならないよう、慎重な姿勢に徹する。

「その神術、ぜひ私にも教えてください!」

「それはできないんだ。俺の神術は、他の薬師には使えないから」それがどういう意味なのか、エメリッヒはにわかには理解できないようだった。だが、ファルマは特殊な属性の神術使いなのだと言明する。

「つまり、メディシス教授の属性は無属性に近いということでしょうか……なるほど、教授にお手合わせいただいたとき、神術の属性が読めなかったわけです」

エメリッヒは感服した。

「でも、それなら教授以外には誰も治療ができない……」

エメリッヒの一族については、治せるかもしれない。

でも、それではだめだとエメリッヒが、一人の薬師として感じてくれればいい、とファルマは願う。

「そういうことだ。それはつまり、この病気の治療法はまだ、確立していないに等しい」

ファルマは率直に言った。

一代限りで使えなくなってしまう方法では、後世の患者を救えない。

その治療法は、科学的根拠があつて、臨床試験で評価されなければならず、他の薬師にも取り扱える必要がある。誰にでも扱える技術でなければ、治療法を打ち立てたことにはならないのだ、とファルマは説いた。

エメリツヒにも、ファルマの意図はひしひしと伝わったようだ。

「俺はこの方針が実現可能かどうか、自分で検証してみるよ。具体的には、植物や小動物を使って予備試験してみる。それで上手くいったら、次男さんに。次男さんが上手くいったら、君を含む他の家族にもやってみよう」

エメリツヒはファルマの計画を静かに聞いていた。そして、ぼんやりと天井を眺めた。

「エメリツヒ君？ どうしたの？ 話はわかった？」

エレンが、一見上の空にも思えるエメリツヒの肩をぼんぽんと叩く。話が理解できなかったのか、と問うとそうではないらしい。

「じゃあ、そういう方針でいいかな？」

ファルマが確認する。もちろん、エメリツヒの家族一人一人にも説明をして、同意を取るつもりだ。

「ありがとうございます。教授の神術と最新技術で、弟妹たちをお救いください、よろしくお願いいたします。感謝します」

エメリツヒは大きく深呼吸をして、ファルマの言葉をかみしめるように目を閉じた。

（ん？ 弟妹たちって言ったよな？ 自分は？）

ファルマはエメリツヒの言いぐさが引っかかった。

「教授、私は決めました」

「何を？」

「私の遺伝子は、治さないでください。自分でこの呪いを解いて…自分で治してみせます」

致死性家族性不眠症を含む、プリオン病の治療法を研究することに決めた。

エメリッヒはファルマの前で宣言した。

「どうして私の一族は病気になったのだろつと、ずっと考えていました」

考えても、考えても、守護神である薬神から呪われる理由が分からなかった、とエメリッヒは苦しそうに述懐する。

「でも、今、やっと分かったような気がします。あなたとの出会いを経て、この病気の治療法を完成させることが、私の守護神である薬神様からの宿題に思えてならないのです」

どこか強がりともとれる、エメリッヒの決意は固かった。

ファルマは彼の強さに驚いたが、頼もしそうに目を眇める。エレンも、そつと励ますように頷いた。

「薬神様も、見ていてくださると思うわ。そんな気がする」

エレンはそう言つて、ファルマにさりげなく視線を送る。ファルマは肩をすくめて、きまりわるそうに咳払いをし、エメリッヒを激励した。

「分かった。君の治療はしない、自分で治してみせてくれ」

「ありがとうございます！ 死にもの狂いで頑張ります！」

ファルマは恐怖に打ち勝ち、奮い立ったエメリッヒの勇気をたたえた。

「今日から、この研究室にあるものは自由に使つて研究していいからね。アデノ随伴ウイルスもあるから、改造するといいよ」

「光栄です！ ぜひご指導ください」

（俺にとっては、前世から引き継ぎの宿題だな。エメリッヒとどっちが先か、競争だ）

志を持って研究の世界に飛び込んできた人間は強靱だ、ファルマは思ふのだ。

命がけで治療法を探そうとするエメリッヒが、大きな成果を手に行けるように。

それが実現するよう指導するのが自分の役割だと、ファルマは決意を新たにす。

指導教官として、研究の支援は惜しまないつもりだ。

そしてファルマ自身も、薬神の能力に頼らない全身の遺伝子治療法を模索してゆこうとしていた。

## 5章16話 ゲノム編集技術と、薬神からの宿題（後書き）

ゲノム編集については、描写を複雑にさせないためにかなり端折って書いていますのでご注意ください。

2016年7月段階で、ゲノム編集を伴う全身遺伝子治療は動物実験まで行われています（人間にはまだ適用されていません）。

ゲノム編集ができるシステムは、他にもいくつかあります

- ・CRISPR（Clustered Regularly Interspaced Short Palindromic Repeat）/ Cas9（CRISPR Associated protein 9）：配列ガイド役のRNAと、DNA切断酵素の組み合わせ。

- ・CRISPR/Cpf1：上に同じ。切断酵素が少し違います。
- ・TALEN（Transcription Activator-Like Effector Nuclease）：ペアで働き、特定の配列を切断する人工制限酵素

- ・ZFN（Zinc-Finger Nuclease）：任意の配列を切断する人工制限酵素

アデノ随伴ウイルス

<i201187—2496>

### 【謝辞】

本項は、生物学者の meso- caccase 先生に間違いの指摘をいただきました。ありがとございました（訂正済みです）。



5章 17話 遺伝子治療とエリザベートからの呼び出し（前書き）

本日は2話あります。後半をお忘れなくお願いいたします。

## 5章17話 遺伝子治療とエリザベートからの呼び出し

次男に対する治療の前に、CRISPR/Cas9のゲノム編集による遺伝子治療システムがきちんと動物個体で働くかを確認したいファルマは、段階を踏んで検討を重ねていた。

異界の研究室から持ち帰った培養細胞のゲノムを編集することに成功した。

植物まるごとの実験も行い、黄色のバラのゲノムを書き換えて青いバラを作成した。

青いバラの花束を持て余したファルマは、エレンとロッテ、そしてゾエの三人にプレゼントした。

「え、なにこれ！ こんなバラ、見たことないわ」

「しかも、ついでに生物発光する酵素を組み込んでいるから、暗いところで見ると光るよ」

「！？ ということなの！？ バラが光る？」

三人とも、それぞれ想像を絶するプレゼントを受け取り、喜んだ。「ファルマ様！ このバラでお屋敷のお庭をいっぱいにしません？」

ロッテが興奮してそんな話もちかけるが、ファルマは首を横に振った。

「君たちに切り花をプレゼントしているのは、栽培しないでほしいからなんだ」

ファルマは、どれほど安全だといっても、遺伝子組換えをした植物を、まだ野生に出すつもりはない。

「こんなにきれいなのに。滅びゆく花をいつくしむのが、ファルマ君の美学なのかしらねえ……」

「美学じゃなくて、野生種を保護するための安全措置だよ」

エレンが残念そうにつぶやいたので、ファルマは情緒のない返答を返した。

「細胞ではできた。植物でもできた。じゃ、いよいよ動物実験いつみるか」

彼は次のステップとして、動物実験に進もうとしていた。

「動物実験ってどうやるの？ 人間にやる前に必要なこととはいえ、人間の都合でちよつと動物がかわいそうね……」

見かけによらず動物好きのエレンは、気乗りしないようだ。

本来、動物実験は専用の飼育施設で、均一の飼育環境で飼育したものを実験に使わなければならない。だが、この世界にはそんな施設もなければ、実験に適した、遺伝的に均一の動物もない。となると、ファルマとしては正常な動物個体の遺伝子を遺伝子工学で破壊し病気にするのではなく、遺伝性疾患のある動物を治療という方針で臨みたかった。

「まあね。今回はもともと遺伝性疾患を抱えている動物を治すことにするよ。俺には動物の調達ができないから、ジョセフィーヌさんに協力してもらおう」

「ああ、あの獣医の子！ 確かに、訊いてみるならあの子が適任ね」

ファルマとエレンは一級獣医にして教え子であるジョセフィーヌ・バリエを思い出した。

「そついえば今日、ちよつと講義で会うな」

ジョセフィーヌはファルマの講義に必ず出てきたので、講義の終わりにジョセフィーヌをつかまえた。ジョセフィーヌはファルマが話しかけると、分かりやすく嬉しそうにしていた。構内では常に学生に取り囲まれる人気教授のファルマと話すのは難易度が高く、ファルマから声をかけると学生は喜ぶのだ。

ファルマがジョセフィーヌの担当の患畜の中に、とある特徴を持つ動物がいるかどうかを彼女に尋ねると、

「ええ。その動物でしたらいますよ、教授。ご覧になりますか？」

ジョセフィーヌは心当たりがある、と答えた。

「宮廷の動物かよ……陛下のだったりすると、やりづらいなあ」

ファルマは予想外の展開になって、尻込みする。ジョセフィーヌとの待ち合わせ場所は、宮廷の大厩舎だった。

エレン、エメリツヒは宮廷には入れないので同行できず、宮廷に入れるロッテが、ちょうど工房に用があるというのでついてきた。

大厩舎は美しく清潔に管理され、馬房は高級ホテルの個室のようだ。馬までセレブなんだな、とファルマは思う。

「お馬さんたち、いいところに住んでますね。人間用の宿屋だといわれても分からないです」

ロッテは、面食らってファルマに耳打ちした。ファルマとロッテが大厩舎を歩いていると、熱心に馬の診察をするジョセフィーヌの姿を見つけた。声をかけ、そのまま彼女の仕事を見学することにする。

「ジョセフィーヌさんは宮廷にも出入りしてたんですね」

「はい、私は宮廷獣医ではないので専属ではありませんが、大厩舎の御馬の診察も私の仕事です」

帝室の紋章の入った獣医専用診療衣のガウンを羽織り、羽根帽子をかぶったジョセフィーヌは、馬をいとおしそに撫でながらファルマに応じる。宮廷では三百頭あまりの馬が飼育されているので、宮廷獣医だけでは常に管理の人手が足りないのだという。

「教授、こちらです」

ジョセフィーヌは、ひときわ立派な馬房に案内する。黄金の毛並みをした馬が、顔をのぞかせていた。

「立派なお馬ですねー。メディシス家のお屋敷の御馬も立派ですけど、この子は毛づやが金色で凄いです。こっ、育ちがいい感じがしますー！」

ロッテはうつとりとため息を漏らす。毛づやがよく見えるのは、丁寧にブラッシングされているからだ。

「そうですね。皇帝陛下の御馬ですよ」

ロッテとファルマは慌てて手をひっこめた。まかり間違って傷つ

けたりしては大変だ。ジョセフィーヌは女帝の馬の血統を二人に説明してくれる。

「エリザベート皇帝陛下の御馬は古フルーラ原産で、失われた古いポリノー血統の馬種と交配させることにより誕生しました。整った小さな頭、長い耳と細身の体をしていまして、長い毛も美しく気品があり、非常に機敏ですがそれでいて馬体は頑健。しかし、一つだけ難点がありまして、気位が高いのです。たった一人の主人にしか懐かないと言われています。獣医もなかなか診察をさせてくれません」

ファルマは馬には詳しくなかったが、さすが皇帝の馬だけあって、素人目に見ても秀麗だった。女帝の馬は、知らない顔を見たからか不機嫌そうにいないでいた。

「気難しいので、後ろ足で蹴られて骨折をしないようにいつもひやひやしていますわ」

ジョセフィーヌは、こつぴどく蹴られたのを思い出したらしく、語気をすばめた。大変な仕事だな、とファルマは彼女の苦勞をしのぶ。

「結構、獣医さんでも動物にやられて怪我とかするんですか？」

ジョセフィーヌは「それは、もう！」と大きく頷く。

「危険な動物に対するときは防御の神術を使っているのですが、それでも、やられるときはやられます。咬傷が一番多いですね」

ファルマが、手袋を脱いだジョセフィーヌの手を見せてもらうと、傷だらけだった。

「わあ……ジョセフィーヌ先生、尊敬します」

ロッテが、痛ましそうな顔をする。

「よく効く傷用の軟膏、出しましょうか。すぐ治りますよ」

ファルマが念のために治療をしようかと聞くと、このくらいは自分で治せます、とジョセフィーヌは恥ずかしそうに笑った。

「話がずれてしまいましたが、教授にお見せしたいのが、こちらで

す」

ジョセフィーヌは皇帝の馬と同じ馬房にいた、純白の仔馬をファルマに見せる。

「わあ、真っ白です！」

ロツテがは純白の毛並みを見てそのあまりの美しさに溜息をもらす。その馬こそが、ファルマが探していた動物だった。  
(なるほど、確かにアルビノだ)

”先天性白皮症”

ファルマが診眼で診ると、間違いなく先天性白皮症(通称アルビノ)だった。そして、大きな赤い目は弱視のようである。

「この馬の視力はどうです? どこにもぶつからずに速く走れますか?」

「この子は視力は殆どないようなのです。こういう仔の視力は、獣医では治せません」

ジョセフィーヌも、弱視には気づいていたようだった。

「ついでに言うと、皮膚がんにもなりやすいです。この馬、大学で治療をしたいんだけどここから連れ出すのはまずいですよね」

「宮廷の御馬は、外に出してはいけませんね」

「わかりました、では通います」

ファルマは翌日から、CRISPR/Cas9システムを準備してきて、体重をはかり、適用量を決めて宮廷の厩舎で仔馬の全身遺伝子治療にあたった。副作用を警戒しながら、ゲノム編集治療を体の各パーツごとに、今日は前脚、今日は後脚、などと様子を見ながら部分的に行っていた。この処置は、ファルマの手が生体を透過することを利用して細胞に遺伝子導入をしているので、痛みなどは全く与えない。

そして全ての処置から一週間が経過した。

ファルマは診眼を使って状態をモニターしていたが、患畜は元氣だ。毎日通っていたのでなつかれた。

宮殿に入れないエレンやエメリツヒにも、ファルマは毎日状態を伝えた。エメリツヒは特に、事細かにメモを取ってファルマに様子を聞いていた。

ジョセフィーヌも仕事熱心で、大学の講義を受ける傍ら毎日馬房にやってきて、処置を施した仔馬の診察を怠らない。暫くして、ジョセフィーヌは赤みがかっていた馬の目の色が藍色になっていることと、栗毛色の体毛が生え始めていることに気付いた。

「教授、どうして眼と体毛の色が変わってしまったのですか？そして、弱視も改善されています」

ジョセフィーヌが馬を走らせてみると、以前よりよく走り、障害があってもぶつからない。

ファルマはそのからくりを説明する。

「この仔馬はメラニンという色素を合成するためのチロシナーゼという遺伝子が生まれつき機能していなかったんですが、その機能を戻す操作をしてやりました。それで、眼を含む全身の色素が作られ始めています。冬毛になる頃には、白ではなく本来の毛色に生え変わると思います」

ここまできても、副作用は深刻なものを出ていない。

この治療でもっとも懸念される副作用は発がんだが、ファルマとジョセフィーヌがフォロアップを行うことによりカバーできる。

「メデイシス教授、いったいこの子にどんな薬を使っただんです？

こんなことができる薬って……」

「三年生になったら専門科目の授業でやりましょう。それに、この治療も試験段階ですし」

「承知しました。まだ確立していない治療法ということですね」

ジョセフィーヌは納得して、熱心にメモを取っていた。ジョセフィーヌの課外実習授業となったようだった。

「ファルマ師。こちらにいらっしやいましたか、陛下がお呼びです」  
その日、女帝の側近が息を切らせながらファルマを呼びに来た。  
ファルマが来たと聞いて、女帝は探していたらしい。

ファルマが呼び出された場所は、広い庭のはずれにある神術訓練用の宮廷闘技場だった。

隔壁生成用神術陣が敷かれた立派なスタジアムである。ファルマも施設の存在は知っていたが、秘密の場所で、近づくのを許されたのは初めてだ。ここは普段、女帝が日々の鍛錬に使っている闘技場だという。神術陣も、帝国医薬大のそれとは比較にならないほど頑強だ。

（陛下は神術訓練中なのかな？）

そんなことを思いながら待っていると、闘技場の中から軽装の女帝が杖を握り姿を現した。華美な衣装を身にまとっていることが多いので、ぴったりとして露出の高いミニス力的な衣装は、ファルマには新鮮に見えた。

ファルマは闘技場の入り口前で、落ち着いて立礼をする。

「陛下におかれましては、ご機嫌麗しく」

「うむ、久しぶりだな、ファルマよ。達者にしておったか、そなたが最近、ここそ宮殿に出入りしとるという話を聞いて、顔を出すのを待ち構えておったのだ」

饒舌に話す女帝は、機嫌がよさそうだった。

息がはずんで額に汗が浮いていることから、どうやら、闘技場で軽く神術訓練を済ませてきたようである。体を動かせば気分が高揚するあたり、わかりやすい性格だな、とファルマは内心想った。

「陛下。御礼が遅れましたが、弊学部に研究資金の援助をありがとうございました」

「うむ、礼状は届いておるしそれはよい。それより、話しておきたいことがある」



「何でございましょう」

「場所を移そう」

聞かれると都合が悪い話なのかな、と予測しつつ、ファルマは女帝に追従する。

「は、承知いたしました」

女帝の数歩後ろに控え、ファルマは闘技場の中へ入ってゆく彼女の後を追う。女帝は思い出したように話題を振った。

「ときにファルマよ、別件だが嫁選びは捗っておるか」

「今は何かと多忙でございしますので、しばし猶予をいただきたく」  
ファルマの歩みがぎくしゃくとしはじめた。今、一番振られたくない話題だ。

「そなたはいつ多忙でなくなるのだ？ ん？ 死ぬまでそうやって働いておるのだろう」

もつともな指摘に、ファルマは愛想笑いを浮かべた。

「以前にも申し上げました通り、私は普通の人間ではありません。女性を伴侶にしますと、悪影響を及ぼさないともしれません。暫く保留にしていただければと」

そんな言い訳を繰り返している間に、女帝は広い石造りの闘技場の舞台に上がり、中央に進んで杖を抜いていた。杖を抜いたことにより反応した神術陣が、舞台に幾何学的な紋様を浮かび上がらせる。土属性術師の施した、石舞台を強化する神術の一種だろう。

「たまにはよかろう、相手になれ」

気が付けば、先ほどまで彼女に付き随っていた側近の姿はない。いつの間にか、人払いがされている。

「陛下のお相手、と申しますと」

（まさか……お相手って、神術戦闘かよ。陛下と？）

「杖を抜け」

そうきたか、とファルマは困り果てた。

帝国最強の神術使いが相手だ、どうなるものか、想像を超えていた。

## 5章18話 エリザベートからの、とある打診

女帝は帝杖と呼ばれる高位神術使い御用達の杖を抜き、闘技場の舞台の上でファルマを待ち受ける。

「一度、そなたと手合わせを試みたのだが、いつも逃げられてのう。今日は逃がすつもりはない、諦めて付き合え」

「私にお話があったのであれば、先にそちらをお聞かせ願いたく」  
何とか戦闘を回避できないかとファルマは話題をそらすとするが、女帝は「急ぎの話ではないぞ」としらばくれてみせた。

肉体言語での話が先、というわけだ。

（でも、陛下が怪我したら俺の首も飛ぶんじゃないか？）

この場で何が起こっても、ファルマが皇帝を暗殺したのではない、と誰も証明できる者がいないのだ。

殺すつもりもないが、まかり間違つてということはある。

皇帝暗殺の嫌疑だけはごめんだ。

「今は、杖の持ち合わせがありません」

「腰に佩いている杖は飾りか？」

女帝は意地悪く微笑みながら薬神杖を指さす。女帝は、薬神杖が秘宝であることを知っていた。

「ええ、これは戦闘用ではありませんので。では、承知しました。お相手しましょう」

ファルマは薬神杖を杖帯ごと足元に置くと、大きくジャンプをし、宙がえりを打ってふわりと舞台に降り立った。

秘宝である職員証は、肌身離さずポケットに入れている。  
ファルマの体全体に、浮力が働いていることを確認しながら。

「ふん、素手か。まあいい、お相手願おう」

「お手柔らかにお願いします」

どちらからともなく、神術戦闘が始まった。

「火神の加護（Protection de Dieu de feu）」

神力を具現化した明るい炎が、帝杖からひらめき立ち昇り、女帝の体を包みこむ。

この神技をファルマが見るのは初めてだが、知っていた。「私は使えませんが、熱を感じなくなり、息がしやすくなる術です」、と同じ属性のメロディに聞いたことがあったからだ。

強力な火炎神術の使い手は、付近一帯の酸素を使いつくして酸欠になる。

そこで結界のようなもので酸素ドームを作って、自身の活動を担保しているのかもしれない。

というのはファルマがメロディの話を聞いて想像するところだ。

続いて女帝は杖を流れるような軌跡で不規則に振り、一段階目の発動詠唱を鋭く唱えると、杖の先をぐりと宙で回転させた。ファルマの強化された視力が、杖の先端に種火となる危険な兆候をとらえる。

「灼熱地獄（Roussissement de l'enfer）」

二段階詠唱で、女帝は火神の加護の適応領域を変え、酸素を放つ。そして次の瞬間、ファルマの足場となっている石舞台を火炎の海へと変えた。

（酸素を下に放ったな。フラッシュオーバーを利用した神技か！）  
猛烈な火力の神力を含んだ業火は、瞬時にして獲物を溶岩の海に飲み込むかのように爆発的に拡散する。

これにはファルマもたまらず、職員証の浮力を使い、氷板で空中に足場を作ってもう一段跳躍し上空へ回避する。

（うわ熱っ……やるな、陛下。下に降りられないぞ）

術者を守るかのように、女帝の周囲だけ炎は円状に鎮火している。女帝は燃焼反応の開始と継続方法を熟知しているようだった。

ファルマは右手をかざし、射程を定め次手を打つ。

（液体窒素生成）

地上の炎を舐めるように、白煙が上がった。

舞台付近を液体窒素で無酸素状態にして鎮火させたかに見えたが、女帝の神炎は耐えて、まだ燃え残った。

次にファルマは消去の能力を使う。

（目標範囲の窒素を消去）

消去しておかなければ、女帝が酸欠で昏倒するからだ。

女帝は、空へ跳んで不自然なほど長く滞空しているファルマを、どこか嗜虐的な表情で見上げた。

「やはりそうか。そなた、飛翔できるのだな」

ファルマは舞台の上に分厚い氷板を出現させ、熱量を神力で潰して炎を蹂躪し、氷上に音もなく着地した。

「飛翔ではなく、これは跳躍でございます」

「ぬけぬけと」

彼女が水平に構えた杖に力をこめると、彼女の周囲に数百個もの灼熱の火球が展開される。

それらは異空間から生じて成長し、大気を灼けつかせていた。

火災旋風が女帝の熱っぽくほてった頬をさらに赤らめさせ、乱れ

た美しい銀髪を煽っていた。

「無尽の神炎（Infini flame）」

女帝は杖を天に掲げ、まっすぐファルマを示す。

彼女の掌握する炎に、一つ一つ、座標を教え込むように。

「ゆけ！」

放たれた火球を、ファルマは空中に生成した氷の防壁で相殺する。火球はくすぶって、軌道を変え、蒸発して消えた。ファルマが攻撃をさばく間にも、油断なくみ上げられた多段の攻撃が発動する。火炎の矢、灼熱の竜巻、天から降る火柱など。

ファルマは、女帝が秘めていた帝王の神技ともいえる芸術に圧倒された。しかも女帝の神力は殆ど減っていない。余力を残し、大技を繰り出す隙をうかがっているようなのだ。

（なんか隠してるな）

ファルマが警戒を強めたそのとき。途切れることなく多彩な数手を放った女帝は、少しずつ編み上げていた長詠唱を完成させた。

力強い発動詠唱が、ファルマの耳を打つ。

「不死鳥降臨（Venue du Phoenix）」

女帝の杖から生じた火炎が唸りをあげ、逆巻き、一つの形を成してゆく。

女帝は、天より巨大な不死鳥を召喚したかに見えた。

この神技には、さすがのファルマも恐怖を呼び起こされる。

（こんな火炎術、見たことないぞ……）

ファルマは両手を突き出し、左手で氷の防壁を張り、右手で真空をつくる。

「そなたの真の姿を見せてみよ！」

神術によって不死鳥のように具現化した白い火炎。

それは偏光し、稲妻のように輝きを強め、不死鳥となってファルマに襲い掛かる。

ファルマは意志を持った炎に防壁を剥がされ突破される直前、拳を神力で念入りに固め、不死鳥の懷に飛び込んだ。

神力と神力がぶつかりあう。

それによって、神力の出力が爆発的に高まり闘技場を震わせる。

神術陣でも抑えきれない神力だまりが大気に渦を巻き、嵐を呼び豪雨を降らせた。

それはさながら、世界の終焉を予感させる、竜のごとき黒雲を生じさせた。

女帝はこれほど強大な神力だまりをその目で見ても怯まない、まさに女傑だった。

「これが……神の力か……素晴らしい」

エリザベートは恍惚とした。

遠慮もなく最大出力で挑んでいたエリザベートの神力が尽き、ファルマとの神力の力比べに競り負けた。

不死鳥は形を失い虚ろとなって、カウンターで放たれたファルマからの衝撃波が術者であるエリザベートに返ってきた。エリザベートの体は宙に舞い、石舞台にしたたかに打ち付けられた。

神術陣が反応し、多少女帝にかかる衝撃を和らげるが、ファルマの神力を吸収しきれない。

「ぐああっ！」

「陛下！」

ファルマははっと我に返り、神力を発散させ、倒れ伏したエリザ

ベートに駆け寄る。

不死鳥との対峙で、手加減がきかなかったのだ。

ファルマは両腕の包帯を解く。強力な呪符が、薬神紋から立ち上る神炎で焼け落ちる。

それをぼんやりと見ていたエリザベートの唇から、押し殺したような笑いが零れる。

「はは……そなた、呪符で神力を封印していたのか……」

「動かないください。多臓器にわたって出血をしているようです」  
ファルマが女帝の手に自らの手を重ねると、腕の聖紋から神力が溢れ、優しく彼女の体を覆って浸透し、みるまに傷を癒してゆく。

異界の研究室を往来することによって彼の体に強制的に蓄積された神力は、明らかに彼の能力を飛躍的に強化させていた。処置を終えると、女帝はぐったりとうなだれて座り込んでいた。

「あの、まだどこか痛みますか？」

「どこも痛まんよ、さすがの治癒術だ。強いて付き合わせて悪かった。それにしても、喉が渴くな」

女帝はさりげなくファルマの左手を取って口元に近づけ、口を大きく開く。

「陛下？ こ、これは……」

「察しが悪いな、喉が渴いたと言っておる」

（蛇口がわりかよ、俺の手は）

苦笑しながら、ファルマは文句も言わず冷たい生成水を女帝に供する。

喉を潤すと、彼女はファルマに向き直った。

「さて、ここからが本題だがファルマよ。わがサン・フルーヴ帝国は、神聖国の支配から独立しようと思う」

「えっ……」

ファルマは、神殿との決別ともとれる女帝の言葉に戸惑い、絶句



した。

「大神殿中枢部の横暴にはもう我慢がならぬ、神殿の教義を逸脱しておる」

大神殿の不穏な動きとファルマへの襲撃は、女帝にも逐次報告がいつている、というのはファルマも薄々知っていた。

「不遜にも守護神を捕らえ大神殿に封印し、消滅するまで神力を奪いつくそうなどと奸計を企てているそうだな。そなたも何度が襲撃を受けたとか。何事もなかったからよかったようなものの……」

女帝の言う襲撃とはジュリアナとの一件も含んでいるので、ファルマとしてはあまり事を荒立てたくはなかった。

「私は、気にしていませんが。それに、今は襲撃も落ち着いていきますし」

ファルマは、意に介していないといった態度を貫いた。帝国と神聖国が全面戦争になってしまえば、大勢の犠牲が出る。平和なサン・フルーヴ帝国がファルマのために戦火の渦に巻き込まれるのは、あってはならない、ファルマはそう思う。

「大神殿と争えば、この帝国全土の神術使いの神術が使えなくなります。それは、国益を大きく損なうのではないでしょうか」

「それでだ。わが帝国で、それを可能とする新教を創始させようと思っただが、どうだ」

意表をつく流れに、ファルマは眉をひそめる。宗教が絡むと、警戒心が先に立つ。

（旧神殿組織から新宗教を分派させようってのか。どっかで見た流れだな、宗教改革か）

女帝は新教の教義を語る。

「守護神を敬い、守護神と共存する新たな教えをな。神脈開閉の神術は、大神殿ではなく守護神を敬うサロモンやジュリアナ、そして心身ともに適性のある者の手で管理する。大神殿の秘儀の独占を崩

すのだ。さすれば、大神殿の一方的な支配を断ち切ることができよう」

ファルマは、女帝の決意が固いことを受け止めた。そして、サロモンたちとも長い間協議を重ねていたであろうことも、言外に察した。

「ですが、そんなことをなされば、陛下の御身も危ういのでは」

それというのも、大神殿が世界最強の神術使いを見出し、皇帝として育て、帝位を与えることになっている。

その大神殿をサン・フルーヴ帝国が裏切れば、最悪、エリザベトは皇帝の権威も地位も失うことになり、サン・フルーヴ帝国の帝政は終わる。

不安定化するであろう国内情勢。クーデターが起きないとも限らない。

平和な帝都は一変する。

「あらゆる可能性を考慮したうえのことだ。して、どう思う」

「私の意見を聞いておられるのですか？」

ファルマはにっこりと微笑んだ。

「むろん、そなたありきだ。守護神を崇め、守護神からの恵みである神力を授かり、志を持って神術を行使し人々を救済するという新教だからな。そなたの忌憚のない意見を聞かせてほしい」

女帝も優雅な笑顔を返す。

「賛同いたしかねます。断固として。陛下のお気持ちは分かりますが」

「やれやれ。そなたはサロモンの言う通り、守護神となるつもりはないのだな。しかし余は、守護神として人前に出てふるまうように依頼したつもりはないのだぞ。人前に姿を見せず、名を伏せて君臨していてもらってよい。必要なのは、守護神を擁する新教である。という大義なのだからな」

「ただの薬師では、いさせてもらえませんか？」

ファルマはやるせなさど、わが身の仄ならなさを感じながら、思いのたけを伝えた。

「人として、私の目の届く限りの人を助けたいと思っています。でも、それ以上の立ち回りを求められても、こたえられません……私は、人間なんです。陛下にはそう見えないかもしれませんが」

ファルマは心の底から人間のつもりでいるので、人々の信仰の対象になりたくもなければ、その思いを受け止められない。

ましてや、形式的にでも守護神として崇拜の対象になれなど、限度を超している。

その一方で女帝が、ファルマの身の安全を保証し、歴代の守護神と、未来の守護神の尊厳と自由を守るために新宗教を創設しようとしてくれているのも理解はできた。女帝は徹底してファルマの味方なのだ。それだけは、心に留めておく。

「ご高配、ありがとうございました。神聖国とは近いうちに、和解の道を探ります」

ファルマの複雑な思いが伝わったのだろうか。

女帝は、「意に添わぬことをしてすまなかった」とわびて、提案を留保した。

ただし大神殿との有事に備えて、神脈を掌握でき、信頼できる聖職者は育成しておく、ということだけは取り下げなかった。

## 5章19話 全身遺伝子治療と、医薬分業への前進

ファルマと女帝は闘技場をあとにし宮殿に戻り、汗をかいただろうということで沐浴に誘われた。

ファルマは男性客人用の沐浴室に案内されほっとしたもの、何故か沐浴のお世話係が全員年頃の美少女ばかりがあてがわれ、ファルマは女帝の画策を思い知る。

「ファルマ様、お体を洗わせていただきますわ。きつとお体がほぐれますわよ」

「いいえ、私がご奉仕させていただきますわ。わっ、この腕の模様が聖紋ですよ？」

「ああっ、ファルマ様、なんて素敵なお方。私と、いいことしません？」

露出度の高い衣装を纏った美少女たちが競い合うようにファルマに奉仕してくれようとするが、必死さを感じたので、

「いえ、あの、前は自分で洗いますので。背中なら、はい」

と、前かがみになって性的サービスをブロックしていた。

（こんなところで嫁探しさせないでくれよ陛下……って）

「うわっ！？ あーはっはっは、ちょ、やめてくだ……ひゃーっひゃっ」

ファルマは脇をくすぐられてキャラ崩壊していた。

精神的に疲れ果てたファルマがやっとのことで一時間の沐浴から解放してもらくと、女帝はジュリアナにマッサージをさせながらファルマを待っていた。傍らにはサロモンが侍っている。

「陛下の差し金ですか？ あの女の子たちは？」

余計なお世話極まりなかった、とファルマは憤慨する。だいたい、こうやって強制お見合いをされても、困るだけだ。

「あの者どもはしつかり務めを果たしたかの？ そなたもしつかり物色したか？」

女帝は完全にお見合いおばさんと化していた、おばさんという歳でもないの、お見合いお姉さん、とファルマは一応気遣う。

「あんな無防備な場で、いい雰囲気になどなりませんってば」

口のきき方が不敬かもしれないが、ファルマは立腹していた。

「ふむ、茶でも飲むか」

ジュリアナのマッサージを終えた女帝が、ファルマを茶会の席に誘う。

「ですから、ああいうのは困りますから……」

「むう、あれで反応せぬとは男ではないぞ！ そなた、男子としての発達がおもしろくないのではあるまいな！ どれ、余が確認を……」

女帝の逆セクハラにたじたじになるファルマを見かねたサロモンが、咳払いをして助け船を出した。ファルマは女帝に襲われかけたところで救出された。

「陛下。ところでファルマ様は、新教の創立と守護神としての擁立には、断固反対されましたでしょうか」

「うむ。手厳しいな」

女帝は言い返す言葉もない。

闘技場を包む積乱雲と巨大な神力だまりの発生をみて、サロモンは予想できたと言う。ファルマは、ただ反対したのではないと補足した。

「陛下のお気持ちは有り難いです。ですがおそれながら、ご期待に沿えそうにはありません。新教の創立は神聖国への反逆と決別を意味します。神聖国が周辺諸国に、反逆国として討伐を命じれば、平和なサン・フルーヴ帝国は今のままではいられません。神聖国との和解の道を探すべきかと」

「ファルマ様はそういうお方なのです、陛下。ご自身にふりかかる危険より、民のことを思われる御方です」

サロモンがファルマを代弁して、女帝に告げる。ジュリアナも、どこかほっとしたようにファルマを見てほほ笑んだ。

「自分は守護神ではないと否定されては、処置なしだ。ファルマとは初めて試合ったが、人外の神力を秘め、神力の底が存在しないようだ、この余が久しぶりに、闘いの中で恐怖というものを覚えたぞ。できれば毎日、そなたと試合したいものだ」

「お断りします。先ほど、私は意図せず陛下を傷つけてしまいました。幸い神力で治癒できましたが……次はどうなるか分かりません」  
聖泉から戻ったファルマは、損傷した組織の修復すら、神力を注ぐことでできるようになった。

だが、力の制御がきかなくなっている自覚があり、いつ手を滑らせて即死攻撃などを発してしまいかねない。

その後の展開は、考えたくもなかった。

いつ暴走するとも知れない爆弾を抱えたまま、ファルマは綱渡りで日常生活を送っている状態である。

「いつそ、神聖国に行つて”鎧の歯車”に余った神力を吸わせてこようかとも」

「ファルマ様。それは……まずいのではないかと」

その一言を聞いたサロモンが、懸念の色を示した。女帝も同様だ。「何を申しておるか、神聖国の思う壺ではないか。それに”世界を維持する鎧の歯車”なる装置など、あるといえるのか？ 実は存在せず、ただ守護神をおびき寄せ神力を奪うための口実かもしれん」

それを聞いていたジュリアナが、おずおずと一言挟んだ。

「わ、私の知る限り、鎧の歯車という装置は実在します。ただ、以前ファルマ様が神力を分けてくださったおかげで、歯車は二百年はもちます。喫緊の問題ではありません」

ジュリアナは大神官ピウスの動向を知る元枢機神官だ。

「ジュリアナやほかの枢機神官どもも、騙されておるのかもしれないぞ。目撃したのではないのだろう？」

女帝は”鎧の歯車”の話すらうのみにしない、慎重にも慎重だった

た。

普段の向こう見ずで豪快な気質だけが彼女のすべてではないと、ファルマは女帝の新たな一面に気付かされる。

「確かに、人間の目で見えるものではないようです」

ジュリアナは、鎧の歯車を目視できる方法がないことをみとめ語気をすばめる。

ファルマは、ジュリアナをフォローしながら女帝に言葉を返す。

「神聖国が私を略取しようとしていることは知っていますが、私は以前より神力が強くなっていて、日常生活を送るにも困っています。神力を大規模に消費すれば落ち着くと思いますが、そんな場も殆どありませんし、使わないので体に溜まる一方です」

正直、発散できるものなら一度発散してしまいたいぐらいだった。「ですから、神聖国の地下にあるという鎧の歯車に直接神力を注いでくるというのは、双方にとってメリットがあります」

神聖国がファルマを狙う目的を潰すのを兼ねて、鎧の歯車に神力をくれてやる。それ以外に、常識的な方法で神力を減らすことができそうにない。必ず破壊行為を伴ってしまう。

唯一神力を大量消費できそうな方法、大規模な疫滅聖域を連発すれば多少は神力が減るかも、とも考えたが、疫滅聖域そのものが微生物を殺す環境破壊行為の一種なのだ。

疫病も発生していないのに、むやみやたらに使っわけにもいい。い。

（最終手段としては、宇宙の果てに向けて神力ぶっ放すことだけど、それこそ神力の無駄使いになるしな）

というわけで、有意義に神力を消費、となると鎧の歯車を利用するのが手っ取り早い。

「まず、鎧の歯車というものが何なのか、自分で確かめたいと思います」

「それは危険だ。例えば、その装置とやらが外部から神力を注げるものではなく、守護神を喰らってすり潰すようなものだった場合は

どうする、行けば運の尽きだ」

女帝が首を振る。遠くから観察して、いかにも危なそうなら、近づかない、ファルマとしてはそういうスタンスで臨もうとしていたが、女帝はファルマが一人で近づくのを許してはくれなかった。

「それならば余も同行する。ピウスとの会談も兼ねてな。日程を調整させよう」

（女帝と大神官の会談か……波乱が起こりそう）

和やかにはいきそうにないな、と予見するファルマだった。

女帝が神聖国へ会談を申し入れ、日程調整の結果、ファルマの神聖国行きは翌月に決まった。

神聖国行きを前にファルマは、気にかけていることがある。

（神聖国で何があるかわからないし、せめてエメリツヒ一族の遺伝子治療の決着をつけておきたいよな）

その後も遺伝性疾患を抱えた動物モデルで、ファルマの遺伝子治療は数件、成功していた。

予定を早めて、いよいよ人に対しての治療に進む。

臨床試験に進むには日本では国の審査委員会などを通すものだが、サン・フルーヴ帝国にはそのようなものはない。

そこで、ファルマは女帝と侍医、宮廷薬師らにデータを示し、認可を得ようとした。

エリザベート臨席の第一回倫理審査御前会議の約束を取り付け、ファルマにしか使えないという治療法、他の薬師や侍医たちはどう説明したのか頭を悩ませていたところ、エレンがひらめいた。

「ねえ、もしかして秘宝を使って投与すればいいんじゃないの？

ファルマ君の手もだけど、秘宝も人体を透けるでしょ？」

ファルマの治療法は、ファルマにしかできないと勘違いしていたが、秘宝を使えば誰でもできるという。

「人間には秘宝を持てないかもしれないけど、無機物で包むなどし



て持ち方を工夫すれば持てないこともないわ。それを使えば、人体を透過させて全身に満遍なく薬を投与できるし、誰にでもできるんじゃないの？」

と、エレンは説明する。ファルマの思いつかなかったアイデアだったので、エレンに感謝した。

「私はファルマ君みたいに薬は思いつかないけれど、こういうことで役に立てるなら、よかったわ」

エレンは神術と組み合わせた治療法を考えるのが得意なようだ。

「道が開けそうだよ、エレン」

エレンのアイデアを含めて御前会議でプレゼンをしたところ、侍医や宮廷薬師たちから疑問を呈されることもなく、すんなり通った。CRISPR/Cas9システムの説明を始めたところで、彼らの半分は既についていけなくなっただのも一因したかもしれない。

しかしクロードとブリュノ、そして帝国医薬大学校でファルマの授業を聴講していた医師、薬師たちは、システムを理解すると喝采した。御前会議の終わりに、クロードがファルマに質問を投げかける。

「私も今後、患者の治療に君の薬を使わせてもらっていいか。どうやって薬を調合すればいい？」

ファルマが医師からそんな申し出を受けたのは、初めてだった。同席した医師や薬師たちも、クロードに同調して頷いている者がいる。

宮廷薬師のフランソワーズ・ド・サヴォワもその一人だったが、彼女は懸念を示した。

「かといって、私たちに取り扱えるものなのでしょうか。よく効く薬は、調合を間違えれば、危険なものです」

フランソワーズは、薬学体系が違うことから、ファルマの新薬に簡単に手を出せるとは考えていないらしい。ファルマも、調剤薬局ギルドの扱う、重大な副作用のない市販薬ならともかく、経験と知識のない者に高度な専門性を要する現代医薬品の調剤を任せるつも

りはない。それが侍医だろうと、宮廷薬師だろうと。

「今、帝国医薬大学校で、新薬を取り扱える専門家を養成中です。最初の卒業生が出るまで、数年かかります。ですが、そういうときは……」

そこでファルマは、新薬を取り扱うための、シンプルな手続きを教えた。

御前会議で遺伝子治療の許可の出た数日後、いよいよ治療に急を要する次男オイゲンの遺伝子治療にとりかかることになった。処置は、大学ではなく処置室のある薬局で行う。

「こんにちは、今日はよろしくお願いいたします」

当事者の兄であるエメリッヒは弟オイゲンを連れて、ファルマの指定した時間に異世界薬局にやって来た。

「私たちも付き添いで来ました」

にぎやかない声がして、ロッテに似た妹たちもわらわらと一緒についてきた。

いつものように接客に出たロッテは、改めてファルマに彼らを紹介され、戸惑っていた。

「ちよつとまってくださいね、この方々と血がつながっているってファルマ様。おっしゃる意味が……」

ロッテの口が、ぼかんとだらしく開いている。

「つまり私たち、親族なんですって。はじめまして、ね」

妹たちはロッテと握手をし、対面を喜ぶ。

「でも私、平民ですけど！　ですけど！　？　どうして貴族の方と血縁が？」

「ああ、それは色々あってね……」

ファルマは、話がこじれないよう横から事情を説明をする。

ロッテは、神力を失って平民となった元貴族の末裔だと知り、驚いていた。

「みなさん、何の属性の神術使いなんですか？ 親類ということも、もしかして、私も頑張れば神術が使えるりするんでしょうか？」

ロツテは興奮し、好奇心がとまらないが、根本的に勘違いをしているようだったので、姉がロツテに教えてくれる。

「私たち兄妹の属性は全員、水か風のどちらよ。神力は生まれながらに持っているものだから、神脈がないのならあなたは無理ね、お気の毒さま」

ロツテは少し残念そうな顔をしたあと、いつもの元氣を取り戻す。立ち直りの早い娘だった。

「そ、そうですね。なんだか不思議な気分です。私、シャルロツトと申します！ 皆さまのお名前を伺ってもよろしいですか？」

兄弟姉妹のいないロツテは、いきなり兄や姉ができたように思えたらしく、嬉しそうに微笑む。

「遠い異国の地で、私たちの親族にこうして偶然に会えるなんて嬉しいわ！」

「私もです〜！」

（あー、女性陣、みんな声が似てる）

同じようなトーンの声が、薬局内にきゅきゅと響き渡る。

ロツテ成分三倍でにぎやかこの上ないな、とファルマも微笑ましい。話が盛り上がって一オクターブほど声が高くなると、途中から誰がしゃべっているのかファルマには聞き分けられなくなった。

彼女らは何やら真剣そうに話し込んでいたが、ファルマが聞き耳を立ててみると、

「今度、皆で美味しいお菓子を食べに行きましょうよ」

「とっても美味しいクグロフの専門店を、帝都で見つけましたのよ。すっかり気に入って」

「ええっ、どこにあるお店なんです？ 気になります！ 初耳です！」

すっかりスイーツ談義で意気投合していた。

（やっぱりそうだったかよ……）

ある意味想定範囲内、スイーツ好きは一族の血なのかもしれない、とファルマは思いながら、本題に入る。

「では、皆さん歓談しながら一階で待っててくださいね。行きましよう、オイゲンさん」

「先生、よろしく願います」

エメリツヒと彼女らを一階に残し、ファルマはエレンと一緒に、オイゲンを連れ二階の処置室に入る。

「さあ、オイゲンさん、その台の上に寝転んでください」

「おねがいします」

オイゲンは冷や汗をふきながら、ベッドに横たわる。緊張して体が硬くなっているようだ。オイゲンはいかにもな虚弱系の体格で、まだ死病を発症していないのに既に病んでいる雰囲気だった。

一族にふりかかる「薬神の呪い」と、逃れえない死を日常生活では忘れて意識しない者もいれば、四六時中悩まされて、精神的にまいつている者もいる。

オイゲンは後者のようだった。

（オイゲンさん、完治したら病氣のことに煩わされなくなって、元気になるといいな）

「では気持ちを楽にしてくださいね。神術の光で目を傷めるといけないので、目隠しをしますよ」

仰向けになったオイゲンに、エレンが適当な説明をつけながらアイマスクをした。

「ところでまだ、不眠症の症状は出ていないのですよね？」

ファルマが治療前に症状を確認する。

「はい、まだ出ていません、よく眠れます。体が少し、ほてるような感じはありますが……まさかこれは初期症状でしょうか？」

「そうかもしれませんがね。でも、違うにしても治療を早く始めるに越したことはありません。発症しなければ、神経細胞の破壊が最小限で済みますからね」

「そうですね、やはり今日やっていただいでよかったです」

オイゲンは覚悟ができたようだった。

「これからの処置に痛みはないと思いますが、違和感を覚えたら言  
って下さい、すぐに中止しますから」

手洗いを終えたファルマが、オイゲンに伝える。

「お願いします」

ファルマは手始めに、診眼を使ってオイゲンの体を診た。

既に致死性家族性不眠症を発病してしまった彼の全身が、ほんの  
り赤く見える。

赤い光は、治療不能な疾患であることを意味していた。

（うわ、赤いぞ。前は光が診えなかったのに、進行が早いな。早く  
治してしまわないと）

放っておけば、あと一年そこそこでオイゲンの死は不可避となる。  
そして、これ以上進行して神経細胞が破壊されきった後では、さ  
らに神経細胞の再生という、困難きわまるステップを踏まなければ  
ならなくなる。

まだ、オイゲンの神経細胞は無事で、彼も不眠になっていない。  
絶妙のタイミングだった。

（一日でも遅らせることはできない、薬の準備はできた。発症する  
前に治す。今日、決行だ！）

ファルマは、地球では未踏の一手で不可能を乗り越えようとして  
いた。

チート能力と地球の医薬の相乗効果で、全身遺伝子治療が可能に  
なったのだ。

ファルマは躊躇を振り切ると、オイゲンの服の上から、格子状に  
区画を書き番地をマーキングをする。

体のどこに投与をしたか、正確に把握するためだ。

「随分変わった神術なんですね。くすぐりたいです」

マーキングをくすぐったく思ったのか、オイゲンが体をねじる。

「ああ、動かないでくださいね。すぐに終わりますから」

エレンがオイゲンの体を固定したからか、オイゲンの心拍数が上がる。オイゲンにはファルマたちが何をしているか、知られてはならない。

彼は”神術”の詳細を知らないからだ。本来なら治療の説明をして患者の同意を取るべきだが、ファルマの手が透けることを利用した治療法だ、などと言えるわけがなく、そういう神術という説明にとどまっている。

だが、その神術によって発生する副作用やリスク、後遺症の可能性は全て説明した。

「ファルマ君、薬の調製できたわよ」

「ありがとう」

理論投与量を計算し準備した標識物質をつけた抗プリオン抗体、そしてCRISPR/Cas9、修正用配列その他一式の混合溶液をエレンに手渡してもらう。

ファルマはくまなく「透過投与」と名付けた、彼の手が人体を透ける特性を利用した投与方法で、そつと標識済み抗体と遺伝子治療薬を投与していった。

「順調ね。五番区画、いいわよ。次は六番、投与量も間違っていないわ」

エレンの万全なガイドのもと、ファルマは機械的に作業を続けてゆく。無事、全身投与が終わった。

「全区画、投与できているわ」

「わかった、次の工程に行くよ」

（”5 - カルボキシフルオロセインを消去”）

ファルマはすかさずオイゲンに右手をかざし、無言で消去の能力を発動した。

プリオンタンパク質を認識し結合している抗体、それを標識した、人体には存在しない蛍光物質を狙って消去すると、正常、異常を問わずプリオンタンパク質との結合部位も一緒に破壊できる。

一部を破壊されたタンパク質はすみやかに分解される。

「これですべてのプリオンタンパク質を破壊した筈だ。あとは、遺伝子治療が始まっている頃だよ」

「同時に投与した遺伝子治療システムは、もう既に動き始めているのよね？」

エレンが確認する。

「そう、これからが正念場だ」

オイゲンの体細胞中の遺伝子を、CRISPR/Cas9と、修正用の配列が正しく書き換えていることだろう。

この処置によって、今後オイゲンの全ての細胞の中で産生されるプリオンタンパク質は、正常型のみになる。

生殖細胞も書き換えているので、遺伝病が子孫に遺伝する心配もなしだ。

日を改めて何度か同じ治療を行うことで、取りこぼしの細胞が存在しないようにする。

理論的には可能。そして、動物実験でも、これまでのところ重篤な副作用もなく成功している。

あとは、人間の患者に効くかどうか。それがすべてだ。

「さあ、うまくいったかな」

ファルマは深呼吸し、凝り固まった肩をほぐして一息ついたあと、診眼を発動した。

オイゲンの体を包んでいた赤い光は、すっかり消えつつあった。

（ひとまず、成功か）

治癒不能であることを意味する赤い光を克服したことに、ファル

マは感動する。

「どう、ファルマ君？」

おそろおそろ尋ねるエレンに、ファルマは指先でマルを作った。つこりと笑った。

エレンも一緒になって喜んだ。

喜びを分かち合おうと、ファルマが寝入っているオイゲンを起こす。

「終わりましたよ、オイゲンさん」

「はっ?! もう!？」

オイゲンは、ベッドから飛び起きる。

「うとうとして、気持ちがよくて……」

「ゆっくり起きてくださいね、立つても大丈夫ですよ。ご家族のところにいきましょう」

ファルマは薬局の一階にオイゲンを案内する。エメリツヒが螺旋階段の下で待ち構えていた。

「お前、どうだ。何もないか？」

「何ともなかったよ。ずっと寝ていた、快適だった、憑き物がおちたみたいにつきりしているんだ」

オイゲンは生まれ変わったように、見違えるような明るい表情をしていた。

「教授! 弟はどうになりましたか……」

エメリツヒは緊張しながらファルマに尋ねる。

ファルマは白衣の袖を下ろし、両腕の薬神紋を隠しながら頷く。

「成功していると思うよ。今日のところはね。あとは、経過を見守っていきましょう」

「ありがとうございます! ありがとうございます! 恩にきます!」

エメリツヒは弟の快復を、自分のことのように喜んでいた。



「ファルマ様！ 患者さんがいらっしやいました。これを持ってこられましたよ」

彼らが帰宅するのを見届けたあと、ロットがファルマに封蝋印ふうろういんのついた封筒を手渡す。

「今日の診療は終わったんだけどな、わかった。時間外だけど診るよ」

ファルマは封筒の中をあらためた後、弾んだ声を出した。

「そうか、これが来たか！」

「なあに？」

エレンが手に取る。ファルマが異世界薬局を創業して、初めて手にしたものである。

書かれていたのは、

患者の氏名、年齢、住所、発行年月日、発行者、貴族（その場合は属性と守護神）・平民の別、そして、処方。

「処方箋（prescription）だよ。医師からのね」

処方した医師は、クロード・ド・ショーリアック（Claude de Chauliac）。

帝国医薬大・医学部教授にして侍医長のクロードが、院外調剤薬局である異世界薬局に処方箋を書いたのだ。

外傷の手術の術後に、術後感染症の予防にファルマの取り扱う現代医薬品のセファペン ピボキシル塩酸塩を処方していた。体重から計算して、用量も指定し、服薬方法も記載されている。

クロードがファルマの薬を取り扱いたいと言ったとき、ファルマは「処方箋を書いてください」と答えたのだった。様式はクロードが考えたようだが、日本の薬局に共通する点がいくつかある。

ファルマは待合席で座って待っていた伯爵に会い、手順に従って、処方箋が正しいか確認する。

「今日は、何故クロード先生の診察を受けましたか？」

「ああ、昨日、ここをざっくりやってな。使いに薬をとりに行かせず直接ここへ手紙を持って行けというので、わざわざ来たのだ」

伯爵はあやまってナイフで指先を深く切ったので、かかりつけ医であるクロードを呼んだとのこと。

ファルマは診眼を使い、処置したあとの傷がきれいで、化膿をしていないことに驚いた。

処方箋に添えられた手紙によると、ファルマの教科書と講義を聞いて処置の方法を変えたと書いてある。

「なあに、侍医長様が薬を指定してきたの？ 患者さんを送ってくれたら、ファルマ君がこっちで診るのに？ パツレ君がいつもそうしてるじゃない」

エレンが意外そうな顔をする。

「患者を送ってくるのと、処方箋を送ってくるのは意味合いが違うんだよエレン」

診療と処方が医師の仕事で、監査と調剤が薬剤師の仕事だ。

ファルマが前世に薬剤師だった頃感覚からすると、薬剤師の診療、つまり薬剤師が患者を診察して独立処方するのを、できれば避けたいと思っていた。

（医師が診療して、処方箋が外から来るのが本来の調剤薬局だと思うんだよな。医薬分業が原則だ）

日本では医師の処方した薬を、薬剤師が監査し、疑義があればこの薬でいいのか医師に問いたです。

処方に疑義がなければ調剤し、調剤した薬剤師でない別の薬剤師が、最終監査する。

二段階の監査が行われ医薬品が患者に適正に用いられる、それが調剤薬局であってほしい、とファルマは思う。

「クロード先生の処方したセファペン ピボキシル塩酸塩でも悪くないけど、この場合はより効率よく人体に吸収されるセファクロルのほうがいいかな」

そういう細かい薬剤選択の検討もそのうちしてゆけたら、とファルマは思う。

クロードの処方箋は、サン・フルーヴ帝都に現代医学が少しずつ根付くきざしをファルマに感じさせた。

「少しずつ、変わっていつてるよな。この世界の人々も……」

エレンは感慨深そうに呟くファルマに何か言いたげなまなざしを送り、仕舞ったビーカーと薬包紙をファルマのために取り出してきた。

ロツテは鼻歌を歌いながら不足分の薬袋を折り、セドリックは、薬局の売上金を計算し金庫へとおさめる。バイトの薬師たちは、営業時間が終わったのでぺちゃくちゃ喋りながらカルテの整理と、調剤台の掃除にいそしんでいる。

そしてファルマは、やってきた処方箋を真新しいファイルに綴じ、新鮮な気持ちで今日最後の患者の調剤をはじめた。

変わったのは自分もだろうか、と実感しながら。

< i 2 0 5 2 4 6 — 2 4 9 6 >

## 5章19話 全身遺伝子治療と、医薬分業への前進（後書き）

5章終了です。6章へお進みください。

謝辞

・本項は、創薬計算化学の専門家で医師・医学博士のhigemoto先生にフルオレセインの性状についてご指導いただきました、ありがとうございます。

・また、「獣医さんのお仕事in異世界」を執筆しておられる作家で獣医師の蒼空チヨコ先生にもアドバイスをいただきました、ありがとうございます。

8/13 追記

・医師の中崎実先生に、薬剤の処方についてご指摘いただきました。ありがとうございます。

8/15 追記

・薬剤師のnene先生に処方箋の記載事項についてのアドバイスをいただきました。ありがとうございます。

## 6章1話 謝神祭の暗転

< i 2 0 7 3 7 2 — 2 4 9 6 >

1147年11月が訪れた。

ファルマは大学と薬局との往復にも慣れ、講義も実習も患者の診察もエレンや学生たちとともに順調にこなしている。

その日はファルマは大学の講義で、薬局はエレンとバイトの薬師が受け持っていた。

「ふわー、ちよつと休憩しましょ」

伸びをしたエレンが、せっせと薬袋を折っているロッテにふと尋ねた。

「そついえば来週の謝神祭<sup>しゃじんさい</sup>、ロッテちゃんも来るんでしょ？　ねえ、私たちも現地で合流しない？」

エレンは手持ちの謝神祭のパンフレットをロッテに見せると、ロッテが開催概要を真剣に読みはじめる。

「え？　初耳です。1147年　謝神祭？　大学で、ですか？」

「そう。うちの大学、保守的だから三年おきに謝神祭やってるの。今年もやるみたいよ。ファルマ君に誘われていない？」

謝神祭というのは守護神への感謝を示す祝祭で、三年に一度、世界規模で一週間近くにわたり開催される。

この期間は仮面舞踏会のようなものがあつたり、パレードが行われたり各種イベントが、守護神を信仰する世界各地で催される。そのイベントを、帝国医薬大でも行うということだった。

「誘われてないです……………」

ロッテはどんよりと落ち込みながら答えた。

「えっ？　おかしいわねえ、誘うの忘れてたのかしら。誰でも来ていいことになってるの、家族も友人もね。お父様もお母様も来るっていうし、ソフィも連れて行こうと思うわ。ロッテちゃんもおいで

よ、ねえ、あなたたちも暇だったら来たら？」

エレンはバイトの薬師たちも誘うと、セルストとレベツカが興味を示していた。

「子供たちが喜ぶと思いますわ！ ぜひ」

と、セルストが答えると、レベツカは、

「私、いつも暇なので行きたいです……」

と、切ないことを言っていたので、エレンが励ますようにレベツカの肩をたたく。

「あら、レベツカちゃん。だめよー、いつも暇だなんて。予定はちよつときつめに入れておくのがいいのよ」

「店主様みたいに、ですか？」

レベツカが迂闊な一言を発した。

「あーだめだめ、ファルマ君はきつすぎだわ。入れるのは仕事の予定じゃなくて遊ぶ予定よ」

ファルマは同年代の少年らしく遊んでいるのか、エレンは疑問だという。

「わあい、私も連れて行ってくださいエレオノール様！ ソフィちゃんも来るんですか？ ソフィちゃんはどうしていますか？ 大きくなりましたか？」

最近では、エレンが多忙のため薬局にソフィを連れてこないのも、彼女の顔を見かけない。

「そんなにすぐ大きくならないわ。でも元気いっぱいよー、ソフィもロツテちゃんに会ったら喜ぶと思うわ！ ますます可愛くなったわよ。謝神祭は楽しいわよ、山車が出るしー、舞踏会もするの」

ロツテはパンフレットを見ながら、目を輝かせてエレンに尋ねる。

「この、お菓子屋さんとか、食事処って何ですか？」

「やっぱりロツテちゃんなら目をつけると思ったわ！ ファルマ君が教授会で、出店を出したらどうかって言いだしただしいの。そうしたら、そのアイデアが学生たちの支持を集めてね。決まっちゃったのよ」

「さすがファルマ様です、お祭りといえばお菓子屋さんです！ レベツカ様もそう思いませんか？」

「わ、私はあまり……」

レベツカは同意しかねていた。

「もう、ロッテちゃんたら。っていうか謝神祭ってそんなイベントだったかしら……仮面舞踏会がメインのイベントよ？」

エレンは首をかしげた。

あつという間に謝神祭の日がやってきた。

祝祭当日、ファルマは謝神祭の実行委員を務めているからか、ブリュノと共に早朝に大学へ出発した。

サン・フルーヴ帝国医薬大学校では、学内楽団の演奏する賑やかな音楽が大学構内に鳴り響き、大学の校舎は華やかに飾りつけがされていた。

数千人もの学外の客が足を運び、今年より生まれ変わったサン・フルーヴ帝国医薬大を歩き回り、盛大な学内行事に親しんでいる。

色とりどりの仮面をつけた学生や来客たちが、メイン会場と特設ステージ周辺に集まり始めた。三年に一度の大祭に浮かれ踊り、羽目を外す者も出ている。

「エレオノール様、どこかな？」

そんな華やかな雰囲気の中、ロッテはエレンとの待ち合わせ場所にやってきた。

そしてすぐに、教え子と思しき学生らに囲まれて彼らと談笑しているエレンを見つけた。エレンは仮面をつけているが、長い銀髪と抜群のスタイルでロッテには見分けがついた。

それに、彼女はゴージャスな装飾のついたベビーカーを押していた。

「あれ、ロッテちゃんよね？ わかんなかったわ、そのマスクどこに売ってた？」

エレンが気付いて、ロッテに声をかける。

ロツテはフルマスクの、猫型の耳がついている仮面をつけていた。色とりどりにちりばめられたガラスの装飾のモチーフが凝っている。「えへへ、私がデザインして、仲の良い宮廷工芸家の方が作ってくださったんです。どうですか？」

「かわいいわよ、いいじゃない。そのピンクのドレスも素敵よ」

エレンの仮面は目の周囲だけのアイマスクタイプで、蝶をあしらったデザインが現代風で妖艶だ。

「ソフィは今、寝ちゃってるのよ。しばらく起きないと思うわ」

エレンは乳母車のホ口を取ると、中にはすやすやと穏やかな寝顔で午睡をするソフィがいた。

だんだんと赤ん坊つぼさが抜けてきて、ますます愛くるしくなっている。

「わあ！ ソフィちゃん！ 大きくなりましたねえ」

「ところでロツテちゃん、ファルマ君は今朝何か言ってた？」

「いいえ、お忙しそうで。エレオノール様聞いてください、私結局ファルマ様に誘われませんでした……私、謝神祭に来てもよかったのでしょうか？」

「ええ？ ファルマ君に聞いてみたけど、薬局でロツテちゃんのと誘ったって言ってたわよ。何か勘違いしているのかしら。あ、ほら、見てあそこ」

ファルマは特設ステージ上で、総長のブリュノや教授らと共に謝神祭のセレモニーに参加していた。

「あ、ファルマ様！」

ロツテが手を振っても、ファルマは気付いていないようだった。

「ファルマ君は謝神祭実行委員会の委員なのよ。運営に忙しくて、私たちとゆっくりする時間はないのかもね。私たちで回りましょ」

「はいっ！」

メイン会場周辺には出店が立ち並び、食べ物のおいしさが立ち込め、アルコールも販売されている。

いつもは、屋外で酒を飲むことは禁止されているが、この日ばかり



りは無礼講のようだ。

ロツテはお目当てのお菓子を買い回り、エレンは学生たちに声をかけつつロツテに学内を案内しながら回る。

お忍びモードのジャン提督とも出くわした。

メロデイも来賓として招待されたく、ブリュノに案内され来賓席に座っていた。

特設ステージでは謝神祭にちなんだそれぞれの守護神への奉納の舞や、ミニ演劇、トークショー、手品なども行われ、二人は観客席から熱い声援を送った。

「楽しいお祭りですね！　こんなの初めてです」

起きたソフィをあやししながら、ロツテは祭りの空気を体いっぱい満喫した。

「ファルマ君が色々面白そうな提案していたからね。あの子、真面目そうに見えて、結構変わった発想しているのよね、お祭りも大好きみたいだし」

「エレオノール様、何か飲みますか？　私、のどが渇きましたから買ってきます！」

「そう？　じゃあさっぱりしたジュースをお願いします」

ロツテは楽しそうに姿を消した。

「エレン、ここにいたのか！」

ロツテが飲み物を買に行ったタイミングで、少女を連れたファルマが、観客席のエレンに声をかけてきた。

「ファルマ君！？　あら、そちらの方は？」

少女も仮面をつけているので、誰と一緒に歩いてきたのかエレンには分らない。

「あ、そのせつは。私ですわ」

フルマスクの仮面を取ると、エメリツヒの末の妹が現れた。

ファルマは彼女を見て驚いて、ぼそりと呟く。

「あれ、ロツテは？」

「え？」

エレンは彼の迂闊な一言を聞き逃さなかった。

何故ファルマがそう言ったのかすぐに察した彼女は、エメリッヒの妹に聞こえないように、ファルマに耳打ちをする。

「つてことはファルマ君、もしかしてあなたロツテちゃんと間違えて……薬局で誘ったの？」

ファルマが事前に謝神祭に誘ったのは、なんとロツテではなくエメリッヒの末の妹だったのだ。

「もう、何やってんのよ。ちゃんとロツテちゃんの顔を見て誘わなかったの！？ 妹さんとロツテちゃんを見分けられないなんて。ロツテちゃん、ちょっと落ち込んでいたわ」

「あー……やらかしちゃった」

上の空だったのかな、と言い訳しながらファルマも若干落ち込んでいた。

そこへ飲み物を買に行っていたロツテが戻ってきた。

エレンからの話を聞いて、ロツテは目を大きく見開いた。

「えーっ、間違えたんですかーっ！？ 声？ 顔？ どっちですか？ いつもお仕えていますのに、あんまりですーっ！」

似ているからといって、ロツテとエメリッヒの妹を間違えるとは、とファルマは猛省する。

「いやだって、君たち本当に似てるんだよ……声も顔も。えーっとその、ごめん」

その後、ファルマは、ロツテとエメリッヒの妹に、どっちがどっちでしょう声あてクイズを出題されていた。

「ごめん、私も分からないわ。ファルマ君のことが言えないわね」

ファルマもエレンも、二人の顔を見なければ3問に1問ぐらい外していた。

「ファルマ様、エレオノール様！ わざとですか？ わざとなんですよね？」

「ごめんって」

ファルマはひた謝りだったが、ロツテは誤解だったとわかり元氣を取り戻した。その後、暇をもてあましていたらしいバイト薬師のレベツカとも落ち合った。エレンがレベツカと言葉を交わす。

「レベツカちゃん、やっぱり来たんだ。予定が入ったら来ないって話だったけど」

「えっと、気になる人を誘ってみたんですけど……その、暇になっちゃって」

深くは聞いてはいけない話だな、と誰もが察した。

「そ、そうなのね」

レベツカは、周囲に氣を使われているのに気付き、赤面して恥ずかしそうにしていた。

「そういえば、オイゲンさんの様子はどうですか？」

ファルマはエメリツヒの妹に兄の様子を尋ねる。

「兄でしたら、あちらに」

妹の示す方をファルマたちが見ると、ダンススペースで踊り猛つて注目を集めている青年がいた。

「ええ？ あれがオイゲンさん？」

エレンが眼鏡をかけなおす。見違えたのだ。

遺伝子治療を受け、日常生活の安寧を取り戻したオイゲンは、内向的だった性格はどこへやら、すっかり明るく陽気になりまして、と妹は嬉しそうに言う。

「ヒトって変わるものねえ」

「ふふ、まさに。兄は、生まれ変わったようだと言っていました。となると、その喜びを発散させたいと申しまして」

「爆発しちゃってるな」

ファルマが冷静に一言添える。

「遺伝子的には生まれ変わったようなものだわね。本人が楽しいなら、よかったわ」

「今日はありがとうございました、兄と帰りますわ」

「ではまた！」

汗だくのオイゲンと彼の妹が連れだって帰ったあと少しして、あたりに煙が充満しはじめた。

「あれ、どうしたのでしょうか。焦げ臭いにおいがしますね、なんですか煙も」

鼻のいいロツテがいちやく異変に気付く。

火を扱っていた出店のテントが燃えているようだった。

「誰かー！ 水属性術師はいないか！」

助けを呼ぶ声が聞こえてくる。

「ボヤだ。行ってくる」

「大変！ 私も消火に行ってくるわ、すぐ戻ってくるからロツテちゃんちよつとソフィ見てて」

ファルマが火元へと走り、エレンもソフィを預け、杖を抜いて走る。

そしてロツテとレベツカはソフィの乗ったベビーカーを預かった。

「レベツカ様は風属性でしたね」

「神術はあまり得意ではないの。こういう時にすぐ出ていけるあの二人を尊敬するわ」

レベツカとロツテが言葉を交わしていたところ、レベツカが背後から何者かに襲われ、突き飛ばされ地面に倒れた。

「きゃーッ！」

ロツテは叫ぼうとしたが、脇腹を殴られ、口を塞がれ背後に回り込まれて羽交い絞めにされた。襲撃者は三人組の男たちで、ソフィも大柄の男の一人に抱えられている。

「騒ぐと全員殺すぞ！」

「な、何者です！ 恥を知りなさい！」

レベツカが起き上がり、震えながら杖を抜いた。しかし、ソフィとロツテが人質になっていて攻撃できない。

怯むレベツカに、男の一人から暴風の攻撃が浴びせられた、観客

たちはボヤに気を取られているが、数人が異変に気付き始めた。騒ぎが大きくなってきたところで一人の男が煙幕を放ち、レベツカが風の神術で煙を払うと、その間に男たちは逃走していた。

「た、大変です！」

取り残されたレベツカは青ざめ、放心状態になりそうだった。

「ロツテちゃん！ どうしたの！？」

そこへ戻ってきたエレンが、脇腹をおさえながらうずくまっているロツテを助け起こす。

「え、エレオノール様。ソフィちゃんが……ごめんなさい、何が起こったのか」

ロツテが混乱しながら報告すると、レベツカも謝罪した。

「エレオノール様。後ろから男たちに襲われました。三人組の男です、申し訳ありません、私がついていながら」

ロツテとレベツカは、襲撃の様子と、男たちの服装を話す。

「わかったわ。それほど遠くには行っていないはず、ソフィちゃんを取り戻して懲らしめてやるから、ファルマ君が戻ってきたら伝えて、衛兵に連絡して。あなたたちは帰るのよ、探し回ってはだめ」

エレンは優しく二人の手をとり、含んで聞かせるようにそう言うのと走り出した。

「あつ！ お待ちください！ エレオノール様！」

「エレオノール様はお強いですから、三人相手でも怖くないのですよ。どうか。どうしましょう」

ロツテとレベツカがうるたえていると、ボヤを始末したらしいファルマが戻ってきた。

「ファルマ様！ 大変です！ ソフィちゃんとエレオノール様が……！」

… … …

エレンは、帝都のはずれにある廃倉庫を突き止めた。

「一人で来なければよかったわ。でも仕方ないわね……衛兵の搜索を待っていては、ソフィちゃんが助からないかもしれないもの」

息を整え、鉄製扉の前で杖を構える。エレンは、神力探查針というものを使って追跡していた。

それは神力をはかる方位磁針のようなもので、探查針に探查した人間の神力を記憶させると、その神力がある方角を示す。

ソフィはすぐに屋敷の中をよちよち歩き回り隠れてしまうので、エレンが高価なその道具を取り寄せて日々の搜索に役立てていた。

「水の大鎚」(le gros marteau de l'eau)

彼女はソフィの気配が扉から遠いことを確認し、扉を神術で一気に破壊し、内部に踏み込む。倉庫の床はエレンの神術で水浸しだ。エレンはすかさず中の男たちに叫ぶ。

「見つけたわよ、人さらい！ その子を返しなさい！」

「どうしてここがわかった」

男たちはいきなり高度な神術を浴びせられて驚いたのか、動揺している様子だ。

「わかるものは、わかるのよ！」

エレンが倉庫の中に入り隅々まで目を配ると、広い屋内には廃材がそこかしこに散乱している。隅のほうの廃台の上に、毛布が敷かれてソフィはその上で眠っているようだった。

ソフィの隣にもう一人、誘拐された男児がさるぐつわをかまされて手枷をかけられ、床の上に転がされている。

「ソフィちゃん！ 無事なの？ 返事をして！」

エレンはソフィに呼びかけるが、ソフィは反応がない。男児も眠っているようだった。

「起きるものか。オパール草を飲ませたからな」

「オパール草ですって？」

昔から使われている、眠り草を煎じて作る伝統薬の眠り薬だ。

だが、ファルマがその中に麻薬成分がありきわめて有毒であることを見出してから、帝都での使用が禁止され、女帝の勅令で全て廃棄処分になっている。

帝国ではもう、簡単に手に入れられるものではない。

だが、国外であれば話は別だ。

「あなたたち、さては帝国の貴族ではないのね」

「ふん、余計な情報を与えてしまったな。お前に因縁はないが、知られたからには生きて返すわけにはいかん！」

男たちもまた、エレンを見逃すつもりはないようで、杖を抜く。

一対三での神術戦闘になりそうだ。

「あなたたちどこの国のならず者なの？ 何でわざわざ人さらいなんて！」

「珍奇な属性の子供に高い値をつける貴人はいくらでもいてな」

「帝都では最近、無属性の孤児が数人見つかったているじゃないか」別の男が続ける。

「どうせ捨て子だ、捨てたものを攫ったって構うものか」

エレンが話を聞いてみるとどうやら、珍しい神術属性を持つ子供をさらって人身売買する、下級貴族たちの闇グループのようだ。

「そんなこと、許さない！ ソフィちゃんは私の大切な妹なのよ、全員まとめて相手してあげるわ！」

「全員というのは、こちらも勘定に入っているのかな？」

倉庫の反対側の扉が開き、奥からさらに数人の男たちが入ってきた。全員が杖を持っている。

十人ものならず者と対峙しながら、エレンは先行して防御を打つ。

「水聖域」(Sanctuair de l'eau)「

水の結界のようなもので、指定した範囲内で神術の威力を失う。エレンの周囲を聖域で大きく囲むことで、エレンへの攻撃を防ぐ。

エレンが神技を使ったので、男たちも仕掛けてきた。  
男たちの神技の発動詠唱の言語が、エレンには聞き取れない。初動を見て判別し、対処するしかないのだ。

「○○○○！」

男が意味不明な言語で発動詠唱を唱えると、エレンに前後から炎の矢が襲い掛かる。

「×××××！」

次は烈風。それらの攻撃は、エレンの水聖域で辛くも無効化されたが、威力はかなりのものだ。

「っ、何なの？！」

発動詠唱は術の体系さえ確固としていれば何語でもよい。ため、エレンは神技の判別がつかず、苦戦を強いられている。

「水の戯れ」(Jeux d'eau)

エレンは全方位に水の砲弾を展開し、杖の一振りで指向性を与える。発射された攻撃の一部は男たちに命中し、男は倉庫の壁に叩きつけられ意識を失った。

「！」

しかし、火炎術師が火炎壁を展開し、二発目は威力が減弱されてしまった。

エレンは真空刃の攻撃を脚に受け、裂傷からは血が流れていた。  
エレンはあまりの痛みにバランスを失い、床に膝をつく。

「まだまだ……」

立ち上がろうと顔をあげたエレンの視界に、おそろしい物体が飛び込んできた。

銃口だ。



「なっ……」

エレンの顔が絶望にゆがむ。

狙撃手はぴったりとエレンに狙いを定めている。発動詠唱を唱えた瞬間、銃撃されて終わる。

エレンほどの神術使いでも、弾丸の速度には勝てない。

「杖を持つ者が銃だなんて……恥を知らないの……？」

「何とでもいえ、終わりだ。手間をかけやがって、騒ぎになる前に死ね」

男が引き金を引こうとしていたときだった。

「待て！」

広い倉庫内に、声が響き渡った。

破壊された倉庫の扉から、一人の少年が中に入ってくる。

「っ……ファルマ君……」

「なんだこのガキは、どこから来た」

男たちの一部はファルマに杖を向け、臨戦態勢に入っている。

「彼女を見逃してくれ。珍しい属性の神術使いを探しているんだろっ？」

ファルマは丸腰であることをアピールしながら、男たちに近づいてゆく。

「はあ？ お前みたいなガキに何ができるっていうんだ。変わった属性の神術でも使えるのか？」

男たちは失笑する。

「使える」

「証拠を見せろ」

ファルマは指と指の間にとあるトリックを使って放電してみせると、男たちの気を引いたらしい。

「彼女の解放が条件だ。もし飲まなければ、俺は二度と神術を使わない」

「いいだろう」

男たちにゆつくりと歩み寄られ、ファルマは鋼鉄製の手錠をかけられた。

エレンは解放される。ファルマは手錠の上から神術を封じる呪布でぐるぐる巻きに縛られる。エレンも同様に縛られ、床の上に蹴飛ばされた。

そしてファルマは、倉庫の外に準備された荷馬車の前に引つ張ってゆかれ、荷台に載せられた鋼鉄製の箱に押し込められた。誘拐されたソフィと男児も一緒だ。

「ファルマ君、ソフィ……！」

二人を載せた馬車が遠ざかるのを見て、エレンが絶叫する。

「叫ぶな！ 静かにしろ！」

エレンは頭を鈍器で殴られ、その場に倒れ伏した。

帝都の衛兵が倉庫の中で意識不明のエレンを見つけ、馬車で薬局に運んだのは、夕刻になってからだだった。

「ご無事でしたか、エレオノール様」

エレンの応急処置をしたレベルツカとロジエが、エレンの顔を覗き込む。

エレンは眼鏡がなく目が見えず、視界が心もとない。

ロツテも涙ぐみながら、エレンにぴつたりと付き添っていた。

「私はいいの、ソフィちゃんとファルマ君がさらわれて、他にも攫われた子がいたわ……異国の犯罪組織よ！」

帝国医薬大から通報を受けた憲兵隊と帝国騎士団が帝都中を封鎖し、数百人態勢で行方不明者と誘拐犯の搜索を進めているという。その捜査の中で、エレンが発見されたのだ。

「ファルマ様　！」

ロツテの悲壮な絶叫が、薬局の外まで響く。

すると、ロツテには大路の向こうから歩いてくる人影が見えた。

「呼んだ？」

そんな声とともに、ファルマが歩いて帰ってきた。

その両腕に、安らかに眠るソフィを抱きかかえながら。

「え？ どうして戻ってこれたの！？」

何事もなかったかのように、ファルマはソフィを抱いて徒歩で帰ってきた。

そのあたりをぶらついた散歩から、戻ってくるかのように。

薬局職員たちは階段を駆け下りてファルマを迎え、歓喜の声に満たされる。

「よかった……！ 無事だったのね！」

「ああ、誘拐先に子供たちがたくさん捕まっていたから、全員解放したよ」

その場にいた全員が、開いた口がふさがらない状態になっていた。  
「あの鋼鉄の檻をどうやって脱出したの？ 手枷もつけられていたし、呪布でも雁字搦めにされていたわ」

「まあ、檻も枷も布も素材が単純だったから、消えるよね」

ファルマはバイトの薬師たちの手前、適当に話を濁した。

「へ？」

ファルマの物質消去能力をもつてすれば、幾重の檻に入れられても存在しないに等しい。

鉄を、銅を、そしてセルロースを消去すれば彼はいつでも自由だ。  
「普通の素材では俺を縛れないから。次からは捕まっても安心してよ」

ファルマは涼しい顔をしてエレンに説明する。

「何がどうなってるの？」

ファルマはわざと捕まったふりをして、数十人の神術使いの関与

している無属性神術使い人身売買ルートのをとり、人身売買顧客リストを入手した。

そこで難なく檻を抜け出し、実行犯全員を倒して拘束し、さらに彼らの神脈を封鎖して憲兵隊に突き出して戻ってきたと説明した。誘拐されていた子供たちは、無事に帝都の孤児院に戻っていたという。

「はい、ソフィだよ。けがはなかった」

エレンはソフィをファルマの手から受け取り、いとおしそうに抱きしめた。

「ああ、ソフィちゃん。無事でよかったわ、ありがとうファルマ君、君も危険な目に遭って」

「本当に、本当によかったです……」

ロツテも、二人の無事の生還に涙が止まらない。

「エレンの大事な家族なものな、血はつながっていなくても」

ファルマはエレンの怪我の処置を追加する。

火傷が熱を持ち始めていたので神力をエレンに注ぎ、創傷治癒能力を高める処置をした。

「ところで、誘拐犯たちは？」

「もう二度と神術が使えないように、ちょっとだけ懲らしめてきたよ」

ファルマは無邪気に笑った。

一体何をしたんだろう、とは誰もつつこまなかった。

翌日、ファルマの提供した情報によって異国の犯罪者グループの残党が、帝都の憲兵隊によって一網打尽に逮捕された。

これを機に、変わった属性の神術使いの孤児は、女帝の命令でさらに手厚く保護されることになった。

## 6章1話 謝神祭の暗転（後書き）

異世界薬局3巻発売決定です。

詳しくは活動報告をご覧ください。

## 6章2話 連絡人の採用と、船酔いについて

「疑義照会だな。クロード先生のこの処方患者さんに合っていない」  
11月中旬のある日の異世界薬局。

その日、クロードや彼の弟子から送られてきた処方箋を読み、薬局にやってきた患者の話を聞きとったうえで、ファルマは唸っていた。

処方を薬師が勝手に変えると信頼関係を損なうので、勝手に変更はできない。

でも疾患に合わない処方が出されていっては、監査役の薬師としてその通りに出すこともできないのだ。

「侍医長様に問い合わせが必要？」

エレンが尋ねる。

「うん、確認というか変更したほうがいい」

日本では処方が合わないと考えた場合、調剤薬局は処方した医師に疑義照会を行う。

この世界では医師にも薬師にも診療、処方、調剤権があり、診療と処方のどちらもができるのでファルマは診療も行っているものの、患者が安全に薬を受け取るためには、医師と薬師の仕事はいずれ分業にすべきだと考えていた。

ファルマがクロードへの伝書をしたためていると、ロッテが気をきかせて立ち上がる。

本日、三度目になる。

「疑義照会ですね、では鳩を見えますね！」

ロッテは仕事の合間にエレベーターに乗って薬局の屋上へと向かった。

しかし、暫くするとキヤー、という悲鳴とともに螺旋階段のあたりからドーンと大きな音がした。

階段から足を踏み外したらしい。

「ロツテ!？」

ファルマが驚いて叫ぶ。エレンもびくつとする。

「ロツテちゃん!？」

ファルマとエレンが螺旋階段へと駆けつけると、階段のたもとでロツテが腰をさすっている。

「すごい音がしたけど大丈夫？ 腰を打ったの？」

「いたたた！ 慌てすぎましたあ……」

ロツテは息がとまりそうになって、涙目になっていた。ファルマはうずくまるロツテの腰に手を触れる。

「痛いので、ここ？」

「もちよつと下です……」

ファルマが少し神力を込めてロツテの腰を何度かさすると、痛みが和らいで治ったらしい。

彼女はファルマが最近そんな能力を身につけているとは知らず、痛みは気のせいだったのかと不思議がっていた。

「あれ？ えっ？ 痛いの、飛んでいきました！ ファルマ様がさすってくださったから……?」

ロツテは素直に喜ぶ。

「どうかな。治ったらよかったよ」

二人はぱつちりと目があつて、あつ、となつてお互いに視線をそらす。

ほんわかしていたところで、ロツテが早口で報告した。

「ファルマ様！ もう、侍医長様に飛ばす鳩がありません。あ、それからパツレ様からも鳩が来ました」

ロツテは薬局の屋上にある鳩小屋<sup>コロンビエ</sup>の様子を伝え、パツレから送られた伝書を渡す。

「鳩、増やす？ 鳩小屋を大きくしないといけないわねえ」

エレンが困ったような表情で眼鏡をいじる。

「いや、もう鳩は増やしたくないな。これ以上増やしたら、あまり衛生上よくないと思うんだよ」

そう言うファルマは帝国大の鳩を薬局の鳩舎に連れてきていて、帰巢本能を利用して医薬大に飛ばしている。

羽根やふん、塵が舞う衛生上の問題から、薬局の屋上に鳩小屋を作りたくないという気持ちはあったが、この世界の通信手段がほぼそれしかないので、ファルマの聖域とこまめの清掃で清浄は賄われている。

とはいえ、衛生を重んじるブリュノからは「鳩小屋は店舗の屋上ではなく、別の場所に作ったほうがよい」と注意されているが。なんてことを思いながら、ファルマは小さくため息をつく。

「今日の鳩は打ち止めか……」

（疑義照会なんて、日本だったら電話一本ですむんだけどなあ）

電話一本で済まないのが、異世界の通信の不便さというもの。

ファルマが異界から持ち出してきたスマホを一台、医薬大に置いてPCからメールを打ちたいぐらいだが、そういうわけにもいかない。患者も目の前で待ってもらっている。

すると、セドリックが代案を提案した。

「お急ぎでしたら、発想を変えて、鳩で疑義照会を飛ばすより、人の使いを頼んだほうがよいのではないでしょうか。ほかの病院にも鳩を飛ばすとなると、鳩小屋の維持が間に合いません」

「それでは私が、疑義照会に行つてまいりましょうか」

フットワークの軽いロッテがさつと手を挙げてくれ、それをファルマも有り難いと思うが、やはり女の子の足では遅い。

「そういうことなら、ひとつ走り行つてきましょ。ロッテさんより速いデスから」



見かねたアルバイト薬師のロジェが、引き受けてくれた。

「ひい、ただいまデス」

あまり体力のあるとはいえないロジェは、へろへろになって帰ってきた。

よほど急いだのか、もう汗だくである。ファルマはそれを見て、専門職員が必要だと考えた。ロジェには酷だ。かといってファルマが薬神杖でひとつ飛び行ってくると、その間の店番に困る。

「やっぱり募集しようか、専門の連絡人を。ロツテ。張り紙作ってくれる？」

「おまかせください！」

ロツテがイラスト付きのメッセンジャー募集の張り紙を書いて薬局の前に掲示し、ついでに帝都の数か所の掲示板にも貼ってもらってきた。

『急募：異世界薬局の連絡人。地図が読めて、読み書きができ、秘密を守ることができ、脚力に自信のある若い方。帝都内を一日何往復かするお仕事です。給料、勤務時間は店主と応相談』

「来てくれるかな？」

とファルマが言っていると、ロツテも両手を胸の前で組みながら、ドキドキしますね！ と話していた。

その日のうちに、貼り紙を見たというメッセンジャー志願者がぞろぞろと十数人もやってきた。

若く大柄な男が大半である。

「まさか異世界薬局から一般職の求人が出るとは！」

などと嬉しそうに口々に話している。異世界薬局のスタッフ求人は給料がいいと噂されているので、就職先として人気なのだそうだが、それもあってか、ファルマが一人ずつ面接をしてみると、誰もが

れもアピールに必死だった。

「それでは歌います、聴いてください」

「私は手品を」

などと、求めてもない芸をする者まであらわれた。

採用してほしい気持ちが出すぎて前のめりになっている志願者に、  
「また、合否結果は後日連絡しますね」と伝えた。

「しかし、あの人たちが暑苦しかったわねえ。誰にするの？ ファ  
ルマ君。あの、手品の上手かった人はやめたほうがいいと思うわ」  
「実際、誰を採っていいのかわかんないな」

履歴書と面接時の印象メモを見ながら、ファルマとエレンが誰に  
しようかと薬局のカウンターで悩んでいると、

「まだ、連絡人の募集していますか？」

と、元気のよさそうな小柄の少年がやってきた。ファルマはカウ  
ンターごしに、すぐに面接にうつる。

「履歴書、見せてもらえる？」

「字が汚くて恥ずかしいですが……」

（確かに、字が汚いな。これじゃ、メモもとれないな……）

頑張つて書いてきたらしい手書きの履歴書は、殆ど文字が判読で  
きないほど字が汚かった。

エレンが、この子はダメダメ、と首を振る。

「わかった。応募ありがとう、合否はまた連絡するから」

ファルマがそう言ってひとまず少年を帰すと、そこにかぶさるよ  
うにして、

「今日も来たぞい」

と言いながらひよこひよここと見慣れた老人が薬局にやってきた。

「いらっしやいませ、提督」

彼を見つけたロッテが提督と言ってしまったので、ジャンは苦笑  
いする。ロッテの言葉でジャンの来店に気づいたのか、薬局を訪れ  
ていた患者や客がざわついた。

「今日は何をもらおうかのう」

ジャン提督は悩んだ末、新製品のマルチビタミンのグミを選んでロッテに取ってもらっていた。

彼は待合席に腰かけて薬局のウォーターサーバーから水を飲み、買った商品を早速食べながら、おもむろに切り出す。

「いよいよ、新大陸への調査航海は来年の二月に大船団で出港することに決まったんじゃ。店主さんや。そこに間に合うように、諸々の製品の大量発注をかけるから頼むで。う。医療品や栄養食品、それから現地で記録する用の写真機も需要が見込まれそうじゃ」

発注は有難いが、大船団とはまた穏やかではないな、とファルマは警戒する。

新大陸への長期滞在を想定しているのだろうか、と。

「ギャバン大陸への出港ですよ」

ギャバンというのは、ジャン提督の姓だ。

「だーっ、やめんか。その名称は、わしゃどうかと思うんじゃ。からかうのはやめてくれい」

発見者であるジャン提督の名前がついた大陸だが、ジャン提督は自分でギャバン大陸と呼ぶのをいつも気恥ずかしがっていた。

「ですが、ギャバン大陸という名前になったんですよ？」

ファルマはジャンをからかっているつもりはない。新大陸と言いつけるのも不便だからだ。

「陛下の一声でそうなたんじゃ。色々あつたんじゃぞ、わしゃそんな名前にならんように頑張つたんじゃが」

陛下の勢いにおされて固辞できなかった、とジャン提督は嘆かわしそうにする。

「それでしたら仕方ありませんね。えーっと、では出港は厳冬の頃、ですね。気候の穏やかな春か秋のほうがいいのでは」

そんな大事な航海なら気候を選んだ方が、とファルマがすすめる。ジャン提督は前回と同じく、西回り航路を使って新大陸に行くら

しいが、なにも真冬に行かなくても、とファルマはアドバイスしたい。するとジャンは声のトーンを落とす。

「わしだって凍える海に船出をしたくないわい。わしゃあ寒がりなんじゃ。じゃが、海賊や命知らずの冒険者が大陸の資源を狙っとるらしいからのう、温くなるまでは待てんのじゃ」

「でも、難所の海域があつて一般の船は新大陸へ近づけないのでしたわよね？　ならば、冒険者は恐るるに足らずではないでしょうか」  
エレンがジャンに尋ねる。

平民のみが乗船した船では、悪霊にとり殺されて航海の途中で沈没してしまうという話をジャンから聞いていたからだ。ジャンはもっともらしく頷いた。

「うむ。」船の墓場”は神術使いが同船せんと抜けられんのう。じやから、より安全な航海のために水属性、風属性神術使いのほかに、今回は旅神を守護神に持つ、無属性の神術使いも同船させよとの陛下の御下命があつてのう」

「旅神！　ああ、あの」

ファルマは思い出して手を打った。

ファルマが神脈を開いてサロモンが守護神を鑑定し叙爵された、無属性神術使いの一人、クララだ。

まだ少女だった、と覚えている。彼女はメディークの出資者クロエのもとに身を寄せていた。

「わしゃあ平民の出じやから神術なんちゅうもんには詳しくないんじやが、旅神様のご加護で、果たして安全な航海ができるもんかう？」

それを聞かれると、ファルマとしても「どうでしょうね」と言うしかなかった。

「困ったことが三つあつてのう。若い女なのと、クララ本人が航海を嫌がつとるのと、いかんせん船に弱いんじや……船が揺れると、吐き気がするんじやと」

長期航海に出る船に若い女をのせてはいけない、という風習は地球ほどではないが、この世界にもある。

それよりなにより、海の荒くれ男たちにセクハラされてしまわないかと、ジャンは心配のようだ。

ファルマも全面的にそう思う。

「それは、最初から連れて行ったらだめな人ですわね……旅神云々以前の問題ですわ。何かあったら、クロエ嬢が黙っておられませんか」

エレンが苦笑し、少女に同情を寄せているらしい。

「旅が嫌いだっていうか、屋敷で引きこもって惰眠を貪りたいって言うってたからなあ」

ファルマはクララの様子を思い出した。幸いクロエは、クララの意識すると「何もせず暮らしたい」という希望を聞き、その環境を提供して甘やかしてくれそうな大貴族であった。

「引きこもって寝たいとは、怠惰な娘じゃのう」

「いえ、怠惰なのではなく、酷い低血圧なのです。おそらく、乗り物酔いをしやすいというのも低血圧が影響しているかと」

「そりやますます船旅に連れて行きたくないのう」

しかしそれと引き換えに、クロエの領地視察への旅に付き合わせられたりもしていたと聞くが、今回は女帝の命令だとあれば、引きこもっているわけにもいかない。

「とにかく、気がすすまんのじゃと、今回は特に……縁起でもないことを言いおるのう」

（彼女の場合、ただ気がのらないって話もあるからなあ……）

とにかくやる気のない彼女に、ジャンも気力を吸い取られたという。

「それは、なにかの天啓を感じているのでは？」

エレンが、旅神を守護神に持つ彼女には「第六感」のようなものがあるのではないかと、一言添えた。

ジャン提督は、深刻そうな顔をする。

「そりゃ困るのう。わしら船乗りは、縁起を特に気にするからのう。神殿の占術の結果によつては、航海の延期もあるぐらいじゃ。旅神の加護を持つ神術使いが、今回の航海は気が進まん、などと言つてはのう……わしゃあまり連れて行きたくないが、彼女の同行を心強く思つておつた若い船乗り衆の士気も下がるで」

ジャン提督は眉を曇らせる。

「難しいですね」

ファルマも、航海の厳しさに思いを馳せる。この世界では一回の航海で、死者が出ないことは稀だ。

航海の犠牲者をできるだけ減らす努力をするのは、提督の務めというもの。その一環で、また航海ではブリュノの弟子の薬師を借りることになりそうだとジャンは言つた。

「今回の航海の主な目的は何です？」

「一番は、大陸の調査とギヤバン大陸の海岸線地図の作成じゃな。

今回は帝国海軍も航海に加わるから、別の目的もあるのかもしれないが」

（提督が着いたのは東海岸だから、大陸の西海岸に到達するまでの勢いはないだろうな）

ファルマは、西海岸に住む先住民のことを気にしていた。

「馬も持つていくんですか？」

「新大陸には入植者を定住させるそうじゃから、家畜は連れて行く予定じゃのう」

（先住民が見つからない以上、植民地を作る流れは避けられないか……）

現在の国際法では、人がいない土地を最初に発見した国家が植民地を作つていいということになっている。

新大陸を無人のまっさらの土地だと思ひ込んでゐるジャンには、

悪気も何もない。

「まあ、忙しい店主さんを困らせても仕方がない。話はもとに戻るが、せめて吐き気を何とかする薬、ないかのう。旅神持ちのあの子を航海に行きたい気にさせてくれる材料がほしい」

ジャン提督はだめもとで相談、といった様子でファルマにもちかけてきた。

ファルマは少し考えて、馬車酔い用の薬を薬局の薬棚に取りに行つて戻ってきた。

「これは馬車酔い用の薬じゃが。航海で飲み続けてもええんかのう？」

「同じです。吐き気止めで、ジフェンヒドラミンサリチル酸塩との抗ヒスタミン薬、そしてジプロフィリンは平衡感覚の混乱をおさえます。ですが薬が合わないとか効かないこともありますから、本人にここに来てもらってください。副作用としては……発疹や動悸、排尿しにくくなったりする場合もありますが……主には、眠くなりますね」

「まあ、航海の邪魔をせず寝てくれているならいいかのう」  
ジャン提督はそう言つて帰つて行つた。

「おはようございます……ジャン提督にお話を聞いてまいりましたあ」

というわけで、クララ本人が翌朝に薬局にやつてきた。

顔だけは非の打ちどころのない美少女なのだが、相変わらずの力の抜けきつた猫背と目の下のクマで、げっそりとだらしく見える。

「店主様！ お久しぶりでございますわ」

クロエも一緒だ。こちらはチャキチャキの令嬢で、クララとは対極をなしている。

「今日はクララちゃんが陛下の勅命で航海に同行することになり、船酔いに効く薬があると聞いてやってまいりましたの……って、ク

ララちゃん？ クララちゃん！！」

薬局にたどり着くなり、クララはカウンターの前に突っ伏すような恰好になっている。

「相変わらず、低血圧が辛そうだなあ。夕方来ていただけたらよかったですね」

ファルマが声をかける。

彼女は一見うつ病なのかと他の医師や薬師が誤診するほど無気力で注意力散漫なのだが、それは酷い低血圧によるもので、特に午前中は症状が酷い。

「航海の同行を命じられているそうですが、気が乗りませんか」

ファルマは水を差し出し、ざっくりと尋ねてみる。この状態で、船旅となると心配だ。

「はい……薬師様に神脈を開いていただいて以来、私はクロ工様のもとで良い暮らしを送らせて貰っています……。陛下の御恩にもこたえたいです。でも、今回はどうしても行きたくないんです。やる気のなさそうな彼女も、神脈をひらいてくれたファルマと、住まいを与えてくれたクロ工は恩人だと言って慕っていた。

「吐き気のためですか？ 吐き気止めを出せますよ」

「吐き気もあるんですけど……」

旅神の加護を持つ彼女は、人知れず悩みを抱えていた。

「私、見えるんです。サン・フルーヴ・ロワイヤル号に乗る船乗りの方……多分、戻ってきません。ほかの船に乗る方は大丈夫ですが、けれど、ほかの船に乗る方も、何人かは亡くなります」

彼女は、旅から帰ってくることでできない者は、骸骨のように見えるのだという。

そして実際に、そう見えた使用人や知り合いが戻ってこなかったり殺害されたりして、何度か的中したようだ。

「ええっ……船乗り全員そう見えるの？」

どうやら、ただの船酔いの憂慮とは違う様相を呈してきた。



「まあっ」

クローエも驚いた顔をして扇子で口をおさえる。クララはげっそりした様子で頷く。

「はう、サン・フルーヴ・ロワイヤル号に乗る方の方々とお会いしましたけど、全員なんですう……」

（予知能力の一種か？）

サン・フルーヴ・ロワイヤル号は、ジャン提督が指揮する大型帆船だ。

「薬師様。私、どう伝えてお断りすればいいですかあ？」

クララはじんわりと涙目で、ファルマの前に顔を近づけて来た。

あまりにもストレートに可愛くて、ファルマは思わず動揺してしまふ。

「サン・フルーヴ・ロワイヤル号で出港しないほうがいいってことかな。船を変えればいい？」

ファルマが固唾をのみながら尋ねる。

「船を変えればどうなるのか……そうですね。サン・フルーヴ・ロワイヤル号では出港しない方がいいと思いますう」

「早急にジャン提督に進言してみるよ。それは重要な情報だ、別の船を用意してもらって、それでもまだ君に死の兆候が見えるなら、その船の乗組員は航海に出ない方がいいってことだな。もちろん君も航海に行かない方がいい」

（それは貴重な能力だな。事前に安全が分かるとなると、助かるぞ）  
ファルマは思いもかけない能力の持ち主と出会い、興奮していた。  
「あ、そうだ。ちなみに俺、来月ちよつと神聖国まで旅に出ることにしているんだけど、帰ってこれそう？」

「……」

クララは目を見開きながら、ファルマを見つめた。

「遠慮せずに言ってよ」

ファルマはドキリとして、緊張しながら尋ねる。

予知能力を頭から信じているわけではないが、やはり神術のある

この世界では彼女の言葉は重い。

「その旅は戻ってこれます。ですが……とても……そう、よくない兆候が見えますん」

言いにくそうに、クララは一言ずつ話す。

（どんな兆候だろう）

「ファルマ君も行かない方がいいんじゃない？ 神聖国」

それを聞いたエレンが、ファルマを心配そうに見つめる。すると、クララは助け船を出した。

「私、薬師様について参りましょうかあ。何か起こる前に忠告できるかもしれません」

「え、そう？ じゃあ同行頼むよ。ありがとう、頼ましい」

「はい、薬師様は私の恩人ですので……」

クララはもじもじしながらそう言った。語尾に力がなく、見た目にはなんとも頼りない印象だが、ファルマにとっては心強い。

「いいかな、クロエさん。クララさんを借りても」

「それはもう、どうぞ連れて行っていただいてかまいませんわ、クララちゃんがよければ」

ファルマは頼もしい道連れの協力を得ることになった。

「あのう、もしかしてエ、連絡人を募集しておられますかあ？」

クロエとクララが薬局を出て行って、一分もしないうちに戻ってきてクララは尋ねた。貼り紙を見てのコメントらしい。

「うん、そうだけど。昨日、面接をしたところだ」

ファルマがそう言うと、クララはちょっと目を瞑ってから告げた。

「一番最後にきた方がいいですん。ほかの方は、脚を負傷したり暴漢に襲われたり、犬にかまれたりしますん」

「うわ、さんざんだな」

「一番最後に来たって……あの、字が汚い男の子のこと？ だめよあの子、ほんとうに字が汚いわ。連絡に行き違いが出るわよ」

エレンの心配ももっともだが……

「うーん、でも採用してみよつか。ものはためしに」

クララの意見は受け入れられた。

そして結局、最後に来た元気のよい、14歳の俊足の少年、トムが採用されることになった。

彼は近所の商店の使い走り専門の徒弟だったので、用があるときだけ呼び出されることになった。彼は真っ黒に日焼けをしていたが、その理由は、早朝のランニングと商店間の日々の使い走りだという。薬局の連絡人の制服を支給され、彼は「なんだか偉くなったみたいです」と嬉しそうに袖を通した。

「お使いに行つてまいりました、店主様！ 次の御用はまだですか？」

「君、ほんと足早いね。息もあがつてないし。じゃあ、患者さんに薬を届けるのもやつてくれる？」

「お安い御用ですっ！」

固定給＋出来高制なので、トムはとにかく貪欲に仕事を欲しがった。

（こりゃ、クララの言う通りにしてよかった人材だな。字は汚いけど、全然問題にならないや。暗記力がものすごいから口頭でお使いができてカバーできるし）

日々最速タイムを切るトムの俊足ぶりにファルマが驚くと、薬局でファルマのつくった生成水のおかげで早く走れるようになりまして、と彼はさわやかに笑った。ファルマのおごりで、仕事帰りに帝都浴場でひとつぶる浴びているのもよいのかもしれない、と彼は話す。

ファルマは、汗を多くかくトムのためにスポーツドリンクを作つて持たせると、全然疲れなくなったといつて喜んで走つていった。

トムはクロードからも、ちゃっかりお菓子のお駄賃を貰っていた。

さらにロツテが時々、トムからお菓子のおすそわけを貰って小さな好循環となっていた。

## 6章2話 連絡人の採用と、船酔いについて（後書き）

### 【謝辞】

・本項は、創薬計算化学の専門家で医師・医学博士のhigemoto先生に酔い止めの薬についてご指導いただきました、ありがとうございます。

## 6章3話 乳腺炎とブランシュの進路について（前書き）

学会シーズンでたてこんでいて、更新が遅れて申し訳ありません。

### 6章3話 乳腺炎とブランシュの進路について

「ロツテ、これあげるー」

「え、ブランシュ様、おやつくださるんですか？」

ある日のド・メディシス家のブランシュの部屋で、ロツテとブランシュの間でそんなやり取りが行われていた。ケーキ一個に目を輝かせて喜ぶロツテである。

「お嬢様どうなさったのです？ お腹のお具合でも悪いのでしょうか」

「ちがうのー。でもケーキものに通らないのー」

「何かお悩みでも」

悩ましげなブランシュが心変わりしないうちにケーキをせつせと口に運びながら、ロツテは心配そうに尋ねる。ケーキと引き換えに悩み相談に乗らねばなるまい、という雰囲気になっている。

「兄上たちがおりこうすぎて、ちつともほめてもらえないことに気付いたのー」

ブランシュはかわいらしく頬をふくらませながら、ロツテにささやかな悩みを打ち明ける。

「どうやったら父上と母上たちにほめてもらえるかな？」

「そうですね。旦那様はあまりお褒めになりませんが、奥様はお褒めになっておられるのでは」

「怒られるほうがおおいのー。お勉強ができたらいいのかな」

たぶんそうでしょうとロツテは思うが、それを言うとブランシュが拗ねかねない。

「ファルマ様やパツレ様にうかがっては」

「だめだめ。兄上たちには私のきもちなんて分からないだもん。ロツテには分かる？ 私の気持ち」

ロツテはうーん、と人差し指を立てて考えてから、

「えーっと、私はそもそもあまり褒めてもらったことがないので…

…私もお嬢様のお気持ちにはなかなか理解いたしかねますが……」

ロツテは笑顔で、悪気なく召使い丸出しのコメントを出した。

上を見上げればきりが無いが、下を見ればロツテがいた、という状況だ。

ブランシュは空気を読んだのか、子供ながらに気まずそうな顔になる。

「そういうことが聞きたいんじゃないのー」

「確かに、パツレ様もファルマ様も完璧でいらつしやいますものね。神術がご上達なされば、褒めていただけるのでは」

「神術はいちおうやってるけど、勉強は何もやってないしー」

ブランシュは机の上に頬杖をついて溜息をもらす。

「お嬢様はまだ7歳でいらつしやいますから、お勉強はもう少し大きくなってからで……」

「兄上たちはもう7歳のときには薬師のお勉強してたもん」

確かに、ブランシュはブリュノからは、神術の訓練をしるとは言われているが、学問をしるとは強くは言われていない。彼女は母親のベアトリスから読み書き計算を習っているぐらいで、薬師としての正式な家庭教師もついていなかった。

「では、旦那様に伺います？」

「そうするー」

そこで、ブランシュは、大学から帰宅したブリュノのあとを追いかけて一緒に彼の執務室について入った。

ロツテもドアの傍までお供をする。ブリュノは執務室でコートを脱ぎ、どっかりと椅子に腰を下ろして書類を広げはじめ、弟子がそれを手伝っている。相変わらず、威厳のある父親である。

「なんだ、ブランシュよ。そんなところに突っ立って」



そんな忙しそうなブリュノに、ブランシュは思い切った質問をぶつけた。

「ちちうえー。私って、しょうらい薬師になるの？」

ブリュノは仕事の手も止めず、苛立たしそうに聞き流した。

「なぜそんなことを聞く。我が家の家業は薬師だ、薬師以外に何になりたいというのか」

薬師になるのが、さも当然だと言わんばかりだ。

「でもー、私まだあにうえたちと違って、薬師の先生いないのー」

「ああ、そういえばお前もそんな年齢だったな。エレオノールに家庭教師をするように命じておくから、彼女を師としなさい」

ド・メデイシス家の薬師育成の教育方針としては、家庭教師をつけるか、学校に入学させるかのいずれかだ。渋々でも服従の返事がないので、ブリュノはむっとしたように顔をあげた。

「薬師になるのは不服か。それとも、エレオノールが不服か。彼女は帝国で数本の指に入るほどの名うての薬師だが」

「そういうわけじゃないけどー」

「親に向かって何だその態度は。何かやりたいことがあるならば、自由にしても構わん。お前の守護神は水神だから、薬師になる責務はない。それにお前は勤勉でないし、不注意も多く、失敗をごまかすし、粗忽者だ。おまけに勉学に対する姿勢もなっていない。お前は薬師には向かぬ」

ブリュノは弟子たちの前で、ブランシュをこきおろしはじめた。

弟子たちはいたたまれなくなっ、その場の作業に専念するふりをする。ブランシュは涙目になってきた。

「それって薬師にならなくてもいいってこと？」

「うむ、薬師は人の命を預かる仕事だ。半端者はいらん」

ブリュノは言い捨てた。ブランシュは泣きながら走って部屋を出た。

「父上に、薬師にならなくてもいいって言われたー。そこつもので

はんぱものだからってー。ほかにも色々怒られたー」

「ええーっ！？ 本当でございますか！？」

涙をぶらさげ、しよげながら戻ってきたブランシュを出迎えたロツテは、あまりに厳しいブリュノの評価に絶句した。ブリュノの、ファルマやパツレに対する薬師としての評価は高い。だから、それと対照的に、ブランシュへの叱咤激励ともつかないこき下ろしは意外だった。

「そこつものってどういう意味？ いい意味じゃないよね」

「そ、それは……どうでしょう」

ブランシュはロツテが返答に詰まったので、意気消沈していた。思いがけない戦力外通告をされて頭をかかえるブランシュを、ロツテがなぐさめる。ブランシュは悔しかったのか、ロツテの服の裾を掴んだ。

「お嬢様は薬師になりたかったのですね？」

「……うん。でも、薬師にならなくていいとしたら、ほかに何があるんだろう」

「お嬢様の職業適性、ですか……」

ロツテは、ブランシュを食堂に案内し、お茶をすすめる。そしてブランシュの前にファルマの本棚から持ちだした一冊の書物を置き、それをブランシュに開いて向ける。

ロツテはファルマの本棚を自由に借りていいと言われてからというものの、少しずつ読書がはかどって教養を身に着けていた。

ロツテが手に取ったのは、神術属性の適性と職業を扱った書物だ。

「なあにこれ？」

コップに口を付けながら、ぐったりとしているブランシュにロツテは内容を説明する。

「お嬢様の守護神である水神様の職業適性です。医師、薬師、芸術家、音楽家、詩人など、人に癒しを与える関連のお仕事のようによ。ほら、こんなにたくさんありますよ！ どれがいいですかねえ！」

水神を守護神に持つ者は、これといった職業適性が決まっていな  
い部分があり、何になれと強いられることはないぶん、職業選択の  
自由度は高かった。それが、ファルマやパツレのように、薬神を守  
護神とするものは希少なので、半ば強制的に薬師への教育が施され  
る。医神を守護神とするクロードも、同じようなものだった。

「うーん、どれもやったことないから、どれがいいか想像もつかな  
いし悩むのー」

ロツテはあることを思い出して手を打った。

「あ、そうだ。クララ様に占っていただきますか！ クララ様は未  
来のことが分かるようです！ お嬢様の適性も分かるかもしれませ  
んよ」

「うん。そうするー！」

思い立つたら吉日と、ブランシュはクララのもとへ使者を送って  
面会予約を取った。

ブランシュとお供のロツテ、そして数人の従者でクララの屋敷を  
徒歩で訪ねる。

クララが居候しているクロエの屋敷は、ド・メデイシス家から徒  
歩十分ほどのところにある。

「いらつしやいませ……」

一行が屋敷の中に足を踏み入れると、クララはエントランスの階  
段スロープに干物のように引っかかっていた。

今日はジャンとの航海の打ち合わせがあつたので頑張りすぎたと  
いうクララは、午後も怠惰モードに入っていたが、ファルマの妹の  
ブランシュが来訪と聞くと依頼を快諾したのだそうだ。

「えっ？ 将来を占ってほしいのですか？ それでは、はじめます  
ん」

瞑想部屋と名付けられた真っ暗な部屋の中に、蠟燭で明かりがぼ  
つぽつと灯され、神術陣の敷かれた怪しい祭壇の上でクララは瞑想  
したまま踊り始める。数か月先の未来は普通に見えるのだが、かな

り先の未来となると特殊な儀式を必要とするようだ。

「はいーっ！ はいっ、はいっ、ゆんああああー！ー！」

奇声を発し始めた。どうやら、彼女の神術は舞踏神術の流れを汲むらしいが、

「父上の踊りとはちよつと違うみたいなのー」

ブランシュがロッテにこそそと告げる。

軽やかにステップを踏み、踊っているときのクララは妖艶で、奇声こそ発して危ない感じになっているが、神がかり的な美を秘めていた。

「はあっ、ひいっ……！」

ひとしきり踊り猛ったあと、クララはブランシュとロッテの前にスライディングで倒れ込んだ。

精魂尽き果てたらしい。

ロッテが思わずクララの呼吸を確認してしまうが、辛うじて生きていた。

「だ、大丈夫ですか？ クララ様」

「ひい、ふう、ただの神力切れですん……。ブランシュさんの未来、はつきりとは見えませんでしたあ……。頑張ったんですがー……！」

はあ、はあ……。とつてもがんばったんですがー！……。が、ちよつとだけ見えましたん」

「伝わってきます……。とつても！」

ロッテは両手の拳を握った。神力切れをするまで神術を使うというのは、はしたない事とされているので、ロッテもあまりその場面に遭遇しない。ファルマが神力切れを起こしたのを見たことがないし、ブランシュはそこまでハードな神術を使わない。

パツレが時々、訓練後に神力切れで倒れるのを介抱するぐらいだ。「お嬢様！ クララお嬢様！ お気を確かに！」

クララの侍女が、倒れ伏して微動だにしないクララを表にひっくり返すと、彼女は白目をむいていた。侍女が神力計で測ると、かな

りの消耗をみせていた。

「キヤーツ!? お嬢様ーっ! 大変、こんなに神力が下がっておられて! お嬢様、神力の使い方を、まだお慣れになっておられませんか……無理なさってしまうんです」

神脈が開いてまもないクララは、神力の出力の加減がよくわからないのだ、と侍女は言う。

「お苦しそうです。ファルマ様にお知らせしましょうか?」

見かねたロツテがクララに尋ねると、クララの手だけがふるふると震えながら拳がった。

何とか呼吸を整えて言うことには、

「っ、ちよつとっ、透視する時期が遠すぎたみたいですね……神力を使いすぎましたん、私はこのまま寝ますん。力を使いすぎたので二日ぐらい寝ますん……ね」

「え、二日寝るんですか?! あ、ありがとうございましたあ……」

「たぶん、医に關係する仕事です……よ? たぶん」

クララはそれだけ言い残すと、ぶっ倒れてしまったので、ロツテとブランシュはクララの屋敷を退散した。

「医に關係する仕事って、やっぱり、薬師になるのかなあ」

帰宅後、少しだけ元気を取り戻しつつ悩むブランシュを、ロツテは優しいまなざしで見ていた。

「エレオノール様みたいな女性薬師になられるんですね、かつこいいですよね!」

照れくさそうな顔がけなげで、ロツテはくすりとはほ笑んだ。

「じゃあ、今日は練習のために薬師ごっこをするのー! 私が薬師で、ロツテはお客さんね!」

ロツテは薬をはかる吊り天秤を出してきて、ブランシュの前にセツトする。

どこことなく、ままごとの様相を呈してきたが、ロツテが真面目に患者を装ってブランシュの前に座る。

「頭がいたくて、咳も出るみたいなんです。薬師様、お薬の調合をおねがいします！」

「がんばるのー！」

まずは厨房で借りて来た小麦粉で秤量の練習だ。

ブランシユは最初はおそるおそる天秤に粉を乗せていたが、だんだんと緊張も解けて来てスムーズに量り取れた。

「これだったら、薬局のおてつだいもできそうな気がするのー」

少し油断したのだろうか、ブランシユは得意になっていっているうちに手が滑って薬さじを落とし、粉が天秤の下に飛び散った。その粉が舞い上がってブランシユの鼻に入り……

「ぶうえつくしょん！」

盛大なくしゃみで小麦粉が全部飛び散ってしまった。ブランシユは顔が真っ白になって半泣きになった。ロツテも真っ白になって目だけがぱちぱちしている。

「もう一回やりますか、お嬢様」

「やーん、失敗したのー。薬師は向いてないみたいなのー」

諦めも早いブランシユである。

「向いてないことはないと思いますが……もっと練習をなされば。粘り強くやりましょう！」

ロツテがブランシユを慰めていると、自主トレを終えたらしいパツレが、あきれた様子でやってきた。

「何を盛大に散らかしているんだ、お前ら？ 天秤も片づけておけよ。何をしてたんだ？」

「ブランシユ様と薬師ごっこをしていました！ 今は秤量の練習を」  
ロツテが説明する。

「あー？ 薬師ー？」

それを聞いたパツレは明らかに馬鹿にした口調だったので、ブランシユは恥ずかしそうにそつばを向いた。

「な、なんでもないのー！」

「そんなことをしている暇があるなら神術訓練に行くぞ。最近お前訓練サボって行ってないだろ！」

「いやー！ 大きい兄上とはいやー！ 小さい兄上と行くのー！」  
ブランシュはジタバタと抵抗したが、真っ白の顔のままパツレに引きずって行かれた。

「行ってらっしゃいましー」

ロツテは顔をぬぐいながら手を振って見送った。

「薬師になれる自信がない？」

大学から帰ってきたファルマが、疲れ果てたブランシュの悩み相談を受ける。

ブランシュはパツレにしごかれて、へとへとになった後だった。

「あい。父上には向いてないって言われたし、薬をはかるのもうまくできないのー。あと、お勉強もきらいだしー計算も間違えるしー……私、兄上たちみたいにすごくないんだもん……」

「えーと、やりたい気持ちはあるんだ？」

「あい。でも……兄上たちみたいにすごくできないとおもってファルマは思うところがあって、ブランシュの頭を撫でてこう言った。

「エレンの仕事、見てみる？ 俺や兄上がやっている薬師の仕事とは、少し違うものが見えると思うから」

翌日、往診をするエレンに、ブランシュを同行させてもらうことになった。

「ブランシュちゃんを？ え？ いいわよ。今日はド・ディオン夫人に呼ばれてるのだけど」

「じゃあ、なおさらエレンに任せるよ」

ファルマは完全にエレンにお任せの構えだ。

「あにうえは行かないの？」

エレオノールと面識がないわけではないし、二人で行ってもかわないのだが、やはりファルマについてきてほしいブランシュである。

「俺は行けないんだ。ていうか呼ばれてないしね。エレンに、俺や兄上や父上ではできないことを見せてもらっておいで」

「兄上たちにも、父上にもできないこと？」

「ああ、そういう意味ね。ではブランシュちゃん、行ってみましようか」

ブランシュの問いに、エレンがファルマの意図を察してにこやかに微笑んで答えた。

「あい」

エレンはブランシュを自馬にのせて、郊外のド・ディオソ男爵の屋敷に到着した。

「さ、行ってみましようか。往診についてくるのは、ブランシュちゃんも初めて？」

「あい。誰も連れていってくれなかったのー」

ファルマやパツレなどは、ブリュノに連れられ、幼少時から皇帝を含む上得意客の診察に行つて薬師としての知見を積んでいたが、ブランシュはそのようなことは一度もない。

薬師としての修行も始まっていないので、往診への付き添いもないのだ。

ちよつとだけいじけたブランシュを、エレンが慰める。

「じゃあ、今日が薬師としての修行の最初の日よ。ブランシュちゃんもかわいいから、大事にされていたのよ、お師匠様もきつとね。診察中は後ろに控えていてね」

「あい。きんちようするのー」

エレンは下馬し、門番に取り次いでもらつと、家令が出て来た。

「ようこそいらつしゃいました、ボヌフォワ師。ええと、このお嬢様は？」



「ブランシュ・ド・メディシスです」

見慣れない美少女の付き添いに、来客に応じた男爵の家令が不審がる。

「ド・メディシス家のご令嬢ですの。診察を見学してもかまいません？」

「ド・メディシス家……宮廷薬師の尊爵家の！なるほど、それは、名薬師としてのご成長が楽しみですな。どうぞ付き添ってください、御夫人はこちらです」

異世界薬局を利用しない貴族の間でも宮廷薬師一家の名は広く知られていて、機会があれば名薬師である宮廷薬師ブリュノ・ド・メディシスに診てもらいたいと、誰もが羨むほどだ。ブリュノは決して下級貴族や庶民は診ないのだが……。ド・メディシス家と繋がりができるというのは、ちょっとした下級貴族のステータスになるので、家令はブランシュの来訪を歓迎した。

「もしかして、父上と兄上の名前、皆知ってるの」

ブランシュは改めて、尊爵家の影響力というものを思い知ったらしかった。

「そうよ。国中の人が知っているわ。尊爵家の令嬢に生まれたこと、誇りに思っていると思うの」

「えらいのは父上や兄上だもん……」

ブランシュの心境は複雑なようだった。

エレンを呼んだ貴婦人は、かなりの高熱を出してベッドに横たわっていた。

「助けてください、ボヌフォワ先生。胸が腫れて……痛くてたまりません」

「今、拝見しますわ」

エレンは婦人のたわわな胸を触診などをして、神力の流れを診た後、固くなった婦人の乳房に触れてしこりが発生しているのを見つける。

「まあ、真っ赤になってカチカチになっていますわね」

「そうなんですの」

ブランシュは部屋の隅にひかえて、エレンのすることを見学していた。

「お胸を見せてください。そうですね、ここにしこりがございますから、これが原因となった、感染性乳腺炎でございましょうね」

エレンは原因となった胸のしこりを見つけた。以前の定期診察では発見されなかったしこり。熱を持つそれは、乳腺炎の特徴だ。

エレンは診察記録をノートにつけて、症状を書く。

あとで、ファルマに処置と処方を確認してもらったためだ。

「お薬がありますの？」

婦人は無意識に胸を隠しながら、苦しそうに尋ねる。

「そうですね、ありますが、まずは詰まりが取れるか試してみましよう」

乳管に、母乳が凝固して詰まり、そこが細菌感染を起こして乳腺に乳が溜り、乳腺炎が起こる。詰まりが取れば乳管が開通し、乳腺炎は解消するのだ。

エレンはガーゼハンカチを出し、水盆に神術でお湯を張ると、ガーゼに浸した湯で乳頭部を柔らかくし、詰まった母乳の栓を指を使って取り除き、次に乳腺（乳房）をマッサージしてうっ滞している膿を含んだ乳を絞り出す。

「少し我慢をしてくださいまし」

エレンの表情は真剣そのものだ。夫人は痛がるが、エレンはもくもくと処置を続けた。

ブランシュはそんなエレンの様子をしっかりと目にやきつけているかのようだった。

ほどなくして、ぴゅーっと、母乳がガーゼの下で吹きあがった。

乳腺が開通したのだ。

それとともに、化膿して変色した母乳がどろどろと出てくる。

「ああ、出ました！」

夫人がそう言うので、エレンはほっとしたように声をかける。

「よかったですね。これが全部抜ければ、元通りの状態になりますよ」

エレンは手も顔も、吹きあがる乳まみれになるのをいとわず、処置に取り組んでいた。

「お乳の通りをよくする、副作用の少ないハーブのお薬があります。それを出しておきますね」

エレンは乳頭の処置を一段落させると、母乳まみれになった顔をぬぐってハーブを調合する。

ファルマの現代薬では、マッサージを行わない場合乳腺炎には解熱鎮痛剤と抗生剤となるのだが、乳管の詰まりが取れて膿が出てしまえばそれらには必要ない、あとは回復を待つばかりである。エレンは現代薬と伝統薬の長所を使い分け、補助的な療法に切り替える。

「今、赤ちゃんの授乳は乳母が？」

「はい、乳母にやってもらっていますわ」

貴族社会では、育児は乳母に任せるのが一般的である。

「奥様の場合は、奥様ご自身が授乳したほうがよいかもしれませんが、とてもよく張るお乳ですから。ご自身で授乳すれば乳腺炎も起こりにくくなりますし、赤ちゃんとも触れ合えます。赤ちゃんも喜びますしね」

「まあ……でも、薬師様がそうおっしゃるなら」

エレンがそういうと、侍女が赤ちゃんを連れてきた。エレンは暫く搾乳したあと、乳首に吸いつかせた。

赤ん坊は、ごくごくぐりと美味しそうに乳を飲む。それを見たエレンは、夫人と気持ちを通わせるように、穏やかな顔つきをしていた。

「ああ、張りがおさまってきました」

「赤ちゃんも満足そうです。熱もじきにひいてくると思います。奥様は、風属性でしたわよね」

「はい」

「”水の癒し”」

エレンは最後に、夫人の両手を握って自らの神力を流し込み、夫人の神脈を整える神術をかける。澄んだ青い光が夫人の体を包み込み、夫人の神力と融和してゆく。

エレンの診察では、特に重要な疾患でない限りアフターケアとして神脈の調整まで行う。

神力が枯渇していれば、補給したりもする。

「熱や腫れが引かなかったら、また連絡をしてください」

「ありがとうございます、救われました」

異世界薬局勤務でブリュノの弟子ということを差し引いても、エレンが巷で人気薬師とされる理由を、ブランシュは垣間見たのだった。

「初めての診察の付き添い、どう思った？」

帰り際、残照が消えてゆく、ド・メデイス家への帰途をゆつくりと馬に揺られながら、エレンはブランシュに尋ねた。

「薬師の仕事って、薬を出したりするだけじゃないの。患者さんがもとの健康な状態になれるように、あらゆる手段で臨むのよ。きかない仕事もあるし、精魂尽き果てたり、こわいこともあるわ。血まみれになったり、そんなこともしょっちゅうよ」

エレンはブランシュに告げる。

「それでも、患者さんが嬉しそうにしてくれるとね。やっててよかったと思うの、薬師」

「かつこいいと思った。確かに、これは父上や兄上にはできないんだね」

「そうね、婦人科のほうは、男性医師や薬師にも診察できるのかもしれないけど、まだ患者さんのほうに抵抗があるわ。特に貴婦人はね」

貴婦人たちは、どれだけ腕がよくても、ファルマら男性薬師を決して呼ばないのだ。

夫が男性薬師の診察を許さないという場合もある。

また、彼女らは気位が高いので、下級薬師も呼ばない。そういう人の求めに応じるのも、高貴な身分にある女性薬師の大事な仕事なのよ、とエレンは少しだけ胸を張って言った。

「エレオノール先生、私の家庭教師になってくれない？」

「あら、ファルマ君じゃなくて私に頼む？」

「あい！」

「それなら、呼び方はエレオノールじゃなくて、エレンでいいわよ」  
エレンはウィンクした。

「あにうえー」

ブランシュが、屋敷に戻ってきてファルマに往診の報告にやってきた。

「どうだった？」

ファルマは食堂の机で、学生のレポートの採点をしていた。

薬学史をまとめさせたレポートはかなり厳しい採点で、再提出も何名かいる。

一人だけ数十枚も書いてきたエメリツヒのレポートは読みごたえがあった。

「薬師になりたくなつたー」

言葉は単純だが、その言葉はやる気のないものではなく、力がこもっていた。

「そう。勉強させてもらったみたいだね。女薬師にしかできないことがあるんだよ。そういう仕事は、やりがいがあると思うんだ」

「兄上も、おっぱいもみもみはできないもんね。ひっぱたかれるもんね」

随分と直接的な表現が出て来たので、ファルマは慌ててブランシュの口をおさえる。おっぱいもみもみと聞いた、経緯を知らない使用人が何人が振り返った。

「まあ、俺も産婦人科領域についてはエレンほど詳しくないしね」  
ファルマは平静を取り繕いながら、学生のレポートの採点に戻る。

「がんばってみる！ エレン先生についてがんばる」

ブランシュは大きく一つ頷いた。エレンについて基礎的なことを学んだら、厳しい倍率の入学試験を経て、ファルマが教鞭をとるサン・フルーヴ帝国医薬大学校へと入学する道もあるかもしれない。

「じゃ、一緒に頑張ろっか。一緒に、同じ薬学の道を歩んでいこう。ほかにやりたいことができれば、そっちをやればいい。途中までも同じ道をゆけば、助けてあげられることがたくさんあるからね」

ブランシュの進路が生まれによって決まっているとは思いたくない、ただ、望んで薬師になってほしいとファルマは思った。

「あい！ あにうえ、よろしくね」

どうやらブランシュは、嫌々ではないようだ。

ファルマとブランシュは固く握手をかわした。

それは兄と妹との固い絆を確かめ合い、そのうえに、薬師としての先輩後輩としての挨拶でもあった。

聞き耳をたてていたロッテはほっとしたように、食堂を去って行った。

翌日から、ブランシュは少しだけ熱心に勉強をはじめた。

しかし、机に向かつてしばらくすると、居眠りをしたり課題に飽きる癖はすぐにはなおらなかった。

< i 2 1 3 2 5 6 — 2 4 9 6 >

## 6章4話 脱臼と解剖実習と神術実習

1147年11月。

とある日の午前中のド・メディシス家の屋敷では、ロツテとファルマが二人連れだつてブランシュの部屋へと押しかけていた。おおっぴらにではなく、おそろおそろ、といった様子でだ。

「どう？ 捗ってる？」

「おじゃましまあす。エレオノール様にお嬢様、おやつ持ってきたよー」

部屋の中には、ブランシュとエレンが、木机に対面に座つて課題を広げていた。

エレンはブランシュの隣について、熱心に指導中だった。

「なにになに？ もうおやつ？ まだ授業始めたばかりよ。気になっちゃうのね、あなたたち」

ブランシュを指導していたエレンが苦笑する。

「ブランシュの勉強はどう？」

ブランシュは早くも計算が分からなくなつたらしく、ペン軸をくるりと指で回していた。

ファルマから見るとどう見ても飽きる寸前の顔であるが、エレンの手前、我慢しているようだった。

「うん。おべんきょーがんばってるのー、わかんないけどーがんばってるー」

「お嬢様、計算の小テストはいかがでしたか？ 実力を発揮できましたか？」

小テストがあると聞いて困っていたブランシュに、計算の得意なロツテが前日に教えたのだ。

「だめだったのー」

ブランシュは目をぎゅつとつぶつて、バツ印をつくる。ロツテの

労力は報われなかったようだ。

「だめでしたかぁ。おやつを食べて頑張ってくださいませね、脳には糖分が必要だってファルマ様の教科書に書いてありましたよ」

ロツテはブランシュを励ましながらおやつのはつをする。

ファルマの薬学の教科書の中でも、食に関する部分だけははつきり覚えているロツテであった。

「ファルマ君とロツテちゃん、ブランシュちゃんが気になって見にきたんでしょ？」

エレンが、お菓子をつまみながら指摘する。

「まあね。ブランシュは実の妹だからな。気にもなるよ。でも、エレンのほうが神術にも詳しいし、婦人科のことも教えられるし」

「あらー、もしかしてファルマ君が直接教えたかったの？ ブランシュちゃんのお勉強」

半分ぐらいは凶星だった。エレンにはお見通しのようだ。

「そうもいかないからね。仕事が増えて大変だけど、妹をよろしくね、エレン」

ブリュノの命令もあり、ブランシュは正式にエレンの弟子になった。

ブリュノ、ファルマ、パツレがブランシュに教えてもいいが、兄妹だと甘えや我がまが出るので師弟関係としてはよろしくない。

他人に教えてもらうほうが適度な緊張感を保ててよい、というのがブリュノの意向だ。

それに、将来的に女性特有の疾患に対応できる薬師になるには、同じ水属性の女薬師の弟子にしたほうがよいだろうとの判断もあった、とのこと。

「ブランシュちゃん。今日はお勉強はこのくらいにして、おやつ食べたら神術訓練に行きましょつか。今日は水属性の基本の発動詠唱をマスターしましょ」

エレンがブランシュを誘った。

「あい！」



勉強はともかく神術の腕前は人並み以上のブランシュは、機嫌を直してにつこりと頷いた。

「私も弟子に神術の個人レッスンをつけるのは久しぶりだわ」

エレンも、ブランシュには教えがいがあるようだ。面倒見のよいエレンである。

「ちょ、俺っていう弟子が教わってたじゃん」

それを聞いたファルマはエレンにすっかり忘れられているので、自分を指さしてうつたえた。

エレンはいーえ、と左右に首を振る。

「無詠唱神術を使えて、思いのままに神術を操る誰かさんは弟子にカウントしないの。だいたい、私が教えたこと、あなたの神術ではほとんど使えないじゃない」

どうやらもう、エレンはファルマを弟子だとも思っていないようだった。

「俺はエレンのこと、今でも師匠だと思ってるよ」

エレンはファルマの発言に、少しだけ驚いたような顔をした。

… … …

「あれ。どうしたのエレン。肩をおさえて」

数時間後、ファルマが薬局で通常業務をしていると、エレンがへろへろになって薬局に戻ってきた。珍しく余裕のない顔をして、顔面蒼白で、冷や汗をかいている。

「肩が痛い？」

ファルマは書き物をしていた手を止めて尋ねる。

「エレオノール様、顔色わるいデスネ」

「ご気分が悪いのですか？ お茶を飲みます？」

調剤をしていたバイトの薬師、ロジェとセルストたちも心配して、エレンの体を支えた。

エレンは痛みをこらえてか、歯を食いしばっていた。

「皆ありがとう。助けてファルマ君。ブランシュちゃんと神術訓練をしていたら、ブランシュちゃんが神術の軌道を外しちゃって。それをフォローしようと思ったら変な体勢になって肩も外れちゃったの……。自分で応急処置をやってみただけど、はまらなくて」

「肩が外れたのは初めて？」

「ときどき外れるのよー……」

無理にはめようとしたらしく、かえって痛めたようだった。

「反復性の脱臼か。とりあえず、外れてるならはめようか」

ファルマは診眼を使いながら、エレンの肩の状態を診て、確かに右肩関節の脱臼であることをみとめると、二階に連れていき診療台の上にうつ伏せにねかせる。

「どうやってはめるの？」

エレンは説明を求める。

「腕を診療台の下に、垂直に垂らしてみて」

ファルマがそう指示するので、エレンは半信半疑で腕を診療台下へ伸ばす。

「ええっ、はめないの!？」

力わざではめるものだとばかり思っていたらしいエレンは、物足りなさそうにベッドからファルマを見上げる。ファルマはそんなエレンをなだめた。

「はまるから、言う通りにやってみて。脱力して。しっかり力を抜くんだよ」

「うっん……痛くてこわばっちゃうわ……」

ファルマが背筋を撫でるとようやく脱力したエレンの腕に、ファルマは腕輪状の重りをつけた。

かなりずっしりとくる重さだ。

「ちよっとーファルマ君どういうことー? こんなことしていいわけー? 余計痛めない?」

「いいからいいから」

そのままの姿勢で、エレンにしばらく安静にしてもらう。

十分ぐらい経過しただろうか。

ファルマはエレンの腕の状態を確かめて、これでいいと頷いた。

「ゆっくり起きてみて、もういいから」

「あつ、はまつてる！」

「自分で整復せいふくできるから、覚えておくといいよ。おや、神経が損傷しているな。肩を出して」

ファルマは人差し指を立ててエレンのはだけた肩に指を差し入れ、体内の神経へと神力を注いで損傷を治癒した。あとは、非ステロイド性消炎鎮痛剤の湿布を貼る。

「あ、ありがとう。一大事だと思ったのに、君はなんてことなく治すのね」

「いやいや、エレンが自分で整復やったんだよ。俺は何もしてない。それより応急処置をしたけど、損傷が完全に治ってるわけじゃないから、しばらく安静にしたほうがいいよ」

今日はゆっくり肩を休めるわ、とため息をついたエレンははつとした顔になった。

「そうもいかないわね。明日神術実習があるのよ、しかも明日は実戦なの。明日までに治さないといけないわ、どうしても」

「明日はやめておいたほうがいいな。エレンの講義、俺がやるところか？」

エレンの仕事が増え、ブランシュの訓練に付き合ったうえでの負傷なので、ファルマは気を回した。

「実習は講師との実戦形式での訓練なのよ。くれぐれも言うておくけど、ファルマ君は学生と試合しちゃだめよ。また闘技場の修理費が発生してしまうわ……秘書のゾエちゃんが失神してしまうわよ」

エレンは思い出したいくないことを思い出して、事前にファルマを諫める。

3300万フルン、日本円に概算して6億程度の修理費が発生したというのは、ファルマの記憶に新しい。高額修繕費を支払うのはもう、懲り懲りだった。

「わかったよ。学生と試合をせずに、学生の神術訓練をすればいいんだよね？」

「ええっ、不安だね。どうやってやるの？」

エレンは目を大きく見開いた。

「はは、何とかなるよ。俺って信用ないかな」

そういう意味じゃなくて、とエレンは前置きをする。

「薬学に関しては信用しているけど、神術に関しては、いつもやりすぎるじゃない。あんまり自覚がないみたいだけど」

「反省しないとな」

そんな事を言いながら、ファルマは軽い調子で引き受けた。

… … …

翌日の午前中は、帝国医薬大学校では、医学部長にして侍医長であるクロード・ド・ショーリアックが担当する、新・人体解剖学の実習が行われていた。

ファルマも、初年度はクロードと共同講義を行うためこの講義と実習に参加している。ファルマが最初に講義を行い、クロードが解剖実習をとり行う。学生のみならず、教授陣も見学に来ていた。また、医師・薬師・技師ならば学外者の聴講も認められている。

ファルマは教壇に立ち、三段になっている大階段教室の中央テーブルの解剖台に載せられた、ホルマリン固定済み解剖体の前には、クロードが白衣を纏って屹立している。

彼の隣には、助手をつとめる若い女医が一人付き随っている。

「何度か解剖学の講義を行ったが、この教室で諸君と会うのは初めてだな」

クロードは講義用の杖を教鞭のように持ち、学生や教授らを見渡しながら言葉を発した。

「どうだね、この教室は。たいしたものだろう」

クロードは両手をひろげ、新しい教室を誇った。大学再編によって誕生した新しい大階段教室は、他の大学の解剖学教室とは違って、受講者にも優しい意匠が凝らされていた。

大階段教室との名の通り、解剖学講堂は階段状の、小さなスタジアムのような構造の教室になっている。

さらに解剖中の臓器の細かい部分までよく受講者に見えるように、解剖台を講堂の天井から映す一对の放物面鏡を設置し、それぞれの焦点距離の差を利用して像の大きさを増幅させる方法で、聴講者は天井付近を見れば解剖台を大きく見えるように工夫されていた。さらに、解剖台周辺は吹き抜けの窓から注ぎ込まれる太陽光を、鏡で明るく集光している。

この工夫は、ファルマが建築士に提案してこしらえて施してもらった仕掛けだ。大階段教室は実習室に隣接しており、学生は隣に移動して解剖体の解剖を行うことになっている。

「それでは、解剖学実習をおこなう。この講義と実習は必修だ」

学生は、医学部、薬学部、臨床検査学部の全学部学生の参加が義務付けられ、学生たちにとっても、絶対に落とせない講義だった。

「実習は私が行うが、講義の大部分は、ド・メディシス教授にも共同で行っていただく。彼は解剖学にも明るいからな」

クロードは杖をファルマに差し向ける。

「よろしく願います」

ファルマは教壇で手を挙げてにこやかに応じた。

（つて、別に明るくはないんだけどさ……他に適任者がいないしな）  
薬学者であつたファルマは、はつきり言つて人体解剖学に明るいわけではない。それでも、動物実験で培ったこれまでの知見と、研究室から持ち出したPCの中にコピーしていた人体の資料から、かなり正確な解剖学の講義資料を作成することができた。

あとは、実際に人体を解剖してクロードに人体の構造を探求し、機能を実証してもらう。

組織や各部の名称は、彼らが自由につければいい。

すぐ切る！　すぐ手術！　ついでに皇子の歯もすぐ抜く！　という当初のイメージが強く、クレイジーサイコな侍医長だと一時期はファルマに恐れられていたクロード。

だが、実際に数え切れないほどの人体を手術や解剖し、その構造を見てきた侍医長は、ファルマなどとは比較にならないほど臨床経験が豊富で、クレイジーでもサイコでもない、ただ少し残念な医師だ、というのはここ最近のファルマの感想だ。だから、ファルマは安心してクロードに任せることにした。

「では、人体の構造のおさらいをしましょう。人体には頭蓋と、脊柱、そして上肢と下肢で構成されています。ここからここまでが体幹で、上肢帯と下肢帯はここまででしたね。そして、自由上肢と自由下肢といいましたね。それから……」

ファルマは骨格と人体標本を横に置き、杖で示しながら人体の骨組みと構造の説明をしてゆく。

「今、シヨールiak教授の前の遺体はおおむね、つまり背臥位になっていて、親指が体の外側になっています。解剖学的な上下と左右、前後の方向をしつかり頭にいておきましょう。人体を左右対称としたときの対称軸平面は、正中といいましたね。正中に近いほうを内側、正中から遠いほうを外側といいますね」

ファルマが標本を示しながら述べ、クロードが時々口を挟む。

「ちなみに、実習のときには諸君の解剖遺体は、二人につき一体ある。帝国で執行された死刑受刑者、および不慮の事故で亡くなった遺体を滞りなく手配するよう御下命くださった、エリザベート皇帝陛下に感謝し、遺体に礼意をはらい、よく学べ」

クロードは学生一人につき一体の解剖を女帝に求めたが、実際は遺体を確保するのが困難であつたため、二人から三人で一人の遺体を解剖することになった。

「これらの遺体は、ド・メディシス教授の新保存法をもとに一年近くをかけて保存処理をし標本としたものだ。これまでの解剖学実習

と違って、解剖中に腐敗しない。じっくりと解剖することができる」  
クロードはしっかりと、これまでとは違う心構えで解剖体と向き合うと言った。

ファルマが示したように学生たち全員で体表の観察を終えたあと、いよいよ人体解剖の実演が始まる。  
クロードは学生たちを激励する。

「私たちは誰も、人体について教えられない。過去のいかなる名医の書いた教科書であっても、捨てたまえ。それらは紙くずだ。前回の講義でも述べたように、解剖学は白紙に戻す。答えは書物の中にはなく、解剖学の答えは人体の中にあるのだ。それでは人体を解剖し、真実を観察しようではないか」

クロードは解剖体の皮膚に、ナイフで皮切線（割）を入れた。

解剖のはじまりは、表皮をはいでゆく作業だ。

「帝国医薬大学校 第一回生たる諸君らの最初の使命は、世界で最初の人体透視解剖図を作ることにある。大変な使命だ、よく励んでくれ」

学生たちは固唾をのんで、クロードの解剖の実演を見守っていた。

… … …

「というわけで、肩を負傷したボヌフォワ先生の代わりに、今日の実習は私が担当します」

ファルマは、午前の解剖学の講義を終え午後之神術実習の受講のために実習服に着替えて闘技場に集まった数十人の総合薬学科の学生たちに向けてアナウンスした。平民の、体術訓練に相当する実習はまた別の教官が担当しているので平民はここにはいない。エレンは、ファルマのかわりに薬局業務を引き受けているので実習には顔を見せられなかった。

「うそだろ」

実習の講師としてファルマがやってきたのを見た学生たちが、だよめた。

「ファルマ教授が、神術実習の授業を？」

「あのー、俺、お腹が痛くなってきました」  
逃げ出そうと後ずさるものもいる。

「ついに死人が出る!？」

「病院送りが出るか! 医者と呼ばないと」

ひどい言われようである。ファルマは、前回の神術戦闘の学生への影響を思い知らされた。

「医者なら向こうの研究棟にたくさんいる、一人呼んで来い!」

以前、ファルマがエメリッヒを負かしたのを目撃していた学生たちは、その時のことを思い出して騒然としている。ファルマは古傷をつつかれるような心境になりながら、ガイダンスを続ける。

「えーっと、ボヌフォワ先生からは今日は実戦をしてくれと言われていますので、私が言うようにペアになって最初は準備運動と……」  
「ぜひとも神術試合をしてください! 教授!」

空気を読まないエメリッヒがまったく懲りる様子もなく、ファルマに手合わせを申し込んだ。

「あー、バウアー君はまたの機会にね」

ファルマはエメリッヒとの手合わせにはもう応じたくないのを受け流す。

「流さないでくださいよ教授!」

「君と私では、守護神の相性が悪いと知ってるだろう。だめだよ、神力の無駄」

エメリッヒの守護神は薬神なので、迂闊にファルマを相手にすると、彼の神力がファルマに全て吸われてしまう。大げさではなくエメリッヒは消耗するだけなのだ。

「それでも、ぜひ! 今度は、20通りほど作戦を考えてきているんです」

エメリッヒはろくでもない作戦を考えてきたのか、目をキラキラ



輝かせている。彼はファルマの研究室に入りびたり、根を詰めて致死性家族性不眠症の新薬の研究をしているので、日ごろの運動不足を解消したいところだろう。

「ちよつと待ちなさい！」

どいたどいた、と言わんばかりに、威勢の良い女学生がエメリツヒを押しつけた。

「bauer君はこないだも手合わせしていただいたのにずるいです。ファルマ教授！ 私は火神の火属性で、守護神も薬神ではありません。ぜひとも、お相手お願いします！」

「あつ、抜け駆けしたな！ 私だつて教授にご指導いただきたいんだ」

一部の学生が恐れおののく傍ら、熱烈なアピールと共にファルマを取り囲む学生たちもいるので、ファルマは両手を振って予防線を張っておく。

「えー、私は試合はやりません。先に言っておきます。絶対にやりません。こないだ、知っている人もいますがbauer君と個人授業をやつて、この闘技場の舞台を総張り替えにしてみましたからです。各方面に迷惑をかけました。また舞台を破壊してしまつたら、私の父であるメデイス総長に解雇を申し付けられますからね。あと、秘書のゾエくんが倒れます」

「でも……」

じゃあこの実習で何を教わればいいのか、と学生たちが閉口していたところ、ファルマは学生たち一人ひとりの顔を見つめた。

「今日は実戦のあと、皆さんの神術で伸び悩んでいる部分を、指導しようかなと思います」

実力の近い者同士ペアで神術の実戦をしてもらつて、問題点があればそれを聞くというスタイルにした。

「それでは、私が指定したペアの人と、実戦に入ってください。バ

「ウアー君はーアルファン君とで、オーリック君はベネトー君と」

対戦相手を間違えると、重大な怪我に繋がりがねない。

ファルマはエレンから手渡された、学生の神術属性と技量をまとめた閻魔帳を見てからペアを決める。

闘技場には実戦用の舞台が四つあって、三つの舞台で同時多発的に実戦が行われる。一つの舞台は、練習用として確保した。試合の禁則事項を確認したあと、学生たちは早速実戦練習に入る。怪我を防ぐため、神技の威力を落とす呪符を杖に貼りつけて使われる。

専門の技師によって隔壁生成用神術陣が展開され、青い円筒状のバリアのような壁の中で神術戦闘が始まった。それを見ながら、ファルマは実はひやひやする。

（神術戦闘を大学の敷地内で、しかも舞台の中でやるうって、無理があるよなあ。スペーシ的にも、戦術的にもさ。もっと自然環境を利用しないと、訓練にならないよ）

ファルマは実戦を監督し、エレンの閻魔帳に評価をつけながら、つくづくそう思った。

神術陣の防壁を破るような学生はいないので、一応安全ではあるのだが。

（あ、この子は詠唱が苦手なんだな。そっちの子は詠唱後の防御が甘いな、ぼつと突っ立ってたら狙われるぞ）

個々の学生の、実戦上の問題点を発見する。とはいっても、ファルマの神術戦闘の知識はパツレやエレンから仕入れたもので、ファルマ自身は神術の専門家などではない。それでも、素人目に見ても気づきはあるのだ。どうにか、大きな怪我もなく試合を終えることができる。ファルマはほっとする。

「実戦お疲れ様でした。では私の方から、今の戦闘を見た個々の課題をお伝えますので、名前を呼ばれたら一人ずつ来てください」  
呼ばれた以外の学生たちには、自主訓練に入ってもらおう。

「ジョセフィーヌ・バリエさん」

「はい教授」

獣医の資格を持つ学生である、ジョセフィーヌが呼ばれてやってきた。小柄な体躯に似合わず大型の杖を持って、とことと駆け寄ってくる。

「えーと、君の課題は……神術の基本はできているんだけど、神技はもうちよっと手数が打てるといいかな。何か悩んでいることがありますか？」

ジョセフィーヌは実戦中、一種類しか神技を打っていなかった。巧みな体術と杖術で攻撃をしのいでいたが。神術の腕はいまいちのようだ。

「はい、悩みですがその……ほかの神技ができないわけではないかもしれませんが、神技の威力がとても弱いんです。なので、実戦では使えなくて……自信喪失しています」

薬師として必要な薬の調合に用いる神術は得意でも、戦闘神術が苦手な学生も少なくない。

ジョセフィーヌはそういったタイプの学生だった。ファルマも、戦う薬師を養成しなくてもいいんじゃないかと内心思うのだが、大学の共通カリキュラムなので、神術実習の単位は危ういことになる。

「ボヌフォワ先生には、神力の呼び込みが下手だから練習しなさいと言われてるんですけど、どうすればいいのかわからなくて」

彼女には細かい悩みがあるようだった。

「なるほど。ではその神技を使ってみせてください」

ジョセフィーヌは風神が守護神で、風属性神術を使う獣医だ。

「しよぼしよぼでお恥ずかしいですが」

恥ずかしそうにしたあとで、杖を構えた。ジョセフィーヌの髪と服が風を孕む。

「風神の暴風」(Tempête de Dieu du vent)

ジョセフィーヌの放った神技は、威力が弱かったので神術陣の防壁に完全に吸収された。

暴風と詠唱しているわりには、そよ風に毛がはえたものしか出ていなかった。彼女は、周囲の学生たちの目を気にして赤面する。ファルマは彼女の神技を観察してふーん、と頷いた。

「神力を大量放出するのは怖い？ 神力切れが怖いのかな。杖に神力を上手く送れてない感じがある？」

ファルマはいくつか質問する。ジョセフィーヌの神力量が少ないわけではない、神脈もしっかり開いている。ただ、神力を使うのをどこか躊躇っているようなのだ。

「はい、神力切れが怖いのと、制御できる自信がないからかもしれません」

「じゃ、神力を制御する感覚を掴もうか。杖を構えてるだけでいい」  
ファルマは呪符を剥ぎ、彼女の杖を上空へと構えさせ、ジョセフィーヌの背中に手を添えた。

そして、彼女の背中に手を当て神脈に神力を注ぐ。

「いくよ」

ファルマは呼び水のように自分の神力を彼女に注ぐことによってジョセフィーヌの神脈を刺激し、神力を引き出す。

「風神の暴風」(Tempête de Dieu du vent)

そして彼は正確な発動詠唱を、ほどよい声量で唱え、ジョセフィーヌの神脈を通じて、彼女の体を支配する形で神力を風属性の神技へと変換し、完全な神技として空に放った。

轟音とともに暴風が天へと駆け上り、旋風は曇天を千切り取って吹き飛ばす。

冬空に冷たく輝く太陽が、ぼっかりあいた雲間から覗いていた。

「な、な……！」

ジョセフィー又はぼろりと杖を落とした。

「神術を使う感覚、神脈から神力を出してきて整流する方法、なんとなくわかった？」

彼女は言葉を失って、目を見開きながらこくこくと頷く。自分の杖から、見たこともない威力の神技が繰り出されたのだ。

百聞は一見にしかず、さらに言うと、体験に勝るものはないのだ。

「今ぐらいの神技を放つても、君の神脈は耐えられるみたいだよ。

一日一回までなら神力切れは起こさない、大丈夫」

すると、それを見ていた学生たちが黙っていなかった。

「教授ー！ それ、私にもやってくださいーい！」

ファルマの周りには、たちまち学生たちが押しかけた。

中でも、ファルマの一番弟子を狙っているエメリッヒの剣幕たるや恐ろしいものがあつた。

「教授！ 教授！ 教授！ 使ってみたい神技があるんです！」

「落ち着いてバウアー君。暴走気味になってるわ」

ほかの学生にエメリッヒはたしなめられていた。しかし、次から次から、ファルマは学生にたかられている。

「おねがいしますー！」

「い、いいよ。ていうかみんな、顔が近いよ、顔が。授業時間が終わるまでの間、順番に、一人ずつね」

ファルマは指導の手間を惜しまなかった。

「氷の華（Fleurs de glace）っていう上位神技をやってみたんですけど」

「ああ、あれね。エレンがやってたな。杖を構えて。君の体を通して神技を撃ってみるから」

「はい、勉強させていただきました！」

いつもより上級の神技に挑戦したい学生たちが、ファルマに神術・神技を使う感覚を体験させてもらい、次々と神技をマスターしてゆく。実習は活況を呈していた。

「また新しい神技ができましたー！　すごいです教授、これ、僕、一年練習してもできなかったんです」

「私なんて、もう五年もできなかったのであきらめていました」  
その学生たちの嬉しそうな様子に、一番驚いたのはファルマだった。

「皆、すごいなあ。たった三時間で上手くなったなあ」  
と、ファルマが学生たちの成長に感心していると、

「一番すごいのは、全属性使えて、どの神技も自由自在な教授だと思います」

ジョセフィーヌが小声でつつこんだ。

ああ、そうかな、とファルマは誤魔化して笑った。  
自分のことはまた棚にあげていたのだ。

終業の鐘が鳴るころには、殆どの学生が、これまでできなかった神技を手に入れていた。

彼らは嬉しさのあまりか、実習時間が終わっても闘技場を離れようとしないうとしない。

「次の講義に遅れないようにね」

「はい、ご指導ありがとうございました！」

学生たちは口々に感謝の言葉を述べた。

「皆の神技が上達したから、エレンが喜んでくれるかな」

ファルマはエレンの閻魔帳に膨大な加筆をしながらそう思った。  
薬局に戻り、エレンに実習の内容と学生の上達ぶりを報告すると、  
エレンは

「ていうかもう、私が講師やるよりファルマ君が神術実習やったほうがいいんじゃないの？」

と、眼鏡をずりおとしたまま、困ったように笑ったのだった。

## 6章4話 脱臼と解剖実習と神術実習（後書き）

10月25日、MFブックス様より異世界薬局3巻発売しましたので、よろしくお願いいたします。

また、ありがたいことにコミカライズも決定いたしました。11月より連載開始です。

詳細は活動報告をご覧ください。

### 謝辞

本項の光学系の部分は、物理学の専門家で理学修士のKentaro Oneko先生にご指導いただきました。

先生どうもありがとうございました。



## 6章5話 ロッテの勘違いと肥満症・再び神聖国へ

「えー。晴れて出禁をくれましたことをここにお知らせします」  
「はい？ どのの？」

ファルマの告白に、エレンは半ば分かっているような顔をしていたが念のため尋ねてみる。

「できんってなんですか？」

ロッテも無邪気に尋ねる。こちらは本気で事情が分かっている。

「学生に指導した結果、総長命令で学内神術闘技場に出入り禁止になりました。以後、入場しようものなら即座にたたき出されます」

ファルマは儂げな笑顔で自白した。

「オーそれはおもしろいデスネ。これから店主サン、神術授業でなくなりましたか」

ロジエがそう言っただけで噴き出した。セルストが、「今は面白くないのよ！」と言って、別室へとロジエを連行していった。使い走りから戻ってきたトムは、「今日は帰ります」と、手をぴらぴら振って帰って行った。空気の読める少年である。

「やっちゃわないでって言ったわよね……ファルマ君」

エレンの眼鏡がずり落ちるのはいつものことだ。ファルマがエレン

ンの代打で行った神術実習は、学生からは好評を博したものの、ブリュノから総長室に呼び出され、上述の件をきつく申し渡された。個人の資質を大幅に底上げしてしまうような神術は大きなトラブルを生じるし、ファルマの実習を受けられなかった学生との間の不公平感も出てくる。

今後はファルマ自身の神術戦闘は勿論のこと、学生に稽古をつけるのもナシ、とのことだ。

授業では神術実習を受け持たないと、誓約書を書かされた。始末書については、言うに及ばず。

「でも、学外でのことについては、特に何も言われてないな」

「あなたって人は……とんだ代打講師ね……」

すっかり肩の調子も戻ったエレンが何か言いかけると、

「お母さん!？」

ロッテが薬局の入り口を見て驚いたように叫んだ。カトリーヌ・ソレル。ロッテの母親が異世界薬局に来店したのだ。カトリーヌが薬局を訪れたのは、意外にもこれが初めてだった。

彼女は屋敷から薬局まで、徒歩でやってきたらしい。

「カトリーヌさん、いらっしやい。何か用？」

「あら、ロッテちゃんのお母さん、久しぶり」

ファルマとエレンも朗らかに声をかける。

エレンはド・メデイス家に昔から家庭教師として出入りしているので、カトリーヌとも馴染みだ。

バイトの薬師たちは、初めましてと挨拶をした。

「坊ちやま、ごきげんよう。薬局の皆様、ごきげんよう。今日はお休みをいただいておりますので、立ち寄りしましたの」

「どうしたの、お母さん。薬局を見に来た？ そっかー、見たことなかったもんね」

「ロッテ、カトリーヌさんに店舗を案内してあげてよ」

ファルマが気を利かせる。

「はいっ、ぐるっ之行ってきます！ 行こ、お母さん！」

ファルマの言葉を受けてロッテがカトリーヌのもとに駆け寄り、薬局の内部の案内をはじめた。カトリーヌは面食らったような顔をしていたが、おずおずとロッテについていく。

「ファルマ様。母は、薬局に見学に来たんじゃなくて薬を買いにきたんですってー」

暫くして案内も終わったあと、ロッテがカトリーヌを連れてパタと階段から降りてきた。

カトリーヌは客がごったがえす薬局内では用件を言いにくいようだったので、デリケートな話かもしれないと思ったファルマは、話を聞くために一階をエレンに任せて二階の診察室に移動した。

ロッテも心配そうについてきて、診察室に滑り込んだ。

「ここなら誰も来ないよ。どんな薬を探しにきたの？」

ファルマが話を促すと、カトリーヌは恥ずかしそうに俯いた。

「坊っちやま、食欲がなくなる薬、なんてないでしょうか」

「何に使うの？」

「はい……最近、肥えてしましまして、お仕着せの服がきつくなっ

てしまったのです。使用人の分際で、体が大きくなってしまうのは  
ご旦那様にも申し訳なく、お恥ずかしいと思ひまして……それに、  
他の者にも陰で笑われているのではないかと」

この世界で、肥満になっている人間は珍しい。肥満は貴族の富と  
飽食のステータスシンボルといってよく、貴族の肥満に関しては神  
術が使えている限り、そこまで周囲に咎められることはないし、神  
術訓練をするので適度に運動にはなる。

だが平民で太っている者は珍しく、怠け者に見えるのではないかと  
気にし始めたようだった。カトリーヌは、いつも甲斐甲斐しく働  
いている仕事のできる使用人、という印象をファルマは懐いていた  
が。

「お母さん……そんなに気にしていたなんて」

隣で話を聞いていたロッテは、ショックだといわんばかりの表情  
になった。

「私のせいで。私がたくさん甘いもの持って帰ってたから……ご  
めん、お母さんのことも考えなくて」

「いいえ、節操なく豚のように食べていた私が悪いの」

カトリーヌは羞恥のあまり消え入りそうな声を出した。

「んー、別にそんな風に思いつめなくてもいいと思うんだけど。ち  
よっと頑張ればもとに戻れると思うしさ」

ファルマはあまりにカトリーヌが深刻そうなので、一言、励まし  
の言葉を添える。

「ちよつとの努力、で痩せるのでしょうか」

「ちよつとずつの努力、かな。急激にと考えなければいいよ」

薬谷だった前世も含めて生まれてこのかた肥満とは縁のなかった、  
というかどうかという痩せていた、というか気を抜くと体重が  
どんどん減ってゆくタイプだったファルマは、肥えていることの肩  
身の狭さを斟酌できなかったが、自己申告の通り、確かにカトリー  
又は肥えていた。

去年あたりはまだスリムだったのだが、ここ一年ほどで顕著に大  
きくなったのだ。

ちよこまかと雑用をこなし、活動量が多いロツテと違い、カトリ  
ー又は上級使用人なのでド・メディシス家の屋敷の中での軽作業労  
働が多い。それで、運動不足になる。

「夕食のあと、シャルロットが買って帰るお菓子がおいしくて……  
つい……」

皆まで言わずとも明らかに、原因はお菓子の食べ過ぎ。

ロツテが毎日のように買ってくるので、それのおすそ分けを食べ  
ていたのだという。

「体格指数を出してみよっか。それを見て、減量が必要かどうか考  
えよう」

客観的な評価が必要だ。ファルマは身長と体重から、カトリーヌ  
の体格指数（BMI）と体重を算出し、カトリーヌ自身に確認して  
もらう。カトリーヌのBMIは30、適正体重より15キログラム  
も多かった。それを、横でロツテも熱心に聞き入って見ていた。カ  
トリーヌは審判の時を待つ。

「どうです？ 私、お豚さんでしょうか」

「いや豚は自虐しすぎだよ。深刻な肥満ではないけど、肥満の部類に入るね。減量しよう」

メタボリックシンドロームの基準は日米とWHOで基準も様々であるが、内臓脂肪型肥満に加え、高血糖、高血圧、脂質異常症のうち二つを発症しているものとされる。

「ちょっと失礼」

血糖値などを測る器具がないのでファルマが診眼で診断をつける  
と、カトリーヌは内臓脂肪の蓄積はあるものの、まだどの数値も正常範囲内にとどまっていると思われた。

「坊ちやま、その、目に手を当てているのは一体何をされているのです？ 以前から気になっておりました」

ファルマの診眼発動を間近で見たカトリーヌが、そのしぐさを不思議そうに見ている。俺の癖だから気にしなくていいよと弁明しつつ、ファルマは更に服の上からカトリーヌの腹部に触れてみたが、皮下脂肪が分厚い。内臓脂肪型ではなさそうだ。腹囲をはかってみたが、基準の腹囲を超えてはいない。

メタボではないが、肥満であるのは間違いないようだ。

「どうやって減量すればよいのでしょうか。薬がありますの？」

薬局にやってきたカトリーヌは、薬だのみのようだ。お手軽に薬を飲めば、みるみる痩せていくのだと思っっているらしい。

「まだ薬は使わなくていいかな、食欲抑制剤や脂肪吸収剤もないこ

「とはいけど」

「では、断食すればよいでしょうか」

「断食で体が飢餓状態になれば筋肉がまず落ちて、そのあと脂肪が落ちるけど、落ちにくい。さらに、骨を作るカルシウムが不足すると骨が溶かすので骨が脆くなり、骨折しやすくなってしまうんだ。その他にも色々断食では弊害があるから、食事制限は少しにして主に運動をしようか。カトリー又さんに合う運動……例えば、散歩かな」

「ええっ、運動で痩せるのですか」

断食で痩せるのはまだしも、運動をして痩せるなどという概念は、カトリー又には理解しがたいものだと言った彼女は言う。ファルマからすると当然でも、敢えて痩せようとする者がこの世界にいないので、信じられないらしい。

「でも、散歩をして遊んでいては、お屋敷の仕事に差支えがありません。お仕事中に遊んではいられません」

「今、カトリー又さん、買い出しをシャルロットさんと交代で行ってるよね。徒歩で少し遠い店に買い出しなどいいかも」

「ああ、それでしたら自然に取り入れられます！」

「その為には、歩きやすい足元をね」

ファルマは彼女に、運動靴を仕立ててもらおうよう促した。

ド・メデイシス家では専門の靴職人を雇っているのです、その職人に注文するといい、と伝えて。

カトリー又は期待半分、不安半分といった様子で帰って行った。

「ありがとうございました、ファルマ様。私、お母さんに悪いことしてみたいです。反省してます」

ロツテはファルマに、小声で声をかける。

母が喜ぶかと思つて、たくさん珍しくて甘いお土産を持って帰っていたのだと言った。

親を喜ばせていたつもりが、もう少しで彼女の健康を損なうところだった、とロツテは氣落ちする。

「もしかして、薬局の職員の方や宮廷工房の方たちも、おすそわけに迷惑していたのでは……ファルマ様もご迷惑でしたら仰ってくださいね」

ロツテからのおすそ分けは多少、負担に感じることもあるが、ファルマは節制して自己管理していた。

それに、彼の体型は驚くほど変わらなかった。

「節度があれば大丈夫だよ。ロツテもだけど、甘いもののとりすぎは氣を付けてね。ロツテほど若くても、甘いものを食べ過ぎたら病氣になるから」

ファルマはそれとなくロツテをたしなめた。

「はいっ、私もおやつは控え氣味にして、お母さんに付き添って、時々一緒に歩くことにします」

ロツテは氣を取り直して、元氣に答えたのだった。

カトリーヌが手ぶらで屋敷へ帰って行つたあと、ロツテは診察室の掃除をしていた。

薬局の一階は掃除バイトが来るのだが、二階以降はロツテが掃除係を請け負っている。

彼女の掃除の腕前は見事なものだった。明るく歌を口ずさみなが



ら、手際よく床をピカピカにしてゆく。体重計もしつかり磨いて、汚れ一つなく、細かい塵も見逃さない。

「そういえば、私も少しスカートがきつくなった気が」

ロツテはふと気になったのか、靴を脱いでそつと診察室の体重計に乗ってみた。ここ最近、体重計に乗っていなかったのだ。母はあであったが、自分はどうだろう。ふと、そんな心配になったようだ。

「ひゃあつ。た、大変！」

ロツテはファルマの言っていた方法で、カトリーヌの時と同じように体格指数を計算してみた。

「きゃーっ！」

「どうしたの？ ロツテちゃん」

悲鳴が聞こえたので、階下からエレンが声をかける。ロツテは何でもないと言ってごまかした。

その日の昼、ロツテの食事は明らかに普段より控えめになっていた。天変地異が起こったのかといわんばかりに、エレンが珍しそうに目を大きくしている。

「ロツテちゃん、食後のお菓子食べないの？ 食事も少なくなってるけど。お菓子はともかく、食事はしっかり食べないと、倒れちゃうわよ」

エレンが心配そうに尋ねる。

「今日は欲しくない気分です」

ロッテはどこか気まずそうに、小声でつぶやいた。

（カトリーヌさんのことで、ロッテもこたえたのかな）

もじもじと答えるロッテに、ファルマはそんな印象を持った。

後日、カトリーヌはファルマの提案通りに食事制限を守り、徒歩で遠くまで買い出しに行くようになった。それが功を奏してか、カトリーヌの体重は劇的に減り始めた。少し心がけるだけで、成果が表れるものだ。

カトリーヌはますますダイエットに乗り気になり、さらに運動負荷をあげているとのことだ。

しかしそのころからロッテも早起きをして、屋敷の敷地内をぐるぐるとウォーキングするようになった。

朝薄暗いうちにこっそり出かけて、起床時間になるといつもと変わらぬ様子でファルマの部屋に起こしに来るので、ロッテ的には誰にも秘密の朝の日課になったようだ。それだけなら、良い習慣だとファルマは思うのだが、どうもロッテは物思いに沈んでいるようだ。

「おはようロッテ！ いい朝だね」

ある日の早朝、ロッテがいつものようにド・メディシス家の庭園内を散歩していると、ファルマが庭の植え込みの陰からひょっこりと出てきてロッテに声をかけた。

ロッテは不審者に声をかけられたと思ったのか、飛び上がって50メートルぐらい逃げた。

ひどい臆病ぶりである。

「なにしてるの？ 最近、毎日早朝に歩いているよね」

「あつ、ファルマ様！ 心臓が止まるかと思いました。こ、これは……えーっと。私、肥えてしまつて……痩せたいと思って、毎日歩いているんです」

「は？ 待つて、ロツテはちつとも太つてないよ！」

思いつめている様子のロツテに、ファルマは何の勘違いをしているのかと強く言い聞かせる。

体重と体型に自信喪失をしていたロツテは、ファルマの言葉は届かない。

「いいんです、気を遣つてくださなくても」

「君は適正な体格だからダイエットはしないでいいんだよ、それにまだ育ちざかりだし、大人とは事情が違う。食事を少なくしてきつい運動をして無理な減量をする、体がきちんと出来なくなつてしまふよ」

「でも、でも、体重計に乗ったら体重が大変なことになつて……私、子豚さんになつちゃつて、恥ずかしくて」

「それは絶対ないよ。その体重計、正確にはかれてないんじゃないの？」

「でも、薬局の体重計です。とっても正確です！」

帝都一正確なのは、とロツテはデータの信頼性をつつたえる。それを聞いたファルマは、ん、と首を傾げた。

「そういえば暫く前、君が診察室を掃除してくれた後、体重計の水平が傾いてたから俺が直したけど、その時にもかして乗つたのかな？」

「えっ？」

「そうだとしたら、正確に計量できてないよ」

その日、ファルマが再び薬局の体重計をセッティングしロツテが載つてみると、ファルマの予想が的中していた。ロツテはひとまず安心したが、甘いものを食べ過ぎないようにというのは継続して心がけてゆくつもりのようなだった。

「このフルーツケーキは、今日はやっぱりやめときます」

甘いものを見れば片っ端から手を付けていた彼女だが、少しだけ我慢というものを覚えるようになった。

… … …

1147年12月になった。

ファルマのもとに宮殿への召喚命令が届き、ファルマは長旅へ向けての荷造りを整えた。

神聖国への旅立ちの日がやってきたのだ。

「ファルマ様、行つてらっしゃいます。どうかご無事で」

ロツテが涙ぐんでいる。何となくここ最近のファルマの緊張した様子から、あまり楽観的な旅ではないと察したらしい。ロツテはそれ以上踏み込んではいなかった。

「大丈夫だよ。陛下もいらっしゃるし、俺はただのお供だから」

「本当ですか？ 信じていいんですよね！」

「約束だよ」

ロツテが手を差し出してきたので、ファルマは彼女の手を固く握る。

その力の強さが、ファルマのロツテに対する気持ちを伝えていた。

女帝の護衛の親衛隊や身の回りの世話をするお供の一団とは別に、ド・メデイス家からは、ファルマに随う数人の家臣が同行する。彼らは、神聖国へ行けると聞かされて浮かれていた。

現代地球人の感覚からすると、ヴァチカン旅行に似たようなものだろう。

「ファルマ、陛下の外遊に連れて行っていただけるだなんて栄誉なことだわ。陛下の御前で、失礼のないようにね」

「神聖国の本場の聖典とお守りを買ってきてくれ」

「あにうえー。暫く会えないだなんてさびしいのー、私もついにくのー」

詳しい事情を知らないベアトリス、パツレ、ブランシュの三人はそれぞれそんな見送りの言葉を告げた。家族らにも勿論、神聖国の訪問で深刻な会談が行われる、などとは伝えなかった。

ただ、女帝の主治薬師として随行するだけ伝えたので、家族からはこのようなりアクションになる。

（心配しないでほしい。俺は絶対に帰ってくるよ、この家に）

ましてや、何事かがあって二度と会えなくなるなどと考えたくもなかった。

エレンや薬局職員らにおよそ二週間の不在を告げ、ファルマが宮殿に馳せ参じると、女帝はサロモンとジュリアナを従えて鎮座していた。

女帝もまた、旅支度を整えて平服である。活動しやすさは残しながら、エレガントな装いのドレスだ。つば広の帽子が、現代的なデザインだなとファルマは思う。

「ファルマです。参上いたしました、陛下。このたびは、よろしくお願いいたします」

「うむ、神聖国との決着はいずれ果たさねばならん。今が頃合いだろう」

神聖国への訪問の表向きな理由は、女帝の在位10年にあたる節目の年に、大神官への表敬と平和的会談、そして神聖国の周囲の国への歴訪だ。

新聞、週間帝都も女帝の外遊を大きく報じている。

その一方で、今回の訪問のファルマの主目的は薬神杖を返却し、それを材料にファルマへの不干渉を公式に取り付けることだ。

「ピウスがどんな手を使ってくるかは分らん、余も、神官どもの使う神術には詳しくないしのう。力で黙らせることもままならん。そんな時に、サロモン、ジュリアナ二名の随行は心強い」

歴代皇帝が神聖国へ訪問するのは戴冠時で、女帝も戴冠式の際に大神官ピウスと面識があると言っている。自らを女帝にしてくれた大神官に対し、女帝は特に悪印象を持つてはいなかったという。

だが、神聖国からのファルマへの干渉を耳に入れ、黙ってはいられなくなった。さらに亡命したジュリアナと、サロモンも同行することになった。

ジュリアナは連れ戻されるおそれがあるのと、サロモンはそもそも行方不明になったとされているのだが、二人とも、何があってもついてゆくと強く主張した。女帝は二人に、念のため偽名を名乗ることと変装をすすめた。

（大神殿の全ての床を抜くと脅したし、向こう側も下手なことではできないと思うけど……確かに、何が起こるか分からないよな）

旅神を守護神に持つクララも、同行を正式に命じられた。クララも旅支度を整えていた。女帝の御前なので、心なしかしゃっきりしている。

「国外旅行は初めてです。大陸に行く前準備だと思って頑張りますん」

「クララよ。して、悪しき予言は変わらぬか」

女帝が尋ねると、クララはしょんぼりとうなだれ、暗に肯定の意を示した。

旅神属性のクララの予知能力によると、神聖国を訪れるファルマにピンポイントで悪い予兆が見えると言っていた。

「えっと、この中の誰も、骸骨化して見えたりしていないよね？」

ファルマが出発前に警戒する。

クララは、死の近づいた人間が骸骨のように見える能力を持っているという。

「はい、全員生きて戻れます。ですが、悪い予兆は変わりません……詳しいことまでは、私には見えないのですん」

ひとまず、全員生きて戻ってこれるといふ暫定的な保証にはファルマも安心する。

ファルマにかかわった人々を、生きる目死ぬ目に巻き込みたくはない。

そこでファルマは、少しでも無事で戻る確率を上げるため、旅の一団全員を集めてブリーフィングをした。

「出発の前に、皆さんにそなえてもらいたいことがあります」

それはファルマが、主な随行者の神脈を開きっぱなしにしておくことだ。

ファルマが無詠唱で開いた神脈は、神官にも誰にも閉ざせなくなる。

神聖国で神脈閉鎖の詠唱を唱えられても、予めファルマが神脈を開いておけばものともしない。

「これで困ると思えば、帰国してから神脈を戻すこともできます。あくまで、皆さんが神聖国で神脈を閉鎖されてしまわないための一時的な措置です」

ファルマは同意を得たうえで、サロモンとジュリアナの協力を得て、随行者全員の神脈を開いた。

最後に女帝の番になり、薬神杖を女帝の体に真正面から差し入れ、無詠唱で開く。

女帝はゾクゾクと震え、女帝の体から神力の陽炎が立ち上りはじめた。

「おお……神脈の泉の底が抜けおったか。どれ、試し撃ちをしてやるうー！」

女帝は、神脈の大拡張をそんな言葉で表現した。

女帝は大火炎を空へと打ち上げる。彼女が以前使った神技とは、比較にならないほど威力を増していた。

宮廷上空を覆いつくすかのような熱量に、ファルマも目を見張っ



た。

「どうだ、冬空があたたかくなっただろう」

「さすがです陛下、豪快な神技ですね」

ファルマは女帝の男らしさに圧倒され、引きつった笑いになった。女帝が満足そうに空を見上げていると、高揚感に水を差すかのよう  
に雨がぽつぽつと降り始めた。

「む、何故だ。雨が降ってきたぞ！」

「あれだけの熱量で上昇気流が発生すれば、降雨があるのは自然で  
す」

「むう。そう冷静に解説するな、余の大神技にケチがつくではない  
か」

女帝のふくらはぎに刻まれていた火神の聖紋は力強く、脈打つよ  
うに一段と濃くなっていた。

彼女の神力量を神力計で神力を測定すると、一桁近く量が増えて  
いることになる。ジュリアナらも、大幅な神力の増幅が見られ、そ  
れぞれに驚いていた。

クララは神力量が増えても特に変わらなかったが、何故か余計に  
眠くなったと言っている。

ファルマの持ち物は、薬神杖、秘宝化した職員証、PC、スマホ  
その他。

薬神杖には、ある工作を施したうえで返却をするつもりだ。

「神聖国までご案内しましょう」

神聖国からの使節を乗せた馬車が、女帝たちを迎えにやってきた。ファルマらはサン・フルーヴ帝国皇帝と大神官ピウスとの会談のため、神聖国へ向けて旅立つ。

## 6章5話 ロッテの勘違いと肥満症・再び神聖国へ（後書き）

本日、ComicWalker様とニコニコ静画様にて「異世界薬局コミカライズ版」、連載開始いたします。

コミカライズ担当作家様は高野 聖先生です。

詳細はのちほど活動報告に記載する予定です。

<http://comic-walker.com/contents/detail/KDCW|MF000000310100000|68/>

## 6章6話 神聖国への公式訪問

神聖国への公式訪問の旅程四日目。

女帝とファルマの一行は、神殿の馬車に先導され街道の宿に宿泊しながら、馬車旅を続けていた。

神聖国へと向かう道路は大規模公共工事の一環できれいに整備されており、路はよく、馬車旅は比較的快適だ。基本的に帝都から出ない女帝の行幸はきわめて珍しいため、女帝を遠目にでも見ようと沿道に領民が詰めかけた。臣民からの敬愛を受け、女帝は帝王の風格を見せつけていた。

しかし、旅は順調とはいかなかった。神聖国への道中、何度か馬車が足止めをくらっていた。

初日、羊の大群が道をふさいで進めず、半日近く待たされることになった。それを皮切りに、二日目は一本道に差し掛かり、土砂崩れにも遭遇した。

道をふさいだ土砂はかなりの量だった。今回の女帝のお供の一団には土属性の負属性術師が随行しておらず作業に手こずっていたので、土砂の大部分をファルマが消去した。

昨日は高熱を出した老婆が山道で行き倒れていた。

虫の息の老婆を見捨てるわけにもいかず、ファルマは治療にあたるほかなかった。

感染症を患っていたので、抗生剤などの処置をして、老婆の行方を探していた家族のもとへ連れて行った。薬も数日分出しておいた。その夜、女帝の馬車の御者の一人が倒れたというのでファルマが呼ばれた。エコノミークラス症候群と思われる肺血栓塞栓症だったので、抗凝固薬である低分子ヘパリン、および組織プラスミノゲ

ンアクチベーターによる血栓溶解療法も行つと、何とか意識を取り戻した。その後ファルマはヘパリンの持続投与をしつつ御者や侍僕らにも、長時間同じ姿勢で座らず休憩中は軽いストレッチ運動をするようにすすめた。

（もう、今日は何事もないといいな）

そんなことを思いながら、ファルマは今日も馬車に揺られている。彼は別馬車に乗った、乗り物の苦手なクララが思い出したように吐いたりするのでその介抱をしたり、学生のレポートを読んだりしながら、なんとなく暇をつぶしていた。

「それにしても、よいのか？ 薬神杖を大神殿に返して……どうせ、神殿には使えもせぬのに」

扇子をパチパチ開閉しながら退屈を持て余した女帝が、真正面からファルマに尋ねる。そう、彼女はファルマの真正面にいた。

ファルマにとっては気を遣うことに、女帝の馬車と相席だった。別馬車にしてほしいと頼んだのだが、女帝じきじきのお誘いを断れるはずもなく。

「はい。構いません。返すのはただの晶石の杖ですので」

「ただの杖？ 薬神杖ではないのか」

「薬神杖を返却しますが、返却してもまったく差支えないということですよ」

「そなたはつくづく無欲だな。あっさり返すのか、分捕ってしまえばいい」

女帝は、もとのように封印用の化粧箱におさめられた薬神杖を名残惜しそうに一瞥し、溜息をついた。女帝には使えない杖なので、

仮に女帝が持っていて飾りにしかないものだった。

「いえ、無欲だから手放すのではなく、代用品がありますので結構です。外交問題になっても困りますし」

「そういえばそなた、杖を新調したのか。ちと見せてみよ、その杖は何という」

女帝は、その時にファルマが新しい杖を腰に帯びているのに気付いたようだ。

貴族は相手の杖を常に見ていて、相手がどんな神術を使い、どれほどの技量を持っているかを値踏みしているものとエレンから聞いたことがあるが、もともと女帝は、下々の杖の良しあしを気にしない人種のようなのだった。

なにしろ、帝都の杖職人は、皇帝の杖より性能のよい杖は作らないことにしている。しかし、わざわざファルマが新調した杖だけは、女帝も気になるらしい。

ファルマは勿体ぶることもなく、女帝に杖を渡した。この杖は、薬神杖とは違って、誰にでも握れる。

しっとりとした光沢と上品さを持つ、細身の黒杖。

女帝も手にとって、しげしげと見つめていた。

(しいていうなら、薬神杖マルチコアVer2・0 1147年オリジナルモデルファーストエディションです)

しかし、一応彼にも羞恥心はあるので、言葉には出さず無難な返答にしておいた。

「自作の杖ですが、名前はまだ決めてません」

「これはただの杖か？」

「攻守ともに四属性神術が使える、耐久性も神力の貯蔵能力も向上し、薬神杖の機能を引き継いでいます」

「な、そんなめちゃくちゃな。どうやって薬神杖の能力を引き継いだのだ」

「薬神杖から情報を抜きました。そのままの意味で」

「は？ それはどうやったのだ」

彼は種明かしをせず、「いろいろやりました」と笑ってごまかした。

「いろいろ」を具体的に説明するところだ。

ファルマは神聖国へ返却する前に薬神杖をあらためていて、薬神杖の柄の部分が分解できることに気付いた。薬神杖の表層部は何層かのパーツからできていて、上層をスライドすると、中枢部には電子基板のような刻印のある透明な晶石が入っていた。その基板で、薬神杖が制御されているようだ。

そこでファルマは、基板部分を抜き取って、聖泉の底の結晶から掘り出し、ファルマ自身が加工した新たな杖の内部に基板を実装した。デザインは極力目立たないように、泥棒に狙われないように、帝都の有名な工房の杖職人に杖のデザイン案をこしらえてもらって、シンプルかつエレガントなものにした。潇洒なガラスの杖のようにしか見えなかった薬神杖は大いに目立ったものだが、新調した杖はありがちなデザインなので、ファルマも気に入っている。

さらに、職員証も丸めて、杖の余ったスペースの中に入れ込んだことで、飛翔性能も維持することができた。

仕上げるに、サロモンに聖別詠唱で杖化してもらって、四属性神術が使える杖ができた。聖泉の底の晶石には、死者の記憶が入っている。だから四属性神術それぞれの術師の記憶が込められていて特別なだろうとサロモンは分析した。ファルマは四属性神術の心得すらなかったが、物質創造などを組み合わせればそれらしく見せるこ

とはできる。

その結果、職員証と薬神杖、さらにジュリアナが持ってきた宝剣の融合した、三つの秘宝の処理系を搭載したマルチコアの新しい杖が完成した。

新しい杖で秘技を使ってみると、薬神杖とまったく同様に使え、四属性神術は勿論、疫滅聖域なども問題なく発動した。また、この杖は宝剣の性質を持っているので、ファルマの神力をかなり吸ってくれ、透明化対策にもなる。秘宝のコアを神力変換のための演算中枢だとすれば、コアは多い方がいい。

（ほかの秘宝のコアも集めて色々搭載してみよっと）

他のコアも搭載できるように、欲をかいてスロットをたくさん作っておいた。世界各地に散らばる秘宝を集めて演算中枢を集約すれば、かなりの事ができるようになるかもしれない。

そう考えると、ファルマは杖の改良に興味を持つようになった。彼は一事が万事、同じものを同じ状態で後生大切にしておくのが苦手で、道具は常に改良してゆきたいタチだった。

「ご報告いたします、陛下」

そんなタイミングで、女帝の侍従が、畏まりながら馬車へと報告に来た。

「進路の橋が崩落しました……昨日は問題なく通行できていたのですが、ついさきほど崩落したとのことで、大変申し訳ありません。大至急、安全な迂回路を検討しております」

「またか」

「はっ、仰せの通りでございます」



女帝が通る道は予め危険がないように先遣隊が安全を確保しているべきもので、安全管理を任されていた侍従は、段取りもむなく急なハプニングに冷や汗が止まらないようだ。

しかも連日の災難があつてのことである。

（またか？災難って頻度じゃないぞこれ）

これ以上の遅れは、予定しているピウスとの会談の日程に影響する。そんな状況で、これだ。かくも立て続けに起こる珍しいアクシデントに、ファルマはとうとう疑念を抱く。

「遺憾なことです。陛下をご案内する道中、何事もないよう、念入りに道中安全の祈祷をしていたのですが。天の思し召しは深遠です」

一団を先導する神官長のコームも、旅程が遅れていることへの詫びを女帝に述べに來た。

コームは女帝の機嫌をうかがうような眼をしていたが、女帝は不機嫌になることもなく、咎めだてはしなかった。

「では、そなたらの修行と信心が足りぬのであろう」  
「御意」

女帝が一言ちくりと言うと、コームは畏まった。暗に、神殿を疑つてゐる空気が伝わったのかもしれない、とファルマは傍観しながら思う。

「橋つて、そんな簡単に落ちるかな。橋脚が物理的に破壊されたつてこと？ それとも、吊り橋だったのかな」

コームが去ったあと、ファルマは馬車の中で分析をはじめた。

「いえ、特に雨なども降りませんでしたし……この橋は生活に欠かせない橋なので、補修や点検もまめに行われており、それは考えにくいです」

神聖国への途中経路としての橋の存在をよく知るジュリアナも陰しい顔になる。

そこへ、馬車が止まったので隣の馬車からやってきたクララが不穏な一言を発した。

「あのー、これって予想外の災難ですん」

「予想外？ クララさん、この事故での馬車の足止め、やっぱり予測できてなかったってこと？」

クララの発した一言に違和感を覚えたファルマが尋ねてみると、クララは気おくれしたように首を縦に振る。彼女は、旅に関する災難的中率はかなり高い。それが、立て続けに予想を外しているのは異様だった。

（自力解決できる災難は予想できないとか？）

クララの予言が外れ、危険を察知することができなくなると、彼女の水先案内人としての新大陸への同行もあまり意味がなくなってしまう。ファルマがクララの神脈を無理やり開いたのが原因だろうか、もう少し閉じたほうが予知能力的にはいい塩梅だったのだろうか。

などとファルマが反省点を探していると、クララから返ってきた言葉は意外なものだった。

「私は天災や人の運命によって起こる事故や災難に関してはかなりの精度で読めます。でも、そうでない場合は……読めないのかもしれないません」

「人災での災害は読めないってことだね」

なるほど、とファルマは合点した。鵜呑みにするのは危険だが、クララの意見は人災と天災を見分けるのに参考になる。いずれにしろ、時間の浪費はいただけない、そう思ったファルマは、馬車の御者に確認する。

「迂回するには渓谷を下っていかないといけないんですか？」

「はい、迂回になります。今から馬車の向きを変えますので、後方から下がらせます」

ファルマは一刻も早く神聖国へ行つて、そして薬局と大学に戻りたいのである。日程が遅れば、家族も薬局職員も心配するだろう。大学の講義も休講しないといけない。足止めを喰らっている場合はなかった。

「いえ、後退せず前進できるようにします」

ファルマは馬車から外に出て、深い渓谷を前に断崖に向かって立った。

彼は奈落へと躊躇なく歩を進める。崖っぷちから踏み出したファルマがあわや落下するかと思いきや、彼が踏みしめた空中には堂々たる氷の橋ができ、彼が一步步対岸へ踏み出すたびに橋が完成してゆく。氷の橋には欄干も添えてあった。

何をするのかと馬車の窓を開けてファルマの神術を見ていた女帝は、ついに笑いはじめた。

「凄まじい神術だ……。詠唱もなく変幻自在に編まれる神術、見事である。無属性にして無詠唱の神術使いは、想像したままのことができるのか」

ファルマがしていることは、神術の常識を破壊どころの騒ぎではなかった。

サロモンとジュリアナも、これにはドン引きといった顔になっていた。

帝都から同行した神官長のコーム、そしてお付きの神官、聖騎士たちは、眼をこすつたり、言葉を失っていた。術の形を術者が思いのままに定める。それは、失われた太古の神術であった。

集中して橋を建造していたファルマは彼らのリアクションにも気づかず、とうとう渡り終えてしまった氷橋の対岸からにこやかに手を振る。

「できましたー。馬車が滑りますので、砂をまいてもらえますかー？」

「は、はいっ。しかし、強度は大丈夫なのでしょうっか」

「馬が通れば、人も歩いて渡れるということです。問題ありませんよ」

ファルマの指示通りに、土属性神術を使うサロモンらが、神術で砂の層を敷いた。

馬車馬を一頭、橋の隅まで歩かせて強度を確認したのち、何台もの馬車とお供の騎馬隊が難なく氷の橋を渡る。人は馬車とは別に、歩いて渡った。いつ落下するかと恐怖に顔がひきつっていた者も、渡り終えてしまうと安堵の息をついた。

「では、皆さん渡り終えましたのでこの橋は消しておきましょう。中途半端に氷が溶けた折に人が通っては危ないので」

職人が新たに橋を架けやすいように、ロープを何本か向こう岸に渡してから、ファルマは氷の橋を消去しようとした。しかし、ファルマが手を出す前に、後方より放たれた火炎が橋の上を舐めるように走り、暴力的な熱量で見える間に氷橋を溶かしていった。

氷橋の上に出現した火柱に圧倒されながら、ファルマは後ろを振り返る。

その火焰は、女帝が放ったものだった。女帝は杖を肩に載せてぼんぽんとかやっていた。

「お見事です、陛下。陛下の神技でなければ、手こずっていました」  
ファルマが女帝をほめると、女帝は鼻息をつき、杖を一振り降って腰に佩いた。

「なあに、退屈しのぎさ。もし、我らが行くのを阻むものがあれば、この炎で手ずから焼き払ってやろう」

女帝はそんな言葉を吐きつつ、神殿の一团に鋭い視線を向け意味ありげにほほ笑んだ。

神官たちは、様にぞつとしたような表情で「さすが陛下でございます」などと世辞を言っていた。

女帝の牽制が効いたのか、その日からは女帝の一团は怪しい”災難”に見舞われることはなく、予定通りの日程で神聖国へと到着した。

「いよいよ、神聖国へ入ります」

御者が緊張をみなぎらせながら、ファルマたちに告げた。

正面から公式に迎え入れられた神聖国の景観は見事なものだった。荘厳な佇まいの宗教的巨大大建築物が立ち並び、全ての屋根は雪化粧をして、冰雪と一体化した、謎に満ちた白銀の聖国がその姿を見せた。

随行した多くの者が聖地巡礼に感動する中、ファルマは浮かない顔をしていた。というのも、

（あー……光るんだろうなあ。床、やだなあ）

ファルマがそんな心配をしながら馬車から降りて恐る恐る神聖国へ一歩足を踏み入れると、そのとたん予想通りありとあらゆる建造物がファルマの神力に反応し青白い光を放つ。

女帝のお供の者たちは神術陣が発動したのかと警戒し、一斉に杖を抜いた。

サン・フルーヴ側の親衛隊が杖を抜いたので、神聖国側の聖騎士たちも杖を構える。

ファルマは手を振って弁解した。

「神術陣ではないです、皆さん杖をしまってください。警戒していただくなくても大丈夫です」

「この輝きは何だ！？ そなたのせいかな」

ありえない現象を目の当たりにし、女帝が叫ぶ。「だと、思います……」と、ファルマが小声で認めると、女帝は恐ろしいものを見るような顔つきでファルマを見つめ、言葉を失っていた。

神官たちは大神殿の異変に驚いたようだったが、基本的には見て見ぬふりをした。表面上は何事もなく対応をしろと事前に言われているのだろうな、とファルマは察した。

気まずい空気になっていると、大路の向こうから、高位神官と思

しき神官の一団が近づいてきた。

ひととき目立つ、豪華な純白のローブに包まれ、黄金の杖を携えた男が女帝の前に立ち、長旅をねぎらう祈りのしぐさをした。ファルマはその男に、ただならぬ雰囲気を感じていた。そう、何か得体のしれない気配をまとった男だった。

「遠路はるばるおいでくださった、エリザベート二世。宿を用意している、しばし旅の疲れを癒されるとよい、歓迎の祭典と接宴はそれからしよう」

「これは、ピウス聖下。ごきげんよう、戴冠式以来だな。光栄だ」

女帝がカーテシーで挨拶をする。女帝が誰かに儀礼的なものであっても礼をする姿を、ファルマは初めて見た。

世界の覇王のようにふるまっていた女帝も、一応気を遣う相手というものがいるようだ。

女帝に帝冠を授けたピウスは、神術を操る貴族のうち最高位の聖職者であり、女帝より序列が上なんだろうな、とファルマは勘繰る。

数時間の休息ののち、女帝は正装し、ファルマたちも沐浴で身を清めて身支度を整えた。

神聖国の国境では神官たちが神聖国の旗と帝国の旗を掲げ、沿道では楽隊が盛大な歓迎パレードを繰り広げ、女帝は賓客として手厚くもてなされた。

歓迎行事と大祭儀が大神殿中央の大広場でとり行われ、女帝は神聖国の神官らへ向けて訪問のスピーチを行い、ピウスもこれに応じ、喝采を浴びる。締めには和やかに握手をして、記念品を交換した。

表面上は、友好国同士の和やかな外交のように見えた。

長々しい一連の儀礼が終わり、お抱え薬師として女帝の傍につきしたがっていたファルマは気疲れする。

ジュリアナとサロモンは、かなり念入りに変装していたので、神官たちに疑われることもなかったようだ。

大神殿の主催する大聖餐宴に招かれた頃には、夜もすっかり更けていた。

宗教行事の祝宴なので、女帝は純白の法衣と白銀の帝冠といういでたちだ。厳粛な空気の中、伝統にのっとった聖餐が饗された。

「む。料理が温かい」

女帝が、湯気のたつスープに、カルチャーショックを受けていた。ピウスが葡萄酒を嗜みながら苦笑する。

「普段は冷たい料理を召されるのかな、皇帝陛下は」

「毒見に時間がかかるのでな、おかげで、今日まで命永らえている。温かい料理というのは驚きだ。毒見はなさらないのか」

「しません。しかし、我々をお疑いになるのもごもっともです。

お毒見役に毒析神術をかけていただいてはいかがですか」

ピウスが自信たっぷり促すので、随行していた毒見役がオーソドックスな神術で分析し、食して料理に毒がないことを保証した。ピウスと女帝がようやく食事をはじめたので、下々の者たちも、ポウルに水をはり、料理に口を付ける。

しかし、ファルマは料理を食す前に小さくため息をついた。見た目は他の人間の食事と何ら変わらないのだが、

（俺だけ盛られてるんだよなあ……）

ファルマは内心、対応に困っていた。盛られたのは致死性の毒物ではなく、この世界に伝わる伝統的な薬草抽出物で、まったく馬鹿



らしいとファルマは思うのだが、自白剤として用いられることがある。それと、睡眠薬として用いられるものがいくつか含まれていた。

ファルマは一応、こっそりと問題成分を消去しておいた。とはいえ、毒物など効かない体であるので、自分だけの皿に薬物を盛られている状況では、その作業も徒労のように思えた。

（どういふつもりなんだろうな、自白剤のつもりで使ってたのかな。大体俺に何を喋らせようと思ったんだ。それとも、マイルドな毒盛って気づくかどうか試されてるのかな）

ちなみに、自白剤なんてものは存在しないぞ、と言ってやりたいファルマである。

ともかくにもファルマはどこからともなく浴びせられる、探られるような視線をやり過ぎしながら、特にでしゃばることもなく、「毒抜き」した料理を口に運ぶことに徹した。

「薬師様、最近、心臓がバクバクすることが多くて、どこか悪いのではないかと思っていますのです」

ほろ酔い気分の若い神官がファルマに健康相談をしてきたので、適当に対応する。

「ああ、あなたはアルコールのとりすぎのようですよ。肝臓にも負担がかかっています、お酒を控えたほうがいいと思います。必要なら、薬も出しますよ」

「そうだったのですか！　ありがとうございます」

枢機神官はファルマに近寄ってもこなかったが、比較的下級の神

官は、ファルマの身の上を知ってか知らずか、食事が終わってお茶の時間になると無邪気に話しかけてきた。

まだ外交上の宴席の体裁を取り繕っている限りは、体裁だけでもファルマは女帝の主治薬師としての立場を貫く。ピウスと女帝は会食の中で、両国の友好的立場を確認していた。

会談の途中で、両国はジュリアナの話や、神殿がファルマへちよっかいをかけた数々の事案などは蒸し返さなかった。女帝は終始和やかだった。過去を水に流し、右手で握手しつつ、左手は拳を固める外交が女帝にもできるんだな、とファルマは意外な側面を見た思っていた。

神殿が出方を探っている限り、挑発してもよいことは何もない。宴も終わり、就寝というスケジュールになった。

宴のあと、帝都の神官長のコームが女帝に挨拶に来た。そのあとで、ファルマにも近づいてくる。

「長旅お疲れ様でございました。本日は、これにて下がらせていただきます。何か御用だてがございましたら、夜中でも構いませんので下級神官をお呼びつけください」

「ありがとうございます」

ファルマは素直に礼を述べた。するとコームは、ここぞとばかりに話を切り出す。

「明日の午前に、ピウス聖下と非公式会談の場を持ってもよろしいでしょうか」

「わかりました。疲れで寝坊してしまうと失礼ですので、午後でもいいですか？」

「午前で調整いただけないでしょうか」

食事のときに盛られた、遅効性の”自白剤”が効いてくるとされる時間帯だな、とファルマはピンとくる。敵の術中にはまるようなものだが、向こうの段取りもあると思われるので、快諾しておいた。

（俺に何かしやべらせたいんだろうな、ピウスは）

「さ、もう寝るぞファルマ。寝室に行くぞ」

コームが去ると、女帝がぐいつとファルマの手を引いた。もしかして……女帝と同室？ とファルマは目を丸くする。そして、謹んで辞退したいファルマである。

「あの、私の部屋も取っていただいていますし、私はそちらで寝ます」

「何をボケたことを言っておるか。神聖国での滞在の間、決してそなた一人になる時間があつてははならぬ」

「しかし、当家の護衛の聖騎士も同伴していますので、ご心配には及びません」

彼らの警護が、あてになるとはファルマは思っていないが。女帝は、少しかがんでファルマと目線を合わせ、含んで聞かせるようにこう言った。

「そなたは人外の神術を使い、神力量も人間離れしておる。正攻法で勝てる者などおらん。だが、枢機神官の使う神殿の神術は、謎が多い。もし、そなたが不意をつかれて無力化されれば、そなたを守れるのは余しかおらぬ」

（無力化か……さつき盛られた毒とか、効いてたらやばかったもん

な。その配慮はありがたいな。この人を巻き込みたくないし、気持ちだけでいいけど)

「純粋な神術戦であれば、余は無敵だ」

女帝はビシッと決め顔を作ってウインクする。

ファルマからしてみると、あからさまに褒めてほしそうに見えたので、「さ……さすが陛下です。頼もしいです」と持ち上げておいた。

(でも、それが相手にも分かってるなら、純粋な神術戦には持ち込まないと思うなあ……)

女帝がファルマと添い寝をするというのを知ってか知らずか、女帝の宿泊する客室には、サロモンとジュリアナが、晩餐会の間に念入りに防犯用の神術陣と、対神封じ用の呪符陣を敷いていた。

「侵入者が部屋に入れなくする神術と、杖を使った瞬間、杖が破壊される術です。念入りに術を組みました、解除するには、大きな物音をたてなければなりません」

「仮に解除されたら、警報が鳴るってことだね」

「はい、さようでございます」

ジュリアナが教えてくれた。そういうからには、時間稼ぎにはなるだろう。

女帝はあくびをしながら侍女を呼んでパジャマに着替える。ファルマも着替えて、寝支度をした。そして彼女はまるで抱き枕でも掴むかのようにファルマをベッドに押し倒し、ぎゅっとしがみついてきた。

真夜中になり、女帝は「そなたは余のものだ」とか、「はよう抱

かんか、無礼もの」などと、誰にあてたのか知らないが、お色気たつぷりな寝言を漏らしていた。密着する女帝の体温が伝わってきてファルマは「一体誰と間違えているんだろっ……」と何ともいえない気持ちになったが、必死に守ろうとしてくれているのは有り難いな、と感謝する。

女帝がゼロ距離で密着していたからか、その夜は、何もなかった。夜襲をされることもなかった。

ファルマは、警戒しすぎだったかと肩透かしをくらったような気がする。

だが、寝室のドアを開けると、女帝の侍僕以外の何者かが夜間に来た形跡はあり、警戒しすぎではなかったことは明白だった。

「よい朝だ、朝食前に神術訓練でもせぬか。神術の腕が訛ってしまっぞ」

ファルマも早めに目覚めたが、女帝の朝も早かった。神術訓練をするというので、ファルマがそれはやめましょう、散歩にしましょうと宥めた。早朝から大勢の臣下を引き連れた女帝と神聖国内の庭園の散歩をしていると、クララが広い庭園をつつ走ってきた。

低血圧で午前中は生きる屍と化す彼女が、珍しく血相を変えて。

「薬師様ああああー……あっ！」

雪の中に頭からつつこんだ。派手にこけたからか、スカートの中身が全部見えた。とんだハプニングに、クララは顔を真っ赤にして慌てて雪の上に正座する。クララの下着は白いドロワースだった。家臣団は気まづかつたらしく、一斉に顔をそむけた。羞恥心で固まっていたのは数秒ほどで、クララは飛び起きた。

「今日は、薬師様に特に悪い事が起こる夢を見ましたん！ 大変ですん」

「おはようクララさん。とりあえず落ち着いて深呼吸して」

「スーハースーハ……さっ、寒いっ、口の中が凍りますん」

クララはぎゅっと目をつぶり、フードをかぶりなおす。いちいちしぐさが小動物のようだった。

「えーっと、それ、俺にとってはこの旅で一番悪い日？」

「そうですん。どうしましょう……命には別条ないようなのですが」

「うん……普段通り過ごすだけだよ。部屋の中においても、外にいても危険はあるだろうし。ありがとう、教えてくれて」

（今日が正念場か……一体、何なんだろうな）

ファルマは気を引き締めた。

女帝も険しい顔をして、ファルマの手を握りしめた。そばを離れるな、と言いたいようだった。

神殿に戻ると、豪華な朝食が供された。朝食は、女帝や家臣の皿はもちろんのこと、ファルマの食事にも何も盛られてはいなかった。食事が終わり、少し食後くつろぐ時間があつて、ファルマと女帝はピウスのもうけた秘密の会談に招かれた。会議を執り行う場所は、下級神官たちは誰も知らないと言った。

枢機神官の最も地位の高い者が、ファルマたちを迎えにきた。会談に出席するのは、女帝とファルマ、そして侍従数名、親衛隊をつとめる聖騎士数名だ。その中には、サロモンも変装して紛れ込んでいる。

ファルマは、薬神紋に貼り付けていた呪符と、自身を拘束していた封印を解いた。

何かあったときのために、万全にしておかなければならない。封印を解くと影は消え、多少透明化もしている気がするが、些末なことを気にしている余裕はない。

「時間になりました。それでは、ご案内しましょう。もう一つの神聖国へ。会談の場は地下です、あいにくですが、歩いていただきま

す」  
「大神官は、地の果てで待っているのか？　なぜ地上では不都合がある」

女帝が警戒したように尋ねると、「危険な場所ではありませんよ。御身の危険はありません、陛下にもきつと、気に入っていただけだと思います」そう言っ、枢機神官たちはランプをともにして先導し、暗い地下へと続く大扉を開いた。

ファルマたちは、謎の地下神殿の深部へ踏み入ることになった。

（写真撮つとこ）

ファルマはスマホを出して、記録のために立派な扉の写真を撮った。

その時ファルマは、絶叫したくなるほど驚いた。

スマートフォンが微弱なWi-Fiを、しっかりと拾っていたからだ。

## 6章6話 神聖国への公式訪問（後書き）

ComicWalker様とニコニコ静画様にて「異世界薬局コミカライズ版」、連載されています。

よろしく願いいたします。異世界薬局特設ページ

コミックウォーカー様（第2話は12月19日更新）

<http://comic-walker.com/contents/detail/KDCW|MF00000031010000|68/>

ニコニコ静画様（第2話は12月22日更新）

<http://seiga.nicovideo.jp/comic/24157?track=1list>

### 【謝辞】

・本頁は、医学研究職の珠樹先生に査読いただきました。ありがとうございました。



## 6章7話 鎧の齒車のいざない

「Wi-Fi拾ってる　！？」

あまりに不意打ちな爆弾投下に、思わず声が出てしまったのは致し方なかったとファルマは思う。女帝は振り向いたし、神官たちには妙な顔をされてしまったが、取り繕う余裕もなかった。そして女帝にはばつちりと聞かれてしまった。

「む？　どうした、ファルマよ。ワイファだと？」

「腹の具合が悪くなってきたので、申し訳ありませんが少々時間をいただけますか」

ファルマはとにかく一旦、一人になって状況確認がしたかった。多少周囲を待たせることになったとしても、いつまで電波を拾っているか分からないのでそうせざるをえない。女帝と枢機神官は、ファルマの体調が急変したというので、遅刻を諾するしかなかった。

「構いません。お具合がよくなつてからまいりましょう、多少遅れますと、ピウス聖下にお伝えします」

「すみません……体調管理が悪くて」

ファルマは、最寄りのトイレ付き休憩室に通された。

神聖国のトイレは、この世界では割と最先端と思しき水洗式だ。

穴のあいた陶器の便座の下は下水に繋がっていて、上部に貯めた貯水槽から配管された水が流され、排泄物を洗浄する、18世紀にイギリスで発明されたビクトリア朝のウォータークローゼットに似たものだ。思い出せばサン・フルーヴ帝国ではいまだに椅子式便器

で、椅子の下部には引き出しがついており、使用人が汲み取って指定の場所に捨てるのが一般的だった。

神聖国のトイレは清潔でいいなあ、と思っけれども、とりあえず今はトイレに用はない。

スマホを手に、先ほど撮ったばかりの地下へと繋がる扉の写真を拡大して確認する。

写真画面には、妙なものは映っていない。

ファルマは神聖国にきてからというもの、観光と調査と記録がてら、スマホで写真を惜しみなく撮っていた。ファルマが研究室から持ち出してきたスマホは秘宝化して人間の目には見えなかったし、シャッター音も聞こえないようだからだ。

でも、ファルマがこの世界にスマホを持ち出してからというもの、Wi-Fi電波を拾ったことなどなかった。

当然だが、ただの、一度も。

そして、この休憩室ではWi-Fiは圏外。ファルマは先ほどWi-Fiを拾った扉により近い窓へと近づき、窓を開け放つと、辛うじて電波を拾って接続することができた。

発信源は、先ほどの方角にあるらしい。神聖国枢機部がフリーWi-Fiスポットだったなんて、ファルマも理解を超えている。

「ここにきてネット繋がるだなんて。どこだよ、異世界に電波売った会社は……」

ファルマはすかさずSSIDを確認し、アクセスポイントの識別名を見た。

しかし、そこにあったのは、まったく予想外のIDだった。

「は！？ これ……うちの研究室の……」

ファルマの生前所属していた大学の学内無線LAN、そして自分の研究室で用いていたものだったのだ。そして、電波状況を調べてみると、飛んでいるWi-Fiは一つではなかった。

しかしファルマが思い返すに、聖泉から入れた異界の研究室の中では、無線も有線LANも飛んでいなかった。つまりこの神聖国というのは、地球に近い場所ということなのだろうか。ファルマは手が震えてスマホを落としそうになりながら、地球のそれと思しきネットワークを経由してインターネットに接続した。時刻情報や数々のアプリがデータ通信を始める。

（同期した……）

ファルマは懐かしさがこみ上げて来た。宇宙の果てから、地球に帰ってきたような……。

（さあ、いつだ。地球では、今はいつなんだ！）

すると、薬谷が死亡したまさにその日、その時刻が表示されていた。

調べものしながらそのまま5分ほど待っていると、時間が一時間ほど巻き戻って時計に表示された。

（あれ？ 戻った。あの、俺が死ぬ間際の時間が、延々と繰り返されてこの異世界と繋がっているのか……）

ファルマはSNSから簡単な投稿を試みた。しかし、いつまでも更新はできないまま。データのダウンロードはできるが、アップロードはできなかった。空メールの一つも送れない。

つまり、地球のネットワークの、たった一時間程度の情報を閲覧することはできても、こちらから交信することは許されていない

ようだ。時間が切り取られているのだろうか。

また、位置情報を見てみたが、やはり取得されていない。文字通りここは、異世界なのだ。

（総括すると、俺がいた研究室という空間と時間が切り取られて、俺の死の直前か直後に異世界に繋がってしまったのか……）

スマホの液晶を通して、地球を垣間見ることしかできないだなんて。

そしてファルマが今現在、ネットワークに繋がてえられる情報は、これ以上更新されてゆくことはないだなんて。そう思うと、無念ではあった。

地縛霊って、こんな感じなのかなあ。とファルマは思う。

（それでも、自分の葬儀の情報やニュースを見なくてよかったのは、ありがたいかな）

薬谷の死後は、まず確実に、大騒ぎになるだろう。

薬谷 完治は世界的な業績を残していた。少なくとも学界からは惜しまれただろうし、日本でも大きくニュースになるほどには有名だった。マスコミには過去を掘り葉掘りされ、亡くなったのいいことに美談や醜聞を流されただろう。同級生たちにも取材が行ったかもしれないし、親族のコメントを取られたかもしれない。

それとも、ファルマが異界の研究室でたった一度だけ因果を覆して生還させた薬谷の一人は、何事もなかったかのようにその先の時間を生きていて、ファルマの中に分かれた自我の一部だけが、あてもなく異界を漂っているだけなのか。それはそれで、虚しいものを感じる。

そういったことを、一方通行の状態で見の当たりにしなくてよかったというのは、多少気が休まる思いがした。

まだ誰も、薬谷が死んだことを観測していない。あるいは、彼は生きているのかもしれないが、薬谷 完治の生と死が重なり合った時間。

ファルマがアクセスしているのはそんな時間軸なのだ。それにしても、この世界は一体どこなのだろう。と、ファルマは思う。

孤独に押しつぶされそうだった。

「ファルマ、腹が痛むのか」

部屋の外から、痺れを切らした女帝が呼びかけた。

彼女の声は、ファルマをひとときの間、思考の渦から救ってくれたような気がした。

「申し訳ありません。ちょっとなかなか用を足せなくて」「糞詰まりか、ならばゆつくりと致せ」

そんな受け答えをしたものだから、きつと女帝の中では便秘で苦しんでいた人ということになってしまっただろうな、とファルマも多少恥ずかしい。それはともかくだ。

地下神殿に、何かある。過剰な期待はすべきではない。

でも、少なくとも、Wi-Fiのアクセスポイントはある。危険もあるかもしれないが、これまでオフラインだったものが、オンラインになれば、そして発信源が見つけられれば得る情報は大きい。どちらにしろ確かめるしかない。ファルマは、地の底へと行く決心をつけた。

女帝も神官たちも待たせていたので、詫びて地下会談の場へと向かう。

地下へと続く階段は急峻で、時計にして十分ほど下ると、階段が石づくりから晶石へと材質が変わった。ファルマは階段を踏み外して転げないように気を付けながら歩きスマホをしていると、Wi-Fiの電波はどんどん強くなってゆく。それが、ファルマの興奮をかきたてる。やはり地下にアクセスポイントがあるようだ。

ファルマたちが突き当たったのは、分厚い、そして透明な晶石の飾り扉だ。高さも幅も、大人の数倍ほどもある。

「鑑査の扉でございます」

案内の神官は、この先の間には、扉を開けられる選ばれた者しか進めません、と述べた。

晶石の扉は神力計を兼ねていて、神力が足りない者が扉をムリに開けて中に入ると、精神を破壊されてしまうという。中にはピウスと上位枢機神官二名のみ待機している、とのことだ。

「逆を申し上げますと、大神殿でこの扉を開ける者は、三名しかいません」

「神力を試す扉か。客人を招きながら、力量をはかるとは面白い。余に開けさせよ、誰が皇帝だったか、思い出させてやる」

女帝は扉に両手で触れ、神力を注ぎながら内側に押す。

すると、扉の表面に獣の眼のような模様が三つ現れ、女帝を睨みつけたあと、彼女を受け入れて内側へと扉を開いた。

「はっはっは、軽い軽い」

「皇帝陛下は適格でございます、どうぞ中へ。私どもはここで待機

しております」

「俺もやってみますね」

ファルマが女帝に続いて、一度閉じた扉を開こうとすると、彼が扉に触れる前から扉は全面開放していた。

ファルマ一人を迎え入れると、ぴしゃりと扉は閉じる。そのあとに続いて、女帝たちに付き添っていたお供の聖騎士数名のうちファルマが神脈を開いていた者だけが中に入れた。変装したサロモンも、その一団の中にしつかりと紛れ込んでいたのだが、バレることはなかった。神官は驚いたような顔をして、「サン・フルーヴ帝国の近侍の方々はつわものですね」と、青い顔をしながら世辞を言った。

ファルマたちが扉の内側に入ってすぐの広い空洞は、さながら晶石造りの宮殿のようだった。絢爛豪華に輝く内部には中央に円卓があり、ピウスらが席についてファルマたちを待っていた。

「ようこそおいでくださった。おや、大勢いらしたな。ファルマ殿は体調を崩されたと聞きましたが、いかがですか？」

「もう大丈夫です。お待たせしました」

「さて、ここからは秘密会談で、記録には残りませぬ。忌憚のないお話を聞かせいたきたい。皇帝陛下にもご臨席たまわりましたが、このたび我々がお話を伺いたいのは、あなたです」

女帝はむっとしたような顔をしたが、ピウスは最初からファルマを指名していたのである。女帝は物見遊山というか、ボディーガード兼付き添いだ。

「ぶしつけですが、早速薬神様とお呼びしてよろしいですかな」  
「承服いたしかねます」

ファルマは笑顔を保ちながらも、断固却下した。  
そして彼は話が始まる前に、持参した薬神杖の箱をテーブルに出した。

「その前に、薬神杖をお返しします。サロモンさんを通じて、長い間お借りしていました、ご高配をありがとうございます」

「これは結構。まさか返却してくださるとは。それにしても薬神ではないのなら、何故”薬神杖”を使えたのです？ 妙な話だ」

「使えたから使った、という以外にありません。薬神杖を使えることと、私が何者かということは、まったく別の話です。第一に私は、そのような名を名乗ったことはありません」

「自明のことを隠し立てなさる意味が、わかりませんが」

ピウスはファルマの毅然とした態度に気おされたように見えたが、傍にいた枢機神官にひとまず薬神杖を箱ごと受け取るように指示した。傷などがないか、変わった部分がないか、時間をかけて調べさせた。

なかでも、贋物ではないのかという疑惑は払拭できないらしく、念入りに”人が持てない”ことを確認していた。

「結構。本物でございます。では薬師ファルマ殿。いよいよ本題に入りましょう。鎡の歯車のことは、ジュリアナから聞きましたかな」  
「ジュリアナさんに襲撃された時にお話をうかがいましたが、その時の件ですか？ それでしたら、概要だけ聞きました。それで、ジュリアナさんに神力をお渡ししたのです。その神力は、有効活用していただけかと」

「その件については、ぜひとも詳しく説明を聞きたいものだな、ピウス猊下」

女帝が追及に乗り出してきた。ファルマはまだしも、女帝は、例



の襲撃事件については腹の虫がおさまっていないのだ。しかし、ピウスはつつかかってきた女帝を軽く退け、冷静に謝罪した。

「部下の独断で、いきすぎた面があったことはお詫びする。以後はこのようなことがないようにしたい」

ピウスは、例の件については関知していないと言い張った。そう言われてしまうと、ファルマも女帝も何も言い返せなくなる。ピウスの指示があったことを立証する方法はないのだ。

「だが、今後、あなたは、鎧の歯車をどのように運用なさるおつもりか。ファルマ殿」

「ちよつと待ってください。」 鎧の歯車”のことは本当に知らないんです。一体、何なんですか？」

するとピウスは、ファルマの言葉を怪しむような顔をした。

その反応から、自白剤の効果を疑ったのかもしれない、とファルマは勘づく。

「本当にご存じないのですか」

「本当に知らないんです。まず、鎧の歯車というものが何で、どうして神力が必要なのかを説明してもらえますか」

ファルマとしても大雑把なところは、ジュリアナから聞いたつもりだ。

鎧の歯車は、この世界と別の世界を繋ぐ鎧が外れないようにするために、歯車で締め上げている、その器械を動かすには、神力が必要だと。そう聞いたが、それ以上は知らない、とファルマは伝えた。

「その装置は実在しているんですか？ どこかで見れるんですか？」

「よせファルマ。危険だ、むやみに近付くな」

女帝がファルマが迂闊に近づくの制止しようとする。ピウスはにやりと微笑んだ。

「興味がありなら、実際に見ていただくのがよろしかろう。私も直接に見たことはありません、なにせ、人間には見えない装置ですのでな。あなたなら見えるかもしれない。いかがなさいます」

「見せてください。ここまできて、見ないのは腑に落ちません」  
「それは結構、感謝しますよ」

ピウスは席を立ち、枢機神官をその場に残し、神杖に明かりをともし、地下洞穴に架かる宙つりの暗い空中回廊をゆつくりと踏みしめるように先導していった。

かなりの時間、足場の悪いスロープをくだってゆく。  
ピウスと、女帝、そしてファルマたちの足音が、広い空間の中を反響する。

どれほど下っただろうか、ずいぶん地下まで来たようだ。

ピウスが神杖の光を照明代わりに明るくすると、平面鏡が床一面に敷かれた晶石づくりの広間が見えてきた。

その空間を構成する壁面は黒い晶石で覆われており、表面には幾何学的な模様が浮かび上がっている。その上を色とりどりの蛍光が脈動しながら、蛍のように乱反射している。

女帝は杖を抜いていた。サロモンも杖を構えていた。その幾何学模様が神術陣のように見えたのだろくな、とファルマは察する。

ファルマは神術陣が設置されている気配は感じなかったので、その空間に入る前から、スマホで動画を撮っていた。

そして肉眼には見えない青白い光塊が、人魂のように映り込んできては、ファルマの周りにふよふよと集まるのを感じていた。見えないが、この空間は無数の死者たちで満たされている。

（なんだ、ここ……）

神力を含んだ、じつとりと密度のある白い霧が立ち込めはじめた。ピウスは足を止め、そしてファルマたちに向き直った。

「この向こうにあるのが、鎚の歯車だ。私がこの装置に関して、知ることは少ない」

「装置だと？ どこにそんなものが」

ピウスは女帝の質問に、床を杖で示して答えた。

「鎚の歯車は、二つの世界を繋ぐ装置で、神々の神力によって駆動されている。この歯車が完全に回転を止めると、世界は崩壊すると言われている。有史に一度か二度、数年で停止するところまで危機的な状況に陥った年があった。その時、二つの大陸といくつかの人種が消滅したと言われている。大陸が滅んだ痕跡は、地上のあらゆる場所に残された。あなたが信じようが信じまいが、我々はその伝承を信じ、厳しい戒律と結束をもって世界の崩壊を食い止めているのだ」

その伝承の真偽は、結局のところピウスにも確かめようがないということだった。

サロモンはピウスの言葉を、少し離れた場所から聞いていた。サロモンは風の神術を放ち、濃霧を払った。すると、クリアな鏡面が現れた。

「ここにあるのはただの鏡の床。我々にはそう見えるし、鏡は私たちの姿を映している。それは、この鏡は人間を受け入れるつもりがないということだ。だが、ファルマ殿、あなたにはどう見える？

我々とは、見え方が違うはずだ、あなたの姿は今も映っていない、鏡に反射しないということは、向こう側に行けるということにほかならない」

ファルマには影がない。

だからこの特別な鏡に、ファルマは映らないのだとピウスは断言した。

ファルマがその場で硬直していると、ピウスが鏡の床の中央の文字を杖でなぞる。すると、装飾のこらされた晶石の台座が鏡の中から生えるように現れた。ピウスは台座の傍にファルマを呼んだ。

「ここに、鎧の歯車の先端があるとされている。人に歯車の一端が見えるように、守護神が目印を付けたのだと。ジュリアナの持ち帰った宝剣はここへ奉じ、この鏡はあなたの神力を吸い尽くし歯車に送り込んだ」

台座の表面には、ファルマには読めないが、この歯車が機能しなくなり世界が破滅に至るまでのカウントダウンが表示されているという。

台座の下から鏡の向こうへと放たれた青白いレーザー光のような何百本もの光条が、奥へ進むにつれて減衰してゆくのが見えた。

ファルマは台座の前に立って、光を頼りに、闇の奥へと目を凝らした。

ファルマの姿が鏡に映らない代わりに、鏡の向こうに見えたのは……すり鉢状の巨大な歯車機構とブラックホールを彷彿とさせる大空間だ。

無限に繋がる歯車の回転に巻き込まれて吸い込まれそうな気がする、しかし、どこかで見たことがあるような気もするのだ。そしてそれは異界への入口のように見えたのだった。ファルマが明らかに「その先」を見ていると知ったピウスは、ファルマにもう一つの情

報を告げた。

「台座に神力を通じると、鎡の歯車全体が動くと言われている。どうするかは、あなた次第だ」  
「わかりました」

ファルマは奥の構造を明るくしようと、台座に手を添えて神力を注ぐ。すると明るい閃光が台座から放たれ、細いレーザーは太い光線となって闇を切り裂き、ファルマははっきりとそこにあるものを見た。

鎡の歯車の内部構造の一端を。

素早くスマホを確認すると、Wi-Fiの電波はもつとも強くなっていた。この歯車そのものが、地球と異世界を繋げる鎡なのだろうか。

そんな予感もしないでもない。そして、彼の目に飛び込んできたのは……。

（メビウスの歯車じゃないか……）

遊星歯車機構と、メビウスの輪が合体したような機構を持つ、途方もなく巨大な歯車のように見えた。表層の材質は漆黒で、滑らかな石のような質感。歯車の中央部には、鎡のような模様が光線で編まれ、ホログラムのように偏光していた。

ファルマは地球で実際に制作された、この歯車にモチーフの似たものを見たこともある。非常に複雑な形態をしており、3Dプリンタで出力しなければモデルさえ作れないようなものだったと記憶している。

（こんな大掛かりな装置、人が作れるシロモノじゃない……）

この歯車が回転すると、裏面と表面が入れ替わってしまうのだ。それが何を意味しているのか、何と何を繋ぎとめているのか、分析も追いつかない。

女帝がファルマの後ろから覗きこむように声をかける。勿論、彼女は鎡の歯車は見えていないらしい。

「何か見えるのか、ファルマ。説明してみよ」  
「見えます。なんと云ったらいいでしょ……形容しがたいものです」

ファルマはカメラのシャッターを切ったが、暗くて映らない。女帝にも見せたい気はあるが、そう簡単に世界の中核は暴露されないようだ。そして、先ほどからファルマが感じていた既視感の正体を知った。

（ああ……異界の研究室の窓から見たのは、この空間だったのか）

ゆつくりと、のつたりと、歯車の回転にあわせてかき回されるように渦巻く宇宙のような空間に対峙しながら、ファルマはどうすればいいのか判断に困った。

ひよつとすると鏡を隔てて歯車の奥にある世界は、元通りの時間と空間に繋がっているのかもしれない。ファルマは、異世界にやってきた時、生前とは利き手が逆になっていたこと、そして鏡文字で生前につけたメモが書かれていたことを思い出す。

（つまりこの異世界は、地球と対になった、逆の世界なんだろうか。ならば鏡を抜けて歯車の中へ飛び込んだら、地球に帰れるんだろうか）

その先の空間はひどく、魅力的に思えた。奥の構造を調べるために飛び込んでしまおうか、そう思ったファルマは、女帝の手が肩を叩いて呼んでいたのに気づきはっと我にかえる。女帝はかなり真剣に呼んでいた。サロモンもすぐ近くにいて、神術を使ってファルマの意識を呼び戻そうとしていた。ピウスはサロモンに気付いたようだった。

「どうしたファルマ、ずっと呆けたまま動かなかったぞ。立ったまま死んだのかと」

ファルマの体感では、それほど時間は経っていない。しかし、スマホの時間は十分程度経過している。時間が凍ってしまったかのようだ。

（意識が……向こうに引つ張られてた……！）

歴代の守護神たちを飲み込み、アリ地獄のように誘い込んですり潰したかもしれない歯車は、無音のまま動き続けている。ファルマはすんでのところで踏みとどまった。

一人でここに近づいていたら、今頃は確実に魅入られて向こう側に行ってしまっただろう。ファルマに縁のある人がここまで付いてきて、親身になって我が身に立ち返らせてくれたことに、ファルマは感謝した。

この装置の謎を解明し、今後永劫に動かすにしろ破壊するにしろ、各地に散る秘宝の中に眠る古い情報を集め、歴代の守護神たちの足跡を辿り正しい結論に結びつける必要があると、ファルマはここにきて強く感じたのだった。

「今は何もできません。また、これを見にきてもいいですか」

どうぞ、とピウスは意味深な表情で頷いた。ピウスと二人でここに来たら、歯車の中に突き落とされていたかもしれない。そんな疑いも晴れはしなかった。

ともあれ、鎧の歯車は実在するという事だけはわかった。それはファルマにとって新たな頭痛の種となった。



## 6章8話 銚（かすがい）の歯車の中にあつたもの

銚の歯車は実在した。

ファルマは歯車機構を覗き込む。構造物は複雑かつ大規模で、歯車の狭間に空中に漂う礫片の挙動を見るに、鏡を兼ねる床材の向こうは無重力空間となっているようだ。

人間には銚の歯車は造れないし設計すら不可能、それは一目瞭然だった。

ピウスの言葉は、部分的には真実であるようだ。

「さて、あなたは銚の歯車を見たのだろう。そのうえでもう一度尋ねておく。あなたはこの、神力を動力に永遠に回し続けなければならない歯車を、一体どうしたい」

ピウスは厳かにファルマの判断を問う。

ファルマは言葉が纏まらないままに口を開いた。

「神殿はどう見積もっていますか？ 私がここで何をしようとも、それは結局数百年先に問題を先送りしているにすぎないのでしょう？ ならば当面様子を見るのでは不都合なのでしょうか」

「次の守護神が必ず降りるという保証はなく、できれば永久的な問題解決をお願いしたい。このままでは、私も無念を募らせ、悪霊になってしまいかねない」

ピウスの口から悪霊という言葉が飛び出してきた、傍で聞いていた女帝は失笑して訊ねた。

「大神官が悪霊化など、遺された者が困るでしょう。もっと手本と

なっていたかねば」

ファルマが聞き間違いかと眉を顰めると、ピウスは、冷気の立ち上る地下空洞を見渡した。ピウスの虚ろな表情は、感情の欠落を思わせた。

「いや、今もここにいるのだよ。神聖国でも殆どの人間は知らぬだろうが。こんな話を知っているかね、十二年に一度、大神官は代わりをする」

ピウスはおもむろに詰襟をはずし、踵を返すとファルマらに背を見せた。彼の病的なほど青白くやせこけた膚には、彼の背を覆いくすほど広範囲に焼き印があった。

焼き印を編む瘢痕は九割が黒く変色し、残りの一割は青みを帯びている。異様な光景に、ファルマは目を凝らす。女帝やファルマの薬神紋と同質のものとみえた。興味を覚えた様子の女帝が、ピウスに率直に尋ねる。

「この聖紋が意味する守護神は……？」

「これは聖紋などではない。融解陣ゆうかいじんという神術陣を背に負ったものが、大神官となるのだ。闇日食の祭日になると、この神術陣は動き始める」

「するとどうなるのですか？ 動き始めるといのは」

ファルマは矢継ぎ早に尋ねる。

「歯車を動かすには、神力だけでは足りないのです。潤滑油を差さねば、歯車が摩耗する。鋸の歯車もあり、潤滑油を必要とするのです」

ファルマはピウスの言葉の先を読み、愕然とした。

「この神術陣は、人間を鎚の歯車の潤滑油にするためのもの。私は溶け落ち、この鏡をすり抜けて、見えない歯車を潤すのだろ。そして私が消滅したとき、大神官は代がわりをする。誰かは知らぬが、次の融解陣を負った者が大神官になる。……私には歯車は見えない。この歯車について知ることもないが、闇日食の日を生き延びた大神官は歴代、ただ一人も存在しないのだ」

ファルマは茫然としたが、周囲の枢機神官たちも、ピウスの発言をさも当然のごと聞き流していた。ピウスは得体のしれない機構に命を使い潰されてようとしている。

ファルマは、身が凍えてくるのを感じていた。

戸惑うファルマに、ピウスは状況を確認するかのように言葉を繋いだ。

「鎚の歯車は、実在するのでしょうか。あなたがご覧になったように（そういうことだったのか……）」

ファルマはピウスと出会った時から、ピウスが神聖国の神官たちの中でもずば抜けて神力が強いわけではないことを、多少疑問に感じていた。

神力の強い者ほど守護神の加護が強いという世界観だ。

仮に神力量が大神官としての資質の全てであれば、神聖国の最上位にある大神官は神聖国で最も神力を持つ者が継承するのが順当だと思われたからだ。

ピウスはどうやら、融解陣に選ばれたという悲惨な経緯を持つらしい。

女帝に火神紋が刻まれたのと同様の事情だが、栄誉とは程遠かった。

ピウスを待ち受ける運命は、女帝のそれより過酷だ。

「いずれにせよ、ここが私の墓所になる。何をどうあがこうとなにに、殺風景だが、悪くはない。話し相手も多かるう」

ファルマがこの地下空間で目撃していた大量の死者。

それは、歴代の大神官が霊となり、地縛されていた者たちだ。

「あなたに言っても仕方がないが、守護神は何故、こんなものを創ったのだろっな」

ピウスはため息交じりに、誰に問うでもなく呟いた。

ファルマはその質問に、返す言葉も持ち合わせていなかった。

神聖国では、高位神官になるほど守護神への信仰心が薄らいでいる……その謎も解ける。一片の慈悲もない融解陣と、繰り返される生贄の死を目の当たりにしては、高位神官の間で信仰心など生じようはずもない。

「困りましたなあ。薬師ファルマ様。あなたはかつてないほど強力な神力を備えているにもかかわらず、守護神でもなければ、歯車のこと知らないという。只人だという戯言を貰われるわけですか」

ファルマはただピウスの失望を受け止めるしかなかった。

「いつになったら我々は、この装置の真実を知る守護神と出会えるのか。そしてなにゆえ、守護神の穿った呪詛に振り回され続けなければならぬのか。いつか知りたいものですな。人類がいつか、守護神の恵みという名の支配から解放される時を、私は希うばかりです」

ファルマはピウスに会う前、ジュリアナを手駒として使い、ファルマの命を幾度となく狙った。ピウスを、冷徹で狡猾な男だと想像していた。

さらに神聖国がピウスを大神官として戴いているのは、人徳を考えると不審だった。

だが、ピウスのその冷徹さは他者に対してのみならず、彼自身にも向けられ、彼は逃れ難い運命を受容し、生きながらの供儀として、自らの命を手放した男だと判明した。

「ピウスさん……今年、即位して何年目だと言いましたか？ もしかして、もうすぐその年にあたるのでは」

ファルマが尋ねると、ピウスは渴ききつた嗤いを浮かべた。

「演技にしても、そんな些事を気に掛けてくださるのは意外だ。このような血も涙もない殺戮機構を創り上げた守護神の言動としては、矛盾を覚えます。気に召されますな」

女帝は即位十年目で、即位時に大神官であったピウスと会ったと言っていたので、十年はとうに過ぎていた。

大神官が十二年に一度代替わりをする。

その言葉が真実なら、ピウスもまた近いうちに落命するということになる。

ピウスは薄く嗤った。

「私はもう死んでいるに等しい半死人。思い致すのは、死後のこの世界のことです」

「残り時間を教えてください！ それまでに鎧の歯車の謎を解き、悲劇と憎悪の連鎖を止めなければ……！」

ファルマはピウスから、次の蝕日食を聞き出そうとしたが、ピウスは口を割らなかった。

「憐れむふりをしてくださるな。もうよいのです」

「フリなんかではありません！ 次の蝕日食はいつですか！」

ピウスが殺されたあと、また誰かが選ばれる。悪夢の連鎖は続くのだ。ファルマはこの惨禍が起こるのを阻止しなければという思いにかられる。

そのとき、足元から突き上げるような衝撃がファルマたちを襲い、全員が体勢を崩す。

（地震　でかい！）

だが、周囲をよく見ると構造物全体は揺れていない。地震ではなかった。逡巡している間に床面全体に罅が入り、数秒置いて鏡面の床が砕ける。空間の中央にいたピウスと女帝が、鎧の歯車のある空間へと舞った。

（抜け……うわっ！）

漏れた空気が真空中へと、二人を攫って猛烈な勢いで流れこむ。

このままでは完全に床が抜けると同時に全員が真空中へ放り出され、落下と同時に鎧の歯車にすり潰されて即死は不可避だ。

瞬時に判断したファルマは、足元に向け物質生成で金属板を繰り出した。崩落する床面を補強しつつ再生し、神官たちの落下を食い止めながら、纏われてゆく板の割け目から真空中へ体を滑り込ませ、鎧の歯車の機巧の内部へと侵入した。

真っ先に吸い込まれたピウスは、鎧の歯車の最も大きな刃に直撃

し、既に肉塊と化していた。女帝は即死はまぬかれたものの、鎧の歯車の中枢部へと猛烈な勢いで落下を始めていた。

彼女は目を見開きもがくが、宙に投げ出され無情にも落下を続ける。杖を振って神術を使おうとしているそぶりはあれど、真空中では炎術は使えないのだ。

ファルマは身を刻む低温に全身が硬直しそうになりながら、金属板の裏側を強く蹴り込み、一気に加速して彼女のもとへとたどり着き、その細い手首を掴んだ。

そのまま踏みとどまって上昇し、歯車側から床上へと戻ろうとしたところで、ファルマははっとする。薬神杖は揚力を失っていた。

（なっ……力が！ 戻れない）

それどころか、ファルマの全身から神力が抜けている。

力が湧いてこない。

薬神紋から神力が供給される、いつものひりつく感覚もないのだ。ファルマ自身が鎧の歯車の内部に引き込まれているかのように、中枢部から壮絶な引力を受けていた。ファルマはおののく。歯車全体の機巧が、捕食者の大顎のようにも見える。

（だめだ……まずい！ 喰われる！）

ファルマが引力に抗いきれなくなったとき、ファルマと女帝は薄い水のような膜で包まれ、空間を漂う。胞の内部は暖かく、息ができ、窒息しかけていた女帝の呼吸は保たれた。

ファルマが戸惑っていると、胞の中へ響くように静かな少女の声が聞こえて来たのだ。

『やあ。きてしまったのだね、こんなところへ』

「あなたは……？」

『鋸の歯車が、新たな生贄を欲しがっているようだ。だが、まだ君はここに来てはいけない』

「あなたは誰ですか？ 一体何を」

ファルマは改めて周囲を見渡し声の主を探すも、姿はどこにも見当たらない。

胞が意思を持っているかのようだ。

『君と似た境遇にあつて、一番最後にここに囚われた者さ……ああ、すまないね。自己紹介したいのだが、名は忘れてしまったのだよ』  
(まさか……)

守護神と呼ばれる存在かもしれない、とファルマは直感が働いた。最後の守護神とされる存在は、農神の少女だったと、ファルマはサロモンから仕入れた予備知識を思い出す。ファルマと似た立場にあつて守護神として祀られてしまった人間……つまりこの死者は地球から来たのだろうか。

「農神……ですよね。地球の出身ですか？」

『農神、そんな風に呼ばれたこともあったか。地球というものは知らない。いかにも私は農神としてこの世界に召喚され、この歯車に呼ばれ消滅した。ここにある残渣はもうすぐ溶ける私の自我で、先代の自我はもう溶けた』

声は生への渴望をまったく感じていない。いかにも死者と会話をしている不気味さが伝わってくる。

『あの墓守は、また外の世界から人柱を送り込んで来たのか。この装置は、一度動き始めたら止まらない。生贄の守護神と人間の魂で駆動し続けているが、よほど君をほしがっているらしい』



彼女の話は理不尽と謎に満ちていて、ファルマはすんなりと受け入れられない。

ファルマと女帝は彼女に助けられたが、ピウスは即死した。ファルマはこの機を逃してなるものと、食い下がって尋ねる。

「何故私を助けてくださったのですか。そして墓守というのは、誰なんですか？」

『この世界を創り、一方では破綻させ、壊れかけたものを繕っている。君は覚えていないか。この世界に君を放った者を？』

ファルマは記憶を辿る。落雷によって目覚めた少し前。暗い場所から、彼は見出された。彼が何者かの手に包まれたのを覚えているような、そんな気もする。ただ、暗い場所にいた記憶はひどく曖昧で、その場面も断片的、抽象的だった。ファルマは記憶のブレを正すかのように頭を振り、目には見えない存在に話しかける。

「この装置を、止めることはできないんですか」

『墓守に抗うことはできるかもしれないが、この世界を壊すことでしか止められない。この宇宙は、無数の鋳で多くの宇宙に寄生し、複雑な因果を共有しているのだそう。繋がったまま片方が崩壊すれば……どうなるか想像してみるといい』

「そんな……地球も」

『そういうことだ。君のいた世界は地球というのか。そこに、神術はあったかね』

「ありません」

『そうだろう。この神術というのが、便利だがくせもので……ああ、もう時間がきたようだ。地上に戻りなさい。ここから、この世界で君のしてきたことを見ていた。君はまだここに来てはいけない。墓守の逆鱗に触れるかもしれないが、今回は助けよう』

「ありがとうございます……あの！」

その後、どれだけファルマが地下へ呼びかけても、彼女からの返事はなかった。

胞は床をすり抜けるように、ファルマと女帝を地上に運んだ。

「ファルマ様！」

サロモンがファルマを助け起こしてくれた。女帝はぐったりとしており意識は戻らないので、その場に横たえた。金属板の上に取り残された神官たちは、螺旋階段へと避難し騒然としていた。

「なぜこの床は崩落したんだ……！　こんなの、聞いたことがない」

「神力を注ぎすぎたのでは！　猊下はどこへ……！」

「それなんですけど……ピウス聖下はお亡くなりになりました」

ファルマは狼狽する枢機神官たちに、一部を伏せて事実を話した。ファルマがピウスを殺害したという嫌疑がかかるだろうが、どうしようもできなかった。

ピウスは鎧の齒車に衝突して即死だった。

空間の向こうでは神術が使えず、後から落下した女帝を助けるのに精いっぱい、ピウスを救出することはできなかったのだと。

床の崩落に手も足も出なかった枢機神官たちは、ファルマの話を飲むしかなかった。ファルマが物質創造で床を打ちなおさなければ、全員死んでいたかもしれないし、神官たちがピウスを助けられなかったのも事実だ。ファルマは全員を見渡して言った。

「地上に戻りましょう……ここは危険です、封印した方がいいと思います」

ファルマはなおも意識の戻らない女帝が呼吸をしていることを確認し、地上へ運んでもらった。ファルマが彼らの後ろから階段を上がっている、ふと彼の目に女帝の背にある赤いやけどの痕が飛び込んできた。

（陛下のうなじにあんな火傷なんてなかった……なんだ）

ファルマはぞくりとして、診眼を発動する。すると、彼女のドレスの下にくっきりと見たのは……先ほどピウスが見せたものと同じ融解陣だった。

ピウスの負っていた融解陣が消え、女帝に乗り移ってきたのだ。

「陛下……！ まさか、次の生贄に……！」

ファルマはピウスの死にざまを思い出す。彼は圧死しただけで、融解陣に溶かされて絶命したわけではない。

次の闇日食に、女帝は無事でいられるだろうか。

… … …

「今日は悪霊がたくさん見えるの……」

「そうねえ……こんなの久しぶり。変だわ」

エレンについて帝都郊外の男爵の屋敷に往診に行っていたブランシュは、エレンと馬を並走させている。今回の往診では、エレンが数年ぶりに目にした症例に当たった。

本物の悪霊憑きだ。一見して見破ったエレンは患者から悪霊を追い出し、エレンの神術で悪霊は追い払われ、森の闇へと消えた。エレンは神力を使い果たし、回復を必要としていた。彼女はただ、疲れ果てていた。

そんな彼女は帰る道すがら、農作業へ向かう老女についてゆく悪霊を見つけた。これから、彼女にとり憑こうとしているのだろう。エレンは杖を抜いた。

「水の禁域！」

エレンの杖から放たれた水滴が悪霊を囲み、悪霊を切り開いてゆく。しかし、神力切れで思ったように術が維持できない。エレンの神術に驚いたかのように、悪霊は退散した。

神官でないエレンは浄化神術を使えないので、悪霊を完全に浄化させてしまうことはできない。追い払うのがせいぜいで、もどかしい。

「杖をこんなに使うようになるとはねえ……気が抜けないわ」

「エレオノール先生、どうしよう、こわいのー」

「ブランシュちゃんも戦わないとだめよ」

「あいー……でもー」

これで何体目だろうか。ここ数日、帝都に、悪霊憑きや悪霊の出現が増えた。

帝都神殿の神官たちがパトロールを強化し一体ずつ浄化しているが、追いついていないようだ。彼女がブランシュを家に帰らせ薬局に戻ると、異世界薬局の門は閉じて、多くのメデシス家の聖騎士たちが集まって警備を強めていた。

「一時閉店？ そんな、どうして」

エレンは彼らの間をかきわけ、薬局に駆け込む。

すると、店内は荒れ果て客の姿はなく、セドリックとセルスト、そして清掃人たちが店舗内に散乱する割れたガラス類、薬瓶の片づ

けをしていた。セルストが気付いてエレンに声をかけた。

「エレオノール様おかえりなさいませ、シャルロットさんが……！  
二階です！」

「ロットちゃんが、どうしたの」

エレンが二階に駆け上がると、ロットは二階の処置室で寝込んでおり、周囲にはロジエとレベッカが深刻そうな顔をして付き添っていた。エレンはロットの傍に駆け寄る。

「ロットちゃん、どうしたの青い顔をして。具合が悪いの？」

エレンが尋ねても、薬師たちは顔を見合わせている。  
すると、いつも明るいロジエが痛ましそうに口を開いた。

「悪霊憑きが店に入ってきて、声をかけたロットさんに襲い掛かって来まシタよ。ロットさん、噛みつかれて怪我をしまシタ」

「どうして……！」

ド・メディシス家の門番の聖騎士と、ロジエ、そしてセドリックが悪霊憑きと神術で戦闘し、その間にトム少年に神殿に応援に行かせた。悪霊の発生との連絡を受けて駆けつけてきた帝都神殿の神官が、セドリックとロジエ、そして聖騎士が追い詰めた悪霊に浄化神術をかけたという。幸い、悪霊に憑かれた者は無事で、何も覚えていなかった。

神官たちは、ここ数日、帝都各地でひっきりなしに呼ばれているという。神官長コームが神聖国へと女帝を案内して行ったので、帝都神殿には神官が五名ほどしか残っておらず、神聖国へ増援を依頼したとのことだった。

エレンは血の気のないロットを目にし、狼狽する。ロットは首筋

を悪霊憑きに噛まれており、適切に処置がされていた。

「ロツテちゃんの傷に浄化詠唱はかけた？ 解呪のポーションは飲ませた。すぐに。あとは、何するんだっけ……そうだ、噛まれたのよね。傷口の洗浄と抗生物質は！」

「浄化神術は私がかけました！ 抗生物質もロジエさんの判断で、傷が熱をもちはじめたので予防投与しました。解呪ポーションはセルストさんが調合してくれました」

レベツカが力強く頷く。悪霊憑きに傷つけられた時には、浄化詠唱と解呪のポーションを飲ませるとというのが手順だ。それでも、呪いが体に回って助からない者もいる。

その呪いの原因の半分は、感染症であろうとエレンは判断している。

バイト薬師たちは、忘れかけていた伝統的な神術使い兼薬師としての仕事をこなしていた。

神術を使える一級、二級薬師、そして貴族の医師が患者を治す以外にしてきたもう一つの仕事。それは、一見病気と見違える悪霊憑きを見破り、被い、危害を加えられた者の命を救う戦いだ。

「ロツテちゃん……なんてこと」

「明日までに目が覚めなければ神官様が追加の神術をかけに来てくださるということです。今日は私がずつついています。ド・メデイス家にも連絡を飛ばしました。パツレ様が、よく効く解呪薬を調合してください」と

レベツカがロツテの看護を引き受けると言った。ファルマに対して不穏な動きをしていた神殿であるが、有事の際はなんだかんだ言っただけで、帝都神殿は市民を守っている。

「エレオノール様、一階をご覧になりましたか？」

「ええ、レベツカちゃん。大変な戦闘になっていたみたいね」

「薬庫にあるものは無事です。店頭のものはご覧の通りですが。悪霊が来たので、店内のものが穢されてしまったかもしれません。店主様がいらっしやらない時に……どうして」

「ファルマ君だけじゃない。陛下も、神官長も不在だわ。昔に逆戻りしたみたい」

もしかして、とエレンははっとした。

（ファルマ君が帝都にいないから？）

いや、それだけではない。ファルマはマーセイル領や各地を往復して、一週間ほど帝都を去っていたことなどざらだった。それでもこんな異変はこれまでになかったのだ。神聖国ほど遠い場所に、長期間出かけたことはないが……。異変が起こっている。神聖国へ赴き、女帝に随行したファルマの身が案じられる。

（今まで、帝都全体に影響していたファルマ君の強大な神力に押しつぶされて、絶滅したかに見えた帝都の悪霊……。それが湧いて出てきている。どういうこと？）

エレンは考えた。もし、ファルマが帝都やその周辺国にいたために悪霊が消えたのではなく、出てくることができなかつただけなら……。

「でも、帝都神殿には秘宝が……。まだある筈なのに」

神殿の秘宝は、悪霊を遠ざけてくれる聖域を形成するとされていた。その聖域が破綻しているのだろうか。するとロジェが思い出し

たように手を打つ。

「神官さん、秘宝が盗まれたといっています。なので、神聖国から新しい秘宝を取り寄せているとのことデス」

「えーっ どうしてこんな時に！」

エレンは絶叫する。神殿の警備が手薄だったところを、盗難に遭ったのだ。

秘宝安置室に複数の土足あとがついていたので、窃盗だろうとのことだった。

「ファルマ君、ジュリアナちゃん、サロモン様は陛下とともに神聖国へ。いま、帝都に神官は五名しかいない。秘宝は盗難……もう……」

エレンの予想では、浄化神術を使える帝都の神官は五名しかいない。最悪の状況がそろった。エレンはきつと外を睨みつけて口走る。

「揺り戻しがくるわ」

こうして再び、帝都市民に悪霊に怯えながら過ごす日々が訪れたのかもしれない。

エレンは体の芯から恐怖がこみ上げてくるのを感じていた。



## 6章8話 銚（かすがい）の歯車の中にあつたもの（後書き）

Comic Walker様とニコニコ静画様にて「異世界薬局コミカライズ版」、連載されています。

よろしくお願いいたします。異世界薬局特設ページ

コミックウォーカー様（4話後半まで）

<http://comic-walker.com/contents/detail/KDCW-MF000000310100000168/>

ニコニコ静画様（4話前半まで）

<http://seiga.nicovideo.jp/comic/24157?track=1list>

## 6章9話 サン・フルーヴの神術使いたち

大神官ピウスを失った神聖国の神殿上層部は、混迷を深めていた。大神官が死去した際には、神聖国では国葬となり、国中が半年間の喪に服すとされている。

鎡の齒車から遺体を回収できないと知った枢機神官たちは、来るべき時に備えて準備していたピウスの身代り人形を棺へ納めた。

身代わりとは手回しがよいことだが、どのみち融解陣を負っていたピウスが死去する際には遺体は残らないはずだったと枢機神官たちは答える。

地上に戻り、大神官の館へ女帝とともに同行したファルマは、女帝を休憩室で休ませつつ、鎡の齒車の中で聞いた声以外の情報を包み隠さず枢機神官らに話し、ピウスは助けられなかったと弁明した。客観的事実として女帝は命をとりとめ、ピウスは助からなかった。故意ではなかったとは立証のしようがなく、嫌疑を晴らすこともできないまま事情聴取はそれで終わった。

「ピウス聖下のことは、いかんともできませんでした」

ファルマがそう言うと、神官の一人はファルマに共感の言葉を寄せる。

「仕方ありません。私どもも、まさか鎡の齒車の蓋が開くとは予想できませんでした」

それを皮切りに、場を取り仕切っていた枢機神官たちが重い口を開いた。

「あなたが咄嗟に蓋を閉じてくださらなければ、神聖国はあのまま瓦解し消え去っていたでしょう」「我々はあなたに助命されました、ありがとうございます」

とはいえ、予定外のタイミングでピウスを失ったのは痛手だったのだろう。彼らは茫洋としていた。

「葬儀のかたわら、次の融解陣を負ったものを探し出さねばなりません。次の大神官を選出しなければなりませんのです。表向きには大神官は選挙で決まるとされていますが、実情はさきほどピウス聖下がお話した通りです」

「それって……全て元通りってことですか」

「そうです。それ以外に、やりようがないのです。鋸の歯車のことなど、誰も知らないのですから。守護神様でさえも」

生贄をうけ継いでゆく悪夢の連鎖は続くのだとファルマは静かに理解した。

対外的に大神官は、大神官選挙と呼ばれる選出過程を経て推挙されるということになり、大神官選挙が終わるまで、大神官の座は空席となるようだ。

「融解陣を負った者は、そう遠くにはいないと思うのですが。新たに見出されるまで、神聖国の国境を閉鎖します」

通例では、融解陣を負う者は神聖国の人間にしか現れず、枢機神官の中に現れることが多いとのことだ。その日のうちに枢機神官たちが強制的に集められ、一人ずつ背に融解陣がないかを検めた。

だが、該当する者はなく、枢機神官たちの間に動揺が広がりはじめた。

「こんなことは異例だ。枢機神官の中に見当たらないなど……この場合、どうなってしまうんだ」

「融解陣はもう、継承されなくなったのでは」

「いやそんなはずはない、どこかに現れているはずだ」

などと話し合っているので、ファルマはちらりと女帝の背に目をやり、診眼で現状を確認する。

（そりや見つからないだろう。融解陣を請け負ったのは女帝陛下だからな……でもここで言うのはナシだ。融解陣が枢機神官の中にしか現れないっていう先入観があって助かった）

ファルマは息をひそめ成り行きを見守った後、「陛下もお疲れですので、私たちは部屋で待機しています」と控室へと退散した。暫くするとサロモンとジュリアナらが部屋に入ってきて、部屋に施錠した。そしてサロモンがファルマに話しかける。

「陛下におかれましては、気を抜けない状況になりましたな……枢機神官は、血眼になって融解陣の担い手を探すでしょうし」

「でしょうね。サロモンさん、ジュリアナさん。念のためお尋ねしますが、次の閨日食の日って、いつですか？」

「はい、それを調べてきたのですが……判明しました」

二人は顔を見合わせ、ジュリアナのほうからファルマに伝える。

「来年の8月です。現在12月ですので、9か月しかありません」「厳しいな……陛下を鎡の齒車に近づけないようにすればいいのか」「はい。その時期に皇帝陛下が神聖国に滞在しておられるのは危険です。枢機神官たちに知られていない今の間に、帝都に戻るのがよろしいかと」

（来年の8月まで持たないパターンもあるな）

ファルマはぼんやりしてはいられないと思い知り、少し時間をあけてクララを控室に呼んでもらった。クララはファルマの顔を見るなり、安心したのか半泣きになってしまった。

「薬師様！ ご無事でしたか！ 大神官様がお亡くなりになったと聞きました……。すみません、お力になれなくて」

クララは悔しそうに俯いた。

犠牲者が出るのを止められなかったことを、悔いているのだろう。クララが死者を見分けられるという能力は、旅の結果亡くなる人間に対してであって、ピウスは神聖国から動いていないので、見分けられなかったのだという。

「大神官様はこのたび旅人でないので、私には命運が見えなかったみたいです……」

「いや、ありがとう。自分を責めないでくれ。君の予言があつたら気を抜かずにずっと警戒していてよかったよ。もつと犠牲者が出たかもしれないからね」

「そ、そうですね。最悪は脱しましたが、まだ胸騒ぎがするので……ここではなく、どこか遠くのほうで」

「それは帝都のほうで？」

「はい……。そんな気配もしますん。ここにいる皆さんは、無事に帝都に戻れますん」

「そうか。ピウスさんが亡くなってまた潮目が変わったのか。早く帝都に帰った方がいいな。ところでクララ、君の目から見て、陛下はどう見える？」

「……陛下は、陛下のままですん」

（融解陣の影響が見えていないのか？ それとも9か月先が見えな  
いだけなのか）

ファルマはクララの言葉に疑問をいだきつつ、ベッドで眠り続け  
る女帝の容体を見守る。

（例えば、融解陣を破綻させられないか？ 皮膚を一部切除すれば、  
陣は崩れるし）

ファルマは以前、火神紋が一部欠けているために守護神が宿らな  
かったという話を女帝から聞いたことを思い出した。神術のあるこ  
の世界では、神術陣の形態は重要な意味を持つらしい。

それでは融解陣の一部を欠けさせれば、死を免れられるのではと  
いうアイデアは、やってみる価値はあると考えられた。

そういえばとファルマはベッドに横たえられた女帝の掛布をめく  
り、ふくらはぎの火神紋を確認する。火神紋に変化はみられなかつ  
た。

火神紋は相変わらず不完全で、そのうえさらに融解陣が彼女の背  
に刻まれたらしい。

（もしくは、融解陣を書き足して意味をなさない紋様にしてしま  
うのが正解か……？ でも、そうするとまた、融解陣は誰かに乗り移  
るんだろつか。ん？ そもそもこの融解陣って何でできているんだ  
？）

根本的な問題を見逃していた。

ファルマはこれまで、女帝に宿った融解陣やファルマの肩に宿る  
薬神紋と呼ばれるもの、いわゆる聖紋に類するものが一体何なのか、  
調べたことがなかった。ただの火傷痕だと理解していたのだが、時  
折発光したりもするので、その解釈にも無理がある。

女帝の背中を診眼で見て光って見えたということは、火傷だというばかりでなく、何かの病変であるという可能性も排除できない。ファルマはすみやかに診眼に問うた。

「熱傷。肥厚性瘢痕。ケロイド」

（違う……）

「感染症」

（光が薄くなった）

なんとなく言ってみたのだが、正直想定外のことだった。

「細菌感染、ウイルス感染、寄生虫感染」

絞り込みをかけようとするが、反応はそれ以上変わらない。

基本的に、ファルマの診眼の能力は手あたり次第に病名や症状を言っていけばいつかは当たるものなので、病名のマージンを広くとってから絞り込んでいるのだが、どうも特定に一筋縄ではいかないようだ。それに、病名を知らなければ、永遠に特定できないというトラップに陥る。

診眼は参考にするべき程度で、絶対的に依存してはいけない。

（何の感染症なんだ！？ 帝都に戻って詳しく検査をしてみるか……診眼が使えないとなると）

彼は未知の疾患にも視野を広げる。先入観を取り払ってみれば、病態が潜んでいるかもしれない。ファルマが診眼を閉じ深呼吸をした時、女帝が目覚め小さく欠伸をした。

ファルマは目をこする女帝の傍に、つとめて平静を装いつつ彼女を窺う。

「陛下。お目覚めですか。お加減はいかがですか」

「背中が熱いのだが……何がどうなった。思い出そうにも、殆ど記憶にないのだ」

女帝は背に違和感があるらしく手を背面に伸ばしたので、ファルマはその手を取る。

「陛下は先ほど、鎧の歯車の蓋が崩壊し落下した際に背中に負傷なさいましたので、私が応急に処置を行いました。炎症を起こしますので、ご自身では掻いたり触れたりしないようにお気を付けください。こちらの鎮痛薬と炎症をおさえる薬をお飲みください。私が経過を観察してまいります」

「そなたが処置をしたのか。ならば不満はない。私はそなたに全幅の信頼を置いておるからな」

しかし、そう言う女帝の語気には力がない。

「私は陛下の主治薬師ですから、当然のことです」

ファルマは融解陣の正体が掴めないことをもどかしく思いながら、女帝にいたわりの言葉をかける。

女帝は何かをファルマに訊きかけたが、思い直したように首を振り、さっぱりとした様子で笑みをこしらえた。ピウスと同じ融解陣を負ったと、悟ったのだろうか。

ファルマが目にするその笑顔は、どこか諦念を含んだ痛々しいものだった。

女帝は腹部をぽんぽんとやって、おどけたように、「さて、余は小腹がすいたぞ」と言ってみせた。

「食欲がおりになるのは結構でございます。神聖国に食事を用意



してもらいましょう。ただ、陛下、食事の席ではお背中を負傷のこととは伏せておかれたほうがよいかと存じます」

これはファルマはどうしても釘を刺しておきたい部分だった。

女帝が融解陣を負ったと、誰にも知られるわけにはいかない。女帝自ら、背に違和感があるなどと口走られては、場所が場所であるだけに、神聖国側に背をあらためられるに決まっている。

「うむ。一国の皇帝たるもの、不調を他国に知られるわけにはいかん。そうであろう」

「御意のままに」

（物分かりがいいな、陛下。助かるよほんと）

女帝らは正餐の席で祈りとともにピウスの死を悼み、帝国へ戻る旨を神聖国側へ伝えた。

ピウスの葬儀までにはまだ期日があつたし、政務に戻らなければならぬとの意向を示したところ、神聖国側はそれをすんなりと了承した。

「服喪の期間に入るとなれば、私も自国の国務へ戻らねばならぬのだが、帰郷してもよろしいか」

「は……道中お気をつけて。神聖国の騎士団に送らせましょう」

「心配には及ばぬ、自分の身は自分で守る」

女帝が淡々と断ったので、枢機神官は余計な気を回したかというように肩をすくめた。

「大変無礼を申し上げました。ですが、神官長のコームをサン・フルーヴ帝都に帰任させますので、お供をさせましょう。帝都神殿の秘宝が、何者かによって盗まれたことです。早急に秘宝を持つ

て帰らせねばなりません。秘宝を盗まれた神殿は、脆弱になります。ただでさえ帝都神殿は人員が不足している折ですから」

「何者かに盗まれた？ 神殿は警備が手薄になっていないのか。それはそうと、帰国する前に新たな大神官選出の動向を知りたいものだが」

「それが、まだ候補者を発見することができません。追つてご報告申し上げます」

食事をしながら傍で聞いていたファルマは、彼らが女帝が適格者だと知らない態度をとったのでひとまず安堵した。ちなみにもう、ファルマの食事に異物は混入していなかった。ファルマはふるまわれた料理を美味しく感じた。

「では後継問題が解消したら、報告をよこしてくれ。あらためて就任祝賀の使節を遣わせる」

女帝はそう言つて席を立った。女帝が去ったあとファルマが、神聖国の今後の動向をあらためて尋ねる。何か協力できることがあれば、声をかけてほしい旨を伝えた。

枢機神官が話すには、大神官の後継が見つからなければ、神聖国は大神官空位のまま組織を大幅改編しなければならないとのこと。

「暫くの間、神聖国大神官が空位になるのは、行政上は構わないのですが、大神官の執り行つていた非常に重要な神術儀式ができなくなりますので、深刻な影響が懸念されます」

「深刻な影響というのは」

「神聖国を中心に各地に展開されていた神術陣が破綻し、鎮められていた各地の悪霊たちがさまよい出てくると予想されます」

「その儀式というのは、例えば私には代行できないものですか？」

ファルマの申し出に、枢機神官はよほど意外だったのか顔を見合わせた。

「融解陣を負った、たった一人にしかできません。他の誰でもはできず、長い修練を積んだ者にしかできないことです」

（融解陣を負った者は、自分の命と引き換えに、悪霊を退ける地鎮のようなことができるってことか……）

ファルマは予想外の影響に戸惑いながらも、女帝とともに帰途につく準備をはじめた。

… … …

悪霊に噛まれ、そのまま意識を失ってしまったロッテは、ド・メデイス家に戻された。

彼女の肌は時間を経るごとに青白くなり、体温も低下しはじめていた。

エレンとパツレが様々な神術や解呪薬の処置を施しても、いつこくに目覚めようとはしない。

翌朝、一晩中働き通しで疲労困憊といった様子の帝都の神官がやってきて浄化神術で解呪を試みたが、同じだった。

時間をかけて呪いを分析すれば解呪の糸口もつかめるかもしれないが、帝都中に悪霊が発生して人々に害を成しているらしく、ロッテだけのために特別な対応は難しいとのことだった。

「神官様、シャルロットはどうなってしまうのでしょうか」

「私には手のほどこしようがありません」

「そんな……何でもしますから。助けてやってくださいまし」

「平民の子供ですから……悪霊に弱いのです。運が悪かったと思ってください。しかしタチのわるい悪霊です。これほどまでに神術が

効かなかったことはない……守護神様のご加護のあらんことを」

神官は術が効かなかったので形ばかり同情をするそぶりを見せつつ、体裁悪そうに屋敷を去って行った。

「そんな、この子は……本当に助からないの？」

神官が帰ったあと、母のカトリーヌはロッテが助からないと思いつき、ロッテの手を握りしめさめざめと泣いている。ブランシュも、仲の良かったロッテの急変を受け入れられないようで、ロッテに抱きつくようにしがみついていた。

エレンは、古文書を調べながらロッテの容体を見守り、そしてことごとく解呪のための神術や解呪薬を試したパツレは、腑に落ちないといったように部屋の中を歩き回っていた。

「パツレ君、わるいけど気が散るからじっとしていてくれる？」

「エレオノール、お前は変だと思わないか」

パツレは出窓に腰を下ろし、脚を組んでふんぞりかえる。

エレンも困ったようにベッドサイドで両手を合わせた。

「ええ……これはただの悪霊ではないと思うわ。浄化神術も効かないってよっぽどよ。こんなときに、ファルマ君がいたら……いいえ、やめましょう、いないのだから」

旅程から考えると、ファルマはどんなに早くてもあと数日は戻らないのだ。伝書鳩を神聖国へ飛ばしたとしても、数日はかかる。この場にいる者だけで、何とかするほかなかった。

「父上にお願ひすれば、ロッテの呪い解けるよね？」

ブランシュが涙目でうつたえる。

「それはどうだろうな。父上の使う術は病の治療には効くが、悪霊退治にかけて神殿の浄化神術を上回ることはないからな」

「大きい兄上のほか！ 父上は悪霊になんて負けないもん！」

そんなやり取りをしているときだった。窓際に腰かけていたパツレは、背筋をぞくりとさせ、窓の外を見おろす。

メデイス家の裏庭のよく整えられた芝生が、とある一点から急に拡大し、あたかも生の気配を食い破るかのように見る間に枯れてゆく。

「待て……何か出やがったぞ」

そしてしばらくすると、地面から悪霊と思しき影がふわりと漂い、獣のように四つん這いで這いまわりはじめた。悪霊は人霊や動物霊などが多く、古戦場や墓地だった場所などからは特に出現する確率が高い。

神術陣の敷かれているド・メデイス家の敷地内で、悪霊が発生したのは初めてといっていい。

「は？ ……ここにも湧いて来たのか？」

いち早く異変を見つけたパツレは、杖を抜いて制御装置を解除した。

彼は無防備なファルマとは違い、肌身離さず杖を帯びている。

「どうしたの？」

「悪霊だ」

「悪霊　メデイス家に　そんな馬鹿な！　退治しなきゃ」  
「なあに、俺一人でいい。ノバルートではよく見たもんだが、久しぶりだな」

彼は窓を開け放ち、四階から躊躇なく窓から飛び降り、落下しながら杖を振る。

発動詠唱を与え、空中で上位神技を発動した。

「　　実戦時制限解除　下限　水の巨神」  
「ちよつ！　パツレ君　制限解除って何　何、その神技」

エレンが窓から身を乗り出し面食らっている間に、パツレは神力を爆発させ、神術で水の巨人を創り出し軽やかにその背に乗った。世界各地に伝わる神術を研究しつくしたノバルート仕込みの神術体系は、革新系神術と呼ばれ、帝国のそれとはまったく異なると言われている。一つずつの神技の消費神力が莫大であるがゆえに、神術の術式から術者を守るため、出力に制限を設けるのもノバルート式だ。

そんな神術をおさめていたパツレだったが、普段はその片鱗を見せることもなかった。

身をもたげる巨人は、腕を拡げてはじめてその威容が分かる。

この系統の神技としてはエレンも見たことのないほど巨大で、メデイス家の屋敷の背丈を越えている。

「どうやって制御しているの、あんな水の量……」

流麗な動作と的確な操作は、パツレが続けてきたたゆまぬ訓練のたまものだ。

パツレの瞳は、普段は見せない残酷な輝きを宿していた。

「”巨神の断罪”」

パツレは杖で軽く指示を与えると、巨人の振り下ろした氷の拳に圧潰され、悪霊たちはさらに巨神の体内に取り込まれ、一体も残らず消滅した。

パツレは水の巨人を消さず、そのまま氷の巨人にし、メデイス家の敷地を見渡し、さらなる異変がないか目を凝らす。中庭に一か所黒い染みを見つけたパツレは、悪霊が湧いて出ると同時に根絶させた。

「これで終わりとは思えねえなあ……暫くは気を抜かない方がいいぞ」

「パツレくん！　　が　　になってるわ　　！」

エレンが四階の窓から、声を張って叫んでいる。

パツレはエレンの声が聞きとれなかったため、巨神に乗ったままエレンのいる窓に近づいてきた。

「ああ？　お前、何言ってるか聞こえねーぞ」

「見て！　あそこ！」

エレンが窓から半身を乗り出し、帝都の中心部を指差している。そこは半径数百メートルにわたって、不自然に黒い霧が立ち込めていた。

「あの霧……あそこだけ立ち込めて、真っ黒。普通じゃないわよね……あつ、向こうでも新しい霧が発生したわ。どうなってしまっの？」

「帝国薬学校のある方向だな」

「大変……！　お師匠様に知らせなきゃ」

「わかったぞ、神殿の秘宝が盗まれ、帝都全体の守護神の加護が弱まっているから、悪霊の力も増しているんだ……つまり、守護神の加護が戻ればシャルロットの呪いも解ける。帝都中で発生している黒い霧を払えばいい」

「どうやって霧を祓うのよ！ 風属性の神術使いを呼ぶしかないわ、私たち水属性では霧に対してはどうしようもないわ」

二人がそんなやり取りをしている間にも、メデイス家の庭に黒い霧が立ち込め始めたように見える。

「そうでもないぜ。こっちも神力をたっぷり含んだ霧を使えばいい」  
「ええっ!？」

「濃霧の壁!」

パツレは霧の壁を神術で現出させ、黒い霧にぶつめた。すると、パツレの霧が衝突した部分は相殺されるように霧が消えて闇が振り払われてゆく。あつという間に黒霧はかき消えてしまった。

「この戦術は効くらしいな。ならばあの霧のところへ行ってくる、直接な」

「パツレ君、さっきから神力を使い過ぎだわ！ 出力過剰に気を付けて!」

「それを俺に言うなよ。エレオノール、お前はシャルロットを見ていろ。なあに、短時間でカタをつけてやる」

エレンがパツレに注意を促すが、パツレは聞き流す。

エレンが心配しているのは、パツレはよく、神力を一気に使いすぎて昏倒してしまうことがあるとファルマに聞いたからだ。



（どうしよう……今はまだ悪霊の発生が少なくてパツレ君は楽観的に考えているけれど、悪霊はどんどん湧いてくるわ。……帝都の中に、死者と因縁のない場所なんてないもの。この悪霊の大発生がフアルマ君がいなくなつた反動だとして、守護神の加護もなくなつたなら）

神術使いの神力が尽きるまで悪霊が湧いてきて、帝都は闇の都になつてしまう……とエレンは危惧する。

そんなエレンの気も知らず、パツレは巨人を变形させて薬学校へ向けて氷のスロープを創り、その上を滑走しはじめた。現場まで最短距離で駆け付けるつもりのようなのだ。

「ひゃーっはー！！ 有事だ有事だーっ！ 天変地異だぞー！」  
「なんて楽しそうなの。あの人、めちゃくちゃだわ……」

仮想敵とばかり相手をしていたものだから、いざ実戦となると嬉しくて仕方がないのだろくなとエレンは推察する。しかし、パツレの強気な姿勢はエレンを多少なりとも勇気づけた。

（しっかりするのよ）

エレンは自らの頬を打って、気弱になりそうな心を奮い立たせた。  
ド・メディシス家の神術使いの聖騎士たちは、ブリュノの警護や薬草園の見回りに出かけていて、屋敷に残っているのは家族と財産を守るわずかな聖騎士と、武装しているとはいえ平民の騎士しかない。

ブリュノは薬学校へ、パツレも黒霧を払うために飛び出していった今、メディシス家に近づく悪霊と対峙できるのは、実質的にエレンしかないのだ。

ロツテを見守りながら、悪霊を駆逐する。これが彼女に課せられ

た任務だ。

エレンは杖をしっかりと構えて腰を落とし重心を下げ、どこへ悪霊が現れるものか目を凝らしていた。

すると真後ろから神力を伴った風圧が生じ、彼女は爆風でにわか

「っ  
！」

風を受けた方向を見ると、風が地面を穿ち、庭園を抉り込んでいた。

エレンの目の前を黒い霧がさらさらと流れ、風にさらわれてゆく。悪霊が消滅したばかりのようだ。

「悪霊があなたに襲い掛かろうとしていました。背中がすっかりお留守でしたよ」

エレンが振り向くと、メデイス家当主の妻、ベアトリス・ド・メデイスが庭園に姿を見せた。

ベアトリスは貴婦人のドレスを脱ぎ捨て、華奢な甲冑に身を包み、瀟洒な宝杖を一振りする。

杖マニアのエレンも初めて見る、ベアトリスの生家であるダンハウザー家の宝杖。ベアトリスが普段携行していないものである。

家紋の三首の神鳥をあしらった杖をその手に携え、彼女は戦闘態勢に入っていた。

ベアトリスの登場に面食らっていたエレンは、我に返って叫んだ。

「奥様。危険ですから、お屋敷の中に入っておいでください！」

ベアトリスの身に何かあったら、ブリュノやファルマたちに申し訳が立たない、とエレンは彼女を案じる。

しかしベアトリスは毅然として首を左右に振った。ベアトリスを追って平民の使用人たちも外に出てきた。

「奥様！」

「危険？ ふふ、冗談。当主の妻が、安全な場所でのうのうとしていられますか。ここは、わが屋敷です。何者の侵入も許しません」

高潔な佇まいの中にも、どこか余裕のようなものが見え隠れして、エレンは彼女の意外な一面に圧倒される。

ベアトリスの神術の腕は、未知数。ブランシュが時々相手をしてもらっていたとは言っていたが……。そんなエレンの疑念をあざ笑うかのように、優雅な動作でベアトリスは宝杖を抱えた。

「”聖竜巻”」

立ち込めてくる黒霧を、ベアトリスの神術が弾き飛ばす。その神技は端麗で、よく磨き上げられたものであった。通常の神技とは違い虹色の光跡を持つ竜巻に、エレンはすっかり魅了される。

「お見事です、奥様」

「ふふ、杖のおかげだわ」

エレンはベアトリスの勇氣に敬意を表した。

「とはいえ、悪霊の発生を待つてそれを各個駆逐してゆくのは非常に非効率的です」

「はい……ではどのように」

「あなたは賢いのだからもっと頭を使いなさい、”破邪狂飆の大神陣”をご存じ？」

ベアトリスはにこっと、上品な笑顔をエレンに向ける。

エレンの實力に全幅の信頼を置いている、といった具合に。

エレンはベアトリスの言葉にはっとさせられたように息を飲む。水属性と風属性、二人いれば共鳴神技ならびに、共鳴神術陣が使えるのだ。

そして彼女は冷や汗をかきながらも、強気な微笑みを浮かべた。

「はい奥様！ お師匠様に御教示いただきましたわ」

「そう、よかった。いくわよ」

エレンとベアトリスは杖を逆手に取り、一斉に逆方向に走り出した。

広大な敷地面積を誇るメディシス家の周囲に沿って駆け抜けながら、長詠唱とともに空中に踊るように陣を描く。神力を少しずつ解放しながら神術陣の領域を閉じるまで駆け続けるこの神技は、体力と神力の消耗が著しい。だが、エレンもベアトリスもへたれはしなかった。

詠唱を続けると杖が重く感じ、息が上がってくる。

しかしエレンが薬草園の曲がり角をターンすると、遠くから猛然と疾走してくるベアトリスと目があった。その姿は気高く、エレンの目を通しては後光すら差して見えた。

「陣を閉じるわよ！ しくじらないで」

「はいっ！」

神術陣を敷設しながら周回し、再会したエレンとベアトリス。彼女らは手を伸ばし、発動詠唱とともに杖と杖を合わせフィニッシュを決める。

「水神と風神の名において命ずる、あしきものは恐れわきまえ、

聖域にはたちいるべからず”」

“いとたかきところにます神々の 世々に続く威光を示さん”」

その瞬間、二人の神力が融合する。

「破邪狂飆の大神陣”！」

二つの杖が合わさったそばから陣が閉じ、空中に青白い神術陣の発光が現れ、作用場が確立する。

敷地内に張り巡らされた神術陣の陣形が空中に固定され、同心円状に暴風雨をもたらし、メデイス家は竜巻の中に守られる。

完成したのは、陣の中心を聖域とし一定領域を風雨で浄化し続ける神術陣だ。

その暴風雨は、見た目の派手さとは裏腹に人間には殆ど悪影響せず、悪霊に靦面に効くものだ。これで、家の周囲で悪霊が発生したとしても、接近を許さない。

エレンが神力計で神力消費量を確認すると、その日に一度に放出できる神力の95%を消費した。

だが、もはや悪霊は侵入できない筈だ。理論上は。ベアトリスは杖を下ろしながら、エレンに笑いかけた。

「さすがだわ。この私の神力と釣り合うとはね」

「ありがとうございます、奥様」

エレンが帝都の中心部に再び目を向けると、帝国医薬大のあたりに存在していた黒い霧が水の壁によって打ち消され、ちょうど二つ消えたところだった。

「お師匠様が上位神技を使われたのだわ」

エレンは無意識のうちに、ファルマの帰還を切に願っていた。  
彼が帝都にいたなら、そもそもこんなことは起こらなかったのではないか、そんな予感がしてならないのだ。

（ファルマ君だったら何をしろというかしら。ロツテちゃんのこと……そして帝都全体の異変に、彼なら何をしようとする？）

エレンはファルマのこれまでの行動を一つ一つ思い起こす。彼は熱くなったように見える時でも、客観的な視点を忘れなかった。ときどき向こう見ずだったりもしたが、それは彼なりの行動原理のもとに判断を下していたのだろう。

（現象の観察をするわね）

有事には情報を的確に収集しなければならない。  
エレンは頭を冷やさなければと自らに言い聞かせた。

## 6章9話 サン・フルーヴの神術使いたち（後書き）

Comic Walker様とニコニコ静画様にて「異世界薬局コミカライズ版」、連載されています。

よろしくお願いいたします。異世界薬局特設ページ

コミックウォーカー様（4話後半まで）

<http://comic-walker.com/contents/detail/KDCW|MF00000031010000|68/>

ニコニコ静画様（4話後半まで）

<http://seiga.nicovideo.jp/comic/24157?track=1list>

（書籍4巻、コミカライズ1巻発売しております）

## 6章10話 禁術系列

ファルマは神聖国を去る前日、そういえばと思い出して、Wi-Fiを利用してありったけの情報をスマホへとコピー、ダウンロードした。鎡の歯車のWi-Fiの電波状況は変化なかったので、これ幸いと収集しつくした。

（今度は大容量ストレージを用意してこないとな）

今後は定期的に神聖国へ立ち寄る理由ができた、情報のためだ。ファルマが記憶できていなかった情報、覚えられなかった薬剤、遺伝子配列情報、バイオインフォマティクスを、前世とほぼ変わらない方法で入手できるのはこの上ない強みだ。

生命科学情報は新たな薬剤を生み出す生命線となる。

女帝の融解紋を癒すために必要と思しき情報は特に念入りに収集した。

プリントアウトができないのが寂しいが、スマホのストレージがパンパンになるまで詰めた。

翌日、女帝一行は出発の前、喪に服した神聖国から簡単な送別のセレモニーを受けた。

渦中の人である女帝は、背中の融解紋を気にする様子もなく、堂々としたふるまいで式典に参加した。

神聖国に対しては、大神官の不在によって予想される混乱を気遣う殊勝な態度を貫いた。

「では、皇帝陛下。息災をお祈りしております」

「うむ、帝国からも使節を送ろう」



「それから、サロモンの処遇は、陛下のご随意に」

新任の枢機神官長が、女帝に意味ありげに目配せをして述べた。それを聞いた女帝は怪訝な顔をしたが、すぐに気づいて豪快に笑う。

「ははは、お見通しだったというわけか。あの者は余がもらい受けてよいのだな！」

「破戒神官にはいずれ、身をもって罪を償わせるつもりではありません。逃亡者ジュリアナも含めてです。それまでは、しばし陛下にお預けしておきましょう」

「その方らも食わせ物よのう」

サロモンとジュリアナが随行していることは、すっかり見破られていたようだ。

女帝は豪快に笑いながらゆったりと顔を扇子であおぐ。神聖国の神官と聖騎士たちが整列し、女帝の馬車列の周囲に並ぶ。

彼らに見送られ、女帝とファルマたちを乗せた馬車列は神聖国の門をくぐった。

帝都神殿へ戻るコームら五名の神官も、女帝らの一団とともに帰国の途につく。

（やっと帰れそうだ……問題は山積みだけれど）

神官と大きなもめごともなく帰国の運びとなったが、ファルマの気がかりは女帝のことだ。

女帝を伴って神聖国に行かなかったとして、彼女は災禍を回避できただろうか。

ファルマはそうは思わない。

（融解紋の治療法はない、発動すれば100%死ぬ。でも、感染症

である限り、何としても治療法を見つけてみせる）

帝国への帰路となるカシア大街道は、神聖国によって敷設された舗装路のひとつで、周辺国家の主要都市間をつなぐ人と物流の大動脈でもあった。

行商や民間人の人通りも多く、神聖国から数十キロ圏内は街道に沿って宿場町が存在する。

神聖国へ各国の国王、貴賓、高官などが神聖国を訪問する際には、貴賓館という神聖国の公的施設を利用することができる。

ファルマは、神聖国からほど近い神聖国の隣国のエルヴェティア王国の二つ目の貴賓館で女帝一行と昼食休憩を終え、川辺の木陰のベンチに腰掛け、貴賓館に面する商店街の人々の往来を眺めながら融解陣を治癒するための思索に暮れていた。

「ファルマ様、ここにいらしたのですね。お飲み物をお持ちしました」

ジュリアナがファルマに、温かいハーブティーのカップを持ってきてベンチの隣に座る。

「ありがとう、ジュリアナさん」

「陛下のことを考えておられますか？」

「ん……そうだね。今は一人で色々考えたいんだ。ごめん」

「そうですか、お邪魔をしました。侍従長より伝言です。馬を休めたら、午後すぐに出発だそうです。出立の時間をお知らせにまいりますね」

「ありがとう」

ファルマがハーブティーを飲み干しながらぼんやりしていると、商店街の片隅で小競り合いの声が聞こえてきた。中年の男店主と、

客と思しき少女の悲鳴の混じった声が耳に入る。

「どうしてもその神術の水と聖別薬草が必要なんです。売ってください！ 母がそれを待っているんです」

「だめだだめだ。悪霊が現れる噂が広がって聖別薬草が品薄になつてゐる、それっぽっちの金じゃ貴重な神術薬を売るわけにいかねえ。とつとと帰ってくれ」

取り合ってもらえず、銀貨を握りしめ茫然自失としながら、あてどなく商店の路地を歩いてこちらへやってくる、十代前半と思しき平民の少女に、ファルマの視線は固定された。

その直後、彼女に目をつけていた物盗りが背後から荷物を強引にひたたくって少女を突き飛ばすと、雑踏の中を風のように走り去って行つた。

一部始終を見てしまったファルマはハーブティーを飲み干してベンチから腰を上げ、精魂尽き果て路傍にへたりこんだ彼女に近づく。そして、優しく見下ろすと、助けの手を差し伸べたのだった。

「大丈夫？」

ファルマの整った身なりを見た少女は、助け起こされて慌てるばかりで、礼をすることもできずただ萎縮し硬直していた。ファルマは彼女の、穴だらけの上着についていた泥をぽんぽんと手で払いのけた。彼女の革の靴の先は破れ、足の親指がのぞいている。

「ああ、ありがとうございます。なつ、何とお礼を申し上げてよいか」

「災難だったね」

「差し出がましいかもしれないけど、さっきあなたが買おうとしていたものを買わせてもらえる？ お母さんが薬を待っていると聞こ

えたよ。何が必要なの？」

温かい言葉をかけられたからか、少女の両目から大粒の涙がほろほろと零れた。

「アルブル。それを、この店で売っているって？」

「この薬店にしか置いてないんです。でも、また追い返されるかもしれない」

頷く少女とともに先ほど冷たくあしらわれた薬店の前にやってきて、薬店の入口の営業許可証を見たファルマは首を横に振った。

「ここでは買わない方がいい。店主は平民薬師なのに、神術薬を売っていると言ったの？」

「貴族の薬師様から、えーっと、調合の材料を買って調合をしたのだそうです」

少女は神術薬に何の疑いもないらしく、たどたどしく説明をした。

「たとえば材料を買いつけたとしても、平民薬師には神術薬は調合できないんだ。調合されたものは偽物だよ」

ファルマは一人で店の中に入ってゆき、アルブルというラベルの付いた薬瓶を見て手に取り、すぐに贋物だと見破った。そして顔を出した店主に一言放った。

「店主。神術薬を標榜して偽物売ってはいけない、この店では神術薬の調合はできないはずだ。この薬には神力がまったく含まれていない。これは詐欺薬だ」

「な、……大人しく聞いてりゃ……フルーヴ訛りのクソガキが！

出ていけ！」

ファルマの話し言葉の中に帝国のなまりを聞き取ったらしく、店主は露骨に悪態をつく。

「だいたい、何を根拠に神術薬を偽物だと言いやがる。お前のようなガキに薬の何がわかるってんだ」

「確かにこの国の薬師の調査には詳しくない。だが、神術薬か否かは一目瞭然だ。神力を感じない」  
「ぬかせえ！」

頭に血が上ったのか、店主はいきなり殴りかかってきた。

ファルマは店主の攻撃をするりと躲し、ファルマを殴打しようとした店主の拳の表面を神術で凍らせた。脅し程度で、数分もすれば氷は自然と溶ける。

「うわああっ！ つめてええっ！ このクソガキ、神術使いか！」  
「エルヴェティア王国薬師ギルドにはあとで話をしておこう、追って違法販売の処罰を待つかいい」

店主の口が、ぽかんと開いた。

「な、何でてめえみたいなガキが他国の薬師ギルドに手を回せる」  
「名乗るのが遅れたが、私はサン・フルーヴ帝国宮廷筆頭薬師のファルマ・ド・メディシスだ。他国であろうと、薬師の人事に対して多少の裁量はある」

それを聞いた店主は、ようやくファルマの襟元に光る宮廷薬師の黄金バッジを見つけて、店の床に這いつくばるように許しを乞うた。彼の目の前の少年の一存で、この薬店の営業許可が取り消される

ことがようやく理解できたからだ。

「ま、待て……！ 許してくれ、俺が悪かったなんでもする！ もう神術薬は売らねえ、無礼もわびる。まさかあのファルマ・ド・メデシスがこんな……」

「こんなクソガキとは思わなかったか？」

「ひいつ……」

薬学において数々の功績を打ち立てている宮廷薬師ファルマ・ド・メデシスの名は、他国の末端薬師たちの間にまで知れ渡っていた。しかし、

ただ、店主は名前を知っていても、その宮廷薬師が、まだあどけなさすら残る十二歳の少年薬師であるとは知らなかったのだ。ファルマが詐欺薬を売った罪を告発すれば、許可証をはく奪し平民薬師一人廃業させることなど、造作もない。

「薬を騙り、人の心を踏みにじるな。二度としないとここで誓え！」

ファルマは店主を見下ろしながら厳しく命じ、店主は泣きべそをかきながら懺悔と改心の宣誓をした。

事の成り行きを見守っていた少女は、少し離れた物陰から茫然と店主とファルマのやり取りを見ていた。ファルマは店から出てきて、少女に笑いかける。

「行こう。君の思っている薬は売っていなかったよ」

「ありがとうございます。やりとりがよく聞こえませんでした、……なかったということは、売り切れてしまったのですね」

「あー……そうか。お母さんの薬だ」

「で、でも私、隣の町に探しに行ってみます！ 神術薬の手がかりがあるかもしれません。ありがとうございます！ 私、くじけそ

うになっていました。ひもじくて、足が痛くて、喉もカラカラで、もうだめだと思って。でも、まだ歩けます。夕方になる前に帰らないといけません、私、頑張ってみます」

神術薬を求めて、彼女は痛む足をひきずって、腹をすかせながらどこまでも歩いてゆくのだろう。

ぺこぺこと礼をして急いで去ろうとする彼女に、ファルマは呼びかけた。

「ちょっと待つて。代わりといってはなんだけど、君がほしかったものは俺が調合するよ」

「え？ でも……私は神術薬が必要で、平民が買える神術薬を探しに行かなければ……母が待つているんです」

「いいかい、見てて」

ファルマは両手を軽く前にかざすと、片手で氷のグラスを造形し、片手で宙に水球を浮かせてそれをグラスにそそぎ、少女に差し出した。

「これは神術……ですか。初めて見ました」

少女はすっかり神術に魅了されて、瞳をまん丸にしている。

「こんなにきれいな水も初めてです」

「喉が渴いているんだっけ、しっかり喉を潤すといいよ」

少女はファルマの水にありつき、喉をごくごく鳴らして三杯も飲んだ。

パサパサだった彼女の肌にも、心なしか潤いが出て来たと言って喜んでいた。

「はあつ、こんなおいしい水がこの世にあるなんて、生き返ったみたいですよ」

「それはよかった」

「でも、どうして外国の貴族のかたが、見ず知らずの平民の私なんかによくしてくださるのですか？ 私はお金を全部盗られてしまったのに」

貴族から声をかけられたのも初めてだ、と少女は言う。

それまで彼女は、貴族に対してよい印象を持っていなかったようだ。彼女の故国にとっての貴族は平民をさげすみ、神術をふりかざし、平民に重い負担を強いるものでしかかったという。

「どんな身分の、どこの国の誰であろうと、お金があろうとなかろうと、大切な人のために薬を必要としている人を放ってはおけないよ」

「え……」

「俺は薬師だから」

ファルマは彼女を安心させるように、にっこりとほほ笑んだ。

少女が求めていたアルブルという神術薬は、帝国医薬学校で調合できる神術の変法で調合できる。神術によって抽出されたセイヨウヤナギのエキスを含む複数の生薬を、神術の生成水で煮詰めたものである。

それをファルマに調合しろと言われれば、ものの30分で調合できる。

だが、アルブルの解熱鎮痛薬よりもっと効果のある現代薬を処方することもできた。

患者にとってアルブルの処方が最善なのか、現代薬を処方すればよいのか、患者を診てみなければわからない。



「ところで、それを必要とする人はどこに？　俺がここで調合して薬を渡すこともできるけど、その薬が本当に必要かどうか、患者さんを診て決めたいんだ」

「母は村で熱にうなされながら、弟とともに私の帰りを待っています」

「君はどこに帰るの？」

少女の故郷を尋ねると、どうやら街道沿いの村で、ファルマたちの帰途と同じ道を通って帰るようだった。進路が同じとなれば、話は早い。

ファルマはド・メディシス家の従者たちに話を通して、馬車列の最後の馬車に少女を乗せてもらった。彼女は豪勢な食事にもありついたが、食事にはほんの少ししか手をつけなかった。

「口に合わなかった？　体調が悪い？」

ファルマが少女に尋ねると、少女は恥ずかしそうに白状した。

「あの、このお料理を持ってかえってよいでしょうか。真つ白なパンと柔らかなお肉を、母と、弟にも食べさせてあげたいのです」

「それなら、新しいのを持って帰るといいよ。パンも新しいものにするといい」

ファルマは女帝にも成り行きを話し、二時間だけという約束で母親の診察と薬の調合を許可してもらった。女帝は彼女の事情に理解を示した。

たった一人の平民の少女のために、皇帝の旅程を変更することに彼女は寛容だった。そして女帝は彼女の母親を気遣う。

「その薬は一度きり飲めばよい見通しか」

「まだ患者を診ていませんが、病状によります。もし継続的に薬が必要であれば、帝国郵便を使って彼女の村に薬を送るしかありません」

ファルマは、彼女とかわったからには最後まで責任をもって母親の治療にあたらうと考えていた。それを聞いた女帝はふうむ、と口をとがらせる。

「このあたりには、ろくな薬局と薬店がないのか。現代薬や、伝統薬を扱う店は」

「エルヴェティア王国には、現代薬を扱う店はありません」

「何をしておる、ファルマよ。はよう出店せんか」

「た、他国にですか？」

「エルヴェティアだけではなく、大街道沿いに薬局の出店を求める書簡を、神聖国へ送っておく」

こうしていとも簡単に、街道沿いに異世界薬局の国外出店が決まった。

… … …

ベアトリスとともにド・メディシス家の屋敷の周囲に結界を張り終えたエレンは、寝食も忘れロッテの傍に付き添っていた。

今、ロッテの呼吸は一分間に数回だけだ。

一日以上経口補水ができないことによる脱水を防ぐために、生理食塩水やブドウ糖の輸液を適宜ゆつくりと行っている。

心拍数が極端に下がってきたのでアトロピンを打つと、脈拍と血圧は一時的に改善するが、容体はすぐもとに戻る。

いつ、息をひきとるか。そんな危機感から、エレンはロッテのそ

ばをいつときも目を離せない。

ロッテの血液を一部とりわけて簡易血液検査を行っても、ロッテの血液を標本にして顕微鏡でのぞいても異常はみられない。だが、伝統的な神術試薬とロッテの血液と反応させると、最悪といてもいい強反応が出ていた。

悪霊がとりついている、エレンにはそうとしか判断できなかった。

（ただの迷走神経反射じゃない。悪霊は血液に乗って全身に呪詛を運んだのかもしれない。こんなことを考えなければいけないなんて）

エレンの一級薬師としての経験が警鐘し、最悪の予想が付きまとう。

悪霊に脈をとられる症例も、過去いくつか経験している。

アトロピンで拮抗していても、いつまでもつかわからない。

それらを一つ一つ思い起こしながら、彼女はファルマがこの世界にもたらした医学、薬学が効果を発揮しない世界がなおも存在することの深刻さと向かい合っていた。

（何でもかんでも悪霊のせいにしていた昔に逆戻りしたみたいだわ）

それでもエレンは、ロッテを失うわけにはいかなかった。

彼女にとってロッテは、古くからの馴染みであると同時に、多くの時間を共有した大切な存在となっていた。

「夜が来るわ。どうしよう」

ロッテの手首に触れながら、彼女は泣きそうになる。

夜の訪れに心がざわつくのは、久しぶりだった。

帝都の神殿の秘宝の盗難の影響も、これほどまでに大きかったのだと思い知らされる。

「エレオノール、シャルロットの容態はどうだ」

帝都の悪霊の駆逐を一段落つけたらしく、ずぶ濡れになったパツレがタオルで頭を拭きながら戻ってきた。ちなみにパツレは、銀髪 of 地毛がきれいに生えそろったため、最近はブランシュ由来のカツラをつけていない。

「エレン先生…… ロツテ、助かるよね？」

ブランシュも心配そうに、ロツテの運び込まれた客室について入ってきた。

「よくない徴候ね。あのあと、いくつか解呪薬を調査してみたんだけど、どれも効果はなかった。ごめんなさい」

エレンは素直に自らの力量不足をみとめ、謝罪した。

「だめなの？ 諦めたの？」

ブランシュの目にじわりと涙が浮かぶ。

「諦めてはいないわ」

「まあ、どーせそんなことだろうとは思った。なにせお前、へっばこだからな！」

エレンはパツレの挑発に、いつものように煽り返す気力もない。ノバルート仕込みの革新神術による神術の練度の差を見せつけられた後では、エレンは意気阻喪していた。エレンがつかかかってこないのを肩透かしに感じたのか、パツレは鼻を鳴らす。

「はっ、言い返さないのかよ」

「言い返さないわ。悪霊の発生状況はどう？ 帝都全域が闇に包まれば、ロッテちゃんの容体も闇に引きずられるわ」

「残念ながら、悪霊は発生し続けている。各個撃破は無理だ。帝都市民も憲兵隊の先導により避難所への避難が完了したようだ。あとは各所の避難所の結界でもちこたえるしかない。ボヌフォワ家も指定避難所になっているが、神術陣が屋外に二層立ち上がっていたので無事だろう」

「ああ、よかったわ。気になっていたの、教えてくれてありがとう」

「ド・メディシス家の結界を張ったのはお前か？」

「私と、あなたのお母上よ」

「ほう。ド・メディシス家の屋敷を守ってくれた礼は言っぞ」

雷鳴が轟き、豪雨が窓を打ち始めた。

窓の外を見ると、帝都全域を分厚い黒雲が覆いつくしている。

悪霊の発生は今もなお続いている、この天気では状況は悪化の一途をたどるだろう。

（夜闇が深まる前にロッテちゃんを救い出さないと。私が知っている神術はすべて試したけど、この悪霊には通用しなかった……これ以上、できることはないの？ 本当に？）

「いえ……あるわ！ 考えてもみなかったものが」

彼女は刮目した。

「禁術系列なら」

エレンは震えながら、禁断の言葉を口にする。

悪霊に対して特に効果の高い薬学の禁術系列が存在する。

だが、禁術は失敗すれば術者とその薬を受ける者の命にかかわるため、誰にも調査されないよう、人目の触れない場所に厳重に保管されている。

その保管場所は……そう、サン・フルーヴ帝国医薬大学校だ。

「私、大学に行ってくる！ パツレ君、ロッテちゃんを見ていて！  
書架の場所はわかってるわ」

エレンはコートを羽織り、勢いよく部屋を駆け出してゆくすれ違いざま、エレンの腕をパツレがはつとつかむ。パツレの腕力で掴まれると、びくともしない。

「待て待て、悪霊の嵐の中を一人で外に出ていくのは大バカ者だぞ！ 死にたいのか？」

「でも、ロッテちゃんを助けるには禁術を試すしかない！」

「待て、それならうちにあるぞ」

パツレは何かを思い出したようにドタバタと部屋を出て行く。メデシス家の地下から爆発音のような物音が断続的に聞こえてしてしばらくした後、黒い革表紙の、鍵付きの書籍を抱えて戻ってきた。大勢の使用人たちがパツレを追いかけてきた。

「パツレ様、そのようなことをなさっては困ります！」

「旦那様の書物を禁書庫へお返しく下さい！ 旦那様にお叱りを受けます」

「ごたごたうるせー！」

パツレは使用人たちを部屋の外へ押し返し、ロッテのいる客間に

鍵をかけると、書籍を掲げあげて嬉しそうにエレンに告げる。

「エレオノール、見ろ、これが禁書だ！」

「今、お師匠様の禁書庫を爆破して強奪してこなかった？」

まさか禁書がメデイス家にあるとは思わず、エレンは反応が遅れてしまったが、もしブリュノの知れるところとなればパツレと一緒に謝るしかない。

「バテラスールの調合法は載ってる？」

エレンは鍵を神術で破壊し、強引にページをめくるパツレに問いかけた。

「何だそりゃ。聞いたことはないな……あつた、赤の靈薬のことか？」

パツレが禁書の中の目録から、バテラスールという項目を探し当てた。

該当のページをめくると、まるまる数ページ白紙である。

「白紙だ。何で書いてない、この項目だけ」

「貸して、こうやって読むの」

エレンは杖で氷を作り出し、氷を手握ってページをゆっくりとなぞっていった。すると神術の氷の触れた部分にすうっと文字が浮かび上がる。

「神術の氷に触れると現れるの。神術の火であぶると現れる文字もあるわ……どちらも、神術が未熟だと読めなかったり、本を台無し

にしまっわ」

「さすが靈藥調合の禁書だな。適性のない者には読ませもしないとは」

パツレが感心したように腕組みをする。

藥学神術によって生み出される藥には、上藥、貴藥、特貴藥、妙藥、靈藥、神藥がある。

エレンが神術の粋を尽くして調合できるのは特貴藥まで。

それ以上の効能を持つ藥を調合できるのは、藥神を守護神とする藥師の中でも、超がつくほど一流の藥師だけだ。

バテラスールという靈藥は、生死を彷徨う人間を現世に連れ戻す効果があるとされていた。だが、ブリュノは「これを調合できる人間は現在一人もいない」と言い切っていた。その言葉の意味を、エレンは目の当たりにすることになる。彼女は落胆しながら読み上げた。

「藥神を守護神に持つ若い女藥師でないと調合できないんですって」

藥神を守護神に持つ女藥師は世界にたった二人で、サン・フルーヴ帝国の宮廷藥師フランソワーズはそのうちの一人だ。だが、若くはない。

「そんな藥師、帝国にいないわ」

「だが、俺の守護神は藥神で、お前は若い女藥師だ。藥神守護神の若い女藥師ならここにいる」

パツレがエレンと自分を交互に指さす。

「それ、二人合算で条件満たしたことになるのかしら……」

「お前の若さについて議論をしたいか？」



「そういう意味じゃなくて。一言余計よ……でも、やりましょう」  
「全文読んだな？」  
「しかと読んだわ」

それ以上の確認は互いにしない。相手の覚悟を試すことも。  
パツレは氷を手にし、もう一度禁書の最後の一行をなぞる。  
そこに浮かび上がった赤い文字は……

霊薬調合の失敗は術者に呪死をもたらし、成功しても術者の余命  
の半分を対価とする。

資質のない者の調合を固く禁ず。

そんな記載だった。

## 6章11話 神殿の破綻

ファルマたちは夕暮れどき、馬車行列に平民少女を乗せ、エルヴェティア王国のはずれの街道を走っていた。

「もうすぐ、村が見えてきます。まさか、皇帝陛下の馬車行列に乗せていただいて、皇帝陛下にお仕えする高名な薬師様に直々に診ていただけるだなんて。恐れ多くて、母がびっくりして倒れてしまうかもしれません」

馬車から見える景色が珍しいのか、嬉しそうに窓にかじりついている平民の少女の名はエマといった。行列の最後にエマと一緒に同乗していたファルマは、彼女が無邪気に喜ぶのを見て、彼女の母を助けたいと願う。

もう少して母親を名のある薬師に診てもらえる、エマはそんな期待を胸にいただいているようだ。

ファルマは馬車のシートで嬉しそうにしているエマの前に跪き、血豆だらけの彼女の足を見つめる。彼女はファルマの視線に気づいて足をひっこめた。彼女の顔が羞恥心でみるみる赤くなってゆく。

「きゃっ！ 見ないでくださいっ！」

「ごめん、足の手当をしようかと思って」

「私の汚い足のことなど、ほうっておいてください。いつものことですから……治していただいたとしても、新しいものがすぐにできます」

「……そっか……次そうになったら見ていて、こうやってやるんだよ」

ファルマが今、彼女を癒したとしても、それは束の間の癒しであ

り、彼女を貧困から救えるものではないかもしれない。それでも彼女は、彼女に必要な情報を伝えておく。彼女の泥と血にまみれた足を水で洗い、血豆が大きくなったときに血を抜く方法、針の消毒の仕方、そのあとの保護の仕方などを教えた。彼女に処置を見せながら、彼女の歩んできた境遇に思いをはせる。

「これで処置は終わったよ。次は自分でできそう？」

「難しいですけどやってみます」

「ほかにもいくつか、役に立つこともあるかもしれない。字は読めるかい？」

「字は少し……お母さんが読めます」

「字が読めるようになったら、これを読んでみてくれ」

ファルマは最近、執筆した分厚い教科書を抽出して、一般市民も読める簡易版を作成していたところだったので、それを見繕って、彼女が利用できそうな簡単な項目のページの端を折って彼女に手渡した。薬は手に入れないかもしれないが、予防方法を知っていれば防げる病、対症療法の方法など、それほど重篤でない場合には役立つことも多い知識だ。

「この本を役立ててくれ、病気や怪我になったときの処置の仕方、薬草、生薬の利用の仕方が書いてある。これを君が読んで、必要ならば筆写して周りのみんなにも教えてあげてほしい。分からなければ、巻末の住所宛に手紙を書いてくれるといい。返事を出すから」

「本を貰ったの、初めてです。名前を書いて大切にします」

彼女は手に取った本を眺めていると、涙がこみ上げてきたようだった。ボロボロの袖口で涙を拭いているので、ファルマはそつとハンカチを貸す。

「あ、ありがとうございます。……そういえば、診察とお薬の代金はすぐには払えないかもしれませんが、必ず働いてお返ししますの  
で」

「お金のことは心配しないでいいよ、これは君が依頼したわけではなく、俺がただ押しかけているだけだから。治せるかどうかも、まだわからないしね」

ファルマは笑った。そんなやり取りをぼつぼつと続け、馬車は揺れる。馬を休ませるために馬車行列が小休憩をはさんでいると、そのすきにクララがファルマたちのいる馬車に移ってきた。今にも泣きそうな顔をしている。

「薬師様、大変です。あなただけでも今すぐ帝都に戻れませんか」  
「どういうこと？」

クララはうたたねをしている間に、また予知夢を見たのだという。予知は刻々と変化するため、以前は見えなかった危険が見える場合もある。クララの予知は漠然しているので、ファルマとしても先読みして対応することが難しい。

「帝都までの旅、他の方々に旅路の不安はあれど命の危険はありません、ほかの方は大丈夫ですので、あなただけに帝都に戻った  
ほうがいいと思うのです」

「その言葉を裏返すと、俺だけに何か良くないことがある？」

「薬師様も命の危険はありません。ですがこの旅を急がなければ、あなたが生涯後悔をする予兆を繰り返し見ました。あなただけでも馬を夜通し走らせてでも、帝都へお戻りください」

「何か取り返しのつかないことになる、そういうことだね」  
「はい」

ファルマは診眼に諮ってクララを診た。クララの体調に異常はない。主である女帝を置いてファルマだけ先に帰れというのは、筆頭薬師としての服務違反だ。どれだけ無理を言っているのかわかっているつもりだとクララは言う。

「私の我儘に付き合っていたくことについて、皇帝陛下には私がお詫び申し上げます、どんな処罰も受けます、ですからあなただけは！ 帝都にお帰り下さい！」

「わかった、エマのお母さんの病気を診たら、すぐに帝都に様子を見に行くよ」

「よかった……」

クララはほっとしたようにため息をついた。ファルマはクララの言葉を信じる。これから起きることを欠片ほど知っていたとしても、運命は変わらないかもしれない。だが、彼女の予知は守護神である旅神の加護を受けた神術なのだ。

今、ファルマが人外の力を手にしているように、それは無力な少女が得たたったひとつの奇跡だった。神術という未知の力の存在するこの世界で、彼女の言葉を軽視することは、すべきでない。彼女も、気まぐれな旅神の天啓に戸惑っている、ファルマは常々そんな悩みを聞いていた。

4つの秘宝の核を埋め込んだファルマの新しい杖ならば以前よりさらに加速にすぐれ、帝都まで瞬く間に往復できる。

「そんな大変なときに、母のことでごめんなさい」

事情を聞いていたエマが、寄り道をさせてしまうことを悪びれた。ファルマは肩に手を添えて首を振る。

「君は気にしなくていい」

「あつ、でも次の村が、私の家のある村です。よかった、もうすぐ着きます」

エマがそう言い終わらないかという時、馬車行列が急停止した。そのまま行列が動かなくなつたため、業を煮やしたファルマは、エマにそこにいるようにと申し渡し、最後尾の馬車を出て先頭車列へと向かう。

女帝の乗る馬車の周りに、侍従たちが集まっていた。道の安全を確認する先遣隊が青い顔をしながら戻り、女帝に報告をしていたところだ。

「何があつたのかももう一度つつみ隠さず申してみよ」  
「は、ご報告申し上げます」

この先にある村には明かりがともっておらず、村は深い霧に覆われ住民たちが村のそこかしこに倒れていて苦しそうに喘いでいるというのだ。

女帝はふむ、と鼻を鳴らし、一拍置いてから側近に命じた。

「ならば直進だ」

女帝の判断を聞いた先遣隊の隊長は、歯切れ悪くこう述べる。

「おそれながら具申いたします。周囲に立ち込める深い霧は、ただの霧ではありません。馬も怯えて立ち往生するかと、私どもも、命からがら戻ってまいりました」

「何が言いたい、風の神術で霧など払えばよからう。はつきりと申せ」

「この先の村は、霧の悪霊にとりつかれていると思われます。しかもその霧は、異様な速度で濃くなってきているのです」

それを聞いた筆頭侍従は、強く進路の変更を進言する。

「陛下！　ここは迂回をご決断ください。村全体を襲うほどの悪霊とあらば、陛下の御身が危ぶまれます」

女帝とのやり取りを聞いていたファルマが筆頭侍従との間に割って入って口を開いた。

「お話し聞かせていただきました。その村人たちはまだ息はあるのですよね」

先遣隊はファルマの質問に渋い顔をしている。

「はい、まだ辛うじて。ですが既にもう虫の息で、救助できる人数ではありませんでした」

「陛下は迂回してくださって構いません、私が村の人々を救助に行きます。悪霊がいるなら、追い払ってきましょう。陛下と皆様はここでお待ちください」

ファルマは淡々と進言し引き下がろうとした。すると筆頭侍従がファルマをも引き留める。

「ド・メディシス殿。相手は悪霊、あなた様の御身も危険でございます。それに、ここは帝国ではありません、エルヴェティア辺境の管区神官や領主に救助を任せるべきです。過干渉はなりません、兵を送り領主に連絡はさせますので」

筆頭従長が強い調子で忠告をする。エルヴェティア王国は、内政も安定している。世界最大のサン・フルーヴ帝国といえど、あらか

じめ申請している神聖国への往還のための通行以外の、現地共和国民への帝国の干渉は歓迎されないだろうとのこと。しかしファルマは切り返す。

「政治的にはそうかもしれませんが、ですがこれは内政干渉ではなく民間人救助で人道的緊急措置です。人が大勢倒れているなら、悪霊であつてもそうでなくても村人を助けなければなりません、この大きな街道に面した村で発生した悪疫を放置しておけば帝国に多大な影響を及ぼします」

ファルマが毅然として告げると、子供に正論でぶたれた侍従たちは女帝の顔をうかがった。

先遣隊は悪霊の存在を察知したというが、ファルマは大規模な流行病の発生も視野に入れていた。その村に住んでいるという、少女の母親の高熱が気にかかる。

そこで帝都神官長のコームがやってきた。

「我々が様子を見に参ります。管区神殿にも連絡をとりましょう。悪霊の撃滅と病人の救済は我々の仕事です。しかし妙です、このあたりには大きな神殿があるはずですが」

喧喧諤諤のやり取りを聞いていた女帝がいらだったように述べた。

「ええい、さつきから聞いて居れば。何をうだうだと申しておるか、このまま直進すればよからう。平民の少女の家はその村なのだろう！ 悪霊ごときは、余手づからうち払ってくれる」

「それはなりません、陛下」

単騎でも直進するといわんばかりの女帝を、ファルマはたしなめる。融解陣を負ったまま悪霊や疫病などと接触して、女帝の身が持



つとも保証できない。ファルマは含むように言って聞かせる。

「私は悪霊ですが、やはり病も疑っております。そうであった場合、陛下がおでましになられると、流行病に感染してしまわれるかもしれません。白死病の際にご存じのように、陛下は神力に優れておられますが、常人より免疫が弱いお体にございます。感染の危険性がございます」

「さようでございますぞ、陛下。ご無事に帰国していただかねば困ります」

「陛下に万が一のことがあれば、我々は首を刎ねられます」

「ええい、こつるさい者どもめ」

女帝はふてくされたが、ファルマたちの説得が実り、女帝とその従者たちの馬車列は一つ前の宿場町まで引き返すこととなった。

「母さんたち……皆倒れていたんですか？ 村に悪霊がきたんですか？」

馬車から出て話を聞いていたエマがガタガタ震えていた。怯える彼女を見つけたジュリアナが抱きしめる。エマの家がどうなっているのか、彼女は気がでないようだ。

「エマ。お母さんと弟の名を教えてください、無事を確認してくる。君はここにいて、悪霊のことは神官に任せろんだ」

ファルマは家族の名前を聞き出すと、エマを信頼のおけるド・メディシス家の使用人に任せ、自身も診療バッグと神杖を手に救助隊に加わった。

五名の神官に加え、親衛隊五名、ド・メディシス家の聖騎士数名、

ジュリアナとサロモン、ファルマがそれぞれ馬で一団となって次の村へと駆ける。

コームは道中あることに気付いたようで、懸念を口にした。

「しまった……そうだ。管区神殿が機能してないとなれば、状況は最悪です」

「コームさん、どういう意味です？」

「あなたは、神殿がどのような場所に建てられているかご存じで？」

コームは黙りこくってしまった。コームの言葉をうけ、ファルマと馬を並べていたサロモンとジュリアナの表情も硬くなった。コームに代わり、ジュリアナがファルマに話す。

「大都市や交通の要所に建築された神殿もあります。ですがこういう辺鄙な場所にある大きな神殿については……非常にたちのわるい大悪霊を無理やり封じたまま、その上に建築された場所がほとんどです。つまり、神殿が破壊されたり、常時展開されている神術陣が破綻してしまっていたら」

ジュリアナは息継ぎもせず一気に告げた。サロモンが総括する。

「神殿は機能を失えば悪霊の巣窟ともなりえるのです、ファルマ様」

（神殿って……この世界では重要な施設だったんだな）

なんとも間抜けな感想だが、ファルマは目から鱗だ。コームを脅すために、以前安易に帝都神殿を破壊するなどと言ってしまったファルマは考えの足りなさを反省する。

「見えてきました。丘の上の神殿はメッセノ神殿です！ ん？！  
不滅灯がともっていない！」

コームが馬上で地図を確認しながら叫ぶ。丘の上に遠目に見えるのは、比較的規模の大きな、白亜の神殿であつた。不滅灯というのは、神殿に併設された鐘楼にかかげられる神術の炎で、神殿が正常に機能していることを示す合図だとサロモンがファルマに教えてくれる。

「神殿の根元部分に、黒い霧がかかっているようです」  
「神殿から悪霊が出てきているってことですか？」

となり村に続く街道に分岐が見えてきた。片方は直進コース、もう片方は丘の上の神殿に続く細道だ。

コームが切羽詰まったように口走る。

「ファルマ様、私どもは先に神殿に向かい、神術陣を組みなおしてまいります、悪霊の発生源となっているのかもしれない。村に向かうのであれば、お氣をつけて。とはいえ、悪霊が発生していた場合に備えて、浄化術の使える神官を一人随行させましょう」

「ご心配には及びません、浄化術でしたら私、ジュリアナが心得ております」

ジュリアナが名乗ると、コームは苦笑した。

「はは、もと枢機神官に、もと神官長だ。これは頼もしい、失念していましたよ。あなたがたに守護神の加護のあらんことを。はっ！」

馬に鞭をうち、コームたちは馬をかけあし駈歩に切り替え速度を上げた。分岐せず直進したファルマたちは、ほどなく前方の異変に気付く。

「確かに……何かいる！」

村に近づくにつれ、先遣隊の報告通りあたりを濃い黒霧が覆いつくしてゆく。

カミュと対峙したとき、あるいはユーゴーの屋敷の地下で見た悪霊と同じ気配が薄く大気中に広がっているのをファルマは感じた。

（これは確かに、悪霊のほうか……）

「清めの疾風」

風属性神術使いの聖騎士が、先頭を走りながら霧を払い、視界を確保する。しかし霧の発生はすさまじく、息苦しささえ覚える。救助隊の間でうめき声が上がりはじめた。

「ぐぶあっ！」

黒霧に溺れ、窒息した帝国の聖騎士の一人がもんどりうって落馬した。馬が暴れ、前進できなくなった者も。ファルマは馬上で杖を出し、先頭を駆けながら新たな薬神杖を繰り出した。

「神術で霧を吹き飛ばします、”疫滅聖域！”」

ファルマは杖を進行方向に向け、疫滅聖域を前方に放った。普通は同心円状に発動する神術だが、集中すれば指向性を持たせることもできるのだ。薬神杖固有の浄化神術に、神力の奔流が黒霧を一気に吹き飛ばす。術の発動に手違いはなかった。

だが、ファルマは以前と手ごたえが違うことを鋭敏に感じ取る。

（疫滅聖域の圏域が……狭すぎる！ 向こう五百メートルぐらいし

か効いてない？)

それでもつかの間の間、黒霧を退けることはできた。

ファルマが放つ聖域で、黒霧の渦の中に台風の目のようにこじ開けられてゆく空間の中を、救助隊は追いつきながら突貫する。落馬した者も慌てて馬に飛び乗り、黒霧が寄せる前にファルマの後を追った。

村に到着すると、ファルマは霧を払うがすぐに霧に浸食されて深くなり、効果は薄くなっていく。

「神殿の神術陣が回復すれば霧もなくなるでしょう。霧は相手にしても仕方がない、救助のほうを急ぎましょう」

「そうですね、手分けして探しましょう」

ファルマはサロモンの提案に従うことにした。

救助隊は数名ずつの編成に分かれて村の路地へ入ってすぐ、ファルマたちは村から逃げようとその半ばで倒れ果てたいくつかの死体を見つけた。はだしのまま逃げ出して、そのまま倒れこみ力尽きたようで、死体はまだ温かった。

「くそ……遅かった。悪霊にやられたのか？」

ファルマはふり絞るように声を出し、手袋をはめ、外傷がないことを確認し、簡易的に死因をさぐるため死体の下脛をめくってみる。そして、粘膜上に小さな出血、いっけってん溢血点を見つけた。毛細血管の破たんによる出血で、窒息死の兆候となるものだ。

「窒息死のようです。黒い霧に飲まれて息ができなくなったのです。ようか」

ファルマがそう言っている間にサロモンは素早く聖符を書いて死体の背に貼り付け、なにがしかの詠唱を行った。サロモンは死体を見慣れているのか、手際がいい。

「それは何をしたんです？」

「死者が悪霊にならないように簡易的に弔っています。特に神殿が機能していない今、弔われない死者は、すぐに悪霊となりますので……あんなふうに」

サロモンは振り向いて、村の路地に浮遊し近づいてきた二、三体の黒い影をみとめた。

サロモンに少し遅れて悪霊を視認したファルマが前に出ようとすると、すつとサロモンの杖が視界の前に割り込んできた。

「大悪霊ではないので、この程度の悪霊の相手は私にお任せ下さい、ファルマ様とほかの方々は村人たちの救助を」

「わかりました」

サロモンに悪霊を任せ、ファルマはジュリアナと数名と村人の捜索を開始した。そして宿屋の奥からかすかに物音がするのを聞き分けたファルマは、ジュリアナと顔を見合わせて中に踏み込む。すると、真つ暗な宿屋の中に、弱弱しく人のうめき声が聞こえた。明かりを向けると、宿泊客と思しき男女が倒れていたので、ファルマは彼らに近づいた。

「お待ちください。あしきものは彼方へ去れ」！

ジュリアナは聖水の瓶を開封し男女にかけ、限局型の浄化神術をかけ、部屋の窓を開けた。

彼女はそのまま手早く部屋の四隅に炭でいくつかの記号を書き、神術の発動詠唱を唱える。すると生存者の男女の体内から霧が湧き出し、霧は部屋の中に渦巻き、ポルターガイストのように室内の家具が乱れ飛んだ。ガラスは砕け、宿にある物は床へと散乱したので、ファルマは氷の壁で要救助者らを囲み、飛びかう家財から彼らを守る。しばらくすると、風は弱まってきた。

部屋が完全に浄化された後、要救助者は恐怖に打ちひしがれたのか、二人で抱き合ってへたりこむ。そのころには二人の意識もはっきりしていた。一仕事を終えたジュリアナはほっとしたようにファルマを振り返った。

「悪霊にとりつかれようとしていましたが、これで一安心です」  
「ありがとう、ジュリアナさん」

ファルマは元枢機神官であるジュリアナの素早い対応に感心しながら、要救助者二人に声をかける。

「助かりましたよ、すっかりしてください」  
「はあっ、はあっ、息が楽になってきました。ありがとうございます」

「わかりません、気が付くと体が重くなり息ができなくなって、倒れてしまいました、もう死ぬかと」

神力を持たない平民には、よほど感覚が鋭敏な者をのぞいて悪霊は見えない。

ジュリアナが、彼らの身に起こった出来事を解説する。

「黒い霧には実体化しないおびただしい低俗霊の念が含まれています、彼らは生者を求めているのです」

「急がないといけませんね。生存者を探しましょう」

ファルマは救助に徹した。村内では一見多くの村人が倒れているように見えたが、実は昏倒していた者が多く、窒息寸前だったものも酸素を給し悪霊を払えばかううじて目を覚ました。数え上げた犠牲者は十数名にとどまっていた。

「やれやれ、こちらも片付きましたよ」

ファルマたちがサロモンと合流したときには、彼は八体もの悪霊を軽々と駆逐し、遭遇した死者を集めて弔っていた。ファルマたちは、村の中央広場に集められた生存者の中に、エマの母親と弟を見つけた。かなり憔悴しきっているが、命には別状はないようだ。

エマの母親が高熱を患っていたのは、診眼で確認するところによると、急性扁桃炎のようだった。口を開けてもらうと、膿栓を確認できた。

「エマさんがあなたのお体を心配しておられました。神術薬を求めておりましたが、それよりよく効くお薬がありますので出しましよう」

「あの、あなたは」

「私は薬師のファルマ・ド・メディシスと申します。エマさんは安全な場所にいます」

「ええ……あの子が。なんとお礼を申し上げていいか」

ファルマは解熱剤と抗生剤を往診バッグから取り出して母親に手渡し、服薬説明をする。その間にジュリアナとサロモンが、晶石を配置し広場の中央に神術陣を描き、生存者をその中に集めた。

「この中は安全です、この神術陣の囲いから出ないでください」

「あんたは神官様かい？　ありがてえ……死ぬかと思った」



「さつき、馬でやってきた貴族が逃げ帰っていったから見捨てられたのかと。助けを呼びにしてくれたんだなあ」

「神術使いの聖職者や貴族様がいねえと、悪霊にとり殺されてしまふんだなあ」

「この近くには神殿があるのに、悪霊が出るなんてねえ」

犠牲者を出したものの、村人たちが救助隊に感謝の言葉を述べる。神術を使う貴族や神官が、この世界でどういう役割を果たしてきたのかをファルマは垣間見た思いだ。貴族の存在意義は、こういう非常時に発揮されてきた。生存を喜び、救助隊を取り囲む村人たちに束の間頬を緩ませながら、ファルマはそれでも腑に落ちないことがある。

（それにしても、俺の聖域の効果はなくなったのか？）

サロモンが以前言っていたように、以前はファルマの周囲には悪霊をよせつけない聖域が発生していた。存在すら実証できないその聖域とやらを妄信していたわけではないが、それによってかファルマにはこれまで、よほどの大悪霊でない限り遭遇しにくくなっていた。

ありふれた悪霊などは彼の目の前に出現することができず、ファルマが近づけば、悪霊はほぼ自動的に消滅していた。それが今はどうだ、ファルマの目の前で黒い霧が発生し、悪霊も出現した。

ファルマの神力や、使える神術などに特に変化はない。しかし確実に、以前とは様子が違う。

（大神殿の鎚の歯車の底が抜けて、大神官が亡くなって、世界が変わってしまったのかな）

「まだ、神殿に不滅灯がともりません」

村の高い建物の上から丘の上を眺んだ聖騎士の一人が救助隊一団に告げる。ファルマはその言葉を聞いてコームの存在を思い出した。

「そういえば！ コームさんたちに何かあったのでは……」

「神術陣の復旧に手こずっているようだな。あれほど時間がかかるというのは……」

サロモンの言葉を聞いたファルマは、即座に決断する。

「ここは任せていいですか」

「えっ、ということですか？」

ファルマはジュリアナとサロモンに告げる。

「神殿に行ってみます。皆さんは、村人の保護をお願いします」

「ファルマ様！ お一人ではなりません！ 私ども……」

「まだ霧が発生し続けている中で、手勢を分散させないほうがいいと思います。悪霊に対してなら、俺が一人で行けることのほうが多い」

ファルマの言葉に、サロモンは言い返す言葉を失ったようだった。ファルマは危険な場所に大勢の人間を連れてゆくことを回避すべきだと考えた。さもないければ、また女帝やピウスのような犠牲が増える。

「ごめん、ここにいる人たちを信頼しているよ。だからこそ、一人で行かせてほしいんだ」

「ファルマ様！」

ファルマは猛然と走り出すと、霧の中に姿を消した。一人で行動するないつも誰かに忠告を受けながら、それでも、自分だけがその場に赴かざるを得ない場面に遭遇してきた。

ファルマは様々な思いとともに霧を駆け抜けながら、杖に神力を通じ飛翔する。森を飛び立ち、ものの数秒で急浮揚し、神殿の上空に到達した。

（最初からここに俺が行っていればよかったんだ）

遠くから見れば一見立派な守護神殿の天井には、不自然に大きな穴があいていた。その穴の中からむせかえるような腐敗臭がし、近づいてみると神殿には蔦がはびこり、廃墟のような不気味な景観をあらわにしていた。

ファルマが目を凝らすと、聖堂の床にはどす黒いタールのような黒塊が堆積し、それが波打って流体を形成していた。その流体の間に漂う青白い神術の光が見える。五名の神官たちが、彼らを今にも飲み込まんとする流体に必死に抗っている神術の光だった。

その流体の表面は、大小の人面のようなものでびっしりと覆いつくされていた。

ファルマは杖に神力を一気に流し、上空から一気に急降下して地上と接触する寸前に神力をほとばしらせ、流体に杖を突きたてた。

彼の杖に宿る4つの秘宝の核が悪霊を認識し、流体を覆いつくそうと協働して聖域を発生させる。その威力は甚大だった。

「消えろ！」

ファルマが極限にまで集中を高め力を籠めると、流体の表面にあった顔のようなものは焼けただれ、そのままぼとぼと溶け落ちて神殿の床下へと押し戻され吸い込まれていった。

ファルマは悪霊の凝縮した流体を地下へ押し戻しながら、神殿の

床面に神力を踏みこむ。

それだけでは手を緩めず、神殿の床の神術回路に彼の神力を充満させ、神殿の聖域を回復させる。神術陣の構造など知ったことではないファルマは、力技でねじ伏せるしかなかった。それでも大抵、この世界の神術はファルマの意図に応えてくれた。神術の術式は、念を具現化させたもののなるう、だから詠唱もなにも本来は必要なく、こうしたいという思いとそれを叶えるための神力こそが奇蹟を顕す。ただ、神力が十分でないものは、術式の効力を借りる他にない。ファルマは最近になってそう思うのだ。

「薬神……様……ゴホッ、ガハッ」

朦朧としながら倒れ伏していたらしいコームが、吐血しながら起き上がり、膝についてファルマを見上げる。彼の瞳には、もう敵対や猜疑の色は宿っていない。ほかの神官たちはぐったりと床に倒れていた。ファルマは一人一人声をかけて助け起こす。よほどの激戦だったようで、神力を使い果たしてしまっていた神官もいた。

「全員、なんとか無事ですか？ 戻って手当をしましょう」

「守護神殿の秘宝が力を失って、この地に封じられていた悪霊が地上に甦ってこようとしていました……それが原因で、周囲の村に被害が及んだのです。情けない話ですが、あなたが来て下さらなければ、命はありませんでした……この御恩はけっして忘れません」

「気にしないでください、あれを相手にするのはその、無理でしょう」

人間が相手にできるものではなさそうだった、とファルマはコームたちの善戦を讃える。

コームはファルマの目を見ながら唇を震わせ、言葉を繋ぐ。

「しかしこの変化は、この神殿のみではなく、各地で起こっているものと考えられます……。神術陣の脆弱な神殿から、神殿は機能を失うでしょう。大神官の空位が世界中の神殿に影響しているのです」

クララの予言が脳裏によぎる。

いま、帝都神殿はどうなっているのだろう。

「世界の破滅の序曲が聞こえてきます。一刻も早く、大神官が見つかることを祈ります……」

コームは憔悴しきった様子でそう呟き、意識を失った。

… … …

「市民は名と住所を名乗り、学内へと避難せよ」

サン・フルーヴ帝国医薬大学校総長のブリュノは、大学周囲の住民に避難指示を出し、避難者を学内に受け入れていた。

「全門と全敷地内に緊急隔壁を展開、防壁神術陣を維持」

神術陣の扱いに長けた風属性の大学専属職員が、敷地の境目に悪霊の侵入を防ぐ強力な神術陣を編み上げて行く。それらの神術陣に近づいた悪霊が蒸発してゆくのが、平民には見えないが貴族たちの目に映っていた。

「ありがとうございます、尊爵さま。この御恩は忘れません」  
「どうなることかと思いました、これで安心です」

平民市民が荷物とともに、帝国医薬大学校へとなだれ込んでくる。

「なに、こういふときのために帝国貴族がいるのだ。安心なさい」

正門で市民を迎え入っていたブリュノは感謝の言葉に応じるかのように、不愛想に鼻を鳴らした。ブリュノの判断に少し遅れて、宮廷からは国務卿発令で帝都全域に緊急避難警報が発令され、帝都各所の鐘楼では、避難を告げる警鐘がけたたましく鳴り響き、帝国軍が市民の避難を誘導しはじめた。

有事の際の平民保護と悪霊との戦闘は、サン・フルーヴ帝国に住まう貴族の最も重要な義務だ。

悪霊が広域に発生した場合、市民は帝国の指定避難場所へ、間に合わない場合は赤い旗をかがけている貴族の屋敷へと一時避難することになっている。

指定避難場所は宮廷や帝国軍関連施設など、帝国医薬大学校も指定避難場所の一つだ。

夜は特に悪霊の影響が強まり、昼間は霧のようだったものが、夜には実体化して市民を襲うこともある。

帝国医薬大学校では、市民に配布するための寝具と、浄化神術をかけた腐りにくい食料を備蓄していた。水属性の神術使いたちが水を生成し、市民に飲み水を支給する。神術による生成水を使うのは、避難生活に腐りやすい水を各個人に持たせると、感染症を招くからというブリュノの判断だ。市民たちは滅多に有り付けない物を支給されて喜んでいる。

「ありがたい、神術の御水だ。透明だぞ」

「お貴族様はこういう時には気前がいいんだね、いつもは偉そうにしているのに」

「しっ、声が大きいわ」

貴族に対する市民たちの印象もまちまちだ。

「いつまでもちこたえればよいのでしょうか」

ブリュノは弟子を各所に送って帝都の全容を把握させていたが、帝都神殿はすでに機能不全となっていた。神官は神術陣を交代で維持するために神殿に張り付きっぱなしで、身動きがとれないそうだ。それでも帝都に発生しはじめた悪霊をこれ以上増やさないために、神殿の守りは絶対だという。

貴族たちが平民をかくまう避難所で展開される神術陣はかなり強力なものだが、これほどまでに大規模な神術を使い続けられ、いつかは神力が切れる。

すでに限界まで神力を使い果たし、神術を使えなくなった者もあらわれた。

「総長、お話がございます」

そんな防衛戦ともいうべき状況のなかで、教員を集め情報収集に追われるブリュノに、放線菌の専門家としての名をあげたキャスパ教授が声をかけた。ブリュノが振り向けば、キャスパを先頭に数人の老教員がそこに集まっている。みな、何がしかの決意を秘めた強いまなざしをブリュノに向けていた。

「私どもは古い先短く、今後の安寧など考えておりません。禁書庫を開き、私たちの神力を使って霊薬ハバリツールを調合してください」

キャスパ教授は、決然としてブリュノに提言した。サン・フルーヴ帝国医薬大学の禁書庫の禁術系列には、神術使い一生分の神力を代償に、薬神守護神の神術使いのみが調合できる、悪霊祓いの

靈薬が存在する。それを聞いたブリュノは、声を失い、靈薬と聞いた教員たちは敏感に反応する。

「な、なにを言っておるのだ。ならん、禁術を使つてはならんのだ」  
「神殿の悪霊は増える一方で、神術陣も長くはもちますまい。脆弱な避難場所から悪霊に飲まれてゆきましよう。靈薬ハバリトウールを一滴でも飲んだ者は、数日間、どんな悪霊も近づけなくなります。それを帝都市民全員に給すれば、全員が安全に帝都にほどちかいランプエ市に避難する時間は稼げましよう。避難のための体力を考えますと、避難民が心身ともに消耗してからでは遅いのです、國務卿にそのように具申下さいませ」

「しかし……靈薬の調合には命の危険がともなう。それに、ランプエ市も無事かどうか」

ブリュノが難色を示したが、キャスパ―教授たちは引かない。

「先ほど、ランプエ市の老学者と連絡が取れました。守護神殿は無事との報を受けました。帝都から二十羽飛ばして、たった一羽戻ってきた鳩による吉報です。信じられないことですが、皇帝陛下と神官長ご不在の今、帝都は悪霊の手に墜ちようとしています。ならば、市民の命を守るのが、私たちの使命ではありませんか」

「うむ……貴殿の言葉の通りだ、キャスパ―教授」

「私どもは、総長がこれまでどんな難解な薬の調合も失敗したことがないことを存じています、たとえ靈薬であつても。たとえご息が筆頭薬師となられても、帝国最高の神術薬師の座は不動です」

ブリュノは、彼らの熱い思いにうたれたのか、申し出を受け入れる。

「そうか。その覚悟、しかと受け止めた。力を貸してくれ」



それからわずか三時間後、靈藥ハバリトウル調合の報と、ラン  
ブエ市への帝都民全員の一時避難の進言が宮殿にもたらされた。

その直後、サン・フルーヴ帝国は、国務卿令で帝都全域に避難命  
令を発布した。

## 6章12話 靈薬の調合とド・メディシス家の秘密

「じゃ、靈薬の原料調達だ。薬品庫に行くぞ」

ブランシュをロッテのいる客間から追いだし、パツレが禁書を片手に息まいている。

エレンは客間のドアの外を気にしていた。外からは「パツレ様！ここを開けてください！」「禁書をお返しくください！ 旦那様にお叱りを受けます！」などと聞こえてくる。

「外にはド・メディシス家の使用人が集まっているみたいよ、彼らをつつ切つて薬品庫まで行かせてもらえるかしら」

「関係あるか、こつちから出ればいいからな。はーはっは！ 天才すぎて困るぜ」

パツレは客室の一角に歩み寄り、壁に手を当て、何やら発動詠唱を小声で唱えた。

すると、壁に神術陣が現れ、穴があき、隣の部屋への通路が現れたのだった。

「秘密扉」

「うちの全室は秘密通路につながってるんだぜ。侵入者や使用人の反乱対策にな。出ようと思えばそれを通して外まで出られる」

エレンには初耳だった。比較的最近建てられたボヌフォワ家には、そのようなものはない。

外観からうかがえるド・メディシス家は築数百年の古い屋敷で、伝統と格式を重んじた造りになっていた。帝都で戦争が起こってい

たところに建造された屋敷には、有事の備えもあつたのだろうか。と、エレンは驚愕する。

「それ、お屋敷の秘密なんて私に教えてくれてよかった情報？　フアルマ君からも聞いたことなかったわよ？」

「知つたつてお前には開錠できんからな。それに、腐れ縁でも一緒に禁を犯す仲だ、黙つていられるだろ？」

「そうね」

「世界最古の薬師の系譜をひく、わがド・メディシス家へようこそ！」

パツレは声のトーンを変え、大仰な動作と芝居がかった調子で片手を広げると、パツレはエレンを秘密扉にいざなう。エレンがおそるおそる踏み込んだ各部屋の壁裏を縫う秘密通路の奥には、ド・メディシス家の薬庫があつた。

「錠がないわ」

「そりゃないさ。この中にある薬は、国宝級の秘薬や神秘原薬ばかりだからな」

通常の薬庫とは明らかに形状の異なる嚴重な鋼鉄の扉で、鍵が見当たらない。

「こうやって開けるのさ」

パツレは鋼鉄扉に杖を押し付けて、エレンの聞きなれない発動詠唱を行った。彼の詠唱に反応するかのように扉に窪みができ、窪みを撫でると扉は開くようになった。パツレはエレンを招き入れながら薬品庫内部へと踏み入る。内部は宝物庫のような堅牢なしつらえで、壁面に据え付けられた棚には、整然と、値の張りそうな装飾の

薬瓶が並んでいた。

ブリュノの秘蔵するド・メディシス家の薬品庫には、神術薬学での調査に必要な薬の原料が、ありえないほどの品揃えでそろっていた。神秘原薬というのは、守護神の秘蹟、伝説の原料や晶石などの希少な原料で、ときに守護神殿や大神殿が所蔵する秘宝の一部でもあって、いくら金を積んで求めようと、表の流通経路には出回らない。

「信じられない、何百種類あるの？ お師匠様がこんなに神秘原薬を所蔵しておられたなんて」

「父上も宮廷薬師、表向きには言えないが、不老不死薬を含む霊薬や神薬の調査を試みたことだってあるのさ」

「知らなかったわ。そういうことを考えるのはトラモイユ元尊爵だけかと思ってた」

「あ？ トラモイユ尊爵がなんだって？」

「いいえ、こつちのこと」

「父上は禁術を扱うことの代償の大きさを思い知ってから、この秘薬庫はほぼ封印していると言っていた。今は所蔵しているだけさ」

「何があつたの？」

パツレは棚の端から原薬のラベルをたどって確認しつつ、エレンに説明する。

「あー実は俺の下、ファルマの上には、死産した妹がいるんだ。それが父上が禁術から手をひいた時期と重なるんだよ。父上に何があったのかは、俺は詮索をしていない。ただの死産なのかもしれないが、あの頃から父上は変わってしまったて、どうも引つかかるんだよな」

「変わったってどういうこと？」

「薬草園の拡大を始めた。舞踏神術を駆使し始めたのもそのころだ、

禁術から手を引いて、そつちに重きをおくようになったら」

「そんな話、知らなかった……」

エレンの知る師としてのブリュノは、帝国で生育可能なハーブなどを原薬とする、安全で汎用性の高い神術での神術薬の調合をメインとし、取り扱いの危険な神秘原薬での調合を禁じていた。

そして、ブリュノにしかできないことといえば、舞踏神術という風変わりな神術だ。

こればかりは、薬神守護神の薬師にしかできないということ、エレンが教わったことはない。

「パツレ君も舞踏神術できるの？」

「勿論できるぜ？ 使う場面はほばないけどな。さ、時間がない、秘密扉のことは母上も知っているから踏み入られるかもしれん。して、霊薬調合に必要な神秘原薬は、この棚にあるはずだ。」封印開錠”」

パツレは杖と神術で、はめ殺しになっている薬棚のガラスを取りのぞき、次々と神秘原薬の瓶を取ってはエレンに手渡す。

「っていうか、この薬のラベルの言語何？」

いわゆるブリュノの一番弟子で優等生であったエレンは、古語といわれるものの一通り以上の教養は持っている。そのエレンの知識を思い起こしても、見たことのない言語であった。

「読めないように、ド・メディシス家に古くから伝わる異語ってやつで書かれているからな。俺は父上に叩き込まれているから読めるぞ」

「ファルマ君も読めるの？」

「あいつは教えられていない。一子相伝ってやつでな、父上と俺にしか読めんよ」

それを聞いたエレンは、ブリュノが弟子に対し、置かれた立場にふさわしい薬学教育を施してきたのだと知る。ブリュノはファルマに、より汎用的な神術薬学を教えてきた。エレンもそうだ。

だが、パツレには、神秘に特化した薬学を学ばせていたのだ。

「パツレ君だけお師匠様に教わっていることもたくさんあるのね」  
「まあ、この屋敷の次の当主は俺だからな。父上に何かがあったとき代がわりできるよう、ファルマが知らないことも、屋敷の隅々まで知っているさ。この屋敷にいくつもある、開かずの間の開錠詠唱もな。俺があのととき白血病で死んだら、父上はファルマに教えただろうがな」

「そのわりには、禁書の読み方は知らなかったみたいけど」  
「蔵書の個別の仕掛けについてはしらねーよ、現在進行形で引き継いでいることも色々あってな」

宮廷薬師は、主君と命運をともにする。  
いつ何があっても、すみやかに当主を引き継ぐように。  
そう聞かされてきたパツレは、いつもブリュノの後を継げるように備えてきたという。

「君も色んな重荷を背負ってきたんだ」  
「まーな！ 恐れ入ったか、ははっ！」

「このお屋敷には多くの秘密があるのね。ファルマ君にそういうことを教えて共有しておかなくてもいいの？」

「薬神の力を持つファルマがこれらの原料を使えば、神薬の調合も夢ではないかもな」

神術を使う薬学で最上級の薬、その製法すら明らかにされていないエリクシールというものが存在する。

それは万能薬と言われ、どんな病も癒す神薬とされてきた。

「神薬は薬神にしか作れないし、そんな……あ。ファルマ君になら」

薬神紋を二つも身に宿すファルマなら薬神が造ったといわれる「神薬」の調査すら容易なのでは、エレンも確かにそう思った。

「神薬も夢のある話だが、ファルマはやらんだろうな」

パツレはそういうが、エレンも同意できた。

「使えばなくなる神秘原薬と、術師に大きな代償を要求する神術薬学の時代は終わったんだよ。限られた人間にしか扱えず、誰かを助けるために、誰かの命を犠牲にする薬学じゃ未来はない。父上も安全な薬学の普及を目指していたし、俺も禁術の殆どは習っていない。ファルマが薬神の天啓を地上に伝えてくれた。新たな薬学は、ここにある神秘よりよほど優れていると俺は思うぜ」

エレンと同じくパツレも、神術薬学と伝統薬学と現代薬学、大きな葛藤のハザマで生きているようだった。

「ただまあ、残念ながら悪霊に対してはファルマの薬学は無力だ。神術薬学はまだ、捨て去るわけにはいかないのかもしれないな」

パツレは引き続き暗号じみた古代語のラベルを読み解きながら、原薬を探し、エレンは容量と薬の保管状態のチェックをする。

「全部使えそう、さすがお師匠様は管理がいいわね」

「最適の状態で長年保管できるよう、父上が神術陣を敷いているからな。おっと……紫晶石の在庫が切れてるな」

「それは”守護神の聖体”か”聖人の遺灰”で代用できるはずだけと」

エレンが禁書を読みながら困惑したような顔をする。なければ、霊薬の調合の話は振り出しにもどる。

「それらしきものがあつたわね」

エレンの眼鏡が光った。

「なーんでファルマの髪が”守護神の聖体”として使えるんだろうなあ？」

「ファルマ君に聞いても”知らないよ”って言うと思うわ」

「意外と毛が落ちてないな。シャルロットのやつ、たく掃除が行き届きすぎだ」

ロッテの仕事のおかげで、ファルマの寝室に落ちていた毛を探すのに時間がかかったが、それらしき金髪を三本ほど見つけた。それを、不足している神秘原薬の代わりに細かく切ってるつばに入れると、きちんと”守護神の聖体”として反応しそうだった。

「あいつが散髪したら全部とつとかないとな」

「歩く神秘原薬ね」

エレンとパツレは水の神術で身を清め、その後、聖別された鉱石、緋晶石、濾過された聖水を凝結させ、宙に浮かせて維持したまま氷



の結晶の中へと神力を封じ込めてゆく。

これが神術核となるのだ。

部屋の中央に晶石でできた火打石で神術の炎をくべ、炉の上につばをかける。

パツレがるつばを中心に客間の床に場を浄化するための神術陣を杖で描き、その上にロツテを横たえ、ロツテの体に神力を通すための神術路を作る。

「材料はそろった。準備も万端。調合を始めるわよ。赤の霊薬バテラスールの導入詠唱を」

「唱えるぞ！ 失敗は許されん、確実に一語ずついくぞ」

二人の神術使いは視線を合わせ、声が重なる。

『「イ・アパレヴィト・イウス・ルーヴルム・レイト・イムト……」  
” ”

霊薬の調合は、原料が希少で術者への要件が厳しいほかは、ほかの薬の調合と比較すると手順はシンプルで、調合にあまり時間もかからない。

聖水を溶媒に、触媒である神術核へ神力をそそぎながら希少な神術原薬の数々を煮込んで完全に溶解する。

そこに、術者の血を注ぎ、それを濾して精製してゆくのだ。

長詠唱と、水の神術使い二人分の神力によって、神秘原薬が溶媒の中へと溶解しはじめた。

「赤の霊薬」の名にたがわず、るつばに赤い輝きがほとばしる。

もう、術が成功しようと失敗しようと、後戻りはできない。

「寿命ってどうやって取られるのかしら？」

「それは、霊薬の呪いの一種だろ」

「もし、呪い以外の何かが」物理的に」介在しているなら、呪いは解けるんじゃない？」

呪いだと思われていたものが、ファルマの薬学で解決できるかもしれない。エレンはその可能性に思い至った。

「つまり、この調合において、術者は何かに感染するってことよ」  
「なるほど。感染しそうな神秘原薬を分析すればいいかもしれないな。もうすぐ完全融解だ。血を注ぐぞ」

「そうね。謎解きは、調合のあとにしましょう」

パツレの呼びかけに、エレンが空色の瞳を眇め表情を締める。準備しておいた晶石刃のナイフを指先に当て、一気に傷をつけ出血させた。

「何やってる、そのナイフを早くよこせ！」

「この禁術に血をささげた人が残り寿命が半分とられると書いてある、失敗すれば呪死だわ」

「そうだ！ ナイフを貸せ、完全融解の機を逃すだろ！ 失敗して呪死したいのか！」

パツレはエレンを怒鳴りつける。

「霊薬に血を捧げるのは私だけでやる。薬神守護神の薬師は世界にも何人もいないのは周知のとおり。ありふれた水神守護神の私にはその資質がなくても、パツレ君になら使える神術もたくさんあるの。ド・メディシス家の秘蹟を継ぐ君に呪いをかけるわけにいかないわ！」

「だからお前はバカだというのだ！ 二人揃わないと条件に合致し

ねーだろ！」

パツレはエレンの持つナイフの刃を握りしめ血を流すと、そのままエレンの手首をとり、二人の手をるつぼの中へと浸した。

「ここで傷口から感染成立ってわけ……でも、なにも君まで」

「悲観的になることなえぜ。二人でやれば、取られる余命も四分の一になるかもしれねえさ」

パツレの言葉は、エレンには希望的観測のように聞こえた。

「ロツテちゃんも感染するのかしら」

「蒸留するからシャルロツトには感染せんだろう」

二人の血を受けた霊薬は、鮮やかな赤透明へと変質した。パツレが杖の先でそれをかき混ぜると、励起するように赤い光が飛び出し、波紋を作った。

それを火からおろし、慎重に濾して蒸留し、最後に神力を加えて仕上げる。二人は気合を入れて唱えた。

『“バテラスール・メディチナエ”』

片手ですくえるほどの量であるが、確かに精製されたバテラスールは、きらきらと粘度を増して赤く輝き、はちみつのようなとろみを帯びていた。

「まだ……二人とも生きているな。即死は回避、霊薬調合に成功はしたようだ」

失敗すればすぐに呪死するという霊薬の調合、しかも術者の条件

が合致していない状態での成功に、エレンは感動をかみしめる。

「完成したなんて……信じられない」

「早くシャルロットに使え。量がない、全部だ」

「わかったわ！」

エレンは薬へらで霊薬をたつぷりと取って練り合わせ、神術陣の上に横たわるロッテの額から塗布してゆく。

体の正中をなぞり、心臓の真上を滑らせ、一直線に臍まで引き下ろすと、ロッテの体を通じ神術回路に神術が連絡される。暫くすると、霊薬はロッテの体へと吸い込まれていった。

次第に彼女の膚が赤みを取り戻す。

エレンとパツレは顔を見合わせて、ほっとしたように頷いた。

「呼吸が深くなってきたわ。どうかしら」

パツレもやれやれと床に腰を下ろしながら、ロッテのバイタルを確認する。

「脈拍も……体温も上がってきているようだ。あとは目を覚ますのを待っただけだ。シャルロットの魂を引き戻したようだぜ」

「うつすらと目を開けたわ……また閉じたけど、あとは意識が戻るのをまつばかりね」

二人は極限の集中から解放され、束の間の笑顔を見せた。

「あなたたち！　ここで何をしたのです！」

高らかな声とともにベアトリスがドアのバリケードを神術で破って客室に踏み込んできた。文字通り、部屋に風穴があく。

「ひょえー……は、母上？　いかがなさいましたか」

パツレのいうように秘密通路を通って客室に侵入できるのだが、それはすっかり忘れていたらしい。ベアトリスは薬学には詳しくないが、ただならぬ気配を察知したようだ。彼女は悲鳴に近い声を出した。

「まさか、禁術を使ったの」

「シャルロットを助けるには霊薬を調合するしかなかったのです」

ベアトリスの勘のよさに驚いたように、パツレが釈明する。

「まあ！　なんて愚かなこと！　代償に何をささげたの」

「あなたに迷惑をかけるものではないですよ、母上。この通り、私もエレオノールも無事です」

「ああ、奥様、おぼっちゃま、ボヌフォワ様、どうお詫びしてよいか……」

ロツテのために何か大変なことをしでかしたらしいと知ったロツテの母のカトリーヌが、部屋の外で泣き崩れる。娘の命の危機に瀕した母親のカトリーヌを慮ったのか、ベアトリスは諦念を込めたようにパツレとエレンの顔を直視して告げた。

「もう……これっきりにしないで。禁術は恐ろしい術よ。無事であったわ」

「わかりました、申し訳ありません」

パツレとエレンが反省の弁を述べる。

ベアトリスは深い悲しみを押し殺した顔をしていたが、はっとし

たように早口に告げる。

「ここを出なさい。神殿が力をうしなつたために悪霊が街にあふれ出てきて、帝都じゅうの神術使いの神術でもおさえきれなくなっているわ。皇帝陛下がご不在の折だけど、國務卿令でランブエ市への一時避難令が帝都全域に発令されたようよ。それと同時に、ハバリトウルという薬が帝国から主要な避難所に配給されているわ、それを飲んで、お前たちは早く避難なさい」

「ハバリトウルですか」

パツレが驚いて思わず口走る。ベアトリスが持ってきた小瓶に入った溶液は、緑色に輝いていた。これをわずかに飲めば、数日間悪霊をよせつけないという。

飲む量が適正でないと効果はなく、一度きりしか使えない霊薬だ。ベアトリスはその場でパツレとエレンに霊薬を飲ませた。二人は否応なくそれを受け入れる。

「苦いわね」

「霊薬だからな。父上の調合によるものだろう、霊薬を調合できる薬師はそうそう帝都にいない」

「それにしても、お師匠様も禁術系列を使ったということね」

「それだけ父上も追いつめられているということだな」

「ハバリトウルの調合には、何人かの高位神術使いの神脈が枯渴するまで神力を使ったでしょうね」

「だろうな」

神力を奪われた貴族は、平民に落ちる。神術使いとしての死の代償をもって調合できる霊薬だ。

普段のブリュノから察すると、自らはともかく他者を犠牲にしてまで禁術に手を染めるというのは、エレンには想像だにできなかった

た。パツレのいうよう、状況は最悪といってよさそうだ。

「馬車の準備をしてあります。屋敷の使用人も、屋敷に逃げ込んできた周囲の平民も避難をするように準備させています、シャルロットを連れて、お前も早く支度をなさい！」

「母上はどうなさるのですか？」

「私はド・メデイシスの当主の妻です。主人が戻るまで屋敷を守るのがつとめよ、霊薬も飲みましたし、問題ありません」

「母上を残して避難できるわけじゃないでしょう。私を子供とみくびらないでほしい、神術と神力量だけなら、あなたより私のほうが神術使いとしての腕は上だ」

パツレはベアトリスに苦言を呈した。

「いいえお前とブランシュには逃げてもらいます。お前こそ私を見くびりすぎです、私は悪霊がひくまで、この屋敷を守り通してみせる。当主はサン・フルーヴ帝国薬学校の教員とともに帝都に最後まで残るそうよ、ならば私は、ここを守る。行きなさい、お前の神術はブランシュと屋敷の者を守るために使いなさい」

「あーもー母上、そう意固地にならずとも……！」

ベアトリスの決意は固いようだった。

パツレが対処に困っていると、エレンがふらりと客間を出ていくとした。

「私、行きますね。用事を思い出しました」

「ボヌフォワ先生、あなたも当家とともに避難をしてください。ボヌフォワ家もそうしているはず、ご家族もすでに避難を始めていると思うわ、ランブエ市で落ち合えばよろしくてよ」

ベアトリスがエレンを呼び止める。しかしエレンは振り返り、困ったように告げたのだった。

「ごめんなさい」

「エレオノール、どこへ行く」

「薬局よ」

「何だつてこんなときに。営業もできるわけがないだろう！」

「守らなければならないものがあるの。あなたはロツテちゃんとブランシュちゃんたちをよろしく」

今、異世界薬局は悪霊憑きの襲撃を受けたあと、ドアが破壊されているために戸締りが完璧ではない。今なら、薬局内に悪霊が容易に入り込める。もっとも大切なのは店舗内の販売品ではなく、ファルマが「二度と手にはいらない」と言っていた試薬類。そして、これまで彼が大切に保管してきた薬局のあゆみ、患者の命を預かる力ルテと薬歴だ。

これらが失われれば、ファルマがこれまでしてきたこと、これからしようとしていることができなくなる。彼が戻るまで、命に代えても死守しなければならない。

「それぞれの持ち場が決まったわね。武運を」

「待てエレオノール！」

「また、笑顔で再会できると信じているわ」

エレンは気丈にはほ笑むと、パツレの制止を振り切って走り去っていった。



## 6章12話 霊薬の調合とド・メディシス家の秘密（後書き）

6/23現在、コミックウォーカー様とニコニコ静画様で異世界薬局コミカライズ7話「異世界薬局の創業」掲載中です。

コミックウォーカー様

<http://comic-walker.com/content/detail/KDCW-MF000000310100000168/>

ニコニコ静画様

<http://seiga.nicovideo.jp/comic/24157>

## 6章13話 世界劇場の開幕

エルヴェティア王国郊外、メッセノ神殿の悪霊を駆逐したファルマとコームらは、すぐさまエマの家族の住む村へと引き返し、サロモンとジュリアナ、聖騎士らと村で合流した。

サロモンとジュリアナは、不安そうな住民たちに応じていた。そこへ現れたファルマが声をかける。

「もう異状はありませんか？ 守護神殿の神術陣は復旧しましたが、どうなったでしょう」

「ええ、神殿の機能が戻ったのか、悪霊の発生も落ち着きました。これで村人たちも家に帰れそうです」

「ですが私たちは念のため、しばらくこの村の様子を見ています」

彼らは朝まで村を警戒し、そのまま女帝一行が街道を通過した際に女帝一行と合流するのが合理的であろう、ということである。その場に残る段取りになった。ファルマは女帝に進路が通行可能であると報告をするため、単独で引き返すことになった。

「では私が陛下のもとに、この村までの進路が安全であることを報告して参ります」

「薬神杖でお戻りになるのですね、賢明なご判断にございます」

ジュリアナが察すると、サロモンは一歩進んだ提案をした。

「そのまま帝都にお戻りになったほうがよいでしょう。この様子では……帝都も同じ状況になっているかと」

「そうですね。陛下に報告のうえ、お許しを得たらその足で帝都に

急ぎます」

「どうかご無事で。幸運を」

「ありがとうございます、この場はよろしくお願いします」

ジュリアナはファルマの手をとりあげて両手で握りしめ、祈りを込めるようなしぐさをした。ファルマはその手の中に、彼女の微かな神力を感じた。

ファルマは新たな薬神杖を携え、神力を与え浮力を得、そのまま夜空高く舞い上がり、雲を切り裂く。

月を仰ぎ方角を得ながら、目指すは女帝一行のもとだ。

眼下には街道にぼつりぼつりと灯る民家の明かりが、まばらに見える。

目的地が見えてきた。人目を避けるため少し離れた場所に降り立ち、街道沿いの宿で休息していた女帝の一行に加わる。

女帝は寝間着に着替えることもせず、クララと酒を嗜みながらファルマの帰還を待っていた。

ファルマは女帝に帰還の報告とともにエマの村の無事を告げ、悪霊にとりつかれた守護神殿の様子、悪霊への対処の経緯を説明した。神殿から悪霊が発生していたという情報を耳にした女帝は、深刻な面持ちになった。

「神殿は、秘宝により悪しきものを封じていたと。秘宝が機能しなくなつたとなれば、難儀なことだな」

「はい……。それに絡みまして陛下、私を緊急に帝都に戻していただいてよろしいでしょうか。帝都には大きな守護神殿がございます」

話を脇で聞いていたクララが女帝の前に割り込み、ファルマの隣に平伏し加勢する。

「陛下、私からも奏上いたします、なにとぞ薬師様に勅令を賜りたく」

クララは、ファルマを一刻も早く帝都に戻すべきだという天啓を受けたと女帝に直訴した。女帝はクララの勢いに面食らいつつも許諾した。

「帝都で何が起きている？」

「それを、私の目で確かめてきます。帝都の守護神殿が悪霊の発生によって陥落していた場合、尋常な方法では済まないと思います」  
「しかし同時多発的に発生しているものならばこそ、そなただけで止められるものとは思えん……そこでだ。この災禍を止める、たった一つの方法がある」

女帝は言葉をなぞりながら、蒼白になっていった。

「余の背には、ピウスが負っていた融解陣なるものと同じものがある。これを見よ」

彼女は自身のその目で確認したのだろう。ファルマに背を向け、正確な口述で融解陣の形状を説明する彼女は、全てを受け入れたかのような強靱さと凛々しさがあった。

ファルマはかける言葉が見つからないまま、女帝の次なる一言をうかがう。

「大神官の不在により各地に悪霊が発生しているのならば、この印を授かった余が形式だけでも大神官となればよいのだ。違うか」

融解陣を負った者が特別な儀式を行うことにより、世界各地の神

殿の神術陣を維持して悪霊を地鎮する効果を発揮しているという話は、ファルマが細心の注意を払っていたため、断固として女帝の耳には入っていないかった。

しかしいくら隠したとしても、鏡を見て、そしてピウスの融解陣を目にしていた彼女は、今後の行動を模索していたのだろう。

ファルマは彼女が、事実を知りひそかに思い詰めていたと気づいた。

「陛下、神聖国に戻ってはなりません。ピウス猊下が絶命し、陛下もあの時、ピウス猊下と共に鎡の歯車にとりこまれ落下していたかもしれないのです」

大神官は、鎡の歯車の潤滑油として殺されてしまう運命にある。

神聖国に戻れば、いつか彼女は鎡の歯車に誘われ、その餌食となるのは不可避だ。ファルマとしては、融解陣を負ってしまった彼女には少しでも脅威から離れていてほしかった。世界中どこにいても安全な場所はないが、それでも、神聖国は最も危険が待ち構えている。

しかしそんなファルマの懸念とは裏腹に、女帝には強い思いがあるようだ。

「神聖国の専属の大神官になるとは言うておらんぞ。あくまでサン・フルーヴ帝国皇帝との兼務だ」

世俗の権威である皇帝と、聖職者の最高権威が同一であること。

この世界では前例もないという提案だが、地球史においてはしばしばあらわれた概念だったなとファルマは思い出す。

「神聖国を……併合すると仰るのですか？」

「今を置いてほかにその機はなكارう。神聖国は飲まざるを得ん」

女帝の言うように方法はそれしかないが、女帝に大神官をつとめる意思が存在する限り、それは悪手だとわかりきっている。

ファルマは哀れな生贄たる先代大神官のピウスの命を、彼の目の前で取りこぼした。

このうえ、ファルマとひとかたならぬ縁のある女帝のそれも失うのはまっぴらごめんだ

鎡の歯車が新たな生贄を欲し、歯車の欲しがるままに生贄をくれてやるのでは、これまでと何も変わらない。ファルマは打開のための思案を巡らせるが、暗中模索だ。

「そうとなれば、神聖国に急ぎ使いを送らねば」

女帝は神聖国に、大神官への就任と兼務を条件に、併合を迫ろうとしている。

しかしファルマはそれをとどめた。

「しばしお待ちを。陛下がそのようなことをなさらずともすむように私が繰り返ししますので。歯車にいいようにされるのは、これきりにしましょう。私を信じてください」

鎡の歯車の中に残っていた先代農神の少女の記憶が教えてくれた、墓守という存在。

”この世界を創り、破綻させ、壊れかけたものを繕っているもの”

もし、墓守が何かの意図をもってファルマをこの世界に放ったのなら、絶対に思い通りに動いてやるものか。徹底的にそむいて、もう誰も失いたくない。

「融解陣は感染症です。呪いなどではありません。ならば私の職責において陛下の治療をさせてください。陛下のご健勝のためお力添えをするのが、私の主治薬師としての第一の仕事です。その中には」

ファルマは薬神杖をとり、不安そうな女帝の瞳を見据えこう告げた。

「陛下のお命を守ることも含まれます」

… … …

女帝のもとを去り、ファルマは四コアの新たな薬神杖に跨がる。スピードを飛ばしに飛ばして帝都上空を目指す。

時刻は午前五時。

道中、ファルマは上空から地上で起こる異変を俯瞰していた。帝都に近づくにつれ、闇が深く霧が濃くなり、黒い霧でドーム状に覆われてゆく。

「既視感があるな。大陸全土で何が起こっているんだ？」

ファルマは警戒して上空でブレーキをかける。

帝都上空をわたる風は湿気を含み、生暖かく、時折不自然な突風が吹き上げてくる。霧の合間に、闇が蠢いているのが見えた。霧は全て悪霊から生成されているようで、壮麗だった帝都の夜景が一変し、廃都と化したかのようなおどろおどろしい雰囲気包まれている。

（クララの言った通りだ……。まだ手遅れでないといいけど。人はいないか）

”診眼”

ファルマは全身から血の気が引いてゆくと同時に、心臓の鼓動が跳ねるのを感じていた。

精度は粗めで、帝都全域に診眼をかける。上空から診ると、建物の中にいる人間の状態を把握できる。

だが、街の建築物や商店、家々の中には殆ど人が残っておらず、ひっそりと静まり返っていた。

（生きている人間を見つけられない、市民はどこに行った？）

ロッテやエレン、家族、薬局職員の顔が脳裏によぎる。彼らは無事だろうか。そうでなかった場合など考えたくもない。ファルマは霧の中を泳ぐように近づきながら診眼をかけ続ける。

注意深く見渡すと、帝都の一か所に幽かに青い光がぼつぽつともる。

「帝国医薬大に、誰がいる」

ファルマは束の間、緊張の糸が緩みそうになる。診眼は帝国医薬大の敷地内に、生きた人間の気配をとらえていた。

空中から近づいてみればかなりの人数が残っており、多数が無事のようにだ。

ファルマは薬神杖を繰り、霧の中に飛び込むようにして、目視で人々の無事を確かめようと接近する。帝国医薬大の壁上回廊には、大学に飛び込んでこようとする無数の悪霊を神術で打ち払い続ける神術使いたちの姿があった。

彼らは神力をすり減らしたのか、ぼろ雑巾のようになってへとへとの様子だ。

ファルマは彼らのいる壁上に降下しながら、即座に彼らの援護を



行った。

” 疫滅聖域 ”

杖の先が閃光を発し、同時に清らかな陣風が大気を駆け抜ける。

ファルマの神術に煽られた悪霊の霧は四散。大学を黒々と包んでいた悪霊の邪気が払われ、透明となった夜空が丸く切りとられて現れる。

取り戻された月光の伶俐な輝きが、彼らを明るく照らした。

「誰だ！」

「なんだ、今の光は！ 新手か？」

ファルマの神術を敵襲だと勘違いし、一部の神術使いが瞬時に反撃をしてきた。ファルマは素早く反応し、炎の神術使いの放った火球をいとも簡単に大気に散らす。

高度五メートルほどまで近づくと、ファルマの接近に気付いたようだ。ファルマは先に声をかけた。

「みなさん、無事ですか 私です、怪しいものではありません。  
ファルマ・ド・メデイスです」

「教授！」

「ファルマ教授ではないですか！」

「どうして上空から！ そういえば陛下に随行されていたのでは」

鐘楼や回廊に上っていた職員や学生からも、大きな歓声が届く。歓喜に満ちたその声は、エメリッヒとジョセフィーヌ、そして教職員の一団からのものだった。

エメリッヒが空に浮かぶファルマを目撃して、何がおかしいのか  
哄笑する。

「やはり跳躍ではなく飛翔神術！ 教授は革新神術をお使いなのですね」

空から降ってきたファルマが、四属性の範疇を超えた神術を使ったと分析した結果、エメリツヒの中ではそういうことになったらしい。ファルマはその質問を聞き流して留保し、その場にいた者たちに落ち着いた口調で尋ねる。

「こちらのことは後です、それより今の状況を聞かせてください」

「は、はいっ。外壁に沿って張り巡らせていた神術陣が決壊しました、悪霊が際限なく押し寄せたのですが、私どもも神力切れでもう術が立ち上がりず、防戦一方でした」

「教授が悪霊を押し返してくださって助かりました！ これで暫くもちこたえられます」

ジョセフィーヌが口走り、エメリツヒが謝辞を述べる。

神術使いが一日に使える神力は決まっている、神力切れを起こしては小技しか使えず火力にはならない。その状態を、MPの切れた魔法使いと似たようなものだと言ふファルマは感覚的に理解している。大規模に悪霊が出現する状況は想定されていなかったからか、殆どの神術使いは接近戦に強くない。

詠唱を連続させたため喉を枯らせへたばっている神術使いたちに、ファルマは氷でコップを作り神術水を満たして配った。束の間の慰労に、彼らは生き返ったような顔をする。

「ぶはーっ、教授の生成水、いつもより格別にうまいや！」

「この悪霊はいつ、どこから湧いて出ていますか？」

「はつきりとはわかりませんが、帝都市街地から湧いてきたようです。夜半過ぎにはもう帝都中に広がっていて……という状況です」

「そんななか、帝都市民はどこにいるんですか？」

ファルマは尋ねながら、不安に駆られる。もぬけのからとなった帝都。彼が親しく接してきた人々の安否が気にかかる。

「ランブエ市に避難をしていると思います」

帝都市民は避難をして無事だと聞いて、ファルマはようやく生きた心地がした。

「でも、この悪霊の霧の中をどうやって？ 神術使いであつても外に出るのは危険だと思つのですが」

「それにつきましては、帝都市民を悪霊から守るため、ド・メディシス総長が霊薬ハバリトウルを調合し帝都市民全員に順次配給をしています。霊薬を受け取った市民から順に、神術使いの庇護のもと夜を徹してランブエ市へと徒歩で移動をしています。我々は追つ手がからないようここで悪霊を引き付けつつ、敷地内にいる市民の保護に徹しています。宮殿の聖騎士も同様の防衛線を敷いています」

「霊薬……ハバリトウル？ 父が禁術を？」

「は、はい。そのようです」

ファルマは予期しないタブーの登場に驚いた。

ジョセフィーヌに代わつてその場にいた他の教員が言葉を繋ぐ。

「禁術ではありますが、致し方なかったと聞きます。五名の神術使いの生涯分の神力を代償とする調合です」

「総長が四名ぶんを担い、不足した神力を補うためキャスパ教授の神脈も潰れたようです」

「私たちも神力の供出に志願したのですが……失敗のリスクを考慮

したうえで、総長は御許しになりませんでした」

その場にいた者たちが、交互にブリュノとキャスパーの偉業を伝える。中には感極まったか涙ぐんでいた者もあった。彼らは息子であるファルマのショックを氣遣っているかのようだ。

それにしても、ブリュノはもともと神力量に秀でていたが、四名分を充足したとは恐れ入る。

（ブリュノさんと、キャスパー教授の神脈と引き換えに……）

ファルマは正直言つて禁術系列には、詳しくない。

薬谷完治が憑依する前のファルマ少年にも知識がなければ、エレンやブリュノから習うこともなく、ファルマも積極的に調べたことがなかった。代償を必要とする神術薬学を、ファルマは否定的にとらえていたからだ。

ファルマは、ブリュノがキャスパー教授の神脈と引き換えに禁術を使ったということにショックを受けた。

神術を使わなくても済むよう、ファルマは現代薬学を広く伝えてきたつもりだった。

ただ、この世界の神術薬学は悪霊に対する特效薬として受け継がれてきて、それらに対する知見をまるきり欠いていたということを突きつけられる。

ブリュノが神術薬学で対応できず、禁術を使ったことは由々しき事態を物語っていた。

神脈が潰れ神力がなくなるということは、貴族として与えられたすべての特権を失い平民に落ちるということになる。自らの持つ特権と権威の失墜を一慮だにしなかったというブリュノの潔さは賛すべきだ。ファルマはようやく、起こってしまったことの重大さに目がくらむ。

帝都市民は隣の市へ移動したというが、徒歩にしては骨の折れる

距離だ。しかしそうも言っていられなかったのだろう。ハバリトゥールは悪霊を数日間寄せ付けない効果があるので、効果が切れないうちに悪霊の手に落ちた帝都から脱出しようというのだった。

短いやり取りのなかで、ファルマは最低限の状況を把握した。

脱出者の中に、ファルマの家族、薬局職員、知己も含まれていると信じながら。

「ここには主に、移動手段がなく移動できない傷病者、歩けないものの、体の弱い者たちをかくまっています」

「想像以上の変事ですね。そこで、この場所を守るために防御神術陣が必要なわけですね」

「はい、ハバリトゥールはあくまでも、悪霊が体内に侵入するのを防ぐ霊薬であり、神術陣も立ち上がっていないこの状況で膨大な数の悪霊に押されれば……この大学に残った私たちも無事ではすみません」

「そういうことなら。ジョセフィーヌさん、術をかりるよ」

ファルマはジョセフィーヌが携えていた杖の柄を彼女の手の上から握り、構えさせた。

彼女はファルマの大胆な行動に赤面し、面食らったような顔をする。

「ななつ、何を？」

「私は神術陣には詳しくないんだ、神力を貸すから適切な神術陣を組んでほしい！」

「は、はいっ」

ファルマは彼らに指示をする。ファルマの神力を杖を通じて受け取り、杖は異様な発光をみせる。ファルマは杖を破壊してしまわないように気を付けながら彼女に神力を供給する。

ジョセフィーヌは慄きながら、まるでそれがわがものでないかのよう、自身の神杖を見る。

「なんて強い神力、失敗したら術者ごと消し飛んでしまいそう」

「そんなことにはならないよう制御しているから落ち着いて」

彼女はファルマに促され、震える声で神力を神術へと変換し発動詠唱を宣する。

「きたれ天空の陣風、生けるものを裡へ、死せるものはたちいるべからず」

「風神の聖界！」

ジョセフィーヌの杖は、青白く輝く颪風を天に放った。

それは複雑な気流の渦を形成し、組みほぐれながら、外壁が神術陣の風壁に覆われてゆく。ファルマの神力を原資にした神術の威力は強烈で、風の防御神術陣が安定状態で即座に立ち上がった。

「こ、こんな広域神術陣が！ たった一人で！」

ジョセフィーヌは驚きを通り越し、恐懼の表情を浮かべた。ファルマはジョセフィーヌの杖を手放し、離れる。

「次々いこう」

ファルマは手を休めず、その場にいた一人一人の杖に手を添え、多種多様な神術陣を起動させ、防衛線を盤石な守りとして固めた。特に、薬神を守護神とする神術使いとファルマの神力の相性はよく、エメリッヒなどは他と比較し数倍の出力を可能とし、本人も驚くありさだった。

ファルマと彼らの連携によって、大学の周囲を漂っていた悪霊は一匹たりとも侵入できない状態にした。

「今、八つの神術陣が同時に立ち上がっています。持続時間はおよそ一日です」

「その間に帝都の悪霊が発生しないように何とか対処しないとな」

「教授はこんなに神力を秘めておられたんですね。教授の神脈はどうなっているのですか」

ジョセフィーヌが信じられないといったように尋ねる。ファルマはあまり詮索されなくなかったので、「まあ、色々あって」とごまかす。

「しかしこれほどの神力を使ってお体に差しさわりは……もう一生分使い果たしたのでは」

心配した教員が、二本の神力計を持ってきて有無を言わせずファルマに強引に握らせた。

すると神力計のインジケータは二本ともぐいぐいとゲージを振り切って、上端が弾けて割れてしまった。

「えっ」

神力計には神力量に応じて使用できるスケールがあり、それぞれ生涯神力量と日別使用可能神力量を測る目盛りがついている。

教員が持っていたのは十万スケールと一万スケールの神力計であり、十万スケールのほうは女帝クラスが使うもので、予備的に持ってきたものだろう。

十万スケールを破壊したということは、女帝の神力量を上回っていて、ファルマの神力を測れる神力計はこの世には存在しなくなる。

その事実を知ったエメリツヒ以外、誰もが啞然とした顔になる。ファルマと直接対決をしたことのあるエメリツヒは、驚きはないのか軽く唇を引き結んだだけだ。

「故障ですかね」

ファルマは迂闊だったと思いつつ言い訳じみた調子で一言呟いたが、その言葉が受け入れられた様子はなかった。

「ここはしばらく大丈夫ですね。私は神殿に行つてきます」

「あつ、神殿には近づくなというお達しが。……ファルマ教授！」

ファルマはその場を彼らに任せ、大学を囲う城壁の上から大きく助走をつけ市街へと飛び降りた。ジョセフィーヌたちが悲鳴をあげたが、壁の淵に駆け寄つて下を覗き込んだときにはファルマの姿はなかった。

ファルマは飛び降りた瞬間、薬神杖に神力を通じ、そのままバーストさせて再び飛翔態勢に戻った。時間を無駄にしてはいられない。メッセノ神殿での経験から、ファルマはまず帝都の守護神殿をおさえることにした。

帝都に大規模な異変が起こっている場合、神殿の神術陣が破綻している可能性が高いというコームの話を思い出す。ファルマは一直線に帝都の守護神殿の方角を目指し、上空に到達する。

確かに、守護神殿はメッセノ神殿以上の密度のどす黒い霧に包まれていた。ファルマはさきほどより直接的に神殿に神力の塊をぶつけ、霧状に覆っていた悪霊を吹き飛ばす。

ファルマを認識した悪霊は、ファルマを避けるかのようにゆっくりと移動を始めた。



ファルマは冷静に、無詠唱で神術の雨を降らせ追尾をかけ黒霧を蹴散らす。

ファルマの神力を受けた守護神殿の表層には神術陣の回路があらわれ、光を取り戻し始めた。開けた視界から鳥瞰すると、神殿の周囲に大勢の人々が倒れているのを発見した。

診眼を通して診れば、全員に生命反応がなく死亡している。

悪霊との戦闘で力尽き命を落とした神術使いや、神殿を守ろうとした神官たちだろうか。ファルマの見知った顔もあった。

ファルマは流体状の悪霊がぼこぼこ湧き出てきている、神殿の窓や出入口を見据える。

「神術陣を回復させて秘宝を置かないと」

ファルマは悪霊を切り払いながら、悪霊の噴出口となった神殿内部に踏み込んでゆく。際限なく湧き出してくる悪霊に神力をぶつけ、押し込めるように戻す。何度か踏み込んだことのある帝都の守護神殿の構造は、くまなく頭に入っていた。

彼はより瘴気の密度が高い回廊を逆走し、悪霊の発生源を辿る。

神殿通路にはところどころ大きく穴があき、礫が積み上がり、足場は最悪だ。

そこを抜けると、帝都神殿の広い聖堂に入る。

聖堂内には祭壇の下部から竜巻が起こり、祭壇は破壊され、神官たちの遺体が折り重なっていた。

豪華な装飾品もモザイク壁画のあしらわれた壁面も、損耗し無残なものだ。

彼は真つ先に天井壁と床に刻まれた神術陣の修復を試みた。幸い、帝都神殿の神術陣は対称形で推測できるので、剥落した部分を補って神術陣を書き足す。神術陣を電子回路に見立てれば、どのようなものをどこへ補えばよいのかは感覚的に理解できなくもなかった。

まさか自身が悪霊云々に神術陣を頼ることになるとは思わなかったが、それが持続的な効果を發揮すると聞けば、効率的に利用せざるをえない。やみくもに疫滅聖域を使い続けても、確実な防御とはならないからだ。一心不乱に修復を続け、完成すると一気に神力が守護神殿の内部を駆け巡り、聖域が立ち上がる。

「よし戻った！ あとは安定化」

ファルマは薬神杖のうち、職員証の核の一つを抜いて詰め込めるだけの神力を込めると、神術陣の中枢、秘宝の安置されていた祭壇の真下へとねじ込んだ。これを秘宝として安置し、持続的に神力を供給するための核とする。職員証は例の研究室への鍵であるため、異界へ出入りできなくなってしまうが、背に腹は代えられない。神術陣を復活させ秘宝を安置させると、神殿内部は光条で満たされ場に満ちた神力に潰されるように悪霊は消滅していった。

ひとまず発生源を制圧、後は帝都中に発生している悪霊を各個撃破。

とシミュレーションしながらファルマが神殿を出たとき、彼は大通りの正面を見て立ちすくんだ。

（何かいるぞ）

彼の目に、目視での異変は見えていない。だが、真正面に位置する空間が歪んでいるかのような大きな違和感だけが存在する。ファルマがその座標に視線をとめた瞬間、時間が凍り付いたように思えた。

謎の歯車の内部で体験したあの感覚とまったく同じ……。

（巨人……）

停止した時間の中を、ゆらり、ゆらりと帝都大路を歩く、黒いフードを被った巨人の影が見えたのだ。目算で全長百メートルはあるだろうか。

帝都の街並みを悠然と、どこかを目指して進む影の巨人、彼にはそう見えた。

（俺は、こいつを知っている……こいつは俺をこの世界に連れてきた）

ファルマの視線に気づいたのだろうか。

黒い巨人はわずかにファルマのほうを振り向いたが、フードの中には虚無が広がるばかりで、実体はなかった。

ファルマが視認されたと覚ると、巨人は向きを変えゆらりゆらりと歩み霧の中へと消え去ってしまった。

巨人が消えると同時に、帝都の刻は再び動き始めた。

「あれは、墓守だ」

ファルマは口から自然と出た言葉に思い当たり、静かに驚きをかみしめた。

「俺はあれを知っていたんだ」

この世界の人々によつて農神と呼ばれ、鋹の歯車の中に捧げられ自我を溶かされていった少女神がファルマを助けた時に言い残した言葉を思い出す。「君を助けることが、墓守の逆鱗に触れるかもしれない」「彼女の残渣が消滅しそれと引き替えにファルマが助かった後、帝都をはじめ大陸中の国々で、神殿がその機能を失い、悪霊が溢れだし、多くの犠牲者が出ていると推測される。

まるでファルマを絶望に陥れるかのように帝都で災厄をふりまく

墓守の襲来を目の当たりにし、猛烈な自責の念が押し寄せてくる。  
自分のせいなのだろうか、と。

「もしかして、俺が助かった結果がこれなのか。俺が齒車の生贄になつて磨り潰されなかったから。俺が助かったから……俺の代わりに、こんなに犠牲者が」

生贄の守護神をささげ、人間の魂で鋸の齒車を駆動させ続ける存在。

ファルマが救った命の数だけ命を刈り取り、時空連続体を自在に駆け、見えない次元の狭間に潜む不可視の存在。

この世界には摂理を司り、時空を制する管理者がいる。

ファルマは絶望というものを味わいつつある。あれに抗えるとは、どうしても思えなかった。

ファルマの有する神力や数々のチート能力も、あれの前には霞む。しかし、ここで遭ったが百年目、という思いも同時にもたげてくる。

この機を逃して、次にいつ墓守を捕捉できるかわからないのだ。墓守に逃げられてしまえば、被害はさらに拡大の一途をたどる。

勝算は完全にゼロ。神に楯突くようなものかもしれないが、それでもファルマは奮い立った。

「逃がすか　っ！」

ファルマは薬神杖ただ一本を携えたと、がむしゃらに跳躍し、徐々に綻びが繕われてゆく空間めがけて飛びついて杖を突き立てた。この世のものならざる秘宝、薬神杖のコアは綻びを見逃さず、罅<sup>ひび</sup>を走らせ空間をこじ開ける。

この世界の時間が再停止する。

ファルマは空間の緞帳を引き裂き、裏の世界へと飛び出し墓守を

強襲する。

世界を一撃のもとに崩された墓守は慌てる様子もなく振り返った。振り向きざまに、ファルマは神力を纏わせた杖でフードの中の虚空へと渾身の一発を食らわせる。

墓守の衣を引っ掴んで殴りつけた手応えは軽く、ファルマの攻撃はすり抜けたように思う。

「くっそ……！」

攻撃の瞬間、位相をずらされた。そう感じた。

そのまま墓守の姿は完全に視認できなくなり、ファルマは元の世界にはき出された。

（届いたのか……）

逃がしてなるものかと食い下がって再度空間をこじ開けようにも、今度は空間の綻びすら見つけられなかった。墓守と接触したファルマの手は、墓守の素体を構成するモノの一部を握り込み、それはやがて黒曜石のような輝きを持った晶石と化した。

（晶石には記憶が詰め込まれているんだったよな……これを分析してみる価値はありそうだ）

煽りをくらって空に放り出され錐もみとなりながら、ファルマは地上で神術の発動音を聞き取った。

強力な神術が地上で発動したようだ。

神力がファルマのいる高度まで到達すると、術の中にふわりとエレンの神力の気配を感じ取った。

その清涼かつ甘やかな気配は、ファルマの意識を駆り立てる。

「エレン!？」

ファルマははっとして目を見開くと杖を握りしめ、異世界薬局へと向かう。

その間にも薬局を覆おうとしていた氷壁神術が、悪霊に破壊され今にも崩れようとしていた。

ファルマが急降下し、正面扉を割るようにして薬局の一階に踏み込むと、エレンは黒霧から実体化した無数の人型の悪霊に囲まれ、一斉攻撃を受け、神術を繰り返しつつも追い詰められていた。

「消えろ!」

ファルマが怒りにまかせて片手を振ると、薬局内にいたすべての悪霊が消滅する。

エレンはぐったりと調剤室の前の床に倒れこみ、肩で息をしていた。ファルマは駆け出して彼女を助け起こす。彼女が身を挺して幾重にも結界を張り氷の壁の中に閉じ込めて守っていたものは、調剤室と薬歴やカルテ。ファルマが異界の研究室から持ち帰った貴重な試薬も一緒だ。

(まさか、このために……エレンは命がけで)

「エレン! エレンしっかりしろ!」

「ファルマ君……戻ってきたの……」

ファルマはがっくりと力を失ったエレンを抱き起こして呼びかけた。

有事の際には躊躇せず逃げろ。薬局のことはどうなってもいい。ファルマは彼らにそう言っていた筈だ。しかしエレンはそう思っ

いなかったのだろう、彼女は気丈にもこう返した。

「逃げられるわけないわ。ここにはかけがえのないものがたくさんあるの」

「薬はまた作れるから、カルテも薬歴もまた聞き取ればいいから。頼むから君の命を大切にしてくれ」

「でも、ファルマ君が死ぬ思いをして聖泉から持ち帰った、この世界では造れない薬もあるでしょう。それがどれだけ多くの人の命を救うか、私は知っているわ」

「……エレン」

言い返せなかった。エレンの言うとおりだ。ここにあるものの物質として、あるいはそれ以上の価値をエレンは知っていてくれた。しかしファルマは伝えなければいけないことがある。

それらのものよりずっと、エレンのほうが大切だということを。

「これからも、君のなす……べき……ことをして……ね」

エレンは途切れ途切れに吐き出す。その声が震えているのに気付いたファルマは、ぎゅっとエレンを抱きしめる。呼吸は喘ぐように、肌は冷たく、しっとりとしている。

「エレン？」

ファルマは彼女がただ消耗し体力が尽きたのではないと気付く。彼女の背に回したファルマの手に、温かいものがまとわりついた。ファルマは手を引き、その色彩に目を奪われる。

それは、彼女の背から湧き出してくる夥しい量の血液だった。

床の上にメガネのレンズの破片をみとめ、ファルマはそれを視線で追うと、大きな血だまりを発見した。

「もう……助からない……から」

エレンは儚げな表情で微笑み、その手をファルマの頬に添えた。

「いいのよファルマ君。君と出会えて、最高の人生だったわ」

「そんなこと言うなよ……」

「だか……きちんと……お別れをさせ……て」

「エレン！ だめだ！」

「あ……りが……とう」

エレンは力を失うかのように、ゆるゆると瞳を閉ざした。彼女の  
手が、がっくりと虚脱する。

そこで初めて、ファルマは診眼を使い彼女の全身を検索する。

彼女の体を赤い光が覆い尽くし、薄くなってゆこうとしていた。  
直感的に判断すれば、外傷性の出血性ショックだ。しかし、ファ  
ルマはわずかに引かかる。出血が原因だとしたら、何故診眼は全  
身性病変だと言っているのか？

”循環血液量減少性ショック”

”外傷性出血性ショック”

こう問いても、光は消えない。違和感を覚えながらも、とにかく  
そのままにしておけば、彼女は助からないという状況は確定してい  
る。全身病変の原因の探索はあとだ。

「諦めるかよ……」

ファルマはエレンの出血部位を検索し静脈性出血と見積もる。圧  
迫しつつ、頭部を後屈し顎先を掌上、時計を確認した。そしてエレ



ンが守った調剤室の中に、緊急で傷病者が運び込まれてきた時のための乳酸リンゲル液を準備していたことを思い出す。さらに、薬局職員全員が二週間おきに全血を保管していたことも幸いしそうだ。エレンの血液型は、ロジエとレベツカと同じ。三人分の輸血ができる。

どんな状況にもできるだけ対応できるようにと彼がコツコツと行ってきた曰ごろの備えが、ファルマに一縷の希望を持たせる。出血量は、室内の床の血だまりを見るに、一リットル強ほどだろうか。

ファルマは思い出した。確かにクララは、”女帝に随行している旅人は誰も死なない”と言った。

だが帝都に残っていたエレンやその他の人々が死なないとは、クララは一言も言っていない。ファルマの危惧が一気に高まり、緊張の糸は引きつれ、彼の頬を幾筋もの涙が伝っていた。諦めたくない。

「繋いでみせる、生きるエレン！」

声なき者に積みかけるその言葉は、ひどく空虚に聞こえる。彼女を助けたいと願った。

この世界に、神はいない。

今、彼女の命はまぎれもなく彼の手の中にある。

ここからは、時間との戦いだ。

死へのカウントダウンが始まった。

## 6章13話 世界劇場の開幕（後書き）

コミックウォーカー様とニコニコ静画様で異世界薬局コミカライズ9話掲載中です。

また、8月25日に小説版5巻、9月23日にコミック2巻発売です。

### コミックウォーカー様（9話）

<http://comic-walker.com/content/detail/KDCW-MF000000310100000168/>

### ニコニコ静画様（8話）

<http://seiga.nicovideo.jp/comic/24157>

## 6章14話 彼女の願いとファルマの賭け

ド・メデイシス家のパツレとブランシュ、そしてその使用人であるカトリーヌとロッテが馬車の中で揺られていた。馬車の窓の外には、暗く垂れ下がった空が見えている。ロッテは馬車の座席に横たえられ、母カトリーヌに付き添われていた。そんな中、ロッテの意識が清明になってきた。

彼女は弱々しく掠れたうめき声を出し、瞼をもたげるが、身を起すだけの体力はないようだ。

「お前、お前！ 目が覚めたのかい？ …… パツレ様とエレオノール様のおかげだよ」

「母さん……ここは」

ロッテの快復を諦めかけていたカトリーヌは歓喜に泣き咽びながら娘を抱きしめる。彼女らの向かいにはパツレとブランシュが相席し、二人のやりとりを見守っていた。

「ロッテ、よかったね。助かったんだね、どうしようかと思ったあ」  
「ブランシュ様……」

ブランシュがロッテに飛びつき快復を喜ぶ。エレンとともに禁術を成功させ、寿命の半分と引き替えにロッテを死の淵から蘇らせたパツレは、ロッテの意識が戻ったことに安堵の表情をみせた。

ロッテは二人のやりとりをきよんとし、カトリーヌに補足説明を受けている。彼女は実に数日間の間の記憶がすっかりとないようだった。

悪霊に取り憑かれ、生死の境をさまよっていたとみられる。軽度

の脱水症状のために目の周りはげっそりとして、少し小さくなってしまったロッテの容態を、パツレは気に掛ける。

「寝たままでいい、少し診せろ」

パツレは、ロッテの腕や下肢に杖を当て、深部反射や表在反射を確認した。現代医学と神術をかけあわせた方法で、反射が正常であるかある程度わかるのだ。それに加えて、血圧、脈拍、体温などをチェックする。そして、グラスを取り出すと神術で生成水を作成し、その中にロッテの体調を整える神秘原薬を混ぜ、神術をかけてよこした。

「微熱はあるがひとまずは問題ないようだ。よく効く薬だ、それを飲んでおけ。それでシャルロット、お前は一体どこまでのことを覚えているんだ？」

「た……たしか、私は薬局にいたと思います。その後、変な様子のお客様がいらして。よくわからないのですが、パツレ様が助けてくださったのですか？ あいう、ありがとうございます」

「エレオノールにも礼を言っておけ。また、会えたらでいい」

「会えるよ！ 大きい兄上ったら、変なこと言わないで」

縁起でもないことを、とブランシュがパツレに反論する。悪霊渦巻く帝都の薬局に残ったエレンや、当主ブリュノの代わりにド・メデイス家の留守を守るうとして屋敷に留まっているベアトリスのことを思っただ、少しナーバスになっているようだ。

「あの、パツレ様。エレオノール様は今どうしておられるんですか？」

「……ロッテ、黙っていなさい」

パツレに率直な疑問を投げかけるロッテを、母親がたしなめた。

「私たちは、どこへ行こうとしているんですか？」

「帝都は悪霊に占拠され、市民はランブエ市に避難している。お前らを避難場所に送り届けたら、俺は帝都に戻る」

「パツレ様。危険です、帝都はもう……」

「黙れカトリヌ。どんな相手であろうと、俺は敵前逃亡つてのが大嫌いでな」

「しかし、次期当主となられるあなた様に何かがあればド・メディシス家は……ベアトリス様もそのように」

「だが母上も父上も残った。ただ尻尾を巻いて逃げたのだとしたら、そんな家はゆくゆく滅亡あるのみだろうさ。悪霊の発生と拡大は流行病のそれと相似する。成長した悪霊はさらなる悪霊を呼び、急速に拡大してゆく。ならば、帝都での惨禍を食い止め、流行病でいうところのエンデミック（局所的流行）の段階にとどめなければ、そのうち世界は悪霊に飲み込まれてしまう。そうなれば、誰も生きてはいられないだろう」

「パツレ様……」

「神力が尽きるまで戦わずして何とする。それが、守護神に選ばれし者の定めだ」

パツレはベアトリスの指示に面従腹背であったことを宣じ、使用人たちの安全が確保できた後のことについては、素直に避難するつもりはなさそうだった。

「兄上、私も！」

「お前は足手まといだブランシユ。来るべき日のために備えてこなかったのだからな。お前は屋敷の者とともにランブエ市に避難し、身近な人間と市民を守れ、ランブエ市の守護神殿の結界がまだ機能していれば、小悪霊を追い払うくらいのことではできるだろう。今に

でも戻りたいが、母上との約束を果たしてからだ」

「……兄上え……死んじゃうよう」

「困りました。あなた様のそういう部分、お父様とお母様譲りでございます」

カトリーヌは当惑を言葉の中に含めたが、否定することはしなかった。

様々な思いを抱えた彼らを乗せたド・メディシス家の馬車列は、ランブエ市へ向け全速で疾走してゆく。

… … …

ファルマはぐったりとしたエレンの服のコルセットやベルトを緩め、床に清潔なプラスチックのシートを敷きシーツをかける。

その上に彼女を横向きに寝かせ、創部のある背中にガーゼを当て、毛布をかけて保温する。

薬局の店舗内は冷え込んでいたので、暖炉に火を入れ部屋を暖かくする。

「心拍数は上昇、血圧は低下。出血は1L〜1.3Lか」

診眼を使いながら、ファルマはこれからなすべきことを頭の中で整理する。

出血性ショックに対しては初期輸液を行い、血圧を回復する。

先に止血したくなるのが人情だが、出血が続いていても最初に輸液だ。

出血により血圧が下がりきつてしまえば、助かるものも助からない。血圧が安定すれば維持輸液、あるいは出血量が多い場合は輸血をしながら、そのあとやっと止血に入る。

彼は出血性ショックの重症度を見積もる。

「エレンの体重を50キロと見積もると、循環血液量は体重の1/13、つまり3.85kg。出血量はギリ35%以内におさまるか、超えてるかもしれないな」

ブツブツ言いながら出血性ショックインデックスという指数にあてはめてみると、重症度は四段階中の三、最大の出血量と見積もつて、四。厳しい状況だが、ここは薬と設備の整った薬局であるというのがせめてもの救いだ。

ファルマは薬局の調剤室に飛び込むと、輸液セットをかき集める。I型糖尿病の牛乳売りの少年がケトアシドーシスに陥った時のために常備していたことから、乳酸リンゲル、酢酸リンゲル、重炭酸リンゲル液はすぐに使える状態にあり、その他の急患への輸液も想定して準備が整えられていた。エレンの血液型は血液型や不規則抗体などの項目が予め検査済みであり、週一で採血して全血を冷蔵で保管している。マニュアル通りの対応をしていれば、エレンの自己血は最適な状態で保管されているはずだ。

さらに冷凍保存している赤血球と血漿成分もある。

調剤室の鍋に神術で湯を張り、水で適温にうめて酢酸リンゲル液の入った点滴瓶を39 程度に加温できたら、治療開始だ。

「やるしかないのか……」

この場にもう一人でも、手を貸してくれる人間がいれば状況は劇的に違っただろう。

一人での処置は不安だらけだ。

しかし、全ての備えは、”その時”にかえってくる。

「落ち着け。俺も前と同じ状態ではない」

以前のファルマは、薬学者という立場から、医業にかかわってはならないと線引きをし、臨床から一步引いたところにいた。しかしこの世界では診眼の補助もあり、代任もなしという状況の中、臨床薬剤師としていくつもの症例を経験し、クロードの解剖や手術にも少なからず立ち会ってきた。

経験は、少しずつ積んでいる。

アップデートされた知見と手持ちの技能を照らし合わせながら、やるしかないのだ。

現実に向き合う。

まずは動脈を触知する。

総頸動脈は触知できるが、手首の橈骨動脈が触知できない。ファルマはエレンのスカートを裂く。救命のために遠慮などしてられない。鼠径部にある大腿動脈を触知。この時点で、経験的に血圧は70〜80 mmHgということになる。

末梢静脈路を確保するために、腕を縛り、腕や手の甲（手背）を見る。末梢静脈は血圧の低下によって全体的に虚脱し循環血液量が減少しているため、血管が見えにくくなっている。それでも、18ゲージに相当する、内径およそ1 mmの留置針で、末梢静脈路を二本以上は確保しなければならない。

一度失敗しながらも何とか橈側皮静脈に針を刺入し、静脈留置針刺入部にフィルムを上から貼って固定し、一本目のルートとした。

もう一本を、太い静脈路である大腿静脈に穿刺し、静脈路への急速大量投与の準備はできた。

「もちこたえてくれ」

静脈路に酢酸リンゲル液を初期輸液として投与を開始する。最初からアシドーシスを改善してくれる重炭酸リンゲルを使いたいとこ



るだが、使用前に二酸化炭素を充填しなければならないことから、一人での対応を迫られている緊急時には却下。次善の酢酸リンゲル液は等張電解質液であり、循環血液量が減少したときに細胞外液を補給し、何より血圧を回復してくれるはずだ。代用血漿薬であるヒドロキシエチルデンプン（HES）なども加えたいが、それなりに集中力を要する構造式であるため、合成ミスを防ぐためにもひとまず考慮しない。

これで血圧が戻り、循環動態が安定すれば輸血をしなくてもよいのだが……失血量を概算すると、輸血なしでやり過ぎるのは厳しそうだ。

「投与量は1L〜2Lまでか」

急速投与で大量の輸液を続けると、低体温や代謝性アシドーシスなどを起こす危険を伴い、さらに循環動態や血圧が安定してこなければ心停止が見えてくるため、投与量が3Lになる前に輸血の判断を下し、開始しなければならない。

血圧が回復してくることを祈りながら、エレンの自己血を輸血しようとする準備にかかり、ファルマは破滅的なことに気付いた。

「待てよ……そんな、何で神術陣が」

自己血をストックしていた調剤室の保冷库と冷凍庫、その冷却を担当していた水属性神術の神術陣が破綻していたのだ。薬局内での悪霊との戦闘によって壊されたのか、以前から壊れていたのか。その判別がつかない。ただ、保冷库の中には常温になった、ファルマを除く薬局職員全員ぶんの自己血がストックされていた。

「いつから室温になっていた……？」

もしかしたら数時間以内に常温になったのかもしれない、その場合は使えるが、いつ常温になったのかが判別できない以上、この自己血を使うことは憚られる。

あれでもと思い輸血瓶を見みるが、赤血球が溶血し、一部は凝固している、使えなさそうだ。

（これは……輸血ができないの……か）

帝国薬学校に戻って輸血の出来る人間を連れてくればよいのかも  
しれないが、往復の時間を考慮すると、救命率は絶望的に下がる。  
かといって出血している彼女をここから動かすのは愚策だ。

（教えてくれエレン、どうすれば君を助けられる……）

彼女の手を包み込む。

あらゆる対処方法を脳内で走らせながら、彼女の顔を祈るような  
気持ちで見つめていると、幻聴が聞こえてきた。

『ファルマ君、苦しそう』

（エレン……俺は、今まさに君を失おうとしているんだ）

『溺れて息ができなくて、もがいているみたいね』

まさにそうだが、この言葉は聞き覚えがある。あれは、エメリッ  
ヒ・バウアーとその家族が苛まれていた致死性家族性不眠症の治療  
の前段階としてゲノム編集の技術改良に取り組んでいたときのこと  
だ。疲労のあまり研究室で寝落ち、朝までまどろんでいたファルマ  
に、エレンが小さな声でひとりごちていた。

まどろみの中で途切れ途切れに聞いた言葉を、今になってひと繋

りに思い出した。

『君には薬神の力があって、自分をかえりみず全身全霊で誰かを助け続けてる……。持ち得た力が大きいからこそ、与えようとするものも大きくて苦しみを負ってるのね。その眼に映る全ての人を助けようとして』

（俺はそんな立派な人間じゃない、ただ怖いだけなんだ。目の前で大切な人や家族を、助けられる病気で失うのが、怖くてたまらないんだよ。ましてやこれから墓守が、揺り戻しを仕掛けてくるかと思うと……）

『私がいつか、君がいつもしてくれるみたいに、君のことを助けられたらなあ』

（エレン、俺には君が必要だった。いつも君に支えられ助けられていたんだ）

ファルマはもどかしかった。

薬神の力があるとしても、それが何になる。今、エレンを救える力なんて持ち得ていない。

彼女の命運を左右するこの事態が、墓守の企図したファルマへの報復や当てこすりだったとしたら、どうやっても助かる気がしない。

（どんな薬も神術も今の君を癒せはしない……。人の血液は、人にしか賄えないんだ）

墓守は巧妙にこの状況を作りえたのだろうか。そして、ファルマがこの世界で縁を持った人々を、根こそぎ奪ってゆくつもりなのだろうか。力なく反芻しながら、氣力を振り絞りファルマはまじない

をかける。

薬はないが、使える神術はありそうだと気付いて。

” 始原の救援 ”

彼だけに使える薬神杖の固有の秘儀で彼女を包み込む。神術の光は、エレンの体表に薬神紋を落とし彼女の身体に吸い込まれていった。

たとえこの世界全ての現象が墓守の手の裡にあるとしても、黒死病のときのように、この神術で多少の時間稼ぎになるかもしれない。まじないを終え、ファルマは自分の手にふと視線を落とす。

「まだだ。まだ使えるものがあつた」

今度はまじないではなく、物理的に使えるものが残っていた。

（俺の血液型なら……血液型は違うけどいける）

同型輸血が基本だが、異型適合輸血を行うことも可能ではある。幸いにしてファルマの血液型は地球でいうところのO型、エレンの血液はA型に対応する。数々のチート能力を持ち、実体ですらないファルマ自身の血に対する信頼のなさから、自身の供血を視野に入れていなかったのだが、そういえば適合はしていた。

ファルマのO型赤血球には血液型抗原がないため、全ての血液型の患者に供血できる。しかしO型血漿中にも凝集素があり、大量輸血した場合には副作用を起こし危険だ。だが、大量投与でない限りは凝集素はエレンの血液で希釈されさほど問題にはならない。

より安全に赤血球のみ分離をして輸血したいところだが、分離をしている時間もなさそうだ。

「俺の血はベストではないが、不適合でもないとなると」

躊躇はあったが、緊急避難的な対応が求められている。今は彼女にとって非常事態なのだ。

ファルマは自分の血液をエレンへ輸血しようと思いを切り替え、自身の採血を行いながら処置を進める。ただ、血液のように薬剤でないものは、診眼を通じてそれが彼女の身体に適するか否か問えない。輸血してみるまで副作用の有無は判別できなかった。

「運を天に任せるにしても、クロスマツチはしとくか」

それでも、酢酸リンゲルを大量投与している間の時間を使い、ファルマとエレンの血液の間に免疫反応が起こるかどうかの確認はしたい。

ファルマは自己血について詳しい検査をしたことはあるが、できる検査は限られていた。こうなると、血液どうしを直接反応させるのが一番だ。その検査すらスキップして一度彼女の体内に入れてしまえば、彼女の体内で輸血副作用が出るのをコントロールできなくなるかもしれない。

そこで輸血用の供血者の血液と受血者の血液間で、抗原抗体反応を起こさないかどうかを確認するクロスマツチテスト（交差適合試験）というものを行った。遠心後、だいたいのヘマトクリット値を目算しながら、検査の結果から、輸血はできそうだと判明した。

ファルマは自身から採血した血液の瓶の入り口にチューブを接続し、白血球除去用の不織布のフィルターを噛ませて白血球を除去する。それでも白血球は残るので、本来の手順のように放射線照射を行い白血球を除去すべきなのだろうが、設備がないので割愛する。

酢酸リンゲルのルートに一度生理食塩水を充たし、輸血を開始した。

「いけ。今の俺が君にあげられるものは俺の血しかない」

ファルマはまだ未成年であり、そもそも献血ができる年齢ではない。年齢を無視して体重からすれば本来400mLしか献血してはいけないところを700mLも採ったが、これを使い切る間に止血を行わなければエレンの命はないだろう。

「今のうちに、止血を急がないと」

ファルマは出血の責任血管を検索しにかかった。

診眼を使えば、どこが出血しているのが発見できる。ファルマはそれほど勞せず損傷部位を見つけた。だが、その出血部位がこの血管に対応しているのかまでは診えない。

「見つけた……」

事態を深刻に受け止め、ファルマはエレンの背に手をまわし、思い切って創部から手をつっこむ。意識が完全に落ちているのと、一人で麻酔の管理を仕切れないということで、無麻酔で処置にかかる。そしてファルマの手は、素手の時に限り人体を透過できるため、その特性を最大限利用する。

透過現象はいつ見ても夢のようで、自分自身がこの世界にとっての異物であることを思い知らされる。

（止血するには、責任血管である静脈につながっている上流の動脈、あるいは門脈を探さないといけない。俺が血管分布と対応する支配域を覚えているわけがないから……しらみつぶしになる）

ファルマの指先は、素手の状態だとエレンの全ての血管をすり抜けるのでつまむことができない。血管に触れるためには、ファルマ

の指先に何かを噛ませなければならない。彼は薄い金属膜、ここではチタンを創造し、それを介してクランプのように血管を挟む。血流を確認したあとは、物質消去し元の状態へもどす。

まずは血流の大部分を司る門脈を遮断したが、出血はおさまらない。

次に太い血管から細い血管へかけて、丁寧に確認をおこなう。

肝臓へ流入する血液の70%は肝臓に栄養を運ぶための門脈血、30%が酸素を運ぶための動脈血だ。肝臓で合流して、類洞るいどうと呼ばれる毛細血管を通り、静脈へと合流している。門脈遮断で反応がないとなると、出血のコントロールのための血管検索の難易度は上がった。

「この動脈だな、見つけた」

摘まむと肝静脈からの出血が減少する動脈を見つけた。門脈ではなく、大動脈から処置のためにアプローチできる肝動脈であったために、ファルマにとっては好都合だ。

このままチタンでクリップしてしまえばいいが、物質創造はできても整形はうまくできないために、うまくクリップできず血液を漏らしてしまう可能性がある。

（ここは確実に、動脈塞栓術にしよう）

血管の外からクリップをして遮断するのではなく、血管の中を詰まらせて止血をする、動脈塞栓術（TAE）を選択することにした。ファルマは、塞栓する予定箇所の血管径を見積もった。

次に直径2〜3cmもある、人の体の中で最も太い血管、大動脈の中に、親指と人差し指で環っかを作ったまま透過させ指先を突っ込む。

エレンの血流を感じながら、親指と人差し指の間に挟み込むように氷片を作り、解けないうちに氷片の土台に載せるようにして塞栓物質を物質創造する。塞栓物質にはスポンジ状になったゼラチンを使いたいところだったが、ゼラチンは単純な物質ではないのでファルマには創造できなかった。

代案としてn-ブチル-2-シアノアクリレート（NBCA）を用いる。これは、日本では血管内での使用を推奨されていない。

（これを流すなよ、流したら大変だ）

この塞栓物質を血管内で飛ばすと、他の血管を閉塞させてしまう。なかでも肺などに飛ぶと致命的だ。ファルマの場合は飛ばしたとしても診眼で追跡して物質除去で除去できるが、余計な仕事を増やさないために細心の注意を払う。

塞栓物質として用いるNBCAは瞬間接着剤として用いられ、その名の通り微量の水分と触れると瞬間的に重合する。

重合の終わった塞栓物質の粒をつまみ、土台にしていた氷が解けるのを待つと、血管内を伝って大動脈から肝動脈へ導き、先ほど目星をつけた細い血管まで運んでゆき、最終的に塞栓させた。ファルマが創造したNBCAは彼が見積もったより少し大きくできてしまったが、径はそれほど重要ではなく、とにかく目的の血管を塞栓すればいい。

「いいぞ。これで塞げる！」

ほどなくして静脈の血流が止まり、出血の殆どはおさまったかに見えた。血圧は90mmHg程度に回復。保温していたため低体温の兆候もなく、酸素飽和度は不明だが、心拍も安定しつつある。

背中 of 創部からガーゼを詰めて、貯留していたあらかたの血液を



吸い取り、ガーゼを創部からとり出す。肝臓の出血部位以外の臓器損傷も検索したが、肺や腎臓、胆のうや胆管、主要な神経などに損傷は及んではいなかった。

（これでいいんだろうか）

輸血は、全量を使い切ったところだ。駄目押しに診眼をかけると、光の反応は創部にとどまり、赤くなっていた全身も紫へと転じはじめていた。一命はとりとめたという意味なのだろうが、ファルマは放心的ない。創部の洗浄を行ったあと、手の届く部分は縫合し、胆汁が漏れていないことをガーゼを当てて確認する。

「ドレーンを留置しないとな」

エレンの体内に貯留した血液や浸出液などを体外に排出するためにドレナージ（排液）を行う。開腹手術のあとには腹部からドレーンを挿入するが、今回は背中中に刺創がある。新たに腹部にドレーンを刺入するか迷ったが、新たに穴を作るのを躊躇した。

「この刺創を利用するかな」

通常の手術ではしないのだろうが、背中側からの刺創の傷の周囲である創縁は直線状で挫滅さくめつや壊死もなさそうなので、刺創をドレーンを出す孔として利用することにした。背中側にドレーンを出すと仰向けになった時に管が潰れるので、内側にひだのあるチューブを開放式ドレーンにして潰れても排液できるようにし、ドレーンの先端を滅菌したガーゼで覆う。

彼女を診眼を通して診ると、彼女の全身を包んでいた光は薄くなり快復へと転じつつあった。

あとは凝固系を監視し、輸血副作用の有無をみながら酸塩基平衡を補正してゆく。そして、無麻酔での処置だったが、ここにきてようやく鎮痛のために点滴でペントジンを流し、低血糖を予防するためブドウ糖を大動脈内に物質創造で少しずつ加える。緊急事態を脱したことで少しずつ、落ち着いた管理ができるようになってきた。

ファルマは彼女にかぶさるように抱擁した。

彼女の傍から、かたときも離れたくない。

「エレン、君に会いたい。君の声が聞きたい。失いかけて初めて、君の存在の大きさに気付いたんだ。ちよつと遅すぎたよな……ごめんよ」

薬神などではなく、今、彼女の守護神になりたかった。

彼女に救われていたこと、彼女から受け取っていたもの、この短く極限の時間の中で彼女へわきおこった感情の全てを、まだありのまま伝えていない。

「好きだ、エレン。俺は君が大好きだったんだよ」

二人きりの薬局内に、ファルマの涙まじりの独白が響く。

返事はなかった。

しかし……エレンの手首に、見慣れた紋様が浮かび上がった。それはファルマの上腕にある薬神紋の薄いもののように見えた。ファルマの血液がエレンの全身を駆け巡り、何らかの作用しているのだろうか。二人の血液が混ざり合ったその証としての、薬神紋の顕現なのだろうか。疑問は尽きぬまま身を起こし佇んでいると、ほどなくしてファルマの手をかすかに握り返す、あたたかな反応が返ってきた。

（帰ってきた……）

ファルマはもう一度彼女の、生の証を両手で握りこんだ。

## 6章14話 彼女の願いとファルマの賭け（後書き）

本項は、医師・医学博士の叢雲くすり先生に監修いただきました。輸血の項につきまして企業研究員のとくがわ先生にも考証いただきました。

その他の薬剤について、薬剤師のnene先生にも考察いただきました。

留置針等について、獣医師のぐる先生にご指摘いただきました。どうもありがとうございます。

9/23日 コミカライズ版異世界薬局2巻が発売されます。

## 6章15話 解呪へむけて

月明かりもない野路を、わずかな明かりを携えた市民の行列が続いている。誰もが不安と、疲労を顔に浮かべながら目的地へ急ぐ。隣市ランブエ市を目指す馬車と、馬車を手配できなかった市民たちは、貴族や帝国軍の護衛を受けながら行歩を続け、その行列は帝都から最も近い平原を延々と横切つてゆく。

ド・メディシス家の大馬車列はその渋滞のさなかにあつたが、時が経つにつれ、先をゆく人々の列は密になり、遂には動かなくなつてしまった。

そんな渋滞に巻き込まれ、豪奢な馬車の中で苛立ちを募らせていた短気な男は、パツレだ。

「何だこの渋滞は。急に止まつたが何故進まないんだ。単に先がつかえているだけか？」

「仔細不明ですが予期せぬ厄介ごとに遭遇しているのかもしれないかもしれません」

「ああ？ 平民どもは何を呑気にしてやがるんだ」

ド・メディシス家の家令、シモンの報告を受け、パツレが馬車の窓を開け外の様子をうかがう。ブランシュも「みせてよー」と顔を出しては肘で押し込められ、小競り合いのような兄妹げんかに発展する。

「ぎゃああ、出たー！ー！」

にわかに渋滞列が大きく乱れ、蜘蛛の子を散らしたように市民が

一方向へと逃げ出し始めた。彼が眼をこらすと、進行方向右手側の平原の地平線から、半透明の黒い人型をした群体がこちらへと押し寄せてきている。それは一体一体が大きく伸縮する人影のようで、明らかに人ではないことがわかる。

迫りくるにつれ、市民たちは大混乱に陥ってゆく。

「あつ、あつ、悪霊だーっ！」

「あれが全部悪霊なの！？ どうすれば……！」

「まって、押すな押すな！ 帝都に向かって引き返せ！」

飛び交う言葉も支離滅裂だ。

言い合っている間に、夜の草原に異臭を含んだ風が吹き始きわたり、市民たちは竦みあがる。禍々しい風が吹き込み、草原の草が朽ちて枯れ落ちてゆく。

「そんな無茶な、帝都にも悪霊がいるのよ！ どこに逃げればいいっていうの」

「ここにいたらとり殺される！ いくらメデイス尊爵の霊薬の効果があるといっても……霊薬は本当に効くんでしょうね」

「あんなのに襲われたらおしまいだ！ みんな死ぬんだ……」

悪霊に武器は効かず、悪霊と戦うすべを持たない市民の間から悲鳴と怒号が聞こえる。そして彼らから寄せられる貴族への暗黙の期待は大きい。

「何故悪霊がここに現れる？ ここは墓地ではない筈だが」

パツレが望遠鏡を手に観察すると、シモンが苦々しそくに告げる。

「いえ、パツレ様。この平原全体が墓場でございます」

「そうか……ここは有名な古戦場だったものな」

現在でこそ専制君主制のもと政情も安定している世界最大のサン・フルーヴ帝国だが、その統一と帝政に遷するまでの歴史は、血で血を洗う数多の戦乱があった。

帝都にほどかいこの平原は、戦場で安らかには眠れなかった死者たちが悪霊となって地の底から蘇ってきたのだろうか。

「こうなつては仕方がない。蹴散らすぞ！ 迎撃が遅ればとりこまれる距離だ！ 猶予はない！」

「大きい兄上ー、私も！」

パツレが上着を脱ぎ棄て、戦闘用神杖を二本握り雄叫びをあげ馬車から飛び出すと、ド・メディシス家つきの使用人、聖騎士らも各々の判断で彼に随い、突撃のラツパを鳴らす。

先制を決めたパツレが飛び出してゆくのを見た他の貴族や兵士の一団も、疎らな横隊を崩す格好で出撃をはじめた。ブランシュも子供用の華奢な杖を手に、パツレを追おうとするが、すぐさま牽制される。

「カトリーヌ、シャルロット！ ブランシュを馬車から出すな！」

俺に何があつても出てくるな！ 窓を閉め、簡易防御陣を起動して中にいる、厳命したぞ！」

「承知いたしました！ シャルロット、ドアを閉めなさい！」

ロツテが茫然としてみると、カトリーヌはロツテをつき飛ばして馬車のドアと窓を閉め切り、馬車が襲撃を受けた際に神術陣が起動するための非常用回路を繋ぎ、防御を固める。

そしてロツテに向き直り彼女の頬を勢いよく平手打ちにした。

赤く腫れた頬に手をあてがって、ロツテは茫然とカトリーヌを見

つめ返す。

「か、母さん……………」

「愚か者！ 早く締めないと中に悪霊が入ってしまうわ！ 命令には迅速に従いなさい！」

「でも、それをするとパツレ様が戻ってこれなくなつて……………」

「そうしろと仰つたでしょう！」

パツレに何があつても、手を出さず見ていろということになる。

ロッテは戸惑いを隠せない。

「命じられたのは、ブランシュ様をお守りすること。お前の命はパツレ様とエレオノール様が下さつたの！ 平和ボケもいい加減になさい、愚図愚図しないで！」

「二人とも喧嘩しないで！。私も援護するのー」

何かをせずにはいられないらしいブランシュがそう言いながら無防備に窓を開けようとするのを、ロッテが慌てて止める。

「ブランシュ様。パツレ様はお優しい方ですので、ブランシュ様が出ていかれると強大な神術が使えません」

「邪魔しないもん！」

「私と一緒にここにいきましょう、それが兄上様とのお約束でございます」

ブランシュの両手を握りしめるロッテの力は強く、ブランシュは口をへの字にしたが受け入れた。

「でも。何もできないなんて……………くやしい」

「私も……………神力がなく守つていただくばかりの自分を、情けなく思



います」

「みんな無事だったら私、これからもっと神術の練習する。兄上にずっと言われてきたのに、今日までわからなかったの」

ブランシュは泣きながら懺悔をする。

ブランシュとロッテは同じ思いを胸に抱いているようだった。

「一番力がほしい時に、誰も守れないぞって。言われたとおりだった、兄上もみんなも、誰も助けられない……！」

ブランシュは無力を嘆き、崩れ落ちた。

パツレは全力疾走しつつ後ろも見ず杖を振り、進むことも退くことも避難も憚らない市民を悪霊から死守すべく、野路に沿って分厚い氷で防壁を走らせた。また、これからぶつける大神技の反動から市民を守るためでもある。

パツレは最初に接触した悪霊の一团に向け、今にも突き刺すかのように杖を掲げる。

「 実戦時制限解除！ 上限！」

革新神術の冠辞だ。ロッテの治療のための霊薬の合成にかなりの神力を使い込んでしまったので、大神技の後は神力切れを覚悟する。

「 発動詠唱三節略。 必中制勝！ 悪疫滅殺の大波浪！」

彼の双杖が風いだ軌跡は、空間の歪みを生じさせる。

疾風迅雷の進撃、最大出力の革新神術を浴びせかければ、それは透明な浪となり平原を駆ける。平原を浸食していた悪霊へと到達すると途端に実体化、激流の中へ悪霊を押し流して水蒸気となり、見

渡す限りの殲滅を果たした。

パツレの最大出力の神術によって、場にいた悪霊の9割以上を撃破。

取りこぼした悪霊は、遅れて突撃した神術使いたちが個別に撃破してゆく。彼は油断なく地平線に目を配りながら、杖を下す。大量の神力を放出し、足元がふらつくが、踏みとどまる。

「くっそ……さすがに限界か。あとは平原一面に浄化神術をかけてバカどもが出てこないように……」

鋭い一声とともに、パツレが瞬時に体を翻す。

平原の反対側から新手が現れたのだ。氷壁の反対側では、市民らが悪霊に押し寄せられ完全に無防備になっている。予期せぬ方向から現れた突然の災禍に、遠距離にいるパツレの援護は間に合わない。神術使いたちも取り乱すばかりだ。

「ちいつ、”逆さ雨！”」

パツレが咄嗟に放った水属性神技も僅差で間に合わず、今にも悪霊の一端が市民を飲み込もうとしていたとき、

「”氷の壁え　　！”」

緩い発動詠唱と共に、かなりの広範囲に氷の壁が展開した。

ブランシュが馬車の中から神術を使ったのだ。詠唱の適当さのわりに、ブランシュの神技のコントロールは意外に正確だ。

「みんなー、今のうちに逃げるのー！」

ブランシュの神技が、押し寄せてくる悪霊を足止めをする。九死

に一生を得た市民たちは足をもつれさせながら逃げ出した。しかしブランシュの氷の壁は強度が十分でなく、罅が入り始めた。

「あーん、もちこたえられないのー。兄上助けてー！」

ブランシュの渾身の防壁が今にも砕け散ろうとしていたそのタイミングで、市民を守るように放射状の白炎が走った。その輝きはまさしく神術の火焰だ。

「私にお任せを！」

芯のある女性の声が響く。

颯爽と馬車の上に立つ若き貴婦人は二本の神杖が宙に侍らせ、それらは妖艶な輝きを放つ白炎を纏っている。医療火炎神術使いのメロディ・ル・ルー尊爵が追いついて加勢にきたのだ。

「おお、あのお方はル・ルー尊爵様か！？」

「尊爵閣下がいらっしゃるのか、お頼もしい！」

市民がメロディに熱い視線と声援を送る。神術と類まれなる才能に恵まれ、英雄的な活躍をした貴族にのみ授与される尊爵という爵位。その尊爵に対する市民の崇敬と信頼の念は、絶大なもののようにだ。期待に支えられるかのようにメロディは集中力を高め、発動詠唱を唱える。

「火神の加護のもとに命ずる。万代不易の天の摂理により、善民を援け、普く不浄を焼灼せん」

メロディは歌い上げるように詠唱し、力を蓄え一気に神術を放つ。

「白炎の舞踏！」

彼女の神杖は大火炎を吐き、悪霊を一気に囲い込む。メロディの炎は闇を切り払い次々と悪霊を昇華させてゆく。彼女の神術は正確無比で、出力は強大、そして何より洗練された大技だった。

「さすがは尊爵様、神がかっておられる！」

活躍と賞賛をメロディに譲った格好になったパツレも、若くして尊爵を与えられた偉大な神術使いであるメロディには一目おいている。

「市民の危機を救っていただき、いたみいます。メロディ・ル・ル―尊爵閣下」

「お褒めにあずかり恐縮ですわ、パツレ・ド・メデイス様。私は職人ですから、攻撃神術を忘れてしまうところでしたがよい慣らしになりました。さあ。今のうちに先を急ぎましょう！」

メロディが鋭く声をかけ、馬車からひらりと馬に飛び乗ると、市民を先導する。パツレは馬車に戻り、外から防御陣を解除する。待ち構えたように中からブランシュが飛び出してきた。

「あにうえー。褒めてー。私ー馬車から出てないのー」

「でしゃばるなと言ったはずだが、まあほめてやろう」

「やったーほめられたー」

パツレは、一定の役割を果たしたブランシュの頭をわしゃわしゃとやった。その後、神術使いたちは道中に現れる悪霊をそれぞれの属性の特色を生かした神術で駆逐してゆく。先を急いでいたド・メデイス一行は、エレンの実家の馬車列に後ろから追いついた。

「これこれはド・メディシス様。エレオノールが戻らないのですが、ご存じないでしょうか。帝国医薬大にいるのでしょうか」

ボヌフォワ伯爵とその夫人が、とともに一人娘の安否を気にかけている。パツレはエレンが一人で薬局に残っていると伝えられなかった。

「お嬢さんは今、帝都の某所に残っています。しかし、彼女はきわめて有能な神術使いです。彼女の腕は、彼女と杖を交わしたこの私が知っています。どんな悪霊も彼女には近づけませんまい」

パツレはエレンの勇気を称え、伯爵に希望を捨てさせない。

パツレはエレンの神術技能を高く見積もっており、低俗な悪霊に後れをとるとはまったく思っていなかった。その意味では、パツレはエレンを陰ながら認めていた。伯爵は力なく答える。

「ええ、そうですね。信じましょう。娘を信じています」

その腕には、少し大きくなったソフィを抱いていた。

ボヌフォワ家と合流し、ランブエ市へと急ぐ道中、野犬の集団に行く手を阻まれる。しかし一匹一匹をよく見ると、その顔貌は変わり果て、肉は腐り落ちていた。死霊となった獣に荷馬が噛まれると、馬は暴れ、見る間に同じ状態へと変貌してゆく。

「変種の悪霊か。くそ、野生動物に憑くようになったのか……」

「この一帯の悪霊による汚染は、深刻であるとみるべきですね」

野生動物と一体化した悪霊をパツレが浄滅し、メロディが躊躇なく焼き払う。パツレの神力が完全に切れた後は、ボヌフォワ伯をは

じめソフィとブランシュも攻撃に加わった。後に続く腕のたつ貴族らが神術を駆使して進路を切り開き、市民らが大きな一団となって通り、衛兵たちが後衛をつとめる。

行く手を阻むように街道に現れる悪霊と交戦しながら、その後の遠い道の手を経てやっとのことでランブエ市の城塞前と到着した。

城塞の上にランブエ市の旗がたなびいているのを見た市民たちは早くも喜びの声を上げる。

「やっと着いた、助かった！」

太陽が昇り、金糸のような透き通った光が雲間から零れる。

ランブエ市の守護神殿は無事だったようで、普段と変わりのない姿を維持していた。束の間の安息を、帝都市民がどれだけ渴望していたか知らない。

ランブエ市へと入る城塞では、警備兵らが市内の結界を死守している。

市民は一旦城塞の中へと集められ、そこから簡単な手続きを経てランブエ市の各避難所へと割り振られる。家人らが無事の到着を喜んでいるうちに、メロディがド・メディシス家に近づいてきた。

「ド・メディシス御一行様とボヌフォワ伯爵は、これからどちらへ」

「避難施設へ向かう予定ですが」

「ご両家とも、もしよろしければ、ランブエ市に父の遺した小領があります。そちらへおいでくださいませ、安全ですわ」

「それは助かります。必ず迎えに来ますので、しばしの間よろしくお願いいたします」

パツレは、彼らをメロディに預けることにした。

ボヌフォワ伯の一行とソフィも、メロディのもとで世話になるこ

とにしたらしい。

ド・メディシス家の一族郎党は安全な場所へと移し、ベアトリスへの義理立てを果たした、となるとパツレの目指すは帝都だ。

彼はブランシュに別れを告げるとド・メディシス家で一番速い馬に乗り、単騎で今来た道を猛然と引き返し始めた。神力は切れている。体力も限界だ、それでも彼は一路帝都を目指す。

朝日をいっぱいに受け、風を切り裂き疾走しながら、彼は馬に鋭く鞭を入れた。

異世界薬局の一階でエレンの処置を終え、ファルマはエレンの容態を看ながら付き添っていた。エレンにつきつきりでいたいところだが、帝都の状況は決して樂觀視はできず、いたずらに時間を潰していることは躊躇われた。

ファルマは窓を開け放ち、杖で軽く浮遊して帝都を一望する。

守護神殿の機能を取り戻した直後から、帝都を覆う黒雲は神殿を中心に少しずつ晴れ上がってゆくようにも思える。だが依然として、分厚い霧と暗雲の立ちこめる空の下では、実体化した悪霊が暴虐と破壊の限りを尽くしているに違いなかった。帝国医薬大の神術陣は一日はもつ。だが、その他の場所に避難した人々が取り残された場所に応援に行かなければならない。

「エレンは動かせないだろうが、こうしてもいられない」

せめてあと一人、エレンの付き添いがいてくれれば身動きがとれる。

そう思いながら店に入ったとき、ふっと扉が開いた。

「店主様？」

「おうわっ」

水色の髪がふわりと揺れる。その後ろから顔を出した大柄の青年も、ファルマを目撃して素っ頓狂な声を出した。お互いにとって意外な顔ぶれの登場に、ファルマはしばし驚く。

「レベッカ！ ロジエも。何でこんなときにここに？ 避難命令が出ているんじゃない……」

「その……薬歴とカルテと一緒にランブエ市に避難をしようと思いついて。患者さんの書類の管理は私の担当だったはずで」

「俺は店主サンに薬の管理を任されていましたヨ」

レベッカ照れくさそうに答え、ロジエはさも当然のように言い返す。ファルマがあっけにとられてみると、レベッカがエレンをみとめたので、ファルマは彼女の容態を説明する。何をどのように治療を施したのかまでは伝えなかったが、レベッカはエレンが瀕死だったと知り、涙を浮かべていた。

「申し訳ありません店主様、エレオノール様が残っていると知っていれば私もすぐに駆けつけましたのに」

「皆の気持ちには感謝するけど、次からは確実に逃げてほしいんだ。君たちの身の安全こそが、間接的にこの薬局を守ることになる。カルテも薬歴も作り直せばいい、薬もまた揃えればいい。けど、君たちが培った知識も技術も、そして常連さんと築いた信頼関係は一朝で取り戻せるものじゃない」

だから何より、全員の無事が最優先だ。ファルマは心からの気持ち伝える。

ロジエは、薬局の調剤室の保冷庫に張り巡らせていた神術陣が破



綻しているのをあらため、中の血液が汚染されているのを検証している。

「にしてもストックしていた全血が悪霊の汚染で使えなくなっていたとは、災難でしたネ。この部屋の薬は大丈夫なんデスカ、店主さん？」

「薬は問題ないだろう。ダメになっていればまた創ればいい」

「んー。カウンターの生け花が腐り、薬局内の植物が悉く枯れ、保管していた血液も腐ってイマスよ……悪霊は人や動植物に憑きマス。生体医薬品には問題ないデスカ？」

ロジエの眼光が鋭く光る。ファルマはロジエの言葉に息をのむ。

（研究室から持ち帰った試薬が軒並みやられたか……？）

ファルマは手近にあった粗精製していたタンパク質の乾燥物を入れた試薬瓶をあけると、腐敗臭が鼻をついた。

品質がこれほど短時間に变化してしまうなどということはありえない。

「やられた……」

被害の検証と把握は後回しだ。それに、エメリツヒの研究のために、帝国医薬大の研究室に分注して保管してあるものもある。それでもこの薬局に置いていたのが殆どだったために全滅に近いだろうが、完全に全滅ということはない。渋い顔をして思案していたファルマは、レベツカに意識を戻される。

「店主様、ところで私はエレオノール様と同じ血液型だったはずですが、もう非常事態は脱したのかもしれませんが、出血も続いている

でしようし輸血に協力できませんか？」

「そういえば僕もデスよ」

「それはありがたい、二人のうち一人、輸血に協力してくれ」

「なら僕たち、ここに帰って来てよかったデスね？」

「そう言われると言い返す言葉もないな……」

成人男性で循環血液量の多いロジエのほうが適任ということで、ファルマはロジエの採血を始める。彼は血液型判定もクロスマッチテストも受けており、ファルマの血液だけでは心もとないのでエレンに輸血を行う準備をはじめた。そうしていると、

「店主様ーっ！ どうしてここにーっ」

「セルストさんまで！」

セルストとその子供たちも薬局になだれ込んできた。異世界薬局の薬局薬師が全員集合だ。ロジエとレベッカは顔も見合わせ、朗らかに笑う。セルストは悪霊が高頻度で出現する森に囲まれた自宅から出られない状況になっていたが、少し前にファルマが神殿から湧き出す悪霊を掃ったからか悪霊が減り始めたので、何とか避難準備を整え出発したのだという。そして彼女も、薬局が気かりで立ち寄ってしまったのだ。

「皆、店主サンの指示は覚えていましたが、なんとなくここに集まっ  
てしまいまシタ。次に有事あれば全員避難するように課題にしま  
しょうネ！ 意味ないデス」

身も蓋もないことを言うロジエと、ロジエに悪態をつきながら血まみれのエレンの清拭をするセルスト、避難のために薬局にある機密文書等を一か所に集め始めるレベッカ。そしてロジエの血液をエレンに輸血するファルマは、ただただ、薬局職員として一緒にやつ

てきた仲間に囲まれ、心強く感じていた。

しばみかけていた気力が戻ってくる。レベッカが手を打ってわざと明るい声を出した。

「エレオノール様を安全な場所に移動させません？ 薬局の重要書類の準備ができました」

レベッカの声が聞こえたのか、エレンの体がわずかに動く。

「んん……ん？」

「エレン」

意識が戻ってきたようだ。処置をしていた間麻酔はかけなかったので、脳への血流が安定すれば意識は比較的早く戻ってくるだろう。エレンは彼女をのぞき込む、薬局職員一人一人の顔を眺めた。その瞳に段々と輝きが、その頬にははつきりと生氣が戻ってくる。

「私……生きてるの……死んだの？」

信じられないといったように、エレンは次第に美しい碧色の瞳を見開く。ファルマがエレンを安心させるように彼女の手にも自らの手をそつと重ねる。ファルマもエレンが生きている実感を込めながら返す。

「生きてるよ、エレン。君は戻ってきたんだよ」

レベッカとロジエが彼女をのぞきこみ、セルストの子供たちにベツドサイドを囲まれる。セルストとレベッカがほろりときたらしく、思わず半泣きになりながらエレンを気遣う。

「エレオノール様、おいたわしいです」

「痛みはありませんか？」

「全然……痛くないわ。ありがとう、助けてくれたのね」

「店主サンのおかげですヨ」

「……ありがとう、ファルマ君」

ファルマはエレンの声と、疼痛がないと聞いてようやく気が休まる思いだ。彼女の一連の処置こそ無麻酔で行ったが、術後は局所麻酔薬とオピオイドを併用した神経ブロックで術後鎮痛管理を行っていた。ファルマは胸に迫る様々な言葉を一旦飲み込むと、彼女を安心させるように微笑む。そんなファルマの様子を眺めていたエレンは、わずかに口をとがらせた。

「あの……ひとつ、妙な事があるんだけど……夢を見ているのかしら」

「どうした？」

「みんなの顔がはつきり見えるの、眼鏡がないのに」

「あつはつは、それは幻覚デスよ」

「しつかり休んでください、エレオノール様」

ロジエは笑い、逆にレベッカは心配したようだ。ロジエの言うように、エレンの近視は軸性近視と呼ばれる、骨格に由来する遺伝的なもので、何かの拍子に治ったりはしない。ファルマがエレンに輸血をしたことによって、エレンの視力が回復してしまったなどということは受け入れられなかった。

（どうやって？　ありえない）

驚いていると、小さな青白い華のような光がエレンの手首に巻き付くように輝いている。彼女の膚の上で咲くそれをよく見ると、フ

アルマの肩にある薬神紋にデザインが似ているようでもある。

（んん）

ファルマは自身の腕をまくって薬神紋を確認すると、左肩の先が少し削れているような気がする。彼女に診眼を使うと、エレンの術後の状態は安定しているようだ。

そして、手首に起こった変化を診眼で看破しようと試みると、新たな神脈が発生しているのが見えた。

「エレンさ、ちょっと指先で輪っかつくってもらえる？」

「どうして？」

ファルマは興奮をおさえながらエレンが指先で作った輪っかをエレンの目に当てさせる。すると、輪っか越しに見える彼女の眼光が変化したのに気づいた。

「ファルマ君とロジエ君の腕が光って見えるわ」

「青い点みたいに？」

「ええ」

エレンは不思議そうな表情になる。その意味を知るファルマは、ぞわぞわと鳥肌が立つ。輸血のために針を刺した部分の傷口が、点のように見えているのだろう。指先の輪をのけると、光は見えなくなるという。彼は術後のエレンに申し訳ないと思いつつも、一つだけ要求を試してみる。

「穿刺創と言ってみて」

「穿刺創」

「光の色が変わった？」

「ええ、白くなつたわ。どうしちゃつたのかしら、私の目」

「意識が混濁してるんじゃないデスか？ あんなに失血したから」

「エレオノール様、おやすみくださいませ。きっと脳に酸素がいていないんですよ」

「そうね。私の頭、大丈夫じゃないかも」

エレンは怖くなつたらしくぎゅっと目をつぶつたが、それは紛れもなく診眼だつた。

エレンに診眼が宿つたということは自分の能力がなくなつたかと一応確認したが、ファルマのほうの診眼もきちんと機能している。見える光は多少薄くなつたが、判別できないほどではない。

素直に考えれば、やはりファルマの持っていた薬神の能力の一部が、エレンに分け与えられてしまったことになる。戸惑いはあるが、考えようによつては能力を継承した相手が彼女でよかったと思う。彼女は今や、豊富な知識と臨床経験に裏付けられた、信頼できる薬師となつた。エレンはいったん毛布をかぶつたが、はつとして毛布を弾き飛ばした。

「あつ、それからファルマ君、君のお母様が大変なの！」

「今頃、あの子たちは何事もなくランブエ市に向かっているかしら……」

一人、ド・メディシス家の屋敷を守るベアトリスは、誰もいない筈の屋敷の庭園に人の気配を感じていた。エレンとの共鳴神術「破邪狂飆の大神陣」によつて、屋敷全体には陣の中心を聖域として風雨で浄化する神術陣がかかっている。並みの悪霊は敷地内にも近づけないはずだ。屋敷の中は安全なはず。

それなのに、確かに門の外から足音が聞こえてくる。

彼女は静かに口を結ぶと、三首の神鳥をあしらったダンハウザー家の神杖を携え、身をこわばらせて臨戦態勢に入る。

「風神の名において命ずる……」

先制攻撃を仕掛けようと発動詠唱を保留し気配を殺していると、茂みの陰から見慣れた人物が現れた。

「おっと。私めでございます」

緊張状態にあり杖を構えていたベアトリスの顔がほころぶ。  
セドリックの姿がそこにあった。

「リユノー　どうしてここに戻ってきたの。私はド・メディシス家の者は誰もこの屋敷に残るなと命じたはずよ、早く逃げなさい！」  
「ええ、しかとそう承りましたが、私の今の主は異世界薬局店主のファルマ様でございますので」

セドリックは不器用に笑って返す。彼は寡黙だがしたたかな男だった。

「ただ戻ってきたわけではありません、ご覧を」

セドリックは神杖で突き刺した、ネズミほどの小さな黒こげの塊をベアトリスに見せる。

「小動物に憑いた悪霊が土の中へ潜り、こざかしくもお屋敷へ侵入を図っております」

「まあっ……気付かなかったわ」

「地上には奥様の神術陣の結界があるようですが、その効果は地下には及んでおりません。お屋敷の周囲を歩いて、私が地中を浄化しておきました」

セドリックは浄化神術を得意とする土属性の神術使いだ。

「ド・メディシス家の広大なお屋敷は、悪霊にまつわる因縁を鎮めるために建てられたと、ご当家の禁書庫の資料より熟知しております。こういう折をみて、悪しきものが寄り集まってくるのですでしょう」

セドリックは淡々と語る。ブリュノの信頼のあつかったセドリックは、ド・メディシス家の禁書庫の閲覧も許されていたのだった。

「奥様に万一のことがあれば、そのファルマ様に申し訳がたちません」

「平気よ。私には厭というほど神力が残っているわ、だって使わなかったのだものね」

ベアトリスは可憐な少女のように胸を張る。そのしぐさが可笑しかったのか、セドリックはつられて笑い、慌てて表情を締めた。

「旦那様も奥様も、神力に至るまで儉約家でございます」

「失礼ね」

セドリックの軽口をベアトリスが受け流す。

この世界の貴族が一日に使える神力量と生涯神力の上限は生まれつき決められており、その関係は柄杓と水瓶に例えられる。

大きな柄杓と水瓶を持つ者は、枯渴を気にせず自在に神術を使える。神力と神術の扱いに長けた者は、大領主となる。このタイプの最たる者が女帝で、エレン、ブリュノ、パツレもこの部類に入る。



小さな柄杓と小さな水瓶を持つ者は、神術の代わりに学芸や技能を磨き、なるべく神術を使わなくともよい道を選ぶ。貴族の中でも小領主や文官の殆どがそうだ。

小さな柄杓と大きな水瓶を持つ者は、神力を余らせたまま生涯を終えることになる。

柄杓が極端に大きく水瓶が小さい者が、ベアトリスだった。

「神力を惜しまなければ、私は負けないわ」

「ですから私も奥様が神力を使い果たさなくてよいよう、微力を尽くすべく戻ってきたのです」

ベアトリスは生来の神力量の少なさゆえ、貴族の義務としての日々の神術訓練を行うことができない。そのかわり、火事場に備えて神力を大量に消費する大神技ばかりを手札としていた。彼女が負けないという根拠である。

「待つて……音がしない？」

ベアトリスとセドリックが動きを止め、足元に視線を落とす。それから間髪入れず、地面にひび割れが起こり始めた。

「何か……よからぬ気配を感じますな。嫌な気配が膨れ上がってゆくを感じます。屋敷の中枢部ですな」

「あのあたりには……行くわよ、セドリック！」

ファルマは薬神杖に乗り、ベアトリスの救出のため空から単身でド・メディシス家へと戻ってきた。エレンをセルストの馬車に乗せ、最低限の荷物を積み、薬局職員たちは最寄りの帝国医薬大に避難を

促した。

「なんだ、あれは」

屋敷に戻ったファルマが見たものは……メデイス家の建物を突き破り、膨張するように成長し始めた樹状の構造物だった。ド・メデイス邸の高さを優に上回るサイズの巨大樹、それが突如として現れたのだ。

「母上　どこだ……」

このままでは埒が明かないと踏んだファルマは診眼を使い、ベアトリスを探す。その構造物の樹冠に、ベアトリスが絡めとられていた。ファルマが救出しようとしたとき、

「　神威の烈風！」

ベアトリスは下半身を枝に絡めとられたまま、怯むことなく大神技を繰り出していた。彼女の神技によって複雑に絡まりあった枝は一旦は弾け飛ぶが、ダメージなどお構いなしに成長を続ける。

地上ではセドリックが、地上を覆いつくそうと拡がる巨大な根を神術陣で必死に抑え込もうとしているところだった。

ファルマは状況を飲み込めないながら、最善の行動をとる。

「　疫滅聖域！」

ファルマは薬神杖に神力を込め、上空から異形を焼き払う。ファルマの神術に触れたなにがしかは光の粒子に分解され、樹木の根本まで削られていった。

ファルマは空に投げ出されたベアトリスを空中で受け止める。ベ

アトリスは神力を消耗していたが気力は十分で、大きな傷もなく命に別状はなさそうだ。

「母上、これはどうなったのです」

「呪器、”疫神樹”よ。目覚めてしまったみたいなの」

「”呪器”」

ファルマはベアトリスを抱きかかえてふわりと地上に舞い降りる。セドリックに襲い掛かっていた根も、ファルマがまとめて焼き払う。

「というのは何ですか？」

過去、この世界に降りてきた守護神のうち、とりわけ邪悪な神がこの世界に残したものだ。それを呪器というのだ、とベアトリスは早口に告げる。

ファルマは唐突な新語の出現についていけない。

「そんなものがよりによって家にあるなんて……どうして教えてくださらなかったのですか」

「いたずらに怖がらせてはいけないと思ったから……。あの人が禁術で封印していたの、封印は完全だったわ。でも神殿が破壊されて、帝都が悪霊に浸食された状況では持ちこたえられなかったみたい、私もその存在をすっかり忘れていたわ」

「おお奥様、ご無事ですか。ファルマ様、お戻りになったのですね」

「セドリックさん、怪我はない？」

「ええ、なんとか」

「悪疫の気配を感じて萌芽してしまったのよ。この樹が成長しきったとき、おそろしい果実をつけるの。その果実が災厄をもたらすと言われているわ」

”疫神樹”はかつてブリュノが禁術を使って封じていたものだという。

大樹へと変形し無秩序に増殖を続けていたそれに、ファルマは対峙する。

「破壊してしまってもかまいませんよね」

「できるかしら」

「領域限定、”炭素消去”」

ファルマは疫神樹に飛びつくと、右腕を幹に当てて物質消去で分解しつくした。炭素化合物とみられるそれは、炭素を奪ってしまえば水蒸気となる。ド・メディシス家の中枢で悪夢のような光景を生み出していた疫神樹も、物質消去にかかつては完敗だ。

ベアトリスはまぎれもなく腰を抜かしてしまった。持病の腰痛が悪化しそうだ。

「まあっ、お前……ど、ど、どうやってあれを！」

「トリックのようなものですよ」

しかしそれでも消えなかった呪器の本体は、この世のものとは思えないほど忌まわしい形状をした拳大の種子のように見えた。

ファルマはそれを両手に取り、神力をかけ潰そうと試みた。

しかし、どれだけ試みても、ファルマをあざ笑うかのようにびくともしない。秘宝と同じ性質を持つものであれば、それは完全な物質ではなく、ファルマの手で破壊できそうにもなかった。

心配そうに見守るベアトリスとセドリックに、ファルマは告げる。

「……壊せないのなら、肌身離さず持つておくまでです。私が持つて神力をかけ続けるかぎり、萌芽しないでしょう。ところで、呪器

は一つだけではないのですよね」

「ええ……どこに何があるのか、誰も全容は把握していないと思うわ」

ピウスが亡くなり生じた大神官の空位。

それによって生じた世界規模での悪霊の発生。

追い打ちをかけるように加わった呪器の復活。ファルマは根本的な対策を打たねばならないと強く感じた。

（もう俺の力ではカバーできない。疫滅聖域も限局的だ……やはり大神官を立てないとだめなのか……）

女帝が背に負った融解陣が、大陸の運命の鍵を握っている。

融解陣を負った人間が次の大神官になる。大神官は世界各地の悪霊を鎮める特殊な神術を行使し、世界の平和と安寧を維持していた……。

（墓守に選ばれた陛下が仮の大神官として即位すれば、地獄の蓋は閉ざせる……陛下はそれを覚悟しておられた。大神官になったとして、問題はその後だ）

ファルマは、女帝の大神官即位はやむをえないとあきらめた。

既に各地で発生する悪霊に対抗する決め手はなく、ファルマの手には負えなくなっている。ごく短期間の間に世界各地の悪霊がよみがえり、呪器のようなものの封印が次々解け、人々を襲いはじめ、それが際限なく続くとなると……無理だ。

ファルマは思考を切り替え、一旦大神官となった女帝の命を守り、世界の崩壊を食い止める方法を猛然と考えはじめる。

（感染症だとすれば、あれを俺に感染させられないか？）

しかしファルマの体細胞はあらゆる感染を成立させない。一時的に移植したとしても、生着してくれないだろう。だからといって女帝の背にある融解陣を治療してはいけないのかもしれない、それをすれば、また新たなキヤリアが生じるだけだ。

女帝の体内に巢食ったものを、そのままの状態で体外に排出させる方法を考えればいい。

（あの状態を維持したまま陛下から融解陣を切り離せば……呪いは解ける）

ファルマは二つのストラテジーを考えた。

一つには、感染箇所を皮膚ごと切除して、それを組織ごと培養し続ける。

女帝の背には、皮膚を培養してシート状にしたものを移植または人工真皮による真皮再構築によって補完する。確実に切除する方法だが、広範囲の皮膚切除が必要となるために、感染症などの危険が伴う。

もう一つは、彼女の背にある感染源を転写して、あらかじめ準備しておいた彼女の皮膚細胞に感染させ、細胞ごと異界に隔離する。

ファルマとしては、断然後者で進めていきたい。

（異界の研究室で培養し続けられ、彼女の背に融解陣が感染しているのと同義だ。隔離できるんじゃないか？）

異界の研究室は鋸の歯車の中心部に繋がっていて、内部の時間は止まっているか循環している。その研究室の中の培養器の中に融解陣の感染源をセットしておけば、融解陣は維持され続けるし、「その時」を迎えて融解陣が活性化し、女帝を溶かすことはないし、異界で何か起こったとしても、その影響がこの世界に及ぼす効果は少

ない。

異界にいる薬谷完治がどうなるかは知らないが、死の連鎖は止まる。

「急がないと」

休んでいる暇はなかった。女帝の表皮を一部切り取り、それを他の細胞とともに培養して自家培養表皮を作り、背中を一面覆うことのできる状態まで増殖させるには、細胞増殖のスピードから考えて2〜3週間程度必要だ。融解陣はまだ彼女の表皮に留まっている……感染症だとしたら真皮に浸透する前に、やり遂げなければならぬ。

ファルマは女帝と接触して融解陣の隔離を行い、再び異界へと向かう算段を考える。

そして、女帝には大神官への即位を進言せざるをえない。

（その代わり、必ず彼女の命は守ってみせる）

苦しい決断だが、ファルマが思いつく最善の手段はそれだ。

「エメリツヒ、君が備えていたことが今こそ役に立ちそうだ」

サン・フルーヴ帝国医薬大では、ファルマとエメリツヒ・バウアー主導のもと、風と水属性神術を無菌的に利用した細胞培養のシステムが完成したばかりだった。

## 6章16話 聖帝と、暗躍する遺伝子

パツレが全速力で帝都に戻ってくると、破壊されたド・メディシス家がそこにあった。

「母上！ ご無事ですか！」

パツレはこの場で何かがあったと気づき、ベアトリスの名を掠れた声で呼ぶ。

水一滴飲まず馬を疾走させて戻った我が家には、薄霞に包まれていた。

まさかという思いで周囲を見て回ると、中庭で人の気配がする。パツレが杖を抜きながら近づくと、ファルマが負傷したセドリックに処置を施し、ベアトリスがそれを心配そうに見守っていたところだった。

「母上、ご無事でしたか」

「パツレ お前まで、どうして戻ってきたの……私は戻ってくるなどと言いつけたわ。ほかの者は！」

ベアトリスは次男に続き長男の帰還に困惑したようだ。

パツレはへらりとしながら釈明する。

「他の者はきちんと安全な場所に送り届けましたよ、ご安心ください母上」

「おかえり、兄上。セドリックさん、ひとまずこれでいいよ」

「ありがとうございます、ファルマ様。かすり傷でございますのに」「いや、かすり傷じゃなかったよ」



セドリツクの処置を終えたファルマに、パツレが声をかける。

「ファルマ、お前はよく戻ってきたな。見てのとおり帝都は散々だし、俺は神力が尽きた。この後はどうする？　いくら持ちこたえても、帝都中の神術使いが一月もたず神力が尽きてゆくだろう。日没になれば、またどこからともなく新たな悪霊がわいてくる」

話を手短に要約し、ファルマに畳みかけるパツレからは焦りがにじんでいた。

「ああ、わかってる。何とかしないと」

「薬神からの思し召しはあるか？　帝都のこの状況が、守護神の御意思か」

パツレはファルマの両肩を強い力で掴む。その指先が、ぐっと強く肩に食い込む。

「……もう、俺にも止められない。帝都は守れても、手の届かないほかの国が悪霊に飲まれて滅びそうだ。こうなった以上は一時的に陛下に、命を預けていただくほかにない」

「筆頭宮廷薬師でありながら、皇帝陛下を命の危険に晒そうとしているのか？」

パツレの眼光が鋭くファルマを射抜く。鬼気迫る形相だった。ド・メデイシス家は宮廷薬師としての長い歴史がある。その薬師が、皇帝を脅かすとあれば穏やかではないのだろう。

「そうだが、陛下のお命を守ることは約束する。俺にはこれ以外に思いつかない」

兄弟の視線が激しくぶつかる。そしてパツレは、ファルマが消極的な決断をしているのではないと見て取った。

「わかった。逆臣となり果てようとも、お前がこの世界のために、お前に天啓を与える薬神の御心のままに、最善だと思っことをしてこい。失敗したら一緒に処刑台に上がってやる。母上、よろしいですな」

「……ええ、異存はありません。我が家の男は、三人ともどうしてこうなのかしら。いつもこうよ、いつも！」

「どうもこうもありませんよ。我々は、信じたことを信じたようにするんです」

「もう……その口調、あの人にそっくりだわ」

嘆きながらも、ベアトリスはファルマをしつかりと見据える。パツレはファルマの背中をバチンと叩き、気合を込めさせた。

「行きなさい、ファルマ」

「いつてこい」

ファルマは一度視線を伏し、二人に向き直って息を吸い込んだ。

「行ってくる」

「今度は本当の悪霊が現れるなんてね」

ランブエ市にある領地にある屋敷に、ロッテやブランシュなどを含むド・メデイシス家とボヌフォワ家の面々を案内したメロディは

ホストとなり、ゲストに紅茶をすすめる。

「薬師様からいただいているこの薬は私の命綱なの。怖いものを見なくて済むわ、それに、私が私でいられる」

統合失調症を患っているメロディは、今もファルマから処方される薬が手放せない。メロディ自身の病状は安定期に入っており、ファルマとカウンセリングをしながら継続して服薬を続けている。

彼女が悪霊憑きと呼ばれていた頃、メロディは自分の中に見える幻想と戦っていた。皮肉なことに、彼女が「悪霊」と戦い続けた経験が功を奏し、彼女の神術の技量は一定の水準に保たれていた。その彼女が、幻覚でない悪霊に遭遇したとき、彼女のこれまでの苦悩はこの時のためにあったような気になった。

「戦うときがきたんだわ」

「メロディ様、かつこよかったです」

ブランシュが憧れのまなざしを向ける。ブランシュの師匠はエレンだが、勇敢な彼女の姿はブランシュの瞳に焼き付いたらしい。ロツテがメロディに疑問を投げかける。

「悪霊はどこから出てきたのでしょうか」

「悪霊は人霊や動物霊、自然界に発生した霊だと言われているわ。強い思念がそこに残って霊になり、悪霊になるの。それは神殿の結界や神術陣によって普段は見えないものだけでも、常に私たちは危うい世界の上にいる、脅かされているということを思い出すわね」

「何か、神力を持たない私にもできることはありますか？」

「そうね……何かしら。弱気にならないこと、気を強く持つことよ。悪霊は思念によって生じるのだから、人の心が弱くなったときに悪霊に付け込まれ、悪霊に力を与えることになるの」

「そうなのですね……心を強く持ちます」

実際に悪霊に憑依されてしまったロッテは、何か思うところがあったのか、うなだれる。

その様子を見ていたメロディが、思いついたようにぼんと手を打った。

「それだけでは不安よね。そういえば、神術使いでなくても扱える神術があるわ。教えてあげましょうか。神力切れを起こした貴族や、杖を失った貴族が、悪霊に対する予備的な術として使う神術が少しだけあるの」

「えっ、神術をですか 私は平民ですが……神術ですか？」

「あなたが平民なのはよく知ってるわ」

「メロディ様。ですが、神術を平民に詳しく教えてはいけない掟があると聞いたことがあります……」

ロッテが恐縮しておずおずと尋ねる。

「たしかに禁忌だけど、神術は自分が見込んだ相手に教えるものよ。私はあなたと一緒に仕事をして、あなたの才能が神術使いに劣るとは思わない」

メロディはいたずらっぽくウィンクしてみせる。

そして彼女が持ってきたのは、これまでに自身が書きためてきたらしい、かなりの分厚さのある火焰神術陣のメモだった。ロッテは初めて、神術にまつわる記述をみた。平民には読めない禁書を除いては、神術にまつわる書物は存在せず、神術使いは師から弟子へ口承で神術を受け継いでゆくものだ。しかしメロディは、統合失調症を発症してからというもの、自身が神術を忘れないために、体系だてて印章を書き残していたという。

「様々な印章があるのだけど、この記録をあげるわ」

「こんな貴重なもの……あとで謄写版で複写してお戻します」

「それが助かるわね」

「ありがとうございます！これを、どうすればいいんです？」

「簡単よ。浄められた特別な油でこの図柄を書いて、神術使いが造った種火で燃やすと効果を発揮するわ。大きく描いて中に入れば、低俗な悪霊には近づけない結界にもなる。神術使いの使う神術ほど強力ではないけど、一時的な防御としては十分よ。絵を描くのは得意だったわよね」

メロディが笑いかけ、神杖を取り、掌で慈しむように神術で特別な神炎を現出させる。

尊爵である彼女の透明で力強い神炎は、鮮やかな種火を作った。

「これが種火。聖油は私が定期的に作っているから、足りなくなったら来るといいわ」

それをメロディは特製のガラスの炉に入れ、ロツテに贈呈した。そして、聖油も水筒に入れて分け与える。ロツテはメロディの嬉しいプレゼントに、顔を輝かせる。

「神術、庭で練習してみる？ 教えてあげるわ」

「はいっ！ お願いします！」

ロツテは緊張した面持ちで頷いた。それを見ていたブランシュが羨ましがる。

「いいなー私も火の神術教えてほしいー、かつこいいのー」

「残念だけどブランシュちゃんは火と相反する水属性だから、教え

られないわ。それにまだこの神術陣は複雑すぎて書けないと思うわ」  
「ああい」

ブランシュは口をとがらせる。

「あの、そういえば神術陣を燃やしたあとの火の始末はどうすればいいんですか？ どこかに燃え移って火事になったりとか」

「指向性を持たない神炎で着火しても聖油しか燃やさないから、聖油以外の場所に燃え移ることはないし、そのうち消えるわ。部屋の中で練習したとしても火事にはならないわよ」

「よかったです。お屋敷を燃やしてしまったらいけないので」

ロツテとメロディの数時間にわたる特訓の末……。

ロツテは基本的な悪霊払いの神術陣をいくつか書けるようになった。

彼女は神術使いではないが、メロディの神力で発動する画期的な神術を習得しはじめた。

「今日はここまで、続きは明日。休憩にしましょう、シャルロツトさんは思った以上にスジがいいわ。何より正確で速いの、驚いたわ。神術陣の専門職でもなかなか書けないわよ、あなたが神術使いだったら正式に弟子にしたいけど、残念ね」

「光栄です、貴重な知識を教えていただいて、何とお礼してよいかな…… 絵でお礼したいと思います」

「絵もいいけど、お菓子を作ってくれるかしら。あなたのお店で食べたフルーツのパイ、美味しかったのよね」

「喜んで！」

ロツテにとって、無力感に打ちのめされていた状況から一転、有意義で刺激的な疎開になった。

「陛下、私がお仕えしていながらこのような事態に陥ったこと、誠に申し訳ございません」

それからわずか三日後。神聖国中枢部に至る控えの間で即位の儀に臨む女帝に、ファルマは忸怩たる思いで謝罪した。

「そのような辛気臭い顔をこちらに向けるでない」

ファルマは帝都から女帝のもとに引き返し、大神官就任への進言を行った。女帝はファルマの進言を受け入れ、神聖国に融解陣の所在を明かし、大神官を兼任することになった。

女帝は聖職者ではなかったが、神殿のもとで帝王学を学んでいたため、大神官としての基本の神技と神術は彼女が習得していたものと共通するものが多く、神聖神術の引継ぎはスムーズに行われるだろうとの見通しだ。

これに伴い、サン・フルーヴ帝国は神聖国を併合する運びだ。

神聖国の認識ではサン・フルーヴ帝国を属国とする思惑があるのだろうが、実質的な武力の差からすれば支配下に置かれたのは神聖国だった。神聖国では大神官の権威を絶対視しているので、反乱なども起こりそうになかった。

「結果的に、神聖国が手に入ったと考えれば、そう悪くもなからう。それに、守護神を崇敬する新宗派を興すということは最初から余の計略のうちにあった。なに、大神官を受けるのはあくまで名目上にはすぎん」

ファルマに対しては強がってはいるが、内心は不安そうだ。

「こうなったからには、余は逃げも隠れもするつもりはない」

そんな彼女の言葉を、ファルマは黙して聞いていた。

（彼女は俺が諦めたと思っているだろうが、むしろ逆だ。まだ足掻くためだ）

局面で一時的に負けて、大局で勝つ。ファルマはそのつもりだ。このまま大神官とならず逃げ続けても、融解陣は皆既日食の日に必ず彼女を溶かすようプログラムされている。

ならばこれまでに蓄積された大神官たちのデータを余すことなく利用できるように、彼女を通例の中に組み込む。融解陣の分子細胞生物学的なアプローチからの解説はそれからだ。

定刻を迎え大聖堂の扉が開かれると、神聖国の高位神官が集い、彼女にひれ伏す。

即位拝礼の後、彼女は戴冠し、聖職者として「聖帝 エリザベスⅠ世」という称号と宝杖を授与され、大神官に即位することになった。

神聖国の最高位聖職者と国家元首の最初の言葉として、彼女は神官たちを広場に集め強硬な姿勢で言い放った。

「ただいまの儀をもって、余は聖帝エリザベスⅠ世として神聖国大神官へと叙任された。余が神聖国を統治するにあたり、最初にそなたらに宣じておくことがある。余は当代守護神たる薬神、その神霊を宿すファルマ・ド・メデイスを敬仰する。守護神を蔑にする者、忠誠を誓わぬ者、逆心せんとする者は余と神聖国に対する叛逆とみなす。その者はただちに神殿を去るがよい」



有無を言わせぬ語気で演説する女帝に、水を向けられたファルマは内心戸惑う。

しかしそれもこれも、女帝流のファルマの安全を守る立ち回りのようで、それが厭というほどわかるだけに否定することもできない。彼女は鎧の齒車に選ばれた悲劇の生贄としての立場を微塵も感じさせず、重責を逆手にとり、強硬な姿勢で完全に神聖国を掌握しようとしていた。

「ファルマはそなたらの敵ではない。過去には邪神もいたやもしれぬが、ファルマは違う。数多の人々の心と病を救済してきた、余が彼の善性の証人である！」

躊躇することなく訴える女帝を至近距離から眺めながら、ファルマは彼女との縁を思い起こす。彼女はざわめく神官らを諭すように続ける。

「そなたらが神術の枢機を知る神官が神に選ばれし特権階級であるという意識は今すぐ捨てよ。そなたらは神と世界人民の僕であり、神聖国はもつとも中立かつ公正な世界組織でなければならぬ。国家を超えた安全保障のための最も堅牢な社会の奉仕者であると心得、市民の心に寄り添う守護者たらんと誓え」

神官たちは、表向きは正統な大神官となつた女帝の意向に従う姿勢だ。そして、即位式典としての大祈祷などが行われた。神聖国の中には守護神が薬神の者も数名いたようで、彼らから祈祷を受ける、ファルマに神力が流れてくるのを感じた。

即位後、特別な神杖を受け取り、大聖堂を起点に広がる一大神術陣に神力を通わせる地鎮の儀式を終えると、大神術陣から光が溢れ、

光ファイバーのように世界各地への神術路を駆け巡りはじめた。ファルマはそれを見届け、女帝は最初の大仕事を終えた。

膨大な神力を消費したからか、女帝はけだるそうに執務机に座す。その彼女を、ご機嫌伺いの神官たちが取り囲む。

「猊下のお力で悪霊どもは駆逐され、世に光が戻ることでしょう。各地の神殿の機能は完全に回復しました」

高位神官も女帝の手腕を褒めそやす。彼女の身の回りの世話をつとめるジュリアナは黙って女帝が喪失した神力を計算し、神力回復のための聖水を晶石から蒸留しはじめた。女帝は神官らを部屋から追い払い、残されたファルマに言葉をかけた。

「ファルマよ、余も詫びねばならん、そなたが一番嫌がることをしてしまったな」

「いえ、そのようなことは……」

ファルマは首を振る。女帝が謝罪しているのは、ファルマを神聖国内で神格化してしまったということだろう。

今更どうこう言っていられない、余裕などない、お互い様な状況だ。神聖国の権力掌握に失敗すれば、彼女のサン・フルーヴ帝国の統治権にも波及する。

多くの国民を擁するサン・フルーヴ帝国を神聖国の傀儡国家にするわけにはいかないという思いを、ファルマは女帝のスピーチの中に見てとった。

「そなたが一貫して人間の振りをしたがっておるのは知っておる。だが先例典拠に縛られ規律の厳しい神聖国のこと、これぐらい言っておけば妙な気を起こすものは現れまい。何しろ、つい先日までそなたを襲撃していた奴らだ。いいように御していかなば」

「仰せのとおりです。過分なお心遣い、ありがとうございます」

ファルマが神聖国内では公式に守護神の化身認定されてしまったことで、それ以降神官たちから敵意を向けられることはなくなったが、常に護衛が監視だかの一団に囲まれるようになったのと、どこを歩いても神官たちに祈られてしまい、ファルマは非常に肩身の狭い思いをした。

だが、その不便さと居心地の悪さと引き換えに、ファルマは神聖国のすべての秘宝に自由にアクセスする権利を得た。秘宝は元来守護神のものである、と女帝が断定したためだ。これは願ってもない特権だった。

聖帝は就任後わずか数日のうちに、彼女が帝国内でそうであったように、神聖国の執政に対しても大改革を始めた。彼女はただちに虚礼を廃し、神殿枢機部を解散した。大陸各地の集落を悪霊から守るため、人口の多い地区を重点的に武装神官をもっとも効率的に配備するよう組織の改組を命じた。次に、神聖国の中枢機能をサン・フルーヴ帝国に移すことを次々に決定した。

信頼のおけるサロモンを神聖国の責任者に据え、神聖国の統治と鎚の歯車の監視を任せた。ファルマの話を聞いたサロモンはただちに、世界各地に散らばる呪器の所在の把握と調査を命じた。そして、呪器のある場所には念入りな人員措置と封印を行わせた。

主要な会議には参加し、聖帝から意見を求められ、多忙をきわめるファルマだが、病み上がりのエレンの経過観察のために、薬神杖を使って夜ごとに帝都と神聖国を往復していた。

夜、帝国医薬大の医学部付属病院に入院しているエレンが、困ったように病室にファルマを迎える。

「……またきたの？」

「それは悪かったね、ランブエ市のロッテのことも診て帰るよ」

ロッテはロッテで、悪霊に憑依された影響がまだあり、ファルマは経過観察を怠っていない。

「だったらなおさら、帝都には往復して来なくていいわよ。毎日多忙でしょうに。私なら平気、もう歩けるようになったんだから、そんなに心配をかけたくないわ」

「術後の経過も診たいし、心配だからね。陛下、じゃなくて聖下には許可をいただいているよ。何か不便なことはない？」

ファルマは外科医であるクロードにエレンの日中の処置を任せていたとはいえ、定期的に様子を見に来なければ落ち着かない。

「侍医長様が処置してくれてるから、不便なことはないわ、微熱があるくらいよ。むしろ視力がよくなって便利すぎるわ」

「持ってた大量の眼鏡はどうする予定？」

「それはまた考えるわ。ファルマ君の血を輸血してもらったからそうなったのかしら」

「何が起こったのか俺にもよくわかんないな」

とはいえ、輸血により薬神紋の一部を左手首に受け継いでしまったエレンの能力は、左目の診眼にとどまるようだ。しかも、病名の検索はできるが、治療薬の検索はできないという版のような仕様になっている。

さらに彼女の神術の属性は相変わらず水属性で、物質創造、物質消去のようなことはできない。エレンの影が消えたり、体が透けたり、そんな異変もない。また、輸血によって能力が分け与えられるのかと思いきや、これも違うようだ。

「それからファルマ君の能力の一つをもらったのよね。病気の場所を診て、病名を正確に当てることができる……君ってこういうことできたんだ」

「他にも内緒にしていたことはあるよ」

ファルマはあっけらかんと告げる。

こうなった以上、エレンと秘密は共有しなければならない。

彼女が診眼を使えるようになったのなら、この先ファルマの身に何があつたとしても心強い。ただ、彼女は診眼を使うと一日分に近いほどの神力を消費してしまうようだった。それなら普段からの診療には使えないな、とファルマは考える。

「ねえ、君を診てもいい？」

「俺」

「だめ？」

「だめじゃないけど、緊張するな」

エレンの思いがけない申し出に、ファルマの声がうわずる。

診眼で、ファルマを診る。今までファルマにはできなかったことだ。

当然ながらファルマはこれまで、診眼を通して自身を見たことがなかった。

というより、鏡を通して見たとしても何も見えなかった。

エレンはそつと左目に手を添えた。診眼の輝きが宿る。

他人が診眼を使うところを目撃するというファルマにとっては新鮮な気分を味わいながら、背筋をただした。

「あれ？ 不思議。ファルマ君って、頭のとっぺんからつま先まで真っ赤っ赤に見えるわ、ほかの人はそんなことないのに」

「その真っ赤に見えるのは治らない病気が、もうじき死ぬって人を見た場合にもそうなる」

「君ってそんなに病んでたのね……知らなかったわ。何の病気なのかしら」

「心配してくれるのはありがたいけど、当たらないんじゃないかな」

エレンはあてずっぽうに何か唱えていたが、最後には「降参」と言っただけを投げた。元のファルマの体は死んでるという意味なのかもしれないし、人として異常だらけという意味なのかもしれない。そもそもが異常だらけである以上、解釈は難しい。

「じゃ、また来るから。俺はロッテのところに行って神聖国に戻るよ」

ロッテがメロディから神力がなくても使える神術を習っているというのは、ファルマも耳に入れていた。

「すごいわよね、ロッテちゃんも心配ね。気を付けて、飛んでる鳥にぶつかったりしないように」

「実際、ぼけっとしてるとバードストライクするからな」

ファルマは冗談をはさみながら神聖国に戻る前にエレンを診る。

「んー」

「どうしたの？」

「そういえば、うつすらとエレンの全身に光が残って発熱してるんだけど、組織が破壊されたり出血した術後の吸収熱や、サイトカインによる発熱にしてももう5日目になるのに解熱しないのが気になるな。歩いたりするのもいいけど、日中は無理せずしっかり休んで」

「それって、吸収熱とかではなくてバテラースールの呪いのせいかし

ら……」

エレンは霊薬調合の顛末を話し始めた。

一部始終を聞いたファルマは開いた口がふさがらない。

「ロツテを助けるために、兄上と君が寿命を半分もっていかれる霊薬の呪いにかかった 何ですぐ教えてくれない！」

「ご、ごめん……君は聖下の呪いの件もあるって聞いて、煩わせたなくて」

「こつちもごめん……命がけでロツテを助けてくれたことについては、感謝するよ」

エレンは少し考えてファルマに疑問を投げかけた。

「ねえファルマ君。この呪いって私、感染症だと思ってるんだけど、もしかして君が言っている、陛下にかけられた呪いも同じなのかしら」

「どうだろう。よく診せてくれる？」

ファルマは診眼を使う。エレンは両腕で胸を隠すようにしてファルマの前に立つ。

「ファルマ君の診眼、改めて見ると目力あるわね。ちょっと圧倒されちゃうわ」

「笑かさないでよ……」 感染症”」

疾患や病変を示す青い光に変化が生じた。

この反応は、エレンが何かに感染していることを示す。

「当たり前みたいだ、さすがエレン！ 感染症といえば……ええと、

”細菌”、”真菌”、”寄生虫”、”ウイルス”、”ウイロイド”、  
”プリオン”」

一つずつ諮ってみる。

大まかな分類から鑑別しようとしても、どれも手ごたえはない。

「感染症だとわかっているのに、どれも当たらないのか……」

ファルマは興奮が醒めてゆくのを感じていた。

「ねえファルマ君。こないだ君がオイゲンさんをゲノム編集で遺伝子治療をしたときみたいに、核酸断片や酵素が細胞に勝手に侵入してくるのは感染症って言わないの？」

「あれは遺伝子治療であって、感染症とは言わないよ……。人工的にやらない限り、そんなことは起こらないし……」

（でも、自然に起こったことではなく、墓守やかつての守護神が故意に起こしたことなら……？ 人工的な核酸配列で呪いが制御されていてもおかしくない）

そんな発想が頭によぎる。

「”ペプチド導入”」

「”遺伝子導入”」

ファルマは全身の血の気が引くのを感じながら診眼に諮る。  
遺伝子導入と念じると、青い光は僅かに反応をみせた。

「あ、当たった！」

「うそ。遺伝子導入のほう？」



エレンが嘘だろうという顔をしている。ファルマも予想外すぎて思わず半笑いになる。

「当たってしまった。霊薬を作って呪われた瞬間、エレンと兄上の中に何かの遺伝子断片が入ってそれが血流にのって全身に回ってしまったっていうのか。でも、ただの遺伝子断片だったら血液で希釈されるし、増えたりしないよ」

では、入り込んできた遺伝子は何なのか。ファルマは考え始める。エレンは霊薬を調合するとき、傷を作って感染し、それで寿命を半分持つていかれる呪いにかかった。

(……自己増幅配列を持つ、たとえば)

「トランスポゾンの導入」

エレンに宿った光は完全に赤くなった。当たったのだ。

「トランスポゾンって何？」

トランスポゾンとは、細胞内を動き回るDNA断片だ。ウイルスではないが、外部からやってきてゲノムの中に勝手に入り込み、自らの複製をつくる。

できた複製は新たなトランスポゾンとなる。

(トランスポゾンなら何とかなるかもしれないぞ)

ファルマの顔が思わずにやけたので、エレンはきょとんとする。

「トランスポゾンだと嬉しいの？」

ファルマは確信めいたものを感じた。エレンはきよんとする。

（いや、ただトランスポゾンだけで細胞に入り込むことはないから……細胞に導入される何かプラスアルファがあつたはずだ。そこは謎が残るけど、霊薬調合の際に何か操作をするのか？）

などと考えているうちにトランスポゾンのことが分からずエレンが混乱しているので、ファルマは紙に書く。

「今夜は月がきれいだね」

「何？ 月、出てないわよ？」

「という順番の配列の遺伝子があつたとするだろ。そこに、ある特定の、例えば 明日は晴れだよ という配列が入り込む、この入り込んだ配列がトランスポゾンなんだ」

” 今夜は月 明日は晴れだよ がきれいだね ”

「 から の間の文章が入ってきたのね。 は何なの？」

「トランスポゾンには、 のように前後に目印の配列がついてる。

この が付いている間は、 を標的にして切り出して別の場所に入る働きをする酵素によって、ゲノムの中をどこにでも移動できるでも が欠けると、目印が消えて移動できなくなる。こういう性質があるので、トランスポゾンは別名”動く遺伝子”ともいわれられている」

「 が取れて ” 今夜は月明日は晴れだよがきれいだね ”、のまま配列が動けなくなってしまうのね。文章の意味がなくなってしまうたわ」

「そう、短い配列の挿入により、この遺伝子はつぶれてしまったん

だ。このトランスポゾン入りの配列の残骸は、人体にも多く残されているんだよ。たぶん」

（まあ、本当にトランスポゾンの残骸が多く残されているか、解析データはそこまでみてないけど）

ファルマが以前に行った数名の全ゲノム解析ではそこまでチェックする余裕はなかったが、それを調べてみると何かわかるかもしれない。

「ええーっ！ 邪魔！」

「邪魔なばかりでもないんだけどね」

これは特別な現象ではなく、地球における哺乳類のゲノムの三分の一、ヒトゲノムでは40%ほどがこのトランスポゾンがゲノムの中に入り込んだ残骸がみられるという報告もある。トランスポゾンによりDNA断片がゲノムに挿入されると遺伝子が破壊され突然変異の原因ともなりうるが、逆にそれが進化を促進してきたとも考えられる。

「んーと、よくわかんないんだけどその動く遺伝子っていうの、ファルマ君の教科書にも書いてた？」

「1ページぐらい書いたよ」

「ごめん、読み直す！」

ファルマに一刀両断にされ、たじたじになるエレンだった。

「とすると、この呪いの治療薬はどんなものかい？」

「ええと、私の中に入り込んできたトランスポゾンのような標識配列を認識して切り出すようなもの？ でも、切り出してもまた

ほかのゲノムの中に入り込んだんじゃないのよ」

「エレンの中に組み込まれた呪いの配列がどんなものであったとしても、このトランスポゾンから　まで跡形残さず切り取って、二度とゲノムの中に入り込めないようにする酵素なら俺が既に持っている。だから、これであってくれ……」

ファルマは診眼に問う。診眼ごしにエレンと目が合う。ファルマは諂った。

「” 活性型トランスポザーゼ”」

エレンを赤く包んでいた光が、完全に消えた。

「正解みたいだ、エレンのは、これでいけそうだ」

治療方針は定まった。ファルマはほっと息をついた。

## 6章16話 聖帝と、暗躍する遺伝子（後書き）

謝辞

・本頁後半は、生物学者の meso | c a c a s e 先生に監修いただきました。どうもありがとうございました。

## 6章17話 ジョセフィーヌの仮説と、霊薬の代償

「サン・フルーヴ帝国皇帝ならびに神聖国大神官・エリザベス聖下のご帰還ー！」

神聖国への半月ほどの滞在の後、聖帝はジュリアナとクララと主要な枢機神官、そしてファルマを伴ってサン・フルーヴ帝国に帰都を果たした。

聖帝の馬車列が帝都に乗り入れると、市民たちが熱狂とともに取り囲み、大騒動になっていた。女帝の不在の間に大惨禍に見舞われた民衆は、彼女の帰還を待ちわびていた。

安寧から突き落とされた市民たちにとって、彼女の存在が帝国の守護神そのものだと思っていたのだ。

人々はあとからあとから、彼女の後を追いかけてついてゆく。母の帰りを待っていた子供のよう。

「エリザベート陛下……エリザベス聖下！ やっとお戻りになられましたか」

「帝都は大変でした！」

「ご帰還お待ちしております。もう少しお早くお戻りになっていれば……」

馬車行列が大路を駆け抜け抜ければ、人々の声が聖帝を追いかける。

「陛下がお戻りになれば、悪霊は恐れるに及ばん！」

「大神官と皇帝を兼務なさるのだとか。帝国民としても誉れ高いことだ」

ファルマは沿道の人々に朗らかに手を振る女帝の傍に控えながら、その光景を目に焼き付けた。彼女が皇帝だったから、帝都は持ちこたえたのだらうと思う。

そして歴代のサン・フルーヴ帝国皇帝には、かならず世界最強の神術使いが即位するというしきたりが、宮廷が不落であるという信頼が、このように簡単に悪霊に侵略されるこの世界において、人心を引き付けてきたのだらうとファルマは思うに至った。

帝都に戻ってきた聖帝エリザベスに安息はなかった。

被災した地域へとおもむき、悪霊による犠牲者をいたみ、悪霊によって破壊された市街や生々しい惨禍の爪痕の残る主要な施設の復興を指揮し、市民のために巨額の特別予算を執行した。

帝都の安全の要となる帝都神殿には由緒ある秘宝が複数安置され、ファルマがそれまで神殿に秘宝として置いていた彼の職員証は取り戻すことができた。

「母上ー、かまってー」

「まったく、甘えん坊で仕方のないやつだ」

「なんと言われてもかまわないよ」

少し手を休める時間ができると、旅程が長引いて寂しさと不安からかへそを曲げた皇子と遊んだり絵本を読んでやるなど、母親としての顔もみせていた。

エリザベスの帰還とともに日常を取り戻し始める帝国だが、帝都の神殿に不安を感じたらしい市民の中には、ランブエ市に疎開したまま戻ってこない者もいる。

ド・メディシス邸も、呪器による破壊が著しく、人が住める状態に補修工事を終えるまで避難日程を延長していた。

帝国医薬大学校では、融解陣の呪いを克服するため、聖帝の皮膚細胞をほんの一部切除し、それをシートにして増やす細胞培養が極秘裏に進められていた。

ファルマから直接に開発を任されたのは、すっかり彼の一番弟子となりつつあるエメリッヒ・バウアーだ。

エメリッヒはその責任の大きさに疎むこともなく、純粋に楽しみながら開発を続けている。帝国医薬大に戻ったファルマは、作業を続けるエメリッヒと学生、そして技術職員たちに声をかける。

「お疲れ様。エメリッヒ、調子はどう？」

「こんにちは教授！ 見てください、絶好調なんですよ！」

「あれからのくらい増えてる？」

「そうですね、あと数日で目標の面積に達します。細菌やウイルス感染検査も陰性ですよ！」

ほめてほめてとあからさまに顔に書いてあるエメリッヒをねぎらいながら、ファルマが培養室に入ると、神術陣の施された恒温培養器の中で育つ細胞シートをエメリッヒがファルマに示す。

特殊な培養器具等は使い捨てではなく、メロディに制作を依頼していた。

「感心だよ、殖えたもんだね！」

ファルマとエメリッヒはそれを顕微鏡で確認してカウントし、細胞数を概算する。

「順調だね。聖下の表皮細胞の培養を助ける栄養細胞と、培養できる無菌の環境が無事でよかったよ」

「本当ですよね……悪霊に汚染されてしまっていたら、除染は大変だったでしょうね」



大学に残った学生や教職員たちが一丸となって、大学を命がけで守ったからだ。その中にはブリュノをはじめエメリツヒやジョセフィーヌ、神力を失ったキャスパ―教授なども含まれる。

「それと、君が熱心に研究をしてくれていたからだ」  
「おそれいます」

研究室の学生用居室に戻るとそこへ、獣医の業務を終えたらしいジョセフィーヌが合流する。彼女も自主的に、エメリツヒの実験を手伝い始めていた。

「こんにちは、教授！ お越しになっていたんですね」  
「今日は時間ができてね。さて、今後の予定を説明するよ」

この細胞が準備できたら、女帝の背にある融解陣を細胞に転写し、細胞の性質を解析する。既に感染症だとわかっている融解陣を転写する方法はこうだ。

まず、融解陣を構成している感染源を標識する抗体を作製し結合させる。その抗体を、外部から電圧をかけて表皮の細胞シートへと写し、感染源を生体内から、生体外の環境に乗り換えさせる。女帝の体から、呪いを切り離してしまうのだ。

ファルマ、ジョセフィーヌとともに細胞の情報の整理を行っていたエメリツヒは、難しそうに眉を寄せていた。

「どうしたのエメリツヒ君、変な顔して」

「あの。その戦略に異存はないのですが、一つ不安があるんですけど」

「何？」

「素人質問かもしれませんが、聖下の融解陣はいつ、どうやって発現したのですか？」

「先代が亡くなったからだよ、答えになっていないけど、現状、わかっていないことはそれだけしかないんだ。トリガーは先代の死で、それは感染症だということまでわかっている」

ファルマは緘口令を敷いて、細胞培養に携わっている一部の学生にはエリザベスの容態を伝えている。聖帝の命を救うべく使命感に燃えている二人だが、エメリツヒは何か腑に落ちないことがあるらしい。

「大神官様と、陛下は接触していなかったのですよね。空気感染などで感染してくるものなのですか？」

「そうだね。大神官の死によって、融解陣はエリザベス聖下に感染し、発現したんだ」

「融解陣はどうやって先代の死を認識し、聖下の御背中に移ってきたのでしょうか」

「それは難しい質問だな」

「それに、その感染源を細胞シートに転写して培養する予定ですが、俺たちへの感染はありませんか？」

「感染後の作業は俺がやろうと思っているよ。幸い、俺は感染しなかったみたいだからね」

「発症しなくても、潜伏感染をしているのかもしれませんが？」

エメリツヒの鋭い突っこみがさく裂しているが、ファルマもそこは保留にしておいた部分だった。

感染の発端を墓守のせいにしてしまうのは簡単だが、どうも腑に落ちない。

ファルマの袋小路にはまりこんでいた思考をすくい上げたのは、ファルマたちの作業を見学していた、獣医でありファルマの教え子

でもあるジョセフィーヌの言葉だった。

「あの、間違っていたらごめんなさい」

「何、言ってみて」

ファルマは自由な意見を促す。

「蜂や蟻に似ていると思いません、この現象って」

「どうということ？」

「女王蟻や女王蜂が死ぬと、新しい女王ができるということです。死んだということがわかると、次の女王をたてようとする」

まさに異世界獣医の視点である。

薬学者であったファルマは、感染症ということを念頭に置いていたため、この現象を忘れかけていた。ましてや、この異世界の動物学には精通していない彼のことである。そのあたりの知識は、言うまでもなくジョセフィーヌの方が上だった。地球でも、不妊の階級を持ち、繁殖個体の限られた社会性動物集団からなる”真社会性”を持った種は昆虫だけでなく、哺乳類ではネズミにも数種類いる。

異世界にいるかどうか、ファルマは知らないが、地球ではハダカデバネズミなどの真社会性動物がいる。ファルマは前世、このネズミに関しては老化研究で遺伝子解析に携わった経験がある。

ハダカデバネズミは通常のマウスに比べて、十倍も長生きで、がんに対する耐性も高く、無酸素にも耐えるとあって、薬学者にもおなじみの研究動物である。

ハダカデバネズミも蜂や蟻のような真社会性の生活様式をとっているが、女王蜂や女王蟻に相当する繁殖メスが死んだ場合は、同じ巣の中でたった一頭が繁殖のためのメスとなり、繁殖メスが生殖できる限りにおいてその他のメスの性成熟をフェロモンで防いでいるという点では、蜂や蟻と共通する部分がある。ジョセフィーヌの推

理は続く。

「融解陣によって選ばれるのはそういう仕組みがあるのではないでしょう。その場合、陛下が大神官の死を見た、という刺激が融解陣の発動に影響している可能性があります」

「そうか……確かに」

ファルマは感心して手を打った。

ジョセフィーヌは彼女の意見が認められたので嬉しそうだ。

「蜂や、蟻のシステムねえ……」

今回の現象を無理やりあてはめてみると、ピウスの死によって、彼が発していたフェロモンが何かが途絶え、その介在物質の途絶を認識した女帝が次の融解陣を負ったということになる。

つまり、蜂も蟻もハダカデバネズミも、繁殖メスの死を認識しているのは視覚ではなく、フェロモンであり、受容体である。

「いや待てよ、このアイデアだと、世界中でたった一人しか融解陣を負わない理由にはならない……あ、そうか。だから素質のある者は、神聖国の枢機神官として大神官のもとに予め集められていたのか。でも、フェロモン分子を化学受容することは、別に感染とは言わないんだよなあ……」

診眼ではすでに、感染症だという答えを得ている。

それに合うストーリーは、とぶつとと考え始めたファルマを、エメリツヒとジョセフィーヌは顔を見合わせ、交互に見つめる。

「となると、陛下は物質Xの受容体を持っていたか、受容体を発現させるようなものに感染したということになる。ピウス聖下から何

が出ていたのか、今上聖下が何を発しているのか、そういう視点で調べてみるよ」

聖帝のゲノム情報をごく一般的な神術使いのそれと比較すれば、物質Xの受容体の存在を突き止められるかもしれない。この仮説に飛びついてしまうのは視野を狭窄させるが、確かめてみるのは悪くない。ジョセフィーヌは腰を浮かせる。

「私たちも文献を調べてみます！　そういう社会性を持った動物をリストアップしてきますね」

「ああ、ありがとう。有意義なアイデアだ、助かるよ」

「俺は時間がありませんので細胞のほうに専念しますけど」

「そうだな。そうしてほしい、ではジョセフィーヌ君、よろしくね」  
「はいっ！」

（学生から刺激を受けるようになったなあ。やりとりが一方通行でなくなったのが嬉しい）

ファルマがジョセフィーヌとエメリツヒ、教え子たちの成長を実感しながら医薬大の教授室に戻ると、出勤してきたゾエに遭遇した。

「ゾエさん久しぶり、しばらく席をあけて悪かったね」

「あつ、お久しぶりです教授！　いつから来られているんですか？」

「昼間に出勤したのはしばらくぶりだな。いつも文通みたいなことして申し訳なかった」

夜間に帝都に戻っていたファルマは深夜の教授室に忍び込み、ゾエの机にメモを残して業務を指示していた。ゾエはファルマの顔を見て嬉しそうだ。

「今日午後から面会予約を取ってほしいんだけど、いいかな」  
「かしこまりました。どなたへでしょうか」

ファルマが会いたかった人物、それはキヤスパ教授だ。  
約束の時間にキヤスパ教授の教授室を訪れると、老教授は書籍をうずたかく積み上げて資料に目を通すことに没頭していた。

「わざわざ来てくださるとはね、ファルマ・ド・メディシス若教授」  
「お時間をいただいて申し訳ありません」

キヤスパ教授の声のトーンはいつもと変わらない。  
しかし、彼女は同じようであって以前と同じ状態ではない。  
ファルマは見舞いにと、教授の好みを熟知したうえで選んだ茶菓子を手渡す。

「まあまあ、私の好物なのよ」  
「秘書さんに教授のお好みをうかがいました。さて、本題をよろしいでしょうか。父が禁術を使用し、キヤスパ教授の神力を枯渇させることになったと聞きました。お体はいかがですか？」  
「ああ、体のほうは問題ありませんよ、ご心配をかけたわ」

彼女はブリュノの禁術の代償に、生涯にわたって神力を失ってしまった。  
「まった。」

ブリュノはかろうじて神脈がつぶれなかったと聞いたが、キヤスパは無事ではなかったのだ。その話を聞いていたファルマは、彼女の神脈に手を加えられないものか、直接会って確認したかった。

「それを心配してきてくださったのかしら」  
「そんなところです。少し、神脈を拝見させてください」  
「そんなことができるのね、でも、希望は持たないわよ」

キャスパー教授に目を瞑ってもらってファルマは神脈を診たが、確かにもう彼女の体に神脈は残っていなかった。神脈が枯れて、完全に閉じてしまったようだ。

ファルマは神脈が閉じた状態をこじあけたことはあるが、今はもう、閉じた痕すらなくなっている。この状態では、さすがのファルマも手のほどこしようがない。

彼女はまったくの平民になってしまっていた。

キャスパー教授はファルマが言葉を失っているので、少しおどけたように尋ねる。

「だめだったみたい？」

「はい。もう、神脈はないようです」

「ふふ、そんな顔をしないでちょうだい。私は元気ですし、いいのですよ。私もこれで身軽になったわ。風属性神術使いだったのだけど、神術は苦手でした。このところの訓練も億劫になっていたところ。だから、力を失ってせいせいした。杖は折って捨てたわ」

淡々と話すキャスパー教授は、その覚悟を裏付けるように、もはや杖を帯びてすらいなかった。

神力を失った教授には、必要ないものだからだ。衣食住にただちに困りはしないだろうが、財産を没収され貴族を追放されることに間違いはない。

「あの、もしご不便なことがありましたら、当家にいらしてください。歓迎いたしますので」

老学者を食客としてもてなすぐらいの余裕はド・メディシス家にある。

キャスパー教授にとっては窮屈かもしれないが、彼女の老後の生

活はド・メデイシス家が責任を負うべきだと考えた。しかし、ファルマの気遣いを一笑するかのように、キャスパー教授はどこか肩の力がぬけたように笑った。

「厄介になんてならないわ。貴族ではなくなっても、私は学者です。神術に頼らずとも、我が学問の道に何ら恥じることはありません」

かくしゃくとした老教授は、同情を嫌っているように見えた。

「教授のご英断と、教授が多くの人々を救われた功績を忘れません」  
「ありがとうございます。どうか、もしそう思っているなら哀れに思わないでちょうだい。そういうの、こちらも惨めに思いたくないから」

「……承知しました。それでは」

「こここのところ寒いから、風邪をひかないのよ」

声にならない言葉を飲み込みながら、ファルマは会釈をして引き下がった。

静かに退出しようとしたとき、キャスパー教授は思い出したように強烈な一言を放った。

「それよりも、お父様の呪いの方が深刻なんだけど、どうなったのかしら」

「？ 父は神力を失っていないと聞きましたが」

事情を把握していないファルマに、キャスパー教授は青ざめた。

「ええ、でもあと一度でも神術を使うと、体が朽ちて死んでしまう、そういう呪いを負ったのよ、お父上は」

キャスパー教授の言葉を受けてそれを完全に理解するまでに、フ



アルマはしばし時間がかかった。霊薬ハバリトゥールは、悪霊から市民を守る薬だった。禁断の調合と引き替えに、彼は禁術に手を染めることになってしまったのだが、それはつまり。

「術者に代償のない、都合の良い禁術なんてないの。もしそんなものがあるとしたら、別に禁じられていないわ」

つまり、ブリュノは実質的に、二度と神術が使えなくなったのだ。

6章17話 ジョセフィーヌの仮説と、霊薬の代償（後書き）

今日はもうこの後に一話ありますのでご注意ください。

謝辞：本頁の生物学的ギミックにつきまして、生物学者の mes  
o c a s e 先生にご提案いただきました。どうもありがとうございます。  
ございました。

## 6章 18話 街の薬師

ファルマが自宅に戻り、真っ先に向かったのはブリュノの部屋だ。ブリュノはちょうどベアトリスと、深刻そうな話をしていたところだった。

ベアトリスがファルマの入室に気付き、悲哀を取り繕ってほわっとした笑顔を向ける。

「あら、ファルマ。おかえりなさい。どうしたの、顔色が悪いけど」

「父上、母上、ただいま帰りました。屋敷の簡易補修が済みましたので明後日、ブランシュたちを迎えに行こうと考えています」

ブリュノは雪を頭と肩に乗せたままやってきたファルマに、頭を払うジェスチャーを送った。

「そうか。私は手が外せないが、行つてきなさい」

「私も一緒に行くわよ。ブランシュったら、寂しがっていやしないかしら」

「では、母上も一緒にまいりましょう」

表向きの要件を話しながら、ファルマは書類に目を通し続けるブリュノの神脈を診る。

ブリュノの神脈の反応が非常に弱い。

キャスパー教授の言う通り、神脈の枯渇が迫ろうとしている。こじ開けてしまうことはできなくもないが、禁術の呪いにあらがうことができないとは思えない。むしろそれが契機となってブリュノの命

を奪ってしまうかもしれない。

ファルマの瞳の色が変化しているのを、ブリュノが察知した。

「私の何を量っている！」

「失礼しました。神脈を診ておりました」

「なぜだ」

「キヤスパー教授のところに行つてまいりました。そして、父上の使つた禁術についてのお話も伺いました。儀礼的ではなく厳密な意味でお伺いします、ご体調に変化はありませんか？」

どうやら概要を知つたらしいと汲み取つたブリュノは白状した。

「その顔は、聞いたのだな。たしかにあと一回神術を使つたら私の命はない。だが、禁術系列を使つて即座に命を持つていかれないだけましというものだ」

ベアトリスは発言を控えているが、驚かない。

どうやら、ブリュノから聞いて話を知つていたようだ。

「そうですね。父上は私に、禁術を教えてはくださらなかったのて存じませんが、禁術系列とはそんなに悲惨なものなのですか」

「子や弟子に望んで禁術を教えたいと思う者はおらん。禁術は本来、人間のための術ではなく守護神らの術であり、神々が使うべき術なのだ。それを人の身で扱うということは、より守護神の身許に近づくということ。それがすなわち、死だ」

「どうして兄上には？」

「ド・メデイシス家の当主となる者には、知識と伝承のために教えるのだ。教えるが、使つてはならぬと命じた。パツレもまだ、その言いつけを守つておるはずだ」

（兄上とエレンが禁術を使ったことは、父上は知らないようだな。そして母上も報告していない、……と）

事実を知っているはずのベアトリスの口の堅さには恐れ入る。

「そういうことでしたか。父上、私にも禁術を教えてくださいませんか。兄上の立場を揺るがすようなことは誓っていたしません」

「今、話を聞いておったのか？」

「しかと」

「ならば、死の道を歩む愚を犯すと申すのか」

「禁術は本来、人間のための術ではなく守護神らの術であるとお伺いしました」

「なんだと？ それはどういう……」

誰かの犠牲を常に払い、この世界の人々が守護神の術を模して禁術の開発を続けてきたのは、連綿と続く悪霊との闘いが終わらないからだ。

終わらせなければいけない。ファルマは拳を固く握りしめた。

（終わらせないと、またどこかで誰かが禁術を使い、誰かが歯車の中に溶かされ続ける）

禁術であろうと、秘宝であろうと、切り札は一つでも多く持つておきたい。

ファルマは両親に告白した。

「不本意なことです、私は今、神聖国にて正式に現今の守護神、薬神として列せられました」

一呼吸おいて、彼らの衝撃を和らげる。

「サン・フルーヴ帝国では公表されていません。心は人間でありませんが、立場上、私はもう人間ではありません。帝国からファルマ・ド・メディシスの戸籍はすでに抜かれ、神籍に入れられてしまいました」

伝統的に、正式に神殿に守護神だと認められたものの戸籍は廃され、神籍というものに入る。人間から守護神となった者はたいていは拘束され、殺されてしまったのだが、ファルマはひとえに聖帝の一存で、自由な行動を許してもらっている。

聖帝の後ろ盾がなければ今頃、彼を拘束できるかはさておき、ファルマは牢の中に収容される予定だった。

ブリュノとベアトリスから、言葉は返ってこなかった。

これまで曖昧になっていたが、今度ははっきりと、人間、ファルマ・ド・メディシスは死んだのだと、そう告げられたのだから。

「お前はあの落雷の日に、すでにそうなっていたのだな」

今ここにいるファルマという存在は、ファルマ・ド・メディシスの記憶を一部有する、まったく別の存在である。それを、両親は明確に受け入れるときがきた。

「こんなことになってしまいました。父上と母上にはこれまでと変わらず、親子として接してくださいとありがたいです。もちろんあなた方にとって私は異形の存在であり、この頭の中には落雷以前の記憶も断片的にあります。親子の縁は、あるのかどうかわかりません。勘当されても仕方がないと思っています」

ファルマはだんだんとうなだれてくる。拒絶されることは承知していた。

だから最低限の要望にとどめる。

「ですが、どのような関係となっても、お願いです。禁術は教えていただきたい。私は禁術はおろか、神術を知ることすらなくこの世界に来てしまいました」

「……お前には、私たちの息子であったころの面影はない。だが……この三年間を共に過ごし、お前が私たちの息子を演じようとしていた努力も知っている。実の息子ではなかったと知り親子の縁を切ってしまうのは、野暮というものだ」

ブリュノは立ち上がり、神殿の正式な作法にのっとりファルマの前に付き、薬神に対する正式な拝礼を行った。守護神が薬神である場合に限り、ファルマの神力と共鳴し、加護を授けることができる。初めて加護を受け取ったブリュノの体はほんのりと輝きを持つ。ブリュノは立ち上がると、その効果に浴しているようだった。

「これが薬神の加護というものか。神脈が脈動するのを感じる。神術を使ってみたくなるな」

「それは命取りですので、しばらくお控えください。禁術の解析が進めば、父上の呪いも解けるかもしれません」

「当家の地下礼拝堂を取り壊して禁術の研究室にするか！ お前の顔を見ずしての礼拝も意味がないからな！」

ブリュノの行動を見て呆然としているベアトリスにも、ファルマは声をかける。

「あの、母上も。そういういきさつですので」

「……なんてことなの」

ベアトリスは言葉に詰まっていた。息子を奪われてしまったかのように感じたのだろっうな、と察したファルマが言葉を選びながら話しかける。

「やつぱり、戸惑いますよね」

「おめでとう！ 息子が守護神様になったなんて、もう大出世も大出世じゃないの！ 母としても鼻が高いわ！ さっそくお祝いしなきゃ！ ああ、内緒なのかしら？ でも私はお前に祈ったりはしないわよ、だってお前は私の息子なのですからね！ 叱ったり、おしりをペチペチしたりもするわ！」

ベアトリスはファルマと一切距離をおくことなく、遠慮もなくぎゅつと抱きしめた。

彼女の愛情に窒息しそうになりながら、ベアトリスがこういう性格で助かったとファルマは思う。夫婦の反応は違うが、受容してもらえたということは伝わってきた。

「お前が使えるかもしれない禁術がいくつかある。お前が神殿に正式に神性を認められ、神となったのなら、禁術はお前にとっては禁断の術などではなく、ただ神術を習得するのと変わらんだろう」

確かに禁術は人間にとっては命を代償とする闇そのものだが、守護神が扱う場合は代償は一切なかったとされている。これまでブリュノは、ファルマを薬神の加護を受けた人間だと思っていたので、禁術を教えようとも考えなかった。

禁術に再び手を染めようとするブリュノの眼光は鋭く、そして昏い輝きを持っている。

「なんと愉快だ。神薬が現界するかもしれんとは！」



ブリュノは久々に声を出して笑っていた。  
ちよつとこわい、とファルマはその悪役然とした笑顔に引いた。

湖に面した森の中にたたずむモスグリーンの、苔むした魔女の屋敷のような趣のある隠れ家風の屋敷、それが医療火炎技術師、メロディ・ル・ルー尊爵の別邸であつた。

緑に囲まれた庭に出てきた一団は、ド・メディシス家の面々だ。  
ファルマとベアトリスは予告通り、ロッテやブランシュを含むド・メディシス家の人々を、疎開先へ迎えに行った。ファルマは彼らをランブエ市の別荘へ迎え入れてくれたメロディに感謝し、ついでにと統合失調症の定期カウンセリングを行って薬を持ってきた。

荷造りを終え、使用人たちに荷物を運び出させながら自宅を出たメロディは、つばの広い帽子をかぶりおっとり微笑む。

「ド・メディシス、ボヌフォワ両家と一緒できたおかげで楽しく過ごせましたわ」

「メロディ様、お取り計らいどうもありがとうございました」

ファルマとベアトリスがお礼を述べ、ベアトリスはメロディに礼金と礼状を手渡した。

「あら、奥様。これはただけませんか、何もお構いしておりませんのに」

「いいえ。大変お世話になったようですし、当主からの言いつけです。お受け取りいただかないと叱られますわ」

「そうですか、ではありがたく」

メロディとベアトリスのやりとりが終わったあと、ロツテが屋敷の中から荷物を持って出てきた。ロツテを見たメロディが、彼女の両肩にぽんと手を置いてロツテの特訓の成果を述べる。

「シャルロットさんともたくさんお話ししましたし、彼女も随分と神術が上達したのよ」

「えへへ、楽しかったですね。ご指導ありがとうございました、また沢山教えて下さい」

ロツテは悪霊を退けるための炎術をメロディから教わった。

ロツテの得意とする作画と神術陣の組み合わせは、天性のものを感じさせるというメロディの話を聞き、ファルマはうなる。

「どんな感じの神術なんでしょう。神力に依存せず神術が使えるなんて画期的ですね」

「ふふ。シャルロットさん、薬師様に神術陣を見せて差しあげたら？」

「あつ、はいっ、喜んで。ご覧になりたいですかファルマ様」

ロツテはじらすように荷物の入った袋をのぞいて開け閉めしている。披露したいんだろうなと気づいたファルマはロツテに促した。

「危なくなければ見せてもらえるかな」

「よろこんで！」

ロツテは下草の刈られ少し開けた場所に立つと聖油を小瓶から取り出し、地面にふりかけるように火焰神術陣を大きく書きつけ、メロディから譲り受けた神術の種火を使って着火した。地上に咲く花のような美しい神炎が立ち上り、確かにそこは神術陣としての形式

を成立させていた。ロツテの手際には迷いがなく、隅々まで丁寧で陣も見栄えが良い。

極彩色の色合いとともに複雑な神術陣が浮かび上がり、悪霊を寄せ付けない領域は、人を燃やさず、悪霊に対してのみ効果を発する。神力を持たないロツテが神術を披露し、安定的に神術結界が維持されている光景は驚異的だった。

「できましたっ！」

「すごいよロツテ。これは立派な神術陣だ、ちゃんとできてるよ」

「ありがとうございますっ。メロディ様の神力をお借りしています！　これで、次に悪霊が出て大丈夫ですかね？」

ロツテの特訓の成果を目の当たりにしたファルマは拍手を送る。

「ちゃんと持ちこたえられると思うわ。もうすこし大きく描いてもいいですよ。中央の図柄は最後にして。帝都に戻ったらまた特訓しましょう」

メロディからの細やかな指導が入っていた。  
ふと思いついて、ファルマは疑問を呈する。

「もしかして、この方法でほかの属性の神術陣もできたりします？」  
「ほかの属性は着火などができないから難しそうですわ、実際にこのテクニクは神力切れを起こした際に神術使いが使うものですが、炎属性以外にはほとんど知られていませんの」

「確かにそうですね、私もエレンから聞いたことはありません」

メロディの話によれば使えるのは火焰神術陣のみではないかという意見だ。

しかしファルマは、例えばソフィの雷などを蓄電して、電気回路

を神術陣として利用する方法や、光エネルギーに変換して平民が利用するのはありなのではないかと考えた。

（面白いことになりそうだ）

ファルマは思わぬ利用法の示唆を受け、ぞくぞくと好奇心が持ち上がってくる。

その顔を見たメロディは、期待を込めたまなざしを送る。

「また、面白いことを思いつきましたね？」

「ええ。そうだといいいのですが、それではまた、帝都で」

メロディと別れの挨拶をした後、ファルマとロッテ、ブランシュは同じ馬車に乗り込んだ。道中、カードゲームなどで暇をつぶしつつ、ファルマはバッグから菓子箱を取り出してロッテとブランシュに見せる。

「あにうえー、それなに？」

「神聖国のお土産のチョコクッキー、二人ともいる？ 包み紙に星占いがついている神聖国の名産品なんだって」

「えっ、包み紙に星がついていてかわいいです！ いただけます？！」

「それから、神聖国の名画のイラストカードをあげるよ」

「わーきれいです。神聖国はやっぱり宗教画の本場ですねえ」

神聖国から戻るときに、神官たちにお土産をたくさん持たせてもらった。

どうも神聖国は神術の総本山であると同時に宗教芸術が栄華を極めている文化財の密集する場所でもあり、ファルマはそれなりに興味と感心をもって神聖国の文化風習を受け入れつつあった。

建築物の形状は異なるが、地球におけるヴァチカンのような国家と形容すればしっくりくる。ブランシュが馬車の振動で眠りこけてしまうと、ロッテが思いつめたように話を切り出した。

「はい、あのファルマ様。私、エレオノール様とパツレ様に大変なご迷惑をおかけしてしまいました、私の命と引き換えに、あのお二人が呪いにかかったとお聞きしまして。パツレ様には笑われましたが、エレオノール様にはまだお会いできていません。どのように償いをすればいいと思いますか？」

ロッテはかなり気に病んで、肩を落としていた。

エレンの父母も、まだ娘が呪いにかかっているということは知らない。

ファルマは馬車に揺られ外を眺めながら、さりげなくロッテを慰めるように告げた。

「そのことなら俺とエレンで何とか呪いを解こうとしていて、必ず解明して見せるから、ロッテは悩まなくていいよ。禁術に手を出したのはエレンと兄上だ、その勇氣には敬服するけど、その結果何が起こったとしても絶対に君が気にする必要はない」

「ですが……私にはどうすることもできなくて。悔しいです」

「手がかりは得られているし、治療法もわかってる。あとはアプロイチを検討しているところだ、解決するよ」

罪悪感に耐えられないといった顔をするロッテを、ファルマは励ました。

根拠のない約束はしたくない。それでも、手ごたえを感じているからこその言葉だった。

また、ブリュノが候補として出てきた神薬の中にも呪いを解く効果のあるものがある。持てる知識と技能を使って、エレンとパツ

レを靈藥の呪いから解き放つ。

「ファルマ様とエレオノール様は、本当に強いお方ですね」

「ロツテが今、俺をどんな風にみているかわからないけど、俺もエレンも誰もがそれぞれ自分と戦っているんだ。みんな強くて、どこか弱い。だから、弱い部分を支えあっていくんだよ」

「私は誰かをお助けすることが、少しでもできるのでしょいか。いつも皆さんに助けていただいていたばかりで……」

「そんなことはないよ」

かじかむ両手をこすり合わせるロツテの手を、ファルマは優しくとりあげた。

久しぶりに見た彼女の手が、あかぎれに覆われていたのを見たからだ。

「手当していい？」

「だめです、がさがさで恥ずかしいです……」

「いいから、まかせてよ」

もともと皮膚の弱いロツテだが、メロディの別邸で過ごし、神術の訓練をしているうちに、手荒れがひどくなったのだろつ。ファルマは持ち合わせの軟膏を指にとると、体温でとかしながら、彼女の手をいたわるように指先に塗りこんだ。

ロツテは恐縮して、ファルマのすることに任せたまま言葉を失っていた。そんな彼女にファルマは話しかける。

「三年前。落雷で死にかけたあと記憶がなくなって途方に暮れていた時に、最初に手を差し伸べてくれたのは君だったよ」

「ファルマ様……そんな、昔のこと」

「君がいなかったら、神術を忘れていた俺はどこかで野垂れ死んで

いたかもしれない。俺が一番弱っていた時に、君は助けてくれたよ」  
「……っ、……はい」

ロツテは感慨深そうに口をつぐんだあと、言葉に詰まったままこくと首肯した。

目じりには宝石のような涙がきらきらとぶらさがっていた。  
手をお互いに預けたまま、ロツテと額をこつんとやる。

「その時からずっと、俺たちはちゃんと助け合ってる」

二人は掌を合わせて、不器用に微笑みあった。

あの頃からずっと、ファルマはロツテと秘密を分かち合い、心を通わせていた。

それを、二人は確かめ合ったのだ。

1148年、1月になった。

サン・フルーヴ帝国では1月1日が年の変わり目となる。

異世界薬局はエレンが附属病院から退院し職場復帰する頃には、徹底的に除霊を行い、神聖国より持ち帰った秘宝を核とし、対悪霊神術陣を半永久的に起動できるよう店舗をリニューアルしていた。その完成を見届けながら、ファルマとエレンは薬局のベンチで細かい指示を飛ばしていた。

「今のところ、俺がいなくなった時に発動する三重の神術陣を敷いているんだけど」

「なんでファルマ君がいなくなるのよ、店主なのに」

「俺がいなくなったとしても、市民のシェルターになるようにしないと思うって」

「どうしてそんなに、いなくなった時のことばかり考えてるの」

彼女は甘ったるい声を出した。眼鏡が不要となり、裸眼になった彼女は垢ぬけて見える。今回、いなくなりそうだったのは彼女のほうだ。

そのことを思い出したファルマは、一息をついてエレンに微笑みかけた。

「死を思う（memento mori）より、今日という日の花を摘むか（Carpe diem）」

「え、何て？」

「エレンが知らない国の言葉」

「は、はあ……」

エレンは困ったようにちよびつと眉をしかめた。

薬局を覆っていた工事の建築幕が取り払われたとき、異世界薬局本店は、25日ぶりに営業を再開する運びとなった。

聖帝のエンブレムが変更になったことにより、真新しい勅許印が二つ、薬局に届けられた。これが営業許可証の代わりとなり、聖帝の庇護の証だ。

神聖国のシンボルである白い獅子とサン・フルーヴ帝国の旗を組み合わせた図柄は、聖帝の権威を知らしめている。

有史以来初の、大神官と皇帝の兼務。

その重責はいかなるものだろう、ファルマは複雑な思いをいだきながら、薬局の玄関にそれを職人に取り付けてもらった。

営業開始日。開店前の薬局では、職員ミーティングが行われていた。



「じゃ、今年もよろしくお願いします。今年のネームプレートをつるすよ」

「わーい。念願の正規職員です」

バイト薬師たちは、希望を聞いて全員正規職員として転換した。ファルマは真新しい正規職員を示す金のネームプレートを薬局の壁に掲げ、名札を配布する。

宮廷薬師（管理薬師）    ファルマ・ド・メディシス

一級薬師（主任薬師）    エレオノール・ボヌフォウ

一級薬師    ロジェ・デ・バツケル

二級薬師    セルスト・バイヤール

二級薬師    レベッカ・デウトワ

一般従事者    法務・事務    セドリック・リュノー

一般従事者    庶務    シャルロット・ソレル

連絡人    トム

「薬局の紋章が変わったので、皆さんのユニフォームもリニューアルしました」

ファルマは新しい制服を着て嬉しそうな職員たちに呼びかけた。

「それじゃ、また、1148年もよろしくね。長い挨拶は省略したほうがいいかな。悪霊の発生によって、薬局はこれまで以上に帝都の地域医療の高度拠点のひとつとしての役割が求められてくると思う。需要と要請、そして患者さんのニーズにこたえられるよう、日々研鑽し技術を向上してゆこう」

「これで僕も正規職員ですか。いやあ、やる気ができますね！」

「そうだね、しっかりお願いするよ」

片言だったロジェも、今ではほとんど違和感なく帝国語を話し始めていた。

「お客さんがたくさん来るように、笑顔で接客頑張ろうと思います」  
レベツカも対人スキルを磨き、自信をつけはじめていた。

「じゃあ私は、小児と母子医療を頑張ろうかな」

セルストは時短勤務だったのだが、薬局内キッズスペースの開所を増やしたことにより勤務時間を延長した。

そして病み上がりだが、ファルマ譲りの診眼を手にし、まったく新しい世界が見え始めたエレンがしみじみと呟く。

「去年に引き続き今年も色々波乱はありそうだけど、負けずにやっていきましょう。私も今年はファルマ君の代わりが務まるように、みっちり勉強するから」

今年も大門を開け、薬局職員総出で新年の挨拶にたった。  
薬局の前には、既に人だかりができている。

「帝都市民の皆様、新年おめでとございます。異世界薬局 総本店、通常営業再開といたします」

職員全員が、ほどよい緊張感をみなぎらせて新年最初のボウアンドスクレープをする。

ファルマは顔をまっすぐ上げ、声を整えた。

「どなたさまも、いらっしやいませー!!」

ファルマの発声とともに、市民たちの拍手がまきおこった。

「よっ！ 名物の子供店主さんだ。待っていました！」

「何やってたんだい、待ちくたびれたよ！」

「エレオノールちゃんの快気祝いをしないとなあ」

「あら、店舗が爽やかになったわね。また通つてしまうじゃない」

薬局の門をくぐった市民が、あとからあとから押し寄せてくる。  
顔なじみの客も、新顔も、老いも若きも。

そこは確かに、帝都市民にとっての癒しの園であるのだろう。

割れんばかりの喝采を浴びながら、ファルマは一人の薬師として  
期待を受け今この場に立っていることを実感する。

いつまでここにいられるのか分からない、来年はここにいないか  
もしれない。

尋常ならざる力を持たされた身は、この世界の見えない意思に翻  
弄されてゆく。

それでも、誰かにとって、頼れる街の薬師でいたいと思った。  
目に留まるだけの生に寄り添って、手を差し伸べていきたいと  
そう思った。

< i 2 8 8 3 7 0 — 2 4 9 6 >

## 6章18話 街の薬師（後書き）

6章終了です。7章へお進みください。

間話 UNKNOWN Theory of Everything  
(前書き)

6章と7章の間の間話です。

謝辞：

異世界薬局コミカライズ作画をしていただいている高野聖先生より、  
薬谷完治の挿絵をいただきました。

(作中に挿入されています)

## 間話 UNKNOWN Theory of Everything

「守護神とは、斯くあるものか……まさに人智を超えた超常の存在だ」

彼らの見つめる視線の先には、創薬神術陣と呼ばれる立体神術陣の中に浮かぶ薬神、世俗名ファルマ・ド・メディシスの姿があった。大神殿の地下施設内の神術実験施設は、神術構造的に安定で、頑健なつくりであることから、合成失敗時に備えた薬神の神薬創造の場として供され、今、彼は創薬神術陣の中で神薬の調合を行っている。

創薬神術陣は幾何学文様に覆いつくされた球体の作用場、その内部でのファルマの存在は、緩く結合する光の粒子のように見える。その術式がファルマの体を蝕んでゆく代物だというのは、神官たちでなくとも一目瞭然だ。

神域に踏み込んだ彼を至近から見守っているのは、彼の世俗上の父親。

かつて世界髄一の禁術薬師であった、ブリュノ・ド・メディシスであった。

「体の崩壊が激しい……これ以上は危険なのではないか」

「あのような状態で、苦痛はあるのだろうか」

「ないわけはなかるう」

神術実験施設の晶石隔壁を一枚隔てた隣室から、神薬合成の成否を多くの神官たちが環視し、ファルマの神術を各々が分析していた。

「それでも薬神様は、神薬によってこの世界から悪霊を完全に駆逐したいと仰せだ」

「禁術の完成を急いでおられるのは、サン・フルーヴ帝都が悪霊に襲撃され、御心境に変化があったのだろう」

「隠遁することもできるのに、逃げようとしめない。今そこで見ているかりそめの家族や、知己を庇ってのことか……」

高位神官の独白に答えるものはなく、場を沈黙が支配する。

静寂を破って、その場にいたジュリアナが勇気を振り絞ったように答えた。

「誰かが困っていたら、人と人のごとく普通の関係として助け合いたい。そう仰っていました」

「なんだと？」

「本当に純粹で、単純な動機なんです」

ジュリアナはファルマの言葉を思い出しつつ呟く。

「人の心を持っていると、ずっとそう仰っています」

「……自分を人間だと思い込んでいる守護神か。変わり者だな」

「神だと思っておられないので、神術にもご関心が薄いように見受けられました。ですから今回、これほどまでに追い込んで神術を究めておられるのは、相当なお覚悟のうえだと思います」

それを聞いていた神官らは、滑稽だと口では言いながらも、笑うものはなかった。

沈鬱な空気の中、ジュリアナはさらに言葉をつないだ。

「それでいいのでしょうか。私たちが、あのお方様に報いることは何もないのでしょうか。人の世に降りられて、献身的に人を癒し、

そして、人の為に御身を傷つけ、最後は齒車に絡め取られ消滅してしまうのでは、人が守護神様を一方的に利用し搾取しているのと変わりません。こんな酷いことってありますか」

ジュリアナは感極まったらしく、はらはらと涙を零し、その場に座り込んだ。

「私は、人の心を解する、強くて優しい薬神様の御世が、この先百年も千年も続けばいいと思います。希望に満ちた優しい世界になると思います。彼を失えばもう二度と、彼のような守護神は現れないでしょう……ですから、彼が私たちを守ってくださいるように」

ジュリアナは確固たる口調で神官たちに訴えかけた。

「私たちも、もつとあのお方の存在を大切にしませんか？」

守護神と人間の、長期にわたる共存と、対等な相互扶助。

謎の齒車の存在を知る高位神官たちには、これまでなかった発想だった。

「そうだな。守護神を守る、考えたこともなかった」

< i 2 8 9 8 3 4 — 2 4 9 6 >

西暦20XX年 5月。

「やあ、中嶋。一年ぶりだ、お前瘦せたな」

「いや、それを言うなら薬谷のほうが……ってお前大丈夫か？ お前それ絶対人間ドックとかいったほうがいいぞ、不摂生していると若死にすることもあるんだから」



「まあ、ここのところ立て込んでいて寝てないだけさ。寝れば戻るよ。調子はどう?」

すっかりくたびれた様子の学友に、彼よりもう一回りやつれた薬谷は声をかける。

米国の大学で理論物理学講座の講師となった学友が一時帰国したというので、学食で昼食をともにする約束を取り付けていた。

彼とは、大学のサッカーサークルをしていた時の友人である。

「やあ、日本のラーメンが懐かしかったら! どんなクソまずいものでも旨く感じるよ」

「もつと美味しい店に連れて行けばよかったな。昼から講義が入ってるから」

「わかってるさ」

学食のコシのないラーメンを、涙ぐみつつ嬉しそうに口に詰めながら、中嶋は研究生生活や日常を面白おかしく語る。留学前から彼は紙とペンを持ち歩いていて、公園のベンチからトイレの中から、どこでもかまわず数式を書いては論文を書いていたことを覚えている。

薬谷の日常生活もたいがい荒廃していたが、彼も負けず劣らず隠者のようだった。

その会話に刺激を受けながら、薬谷はもそもそと牛丼とサラダを食べていた。

「いやあ、こっちの学生は興味深いよ。物理学徒なのにインテリジエントデザインを信じている学生がいるんだよ。議論をしていると、ナイーブで気を遣うんだわ」

「まあ、信仰を持っていないのなんて、日本人ぐらいのもんじゃないか?」

薬谷は特に驚かず、すました顔で茶をすすっている。

「物理学は神の存在を駆逐してゆくものかと思ったら、逆に居場所を突き止めようとしている連中もいるみたいだ。文化摩擦ってやつかね」

「進化論研究者でも信仰持つてるっていうからな」

大学院で米国に留学中、医学薬学分野の学生でもそういったことは掃いて捨てるほどあった。彼らは信仰を持ちながら、何ら矛盾なく創造論と進化論を両立させ、最先端の科学研究に携わっていた。

「そういう薬谷に信仰はあるかい」

「御多分にもれず、俺も無神論者だからね。サイエンスこそ我が宗旨、残念ながら現代科学は神に居場所を与えないよ。だいたい、生命科学にだって神がつけいる余地なんてないしね」

彼が妹と死別したあの時から、薬谷はいかなる信仰もいດこうという気にはなれなかった。奇跡を起こすのは祈りではなく、膨大な努力と知の集約によってでしかできない。

それが彼の信念だ。しかし中嶋は話を続ける。

「現代宇宙物理学は、まだ宇宙の実像を完全に記載する方法を手に入れている。そこに神秘を見出している連中もいることはいるんだ」

「へえ、大儀なことだなあ」

薬谷はまいったというように頬杖をする。

「神の非存在性を論じるには、君ら物理学者の目指している Theory of Everything、万物理論を完成させないといけない。でもそれはたった一つのエレガントな数式になるものかね」

「たった一つでなければ、それは真の姿ではないと思うよ、薬谷。俺は今、この宇宙のすべては、コード化されているのかもしれないと考えているんだ」

中嶋は箸を置き、薬谷にポケットから取り出したスマホを向けた。

「俺たちのほとんどは時間の一次元と、空間の三次元以外を認識することができない。でも高い次元に行けば、できることが増えてゆく。たとえば、このスマホの中で再生されている動画の女優の情報は二次元に圧縮されていて、俺たちがこうやって彼女を見たり、彼女の頬を撫でたりするのに気づかない。動画を逆再生したりしても一時停止したとしても気づかないだろう。俺たちはある意味、二次元に蓄えられたコードを操作して、下位の次元の時間と空間を操っているのだけだね」

調子よく語る中嶋を、薬谷は相変わらずだと感心しつつ傾聴しつつ、話の見当をつける。

「情報は空間、次元の表面にたくわえられているコードである。ホログラフィックな宇宙論のことかい？ M理論での統一はどうなった」

「まあ、そう一筋縄ではいかないのさ。この宇宙は、はるかに大きくて、はるかに高い空間の中に浮かぶごく一部の空間にすぎない。だから神は案外、目の前で俺たちを見て笑っているかもしれないのさ」

だから、学生が信仰を捨てないのは、少し理解できる気がするんだ、と中嶋は笑う。

「もし、その類の”神”に出会ったら、俺たちは降伏するしかないのか？」

「そうだな。反撃しようと思えばこの画面から手を突き出して、同じ時空でワンパンくらわすしかないさ。無理だろうけどな」

シュツ、と言いながら中嶋はスマホの後ろから薬谷に向けてパンチを放った。

「脱線しまくったな」

薬谷が苦笑していると……

「ファルマ！」

鋭い一声で別世界という現実に戻される。

他愛なく笑い飛ばしていたその状況の渦中に、薬谷はファルマ・ド・メデシスとなって直面しているのだ。

ブリュノの声が遠くに聞こえてくる。ファルマはようやく”こちらの世界で”瞳を開いた。

「目を覚ませ！ 失敗だ。創薬神術陣を崩壊させるぞ！」

創薬神術陣の中で意識を朦朧とさせたまま、ファルマは胎児のように体を丸めている。

ファルマの腕をつかみ、猛烈な火傷を負いながら掴んで引きずり落とし、ブリュノが術式を破綻させる。

ブリュノが中断しなければ、暴走が始まっていたことだろう。

ブリュノは霊薬調合の呪いのせいでもう神術を使えないが、神薬創造に挑むファルマを、ほぼ無防備の状態で至近距離で見守っていた。

「天類は諦めたほうがいいかもしれんな、お前がもたん」

「父上、御手に火傷を」

「これしき、大したことはない。私に意識を割くな、実体化に集中しろ」

ブリュノの呼びかけにうなづきながら、ファルマは今も存亡も定かではない地球の、遙かなる場所にいる学友に告げる。

（俺は視えない高位の次元に巻き上げられて、そしてその情報と特質を保有したまま、おそらく下位次元であるこの世界に落とされた）  
指先に力を込めると、動作がおぼつかない。

（中嶋、俺がいるこの世界は、地球の物理学でどう記載すべきだ？）

そんな疑問を抱いている間にも、ブリュノがファルマの、ファルマ・ド・メデイシスとしてのアイデンティティを確認する。

「今日の日付を言ってみろ。お前の名は」

「1148年2月2日、ファルマです」

ファルマは神聖国とブリュノの協力のもと、禁書を読み解き、いくつかの禁術系列の中のうちの最上格、「神薬」の調合を含む禁術を驚異的なスピードで習得していた。

神薬は、天類、宙類、地類という分類があり、天類が最高難易度となる。

神秘原薬の持ち合わせがあるものしか作れないため、ファルマが神聖国とブリュノのコレクションを駆使して現代に顕界させた神薬は以下だ。

地類 再誕の神薬。数日間、瀕死者の命をつなぎ止める神薬。

地類 爾今の神薬。一日間、肉体が霊体化し不死化する神薬。

宙類 庇護の露。甘露を受けた者を一定期間回復させ続ける神薬。

とはいえ、一度にできる神薬は多くなく、数人分を賄うだけしかないうえに、すぐに飲まなければ劣化し消滅する。つまり、用事に調製するのが大原則だ。

そして、ファルマは二つの天類神薬に挑んでいた。

天類 万理の解。あらゆる呪いを無効化する神薬。

天類 千年聖界。悪霊をこの世から千年駆逐すると言われている。

ファルマがこの世界の崩壊を食い止める切り札となるのは、天類にこそあり、まさに全世界が渴望している能力だった。

しかし、神薬とは、薬神の神体を破壊して神秘の薬として作り替えてゆく術といっても過言ではない。

地類の調査は神体の一部が必要というので、髪の毛を使った。そのため、今、ファルマの髪はショートヘアになっている。

宙類の調査は血液を必要とし、何度か貧血で倒れたが、モノにした。

そこまではよかったのだが、天類の調査においては、まったく事

情が違った。

天類の調合では守護神の神体を崩壊させ、一部を強制的に奪われると禁書に記載があるが、何を取られるのか不明。記載がないのだ。調合に挑むたびに、ファルマは確かに大切なものを奪われているような気がする。

それが何なのかは特定できていないのだが、何度も試みてよいものではないことはわかる。

たった一度、成功すればそれで事足りるのだ。

ファルマが失敗した点を振り返りながらうつ伏せになったまま悶々としていると、ブリュノはファルマを案じるように言葉をかけた。

「禁術は神々の術、お前が守護神としての力を得ているのなら、それほどの代償なしに扱えると考えていた……だが、天類の調合は想像を絶していた。命にかかわる、諦めた方が賢明だろう」

「ですが、もう少しで掴めそうなんです」

「致死域を攻めるな、こんなことでお前を失うわけにはいかん。体が朽ちてしまう」

創薬神術陣を起動した反動で全身を白光の粒子に覆われ、ファルマは息も絶え絶えに、体の維持と回復にかかりきりだった。

ファルマの体は今、物質とエネルギーの中間の状態にある。

高度な神術は、ファルマの物質としての性質を不安定化させるようだ。

「今日はもう休め」

「いえ、もう一度……」

ブリュノの配慮に、ファルマは応答するので精一杯だ。

「だめだ。集中を欠いている。さつき、うわごとまで言っていたぞ」  
「……？」

「ブランシュではない妹と喋っているようだった」

ファルマは参ってしまった。

ブリュノが盗み聞きしたのは、薬谷ちゆ、薬谷完治の妹だった少女の名だ。

「……ああ、そんな夢も見ていたのですね」

「そういわれてみれば、神々の世界では、お前にも本当の家族がいて、生活があつたのかと思つてな。まだ子供であつたのなら、実の家族のことが恋しかろう」

「……少しご想像とちがいますね。前世の家族は全員他界、私は天涯孤独の薬学者でした。向こうの世界で三十一、こちらの世界で三年。私の実体は三十四歳ですよ。ですから、子供と憐れんでいたただなくて結構です、父上」

「そうか。三十四か。それは子供扱いできんな。私のことは父でよいのか？」

ブリュノは倒れたファルマのそばに座して、相槌をうつ。

ファルマも懐かしい心境で打ち明けてしまった。

「もう、口が勝手にそう呼んでしまいますので」

本当のことを彼らに打ち明けて、随分気が楽になったと思う。

他人であるはずのブリュノやベアトリスの支援も、息子を装わなくてもよくなつて、大人と大人としての彼らとの会話は、今はそれとして心地よい。

（おや……）



ファルマは立ち上がりうとして目を見開いた。

（ちゆの顔が、思い出せない。俺の親の顔も）

以前はそんなことはなかった、紛れもなく神薬の調合をはじめてからの変化だ。

そしてふと思いついた。

天類の調合に挑むことによって奪われているのは、脳の神経細胞。そこに保持されていた記憶かもしれない。

（仕方がないか……こんなこと、ブリュノさんには言えないな）

ひとつの諦念を、ファルマは静かに受容した。

「とにかく、今日はもう終わりだ、しっかり休みなさい。よいな」

「……はい、父上」

神薬の創造は、ファルマ一人では行わないことを神聖国に約束させられている。

ブリュノは術の成否を見極めて、失敗だと判断した時にはファルマを救出する。

だからブリュノが終わりといえ、その日は終わりなのだ。

大神殿での居室に運ばれたファルマは、神官たちを退出させ、神薬合成で傷ついた体の処置を行っていた。すると、ジュリアナの声が部屋の外から聞こえてくる。

「ファルマ様、失礼いたします」

「あ、今はいらなくて、処置してるから。何か話があるならそこか

ら」

「包帯をお持ちしましたので、入室させてください」

「入口に置いといて」

「お手伝いさせてください」

ジュリアナは新しい包帯を持ち込んでくると、ベッドの上で包帯と格闘していたファルマをさりげなく手伝い、肩にきれいにまいてゆく。

「いいよ、一人でできるから」

「私ももと医療枢機神官ですので、神術薬を用いた処置には慣れています。こういう場面でしかお役に立てませんので」

「……じゃあ、ご厚意に甘えるかな」

神術薬を塗った包帯を、ジュリアナは手際よくファルマの全身に巻いて行く。

びっしりと聖句の書かれた包帯は、崩壊をはずめ、回復を促す作用がある。

「傷だらけですね。この神術は神体も傷つくのですか？」

ファルマの半実体化した身体は物理攻撃では傷つけることはできないが、今回は異例のことだ。心配をかけたくなかったファルマは隠していたかったのだが、ジュリアナにはお見通しだったというわけだ。

「仕方ないね、禁術の最上級の術だし、俺の制御が下手だから。途中で意識が飛んで術の維持ができないんだ……情けないところを見せて、皆を不安にさせているよな。俺がしっかりしないとイケないのに。不甲斐ないと思っているよ」

ファルマは反省の弁を口にするが、ジュリアナはぷるぷると首をふって否定する。

「ファルマ様は血のにじむ努力をしておられますし、天類神薬の創造は、先代も先々代の薬神様も成功なさらなかったのだと思います」  
「まあ、客観的にみればそうだろうね」

彼らが失敗した証拠は、現在悪霊が発生してしまっていることで裏付けられる。

伝承が正しく、もし天類が完成していれば、千年は悪霊を鎮められたはずなのだ。

「迷いや怖れが雑念となっているのかなあ……無心になれてないんだろうな」

前世や、今生への未練もあるだろう。頭の中は煩惱だらけだ、と彼は内省する。

ぼつりと呟くファルマに、ジュリアナはやるせない表情をみせる。

「無心になるなんてそんなの、無理です。もし私が、自分の体を碎いて薬にしないといけないとしたら、きつと怖くて怖くて逃げ出さたくなると思います。そんな恐ろしいことに、何度も何度も挑戦なさっているファルマ様は、勇敢だと思います」

「ありがとう、共感してくれて。その気持ちだけで十分だよ」

ファルマは所在なさげにぼりぼりと頬をかいた。

ジュリアナの慰めと励ましは、ファルマのささくれていた心をすっと繕ってくれたように思う。

「きれいに巻けました。お食事をご用意していますが、こちらで召し上がりますか？ それとも、会食になさいますか？」

「ここでいただくかな。ジュリアナさんも、まだ食べてなければ一緒に食べよう」

「かしこまりました」

ジュリアナは包帯を巻き終えると、新しいロープを持ってきてファルマの肩にかける。ファルマはそれをきつちりと着込み、決して包帯が見えないように整えて帯を締めた。

神聖国での守護神としての正式な装いだが、日本の着物のようを着心地がよくそれなりに気に入っている。

「これでよしと」

居室に運ばれてきた食事を、ジュリアナとともにとる。

黒パンとスープと、魚介のパスタ、そしてマンゴーに似たフルーツ。

神官たちは魚こそ食べるが肉食をせず、修行の一環として質素な食事をしているようだが、ファルマは体調や栄養バランスを考えて普通のメニューにしている。

「神聖国の食事って、魚介が新鮮でおいしいよね。それからこのフルーツも気に入ったよ」

「海が近いですし、果樹園も充実していますから、ファルマ様も今度ぜひ視察にいらしてください。もぎたての果実はとっても瑞々しくておいしいですよ」

神聖国にあって、顔見知りが少ない中で、以前と変わらず接してくれるジュリアナと話していると、ファルマはつかの間の癒しを感じる。

「さて、満腹になったし、一寝入りして午後にもう一度禁術の復習をするかな」

「あの。もしかして人々を悪霊から守り、聖下の呪いを解くために、神薬の創造を急いでおられるのですか」

「そうだよ。時間がないからね。俺にしかできないことだし、一刻も早く完成させたい」

女帝の融解陣が動き出すまで、もう幾何もない。

悪霊というものが存在するこの世界で、地球の科学だけでは悪霊や墓守という超常には太刀打ちできないのだ。

ファルマが扱う地球の科学が、先人たちの連綿と続いてきた知識の上に成り立ち、巨人の肩の上でなしえるものなら、この世界には別の巨人がいたことになる。

世代を超えて受け継がれてきた神術体系は、原理こそ皆目見当もつかないが、この世界の科学に相当してきたものだろう。

それとあればファルマもまた、この世界のルールにのっとり、この世界の巨人の肩を借りるしかないのだ。

「あの、復習であつたとしても、この状態で何かなさると傷が悪化すると思います。そうすれば、禁術の完成はさらに遅れるのではと」  
「んーそっかな。わかった。じゃあ、午後からはデスクワークにするよ」

ファルマはジュリアナの提言を受け入れ、一つ息をついて、ベッドに体を横たえる。

ジュリアナは机の上にどっさりと積まれた書類に気づく。

「この資料が、デスクワークですか？」

「そう。定期試験の問題を作るつもり」

「定期試験？」

「大学の定期試験。たくさん受け持ちの講義があるから、余裕もつて作らないと。学生たちも戦々恐々としているというから、こちらも手を抜けないよね」

ジュリアナはぷつと噴き出してしまった。

「そうでした。あなたは、守護神であると同時に薬局の店主で、宮廷薬師で、おまけに大学教授でしたね。相変わらず、多忙をきわめておられますね」

「いつか、ただの街の薬師に戻って、平穩に暮らせるといいんだけどね」

そのために、今は全てに全力を尽くしているのだ、とファルマはジュリアナに打ち明ける。彼にとっては、最終目標に到達するために必要な努力らしい。

「ファルマ様のいらっしゃるお店が、ずっと続けばいいと思います」

ジュリアナがそう答えた頃には、彼は静かに寝息をたてていた。

## 7章1話 定期試験前の告白

1148年 2月5日。

サン・フルーヴ帝国医薬大学校の第一講義室にて。

「それでは今日は、冬の定期試験についてのガイダンスを行います」

教壇に立つファルマは、講師陣数名とともに定期試験のガイダンスを行っていた。

シラバスを手に、心なしか緊張感に包まれている全学部一期生の学生たちの顔を見渡し、黒板に試験日程を書き付ける。

「皆さんは一年生なので、教養科目ですね。定期試験は一週間かけて行います。試験科目と範囲は私がいまここに書いた通り。すべてマーク形式と記述形式で行います。試験問題の難易度は高めです」

難易度を聞いてどつとざわめく講義室。マークシート式にしたのは、採点を楽にするためだ。回答を記入したフィルムを重ねれば簡単に採点できる。

「これから必死で勉強してください、厳しいことを言うようですが、今のままの理解度だと半数は留年します」

ファルマはガイダンス内容を要約したプリントを学生たちに配布する。

「プリントに書いてある講義は必修ですので、単位を落とすと即留年になります。また、必修を落とさなかったとしても全講義の三分

の一を落とすと留年です。留年したら、もう一年しっかりと学びなおしてください、救済措置はありません」

「半数は留年って、そんなことあっていいのかよ」

「総合医薬学部以外は？」

「必修をとれないと全学部で留年だよ」

「……いきなり留年は嫌だよ。学費は無償でも生活費はかかってるんだ」

要領のわからない全学部の一期生たちは震えあがっていた。

何しろ、カリキュラムの刷新によって過去問がなくなったのだ。

それまでの帝国薬学校では、先輩後輩が連携して過去問の作成などを行い、試験もそれほど難しいものではなかった。今年から様相が一変してしまっている。ファルマは彼らに追い打ちをかけるように告げる。

「また、試験時に不正行為をした場合も、点数にかかわらず即留年です」

抜きうちで行われる小テストの難易度が高すぎたことで、一気に戦意喪失してしまった者も多かった。

留年したとしても学費は無料なのと、日本の医学薬学部と違い何年度留年しても放校にはならないため、学生の懐が痛むことはないのだが、やはり進級が一年遅れるというのはやる気を奪われるものであり、学生の家族を落胆させることになるし、なにより子供教授の授業についていけないというのは、自尊心をへし折られる。

「何か質問は？」

学生たちはしーんとしていた。どの学生も、心なしか青ざめてみえる。



今日も講義室最前列に鎮座する、エメリツヒ・バウアーを除いて。

「ええと……皆さん顔が暗いですね。あ、バウアー君は元気そうですが。分らないことがあれば、いつでも質問に来てくださいね。わかりやすい講義を心掛けてきたつもりですが、ついていけない場合は講師の指導が悪かったのでしょうか。個別に指導しますので、恥ずかしがらずに相談してください」

脅しすぎたかと気の毒になったファルマは、優しい口調で、さりげなく助け船を出した。

学生を留年させることが目的でもなければ、落ちこぼれを作るつもりもない。

ただ、試験内容を甘く見てほしくない。しっかりと基礎を学んでもらい、全員進級を目標とするところである。

「メデイス若教授のテストが憂鬱だわー、必修単位取れる気がしないわー。そもそも試験範囲、鬼畜すぎない？」

「パパ・メデイス総長の単位よりきついって話だよな」

「試験問題、事前にわからないものかしら。占いが得意な子がいたわよね」

「占いで当てるのは不正行為だわ」

「そうそう当たるもんかよ……」

学食の席で各所から聞こえてくる学生たちの嘆きを、エメリツヒとジョセフィーヌ、そしてジョセフィーヌとよくつるんでいる、総合薬学科の平民学生、ステファニー・バルベが耳にいれていた。それを聞いたエメリツヒの言うことは、

「どいつもこいつも定期試験ごときで右往左往して、嘆かわしい。講義と実習しかしていないだろうお前らは」

自主的にファルマの研究室に入り浸り、彼からプロジェクトを任されて日夜研究に取り組んでいるエメリツヒからすれば、定期試験で悲鳴を上げるなど、甘えているように見えて仕方がないのだ。

そこを、一般学生の立場でステファニーが弁護する。

「だって、ド・メデシス教授の講義が一番難しいじゃない。ほかの薬学体系と全然違うんだもの、覚えることも多すぎなのよ。基礎医学概論、医学薬学生物学、応用数学、物理化学、有機化学も全科必修でしょ？ さらに専門科目！ この調子だと総合薬学部だけ卒業率が悪いんじゃないかと思うわ。ド・メデシス教授は薬師試験の合格者を増やしたいなんて言ってたけど、逆効果じゃないかしら」

「ああー ところが難しいんだ、学生のレベルに合わせて、本来言

いたいことの十分の一も話しておられないし、練習問題も基本的なものばかりだったぞ」

「ひい、エメリツヒ君の意識が高すぎだよ……さすが無勉強で満点とるだけあるよう」

ステファニーは引いたというように肩をすくめる。すでに一級薬師でありいまだに学部いちの成績を譲らないエメリツヒは、当落線上にいる学生たちにきわめて冷やかだ。彼はファルマの教科書に書いてあることなら完璧に答えられたため、抜き打ち小テストでも満点街道を突っ走っては他の学生の反感をかつている。

「まあまあ。すべての学生が君みたいにできるわけじゃないわ。君は首席だし、ついていけない子が怠惰に見えて許せないのかもしれないけど、それぞれ理解度は違うのよ」

ジョセフィーヌもエメリッヒにやんわりと忠告する。

ジョセフィーヌも、教員たちの間では総合薬学部でエメリッヒに次ぐ秀才としての評価が定着してきた。彼女はもともと獣医学の知識があるので、人体の薬理作用に対する理解も早く、スポンジが水を吸収するように学んでゆくし、好奇心も強かった。

無資格で平凡学生、成績も普通のステファニーは、そんな二人に委縮している。

「とにかく、できないやつは留年すればいい。生半可な知識で進級されても迷惑なだけだ。だいたい、出席点やレポート点もあるというのに、何が厳しいのやら」

「体調不良で休んだ子もいたじゃない」

「今年はグリップも流行ってるし、欠席は仕方なかった子もいるわよー」

ステファニーが弁護し、ジョセフィーヌがストイックすぎるエメリッヒを宥める。

「早く試験期間など終わってしまえばいい、騒々しいったら。では、俺は先に研究室に戻るから」

「わかったわ」

エメリッヒが席を立ったところで、女子の二団が彼を取り囲んだ。

「あ。いたいたー、エメリッヒ君ー、ねえノート貸してよー！一緒に勉強しよう！」

「うるさい、お前らに貸すノートはない！勉強というのは孤独にやるものだ」

「ねえったら、分からないところがあるのー！」

エメリツヒは撫で切りにして突っぱねていた。

エメリツヒが追い回されているのをファルマとエレンが遠目に目撃していた。

「またエメリツヒが囲まれてる。なんで俺のところに直接質問に来てくれないんだろうな……」

「あら、ファルマ君もあんなふうに女子に囲まれないの?」

「男女問わずわかっていない学生に囲まれたいよ。そうすれば一人でも落単者を減らせるかもしれないだろ」

女子にちやほやされたいのかと思いきや、教員として普通すぎる返答をする。

「ファルマ君のもとに個人で質問にくるのは、学生には敷居が高いつて話を聞いたわよ」

「こわくないし優しく教えるよー」

「ふふ、残念そうね。試験問題はもう作ったの?」

「神聖国で隙間の時間に全部作ってきたよ。解答案もちゃんとできてる」

神聖国ではネット環境があるので医学薬学情報の取得がたやすく、ファルマがうる覚えだった部分もきちんと補強して、充実した試験問題を作成することができた。

「ところでファルマ君って、神聖国で何やってるの? エリザベス聖下の命令での薬師としての任務なの? お師匠様も神聖国に出張なさったきり、暫く戻ってこれないわよね」

「まあ、父上と共同で仕事をしていてね。あんまり詳しくは話せないんだけど」

「宮廷薬師の仕事を詮索してはいけないというのは、弁えているわ。」

「ただ」

ファルマはエレンには心配をかけまいとして、神薬創造の件は話していなかった。

彼は薬神杖を使って神聖国と帝国を週に数回往復しており、一方でブリュノは神聖国にとどまっている。天類神薬の創造は、相変わらず完成には至っていない。

天類の創造に挑むごとに前世の記憶が消えてゆくことに関して懸念を抱いた彼は、すでに前世の主要な事柄についての記録をこと細かくつけ終わっていた。

そうすると、消えてゆくのは映像記憶だけで済む。

医学薬学の知識が侵食されてしまったとしても、神聖国のネットで随時正解を参照できるので問題ない。彼のアイデンティティにまつわる記憶は、文字情報として保持した。

以前のように、闇雲に訓練をしてはいない。

ブリュノの体調管理のもと、挑戦は一日一回までと決めている。

一人ではやらないのも徹底している。

エレンはファルマの正面に回り込み、じっとファルマを見つめる。眼鏡をかけなくなった彼女は、心なしか以前より瞳がはつきりと大きく見え、直接感情が伝わってくる。

「時々君のことを診眼で見てるけど、神聖国から戻ると体調が悪化してるみたい。何か危険なことをしているの？」

「……長時間の飛翔の疲れじゃないかな」

「髪も何でそんなに短くしたの。まさか神秘原薬にしちゃってない？」

「……えっと」

「ええ……？ そんなことしてるの？」

エレンが診眼を手に入れファルマの体調を把握できるようになってから、彼女は折につけ心配の言葉をかけてくれる。

そして、彼女の指摘がいちいち凶星であるために、ファルマも安易に隠しだてできない。

「そ、そういえばエレンも午後から神術実習のテストをするんじゃないかってっけ」

ファルマは話題を切り替えることにした。

午後には神術実習講座の教官であるエレンも、試験対応に追われる。

「そうなのよ。初テスト！ 楽しみだわー」

「エレンも病み上がりなんだから、傷が開かないようにね」

「わかってるわ、今日は私は何もしないわよ。見てるだけ」

「俺も見せてもらおうかな」

ファルマはひとまず話題がそれたのでよしとして、エレンのテストに付き添うことにした。トレーニングウェアに着替えを済ませて神術実習場に集まった学生たちを集め、エレンがブリーフィングを行う。

「じゃ、体調は万全にしてきたわよね？ 神力切れや体調不良の人がいたら、追試を認めるけど、どうかしら」

エレンが出欠を確認し、神力計を握らせてコンディションを把握する。

各属性ごとに課題の神術のテストを行い、それを合計して100点満点で評価してゆくのだ。ファルマも学生の呼び出しや神術の判

定の手伝い、合計点や技難易度のバイアスをかけた計算をする。

エレンは集計したファイルを抱えて発表する。

「みなさんお疲れさまでした。では早速、上位から成績を発表していくわ。1位 エメリッヒ・バウアー 99点」

「2位 アレクサンドル・ベルトラン 88点」

「3位 エマニユエル・ピュスロー 79点」

「4位 ジョセフィーヌ・バリエ 78点……」

エレンは順に名前を読み上げ、21位まで発表し終えた。

エメリッヒが不動の一位成績というのは、講義、実技科目にかかわらず同じだ。

成績を聞いた学生から、悲喜こもこもの声が聞こえてくる。

「……つと、ここまでが合格ね。ここから下が不合格よ」

赤点をとってしまった学生は震えながら青くなっていた。

「これで成績発表は終わりだけど、何か質問や不明点はあるかしら？」

するとエメリッヒがエレンの目の前で手を挙げまくっている。

「ボヌフォワ先生、納得がいきません。どうして私は満点ではないんですか、神技は完璧だったと思います」

「あら、詠唱で囃んだから減点したのよ。発動詠唱を明確にしないと、誤発動につながるわ」

「断固として囃んでません。あれはサン・フルーヴ帝国語で詠唱したので訛っていただけです。私の母国語で詠唱すれば完璧だったはず、減点があつたなど汚点です。受け入れられません」

完璧主義のエメリツヒは、学生の立場では少々面倒くさいタイプの学生だった。

「はいはい、じゃああとで追試においで。ちゃんとできたら更新してあげるから」

「不合格者も追試を受けさせてもらえますか？」

「構わないわよ。じゃあ、ほかの科目のテスト勉強頑張ってね」

エレンは案外、学生に甘かった。

エレンの実習は必修ではなく、進級に影響しないのでお気楽なものだ。平民学生は床運動かマラソンのテストで単位が振替されており、こちらは不合格者は出ていない。

「私も床運動かマラソンで単位を振替してもらってもいいですか？」

「別に神術でも体育でも、課題がこなせばどちらでもいいわ」

実習で赤点をとった貴族学生が、平民学生と同じテストを希望する一幕もあり、エレンは彼らの要求に応じていた。

試験対応に追われていた数日後、ファルマは教授室のデスクの書類の位置が変わっているのを見つけた。それを彼は目ざとく見つける。彼は細かい男だった。

（ん。誰かがデスクに来たな）

「ゾエさん、机の上の書類を動かした？」

「いえ、書類箱に入れた以外は一切触れていません」

秘書のゾエに確認しても、来客はなかったし、教授室の机は触つ



ていないという。

ファルマはもしかやと気づいて、厳封していた試験問題を確認する。

（試験問題が一枚足りない。やられた）

もし盗まれていたということなら、もう一度試験問題を作り直さなければなくなる。平等なテストのためには、見て見ぬふりはできない。

（うちで管理しておくべきだった）

ファルマはしかし抜かりなく、書類入れに付着していたサンプルを採集し、処理して分析にかけた。

その結果を確認し、彼はひとつため息をつく。

（彼女が。名乗り出ては、くれないのかな……）

次の時間の講義の間、彼女がテスト問題を盗んだかと思うとやるせなかった。

だが、ファルマはまだ言い出さなかった。

講義の終わりに、彼はどっさりとプリントを配布する。

「皆さんの試験対策にと思いまして、想定問題集を配ろうと思います」

ファルマは時間をかけて作った問題を、惜しげもなくすべて配りきってしまった。

問題を配布しながら、一人一人の表情を観察する。

その中で、不自然な動きを見せた学生を発見した。

（やはり彼女か。ナタリー・ブロンデル）

ファルマは彼女の動きをよく見ていたが、ファルマの視線を感じたのかふと視線が合った。

その直後の彼女の挙動は明らかに不自然で、生体資料の分析結果を裏付けるものだった。

「ブロンデルさん、ちょっと話があるんだけどいいかな」

「あ、はい……」

ファルマはついに彼女に声をかけた。

ブロンデルを施設のされた薬草園の温室に呼び出し、ファルマは中のベンチに座らせて尋ねる。

「何故呼び出されたかわかる？」

「いえ、まったく」

「あれが模試でがっかりしたようだけど、もし本試験にしていたら君は失格だったよ」

かまをかけた物言いをすると、ナタリーはぎくつとする。

「な、何のことでしょう」

「試験問題の保管庫の遺留物から、君のDNAが出てきた。微物からの個人の特定方法は、教えたはずだ。教官を出し抜くならもっと巧妙に。不正行為を認めるかい？」

「は……はい」

「不正行為をした者は、未成年の場合は親御さんに連絡をしなければいけないことになっているんだけど。君のお母さんは宮廷薬師フランソワーズ・ド・サヴォワ師だよね」

学生の履歴書についてはファルマもきちんと読み込んでいたが、父方の姓を名乗っていたため、この事実気付いたのはつい先日のことだ。

「そうです」

「……連絡しないから、次はちゃんと実力で試験を受けるんだよ」

「……言えはいいいじゃないですか！ 母に告げ口すればいいじゃないですか……不正行為は即留年って、仰っていましたよね」

彼女は目に涙をためて言い返した。

ファルマはぶつけられたままの彼女の感情を受けとめる。

「だから。そうならないようにするために、あれは模試にした。私はフランクソーズ師を尊敬しているし、同僚として彼女を悲しませたくない」

「馬鹿にするのはやめてください！ 十歳で宮廷薬師、十二歳で教授、十三歳でお父上や私の母も抜いた筆頭宮廷薬師。同じ宮廷薬師の子として生まれたのに、あなたはまぎれもない天才で、かたや落ちこぼれ。人生って不公平だと思います」

「人の生い立ちや経歴を比較するのは意味がないよ。俺と君は別の人間で、違う人生を歩む。同じになるわけがない」

ファルマは答える。

彼は自分を天才だと思わない、それなりの努力はしてきたつもりだ。

「家のしがらみはどうでもいい。どこの家の誰だなんて関係ない。君が今本当にすべきことは、定期試験を突破することじゃないのか」  
「……そう。でも、私には薬師としての才能がないんです」

現実を突きつけられたからか、ブロンデルは語勢がしばむ。

「才能か……」

「私、守護神からほとんど神力をもらわなかったんです。それに、こんな頭の出来で……親と比べられていつも陰口を言われているの知っています。母も恥ずかしがっていると」

「そうなんだ？」

「母は私の話をしたことがありますか？」

「聞いたことがないけど、もともとフランソワーズ師はプライバシーを一切お話にならない方だよ」

確かにフランソワーズから、娘がいるという話は聞いたことがない。

そして、ファルマが彼女を指導しているということも知っている筈だが、触れてこなかった。

確かに、先日のエレンの神術テストでも、彼女は落第してしまっていた。

「生まれつきの神力が少ないってことは、守護神である薬神から愛されなかったということなんです。だから、どれだけ努力しても無駄だと思います、見捨てられた者としての惨めな人生が待っているんだと思います」

彼女の理屈もわからないわけではない。

生涯、授かった神力量はどんなに努力を重ねたとしても増えないからだ。

「では、神術を使えない人たちはどうなる？」

ファルマの指摘に、彼女は言葉を詰まらせた。

「私たちに備わった神力は、自分のためのものじゃない。神術を使える人が、使えない人を守り、助けるための力だ。そこに多いも少ないも、生まれつきどうだというのに関係ないだろう」

「ではお伺いしますが、教授は、世のため人のためにと想着て神力を使っているんですか？」

「少なくとも、私はそのつもりだよ」

ファルマは恥じることなく答えた。自己の利益のために神力を使うことが悪いとは思わない。

だが、それだけでありたくない、とファルマは考えている。

彼女が感情的になってしまっているようなので、ファルマは一旦落着かせる。

「ひとつ大事なことを忘れていないか？ 君はこの学部に入るための、何十倍もの難関だった試験を既に突破しているんだ。カリキュラムについてこれると思えなかった学生は、最初から入学を許していない」

「……っ、それが何ですか」

「だから、普通にやればできる。模試を解いてみて、類似問題をやって、間違った部分を復習して、わからなければ私に質問に来る。それが対策のすべてだ。君は自信を喪失しすぎだ、卒業できそうにない学力の学生は最初からこの学部に入れてない。神術実習ができれば、体育で単位を振替すればいい」

彼女は一つ一つ、今後の見通しを示されて放心状態になっていた。

「だからあとは、君のやる気次第だ。理解できなかったなら、後でおいで」

ファルマはそう言い聞かせて、次の講義の予鈴が鳴ったので立ち去ろうとした、だが……。

ブロンデルはベンチを立ち上がって、泣きじゃくりながらうたえる。

「覚えられないの。ここ最近、何も覚えられなくなってしまったんです！」

「どうのこと？」

「記憶が、どんどん消えてしまってます。助けてください！」

はっとしたファルマは即座に診眼に問う。

そして、彼女の頭に強く赤い光をみとめたのだった。

不定形で、境界が明瞭でない。大きさは三センチほど。

（脳腫瘍か）

ファルマは、忘れかけていたトラウマが蘇るのを感じていた。

それは、彼の生前の妹の命を奪ったものと同じ病だった。

## 7章2話 来年はこない

ファルマは入学時、学生たちの健康診断に診眼を使わなかったことを後悔した。

定期的に診ていれば、ブロンデルの脳腫瘍については絶対に見逃さなかったであろう疾患だ。

ファルマが診眼を使う動作はやはり不自然で、日常の中で取り入れるのが難しい。

それで控えていたのが仇になってしまった。ファルマが診眼を使っている間、ブロンデルは不思議そうに彼をのぞき込む。

「先生……？ 目が霞むんですか？」

「違う、ちょっと動かないでいてくれ」

（固形腫瘍で、真っ赤、前頭葉に浸潤しているな。境界がはっきりしないというのは浸潤してるのかな。悪性度が高そうだ。腫瘍径は2cmほどある）

この腫瘍のせいで認知機能が低下し、やむにやまれずテスト問題を盗んでしまったのかもしれない。

などと考えれば考えるほど、事情を聴かずに彼女を責めたのは間違っていたのかもしれない。

そんなことを考えながら、悪性腫瘍を検索してゆく。

（”髄芽腫、神経膠腫”）

グリオーマ  
神経膠腫のほうで反応がみられた。

ファルマはさらに細かい分類を行いつつ、悪性度を見極めてゆく。

グリオブラストーマ  
（”膠芽腫”）

膠芽腫で間違いないようだ。この膠芽腫という腫瘍は、脳のグリオ細胞から発生し、脳腫瘍の中でも最悪の悪性度といっている。

腫瘍の境界がはっきりとせず、手術による全摘出は困難で、外科手術、化学療法、放射線療法などの集学的治療を行ったとしても根治するための有効な治療法はなく、平均余命は約十四ヶ月。

五年生存率は、わずかに八パーセント。

彼の妹であつたちゆの命を奪つた病気だつた。

神薬創造の代償として、もう今となつては顔も思い出せない彼の妹の葉谷ちゆ。彼女は手術、化学療法、放射線治療の壮絶な闘病の末に亡くなった。

ファルマの手持ちの治療法を頭の中で広げてみる、まずは標準治療を視野に入れる。

地球でならば第一にやるべきは開頭手術。脳手術に関しては、帝国医師団もファルマもまったくといって経験がない。

ノバルート医薬大では実験的な手術が行われているというが、成功率は惨憺たるもので、術後は数週間以内にほぼ全員死亡している。神聖国で手術の術式情報を取り寄せ、帝国いちの外科医であるクロードの協力を得たとしてもやるべきではないだろう。手術実施日が彼女の命日になる。

今の帝国医学部医学科に、脳手術を任せられるほどの信頼はない。しかしこうしている間にも、刻一刻と彼女の脳の機能は損なわれてゆく。

手術を避けるとすれば放射線治療。放射性物質は創造できないこ



ともないが、線量の管理ができそうにない。この案は保留。

膠芽腫の標準治療としての化学療法は、手術の直後から放射線治療と化学療法が併用して行われる。

（初回治療薬としては、細胞障害薬であるテモゾロミドが、再発例に対しては、アバスチンやニムスチンなども検討されるが……）

ファルマはめぼしき薬を診眼にはかると、すべて効果は限定的。増殖は押さえられるが、それは一時的なもので完治しない致死性であるというインジケータ、腫瘍に宿る赤い光は頑として消えないのだった。

非切除で化学療法か、その他の治療法ということになる。

（これを確実に治す神薬があれば……）

短期間の鍛錬の末に神薬を扱えるようになったファルマだが、それは対悪霊の効果を狙ったものが多く、一時しのぎ的なものが多い。レシピは存在していても、神秘原薬が不足していることから、万能薬的な効果を持つものの創造には至っていない。

難治がんで死を迎える人の命を少しばかり延命する、などのことしかできず、根治には至らない。彼女の顔を見ているうち、ファルマは泣けてきた。

（俺の存在ってなんなんだ。神薬まで合成できるのに、彼女を助けられそうにないだなんて……）

また、この病に負けてしまうのだろうか。

二度も同じ喪失をするのか、そんな心の声がファルマを苛む。

彼女は偶々ファルマの教え子となった女学生にすぎない、だが…

…だが、彼女を助けられなければまた過去に捕らわれたまま、前に進めない。

「私、何か病気なんですか？　今、何を……」

（確実に細胞を殺すものでないといけない。俺は脳外科の手術も放射線治療もできない）

思考の渦に飲み込まれて硬直しているファルマに、ブロンデルが声をかける。

「次の講義が始まるので戻ってもいいですか？」

「ああ、わかった。とりあえず、次の講義へ行っておいで。また時間をみて話をする」

「はい……今日は取り乱してすみませんでした。落ちるかもしれませんが、ちゃんと試験を受けます」

去ってゆく彼女の歩行を見守っていると、何もない場所で何度か躓きそうになっていた。

それを危なっかしく見ていたファルマは杖を抜いて浮遊し彼女に追いつき、ほんとブロンデルの背中に触れ、神術をかける。

（”始原の救援”）

ブロンデルはファルマの接触に気付き、のけぞるようにした。

「な、何ですか？」

「あ、いや。激励のつもりで」

「心配がしませんでしたけど、走ってきました？」

始原の救援は、瀕死の重傷者に対して観面に効く。

だが、脳腫瘍の進行を抑えることができるかどうかはわからない。それでも、保険のつもりでかけておいた。幸い、始原の救援をかけた後、彼女の歩行のふらつきは抑えられているようだ。

「おどかさないでください」

「ごめん」

よく考えたらセクハラ寸前だったか、と思いファルマは頭をかく。ファルマは治療方針を欠いたまま、小さくため息をついて彼女を見送った。

（今の状態で試験を受けて、その成績を評価されても不本意だろうな）

ほかの教授にも彼女の試験結果が悪ければ温情措置を根回ししておこう、腫瘍が存在することによって学習に差支えがあるようなら試験は中止に……などとファルマは配慮した。

ファルマは教授室へ戻りPCを立ち上げ、神聖国でDLしコピーして蓄えておいた資料の中から、脳の機能局在を示す脳地図を引っ張り出してくる。

「腫瘍はこのあたりだったか」

彼女の脳腫瘍は、前頭前野に存在する。

思考、運動能力、意欲をつかさどる脳の司令塔といってもよい場所、そこに2cmほどの腫瘍が居座っている。

「新しいことが覚えられないと言っていたよな……」

それは記憶をつかさどる海馬に損傷を受けた場合に現れる症状なのだが、彼女の腫瘍の位置とは異なる。

「彼女の主訴によれば、集中できずに覚えられないという方が正確か。そして、テスト問題を盗んでしまうということは、善悪の判断もできない状態にあると。これは本人も辛かるうな」

彼女の脳の損傷に対するリハビリは次の段階で、一刻も早く腫瘍を治療するのが先決だ。

（腫瘍を完全に摘出できればいい。でも、この腫瘍は脳領域に染み込むように広がっている）

化学療法で効果のある薬がないと判明した以上、ファルマは腫瘍を切除せず化学療法を除いたアイデアを考えた。

「化学療法が効かないなら、物理的に死滅させるまでか」

腫瘍に栄養を送っている血管を全部閉塞させて腫瘍を兵糧攻めにし壊死させる。

抗体で腫瘍を標識して、標識物質を狙った消去能力で腫瘍ごと破壊する。

ファルマの手を脳に突っ込んで、腫瘍を両手で握りこみ、その手の中で毒物や、カルシウムなどの細胞死を引き起こす物質を高濃度で処理する。

範囲指定でDNAを構成するリン脂質などを消去をかけ細胞死を誘導する

腫瘍を死滅させたとしても、気を付けなければならないことはある。

一気に腫瘍を破壊してしまうと、死んだ細胞から放出された大量の核酸や細胞の分解産物が血中にあふれ出し、それが原因で腫瘍崩壊症候群というものが生じる。

このため何回かに分けてやるか、領域指定で消去してしまったほうがいい。

どれも、今のファルマならば実現可能なアイデアのはずだ。

ただ、スポンジの中を浸透するようにこの腫瘍は細かく広がっていて、浸潤した細胞まで破壊できる完璧なものではない。

（だからといって一刻も放っておく時間はないぞ……）

この腫瘍の進行は非常に早く、一週間や二週間で大きさが倍になったりもする。

できることなら、今日にでも処置をしてしまいたいのだ。

「教授！ お疲れ様です！」

考え込んでいたファルマに、ゾエがお茶と茶菓子を出してくれた。

「今度は何のお悩みです？」

「ちょっと難しい患者の治療法を考えていたんだ」

「私ではお力になれませんよね。せめて肩でもお揉みしましょうか」

ゾエがファルマの肩に手を添えて揉んでくれようとする。

「や、気持ちはありがたいけど今はいいよ」

「私、ここから教授が大温室で女生徒にスキンシップを図っておられるのを見ましたが、患者さんというのはあの子ですかね」

どうも温室の中の出来事を、教授室から目撃されていたらしい。

「言い方があれだな。どうしてそう思うの」

「教授のほうから女子生徒に接触するのは珍しいと思いましたので、治療か何かしておられるのかと」

「鋭いんだな」

「誰にも言いませんからご安心ください。教授秘書ですから」

ファルマは、セクハラ疑惑を晴らすために、ブロンデルの置かれた状況を簡単にゾエに打ち明けた。

その話を、図らずも立ち聞きしていたものがいた。教授室の隣の研究室にいたエメリッヒだった。ドアが開いていて、丸聞こえた。そして、運が悪くジョセフィーヌもやってきた。

「教授！ ブロンデルがどうしたんですか 詳しく聞かせてください！」

（しまった、エメリッヒとジョセフィーヌがいたか……）

エメリッヒは特にすっかり研究室の住人であり、彼が研究室にいることは日常になっていたのでファルマも気に留めていなかった。ファルマはやってしまったと額をおさえる。

「ブロンデルが脳腫瘍なんですか……？ それは悪性のものでしょうか？」

エメリッヒが悲鳴にも近い声を上げてファルマに詰め寄り、次の瞬間には隣の部屋から彼のバイブルである教科書をとってきて脳腫瘍の頁を開いてファルマに見せに来る。

そして、ジョセフィーヌも近寄ってきた。

「どれの疑いですか？」

ファルマが渋々指をさすと、彼の表情は固まった。

エメリツヒは膠芽腫の恐ろしさを知っているからだ。

「なんてことですか、家族性致死性不眠症の俺より状況が悪い……生存期間の中央値は、一年以内だったはず」

「そう、その膠芽腫なんだ」

「最悪、一年しか生きられないんですか、あいつは。あいつには来年がないかもしれないなんて」

エメリツヒは、脳のどの領域にどの大きさで存在するのかを尋ねた。

そして返ってきたファルマの回答、その言葉を一つ漏らさず、メモをとってゆく。エメリツヒはまいったというように呟く。

「……教授、今日はもう実験は終わったので早く切り上げて帰ります」

「おつかれさま。分かっていると思うけど今の話はまだ」

「はい、口が裂けても他言しません」

ジョセフィーヌも「私もです」と青ざめた顔をしながら答えた。

ファルマはエメリツヒとジョセフィーヌの口の堅さを信頼していないわけではなかったが、特にエメリツヒは顔に隠せないタイプなのでわかりやすすぎる。

治療法が定まらないうちにブロンデルに気付かれてしまっでは意味がない。

「教授はこの腫瘍をどうなさるおつもりですか」

ジョセフィーヌがおそろおそろ尋ねる。ジョセフィーヌも知る限り、治療法はないに等しく、絶望的なのだ。

「何をするかは考えているけど、そのままにはしておかないよ。それに、生存率は0%ではないからね」

「そのお言葉が聞きたかった。俺も治療法を考えてみます、外科的切除が最善ですが、それも考えておられますか？」

「ああ、あらゆる可能性を視野に入れている」

「では、俺も治療に参加したいです。失礼いたします」

エメリッヒはファルマの言葉を耳に入れると、決然とした足取りで教授室を出ていった。

「わ、私も……何かできないでしょうか」

「ジョセフィーヌさんは彼女に勉強を教えてあげてもらえると嬉しいかな」

「わかりました。精一杯教えてみます」

ジョセフィーヌは力強く頷くと、研究室へ引っ込んでいった。

ファルマはこれまで、彼らを難治性疾患の治療のための戦力だとは思っていなかった。

だが、すでにエメリッヒは現代薬学を学びはじめ、地球の医学ではまだ治療法の見つかっていない遺伝性疾患の克服への道を歩み始めている。

エメリッヒは特に、致死的な脳疾患の保因者として、彼女に共感するものがあるのだろう。

「そうだな、頭脳は多いほうがいい」



ファルマは教え子の成長に気づかされ、認識を改めるかのように大きく一つ頷いた。

エメリッヒは図書館で試験対策をしている学生たちの中に、ブロンデルの姿を見つけた。

大股で近づき、どすんと隣の席に座る。ブロンデルは他にも席があいているにも関わらず隣に座ってきたエメリッヒに圧倒されたのか、肩をすくめた。

エメリッヒはただでさえ大柄で、粗野な印象を受ける青年だ。しよっぱなからファルマに神術試合でケンカを売るといふ問題行動も起こしている。

その彼がずいずいと迫ってくると、ブロンデルでなくても怯む。

「何よ？」

「これをやるから、絶対に試験を落とすな」

エメリッヒは数冊のノートを、ばさつとブロンデルに押し付けるように手渡した。

学年一の秀才である彼が、ほかの誰に請われても誰にも貸さなかったノートだ。

「やるって……これがなかったら、あなた勉強どうするのよ」

「今テストされたって満点に決まってる」

真顔で答えるエメリッヒに、ブロンデルは面食らった。

劣等生の前で自信満々に言ってしまうところがまた嫌味で、カチンとくる。

「お前、何回か講義に出なかつただろ。だから、抜けていた講義のぶんだ。やる」

「私がいつ出席しなかったかまで覚えているの？ あんた、最前列にいたのに」

「講義中は気が張っているからな、どんな些細なことにも気づくさ」

さも当然のことのように答える秀才に、ブロンデルは苛立ちをぶつけた。

「神経質なのね……何よ、私を笑いにきたんでしょ。ばっかみたい！ あんたのノートなんて、願い下げよ！」

「俺が勉強に命をかけているのは、文字通り命をかけているからだ」「は？」

「持てる技能と知識をもって全身全霊で戦わないと、俺は死ぬんだ」  
ひとつ深呼吸をして、エメリッヒはまっすぐな視線でブロンデルを射抜いた。

「俺もお前も、誰だつて」

エメリッヒは指先を彼女の額に突きつける。

「わずか先の未来を確実に生きていることすら、人間には難しいんだ。今日できたことは明日はできなくなるかもしれない、明日はどうなっているかわからない」

「……何を自分に酔ってるの？」

ブロンデルは気持ち悪いものを見るような顔をして、目をしばたかせる。

「だから俺は、今日のみを全力で生きている。その積み重ねが、俺を生かしていく」

「何がしたいのよ」

「明日死ぬと思っただけ毎日を生きた」

エメリッヒはぶっきらぼうに言い捨てると、その場を去っていった。

後にはブロンデルと、彼のノートが図書館机の上に残された。

「滔々と自分語りしてノートを押し付けて……いけすかないわ、あいつ。明日、このノートを突き返してやらなくちゃ」

勉強する気をそがれたブロンデルが机の片づけをして図書館の外に出ると、ジョセフィーヌと鉢合わせをした。

「こんばんは、ナタリー・ブロンデルさん。試験勉強お疲れ様。これから予定は？」

「……寮に帰るけど」

「よかった！一緒に帰る！」

ジョセフィーヌは肩をたたき、強引に誘う。

「ね。うちにこない？今日はパパもママも出張で、召使いも暇を出して誰もいないから、泊まっていったっていいわ、それに、一緒に試験勉強しましょうよ。一人で勉強するより二人でやったほうがかどるわ」

ブロンデルとジョセフィーヌはそれほど仲の良い学友ではない。急になれなれしく話しかけてきて、家にまで誘われるのは、違和

感がある。

「なんで？ エメリツヒ・バウアーといい。あんたといい、もしかして、教授の差がね？」

「同じ学部学科で、クラスメイトなんだから、気にしたっていいじゃない」

「……余計なお世話よ」

「ほらほら、寮に帰るだけなんでしょ？ うちにいらっしやいよ、朝仕込んだおいしいシチューがあるわ」

ブロンデルは半ば引つ張られるようにしてジョセフィーヌの家についてきた。

ジョセフィーヌは部屋で所在なさそうにもじもじとするブロンデルを席につかせ、パンとシチュー、そして焼き魚の夕食をブロンデルにふるまい、二人でおいしく食べた。

「ごちそうさま。じゃ、私は帰るわ。もう遅いから、お邪魔しました」

「えー、これから一緒にテスト勉強しようよ、どうせ家に帰ってからも勉強するんでしょ？」

テスト前の学生のすることといえば、勉強しかない。ブロンデルは言葉に詰まる。

ジョセフィーヌは二人分の紅茶を手早く準備し、ブロンデルを引き留めた。

仕方なく彼女もノートとテキストを出す。

暫く時間が経過したあと……ブロンデルの手元を見ていたジョセフィーヌは気づきを述べた。

「ねえ、ナタリー。そこは重要ではないわ。この項の要点はこっち

よ。あと、一ページ飛ばしたわよ」

「え？　なんでそんなに見てるのよ。あなた本当におせっかいだわ」  
「ごめん、一緒に勉強すると気になっちゃって」

ブロンデルは、脳腫瘍が思考力を妨げているのか、情報の取捨選択ができにくくなってきているようだった。それに、易怒性も増している。そこで、ジョセフィーヌがそつと要点をかいつまんで話す。

ブロンデルの勉強法だと、頭に入らないどころか、いつまでたっても終わらない。時間は無限ではないので、節約は必要だ。

ジョセフィーヌの講義を聴いていると急に、ブロンデルが頭をかかえた。

「頭が痛くなってきた……」

「だっ、大丈夫？　頭痛薬のむ？」

「もののたとえよ。一気にたくさんしゃべられると頭がついていかないわ」

「なあんだ……」

腫瘍による頭痛ではないと知ったジョセフィーヌがほつと溜息をつく。

ブロンデルは思い出して、バッグの中からノートを取り出した。

「そういえば、エメリツヒ・バウアーがノートをくれたの」

「えっ、すごい！　エメリツヒ君、誰にもノート貸したことないのに。って、くれたの！？」

「私も何で突然くれたのか分からない。あいつとはまともに話したこともなかったし。私が欠席していたところのノートだけ置いて行ったの」

ジョセフィーヌは、エメリツヒの露骨なサポートに「あらら」と

いう顔をしたが、左右にぶるぶると首を振って取り繕う。

「でも、これを見ながら要点を絞り込んで勉強すれば頭に入りやすいわ！　せっかく貸してくれたんだし、これを使わせてもらいましょう」

ジョセフィーヌが嬉しそうにノートをめくる。ジョセフィーヌも見ることがなかったものだ。

そう言いながら彼女がパラパラとめくったノートには、メモが挟んであり、ブロンデルへと宛書がしてあった。

「あら、ナタリーちゃんに手紙だって。ラブレターかしら」  
「ええ？　そんなわけないわ、やめてよ」

それでも早く内容を確認したほうがよいということで、ブロンデルはジョセフィーヌがトイレに席を立った間に手紙を読むことにした。そこに書かれていたのは、習ったばかりの記述形式で書かれていた、家族性疾患の遺伝様式を示した家系図であり、手紙というのは不愛想だ。

しかし、家系図の中のエメリツヒを示す個体の注釈に、こんな単語が添えてある。

「致死性家族性不眠症の保因者？」

そんな言葉など知らないブロンデルは、教科書の索引から検索する。

ようやく発見した記述に、かじりついて読んだ。

「あいつ……死ぬんだ……」

エメリツヒだけではなく、弟も妹もみんな死ぬ。  
ブロンデルはエメリツヒの立場を知り、彼の言葉の意味を知り、  
頭をかかえた。

「死ぬ前の時間を使って、自分と家族の病気を治そうと不治の病に  
立ち向かっているっていうの？」

ブロンデルはノートを閉ざす。

そしてテーブルの上で拳を握りしめ、その拳はわなわなと震えた。

「ああ、何であいつが学年を先取して研究室に入り浸っているのか  
わかった。いつも必死なのかわかった」

ブロンデルはその場で泣き崩れた。涙が枯れても号泣した。  
トイレから戻ってきたジョセフィーヌが彼女にハンカチを差し出  
す。

「どしたの？ エメリツヒ君、なんかひどいこと書いてた？」

「私、帰るね、こうしてはいられないわ」

「う、うん。気を付けて帰ってね？」

その日から、夜遅くまで図書館に残るブロンデルの姿があった。  
ジョセフィーヌが時々声をかけると、エメリツヒのノートをもと  
に、猛烈な勢いで勉強をしているようだった。そして彼女は積極的  
にジョセフィーヌやエメリツヒに質問をするようになった。

最初は効率の悪い勉強をしていた彼女も、だんだんと勉強のコツ  
をつかんできたようだ。

そうして、運命の定期試験の終わった数日後。最難関の難易度と  
なったファルマのテストの後の最初の講義になった。

「試験が終わりましたので、テストの答案を返しますね」

試験の採点を終えたファルマは一人ずつ答案を返してゆく。

読み上げられた成績優秀者は五名。エメリッヒは宣告通り満点。

ジョセフィーヌ・バリエが次点。当然のように成績上位者の中に名前はなかったブロンデルは、祈るようなしぐさをしていた。そしてとうとうブロンデルの名前が呼ばれた。

教壇に立つ子供教授から、両手で答案を受け取る。彼女は留年宣告を受け止めるべく、ぎゅっと肩に力が入る。

「75点。合格ですよ」

「えっ」

ブロンデルは目を見開き、信じられないといった表情を顔に張り付けて答案を凝視する。ファルマの直筆で、事細かに間違い部分の解説が書き込まれていた。

「普通に受かった……」

「よく頑張りましたね。あなたの实力ですよ」

ファルマはさりげなく賞賛して、次の生徒の名前を呼んだ。

その日、ブロンデルは、エメリッヒやジョセフィーヌたちに感謝をこめて昼食をおごった。

エメリッヒはあてつけにか、これでもかというほどお代わりをした。

「ありがとう。二人とも。私、少し頑張れるようになった気がする」

エメリッヒとジョセフィーヌは顔を見合わせて、思いを共有した



かのように微笑んだ。

## 7章2話 来年はこない（後書き）

謝辞：

本頁は、企業研究員のとくがわ先生、研究職のUO先生、もり先生、山下敦先生に膠芽腫の治療に関するアイデアをご教示いただきました。

どうもありがとうございました。

2018/3/24に異世界薬局6巻が発売いたしました。詳細は活動報告にて。

## 7章3話 医薬連携開始

お祭り騒ぎの様相を呈していたサン・フルーヴ医薬大の定期試験は何とか終了した。

医学部、薬学部、臨床検査学部では合計五人の学生が必修の単位を落とし落第しかけたが、教員会議の末、レポートや再試験などの救済措置がとられることとなった。

ファルマとエレンは、教授室で学生の成績を集計していた。ファルマは試験後の学生の提出したレポートを読むのに休日を返上して疲労もピークを超えたところだった。

エレンはよほど疲れたのかソファの上に文字通り体を投げ出しており、素足が太ももまであらわとなっていた。それを無防備に組み替えたりするものだから、ファルマにとっては目の毒だったり保養だったりする。

「ファルマ君が試験前に脅しまくったから、総合医薬学部は無難に全員合格したわね」

「危機感を煽るために、きつく言っておいてよかったよ」

まさに目論見通りの結果となったというわけだ。

「ナタリー・ブロンデルちゃんも全試験科目合格したっていうのが奇跡よね。エメリッヒ君が何か言って刺激になったのかしら？ 神術演習も体育に振り替えたし、手堅くやっているわ」

「エメリッヒやジョセフィーヌの協力や意見もあっただろうし、本人もよくやったと思うよ、しかもあの状態で……一刻も早く何とかしないとね」

「でも、脳腫瘍に手出しのできる薬は少ないんでしょ。もう一週間

以上経ったわ、治療ははじめないの？」

私、気になってた、と言いながらエレンは飛び起きて前のめりに向き直る。

くつろぐのはいいけど、ブラウスの胸ボタンはもう一つとめてほしい、とファルマは思う。

「そのための検討を進めているところだよ」

エレンから視線をそらし、ファルマはPCとデバイスに集めた資料をあたっている。治療の厳しさは絶望的といってよいもので、ファルマが自身の持ちうるチート能力を全て駆使したとしても、確実な方法は見えてこない。

エレンは口をとがらせていたが、ある案を思いついた。

「そういえばどうして外科を頼らないんだっけ。せっかく同じ大学なのに」

「外科か……エメリツヒも言ってたけどそれは選択肢に入ってこないな」

ファルマはエレンの提案を一応反芻しながらも採用できないとする。

「呼びましたか？」

「呼んでない」

地獄耳らしいエメリツヒが隣の研究室から走ってきたが、そうでしたかと頷いて顔をひっこめた。

「やっぱり脳の手術には踏み切れない」

「どうしてそう思う？ 侍医長様のグループ、脳手術の症例はいくつかあるはずよ。生存者もいるわ、私は無謀なんかじゃないと思うけど」

確かに標準的な治療法に従えば外科的切除が一番で、そうしたい気持ちはやまやまなのだが、それは現代の医療水準で、万全のバックアップがあればの話。

帝国医師団を信頼していいわけではない。

このところ、手術器具の改良、薬剤選択の増加、麻酔技術と術前術後管理も向上し臨床検査部による診療支援の強化もあり、教育カリキュラムの刷新もあって一般外科や整形外科でめざましい手術成績をあげ、ノバルート医大からも留学者が多く訪れるまでになった医学部医師団は、術前に厳密に症例を精査するようになった。

以前は医療占術をもとに、守護神の加護のありそうな患者を切つて縫ってみるという博打だったのだが、ファルマの意見を聞き入れ、臨床検査学部との協働による術前診断を重視し、患者の全身状態を評価し、手術適応となるかを慎重に判断し、周術期管理計画をたて、分業化して患者の治療にあたるようになったのだ。これは目覚ましい進歩だった。

ファルマは完全に専門外なのだが、現代地球で行われていた外科的術式を調べ、彼らに情報提供、開示することはできた。ちなみに大神殿から世界各地の神殿をつなぐ神術路の神脈を操作することによって、大神殿でのみ発生していたWi-fiだが、研究室から持ち帰っていたルーターを噛ませてサン・フルーヴの守護神殿周囲へ飛ばすことにも成功したため、情報を集めるのに神聖国に赴かなくてもよくなって助かっている。

電気系統や設備機器の不足から現代地球での術式をそのまま用いることはできない場合もあるが、不可能な部分を補うべく、専門の

研究者集団が動物実験をもとに日々研究開発にあたっている。

そういう現状にあっても、脳外科の手術を任せるには不安がある。なにしろ正常な脳と腫瘍の境界は見分けがつきにくく、高度な手技を必要とし、腫瘍摘出の成否とその後の経過は脳外科医の経験や知識に大きく依存する。

「何もしなかったとしても命が危険なんですよ？ 神術と組み合わせることはできない？」

「神術や、俺の持っている能力との組み合わせはもう試したよ」

チート能力や薬剤治療を組み合わせ延命を図るほうが現実的なのだが、どんな治療法と組み合わせたとしても、完治する方法は見つからなかったというのが、ブロンデルに診眼を通して諮った結果だ。

「じゃあ、霊薬は？」

「今俺が創造できる霊薬と神薬は悪霊祓いの側面が強くて、脳腫瘍が治せそうなものはなかったよ。さらに万能薬は材料がない」

しかしファルマは、エレンの提案であることを思い出した。

「いや、”再誕の神薬”と”爾今の神薬”と手術を組み合わせるのはまだ考えてなかった」

「なにそれ」

「再誕の神薬とは、一日間何があっても死亡しない神薬、爾今の神薬とは、数日間瀕死者の命をつなぎ止められる神薬だ」

「ええー……とんでもないものがあるのね」

エレンはどんびきだ。ちなみに、エレンは眼鏡が不要となっ

らも、うつかりと眼鏡を上げるしぐさをしてしまつ。今も、エア眼鏡をくいつとアクションをしてしまった。

「確かにそれを飲んでおけば術後すぐに死亡することは避けられるよ」

「連続して飲み続けたら？」

「それは効果がなくなる、せいぜい一回か二回が限度らしい」

連続して飲むことはできないとはいえ、神薬の効果は絶大だ。

ファルマがこれらの神薬の調合を習得したとき、正直いつて使いどころが見つからなかった。場しのぎ的な延命効果はあれど、治療効果を持っていないからだ。

しかしこの神薬は病気の治療にでなく、術後管理の補助として使うならば完璧である。

（これを使えば徹底的に腫瘍を取り切ったうえで、標準的な治療ができるんだろうか）

ファルマはふらりと立ち上がった。

エレンはファルマが視線を彷徨わせ窓の外を見ているので、首をかしげる。

「何か思いついた？」

「神薬が使えるかもしれない」

「神薬って……ファルマ君、今度は何を代償にする気？　そろそろ体壊すんじゃない？」

エレンの気遣いを心に留めながら、ファルマは撤退しない。

「心配してくれてありがとう。神薬での代償は髪の毛ぐらいだよ」

「ハゲてるファルマ君なんて、みんなが心配しちゃうわ」

「それなら、兄上が使ってたブランシュのかつらを借りるよ」

「あなたがやらなくてもいいじゃない」

「ほかに代理がないよ」

霊薬は人間にも調合できるが、神薬を調合できるのは守護神だけだ。守護神の降臨は必ず一柱ずつで、同時に複数降臨したりしない。薬神が降りているということは、ファルマ以外にはいないのだと聖典からは読み取れる。ファルマの代わりはないのだ、だから自分でやるしかないということはもう肚の底ではわかつている。

それでもエレンは見えていられないといった様子で、代案を探してくれる。

「過去の守護神の神薬とか残ってないの？」

「ないだろうね。神薬は創造後すぐに崩壊するものみたいだから、用時調製が基本だ。手探りながら効果を実証していくしかないさ」

彼はさっそく次の講義の中で、ブロンデルと対峙した。

診眼を通じ腫瘍摘出手術と神薬を組み合わせた治療法の成否をはかる。

しかし診眼によれば結果は芳しくなく、他の薬剤を使ったときより赤い光を帯びていた。一時的に延命できても、結局は死亡してしまう。

その結果はファルマを落胆させた。

（どういう意味だ？ 誰がやってもだめなのか？ それともこれは、俺がやった場合の予測か？）

この段階で、ブロンデルにはまだ告知をしていなかった。だが外科手術を行うために彼女をクロードと引き合わせるからに



は、彼女にどのような病気を疑いなぜ検査が必要かを説明する必要があるだろう。これまでファルマは、自身の正体が発覚するのを恐れるあまり、薬での治療の際はともかく、自身の固有のチート能力を使った治療に関しては、患者に十分に治療方法、治療計画を説明することができなかった。

この異世界では神術があり、神術を用いた治療が行われていたがために、パターナリズム的な文脈の中で医療情報を提供しなくとも慣例的に許されてきたのだが、今後は神術に頼らないチーム医療に取り組むためにも、また患者の自己決定権を尊重するためにも、治療の必要性、方法、予測される結果と危険性、他の方法との比較など、情報は、患者と医療者の双方に提供するべきだと考えている。

特に今回のような、侵襲的で挑戦的な医療を提供するに当たっては、適切な説明を行い、医療を受ける者の理解、そして協力を得るようにも努めなければならない。

（彼女には術式や治療スケジュールが定まってから、早急に告知と説明をしよう）

そう心に決め、ファルマはアポイントメントを取ったうえで、サン・フルーヴ帝国聖帝の侍医長にして医学部長、クロード・ド・シヨリアックの研究室を訪ねる。

「急にどうしたんだ？」

「お忙しいところ申し訳ありません。言葉通り、あなたの外科医としてのお手を拝借したいのです」

ファルマが、資料をもとに簡単に経緯を説明する。クロードは、ほう、と呟くと真顔で応じた。

「二つ、質問がある。一つ目。どうして脳腫瘍があるかわかった、

そっつうのはだいたい、死後に解剖してわかるものだ」  
「私の神術を用いました」

それで信用してもらおうというのもどうかと思うし、虫の良い話なのだが、この世界ではそれで通用する。

「二つ目、君が執刀じゃだめなのか？」

「だめだったんです」

「だめだった、と。それも君の神術かね」

「そうです。お手を拝見させていただいてよろしいでしょうか」  
「かまわないよ」

クロードは懐疑的なまなざしを向けながらも、ファルマに手を差し出す。ファルマはクロードが差し出した指の環、その空白を通して診眼を発動し、隣の棟にいるブロンデルを特定し、遠隔から脳を透かし見て、治療法をはかる。

「ようやく君の固有の神術を見せてもらえるのか。前から思っていたがその動作は神術診断術や占術の一種だろう？」

「そうかもしれません」

「ちなみに、なんで壁の向こうを見ている？」

「壁は透けて、彼女の脳が見えています」

「こいつは驚いた！ 前代未聞だ」

クロードは、帝国髄一と目される医神の加護を持っている。

その加護は、紛れもなく本物のようで、ファルマの腕ではできない手術が、クロードの指を通して見るとブロンデルの脳に灯った光の大部分が消える。

ファルマは小さく息をのんで、クロードの執刀による手術と、標準的な膠芽腫の治療法、そして神薬による補助的な治療法の三つを

組み合わせ診眼に諮った。

その結果、光は完全に消え、すなわち完治が予測された。

「いける！」

「今ので何かわかったのかい？」

「彼女の脳腫瘍の手術をお願いできませんか？ 先生ならば成功の見込みがあるようです」

「驚いた。君は未来視と組み合わせた診断ができるのか！ そういうことか？」

ファルマはクロードへの敬意を素直に口にしたが、彼からは興奮気味に褒められてしまった。確かに診眼という能力を分解してみると、クロードのいうように確かに未来視の類なのかもしれない。

もし未来視であれば、クララの持つ能力にも共通したものであり、ファルマ固有の能力でも何でもなくなるし、ファルマが持ちうる物質創造と消去のチート能力だって、一般的な神術使いの持つその拡張版であるようにも思えてくる。それでクロードが納得してくれるなら、ひとまずこの場はよいでしょう。

「今でこそ失われた神術だが、昔は医師にも薬師にも未来視を使った診断術を使える者がいたそうだよ。その神術は何かコツや発動詠唱はあるのか？ もし教えられる類のものなら、ご教示いただきたくない」

強く請われても、ファルマは診眼の発動方法をどう説明していいものかわからない。

「いや、その……発動詠唱も術式も何もないんです」

「……まあ、そうか。それはまたの機会に。まさかと思うが、腫瘍の位置や大きさまで見えているのかな？」

「ある程度は」

ファルマが応じると、クロードは瞳と口を大きく開いたまま絶句していた。

「話を戻そう。君が私の目となり、私が腫瘍を摘出する、それはかまわないよ。君の固有能力で支援してくれるんだろう？」

「手術の支援としては、腫瘍の浸潤や血管の位置のガイドと、数日間、何があっても死亡しない効果を持つ神薬を使えそうです」

神薬と聞いたクロードは耳を疑ったようだ。

「霊薬の間違いではなく神薬か」

「そうです」

「神薬なるものが実在するとは知らなかった。それは大量に調達できそうなのか？」

「正直なところ、一人分が限度です」

「そうか。まあ敢えて入手ルートは聞くまい、君の父上もそうだったが、どんな薬も調達してくるド・メディシス家のことだ。これで怖いものなしだな！ これは愉快愉快！」

「クロード先生、あなたとこれからチーム医療のパートナーとなるので誤解のないよう申し上げておきますが、私ができるサポートは病を鑑別することと、神薬を含めた各種の薬剤を準備し提供することだけ。治療の結果はまったくの未知ですし、術中の死亡はないでしょうが、神薬の効果が切れれば死亡はありえます」

「まあ聞き給え。自分の腕に自信を持ち、相手に働きかけるのは、我が医学流派の流儀なのだ、特に相手が貴族である場合、神術の効果で生存率を向上させるのでね。君も少しは自信を持ったほうがいいぞ」

クロードの言っているのは、はっきり言ってプラセボ効果の延長にすぎない。しかしこの世界の医学は、守護神の存在と神術の神秘と切り離せず、貴族の治療に関しては大いにプラセボが影響する。そうだったな、とファルマは実感した。

「手術の術式はカンファレンスで詰めていきましょう。術式の提案は、いくつかこちらからもできそうです」

「明日にでも全外科講師を招集しよう。新鮮な死体を調達しておくよ」

「ありがとうございます」

ファルマとクロードは膠芽腫の治療のためにタッグを組んだ。

「悪霊、帝都からいなくなっていましたね」

メロディの屋敷の神術訓練場で神術の訓練に精を出していたロッテが、休憩時間のお茶会でぼつりとメロディに零した。ロッテは帝都に戻ってから、週二回、休日を使ってメロディから火炎神術と神術陣の修行と手ほどきを受けていた。さながら習い事のようなものだ。

ロッテは神術使いではないので、メロディの神術を借りる。火炎神術陣を聖油で書きつけてそれにメロディが作った神術の炎を灯すという、非常にシンプルな方法だ。

「実戦のない神術訓練は物足りない？ 悪霊なんていないほうがいいのよ」

気持ちわかるわ、とメロディが相変わらずの美声で笑う。

「は、はい……ですが、メロディ様からお借りして私が使わせていただいている火炎神術が、悪霊に本当に効果があるか、確かめるすべがなくなってしまうました」

ロツテの教わっている神術は、悪霊に対して効果を発揮するものなので、悪霊がいなければ効果を評価しようがない。効果がわからないものを訓練し続けるのは、霞をつかむようなもので、目標も自分の立ち位置も把握できないのは、訓練に支障がある。

「そうかもしれないけど、聖下が大神官に即位して、帝都のみならず世界中の守護神殿を守ってくださっているから、不安がなくていいわね」

エリザベス一世が大神官と皇帝の兼務である「聖帝」として即位してからというものの、これまで謎に包まれていた神聖国の神秘が少しずつ公になりはじめた。

大神官の神術は、各地の守護神殿を結ぶ巨大な神術網を展開し、それが各地の悪霊の発生を抑えていたのだと知ったときは、ロツテはメロディともどもエリザベスの宮殿に感謝の祈りをささげたほどだ。しかしその守りが、ロツテの訓練には障害となっていた。

「神殿の加護の及ばない場所へ足を延ばせば、悪霊にも遭遇できまずでしょうか」

「ばかなことはよしてちょうだい、神術陣で対応できない悪霊に遭遇した場合、あなたには神術が使えないのよ。神術陣は悪霊と戦うための主戦力ではないの、あくまで防御のためなのよ」

「そうですね」

メロディがロツテをたしなめると、ロツテはしょんぼりする。それをけなげに思ったのか、メロディはロツテの手をとって手の

甲をすすべすと撫でた。

「それに、悪霊と戦わなくてよくなるかもしれないわ。風のうわさによるとね」

「それはどういう」

「大神官様の即位だけでなく、神殿が正統な守護神様を見出し、擁立した。それで守護神殿の守りが万全になったようなの」

「えっ、えっ」

ロツテは理解が追い付かないようで、目を思いきり見開いている。

「そつえば、守護神様にお仕えするのが大神官だから、エリザベス聖下はご存じないはずはないわ。聖下はきつと守護神様にお目にかかったはずよ」

「守護神様つて、どんなお方なのでしょうっか！」

目を輝かせて妄想を膨らませるロツテを、メロディはなだめた。

「神聖な存在だから、私たちがお目にかかる機会なんてないわよ。神聖国からお出ましにならないと思うわ」

それを聞いてからというものの、ロツテはこの世界に降臨したかもしれない守護神のことで頭がいっぱいだった。メロディの屋敷を出たその足で、情報収集のために新しい守護神殿へ向かってみた。帝都の守護神殿は悪霊によって破壊されていたため、宮殿内に新築した神殿が新たな守護神殿として市民に解放され、神聖国の神官たちも詰めている。

しかし、新しい帝都守護神殿の入口は固く閉ざされていた。

ロツテが神殿の扉でもじもじしていると、門番に追い返されてしまった。

「今日は神殿全域立ち入り禁止だ。何の用だ」

「神官様のお話を伺いたいと思ひまして」

「明日にしないさい」

「はい、失礼しました。出直してまいります」

守護神殿は基本的に年中無休、貴族平民の別なく、深夜も早朝も聖堂には入れるものだ、今日に限って立入禁止という言葉に、ロツテは疑問を持った。

「工事中なのかな？」

おかしいこともあるものだと思いながら、その日は諦めてすごすごとド・メデイス家に帰ろうとしていたとき、ロツテの足元に黄金の神術陣の光が見えた。

図柄からするに、地中を通して、地上に抜けた光だろう。発信場所は、地中のようなだ。

「何これ？」

ロツテはメロディの火炎神術だけではなく、ほかの三属性の神術陣も少しずつ見て学んでいた。美しい神術陣の紋様は、宮廷画家たるロツテの創作意欲を刺激する。その神術陣は、神殿を中心に編み上げられているようだったが、金色の神術陣など見たことも聞いたこともない。

「これ、何の属性だろう？ 神官様の神術陣かな、でも神殿神術は白いはずだしな……」

ロツテは好奇心にかられて、神殿の真裏に回り、そつとステンド



ガラスの間から聖堂内を覗こうとした。しかし、神殿の奥に位置するその聖堂は絶妙に視線を遮る建物の構造になっており、手鏡を差し入れて文字通りのぞき見だ。

地上部は一般参拝者は入れない秘密の聖堂で、入り口はない。

しかしその聖堂は地下へ吹き抜け構造になっていて、底部に祭壇のようなものがあるのが見える。展開された神術陣の上に浮遊し、神術陣から伸びた黄金の神術帯を幾重にも操りながら細密構造を有する神術を構成している術者の少年を目撃した。

彼の体は透きとおり、星屑でできているかのように儚く見えた。立体神術陣を繰るその黄金の輝きに、ロツテはすっかり魅了されてしまった。

上から覗き見しているため、顔ははっきりと見えない。だが……ロツテは彼の体にある特徴的なしを見つけてしまった。

「ここで何をしている！」

神官服を着た男が、無防備に覗き見をしていたロツテを発見しとがめた。

ロツテは運悪く、普段着を着ていて宮廷画家見習いのバッジをつけていなかった。

なので、面識がないことも手伝って、単なる不審者と見間違えられたに違いない。

「正直に言え！　どこの間諜だ」

「私は宮廷画家です、バッジは今日はもっていませんが、陛下にお会いできれば身分は保証できます！」

「宮廷画家が何を覗き見していた」

神官はあわてふためくロツテをますます怪しんだかのように無言

で杖を向ける。

白状しなければ危害を加える意思表示だ。ロツテは観念した。

「誰かが下にいました」

「見たのか！」

「顔はみていませんっ」

はあ……と、神官はため息をついた。顔を見ていないというのは事実だ。

神官は何か詮索するような視線を向けてきたが、ロツテの持ち物に画材があるのを確認すると、それ以上追及はしなかった。聖帝の宮廷画家を追及するのは、聖帝の機嫌を損ねると考えたのだらう。

「もういい、行け！」

「あの、一つだけうかがっても」

「何だ」

「守護神様が現れたというのは本当でしょうか」

「巷にはそんな噂が流れているのか」

神官は顔をしかめた。明らかに、聞かれてはならないことを聞かれてしまったかというように。

「正統なる守護神様が神聖国に顕界したというのは事実であり、帝国には入ってきていないが神聖国では公表されている。守護神様と大神官の神術は大神殿に作用し、大神殿を経由して各地の神殿で効果を発揮している。世界中の悪霊の発生を食い止めておられるのだ」  
「この聖堂の地下で神術陣を立ち上げていたのは、どなたですか？」  
「誰でもない、忘れる」  
「ありがとうございます」

(……違う)

ロツテは膝から崩れ落ちそうになりながら、何とか心を強く持ちその場を立ち去った。

宮殿へつながる石段に腰をかけて、呼吸を整えても動悸がおさまらない。

先ほどの少年は、ファルマだった。彼の召使いとして、彼の至近で毎日奉仕しているのだ、顔が見えなくとも見間違えるはずがない。そして何より、両腕には薬神紋の輝きがあった。

(ファルマ様、薬神紋に似た傷と体全体が光ってて、透けていた……知らなかった)

ロツテに見せていた彼の姿は、偽りだったのだろうか。

ロツテにとつてのファルマは、長年仕えてきた主人であり、宮廷薬師で、異世界薬局の店主で、大学教授であった。それがロツテの知る、親愛なるファルマの全てだった。

だが、今まさに、ロツテの知らない一面を見てしまったのだ。

「ただいまー」

夕刻になってド・メディシス家に戻ってきたファルマは、いつものファルマだった。

平服に戻っていたし、体は透けていなかったし、光を纏ってもない。ましてや、浮遊してもいない。あれは見間違いだっただけで、と無理に納得させることもできる。

ロツテはいつものようにファルマのコートを脱がせながら、震える声で応じた。

朝に確認したファルマのスケジュールでは、今日は聖帝の往診に宮殿へ出かけていたことになっている。

「おかえりなさいませ」

「元気ないね、どうしたの？」

ロツテの様子がおかしいことに、ファルマは気付いたようだ。顔を覗き込もうとするファルマに、ロツテは拒絶の意思を示して手を小さく振った。

「わ、私は元気ですよ！ 歌も歌えますよ！」

「何か変だよ？ 悩みを抱えていないか？ よかったら相談に乗るよ。ちよつと待ってて、荷物を置いてくるから」

「お荷物は私がお預かりします」

その立ち居振る舞いも、しぐさも、ファルマはいつもと変わらない。

「あなたはいつもお優しいです。私に何かあったらすぐに気付いてくださいます、でも、私は鈍感で脳天気で、もしかしたらあなたに大変なことが起こっていたのかもしれないのに、気付きませんでした」

「何も起こってないよ、どうしたの？」

ファルマはロツテを案じるかのように、柔らかく笑う。

その笑顔に絶対の隔絶を感じたロツテは、困ったように笑顔を返すしかできなかった。

そして、切なげに心情を吐露した。

「何か、起こりましたよね」

ロツテはファルマを直視できなくなって視線を伏せる。

ファルマはロツテの肩に左手を置き、右手で顎を自分に向かせた。

「こっち向いて」

二人はお互いの気持ちををはかるように見つめあう。

「君が何を聞きたがっているのか分かった。本当の話をしよう」

「えっ」

「嫌われたくないと思って、その場しのぎに取り繕っては君を傷つけていた。でもそれは卑怯だったよな」

ファルマは脱いだばかりのコートをロツテに着せかけて、中庭の外にロツテを連れ出すと、腰から神杖を抜く。

「誰もいないところで話そう。舌をかまないよう、口を閉じておいで」

ロツテの細い腰に手を伸ばし、ファルマは人目をさけるように一気に夜空へ飛翔した。

帝都の街並みが眼下に小さく遠ざかった頃、ファルマはロツテを抱えたまま杖の底を夜空へ打ち付けると、空中に衝撃が走って瞬間的に透明な神術陣が展開した。

ファルマは神術陣の上に着地し、ロツテも促されて着地する。それは空飛ぶ絨毯のようだ。

「ファルマ様、これは」

「これは空間固着神術陣だよ。そっか、ロツテは神術陣の勉強をしていたんだっけ」

「初めて見ました。それに、空に浮いています!」

「俺も習得したのは最近だよ。神術陣って奥が深いよね、ロツテが

夢中になるのもわかるよ」

「私は一瞬でこんな複雑な陣は書けませんけど……これは何属性の神術ですか？」

「まあ、この世界では俺だけが使える無属性の神術かな。落ちないから適当に座って。さて、どこから話せばいいかな。あ、ポケットにチヨコレートがあるよ、いる？」

「ください！」

そして、ファルマは神術陣の上にロツテと肩を並べて座りながら五月雨式に打ち明けはじめた。

落雷で死亡したファルマ少年のこと、彼の死体に憑依した異世界人であること、薬神の力を持っていること、影がなく、物質創造と消去ができること。

神聖国がファルマを守護神として擁立し、政治的、帝国の安全保障的判断から神聖国での守護神としての扱いを受け入れているが、自我は人間であること。

守護神の立場を得たことで、各地の秘宝や貴重な文献を読み解け、数々の神術にアクセスでき、最大限に力を引き出せるようになったこと。

それでもなお、霊薬や神薬でも治せない病気は数多く存在し、薬学、科学と神術を組み合わせ、技術の発展を目指してゆくこと。その一環として今は、悪霊の襲来から人々を守るすべを求めて神薬の調合に尽力していること。

全てを終えたら、穏やかな生活に戻りたいこと。

訥々と話していたのは、時間にして三十分ほどだった。

ロツテは相槌を打ちながら、黙って耳を傾けていた。

「たくさん教えてくださって、ありがとうございました」

ロツテは戸惑い、はにかみながら感謝の言葉を口にした。  
ファルマは、以前とは違う関係になってしまったロツテをうかがっているかのような顔。

「少し変わられたなとは思っていましたが、落雷の影響だと……前のファルマ様に、ちゃんとお別れができなかったのは残念です」  
「前のファルマの記憶もあるよ。呼びかけても出てこないけど、彼の存在はずっと感じているよ」

「なら、一緒に生きていらっしゃるのだと思います」  
「そうだね」

ファルマはさすがにそうに伸びをした。  
秘密を打ち明けて、彼の心も落ち着いたのだろう。

「先ほどは何をしておられたのですか？」

「ああ、あれは神術陣の導入のついでに、手術に関する情報を取り寄せて情報端末に落としていたんだ」

「じょうほうたんまつ」

「ああ、いや、調べ物をしていたのさ」

「そういえばファルマ様の神力が、全世界に及んでいると神官様からお聞きしました」

「全世界は言い過ぎだ、神術陣を介して、せいぜい大陸中の掌握がよいところかな」

「すごいですけど、ちょっとすごすぎて怖い気がします」

ロツテが茫然としているのに気付いたファルマは、弁解を始める。

「怖がらなくて大丈夫だよ、掌握といっても、俺は別に世界を支配しにきた魔王じゃない」

「それは、今までのあなたの足跡を見てよくわかっています。あな

たは、この世界の人々の命を守ること、私たちを癒すことに、全身全霊でいらっしやいました」

「そう思ってもらえるなら、嬉しいよ」

「あなたが、あの薬局に異世界薬局という名前をつけた理由がわかりました。あなたにとつては、ここが異世界なのです」

「ああ、あれはね。その通り」

「ほんとうの事を知ったら、もっと好きになってしまいました」

瞳を潤ませて思いを告げるロツテの手をとり、ファルマはそつとロツテの手にキスを落とす。プロポーズと受けとれる、意味ありげなキスだ。

ロツテが耳まで真っ赤になっていると、ファルマはロツテの反応に気付いて頭をかいた。

「これからもよろしくね」

「勘違い、してしまいました……」

「ロツテのことは好きだし、大切な存在だ。それは嘘じゃないよ。でも俺は神籍に入ったから人間ではなくなった。誰かと結ばれることはもうできない、勘違いではないけど、ごめんね」

どつちつかずの罪な言い方だ、とロツテは感じたが、彼としては精いっぱい素直な表現なのだろうとも受け止めた。

「そうですよね。守護神様になったのですもんね、でも、ごめんなさい。前のファルマ様も、今のファルマ様も、なんだかんだでやっぱりファルマ様です」

「そんなこんなで、いままで通り、ただのファルマとして接してくれると嬉しいな」

「はいっ」



ロツテは、今後もファルマと呼ぶことに決めた。

ファルマとロツテはチョコレートを食べ終わり、ファルマはロツテをしつかりいだと、神術陣を解除し、ゆつくりと地上へと降りていった。彼が何かしたのか、先ほどまで薄曇りだった空は晴れ上がり、満天の星が見える。

庭先に羽毛のように着地すると、ロツテは天真爛漫な笑顔に向けてファルマを誘った。

「ファルマ様、何か温かいものを飲みませんか？」  
「いいね、はちみつを入れよう」

その後、二人はホットミルクティーで体を温めた。  
ロツテはいつもより甘く、少しだけほろ苦く感じた。

## 7章4話 窓際の黄色い花

「それではカンファレンスを始めます」

医学部長クロード・ショーリアックの外科学講座、総合医薬学部長ファルマ・ド・メディシス門下数名の術前のカンファレンスがまった。これまで、医学部で医師と医学生たちの症例検討会が行われていたものの、研究科を超えた協力は初である。

ファルマは前世においても、医師と合同のカンファレンスに出席した経験は卒後臨床研修や、大学病院に所属していたころの数回しかない。なので、最小限しか口出しせず、カンファレンスの進行はクロードの従来 방식に任せている。

「本症例は18歳女性、身長5.3丈、体重40杯、体格はやせ型。主訴は、認知、記憶障害、易怒性の亢進、既往歴、家族歴は不明、四肢、および体幹に異常はなし、代謝疾患や精神疾患はなし、軽度のしびれと歩行障害はあり」

クロードが黒板に書きつけながら症例の呈示を始める。クロードは帝国内通用単位ではなく、多くの医師や薬師に通じるように、神聖国が定めている国際単位を用いている。

ちなみに、杖というのは神杖を基準とした長さの単位で、一杖は30cm程度である。重さの単位も聖杯の重さを由来とする「杯」というものが存在する。

基本情報をクロードが説明したあと、ファルマが続ける。

「神術検査は私が透視神術を用いて行い、右前頭葉に0.1杖以下の腫瘍形成を予測しました。腫瘍の輪郭は比較的鮮明で、領域は特

定できました。同時に血管走行の把握を行い、周辺血管の局在画像、血行の支配領域をこの図のように書き起こしました。臨床検査学部に委託した血液検査では特記すべき所見はなし。小切開を加え腫瘍に定位的生検術を実施した結果、顕微鏡的には高密度の腫瘍組織であり、細胞核は大小不同、クロマチン凝集あり、多核や巨核、ならびに壊死層もみられました。遺伝子検査においてはp53に変異、CDKN2Aの欠損、EGFR増幅、MAPK経路の変異が示唆されました。免疫組織化学的検査では、腫瘍特異的マーカー（MIB-1）の発現率は19%でした。臨床経過、神術所見、病理所見から術前診断として神経膠腫の中でも最も悪性度の高い四段階目の膠芽腫であり、早急な手術加療が必要と考えられます」

ファルマの説明を聞いて、最前列席でそつと涙をぬぐう貴婦人がいた。

ナタリー・ブロンデルの実の母親であり宮廷薬師でもある、フランソワーズ・ド・サヴォワだ。

最後尾にはエレンも座っている。

「周術期の患者の術前評価として危険視される所見はなかった。私の方からは開頭術の術式とアプローチのための経路説明をする」

ふたたびクロードが術式を図示して説明を続ける。これまでにクロードがノバルト医大との連携のもと開発してきた神術術式に加え、ファルマからの助言を総合した、ほぼ地球における標準的な開頭術の術式が採用されている。

「以上、膠芽腫疑い、この患者に対し3月10日 開頭頭蓋内腫瘍摘出術を実施します。本症例について、御討議をお願いいたします」

そこで颯爽と手を上げたのは、ブリジット・ル・ノワール。

ノバルート医大出身一級医外科准教授で、まだ若いがクロードの一番弟子の女性医師だ。この彼女が勝気でプライドが高いが手術はとびぬけて上手く、脂が乗りきっている。

彼女は今年から導入された白衣をガウンのようにして着ている。医学部長であるクロードは侍医長でもあるため、基本的に宮殿に常駐し、いくつかの講義をブリジットに割り振っていた、いわばクロードの名代であった。

大陸の医師もまた、薬師と同じように一級、二級、三級と格付けされている。

この世界では、医師は専門の違いこそあれ全員が外科医であり、手術を行う。

医学部は外科のみで、一般外科、整形外科、脳外科など幅広い診療科が含まれている。

一級医は医神を守護神とする貴族の医師。医神の加護を持ち、希少であるため、各国の王侯貴族に仕えている。人数も少ない。

二級医はその他の属性の貴族の医師。主に傷病の治療、切断、切除を行う。戦争の際に軍医として活躍する。

三級医は抜歯、瀉血、腫れ物の除去など行う平民医師、床屋を兼ねている者もいて、床屋外科ギルドに所属している。

ちなみに、平民は今回、学力不足で、一人も医学部に入学していない。今年度サン・フルーヴ帝国医薬学校に在籍するのは、貴族の医学生のみである。これは、医薬学部と対照的であった。

そんな背景のなか、ブリジットがさっそくファルマをやり玉にあげる。

「透視神術とおっしゃいましたか。透視神術の予測だけで、侵襲的な検査である脳生検にいったのですか。それでは従来の占術と変わらないのでは」

「仰る通りです」

ファルマが即答する。

「なるほど、神術の腕によほどの自信があるとお見受けします。あなたはその若さで筆頭宮廷薬師にまで上り詰めたお方ですから、類まれなる才能を持った神術使いであることは存じております。しかし、慢心は患者のためになりません。診断が的中しなかったこともありません？」

「これまでの診断と治療に誤りがなかったかということ、確認のしようがありません」

ファルマは診眼という、クロードのいうところの予知能力的なチート能力を持つているが、その診眼の結果が正しかったのか、正解は神のみぞ知るだ。

病名に基づいて、薬剤師の立場から適応すると考えた処方した薬は効果があった。彼の知識は地球上における最善に基づいていたが、病態を制御できないこともあった。

その事実があるだけだ。すると、ブリジットは「へえ……」と甘ったるい声をだした。常々気に入らなかった、若き学部長をやりこめようとしたのだろう。

「そんな無責任なことでは、呆れてしまいますわ」

「口を慎みたまえブリジット君。我々はただの医療者ではない、医療神術使いだ。最善の医療を提供するために神術を使って何が悪い。それに、私が行った生検の結果、腫瘍は事実存在した」

クロードの弁護が入った。医神を守護神に持つクロードは、手術中にもいくつかの神術を使う。

「結果論としてはそれで正しかったかもしれませんが。しかし神術は

術者の技量に影響されます。世界中でたった一人にしか使えない神術になんの意味がありましょうか。神術に頼った診断をしなくてもよいよう、平民医師、平民薬師でも診断、治療ができるようにド・メデイシス学部長は医療改革を行いたいのではなかったのですか」

ずけずけとモノをいうが、ファルマは彼女の意見はもつともだと考えた。

「御明察の通りです。ただこの神術は私が偶然に習得したもので、簡単に伝承することができないのです」

「ならばそれは、独りよがりな技芸にすぎませんわ」

ブリジットは不快感をあらわにした。それを見計らったかのように、ファルマの瞳が鋭く輝く。

「ですので、それに近いものをお見せすることはできようかと思えます」

ファルマはバッグの中からこそごととガラス器具と、一枚の写真と同時に取り出した。

それは、X線管とよばれるのと、人の手の骨が映ったレントゲン写真だった。

「こちらは電磁放射線発射装置であり、こちらはその発射された電磁放射線が人体を通り、それを検出した写真です。諸先生方は私の講義を聴講しておられるので、今、電磁放射線といってもその正体をご存じですし、どうしてこう見えるのかもわかりかと存じます」

ファルマが前列の参加者に手渡した写真が、会議室を一周する。ブリジットは目を丸くしてファルマから写真を奪い取り、クロー

ドは「素晴らしい！」と大げさなアクションで拍手を送った。ブリジットは半信半疑で質問する。

「これを改良すれば、透視神術を持っていなくても診断がつくようになるってわけ？」

「さきほドル・ノアール先生がおっしゃったとおりです。誰にでも使える技術でなければ意味がない、ですので試作装置を準備中です。ただ、今は開発にかかる時間を待てないので今回は神術で対応させていただきます」

「やるじゃない、子供教授！」

ブリジットはひゅうつと口笛を吹く。

「やめないかはしたない。ル・ノアール君は口が悪いにもほどがあるぞ。ド・メディシス教授、失礼しました、あとでよく言っておきます」

クロードがブリジットの保護者のような立ち回りをする。そのほかの医師からも手が上がった。

「透視写真は画期的で、技術開発には期待しております。して、術式の検討に戻りますが、それで成功例があるのですか」

「人間での経験はないが、先週から実施している中型動物での実験においては、神薬を使わずとも私の執刀で十例中八例が一週間生存中だ」

クロードは付け焼刃ながら、一週間で開頭術のための準備を進めていた。

ファルマはそれを頼もしく思う。

「私からもよろしいでしょうか」

今度は、フランソワーズからの質問だ。

わが子の手術とあっては、どんな疑問も明らかにしておきたいというのが親心だろう。ファルマとクロードは数日前、とうとうフランソワーズとナタリーに膠芽腫の告知を行って手術と治療の同意をとった。二人ともショックを隠せない様子だったが、治療に専念するほかにないと腹をくくってくれた。フランソワーズも薬師団の一人として治療に参加する予定だ。

「このたびは、娘のためにこれほど大規模かつ挑戦的な体制を組んで手術を実施していただき、本当にありがとうございます。諸先生方、よろしくお取り計らいのほどお願いいたします」

フランソワーズは数秒間その場で会釈をして感謝の意をあらわした。

「質問は二点あります、周術期の薬師の薬剤管理に神薬が出てきたのですが、その二つの神薬が現存するというのは初耳で、貴重な神薬資源を使っていたかどうかということで恐縮しております。神薬はすぐに分解してしまうと聞きましたが、どのようにして神殿が数百年間安定的に保管できていたのでしょうか。また、ド・メイシス教授の使っておられる既存の薬と相互作用しないのでしょうか」

「質問にお答えします。神薬の詳細につきましては神聖国の機密事項となりますので私の口から申し上げることはできないのですが、品質には問題のないものを、少量ですが今回に限り調達できます。神薬と薬剤の相互作用の有無については、文献や神術分析により事前の評価を行い確認しております」

苦しい弁だが、ファルマは嘘はついていない。



まさか自分が調査するとは、この場にいる医師団、薬師団は夢にも思わないだろう。エレンが困ったような顔をしてファルマと目配せをした。この場では彼女だけが真相を知っている。

「神聖国の機密にかかわるので組成等は開示できないというわけですか。神薬が入手できなくなったらどうするのです」

隙を見せたファルマに、ブリジットが追い打ちをかける。開示できなくもないのだが、ファルマにしか作れないものは開示しても意味がないのだ。そこでファルマはこう述べた。

「神薬はなくとも手術は可能です、成功率も変わらないかもしれませんが。が、今回初の脳腫瘍摘出術ということで、不測の事態に備えて用います」

「もし神薬が使えるのであれば、毎回使ったほうがいいに決まっていますが、実際はどうなんですか？」

「当然ながら、守護神の創造する神薬資源には限りがあります、しかし」

ファルマは敢えて誤解を正していないのだが、ブリジットらはファルマの現状を知らないなので、今回調達される神薬が過去の薬神によつて造られたものと誤解している。

しかしその誤解をファルマは逆手にとる。

「その限りある神薬を消費しては、あつという間に底をつき、医療技術が普及しません。どの神術使いにも使える汎用神術と組み合わせた、もしくは神術に頼らない術式を確立してゆくのが最善かと考えます」

「確かに」

「やむをえますまい」

医師たちも薬師たちも口々に同意した。そうせざるをえないというのが実情だ。

「薬師としては手術中に何を支援すればよいですか？」

薬師団からの質問が出た。

「手術チームに加わる薬師へは、周術期の薬学的管理をお願いします。麻酔薬などの医薬品の管理、温度管理、術中の調剤調製、術後鎮痛用薬剤の適正な使用などが含まれます。詳しくは、明日の部門会議でお話いたします。挑戦的な手術にはなと思いますが、彼女の救命のために尽力しましょう。ほかに質問がなければ、これで本会を閉会いたします」

こうして、不安を払拭できないながら、術前合同カンファレンスは閉会した。

ついにその朝がやってきた。

病室で目を覚ましたナタリーは、病室の窓を開けて外に目を奪われていた。カーテン外にはサン・フルーヴの霞がかった街並みの上に太陽が昇り、鮮やかな色彩が広がっている。

「おはよう、ナタリー・ブロンデル君」

「朝日がきれいですね。教授」

ナタリーは振り向かず、窓の外を見たままファルマに応じる。ファルマは窓際のナタリーの隣に並んだ。

「今日も明日もいい天気になるみたいだ、春はすぐそこだよ」

「今日を限りと思って、目に焼き付けておこうと思います」

術前内服薬を持ってきたファルマに、ナタリーは不安な胸の内を吐露する。

「そんなに太陽を見ていたら目が焼けてしまうよ。また明日見たらいい。さて、手術前なので絶食だったね」

ファルマはナタリーと話をしながら、深夜から苦勞してブリュノとともに調合した神薬を飲ませ、鎮静剤も併用する。

この神薬が、今日と数日の彼女の命に、絶対的な保障をもたらす。青い神薬の入ったグラスを飲み干したナタリーの様子を見ていたファルマは尋ねる。

「気分が悪くなったりはしていないか？ 違和感は」

「いいえ。体がぼかぼかします、気分が落ち着きました」

ナタリーは胸をゆつくりとなでおろした。

神薬の効能としては、不安な気持ちを落ち着ける効果もあるらしい。

「それはよかった、前向きでいてくれよ」

「教授にお願いがあるのですが。母を悲しませるので直接は渡せません。もしダメだったらということで、これを預かってもらえませんか」

ナタリーがファルマに手渡した小箱の中には、何通かの手紙が入っていた。

それぞれあて名が書いてあり、母親や親類、友人らに宛てた遺書だと思われる。

ぱらぱらとめくると、ファルマの名前もあった。インクは滲んでおり、涙のせいだろうかと推測する。ファルマはナタリーの気持ちに無碍にせず、神妙な面持ちで受け取った。

「わかった、ではこれを預かっておこう。私も君にあげたいものがある。去年の秋仕込んだのがきれいに咲いたから見てやってくれ」

ファルマは病室の窓際に、黄色い花をつけたクロツカスの水栽培の小瓶を飾った。

「教授、観賞用の花なんて育ててたんですか？　なんか薬草しか栽培しないイメージがあるので意外です」

「まあ、プライベートでも薬師をやっているわけではないからね。それにほら、君が花が好きだとお母上にうかがったから」

「この花に、何か意味などあるんですか？」

「あるよ」

にこつとファルマはほほ笑むが、具体的には自分の口からは言わない。

「え、あるんですか」

「私たちは誰も、明日のことはわからない。でも、君は今日は死なないことになっている」

「……そこまで言うなら、はったりを真に受けてあげてもいいです」  
「その意気だ。次は手術室前室で会おう」

ファルマはそう言ってナタリーを元気づけ、自分の心臓のあたりにこぶしをトントンと当てると、片手をひらりと振って病室を出て

行った。

パントマイムのようなその不思議なジェスチャーを見たナタリーは、はっとした。

「そういうことが」

彼女は何だかおかしくなって小さく吹き出し、クロツカスの花弁を指でそつとなぞった。

ナタリーはクロツカスの花言葉を思い出した。

ファルマは、「私を信じて」といったのだ。

「ああいう男、大嫌い。ほんとと嫌い。そんな大切なこと、ちゃんと口で言ったら？」

ナタリーはそう言いながらも、束の間笑顔になっていた。

1148年3月10日午前9時、サン・フルーヴ帝国医薬大学医学部附属病院にて、ナタリー・ブロンデルの手術が行われた。手術室はガラス張りになっているため、多くの医学生がノートやカメラを携え見学にきている。また、この手術室では鏡の反射と集光を利用して、手元を明るく保つために十分な照明が確保されていた。

さらに手術室の衛生については、事前に疫滅聖域とクロードの浄化神術の重ね掛けで無菌状態に近くなっている。

ナタリー・ブロンデルはファルマが創造した二つの神薬を服用し、仰臥位の体位をとり、三本の金具で頭部を締め付けるように固定。切開予定部位をその場で剃毛し、ポピドンヨードで頭蓋を消毒、続いてアルコールで消毒をしたのち前頭葉切除線のマーキングが行わ

れた状態で静脈麻酔薬での急速導入で全身麻酔に入った。挿管と吸入麻酔が設備不足でできないため、人工呼吸と吸入麻酔はバッグバルブマスクの内部に吸入麻酔薬を噴霧したガスを送り、間に合わせる。

麻酔の組み合わせと量はファルマが念入りに診眼で事前に調査をし、管理はファルマと、麻酔科医として育成中の専従の医師が行う。正直、ファルマも含めて麻酔管理の専門家は这个世界にいないに等しい。そこで、ファルマと同じく診眼を使えるエレンに協力を求めた。彼女は脈拍、酸素飽和度の異常、体温、呼吸数その他すべてのバイタルの異常が把握できるようにファルマが数日かけてトレーニングをした。脳波だけは診眼では検出できないため、痛み刺激によって変化する色と部位を覚えてもらって、それで覚醒レベルをはかることにした。

長時間診眼を使うと彼女が消耗するので、数分に一度、瞬間的に異常を検索する方法で永らえてもらう。

現代地球で用いられているすべての電子医療機器がここには存在しないため、エレンには患者の生命にかかわる重大な異変が発生する前に報告してもらう。

ブロンデルの頭部だけでなく、全身が赤く変わり始めたら緊急事態だ。

診眼の予後予測は、刻一刻と変化する。手術で救命できるという判断が、失敗を起こせば覆ったりもする。神薬を使って数日を不死身で凌げたとしても、その後死亡する予測が出てしまえば一巻の終わりなので、だからこそ気が抜けない。

そこでバイタルのモニタはエレンを信頼して完全に任せ、ファルマはクロードに腫瘍をガイドし、具体的に指示を出すことで手術のサポートに回ることに徹する。

自らの能力を過信せず、分業しなければ手に負えない。

「それでは、18歳女性 部位は右前頭葉 頭蓋内腫瘍摘出術を行

います。予定の手術時間は四時間です。よろしくお願いいたします」

クロードがそう宣言すると、マーキングされた部位の頭皮の切開に入った。

ファルマの診眼を使って全ての外科医の手術結果を予測すると、クロードの執刀でしか成功しそうになかったので、是が非でも執刀させてほしいと囁みついてくる准教授ブリジットを引き下がらせ、助手に回らせるのには苦労したようだ。

クロードは晶石つきのメスをもっており、メスを小さな杖と化し神術出力装置とすることができると。神術で出血のコントロールを行っているのだらう、メスを表皮に直角に当て、軽やかに鋭的に切開する。頭皮は血行に富んでいるはずだが、驚くほど出血しない。神力の被膜で優しく覆って創面を保護しているから、出血は最小限で済むとクロードは事前に説明していた。

有言実行。さすがだ、とファルマは恐れ入った。

それでもブリジットは確実に頭皮クリッピングをしてゆき、創縁にはガーゼをはさみこみ、硬膜を吊り上げる。

クロードは引き続き弧を描くように切開した皮膚弁を持ち上げ、硬膜用の剥離子を用いて筋層の切開を行い、これも驚くほどスムーズに終わると、次は頭蓋骨を骨切にとりかかる。見学していた医師たちがため息をもらした。

「さすがは侍医長様です」

「やあ、まだ始まったばかりじゃないか、おだてないでくれよ」

賞賛の声が上がる中、クロードは平常トーンでそんな受け答えをしていた。軽口をたたきながらも、集中は絶やさない。

彼はドリルに持ちかえ、骨表にいくつか小孔を穿孔し、その間を糸鋸で切つてゆく。脳生検のときに事前に穿孔したものも利用する。ブリジットは適宜生理食塩水を投与することで、骨の欠片が飛び散

るのを防ぐ。

「さあ、目的の腫瘍へ行くぞ、案内してくれ」

ファルマはブロンデルの頭部の透明模型を示しながら、血管の位置も注意し、どこに腫瘍があるのかを正確にナビゲートする。クロードは脳実質と白質を切開し、予定通りのルートで腫瘍にアプローチした。

「これが……確かに、白質と色が違うな。腫瘍だ」

腫瘍の全周を、安全域を残してメスで外周剥離を行ってゆく。右前頭前皮質の切開を進めるクロードは、ファルマの指示に従う。機能を最大限に温存するには覚醒下での手術がよいのだが腫瘍のある場所は言語野や運動野ではないので、覚醒下で行わなくてもよいと判断した。クロードの神術により出血はコントロールできているものの、断端からの出血点は、ブリジットが凝固止血でつぶしてゆく。

クロードは操作を終えると一息ついた。水分を補給しながらもクロードは冷静そのもので、汗一つかかない。

「よし、摘出操作は終了。これで全摘出だろうか、ファルマ教授、見てくれ」

ファルマは体をどかせたクロードに代わり摘出腔の奥を覗き込み、摘出腔に指を入れて、固い腫瘍が残存していないことを確認する。

「はい、これで間違いはないと思います。摘出率は99%は確実かと。では摘出腫瘍を迅速診断に回して」



断端に腫瘍がないかということ、今度は病理学的に検索するためだ。病理医はまだいないが、臨床検査部と病理部の機能を合わせ持った部署が立ち上がっている。

ファルマは術中迅速診断を待ちながら、診眼に加えて拡大視を用いて、腫瘍の取り残しがないかを念入りに確認する。細かく見ても、光る部分はどこにもない。

摘出範囲は十分だと思われるが念のため、エレンにも確認する。ダブルチェックできるようになったのが有難い。

追加切除なく一度の手術で取りきる、目指すのは根治だ。

「エレンはどう見える？」

「取り残しはないと思う、光っている部分はないわ、でも顕微鏡を使っただけでもないし」

「細胞単位の残存を追うのは、限度があるよな……」

待機していると15分後、専従医からの判断が告げられた。

「断端に腫瘍はないとの見通しです。追加切除は不要です」

「ありがとうございます」

よしきたとばかり、ファルマが答える。

「再発防止のためにカルムスチン生体内分解性ポリマー基材を留置き、腫瘍標的放射性抗体の投与を行います」

「よし、ではこの段階はド・メディシス教授に任せるとしよう」

この操作はファルマが担当する。カルムスチンは、腫瘍のDNAの転写複製阻害を行い、腫瘍細胞の増殖を抑える。放射免疫抗体は、ファルマが術前生検で検体を徹底的に遺伝子検査することによって

見出した腫瘍に最適な抗体、それが腫瘍に特異的に結合し、さらに抗体に結合させたベータ線とガンマ線を放射する放射性物質が、脳内に散らばった可能性のある腫瘍細胞を死滅させるだろう。

「よし。では閉創、閉頭だ。深部から順にいくぞ」

クロードは硬膜を縫合し、ファルマが提供したフィブリンの糊で髄液が漏れないよう閉鎖しておく。無血的な手術であったので、ドレーンの留置も必要なさそうだ。糸で骨片と骨縁を縫い合わせて固定し、皮切の両端から丁寧に皮下を連続縫合、表皮も医療用ステープラーで閉創した。

「終了します。お疲れさまでした」

エレンとファルマが診眼でブロンデルの全身状態を確認する。クロードから引き継いで、ファルマは麻酔の術後管理に移行する。彼女が覚醒するまでは、20〜30分、気が抜けない。創部の感染については、ファルマが聖域を展開している限りはあまり心配しなくてもよいが、感染兆候には気を付ける。

「総手術時間は4時間41分、出血量は50量でした、お疲れ様です皆さん」

クロードが手術室を退室してゆくのを見送り、ファルマはそう言っただけで、そっと安堵の息をついた。

「幸いにして、予知能力は正確だったわね。ド・メディシス教授」

ブリジットは皮肉か称賛かわからない言葉をファルマにあてつけていった。

全身麻酔から覚醒したナタリーは、母親とファルマが視野いっぱいに彼女を覗き込んでいるのに気付いた。

「私に分かる？ よく頑張ったわ、手術は成功したわよ」

フランソワーズはナタリーの手を握り、ファルマはナタリーの様子を注意深く見守って麻酔覚醒後の評価を行った。このあたりの手順はファルマも知らないことが多かったため、ネットで正確な資料を入手できるようになって随分と助かっている。

「腫瘍は全部取ってくださったわ。命拾いさせてくださったのよ」

「よかった……ありがとうございます」

ナタリーは頭をもたげて、フランソワーズの隣に見えたファルマに礼を述べた。

ファルマは軽く微笑んだまま頷いた。首をもたげると、病室にはほかの医師や薬師、エメリッヒにジョセフィーヌも入って彼女の術後管理に携わっているのが見えた。ナタリーは多くの人間の協力を得て手術を終えたことを知り、もう一度繰り返す。

ナタリーが覚醒したと聞いて、クロードが下級医に呼ばれたのか術衣の上に白衣を羽織ったまま病室にひよこつと顔を出した。

「やあ、目覚めてくれて安心したよ」

「私もです、皆さん、ありがとうございます」

ナタリーはぼろぼろと泣きながら、一人一人の目を見て頭を下げた。

「難しい手術だったと思います、もう二度と目を覚まさないのではと、半分諦めていました」

「少し休んだほうがいい。痛みが出てきたら言っで。何か不安なことがあったら聞かせてほしい、今日はずっと傍についているから、疼痛管理は私と君の母上の担当だ」

ファルマが言葉に詰まるナタリーに目くばせをした。

「ド・メディシス教授」

「なに？」

「窓際のクロキユスがちよつときれいに見えるので、明日も生きていけるような気がします」

ナタリーは掠れた声でやつとそれだけ述べた。

「それはよかった。春になったら逆さに吊った青いバラをあげよう」  
「今度は、”不可能を可能に”、ですか。教授のそういう気障なところ、大嫌いです」

「それは誉め言葉に聞こえるな」

おどけたファルマを見てほほ笑んだ彼女は、うつらうつらして、やがて穏やかな寝息をたてはじめた。

< i 3 0 7 2 6 0 — 2 4 9 6 >

## 7章4話 窓際の黄色い花（後書き）

### 謝辞

本項の医療描写は、医師 高橋敦宣先生に監修いただきました。どうもありがとうございました。

### お知らせ

5月23日に、異世界薬局コミック版3巻が発売されます。表紙等の情報は活動報告をご覧ください。

### 参考文献

脳神経外科手術の基本手技 中外医学社 永田和哉ほか  
STEP 外科 外科総論 脳神経外科 小林士郎ほか

## 7章5話 日進月異

1148年3月中旬。

その日、ファルマは宮廷内守護神殿の神殿枢機部定例集会に参加していた。

神聖国大神官を兼務する聖帝エリザベスと、現地責任者として任じられたサロモンが推進した神聖国の宗教改革の恩恵を受ける形で、ファルマが執り行うべき神聖国の祭儀や会議は最小限となり、実務的なもののみにとどまっていた。

ファルマは週に一度神聖国を往復しているが、エリザベスは帝都に神殿仮本拠地を構えている。

「それでは、定例会を執り行います」

神官が準備した資料をファルマが受け取る。

以前は、守護神が神殿の重要な会議に出席し意見を述べることは認められていなかったのだが、エリザベスのはからいでファルマも参加している。

「守護神様より拝命した案件で、世界各地の呪器の所在地と神術網をまとめたものがこちらになります」

「早いですね、ありがとうございます」

そして最初は話の通じない人外扱いを受けていたファルマも、こまごまとした意見をしているうちに、神官たちも”人間の話ができる”とわかつたらしく打ち解け始め、耳を貸すようになってきた。守護神殿やそれに代わる神術拠点の設置のため各地を飛び回っているサロモン、そしてジュリアナからの説得も随分あったと聞く。

「神殿の結界が及んでいない地域はこちらです」

「なるほど……ここはまったくの空白になっていますね」

ファルマも深刻そうな顔つきになる。

「こういうところは悪霊の吹き溜まりになるのでございます」

「この地図によると、大陸の北西部、エンランドか」

エリザベスが目をとめ、扇子で地図を示した。神官が事情を説明する。

「ええ。把握してはいるのですが、そこは手を施しようがないのでございます」

神術の秘蹟を掌握することにより大陸中の国家の実権を握ってきた神聖国であるが、極地には神殿の支配を受け付けていないエンランド王国を宗主国とする国々があり、反神殿勢力が存在する。

「では、神殿の結界の保護下がないということは、独自の防御をしているのでしょうか」

「とはいっても、神術が使えませんからな。物理防御のみになります」

「えっ、そうなんですか？」

「……ご存じなかったのですか？」

「すみません、世界情勢に疎くて」

ファルマはエンランド王国というのが地図上に存在することは記憶していたが、非神術国家だということは知らなかった。

（別に反神殿勢力はいてくれていいし、むしろ健全なんだけど）

悪霊のことを考えなければ、それはそれで結構だ、とファルマは思う。

例えば、単一宗教が世界を間接支配しているこの事態は異常であるし、ファルマとしては、悪霊からの防衛線を拡大するために神殿の支配地域を広げるということは望んでいない。

世界情勢についてさして知識のないファルマが、おそろおそろサロモンに尋ねる。

「あの、その国の人々は神術が使えないとおっしゃいましたよね」

「さようでございます。かの国は強大な武力を有していますが、神脈を開くことができないので、神術使いは一人もいません」

「そうですか……もうひとつ質問です。悪霊は追い払うことはできても消滅させることはないと言っていましたよね」

「はい。間違いなく、いかなる神術を使ったとしても、悪霊は消滅することはございません」

サロモンが頷く。神殿神術やこの世界のあらゆる神術は基本的に悪霊を祓って近づけさせないだけであって、悪霊そのものを消滅させることはできていない。

「あなた様以外の者には、という注釈が付きます」

「なるほど。悪霊は消滅しないし、悪霊は人の居住地へ集まる性質があります。では、私たちが神術経路を充実させ神殿を信仰している国々から悪霊が追い出されたとなると、行き場を失った悪霊は、未曾有の勢いでエンランド王国および諸国連合に押し寄せているのではないですか？」

悪霊の駆逐は、砂場を掃くことに似ている、という話をエレンが



ら教わった。

どこかの砂をなくせば、どこかに砂山ができるだけだ。

「御明察です。すでにその兆候は掴んでおります。悪霊の密度が高まりすぎますと、それが融合・実体化して強力な悪霊が出現することとも懸念されます」

別の神官がファルマの質問に答えた。

エンランド国内に偵察を送ることはできないが、悪霊が国にとりつこうとしているのは遠目からでも観察できるようだった。悪霊にとりつかれた国がどうなるかというのは、ネデル国での大惨事を振り返れば、おぞましい結末を招くとわかる。

「それでしたら放つてはおけません、彼らを助けないと。宗教上の対立はあるかもしれませんが、それは横に置いて行動しなければ、大勢の命が失われてしまいます」

ファルマは議場の神官らにうつたえるが、一人の神官が反駁する。

「しかし、我々がかの国の救援と除霊のために武装した神術使いを派遣すれば、侵略だとしてただちに戦争が勃発するでしょう。ここは静観が無難です、もし援けを求めてくれれば応じればよいことでして」

「それでは後手後手になる。神殿がエンランド王国の除霊に協力するとの使いを送っておけ、除霊後、神殿ではなく神術拠点を置かせると要求しろ。除霊後は駐留も内政干渉もせん」

「よろしいのですか？」

「何がだ」

「派兵することによる利点がまったくありません。エンランド王国は神殿への敵対国家でございまして、ピウス聖下への挑発行為もあ

りました」

「大神官は代替わりをした、過去のわだかまりは水に流せ。エンランド王国が悪霊によって陥落すれば、周辺国へも被害が広がる。その前に手をうつのだ」

聖帝エリザベスは皇帝であつたときと変わらず、即断即決の人であつた。

この決定だけでは心もとないと感じたファルマは、その日の深夜になって、エンランド上空へとんだ。エンランド王国は島国からなり、都市文明もかなり発展しているようにうかがえた。ファルマの目から見ると、イングランド北部の街並みに似ている。

ファルマは大きな街に、悪霊の発生を示す黒霧が渦巻きはじめているのを見つけた。

あの時と同じだ、サン・フルーヴ帝都を覆いつくした黒い霧。その霧がある密度以上になると、悪霊は人々を襲い始める。

”疫滅聖域”

ファルマは地平線の先まで悪霊の凝縮された霧を吹き飛ばしたが、これが一時的な対処であることは知っている。よくて数日もつたろうか、といったところだ。

疫滅聖域は効果絶大だが噴霧型除虫剤と同じようなもので、持続時間を過ぎれば効果も薄くなり、また悪霊が優勢となってしまう。やはり、彼らを守るためには守護神殿を建てるか神術拠点を置き、神術経路の中に組み込まなければならない。

そうして考えてみると、かつて神殿が世界各地に支配域を拡大し、計画的に守護神殿を置いた手法が、きわめて合理的であつたことに驚く。神殿もただ、やみくもに周辺国家を侵略していたわけではなかったとうかがえる。神殿神術と神殿の統治を受け入れることは、

人民と神殿に相互に利があった。

エンランド王国の過疎地にこつそり神術拠点を置くこともできないが、悪霊は人口密集地に集まるため、都市に置かなければ意味がなく、エンランド王国の人々に内緒で置いたものは破壊されてしまう。目立たないほど小規模なものは、効果が薄い。彼らの理解が必要だ。

しかし何もしないよりはと考えると、ファルマは晶石に神力をため込んだ神術陣展開用の小型杭を高い鐘塔の壁面に穿ちこみ、塔の高低差を利用して傘で覆うように最小限の結界を張った。

敵国への不法侵入だが、仕方がない。

夢中で結界を固めていると、トイレに起きたらしい一人の少年が、三階の窓を開け、杖を片手に空を舞うファルマの姿を目撃していた。ファルマは自分の口に手を当てて、黙っているようにというジェスチャーを送ると、少年は顔をこわばらせたまま頷いて窓を閉めた。数人の目撃者が現れるのはやむをえないが、あまり大勢になると厄介だ。

ファルマは適当なところで切り上げることにして、その街を飛び去った。

「んー……エンランドの島々は散在しているし、その島々の居住地に結界を張るのは不可能だな。それにこの国の悪霊を追い払ったとしても」

このエンランド王国から追い出された悪霊の群れは、次はどこへ行くのだろうか？

いよいよ行き場をなくした悪霊たちは、残る人類の居住地である新大陸へと向かうに違いない。彼らは悪霊に対抗できるすべを持っているのだろうか？

（やはり悪霊に対する最終的な解決法は、神薬”千年聖界”の創造しかないのか）

しかしこのところ、最高難易度の神薬の創造については「あと少し」という感触ではあるものの、失敗続きで、試みようにもファルマの神体の崩壊もこれ以上は続けられないレベルにまで達していたため、回復を待っているところだ。

ファルマは悶々とした心境で神聖国へと降り立つ。

千年聖界以外に、利用できそうな神薬や秘宝の情報はないか、その手掛かりを探すためだ。

空から大神殿の屋上へ戻ってきたファルマに遭遇した警備の下級神官は、慌てて拝礼し、上役呼びに走った。入れ替わるように上位神官が猛ダッシュでやってきてファルマを迎える。

「はあっ、はあっ、お帰りなさいませ薬神様。今日はお戻りの予定をうかがっておりますが、急用でいらっしゃいますか？ ブリュノ・ド・メデイス閣下をお呼びいたしましょうか」

「今日は神薬の創造の訓練に来たわけじゃないから父は呼ばなくて構いません。ちょっと立ち寄っただけで」

「それは大変失礼いたしました」

神術薬学の専門家でもあるブリュノは神聖国へとどまり、神官たちに資料を開示させて神薬の研究と改良を続けていた。今や、神聖国のすべての禁書は随意に入手できるため、神術の使えないブリュノ自身が、神官たちの神力を媒介に調査できた霊薬もいくつかあった。

何か大きな発見があれば、ファルマを呼ぶだろうし、ならば彼には研究に専念してほしいと思う。

「かわりに、神殿神術と悪霊に詳しい方を呼んでください」

「は。かしこまりました、大神殿随一の神学者をお呼びいたします」

世俗の服を脱ぎ、神聖国での装いを整えたところに、学者風の神官服を着て眼鏡をかけた女性が、ファルマの部屋へやってきた。

「大神殿禁史書庫の司書、神学者リアラ・アベニウスであります」  
「いらつしゃい、入ってください」

居室の前に直立不動で名乗りをあげた彼女は、ファルマを直視することもできずガチガチに緊張していた。ファルマは神殿にとって数百年ぶりに顕現した正統な守護神であり、その守護神から指名を受けるというのは、大変なこととらえているらしい。

「いえっ、ここで結構でございます」

リアラは、ファルマの居室の前の床に這いつくばるように平伏したまま動かない。

「相談があるんです。中で話しましょう。お願いします」

ファルマがもう一度入室を勧めたので、彼女は迷った挙句席についた。

「ご命令とあらば」

リアラは入室して着席した後もブルブルと手が震えていた。予想外の反応に、ファルマも困惑する。神聖国に入ってから、ここまで面と向かって怯えられたことはなかった。

「神学者の知見からすれば、守護神と呼ばれる存在と対面するのはそんなに怖いものですか？」

「……やはり、すべてお見通しなのですね」

「私があなたにどんな酷いことをすると思っているのか、逆に気になります」

彼女は観念した。

「守護神様とまみえて、殉職しなかった神官のほうが少ないのです。死因は多岐にわたります。守護神様に加害の意図がなかったとしても、強い神力にあてられて死んでしまった者も、暴行を受けたもの、お姿を直視したがために目が潰れた者もいます。現にピウス聖下もあなた様の不興をかったのではと……」

決死の覚悟でやってきたのだろう。

なるほど、ピウスの死因と関連付けられているのか、とファルマは小さくため息をついた。

「彼のことは不幸でした、ですがその死は偶然です。それに、私は人間社会で人として三年間暮らしてきました。私の周囲にいた人々は今も皆さん元気になっています、私の姿を見て目が潰れた人もいませんよ。それに今はあなたに用があるのではなく、あなたの知見に用があります」

「本当でございますか？ それは大変失礼いたしました」

どうやら加害は免れそうだと思ったのだろうか、リアラはぎゅつと強張らせていた肩の力を抜き、ファルマの顔をおずおずと上目遣いに見つめた。

「それで、何をお調べいたしましょう」

「悪霊を完全に、恒久的にこの世から消してしまえる方法を探しています。私がいなくなってもこの世界の人々が悪霊に脅かされず安心して暮らせるように、それを実現したいのです。その方法は本当に神薬だけしかないのでしょうか」

神薬や霊薬についての研究はブリュノに任せて、禁書関係も徹底的に調べられているので、ファルマは別のアプローチで歴史的な背景をリアラに尋ねてみた。

リアラは失礼しますといって退出すると、禁書庫から書籍の山を抱えて戻ってきた。

ファルマも見たことのない表紙、「禁史書・原典」というものだ。彼女は司書らしく的確に書籍を引っ張り出してきて、ファルマに一冊ずつ記述を見せる。

「有史以来、悪霊の完全消滅に成功した守護神様はいらっしゃいません。ですので、悪霊を消す方法は現時点では存在しない、とお答えするしかないと思います」

「では、当座をしのぐにはやはり神薬”千年聖界”しかないということになりますか……」

抜け道はなく、ふりだしに戻りそうだ。すると、その言葉を聞いたリアラは慌て始めた。

「あなたが神薬の創造に挑まれるとは存じ上げませんでした。と、いうことはもう、現世からお隠れになるのですか？」

「ん？ それはどいう」

「千年聖界を創り給うたあと、現世に留まられた薬神様はひと柱もあらせられません」

「えっ」

神薬の創造の話はどうやら神聖国内でも公にはなっていないかったため、リアラはファルマが今何をしているのか、神殿中枢部から聞かされていなかったという。

これはブリュノらも知らなかったことなのだろう、もしくは知ったうえで、敢行させていたのかもしれないが。ファルマは息をのんだ。

「……つまり、神薬を創ると消滅してしまうということですか？」

「聖典には記載されておりませんが、古語を読み解くに、そういう解釈も可能と思考いたします」

「道理で……術中に体が崩壊していくわけだ。あのまま完成させていたら、本当に戻ってこれなかったのか」

ファルマは体の芯から冷えてゆくかのような恐怖を感じた。

神薬を創れば消滅し、創らなくても時間切れで消滅する可能性がある。

危ないところだった、とファルマは胸をなでおろす。

この世界における神薬、神術、守護神、悪霊とは、そして墓守とは何なのかを考えたとき、それらの概念は確かに、宗教のような顔をしている。

地球における宗教は、人々の不安を取り除き、倫理を教導し、欲望を制御し、共同体の安寧を維持するための役割を担ってきた。細かい反論はあるだろうが、少なくとも宗教は人が人のために作った”人のための物語”だ、とファルマは理解している。

だが、この世界における宗教の縁起は地球のそれと明らかに異なる。

守護神と呼ばれる異界の生贄を次々に召喚し、悪霊への脅威を煽り、神術を与えることで守護神への人々の信仰を集め、信仰を神力へと変換し守護神を鎡の歯車で潰し、神力を世界を維持する駆動力



へ変えてゆく。各守護神にまつわる伝記のようなものは存在し神殿はそれを崇め奉り聖典としているが、この宗教をこの世界に根付かせたのは墓守本体であり、異世界人が作り上げた”人のための物語”ではない。

だから、この世界の神話には、幾重にも仕組まれた巧妙なトラップが存在するのだ。

神薬の調査は魅力的で、歴代の薬神たちはそれに手をだしてきたに違いない。

しかし、その代償は禁書には完全には記載されておらず、ファルマも危うく罠に落ちるところだった。

「神薬の調査は、いよいよという時にされてはと。今がその時だとおっしゃるのなら、残念ですが」

「そうですね。有益な情報に感謝します。リアラさんのおかげで踏みとどまりました」

まだ、この世界でやり残したことはたくさんある。  
今ここで、消えるわけにはいかない。

「今日はありがとうございました、また日を改めて、質問などをまとめられます。あなたのほうから私に何か質問がありますか？」

ファルマがリアラに促すと、リアラは思い切って話しかけてきた。

「あの、一つ、薬神様のお知恵をお借りしてもよろしいでしょうか。書庫で書を読んでいるともう死ぬかと思うほど咳が出る時があり最近特にそれがひどいのですが何がいけないのでしょうか」

リアラが息継ぎもなく一気に早口で言い切ってしまったので、フ

アルマは気が抜けて表情を緩める。そして、薬師の顔つきになった。

「書の間に挟まった埃やダニ、昆虫の死骸などを吸い込むことによっておこる喘息のようですね。書庫で本を読まず、掃除のいきとどいた別の部屋で、よく払ってから書物を閲覧してください。書庫ではマスクをすればよいかもしれませんが。発作が起きたときのために、薬を出しますよ。薬をあとで誰かに届けてもらいましょう」

「ありがとうございます！ あ、今、薬神様というより薬師の先生に相談しているみたいでした」

「いつかただの薬師に戻ってこの世界で穏やかに暮らしてゆくために、今をもがいているところです」

ファルマは寂しげに微笑んで立ち上がった。

ナタリー・ブロンデルの膠芽腫の脳手術から8日後。

彼女は神薬の効果が切れたあとも術後の合併症や感染症もなく良好な経過をたどり、抜糸も済んで、ついに退院の日を迎えた。

大学は試験の後春休みに入り、学生たちは故郷へ帰省などをしている者も多いが、帝都に住まうナタリーの大学の同輩たちの中には、退院を祝いに来ているものがあつた。

傷を隠すためつば広のおしゃれな帽子をかぶったナタリーは、馬車に乗り込む前に、ファルマとクロード、その他のスタッフら、見送りの列をなす一人一人に懇ろに礼を述べる。彼女の病室の窓際のクロッカスの花はもう枯れてしまったが、手術成功と無事の退院は快挙だということで祝意を表した病院職員たちから大きな花束が渡され、はにかんだような笑顔を浮かべていた。

「何から何まで、ありがとうございます。こういっては失礼かもし

れませんが、生きて病院を出ることができるとは思いませんでした。先生がたを信じてよかったです」

「退院おめでとう。しばらくは通院と療養生活が続くけれどね」

「あまり無理をしないことだよ」

ファルマとクロードがそれぞれ声をかける。ナタリーは笑顔で頷き、二人に感謝の手紙を渡す。

「体が鈍ってしまうので、散歩をしようと思います」

「必ず誰かに付き添ってもらってね」

「侍医長様と筆頭薬師様ご両名に休暇をいただきましたからには、親子水入らずで別荘でゆっくりしますわ」

答えたのは彼女の母親でもある、宮廷薬師フランソワーズだ。

今回の大病を機にこじれていた娘との仲も良好になり、今はもとの親子関係を取り戻しつつある。フランソワーズもまた、宮廷や大学、そして治療中の病院でファルマと出会うとよく話をするようになった。

「何か異変があったらすぐに戻ってきてくださいね」

「馬車で一時間ほどの領地に滞在しますので、急変時にはすぐに戻れますわ」

「それでしたら安心です」

ナタリーの病気によって、外科医と薬師、そして技師との連携も固まり、大学内には多くの改革が起こった。

「休暇から戻ったら、私と認知機能回復のためのリハビリを続けていこう」

「はいっ、教授。春休みの間に改善できるように頑張ります」

「それでは、これで」

フランソワーズとともに迎える馬車に乗り込む彼女の晴れやかな笑顔を見送り、ファルマもクロードも手ごたえを感じていた。

「無事に終わってよかったわね。難しい局面だったでしょう?」

エレンがファルマの肩をぽんと叩いてウィンクをする。しかし、ファルマは複雑だ。

「毎回、綱渡りの状態なのを何とかしたいよ。それに、まだ再発の可能性だって残ってる」

「一時的にでも、成功を喜ぶ癖をつけたら? ぬか喜びだったとしても、楽しいことが多いほうがいいじゃない。ずっとそんな調子だと、息が詰まってしまっわ」

「まっただ。やったね! 大成功だ!」

ファルマとエレンはハイタッチをして、それに加わりたそうな顔をしていたクロードや周りにいた病院スタッフたちともハイタッチをし、かなりの人数がいたのでそのまま胸上げの流れになった。ファルマも流れて胸上げをされたのだが、何名かはファルマのあまりの身軽さに首をかしげていた。

「ド・メディシス教授、中身が入ってないかと思うぐらい軽いですね」

「なんか霞か雲みたいでしたけど、気のせいでしょうか」  
「そういわれるとなんか傷つく」

エレンは薬局へ戻り、ファルマはその足で大学の会議室へ向かう。会場には、エメリッヒとジョセフィーヌ、医学薬学の専門家が続

々と集まってきた。

神術薬学の専門家らを集めて対外的に極秘裏に取り組んでいるテーマはいくつかあるが、最優先しているのは聖帝が大神官ピウスの代わりに負った融解陣の解呪だ。

「それでは第四回、融解陣対策研究進捗会議を行います」

コアメンバーであり、研究リーダーであるエメリツヒが黒板を使って現状を整理する。

往診を終えたパツレもやってきた。

エメリツヒの話を、ファルマたちが議席について聞いているという状況だ。

「まずはこれまでの背景を整理します。この世界の人々は、神術使い・平民にかかわらずゲノム中に神力の発現にかかわる、今回我々が神力遺伝子群と名付けたものを持っています、それはファルマ教授が遺伝子配列を解析して確認済みです」

「神力に関与する因子はゲノムだけではなくミトコンドリアDNA中、その他の細胞内共生器官中も候補かな。そこはまだ調べていない」

「いやまて、ウイルスや核酸の潜伏感染もありえるぞ」

エメリツヒの仮説に、ファルマとパツレが即刻補足した。

ファルマが全ゲノム解析を行い、地球人とこの世界の人間の遺伝情報を比較した際に、それほどの機能を持ちそうな遺伝子領域は見当たらなかったからだ。また、平民と貴族の遺伝子を比較した際にも、発現していそうな遺伝子はそれほど多くはなかった。

ただ、それらの発現制御機構はゲノム以外にも存在しているかもしれないので、見逃している可能性は否定できない。この、神力遺伝子群の構成要素と全貌はまだ明らかになっていない。

「はい、今補足いただいたものも含め、神術使いはこれらの遺伝子群が正常に機能しています。我々が全員受ける神殿の洗礼儀の際、神力遺伝子群の最上流に位置する神脈遺伝子をオンにすることによって神力遺伝子群が動き始めます。神術使いは神力遺伝子群を駆動させ神力を呼び込み、各系統の神術を使えるようになります。例えば私は、周囲の気圧、気体の密度、湿度を操作することによって、風の神術が使えます」

エメリツヒは、指先で風を起こす。

神力が何を原動力とする力なのか、その解答をファルマの中では持ち合わせていない。上位次元の存在たる墓守が特定の遺伝子の保因者に付与したこの謎多きシステムだが、この世界に存在する神術の四属性は、すべて物質創造と物質消去の下位互換であると説明することができる。

水属性は水、火属性は可燃物、土属性は鉱物粒子、風属性は気体の調節。

ファルマは科学的な理解のもとに全ての属性を等質のものと見抜き、そう扱うことができるが、神術使いたちはほかの属性を使えないと暗示にかかっている、もしくは他属性の神力遺伝子群が制御されて使えないだけで、遺伝的には全ての属性を使える下地はあるのだ。

「私たちがなぜ一つの神術属性しか使えないかという疑問については、一つの属性が決まると、ほかの属性に關与する遺伝子群は抑制、または機能が破壊されるからと考えられます。その根拠は、生殖細胞と体細胞のDNAメチル化やヒストンの修飾……ええと、言い換えます。DNA変異を伴わない修飾が起こっているのを実験によって確認したからです」

生殖細胞の段階では、個人の神術属性は決まっていない。

だが、体細胞レベルでは一つの属性しか使えなくなるように、細胞内で調節されているようだ。

「いっぽう平民が神術を使えないのは、これらの遺伝子群が欠損または、遺伝子変異を伴わない制御によって部分的に機能不全になっているからと考察できます」

エメリツヒは全員の顔をゆつくりと見まわすと、おもむろに彼は黒板にスライドを吊るし、実験結果を発表する。大きな成果を発表できる場を与えられて興奮してきたのだろう、彼の頬は紅潮していた。

「この仮説を検証するため、神術使いである私の細胞を培養し、遺伝子工学的手法を用いて神脈遺伝子を機能不全にすると、その細胞は神力を産生することができなくなり、このように平民のそれと同じ状態になりました。その状態から、再び機能を活性化させると、細胞は神力を放出するようになりました」

エメリツヒが次々に聴衆に示した結果は、ファルマ以外の参加者たちを驚愕させた。

ちなみにファルマは彼の指導教官であり、当然研究の進捗は知っていた。

「また、私の親戚にあたり現在は平民のシャルロット・ソレルさんは、ファルマ教授により全ゲノム解析を実施済みで、神力遺伝子群の一つに欠損があるため彼女の父の代から神力を産生することができません。この彼女の培養細胞の遺伝子の変異を修復すると、再び神力を産生することに成功しました。さらに、数代前に遡って平民である者については、多くの遺伝子変異・機能喪失が起こっており、

それら全てを修復しない限りは神力の回復が困難であるという結果も得られました。これは、世界初の報告であります」

「なんと！」

「これは大したものだ」

議場はどよめきに包まれた。その報告は、それまでの神術の常識を覆すだけのインパクトを持っていた。それはエメリツヒとジョセフイーヌが苦心の末突き止めた、もっとも大きな発見といえた。

ファルマはエメリツヒに研究を任せ主体性を重んじながら、彼への細やかな指導を欠かさず、初心者であった彼を超短期間で、自立目前の研究者へと育てつつあった。

「我々は今、神話の世界を、科学の言語を以って紐解こうとしています。これからの神術使いは守護神を盲目的に信仰し、天賦の属性に依存するばかりでなく、自分の体の中で何が起こっているのか、自分の頭で考えるのです。一人一人が、神術という現象を理解するための、科学的思考を始めなければなりません」

今やエメリツヒは、自分の頭で考え、自分でそれを実証することができる。

装置や手法はファルマのサポートを必要とするが、とにかく一人で研究をしていける人材として飛躍をみせていた。

「特別な神術使いに稀に現れるという聖紋、かつて枢機神官の用いていた聖呪紋、そしてエリザベス聖下の融解陣、さらに禁術の代償として受ける呪いすらも、この遺伝子群の制御によるのではと考えています。これらの遺伝子相互作用を明らかにすることによって、我々は神術体系を掌握できるのではないでしょうか」

エメリツヒはたたみかける。



議場はこのパラダイムシフトについてゆけず、しばらくの間動揺に見舞われていた。

「本当は、平民が貴族になることも、複数の神術属性を得ることも、神力の底上げにすら手が届くかもしれないというのか」

「知りすぎてしまったのではないか。そんなことをすれば、守護神の怒りをかうのでは」

神術に関する遺伝子にふれることを、宗教的な理由から危惧する者もいた。

「ええと、私の守護神は薬神ですが」

エメリッヒは咳払いをして言いくそくに答えた。

エメリッヒがファルマに視線を向けようとしたが、ファルマはふいと視線をそらす。梯子を外されたエメリッヒは無難な発言にとどめた。

「少なくとも現在の驚異的な進捗状況を鑑みしても、薬神様からはご支援いただいているものと自負しております。ともあれ今回の発見が、神術のより体系的な理解に役立つと確信しております」

学者たちはノートをとるのに余念がなく、パツレはエメリッヒのデータに強い関心を示していくつか鋭い質問を飛ばしていた。

「エメリッヒ・バウアー君、素晴らしい発表をありがとうございます」

「お褒めにあずかり光栄です、教授」

「本会議といたしましたは、バウアー君の結果をもとに、融解陣の制御を次の目標とします。エリザベス聖下の背中にある融解陣は、

皆既日食となる日にそれを宿すものを溶かします。聖下の神力遺伝子群は、融解陣を発現しうる独特の機構が働いていると考えられます。第一戦略といたしましては、聖下の融解陣を少しずつ切除し……」

ファルマがエメリツヒの後を受けて会議を進行していると、パツレがふらりと立ち上がった。

「一言言わせてくれ。確認なんだが、融解陣は”神術使いにしか”発現しないんだよね？」

「そうです。融解陣は周囲に居合わせた者の中で、それに相応しい神力遺伝子群の発現パターンを持つ者に、次に発現が誘導されます」  
「培養細胞は、神力を産生しているんだよね？」  
「そうです」

パツレが発言をし、ファルマが答える。

その答えを聞くと、パツレはにやけながらエメリツヒに向き直った。

「エメリツヒ・バウアー」

「はい、パツレ・ド・メデイス師。ご質問でしょうか」

「聖下の培養細胞の準備は整っているんだろう？」

「はい、すでに」

エメリツヒの言葉を受け、パツレは答えを言いたくて仕方がないといった顔をしていた。

「アガってるぞ」

「アガっている？」

ファルマとエメリツヒは互いに顔を見合わせたが、エメリツヒは首を傾げ、ファルマは何かに気付いてあつと息をのんだ。

「ならばもう、E r a t   D e m o n s t r a n d u m（すでに示された）だ」

エリザベスに傷一つつけず、彼女を融解陣から解放する方法はすでに、エメリツヒによって示されていた。

「聖下、お話があります」

宮廷に参内したファルマが、クロードとジョセフィーヌを伴いエリザベスに声をかけた。貢献のあったエメリツヒやパツレを連れてきたかったところだが、宮廷人ではないので連れてくることができなかった。聖帝は神官と國務卿を侍らせ、一心不乱に政務を行っていた。

「なんだ、そんなにそろそろと改まって」

「聖下の融解陣を無力化するための一つの仮説が導き出せました。方法は何十通りもありますが、陛下のお体にとって負担のない方法はこれです」

「なんだと？」

エリザベスは急展開に首をかしげる。

「聖下の神脈を一時的に閉鎖します」

ファルマはエリザベスと神官、そして國務卿らを説得し了承を得

る。

「それでは、失礼」

指先を彼女の背にあて、背面から神脈を一時的に閉鎖した。

するとエリザベスの背にあり存在感を放っていた融解陣は雲散霧消し、ファルマが持ってきた彼女の培養細胞表面に滲み出るように転写されたのである。

ファルマはしてやったりとばかりに頷き、ジョセフィーヌとクロードは仮説が正しかったことで驚愕の表情をみせた。

「どういうことだ……？ 背中の紋が消えたのか……？」

エリザベスは侍女に持たせた合わせ鏡を見ながら、放心状態だ。

戸惑う彼女に、ファルマが説明をする。

「これを成しえた理由をご説明いたします。前提としてこの融解陣は、神術使いの細胞でしか存在することができません。今、神脈を閉鎖し聖下の神力が途絶えましたので、融解陣は宿主が死亡したと認識します。そして、付近に存在するもののうち、もっとも大神官となるにふさわしい者の細胞の遺伝子を活性化させて新たな融解陣を作り出します」

ファルマは説明用の模式図を示しながら話をする。

「以前聖下よりいただいた細胞を大量培養していましたので、そちらに発現を誘導したのです。あとはこれを神聖国へ持ち運び、平民技師の手で培養細胞に融解陣を転写し続けます」

ジョセフィーヌが写し終えた培養細胞の大型シャーレをエリザベ

スに見せる。

「安定的に培養が続けられれば、聖下の神脈を開いても支障なしでしょう。聖下の神力が途絶えると大神殿から世界各地を繋ぐ神術回路が遮断されますので、私が一時的に神力を注ぎ込み神術回路を維持しておきました。皆既日食が来たとしても、融解するのは培養細胞、新たに発現するのも培養細胞。誰も死ぬことはありません。これにて鋹の齒車からの呪縛は断ち切れました」

「なんと！」

鮮やかな手腕に、エリザベスはルビーのように鮮やかな輝きを持つ紅い瞳を見開いた。

信じられないといった顔つきだ。

「さっぱりわからん！　だが、とうとうそなたの頭脳は人智を超えたようだな」

「それは違います。多くの人々の知と、そしてたゆまぬ努力によって解決法が、文字通り浮かび上がってきたのです」

「いずれにせよ、見事である」

エメリツヒの実験結果があり、ジョセフィーヌやパツレの思いつきが複雑な化学反応を起こしての、集合知の勝利ともいえる怒涛の解決策だった。

ファルマは着想に至った経緯と、それにかかわった人物をエリザベスに順繰りに説明する。

「そうであつたか。では祝宴を開こう、功績のあつたすべての者に褒美をつかわす。これで余も、雑念に煩わされず政務や祭事に専念することができよう」

エリザベスはまさに、憑き物が落ちたように大きくうーんと伸びをした。

ファルマは彼女の背をゆつくりとなでおろしながら神力を注ぎ込み、彼女の呪いを解き放った。

論功行賞の人事の結果、エメリツヒとジョセフィー又は新領地を得、今回の研究にかかわり功績を上げたすべての者に勲章と報奨金が授与された。特に功績の大きかったエメリツヒについては、サン・フルーヴ帝国の伯爵位も与えられた。スパイン王国の貧乏貴族であったエメリツヒは、サン・フルーヴ帝国医薬大に届いた聖帝からの親書を受け取り恐縮していた。

「過分なお心遣いのような気がします。私は、スパイン王国の出で、まだ学生の身分なのに……。それに、見返りのために研究をしていたわけではないです」

「君がやったことを正當に評価していただいたのだと思うよ」

「すごいじゃない、叙爵だなんて！ 世襲じゃない叙爵ってすごいよ」

ファルマとエレンは、エメリツヒを惜しみなく讃える。エメリツヒは頭をかいて照れていた。

「それでは、ありがたきお受けいたします。これで弟や妹たちの暮らしも楽になるでしょう」

「しばらく研究室は休んで、しっかり春休みを満喫しておいで」  
「そうすることにします」

エメリツヒは歯を見せて笑った。

（何があっても、諦めずに一つずつ解決していけばいい）

災難続きの毎日だが、決して後退し続けてはいない。

自分はこの世界に来たときは孤独だったが、もう、一人ではない。  
数えきれない人々に支えられ、頼れる人々がいる。

ファルマはまだ多くの謎に包まれた彼の肩に宿る薬神紋に触れ、  
それをぐっと握りこみながら、そんなことを考えていた。

## 7章5話 日進月異（後書き）

謝辞：本頁の生物学的ギミックにつきまして、生物学者の meso-cascade 先生に考証していただきました。  
どうもありがとうございました。



## 7章6話 未知への出航

1148年3月末。

聖帝エリザベスはエンランド王国へ使者を送り、大神官が代替わりをしたことと、要請があれば悪霊の除霊に協力するという旨を伝達させた。

しかし、悪霊の襲来危機のさなかにあるエンランド国の国王は予想通りの反応を見せた。

神聖国とは長く敵対関係にあり、代々の大神官はエンランド王国を支配下に置こうとして幾度となく襲撃をかけてきた。時にはだまし討ちもあった。援軍とて信用はならない。

なんとまあ、上位神官の予想したままの答えが返ってきた。

このため、神聖国としても派兵できず静観するしかない状況になっている。

エリザベスは前任者による風評被害だと不貞腐れたが、こればかりは仕方がない。

とはいえエンランド王国は武力国家だが、非神術国家であるので、悪霊からの攻撃にすこぶる弱い。

援軍を断ったエンランド王族や軍人はともかく非武装住民が心配だが、ファルマがひそかにエンランド王国の数か所に残してきた結界周辺には悪霊が発生しないことに気づいて夜間はそこへ避難しているようだったので、ファルマはせめて無防備な住民を悪霊から守るため、闇に紛れて時折結界を追加しに行ったりもした。

もし、このままエンランド王国と神聖国の間で膠着状態になり身動きがとれなくなるようであれば、ファルマがエンランド国王の夢枕にでも現れて派兵を受け入れるよう囁くしかないか、とも考えて

いる。

幸いといってよいのか、エンランド王国も神聖国と同じ守護神を起源に持つ神話体系を信仰してはいるようで、”守護神の天啓”は奥の手として使えそうだった。

人の信仰心につけこんで積極的に騙しに行くのは、もちろん気乗りはしなかったが。

そんなこんな状況に頭を悩ませつつ、療養中のナタリー・ブロンデルの近況も把握しつつ、ファルマたちがやってきたのはド・メデシス尊爵領マーセイル港、目的は出航式への参列だ。

融解紋からすっかり解放され、ますます英気みなぎる聖帝エリザベスの勅令を受け、ジャン・アラン・ギャバン提督は予定通りギャバン大陸を目指し出航することとなった。

二百名の乗組員で五隻の戦列艦を率い、新航路へ繰り出す。

その名も、ギャバン大陸探検隊。

今回は通商貿易目的ではないため帝国東イドン会社の出資ではなく、出資者はサン・フルーヴ帝国で、神聖国も支援に回り、海軍が全面に出てきている。

ファルマらは、マーセイル領主であるブリュノらとともに出航式に参加し、船団と乗組員たちを見送ろうとしていた。神聖国で研究漬けの毎日を送っているブリュノも、この時ばかりは領主としての務めを果たすべく、神聖国からマーセイルにやってきた。

出航式では楽団の演奏や、エリザベス聖帝の勅命状の読み上げ、ブリュノの激励、ジャン提督のあいさつなどがあった。

ファルマは、航海中の栄養状態の改善や、水や食物の長期保管に関する技術提供、船医、薬師の教育など、この日までに全面的な支援を行っていた。

特に感染症治療や創傷の治療に対する教育は念入りに行った。

異世界薬局のロングセラー商品でありジャン提督お気に入りビタミンC配合の船乗りの飴も、ジャン提督の要請で全員に支給される予定である。これは、地球史における大航海時代、船員たちの主な死因となった壊血病を完全に予防する。

出航式が終わったあと、顔見知りの船員たちがファルマらを囲んだ。船員たちはソワソワしている様子だ。それもそのはず、

「あれが楽しみで、早く出航したいんです」

「あれですか」

「あれ、航海中じゃなくて市販してくださいよ」

ファルマから男性船員たちにプレゼントがあった。長期航海中にもどうしても性欲を持て余すということで、男性船員から何か薬局で性欲解消グッズを作ってくれないかとせがまれていたのだが、内部にローションを充填した使い捨てで衛生的なカップを開発して、必要な人には支給することになった。このため、彼らからは大変喜ばれている。

ジャン提督もブリュノに挨拶をした後、ファルマに近づいてきた。彼は提督の正装のジュストコール（上衣）に身を包み、ビコルヌ（二角帽）をかぶっている。

背筋はぴんと伸ばし、ひょうひょうと歩く。

「じゃあのお、店主さん。いろいろと相談に乗ってもらって感謝じや、ありがとうございます」

「ジャンさん。困難の連続かと思いますが、くれぐれもお気をつけて。新大陸で危なくなったらすぐ海上に戻ってくださいね」

「うむ。逃げ足は速いつもりじゃ！ わしゃあ拙速主義じゃからのう！ 探検も資源の探索を欲張らず、安全な拠点が一つ二つ確保で

きて、除霊神術陣を敷いて補給のための算段ができればええ。じゃあ、いつてくるでう！」

「新大陸で危なくなったら、これを置くと結界ができますから」

ファルマの後ろに控えていたロツテは、火炎神術陣を描いた使い捨ての不燃性シート数十枚と種火の入ったプレゼントをジャン提督に贈呈する。ジャン提督はロツテのはからいが意外だったのか、満面の笑みで嬉しそうに受け取った。

「これは頼もしいのう！ 上陸後は平民船員も多くて銃撃ぐらいしかできんからのう、神術陣があればしばらくは悪霊を退けられるで！」

ジャン提督が上陸するであろう新大陸の一带には現地住民はいないが、野生動物などと遭遇する危険もある。野生動物であればまだましで、それよりなにより悪霊に遭遇する危険も存分にあった。聖帝のはからいで航海には神官を帯同させ、さらに腕利きの神術使いが同行するが、航海経験のある神術使いが少なく、船員の二割ほどしか神術使いがいない。

そんな状態で「船の墓場」といわれる悪霊の出現スポットも通過予定。

前はほとんど上陸していない新大陸には、まず間違いなく悪霊が待ち構えている。

そついった意味でも、厳しい航海になるだろう。

今回、ファルマは航海の安全と期間短縮もはかるため、船に劇的な改良を施すよう提案した。

まず、帆船の風力と手漕ぎのみだった推進力に、水の神術陣を船底に、風の神術陣を帆に施し、省神力で駆動する流体整流のブースト機構を追加した。

さらにその速度に対する船底の抵抗を減少させるため、可動式の水中央翼を取り付けた。

この改装を施した後のテスト航行の結果、航行速度は現代地球の高速船と遜色のない速度をたたきだした。

試乗したジャン提督は、そのあまりの速度に驚き「こんなに速度が出るのなら、進路を見失ったり座礁を気にせんといかん」と面食らっていた。

ファルマとしても、無謀な技術を押し付けたくもないので、基本的には速度ブーストは緊急時にと伝えておいた。

「ブーストのための加速は神術陣を稼働させることで行いますが、そうはいつでも神力切れが心配ですので、私が晶石に神力を詰めておきました。この杖を使って船に神術をかければ、神力をセーブすることができます。まず神力切れはないでしょう」

ファルマはあらかじめジャン提督の側近の風と水属性神術使いに一本ずつ杖を贈呈している。

そのほかにもプレゼントはあった。

羅針盤に代わる、どんなに船が傾いても正確に方位を知ることができるハンドベアリングコンパス。

ループプリズム式で、正立像を得ることのできる小型双眼鏡。

そして、ドーム状で三つの機能が圧縮されたアナログの温度、湿度、気圧計。

これらは、マーセイル工場で組み立てられ、市販化が検討されているものだ。

精密なものではないが、ある程度の変化が観測できればそれで目測は立つだろう。

彼は船舶無線通信の実装も行った。

目指すは無線通信システムを搭載した船舶と、大陸間での洋上通

信だ。

音波や電波は、波長の2乗に反比例して減衰する。

同じ出力であれば、長波ほど電波は遠くに届くということになる……普通はそう考えられるのだが、短波は、電波を反射する性質を持つ大気上層の電離層での反射を利用し、地平線の向こうまで届かせることができるため、長距離通信に向いている。ちなみに、この世界の大気圏に電離層があるのかないのか、先に確認は怠らなかった。

地球史を振り返れば、1902年、ノーベル物理学賞受賞者でありイタリア人グリエルモ・マルコーニによりイギリスとアメリカ間をつなぐ大西洋大陸間横断無線通信が確立している。当時の技術としては洋上基地局をリレーして行われたらしい。

無線通信に最低限必要なものは、送信機と電源、そして検波器と復調回路を含む受信機である。

ファルマは電子工学の基礎的な知識を持っていたものの、うろ覚えでは事故につながると考え、必要な情報はネットで確認しながら作業をすすめた。

レトロな電子工作が趣味の大人たちのおかげで、この異世界でも作れそうな送信機の回路図などは手に入れることができたし、真空管の作り方は探せばどこにでも載っていた。

コンデンサも山ほど自作して、静電容量をはかるためのテスターは研究室から持ち出してきていたので、それで容量値を計測した。銅線の被覆も、器用なことではできないのでゴム管に銅線を通し、ゴムの保護のために布を巻いていった。見てくれはコタツ線のようなある。

真空管は割れないガラスを制作できるメロディとともに、彼女の工房で制作した。

フィラメントやプレートトライオードの素材は物質創造で作り出せたので、それを加工する。三極真空管のヒーターに橙色の光がとるのをみて、

どこことなく温かく、郷愁のようなものを感じた。

電源は、以前風力発電をしたときのノウハウを生かし、ファラデーの電磁誘導を利用し、誘導コイルを機械的に回転させることにより起電力を発生させる発電機を試作して……はみたものの、真空管を含む回路では電力消費が大きく、どうにも安定した送信をする事ができなかった。

となると、バッテリー火災や海水などが怖くもあるが、単セルあたり2V程度の鉛蓄電池を作製し、それを数台直列につないで電源として主に使用し、風力蓄電を併用することにした。こちらで電解液、正極と負極の酸化鉛と鉛などはファルマの物質創造で作ることができた。

送信機のパフォーマンスとしては、あまり複雑なことは要求しておらず、最低限海難信号を送信できればいいと考えていた。

受信機側はPCでラジオ視聴できるので、短波受信でき、なおかつ自作できるループアンテナの情報をネットで取り寄せながら作成し、短波用の同調・復調回路を作ってPCに接続する。

と同時に、普及用としてゲルマニウムラジオも作った。これは、ファルマが物質創造で生み出せる半導体であるゲルマニウムを材料とするゲルマニウムダイオード、を用いた電源不要の構造が単純なラジオだ。

不純物混入の許されないゲルマニウムダイオードまでせつせと無心になって作ったのだが、よく考えたらあれだけ苦労して送信機に真空管を取り付けなくても、ゲルマニウムダイオードを使えばよかったのかな、と気付くのは出発直前のことである。

ゲルマニウムラジオは単純な回路であるため、材料さえ揃えば製作にはそれほど苦労せずに、十分少々でできた。

苦心してできた送受信機のテストも行った。

エレンとパツレに協力してもらって、ファルマがギャバン大陸に

送信機と受信機を持って渡り、大陸間で何度かの送受信テストにも成功した。

予想していた通り、短波を用いた通信なので、夜間のほうが感度よく通信できた。

なにしろこの異世界で電波を使って通信をしているのがファルマたちだけという最高に贅沢な電波状況なので、周波数も帯域も使いたい放題である。

どんな雑音でも人工的な電波の発信があればファルマ宛てだと思つてよく、救難信号が発信されればすぐ飛んで行ってよい。という、とんでもなく低いハードルをクリアした。

エレンは「いったいどこから電波を送ってきたの？」と尋ねたが、「それなりに遠くから」と答えるにとどまった。ファルマが大陸を渡つて安全確認や下見に行っているということは、誰にも話してはいなかった。

こうして送信も受信も可能となった無線通信は、ファルマが専門に訓練した乗組員に任せることにした。受信機は、サン・フルーヴ海軍にも数台持つてもらい、シフト制で通信を聞いてもらうことにした。

無線の問題はクリア。

船は無線電波を送信でき、受信機も持つていく。

ファルマが台風などの接近を空から観測できれば、大陸側から船に知らせることもできる。とはいえ急な天気の変化で海難事故になり、海難信号を受けてから場所を探索するにはそれなりに時間がかかる。船団全てが一斉に転覆することはないだろうが、嵐に飲み込まれればありえないとも言切れない。

そこで検討はしたものの、実現はしそうになかったものは天気予報だ。

現代地球で天気予報というとスパコンでの数値予測を利用して行うもので、一週間ほどの気象予測は可能だが、ファルマにもこの世



界の天気予報は出せない。

研究室から持ち帰ってきたPCでの解析では話にならないし、そもそも計算できるだけの知識もない。現代でもスパコンで計算しているものが、各種数値を船上で観測し、そのデータに基づいたアナログ計算では、なおさらのこと予測は難しく、翌日までが限界のようである。

しかも船の装備は、無線はあるものの、せいぜい近世の水準だ。それでも、気象予測ができればはるかに命を守る可能性は高まる。

航海士には気圧や流体力学の概念を教え、実際の海域の雲の動きなどを観測し、気圧や湿度の下降を検知して低気圧の接近を知るなど、ファルマとしては海難事故を防ぐべくできる範囲の教育をした。

その他のサポートについてだが、魔の三角海域に棲まう悪霊は念入りに駆逐しておいたし、しばらく悪霊の発生もなさそうだ。

上空から見える限りの座礁しそうな大きな岩礁も物質消去で削ったり消して、広範囲にわたるものは海図に追記しておいた。

あまりの念の入れように、エレンに「お母さんじゃないんだから！ 神術使いも乗船するんだし悪霊くらい何とかするでしょ」とあきれられたものである。

エレンに笑われそうだが、それでも心配なので、ファルマが上空から時々船団の無事を見守るつもりでいる。

「何をどうしてくれたのか、完全には把握しとらんが、船員から話は聞いた。わしがおぬしに相談を持ち掛けたばかりに、煩わせてすまんかったのう」

ジャン提督はあまりにも手厚すぎるといっか、なんなら度が過ぎるほど過保護ともいえるファルマの対策に申し訳なさそうにぱりぱりと頬をかいていた。

「おかげさまで、という以外にないのー。子供なのに発明家とは大したもんじゃ」

「私の発明ではありませんので、先人の知恵を拝借したにすぎません」

「いやあ、そういう謙遜はなしじゃ。昔から知つとつたがのう、そうやってすぐ自分の功績を隠すんじゃ！ だいたい、知識があったとしても、手を動かして形にしたのはお前さんじゃろっ」

ジャン提督はわかつとる、わかつとるとファルマの肩をぽんぽんとやって頷いた。

「一回行つた航路じゃから、そんなに心配せんでええ」

「皆さんの命がかかっていますから、今回は念には念を入れて」

まあ、何かあつたら年寄りには死にかねんからのう、とジャン提督はブラック気味のジョークを飛ばす。

「これだけ尽力してくれたおぬしと聖下には、吉報を持って帰らんといかんのう。砂金でも出りやいいんじゃが、まあそううまくもいかんじゃろっ。期待せずまっとれ」

「何か珍しいものがあつても、あまり持つて帰りすぎないでください、積み荷が多くなると転覆が心配です。検疫も必要ですし、途中の航海で感染が発生してもいけません」

「そうじゃのう、欲をかかんようにするわい！」

ジャン提督はおおらかに笑つて立ち去つていった。ファルマは口ツテとともに、出発を間近に控え先ほどから出航所のベンチに座つて浮かない顔でどんよりしていたクララにも声をかける。

クララは男装に近いパンツスタイルで、船上でも動きやすい服装

にしているようだ。

「クララさんも、ご気分はどうです？」

「薬師様からいただいた酔いどめのお薬があるので幾分気は楽ですわ。しかし何度予知しても波乱含みになりそうなんです……」

「船酔い対策としては、よく寝ること、酔いそうになったら甲板に出ること、そして進行方向を見ていることですよ。それに、ジャンさんが言っていました、航海中に慣れて船酔いしなくなってくるようです」

「お心遣い、ありがとうございます」

彼女は船隊に同行する、旅神を守護神に持つ予知能力系の神術使いである。

船酔いが深刻だということで、ファルマのほうからは、吐き気に困らないよう酔い止めを出しておいた。さらに、彼女にはもう一つ薬が出されていた。

「あちらのお薬も、助かりましたわ。毎月のあれが軽くなり、あれも少なくなりましたん」

「ああ、あの薬であれがあれになったのですね。期待通りの効果です」

ファルマが処方したのは、低用量ピルだ。

低用量ピルにはエストロゲンとプロゲステロンなどの女性ホルモンが含まれており、脳に、女性の体が妊娠をしていると誤認識させる。その結果、ピルを飲んでいる間は脳下垂体から卵巣に排卵を促す信号が発せられるのを抑え、子宮内膜の増殖を抑えることができる。生理を少量にし、PMS（月経前症候群）を防ぐことができるばかりか、卵巣癌、子宮体癌を防ぐ効果もある。

クララは睡眠障害、下腹部痛、乳房の張り、抑うつなどの情緒不

安定などのPMSや、子宮が収縮することによっておこる生理痛が深刻だった。

しかしピルを飲むことにより、この不快症状がなくなり、出血も少いで済むようになったという。航海での不便が少し解消されそうだと、彼女は喜んでいた。

ちなみに、女性乗組員全員になのだが、長期航海で不自由しないだけの下着や生理用品も薬局からプレゼントしている。

思い返してみれば、地球の先進国では女性の低用量ピルの使用頻度は高いものの、日本での使用率は数パーセントにとどまっている。排卵を抑制するピルには避妊効果があるため、PMSや生理痛の軽減などの治療薬、としての効果があまり知られておらず、ピルを飲むことに偏見や誤解が根強いのだが、緊急避妊薬として、性行為後72時間以内に服用する、望まない妊娠を防ぐアフターピルとは違う。

よって、クララのような少女でも性行為などとは関係なく低用量ピルを飲むことがある。

この点は社会の理解が必要な問題だったな、とファルマは思い起こす。

「ところで前は、クララさんの予言によると船員が骸骨のように見えると言っておられました。今は誰も骸骨のようには見えないんですよね？」

「はい、もう問題ありませんわ。航海中の問題は解決したのだと思われます」

「それはよかった。全員戻ってこれるということですよ」

彼女に言わせれば予知の結果はあまり芳しくなさそうだが、少なくとも死者は出ないことはわかっているらしい。

「でも……こう言うてはなんですけど、大陸で薬師様ともう一度お会いしそうな予感がしますん。そんなわけありませんよね」

「いやー……どうですかね」

（俺が大陸に行くことになる……ってことは、大陸に到着した後に救助が必要になるってことかな）

ファルマはクララの話聞いて渋い顔つきになる。

数百人規模での救助が必要となったら。船が操舵不能になったり、船が破壊されてしまったら……ファルマ一人でなんとかできるものとも思えない。薬神杖で飛翔して連れ帰ったとしても、運べるのは数人がいいところ。全員は無理だ。

物質創造で大陸に安全なシェルターを作ったり、傷病者の治療などは現地でできるだろうが、それが限界である。

そして、クララの予言は今のところ外れなしときている。

（救援方法を本気で考えておかないとな）

内心胸騒ぎのするファルマだったが、まさに船出を迎えたクララを不安にさせないように微笑んだ。

「救難信号が出れば、いつでも助けに行く予定です」

「無理だとわかっていても、そう言ってもらえるだけで、嬉しいです」

ともあれ、ファルマはすっかり出発の準備を終えた彼らを激励する。

ロッテが応援の横断幕を作って掲げていた。

「皆さんが元気で、予定より早く戻れるように願っています」

いよいよ出航の時間となり、満艦飾の旗（Pavois）で飾った美しい五隻の大型帆船は出港前の最後のセレモニーとして、提督の命令で乗組員はマストをかけ上り、ヤードに等間隔に並んで片手をあげ、声をそろえ別れの挨拶を述べた。

（登檣礼ってやつかな？）

地球でいえば、乗組員をマストに引き上げるにより砲撃などの準備をしていないことを示す、帆船の最高儀礼である。

それは壮観で、ファルマも彼らの無事を願うとともに、こみあげてくるものがあつた。

登檣礼を終えた乗組員たちは、帆走のために総帆展帆の準備を行おうとしていた。

のだが、いよいよ出発というときになって、航海士の予想と異なり、風がだんだんと弱くなってきた。

（あれ？ 俺のせいかな？）

ときに神力だまりを発生させるファルマの神力は気象や気圧に影響することもあり、風の読みが外れたのだらうと思われる。

気圧配置にもよるが、基本的には、晴れ男というか、天気がよくなる傾向にある。

「まあ、しょうがないのう」

ジャン提督の顔が曇り始めたとき、責任を感じたファルマが声をかける。

「ジャンさん、針路を見せて下さい」

「ん？ 何をするんじゃ？ これじゃが」

航路の選定はすでに終わっており、本日の針路設定も整っている。

「帆はたたんでいて結構ですよ、そちらのほうがスピードが出ますから。しばらく先までは海流でお送りしましょう、夕方から夜にかけ天気が崩れるかもしれませんが、日中に安全な海域まで到達できますように。進路はあちらで、直進でよろしいですね」

「お、おう。何をするんじゃ」

ファルマは杖を出して構え、人目があるのでよそいきの発動詠唱を行い、海上に水の超大型神術陣を立ち上げた。

出航式に参列した来賓と言葉を交わしていたブリュノは、神力の昂揚に驚いてファルマの方を一瞥したが、制止はしないようだった。

「おおー」

「神術で海流を作ってくれるんか。そりゃー何もせんで助かるで！」

「いや、ちょ、何この神術陣 神術陣って海上に展開できるのかよ」

「氷だ！ 氷で編んでるんだ」

船員たちや、見送りの人々から驚きと歓声が上がる。

「では、みなさんごきげんよう」

ファルマが五隻の船団を水流に乗せて押し出すようにすると、船は海上を滑りはじめた。

「行ってきますわー！」

「皆、たっしやでのーう！」

クララは大きく手を振り、甲板に総員整列していた乗組員も、帽を振って出航する。

船は紙テープをたなびかせてあつという間に遠ざかって豆粒のようになり、ファルマらは笑って帽子を脱ぎ大きくふって見送った。ロツテがおそろおそろファルマに声をかける。

「今の神術陣すごいです！ 水上に展開する神術陣だなんて、見たことも聞いたこともなくて！ しかも、紋は風の神術陣でしたよね」

「氷で陣形を編めば水の上にも好きな図柄が描けるからね。水も風も同じ流体だから、同じ陣形で制御できると思って練習してたんだ」

神術陣に興味津々のロツテのことである。

ファルマの使う神術陣は、現在普及していないものばかりで、全てが新しい図柄に見えるらしい。ファルマとしては、神術陣の紋様はどれもこれも自分で編み出したものではなく、神聖国禁書庫司書のリアラの援けを借りて情報を取り寄せ、現代によりがえらせたものばかりだ。ファルマは、せっかく使えるものを使わないのは勿体ないということで、神力を消費する以外にデメリットのない神術は、当面利用してゆく、という方針をとっていた。

というわけで、誰も見たことのない古典術式を使うファルマの神術は、ロツテにとっては常に新鮮にうつるようだ。

「ほわー、不思議がいっぱいです。でもどこで練習していたんですか？ 海とか、お出かけになっていませんか？」

「ナタリーの看護をしている合間に、病室から窓をあけて大学の噴水池で練習してた」

「ああ、それで大学の噴水が凄い綺麗な動きしてたんですか！」



宮殿に出勤する際に大学を通りぬけてゆくロッテは、それを見てどんな仕掛けかと驚いたという。

「隙間時間は有効に使わないとね。そう思って」

「時間は有効に、ですか」

「時間は大事だよ、一番とっていいほど大事だ」

「それでしたら、ファルマ様が次に考えていること、当ててみせますよ」

ロッテがつきつきしながら話しかける。今にも小躍りしてしまいそう。

「なになに」

「大陸中に無線通信を引いて、あらゆる国と連絡がとればいいと思っと思っていますよね！　そういうことですよね！」

「思ってもみなかったな」

「違ったんですか？」

「医療分野以外の応用には、頭がまわらないみたいだ」

「ファルマ様らしいです」

ファルマは医学薬学分野以外の技術を性急に普及してゆくべきだとは考えていなかった。しかしそれは、ロッテの言う通り、同軸でやるべきだ。そして、無線だけでなく、神術経路は光ファイバーのように使うことができる。電線を敷設する必要がないのだ。神術と科学技術の融合も考えてゆかなければならない。

「基盤を整備するところまではして、通信技術の改良などはほかの人々に任せよう」

ファルマはしっかりと頷いて帽子をかぶり、空を見上げる。ロッ

テもつられて空を見る。

ふわりと海風に弄ばれた髪をかきあげたロツテの手首には、今月の彼女の誕生日にファルマがロツテに贈った、悪霊除けの清楚な晶石のついたブレスレットがさりげなく輝いていた。

「今夜はお星さまがたくさん見えますかね」

よく晴れた夜空のもと、午後九時にはゲルマニウムラジオに航海第一日目の無事を告げる船舶無線通信が入るだろう。

遠く離れていても、人と人が繋がり無事を確認できる。

そんな技術が海を越えようとしていた。

## 7章6話 未知への出航（後書き）

### 【謝辞】

・ 本項の天気予報の部分は、  
気象予報士 あわ みかわ先生  
・ 無線通信の部分は  
工学修士 赤間 道岳 先生  
アマチュア無線技士 丸山 修 先生  
生命科学修士 坂下 明 先生  
放射線治療医 不観樹 露生 先生  
に、ご指導いただきました。どうもありがとうございました。

漫画版の医学考証をしてくださっている中崎実先生が、漫画版医学考証ブログを書いてくださいました（もくじにもリンクあります）  
URL <https://note.mu/nnakazaki/n/n6b62a69f26e1>

## 7章7話 異世界ノーチート化学工業

ジャン提督の船を見送った日、ファルマとサン・フルーヴ帝国海軍は、ジャン提督からの最初のモールス通信を送受信した。

通信のやりとりについては、デビューしたての通信士が打ち間違えるのは目に見えていたので、古式ゆかしく、紙テープに穴をあけておいて電鍵の接点を開閉する方法で、半自動化して通信できるようにしておき、またいくつかの定型文を番号で決めておいた。音声通信の設備もあるが、モールス通信が無難だ。

それによると、今日の報告はこうだった。

「16時にジブラー海峡を航過し、フルーヴ沖へ全速帆走、西航中。  
現在風向風力は南南東3、気圧は1013<sup>ヘクトフルーヴ</sup>hF、気温25度、全船団と乗船者に異常なし」

全文、間違いなく聞こえた。

感度は良好とはいえないが、通信を維持できるだけの最低限の性能はありそうだ。

これが、マーセイルから遠ざかってゆくと聞き取りづらくなつてゆく。

ファルマは、事前にマーセイルの上空へ昇つて、そこから見える雲から予想される風向きを伝えた。隔日ぐらいのペースで伝えていくと考えていた。

空から戻りコートを脱いで一息ついていると、寝支度を整えにきたロツテが笑った。

「ファルマ様、髪の毛凍ってますよ。まつげも」

「あ、ほんとだ」

愛想笑いをしていると、ロツテが髪についた氷をせっせと取り払ってくれる。

近すぎる距離にやられて、お互い照れる。

「お空に行かれていたんですね。すぐわかります」  
「……あたり」

秒で白状する。マイナス50度を下回ると、そういう状況になりもする。

「ふふ、ファルマ様と夜間飛行をしたとき、いつも髪の毛が凍りましたから」

「雲の中を通ると、どうしてもこうなるね」

「お風邪を召されないようにしてくださいね。でも、何かありましたか」

「何もないよ。晴れたらいいなって思ってたね」

「どういことですか？ まさか、晴れになるようにしたとか、そういうことですか？ 神術陣を使っただけですか？」

ロツテの直感がビシビシくる。ファルマが上空から行ってきたのは、気圧の印加だ。

物質創造を駆使して上空から押し付けるように空気を展開すると、大気が集まって高気圧となる。地上からでもできるが、空から大気を叩きつける方が大気潮汐においても持続効果が高い。ジャン提督の船団が快晴の中を、良い風で、できるだけ船が揺れずに航海できるようにとの心配りだった。クララのためにもというか、よく考えると過保護極まりないとファルマも思う。

「ということは、どこかでは雨になっていませんか？」

「だね。それは申し訳ないけどね」

どこかが高気圧になれば、どこかが低気圧になる。

ロツテが何かを思い出したらしく、おそろおそろファルマに尋ねる。

「クララさんは眠れているでしょうか……」

「そうだなあ」

酔い止めを飲みながら、何とか船上生活にも適応してほしい、とファルマは夜空を見上げながら祈る。

「船酔いも、激しい人は何十回と吐くからね。船が揺れないに越したことはないけど」

「そんな、干からびてしまいます。でも酔い止めの薬は飲んでるんですよ？ あっ、私もなんだか気持ち悪く……」

ロツテは言っているそばから手で口を押えてえづきそうになっていた。

ファルマはロツテの背をさする。

「え、何でロツテまで？ 大丈夫？」

「晩御飯食べすぎたかもです。クララさんはいつもこんな状態なんですネ、つらいです」

「何かに当たったのかと思ったよ、紛らわしいよ……」  
「外の風にあたりたいです」

バルコニーの階段から、二人で屋根の上に座る。

そこへ腰を下ろし、毛布を共有して二人で空を眺める。

「わー、星がきれいです。ファルマ様が雲を吹き飛ばしたからでしょうか」

「ちよっと待って。いいものがあるんだ」

ファルマは、肩にかけていたカバンの中からがさごと取り出す。

「望遠鏡（Télescope）だ」

「あれ、手作りですか？」

「あり合わせで作ったものだよ」

ガラスコップの底をくりぬき、捨ててあつた古い老眼鏡で作ったレンズを組み合わせた自作のものだ。カメラから顕微鏡に至るまで、光学機器の自作は彼のちよつとした趣味でもあつた。そして覗き込んだロツテは……。

「月に模様があります」

地球から見える月とは何もかも違うのだが、やはりこの世界の月にもクレーターなどがある。ロツテのその日一番の驚きだった。そしてファルマとロツテは、寄り添うようにしてしばしの間天体観測を楽しんだ。

翌日、ファルマはアダムの案内で、パツレとブランシュともにマールセイル領内の薬草畑の視察に出かけた。タイトなスケジュールで農家や薬草商を回るファルマに、ブランシュが休憩をしたいとこねる。

「ねーおやつの時間がほしいんですけどー」

「もうちよつと回ってからにしよう。そしたら休憩にするから」

「飽きたなら領主館に帰ってもいいんだぞ」

「一人じゃ帰れないのー」

ファルマがなだめ、パツレが冷たい眼差しを向けると、ブランシユはふくれる。

「視察も明日とか明後日にしたらいいじゃんー。そんな慌てて見回らなくてもー」

「早く帝都に帰らないとね。エレンに負担がかかっていると思うしむー」

ブランシユも、エレンの名前が出たからか、頬をますます膨らませはしたが、我儘をひっこめた。

ファルマが帝都を離れている間、エレンやほかの薬師らが薬局の営業をしてくれている。

処方箋がなければ購入できない医療用医薬品の調剤ができる薬局は現在、異世界薬局総本店のみ。

処方調剤のできる薬局が世界で一か所しかないというのに、サン・フルーヴ帝国医薬大の医師や薬師らが現代薬を使い始めたため、処方監査と調剤が追い付かない。

処方監査のできる薬師が、ぶっちゃけファルマしかいない。

エメリツヒとパツレは現代薬の薬物動態などのひととりの知識はあるが実務経験が足りず、エレンは実務経験はあるが薬理、物理化学の理解が完全ではない。

つまり、新カリキュラムの教育を受けたサン・フルーヴ帝国医薬学校 総合薬学部の一期生が卒業し一級薬師となり各地で営業を始めるまでは、ファルマが全世界の現代薬の製薬、処方調剤の全てを引き受けているということになる。

「なんで小さい兄上が帝都にいないといけないことになってるのー？」



「大人の事情ってやつがあるんだよ」

「子供なのにー。大人じゃないのにー。エレン先生がいるのにー」

「エレンも頼りにしているよ、でも、一人では大変だからね」

エレンは診眼が使えるようになり診療技術が多少向上したことで、ファルマが帝都にいらなくても薬局を閉めなくてもよくなったのだが、エレンが対応できる疾患にも制限をもうけられ、それ以外の調剤は停止している。

それで、早く帝都に戻る必要がある。

「ブランシュだって、エレンに視察の成果を報告しないといけないんじゃないか？」

「あ、そっか」

ブランシュは普段師匠であるエレンに同行しているが、今回は視察についてゆくよう促された。宿題のために薬草栽培農家の話を聞き、薬草の生育状況などを確認する。

ブランシュが学んでいるのはまだ初歩の初歩だ。図鑑とともに知っている一通りの薬草をチェックし終わって、レポートを書くと暇を持て余したらしい。ファルマは適当にブランシュに仕事を与える。

「そうだブランシュ、この畑に雨を降らしておいてよ。しっとり程度でいいよ」

「わかったー。」 あめーふれー」

「ちょ、今の掛け声はなんだ？ え？ まさか発動詠唱なのか？」

杖をかかげたブランシュを、パツレが目ざとく突っ込む。

ブランシュの杖はブランシュの意のままに大気から水滴を引き出し、ほどよく雨を降らせた。適当すぎる詠唱ながら、まさにファルマの指示通りこなしたということになる。

「降ったし！ 何で降る！」

パツレの顎が外れそうになっていたので、ファルマが解説する。

「適当でもいいんだよ。詠唱を噛みまくっていてもちゃんと発動してたから、もう発動詠唱無視すればいいんじゃないかって、教えたんだ」

「そんなこと教えるなよ……暴走したらどうすんだ」

「えーそんなすくくないしー。兄上はむえーしょーだしー」

さらっとバラされてしまった。

「マジか！ 神術学者が憤死するぞ！ 詠唱練習とか意味ねーってことじゃねーか……何のために毎日練習してんだよ。ていうか、無詠唱なんて発動したことねーぞ」

「どの国の言語で詠唱しても発動する時点で、詠唱は曖昧でも許されるだろ」

ファルマがそう言ったものだから、パツレは反論を諦めたらしかった。

「むちゃくちゃなことを言いやがるな」

「言語化したほうが制御が楽になるみたいだけどね」

「フォローになってねーよ。じゃあ俺が無詠唱でやってみるぞ」

パツレは戦闘用の長い杖を出して構えた。気合を入れ念じているらしい。

「……………」  
「って、発動しねーじゃねーか！」

「練習すればできるよ」

ファルマはパツレがくっつかかるのをいなし、パツレの背に手を当てて、パツレの手を介して簡単な水属性神術を発動し、周囲に水蒸気の渦を発生させる。

「は」

「そんな感じでやったらできるよ」

「お前、後で無詠唱神術の練習に付き合え」

「時間があれば」

神聖国の禁書庫にまでアクセスし、神術の全貌を垣間見始めたファルマが思うには、発動詠唱は神術の制御装置だ。

詠唱は概念を具象にし、安全に術を作動させる。

複雑な神術のプロセスを一つずつ処理してゆくのに便利だ。

失敗すれば発動しない、暴走もしない。よそごとを考えていたとしても発動する。

だから、彼らはこう錯覚している。

「発動詠唱の存在しない神術は使えない」と。

だが、本当は詠唱など必要ない。

高度な神術を使う際にはプロセスは複雑化するが、具象化できるならばできることは無限だ。

それは、この世界が実在していないからだ。

墓守は、詠唱と神力量を管理することによって世界に秩序を用意したのだろつ。

それが神術の正体だ。

ファルマはそのことを心のうちに秘めておいた。

この世界の登場人物全員の”籠が外れてしまう”、気づきによつ

て消滅してしまうのが、怖かったのだ。

「あにうえって、薬局でも薬草あまり売ってなかったよね。どうして薬草を真剣に見始めたの？ 心境の変化？」

「今、異世界薬局で売っている薬。あれは化学合成によって工場や研究室でいちから作るのは大変なんだ。時間もかかるし、コストもかかる」

「ふーん」

実際には難しい化合物は物質創造で作っているのだが、そんなことは知らないブランシュは納得して頷く。

「だから、途中まで自然界に作ってもらうにこしたことはない」

「お前とキャスパー教授は放線菌も使って抗菌剤や抗がん剤を作ろうとしていただろう」

「それもだけど、生物資源、特に植物も活用していこうと思ってるんだ」

持続可能な発展を促すために、ファルマの物質創造に頼らず、天然の資源から異世界の市場で使える薬剤を工業ベースで作り出す。

マーセイル製薬工場の設立目的といってもよく、長期的な安定生産と市場への供給を目標としているところだった。パツレはファルマの意図するところを理解する。

「なるほどな。医薬品の合成出発物質にするってことか」

「ふーんわかんない」

「もっと学ぶ姿勢を見せんか、不心得者が！」

「いたいいたい！ やったなー！ もーゆるさないー！」

「おう、杖を抜け。決闘だ」

「まいったって言うまで許さないんだから！」

パツレとブランシュの二人は、揉みあってそのまま問答無用の神術戦闘に発展しそうになっていた。隙あらば兄弟げんか、最近はブランシュも神術の腕が上達してきたこともあって、売り言葉に買い言葉で少し目を離すと戦闘が始まってしまふ。あわやというところで、ファルマが間に入る。

「二人とも喧嘩はそこまで。ほらブランシュ、ここは新しいビート（Betterave sucrière）を作っている薬の試験場だ、見学しよう」

「ビートって、砂糖のこと？」

「そう、砂糖」

ビートとは、甜菜のことで、比較的冷涼な地域で栽培されている寒冷地作物であり、根の部分から砂糖が取れる。サン・フルーヴ帝国ではマーセイルを中心に広く栽培されている。

「薬じゃないじゃん、砂糖じゃん」

ブランシュが口をとがらせた。

「砂糖も作る。そして砂糖を作るついでに、薬も作る」

「出発物質にする話はどこいった？」

「それはそれでやってるよ。根の部分で砂糖を、葉の部分で薬を作る」

ファルマが何を言っているかというと、遺伝子組換え植物を作り、植物に薬を作らせようとしているのだ。既存の薬用植物を製薬に利用する、という話ではなく、農作物を利用し応用をもくろんでいた。

「砂糖に薬が紛れ込まない」

「茎より上の部分でしか薬ができないようにしているんだ」

「ですから、ビーツの首のところで葉をちょん切れば、薬は紛れ込みませんよ、お嬢ちゃま」

横から割り込んできた農家の女性が、ファルマの後をうけてブランシュに説明する。

マーセイル領主館にほどこかいこの農家は、異世界薬局の契約農家だ。異世界薬局と提携している農家は、アダムの気前のいい報酬提示もあつて年々増加を続けている。

ビートは、日本でも遺伝子組換えが認められていた作物で、ついでにいうと、ファルマが遺伝子工学的に工夫をこらしたことにより、茎より上の薬用部分は特殊な方法を使わなければ、精製ができない。マーセイル製薬工場が収穫後運び込まれた葉身から、薬剤の精製を担う。

珍しい作物だからといって万が一転売されたり盗難にあつても、さほど心配はいらない。

精製と製剤化ができないので、ただの砂糖として取引されるくらいだ。

砂糖は砂糖原料として売れるうえに、捨てていた葉身の部位を売って収入が何倍にもなるとあれば、しめたもの。葉は、現地の人間が食べることもあるが、日持ちがしないためあまり帝国に流通していない。お互いの利益が確保されるとあつて、農家も快く応じてくれ、せつせと苗を育ててくれている。ブランシュの首が傾きっぱなしだ。

「葉っぱの部分は何かを作っているの？」

「ワクチンを造らせてるよ。B型肝炎ワクチンと、インフルエンザ

ワクチンだね」

「マジか！」

「の、予定。ちゃんとできるかどうかは未定だよ」

ワクチンは細胞培養や鶏卵法、酵母などでも生産できる。

しかし、鶏卵法は1年もかかるし、動物細胞培養での生産はコストも高ければ手間暇もかかる。酵母などの真菌を用いても安価にできるが、専門技術者が張り付かなければならないし、ファルマが進捗を確認しようにも、パッシブスキルである”聖域”によって細菌を全滅させてしまう。

放線菌を培養することすらできなかったファルマは、キャスパー教授のグループに生産を任さざるを得なかった。

そこで、農家が作物を作る”ついでに”薬を作らせてしまう方法を思いついた。

これならファルマも「全滅させるかも」などと気にせず生産と試験に参加できる。

「収穫時にほかの薬を生産している植物が紛れ込んだらどうする」

「葉っぱの形で区別がつくようにしておいたから、混入してもすぐに気付くよ」

「完璧じゃないか」

「目論見通りにいけばね。そうはいかないだろうから、検討はこれからだよ」

「確かに」

その後、マーセイル化学工場へと足を延ばす。

マーセイル化学工場での生産体制も、少しずつ整いつつあった。

現地責任者の、もと医療神官のキアラと、プラント開発の専門職員テオドル・バイヤールがファルマに応じる。

「お久しぶりです、キアラさん、テオドールさん」

化学工場は複数の化学工業プラントにわかれ、異世界薬局をはじめ、帝国各地の薬店へと供給される医薬品の製造が行われている。

そのうちの第一プラントはテオドールの担当だ。

テオドールはノバルトからスカウトされた名の売れた敏腕錬金術師で、奇しくも異世界薬局の薬師であるセルスト・バイヤールの弟にあたる。彼は火炎術師であり、ファルマと出会う前から、神術を利用した金属精錬や、純度は低いものの硫酸、硝酸などの合成にも成功していた。

テオドールは飛び級に飛び級を重ねて、パツレの二つ上の学年の主席だったほどの逸材。頭脳と神術に申し分はないのだが、視覚過敏を持っており、光が苦手だ。

そのため、ファルマが採用面接で彼と出会った当初はフードを顔が見えないほど深くかぶっており、隠者のような個性的ないでたちをしていたのだが、ファルマがそれに気づいてサングラスを作ってプレゼントすると、気に入って常用している。

そのサングラスをかけた錬金術師テオドールにファルマが尋ねる。

「生産体制の進捗はあれからどうなっていますか？」

「最高だぜ、店主」

口調のラフさとサングラスの印象もあって、少し粗野な印象を受ける。

彼の知識と実務経験をファルマの知識が補強し、彼は絶好調らしい。

「溶媒と、基本的な出発物質の選定と確保をすすめてるぜ。いやあ、あんたの指示書は今までどれだけ考えても分からなかった全合成の



回答集のようだ」

「無理をせず、できることなら半合成を使いましょう。工業生産のためですから、労力と時間の節約のためです」

「まあな。だが、神術抜きで全合成のほうが面白くてな」

「学者はそう言うでしょうね、小さなパーツから大きなパズルをくみ上げてゆく面白さがありますからね」

最初にファルマが調達を指示していたのはエタノールだ。

殺菌や消毒などに広く使われ、もちろん有機溶媒でもある。麦藁や廃材、雑草、生ごみなどのバイオマスを買集め、それを発酵させて蒸留を繰り返すことで得られる。無水アルコールを精製する場合には、ペンタンを加えて共沸させることによって純度を上げる。

これは難なくクリアしてみた。

次に、メタノールはアルコールの一種で、種々の化学反応に用いられる重要な有機溶媒である。ホルマリンの原料などにもなるため、ぜひ押さえておきたかった。テオドールは炭焼き職人に会いに行き、そこで出る廃棄物であった木酢液を買上げた。木酢液を蒸留することで得られるそれには飲用毒性があり、メタノール中毒を引き起こすため、絶対に飲用されないよう保存管理は徹底している。

得られたエタノールから、酸触媒を加えて脱水縮合でジエチルエーテルを生成した。ジエチルエーテルは溶媒抽出として用いられるほか有機溶媒として工業的な利用価値が高く、さらに吸入麻酔薬としても用いることができる。引火点が低いため、生産、管理時は火気厳禁を徹底して管理しているが、燃料として用いることもできる。テオドールは燃料の研究も面白がっていた。

「指示書通りにやって、アンモニアの合成に成功したぜ」

（フランク・カロ法がうまくいったか）

ファルマは目を細める。アンモニアは、有機合成反応の窒素源として用いることができる。

「合成おめでとうございます。着々と進捗が生じていますね」

「生石灰と炭素からカーバイドを作る火力を上げるのが骨が折れるがね。もっと大容量の神力量を持つ火炎神術使いを雇用しないと、俺のなけなしの神力を使い切ってしまう」

「2000度も必要ですからね。雷の神術使いがいれば簡単に反応できるので。火炎神術使いや、メロディ様のお弟子に協力を要請しよう」

（ハーバー・ボッシュ法やビルケランド・アイデ法よりは省エネで、高圧もいらなし苦労しないからな）

「聞いてみようと思ったんだが、この化合物、マーセイルで有名な”火山塩”を加熱したときに出るにおいと同じにおいがするぜ」  
「火山塩？」

（あー、塩化アンモン石。塩化アンモニウムを加熱したと言っているのか？）

アンモニアにも様々な合成法がある。どれでもいい。どれでもいいが、工業的に大量に必要なからには、純度と合成のコストは大切だ。それらを検討して、収量、収率が最適な方法を探してほしいと思う。

「店主さん、あとで純度を確認してくれ」

「サンプルをいただければ、神術で測定しますよ」

「反応中間体でベンゼンも作った！」

「予定より早く進んでいるんですね」

「寝てないからな！」

「寝てください」

過労を自慢してふんぞり返るテオドールに、ファルマがくぎを刺す。

「寝ないとうなる？」

「過労死します」

「まさか！」

今日一番説得力のあるファルマの言葉なのだが、テオドールは信じない。

（頼むから定時で帰る姉のセルストさんを見習ってほしい。姉弟でも正反对だな）

「キアラさん、テオドールさんの労働時間をしっかり管理して、錬金術師の人員を増やしてください」

「かしこまりました」

「えっ、もっと働きたい」

「だめです。今日から一日10時間を労働時間の上限とします」

「足りない。あんまりだ！ 忍び込んでやる！」

「だめです！」

ファルマは三徹目だと言って自慢していたテオドールを強制的に馬車に乗せて帰らせた。馬車を見送りながら、「労働時間に厳しいのですね」とキアラが冷や汗をかく。

（こついうのは死んでみないとわからないものなんだ。死ぬ直前で、まだ若いとか、自分だけは大丈夫だと思っっているんだよ）

過労死経験者、薬谷は虚しい自省をする。

「他のプラントの報告はまた後日にしましょう。今日は時間がありません、ほかには何か問題がありますか？」

「バイオマスが不足しています」

「そうですか。かといって麦藁を売ってくれる農家がそうそう増えるわけでもありませんし、他の領地から調達となると輸送費もかかりますしね」

コストがかかりすぎては、赤字が膨れ上がって不採算になってしまふ。

今は資金を補填できるからいいが、ほかの業者が参入できなくなってしまう方法を模範として残してはだめだ。

むー。と、ファルマもキアラも憂わし気に唸る。

話を聞いていたパツレは安直だ。

「このあたりの森を全部伐採すればいいだろ」

「環境破壊は領土の荒廃を生む。それに、伐採したらそれっきりで終わりになる」

パツレの提案は敢え無く却下される。持続可能性は常に考えていかなければならない。原料の調達は一回こっきりしかできない、というのでは困るのだ。

「宿題にさせてください」

「わわわ、宿題にしないでください。お忙しいところ、なんだか申し訳ありません。ファルマ様をわずらわせず原材料の調達を進めて

いければいいのですが……なにぶん、知識不足で」

キアラが肩を落として落ち込む。

ファルマが多忙だというのは、複数の筋から聞いているようだ。隠さなくても、見た通りなのだが……。ファルマは疲れを見せず愛想よく応じる。

「煩わしく思っていないので、困ったらすぐに話をしてください。それに、こういう考え事は嫌いではないんですよ。あと、忙しいといってもテオドールさんほどは働いてません」

「はあ……おそれいます」

ファルマがキアラとそんなやり取りをしながら、マーセイル化学工場を出たときのこと。

「代行領主さま、お助けを」

「領主館に行きましたら、こちらにおでましたと伺って」

ファルマたちと同行していたアダムに領民数名が直訴をしにやってきたらしい。

彼らはマーセイルの北東にあるマリニャーニヤ地方の住民代表だ。夜明け前に出発して、朝いちでやってきたとのこと。ただ事ではない様子だ。

「どういうことだ？ 災害にでも見舞われたのか？」

「聞いてくださいよ」

「あ、ああ。とりあえず領主館で話を聞こう」

アダムが領民たちを領主館へ招き入れて対応する。

ファルマらも同じ馬車だったので、その気はなくてもついて戻っ

た。

領主館の同じホールで、ファルマらも彼らとお茶をたしなみ、ブランシュはおやつにありついた。いつのまにかその隣にはロッテがいて、ブランシュとともにおやつの相伴にあずかっていた。

「今年はひどい水害でして、代行領主様」

「水の神術で領地を庇護してくださっていたシヨン伯爵が帝都に赴任になりました、その影響だと思いますが」

神術は戦闘時にのみ重宝されるのではなく、生活の中でこそ真価を発揮する。

土属性神術使いの領主などは、農作物の収穫量を何倍にも伸ばすこともでき、領民を豊かにすることができる。水属性でも降水量調節や、灌水管理などの熟練者は重宝がられる。

マーセイル尊爵領は、潟湖をはさんでシヨン伯爵領に隣接している。

水の負属性の優れた神術使いであったシヨン伯爵は、潟湖に面した海拔が低く水はけの悪い湿原を農地として利用できるよう、マーセイル領の領民の生活までも守っていた。そのシヨン伯が帝都に赴任になったという報告は、アダムの耳にも入っていた。

（シヨン伯爵って、あのドールマニアのか。珍しい属性だったんだな）

数年前にファルマにかかっていた、銀皮症だった伯爵だ。

最近では宮殿でもめつきり会わないが、元気でいるのだなと懐かしと思う。

シヨン伯爵は、マーセイル領の領民に恩恵をもたらしてくれていたらしい。

領土と領民は地続き。

神術は確かに、領民の生活を守っている。  
お隣さんとはもちつもたれつだな、とファルマは実感する。

「代任の代行領主様は水の正属性。潟湖の水面を管理することはできず、畑は水浸し。土地を失った領民は青息吐息でございます」  
「なるほど」

「ですがシヨン領の代行領主様に申し上げようにも管轄が違います」

「いかにも。本来はマーセイル領の仕事であり、領土をブリュノ様から預かった私の不手際だ」

農地が冠水してしまったうえ、その状態で冬の間放置していたものだから、汽水湖の塩により塩害にも苦しんでいるというのだ。

「こういう状況ですので、今年の春は畑の種植えができません」

「当面は免税をお願いしたい。このままでは食い詰めてしまいます」

申立書を提出しながら、領民が嘆く。  
それを聞いていたアダムは了承した。

「よくわかった。シヨン伯に頼り切りになっていたのは、そなたらにも申し訳ない」

「ありがとうございます。マーセイル代行領主様のご配下には、負属性神術使いのお方はおられませんか」

「あいにく、配下に負属性を抱えていない。負属性神術使いが手配できるまで、別の管理された小作地を貸すから、今年はそちらで耕作しなさい」

「お心遣い痛み入ります」

「部外者の浅知恵ですが、風車での揚水はどうですか？」

ファルマが横から割って入った。この領民らはファルマと面識がない。

「大きな風車で揚水するには予算もかかります。職人を呼ばなければなりません」

「風車は何基立てるのですか？」

「予算はどこから出てくるのですか？　今から着工したとして、いつ完成するのですか？」

「水は引くかもしれませんが、塩はどうやって除けば」

領内の設備投資は、領民ではなく貴族側に任される。

つまり、アダムが投資をしなければならぬのだ。これは本当に浅知恵だったな、とファルマも反省する。

「真水を降らせ続けなければいつかは除塩できますが、真水がないって話なんですよ」

「その排水設備をだれが作ってくれるんですか」

收拾がつかなくなってしまった。

首をつっこんでしまった責任を感じ、ファルマは視察を提案する。

「一旦、その状況を見せてもらえますか？」

異世界生活も四年目に突入。

なんでもかんでも知識チートで設備を近代化すればよいというものではない。

神術のほうが便利なおともあり、神力量とコストとの相談になる。というのはファルマも身にしみる。

異世界で神術を知ったときには「負属性なんて何に役立つんだ」



と思ったりもしたもののだが、負属性使いが希少だということもあり、案外正属性より需要があつたりする。

「あなたは何属性なんですか」

「……負属性も使えます」

領民たちはきょとんとしていたが、ファルマを担ぎ上げると、有無を言わず荷馬車に乗せた。

「なんで早く言ってくださらなかったんですか！」

「ちょ、待って。慌てないで」

ファルマが領民の案内で現地入りしてみると、領民がここですと言つて示した指の先には、ただっ広い湖が広がっていた。半ば誘拐に近い格好で連れていかれたファルマを追つて、アダムとパツレ、そしてロツテもやってきた。

「ええ、ここが畑だったんですか？」

「沼地になって、こんな藻が生い茂ってしまいました」

「ああ、これは一大事ですな」

「わあ、緑の絨毯のようです」

ロツテが詩的なことを言うが、目の前に広がっているのは藻の絨毯なのだ。立派なアオコである。

「三月になって温かくなってきましたので、増殖も盛んになってきました。人海戦術で駆除をしていましたが、断念しました。駆除を諦めると、これから藻が増える一方です」

「困りましたね」

「あなたが何とかするんですよ！」

「そうでしたね。でもこれは、水の負属性神術でもお手上げかもしれません」

（といっても、どこの世界に藻を消せる水の負属性神術使いがいるんだ。しかも、水中生物に悪影響を出さない形で……）

施肥が行われているので、窒素もリンも豊富で有機物により藻が生える。

口ではそんなことを言いながらも、ファルマは水質検査をするためにコップに一杯、池の水を汲んでサンプル採取を行った。

藻の種類を特定できれば、消去能力で一網打尽にできるからだ。すぐ横で、暇を持てあましたロッテが顕微鏡をのぞき込み、それをスケッチブックに写し始めた。

ファルマの頼りない様子に、領民が大きなため息をつく。

「藻はゴミですからねえ」

「そうですねえ……海苔とか寒天になるならまだしもですねえ」

「ファルマ様、藻ってきれいですね。なんだかカレイドスコープみたいです」

「万華鏡ねえ……。ロッテが藻アートでも作るかい？」

ふざけているのではなく、藻アートというものも存在する。

地球においても顕微鏡を覗き込めば万華鏡やステンドグラスのように広がる藻を使ったアートは、ヨーロッパの貴族の間でもてはやされたこともある。

（つても、藻アートじゃ埒があかないしな）

ファルマはぼんやり見ていたロッテのスケッチを二度見してはつと目を見開くと、それを取り上げてもう一度顕微鏡をのぞきこんだ。

（あれ）

そして、振り向いて領民に真顔で申し出た。

「売ってください」

「えっ」「藻を？」「なんで」

ファルマの突然の掌返しに、ロットと領民が同時に口を開いた。

「用があるのは一種類ですが、全部買い取ります」

「買い取って捨てるのかい？」

「捨てません。これこそが藻類バイオマスとして利用できると思います」

「ど、どういうことなんですか？」

ファルマがかねてより困っていたことだが、この異世界には石油というものがない。

石油というものは数億年前の、藻類などの生物遺骸が高温・高圧で変質することによって作られる。

それがどこからも採掘されていない。

あればどれだけ技術革新が捗ったかと思うのだが、ないのだ。

石油がないということで、チート能力以外でプラスチック製品の合成も断念していたし、合成医薬品を造ることもできなかった。炭化水素が手に入らないため、ワセリンの製造にも苦労していたありさまだ。

（この世界には、歴史がない。”最近”作られたんだ）

このことを裏付ける証拠がもうひとつ。

この世界のどこにも、いわば地球でいうところの地層が確認できない。

神聖国の古文書を紐解いても、さかのぼれる地下構造は数千年前が限度だという。

深い地層から、古い化石が発掘されたりすることもない。

そんな状況下で、藻がある！

「藻類を高圧下に置けば原油ができるし、そんなことしなくてもボトリオコッカスはボトリオコッセン（C34H58）を作るから……それを抽出すれば石油ができる」

藻由来バイオマスを炭素源とすればよいのだ。  
それを使って製薬を進めてゆけばよい。

「つまり、ということだ」

「この藻から薬を作れるんです」

ファルマの瞳は爛々と輝いていた。

前世では石油から薬ができると一般人に説明すると、「体に石油を」と忌避感情が出る人間もいたが、石油自体が生物由来なのだから、落ち着いて考えてみてほしいと思うファルマである。石油というものを知らない領民は、忌避感情こそないようだが、ゴミが薬になるとするのは信じられないといった顔をしている。

「私が設備投資をして増殖プールを作りますから、作物の代わりに藻を育てて、異世界薬局マーセイル工場に売りつけていただだけますか？」

「一体藻で何をするんじゃ」

「この土地で取れていた作物の総額より高く買い取りますよ」

「ということは、これは売れば金になる藻なんですかいのう？」

ファルマは藻を駆除せずに、藻を増やせという。それは畑をつぶすことになるし、領民の生活がかかっている。ぜひ知っておきたい情報だろう。それに、子供のいうことだ。ファルマは不敵にほほ笑んだ。

「買おうと思うのは私ぐらいでしょうね」

「何であんたは買いたがる」

「この藻を市場に出荷したとしても価値は全くないでしょう。しかし我が社に限っていえば、その藻から重要な製品を作り出すことができます。それはありとあらゆる薬の原料や、画期的な燃料になるでしょう」

「そういえば坊ちゃんはこのお偉いさんじゃ、失礼じゃが子供の与太話に付き合うわけには」

「申し遅れましたが、私はファルマ・ド・メデシスといいます」

目の前の少年が異世界薬局の店主だと気づいた領民は、声に張りが出る。

「おお、あんたが創業者か！」

「尊爵のせがれじゃないか」

「宮廷薬師だつて話の……」

「いや待て、異世界薬局の羽振りがいいのはわかる。じゃが、事業を広げすぎじゃ。薬局が倒産したらどうする。世界で一カ所しか製品化できないものを全力で育てては、共倒れじゃ」

「何かやらかして、メデシス家がおとり潰しになったりせんこともなかるう」

「倒産したら、ですが」

ファルマの前置きを受けて、パツレがアオコを眺めながら呟いた。

「うちの家を取り潰されるかともかく、異世界薬局が倒産するといったら、帝国と神聖国が滅びるときぐらいじゃねーか。異世界薬局は、今や帝国唯一の勅許薬局であるばかりか、神聖国の勅許もあるんだし」

「ひっ……いつの間にそんなことに」

領民は誰を相手にしていたのかを思い知ったらしく、黙りこくった。

異世界薬局はもはやただの薬局というより、医療保健機関としての役割を一部果たしている。

ファルマは若干居心地の悪さを感じながらも、改めて切り出す。

「契約書はしっかりと作成しますので、商談に応じていただけますでしょうか」

次に反論するものはなかった。

## 7章7話 異世界ノーチート化学工業（後書き）

### 【謝辞】

本項はけみかたん (@chemicaltan) 先生に、ご意見とご考察伺いました。どうもありがとうございました。異世界薬局の医薬品や化学薬品をできるだけファルマの神術チートなしの現地の素材だけで作るという、異世界薬局工場建設計画 (<https://tgetter.com/li/1246775>) という考察をしてくださっています。本項では書ききれませんが、調達できる化学原料、クリーンルーム、プラントの配管まで非常に細かく考察してくださっていますので、ぜひご覧になってください。また、本項は加筆される可能性があります。ご了承ください。

## 7章8話 探検隊の上陸

ファルマはマーセイルから帝都に戻り、怒涛の慌ただしさの中を何とか日々やりすごしていた。

ブリュノが神聖国に滞在し、霊薬体系を研究し始めてから一ヶ月が経った。

大学の春休みが終わり、ナタリー・ブロンデルの腫瘍の再発がないことを確認し、エレンとパツレが些細なことから恒例の果たし合いをし、ロッテが聖帝の肖像画の制作依頼を受け、マーセイル領にバイオマスプールの建設計画が承認されてから一週間。

テオドールが最後に倒れて四日。

パツレが無詠唱神術を使えるようになって三日。

ファルマは今日も、薬局に通常出勤していた。

「ファルマ様、電信がきたみたいですよ」

いつも伝書鳩のメッセージを届けてくれたロッテは、ここ最近は電信の記録用紙を持ってきた。

その状況に至った経緯だが、通信技術の発展は目覚ましく、異世界薬局には帝都各地からの無線通信が入りはじめていた。帝国技術局に無線通信が登録されるや、帝都と近隣都市間では無線通信が整備されようとしていた。また、それを指をくわえて見ていた他国も、サン・フルーヴへ許可と特許使用料を支払って利用を目論んでいる。

ファルマは先んじて、混信を避けるため国家が使用する帯域を協定で決めた。

また、サン・フルーヴ医薬大と異世界薬局間の電信も開通した。



通信室は、薬局の三階の一部を改装して通信設備のある小部屋を作った。

営業時間中は専属の通信士が詰めて送受信を行っている。

薬局に詰めていた屋上の伝書鳩はお役御免とはならなかったが、多少はリストラされた。

彼らは元の鳩舎に戻され、昼は放鳥されて仕事もなくえさをついばみ、優雅に暮らしている。専属メッセンジャーのトムも、医薬大まで走る頻度は減った。

しかし彼は失業することはなく、民家や各薬店、薬師らとの緊密な連絡を担ってくれている。

通信技術の発展の帰結として、ファルマの業務量は莫大に増えた。異世界薬局には無線で処方相談が舞い込むわ、処方箋が来るなどしている。

その忙しいさなか、テオドールが「図や反応式を送りたい。郵便や伝書鳩では遅い」と言い出したので、図表を送る方法を、ファルマは主に二つ提案した。

最初に提案したのは、描画するマスを定義し、その座標を指定して送るというものだった。

しかし、電力や描画するマンパワーの節約から、データの圧縮が必要となる。

面倒を嫌った無線技術師によって符号化が試みられ、連長圧縮（ランレングス圧縮）などを用いた。

白と黒を0と1で定義し、白白白白黒黒白白などは、00001100と表されるところを、更に短縮して422という具合に表す。通信できるデータ量は多くなったが、データ量の増加に伴い復号係のミスが頻発した。

そこで、自動にできないものかとのユーザーからの相談がファルマのもとに舞い込んできた。

コンピュータの出番かとも思われたが、コンピュータ開発に手を

広げるにはファルマも忙しすぎた。

急場しのぎとして、ファルマは振り子の先に電極をつけ、その往復を利用してわん曲した銅板の表面を走らせ原稿を読み取らせて遠隔地に送達するパンテレグラフ（Pantelegraph）という、ファクシミリの原型となる原理を技術局に登録した。

驚いたことに、それを契機に画像送達技術が次々と発明されはじめた。

とある技術者が、振り子ではなく円筒に絵や図を全周貼り付けて回転させながら絵を読み取ったほうが効率がよいと考え、受信側は円筒の回転速度と針の動きを同調させることによって絵の受信を成功させた。

それを受けて、事前に技術局に登録されていた光電管を用いて光の強さを信号に変えシグナル化して読み取らせ発信し、受信側は信号の強さをインク濃度へ変換し記述するという仕組みを考えたものもいた。

映画フィルムができる一歩手前、そんなムーブメントがきている。誰かが思いつくのも時間の問題だろう。

技術局には、実名つきで多種多様な送信技術が登録されはじめた。ファルマは匿名を貫いていたので、ファルマ以外の技術者や実業家の実名登録が始まったということになる。

特許を実名登録をすると、技術局から報奨金や特許料が得られるため、競争のようになってゆく。技術者や学者らの井戸端会議が繰り広げられはじめた。登録書類の執筆を代行する特許事務所のような商売を始めたものもいた。

技術局には新技術を利用しようと毎日出勤している者があり、また、登録しに来るものもあり、技術開発によって活況を呈した。

そのうち彼らが意気投合して組織化し、それまで工業系ギルドの専門学校であったサン・フルーヴ帝国技術学校を改称して、官民合

同の電気通信技術なども包括したサン・フルーヴ工科大学創設の動きが出てきた。個々で競い合うのもよいが、技術者一丸となって全体で帝国の技術力を底上げしてゆこうという流れである。

聖帝のお墨付きを得て、来春にも新規開校すべく準備を整えていると聞いた。

大いに結構だとファルマは思う。

現代の通信技術や工業技術とは異なる技術が発明されれば、それはそれで面白い。

この流れから当然、頻繁に登録受け付けにやってくるファルマは、帝都の技術者らにマークされはじめた。ファルマは技術局から出てくると、待ち伏せていた技術者らに囲まれ根掘り葉掘り聞かれるようになってしまったので、技術を登録する際は代理人としてセドリックを派遣することにした。

ファルマの依頼を受けて特許局へ出入りしていたセドリックは、詐欺的な内容での登録が現れ始めたことに気づく。そこで法律に明るい彼は悪徳業者が参入しないよう事前に手を打ち、利用制限や登録制限をかけた条項の盛り込みを技術局に打診した。

そこで、「技術局に登録したものは、技術の妥当性があるかどうか事前審査し、悪質なものは実名・社名公表のうえ嚴重に処罰する」というお触れが出た。

ファルマはジャンたちの動向を気にかけてつつ、テオドールと緊密にやりとりをし、指示を送っていた。ファルマが過労死を警戒して余りにも労務管理にうるさいからか、テオドールは自宅にラボを作り始めたという情報を得て頭が痛い。自宅にラボなんて作ってしまうと、実質24時間働けてしまうのが辛いところだ。

かたやラボが自宅勢のエメリツヒに関しては、ファルマの目が届くということもあって労働管理はきちんとしている。エメリツヒは叙爵されたことで暮らしに余裕がでてきたようで、生活のための薬

師バイトはもうしておらず、さらに研究に専念している。

「テオドールさん、また高熱が出たのに出勤したのか」

ファルマが悩ましく思っていると、セルストが接客を終えて薬歴を書きながら弟を気遣う。

セルストは、度重なる悪霊の襲撃で有事に対応できるよう異世界薬局の近くに引っ越してきたため、子供たちがよく薬局に遊びにくるようになった。

「弟は錬金術師として天職を見つけたようで張り切っているのでしょう。しかしその状況で出勤してはいけないと、わからないのでしょうか。ほかの労働者にうつすことになります」

「言っても言っても言っても懲りてないみたいです」

「ふふ、私も昔はよく体を悪くしていたのですが、この薬局に勤め始めてから全く発熱や風邪というものをひかなくなりました」

それは言うまでもなくファルマの展開しているパッシブスキル「聖域」のたまものだったのだが、ファルマは愛想笑いをする。

「そういえば昔、弟は研究室にこもりつきりで、私が部屋をたずねたら鍋を火にかけたまま密室で二日間倒れていたということがありました」

「密室で火をかけたまま……一酸化炭素中毒かな」

「危つく死ぬところだったという笑い話ですけどね」

「それは本当に笑い話にはならないところでしたよ」

ファルマが真顔になる。

テオドール率いるマーセイル錬金術師らが突っ走って、やらかさないよう祈るばかりだった。

水属性神術使いの錬金術師は火を使わず薬効成分を抽出しポーションにするのが得意だが、火属性神術使いのやることといえば乾留・蒸留・煮沸・融解・燃焼などなど、炎や熱を使う過程ばかりである。必然的に事故も多い。もちろん、火属性神術使いは炎に対する防御力も強いのだが、機材や設備なども一緒に焼けたり吹き飛んでしまう。

（現代でさえ、研究室での爆発や機材の破裂なんてざらにあるんだからな）

たまに大学で爆発を起こしてニュースを賑わせる。思いつきで色々とやらないでほしい、とファルマは心配だ。実験計画を必ず電話や電報で提出してもらおうようにしているが、心配はつきない。

「有機・無機化学および専門科目の座学と安全講習はしたんですが」「防災、防爆神術陣を施した服装にしろらうとかどうです？」

レベッカが提案する。

「そうしたほうがいいでしょうね。ついでに保護メガネも改良しましょう」「

ファルマはさっそく受け入れることにした。

「ところでレベッカちゃん、なんか最近顔色が黄色くない？ 脅かすわけじゃないけど、肝臓とか大丈夫かな？」

レベッカに話題が及んだ流れで、セルストが微妙なタイミングで指摘する。

黄疸ではないかと疑っているようだ。ファルマはそうではないと思っただので、フォローする。

「なんか緑黄色野菜か柑橘系の果物を取りすぎてない？」

「きゃーっ！ 栄養剤を飲みました！ 柑皮症ですー！」

レベツカは顔を真っ赤にした。

この夏、一級薬師の試験を受けるために夜間勉強で寝不足らしく、家に近い支店で薬局の栄養ドリンクを買いまくっていたのが原因だ。そんなこんなで、暗記内容が口からスムーズに出てくるレベツカだった。

今年から、一級薬師の試験問題の内容は現代医薬品も加わり、難易度も上がっている。

「そんだけ勉強してたら受かるでしょ」

「いえてる」

ファルマがレベツカと笑っていると、ちょっとちよつと、とエレンがカウンセリングブースから顔を出している。人目を憚る話だと察したファルマが、エレンと対面してカーテンを閉め、ブースに座る。

「どしたの？」

「ねえ、ファルマくん。つかぬことを聞くんだけど、診眼を使ったあとってしばらく目が見えないことってある？」

「いや、ないよ」

エレンは深刻そうではないが、見逃すこともできないといった様子だった。

「診眼を長く使えるように頑張ってるんだけど……。使ったほうの目が、しばらく眩しく感じるの」

「痛みとかは？」

「ないわ。うーん……。なんだろう。疲れ目かしら」

「集中しすぎてるんじゃないか？」

日常的に診眼を使わないほうがいいのかもしれないよ、とファルマはアドバイスした。

エレンが一度診眼を使うたびに、一日分の神力を使ってしまうことにはかわりない。工夫してごく短時間での透視を試みているようだが、それでも二人が限度ということだった。

「エレンが診眼を使うの、やっぱり体に負担なんじゃないかな」

ファルマは考え込む。

ファルマだって、診眼はここぞというときにしか使っていない。

人外の能力を、エレンのような「人間」が使って害がないという保証もなかった。ファルマはエレンの目を覗き込むが、炎症を起こしている様子はない。眼球そのものにも異常はみあたらなかった。ファルマに凝視されて、エレンが若干照れる。

「や、やあね。そんなに凝視して。てか、ファルマ君なんか大きくなっただよね」

「心配してるんだから、茶化さないでよ」

ファルマの心配をよそに、エレンは軽く笑って席を立ち、勢いよくブースのカーテンを開いた。

「ふふ、深刻に考えすぎよ。神力を枯渇させてもいけないし、診眼を使うのは控えることにするわ。ありがとう」

「また、変な症状が出たら教えてよ。気になるからさ」

「わかったわ。ありがとう。やっぱり、ファルマ君みたいにしようと思うとガタがくるのね」

「エレンが手伝ってくれるのはすごく助かってるけど、症状が続くようならやめたほうがいい。無理しないで」

ファルマはエレンを気遣うが、何となく引つかかるものを感じた。診眼を使って目がくらんだようなことは、一度もなかったからだ。すぐさまエレンを診眼で見てみたが、エレンの左目には青い光がともっている。青ならば、治るということだ。

一時的に目がくらんだのだろうな、とファルマは納得した。

\*

「1148年4月16日、新大陸への二度目の上陸じゃぞい」

ジャン提督が陸地へと一步を踏み出すと、甲板に出た船員たちの拍手がどつとわきおこった。

出航からわずか22日、ギヤバン大陸探検隊二百名の乗組員は、最速航海でギヤバン大陸へ到達した。

上陸したのは、大陸東海岸の南部地方。

真っ白な砂のビーチの広がる砂浜の奥には、豊かな森林地帯と植生が広がっている。まさに新天地といった趣だ。

「ここがギヤバン大陸ですね……本当に着いたんですね……」

低血圧で干物のようなになったクララが、何とか船べりにひっかかっただけで尋ねる。

「着いたのは間違いないが、その呼び方はよさんか」



「でも、そういう名前がついてしまいました」

航海士もそっけなく返事する。ジャン提督は居心地が悪そうな顔で、

「まあいい、今夜、大陸へ電信を打つてくれ。皆心配しとるじやろうで」

「はい。聖下もさぞやお喜びになるでしょう」

「さすがはジャン提督です。まさかここまで速い到着とは思いませんで」

「提督が指揮される船団でしたら、大船に乗った気持ちでいられます」

船員たちはジャン提督の航海の手腕をほめそやす。

ジャン提督への信頼が厚いのは、それなりの理由があつた。

彼は若い時分は帝国から東イドンへの最短航路をはじめて見出し、航海士としての名声を不動のものにした。新航路の開拓で帝国に莫大な利益をもたらし、東イドン会社を組織してからは植民地を狙う海賊を退け、数々の海戦にも勝利した伝説の船乗りだ。

海賊を撃退しただけではなく、海域を荒らす大悪霊をも追い払ったという尾ひれのついた称賛はとどまるところを知らない。

過剰な持ち上げに困った提督は、ひとまずその場にはいないファルマに功績をなすりつけることにした。

「今回はなぜか魔の海域でも悪霊と遭遇せんかったし、店主さんがいろいろと立ち回ってくれたおかげもあるじやろう」

「確かに、驚くほど直進できましたね。前回は悪霊がのさばっていたのに、好天にも恵まりましたし」

「帰りもうまくいくといいんじゃないが……」

ジャン提督はのんびりとあくびだ。

クララも疲れた顔で上陸し、荷下ろしがはじまった。

船団は次々に到着し、海辺には安全確保のための神術陣が敷かれ、本格的な船外活動が開始する。クララも嬉しそうにビーチに突っ伏して、砂浜で平泳ぎのような動きをした。

「はあーやっぱり陸地は最高です。砂！ あー砂！ これでやっと酔い止めを飲まなくてもすみますー！」

「はは、お嬢ちゃんはそのが一番じゃの！」

「帰りもあるかと思うと吐きそうですけど。おええ……」  
「今日は吐かんでよかろう」

航海の途中、無人島などにも立ち寄ることがあったが、先を急ぐあまり滞在期間は数時間という日々が続いていた。

航海の全期間は短期間で済んだとはいえ、クララは陸地が恋しくなっていたところだ。

「じゃあ一言念押ししとかんといかんじゃろうのう」

背の低いジャン提督は、荷箱の上によっこいしょと登ってブリーフィングを始めた。

「諸君ら、わかっておると思うが今回の旅の目的は拠点の確保、次に探検と地図作製のための測量じゃ。船上でも今後の段取りは一通り説明したが、野生動物や悪霊とは、やむを得ない場合をのぞき極力戦うでないぞ。どこに悪霊の巣窟があるかわからんからな」

船員たちは神妙な顔をして聞いている。

手に負えない悪霊と遭遇して、海上まで追ってこられては一卷の終わりだ。逃げ切れない。

クララの予言では船団の全滅はない、死者は出ないといったが、その予言も無事を約束するものではなく、いつ瀕死の状況に陥るともしれないのだ。

「野生動物はまだしも、新大陸にはどんな悪霊があるかわからんからの。食糧・資源探索隊、測量部隊、神術陣敷設・基地建設隊の三隊にわけろ。滞在期間は最大一か月じゃ、積んできた食糧だけじゃ、もたんからのう。滞在分の食糧と補給が尽きたら帰るとする。なんか質問はあるか？」

「提督！」

「はいそこっ」

ジャン提督はあごをしゃくつた。別の船の指揮官が杖を挙げていた。

「新大陸の果物や水、獣などは食べてはいけないのでしょうか。食糧を増やすことができれば滞在期間が伸ばせます」

「ばっかもーん！ 出発前研修で異世界薬局の店主さんからさんざん言われとったじゃろう！ 口にしていいのは本国から持ってきた食糧、神術使いの出した水、これだけじゃ！ その、あーあれじゃ。未知の病原体に汚染？ されとるかもしれんし？ 病原体はなくても重金属かなんかに汚染されとるかもしれんから？ 難しい話はよくわからん！ とにかくダメなもんはダメじゃーっ！」

ジャン提督はファルマの説明を半分ほどわかっていなかったが、現地のものは何も食べるな、と部下に指示し、ファルマの言いつけを死守するつもりだ。

不測の事態で食料が尽きて、最終手段としての「食べられる食物の見分け方」、「飲み水の作り方マニュアル」も渡されているが、これは本当に最終手段で、基本的には絶対に飲むな食べるなど言わ

れていた。

毒物検出の神術が使える神術使いも同行しているが、旧大陸での神術を、新大陸でも通用するものと過信してはならないということで禁じられている。

体を張った調査はいらない。珍しい植物や果実があれば、写真を撮り、採集して持ち帰る。

野生動物の調査も、無理のない範囲で行う。

ロツテが餞別に渡した火炎神術陣などを調査拠点に敷設し、最も近い水場までの測量を行う。宝石や黄金の探索も気になるが欲張りすぎてはいけない。功名心は命取りだ。

「たとえ未知のものでも、連れてきた犬に食わせてみれば毒かどうかぐらいわかるんじゃない？ それより領地確保にいこうぜ。うかうかしていると、他国が来るかもしれないぞ」

こう言うのは、準騎士であり、かつては女帝の小姓を務めていたノア・ル・ノートル（Noah Le Nôtre）だ。彼は偽名で乗り込んでいたが、出航して五日目ぐらいにクララに「ノートル様ですよ？ 社交界でお会いしたことあります」と即バレした。有名貴族の公子であるノアが何故危険な船旅にまぎれ込んでいるのかというと、聖帝エリザベスの密命だ。彼は秘密の任務を与えられて潜入していた。

「だって、話を聞いたったのか！ 遅効性の毒もあるんじゃないぞ。食料は、植えたものが育つまで待つんじゃない！ 領地もへったくれもあるか、お前は新天地をなめとる！」

「帝国の旗を立てて、測量した場所が領土になんだろ？ 急がないと先をこされるぞ」

「断言してもええが、新大陸に到達したのはわしら以外にはおらん！ そんな航海技術を持つ国なんてありやあせんのじゃ」

「わっかんねーだろうがよ！」

ジャン提督とお互いに言い合っていたが、最後は舌戦に疲れてノアが折れた。

それでも船員たちは平地を見繕って地道に開墾し、土壌の確認をし、神術陣で囲いを作って畑とし、本国から持ってきたマメ、カブ、マクワウリ、ミカン、りんご、オレンジなどいくつかの作物の種と苗を植えた。

「大地の実り」

土属性神術使いが協力して促成栽培神術をかける。

これらの作物を育てている間に一度本国に帰り、育ちはじめた頃に戻って安全な食料供給を賄うのだ。現地の果物は、持ち帰って研究し、毒性がないことを確認してから、次回から食べてもよい。

ここはぐつと我慢だ。

その夜の帝国との定期通信で、ギャバン大陸上陸の報が華々しくもたらされた。今回ばかりはモールスではなく音声通信だ。聖帝からのねぎらいの玉音を受け取った船員らは感極まっていた。

船員たちは夜は安全のため、また悪霊との遭遇を避けるためにも、船に戻り一夜を明かす。

夜間、船への侵入者を警戒して、すべての船室には鍵と神術陣がかかけられ、交代で見張りを行った。

翌朝は、早くから大陸の探索活動が始まった。

そして午前中、探索開始後数時間ほどして、基地はにわかに慌ただしくなった。

「湖だ！ 透明で真水の湖があったぞー！」

探索隊が一キロほど内陸に、大きな湖を見つけて帰ってきた。  
水場があれば集落などが作れると喜んでいる。

「水場を見つけたら、発見者が名前をつけていいっていう決まりでしたよね？」

そこで、ギャバン湖（Lac de Gabin）と命名された。

「なーんーでーそこで何でわしの名前をつけるんじゃ」

「到達地の地名はギャバン揃えにしたいと思ひまして」

「揃えんでええわい！」

しゃあしゃあとした返答に軽く嘆いていたジャン提督は、ひげをいじり回しながらあることに気づいた。

「ん？ その真水っちゅーのはどーやって確認したんじゃ？ まさか飲んだんじゃあるまいの？」

「えーとその、し、しづきが口に入りまして」

船員は苦しい言い訳を繰り返した。

「ちよつと体を洗いたくて……で、でも水浴びはいいじゃないですか！」

「その湖には危険生物はおらんのかの？」

「クロコデイルが日光浴をしていましたが、神術結界で向こうへ追いやっておきました」

大型肉食動物との遭遇に動じないあたり、頼もしい。

「人食い魚がおるかもしれん」

「水の透明度が高いので湖底までよく見えますが、クロコデイル以外の大型生物はいませんでしたよ」

護衛の神術使いが報告する。

平民船員ならクロコデイルとの遭遇は大問題だが、神術使いが同行しているため、簡単に退けることができた。ジャン提督は押される。

「むー……水浴をするときには、容器に水をはってその中に何やら薬を入れると書いてあるでう。湖や川を泳ぐのは想定外じゃ」

ジャンは眼鏡を上げ下げして、金科玉条としているファルマの「絶対順守！」メモを確認する。

それを聞いていた随行薬師、マジョレーヌ・ポアンカレ（*Marjolaine Poincaré*）も口をそろえる。彼女はブリユノの高弟で、錬金術師と一級薬師の二つの資格を持っている臨床家だ。ファルマの渡航前研修を受け、ブリユノの命令で随行していた。

「ファルマ・ド・メディシス師からは、やむをえず現地の原水を利用するときは、水質検査と微生物調査が必須と言われています。浄化神術では不十分とのことで。水質検査には時間がかかります」

しかし船員たちはマジョレーヌの話には聞く耳持たずだ。

「そんな大げさな」

「水質検査、何時間かかるんですか。待ってられません、日が暮れちまう」

「本国でだって、湖や川で泳ぐのは当たり前だ。いったい何が危険

なんだ」

「毒物や重金属が含まれていたり、感染症のおそれがあります」

なにしろ船員としての細かい規則や、締め付けが山ほどある船旅である。

ストレス生活中的の船員たちの我慢は限界に達したようだった。

マジョレーヌは圧倒されてしどろもどろになる。

「や、急いで検査しますから……お待ちを……」

「あーじれったい、水を飲まなければいいんだろ！ 水底に真っ青な魚がたくさんいるぞ！ 魚がいるってことは、安全じゃないか」

「せめて水質を調べてから！」

船員たちはマジョレーヌの言葉も聞かず思い切り水浴びを始めた。おおはしゃぎで水を掛け合って白熱する船員たちは、もう止まらない。

透明度の高く乱反射する水は、人を虜にする美しさがあり、潮風と汗でべたついた体を清めたい者も多かった。

あわわわ、とマジョレーヌが両手を前に突き出したまま顔面蒼白になっている。

そんな彼女に向かって、料理人は、黄金色の殻をもつ巻貝を手にしてにつこりしていた。

「見て、水底にきれいな貝がたくさんいますよ。これ、おいしいのかなあ」

「そんな素手で！」

「薬師様がたは潔癖すぎますよー。火を通せば安全！ スパイスト油で炒めたら絶品ですよきつと」

その様子を見たクララもそこはかとなく嫌な予感がして、おずお



ずと忠告する。

「あのそれ、触らないほうが……すごく嫌な予感がします、私の守護神がそう言っています」

「またまた一気にしすぎですよー」

「そうかなあ……」

クララと随行薬師マジョレーヌは押しが弱く、お互いに顔を見合わせて一言ずつ述べた。

「私はどうしても嫌な予感が」

「私は衛生的観点から危険だと申し上げているのに」

「もし、何かあったら」

「感染症にかかったとしても、しばらくは持ちこたえられるだけの薬は装備していますが……全員が同じ病気になることは想定されていません」

マジョレーヌは「常備医薬品・衛生用品手帳」というものを取り出して見せた。

クララとマジョレーヌの懸念もよそに、その日、船員たちの身に何も起こらなかった。

大急ぎで実施した水質検査も、細菌検査も問題はなかった。

「濁度、色度、細菌の個数、水素指数、全般的に問題ありません。ファルマ師の水質指標をクリアしています」

飲用には適さないが、生活用水としては間に合う。フィルターろ過を行えば、飲用もできる。

マジョレーヌはすっかり安心したようだった。

翌日も、何も起こらなかった。それどころか大っぴらに泳いでい

るものも増えた。こつそりと魚を焼いて食べ始めた者も出た。ジャン提督も、「火をしつかりと通したのなら」と認めざるをえなかった。緊張の糸が切れた、そんな空気が漂う。

誰から言い出すともなく、この湖は安全だということになりつつあった。

「この青い魚、焼いたらウロコがパリパリしてうまいですよ」

「さっ、魚は苦手ですの」

「クララさんも水浴びぐらいしたら」

「私は水属性神術で間に合ってますん」

「クララさん、クロコデイルのテリーヌですよ」

「遠慮しておきますん」

クララは頑なに断った。

付き合いの悪いやつ、と思われようが、嫌な予感がするとき全員が同じ行動をしないほうがいい。それがクララのサバイバル術だった。

それから一週間で、ギヤバン大陸探検隊は、上陸地から南北に数キロの安全な生活圏を確保した。

ギヤバン山、ギヤバン溪谷、ギヤバン川、ギヤバンという地名をつけまくった。

野生動物も、発生する悪霊も、歴戦の神術使いの活躍で退けた。

ノアはめばしい土地を見繕っているようだった。

着々と測量も進み、真新しい地図ができてゆく。順風満帆、船員たちも活気にみなぎっていた。

…… たったひとりを除いて。

「守護神様の神託…… 外れたのかなあ……」

日中も動悸が止まらず、旅神に祈りをささげつつ、なかなか寝つけもしなかったクララである。クララの日課といえば、「今日の運勢を占い、ジャン提督にアドバイスをする」という立派(?)な仕事だ。

占いの効果もあつてか、船員全員、さしたる怪我や病気にも見舞われていない。

それなのにあまりにもクララが沈んでいるので、船医からは「ストレスですよ」と断定され、「だいじょうぶ? 眠れないなら睡眠薬とか抗不安薬飲む?」とマジョレーヌにそんなことも言われたが、クララは薬で解決する問題ではないとはっきり感じていた。

「ふええ、絶対なんかあるよう……早く帰りましょうよう……」

クララは目じりに涙をぶら下げていた。

とにかく、何事もなく帝都に戻りたいばかりだった。

クララが悪夢を見て飛び起きた朝、早番で上陸した船員たちが、悲鳴を上げながら逃げ帰ってきた。

「基地に敷設していた神術陣と結界が……すべて破壊されています! 基地内にも何者かが侵入したあとが。資材が破壊されています」

「何じゃと!」

朝の紅茶を飲んでいたジャン提督が紅茶を吹いた。

「神術陣を退けるほどの悪霊が来たのか……」

探検隊は騒然となった。なにしろ、近くに悪霊の住処となりそうな場所はなかったし、大型の野生動物もない、神術使いたちも特

に反応を示してはいなかった。

「いや、でも悪霊ならば昼間は安全だ。神力を消費するがやむをえん、もつと強力な神術陣を展開し、基地の荷物を船に戻せ」

ジャン提督の指示が飛んだ。随行神官、神術使いたちは結界と神術陣を張り直した。

「妙ですね。神術陣を破るほどの悪霊のはずが、気配がまったく残っていません」

神官が首をかしげる。

「提督！」

作業が終わりに近づいたころ、マジョレーヌが震えながら近づいてきた。捧げもった布の上に何かを載せてジャン提督に見せる。

「なんじゃ？ わしゃ老眼で」

「基地の床に髪の毛が落ちていました。よくみてください」

「船員のじゃないんか？」

「真つ黒の、長い直毛です。この髪の毛の持ち主は、我々の船にはいません……そして、動物の毛とは違う構造……人毛です」

一同に戦慄が走った。

「ほらみる、やっぱり他国が先回りしてんだろがよ。どこだ？ スパインか？」

ノアがマジョレーヌに詰め寄るが、マジョレーヌは首を振る。

そう、黒髪の船員は存在しないばかりか、大陸にも、どの国にも、植民地にすらも存在しない。それを説明されたとき、誰もが黙りこくるしかなかった。

「私たちが分かるのはただひとつ、犯人は悪霊ではなく、この大陸の人間だということです」

クララはじめ船員らは震えあがった。

ジャン提督は船員たちの動揺をよそに、きびきびと副官に指示をする。

「本国に電信を飛ばせ、人がいるとな」

「しかし、昼間は大陸間での電波が安定していません」

「今すぐだ！　そして、その毛を持たせて伝書海鳥を飛ばせ。店主さんに見せるんじゃ」

「無理です、一番飛ぶ鳥を使っても、これほど遠くからは戻れません」

「できるかできんかは聞いとらん。やれ！」

「かしこまりました（Je suis à vos ordres .）」

「諸君、武器の準備を怠るな。大砲を全門、岸に向ける。話が単純でいい。人間とやりあうに、杖はいらん」

ジャン提督はなおも動じる様子もなく、肌身離さず持っていた腰のピストルに手をかけ、コートを羽織った。

「われら泣く子も黙る無敵艦隊。陸あれ海あれ、戦争とくりやお手のものよ」

## 7章8話 探検隊の上陸（後書き）

### 【謝辞】

本項の無線技術の部分は、下記の専門家にご指導、ご提案いただきました。順不同

アマチュア無線技士 アルタリウス先生

でちでち先生

工学修士・アマチュア無線技士 HODA先生

生命科学修士 坂下 明 先生

放射線治療医 不観樹 露生 先生

アマチュア無線技士 丸山 修 先生

## 7章9話 ファースト・コンタクト

「開戦じゃ！」

ジャン提督の号令が洋上に響いた。

「調査基地は海岸堡を構築し、艦隊の前面に物理防壁を展開しろ！  
沖合の島を撤退時の陣地とする。ボヤボヤするな！」

「はっ！」

船員らは戦闘モードにスイッチしたジャン提督に圧倒されるが、  
迅速に行動を始める。

大型帆船は海上で視認されているため、すでに標的になっている。  
こちら側は内陸部に逃げ込むことのできる相手を殲滅することはでき  
ないが、相手に船を沈められれば終わりだ。

ジャン提督の言うよう、一刻も早く陸上、特に海上の安全域の確  
保が必要だった。

神術使いらが各属性ごとに隊を編成する。

「地殻よ、隆起・堅守せよ」

正の土属性神術使いらが共鳴神術を使って連携し杖を地上に突き  
立て、息を合わせて発動詠唱を発すると、基地の周囲を硬く高い岩  
壁で囲われた。

これを前進基地とし、防衛のための拠点とする。

「陥入せよ」

続いて控えていた負の土属性神術使いがその周囲に一瞬で二重の壕を張り巡らせ、

「湛えよ」

水属性神術使いが一斉に杖を振れば水堀ができ、

「火炎焼灼！」

炎属性神術使いが海岸堡の周囲百メートルを炎で焼き払い視界を確保する。

「大地の牙！」

そのさらに前面に土属性神術使いらが頑強な柵を構築した。ここまで、わずか数分。この機動力は、神術使いがいかに戦地で欠かせない存在か実証する。相手が神術使いであれば構築した要塞を神術で切り崩されてしまう心配もあるが、平民相手ならば物理攻撃は防げ、視界を広くとったことで敵が突撃にも早期に警戒し迎撃できる態勢が整った。大砲などの飛び道具も届かない距離だ。

「今日の神力はもう使い切ってしまったぞ」

「かなわんな」

「ポーションの配給をたのむ」

神力計を握りながら、神術使いらは汗をぬぐう。神術使い全員が消耗したわけではなく、予備戦力はもちろん残してある。神力を消耗した者は、杖を銃器に持ち替える。貴族が手にする武器は杖のみ、銃火器を扱うは末代までの恥という誇りと矜持は、新大陸においては命取りとなるため犬の餌にくれてやれという考え方だ。



彼らはマジョレーヌら随行薬師が調合した神力回復促進ポーシヨンを喉に流し込む。マジョレーヌは甲斐甲斐しく神術薬の瓶を一人一人に手渡してゆく。

「どうぞ！ はいっ！ 神力充填薬を準備しておいた甲斐がありました！」

これによって、通常一日程度神力の回復に時間を要するところが半日で済むようになる。

このポーシヨンは翌日の神力を前借することができるが、そのぶん後日にツケを払うことになる。

ハラハラしつつ様子を見守っていたクララが、ジャン提督に改めて進言する。

「防衛は必要ですが、交戦は避けるべきだと思いますん」

「正当防衛と安全の確保は国際法でも認められとる、一方的に侵略されとんぞ！ 寝言を言つとるばあいじゃなかるう！」

ジャン提督は憤慨している。

「でも、相手は国際法なんて理解してないと思います。地形まで変えて、森を焼いちゃったら過剰防衛だと思いますう……。私たちは無人だと思つて彼らの縄張りを荒らしてしまったのかもしれない。あちらからしても、侵略者を追い払うための正当防衛なのかもです。地図や最低限の測量は終わっています。差し出がましくてすみません、ここは安全を優先し帰還すべきかなって」

クララは涙目で言いにくそうに理由を述べる。

「では、拠点を変えてはどうでしょう。彼らの縄張りを出れば、攻

撃してはこないはずです。北上か南下しましょう。別にここを拠点にする必要はありません、仕切り直しませんか」

航海士が拠点の移動を提案した。彼らも全員が全員戦闘要員ではないので、交戦は避けたいと考えている者も多いようだ。しかしジャン提督は首を縦に振らない。

「遁走じゃろうがそれは！ 場所を移しての再調査、拠点建設は時間と物資の無駄じゃ！」

「しかし、一晩で神術陣が破られました。相手はこちらの手の内を熟知しているものと思われます。ご存じの通り、神術というのは主に悪霊や野獣に対しての対抗術でありまして、対人は基本的には想定されておりません。設置型<sup>トラップ</sup>神術陣は、人為的に陣形の一部を破綻させることで、いくらでも破ることができるのです」

随行神官らは戦闘技能に長けている精鋭揃いで、戦闘を厭わないが、神術陣を破られたことは懸念材料となるらしい。

「このように危険な地では、作物を育てることもままなりません。基地を建設しても、そのまま無人で残して帰還できる場でなければ意味がありません」  
「ぐぬぬ」

最終的にはジャン提督は副官に矛を収めさせられたが、譲らない部分もあった。

「では明日拠点を移す。だが、敵はまだ近くにあるはずだ。相手の正体も見極めずに逃げ帰るようなことだけはできんぞ！」  
「それは同感です」

何も情報を得られないまま退避したとしても、次も同じ目に遭う。引き揚げる準備はしたうえで、彼らの正体を見極めて帰還する。捕虜をとって帰国すべきだ、とジャン提督は意気込む。

「というか、相手はどこに潜んでいるのでしょうか。全く気配がないのですが」

マジョレーヌが疑問を投げかける。

「不寝番によれば、夜間、陸側に明かりは灯っていなかったのとです。彼らは明かりをつけずに行動し、神術陣を破壊するなど、的確な機動をしていたということですよ」

「月明りや星明りじゃろう」

「昨夜は新月です。夜目の神術でも使っているのでしょうか」

「もしくは、晶石じゃな」

ジャン提督は眼光を鋭くする。晶石の中には、神力を受けてほのかに発光するものもある。

それを明かり代わりにすれば、足元の明かりぐらいにはなるだろうというのだ。随行神官の一人が、険しい顔になった。

「たしかに彼らが晶石を使うのでしたら、暗闇に乗じて未知の神術を使い、我々に奇襲をかけることができます」

「前線に火を絶やすな！」

ギヤバン大陸探検隊は、最大限の警戒のもとで夜を迎えた。

「さあこい。正体を見せてみる……！」

ジャン提督は陸地に向かって吠える。

夜の帳があり、辺りは闇に包まれてゆく。待ち構えていると、通信士らが青い顔をして報告にやってきた。

電源の節約のため電波の届きやすい夜になって帝都との通信を開始した直後、異変に気付いたのだという。

「報告します。電波は送信しているものの、帝国と通信が確立できません。帝国を含む各国の基地局も応答しません。これ以上は電源の確保が難しく」

「はあっ そんなわけがあるか！ 装置の故障ならばなんとかしても復旧しろ！」

「いえ……通信機器は正常に作動しており送信には成功しているのですが……送信側の電波がどこかで遮断されていると結論付けました」

「なんじゃと！」

通信士はなすすべなしといった面持ちで怯えていた。

「つまりその……我々は、孤立したということです」

マーセイルから8000 km、通信は途絶。

未知の敵地で孤立したのだ。

その意味を誰もが理解しはじめた時、内陸から吹き降ろした一陣の疾風が、前線を煌々と照らしていた神術火炎を一齐に吹き消した。

「来るぞ！ 再灯火しろ！」

「”照炎珠”」

炎の神術使いらが、すかさず焼夷弾となる火球を上空へ放つ。

照明が確保されたときには、黒く臃げな人影が忽然と五体出現し、基地の数十メートルほど手前まですでに侵攻してきていた。

「なんだあれは！」

” 捕縛せよ！（Arrestation）”

随行神官らが、陣地に埋設していた拘束神術陣を起動した。

これは人獣問わず相手を完全に無力化し、その場に縫い付け捕虜とするための術で、基本的に捕縛できないものはない。

しかし、術は黒い影を五体とも認識することができず、影たちの侵入は止まらない。

影の集団は横一列に並び、壕に張られた水上をもともせず、一歩ずつ歩いて越えた。神術使いらは影の正体を見極めようとした。

” 憤怒の暴風！”

” 炎の嵐！”

風属性、火属性の連携技で、影を火炎風で吹き飛ばそうと試みる。しかし影は攻撃で少し煽られたものの、なおも一定の速度でこちらへ近づいてくる。射撃部隊の掃射が始まったが、被弾しても態勢を崩しもしない。

「 死霊殲滅！」

神官らが除霊神術を使うが、効果はない。その何者かは、悪霊ではなく実体でもない、相反する性質を持っていた。

「こいつらは一体何なんだ！」

神術使いらがパニックに陥ったとき、船を囲むように、海中に無数の黒い影が現れた。それは人の頭のようなシルエットを映じ、ふわりと海上に浮かび上がりその全貌を現す。

森の奥から迫ってくる人影と同じものだ。

「囲まれたぞ！」

近くで見れば、それは黒布を頭からすっぽりと被った異形というべきものだ。そして、四肢の各部は人間として不自然な、不規則的な細動を繰り返している。

「不破の聖界」

それらが船底を伝って上がってこないよう、神官が素早く船底に防御用の神術陣を張り巡らせる。誰もが船の周囲に目を向けていた時、

「” 火焰の矢 ”」

ノアが鋭い発動詠唱とともに繰り出した火炎が、陸地の最奥にいた影の頭部に直撃した。

狙いすませた一撃により、その一体は吹き飛ばされ転倒した。

一体の動きが止まると、全ての人形の動きが一瞬止まった。ノアはその拳動を見逃さなかった。

「見つけたぜ」

全ての人影の足止めに成功し、標的は定まった。

「お前、” 人間の動き ”をしていたぞ」

女帝の小姓であったノアのめざとさと、洞察力が冴えわたっていた。

” 火焰牢獄 ”

ノアの放った神術炎の火柱が、主犯一体の周囲に立ち上り、彼を援護するように、土属性神術使いが岩石牢で補強した。術者をとらえた。

しかし、囚われの術者は一切の動揺を見せることもなく指先を前に向けた。

「何だ？」

ノアに報復をするかのように、彼のいる船めがけて縦に一本線を引く。

すると岩石牢は果実を破ったように縦一線に割れ、同時に術者の延長線上に位置する船のマストの頂点から縦二つに船が裂け、船員たちは海上に投げ出された。

” 氷晶盤！ ”

水属性神術使いが海上に杖を突き立てて海面を固め、流氷を作り急場の足場とする。

ジャン提督は躊躇せず術者を銃撃したが、銃弾は不可視の防壁によつて弾き飛ばされた。

大型帆船は大きな渦に飲み込まれながら、あえなく沈没していった。

命からがら海中から氷上に上がりながら、一部は上陸しながら、神術使いらは戦闘陣形を立て直す。

「あれは、神術ではありませんよ」

ずぶぬれの神官が肩で息をする。

敵術者は、その姿を見せつけるように、かぶっていたフードを脱ぎ捨てた。

黒い覆布の下から現れたのは、長い黒髪の少女だった。

「女だぞ！」

彼女は神術使いらを軽くあしらうかのような艶美な動作で大地に胡坐をかき、両手を地について俯きながら地に扇を描くようにした。すると、大地に赤く発光する鳥と植物をかたどった幾何紋様が現れ、彼女を中心に、地上に敷設された神術陣を崩壊させ、赤い発光で上書きしてゆく。

神官が叫んだ時には、燃え上がるような炎色の羽毛に覆われた怪鳥と巨木が地面の図柄の中から湧き上がり、夜闇の中で禍々しく実体化しはじめていた。

「なっ……」

神官の杖を握る手が、わなわなと震えていた。

彼我の力の差を知ったのである。その直後、クララが絶叫した。

「今すぐ杖を捨てて！」

クララは率先して杖を捨てて必死に警告したが、誰も杖を捨てなかった。

その時、閃光とともに怪鳥が彷徨し、それを合図に杖を持っていた者全員を射抜くように光の矢が直撃した。

少女は実体化した蔦を操り、硬直した神術使いら全員を捕縛した。地より実体化した怪鳥は少女を背に乗せると悠然と上空に舞い上がり、ただ一人意識を保ったクララめがけて大嘴を開きながら急降



下した。

「きゃーっつ」

惨劇の夜。

壮麗な巨躯を誇った五隻の戦艦の姿は無残にも波間に消え、沖から寄せる波は大量の漂流物を岸へと運んでは、静かに沖へ返していた。

時刻は夜十一時、夜空には三日月。

千人をこえる神術使いたちが、大きな輪を作って演習の始まる瞬間を待っている。

闇夜の中、聖帝の放った火炎神術の火球が草原を昼間のように照らしていた。

神聖国武装神官とサン・フルーヴ帝国近衛師団、その他上級神術使いらによる、合同神術演習の日を迎えていた。

サン・フルーヴ帝都郊外の荒野に、指揮をとる聖帝エリザベスの声が厳かに響く。

彼女は戦闘用のドレスを着用し、大神官となつてあつらえた戦闘帝杖を携え臨戦態勢をとっている。

「これより、大規模な悪霊の発生を想定した大演習を行う」

この演習には、ファルマを含む神術使い、総勢千人以上が参加していた。

宮廷や大神殿に所属する神術使いのうち、上位戦闘神技、上位防御神技が使えると担保された者であれば、誰でも参加してよいという聖帝の意向を受けて、われもわれもと腕に覚えのある神術使いた

ちが詰めかけた。

審査に合格した神官ら、廷臣はもちろん、腕試しとばかりに武術系名門貴族らも多数参加している。

この背景には、昨今の帝都の神技技能、防御神術陣の技能向上の機運の高まりがあった。

防災意識の高まりもあって、悪霊発生を想定した模擬演習なども各地で行われていた。

というのも皇帝不在の間、帝都での大規模な悪霊発生と、神術使いらがなすすべなく、隣市に避難するしかなかったという醜態をさらした神術使いらは、神術使いとしてのプライドをへし折られた。悪霊発生時、我先にと逃げた貴族は白い目で見られるだけでなく領民から追放されたり、神術の腕の悪い領主の解任を求められた。これらの事例を耳にしたか、有力貴族らは保身と恐怖心もあって、上位神術使いを召し抱えたり、慌てて自ら杖を振り始める者も多数現れた。

神術を扱えるだけではもはや不適合で、家族と財産、そして領民を悪霊から守り抜く能力が求められ始めたため、貴族らは必死だ。

悪霊が出れば杖屋が儲かる、そんな言葉もあるが、帝都では神力増幅効果のある戦闘杖が飛ぶように売れている。また、平民も悪霊除けのお守りを買って求め、帝都の空気は物々しく一変した。

聖帝が主催するこの演習は、神術結界で広域に囲ったうえで、呪器を解放し実際に悪霊を大規模に発生させ、悪霊の殲滅をはかるという、実戦形式の模擬戦闘訓練である。

訓練の最終段階ではファルマが後片付けと地鎮をし、最後は結界を解いて呪器を鎮めるという段取りだった。

聖帝から演習のブリーフィングを聞いていたエレンが、ファルマに耳打ちで尋ねる。

「ファルマ君って神聖国では正統な守護神として擁立されてるのに、なんで帝国では伏せてるんだっけ？ 宮廷薬師のファルマ君が何で世界最強の聖帝を差し置いて現場責任者を任されているのか、知らない人は疑問に思うわ」

「……なんでだと思う？」

ファルマは困ったようにエレンを見やる。

「わっかんない」

「薬局を平穏無事に続けたいからだよ」

「そっか……そうよね。薬局と大学が神殿になっちゃうと困るわけね」

「患者さんが薬局に来て安心できない状況は、どうしても避けたいから」

エレンもファルマの説明を聞いて遠い目になった。

ファルマは今はどっちつかずの立場だが、帝国で素性をバラされると居心地がすこぶる悪くなる。

一般市民にまでばれてしまつては、患者や客を巻き込んでのトラブルに見舞われないわけがない。信者が押しかけてファルマは店頭に立てなくなるし、患者も殺到して受診が一極集中化する。せつかく各地の施設にも患者が分散して医療拠点ができつつあったし、大学で後進も育ってきたのに、一期生が卒業しないうちから帝国の医療を崩壊させるのはたまつたものではない。

ファルマが守護神として神聖国に担ぎ出されることを了承したのは、エリザベスを救い、そして世界の安寧秩序を守るためでもあった。現にエリザベスが大神官として即位、呪いから解き放たれ、しかるべき職務を果たしているからこそ、この世界は仮初の平和を保たれている。しかし、その代償もそれなりにはあった。

「まあ、今後はもう広まらないと思うよ」

「何で？」

「違反者は聖下に肅清されるから」

「こわっ！」

神聖国側ではファルマの正体について厳しく口止めし、帝国側でも聖帝がファルマの秘密を知るもの全員に誓約書を書かせ血の署名を求めた。

誓約を破ったものは、聖帝直々に厳罰に処されるという文言を付してだ。

それを恐れたのか、噂の拡散は失速した。

「ファルマ、続きの説明を」

「あつ、はい」

エレンと私語をしていると、聖帝に水を向けられた。

ファルマは咳払いをすると、神術使いたちの円陣の中央に腰を低くして進み出た。

「改めまして、今日の演習の責任者をつとめます、宮廷薬師のファルマ・ド・メディシスと申します」

簡素な自己紹介だが、場の全員が事情を知っているわけではないのでこれでいい。

ファルマの言葉が始まると、神官らはただの宮廷薬師に対してとは不釣り合いなほどの恭順な礼をする。

おのずと注目が集まるなか、ファルマはコートの内ポケットから呪器をとりだす。

「えーと……今回の演習に用いる呪器は、疫神樹です。発芽と同時

に地中から悪霊を無限に呼び込み、一定の領域に入った生きとし生けるものを無差別に襲撃して樹幹へと取り込み悪霊化しようとする。神術攻撃を続けても、完全には破壊できません。命の危険があれば私が救出しますが、防御に自信のない方は、遠隔から攻撃をした方がいいでしょう」

疫神樹は、ファルマがド・メディシス家から引きはがし、肌身離さず持っていた呪器だ。

狭い範囲で無限に悪霊を呼び込むという性質が、演習にはうってつけだった。

呪器は必ず、ファルマが制圧できるものでなければならない。

ファルマも試しに何度か試してみたが、問題なく制御できそうだった。

性質のわからない呪器を解放することは危険極まりないが、疫神樹ならば研究済みだった。

「疫神樹の増殖が勝るようでしたら、私がすみやかに種子に戻します。全員、ハバリトウルは飲みましたよね？」

この場の全員、霊薬ハバリトウルを飲んで、悪霊の憑依を予防している。

ハバリトウルはファルマ自身で作ることににより、神術使い一人が一生分の神力をすり潰されるという代償はなくなった。ファルマは神力切れを気にしなくてよかったし、半実体である彼は呪いにもかからなかったからだ。

ファルマは種子を地中に埋め、軽く両手をかざした。

「では、はじめます。準備はいいですか」

指揮をしていたサロモンが、ファルマの呼びかけに応じる。

サロモンは今回の演習の神聖国側の総責任者となっていた。

「神聖国神官、全隊準備完了です」

「うむ、こちらもよいぞ」

エリザベスも腕組みをしたまま首肯する。

「では」

ファルマは頷くと目を瞑り、疫神樹を覆っていた神力を断った。

「解除しました。どなたも、油断なく」

彼はゆっくりと後退し、防護壁の役割を果たしている神術陣の外に出る。

広範囲をすっぽりと覆うドーム状の神術陣はコームらが維持しており、悪霊を拡散させないための防御壁だ。これが崩れれば、悪霊をまき散らしてしまうことになる。

結界の中央に位置する疫神樹が発芽し、周囲に黒い霧が湧き上がる。

意図的に呪器の封印を解き、神術を絶った状態にすると、制御を失った呪器はたちまち悪霊に汚染され、黒い不定形の塊を生じ、樹木の生長を早回しするように禍々しく脈打ちながら成長をはじめた。エレンが杖を握りしめ、制御装置を外す。エメリツヒは二杖を両手に取り、神力を込め始めた。

数分もたたないうちに、疫神樹は無限に悪霊を生み出す大樹となる。

ファルマはそれが広がるに任せて、ただ眺めていた。

神術使いたちは、この世界が悪霊を踏みつけながら危うく成り立っていること、神術の存在意義を再確認するのだった。

戦闘は神術使いらに任せ、ファルマはこの時点では手を出さない。今回ファルマはあくまでも、この呪器を持て余し、どうしようもなくなつた時の後始末要員だ。そうでなければ、対悪霊の訓練にならない。悪霊を呼び出してまで彼らに神技の特訓を促しているのは、いつ消滅するかもしれないファルマが世界中をたつた一人でカバ―できるわけではないからだ。一人でも多く強力な悪霊と戦える人材を育てておき、各地に悪霊駆除のノウハウを伝承することもまた、必要事項だった。

疫神樹が生み出した悪霊は、結界を打ち壊そうと群がり始めた。

「攻撃開始！」

「水・風・土属性。攻撃開始！」

土属性のサロモンの号令が響く。

この度の演習では、相性の合う属性ごとに一斉攻撃を行う。例えば水と火など、組み合わせによつては、攻撃の威力が削がれるからだ。

少人数ではできなかったことも、大人数では可能な戦術となる。

神官らは共鳴神術を使い、連携のとれた連続攻撃を近接、遠隔からたたみかける。

「日頃の鍛錬の成果を見せてやる」

パツレは嬉々とした表情を浮かべると、氷の柱を次々に生成し、それに乗って跳躍し、空中から疫神樹を急襲する。

無詠唱の革新神術で、氷の柱を幾重にも穿ちこみながら疫神樹の樹幹に降り立ち、指先で疫神樹に触れた。すると疫神樹全体が氷塊に覆われ、動きが止まる。

パツレは目覚ましい神術技能の成長を遂げていた。

「何が起こったんだ」

「疫神樹に含有している水分を利用して、内部から凍らせたのでしよう」

ファルマが分析した。

凍てついた疫神樹の表面に、聖句紋が走る。神殿神術の真骨頂だ。それに反応したのは神官らだ。

「あの陣形……！ 杖の聖別詠唱ではないか！」

「しかし詠唱をしていない。無詠唱で疫神樹を聖別して杖化しようとしているのか！」

パツレは持っている杖を手放し腰に差しなおすと、晶石を両手で握りこみ、両腕を前に突き出した。

彼の両腕に聖句紋が走った次の瞬間、光砲にも似た大神技を生身で放出し、周囲に光をまき散らし、疫神樹の半身を粉碎した。

「両腕を杖化詠唱で聖別、破邪系革新神術を晶石で増幅し、無詠唱で繰り出しましたかね。……からの、破戒神技です」

ファルマが、何が起こったか理解できない観衆のために冷静に解説をする。平静を装うが、ファルマも初めて見たのだ。

エレンは神官たちと同様に、神術の常識を超えたパツレの神技に唖然としていた。疑いのまなざしがファルマに注がれたので、ファルマは全力で首を振って先に釈明した。

「いや、俺は教えてないよ」

「独学でああなっちゃった？」



エレンの口がぽかんと開く。

「しいていえば、似ているものを探すといいつて言ったかな」

ファルマがパツレに教えたのは、「他属性の神術を扱うには、今使える神術との共通項を作って汎化させるといい」、その一言だけだ。

その一言に触発されたパツレは、部屋にこもって神術を分析し、凄まじい解釈を試みた。

杖は植物あるいは金属を聖別することで得られる。

植物と動物の細胞は、細胞壁の有無のみで本質的には同じ。

ゆえに、肉体はそもそも杖化できる。

そんな発想に至ったというのだ。

ファルマが杖を用いず素手で物質創造、物質消去ができるのは、別にチートだったわけではない。

無意識のうちに、自身を杖化していたのだ。

それが、神術発動と同時にファルマの両腕に薬神紋が浮かび上がる理由だ。

パツレは、神術の本質を追い求めている間に、この世界の無法則と無秩序に気付き始めたのかもしれないかった。

気づいてしまえばなんということはないが、術を編むときに僅かでも世界に対する疑念が残っていれば失敗する。

失敗するかもしれないと思えば、そのようになる。

この世界は念じたままに、心のありようを現実に映す。

それでも、失敗を恐れず自身に杖化詠唱をかけることのできる神術使いが、この世に何人いるだろうか。パツレにはそれができた。

それはひとえに彼の信心のたまもの、薬神の加護を信じていたからだ。

「そんなヒントだけで……段違いだわ。今のパツレ君にはかなわないわね」

勝気なエレンにしては珍しい発言で、ファルマには、彼女のパツレに対する敗北宣言のようにも聞こえた。

パツレの会心の一撃も、容赦のない再生能力を持つ疫神樹を滅ぼすことはできなかった。

「くそっ！」

「あつ、はじかれたよ。エレンは攻撃しないの？ せっかくの演習だ」

「そうね！」

エレンは疫神樹に診眼をかけ、急所と思しき部位を探し当てた。これだけは誰にも真似のできない、ファルマより授かったエレンの固有神術だ。また、悪霊に対して診眼をかけ急所を探するという方法は、ファルマも気づかなかったがエレンが見出した。

” 氷の華 (Fleurs de glace) ”

エレンは呼吸を整え、堅実で正確な神技を疫神樹の根本へ放つ。ブランシュに神技を教えてきただけあって、彼女の神技のすべては美しく完成していた。

彼女はパツレやファルマのように捻ったことをせず、手順通りの神術を繰り出し、その術はきわめて安定している。

” 無尽の旋風！ ”

彼女の隣で風属性のエメリツヒは二杖を操り、神技の高速、連続

射出を行っていた。しかしそれでもなお、疫神樹の再生能力が勝っている。

「エメリツヒ君！」

「何ですかエレオノール先生……あつ、わかりました！」

エメリツヒは二本の杖を一本にまとめた。

エメリツヒとエレンは呼吸を合わせると、杖の先端をそろえる。

”颯風氷刃！”

共鳴神術の発動だ。エレンの射出した研ぎ澄まされた無数の氷の刃が、エメリツヒの風圧で弾丸のように加速され、疫神樹の枝を切り刻み再生を阻む。

”破邪狂風の大神陣”

そして、エレンとエメリツヒはさらなる大技を組み上げ、畳みかける。そこへ周囲の神術使いらが援護を行う。

”真空内爆！”

風属性のクロードも加勢に回った。

彼の神技は生体内に真空を作り出し、爆縮により発生した衝撃波により生体組織を破壊するというえげつないものだ。

「まだいくぞ」

”旋風斬撃！”

続いて放った攻撃では、風を刃物のように使い、再生しつつある

枝葉をことごとく裁ち落とした。クロードの杖は、切れ味鋭い剣、あるいはメスのような形状をしている。

「水属性攻撃中止！ 火・風・土属性攻撃開始！」

今度は火属性と、他属性の連携だ。

「下がっている」

「聖下のお出ましだ。退避ーっ！」

聖帝が杖を掲げ、周囲に退避の指示が飛んだと同時に、不死鳥の降臨とともに爆炎が天まで立ち上り、疫神樹は青い火柱に包まれた。閃光と煙幕によってあたりの視界が奪われたため、風属性神術使いらが視界を一掃する。

しかし、完全に焼け落ちたにも関わらず、根から新たな悪疫が漏れ出して形を成し始める。

次は土を硬化させて持ち上げ、負の土属性神術使いが土壌を粉碎して砂へと変えるも、根の増殖はとどまることを知らず、大地から吸い上げるように悪霊を呼び込み、実体化させ続けている。

「”神威の真円陣”」

メロディが杖を振り、炎の神術陣で悪霊の拡散を抑え込む。悪霊らは断末魔の悲鳴をあげ、神炎で灰となって崩れ落ちた。メロディは踊るような杖さばきで幾重にも神術陣を構築して行く。

そうして戦闘が開始して一時間。

神術使いらは死力を尽くし攻防を繰り返していた。

「んー。そろそろキツくなってきたかな」

手出ししたい気持ちを抑えながら、疫神樹に取り込まれた神術使いらを救援し、負傷者の処置をしつつ遠巻きに見ていたファルマだが、そろそろ神力が尽きる頃合いのため、加勢が必要だろうかと考え始めた。

疫神樹の攻略は難しく、一気に根元まで消してしまわなければ、いくらかでも再生するのだ。

疫神樹が根を地中に張り巡らせ、種子を撒き散らしたり増えて仕留めきれなくなってしまうのはまずい。

「終了してよいですか？ 根が深張りをはじめています」

「……よかるう」

ファルマはエリザベスに同意をとると、「では」と言っただけの維持する結界の内側に足を踏み入れた。

疫神樹からの全ての攻撃はファルマの周囲にパッシブに展開されている結界に阻まれ、彼を傷害することができない。ファルマは疫神樹の襲撃をまったく意に介さずまっすぐ歩いて疫神樹に近づき、ぴたりと指先で樹皮に触れた。

すると、ファルマが触れた部分から、疫神樹は粒子状に分解されはじめ、枝葉の一部、根の一本も残さず消滅し、もとのように種子の姿をとって彼の手の内に握りこまれた。物質消去を使って即時の決着を図ったのだ。幻のような光景だった。疲弊しきった神術使いらは、目を瞬かせる。

「今……何をしたというのだ」

「後始末です」

結界の解かれた荒野で、神術使いらは安堵と疲労で、思い思いの場所に大の字になってくたばった。

ファルマは指先で天をかき混ぜると、柔らかな霧雨を降らせた。

霧雨には強い神力が含まれ、神術使いが失った神力を補って癒し、全身を潤していった。

「結局、お前が全部持っていくのかよ」

パツレが悔しそうに一言吐いて目を閉じた。彼の神力は底をついていたが、満足そうな顔をしていた。

「そなたにしてみれば、赤子の手をひねるようなものか」

エリザベスは苦笑した。ファルマは疫神樹をポケットに入れると、ポケットをポンポンと叩いてみせた。エレンは神力切れで倒れ、寝入ってしまった。

「ファルマ・ド・メデイス様！」

演習が終わってそれぞれ撤収を始めたころ、サン・フルーヴ帝国海軍の伝令役が二名、全力疾走させてきた軍馬を飛び降り、ファルマのもとへ転がるようにして駆け込んできた。

「報告です！ 新大陸に現地住民がいるようです。彼らのものと思われる黒髪が伝書海鳥で送られてきました。その黒髪の主に、一晩で基地を破壊されたようです」

「無線ではなく、あの距離から海鳥を飛ばしたのですか？ 送信日時はい」

「はい……三日前です」

ファルマは衝撃を受ける。

鳥が戻るか定かではない距離から海鳥に手紙を託すなど、子供の使いよりまだ悪い。そんなものより、電信一本いれればどれほど

正確な情報をやりとりできるか。

「その後の通信は入っていないのですか？」

「はい、まだ……」

（現地住民なんて、東海岸にはいなかったぞ？　どっからやってきた？）

というのも過保護きわまりないファルマは、探検隊が人にばったり遭遇するといけないと思い、わざわざ上陸して現地の下見をしてきたというのは前述のとおり。

ファルマの搜索方法だが、山林をかきわけしらみつぶしに探していたわけではない。

上空から目視しかしていないのに「いない」と断定しているわけでもない。

彼が住民を見つける方法は至って簡単で、そして正確だった。

診眼で空から見渡せば、どんな地中深くに隠れていても、必ず人がいるのがわかる。人の集落を俯瞰すれば、そこに体調を崩している人間は必ずいる。診眼は、人と動物を区別できるのか、人のみが検知される。それは人種は関係なく、どの人種も検索網に引っかかる。

診眼がとりこぼす集団など、いるはずがないからだ。

（黒い毛……？　俺が調べた後、西海岸から精鋭が派遣されて東海岸を警備していた？）

ファルマは伝書海鳥が運んできた毛髪に、毛根がついているのを見つけた。彼はマジョレーヌの顔を思い浮かべた。

毛根があれば、そこには数万個の細胞が含まれている。

DNA抽出と鑑定は、エメリツヒの腕でも成功するだろう。解析はエメリツヒに任せる。今、ファルマとほぼそんな色のない遺伝子実験技能を持っているのは彼だけだ。ゲノム情報があれば、相手が神術使いか否かはおろか、病気になりやすさ、相手のルーツまで調べることができる。マジョレーヌらは、相手のゲノム情報を知ることがいかに有利であるかということを、きちんと理解していた。ファルマが取り組んできた、知識の共有が生かされた。

「わかりました、引き続き新大陸に近い全基地局に要請し、電波の送受信を試みてください」

「はい。そしていかがなさいますか」

「聖下に上奏し、早急に対応を決めます」

そう答えながらも、ファルマは厳しい顔つきになる。

無線が繋がらないのは、十中八九は電源を喪失したからだろう。

ただの故障や電力不足ならば問題ないが、基地を破壊され、そのまま大陸の住民に襲撃されたからでは……ファルマの脳裏にそんな不安がよぎり、「新大陸でファルマと再会する未来が見える」そう言ったクララの予言を思いだした。クララは、今回の旅では誰も死なないと言っていたが、負傷や重症がないとは言っていない。

新大陸までは、ファルマの薬神杖ならば直線距離を使い1時間少で行ける。

「もう三日たってる。それで通信途絶となるとこれは、100%救援が必要なパターンだぞ……」

ファルマはそう理解し、ただちに救援に向かおうと即決した。



## 7章10話 クララの孤軍奮闘

神聖国武装神官とサン・フルーヴ帝国近衛師団らの合同大演習を終えたあと、ファルマが海軍伝令より報告を受けている間、戦闘に参加した神術使いらは帰り支度を整えていた。

解散の空気が漂う中、聖帝自らパツレのもとに足に向けた。自然と道が開けたのに気付いて、だらしなく崩していたパツレが畏まる。

「パツレと申したな、そなたに取らせたいものがある」

「は、頂戴いたします」

「此度の演習での神技の数々、見事であった。そなた、歳は」  
「18です」

パツレが緊張気味に答える。来月、彼は19歳になる。

エリザベスは何やらパツレを値踏みするように見下ろした。

「ふむ。成人しておるな。体に不完全な聖紋や、聖痕などはあるか」

「いえ、ございませんが」

「これを持ってみよ」

唐突に、エリザベスが持っていた特注の帝杖を差し出される。パツレは促されるままに、命令通り帝杖の先端を握る。

すると、神力計を兼ねた帝杖は、青い発光を示した。これは水属性を示す発光だ。

エリザベスは神力計の目盛りを読み、満足そうに頷く。

「ふむ。神力量も悪くない、よかろう。これを」

エリザベスは周囲の目から隠すようにして、パツレに帝室の紋章のついた小箱を渡す。

とはいえ、周囲の注目を浴びまくっていたので、パツレは手で影をつくり中をあらためると、中には純金のカードが入っていた。

「これは……」

パツレがカードの裏面を改める。裏面にはサン・フルーヴ帝国帝位御璽とあった。

パツレはその意味するところを察知して息をのんだ。これは、皇位継承戦に参加するための正式な資格だ。

世界最大の帝国、サン・フルーヴ帝国の帝位継承候補者は大神官が選出し、帝王学を学ばされ、帝位継承戦を経て先帝から玉座を奪い取る。

パツレは皇帝の座に挑むことをひそかに許されたということになる。

サン・フルーヴ帝国皇帝には帝位継承に厳密な基準があり、世界最強の神術使いでなければならない。現職である彼女からそう見込まれたということは、この上ない栄誉だ。

エリザベスは衝撃を受けて固まるパツレに耳打ちした。

「このときと思い定めたら、来い」

エリザベスはまだ、このカードを誰にも渡したことがない。

ファルマを次期皇帝にと見込んでいた時期もあったが、彼が成人していなかったため見送っていた。その間に、ファルマは人籍を捨て候補から外れたために、新たな後継者を探していた。

そこへ現れたのが、独自の神術体系を駆使するパツレだ。

彼女は彼の真価を見出した。

しかしパツレは、二つ返事では応じなかった。彼は絞り出すように、言葉を選びながら答える。

臣民にありながら皇帝に何か意見をするようなことは、本来あってはならないことだ。

「私には目標がありました。まずは一人前の薬師になり、満足に人を治せるようになることです」

「ああ。それはそなたの身近な二人から常々聞いておった」

パツレの率直な希望を聞き、エリザベスは頷いた。パツレは薬師としての経験を積み、ゆくゆくは宮廷薬師を目指している。ファルマに先んじられてしまったとはいえ、今でも変わらず一途に宮廷薬師を目指している。

宮廷薬師は皇帝に仕え、皇帝の命を守る仕事、自身が皇帝として即位してしまえば、薬師として技能は衰えることになる。往診や調剤などもままならない。彼にとっては魅力的な地位ではなかった。

「王にとって、国民は我が子も同然。その我が子を、いずれ誰かに託さねばならん」

パツレは言葉に詰まる。

「なに、そう固くなるな。これは挑戦への許可であり、強制ではないのだよ」

彼がこわばった様子を見たエリザベスは、安心させるように笑顔を見せる。

それは、子を持つ彼女の気配りのようでもあった。

「薬師としてのその先に、世を治し、国家を守る仕事がある、そう

思えた時でいい」

「……………では、お預かりいたします」

パツレは逡巡の末、受け取ることにした。

使うか使わないかは、よく考えて決めればよい。ただ、受け取りを拒否することはできない。彼女の思いを受け止めた。

「お話の途中で申し訳ございません」

話に区切りがついたのを見たファルマが、二人の間に割って入った。

彼らの会話は、ファルマの耳には入っていない。

「聖下、緊急にご報告したいことがございます」

ファルマはサン・フルーヴ帝国海軍伝令役とともに、聖帝に現況の報告をした。

「ふむ……先住民がいると判明した状態で、通信途絶か。打つ手がないな」

ファルマが報告した聖帝の反応は、沈痛な面持ちを見せながらも、どこか諦念を帯びたものだった。

ジャン提督の艦隊は、有事には救助を想定されていない決死隊である。

また、帝国は救助隊を送らない。送ろうにも、間に合わない。たった今から救出のための船団が出航したとしても追い付かず、救出できないからだ。

過酷な旅路だった。だからこそファルマは、念には念をと支援してきたのだが、それでも足りなかったようだ。クララの予言から予

想していたこととはいえ、あれだけ備えても避けられなかったファルマは、忸怩たる思いだ。

「クララの予言でも受難を避けることができず、かようなことが起これば、新大陸への船団派遣はしばらく見合わせるほかない」

これが彼女の政治的な判断だった。

ファルマは新大陸までの緊急の移動手段がないことの対処の限界を思い知る。

帝国の中では、暗黙の裡に彼らは殉職したということになりかねない。

「しかし、彼らはまだ生きているかもしれません。襲撃された船舶の位置を把握しています、私が行っても構わないでしょうか」

「たった一人で行ってなんとする」

「安否の確認と、救命措置、通信を回復させ、救援隊が来るまで安全な場所に避難させてくることはできます」

もしできるというなら、八面六臂の活躍だ。

「例えば数十名の傷病者がいたとして、一人では船員全員を連れて帰ってくることもできはすまい」

「工夫すれば四人は運べます、重傷者から順に何十回と往復すれば、数日で全員連れて帰れます。相手が悪霊ならともかく、人間相手なら、私は負けません」

ファルマは本気だ。かなり強気な発言だともいえる。

「まったく……そなたの着想はいつも人外のそれだな」

「恐れ入ります、ご許可を」

「サン・フルーヴ皇帝として宮廷薬師のそなたに下す命令は、否、だ」

ファルマの思いはエリザベスの拒否によって無残にも絶たれてしまった。ファルマは言葉を失いエリザベスを見つめたが、彼女を責めることはできなかった。

「……はい」

彼女が一度決めた命令を取り消したことはない。ファルマは引き下がるしかなかった。

ファルマはド・メディシス家に戻る馬車の中で、思索していた。対面にはエレンが座っている。

（聖下に許可を求めたのは失敗だった……一人で行けなんて、言えるわけがない。でも言わないと不在にするからバレルしな）

「何かできないかしら」

ファルマの話を聞いたエレンが、戦闘で腫れた腕に氷を当て、体を馬車の客席に預けながら心配そうに伺う。

「通信が機能しなかった場合に備えて海鳥を持ち運んでいて、イチかバチかで飛ばしてくれたおかげで状況を知れたわけだけど……知っているのに何もできないなんて」

「普通の海鳥ではなく、渡り鳥を使ったようだね」

大陸とマーセイル間は距離にして約8000キロほどだ。

渡り鳥は無着陸で何日も、果ては一か月近くも飛べるものもいる。

中には北極圏と南極圏の間を一か月程度ぶつ通しで無着陸で渡るキョクアジサシなどの鳥もいる。

遠洋航海の途中からマーセイルに向けて海鳥を飛ばし、独自のノウハウを持っていた東イドン会社は、多種多様な海鳥、渡り鳥をそろえていた。アナログな通信手段を確立していたのだろう。過去の遺産と化すかと思われた伝書鳥も、見直されることとなった。

「だからこそ、この報告を、無駄にするわけにはいかない」

事前にジャン提督らが上陸地を報告してくれていたおかげで、船団の位置は確認している。

予言が的中したことを嘆く時間はない。

無線通信の機能を持つ戦艦は五隻のうち二隻だが、襲撃や遭難などに備えて互いに距離をとって、全艦は上陸せず洋上待機していたはずだ。だから、上陸後に何かあって上陸した乗組員が全滅したとしても、一隻は生存して戻れるようになっていた。

それなのに、五隻とも通信が途絶。

これが意図するものは、残り一隻も襲撃者に追い付かれ全滅したか、少なくとも危機的な状況にあるということだ……。クララの予言だと、ファルマが到着するまで彼らは生存しているはずだ。

ならばこそ、聖帝の命令に反してでも行くしかない。

「暫く戻れないかもしれない。あとをよろしく、エレン」

ファルマの真剣な物言いに、エレンは何かを察知したようだ。

「まさか一人で飛んでいこうと思ってない　手練れの神術使いで組織された、百人からの船団からの連絡が忽然と消えたのよ？　手強い悪霊かもしれないし、ちょっとは作戦を練ってから行くべきだわ」

「いや、悪霊ではないよ」

ファルマが数度確認した限り、ジャン提督が上陸目標としていた地点に、危険となるようなものはなかったはずだ。

悪霊もいたが根こそぎ退治していたし、悪霊を寄せ付けられないよう神術陣も張っておいた。

だから、襲撃者は悪霊ではなく、人が動物、未知の怪異だと断定している。ファルマがそう説明しても、エレンは首を横に振る。

「じゃあ私も行く。君は向こう見ずだし、私も診眼を使えるから、要救助者のトリアージの手伝いはできると思うわ」

「でも……危険だし、君はケガをしてる。それにもう、診眼はしばらく使わないほうがいい」

「足手まといになると思ったら全力で逃げて、洋上にいるわ。さつき、四人なら同時に運べるって言ってたでしょ？　じゃあ、君が搬送している間に怪我人を診ている人間が必要じゃない」

ファルマの新調した薬神杖は、他の秘宝で性能をブーストしたといっても、そもそも貨物運搬用の杖ではない。荷重200kg程に達すると飛行性能が極端に落ち、コントロールも悪くなる。それで、頑張っても四人だ。険しい顔をしていたファルマが、ポンと手を打った。

「確かに……でも待てよ、ジャン提督が着いた場所なら……あれが使えるかもしれないぞ」

「あれって？」

ファルマは通信のあった場所を記録したメモを見る。

「マーセイル工場には、テオドルさんの失敗作の数々を商用化し



ている、商品開発部って部署が新設されたんだ。廃棄したアレが大量にあるって言っていたよな」

「ええ？ テオドルさんの失敗作なのに？ それを使ったらどうなるの？」

「理論的には、百人全員を一度に、片道だけで一日以内に運べる」「ど、どんな神術を使おうっていうの？」

何かをひらめいたのか、眼を輝かせはじめたファルマに、エレンが不穏な顔をする。科学オタクにはついていけないといった具合だ。

「神術というより物理装置だな」

「マーセイル工場にそんなシロモノなかったでしょ？」

「いや、あるんだよそれが」

不意に、馬車が止まった。ファルマが外を覗くと、白馬が横付けされている。白馬に馬車が止められたのだろう。その白馬に跨っていたのは……

「エリザベス聖下」

「ギヤバン大陸直行便の定員はまだあいているか？」

先ほど、ファルマの上奏を真つ向否定したばかりのエリザベスが、面白そうに笑っている。

彼女は召し上げた近隣の町の宿泊所へ戻り休んでいるはずだが、どうやってか抜け出てきたようだ。

「四人は運べると申したであろっ」

「聖下 あの、先ほどのやりとりは……」

「大神官としては、そなたの行動を縛る権能は持ち合わせておらん」

彼女は二重の立場を使い分けていた。

「聖下をお連れするわけにはまいりません。御身に何かがあつては困ります」

「それはこちらと同じセリフを返すぞ」

大神官の立場としては、守護神は箱入りにして祀っていないなければならない。

そのファルマに、自らの責任でといって自由を与えているのは彼女だ。

ファルマに何かがあれば、やはり大神官としての責任をとわれる。

「聖下が不在ですと、さすがに……」

「神力消耗を回復させるため、半日は寝室に入るな、誰も起こすなと言ってある。日が沈むまでに戻れば問題もなかるう」

「えっ、日帰りのつもりですか!」

「人間が相手なのだろう? 十分であろうが」

（聖下、強気すぎるだろ……トラップだってあるかもしれないんだぞ）

ファルマは渋い顔になった。

「これはこれはエリザベス聖下、いかがなさいましたか」

騒動に気づいて、パツレが前の馬車から出てきた。紛れもなく、俺も混ぜろ、という顔をしていた。

「では、家に到着したらすぐに薬や装備の支度をしますので、お待ちください」

にっちもさっちもいなくなり、結局三人を伴って新大陸へ飛び立つことにあいたった。

ファルマはマーセイル領のアダムと、テオドール、そしてキアラに彼の計画についての電報を打ち、作業依頼を送信した。

そして、最短での旅支度にかかる。

一刻も早くとは焦るが、準備不足で行っても役には立たない。

人間相手なら負けないと断言した手前、今更訂正することははばかられるが、ファルマはこうも思うのだった。

対人戦闘はそれほど怖くはない。

神力量の差で圧倒できる。

だが人間の謀略や心理戦があるとすれば、悪霊よりもおそるべきものだ。

「ひゃっ」

滴る水滴に頬を打たれ、クララは目覚めた。

「ええつと」

きよろきよろとあたりを見渡し、状況を確認する。彼女のいるのは湿度の高い暗い洞穴で、天井から下がった鉄格子のようなもので空間を隔てられている。クララはどうかやら格子の中に閉じ込められているようで、先ほどの水滴は洞穴の天井から落ちてきた。

格子の外には松明がともっており、その奥には通路のような開けた場所があり、そこを多くの人々が行き交っていた。

クララの目に映ったのは麦色の肌をした黒髪の人々だ。

しばらく目を奪われていると、杖を脇にかかえた女が、格子の外からクララをじっと眺めているのに気づいた。

少女のように見えるが、年齢は不詳。

長い髪の毛を、片側だけ三つ編みにしてさげて、カラフルな紐で縛っている。

好奇心の強そうな大きな黒い双眸が、クララに向けられていた。

（あつ、この子、船を沈めた子だ！）

あの時は暗闇ではよく見えなかったが、たった一人で神術使い百人を軽くいなした実力を持つ術者が、こんなにあどけない少女だったのか、と改めてクララは驚く。

「……、……………！」

女はクララが起きたのを見てか、近づいて話しかけてきた。何か言っているので愛想笑いを試みるが、彼女の言葉がまったくわからない。

「あ、あのう……わかんないです」

クララは申し訳なさそうに首をひねって肩をすくめると、少女は小首をかしげて鼻で息をついた。

「できればその杖を返して……もらえませんかよね」

クララは牢の中に押し込められ、杖を取り上げられている。

少女は杖を片手で握り、反対の掌にぽんぽんと杖の先を打ち付けてクララの様子をうかがっている。

そのうち、少女は誰かに呼ばれて立ち去っていった。  
彼女と入れ違いに、二、三人の少年たちが身をかがめながら檻の  
前にやってきた。

見張りではなく野次馬なのだろう、明らかに彼らとは異なる容貌  
のクララに関心を持っているというのはわかる。そこで、クララは  
絵でコミュニケーションをとることを思いついた。幸い、牢の中は  
砂地で、指先で地面に絵を描くことができた。

彼女は彼らが知っていそうな生き物の例で、最初に鳥の絵を描い  
た。

「ピリ！」

少年が指をさして叫んだ。クララは絵を指さして尋ねる。

「ピリ？」

「ピリ！」

「わかったわ、ピリって言うのね！」

クララは幸先よく言葉の手がかりを得た。次に魚の絵を描し、指  
さす。

「カタナ」

「魚はカタナなのね」

クララにそれなりの絵心があつたことが幸いした。

人の絵を描く。男と女を。子供と大人、体の各部。続いて、動作。  
子供らが絵を見て、あるいはクララの動作を見て答える。

その単語を、クララは地面にメモをとり暗記していく。

クララは彼らが慣れたタイミングを見計らって、銃の絵を描いた。  
子供らは首をひねって、

「ニーネ？」

と返した。クララはすかさず馬車の絵を描いた。この時もまた「ニーネ？」と返した。

クララは彼らが知らないであろう、帝国に存在する事物を描き、ニーネと返ってくるのを確かめた。

クララは今でこそ貴族ではあるが、ファルマに神脈を見出されるまでは平民として、そして捨て子として育った。小銭を稼ぐために大市に集う異国の行商に、片言で野菜を売りつけることもあった。言葉の通じない相手と交渉するすべを、知らないわけではない。相手の言語を理解するために、まず必要なことがある。それは、「これは何？」に相当する、汎用性のある言葉を知ることだ。ニーネとというのが、質問文だ。それさえ引き出せば、あとは根気との勝負だ。クララはぎこちなく微笑んで、自らを指先し、「クララ！」と名乗った。

そして、彼らの一人を指先し、こう言ってみた。

「ニーネ？」

子供らは驚いたようだったが、

「マリポ」

クララに指名された彼は自身を指して、笑って答えた。

これが、彼の名だ。クララは地面にメモを取って記憶した。初めての自己紹介、それから先は、地道なやりとりが続いた。

それからしばらくして、クララと子供たちのやりとりの声が大きすぎて、目に余ったのだろう。大人に呼ばれて、子供らが離れていた。クララの牢の前を横切る大人たちは、ジャン提督の艦隊の船

員らが身に着けていた銃や杖を手にしていた。それを見たクララは、愕然とした。貴族にとって命の次に大事な杖。杖を取られるということは、彼らが無事ではないということだ。

（ジャン提督やほかの人たちはどうなったんだろう……無事なのは私だけかな）

考えたくはないが、とても無事とは思えなかった。

クララが何故助かったかというところ、少女が攻撃に転じたその時に杖を手放した、だから無事だったのだ。何故杖を手放したかというところ、クララには少女が杖や武器を通じて相手を攻撃してくる予測が瞬間的に見えていた。

旅神という守護神の加護、あるいは防衛本能のようなものだったのかもしれない。

クララはあのかのとき周囲に警告を発し叫んだが、誰もそれを受け入れなかった。

戦闘中に武器を手放せと言われても、どだい無理だったかもしれない。

（こんなことにならないように、私が船団に同行してきたはずだったのに）

くよくよしていても始まらない。それどころか、クララにも命の危険が迫っている。ジャン提督らは、最後の瞬間まで骸骨のようには見えなかった。

無事ではないが、命までは取られていないということだ。

しかし、クララには自分自身の命運はわからない。

一人だけ殺されるということもありえる。

クララは涙を拭くと、先程子供らから収集した単語を整理した。

「あ、そうだ。私はわからなくても、守護神様はすべてをご存じだわ」

クララはひらめいた。クララは猛烈な勢いで地面に「はい」と「いいえ」に当たる記号、そしてその周囲に占いのための略語、そして文字盤を書いた。

降守護神術というものだ。

これは、一時期サン・フルーヴでも貴族のサロンで流行っていたウイジャボードという類いのもので、守護神の使いを呼び出し、文字盤の上で神意を聞き出すというものだ。日本ではこっくりさんの原形として知られている。サロンで行われているものは心理遊びのようなものだったが、クララの場合は本当に旅神の加護を指先に宿らせているため、嘘のように当たる。クララは何度か、旅の道中に限って当たるこの占いを試してみたことがあった。

舞踏神術を踊ったのち、軽く念じる。

「守護神様、おいでください」

クララの指が勝手に動きはじめた。

（守護神様、守護神様、ようこそお越しくださいました。ジャン提督らは存命ですか）

“はい”

ひとまず、よかったという思いがこみ上げてくる。クララは一人ではない。孤立無援ではないという、たまらなく勇気づけられる。

（どこにいますか。近くにいますか）



“はい”

（無事ですか）

“いいえ”

「無事では、ない……のか」

ああ、そんな……。と、クララは絶望的な気分になった。大怪我をしているのだろうか。

（早く助けないと危険ですか）

“はい”

クララ一人でここから脱出して彼らを救助できるとも思えないが、ひとまず敵を知ることにした。

（私たちが襲撃した者は神術使いですか。メレネーという少女のこ  
とです）

“いいえ”

（彼女は何者ですか。神術使いでなければ、あの力はなんですか？）  
文字盤をへとクララの指が誘導されてゆく。はい、いいえで答えられないものは、文字盤で示してくれる。

“呪術師”

「はえー……」

なるほど、とクララは思った。悪霊ではない、霊を呼び出して使う術だ。大地から鳥を、植物の化け物を喚び出し、そして大量の異形を動かしていた原動力は、呪術だったのだ。

錬金術にも似たようなものがあるが、大陸では禁忌であり、神殿の異端審問の対象とされてしまう。なので、ここまで実体化が強力な術式は大陸には残っていない。

（彼らの中で、メレネーが一番強力な術者ですか）

“はい”

そこでクララの、今日の分の神力が切れ、これ以上は神術を使えない。明日まで、神力の回復を待つしかない。明日が来れば、だが、あの場にいた神術使いを一瞬で無力化したほどの使い手だ、戦闘神術の使えないクララが、神術で戦闘をしかけてどうにかなる相手ではない。

正攻法ではダメだ。クララに残された手段は、彼女に取り入り、籠絡するしかなかった。

急がなければ、こうしている間にもジャン提督らは危険な目に遭っている。

「メレネー！」

クララは意を決して呼びかけた。

彼女は驚いて振り返った。先ほど彼女の似顔絵を描いて、彼女がメレネーという名であることを子供たちへの取材で突き止めたばかりだ。持つべきものは絵心と度胸である。

相手はクララを瞬殺できる能力を持っている。心証を損なうことは得策でないが、怯えてばかりもいられない。ギリギリの駆け引きに、クララの心臓が高鳴る。

「イヘト マニ」

クララは腹部を撫でながらお腹がすいたというと、メレネーは不審そうな顔をした。しかし彼女の仲間に何かを言っと、ほかのものが、焼いた芋と焼き魚そして飲み水を持って現れた。

「ヤライヤライ」

これは、お礼の言葉に相当する。

クララは、覚えたわずかな言葉を駆使する。

メレネーはそれをじっと聞いていた。

「カタナ マナナ」

魚、良い。という意味だ。魚おいしいと意識してほしい。実際においしいかというと魚自体のクセが強く、同行してきたサン・フルーヴの料理人の腕と比べるとあまりにもワイルドというか、スパイシーな味付けだ。クララの知らない香辛料をまぶしているようだった。

クララの舌には合わなかったが、ひとまず友好的な態度をとりつつ、相手の食文化を褒め素性をさぐる。

「マリポ！」

メレネーはマリポを呼んだ。マリポはメレネーと何かを話していたが、マリポがクララの前にやってきた。メレネーは、先ほどまで

クララと身振り手振りで話していたマリポにクララの通訳係をさせようというのだろう。

メレネーは、杖をクララに掲げて見せた。マリポが問う。

「ニーネ？」

「神杖です」

クララが慌てて答える。

「マーネ？」

「神力で動かします」

マーネとは、どうやってという意味。どうやって使うかと聞かれている。クララはかしてと言って手を伸ばしたが、メレネーは杖を渡してはくれなかった。さすがに用心深い。メレネーは、これが武器にもなるものと知っている。

「ニーネ？」

「銃です」

「マーネ？」

「……ナンナ」

銃の使い方を教えれば、撃たれてしまうかもしれない。また、それで仲間が撃たれるかもしれない。クララは教えるわけにはいかなかった。だから、「ナンナ（わからない）」と言って質問から逃げた。メレネーは納得がいかなかったのだろう、地面に模式的な人の絵を描き、その絵に手を置き、手を引き上げるような動きをした。

すると、大地より人型の霊が現れた。クララは驚いて後ずさる。殺されるかと思いきや、メレネーはクララに話しかける。すると霊がメレネーと同じ口の動きで話し始めた。

『私の言葉が聞こえるか』

霊は、メレネーの言葉を翻訳してクララに伝えている。

そうか、とクララは気づく。

霊は思念の塊で、霊の発する言葉は言語を超越する。

メレネーは霊を介して互いの言葉を翻訳することができるのだ。

マリポの通訳がうまくいかないとわかると、すぐに対話の方法を切り替えた。メレネーは霊術を使うばかりか、侮れない相手だと身を引き締める。

「はいっ、聞こえます!」

霊がクララの言葉を翻訳してメレネーに伝える。霊術を生かした異文化コミュニケーションだ。

『私たちは当初、お前たちを歓迎しようとしていた。そこで辛抱強く、お前たちがこの地で何をするかを見ていた。奴らは我々の領土を侵し、祖霊の眠りを妨げ、退けるための不吉な力を使った』

不吉な力というのは、神術のことだろう。

彼らにとっては、神術というのは忌まわしい術体系のように見えるらしい。

クララは思わぬ恨みを買っていたことに驚き、言葉に詰まる。

「そんなつもりは……私たち、あなたたちがいるとは知らなかったんです」

『静かに眠っていた古き霊たちを、追い払おうとした。それより四十日も前に、この地を守っていた偉大な霊が、邪悪な力によって消滅した。残されたわずかな霊たちはお前たちの仕業に違いないと怒

っている』

（四十日前に、邪悪な力？ メレネーたちが大切にしていた霊を一掃した？）

そんなの知らない、とクララは唸ってしまう。

ジャン提督に随行してきた神官らは、確かに腕利きばかりで、悪霊払いの神術を駆使する。

だが、まだ船は出航していなかったし、大陸を超えて神術を使つたなどありえない。

「その、何十日も前の件は知りません、私たちじゃない。だって私たちは、ここにきてまだ十日しか経ってないわ。それに、霊を退けようとしたのは、悪霊だけで……」

『ここには悪霊などいなかった』

メレネーは曇りのない瞳でそう言い切った。クララにとっては悪霊でも、彼女にとってはそうではないのだ。

「あなたたちは、霊を大切にしているのね。そして、私たちが守護神様を信仰し神力を得るように、あなたたちはこの地に宿る霊から加護と力を得ているのね。私たちはあなたたちの流儀を知らなかった、ごめんなさい」

クララのいた大陸では、死者の思念は悪霊になるばかりだった。

悪霊は駆逐され、神殿神術によって浄化される対象だった。

しかし、この大陸の人々はそうではないようだ。

霊とともに暮らし、霊を敬う。そんな世界観で生きているようだ。つた。

「この大陸の悪霊は、人間を襲ったりしないの？」

『古き霊がいる限り、悪霊など現れない。だが、古き霊が減んでしまった』

「どうして、私だけ助けてくれたの？」

『私を見た時の反応が、お前だけ他のものたちとは違っていた。また、お前だけ、私たちを攻撃しようと武器を向けなかった』

「そんなところまで見てたんだ……」

あの暗闇の中で、メレネーはそこまで見通していた聡明な少女だとわかった。

『お前はなぜ、あのとき杖を手放した？』

「あなたが杖をめぐけて攻撃するとわかったから」

（そうか、メレネーが使役する霊には予知能力はないんだ。そして、彼女の霊は私の心を読むことはできないのね）

だから、クララに興味を示し、直接質問をしているのだ。

『お前はどうかやって危険を回避している？』

メレネーはそう言うが、クララはたまったものではないと首を横に振る。

「こ、これはなんというか……勘のようなものです」

『嘘をつく、お前の仲間が明日にも死ぬことになる』

「うわーっ！ やめてください！」

クララの立場はというと、人質をとられた捕虜にも等しかった。立場は弱い、どうやら彼らもクララの能力をあてにして殺せな

いらしい。

「私が知っていることなら答えます。ですから、彼らを助けてください」

『お前たちの仲間全員、ピチカ力湖に入って呪われた。その呪いはやがて死に至る、それが遅かれ早かれ』

（えーっ！ やっぱりあの湖、何かいたんだ！）

クララは全身がすくむ。クララがなんとなく避けていた湖の水。その湖に入ると、死に至る呪いを受ける。そんな罠がどこかに仕掛けられていたのだ。

『お前は湖には頑として入らなかったようだな。それも予知か』

「わー、それはなんとなくいやな予感がしただけです！」

メレネーの眼光が鋭く光る。

旅神の予知能力はクララ固有のものだ。相手に教えたとしても、守護神すら持たない者にできることではない。それでも返事ができなければ、クララもろとも殺される。クララは絶体絶命の窮地に陥った。

「っ……！ わかりました。予知の能力は私にしか使えません、あなたの言う通りにしますから、あの人たちに手出しをしないでください！」

『いい返事だ、では奴らは無人島に置き去りで許してやる。手を出せ』

メレネーはクララの首に指先を押し付けると、呪印のような刻印が現れた。



『お前は私の奴隷となれ、叛けば死を』

（ひえーっ、不平等契約ーっ！）

クララは涙目だが、抵抗することもできない。

神力が切れた状態で従属の呪いをかけられれば、なすすべがない。  
万事休すか。

クララは無力感に打ちひしがれながら、牢の中でへたりこんでしまった。

## 7章11話 敵地進入

ド・メデイス家に戻ったファルマらはさっそく新大陸へ旅立つ準備を始めた。

まずは防寒具、携帯用の食糧、普段から準備している薬品一式を手早くとりそろえ、携行できる医療機器なども準備する。

パツレも何やら必需品らしきものをカバンに詰めて早々に用意を終えた。

杖も一応携行するようだ。

エレンは自宅に帰らず、ブランシュの家庭教師のためにあてがわれているメデイス家の自室の荷物の中から、あり合わせで支度をした。いつものように大荷物になりそうだ。

多少なりとも荷造りをする彼らとは対照的に杖一振りを手に身一つで出発しようと考えているらしい聖帝は、ド・メデイス家のゲストルームで早々にくつろいでいた。

「慌てなくてよいぞ、忘れ物をするな？」

「は、恐れ入ります。お待ち間に、お茶をお出しいたしますのでお寛ぎください」

ファルマは夜勤のシフトに入っていた新任の執事に、紅茶とお菓子を注文した。

「かしこまりました。あちらのご令嬢は？」

「あまり詮索しないほうが賢明かな」

まさか目の前の人物が聖帝エリザベスだと気づいてすらいない執事は戸惑い、ファルマに確認する。エリザベスは身バレを警戒して

が偶然か、扇で口元を隠している。

それでも眼光の鋭さやその佇まいから、ただものでない雰囲気を感じ出していた。

「ところでファルマ様、お出かけでしたらお仕度を手伝いしましょうか」

「いえ、一人で支度できます」

というか、今回ばかりは他人に任せられない。持ち物の不備は、助けを待つ人々を窮地に陥れる。

「承知いたしました。お帰りは本日で？」

「まだ予定がたちません。薬局と大学に、私の本日と明日のすべての予定をキャンセルするよう伝えてください」

ファルマの本来の予定はぶっちぎればいいとしても、何しろ国家元首であり宗教最高指導者である聖帝が、脱走というか帝都から不在となるのである。バテてややこしいことになる前に帝都へ戻りたいのはやまやまで、何なら彼女をここへ置いてゆきたいところだが、エリザベスは聞く耳を持つまい。だが、彼女を連れていってよいこともある。それは、新大陸で問題がこじれたときに、現地民とサン・フルーヴ帝国最高責任者が直接話し合いを持てるということだ。意思決定の迅速さはありがたい。

抜き足差し足で自室で準備していると、思いがけず扉が開いた。

「あにうえ……？　こんな明け方にどこか行くの？」

「ブランシュ。起きてきたのか、ちょっとそこまでね」

トイレに起きてきたブランシュが、目をこすりながら入ってきた。

間の悪い時に妹に見つかってしまったものである。

ちよつとそこまでという距離でも装備でもないのだが、ブランシユはファルマの顔を見て何かを察知したらしい。

「私も行くー！ 支度してくるのー！」

「だめだよ、連れていけない」

「小さい兄上が一人でどこかに行くときは、何か起こるから心配なんだもん……一緒にいたほうがいいと思うんだもん……」

ブランシユはネグリジエの裾を握りしめ、目を潤ませていた。悪霊による帝都の襲撃を思い出しているのだろう。

ファルマは、わっとだきついてきたブランシユをなだめるように頭を撫でる。

「一人じゃないよ。兄上もエレンも一緒に行くから、心配いらないよ」

「じゃあやつぱり私も行くー！」

ブランシユは大急ぎで出ていってしまった。

とはいえ一人で着替えや支度をしたことのない彼女は、着替え一つするにも悪戦苦闘するだろう。

彼女には悪いが、その間に出発してしまうしかない。ファルマはブランシユを二階に残し、階段を下りて客室に戻る。エリザベスは紅茶で喉を潤していたが、舌の肥えた帝王の口には合わなかったか、砂糖控えめな自家製クッキーは一口かじって残されていた。

「ところでファルマよ、新大陸での最初の目的地はどこだ」

「こちらをご高覧ください」

ファルマは新大陸の地図を聖帝に渡す。

これはファルマ謹製、できたてほかほかの新大陸の地図だ。

上空から新大陸をスマホで撮影して帝都に持ち帰り、それを拡大しつつガラスを通して写真をなぞり、異世界の人々にうつかり見られてもいいよう地図化した。

公的にはジャン提督らが測量して得るはずだった代物だ。

「ふむ、この地図が今ここにあるのは摩訶不思議だ」

探検隊が戻っていないのになぜ地図が既に完成しているのか、とも言いたいのか、聖帝はじつとりした眼差しでファルマを一瞥した。

とはいえ深いつつこみもなく、ファルマとは共犯的な態度をとっている。

ファルマは特に慌てることもなく、指先を地図に走らせる。

「ジャン提督らの上陸地点はここだと思われます」

「湾の間口は広いが、奥行きもそれなりにある。波除にはちょうど良いが」

「水深が深いので、船舶は直接陸に乗り付けたと思われます。仮に通信の不具合があったとして、一時避難をしているとすれば、洋上です。まずは船を探し生存者を救出、船を沖合まで遠ざけ、安全を確保したいと思います」

「全員上陸してしまっていたら？」

「全員は上陸せず一部待機を前提としていますが、その場合陸上の搜索が先決となりますね」

ファルマがコートのボタンを留めていると、エレンとパツレも支度を終えて合流した。エレンのカバンは案の定パンパンに膨らんでいた。

泣かれるだろうが、ブランシュの姿はまだ見えないので置いてゆ

く。

「聖下、お待たせいたしました」

「じゃあ行こう」

「何泊ぐらいを想定すればよかったのかしら」

大荷物を抱えたエレンが言いにくそうに尋ねると、エリザベスは「泊まらんぞ、即時解決が目標だ」というので、ファルマは大きく「長引きそうなら一旦戻るし、大丈夫だよ」とエレンに説明する。

「あくまでも安全確認と傷病者の救出が第一だからね。心配なら、ここに残る？」

「残らないわよ、なんの役にも立てないじゃない」

「四の五の言うでない、エレオノール。明日の夕刻には戻っておる！」

エリザベスの強気な言葉に、エレンは恐れ入って肩をすくめる。

「御意にございます」

「余の同行があっても心細いと申すか」

「滅相もございません！」

「ならばよかろう！」

エリザベスが軽口をたたく。飄々として強気の聖帝に、エレンはたじたじだ。

パツレは聖帝の背後からエレンをからかうようなジェスチャーをして、エレンが拳を握りしめていた。あまり緊張感のない彼らに一抹の不安を覚えつつ、ファルマは一行をまとめる。

「では早速参りましょうか、新大陸へお連れしましょう。と言いた

いところですが、高速飛行時に直に風を受けると危険です。風よけを準備します、取ってきますのでここでお待ちください」

ファルマは駆け足で外に出ると、ド・メディシス家の倉庫の鍵を開け足を踏み入れる。

倉庫の中には、整然と壁に立てかけられた数十枚ものインゴットが左右に陳列している。

待機と言われたのにファルマについてきた聖帝が訝りながら尋ねる。

「これは銀か？」

「光沢は似ていますが、すべてアルミニウム合金です」

「なんだその耳慣れんものは」

「未完成ゆえに、ご報告はまたの機会に。マーセイルでの工業的な製造をもくろんで量産化の検討をしていたところです」

「そなたはまた！ 性懲りもなくせっせと内職をしておったのか」

「ええと、生産者は私ではないですよ！ メロディ尊爵に作っていただいています」

細かいことを言えば、製法を伝え、資金も出してメロディとその弟子らに作ってもらった。

ファルマはインゴットを見繕いながら、簡単にアルミニウムの性質と活用法を聖帝に説明する。

なぜアルミニウムかというと、アルミニウムの原料であるボーキサイトがマーセイル南西部から発見されたからだ。

アルミニウムが発見されていなかったこの異世界において、ボーキサイトを豊富に含む土地は農業的に不毛であった。

そこに住む領民は主たる産業もなく、近隣の領地への出稼ぎや大領主の小作で生計をたてていた状況で、陳情があった。ファルマはその地域に住む領民の新たな収入源として、ボーキサイト鉱山の現

金化の方法を企てている。

アルミニウムの精製は、地球上においては原料であるボーキサイトからバイヤー法によるアルミナの抽出に続き、ホール・エルー法による融解塩電解が一般的であった。

しかしこれらの過程には大量の電力を消費するし、現代地球の科学力、工業力をもつてしても火災事故がたびたび発生するので、この方法を採用すると異世界での安全管理には心もとない。

そこでファルマは精製度にはこだわらず安全な精錬を第一目標とした。

土属性神術使いの破砕・分解神術で最初にボーキサイトを細かくし、鉍石や宝石をふるい分ける神術で材料を分別、分取、続いてメロディの炎で分別晶析法を用いた精製方法を確立しようとしていた。そして最後に火炎技術師メロディの卓越した火炎神術と連携し、ド・メデイシス家の倉庫にはアルミニウム合金のインゴットがいくつも転がっている。

「アルミ・マンガン合金で簡易客室を作りましょう」

精製した純アルミニウムと微量のマンガンを加えて加熱、溶体化し、冷却し固めるという地道な手順を踏んで作られたこの合金は、地球においては航空機などの本体に用いられ、精製度に問題があり不純物もそれなりにあるが、強度には問題なく軽量だ。

それを見たパツレが困惑したように眉を寄せる。

「ご立派なんだが、まだ板の状態だ、今から加工するとか言うんじゃないだろうな？」

「用意していないんだから、今からやるしかないよ」

ファルマは工具置き場の中から大型定規を引っ張り出してくると、左手で鉄の塊を創造する。物質創造直後は造ったものを短時間なら



浮かせておけるので、滞空させながら鉄塊を標的とし左手で持ち替えた定規の上に右手を一直線に滑らせ、物質消去で直線に加工してゆく。

まるで鋭利な刃物でカットしたように成型できるこの方法は、最近ファルマが思いついて気に入って便利に使っている。直方体の鉄塊の金型にアルミ・マンガンのインゴットを挟み込み、プレス加工をすると、素朴なキャリッジができあがった。

「一発でやりおった……」

聖帝はファルマの奇想天外かつ、文字通り物量と物理で解決する神術に唸りっぱなしで、エレンとパツレも口が半開きになっていた。

「すさまじい神業だ、もはや理解が追い付かん。物質を思うがままに生み出し、狙った通りに消しているのか」

「いえいえ、これは合金ですので、作ってもらったものを加工しただけです」

ファルマは愛想笑いをした。聖帝には「合金ですので」、の意味がわからなかったようだが、ファルマは化合物以外の共融混合物などは作れないので、誰かに作ってもらうのが望ましい。

それに、なんでもかんでもファルマが物質創造でお膳立てするのはもう卒業したい。

この世界に存在する材料で、この世界でできるものを、この世界の人たちの手で作る。それが次の目標だ。それでなければ、技術として普及しない。

パツレはできたての客室の中を見渡し、構造を確認してから首をかしげる。

「お前の作品、十人以上乗れそうなんだがサイズ間違えてねーか？

乗るのは三人だぞ？」

「行きは三人だけど、帰りはこれで乗員全員を運ぶつもり」

「重すぎてはこべねーだろ。船にでもすんのか？」

「その点は帰りに説明するよ。いったん乗ってください」

三人は口をつぐんで荷物とともにキャリッジに乗り込み、二重の毛布にくるまった。

乗ってみて、エレンが好待遇をありがたがる。

「寒風吹き曝しで凍傷寸前を覚悟してたけど、馬車客室みたいに快適だわ。ありがとうファルマくん」

「それはどうも。寝て構わないので、体力を温存し神力を回復させておいてください。往路五時間ほどかかります」

直前に大規模演習でくたびれ果てた後の、新大陸へ直行という弾丸スケジュールである。

疲労困憊で上陸しても、何の戦力にもならない。ファルマとしては少しでも睡眠をとっておいてほしかった。

「一時間そこらで着くと言っていなかったか？」

今日中に戻るという目標がある聖帝は気忙しい。

「それは単身で行った場合です。この人数ですから」

「速度がでんのか」

「出せますが、この装備で人を運ぶとなると高速は出せないのです」

「移動だけで十時間か……」

「申し訳ありませんが」

というか、ファルマが全速すると宇宙を経由するので彼らが死ぬ。

さすがに説明はしなかったが、理由はそうだ。

「途中、マーセイルに寄り道します。マーセイルは新大陸までの最短ルート上にあるので、時間は無駄にしません」

「うむ、任せきりになってしまいが、すまぬの」

ファルマはてきぱきとキャリッジのふちに何本もの鎖を通し、空中で束ねて吊り下げ、杖の柄に括り付ける。フレームに水銀気圧計を取り付け、すでにパツレが白血病を患っていた時期にマーセイル工場で量産化していた酸素ボンベを人数分入れ、あとでメロディ謹製の割れないガラスでキャリッジ上部に蓋をする。こうすることで、ファルマは中の様子を確認しながら飛ぶことができる。客室の換気のために時々低空に降りなければならないが。

人間三人分とアルミ合金フレームのキャリッジの重量は、ファルマが高速飛翔できる積載重量ギリギリだ。それに気づいたエレンがファルマを気遣う。

「さすがに三人は重い？ 何か手伝えることは？」

ダイエットをしておくべきだったかしらね、とエレンが冗句を言う。それより荷物が多いんじゃないか、とファルマは指摘したい。

「今度の杖は薬神杖以外の性能を付加したマルチコアだし、杖そのものも頑強にしたから何とかなる。では、よい空の旅を。次に起きたときには、新大陸に到着しているよ」

「道案内とかいらない？ 方位磁石でも見ましようか？ ごめん、邪魔かしら」

「何度か行つたから、間違えないよ。気圧の差を生じないよう、客室上部を強化ガラスで密閉するね」

「窒息しない」

「しないよ。気圧計を見ながら客室内に圧縮空気を注入、ベントしてゆくけど、苦しくなったら酸素ボンベは早めに使って。とくに根拠もなく自信過剰だったり楽しくてたまらない気分になったりしたときもすぐ」

「前者はわかるが、後者はなんだ？」

まさに自信満々、傲岸不遜が擬人化したような男、パツレ・ド・メディシスが首を傾ける。

「ひどい低酸素症の状態で、意識を失う寸前だって話だから」

高高度で低酸素症になるとそういう症状が出るという、地球での実話がある。

（仮にそうなっていたとしても、わかりにくい自信満々メンバーだよな）

苦笑しつつ、時折診眼で確認しながら飛ぶことにした。

神力を杖に通じると、鎖がぴんと張り、キャリッジが地上から浮かび上がった。

もともとの神力のおかげなのか、ファルマはほとんど寒さを感じない。

「あにうえのばかー！！　せつかく支度したのにーおいてくなくー！」

下から小さく声が聞こえた気がした。置いていかれたブランシュの姿をみとめたが、小さくなってゆく。

「ごめんブランシュ、帰ったら埋め合わせをするから」

空気抵抗を考えれば、寒さに構わず航空高度を飛びたいが、航空機ではないので急上昇をすると気圧が低くなり、乗客が危険だ。

そこでファルマは、進行方向の大気を適度に消去し、高高度を巡行しているような状態を作り出した。安定姿勢に入り、客室の気圧を確認すると、徐々に加速し高速飛翔に切り替えた。

ファルマらは夜明けの空、雲海の上を船出をするかのように滑り出した。

マーセイルに寄り道をし、新大陸までは六時間がかかった。

ファルマ単身では一時間程度で到着できるのだが、地球においても飛行機での大西洋最速横断記録が五時間程度であるため、これ以上は速度の限界だといえる。気圧の調整をしてガラスのハッチを開け、高度を下げて五百メートルほどの位置を低速飛翔に切り替え、一応敵襲を警戒し雲の間を飛ぶ。エレンとパツレが顔を出した。

「見えてきたよ」

「これが新大陸！」

「で……か！」

二人とも、興奮したように身を乗り出して下を覗き込む。

エリザベスはまだ目覚めないようで、夢の中だ。ファルマは彼女の状態が問題ないことを診眼で確認する。寝てると思ったらそのまま起きてこずに死んでいた、ということがあってはならない。

ファルマは雲に隠れて飛翔しつつ、海上に目を凝らす。

「妙だな」

「どした？」

「あそこ。板状の廃材が大量に漂流している。船が破壊されたのか

もしれない」

「よく見えるなお前。船は五隻もいたんだぞ」

「漂流物から見積もると、何隻とはいえないけど複数はやられてる」

ジャン提督と、クララら……出航前には全員の健康診断をしたので、乗組員の名前と顔も覚えていた。行方不明者の確認をするため、写真付きの乗組員全員の名簿も持ってきた。それなのに……船がない。ファルマの表情は凍り付く。

「そんな……もう終わっていただなんて。俺たちは何をしに来たんだ」

満艦飾の軍艦を一か月前に見送ったパツレは、信じようとしないう最後の通信が、三日前。間に合わなかったのだろうか。

「でも、死体は浮いてないぞ」

その時、ファルマの視界の隅に何かがよぎったような気がした。はっとして洋上に視線を配ると、散在する小島の一つを中心のあたりから、はつきりとしたフラッシュが見える。

< i 3 6 4 3 3 0 — 2 4 9 6 >

「なんだ、あれは……何か神術を使って船をぶっ壊した奴らが居場所教えてくれてんのか？」

「いや、彼らは敵じゃないな」

「どうしてわかるの？」

「これはシグナルミラーだ、俺たちに当て続けてる」

「単なる反射とかじゃなくて？」

「偶然ではなく、明確な意図をもって当ててきてるよ」

サバイバルグッズでもおなじみ、遭難信号用のシグナルミラーというものだ。

シグナルミラーは、太陽光の反射を利用して、上空からの搜索者にピンポイントで位置を知らせる。手鏡サイズのミラーの中央に穴があいており、照準合わせを行なったうえで遭難信号を送ることができる。

東イドン会社がもとも船舶間の連絡に使っていたシグナルミラーを、ファルマが照準合わせができるように改良していた。それを見ていたパツレが叫ぶ。

「うわまっぶし！ これ、敵にも位置を知らせてるようなもんだろ、アホか！」

「いや別にアホじゃないな、狙った目標以外には見えていないよ」

そのうち、光はチカチカと激しい反射を繰り返すようになった。

「あ、信号を送ってきてるぞ。エレン、俺の荷物の中から赤い手帳を出して。挟まっているメモを見ながら解読して。鏡を手で覆って信号を飛ばしてるんだ」

「えっ、わかったわ！」

ファルマは光の明滅を信号に変換し口頭で伝えながら、エレンに解読してもらうことにした。

彼女がファルマの手帳を開くと、彼がモールス通信の際に使っていた符号表が出てきた。

解読すると……、

「総員とらわれ、敵に囲まれている……ですって！」

「あの島に、船員を囲んで敵が潜んでいるんだな」

ファルマは診眼で上空から人数を確認する。

島の真ん中に、少し開けた場所があり、全身青白い光を放つ人々が大量に折り重なって倒れている。

その周囲には、彼らを見張るように健康成人数十名がぐるりと囲んでいるようだ。

そんな中、彼らに気づかれないよう必死にシグナルミラーを当ててきているのは、通信士だろう。

（！ 倒れている人たちは全員、青？ 発熱している？）

診眼で中毒症を疑ってみるが外れ。次に感染症を疑うが、前提が多すぎて特定できない。

「人質奪還が先決だな、急襲するか！」

パツレが語気を荒らげたので、エリザベスはその声に気付いて起きてきた。

「おお、もう到着か。なんと壮大な眺めではないか……」

エリザベスの感動をよそに、下を見ていたエレンが蒼白になって杖を振る。

「氷の壁！」

エレンの繰り出した頑強な氷の防壁がガラスのように粉碎され、何かが氷壁を貫通した。

（タングステンを創造）



エレンの防壁の背後に、ファルマがタングステンの防壁を展開していた。

飛翔物体は防壁に阻まれ、はじき返されて海面へと落下してゆく。そして遅れて聞こえたのは発砲音だ。

飛んできたのは銃弾、狙撃されているのは客室部分。ファルマ個人を狙っているのではなさそうだった。

「なんで銃撃が！」

「銃だろうと大砲だろうと持ってくるがよい。どれ、肩慣らしに焼き尽くしてやるか」

パツレが叫び、エリザベスが不敵に笑う。

戦闘モードに入ったらしいエリザベスが鋭く杖を振り上げたところで、ファルマがたしなめる。

「あそこには人質がいます、お忘れなきよう。そして状況が判明しない中、彼我の戦力差もわからぬなか、いきなり相手を殺害すれば間違いなく話がこじれます」

「何を悠長な。わが臣民がやられておるのだろうが。敵をのみ燃やすよう火炎の制御ぐらいできるわ」

「彼らが手を下したのではないかもしれませんよ」

「そなたはお人よしが過ぎる！」

エリザベスはあきれ果てていた。

「根拠はあります。別個の場所から、六連発ずつ銃声が聞こえました。この銃声はジャンさんたちが持っていた銃ですからね」

「奪われたに決まっておるうが」

「それだと使い方まではわからない。帝国側の誰かが彼らに教えた

のですよ、とすると敵対的な関係ではないかもしれませんが。それに、彼らには創傷はないようですよ」

「ならばなぜ我々が狙撃されている」

「この世界で空に金属の塊が浮いていたら、まあ怪しいですからね。ひとまず、足場を作りましょう」

ファルマは左手を返し、物質創造を発動。

海中にビルほどの高さの鉄塊を突き刺し、頂上にキャリッジを置く。

地上から頂上に弾は届かないはずだが、届いてもかまわないよう、頂上にも砦のようにポリカーボネートの防壁を展開しつつ、視野を確保しておく。一瞬にして防御のための要塞ができた。

「ちょっとここにいてください、まず人質の安全を確保してきます。彼らをここに連れてきます」

「お前だけずるいぞ！」

パツレの叫びを背後に聴きながら、今度はファルマが単身で空から島へ近づく。

銃撃は執拗に、激しく繰り返されるが、高度をとって狙撃しにくいうえに、銃弾が仮に届いたとしても物理無効のファルマはものともしない。

六発の鉛玉を無駄に消費させ、弾の装填を始めたころ合いで、ファルマは上空から人質を囲うように円筒状の防壁を作り、物理的に攻撃を遮蔽しつつ急降下した。ついでに、付近一帯の鉛を消去。これで鉛玉での狙撃はできなくなったはずだ。正確に言えばなんでも詰めれば狙撃はできるのだが、ぴつたりと合う小石を拾う時間などが稼げるので、あえて銃身の素材は消さない。防壁の底部にたどり着いたファルマが見たのは、帝国艦隊の乗組員らの衰弱しきった姿だった。

全員が息はある。死亡している者はいない。しかし熱と苦痛にあえぎ、手足を縛られて地面に転がされていた。シグナルミラーを送ってきていたものは、手が縛られているので口で啞えていたようだ。ファルマは炭素を一部消去して縄を素手で切りながら、異常な光景におののく。

「なんてことを……何があつたんです」

「ファルマ師、本当によく来てくださいました。私がついていながらこんなことになり、申し訳ありません」

すすり泣きながらファルマに声をかけてきたのは、薬師マジョレ―又だった。

彼女の纏っていた薬師のロングコートは引き裂かれ、素足がむきだしに、あられもない姿になって縛られて這いつくばっている。

見かねたファルマは目をそらしながら自分のコートを脱ぎ、彼女の腰にかけた。

手足の自由を取り戻した人々は、病と熱にうかされて依然として苦しそうにしていた。

「杖は奪われたのですか？」

ファルマは、訊いていいものかと躊躇しながら尋ねる。

いわく、気絶している間に現地住民に奪われてしまったという。

彼らは悔しそうにうなだれた。貴族の命の次に大切な杖を取り上げられ、彼らの自尊心と戦意はスタボロだった。

「とにかく安全を確保しましょう」

ファルマは地面に左手をつく。

「地面ごと上昇しますよ、地面に伏せてください」

ファルマは円筒防壁の底の地面を鉄板で覆い、そのまま物質創造をかけ続ける。すると鉄の円柱が上昇し、タワーのように伸長した。

「ここで伏せている限りは、撃たれませんよ」

銃弾の射程は数百メートルはあり、射程圏内にはいつている。

だが、地上からビルの上ほどの高さに伏せている人間を狙撃できる狙撃者はいない。ここでいったん、状況分析と傷病者の処置だ。気が付くと、ファルマが構築したばかりの鉄のタワーにパッレかエレンかの手によって氷の橋が架けられ、向こうのタワーに置いてきた三人がこちらへ走って向かってきているのが見えた。加勢はありがたいが、案の定狙撃されている。鉛玉は消しているので、代替の何かを詰めたのだろう。

「あー、こっちに来るみたいですね」

「薬師様、杖をお持ちではありませんか。銃弾でしたら土属性神術で防げます」

そう言うのは、同行してきた神官と乗員だ。

パッレが実証したように、杖がなくとも神術・神技は自身の腕を杖化すれば使えるのだが、そういうトレーニングをしていないために、全ての神術使いは杖を取られれば無力化すると信じ込まされている。彼らの自信を取り戻すには、杖がいる。

「そうですね、では今作ります」

「作る」

ファルマは左手と右手でこぶしを作って目の前で合わせ、左手で

物質創造をかけながら、右手で即座に物質消去をし、3Dプリンタのようにタクト状の杖を成型してゆく。太目の杖を作り、真ん中に割りばしのように溝をつけてゆく。

そして仕上げに、聖別詠唱を念じると神杖化した。一本の太い杖を、割りばしのように真ん中でぼっきりと割り、二人に手渡す。

「はい」

晶石はついていないが、十分機能する。

今できたばかりの杖を手渡された土属性神術使いの神官と船員は、ぽかんと口を開けて目を丸くした。

「え、え？ 杖は袖の中から出したのですよね？」

「あ、はい。もったいぶった出し方をしてすみません」

ファルマは面倒を避けるためにそういうことにしておいた。

彼らは神術使いに戻ったといわんばかりに杖を振り、土壁を形成して援護した。

ややあつて、三人組が氷上中距離走を終え到着した。

「ファルマお前、置いていきやがって」

「なんで勝手に行くの」

パツレは罵るし、エレンは息が切れている。聖帝はまったく息が上がっていない。

「あ、後から呼ぼうと思っていたんだよ」

船員一同は、エリザベスの登場に驚く。そこで初めて意識を取り戻したジャン提督は、エリザベスを見るなり平伏した。

「聖下……！」

「エリザベス聖下！」

「いかにも。どうした、余が直々に助けにきたのだぞ。苦戦しておるではないか」

臣民の救助のためはるばる海をわたってきた君主の姿に胸をうたれ、感涙にむせび泣く者も。ジャン提督は静かに悔し涙を流していた。

しかし……、感動の対面のなか鋭い声が上がる。

「聖下、我々に近づかないください。我々は感染しています！聖下の御身が穢れます！ 向こう岸にお戻りください！」

薬師マジョレーヌが絶叫を上げた。

主君を未知の病に感染させるわけにはいかない、という悲壮感にじみ出ていた。

「ここでは空気感染は成立しないよ。接触感染はあるかもしれないけど」

ファルマがパッシブに展開している聖域は、ウイルスや菌の空気感染を無効化する。

害虫がいたとしても、この高度まではこれまい。

「ファルマ君、彼らに応急処置をしましょう。敵も次の手を打ってくるかもしれないわ」  
「そうだな」

エレンが薬箱を開けはじめた。ファルマはマジョレーヌから症状

の聞き取りをする。ファルマは代表的な感染症ではないことを先に診眼で確認してから、感染経路と感染源の特定をはじめた。

「彼らに共通しているのは発熱、筋肉痛、腹痛、血尿、嘔吐、なかには吐血をする者も……」

「わかりました。水はどうやって飲んでいた？」

「神術の水と、飲用にしていた湖水の水質には問題はなく、煮沸してから飲んでいました」

「何を食べた？」

「湖でとれた魚介類と、持ってきた食糧のみです。現地の果実、植物などは食べていません。もちろん、重金属検査や微生物、寄生虫検査もしました。また、完全に火を通して食べていました」

「そうか……」

「悔しいです……！ 私は何を見落としたのでしょうか」

マジョレーヌが懷から取り出して、お守りのように抱えていたものは、ファルマの書いた薬学の教科書の簡易版だった。

その内容が、この場所ではなんら役に立たなかったことを物語っていた。

「虫に刺されたりは？」

「しましたが、刺し口は特に腫れていません」

「湖といたけど、そこで水浴をした？」

「しました。水質がよかったもので、泳いでいたものもいました。水質を調べましたが、寄生虫らしきものもいませんでしたよ？」

（淡水で泳いでいた……。まさかこれじゃないだろうな）

ファルマは診眼に問い、脳裏で答え合わせを行った。

「住血吸虫症」

なかば直感でしかないが、キーワードが頻出しすぎたためにすぐに確定してしまった。

「えっ……そんな。住血吸虫も疑いました！　しかし特有の症状である急性のセルカリア皮膚炎などがなかったですし、それだとしてら進行が早すぎますし、虫卵も検出されなかったので除外したのです！」

彼女にはなまじ知識があったがために、「教科書通りの症状ではない」ことで除外してしまったのだ。

「住血吸虫症には、セルカリア皮膚炎が出にくいタイプのもものもあるし、初期の感染では虫卵は出ないのかもしれないよ」

はつきり言って、ファルマは薬学の教科書の中で住血吸虫の項について記事を割かなかった。

帝都や近隣諸国は高緯度であるためか、住血吸虫の症例がまったくなかったからともいえる。

地球上においても住血吸虫症にはいくつものタイプもあり、症状も様々で、流行地域もそれぞれ異なっている。ファルマは典型的な症状を記載しただけで、もちろんそれがすべてのタイプを網羅しているわけではない。

ましてやここは異世界。吸虫の引き起こす症状が異なっているものなんら不思議ではない。

マジョレーヌは拳で膝をたたき、悔しさを爆発させた。

「プラジカンテル！　……持っていたのに！　私が管理していたのに。私が未熟だったばかりに……あのとき、すぐに飲ませていれば



！ 人数分はなかったけど飲む時間はあった。重症者は確実に救えたのに、襲撃で海の底に沈んでしまいました！」

彼女の頬を涙が伝う。

「私は無能です！」

船員の安全を預かっていた薬師として、彼女はこの大失態が許せないのだ。

同行していた薬師、技師の担当する検査一式では虫卵を検出できなかった。

誰も死亡していないので病理解剖もできなかった。血尿をみとめたようだが、組織生検などをしなかったため特定できなかった。船医もいたが、彼は外科が専門であり、見抜けなかった。

「君はよくやったよ」

ファルマが診眼を持っていなければ、原因すら確定できたかどうかかわからない。おそらくはマジョレーヌと同じように最初の死亡者が出るまで途方に暮れていただろう。

だれかが死亡していたならば、病理解剖ができたかもしれない。でも、おそらくは感染初期であつたがために、誰も死ななかった。彼女は最善を尽くした、とファルマは心からそう思う。

「プラジカンテル」

ファルマは定番といえる住血吸虫の治療薬を決定した。もう、大丈夫だ。

プラジカンテルは人数分の持ち合わせがない、だが、ファルマがここで創って飲ませれば問題ない。あとは帝国に全員を連れ帰り、

そこで処置をすればいい。それを説明していると、

「人数分あるわよ、プラジカントル」

エレンが告げた。

「なんだって？　なんでそこまで想定していた？」

「私、荷物はいつも多めにもってくるの。ファルマ君が外しそうな、緊急性の低い薬を中心に持ってきたわ」

「さすがエレンだ。俺の行動の裏読みも完璧だな」

いつも大荷物を持って出勤し、旅行時も万が一を想定した準備を欠かさないエレンに感謝だ。

エレンの言葉を聞いてほっとしたマジョレーヌが言葉を続ける。

「思えば、クララ・クルーエさんが警告していたんです。湖に入るとよくないことが起こるって……でも彼女は理由を説明できなかった。彼女は何かを予知していたのだと思います」

「ん？　そのクララさんの姿が見えないけど」

「私たちが気付いた時には全員ここに連れてこられていて……でも！　どうしてか彼女一人だけいないんです」

ファルマは目を配る。嫌な予感がする。旅に特化した予知能力を持つ彼女は、この航海に欠かせない存在、水先案内人だった。その彼女が、消えている……。

敵は、クララの能力に気付いていた。そして、彼女を利用しようとしている。

「よう、弟。こいつは少し、手ごわい相手なんじゃないか？」

パツレもクララを奪われた意味を理解しつつあった。クララの予言を使って、待ち伏せていたということになる。そしてこの住民は、住血吸虫症にはかかっていない。むしろ、住血吸虫症を熟知していて、感染を成立させ頃合いを狙った線まである。

しかしパツレは怯えてはいない、その状況を楽しむかのようだ。ファルマも頷く。

「相手が誰だろうと、一人残らず無事に連れて帰るよ」

「奪われたら、奪い返すまで。余の臣民は、余のものだ」

聖帝も宣言した。

ファルマはゆらめくように立ち上がり、眼下に潜む見えない敵を睨みつけた。

## 7章11話 敵地進入（後書き）

### 【謝辞】

2019.3.1 修正

防壁素材に関して強度不十分のご指摘があり変更しました。mes  
o | c a c a s e 先生ご指導ありがとうございました。

## 7章12話 貫通

「ところで、いないのはクララだけか？」

船員たちの顔をしげしげと見ていた聖帝が、ふと疑問を口にした。

「たしかにクララ・クルーエ嬢のみとお見受けします」

ジャン提督が周囲を見回しながら答える。点呼をしている時間はない。

「む？ はぐれた者もおらんか」

「どういふことですか？」

その訊き方にひっかかるものを感じたファルマが横から尋ねる。

「余の配下の准騎士を随行させておったのだがな」

「ノア・ル・ノートル様のことですか？」

ファルマが勘付いた。

「うむ。姿が見えんのだが、クララとともに攫われたのか？」

「や……先ほどまで我々と共におられました。すぐそのあたりにいらっしゃるのでは」

「いつ消えた……？」

不穏な空気が漂い始めたとき、ファルマが緊急避難場所としていた台地を震動が揺るがした。

突き上げるような大きな地響きが起こりその場の誰もが身構えたとき、周囲を取り囲むように、森の中から蛇状の霊体が現れた。その威容は圧倒されるほどで、大蛇は鎌首をもたげ今にも襲い掛かるうとする。

怪異の襲撃に、船員たちは竦み上がる。ファルマも白昼堂々の襲撃に、

（なんだ、これは）

ファルマはこのタイプの霊を目撃したことがない。

抽象画をそのまま実体化させたかのような、いびつで不自然な形状をしている。

「これはなんだ？ 落書きのような。悪霊なのか？」

造形物とも見紛う形状に、ファルマは理解が追いつかない。

「見たことがないタイプだわ。どの系譜にもなさそう」  
「なんだこりゃあ」

それなりに悪霊には詳しいと自負しているらしかったエレンもパツレも知らないようだ。

聖帝でさえも帝杖を握ったまま首をかしげ、気味が悪そうに顔をしかめる。

ファルマはもともと悪霊の生態学の心得などはないが、それを見た探検隊らの反応は違った。

「気を付けて！ それこそが悪霊です！」

「我々はこれに船を破壊されたのです！」

聖帝が強がりというより拍子抜けといったように苦笑する。

「余の目には落書きにしか見えんのだが？」

「そうなのです！　それで我々も侮りました。しかし決して侮ってはいけません。奴らは地上に描いた絵を実体化させます！」

「実体化だと？」

神術使いらは悲鳴とも絶叫ともつかない声で口々に叫ぶ。中には果敢にも神技を放つ者もあったが、攻撃は大蛇を透過し虚空に飲み込まれていった。

必死の応戦をものともせず、大蛇はファルマらが一時避難しているせり上がった鉄の台地にまで迫ってきた。

「面白い、この蛇めを我が杖の餌食にしてくれよう」

「聖下。白昼堂々と実体化している霊です、もう少し探りを入れたほうがよいのでは」

「では少しつついてみよう」

前に出ようとするファルマを制し、聖帝は鬱陶しくなったらしく、杖に手を添えて神力を通じると、声を整え詠唱を行う。

「火焰神術陣、“火神の障壁”」

彼女が叫ぶと同時に、視界を覆いつくさんばかりに火柱が上がった。聖帝が放った白炎は火柱を形成したのち、空中に島全体を覆いつくすほどの巨大な神術陣を描き出し、その火柱で辺り一面を蹂躪する。

神術陣は火焰旋風となって大蛇を焼き、円盤状の防御域を形成する。

変幻自在かつ大火力の火炎神術を前にパツレは前のめりになり、

エレンは腰が引けたようだった。圧倒的な熱量にあおられ、熱風が渦を巻く。彼女いわく“少しつついた”程度なのかもしれないが、ファルマもさすがに口があいた。余人ならば生涯神力量を費やすほどの神力を消費しながら、彼女は悠々としているのだ。

「悪霊を標的として広範囲に撫で斬る神術陣だ。実戦では使う機会がないのだが、こういう時に使わねばな」

得意満面なエリザベスが杖を下げると、神術陣は空間に固着化されたようで、結界のように機能している。

「お見事です聖下。私も援護いたします」

「“雷の大涙”」

エレンは聖帝のダイナミックな神技に驚嘆しつつ、間髪いれず自身も森の全域にくまなく大型の雷の雨を降らせ、森の中からの飛び道具による奇襲を牽制する。

「ちょっと待てエレン、“人”を狙うな！」

先住民への攻撃を見とがめたファルマが、反撃をとどめる。

「ええっ。明らかに人工の霊に攻撃されてるのに!？」

「それでも」

「積極的な加害はしなくても、脅かす程度には遣り込めるつもりなだけで。待って！ 下！」

エレンの指摘でファルマとパツレが下を見やると、首を失った大蛇が異様な動きをはじめ、切断面が盛り上がり、新たな首が再生し



はじめた。

「しつこそうだな」

ファルマがそう呟いた直後に、思わぬ方向から全身に鈍い衝撃が走った。

真横から全身を打ち付けられ、そのまま島外に放り出された。

「っ……何が！」

久々に痛覚を味わったからか、ファルマは対処が遅れた。

ファルマの体は半実体に近く、これまで基本的に物理攻撃は通用しなかったため、それに慣れすぎて防御を忘れてしまっていた。瞬時に襲撃者を探し彼が素早く視界に捉えたのは、同じく抽象画をそのまま実体化させたかのような、大猿とも巨人ともつかない巨躯を持つ霊だ。

（物理無効だと思ってたんだけど……相手が霊だとそうはいかないか）

殴られた衝撃で杖を手放して浮力を失ったため、そのままの衝撃で海面に激突しそうになる。

実際には「海面に激突」などはしないのだが、ファルマは反射的に素手で生み出した柔らかな雪の塊をクッションにして衝突を避けた。まだエレンに神術訓練の相手をしてもらっていた頃に、海上で何度となく使った受け身の動作で、体が自然に動く。

海面を踏むと同時に氷板を形成し、彼は海上に立ち踏みとどまる。

（殴られたってことは“俺も”殴れるんだよな）

発想を転換すれば、彼と同質である霊も、本来ファルマに干渉できるのだ。ただ単純に、これまで出会ってきた悪霊とファルマの間には圧倒的な力の差があり、悪霊の攻撃がファルマに届くことはなかった。

霊と霊で「消滅をかけた命の駆け引き」など思ってもみなかったが、そうとなれば話も変わってくる。

「杖がないから飛べないのか、ほかの秘宝も全部杖の中だしな」

殴打の衝撃で杖を手放してしまったため、飛翔ができない。不便なことだが、秘宝あってこそその飛翔能力だ。

ファルマは薬神杖を手元に呼び寄せようとするが、戻ってこない。薬神杖をつかみ損ねたファルマは、こちらを見下ろしている筋肉質の青年が猿型の霊に乗り、薬神杖を左手に握っているのを目撃した。

「新しい薬神杖は誰にでも持てるんだったな。セキュリティ面でも迂闊だった」

自分以外に使えない杖は意味がないと考えた彼は、人体を透過するというかつての素材の性質を殺してコアだけを組み込み、誰にでも持てるようにしておいたものだが、それが完全に裏目に出ってしまった。

それでも駆動には大神力を要するために、神術の使えない青年にとってはただの棒きれとなってしまうている。

青年が薬神杖を持て余しているのを落着いて眺めながら、どうしたものかなとファルマは思案する。

エレンが台地から身を乗り出すようにしてファルマを気遣った。

「ファルマ君ー、怪我してない？ 無事ー 加勢するわ！」

「心配ないよ！ 何もしくなくていい」

彼女は心配してくれているが、ふと思いついてファルマはこの状況を逆手にとった。ファルマは彼を狙う青年に気付かないふりをして体ごとエレンのほうに向け、エレンとやりとりを続け無防備な状態を演出した。

彼の演技に誘われたか、青年が動いた。ファルマをめがけ、大猿をけしかけ殴打を仕掛けてくる。

「きた」

ファルマは振り向きざま、大振りに繰り出される猿の握り拳に着目した。

「おや、親指を握ってるな」

なんとということもない動作だが、彼は霊が青年の命を受けて自律的に動いているのではないと断定した。何故なら、人類を除く霊長類は親指を中に入れて拳を作ることができない。そんな動作になったということは、青年が意識を割いて操っているという間接的な証拠である。つまり、あの青年の意識と霊体はリンクされている。ファルマは瞬時にそこまで判断した。

「なら、ダメージを返してやる」

ファルマは背中に目がついていたかのように身を返し、海上で軽く腰を落として構えると、真正面から両手で拳を受けて、接触と同時に霊の右拳を粉碎した。

霊を直接操縦していたと思しき青年は右拳をおさえ、その場に縫い留められた。

不意をつかれ薬神杖を取り落とし、右拳を押さえて苦悶の表情を浮かべている。

ファルマは遠隔から診眼を使い、彼の拳のダメージが中手骨骨折までには至らなかったことを確認した。

今こそと薬神杖を呼び寄せ、小気味よい音を響かせて杖を握り、すかさず飛翔し地上を俯瞰した。

彼らは森に潜み、悪霊を使役し、あらゆる場所から変幻自在の攻撃を仕掛け、その実体化は昼間でも物理的なダメージを与えうるほどに強固で、並みの霊を雲散霧消させ無敗を貫いてきたファルマの聖域をもともしない。

ここに至って、ファルマの聖域がどういうわけか、彼らの操る霊を排除できない。そうなると霊を成敗してもきりがなく、攻撃すべきはエレンの言うように霊を操る人間だ。

だが、対人戦闘において加害せず相手を制圧する、これが難しい。ファルマが躊躇している様子を見物していたエリザベスが凶星をつく。

「どうした、何を迷っておる。悪霊は蹴散らせても、人間はそうはいかんか？」

ファルマの煮え切らない態度に見切りをつけ、エリザベスは首を鳴らした。

「よかるう。一時退避だ。ここに守護神殿を建てるぞ」

鋭い宣誓が場の緊張を煽る。

「大神殿・守護神殿間神術網へ接続！」

エリザベスが片手で杖を地面へ突きたてる。

短期間に神殿の秘術をものにしつつあった彼女は大神官としての権能をフルに使い、ガラス箱入りの秘宝を地に埋め、流れるような動作で守護の核とした。続いて大地に神力を注ぎ込んで共鳴させ、神術陣を展開する。

「広域浄化、あしきものは立ち入るべからず」

長詠唱のち完成の発動詠唱を唱えると、彼女を基点に立方体の青い光の神術壁が出来上がった。

土地の守護神殿化は詠唱によって確立し、今、建物こそないが、仮想の守護神殿が現れたということになる。守りを固めてくれたエリザベスに感謝しつつ、ファルマも気を引き締める。

「奴らには神殿内にあるものを認識できんだ、霞がかかったように捉えるらしい。この中に引きこもっていてもなんの解決にもならんが、ひとまずの防衛拠点にはなるであろう」

守護神殿への悪霊の攻撃は当たらない、とエリザベスは宣う。

一仕事を終えたエリザベスは腰に手を当てがいながら解説した。ファルマも彼女の活躍に勇気付けられ、重ね掛けの安全策を講じた。

（気は進まないが、そっちがそれならオカルト全開だ）

この世界における悪霊に対して、物理法則は無用となれば、禁術系列、神術体系を使うしかない。ファルマは肚を決めた、備えは終えている。

（創薬神術陣！）

予め準備しておいた自身の髪の毛入りの小さな封筒を取り出し、それを触媒に彼の体は白光の粒子と化す。

「神薬合成・地類 “爾今の神薬！”」

数秒とたたず、虹色に輝く神薬が空中に顕現したそれを船員らに霧雨にして注ぎかける。

エレンやパツレ、聖帝にも降りかかってしまったが致し方ない。

この神薬を飲む、またはそれに当たった人間は何があっても一日だけ不死化する。

いわば霊体に近い状態となるため、いかなる重症となっても病状は進行することはない。

彼らは簡易守護神殿の中にいる限り、霊からの攻撃は受けず、脅威となりうる「人間からの」物理攻撃も無効となり、無敵となる。

神薬とは大仰なものだが、この世界に存在する時間操作系のバグ、もしくは衝突判定を誤魔化すバグ技なのだろうとファルマは分析している。

実体解除の隙を突かれないよう、ファルマ自身は再実体化。これで自陣営に現実世界での危険はなくなった。そのうえでファルマはときばきと平和的な制圧手順を実行していた。

「さて……強引かもしれないけど、俺にはこれしか思い浮かばない。襲撃者に出てきてもらわないとな。“セルロース、ヘミセルロース、ペクチン、リグニンを消去”」

ファルマは空中から右手で島全域をとらえ、真横に撫でるようにして、守護神殿の中にいる人々を除き島内全ての植物を対象とし物質消去をかけた。

島全体に有機物が沸騰するかのような霧が立ちこめる。  
ありとあらゆる植物体が雲散霧消し、森に潜んでいた先住民らの

姿があらわとなった。

ファルマの奇襲によほど驚いたのだろう。

悲鳴や咆哮を上げるもの。

物陰に隠れようとするもの。

威嚇するもの。

反応は様々だ。

獣皮の衣を着ていたものとはかく、植物性の衣類を着ていた者は服を消されて全裸になってしまったようである。男女入り混じった武装戦士ばかりであることを確認した。彼らはファルマの力に怯んだかにも見えた。

ファルマは彼らを無力化するため、さらに容赦ない手順を踏む。両手で格子を作り、指を組み合わせて物質創造と物質消去を同時にかけ、彼らを綾に織られた銅と、ニッケル化合物の格子の中に閉じ込めた。

導体で形成された電磁シールドの内部は霊の発生を妨げ、シールドは霊の通過を妨げる。

人も霊も同時に無力化できるのだ。

ファルマは捕獲した先住民たちににらみを利かせつつ島内を俯瞰し検索する。

島の生態系を破壊し、丸裸にまでしたのにクララの姿が見えない。

（彼女はいつたどこに？）

\*

「あれ……？」

「いったいどうしたんだ……苦しくない？」

守護神殿の中で蹲っていた船員らは戸惑い、ふらふらと立ち上が

る。聖帝がこの場を守護神殿化し、ファルマが彼らに神薬をそそぎかけた。何をされたのか気付いた者は船員らの中では皆無だったが、誰もが自らの身に起こった異変に気付いた。マジョレーヌに至っては、信じられないといったように目をぱちくりとして頬をつねっている。異変を察知したのは彼らだけではなかった。

「エレオノール」

パツレが自身の腕を見ながらエレンに視線をくれる。

エレンは応じたくなさそうに視線をそらす。

「話を聞け」

「なに？」

「この霧の輝き、この芳香、霊薬か神薬だよな」

「ごめんわかんない」

「ファルマは今、何か創造したよな？ それをかけられた」

エレンが返事に窮していると、パツレの顔が迫ってくる。

「霧に紛れつつ、見間違いでなければ半実体化し、再実体化した後光の雨を降らせただろ。まるで神霊が変幻自在に姿を変えるようにな。そしてそれが当たった俺たちにも何か作用させている」

「んー、私は逆光でよく見えなかったわ」

「お前の目は節穴なのかもしれないが、俺はちゃんと見ていたぞ。なんの神術だ？」

「だから……」

エレンは目が泳ぎ、歯切れが悪い。

パツレはファルマを、「薬神の加護を受けた特殊な人間」だと未だに信じているようだ。



ファルマは両親には打ち明けたと言っていたが、兄妹には伝えていないようだ。パツレは当然、ファルマを人間だと信じて疑わなかったようだが、その言い訳が通用しそうな段階は過ぎた。

エレンはエレンでファルマの実体化だのなんだのをそもそも見たことはなかったが、あまり詮索せず、むしろ気付かないふりをしていなかった。問い詰めればいつか、彼が時々冗談交じりに口にするように、本当に消えてしまいそうだ。

「お前が何か知っていて、俺に言うことがあるなら聞くぞ」

「何もないわよ、ファルマ君本人から聞きなさいよ、兄弟なんだから」

「兄弟だと思っていたんだがな……」

パツレはどことなく寂しげな口調でつぶやく。

「お前は今のを見て平気なのか？」

「なんとも思わないわけじゃないけど、あの子にしかできない最善を尽くしているなら、脚を引っ張るようなことはしたくないの」

エレンは揺れ動く心情を吐露した。

「ふーむ。ファルマのやつ、この余を後方に回し、非殺傷の原則を守りつつ一人で制圧しおったな」

聖帝が素直な感想を絞り出す。噂をしていればファルマが何事もなかったかのように舞い降りてきた。

「ただいま！」

「おかえり、って調子が狂うわね」

エレンは杖を取り落としそうになりそうになっていたが、なんとか取り繕った。

「島中の木々はおるか、彼奴らの服も根こそぎ剥ぎ取りおったな。おぬし邪神だったか」

聖帝はファルマをいじり倒す。

「手っ取り早く視界を確保したくて……脱衣させてしまったのは本意ではないです。それよりあの中にクララはいなかったので、これから大陸に探しに行きます」

「ちよつと待つてよ、単独行動はダメって言ってるでしょ」

「船員たちの安全が第一だ、どのみち二手に分かれないといけない。エレンたちはここにいてほしい」

「それであやつらはどうする。檻の周囲に火柱を拵えて火あぶりにでもしておけばよいのか？」

聖帝が口を挟み、檻の中で身動きの取れない現住民らを指して尋ねる。服を剥かれた若い女戦士らは身をかがめて恥ずかしそうに、あらわになった肢体を隠していた。

「銅とニッケル化合物の檻で電磁シールドを二重に形成しましたので、彼らは“人工の霊”を呼ぶことができません。檻から手を出しても呼べないようにしておきました。暫く脱出はできません。飛び道具も届きませんし、彼らと争うことが目的ではありません、今のうちにクララさんを奪還して帰還しましょう」

「銅の檻から霊を出せぬ、などとぬかしおるか」

聖帝は苦虫をかみつぶしたような表情をした。

「そうです、正確には銅でなくとも電磁シールドとして利用できる金属であればいい。シールドに適切な密度と、遮断できる周波数の制限はあるようですけどね。浄化神術も実は同じような原理を利用しているはずです。霊を物理的に防いでいたというエンランド王国の技術を拝借しました」

「たったそれだけのことでいいのか！」

「今のところ、実験結果からすればそうだと思いますね。あまり詳しくは特定していませんが」

「むう……」

「その前にだ。お前、どうやって金属まで創造してんだ？」

パツレがファルマを問いたたすので、ファルマは面倒くさそうに一言で要約する。

「兄上だって、水を造れるならほかのものも造れるよ」

「答えになってねーぞ。水と氷、百歩譲って湯、霧、雪、蒸気ぐらいしか出せねーぞ」

「水をもっと分解してみたら？」

「は？」

パツレは呆然とするが、ファルマはふざけてなどいなかった。

「ていうかそれを話すのは今じゃなくてもいいかな」

「いや、今だろ。物質創造なんてできたら即戦力になるだろうが」

「いやー……ちょっと勘弁して」

「お前今、話すの無駄だって思わなかったか？」

いかにも凶星だったので、ファルマは手短にコツを伝えた。

「……………というわけで、水の創造も、その他の物質の創造も、無

から有を生み出せる。それこそが“神技”なんだ。何を作ろうが原理的には同じだ。水の創造ができれば、なんでもできるんだ。“何を造りたいのか”、ちゃんと考えなよ」

「全く説明になってねー」

「もういい？ 俺はクララの搜索、兄上らはここで皆を頼む」

ファルマは話を終える前にほぼほぼ浮いていた。半分浮きかけたファルマのコートの裾をエレンが引く張る。

「ファルマ君、私がついていくって」

「気持ちありがたいけどエレンがついてきたら、クララとエレンと、場合によってはノアも持って帰らないと……素手で三人持たないといけないんだよ」

「そっか、ファルマ君の手は二本だし」

毎度のお約束のようにエレンを丸め込み、ファルマは不穏な言葉を残すと南北に横たわる大陸へと飛び立った。加勢は嬉しいが、この状況ではどう考えても足手まといにしかない。ファルマはそう判断した。

取り残されたエレンとパツレは顔を見合わせ、パツレは吐き捨てた。

「あいつ無茶苦茶だ」

「そうなのよ。ファルマ君って常識では考えられない神術の使い方してる。何考えてるのかわからなかったんだけど、説明してもらってもやっぱりさっぱりだわ」

エレンの言葉を聞いた聖帝が面白そうにニヤついていた。

「水属性は楽しそうなことになっておるではないか。余は属性違い

なのが口惜しいが」

「聖下は天下無敵の炎術使いではございませんか。確かに、水属性と土属性だけが物質を創造してんだよな」

パツレが雑に聖帝を持ち上げていると、船員たちの何名かが手を挙げて集まってきた。

「あのう、私も水属性ですけど、どういことですか？」

「私は土属性ですが、何かお手伝いができますか」

「全員で脳みそ絞って考えるんだ。あいつ、水が造れたらなんでも造れるって言いやがったんだぜ」

「あ、ありえません。ファルマ師のおっしゃることが理解できません」

「何か特殊な詠唱があるのでしょうか」

「属性を変える裏技とか？」

「守護神と交渉する方法とか」

船員たちの場当たりの推理を聞き流しながら、エレンは首をひねっていた。

「詠唱じゃないのよねえ……神術属性を決めているのは遺伝子だつてとこまでファルマ君が突き止めているから、私たちが属性に縛られているように見えるのは、後天的に遺伝子発現が変わっているからなのかしら」

「近いところまできた気がするぞ」

パツレの論理スイッチが入った。あつと思ったエレンが要点を整理する。

「でも私たち水の神術使いは、水しか作れない。本当はなんでも造

れるけど、何か先入観に縛られているってこと？」

「物質創造の能力はもともとすべての神術使いに備わっていると仮定して、水っていったいなんだ？」

「ええ？」

エレンは調子を崩した。

聖帝は属性が違ったため、聞き流して守護神殿の結界の補強にとりかかっているようだった。

「そこ？ この非常時に今そこから始める？ 水素と酸素の化合物とかそういう話からいく？ 君、化学の教科書も書いたんじゃないかな」

「そうとも。だからこそ言える。俺たちは確かに、水なら創造できるんだ！」

エレンは何を言い始めたのかと妙な顔をする。

しかしパツレは真剣そのものだった。

彼はファルマの言葉を反芻している。エレンはもうパツレを相手にしないと決めたらしく、周囲への警戒を怠らず、聖帝や守護神殿の防御を担いつつ杖を握りしめている。

「水を酸素と水素に分解か……」

パツレはブツブツ言いながら両手を開いて前に突き出す。

「さあて、論より証拠、まずは実験だ。防御しているよ、ここら一带すこぶる危険だからな」

パツレは大きく深呼吸をし、照準を海上に合わせ、杖を振りぬいた。

パツレの杖の先端からは何も出てこない。それを見届ける間もなく、

「氷の防壁」

エレンはパツレの動作とほぼ同時に詠唱を発し、守護神殿の周りを幾重もの氷の壁で囲い込んだ。嫌な予感がしたのだ。肩で息をするエレンをしり目に、パツレは自身の持っていた柄の部分に聖帝に向けて差し出した。

「聖下、この杖の先端を加熱していただきたく」

「何か企んでおるな？」

「答えをご覧にいきましょう」

「よかるう」

聖帝は片手間にパツレの杖の先端を握ると、ものの数秒とかわからず先端は赤熱した。パツレは杖の先端を軽く握り、エレンの生成した氷の防壁の上に飛び乗り、海上に向けて振りかぶる。

「パツレ・ド・メディシス様。何をなさるのでしょうか」

そばに寄ってきたマジョレーヌがおそろおそろ尋ねる。

「予定通り水を分解できたか確認しようと思ってな。全員、二十秒間耳をふさげ。聖下もお手を煩わせますがご協力を賜りたく」

パツレはその場で不審そうに首をかしげている船員らに呼び掛け、彼らが耳をふさいだことを確認した。

「エレオノール、お前も塞がないと耳がやられるぞ」

「それ、今やらないといけないこと？」

「まあ見てなつて、ちゃんと実益も兼ねてるぞ」

パツレは海上に杖を投げつけ、一拍ほどして指をはじく動作を行う。

空中で氷の神技を作動させたのだ。

エレンが叫び終わらないうちに、海上では雷が落ちたような大爆音と爆発が起こった。

彼は最初の、空振りのような一撃で海水を酸素と水素に分解し創造。

海上に爆鳴気が生成したのを確認するために、聖帝の加熱と、投擲後に放った氷の神技によって瞬間的に熱電効果を起こし、発生させた電気で爆鳴気を引火したのだ。

「すげーすげー、火炎神術使いになったみたい」

「やるではないか」

「どうということ？」

聖帝が食らいつき、エレンは恐ろしいものを相手にしているかのように尋ねる。するとパツレはふんぞり返って説明をはじめた。

「水は水素と、酸素の化合物だ。俺たちは化合物をいきなり造る能力があつたわけじゃない。元素単体を創る能力が備わっていて、無意識に化合物にしていたんだ！」

「詠唱と同時に水をイメージすればいいだけなの？」

「その詠唱がくせ者だつたつてことに気付かないとな。詠唱は便利だが、物質創造の自由度を奪う。たつたそれだけのことさ。だつたら原理を転用して、オゾンや過酸化水素にはじまり、下手すりゃ酸素化合物や水素化合物もできるつてことだ！ ファルマがやっていたのはそういうことさ」



「わかったような気もするけど、実証実験は帰ってからにしてよ」  
「まあ実験は帰ってからだ、百理ある」

彼はエレンの制止を聞き入れたが、おもちゃを与えられた子供のようにながらに笑った。彼はこの土壇場で、水の神術使いから無属性神術への一步を踏み込みはじめていた。彼の様子を頼もしげに見ていた聖帝はぽんと手を打った。

「今の音に当てられたなら、奴らも戦意を喪失した頃であろう」

彼女はファルマの拵えた檻の中で地面に伏せてしまった現地住民らに視線をくれた。

「畏れながら聖下、すでに無力化されているので接触は不要かと」  
「そなたらはやはり人を癒すことが専門の薬師だな、そういう着想はないのか」

聖帝はやれやれといわんばかりに首を振る。エレンは萎縮し、パツレは首をかしげる。

「捕虜の尋問にうってつけの状況だぞ。洗いざらい吐かせてくれよう」

「……大神官聖下が未開人の拷問などはまずいのでは……」

パツレの内心が外に漏れた。

「なあに、虐待的尋問は効果がない。怖がらせた後はたっぷり甘やかして、寝返らせるのだ」

かつて帝国を世界最大の覇権国家にまで拡大せしめた、皇帝が静

かに動き始めた。

\*

ファルマは大陸にわたり、上空から診眼を使ってクララを発見したいところだが、何度看破しても陸地には人がいないように見えるのだ。

先ほどやってのけたように木々を地表から根こそぎ剥ぎ取ることができるが、さすがに広範囲かつ無意味な生態系破壊はためらわれる。

「うーん……どこかに隠れている？」

ファルマの診眼は建物も透視する。洞窟や地下などに隠れていたとしても暴くのは造作ない。

「結界か何かを張って診眼すら欺いているのかも」

なるほどそうかと思ひ当たり、目視で確認しなければ分からないかと、彼は上陸して地上の探索を始めた。

彼が深い森の中で真つ先に探したのは獣道だ。どんなに隠れても、生活の痕跡を隠すことはできない。人も動物も、森を歩けば必ず道を作る。生活のために植物の繁茂した場所を怪我をすることなく往来するには、必ず一定のルートをとる必要があるからだ。獣道と人が踏み固めた道を区別するには、フィールドサインを見つけるのが手っ取り早い。フィールドサインというのは足跡、糞、果物や木の  
実の食痕などだ。

「小型小動物の足跡はあるが……大型動物の足跡はない。そして……」

ファルマは目を凝らし、それなりに存在感のある動物の糞を見つけた。

「……これ。この大きさ、色形からみても人糞だなあ……つまりこれは人道だな」

罨に警戒して地表から数メートルほど浮いたまま、人道を海側から山際へとたどった。

人が森林で生活するためには、周囲が安全であること、水場からそう離れていないことが条件だ。生活用水を汲みに行く場合もあるうが、何時間かかるほど遠くにはならない。先ほどの島で出会った彼らの装備からして、それなりの文明と集落を築いていそうな雰囲気はあった。ただ、あの島は彼らの本拠地ではないとファルマは推定している。あれほど小さな島では、生活に必要な淡水を得ることが困難で、雨水を飲むしかないが、島を丸裸にした後もそれらしき雨水貯留設備はなかった。

（とはいえ、船で移動した形跡もなかったよな……霊を使って移動したのかな）

人道を辿ると、驚くほど簡単に洞窟の入口が見つかった。洞窟の内部には、床一面に施された呪術的な刻印がある。

（なんかありそうだ）

よく見ると、奥には小動物の骨らしきものも見える。手近にあった小枝を折って洞穴の中へ投げ入れてみると、呪印から湧き出た黒い霧が洞窟内部に渦巻き、投げ入れた小枝が一瞬にして灰へと変わる。

「やっぱりか」

植物も動物も、本質的な構造は変わらないため、迂闊に踏み込めば灰になっていたのはファルマだったかもしれない。

「害獣除けか、侵入者の抹殺のためか。今の、帝都を襲った黒霧に似てたよな……」

トラップを看破したファルマは、呪印を覆い隠すように物質創造で銅板の橋を作り、その上へめがけ小枝を再度内部へ投げ入れると、今度はトラップが作動しない。センサーを遮ることができたようだ。安全確認もほどほどに、彼は呪印の絨毯を難なく踏破し、洞窟に踏み入ってゆく。

「……彼らは神術がない代わりに霊を呼び出したり、呪術で身を守っているのかな」

洞窟は横穴になっており、奥は広く、鍾乳洞のような構造をとっていた。

誰か人がいないかと診眼で岩盤ごと透徹すると、この先に数十名が息を潜めているのを検知した。ファルマは彼らの持つ種々の疾患が放つ蛍光に目を凝らす。が、目標は彼らではない。

「いた……！」

彼はついにクララの居場所を突き止めた。

潜伏中の現地住民とクララを区別するためには、大勢の神脈を持たない光の中から神脈を持つ人間を探せばいい。

洞壁に遮られクララの姿そのものは実体としては見えないが、フ

アルマは確かにクララの神脈を探知した。クララに怪我などはなさそうだが、神力は枯渇しているようだった。

（他の皆は感染していた住血吸虫にも感染していないのか。占いで回避したんだな。マジョレーヌの言っていた通りだ。……ここにはノアはいないみたいだな）

そうということかと合点がいったファルマは、暗闇に紛れ、まずはクララを奪還しようと決めた。そのために、洞壁ごしに原住民らが分散、移動している方向を見極め、彼らに到達するまでの通路を把握し奪還、脱出ルートを決める。ファルマのいるポイントから、クララのいる場所に到達するためには蛇行した洞穴が迷宮のように広がっており、接続している洞穴は一本しかない。

ファルマは脱出路を頭に叩き込むと、侵入を気取られないうちにと実行に移す。

彼は洞窟内を一定間隔で照らしているトーチの炎、そして手燭の灯を遠隔からの窒素生成で次々に消した。視界を失った原住民らから驚きの声と悲鳴が上がる。ファルマが洞窟の奥へ向け風のように加速を始めたとき、診眼が小さな蛍光の動きをとらえた。

（……？）

それは暗闇をもものともせず、ファルマをめがけて全力疾走をかけた。

ファルマが違和感に気づいたのはその直後のことだった。

ファルマをめがけて突進してくる一点の光、それは、岩盤を貫通し“直進”してきていたのだ。

ファルマは瞬時にして察知した。

今にも現れるものは、人間ではないと。

## 7章13話 無の根

暗闇をもともせず、その何者かは、ファルマめがけて全力疾走をかけてきた。

ファルマが違和感に気づいたのは、その直後のことだった。

診眼を通して世界を診たとき、視野は拡張現実のような世界に入る。

こちらに向かってくる何者かは、一点の光として捕捉されているが、それは岩盤を貫通しながら“直進”してきていたのだ。

診眼の光は、どこに宿っているかわからない。

（人。あるいはそれ以外か……？）

相手の特性を判別するため、ファルマはその場にトラップを展開し待ち構えた。

何者かが洞壁から飛び出した一瞬を狙い、その進路を塞ぐように鉄壁を生成する。

（これを貫通してくるようならば、結構厄介だな）

何者かは物音を聞き分けたのか岩盤内で急停止すると、ファルマの背後を取るようにして鉄壁をも貫通し、壁の中から姿を現した。ファルマは振り返らず前に跳び間合いをとり、そこでやっと振り向いてその正体を見極める。

相手は特徴的な入れ墨を褐色の肌に施した、鋭い眼光を持つ黒髪の少女だった。

その異様な雰囲気、ファルマは息をのむ。

（女の子？ 人間か？ 俺と似た性質を持つてる……？）

ファルマにそれ以上考える隙を与えないかのように、彼女は手に持った杖を握りしめて何かを叫ぶ。

「、！」

彼女の呼びかけに呼応するかのように、ファルマの背後に描かれた壁画から物音がする。

防壁とは反対側に描かれていた抽象画が次々に実体化され、彼に一斉に襲いかかった。

（なるほど……、実体で攻撃してくるか）

壁画から生成される霊は、ひとたび実体化すると肉塊となって増殖を続けて空間を埋め尽くし、瞬く間に洞穴をふさぐまでの塊を形成した。

（悪性腫瘍みたいな殖え方をするな、分化度の低いのは腫瘍も霊も厄介そうだ）

ファルマを観察しつつも少女の指は動き続けており、一気呵成に実体化した霊をけしかける。

だが、有象無象の霊がしかけてくる攻撃はファルマには殆どダメージを与えないし、霊が実体化したとしても、それは人間や動物に襲われているのとはさほど変わらない。

ファルマは物理攻撃を受け付けないため、それらの攻撃も無効化される。

物体には物体を、霊体には霊体をぶつけてこそ意味がある。



ファルマは彼女のペースに飲まれそうになっていたが、次第に落ち着きを取り戻し、自らに教え込むように反芻する。

（実体化したとなれば……物理法則で対応できる。珪素を消去！）

ファルマは頭を切り替えて右手を真横に一振りすると、壁から実体化した霊は構造の核となる珪素を抜かれて形状を保てず、少女の制御を逃れ瓦解した。

彼女は、淡い光を纏いながら素手で神術を繰り出すファルマの両手をじっと観察していた。

（この子……俺の能力を分析しようとしているのか）

そのうち、彼女の視線はファルマの肩にくぎづけになった。

（薬神紋に気付いたのか？ 嫌な予感がするぞ）

診眼と似た能力を持っているのかもしれない。

そんな直感を得たファルマは、あまり彼女に思考時間を与えるべきでないと感じた。

彼が次の一手を決めかねていたその時、彼女の姿が地面に溶けるように掻き消えた。

次の瞬間、ファルマのすぐ背後の地面から現れた少女の杖がファルマの心臓のあたりをきれいに貫通していた。彼女の明確な殺意を感じたファルマは、彼女に対し一段と警戒を引き上げた。

（殺意があるか）

ファルマは貫通した彼女の杖を掴むと、体から引き抜くようにして強奪する。

ファルマでなければ致命傷になり勝負は決まっていたはずだ。しかし、そうはならなかった。

少女の瞳に恐れの色が浮かんだかに見えた。

（こっちは物理攻撃が効かず、霊も蹴散らす人外だ。そんな相手には遭遇したことがないに違いないな、分析される前に離脱する）

暗闇の中で薬神杖に神力を通じたファルマの体は、淡い発光を伴う。

「この杖はもううからな」

神術使いにとっての杖は、神術そのものにほかならない。

少女が戦闘中にあつても握りしめていた杖は、神術使いのそれと同じく彼女の異質な力の増幅や発動を助けるものとみるべきだろう。杖を取り上げられた彼女はファルマへの攻撃をやめ、ふらりと体勢を崩し膝から頽れた。

それと同時に、彼女の下にそれまでなかった彼女の濃い影が落ちた。

（俺と同じだ。杖を手にした時だけ半実体化していたのか……？）

彼女は、ふらついたように見せかけ地面についた右手を即座に地面に張り付ける。

なおも霊を召喚しようとしているようだ。

（まだやるか）

ファルマはそれを見逃さず、一連の動作で物質創造と消去を同時にかけながら地上に鉄板を敷き、それ以上の召喚を妨げる。

ファルマは放心し宙を漂う彼女の左手の中指をとると、彼女の肘のほうへゆっくりと曲げていった。たったそれだけではあるが、彼女はいつも簡単に無力化された。

些細な動作であつたため、彼女が一番驚いているようでもあつた。

「こんなに小さな動きで、力をかけなくても人を無力化することができるんだよ」

ファルマは落ち着いた声のトーンで彼女に話しかけた。

十分に痛みを伴っているはずなので、そこそこにしか力を加えていない。

憎悪を向けさせることが目的ではないにしろ、和解できると思つていない。

「ちょっと落ち着かないかもしれないけど、話を聞いてほしい」

しかし彼女は反抗心を失つておらず、なにやら罵倒らしき言葉をファルマに浴びせ続けた。

「手短にするよ。この子を知ってる？」

ファルマは胸ポケットに挿した手帳を取りだし、中に挟んでいた写真を引っ張り出して鉄板の上に置く。

出港の際に船員たちを撮った集合写真で、そこにはクララが映っている。

「見える？ 俺はこの子を探していて、ここにいることを知っている」

彼女はクララの写真に注意を向け、吟味するように少し顔を近づけた。

「面識があるって顔をしているね」

ファルマは彼女の顔を覗き込み、断定する。彼女はファルマの視線を厭うように顔をそらす。

「この子を連れ戻すよ、彼女は非戦闘員で、攫われる理由も見当たらない。いいね？」

ファルマが問いかけた直後、再び点火したトーチを携えた大勢の人間が、洞穴の通路を駆けてこちらに一気呵成に押し寄せてくる。

彼らの目に飛び込んできたのは、彼女と同じくらいの背格好の少女が少女を制圧する姿であつたはずだが、その方法が地味で控え目だつたために、彼らはファルマが何をしているのか判断がつかないようだつた。

彼らは武器を構えながら、じつと様子をうかがっている。

「来るなよ。正直、誰とも戦いたくない。そこにいてくれ！」

ファルマは物質創造で洞穴内部に氷壁を展開し、彼らとの間に隔壁を作つた。

診眼ごしにクララの居場所を見定めながら少女の拘束を解くと、少女はファルマを羽交い絞めにしようと掴みかかった。

冷静な動作で、ファルマは彼女の腕をすりぬける。

それと同時に彼女はバランスを崩し、その場に倒れ伏すと、その場からびくりとも動かなかつた。

ファルマはその場に全員を残し、濃霧に溶け込むように岩の中へ

とかき消えた。

ファルマはクララの居場所を特定し、先ほどの少女がしたのと同様に洞穴の壁面を貫通しながら疾走する。

（いいね。最初からこうすればよかった、妙案だ）

最短距離でクララのもとにたどり着くと、彼女が押し込められていたのは洞穴をくりぬいた鉄格子をはめ込んだ牢獄のような場所だった。

ご丁寧に、入口には家具類などでバリケードが張り巡らされている。ファルマはクララのいる牢の奥から現れたが、牢の外の様子はここからではよく見えない。

（おあつらえむきだな。バリケードがあれば、見張りからの目隠しになる。あとは、物音さえさせなければ……）

唐突に登場してクララに悲鳴を上げられると困ると考えたファルマは、壁の中からその姿を現すと同時に、背後から真っ先にクララの口を塞ぐ。

クララは悲鳴と息を飲み込むと、軽くパニックになったのか、凄まじい勢いで指を噛んでくる。

いくら噛もうが、ファルマには効果がなく、痛くもかゆくもない。その反撃の思い切りのよさに、ファルマは多少感心した。

（すごい噛むじゃん！ これは完全に指を噛みちぎるぐらいの勢いだな、頼もしいよ）

クララはなおも暴れるが、ファルマは押さえ込んで小声で告げる。

「クララさん、声を出さないで。こんなところから驚かせてごめんなさい、ファルマです」

背後から現れた怪異がファルマだと気づいたらしいクララは、多少の混乱を見せる。

「えっ、本物ですか？ 絵で作った偽物とかじゃ……」

「本物だよ。ええと、どうやったら信じてもらえるかな。あ、そうだ。船酔いの薬は効いた？」

ファルマしか知りえない情報を聞いて、クララは半信半疑ながらも信じてくれたようだ。

「あの薬、よく効きましたよう……」

じわりと涙をにじませつつ答えはしたものの、彼女の的にはまだ違和感があるらしく首を傾げる。

「そう言われると、薬師様かも……？ で、でもなあ……怪しいなあ……」

クララは言葉に詰まる。

「そ、それに今、どこから来たのでしょうか。背後は岩で、前は格子とバリケードでふさがってるんですよ？」

彼女は不審そうにもう一段階、斜めに首をかしげていた。

「ええと、その牢の隙間から入ったんだ」

「隙間、どこにあります？ 私、通れませんでしたよ？ 向かって

正面から来たってことですか？」

「いや、ほら、細めの体形だから通ったよ」

ファルマはいらぬことを言ってしまった。

「は？ 私が太いみたいじゃないですか、私の方が細いですー」

どう弁解してよいか困るファルマは、愛想笑いをしておいた。クララははっと我にかえる。

「本当に薬師様だとしたら、私の占いが当たってしまいましたね。この大陸で、あなたにもう一度お会いできるような気がしていました」

「まあ、的中だったね。君の予言の精度は凄まじいものがあるよ」

ファルマはそう言いながら、複雑な表情を向ける。

「こんな遠くにまで来てくださって……胸がいつぱいです。皆さんは無事でしたか？ 私だけここに連れてこられて、ほかの人はどうなったか……」

クララは彼らの安否を尋ねて緊張したのか、ぎゅっと目を閉じた。

「さっき救助したところだよ、みんな無事のはずだ」

正確にはノアが見つかっていないが、とりあえずクララには心配をかけるのでまだ伝えない。

クララは、ほっとしたように大きな息をついた。

「分かっていたはずなのにこうなってしまって、申し訳なさ感謝

の気持ちでいっぱいです。最初から、もっと強く、取り返しがつかないことになる前に出航を止めるべきでした。色々と対策をしていたいたはずなのに、危機感が足りなくて」

クララがしみじみと、感謝とともに複雑な心境を吐露する。

「危機感と先の見通しが足りなかったのは俺も同じだよ」

ファルマは彼女の思いを受け止める。

「俺は、運命が定まっているとは思わない。どんな未来も、無数の選択肢の中から選びとっていくものだ。森羅万象の相互作用があつて、今回はこの状況になった。ましてや君が謝ることなんて何もない」

クララがうつむいてしまったので、ファルマはあたりを見渡す。

（ええと、このあたりは石灰洞でできているのかな。じゃあ、炭酸カルシウムを消去）

ファルマは天井に向かって右手をかざすと、クララがうつむいている間に石灰洞の主な成分をいくつか消して大きな風穴を開けようとした。

しかし、集中しようとしたところで、クララがファルマを引き留める。

「あの、薬師様。ここに来る前にメレネーという少女に会いましたか？ 黒い長髪の、肩に入れ墨を入れた女の子なんですけど」

「会ったかもしれないけど、暗くて容姿まではよくわからなかったな。名前もわからないし」



洞穴に踏み込んでくる前になら大勢の男女とまみえたが、一人一人の容姿にそこまで注意をしていなかった。

「じゃあ、その中でもめっちゃくちゃ強い女の子です。ぶつちぎりです」

「さっき、気の強そうな女の子には会ったな。とりあえず、その話はあとにして先に逃げよう。足止めはしておいたけど、ここに戻ってこられたら大変だ」

ファルマは少しの時間も惜しい。

「……それが、私は逃げられなくて」

「どうして？」

救助を断られて、ファルマは肩透かしをくらった気になる。

「ええと、その子はとりわけ巧みに霊を操ることができて、霊の力を借りて絵を実物にして攻撃してきます。すみません、うまく説明できなくて……」

クララは説明の語彙が追いつかないようで、あたふたしている。

「ああ！ わかった。たった今、その子を撒いてきたところだよ」

「その子は無事ですか」

クララが必死の形相で迫ってくるので、ファルマは何かやらかしたかと冷や汗をかく。

「無事だと思うけど、どういう意味？」

何故、彼女を心配するのだろう。ファルマは意図が呑み込めない。

「私、その子に強烈な呪いをかけられて。その子……ええと、メレネーって名前なんですけど、その子の身に何かあれば、たぶん私も連帯責任的なやつで死んじゃうんだと思います。なので、仮に自由の身となっても捕虜のままというか……逃げられないというか」

クララはもじもじと指先をくつつけたり離したりしている。

ドジを踏んだと恥じているのだろう。

ファルマはクララの体に視線を走らせると、襟足のあたりに呪印のようなものがある。

（これ、ジュリアナさんがつけられていたやつに似てるな）

ファルマは、かつて枢機神官であったジュリアナが大神殿からつけられていた聖呪紋を思い起こす。

大神殿での文献閲覧の甲斐もあり、ファルマも神秘現象や呪いなどの知識の蓄積ができてきた。

「呪われたって、その首のやつ？　そういうことなら、物騒だからすぐ対策をとっておこう。手をだして」

ファルマは薬神杖を小脇に挟むと、空いた片手でクララの手に小瓶から水薬をたらした。

先ほど創造したばかりの神薬“爾今の神薬”の残りだ。

この神薬に当たれば何があっても一日間だけ不死化するので、クララに危害を及ぼすことができる人間はいなくなった。

「これで、その呪いはとりあえず保留にできたはず」

「今のは、解呪薬みたいなものですか？」

クララは水薬をハンドジェルのようによく手に揉みこみながら尋ねる。

「そんな感じかな」

「よかったです。奴隷になれとか、叛けば死をとかわれてましたから……」

「ええ……そんなこと言ってたんだ……」

言葉が分からないので、そんなキャラだとは気づかなかった。そこであれ、とファルマは引っかけかりを覚えた。

「クララさんとメレネーって子は、言葉が通じるの？ 実はあの子、帝国語が喋れるとか？」

かくかくしかじかで、とクララは手短かに、誘拐された後の経緯をファルマに伝えた。

「なるほど。メレネーはクララさんの予知能力に勘づいて、クララさんだけ捕まってしまったんだね。それで、メレネーという子とは霊を介して会話ができていたんだね？」

「そうなんです」

思い出せば、彼女は地中から、あるいは洞壁から執拗に霊を呼び出そうとしていた。

（あれは攻撃のためではなくて、霊を通じての会話を試みようとしていたんだろうか？）

その機会を反撃のしるしと見たファルマは、悉く、とにかく徹底的に潰してしまっていた。

（あー、悪いことをしたな……初手で異文化コミュニケーション失敗だ）

ファルマは胸が痛む。

「薬師様。その解呪薬、私を除く探検隊の全員のぶんもあります？皆さん、メレネーのいうピチカ力湖っていう湖に入ってしまったんですけど、そのことで死の呪いがかかったっていうんですよー！」

「その話なら、さっき探検隊の人たちから聞いているよ」

「どうでしょう！皆さんに生命の危険が迫っていますっ」

クララは思い出したかのように慌て始めた。

「それなら、もう治療薬の投薬を開始しているから問題ないよ」

「薬師様は予言者ですか！そんな、呪われし湖の呪いに効く薬をピンポイントで持ってきてるもんなんですか！ちよつと神がかりすぎじゃないですか！」

「いや、俺の仕事じゃなくて、異様に旅の準備がいい子のお手柄とつか……」

ファルマはエレンの得意顔を思い出しながら告げる。

「よかった……一安心です」

「メレネーって子は、何の恨みがあつて探検隊やクララさんたちをそんな目に遭わせるのかな。見知らぬ人々が上陸してきたのが気に入らないのかな？何か言っていなかった？」

彼らからすれば、探検隊は海から押しかけてきた、言語の通じない、目的も知れない侵略者に見えないこともないか、とファルマも襲撃には一定の理解を示してはいる。

「最初に上陸したとき、安全確保のために神官様や神術使いたちが、陸地のいたるところに浄化神術をかけてしまったんです」

「え？ でも悪霊が消えたとして、何か問題ある？ 彼らも安全に暮らせるじゃないか。そこをちゃんと説明できれば、和解もありえるんじゃないか」

むしろ善行ではないかと、とファルマは疑問だ。

「それが……私たちの大陸とは違って、ここには霊を大切にする文化があつて、浄化神術でいなくなったのは一族が大切に祀っている先祖たちの霊だったみたいなんです、その大切な先祖様たちの霊が姿を見せなくなってしまって、それでメレネーをはじめこの大陸の皆さんは怒りが収まらないみたいなんです」

「え」

ファルマは頭を抱えそうになる。

彼にも悪霊とその他の区別はつかないが、メレネー達からすれば、探検隊の存在は百害あつて一利なしといったところなのだろう。

（それに、俺のせいでもあるのか……？）

ファルマの周囲には聖域が発生しているため、大陸に下見に訪れたり、救助に駆け付けたりしたことでも、意図せず除霊に一役買っ  
てしまっていただろう。

「ひとまず、ここを脱出しよう。これでは二人で投獄されてると変わらない。それから今後の方針を考えよう」

ファルマは再び一帯の岩盤ごと炭酸カルシウムを消去して風穴を開けようと、右手をかざした。

だが、いつもの別世界から薬神紋を通じて神力が流れ込んでくる感覚がない。

ファルマははっとして右肩に触れた。

ない。

青白く輝き、脈動しながらファルマに薬神の恩恵を授けていた、薬神紋がないのだ。

ファルマは全身が硬直しそうになる。

反射的に左腕の薬神紋を探るが、こちらに異常はない。

ファルマは背筋が凍るような思いで念じる。

(NaClを創造)

ファルマの左手には、予期した通り白い粉末が現れる。

それが塩化ナトリウムであってもなくとも、物質創造はまだ使えるという証拠だ。

普段ならば物質消去を使って合成した物質の同定を可能にしていたのだが、これでは創造したものに間違いがないのか確認する術が途絶えてしまった。

仕方なく、舐めてみることで先程創造したものの物性を部分的に確認すると、確かに塩分を感知する。

(合成したものを同定する方法は、古来より確立されてきた化学的分析手法を使えば、ほとんどは可能だ)

だが、即座に、この場で、というと限度がある。実戦には使えない。

（診眼は？）

次に診眼を発動すると、視覚が研ぎ澄まされてクララの体が透けて見える。

診眼の発動の感覚や視野に特に変わった点はない。

右手の拡大視もまだ生きている。

（物質創造と診眼、拡大鏡には問題ない。つまり物質消去だけを奪われた！）

奪われたのなら奪い返すまでだが、薬神紋を取り戻したとしても物質消去の能力は回復しないかもしれない。

それに、右上腕の薬神紋を盗られたのではなく消されたのであれば、薬神紋は永久に失われる。

ファルマが気付いたのは、それだけではない。状況は悪化の一途をたどる。

（神力が激減してる……！）

体に充填されていた神力が目減りしている感覚を自覚したファルマは、この世界に来て初めて自身の神力を満たす器の存在に気付かされた。

その貯蔵量を神力計で数値化することはできないだろうが、確かに底はあり、ファルマは自身の神力が有限だったことを認識する。

（無限だと思っていた俺の神力は、薬神紋を二つ宿したことで初め

て担保されていたんだな……）」

薬神紋は残り一つだが、神殿から収集していた情報によれば、歴代の守護神は聖紋を一つだけ持つのが“正常”な状態とされている。そう考えれば、薬神はもともと物質創造もしくは物質消去のみを擁する守護神だったと考えられる。

本来の状態に戻っただけだとしても、やはり物質消去の喪失は痛い。

「薬師様、顔色がすぐれませんが……お腹痛いです？」

クララが不安そうな顔を向ける。心なしか、胃も痛い。

「少し、まずいことになったかも」

警戒すべきことは、他にもある。

メレネーはファルマに残されたもう一つの薬神紋も奪う、もしくは消すことができる可能性があるということだ。

いつ、どのタイミングで？

メレネーに右の薬神紋を奪われたのか回想するが、これというタイミングを思い出せない。

むやみに接触してしまったのは迂闊だった。

（もしかして、クララさんの言う“絵を具現化する能力”で薬神紋を剥がした？）

どんな原理で、という疑問が付いて回るが、一旦それは横に置く。

（あるいは、俺が聖下の呪いを剥がしたのと類似の原理で、自らに



薬神紋を憑依させたとか？ いや、彼女は神力を持っていなかったし、それはありえない……神脈はなかったけど、呪脈のようなものがあつたなら……？）

ファルマの思考はもつれはじめた。

（ひとまず薬神紋の奪還は諦めて、メレネーから距離を取るべきだ。物質創造まで封じられたら、完全に詰む！）

最悪、次々に能力を引きはがされ、大陸から戻れず嬲り殺されるかもしれない。

ファルマがフリーズしていたからか、クララが恐る恐る尋ねる。

「まずいこと、というのは？」

「メレネーに神術の一部を封じられたみたいだ」

「え、神脈の剥奪とかですか？」

（ああ、そういう手もあるか）

ファルマは自分の神脈をみたことがない。

エレンにもファルマの神脈は診えなかった。

しかし、メレネーにはファルマの神脈が見えていて、それを閉鎖して自身にスイッチさせた、そんな仮説も思いつく。

（あの一瞬に？）

ファルマは彼女の実力に慄く。クララはそんなファルマを心配そうに見守りながら重い口を開く。

「どうやって取られたにしても……少なくとも、それはこの旅では

戻ってこないような気がします」

旅神の加護を持つクララは、旅の期間中の予言を外さない。  
ファルマはマジかよ、という思いでクララの予言を受け入れた。  
薬神紋の奪還は、必ず失敗に終わるとの天啓が出た。  
であれば、いったん完全に諦める。

「わかった。クララさんの呪いは薬でしばらくは抑えられるから、  
メレネーを探すのはやめよう。即時に撤退だ」

撤退を決断したはいいが、物質消去なしでクララを連れて洞穴から脱出するのは至難の業だ。

二人とも牢に閉じ込められた状況になっている。  
物質創造にひきかえ、物質消去は破壊的かつ絶対的な能力だ。  
特に人体に対して行使すれば、ほぼ無敵といってもよい。

（落ち着け、物質消去を取られても彼女には使えないはずだ）

ファルマは冷静さを取り戻す。

彼女が物質消去を手にするには、二つの制限がある。

一つは神力がないこと。

彼女は神脈を持ちえず神術を使うことができないはずだ。

もう一つは、物質消去に必要な物質名の特定ができないこと。

物質消去の能力は、物質創造と比較すると制御が曖昧で、物質創造では必須である分子構造の想起は必要ない。

それでも、明瞭に物体の性質を理解していなければ発動しない能力なのだ。

（彼女に物質消去は使えないはずだ、できるとすればギリで水ぐらいか？）

そう考えていると、低くくぐもった思念がファルマの脳髓を揺さぶる。

『囚人が二人になったじゃないか？』

目の前のバリケードが一つずつ取り払われ、土埃が舞う。

その向こう　松明の光が照らす先に現れたのは、まさに今ファルマが全力で接触を避けるべきと考えていた少女、メレネーだった。原住民らを引き連れ、傍らには霊を従えていたメレネーは、クララに恨みのこもった鋭い眼差しを向ける。

『叛けば死あるのみ。しかと伝えたはずだ』

メレネーの言葉を、彼女の従属させている霊がファルマにも思念で伝える。

「ひいつ……無理ですうつ」

クララは解呪されているとはいえ、メレネーの威圧感に萎縮したのか、動けなくなっている。

ファルマはその間に入り、クララを庇う。

『まだ賤が足りないようだ。屈服するまで体で分かせてやらねばな』

メレネーは憎悪のこもった口調でファルマとクララに宣った。

「彼女からこれまでの経緯を聞いた。さきほどの非礼はお詫びする。もし言葉が通じるなら、話し合いができないか。あなたがたの大切な祖先の霊を私たちが追い払ってしまったと聞いた。それを償いたい」

ファルマは交渉を試みる。

霊を呼び込む性質を持つ呪器である疫神樹をうまく使えば、また祖先の霊を呼び寄せることができるかもしれないと考えたのだ。

『話しあいなど無用だ、時間稼ぎに興味はない』

メレネーは霊を通してファルマの提案を一蹴する。

『なにやら焦りが見えるが、探していたものはこれか？』

彼女は右手をかざし、握りこんでいた掌をほどいた。

そこから零れたのは、眩い閃光を放つ、小さな赤い雷のように見えた。

彼女の掌から少し離れた距離で、彼女の掌に吸い寄せられ激しく放電している。

その禍々しい赤光に照らされながら、メレネーはファルマらを睨めつける。

（あれは、奪われて変化した薬神紋なのか……？）

ファルマは地球において、一度だけそれに似たものをニュースで見たことがある。

それはレッドスプライトと呼ばれるもので、雷雲の放電現象に付随してさらに上層で起こる発光現象だ。

圧倒されつつも、ファルマが赤い雷に見入っている様子を察知したのか、クララが怖気づいたような顔をする。

ファルマはクララの恐怖に気付いて、クララを後ろに下がらせた。

人間の恐怖の感情は、悪霊を強靱にしてしまう。

メレネーが霊を使役するならば、敵に塩を送るようなものだ。

「クララさん少し下がって、何も心配せずそこで動かないで」  
「い、いえ、私も戦います」

クララが息を飲む。

気持ち嬉しいのだが、わずかでも意識をほかにとられたくない。頼むからそこから動かないでくれと願いつつ、ファルマは改めてメレネーに呼びかけた。

「それを返してもらおう。君が持っていてても使えないどころか、害のほうが大きい」

『それ、とは？ “無の根”のことか？』

メレネーはこれ見よがしに赤い雷をファルマに見せる。

（……なるほど。メレネーはこれを知っているんだな。名前がついているということは、この大陸には聖紋にまつわる別の伝承が存在するということか）

ファルマは想像を巡らせつつ、彼女の言葉に応じる。

「名前は知らないけど、それだ」

『至高の呪術師に宿りし無の根、ルタレカは、祖霊に叛くあらゆる

ものを消し去る。これは、われらの生存に必須のものだ」  
「その無の根というものを、どういう用途に使う？」

よりにもよって物質消去の能力が生存に必須、というのはファルマの理解を超えている。

物質創造はまだ理解できる。

物質創造は、貴金属などに狙いを絞れば莫大な富をもたらす能力だ。

でも、水のみに限定した物質消去の使い道がわからない。  
洪水を防いだり、治水に使うのだろうか、という想像がせいぜいだ。

『話してなどやるものか。無の根が失われてより、吾らが一族は二百年もの間、洞穴を褥とし、抑圧を強いられてきた。もう、侵略者の手には戻さんよ』

それを聞いたクララが、ファルマに小声で忠告する。

「薬師様。私が捕らえられている間にこの住民から聞き出したんですけど、どうやらこの先住民の一部は、呪力という神力とは異なる超常の力を持っていて、呪術を使えるらしいのです。呪力のある者はいれ墨をしています」

「ありがとう、その情報は助かるよ」

クララの土壇場での異文化コミュニケーション能力に驚きながらも、ファルマは素直に情報を受け取る。

よく見れば、メレネーを含め後ろに控えている者たちは殆ど入れ墨が入っている。彼女が従えてきた三人も、呪術師のようだ。

（彼らはどうやって呪力を得ている？ やっぱり、こちらの神脈に

対応する呪脈のようなものがあるのか)

ファルマは薬神杖を構え、改めて彼らに対して診眼を使う。

メレネーの心臓のあたりに、青く見える病変がある。

心臓病が何かをわずらっているのだろう。

だが、呪脈に相当しそうなものは、何も見えない。

左腕の薬神紋と、そこに宿る物質創造の能力をも取られることを懸念して、薬神杖の晶石に少し神力を逃しておく。備蓄された神力は、バッテリーのような役割を果たし、神力が枯渇しても神術を使える。

急に体内の神力がなくなっただとしても、最低限、神術陣などで応戦することはできる。

ファルマは手持ちの能力を精査し、これから起こる衝撃に備えた。

7章13話 無の根（後書き）

次回更新日 7月15日



## 7章14話 透明人間

聖帝エリザベスより密かに与えられた密命に従い、ギャバン大陸の洞穴の闇に紛れて暗躍を開始した少年がいる。

彼はサン・フルーヴ帝国準騎士にしてル・ノートル侯爵家の次男坊、ノア・ル・ノートル。

彼が聖帝より承った密命とは、命にかえてもクララ・クルーエの保護・護衛をし、帝国に連れて戻ることであった。

クララがメレネーらに攫われた直後、ノアはサン・フルーヴ帝国船団と離れ、クララを追跡していた。

彼は原住民に紛れて、彼らが軟禁された島から彼らの舟に乗り、その場を離れていたのだ。

視力、聴力、五感六感に長けた、警戒心の強い現地住民たち。

彼らの中に潜んでいても、誰もノアを敵と認識できる者はなかった。

メレネーも、メレネーの使役する霊ですらも、その存在を見逃した。

ファルマとメレネーとの戦闘が始まった頃合いに、ノアは混乱に乗じて洞穴の反対側から敵陣地へと潜入、もぬけの殻となった敵地へ易々と侵入した。

（こんな時、俺って便利な体質だよなあ……）

ノアが聖帝の小姓として抜擢されていたのには理由がある。

それは、ノアが有力貴族の次男であり、神力量が平均より多いという理由だけではない。

彼は、随意に気配を消すことのできる特異体質を持っていたからだ。

存在を遮蔽すること、それこそが彼の持つ生まれながらのギフトであつたのかもしれない。

ノアは常に誰かに話しかけていなければ存在を察知されず、彼の存在は認識の埒外におかれる。

足音などは聞こえているはずなのだが、声を出さない限り、なぜか誰もその存在を認識できないのだ。

ノアのこの性質を知るのは、サン・フルーヴ宮廷内ではエリザベスただ一人である。

幼少期より、大多数の人間から無視をされる人生だった。

親族にすら「急に現れる」「急に消える」「声だけ聞こえる」と気味悪がられ。

兄弟からは「悪霊なのでは」と疎まれ続けた。

母親にはネグレクトを、父親はノアの姿がなくなとも気にも留めなかった。

空腹に耐えかね、誰かに認識してもらいたい一心で常に喋っているか、大きな足音を立てて目標に近づくと、やっと存在に気づいてもらえる。

それが彼の日常だ。

誰も彼の存在に目をとめない、気にもかけない。

そんな状態で幼少期を過ごしたノアは、自分の価値はおろか、生きる意味など、ないものと思っていた。

（なにせ、生まれながらの透明人間だからな）

誰かに構ってもらいたいがために少しお喋りになってしまったのも、その反動である。

半ば侯爵家を放逐されるように宮仕えに出されたが、聖帝だけがノアの能力と利用価値にいちはやく気付いた。

彼の特性は諜報や暗殺などにうってつけで、廷内の不穏分子のいち早い発見などが可能であった。

そして実際、裏切り者に正義の鉄槌を下し、悪を暴き出してきた。

彼は軽薄そうに見えながら、口は堅く、思考はしなやかで、時に攪乱や陽動も行う。

聖帝の与える任務は彼にとって愉悦に満ち、孤独を癒すようだった。

ノアは聖帝の耳目となり、皇子の世話をやき、彼女の多くの秘密を共有し、彼女の弱みすらも握った。

彼女のために尽くすこと、彼女に取り立てられること。

それはノアにとって唯一他者に認められる方法であり、そして他者に自分を認めさせる方法であり、自分を蔑ろにしてきた家族へのあてこすりでもあった。

早々に出世し領地を得て、面白おかしく気ままな人生を送りたい。そんな人生の目標を掲げてその日暮らしをしているが、それもきつと孤独を深めるだけになるだろう。

（俺には何もない……からっぽだ）

だから、宮廷に出仕している限り、聖帝の命令には絶対的に服従しようと考えていた。

彼女がクララを連れて帰れと言ったら、船員全員を殺し彼女一人を引き摺ってでも戻る。

彼はそんな覚悟のもとにあった。

ノアはこの大陸に来てより、船員らに内緒で備えていたことがある。

それは、予備の神杖や銃火器、神術陣を茂みの中や岩場の陰に仕込むことだった。

というのも、船外活動の時間が多いぶん、大荷物を常に背負って移動するわけにはいかず、武器や食料などを用意している主な拠点は目立ちすぎてしまう。

彼はそれを懸念していたのだ。

さらに、ジャン提督が船上を主な拠点としているのも不安の種だった。

洋上にある船が陸地から襲撃されることはないという思い込みと、神術使いら腕を過信しているのだろうが、船外活動を行なっている際に船に奇襲をかけられては洋上の利はなく、土地鑑のある敵に優勢をとられて終わりだ。

（まさか全員が武器を奪われるなんて、ざまあねえ……。特に杖のない神術使いは、体術では平民にも劣るんだから）

彼は現地住民に没収されたはずの神杖を携えて、アリの巣のように張り巡らされた洞穴内をまるで現地住民が散歩をするかのように探索する。

ノアの隠形の能力は、敵地潜入の場面でこそ真価を発揮する。

（お、ここか）

ノアは神術使いらの杖を保管している倉庫を探しあてると、扉を神術で破壊して杖を奪還した。

（全員分は持てねえ。誰の杖を持っていくなねえ……）

少し悩んだノアは、クララの杖、そして高価な順に二振り持つていくことにした。

神官が聖別詠唱をかければ、木切れだって杖になる。

神術使いの杖を全部が全部持つていく必要はない。必要最小限でいいのだと彼は自分に言い聞かせる。

すべて予測通りとはいかなかった。

ノアは人的な敵襲に備えていたとはいえ、防げなかったこともある。

それは、住血吸虫の感染だった。

不用意にもピチカカ湖に足を踏み入れてしまったことで、発熱と倦怠感の蓄積が体力をそいでゆく。

それでも消耗した体に鞭をうちひた進む。

彼は怯むことなく、人の声のするほうへと歩みを進めた。

原住民が通路をすれ違ってゆくが、やはりノアに気付くものはない。

いくつもの分岐点を進み、ノアは洞穴の中の彼らの居住区を発見した。

居住区には、非戦闘員と思しき若い女や子供たちが屯していた。

彼は居住区に漂う独特のにおいに気付く。

何かを燃やしているようだ。

ノアは杖を構えると、炎に風を孕ませてその場の何もかも破壊の限りを尽くそうと思い定めた。

（こいつら全員、帝国の敵となる。生かしてはおけない、奇襲をかけるなら今だ）

ノアの杖の先端に、神術の光が宿る。

だが、ノアの殺気を察知したのだろうか、どこからともなく赤子の泣き声が聞こえてきた。

数秒の空白のち、ノアはゆっくりと杖をおろす。

（ちっ、気に入らねえ。見なかったことにする）

ノアに気の迷いが生じたとき、彼は洞穴の奥のほうで大きな物音を聞いた。

激しい神術戦闘が繰り広げられている、そんな気配がする。

（誰かが水属性の神術を使った……？）

つまり、神術を使える仲間がいるということだ。

ノアは走り出した。

物質創造と物質消去。

今、一対の能力であったそれが分かれた、激突しようとしている。メレネーはファルマに、まっすぐ赤い雷、無の根を向けている。ファルマは確固たる攻撃の意図を読み取った。

（唯一、物質消去を使って撃つてこれるとすれば！）

ファルマはこれまでの神術戦闘経験や対悪霊戦闘時の手札を全て

捨て、メレネーの衝撃波に対して即応的に物質創造で氷壁を作る。  
その意図は緩衝、防御、そして相殺を兼ねている。  
彼に許された選択肢は、様子見のみ。

「レイタカ・マ・パエカ」

メレネーが肉声でつぶやく。

右手を構え、詠唱は添え物であるかといつかのような囁き声とともに、メレネーは慄くほどの衝撃波を繰り出した。

メレネーの気をほんの少し損ねただけで、島内全員の命の保証はないだろう。

ファルマが張り巡らせたはずの氷壁は、衝撃波を受けると幻のように消滅した。

洞窟の天井から、パラパラと乾燥した砂が落ちてくる。ファルマはその流砂に着目して周りを見ると、先ほどまで湿っていた地面が完全に乾いている。

（やはり！ 水の消去を使えたか！）

初手で、メレネーの攻撃内容を把握する。

「なっ、何が起こったんですか！？」

クララは状況が把握できずに、首をすくめている。

（もしノーガードだったら、全身の水を奪われて即死だったな）

ファルマの物質創造と“爾今の神薬”の効果が拮抗し、なんとか即死は免れた。

（水の消去か……。一点突破であっても、これほど怖いことはないぞ）

ファルマは即座に危険性を認識する。

（水は生命活動の源だからな）

何しろ、相手はファルマ達を殺す気できているのだ。  
水の消去とは、脱水、そして電解質異常を人体に引き起こすこと、対人戦闘における威力は計り知れない。

ファルマが自身に固く禁じて、その威力は知りつつも一度たりとも行使しなかった禁忌の能力でもあり、本来は必殺の能力なのだ。  
メレネーは右手をかざし、ファルマに狙いを定める。  
先程と同じ詠唱だが、同じ技を使ってくるとは限らない。

そのとき、ファルマの視線は一瞬、メレネーの背後をとらえた。  
洞窟の奥から、何者かが戦闘中の空気をまったく意に介することもなく、一步一步近づいてきていた。

足音がしているのにメレネーは気にする素振りもなく、彼女の後ろに控える原住民も誰も気づいていないようだ。

（あれは……ノアか！？）

杖を携えて近づいてきたのは、行方が分からなくなっていたノアだった。

ファルマは息を詰める。

今、メレネーが気付いて振り向いたら、ノアは即死する。

ノアはファルマとゆるく視線が合うと、口パクでファルマに「氷



の壁」と神技名を告げた。

（ノアは風属性だ、俺にそれを使えと言ったのか？）

ノアの思考が読めないままに、ファルマは身じろぎ一つせず、氷壁を展開してメレネーの意識を向けさせる。

先ほどと同じメレネーの詠唱に対し、同じ防御だ。

あえて、メレネーに対し無能を装う。

氷壁の裏で、ファルマは爾今の神薬を凍らせ、霜のようにしてノアへと注ぎかける。

これで、ノアを束の間の不死の守りの中へと引き入れた。

ファルマの対処方法を読み切り、押し勝つ自信があるのか、メレネーの口角が上がった。

直後、鋭い詠唱が洞窟内に響き渡った。

ファルマでもなく、メレネーでもなく、ノアが発動詠唱を発出した。

『聖竜巻！』

たった今、そこに忽然とノアが存在が現れたかのように、

メレネーや彼女が引き連れていた原住民が一斉に背後を振り向く。

彼らの狼狽を置き去りにし、ノアの神技は完成し、すでに発動していた。

聖竜巻の発する虹色の閃光とともに視界を奪われ、ノアの放った爆風によって吹き飛ばされたメレネーらは、ファルマの生成していた氷壁に激突する。

ファルマはノアの暴風を氷壁で防ぎきると、ノアは檻の門を外し

ファルマとクララを救出する。

牢獄の格子ごと消して囚人を脱獄させるなど朝飯前だったファルマも、物質消去を失ったからにはノアに感謝せざるをえない。

「助かったよ、ノア」

「この御恩を一生忘れんなよ？」

ノアは彼らが衝撃に倒れ伏した隙に、クララに杖を放り投げ手渡す。

「何が何やらです……！ でも、助かりました！」

クララはパニックになりながらも、ノアから向けられた自前の杖を両手でキャッチする。

「この隙に一旦引くつてことでいいか？」

「賛成。まずいことになった。形勢を立て直したい」

物質消去の能力の奪還の必要性を痛感しながら、ファルマは水蒸気の幕を引いて彼らの目をくらませ、洞窟外への脱出を図った。

「あの、はあ、メレネーをつ、はあつ、どこかへつ、呼び出すことはつ、ぜいぜい、できないでしょうか！」

クララが慣れないランニングフォームで息を切らしつつ、ファルマとノアに追いつがって走りながら提案する。

「どういつこと？」

「強制的につ、旅をつ、させてしまえば、私の神術が使えます。つまり……メレネーの行動の予知が、できます……ぜい、その前に

私の心臓が死ぬかも」

「旅の定義とは？　ちよつとやそつとの距離じゃ、移動扱いになるんじゃないのか？」

ノアには疑義があるようだが、ファルマは肯定する。

「詳しく話、きかせてくれる？」

ファルマはクララの案を採用する。

ふと見ると、クララの足がもつれて、走るスピードが落ちてきた。日ごろの運動不足がたたっているのだろう。

「あれ。息が切れて……日ごろぐうたらしていたつけがーっ！」

「走り込みと神術鍛錬ぐらいしろよお前」

「疲れるんですよ！」

「誰でも疲れるわ！」

クララとノアは漫才のようなやり取りを繰り広げている。

（物質消去は、対象を視認していないと撃てない。つまり、今すぐメレネーの五感の圏外にでる必要がある。走っていたら間に合わない）

ファルマはくるりと振り向いて薬神杖を口に咥えると、二人の右手と左手をしっかりと握る。

洞窟内から脱出すべく加速しながら低空飛翔に入った。

「ぎゃ　　！」

不意を打たれたノアとクララはファルマの手首にしがみつき、そ

の絶叫が洞穴内に残響をのこした。

明け方に目が覚めたロッテは、用を足すために母カトリーヌと兼用で使っている使用人部屋から出る。

（うう、トイレ遠くなっちゃって怖いなあ）

神聖国から戻ったファルマが神聖国のトイレ事情に影響を受けて、トイレと居住空間を別にしたため、そして水洗トイレの工事をさせたことで、ド・メデイス家のトイレは水洗式になっている。

廊下の突き当りのトイレから、あくびをしながら部屋に戻ろうとしたロッテは、一階玄関から不審な物音がしているのに気付いた。なにやら話し声も聞こえてくる。ふらりと足を向けようとして、ぴたりと止まる。

（何かしら？ 不審者かもしれない。誰か起こした方がいいかな？ ……ううん、風の音かもしれないし。ちょっぴり様子だけ見てみよう）

彼女は暫くの逡巡の末、掃除道具入れからほうきを掴むと、それを両手で構えながら恐る恐る階下へと歩みをすすめる。

光が漏れてくる客室では、ブランシュが新しくファルマの担当となる予定の上級使用人のシメオンと揉めていた。

今にも旅に出ようかという大きな荷物をかかえたブランシュは、肩を震わせてうつむいていた。

「最初から置いていくつもりだったに違いないの！ ひどすぎるのー！」

そんなブランシュを、シメオンは困ったようにとりなす。いつもは冷静なシメオンだが、ブランシュが相手となるとやりにくそうにしている。

そもそも、ド・メディシス家の中でもブリュノ、パツレ、ブランシュはとりわけ気難しいとして、使用人たちから敬遠されている。ブランシュの使用人として、彼女のわがままに何度付き合わされたかもしれないロツテだが、ほかの使用人たちが持て余すブランシュともうまくやってきた。

「兄上たちがどこに行ったか、すぐ調べてほしいの！」

シメオンは理屈が通じないブランシュに振り回されている。

「申し訳ありませんが、執事を含めて、誰もファルマ様の行き先をうかがっておりません。急な予定だったのだと存じますよ。ブランシュ様には明日のご予定もございます。温かい飲み物をいれますから、それを飲んでおやすみなさいませ。ファルマ様、パツレ様がたも、きつと明日にはお戻りになれますよ」

だが、そんなごまかしの通用するブランシュではなかった。

背中に隠していた筈をそつと部屋の隅にたてかけたロツテが、自然にブランシュに近づく。

「ブランシュ様、どうなされたのですか？」

「兄上たちが、私を置いてどこかにいったのー！」

「今夜は、神術演習があるとかで、朝までお戻りになられないのです」

「いえ、一度戻られて。お仕度にも呼ばれなかったので、行先がわからないのですが」

シメオンがまいったというように頭をかく。

「みんなで空を飛んで、西のほうにいったのー」

「ははは。それはさすがに……夢をみておられたんですよ、ブランシュ様」

シメオンはそう言うが、ロツテは真顔になった。

（空を飛んだ？ ファルマ様なら飛べるし、本当かも……）

「兄上の杖で皆を引っ張ってたんだよ」

その一言で、ロツテは確信を強める。

「ブランシュ様、ベッドで詳しくお話を聞かせていただけますか？」

ロツテはシメオンにウィンクをして、あとは引き受けるというジェスチャーをした。

シメオンはほっとしたような顔をして退出したが、その後ろ姿からはファルマの不在をどうしたものかと悩んでいるような印象を受けた。

ロツテはいつものように手際よくブランシュを寝室へ戻すと、ネグリジエに着替えさせ、温かい飲み物をもってきて寝かしつける。ブランシュはしぶしぶといった様子だ。

「兄上たち、本当に空を飛んでいったの。でも、誰も信じてくれないのー。ロツテも信じない？」

「私は信じますよ、ブランシュ様。お兄様がたは演習からお帰りの

あと、ご無事でしたか？」

ロツテはブランシュの美しい金髪をくしけずりながら言葉を交わす。

「大きい兄上とお師匠様は怪我をしていたけれど、小さい兄上は平気そうだったのー」

昨夜は悪霊を想定した大規模演習があつたとかで、朝まで戻らないと言っていた。

ファルマは参加しないが、エレンやパツレは戦闘に参加すると言っていたが、深夜の帰宅とは早い帰りだったのだなとロツテは気を回す。

「怪我をしておられたのに、出発されたのですか。となると、急用でしょうか」

ブランシュは大きく頷く。

「そう。急いでたの。大きい兄上と小さい兄上とお師匠様と、それからもう一人知らない女の人と出かけたの」

「知らない女の人？」

「遠くてはつきり見えなかったけど、なんだかすごそうな人だったの」

誰だろう、とロツテは記憶をたぐる。この夜中に、ド・メディシス家を訪問。

しかも、パツレまでもが謙遜する相手、相当な家格の御令嬢とみられる。

「銀髪と金髪が混じったような髪の色で、ルビーのような赤い瞳をしていたのー」

（聖下だわ、間違いない）

彼女に仕える宮廷画家たるロツテはすぐに勘づいた。

そんな目立つ特徴を持った貴族で、尊爵家の御曹司をはべらせる令嬢など、彼女しかない。

ロツテの反応を見たブランシュが、ロツテの顔をのぞきこむ。

「ロツテ、その人のこと知ってるの？」

「ええと、似た方は存じ上げておりますが、確信がないので……」

ロツテの目が泳ぎ始めた。

サン・フルーヴ帝国皇帝にして、神聖国大神官を兼任するエリザベスが宮殿から抜け出してド・メーシス家にいたなど、言えるわけがない。

「ふーん。私は知らない人だったけど。明日には帰ってくるって言うってた。でも……嫌な予感がするの」

ロツテが記憶している限り、明日の夜、聖帝エリザベスには定例の公務がある。

戻らなければ、帝国が大混乱に陥ってしまうだろう。

「断言されたのでしたら、みなさんご無事に戻ってこられますよ」

ロツテは事の重大さを知って冷や汗が止まらない。

「そっかな……師匠の荷物が異常に多かったんだけど。何泊かする



みたいだったの」

「エレオノール様はいつも準備万端でございますからね！」

きつと、明日には戻ってくる。

約束は果たされる。

ロツテはそうブランシュを励まして、ようやく寝かしつけると、起こさないようそつと上掛けを整えてブランシュの部屋を出た。

「シャルロツト」

部屋を出るなり、シメオンが青ざめた顔で紙切れをもって近づいてきた。

「ファルマ様のお部屋にこれが……」

シメオンから手渡されたのはどこかの地図で、ファルマが何か説明をしたかのようなメモがいたるところに書き込まれていた。

（ファルマ様は聖下に何かご説明をしたのだわ。すると、目的地は……ギヤバン大陸？）

ギヤバン大陸までの道のりは、船で一月ほどかかると聞いた。空を飛んでいったとしても一日で戻るわけがないし、それどころか到着するわけもない。

ロツテはそんな予想を巡らせる。ロツテは狼狽するが、どうすることもできない。

シメオンがおそろおそろといった様子で疑問を口にする。

「ファルマ様たちは、ギヤバン大陸に船で向かわれたのだろうか」「船かどうかはわかりませんが、向かわれたのは間違いないと思い

ます」

船ではなく、ブランシュの言う通り空を飛んで向かったのだろう。ロツテはすんなりとそう信じた。

「そんな！　どうしてファルマ様は私に行先をおっしゃらないのだ……」

信用されていないのかと、シメオンは悲観してうなだれる。

「ファルマ様にも、きっと何かご事情があったのだと思います。それより、シメオン様。今夜から屋敷の守りを強化したほうがいいと思います。大規模な神術演習があったと聞いておりますが、浄化しきれなかった悪霊が帝都にいるかもしれません。旦那様や奥様にもご相談したほうがよいでしょう」

ファルマは正統な守護神として、大陸全土をその強大な神力で守っていると言っていた。

その彼が、もしギヤバン大陸に向かったとすれば……この大陸の守りはどうなるのだろう。

彼の力は、大陸を越えても届くのだろうか。

押し寄せる不安で嫌な想像をかきたてられたロツテは、ファルマを慮って言葉を選びながらシメオンに屋敷の警備強化を進言した。

「わかった、たしかにそうだな。すぐにご報告しておく」

ロツテの緊張がシメオンにも伝わったようだ。

ロツテは部屋に戻ると、真新しい聖別紙を裁断する。  
適度なサイズに切りそろえると、メロディからもらった聖油を小

瓶につぎたし、それに絵筆を浸して火焰神術陣の護符を書き始める。

今日はこれから一刻も休まず護符を作り、要所要所に敷設して悪霊の侵入を防ぐつもりだ。

いざ悪霊の発生ともなれば、護符も一瞬で破られてしまうかもしれない。

それでも、ロツテは彼らの無事を祈るように、その手を止めなかった。

## 7章14話 透明人間（後書き）

次回更新は7月18日です。

異世界薬局のアニメ化決定と、それに伴い公式サイトができました。  
異世界薬局公式HP：

<https://isekai-yakkyoku.jp/>

7章15話 INSTRUCTION MANUAL 写本

無人島には、洋上より吹き上げる風が吹きつけている。

ノアとクララを同時に救出して聖帝らの待つ無人島へ戻ったファルマは、彼女らと合流し、事の次第を報告した。

まずはクララを救出したこと。

祖霊を滅ぼされたメレネーは、帝国に怨恨を募らせていること。

二つあった薬神紋のうち一つを奪われ、メレネーに乗っ取られてしまったという報告は伏せた。

失望は絶望に繋がり、混乱を呼ぶ。

「ふむ……報告ごころう。瞬間に行方不明の二人とも連れて戻るとは、さすがはファルマだ。無事に戻ってきて何より。クララ、ノアも、大事ないか」  
「は、勿体なきお言葉にございます」

ノアはすました顔をしている。

ノアが目くばせをするので、クララも慌てて倣った。

「はい、聖下。ご心配をおかけいたしました」

クララは命からがら逃げ延びた後、聖帝が新大陸に現れたことに動揺していたが、彼女の前では明らかに安心した様子だ。

聖帝は国母として臣民に慕われる世界最強の神術使い。

その彼女が国をかえりみず直々に救助にやってきた。

これほど心強いことはこの上なく、忠誠心も最高潮となる。  
聖帝は二人の無事を確認し、大きく安堵の息をつく。  
そしてファルマに向き直る。

「こちらはこちらで収穫があつたぞ」

「まさか、聖下じきじきの尋問で？」

どんな厳しい尋問が、とノアが固唾をのむ。

「いや、普通に話した」

聖帝の答えは気抜けするものだった。

そんな軽い口調の聖帝が語った情報量は、ファルマが洞窟へ単独  
潜入しているほんの少しの間に得られたものだったが、耳を疑うほ  
どだった。

彼らは銃の使用方法を知っていたが、その方法は昔から独自に知  
っていたもので、帝国の探検隊の模倣などではなかったということ  
が明らかになったというのだ。

「銃と同じような原理の武器を持っていたのでしょうか」

ファルマがオーバーツの出現に首をひねると、

「その昔、原住民の中に銃を持っていた者がいたのでしょうか」

ジャン提督がそう推察する。

ファルマもジャン提督と同じく、彼らが独自に開発したものとい  
うより、大陸から伝来したという可能性を疑う。

（こっちの大陸の人間が遭難して新大陸に漂着したのかな？ 地球

でだって、コロンブスがアメリカに着く何百年も前に、ノース人がアメリカ大陸に来てたつていうし……大黒屋 光太夫だってあんな離れたロシアに漂着してたもんな。もしくは、銃火器を積んだ難破船が大陸に漂着し、彼らが先に知っていたか……）

ファルマの想像はそんなところだ。

「ほれ、これが銃の説明書のような」

図解入りの皮紙がその証拠だといって、聖帝は丸められた羊皮紙をファルマに手渡す。

「……ありがとうございます」

手に取った皮紙の劣化具合からして、数十年から百年は経過していそうだと感じる。

「これを、こやつらが持っていた。皮紙のほうは複写であろう、原本はボロボロになっている。さっき消えたのだと」

ファルマはその情報を聞いて、しまったと反省する。

（あつ、もしかして紙が消えたのって俺がセルロースを消してしまっただからか！）

「そなたのせいかな」

「すみません」

おそらく、セルロースをベースとする紙に記載された図だったのだろうが、迂闊にもファルマが消してしまっていた。

（うつかりと貴重な文化遺産が喪失！）

原本が惜しかった、と悔いるファルマだが、言っても仕方がないので皮紙に複写されたものを閲覧する。

「INSTRUCTION MANUAL FOR XX,  
Owner manual.  
User safety warning and responsibility.  
Do not attempt to load any firearm until you read」

ファルマは興奮して声が大きくなってくる。

耳慣れない言語が聞こえてきたからだろうか、エレンが眼鏡を上げ下げしている。

「ん？ んん？ 今なんていった？」

ファルマはしばらく夢中で読み進めて、自分の発した言語の場違いさに啞然としてしまう。

（え……英語）

懐かしい言語が目飛び込んできたので、思わず悲鳴を上げそうになった。

複写の記述内容は一目瞭然。英語で記載されたハンドガンの取説、その複写だ。

複写ではあるが、まぎれもなく地球由来のものだ。型番や、リリースした日まで書いてあるのだから。



ここにある年号はサン・フルーヴ暦ではなくて地球の西暦だ。

（これはなんだ？ どういうこと？ 英語を話していた人物がいた  
しかも年代が新しいぞ）

今すぐにもこの資料の出所が知りたい。

その周辺にある資料などもすべて調べ尽くしたい思いにかられる。  
地球世界の痕跡にふれ、動悸と興奮がおさまらない。

彼が薬谷完治として過ごしていた地球世界の言語に触れると、まるで実家にかえったような安心感に包まれる。

「我等には読めんが、そなたには読めるのか？ …… 見たことがない言語だな。そなたの発音。流暢だったが、この言語が読めるのか。そして、日常的に使ったことがある、そんな雰囲気だな」

エリザベスが横から顔をだして、興味深そうに眺めている。

「いったい何が書いてあるかわかるか、ファルマ」

パツレもつられて興奮気味だ。

「……おそらくですが……これは、この世界のものではなく別世界で使われていた銃の取扱説明書です。銃は帝国海軍が使っているものより、技術的に数十年から百年以上未来に作られるはずのもので、技術的にも高度なものです」

エレンとパツレが身を乗り出してきている。

「未来」

「なぜ別世界からきたものとわかる。神殿の所蔵している秘宝のよ

うなものか？」

「なぜ別世界由来のものかわかるかというと……これと似たものを、写真や映像で見たことがあります。あ、映像というのは動く写真のようなものです。見たことありませんね。今度お見せしましょう」

ファルマは言葉に詰まる。

「別世界からもたらされた銃の構造が高度であるがゆえに、あるいは材料の不足によって現地住民は模造品が造れず諦めて、それでも取り扱いの知識だけがこの大陸に残ったのではないだろうか」

銃（遺物）は朽ち失われても、取説（知識）が残っていた。そのおかげで、その基本的な取扱い知識は失われていなかったということだろう。

ファルマは念のため、周囲の誰にも見えていないスマホのカメラで写真を撮り集める。

「でもどうして、こんなものが」

これまで己の身に起こったこと。

鎡の齒車の中で出会った農神の少女の、「地球ではないが、ほかの世界から墓守に見いだされてこの世界に放り込まれた」というもの。

それらの事実を突合してゆくと、一つの推測にたどり着く。

（この場所に、英語圏からきた地球人が生きていた！）

おそらく彼または彼女は墓守によって見いだされ、現地住民に受け入れられ、部族間対立などに対抗するため、あるいは野生動物と戦うため、銃器の使い方を教えたに違いない。

守護神の伝承のないこの地で、彼または彼女がどのように生きたのか。

海を越えはるばる神聖国にわたり、鎧の齒車にすり潰されたか。それともこの地で永眠したか……。

ファルマの脳裏には怒涛のように疑問や推測が生まれてくる。

（彼女は守護神だったのか）

しかし、おや、と首をかしげる。

いま、新大陸の先住民と敵対関係にあるのに、聖帝エリザベスがこの資料をすんなり手に入れられるわけがない。

まず、ファルマはコミュニケーションの初手で失敗していたのだから。

「聖下、どうやって彼らの言葉を理解してこの情報を得たのです？」

「ん？ 尋問のために一人だけ解放してやったら、その者が悪霊を紹介し、帝国の言語で話しかけてきたぞ」

さきほどメレネーがやっていたように、霊を通じて話せるものがあるのだ。

「まあそれで、お互いに争う必要もなし。こちらも逃げも隠れもせぬ、落ち着こうということ、一時休戦となった」

ファルマは肩透かしをくった気分だ。

聖帝は持ち前のカリスマ性とコミュニケーション能力を発揮し、ファルマよりやり取りもスムーズだったようだ。

「悪霊を出した時点で攻撃とみなさなかったのは恐れ入ります」

そういえば、と思い出すに。

執拗に悪霊を出そうとするメレネーの初動を、丁寧に丁寧に潰してしまつたファルマである。

やり方が一方的かつ過剰防御だつたかと反省する。

このあたり、ファルマの対人実戦経験は聖帝の足元にも及ばない。

「なに、相手をよく観察しておれば、言葉は通じずとも意図はわかるものだ。敵意や殺意の有無を看破するのは、読心術の基本中の基本だぞ。様子を見る、ということ覚えよ」

せつかちだと常々思っていた彼女だが、必ずしもそうではないらしい。

（すげー。それに、読心術なんて心得ているのか。ん、でもそれって）

さすがは聖帝、外交の達人である。

同時に、読心術の信憑性はさておき、その読心術をファルマに対して使っているのではないかという不安も拭えない。

「彼らとはもう、少なくとも表面上では敵対関係にない」

用心のためにファルマが拵えた格子からは解放していないが、水や果実などの差し入れは行なっていた。

そこまで話がついていれば、ファルマとしても本当に助かる。

「調整をありがとうございます。私としたことが、洞穴にいる一団とは話が決裂してしまったので」

ひとまず、無人島に軟禁されている先住民の勢力を警戒する必要

性が減ったのは助かった。

「そなたは交渉事がへたくそだのう」

聖帝はがつくりと、ややからかうように額をおさえた。

「返す言葉もございません」

「では、余がメレネーなる者と交渉をすればよいな。なに、八方丸くおさめてみせよう」

彼女の手腕であの殺気立ったメレネーが丸め込まれるのか、ファルマにとっては未知だ。

「確かに最善手は、メレネーと和解をしてから帝国に戻ることです。ですが、成功率は極めて低い。話を聞いてもらえる保証がありません。ともかく、帝都に帰りませんか」

ファルマは時計を気にした。

「確か聖下、今日中にお戻りにならなければ大変なことに」

ファルマが青ざめる。

彼女には定例公務があつたはずだ。

一番重要なのは探検隊を無事に帝都に戻すことで、薬神紋についてはファルマが一人、ないし少人数で話をつけにければいい。

「まあ、念のため、大規模演習の疲れを癒すためといって、公務は別日にずらしておいたのだ。だからあと一日は滞在可能だ」

「そんなに長い間ぶっ通しで寝るといって、不審に思われないものですか」

一度ぐらゐは安否を確認されるのでは、とファルマは懸念する。

「ないぞ！」

「それはどういふ」

「以前は神力を使い果たすほどの戦闘になつた翌日二日ぐらゐは寝ていたのだ、それを知る者たちは、下手に起こしにはこぬだらう。何しろ、余の周りの者は神力消耗後の寝起きが悪いのは知つておるうからのう」

以前無理に起こしに來た者を、寝ぼけて燃やしたことがある、という。

（そんな痛ましい事故が……聖下の側近も大変だ。こないだ添い寝したときも無事でよかつた）

ともあれ、なんの準備もなく帝都を抜け出したわけではないと知りファルマは首が繋がつた思ひだ。

ついてくるといつたのは聖帝本人だが、新大陸にまで連れ出したのはファルマである。

聖帝を無事に公務に戻すまでがファルマの仕事である。

「ではもうここに用はありませんし、彼らを解放してあと半日以内にこの島を発ちます。そうでないと帝都に着きません。そして私は、歸る準備をしますね」

ファルマは予告しておいた。

メレネーのことは次回にして、帝都に向けて歸り支度をしなければならぬ。

ファルマは聖帝らを乗せてきたキャリッジの改装にとりかかる。

キャリッジの中から、バググ状の大型資材を取り出す。

「これは今使うもの？ 広げるなら手伝いしましょうか」

エレンが興味深そうに尋ねる。

「そう、球皮というもので、これを風船のようにして、下から暖めた空気で浮力を得て空を飛ぶ。熱気球というものだ。ありがとう。そっち持ってきてくれる？」

「待って……飛ぶの？ 帝国まで？ この風船で？」

エレンが一語ずつ、これから起こることを確認する。

「帝国から飛んできただろ？ なら、帝国に飛んで帰る」

「交通手段！」

それとこれとは安心度合いが違う、と言いたそうなエレンをなだめて、ファルマはエレンやパツレに手伝ってもらってこつこつと気球を組み立てる作業を行う。

組み立て方法は、スマホに情報を集めている。

間違えて球皮を破ったりでもすれば、ファルマが人力でこの無人島と帝都を何十往復もタクシーをしなければなくなる。

「安全性？ テスト飛行はしたことがあるよ。この三分の一スケールで」

ファルマは心もとなない情報を出した。

「実際のサイズでやってねーのかよ！ 荷重も強度も全然違っただろがよ！ 飛ぶかよそんなもん！」

パツレのツツコミもむなしく。

「まあ、補正する計算はしているから。基本的には飛んでいる風船状態の気球を俺が押すか風で吹き流す。前に言った通り、俺自身が運べるのは四人が限界だ。全員を運ぶための力は、この気球と浮力で補う」

地に足をつけた案とはいかないが、現状でも、大陸間を渡する方法は船が飛行機しかないのだ。

マイラカ族の長、メレネーは拠点としている洞穴の床に倒れ伏していた。

「逃がした……あの三人！」

意識を取り戻した彼女は、悔しそうに拳を地面を叩きつける。彼女の周囲を、同じく起き上がってきた彼女の家族が取り囲む。

「メレネー、大丈夫か？ うわっ、すごい血だぞ」

メレネーの兄アイパが、額から血を流している彼女を気遣う。

「傷は浅いから問題ない。ルタレカも手に入ったことだし、よしとする」

メレネーは「無の根」と呼ばれる腕の赤い輝きを愛おしそうに撫でる。



それは赤く毒々しい輝きを宿し、彼女の腕で生きた蛇のような禍々しい存在感を放っていた。

「私にもよく見せてくれ。これが、古き者の宿していた秘蹟か」

「ああ。やっと戻ってきた、あの少年が奪っていたのだ」

メレネーは額の傷をおさえながら、その場にへたりこんで立ち上がろうとしない。

「動けないのか？」

「どうやら呪力切れだ、すまないが運んでくれ」

「わかった。では、おまえの部屋へ運ぼう」

メレネーはアイパの背に担がれて、自室へと戻される。

次々と部屋を訪れる集落の者たちにねぎらわれながら、掛布を頭まですっぽりとかぶり、メレネーは震えていた。

命のやりとりを終えて緊張が抜け、どっと脱力して、彼女は今更のように怖くなったのだ。

（あの金髪の子供は、何者……？ もう一回やってきたら、かなわないかもしれない）

（人間ではなかった。体が光っていた。あれはなんだ）

（直視できなかった。眩しすぎる。闇夜を照らす太陽のような存在だった）

（それに……私を殺すこともできたのに。手加減されていた？）

（あれを殺せるのか？ 無理だ）

（あれはきつとこの世のものではない。別の世界からきた、私の知らない光の存在だ）

（光は怖いものだ。霊たちを脅かす）

感情を殺していたメレネーの中に、怒涛のように恐怖の感情が押し寄せる。

「メレネー。よくぞ長のつとめを果たした。私は誇りに思うぞ」

先代の長にしてメレネーの母、レーネラが娘の奮闘をたたえにやってきた。

「母上……きちんと皆殺しにするはずでしたが、取り逃がしてしまいました。どうしましょう。あの、隷属させていた女も取り逃がして」

「深追いをしなくていい」

レーネラはメレネーの手を握って慰める。

「……しかし、仲間を連れてまたやってくるかもしれません」

「相手は逃げたのだ。もう、追っていかなくていい。その、透明な金髪の子供は危険だ」

「はい、私も命の危機を覚えました。あれは何者だったのでしょうか」

メレネーは金髪の少年を思い出す。

その身は光に満ち、霊体に近いその身にルタレカを二つも宿していた。

知らないエネルギーの塊だった。

「辛くもルタレカを取り戻すことができたが、油断をつかなければ、到底かなわなかったでしょう」

離れてみてわかる、彼の怖さを。

レーネラは祖霊を呼び出し、同じ質問をする。

「祖霊パラル。あの子供について何か知っているか」

祖霊パラルと呼ばれた霊は、煙がかった老人のような姿をしていた。

『ここより遙か遠き場所に、似たような超常の存在が次々と現れては消えた時期があったという話を聞いたことがある。我々祖霊の殆どを消し去るほどの凄まじい力……その類の者なのかもしれぬ。霊の王だろう』

「我らが偉大なる呪術王、ハリースとは違う存在なのか？」

パラルが「霊の王」とまで言って強く警告をするので、レーネラが驚いたように尋ねる。

ハリースとは、マイラカ族の中では伝説の、最強の呪術師だ。ハリースが「無の根」を手なづけ、その扱い方を一族に伝えた。無限の呪力をもってマイラカ族を率いていたといわれている。

『おそらく、ハリースに匹敵するか上回る。霊体の性質としてはハリースと正反対のものである。メレネーはわかっているだろうが、あれに攻撃をしかけても消滅しない。物質界を超越している。手を出さぬが身のためだ、彼はその存在だけで霊を壊滅させる』

レーネラとメレネーは悔しそうに沈黙した。

「そういえば……彼は話し合いをしろと言っていたのだが……」

表情だけを思い出すに、少年からはそれほどの敵意は見えなかった。

口調も穏やかで、一見悪い人間には見えなかった。

メレネーを傷つけなかったし、攻撃ひとつの選択にしても、「氣を使われていた」のを実感する。

『靈を滅ぼしながらのこのこと、話し合いましょう、か。そういうのは普通、冷酷無比というのだよ』

祖霊パラルがメレネーに疑いをぶつける。

メレネーはやはりと唇を引き結び、溢れんばかりの憎しみの感情を取り戻す。

メレネーの祖父や、大好きだった祖母。先月までは呪術で呼び出せばいつでも会えたのに、メレネーにとって身近だった靈たちも、あの少年の出現を境にいなくなってしまったのだ。いわば、家族を滅ぼされたに等しい。

「そうだったな。やはり怨敵だ。もし次まみえたら、私の命に替えても一矢報いる」

レーネラは「あとをつけてはだめだ」と首を横に振っていた。

レーネラは祖霊パラルを地に還し、改めてメレネーに忠告した。

「あの者のことは考えず、しっかり休むこと。呪力の回復にもとりかかること」

「わかりました。すぐ就寝します」

メレネーは力なく答える。

「メレネー」

メレネーの部屋のドアを、外から激しく叩く音がする。

メレネーは扉越しに声だけで返事をする。

「どうした」

「異人の捕虜を無人島へ移送した者らが、日が暮れてもまだ戻っていない」

「なんだと」

メレネーの瞳がかったと見開かれる。

そこには先ほどまでの弱気な少女の姿はない。

マイラカ族の長の顔に切り替わった。

「時刻までには戻っている予定だった」

メレネーは静かに寢床から起き上がる。

「絵鳥を偵察に送ったが、すべて撃墜された」

「そうか」

「どうやら、ピチカカ湖の呪いを受けても、奴らは動ける状態にあるようだ」

「侵略者とマイラカ族、優勢が逆転した可能性はあるか？」

「おそらくそうだろう。あの金髪の少年が一人で突っ込んでくる前に、無人島で捕虜となっていた仲間の救出を試みたはずだ。そのめどがついたので、仲間の奪還に来たのだろう」

メレネーの体に呪力はまだ戻っていない。

しかし……一刻も休んでいる暇はなくなった。

「呪術隊を召集。すぐに家族の奪還を行う。無人島までの方角へ距離を特定しろ。絵鳥に乗って、夜闇に紛れ、私が空から奇襲をかける」

「わかった。すぐに用意させる」

兄アイパが、メレネーの杖と槍を持ってきた。

「私は仲間を見捨てない。私たちはみんなで一つだから」

死するときは、全員で果てるまで。

「たとえ今日が私の命日となっても」

「ええと、準備完了」

ファルマは組み立てた気球を別の無人島に移し、いつでも飛びたてる状態にして、その島の裏に隠しておいた。

気球を傍に置いていて、急な襲撃に巻き込まれでもしたら、球皮が破れて飛べなくなってしまう。

「夜明けには、ここを発つ」

熱気球という性質上、気球内部の温度と気温の差が大きい時間帯が望ましく、飛行は夜明けか日暮れに行われるものだ。

日中は上昇気流サーマルが発生しており、強風も吹き付けていて、とくにコンディションがよくない。

「上昇気流があるとなんで望ましくない？ 気球を上昇させてくれるんじゃないのか」

パツレが直感に反するのか、飲食しながら質問をしてくる。

「上昇気流の中の風の流れは複雑で、上昇するばかりではなく、下降する流れもある。気球には操舵性がないから、かえって危険なんだ」

地球上でも、強いサーマルが発生しているときの飛行は厳禁だ。強いサーマルがあるときは、競技も中止されるぐらいだ。

「なるほど……」

ファルマは帰還の準備を整えつつ、原住民らがいる無人島の対岸に面した海岸線に大きな砦を構え、メレネーの襲来を待つことにした。

時刻を待つてメレネーが来なければ、現地民を解放して平和に帝都に戻る。

彼らが乗ってきた小舟は無傷だったので、それに乗って大陸に戻ってもらえばよいだろう。

そんな段取りだ。

メレネーと遭遇して、ほぼ一日が経つ。

「ファルマ、メレネーってクソ女はどんな技を使ってくるんだ？」

パツレが干し肉をかじりながら、直接戦闘をしたファルマに情報提供を求める。

「そういう言い方はやめてよ。あの子、メレネーの攻撃はほとんどの攻撃は神術使いなら落ち着けばさばける。動きも遅い。でも、一番厄介なのは……ルタレカというものだ。負属性の最悪の神技を予想していてちょうどいい、と思う」

パツレの反応をみるに、ファルマの意図は伝わっていない。

「想像がつかねーんだけど。神技つかつてくんの？」

「似たようなものだね。具体的に言うと、メレネーの視界に入った任意の対象に対し、その中の水を消すことができる」

「それ、水の負属性の能力じゃねえぞ！」

先ほどメレネーのそれを見たノアは驚いている。

「俺たち水の正属性と、真っ反対の能力だな」

パツレはエレンに目配せをする。

「そうね……例えば私たちが、メレネーが消した分と同じだけ水を出したら、その効果は相殺できるものかしら。もしそうなら、ここには水の神術使いが何人もいるから……」

「……あれは、そういうもんじゃないよ」

ファルマだけが、メレネーの攻撃の性質を理解していた。

「それでメレネーとやらが、ここに来ると思うのか？」

「メレネーは必ずきます。となると、こちらの方向からに決まっています」

クララが確信をもった口ぶりだ。ファルマらがメレネーのもとに再突撃しないのは、こちらが旅をしている状態ではなく、メレネーが旅をしている状態を強制的に作り出すためだ。

それは、クララの案だ。

「なんでわかる」

「あっ！ 今出発しました」



クララは目を閉じ、感覚を研ぎ澄ませている。旅神と交信をしているのだろつ。

「なんだと」

全員の動きが止まった。パツレが空を見上げながら警戒する。ファルマは大陸の方角から目を離さない。

「旅をはじめたのは、二十五人です……」

「そんなこともわかるの！　すごいわね！」

エレンは感心しきりだ。

「いつもと違って情報量が多いです」

味方の旅についてはそれなりにしか読めないが、敵の移動に関しては敏感になっているのかもしれない、とクララは言う。

エレンが水の神術陣を立ち上げる。

ノアが向かい風を放つ。

「待ってください、速度が速すぎます」

クララが一点を凝視して叫ぶ。

彼女の第六感を研ぎ澄まし、ファルマたちには見えない情報を読み取っている。

「移動手段は船ではないのか」

“防襲神術陣を展開”

聖帝は警戒態勢に入り、神術陣を立ち上げると、すらりと帝杖を抜いた。

「……船ではありません！ あの時と同じ……夜闇に紛れて、襲ってきます！」

海上にはさらに強い風が吹き付け始めた。

「来ました！」

夜空から現れたのは、十を超える絵を具現化した怪鳥だ。

怪鳥に二人ずつ乗って、こちらへ急降下してくる。

絵の鳥から、無数の絵の怪異を具現化した礫の攻撃が繰り出される。

それらは流星のように局所的に降り注ぎ、ファルマめがけて落ちてくる。

聖帝が展開していた強い上昇気流を伴う炎の神術陣がそれをはじき返す。

「撃墜していいな。やるぞ」

パツレが指先を向け、絵鳥めがけて攻撃をしかけようとしたそのとき。

神術陣の爆炎に紛れるように、メレネーは単身、飛び降りながら初手でルタレカを放ってきた。

海に孔があいたように海水が干上がり、海底の砂は乾いている。

（……物質消去か！）

ファルマがマーセイルの海で海に穴をあけてしまった、まさにあ

の状況を再現している。

何発かルタレカを放ってきたメレネーは、手元を狂わせた。ルタレカの衝撃は、無人島で軟禁されていた原住民らにまで到達した。

瞬時に原住民らは体液を奪われ、干物のようになる。

しかし、彼らは死ななかった。

干物となった彼らは再生をはじめ、瞬時に水分を取り戻し、やがて人体へと再生し、復活を遂げる。

ファルマは探検隊のみならず原住民らが戦闘の巻き添えにならないよう、「爾今の神薬」を与えていた。

この神薬を得たものは、何が起ころうとも一日の間は死なないのだ。

クララは駆け出して最前線の波打際に躍り出て、杖を構えた。

『目的地への到着（Vous êtes arrivé à destination.）』

クララの杖から、水平線の向こうまで続く光の壁が生み出される。

メレネーたちの乗ってきた怪鳥が、弾かれるようにクララの光の壁に押し返される。

絵鳥から飛び降りて急襲をかけようとしていたメレネーは、光の繭によって空中に張り付けられ、彼女の意思に反してゆっくりと降下をはじめめる。

クララは大神技を繰り出しなお集中を維持しているのか、肩で息をしている。

「何が起ころう」

聖帝が叫ぶ。

怪鳥とともに洋上に舞い降りたきり、その背で微動だにしくな  
ったメレネーと原住民らに、クララが静かに語りかける。

「あなたがたはそこから一步も動けません。旅は終わりました」

クララはしっかりと杖を掲げながら神力を込める。  
神技の光は煌々と、彼女の神杖に宿っている。

（そうか……移動座標の固定。これが彼女の神術か）

ファルマはそんな理解をする。

「私の守護神たる旅神は、あらゆる旅を終わらせることができます」  
「こんなことができるのか」

聖帝は驚いて、クララとメレネーの顔を交互に見る。

「隠しておきたかったというのが正直なところです……、神力量の  
消費がやばいですし」

その言葉を裏付けるように、クララは脂汗をかいている。

「神官の話では、旅神を守護神に持つ古の神術使いは、敵の行軍を  
止め、数十万の敵軍を死に至らしめ人生という旅を終わらせること  
もできたそうです……すみません私にはこれが精いっぱいです」

誰かを傷つけるつもりもありませんし、とクララは顔を曇らせる。

「……旅神の加護ってすごくない？」

思わずエレンからも賛辞が漏れる。

ファルマには、クララの言いたいこともわかった。敵軍に侵攻させない能力など、時の権力者がほうっておくわけがない。

具体的には聖帝にみられるのがまずい。

しかし、そうも言っていないほど事態は切迫していた。

「いつまで相手を無力化させていられる？」

「私の神力が尽きるまでです！」

クララの声は震えている。限界が近いのだろう。

「よし」

聖帝はざぶざぶと海へ、腰まで浸かりながら入っていった。

メレネーはクララの神術に捕らえられ強制着水し、クララが展開している光の壁の先で脱力しながらも、こちらをにらみつけてくる。そんなメレネーに、聖帝は微笑みを向ける。

メレネーにしっかりと視線を合わせると、メレネーの読める距離で、一枚の紙を掲げて見せた。

そこにはメレネーらの使う言語で、「そなたらの仲間は全員無事で、安全な場所にいる。われらの目的は侵略ではない。

争いをやめ、平和的な話し合いをしたい。わかったら両手をあげてくれ」と書かれている。

彼らに読める言語を提示することは、おおよそ三つの意味を持つ、とファルマは考えている。

一つ目は、彼らと通じ合い、和解した。

二つ目は、脅迫して書かされた。

三つ目は、洗脳されて書かされた。

だが、二つ目の可能性は実際には低い。

というのも、暗号を仕込むことは可能だからだ。

実際には、原住民の一人に話をつけて現地語で書いてもらい、それを別の住民に読んでもらって内容に齟齬がないことを確認した。

現地語による手紙をみたメレネーがどうとらえるか、ファルマには予測がつかなかった。

何しろ彼女は、霊を操り、こちらの思考を盗み見ることができる。そして、無力化されながらも霊に伺いをたてていた。

五分ほどの沈黙があった。

長い長い、対峙の瞬間。

聖帝はじつと、せかすことなく、慈母のように彼女の決断を見守った。

メレネーはついに、話し合いの場につくことを承諾した。

メレネーが両手を挙げ、頷いたとき、クララの神力が限界を超えて尽きた。

7章15話 INSTRUCTION MANUAL 写本(後  
書き)

次回更新は7月25日です。

今後の更新スケジュールは活動報告をご覧ください。

## 7章16話 大陸間会談のすえ

話し合いに応じたメレネーらは全員、無人島へと上陸した。

浜辺で彼らを迎えるのは聖帝、ファルマ、エレン、パツレ、ノア、クララら神術使いだ。

先住民らに威圧感を与えるのを避けるため、探検隊らの大部分は別の場所で待機している。

落ち着いた話し合いの場が必要だ。

「干し肉と、ドライフルーツを食べるかね」

聖帝が場を和ませようとしてか、帝都より持ち込んだ非常食をすすめるが、メレネーは首を横にふって応じない。

あてがはずれた聖帝はそうか、と言いながらフルーツをほおばる。

「白々しいやり取りはやめようか。先に話をしよう」

エリザベスとメレネーは、互いに向かい合い、砂浜に直に座った。ファルマが聖帝の後ろに控えるようにして正座する。

メレネーの後ろにも呪術師らが控えているが、距離を置いているので二者の会話は聞こえない。

話し合いの場についたとはいえ、一触即発の空気だ。

場が整ったところで、一座に近づいてきた原住民がいる。

聖帝は彼を紹介した。

「ご存じ、呪術師のマガタ君だ。マガタ君に、こちらの通訳についてもらう」



聖帝が捕虜の中から選んだ呪術師のマガタという青年は、メレネーに黙礼し、その場に霊を呼び出す。

聖帝の言葉を、マガタの使役する霊が同時翻訳してメレネーに伝える。

メレネーはマガタに値踏みをするような眼差しをむけたが、マガタはメレネーと視線を合わせなかった。

メレネーと聖帝は言葉を交わし始めた。

『改めて挨拶をしたい。私はここから遙か遠方のサン・フルーヴ帝国という国の長で、エリザベスという者だ。このたびは、私が派遣した船団が上陸し、そなたらの生活圏に無断で踏み込んだこと、心よりお詫びする』

メレネーは聖帝から謝罪の言葉が出たことに驚いているようだった。

メレネーの瞳に宿る猜疑の光は、聖帝の意図をはかりかねていた。彼女はつんとした態度で言葉を返す。

『心にもない謝罪などしてもらわなくてもよい。どうせピチカ力湖に入ったものは全員死ぬのだ。それが贖罪ということだ、お前たちには死をもって贖ってもらおう』

メレネーは、エリザベスを含め探検隊が全滅すると信じているようだった。

しかしエリザベスは動揺もしない。

『私はピチカ力湖には入っていないぞ』

『だが、お前たちの大半が入ってしまったことを見届けた』

『確かに無防備に湖に踏み入りほぼ全員が死病を患ったが、我々はこの病に対する薬を持っているので、全員死亡という結果にはなら

んよ、心配ありがとう』

『病ではなく呪いだが？』

『いいや病だ。私の配下の有能な薬師どもがそう申している』

メレネーは耳を疑っているようだった。

『病だとしたら、効く術があるというのか。仮に病だったとしても、侵略をはじめて日が浅いお前たちには未知の病のはずだ』

『いや、薬だ。それは物質で、霊的なものではないよ。この大陸を含め、世界には様々な人、家畜、風土の病があり、それを地道に集めて治療法を探り、時を超えて一歩ずつ知見を積み重ね、全疾患克服のための統御を目指している者たちがいる。医師や薬師、技師や研究者というものだ。彼らの集学的な見解が、これを病だと看破している』

メレネーは反論せず押し黙った。

彼女らは、ピチカ力湖の呪いは致死性のものだと思っている。

はったりだとも思っているのだろうな、とファルマは横で聞いていて察する。

『そうか。ではのちほど存分に薬の効果を見せてもらおうとしよう。

さて、お前たちは一体何が目的ではるばるここにやってきたのだ』

『単なる興味と調査だ』

『資源の略奪ではなくて、か？』

メレネーは聖帝を挑発する。

『それは本当だ。わが帝国には広大な国土と潤沢な資源があり、貴金属の埋蔵量も申し分ない。わざわざ海を渡ってこの大陸に領土を拡大せずとも、国家は潤っておる』

メレネーは猜疑のまなざしで聖帝を睨み据える。

『口では何とでもいえよう。ならば何のためにこの大陸へ毒手を伸ばしたのだ？ 資源を求めてきたのであろう』

メレネーは聖帝に容赦ない質問を繰り返す。

『探検隊をこの大陸へ派遣したのは、純粋な世界の在り方への興味であつた。何しろ、この大陸は無人の大陸だと考えていたのだ。そこに大陸があるのなら地図を作らせ、その反対側はどうなっているのか知りたかつた。そうして、世界の闇を掃うべきだと考えた』  
『そんなことのために、我らは祖霊を滅ぼされたのか！ 我らにとつて霊とは！ 家族も同然だつたのだぞ』

メレネーの言葉には熱がこもり、それが真実である様子が伝わってくる。

彼らの怒りを宥めることは容易ではなく、その怒りはもつともだと思つたので、ファルマはメレネーに提案を持ちかける。

『浅薄な行動をとつてしまい申し訳ありません。罪滅ぼしといつてはなんですが、あなたがたが崇敬している祖霊を戻す方法を提供できます』

ファルマはにじって進み出て、疫神樹の種をメレネーに披露する。

『これは、周囲の霊を無限に呼び寄せる道具です。あなた方の祖霊が戻ってきてくれるかはわかりませんが、やってみる価値はあると思います』

ファルマたちのいた大陸では悪しき霊を呼ぶという先入観があったが、この土地には悪霊はいないということなので、疫神樹の使い方も変わってくる。

思った効果が得られなければ、ファルマが『疫神樹』を滅ぼせばいい。

そんな計画を用意していたのだが、メレネーはファルマを信じる様子はない。

『そう、お前だ。お前は何者なのだ。皆目正体がつかめぬ。この世のものではない。信用などできるものか。私はお前がこわい』  
『この者は私に仕える薬師だ』

聖帝がファルマの身上をそう説明する。

『そんなわけがあるか！』

ファルマは聖帝が話をつけているので、余計なことを言わず控えておいた。

『残念ながら事実だ。では罵り合いをしても仕方がないので、互いの要望を出し合わないか。まずはそちらから』

聖帝がメレネーに水を向ける。

『同胞の奪還と、お前ら全員の抹殺だ。お前らの故郷が遠い地にあるのならば、生きて返すわけにはいかん。呪いの効果がなければ、縊り殺すまで』

『もちろん同胞は無事で、さきほどから丁重にもてなしている』  
『どこに匿った』

『それは話がつけば教えるし、解放もする。なぜ、我々の全滅を望

む？ 元いた場所に戻るといつているのだぞ』

エリザベスはつられて激昂せず、落ち着いた口調で尋ねる。

メレネーはまだ感情をあらわにする青臭さがあるが、聖帝は手練れている。

『生かして返せば、より多くの侵略者がここに押し寄せることになるからだ』

『大陸の皇たる私がそうさせぬ、と言っても？』

『信用できるか！ 今は分が悪いから本性を隠しているが、我らを根絶やしにしようと企んでいるに違いない』

メレネーの言葉を訳していたマガダは、口をつぐんだ。

そして勇気を出して、メレネーに意見をする。

『長。横から失礼いたします。ひとつ話しておかなければなりません。彼らの本心は知れませんが、先ほど、害意はなかったという言葉を裏付ける出来事がありました』

『どういうことだ』

メレネーは同胞からの手痛い返しに、ショックを受けたような顔をしていた。

『私たちはあなたに一度殺されました。あなたはルタレカを得たのかもしれませんが、その扱いに慣れず、誤爆したのです。私たちは全員一度死に、そして甦りました。私たちを守ってくれたのはあなたではなく、誰あろうそこにいる少年です』

マガダはファルマに指を向ける。

『そんなはずはない……私がお前たちに手をかけるものか!』

メレネーは目に涙を溢れさせながら、到底受け入れられないと耳をふさぐ。

『ええそうでしょう。ですから、きっと誤爆なのです。この少年はあなたの失敗を見越して、あらかじめ私たちに甦りの薬を授けていたばかりか、防壁で守ってくれたのです。私たちを滅ぼすつもりなら、どうしてもそんなことをする必要があるでしょう。何もせず私たちを見殺しにして、ただあなたの失態をなじればよかったのに』

マガタはメレネーにありのままを伝えた。

メレネーは信じがたいといったようにうなだれ、ファルマに視線を向ける。

ファルマは彼女に何と言葉をかけてよいかわからない。

彼女の能力が、仲間を殺しかけた。

そのショックに耐えられるほど、彼女は成熟していないのだ。

ファルマは迷いながらも、マガタの言葉を受けてフォローの言葉を紡ぐ。

『メレネーさん。そのルタレカという能力。私はその能力を三年あまり使い込んできました。私は使用歴が長いので、水だけではなく知りえる全ての物質を消すことができます』

メレネーはぐっと唇をかんで、口を挟まなかった。

『そのうえでわかったことがあります。その力は人を救いますが、いとも簡単に殺すのです。それも、敵味方の区別なく殺します』

ファルマの神術が、その神力が暴走しないように、平時からどれ

ほど神経をすり減らしているか。

いつも、ファルマはふと思うことがある。

物質創造の対象を間違えたら。

分子構造のイメージを掛け違えたら。

物質量を間違えたら？

標的座標を間違えたら？

自らのおかしたたった一つのミスで、ありとあらゆることで人が死ぬ。

物質創造と物質消去は、厳密な制御でなくてはならない。

『ですから、私は攻撃目的で、敵にも味方にも、とにかく人の体液という水を奪うその能力を、人に向けたことはありませんでした。それは即死を付与する能力でもあるんです』

ファルマは物質消去という能力の殺傷性を、何より恐れていたことをメレネーに伝えた。

『ルタレカを手にしたあなたが私たちにその手を向けたとき。誤射によりあなたの仲間である彼らを殺してしまうことは確定しました。その能力は、絶対的な制御を必要とするものです。ですから、人死に出ないように備えていた。それだけです』

『どうしてそんなことを』

『もしあなたが仲間を殺していたら、その絶望がいかにひどいと思ったからです』

メレネーはファルマの言葉に何かを感じ取ったようだった。

『そうだったのか…… 同胞を救ってくれて感謝する』

素直に口から出てきたその言葉を、ファルマは複雑な思いで受け止めた。

『では、そちらの希望は何だ』

メレネーは渦巻く感情の処理に困っているようだっただ。

彼女の精神が一種の麻痺をおこし、気力が萎えたところに、聖帝が声をかける。

『何もない。わが帝国はこの大陸から単に手を引く』

『そこになんの得がある。手ぶらで帰るつもりなのか。とうてい理解できない』

メレネーはぎょつとしたように尋ね返す。

『何も得はない。手ぶらで帰ることに失望はないよ。この大陸に人間がいて文明を築いているという情報を得た。その情報を得たからには、大いなる収穫はあった』

聖帝はさっぱりと、あっけらかんとそう言った。

エリザベスは事を荒立てるつもりはないようで、落ち着いていた。

『ただ、そなたが何か無条件撤退に納得のできる理由を探しているなら、我らはそなたらと友好関係を築き、貿易を行いたいと思っ  
ている』

『断る。こちらに何も利益がない』

メレネーは訝しそうな顔をしてエリザベスの申し出を一蹴した。  
もう少し考えてくれても、とファルマはやきもきするが、



（あ、これは貿易の意味がわかっていないな）

メレネーの表情から察したファルマは、いちから貿易について説明をはじめた。

『と、貿易というのはこういうものです』

メレネーはファルマの説明で貿易の趣旨を知ったようだ。彼女らにとっても悪い話ではないはずだが、貿易の利点を理解してもらえていない。

メレネーはふて腐れたような態度だ。

『こちらが欲するものが、何かあるのか？ そちらの言葉をそのまま返すなら、この大陸にだって宝石も金も、豊かな食糧もふんだんにある』

『では、医薬品はどうですか』

ファルマの質問に、メレネーはうつと唸る。

貿易に利益があることがファルマの一言でわかって、悩んでいるのだらう。

もっひと押し、とファルマはプッシュを続ける。

『ピチカカ湖の呪いに効く薬は？ 病気を予防するための情報は？』

その後も、彼らにとって喉から手が出るほど欲しいものをいくつが提示したおかげで、ほどなく貿易条約を締結した。

聖帝が直談判をしたおかげでの、即断即決の流れだった。

誰も予想だにしない急展開で、ファルマらはメレネーたちを懐柔し和解に至った。  
完全にわだかまりが解けたとはいかないが、少なくとも敵対する理由はなくなった。

ファルマは有言実行とばかりメレネーらと大陸に戻り、疫神樹をすぐさま解放した。

疫神樹は青々とした葉をつけ、神樹のように美しく生まれ変わった。

『あれ、大陸で植えたときと違うな。普通に樹になった。大陸で植えたときは次々に悪霊を呼び込んで凄く凶悪だったんだけど』  
『祖霊の守るこの地には、悪霊はいないといっただろう』

メレネーの表情から険が消えて、ほっとしたような顔になった。

『本当だね、よくわかるよ。名前変えた方がいいかな、これはここに置いておこう』  
『では、偉大なる樹と名付ける』  
フリデカ

ファルマも今となっては素直にその言葉を受け入れる。

ファルマとメレネーが疫神樹を見上げながら寝そべっていると、消えたと思われていた祖霊たちはひとつ、またひとつと疫神樹を目印に集まり始めた。

木陰からも、次々にその姿を現し始めた。ファルマに消された霊たちは最初ファルマの周りに集まり抗議をしているようにも見えたが、メレネーに宥められて去って行った。

『あ、おばあさま』

『おばあ様だつて？ ご先祖様の霊か』

『よかった……無事だったみたい』

もとの数には戻らないが、メレネーは祖父母の霊にも会えたように、急に毒気が抜けた。

ご先祖様を大切にしている彼らの文化に、ファルマはもと日本人として共通するものを感じなくもない。

（日本だって、お盆にはご先祖様を呼ぶもんな……）

有言実行のファルマに少しずつ心を許し始めたメレネーは、内心を吐露する。口調も少しずつ打ち解けてきた。

『ファルマ、という名前だったよな』

『うん、あつてる』

『名前の意味は？ 私たちの名前には必ず意味がある。お前たちにもあるのだろう』

『意味か……医薬品とか、薬って意味じゃないかな』

『……お前的にはそれでいいのか』

『あんまりよくないな』

名前についての苦情は、ブリュノに言っただけ。

『私の名はメレネー、朝の海という意味だ』

『いい名前だと思う』

ファルマはしみじみと感想を述べた。

ファルマとメレネーは霊を介して自己紹介などを続けている。

『私はルタレカを使うのが怖くなった。きっと、少し気を抜くたびに勝手に暴走して、あらゆる水を消してしまう。いとも簡単に人が』

殺せる』

『……そうだね』

いくら訓練を積んで、術を使うことに慣れても、こればかりは覆せない。

物質消去も物質創造も、必ずしも人体に益のある能力ではないのだということ。

たった一つのミスで、全てを失うこと。

『私にはこの力を使う資格がないのかもしれない。お前はこのようなものを二つも持っていて、怖くないのか』

『怖いよ。でも、最初は手加減できなかったけど、最初に師となる人からきちんと訓練を受けたから』

最初にエレンとの特訓がなければ、物質創造と物質消去、二つの能力を手にしてどうなっていたかわからない。

ファルマの力に畏怖し、決死の覚悟をしながらも特訓に付き合ってくれたエレンの勇気と献身に、ファルマは感謝している。

それから先は、とにかく慎重に、集中力を研ぎ澄まして、能力を運用している。

ミスを避けようと思えば、極力、使わないに限る。

『師か……私にはそのようなものはいない』

自信喪失といったところだろうか。

ファルマは彼女の思いを受け止めながら傾聴する。

『私にも師がいれば、もっとうまくやれただろうか』

『ルタレカの性能を引き出すには、君がまだ知らない知識が必要だと思うよ。それにいくら訓練しても、術を使うときの、人を殺める

かもしれないと感じる危惧は同じだよ』

『……そうなのだろうな。お前も、人を殺すのが怖いのか』

『それが一番怖いよ。ところで、そんな思いまでして、そのルタレカの能力は一体何に使うつもりだったの？』

ファルマは彼女の願いを聞き出すことにする。

そこを聞き出せば、和解の道もあるかもしれない。

『ピチカ力湖の水を消せば、ピチカ力湖の呪いを解くことができるという伝承がある。でもあれだけの水、私は呪力不足で消せそうにない。ピチカ力湖の呪いのせいで、吾らは地下洞穴で暮らす定めとなったのだ。呪いが解ければ、地上で暮らせる日が来る』  
『ええと、つまり』

ファルマは彼女の話を整理する。

ピチカ力湖は住血吸虫の感染地となっている。

その湖の周辺もまた沼地であるがために、広範囲に中間宿主となる淡水貝が生息しているのだろう。それで、彼女らは地下で生きる道を選んだ。

それを呪いと信じて、何世代にもわたって……。

（地下の暮らしは過酷だ。衛生面でも問題がある。病気になった人たちも多くいるだろう）

『ファルマ、お前ならルタレカを使ってピチカ力湖の水を消せたか？』

『できたと思うよ』

ファルマは平時の体調も加味して控え目に答える。

『あの量の水を』

メレネーは驚きのあまりか、硬直した。

『上流の水源ごとと言われても問題なく。たとえば』

ファルマは神力量を示すために、空中を覆いつくすほどの水の塊を空に浮かべた。

その挙動はファルマの神力で制御されており、分厚い雲のように空を覆いつくす水は、空中を漂うばかりで地上に降ってこない。

『この量と同じか、それ以上の水を消せる』

『信じられない……上限はないのか』

『海を消せと言われたら困るけど、湖ぐらいできるよ』

メレネーはたった一言でその発言が偽りではないことを悟ったようだ。

『ルタレカをお前に戻してやるから、ピチカ力湖を干上がらせるという取引をしないか』

『不平等取引に見えるけど、いいの？』

もつとも悪意をもって予想すれば、薬神紋を奪還したあと、ファルマが逃げてしまうことだってできる。その可能性を見越しての提案なのだろうか、とファルマはメレネーの態度の急変に戸惑う。

『そういうことをしない奴だということがわかってきた。直感なのだが』

『それはどうも』

メレネーはルタレカを所持することを諦め、赤い雷のような紋様を膚から剥がし、シールを貼るようにファルマの上腕にぺったんとかっつけた。

ルタレカは赤い蛍光から白みを帯び、やがて青く変じて薬神紋を展開してゆく。

『こんな簡単に！』

メレネーのこの能力は、ファルマには決して真似のできないものだ。

こうしてファルマの腕に、物質消去に対応する二つめの薬神紋が戻ってきた。

それらはあたかも最初から一対の模様であつたかのように見える。

『ありがとう。では、これは俺が借りておくね。また、使いたときは声をかけて』

『しばらくはいらないぞ』

ルタレカと薬神紋は、どちらかが所有するのではなく、大陸をこえてシェアしようという話になった。

そのほうがいい、とファルマは思う。

ファルマも薬神紋を二つも持つてこの世界にやってきた時点で、幾度となく疑問に思っていた。

歴代の守護神たちが一つずつ宿していた聖紋なのに、自分だけ二つ。

そのせいで、神力量も莫大なものとなっている。

でもそれは、誰かが手にすべきものではなかったのか。

一つはメレネーが手にするべきものを奪っていたかもしれない、

そうであれば自分が独占しているのはフェアではない。

そんな気がしてならなかったのだ。

ファルマの腕に戻った青い薬神紋はびっしりと根をはり、ファルマの神脈の深くに根をおろした。

（呪力の有無、神力の有無によって聖紋が最適化されているのかなあ……）

考えても、何故そうなっているのかよくわからない。

物質消去の能力を取り戻したファルマは、メレネーがファルマに薬神紋を返還したことを後悔しないよう、促される前にすみやかに約束を果たす。

彼女が見ている前で右手をピチカカ湖にかざすと、湖水を消滅させ、その周囲の沼地を完全に干上がらせてみせた。

メレネーは壮大な光景に、膝から崩れ落ちた。

彼我の力の差を見せつけられ、屈服させられたといわんばかりだった。

彼女の口から出てきたのは、感謝の言葉だった。

『ありがとう』

『こちらこそ。君が返してくれたからこそできたことだ。これで、約束は果たしたかな。このまま、中間宿主が滅びるまで数年干しておこつ』

彼ら一族を悩ませてきた積年の問題、その解決は、ファルマにとって朝飯前のことだった。

ファルマはピチカカ湖の代わりに、中間宿主の貝がないことを確認したうえで、彼らに新たな水源を供給した。

メレネーたちは、ようやく地上に住居を構えることができる、といて安堵した様子だった。



軟禁状態で収監されていた先住民らも、全員が無傷で解放された。貿易については、帝国の船がギヤバン大陸に交易品を持ってきて取引をしよう、という取り決めになった。

融和の空気が醸成され、憎しみはとかされてゆく。

「よし、帰るか。夜も明けたし、帝都に帰還するぞ！」

聖帝は守護神殿の結界を解除し、あっさりと帰投を指示した。エレンやパツレ、探検隊らは当然疲労困憊だ。

「これから全速で帰っても、聖下の公務に間に合うかな？」

ファルマは大急ぎで気球の珠皮とキャリッジを準備し、可燃物質を燃やしてバーナーとし、空気を入れ、温めて膨張させる。

探検隊はおっかなびっくりキャリッジに乗り込み、口をあけながら気球を見上げる。

「よかったですか、聖下」

ノアが毛布を頭からかぶって就寝モードに入っていた聖帝に本心をうかがう。

「帝国領土の拡大にはもってこいだっただけでしょうに。大陸そのものから手をひかずとも、別の土地をおさえれば……」

帝国貴族たるノアは、手に入れられるとばかり思っていた新天地が惜しくて仕方がないようだ。

この大陸に入ったという先行アドバンテージを生かし帝国の領土拡大を行えば、必ず国力を強める。

その画を、彼女は捨ててしまったのだ。

「これでよい。先住民が不安になるようなことはしとうない。余も人の親である。子らが怯える暮らしを強いるのは誤っている」

「ご英断です、聖下」

ファルマは全高20メートルもの気球を見上げながら、クラウンロープを操りつつ、さりげなく聖帝に賛同する。

地球では、新大陸の発見のあと、先住民に対して虐殺の歴史が始まった。

今回の新大陸への探検が、類似の過程をたどらないことを切に願う。

しかし聖帝が健在のうちは、この世界では幸運にもそうならずに済みそうだ。

「さて、余もそう思うのだが。これより貿易が長らく行われることになれば、それを傍観する他国の思惑はあるやもしれぬ。ただ、彼ら先住民族の領地は余の名誉にかけても、守らねばならぬ」

世界最強にして最高位の権力を持つ聖帝の私見はともかく、ならず者はどこにでも現れるものだ。

ファルマもメレネーらの暮らしを脅かす存在があつてはならないと思う。

ファルマがクラウンロープを処理し、さて上昇しようかというところで、しばしの間姿を消していたメレネーが猛烈な勢いで追いつがってきた。

今にも乗り込まんとばかり、キャリッジに手をかける。

「どうした？ そなたも帝国にくるか？」

聖帝はメレネーを連れ帰るのも大歓迎のようだ。

しかしメレネーはそういうつもりはなかったらしい。

『そうではない。ファルマ、お前にはこれが読めるか。銃の説明書が読めたと聞いた』

メレネーは一冊の冊子をファルマに手渡す。

ファルマはメレネーから受け取ると、メレネーは一回転して地上に着地した。

『結構、分厚いね。何だろう』

ファルマはひとまず離陸を保留すると、冊子に視線を落とす。まず、その分厚さに驚く。

冊子といっても紙切れのようなものではなく、ノートのように皮革で製本してあるから、なお驚く。

『偉大なる呪術師ハリースの遺品だ。ラカンガという洞窟より見つかった、古代より伝わる古文書なのだ。だが、我々にはこの文字が読めない』

『さつきと同じ言語なら、読めるよ。分厚いし、来年までに翻訳しておくのでいいかな』

ファルマはパラパラとめくって、返却を想定してスマホで写真を撮りながら冊子を開く。

文面は読み飛ばしてゆくが、日付がつけられていて、どうやら日記のようだ。

思った通り、英語で書かれている。

『……これは日記のようだよ』  
『日記とは』

『一日の忘備録のようなもの』

『そうなのか。古の呪術について何か書いてあるのかと思っていたが。この書物の持ち主、ハリースの亡骸のそばに、遺品として置かれていた』

『祖霊を呼び出せるんじゃないのか？ 呼び出して詳細を聞いてみたらいい』

何故、彼女が疑問に思っていることをハリースの霊に尋ねず、日記を解読してほしいという話になっているのか、ファルマは疑問だ。

『彼女の霊は私の呪術でも呼び出せたことがない。もう、この大地にいないのかもしれない』

メレネーは、過去に亡くなった人物で、霊がその場を動いていなければ誰であっても呼び出せる。

その彼女が、ハリースという霊を呼び出せず、長きにわたり途方にくれていた。

彼らにとっては聖典のような扱いであった書物を解読できる人物が、今やファルマひとりである。

（そりゃ、内容も気になるだろうな）

ファルマはメレネーの気持ちもわかるので、翻訳を引き受けた。

『わかった。でも、量が膨大だから少し時間がかかるな』

『急いでいない。次回の貿易のときに持ってきてくれ』

『わかった。依頼は引き受けたよ。かならず持ってくる』

しっとりとした皮のブックカバーが、使い込まれた風合いを出しており、年月の重みを物語っていた。

地上ではメレネーたちが、大きく手を振っている。

探検隊も手を振り返し、さっぱりとした表情で別れを告げた。

「いろいろとあったが、互いに益のあるいい幕引きだったのではないか」

「聖下のおとりはからいのおかげで」

ファルマはお世辞ではなく、心からそう思う。

やはり、帝国のリーダーは彼女でなくては務まらない。

そんなことも実感した。

気球を無事にテイクオフさせ安定飛行に入ると、ファルマは冊子に目を通しはじめた。

<i 5 6 6 8 0 1 — 2 4 9 6 >

## 7章16話 大陸間会談のすえ（後書き）

7章本編終了です。

次回更新は8月1日、7章最後の閑話更新予定です。

閑話 Diary of Scarlett Harris 死者は語る

表紙

スカレーレット・ハリスの日記。

この日記が私の手から離れたとき、おそらく私はこの世にいないだろう。

だからこの日記を見つけた親切な方、そしてこの手帳に記載している言語を完全に理解できる方は

次の場所へ届けてほしい。

ジョシュア・ハリス宛。

アーカンソー州ウィンターヴィル、XXXXXX番地。

私が天に召されていたとしても、どうかこの記録が死なないように、主に祈っている。

中表紙

1926年7月21日

私はスカレーレット・ハリス。

1902年4月3日生まれ。

アーカンソー州ウィンターヴィル、XXXXXX番地在住。

小学校教員の五年目。

一週間前より断続的に降り続いた豪雨により、ミシシッピ川の堤防が百か所以上で決壊。

私の自宅付近一帯は洪水となり広範囲に水没。

避難のために持ち出したカヤックのパドルを激流で喪失し、どれ

ほど下流に流されたかわからない。

濁流がおさまり、川岸に上がってより二日経つ。

不思議なことに、あたり一面に民家はなし。

田畑も橋も町もなく、ひたすら原生林が広がっている。

この二日間、川岸を下ってきたが、誰にも遭遇していない。

私はおそらく遭難した。

州からの救援がくることを祈りながら、遭難日記を書いている。

身体状態の確認から。

遭難時には気付かなかったが、右腕に、身に覚えのない酷いやけどあり。

痛みはない、出血などもない。

メデイカルキットの中の消毒薬と、軟膏、包帯で応急処置を終えている。

持ち物の確認を実施。

練習用力ヤックに積み込んだ非常持ち出し袋と、自宅から慌てて持ち出したもの。

ため息が出る。これが私のすべて。

あとは今ここに日記をつけている、カレンダーつきのまっさらなノート。

あと二百五十六ページあるようだ。

一週間前に父に押し付けられた防犯用サブマシンガンと銃弾。

その説明書。

射撃の腕？ 趣味で嗜むぐらい、当たらなくても野生動物や暴漢と遭遇した際に、威嚇ぐらいはできるかもしれない。実戦経験などはありません、不審人物に遭遇しないように留意。

あとはアリゲーターにも気を付けなければならない。

ミシシッピ川に生息するアリゲーターとの遭遇は日常的なもので、どの湖沼にも生息している。



もちろん遭遇すれば怖いが、人食いとして知られるナイル流域に生息するクロコダイル科とは異なり、アリゲーター科のワニの性質は比較のおとなしく、臆病でもある。

繁殖期にわざわざ攻撃をしなければ襲われることはまずないし、ハンティングの対象になっている。

アリゲーターより怖いものといえば、沼のママシやカワウソぐらいか。

ミシシッピ川流域の住人として、最初に学ぶ身近な脅威であり、私が受け持ちの小学生に教える事項でもある。

脱線した。要点は、遭難が長期化した場合に備えて、無駄撃ちはしないこと。

ナッツとチョコレート、缶詰が三つ。

四つあったけれど、一つ食べた。

着替えが三着。

寝袋。

現金。

懐中時計。

コンパスと地図。

鉱石ラジオ。

マツチ。

ナイフ。

ファーストエイドキットの中にあるもの。

外科用プラスター。

アルコール。

脱脂綿。

救急箱に附属していた冊子「What to do for little ailments and real emergencies」

降り続く雨のおかげで、飲み水には事欠かない。

降りやんだ時のために、容器にためておく。

救援が来なくても、一週間は生き延びる。

ここから先は、めくるめく未知の世界。

トムソーヤーの冒険のようだ。

なに、怖がることはない。

つかの間のアウトドアキャンプを楽しめばよい。

明日にもなれば、飛行機が私を見つけてくれる。

害虫に気を付けて、野宿をすればいいだけ。

気楽にいこう。

ただ心残りは、私の家族や生徒は、うまく避難できただろうかということ。

1926年7月25日

持ってきていた食料がつきた。

沼地のザリガニを直火で焼き、貝を焼いて食べている。

それにしてもこのザリガニ、いわゆる私がよくサイエンスの授業で取り扱うアメリカザリガニではないし、知らない種だ。

生け捕りにしたので、救援が来たら新種として新聞社に情報を発表しよう。

カモを狙っているのに、射撃の腕が悪くありついていない。

搜索隊が船でくると予想しているので、川岸から殆ど動いていない。

アリゲーターが出るので、川岸で寝るのもはばかられる。

主よ、これは何かの罰なのか。

腕のやけどの包帯をとる。

1926年7月28日

遭難してよりずっと、鉱石ラジオが何も受信してくれない。壊れているのだろうか、そうは思っても単純な構造だ。

修理を試みたけど、まだ受信してくれないしな。  
あるいは、放送局も洪水の被害を受けているのかもしれない。  
例の腕の傷は、大きなケロイドになってしまった。  
あまり考えたくないことがある。  
遭難前にはあれほどひっきりなしに飛んでいた飛行機が、遭難してから一機も飛んでいない。  
遠くの山々にも、山腹などに民家は見えず。  
そんなことってありえるだろうか。

1926年7月30日

正午ごろ、カモを狙っていたら、銃声を聞きつけて何者かがやってきた。

何日かぶりに人間に遭えた、そんな喜びと希望は吹き飛ぶ。

彼らは全員、弓や槍を持って、今にも射掛けてこようとしている。  
サブマシンガンを隠して友好的に挨拶をするが、英語が通じない。  
独自の言語を持つ人々のようだ。

奇妙な服装で、人種や文化圏が特定できない。

北米の先住民には顔立ちが似ていない。

私は南米の事物をよく知らないが、南米から北上してきた部族だろうか。

信じられないが、合衆国の把握していない孤立部族だと思われる。  
世界にはまだ発見されていない孤立部族がいるという。

そういった新聞記事を読んだことがある。

互いに警戒しつつ、言葉は通じないながらに挨拶。

私が丸腰なので、武装をといってくれた。

友好的な部族ではないが、攻撃してこないだけまし。

意思疎通はできると判断。

彼らの集落に案内され、歓待を受ける。

彼らの文化水準は私の期待していたものではなかった。

森の中に、半地下のテントのような竪穴式住居を構えている。  
見知らぬ穀物と、芋にありついた。

それにしても、この芋も一度もみたことがない。

アルカロイドなどの毒ではないことを祈りつつ、主の恵みに感謝し完食。

夜は木の上で寝るようだ。

冗談かと思っていたら、本当にトムソーヤーの冒険じみてきた。

私の腕のやけどに興味を持っているようで、何度か触れてこようとす。

1926年8月2日

集落に居候を始めて、しばらくたった。

彼らとの暮らしの中で、日に日に確信が強まってくる。

ここはアメリカ大陸に似ているが、そうではなくて。

ここは地球に似ているが、そうではない。

もう、ここがどこなのかわからない。

不思議の国のアリスにでもなった気分だ。

ただ、元の世界に戻るウサギ穴がまだ見つからない。

お願いだから、夢ならさめてほしい。

私は彼らの生活の中に取り込まれた漂泊者で、ここから出ていく勇気がない。

だって、この集落の外がどうなっているか、まったく分からないのだから。

毎日わけのわからない言語や風俗にさらされて、私が遭遇するのは見慣れぬ植物や動物たちばかり。

それでも私は生き延びる必要がある。

ここの生活に適應するために、少しずつ、彼らの言語の収集を始めた。

彼らの言語のバリエーションはさして多くなく、言語への順応は

うまくいきそうだった。

1926年8月26日

私は彼らと暮らしながら、少しずつ彼らの使う言語を収集している。

(最終頁のメモを参考されたし)

この集落の社会階層構造は興味深い。

一人の若い女性を長とし、集落の全員が彼女の言葉に従っている。集落内の地位が高いものほど、体に装飾的なタトゥーを多く入れている。

長は巫女のような存在だろうか。

北アジア文化圏のアニミズムや、シャーマニズムを髣髴とさせる。集落の中心部にキンダーガーデンのような場所があり、子供たちは集団で生活している。

大人たちは男女の別なく狩猟に出かける。

長は決まった拠点にいるが、あまり姿を見せず引きこもっている。長の姿を見たのは数えるほどしかない。

高齢者は一人としていない。

平均寿命はきわめて短いと推定される。

このような過酷な環境下では、乳児死亡率も高いのであろう。滞在中、乳児が二名亡くなった。

(村落の構造については、下記のスケッチを参考されたし)

1926年9月24日

今日、村の若者が殺害された。

その葬儀というか、埋葬の儀式に参列して、驚くべきものをみた。長は、絵を生きたものにすることができる。

そうだね、私はべつに、頭がおかしくなっていない。

ただ……正確に説明できる自信がない（下に図を描いている）。紋様の描かれた祭壇上に動物の生贄を捧げ、遺体を置き、長が何か唱えると、祭壇の紋様が現実になるのだ。

例えば鹿の紋様を呼び出せば、絵が現実世界を跳ね回る。

長が絵を動かしているのだと、子供たちは言っている。

長はまた、死者と会話をすることができた。

タトゥーが多く入っている者は、霊の姿も声も聞こえるらしい。

一種のトランス状態だと思っていたけれど、どうやらそうではない。

私には何も見えないが、死者の声を聴くというのは、決してまやかしてではない。

何故なら死者が、自分を殺害した相手の情報を語ったからだ。

長と死者との会話によって、すぐに彼を殺害した者の証拠品を見つけることができた。

別の部族に殺されたようだった。

霊への信仰や儀式の種類などをみると、ブードゥーとの共通性もあるようにも見えるが、おそらく関係ない。

私は奇跡をまのあたりにし、主への信仰が揺らぎそうだ。

ただひとついえるのは、ここは地球ではない。

もう、この空に飛行機は飛ばない。

きつとラジオの電波を受信することもないだろう。

私はいつ、家に帰れるのだろうか。

1926年9月30日

ここで私ができる仕事は少ない。

狩猟はできないので、      というか、足手まといだと思われる

る      料理の手伝い。

赤子をあやす、そんなところだ。

もう一つ役目があった。

私はメデイカルキットで集落の人々の怪我の、簡単な手当をすることが出来る。

そういった日々を繰り返すうち、長と話をすることが許された。長の名はメイナという。

彼女の名前は今日初めて知った。

長は私が別世界から来たのだと信じている。

残念ながら、私もそう思う。

腕の傷をみて、ルタレカと言ったと思う。

長は私の腕からルタレカをはがそうとしていたけれど、うまくいかなかった。

これはただの傷なので剥げませんと伝えたと、舌打ちをされてしまった。

彼女は本当に私の傷を私の腕から剥がすつもりがあるようだ。

それができれば、とてもありがたいけれど。

ルタレカというものが私の腕にあるので、長が使っていた、死者と交信する魔法（？）を教えてもらうことになった。

私の腕の傷になにか、神秘性を見出しているようだ。

1927年3月1日

ペンシルの芯が尽きてしまったので、不便だが彼らの使う赤い染料と小枝で日記を書いている。

私がこの不思議な世界に迷い込んだ時、私の腕に現れたやけどの傷。

「無の根、または根なし」というもので、ルタレカと発音する。

彼らの伝承に伝わる偉大な呪術師の印で、この印を持つものは、呪術を使えるようだ。

私は「祖霊」<sup>マアデ</sup>とつながりがないからか、ルタレカの力を使っても、死者と話ができるようにはなかった。

そのかわり、ルタレカを通じて特別な力を授かっていたようだ。

これは洪水を鎮め、大地に実りを取り戻す力だとされている。具体的には、任意の範囲の水を干上がらせることができた。

彼らにせがまれて、広範囲にやると疲れる。場合によっては、翌日まで動けない。

呪力は呪術を使うと減るもので、使い果たすと死ぬという。

しかし彼らは、私が呪術を使うことを期待している。

私が呪術を使うとき、ルタレカはルビーのような美しい光を出す。形容が難しい。あるいは天青石を燃やした時のよう。

彼らの期待に応えられるよう、なおかつ呪力を消費しないよう、精度を高める訓練を行う。

何故、私はこんなものを持たされてここに来たのだろう。

1927年5月8日

未明、寝込みのところを突然の襲撃に遭った。

去年、集落の若者を襲った部族だろうとのこと。

襲撃してきたのは、百人以上（追記。後で数えたところによると、二百八十人）

メイナや呪術師らが具現化呪術で応戦するも、次々に殺されてゆく。  
シンボルゴースト

メイナが真つ先に殺害された。

私はサブマシンガンで応戦。

襲撃者の足元へ向けて射撃を行った。

残弾つき、追いつめられた私は、一方向にルタレカの力を解放した。

そして、……襲撃者は一人残さずいなくなってほしいと念じた。ただ、私の願いはそれだけだった。

襲撃者を全滅させ、私が力を向けた方向に、集落の人間も数人巻き込んでいた。

犠牲となった死骸は体液を奪い取られ、ジャーキーのようになっ



ていた。

その日、私は集落の長となった。

1927年7月1日

私が長となってより、集落の安寧維持に關してずいぶんと腐心した。

アーカンソー州の治安もたいがいだったが、ここはさらに治安が悪い。

何しろ、長の方針が気に入らなければ、いつ寝込みを襲って暗殺をしかけてもいいのだ。

子供を中心に人心掌握にも成功し、母親たちの支持をとりつけているため、少なくとも寝首をかかれないようにはなっていると思う。また、私はルタレカのほかに、彼らの持ちえない知識を持っている、これは彼らにとって私を生かしておく十分な理由たりえた。

教職をしてきてこれほどよかったと思ったことはない。

このところ、マイラカ族の殲滅をはかる周囲の部族との衝突がとみに増えた。

長であったメイナや主だった呪術師らがさきの戦闘で殺害されたことにより、防衛は手薄と見て一気に攻勢をかけてきている。

サブマシンガンの弾が尽き、戦える者も激減、集落の戦力は大幅にダウンしている。

集落の守りを固め、彼らに教育をほどこし、呪術を磨き集落の団結をはかることが当面の課題だ。

呪術の才能に長けた者を集め、戦闘訓練を施し、自警団を組織した。

1927年8月15日

流行性の奇病に見舞われているようだ。

子供を中心に、腹水がたまっているものが複数いる。

私は医者ではないが、ちょうど新聞の特集で読んで、疑っているものがある。

寄生虫の感染を起因とする、住血吸虫症というものだ。

十年以上前、パトリック・マンソン卿が発見し報告したマンソン住血吸虫。

その恐ろしい寄生虫は西インド諸島に生息しているという報告を読み、父とともにカリブの島にバカンスに行くのを恐ろしく思った経験がある。

住血吸虫は水を介して伝染し、巻貝に住み着き、人へも感染する。感染した人の膚には皮膚炎ができたり、発熱や腹水がみられ、糞便には虫卵が出現するという報告だったはずだ。

顕微鏡があれば検査ができたかもしれない、持っていないのがもどかしい。

この風土病に対する特效薬はまだ存在しない。

地域の淡水が汚染されているとかで、汚染された淡水系との遮断を図るべく、生息域の埋め戻しをしている地域もあると聞いたが……。

もし私の予想が正しければ、この地における最大の淡水湖、ピチカ力湖は特に危険だ。

私はまだ幸いにして発症していないが、いつ発症してもおかしくない。

当面の絶対的な措置として、地上のありとあらゆる淡水に触れることを禁じた。

生活に利用できるのは、雨水と、水源の異なる地下洞窟からの湧水に限るとした。

1927年9月24日

1927年10月30日

1928年1月2日

1929年4月12日

ページ数が減るにつれ、小さい文字で日記を書いてきたが、いよいよ最後のページになった。

日記を終わるにはちょうどいい。

先日、墳墓に刻まれていた文字から、新たな伝承を知った。

「紋章を宿すすべての異人を追放するまで、世界の崩壊は繕われな  
い」

異人とは、きっと私のような、この世界への遭難者のことだろう。もう、何もかもうんざりしている。

主が見放し、地の底に落されたような気分だ。

この世界は閉塞している、おそらくは時空から切り離された虚構の世界だ。

私はここにいてはいけない。

ここで集落の人々に慕われながら、季節が過ぎるに任せるつもりもない。

私はただ、家に帰りたいのだ。

それに、私の体に残った呪力もどうやらあとわずかのようだ。

その時が訪れれば、この地における私の存在意義もなくなってしまう。

寝首をかかれるかもしれない、身の危険も心配しなければなら  
ない。

後継者に長を引き継いで、あとのことは託してきた。

私がこの地に来てからの功績はというと。

敵対する6つの部族と和解し、停戦協定を結んだ。

この地に来てからの私を助けた力があるとすれば。

サブマシンガンでもなく。

ルタレカでもなく。

私の脳の中に詰めてきた寡い地球の知識、偉大なる先人の知恵だ  
った。

その知識が私を一帯の族長たらしめ、異なる部族との共存繁栄を  
実現させ、そして何より私というゲストはこの地に留まることを許  
され、生存権を得ている。

私が一帯の族長として認められたからには、もうマイラ族が襲  
われることはないだろう。

私もし主より「彼らに安息を与えよ」という召命を受けてこの  
地に呼ばれたというのなら、

この段階をもってミッション完了としてよいのではないか。

彼らから「ラカンガ」と呼ばれるこの洞窟の果てに、光の渦とい  
う異界への入口があるという。

私は今から、このラカンガを踏破する。

もう、あまり時間はないようだ。

住血吸虫にも感染しているし、継続的な発熱と嘔気に見舞われて  
いる。

倦怠感もひどく、おそらく複数の感染症にかかっている。

私は合衆国に帰りたい。

願いはただそれだけなのだ。

壁の向こう側はどうなっているか。

入ってみなければ分からない。

明日は、家に帰ってコークを飲めるといいな。

さあ、懐かしきわが家へ帰ろう。

ファルマは深いため息とともに日記を閉じた。

二百五十ページ以上、すべてを読む時間はなかったが、だいたいの経過を読んでとれた。

アーカンソー州より生身の状態でこの異世界へと迷い込んだ彼女は、マイラカ族と合流し、呪術を学び、ルタレカの力を使い、その知識をもって集落を住血吸虫の汚染から守り、いくつもの部族をまとめあげ繁栄へと導いた。

（すごいよ……ハリスさん。小学校教師の彼女がこの過酷な環境で、医薬品も医療機器もなしに、二十世紀初頭の知識でこれだけのことを）

最後の日付は1929年10月17日。

地球では世界恐慌を迎えた年にあたり、暗黒の金曜日の一週間前だが、彼女が知る由もない。

メレネーが言った通り、彼女が亡くなったのはラカンガ洞窟だ。ラカンガ洞窟の果てに何があったのか、伝承通りに「光の渦」を見たのかは、今となっては知る由もないが……洞窟内に遺体があった状況から、その先に進むことはできなかったのだらう。

そして、その地で命を潰えた。

ファルマは異郷の地で人生を終えた彼女の歩みをたどり、いたましく思った。

彼女の苦しみは、ファルマがこの世界に来て以来、体感し続けて

いたものだった。

もし、同じ時期にこの世界にいたら、どれほど心強かっただろう。この日記は、アーカンソー州ウィンターヴィル、XXXXX番地在住の家族のもとに帰ることはないだろう。

（こうやって詳細な記録を残してくれたから、彼女の内面をうかがい知ることができる。俺も日記でも書いておいたほうがいいのかないあ……）

そんなことも考えたりした。

ただ、ひとつ救いはというと　　。

（メレネーは、ラカンガ洞窟で彼女の霊を呼び出せなかったんだよね）

生還はかなわなかったのかもしれないが、彼女の魂は自由になって、ひよつとすると彼女が帰還を夢みた生家に帰れたのかもしれない。

彼女の残した手がかりを無にはすまい。

ファルマはそんな思いとともにそつと手を合わせた。

閑話 Diary of Scarlett Harris 死  
者は語る（後書き）

7章終了です。

次回更新は8月8日です。

## 8章1話 闇日食への備え

ファルマら一行は、十時間近くもの空の旅の果てに無事に帝都に戻ってきた。

ファルマ自身の疲労や船員らの休憩のため、到着時間は予想より大幅に過ぎた。

その間、聖帝が借り上げていた宿屋では、聖帝が消えたあの、誘拐されたのだといって上へ下への大搜索が始まっていたが、最終的に聖帝は宮殿にひょっこり帰還していたので大事には至らなかった。

「聖下、もしかしてお忍びで街に繰り出しておられたのでは？」

クロードが疑いのまなざしを向けるが、まさか彼女が新大陸までの道のりを往復していたとは夢にも思わなかったようだ。

「おひとりの行動は、謹んでいただかないと。私ども廷臣は引責で全員首を吊らなければなりません」

国務卿が縛り首のポーズをして舌を出す。  
何を大げさな、と聖帝は失笑した。

「余もたまには一人になりたいこともある。いらぬ詮索はせぬように」

「そうはいいまして」

「聖下は帝国の国体にあらせられます。勝手な行動をなさってはいけません。警護もつけずに……」

「警護もつけずに危険と？」



世界最強の神術使いの座を守る聖帝エリザベスをして、危険に遭おうとするほうが難しい。

「正面からの襲撃はかなわぬとあらば、卑怯な方法で陛下を襲ってくる連中もありましょう。例えば毒物など使って！」

「その場合は侍医団や宮廷薬師を呼べばよい」

特にファルマを呼ぶと、医薬に関する問題はだいたい何とかなってしまう。

聖帝にはそんな認識だ。

「と、とにかく！ 平たく申しますと我々が心配いたしますので！」  
「まったくですぞ。今日という今日は重要書類にサインをしていた  
だかないと」

傍付きの神官たちもあれこれとうるさい。

聖帝。大神官と皇帝を兼ねる世俗と聖職、双方の皇たんとすることは、彼女には窮屈で仕方がなかった。

（やはり早々にパツレをサン・フルーヴの皇帝に据えねばならん。  
任務は大神官のみとして、仕事を減らしたい。パツレにはたんまり  
と仕事をふってやる）

聖帝はひそかに計画を立てるが、パツレを次期皇帝に擁立するにしても、色々と人事が難しい。

（その場合は、ブリュノやファルマがパツレの主治薬師となるのか  
？ いや、パツレならば宮廷薬師、侍医団そのものを廃止しかねない）

皇帝と薬師団という形式は崩れ、単なるド・メディシスファミリ  
ーになってしまう。

それよりなにより、聖帝の計画には大きな障害があった。

これまでの慣習を考えると、パツレと命を賭けた神術戦闘で戦つて、完膚なきまでに負けなければ譲位はなしえないのだ。それが彼女の望みとはいえ、衆人環視の中、わざと負けてやるのも悔しい。無様な姿をさらしたくはない、という気持ちは彼女は人一倍強い。

（まあしかし、ストレートで負けそうな気もするな。それはそれで楽しみだ）

大規模演習で見せたパツレの卓越した神技と、新大陸で見せた異次元の思考の柔軟性。

正直、神力量で押す以外に勝てる手段が見当たらない。あれこれ思案していると、

「母上、今日という今日はお話があります」

仁王立ちになった息子のルイが、いかにも憤慨しているという顔つきで現れた。

その表情を見た母は、怒られの覚悟をきめる。

聖帝は有無をいわず別室へ連れていかれ。息子からの苦情に延々三時間付き合ったのち、ようやく解放されていた。

「叱られましたか」

聖帝の消えたドアの前で三時間も出待ちしていたノアが、感想を伺う。

廷臣らは誰も、ノアが待機していることには気づいていなかった。彼の隠形能力のなせるわざである。

「やれやれ。喉がカラカラだ。飲み物を持ってきてくれ。あの子も口が立つようになって容赦がない」

「お疲れ様でございました。すぐにお持ちします。殿下をお部屋にお連れしましょうか」

「ルイは言いたいことを言って寝た。ここにいるのだそうだ」

「さようでございますか。帝国語にも堪能になられて、喜ばしいことでございますね」

「そうとも言つか。そのほうの言う通りだな」

聖帝は懲り懲りだというように頷いた。

「そなたも、吸虫症に感染したとき。しばらく休暇をとって、ゆっくり体調を整えてまいれ。いつも言っておることだが、余の身の警護は必要ない」

「お暇を頂いている間に、私のことをお忘れになりませんか？ ただでさえ、影が薄いので」

「余をみくびるでない」

「ありがとうございます、聖下。お飲み物をお持ちして、今日は失礼します」

ノアは恭しく礼をし、足早に廊下を歩み去った。

「なるほど、余が退位すれば困るものもそこに一人はいるか」

皇帝の後ろ盾がなければ、存在自体が隠形状態のノアは忘れ去られてしまう。

まこと、政はしがらみだと聖帝は肩をすくめた。

ファルマがド・メディシス家に戻れば、ロツテとブランシュは帰還にほっとしたようだ。

「よくぞご無事で！」

「ただいま。ごめんね、勝手に抜け出して」

今日は説教も覚悟しなければならないな、とファルマはひやひやだ。

帰宅したファルマは、屋敷に入るなり、いたるところに貼られた神術陣に気付く。

「多いな！ 屋敷に神術陣を張り巡らせたのはロツテ？」

筆跡が全部同じなので、それと聞かなくてもわかつている。  
やりすぎと思わなくてもないが、ロツテはそれだけ必死だったようだ。

「はい、百枚書きました！」

「手書きで！」

「はい」

謄写版を使うわけにもいかないのだろうしな、とファルマはつまらない。

「悪霊でも出たの？」

「出てはいけないから、です。ファルマ様と聖下のご不在とあつては、帝都に何が起るかわかりません。前のようにならないために、お屋敷を守らなければと思いますて！」

ロツテは火焰神術陣の護符を書きすぎたのだろっ。  
臙鞘炎になったのか、手首に包帯を巻いていた。

「それは心配をかけてしまったね」

帝都には守護神殿の秘宝が戻ったといっても、ロツテは不安だったのだろっ。

「でも、シャルロツトのしたことは決して無駄ではありませんでした。屋敷の隅で、悪霊が火焰神術陣の護符にひっかって浄化された形跡がありましたよ」

ファルマのカバンを受け取った、ファルマの専属使用人のシメオンがロツテを弁護する。

「えっ、本当ですか　お役に立てて嬉しいです」

ファルマはロツテの苦勞が報われてほっとする。

「ありがとうね、ロツテ。ロツテの神術陣は、大陸で探検隊の護身に活用されたようだよ」

ファルマがそういつてねぎらうと、ロツテはますます嬉しそうだった。

ロツテとやりとりをしていると、ブランシュからの視線に気づく。そういえば、と振り返れば、ファルマはブランシュを置き去りにして新大陸に向かったのだ。

今更のようにそれを思い出したブランシュは、

「小さい兄上。私を置いて行ってひどいのー」

「ごめんな。でも、ブランシュにはやっぱり危険だったんだよ」  
「もー！ 子供扱いしてー！」

ブランシュが神杖でしばしと叩いてくるが、ファルマは叩かれるに任せるしかなかった。

ブランシュがふと、パツレの姿が見えないのに気づく。

「いつもね、兄上がいつか帰ってこなかったらどうしようって思うんだよ」

ブランシュは本音をぶつける。

そしていつか、その懸念は現実のものとなる。

ファルマは切なくなつて、ブランシュの頭を優しく撫でる。

ブランシュはひしつと抱きついてくる。その手に力がこもっている。

いつだって、残される者は立ち去る者より痛みを負う。

「大きい兄上と一緒に帰ってないの？」

「あれ、さつき馬車で一緒に帰ってきたのにどうしたんだろう」

てつきりパツレと二人で怒られていると思ったら、パツレがいない。

パツレはよほど疲れたのか、馬車の中で寝ていた。

揺さぶっても起きないので、今度こそ神力切れのようだった。

「これは、今日は起きないかもな」

神力を補充することもできるが、体力の回復も必要だろうと寝ただけ寝かせていたら、翌日朝に起きてきた。

< i 5 6 1 0 0 1 — 2 4 9 6 >

月日は流れ、一一四八年五月一日。

「五月一日になっちゃった」

ファルマは茫然としつつ、自室のカレンダーをめくる。  
口に入れた歯ブラシを左右に動かしながら考え込む。

「この世界にもゴールデンウィークがあつたらよかったのになあ」

ファルマはこれでもかというほどたまっている仕事を消化するた  
めの大型連休がほしい。

それなのに、基本、貴族には大型連休というものがない。

日曜日が休み。

それから帝国の独立記念日。

聖下の誕生日。

ぱらぱらと入る守護神の祝日のみ。

薬局は土曜日と日曜日が定休日だが、それはファルマが無理やり  
休みにしているだけだ。

「闇日食は……八月のいつだっけ」

サロモンとジュリアナの教えてくれた闇日食の候補日は、きちん  
と特定できていないが、八月の下旬だったはずだ。

他の仕事に夢中になっていて、すっかり対策を後回しにしていた。  
帝都に帰還してからも、ファルマも今まで以上に忙しかった。

探検隊のうちほとんど、住血吸虫症に侵された人々は帝国医薬大  
に収容され、入院措置がとられた。

ファルマはつきつきりで彼らの治療にあたっていたことになる。

ファルマは片山熱として知られる急性症状、すなわち住血吸虫に感染したことによって生じる発熱などの症状を呈する感染者に対し、糞便や尿中に虫卵を検出した場合はエレンが用意していたプラジカントテルを迅速に投与した。

プラジカントテルは二日間の服用で治療効果を発揮する短期決着型の薬剤で、副作用も軽度なものばかりで重篤なものはない。

ただ、プラジカントテルは成虫には効果があるが、幼虫には効果が不十分でもあった。

このためファルマは、診眼や帝国医薬大の検査技師の顕微鏡下で虫卵の有無を確認してもらいながら、投薬のタイミングに注意を払い、六週間後に再治療を計画している。

また、薬の飲み合わせにも気を付けなければならない、結核治療薬であるリファンピシンと併用すべきではない。

一部の抗けいれん薬、胃薬、抗真菌剤を使用中の患者がいないかを確認し、併用禁忌とならないよう薬歴を確認して神経をすり減らした。

症状の強い人には、追加でプレドニゾロンも数日投与を行った。プラジカントテルの投薬のみならず、エメリツヒと協力して抗体を利用した住血吸虫の虫卵を破壊する措置をいくつか講じたおかげで、ようやく治療のめどがたち、重症化していた人々もおおむね回復してきた。

あとは帝国医薬大の医師や薬師らに患者を引き継ぎ、急変があったときには呼んでもらうようにしている。

すでに退院した人々も、再発に備えてフォローアップが必要だ。



そんなこんなで彼はいつものように多忙を極めていた。  
カレンダーの前で動かなくなっているファルマに、シメオンがさ  
っさとシャツを着せてタイを結んでくれる。

「リマインドが必要でしたら、私が記憶しておきます」

「ありがとう。でも、気軽なもんじゃないから、いいや」

「そうですか」

今日の予定は闇日食です！　と言われても手遅れとしか言いよう  
のない状態だ。

周到に対策をうつておきたい。

その日を境に世界が一変するかもしれないし、何ならファルマの  
命日になるかもしれないのだ。

「お食事のご用意ができております。スープを温めておきます」  
「すぐ行くね」

ファルマは朝食の席で、あれやこれと考え事をしていたものだけ  
ら、フィンガーボウルに神術水を張るのをしくじった。

それを見ていたブランシュがファルマの腕を引っ張る。

「あにうえ、おぎょうぎがわるいの！」

「ごめん。こぼれちゃった」

マナーは悪いが、ファルマはあたりを水浸しにしようが、全く問  
題に思っていない。

いつものように水を消そうとすると、シメオンが慌てている。

「ああつ、ファルマ様。今お拭きいたします」

同席していたパツレはシメオンがナプキンを持つてくる前に、ファルマの代わりにテーブルにこぼれた水にすつと指をあてがい、そつなく水滴を消してみせた。

「粗相はいかんぞ」

「すごい、兄上！」

水の負属性の能力を手に入れたパツレは、あたかも生来そうだったかのように使いこなしている。

「私も水を消すの、やるー！」

ブランシュもファルマたちに褒められたい一心で真似をしたがつているが、ブランシュには難しいようで、あまりに力を入れたものだから、ボウルに手をつ込んで今度は全部ひっくり返してぶちまけていた。

「あにうえー、かわかして！」

ブランシュは納得がいけないといった顔で二人の兄に助けを求め

る。

「よしきた」

今度はファルマがシメオンから受け取ったタオルで頭をわしわしとふいてやった。

ファルマは一人、神聖国の統治を任されているサロモンを訪ねた。サロモンは大神殿の中枢部で聖帝エリザベスの信任を受けて執務を行っており、現地の最高責任者だ。

ほかの神官からの評判によると、彼は何をやらせてもおそろしく有能で、実務者としててきぱきと任務にあたっているようだ。

内臓逆位を持つ彼が広い神聖国の中でどこにいるかは、ファルマには上空からすぐにわかる。サロモンの部屋を突き止めたファルマは、何事もなかったかのように執務室の前に立つ。

物理的にドアを叩くことのできないファルマは、物質界に干渉しうる新しい薬神杖を構えて勢いよくノックをしようとする。

「ようこそファルマ様」

サロモンはファルマがドアをノックする前に、内開きの執務室の扉を勢いよく開く。

ノックを空振りしたファルマは、サロモンの額を思いきり杖で打ってしまった。

「す、すみません……ドアが開くとは思わず」

「……いえ。ご来訪がわかりましたのでお出迎えをと」

サロモンが床に目を落とすので、ファルマは神聖国のすべてのフロアに仕掛けられた守護神トラップを思い出した。

「ああ、これですか……」

ファルマは念のため、サロモンに冷却用の氷塊を渡しておいた。それで額を冷やしながら、サロモンは何事もなかったかのように話を進める。たんこぶぐらいできるかもしれないな。とファルマは申し訳ない気持ちで一杯だ。

「それで、ご用向きは」

「闇日食の対策を打ちたいので、相談にきました」

「それは奇遇でございました。闇日食にむけては、もちろん神官全員が危機感をもって準備にあたっています」

闇日食とは大神官の背に刻まれた融解陣が溶け落ち、大神官が代替わりをする日だとして知られている。

聖帝エリザベスの背にはもう融解陣はないし、それは培養細胞上に隔離されている。とはいってもそれでうまくいくのか、絶対に彼女の安全が保障されているかという不安になってくる。やれ安心だといって胡坐をかいているわけにはいかない。

「細胞の培養技官には常時平民を任用しており、闇日食の日を無事に経過すれば、他者への融解陣の憑依の可能性はないと考えます」

「ありがとうございます、適切な対応だと思います」

「ファルマ様とエリザベス聖下におかれましては、ぜひともご安心いただきたく」

サロモンは忠心をもって伝える。

「別の対策も講じていた方がいいでしょうか？」

「ほかに何か案が？」

融解陣は人を溶かし、鎧の歯車の潤滑油にするのならば、人体の融解、それを防ぐ薬があるとすれば、プロテアーゼ阻害剤や、カスパーゼ阻害剤かもしれない。

生体反応を超えて急速に進行する場合は手に負えないかもしれないが、これらの薬を準備しておく必要がある。

「憑依されると思しき人間全員、当日一日だけでも“爾今の神薬”を飲んで備えていたほうがいいかもしれません。それから、神聖国

からはその日一日、全員退避していただきましょう」

それで十分だとは思えないが、最低限の対策も打たなかったとなれば後悔する。

「は、仰せのままに。前後三日間、神官全員を神聖国から遠ざけます」

「よろしく願います」

ファルマはサロモンに現地の指揮を任せることにした。

「しばらく見ていなかったので、鎧の歯車の様子を見に行ってもいいですか？」

「同行しましょう。決しておひとりではなりません」

サロモンは傍づきの神官に、一定時間が経って二人とも戻ってこなければ全員国外に脱出するようにと告げた。それは、ファルマとサロモンが二人とも鎧の歯車の犠牲になったことを意味する。

「付き添いに大人数は必要ありません」

「は、しかし危険では」

神官たちが心配するが、ファルマは首を横に振る。

「付き添ってもらうほうが危険です」

「はあ」

大人数がきても、何かあった場合に助けられないのだ。

サロモンに案内され、ファルマは床の鉄板を一枚隔てて再び地下

にある錠の歯車と対峙する。

床部の嵌入後にファルマが底うちした錠の歯車の蓋は、ここを去ったその時と変わらない状態だった。

蓋を開けてみなければ中の様子はわからないが、ここを開いてはならない。

そんな直感がファルマに警鐘を鳴らしている。

「表向き、変化がないように見えます」

「ええ……融解陣に憑依されてしまうということもありえますから。このまま蓋をして誰も近づかないようにしています」

「それが最善だと思います」

ファルマはサロモンの判断に間違いはないと思う。

「よかった、お戻りになって」

ファルマとサロモンが地上に戻ると、ハラハラとしながら二人の帰りを待っていた神官らに出迎えられる。

「おかげで、戻ってきました」

ファルマは歓待をやり過ごしながら神聖国を歩くと、神官らがあるとからついてくる。

神聖国に足を踏み入れた先ほどの瞬間を境に、ファルマの訪問はバレしてしまうのだ。

いつまでたっても、内緒で訪問とはいかない。

「薬神様！ ようこそお越しくださいました」

「道中お疲れでございましょう、沐浴などいかがですか」

「ああ、すみません。お構いなく」

あつという間に神官の人だかりに囲まれて動けなくなる。  
顔見知りの神官がファルマに伺いをたてる。

「薬神様、今日の御昼食はお決まりですか？」

「軽食を持ってきました」

小腹がすいたときに、パンやドライフルーツなどを持ってきている。

神官らに用意してもらおうとは思っていなかったが、そうもいかないらしい。

「もしご迷惑でなければご昼食を用意しておきますので。ご用が終わりましたら、食堂へお越しください」

「ありがとうございます。ではありがたく伺います」

ファルマは神聖国内の案内板を眺める。

「図書館はどこかな」

小さな国だというのに、何度訪れてみても、神聖国内部の建物構造を把握できない。

複雑に建物が入り組んでいて、地下構造も凄まじい。

誰かの案内がなければ迷子になるが、あまり供を連れて歩きたくもないのだ。

ファルマはしばらく歩いて図書館を探し出し、リアラ・アベニウスを訪ねる。

「うわあつ、薬神様！」

リアラは禁書庫からでてきたところをファルマと鉢合わせして、持っていた本を全部落とした。

「すみません、突然現れたので」

リアラの本をひとつずつ拾ってあげながら、ファルマは彼女の体調を観察する。

「今日は何の御用でございますか！ あ、ご依頼の調査内容なら既にまとめております！」

「早い調査結果をありがとうございます。あれから喘息は少しはよくなりましたか？」

「はい！ 書庫の掃除をして、閲覧室もきれいにしました」

屋根裏がものすごいホコリだったんですよ、とリアラはおぞましそうに述べた。

「それで、きれいにすると、発作が出ることはなくなっただんです。薬神様の出してくださったお薬もよく効きました」

目ヤニも出なくなって、禁書もよく読めますよ、と嬉しそうに語る。

「そろそろ薬が足りなくなるころかと思って、届けにきました」

「ええっ、私のことを覚えていてくださったのですね」

リアラは感激して何やら祈りを捧げはじめが、ファルマは患者情報をノートに一元管理していて、誰の薬が切れるか、きちんと把握しているのだ。

ファルマは薬袋をリアラに渡して、依頼していた古い聖典の調査



内容を受け取る。

「ありがとうございます。また調査をお願いしますね」  
「よろこんで」

お互いにもちつもたれつの良い関係を築けているようだ。

エルヴェティア王国はずれの寒村の平民の少女エマは、村の入口に現れたファルマに駆け寄った。

「宮廷薬師様！」

洗い場で野菜を洗っていたエマは、何もかも放り投げてファルマの元に駆け寄ってきた。

「エマさん。薬局に手紙をありがとうね」  
「もしかして、手紙をよんでくださったのですね！」  
「ちゃんと届いたから、顔が見たくなって」

先月、エマからは近況を記した手紙を受け取っていた。  
その返事は直接、と思っていた。

「この私なんかのために、サン・フルーヴからですか？」  
「神聖国に用があったから、そのついででもあるよ」

以前は高熱を出していたエマの母親も飛び出してきて、嬉しそうにしている。

「そのせつは、本当にお世話になりました」

ファルマが立ち寄ったのはついだが、できるだけ足を延ばして、少しずつこれまでに会った人々の元を訪れている。

もう、いつか最後がくるかもしれないから。

「血豆、あれからどうなった？」

エマはよい靴をはいている。ささやかな変化に、ファルマも嬉しくなる。

「はい、靴を変えたらできなくなりました！」

「それはなにより」

「神官様たちが神術陣を敷いてくださったおかげもあり、あれからぴたりと悪霊も出なくなりまして。村民一同、ほっとしたところですよ」

エマの母親が教えてくれる。

「こんど、近くの街道に薬局ができるみたいですよ。薬師様のおかげですか？」

エマははしゃいでいる。

聖帝の下命により、国外のギルドと提携して医薬品を供給する体制が整いつつある。

「ああ、あそこは異世界薬局の提携店なんだ。エルヴェティアの薬師ギルドと提携して、出店をすすめているよ。一般用医薬品が安価に買えるようになるはずだ」

エマが母親のために、血豆がつぶれるほど歩き求めた薬を、それほど遠くない場所で安価に買い求めることができたなら。

きつと人々の暮らしが変わるはずだ。

ファルマはそんな信念のもと、聖帝の強力なバックアップのもとに、提携薬局の国外出店、ノウハウの共有を急いでいる。

「わあ、嬉しいです。これで隣町まで買いに行かなくてもよくなります」

人々の健康を守るため、必要とする人に、薬が届くように。そこで提供される医薬品は世界中のどこでも同じ品質であってほしい。

それを取り扱う薬師も、高度な知識を有する、頼れる専門家であってほしい。

今もファルマはこの世界に、そんな未来を思い抱いている。

## 8章1話 闇日食への備え（後書き）

次回更新は8月15日です。

謝辞：本頁の住血吸虫の治療法につきまして、医師の村尾命先生に監修いただきました。

どうもありがとうございました。

## 8章2話 帝国外科医ギルドと狂犬病

サン・フルーヴ帝都のはずれに、由緒のある大きな平民屋敷がある。

幾重もの野バラの生垣に囲まれ、人を寄せ付けない深い森を抜けた先にあるそこは通称、アガタの薔薇屋敷と呼ばれていた。

門柱にあしらわれた大きな医神の彫刻が目印の、このバラ屋敷には別名がある。

サン・フルーヴ帝国外科医ギルド（別名帝国平民外科医師会）本部だ。

この組織は帝国の平民医師のためのギルドであり、床屋外科を前身とする。

専門範囲は外傷、体表面に存在する（深部ではない）潰瘍の切除、浣腸、創傷治療、瀉血、周産期管理など。

たまに、床屋を兼業で営んでいる医師もいる。

基本的に、平民以外を診ることはない。

外科医ギルドが辺鄙な場所にある一因は、その不遇の歴史に由来する。

この世界では長らく、医学の花形というと薬草学を用いた薬学だった。

床屋外科は血を扱うことで穢れを引き受ける職業とされ、貴族世界でも平民世界においても帝国薬師ギルドの一段下に置かれていた。暴利をむさぼり私腹を肥やし、各地に豪邸を建てた薬師の集う薬師ギルドとは異なり、帝国の中心部に堂々とギルドを構えることができなかったのも、迫害の名残をおわせる。

帝国における外科医の立場を引き上げたのは、先帝の腫瘍摘出手術に成功し侍医長の座に就任した、医神の加護を持つ外科医のクロード・ド・シヨールアックだと言われている。

彼は平民医院や施療院の保護を行い、皇帝への働きかけを通じて、床屋外科医たちに一定の予算を措置し続けている。

そして、クロードの師にあたる人物が、この薔薇屋敷の女主人、アガタ医師だった。

彼女は現在は平民であるが、もとは侍医を務めていたほどの人物であり、数々の手術手技を開発した。宮廷内でクロードに技量を追い越されたと知るや、神殿に乞い、自ら神力を封鎖して平民へ降下し、身を引いてこの地に隠居して数十年たつ。

彼女は医師として築いた財を投じ平民の床屋外科らを組織し、外科技術を伝え、外科医師ギルドを立ち上げた。

ただ、平民の組織であるため、帝国侍医団や、貴族の医師らを会員とする帝国医師会とは交流はない。

今年で八十歳になるアガタは、帝国各地から集った主要な平民医師ら二十名ほどを会議のテーブルに招き、彼女が庭で育てたローズヒップティーと、ハーブの練りこまれたクッキーをふるまい、それらを嗜みながら憂わし気に議題を読み上げる。

「最近、辺境を中心に帝国の医院での平民の死亡率が高くなっているようにですね」

先月も、憂慮すべき事項として報告が上がっていた。だが、今月は顕著に悪化している。

「は、そのようです」

アガタは資料を読み込んでいる。

「帝国医師会は、貴族・平民医師ともに筆頭宮廷薬師ファルマ師の経営する異世界薬局の薬を術前、術後管理に採用しました。師の提言通りに手術部位、血管、血流に対する感染防御を行うこと、深刻な出血には輸血を行うことで、以来目覚ましい治療成績をあげてきました。医師会本部にファルマ師を招き、研修会を執り行ったこともありましたね。うまくいっていた、そのはずでした……」

思い切った改革として、帝国医師会はそれまで多大な需要のあった瀉血の施療をとりやめた。

何かあれば瀉血。よくわからなくても瀉血と、安易に用いられ、患者も瀉血を希望してきたのだが、ファルマの報告書によれば意味のないどころか有害な治療法であったとして、アガタの旗振りにより、真正多血症の場合を除き、帝国中の医師たちに一切禁止したのだ。このため、瀉血患者におんぶにだっこだった各医院の収入は激減している。減収にくわえて、この難局。アガタのため息は深くなる。

「アガタ先生……」

「どこで道を間違えたのかしら」

アガタはファルマの方針に従ったのは間違っていたのだろうか、と振り返っていた。

所詮、貴族の開発した治療法では平民を救うことはできないのだろうか、とも。

「ファルマ師のもたらした知識は確固たる理論に基づいた革新的なものでした。私は目を悪くして、もう十年も前にメスを置きました。ですが一人の外科医として、神術に頼らない外科技術確立のための最短の道を、外科技術の躍進を信じていました。しかし、その希望が崩れ去ろうとしています」

アガタは眼鏡をはずして、深いため息をつく。

「私があと二十年も若ければ、寝食を忘れ徹底的に原因を調べ尽くしてやれたでしょうに」

この世界では、外科医は視力、集中力、長時間の手術への負担が大きいため、体力がもたなくなれば引退し後進に道を譲りマネジメントに精を出すというキャリアが一般的だ。ごくまれに、床屋に戻る者もいる。ずっとはできない仕事だからこそ、後輩へは道標を示したい、アガタは強くそう願っていた。

「まっってください」

帝都の中心部に医院を構える دونالد 医院の老医師が、深い皺の刻まれた手を挙げる。

「私の医院では、手術成績に変化はありません。むしろ向上の一途をたどっています」

暗雲の立ち込めていた議論に光明が差ししてくる。

「あら。そうなの？」

「本当です」

「Donald 先生の医院は、異世界薬局から最も近い医院ですね。フアルマ師が手伝いに来てくださるのですか？ 最近、繁盛していると聞いています。異世界薬局の恩恵があるのですか？」

帝都在住の別の医師が Donald にかねてよりのやつかみをぶつける。



「はい、輸血が必要なときには異世界薬局の薬師が直接きてくださいます」

ドナルドは思いがけない糾弾に面食らったか、うつむいてしまった。

「異世界薬局には貴族の薬師がいますし、貴族は神術を使いますからねえ……応援にきてくれれば……浄化神術でもかけてもらっているのでは？」

「い、いえ。そのような」

「ははあ、なるほど」

「しかしドナルド先生は羨ましいなあ、うちも異世界薬局の近くに引っ越しをしましょうかねえ」

ドナルドの隣の医師がドナルドの医院の立地の優位性を述べる。ほかの医師も羨望のまなざしを向ける。治療成績は医院の繁盛に直結するのだ。

「貴族の医師も薬師も鼻で笑って、平民医師の応援になんてきませんからね。門前払いがいいところです、対応してくれるのは異世界薬局だけですよ」

思わぬところから流れ弾を食らったアガタは、貴族とも平民ともどちらともつかない立場に居心地悪そうに咳払いをする。

「そうですね、貴族の医師も薬師も浄化神術も使いながら治療をしますからね。ですが、そういうことではないのでしょうか？ ドナルド先生」

「はい。ファルマ師は手を出しません。浄化神術もかけていただい

たことはないです。辺境の医院で成績が悪いのでしたら、症例をもっとよく検証するべきかと」

批判そらしとれる発言だが、 دونالدは俯瞰的な検証を求めた。

「そうですね。集計によると、動物による噛傷の治療の成績が著しく低下しています。手術例を見ても、どれも深刻な咬傷ではありません」

「死因は？」

「発熱や錯乱、最終的には昏睡からの死亡です」

「何かに感染したのでは」

感染、という概念はこの数年で世界中の医師と薬師の間に急速に広まった。

今や悪疫と呼んでいたものの一部は、感染症によるものであったということが、顕微鏡の発見によって明らかにされた。感染症の概念を学ぶことによって、かつて死病として恐れられていた症候群、黒死病や白死病などは治療見込みのある感染症となった。

外科医の天敵、傷の腐敗を防ぐこともできるようになった。

感染制御を学ぶことによって、今や帝都の出産は世界一安全だ。

何もかもが変わったのだ。ファルマが世に広めた。

彼を信奉するものは多く、帝都は彼の手によって何度も救われていた。

「私もそう思いましてね。かつての教え子の手を使って帝国医薬大の臨床検査部に検体を送りました。あそこにはファルマ師が教育した精鋭の技師団がいます。でも、何も出ませんでした」

医薬大の検査結果は世界最先端の科学技術に基づいて検査が行われている。感染症ではないと否定されてしまっただけだ。それ以上、疑義を出せる判断材料もない。

感染症は、外科医の専門外だ。

「悪霊憑きの動物に噛まれたからではないのですか？」

ドナルド医師は可能性の限りを並べてみた。アガタは大きくため息をついた。

「それでしたらもともとは厄介で、打つ手がありません。悪霊憑きは貴族の外科医に診てもらったか、神官を呼ぶしかありません」

平民は悪霊をはらうことができない。

そして、平民を診てくれる貴族の外科医もいないのだ。ドナルドは納得がいかないという様子だ。

「症例報告を持ち帰っても？」

「かまいませんよ、手分けして原因の究明にあたりますよ」

医師ギルドは大きな課題を抱えることになった。

ドナルド医師は帝都に戻るなり、一直線に異世界薬局を目指した。

（なんとも言う方がいい、軽蔑する方がいいさ！ 私は叡智を仰ぐ）

あてになるのは遠くの同業者より、近所の薬店だ。

なんでも相談をしてほしい、と口癖のように言っていたファルマの言葉を鵜呑みにして、ドナルドは相談を試みることにした。

（社交辞令だろうかまうものか、きっと彼は答えにたどり着く）

閉店に間に合ったので思い切って異世界薬局に突撃してみると、そこにファルマの姿はなかった。エレオノールという薬師が対応した。

「あら。ドナルド先生。あいにく、店主は今いませんけど何か」

「では明日また出直してきます」

エレオノールでは手に余る案件だろう、とドナルドは彼女を値踏みする。

「店主でないとできないお話ですか」

エレオノールが落胆したように見えたので、ドナルドは慌てて否定する。

「いえ……詳しい方でしたらどなたでも」

「では私が伺いますよ。せめて、解決しなくても用件だけでも」

エレオノールは人懐っこくほほ笑み、店舗を閉めてしまった。じつくりと話を聞くつもりがあるのだろう。

「僕も聞きたいです！」

さわやかな印象の、大柄な青年が寄ってきた。ロジェと名札に書いてある。

「私もうかがっても？」

集まってきた薬師の名札にはセルスト、レベツカと書いてある。  
仕事を終えた四人の貴族の薬師がドナルドを囲んでくるので、ドナルドは圧倒されてしまう。

（貴族に囲まれるとは贅沢な気分じゃのう！）

ドナルドはそれでも若干面映ゆくなりながら、手早く床屋外科医たちが直面している問題を資料とともに打ち明けた。

資料を閲覧していたエレオノールが、確信したように頷いて分厚い教科書をとりにいく。

バツサと教科書を開いて、ドナルドに示す。

「私は狂犬病を疑いますわ」

「です」

「はい」

「私も」

エレオノールの後に、三人の薬師が頷く。話を聞いた全員がそう口を揃えた。

ドナルドはリアクションできずにいた。

（えっ、何でそんな一瞬でわかるんじゃ。この薬師らはみな、筆頭宮廷薬師のファルマ師に匹敵する知識量があるんか！）

ドナルドは示された項目の概要欄を読んでみる。感染症だとある。

「え、でも感染症ではないと帝国医薬大の臨床検査部のお墨付きで」

ドナルドはアガタから借りてきた検査結果の写しを示す。エレオノールは検査項目を確認して、首を横に振った。

「この項目では無理です。狂犬病ウイルスは帝国医薬大では検出できないんですよ。あ、ほら。やっぱりそうです」

エレオノールは念のため、帝国医薬大の臨床検査部の内部資料を確認しているようだった。

「それに、どんな検体を出しましたか？ 患者が生きているうちですか？ 唾液、髄液、角膜塗抹標本、頸部皮膚……」

新品の一级薬師のバッジをつけたレベッカが後を続ける。

「いや……アルコールで固定した組織片じゃ」

「それでは固定も悪いし難しいですね、ギリ、蛍光抗体法ができるかどうか」

さらにレベッカの後を受けて、エレオノールが困ったような顔をする。

「狂犬病とは人畜共通感染症のひとつで、狂犬病ウイルスによって引き起こされるものです。ウイルスを保有する特定の動物に噛まれたり、ひっかかれたりすると傷口からウイルスに感染し、噛まれた部位より神経系を通じてウイルスがゆっくりと脳を目指し、数か月の潜伏期間の後、風邪のような症状に始まり、最終的には昏睡、呼吸の停止によって死亡します。一度発症すれば、必ず死亡に至ります。まだ治療法が打ち立てられていない、恐ろしい感染症ですわ……」

ドナルドはエレオノールの説明に鼻水がたれそうになった。

「はあ……ゴホッ、ガハッ」

彼らとは知識量のレベルが違う、とドナルドは実感し、口を開けすぎたので痰が喉に絡んだ。

「あら失礼、お飲み物も出さず」

エレオノールがよく冷えたアイステイーを出してくれる。

それで喉を潤しながら、ドナルドは言われた内容を反芻する。

最近では認知機能の衰え始めた脳には、理解するのもきつい内容だ。

「ついるす？」というところから聞かなければならない。

「完全に治療法がないんですつけ。たしかそう書いてあったと思いますけど」

ロジエという名札をつけた薬師がエレオノールから奪った教科書をペラペラとめくっている。

「完全じゃないのよ。有史以来、世界一致死率の高い病気といわれているそうよ。だからファルマ君がワクチンを開発しようと奮闘していたの」

「砂糖と一緒にてんさいの葉の中で作らせてしまおっかな！とおっしゃっていたやつですか？」

エレオノールの言葉を受け、セルストが思い出したように手をぼんとうつ。

「いえ、狂犬病ワクチンに関しては野犬からウイルスを採取して培養細胞を使って増殖させ、それを分離して不活化ワクチンの試作品

を作っていたわ。ファルマ君はできないからエメリツヒ君とジョセフィーヌちゃんが」

「用意周到ですね、さすがは店主様です」

レベツカが感心したように頷く。

「そういえば店主さんってなんで細菌やウイルス培養できないんですか？」

ロジェが不思議そうに尋ねると、エレオノールも歯切れが悪い。

「さあ……神力の影響かしら。ファルマ君が微生物を飼うと殆ど死滅するんだって」

「チーズ工場とかこないでほしいですね」

「ワイン工場も酵母菌が死ぬです」

「パン屋立ち入り禁止ですね」

はた迷惑な能力に、三人の薬師らは率直なコメントを出していた。

「いや、そんな体質があるなら外科医にとっては守護神のようなものですじゃ。手術の際に傍にいてほしいぐらいですじゃ。ファルマ師は外科医になるべきお人ですじゃ」

「たしかにそうですね」

エレオノールはドナルドを置き去りにしていたことに気付いたらしく、愛想笑いをした。

「ファルマ師の名前からして、そういう星のもとに生まれているような気がしますのじゃ」

「名前については、お師匠様の思いつきだからあまり言わないであ



「教えてください」

ブリュノ・ド・メディシスのネーミングセンスについては触れてはいけないようだった。

「ええと、すみません脱線しました。異世界薬局には外傷の患者さんがあまりこないのも、狂犬病が流行していることに気付きませんでした。それは一大事ですので、さっそくワクチンを外科医院に提供し、動物に噛まれた後に曝露後ワクチン接種をしましょう」

「え、ええんですか！　というか、ワクチンって？」

エレオノールは嫌な顔ひとつせず、ワクチンについてイラストをまじえてドナルドに説明をはじめた。

「感染症にかかると、体内ではその病原体を攻撃し排除する免疫がつくられます。この免疫のしくみを利用して、あらかじめ細菌やウイルスに対する病原体に抵抗するための免疫を作り出し、実際に病原体が体内に侵入したときに発症や重症化を防ぎます。ワクチンには主に三種類あり、生きたウイルスや細菌の病原性をおさえた生ワクチン、病原体の感染能力を失わせた不活化ワクチン、病原体の毒性をなくしたトキシイドにわけられます。店主が造っていたのは不活化ワクチンで、実際に動物細胞に感染させて増殖させ、それを不活化。ウイルスのパーツをバラバラにすることによって得られます」

「ということは、病原性のないウイルスということになるんか」

ドナルドは混乱しながらも要点をまとめる。

「そうなります。完全な弱毒化ウイルスの生ワクチンと比較して、不活化ワクチンは残骸なので、私たちの体にある免疫細胞に、これは攻撃対象だと学習させるために何回か接種する必要がありますが、

そういうことなので、狂犬病ワクチンは安全ですよ」

「血液中にそんな異物を取り込んで問題ないんか？」

「もともと、血液中には数えきれないほどの、活動中の細菌やウイルスが侵入してきていますよ。私たちの免疫細胞はそれと日夜戦っているのです」

レベツカが諭すような口調で補足した。

「異世界薬局マーセイル工場にワクチン精製指示の電報を打ちましようか。店主様にも報告しておきますね！ 弟にも指示を送りますわ」

「おねがいね。助かるわ」

セルストがすぐに打電の準備をする。

あわただしくなった薬局で、取り残された医師が一人。

「どういことですかのう」

「店主が現在手掛けている新薬の準備は、数百種類にものぼっていますが、もちろん一人では手におえないので、各地の生産拠点、研究拠点到技術分散して預けてあるんです。細胞培養の実験手法もマーセイルの工場で軌道に乗せているので、電信を使って同じ品質で大量生産を依頼することができるとすよ」

エレオノールはカレンダーを見て、余裕をもって納期の日数を計算する。

「納期はまた連絡しますが、一か月もあれば可能だと思いますわ。どのくらいのロット数が必要ですか？」

「そ、そんなにすぐ……薬剤の代金の見積もりをいただいても。それから必要数を考えます。消費期限も教えていただいていいですか」

のう」

ドナルドは震える声で返事をする。えらいことになった！と全身に鳥肌がたつ。

「ええ、ではすぐに。セドリックさん、マーセイルに確認がとれたら、見積もりをお願いします」

「かしこまりました」

あまりにも薬価が高すぎると、患者が薬剤代金を支払えないかもしれない。場合によっては、金銭的な事情で治療を諦めるかもしれないとなれば、医師が治療費を建て替えるしかない。

すわ、破産しそうだぞ！　しかし依頼した手前、払えないというのも言い出せない。

どうしたものかとドナルドの脳裏に金策がよぎる。

「あのう、その新薬は特注ということで、きっと目が飛び出るほど高いですよのう？」

「ええ、もちろん特注品ですので、それなりに費用はいただきます」  
「うっ……」

ドナルドの顔に脂汗が滴り始めたのに気づいたのか、エレオノーラが何かに気付いたように、カウンターの奥に控えていた事務の男性に耳打ちをしていた。すると、セドリックという名札をつけた男が、書類一式を整えてドナルドに手渡す。

「帝国医薬品普及補助金の申請用紙はこれですので、これを所定の場所に持っていけば、高額な薬剤の代金を九割還付される補助金をもらえますよ」

「そんな制度が！」

「先月からできましたよ」

ドナルドは地獄から救われたように思った。

「それでは、今日は店をしめますわ。またいらしてくださいね!」

夢でも見ているような気分でドナルドは異世界薬局をあとにした。

「さすがは、聖域の薬局。ここに来て、何とかならないことがない」

こんなに都合のいい薬局が現世に存在してもいいんだろうか、とドナルドは信じられない思いだ。

「え、原因がわかったうえに解決できそう、ですって?」

バラ屋敷の主人、アガタは早朝、馬車を飛ばして訪ねてきたドナルドの報告に驚いて階段をつまづきそうになっていた。この歳で骨折でもしたら、とドナルドは気が気ではない。

「まだ一日も経ってないのにですか?」

「はい、異世界薬局の薬師に相談したら、即解決の運びでして。狂犬病が疑われるとのことですよ」

ドナルドは脱いだ帽子を両手で持ってハンドルのようにゆっくりと回している。

あそこで何が起こったのか、まだよくわかっていないのだ。

「ファルマ師に相談をしたのですか」

「いえ、彼は不在で。対応してくださったのはほかの薬師でした。四人の貴族の若い薬師が全員で話をきいてくれまして……なんというか、平民にも厚待遇で恐れ多いというか」

「身分は関係ありません。同じ医業を営む者です、卑屈になるのはおやめなさい」

それは常々アガタが外科医たちに言ってきたことだが、平民出身の医師、特に高齢の者には意識改革は難しいことだった。

「人畜共通の感染症ですので、犬の捕獲とワクチンの接種を推奨するということでした。詳しくは、このワクチンの説明書に書いてあります」

「新薬の受け渡し日はいつ？」

昨日の今日持ってきたにしては、情報量が多すぎる。資料は印刷物だったので、アガタは二度驚く。

「一か月後に、異世界薬局に取りに行くことになっています」  
「それまでに……追いつくわよ」

アガタは髪を振り乱して宣じた。

「たしか……ワクチンの製造方法は技術局に登録されているのよね」  
「はい」

アガタは外套を羽織り、帽子をかぶる。半年ぶりのお出かけだ。

「私はこれから技術局に行きます。洗いざらい開示して、ワクチンの受け渡し日までには完璧に準備を整え、狂犬病に対する治療の最初の症例報告を出しますよ！」

「お供しましょう」

ドナルドが仰々しく礼をする。

アガタはワクチンの製造技術とともに、聴診器に注射筒、手術器具、老眼鏡の設計図まで開示して帰ってきた。

そして数日後、アガタが外科医として現役復帰するとの知らせがギルドを駆け巡った。

「へえ、アガタ先輩、あの御年でさすがだ。これは私も負けていけないな」

アガタの完全復活を耳に挟んだクロードがそんなことを言ったとか。

## 8章2話 帝国外科医ギルドと狂犬病（後書き）

### 【謝辞】

本項の平民外科のとり扱う診療範囲について北極28号様にご指摘いただきましたので修正しました。  
ご指摘ありがとうございます。

### 8章3話 パツレの覚悟と、客人の来訪

1148年6月15日になった。

ファルマはその日、朝からジョセフィーヌとエメリツヒらと研究室にいた。

「教授、遠心分離機がこれ以上上がらないんですけど……」

三人で遠心分離機の挙動をみている。少しずつ異音がはじまった時点で、装置の回転数を落としてゆく。ファルマは記録をつけながら二人に打ち切りを告げる。

「うーん。この回転数とGでは超遠心は厳しいかなあ……無理はしなくていいよ」

遺伝子治療用のウイルス精製のために、遠心分離機の改良を行っている最中だ。

超遠心分離機とは、溶質に遠心力をかけることにより、沈降挙動を解析する。地球世界では百万Gもの加速度を生み出すことができ、分子の大きさの差のふるい分けができるものだが、異世界ではそうはいかない。

「でも、今より真空度を上げれば空気抵抗も減りますよね？」

エメリツヒがチャンバーを極高真空状態にしようと杖を構えるので、ファルマはその杖をおさえる。

「いや、もう十分」



風の正属性の神術使いのエメリツヒだが、ファルマが教えたので真空を作り出すことができるようになっていた。空気の密度を移動させればいいのだと教えただけなのだが、彼もパツレと同様にすぐに原理を理解して応用に移す。

「やめよう」

ファルマの決断は早い。粘るときは粘るが、諦めも早いのだ。ファルマはそう自負している。

「ええ、でも……超遠心を使わないと目的のウイルスやタンパク質の濃縮と精製が。最短で精製できそうなのに」

エメリツヒは納得がいかない様子だ。

「カラムやメンブレンフィルターを使えば低速でも濃縮できるよ、私たちだけが使うわけじゃないから、皆が使えないと意味ない。安全にいいこう」

代替手段があるからには、安全第一でいきたい。帝都で研究室を爆発させたら、テオドールの笑いものになる。ファルマの脳裏にそんな考えが浮かぶ。

「さっき言ってた、超遠心機が爆発するって話ですか？」

「遠心力に耐えられず爆発したり、サンプルのバランスが少し崩れても、スウィングローターが崩壊しても爆発するよ。爆発というか、崩壊だね」

ローターの回転数の電子制御が現状できていないので、なおさら

危険度は高い。

前世では、超遠心分離機の事故には細心の注意をはらっていた。学生にもバランスのとり方には気を付けるよう、口酸っぱく言っていた。それでもたまに事故が起こるものだ。

「遠心力って恐ろしいんですね……」

ジョセフィーヌがぞっとしたようにのけぞって、顔をひきつらせる。

この世界では、あまり遠心力を体感する機会はないので、ぴんときないのだろう。

「そうだよ。甘く見てはいけないよ」

なんなら事故の動画を見せてあげたいところだが、彼らにはスマホの画面が見えないのもどかしい。ファルマは眉間にしわを寄せている二人を休ませるために、声のトーンを変えてぽんと手をうつ。

「いったん休憩にしようか！ お腹がすいたな」

「学食行きますかー。たしか二十日まで、パルフェ祭りだったはずなんですよ。ジョセフィーヌさん、好きですよ。うちの妹たちがチエックしていて。今日も学食に来ているはずですよ。昨日もいたんですけど」

エメリツヒの妹たちは、スイーツの情報収集に余念がないらしく、その情報は逐一兄に報告されている。

「パルフェ、賛成です！ 妹さんたちと合流しましょう」

ジョセフィーヌも満更でもないようだ。

ファルマはロッテにそっくりの妹たちの顔を思い出した。エメリッヒ一族はロッテの遠い親戚なので、ロッテの顔を思い出せばだいたい当たらずも遠からずだ。

「そういえば、妹さんたちと弟さんは元気？」

「ええ、毎日元気にスイーツ開拓をしています。食べた分ダイエツトに忙しいようです」

「そ……そう。たしか基礎代謝、脂質代謝、糖代謝が低い遺伝子型だったから、妹さんたちには食事に気を付けてもらって……」

運動をすればいいというものではない、きちんと予防をしなければね、とやんわりと伝える。彼女たちはたしか遺伝型を調べると糖尿病リスクが高かったはずだ。とファルマは妹たちの結果を思い起こす。

「はい、伝えておきます」

エメリッヒはまじめに受け止めているようだった。

財力と暇のある有閑階級は優雅でいいよな、とファルマは愛想笑いをする。

ファルマもエメリッヒも有閑階級の高等遊民であるはずが、なぜか平民以上に忙しい。

「教授！ ご報告したいことが」

ファルマたちが白衣を脱いで、さあ学食にお昼でも食べに行こうかと移動していた時、秘書のゾエが追いつがってファルマ呼びに来た。

マーセイルから電信で驚くべき知らせが入ったというのだ。

「え？　メレネーが貿易船に乗って来た？　メレネーが！？」

ファルマの眉間にしわが寄る。

帝都と大陸は今や大陸間で通信が可能となっている。それなのに、第一報がマーセイル！　心の準備ができていない。

「教授？」

ジョセフィーヌがファルマの顔を窺うので、ファルマは二人に手を振って見送った。

「ああごめん、二人で学食にいつてきて。急用が入った」

パフェ食べてる場合じゃないぞ、ということはファルマにも理解できた。

エメリツヒたちは当然ながら、新大陸での顛末を知らない。

「後できてくださいよー。パルフェ祭りですよ、パルフェー！」

ジョセフィーヌはファルマが食いつぶれるのではないかと気に掛けているようだ。

「行けたら行くね」

「行けたら行くという人は、だいたい行かないものですよ」

ゾエが耳元でささやく。

「鋭いな」

ファルマも閉口する。

最近、ゾエからの当たりが厳しいような気がするの、今回のような唐突な厄介ごとが転がり込んでくるからだろう。

「行くというといつまでも待つかもしれないので、行けないというべきですよ」

「次回からそうします。それで、メレネーたちはいまどこに」

「ええ。メレネー？　ほかマイラカ族の六名はマーセイルで検疫を受けて、帝都を目指している、このことです。ええと、マイラカ族って何ですか？」

ゾエが、マーセイルからの電報を読み上げる。

「帝都に！　来る！」

彼らが出航してから一か月近くかけて航海をしてきただろうに、どうして帝国側の貿易商の誰も出発前に教えてくれない！　とファルマは白目になる。

「ええと、マイラカ族というのは新大陸の先住民の人たちだよ」

「そうなんですね！　では勿論お会いになりますよね？　帝都の観光などの案内は？」

「俺が？」

驚いて自分を指さし不本意そうな顔をしてはしたが、そうだな、と腑に落ちる。

「教授を訪ねておいでなので、おもてなしは教授がすべきなのではない」と

ゾエは諭すように伝える。

「でも俺、招いてないんだけどな」

何か用があるのならば、大陸間通信でも間に合うだろうに、とフアルマは対面を希望する謎に思いをはせる。

「まあ、細かいことはなしということで」

「そっか……ゾエさん、帝都の観光スポット教えてもらえる？」

「そうおっしゃると思って。帝都で評判のレストランを見繕っておきました」

デキる秘書のゾエは興奮した様子で、リストをフアルマに贈呈してくれた。

普段から会食の場を用意するのにもそつのない仕事をしてくれる。

「食べられないものとか聞いてなかったな。アレルギーとかあるかな」

エリザベスが薦めたものの、干し肉は食べなかったし、とメレネーの行動を思い出すが、彼女の服装から何から、生活感がなさすぎて、何を食べているのかよくわからない。

「海の近くにお住まいだったのですよね。では、魚介を食べていたのでは」

確認はしていないが、貝塚のようなものがあつたので、貝は食べていたのだろう。

「そうかもしれないな。あと、帝都の観光名所ってどこかな」

「建築のみどころというと、神殿などは！帝都の建築様式は、国

外からのお客様は珍しがられるようですよ!」

ゾエが微妙な観光スポットを提示してくる。

「建築の観覧にはいいけど、中に案内するとなると思い切り宗教上の問題がありそうで」

下手をすると、神殿内で霊を呼び出そうとするかもしれない。それを見た神官らと宗教戦争まっただ中だ。

「では、宮廷を訪問するプランは?」

「聖下に確認が必要だな。甘いものでも食べながら考えるか。ゾエさんもパルフェ行く?」

「行きます」

ファルマたちは遅ればせながらパフェ祭りに合流した。

「父上、ご相談が  
「入れ」

パツレがド・メデイス家の執務室で精力的に働くブリュノを訪ねる。

パツレは内側から部屋の鍵をかけると、ブリュノの執務机の上にサン・フルーヴ帝国帝位御璽と書いてあるカードを置いた。

「申し上げるべきか迷ったのですが。やはりお耳に入れるべきかと思ひ。聖帝エリザベス聖下より、サン・フルーヴ帝国皇帝の帝位挑戦権を拝受しました」

「それは聖下より聞いておる」

ブリュノは顔を上げた。

「この挑戦権を、ファルマに譲渡できないかと聖下に奏上したいのですが」

パツレの目標は、あくまでもいつぱしの薬師になることだ。挑戦権を受け取りはしたものの、皇帝の座に興味はない。ブリュノは困ったように額をおさえながら答える。

「新たな皇帝は、神聖国によって見いだされるものだ。したがって、帝位挑戦権の譲渡はできない決まりになっておる。だが、権利を一度も使わない、ということもできる」

「それはただの機会の損失です、聖下は後継者を見つけないとお考えなのでしょう。新たな皇帝の候補を立てることができなければ、聖下のご公務の負担もご心労も重なるばかりです」

「そうであらうな」

ブリュノは齒に衣を着せたような、齒切れの悪い喋り方になる。

「聖下はファルマのことを過小評価しておられます」

パツレは熱気のこもった言葉でブリュノに問いかける。

「すでに宮廷薬師としてとりたてているであらう」

「薬師としての腕もそうなのですが……私は最近、神術試合においてもファルマに勝ったことがあります。彼は聡明で、類まれなる神術の使い手で、薬神の加護と知識を得ています。帝国の数々の危機を救いました、彼は英雄です。彼が即位したあかつきには、帝国



は栄え、舵取りを間違えることはないでしょう。私は彼の兄として、彼の素質を畏怖してすらいいます。人格も申し分ありません、彼ならば人民に慕われるよき皇となると思います。ファルマも薬師の身でありたいということは承知していますが……」

「はつきり言っておくが……ファルマは皇の器ではない」

ブリュノはパツレに話して聞かせる覚悟を決めた。

「父上までそんなことをおっしゃるのですか。なぜ彼を認めないのですか。私に配慮してのお言葉であれば」  
「そうではないのだ」

そして、とうとうブリュノの口からパツレは真相を知ることになる。

ファルマが神聖国において神籍を持ち、正統な守護神と認められていること。

ブリュノの執務机に置かれていた紅茶がすっかり冷めきってしまったまでの間に、ブリュノは順を追って、パツレの知らなかったファルマの姿を話して聞かせた。パツレはうなだれる。

「彼は、まことに薬神……なのですか」

「さよう。彼は人界の皇ではなく、守護神であるがゆえに、皇帝位につくことはない。宮廷薬師の地位に甘んじておられるのも、彼の言葉を世に伝えるための、かりそめのものだとして理解している」

パツレは言葉を失ってしまった。

思えば、数々の加護を受けていた気がする。

彼のもっとも近い場所において、彼の言葉を聞き、彼に命を救われ、彼のわざをみてきた。それは、薬神を守護神に持つド・メディシス家に与えられた福音だったのか、因縁だったのかとパツレは振り返

る。

そしてそんな彼に、どんな態度で接してきたか。

パツレは思い出すだけでも後悔で体の中が熱くほてるようだった。

「私は、守護神様に数々の無礼をはたらいてしまいました。のうのうと生きてゆくことなど、耐えられない。死んでお詫びしなければ」

この身を引き裂き、百万遍の祈りを唱え、血と心臓を捧げなければと、パツレは悔悟の念からそうせずには気が済まない。

「まさにそれだ。そういう反応に困るから、神だと名乗っておらんのだ。彼は特別扱いをされることを望んでいない。彼は人々とともに生き、人々に寄り添い、人のために力を使い果たして滅びる益神だ、だから私もこれまで通り、彼の願うように親子のように接している。そうしてほしいと仰せだからだ。お前はこれまでのように、兄のようにふるまうのが正しい」

ブリュノは大きくため息をついて、ペンを置く。

ブリュノがまとめている資料は、ファルマの医学と薬学を記録したものだ。ブリュノもまた、その日に備えている。

「……そうだったのですか。それでは私が皇帝になり、彼のもたらず医学や薬学を保護し、普及させるのがよいでしょう。彼が身罷られてからでなく、世にまします間に」

「うむ……彼はこのところ、ゆかりのある各地を訪ねておられる。現世との別れを惜しんでいるようにも見える。言葉には出さんが、あまり時間はないのかもしれない」

パツレはぎゅっと拳を握りしめる。

薬神はパツレの弟ファルマを宿し、彼の魂を生きながらえさせて

いる。

薬神は時折、パツレやブランシュの前で、あどけない弟の面影を見せることもある。

それは、弟をなくしたパツレに配慮した、薬神からの救いなのだろう。

薬神がこの世を去るとき、パツレの弟、ファルマ・ド・メディシスの魂も天上に連れてゆくのだろう。パツレは沈痛な面持ちで瞳を閉ざす。

その瞳には、うつすらと涙が浮かんでいる。

「今日より、薬学のほかに、聖下より帝王学の教えを請おうと思います」

彼は静かに、決意を吐き出す。

「よろしい、では聖下に奏上しておく。聖下は宮殿に招く準備は整えておいでのようだった」

「ありがとうございます。そして今と思い定めたら、聖下の胸をかりて、帝位に挑みます」

パツレは己のなすべきことを知った。

ブリュノの執務室を出たところで、ファルマとばったり会った。どこかで買ったのか、たくさんのクッキーを抱えている。

話を聞かれたかと身構えるが、彼は無防備にしている。

「兄上、今から下でロツテとお茶するんだけど一緒にどう？」

「ああ！ その後で神術訓練しようぜ！」

「しないよ、今日は忙しいから」

なるほど、このお方が当代の薬神様なのか、とパツレは改めて彼

をみる。

彼は華奢で、ほわつとしていて、見るからに頼りない。

それでも、小さな体で数々の奇跡を起こしてきた。

白血病に蝕まれ、死を待つのみだったパツレに、昼夜を問わず傍に付き添い、その天上の薬学をもって、確固たる理論のもとに癒してくれた。

彼の言葉を、広く世に普及する書物として編纂することを許された。

帝国医薬大の中枢として、医学薬学の普及に腐心された。

そして、世に光明を与え、人々を癒して、もうすぐいなくなる。

もっと早く知っていれば……パツレはそんな感慨を胸の奥に押し込む。

パツレは嬉しそうに階段を下りてゆく彼の小さな背中に、そっと祈りをささげた。

「神様、あなたはこんなに近くにいて、私をご覧じていらしたのか」

薬神をかたどったかりそめの守護神像に額づき、毎日のように祈りを捧げていたパツレを、彼は後ろからどんな思いで見ていたのだろうか。

「明後日、俺を訪ねてお客さんが来るから、観光プランを決めてみたんだけど」

ゾエの手配で関係各所へ全ての根回しを終えたファルマは、自宅でロツテの意見を聴取する。

パツレも誘ったので、お茶会に加わっている。

「このプランで女子の心が躍るか教えてほしいんだ」

ロツテはおやつを給仕しながらファルマの言葉に耳を傾けていたが、ポットを持つ手を止めた。

「えっ？ それを私が判定するのは責任重大ですね。それに、女子といっても色んなタイプがいますがよいのでしょうか。ほら、プランシュ様とエレオノール様だってタイプが全然違いますか？」

ロツテが紅茶を出したトレイを持って小首をかしげる。

（うーん……確かにメレネーとロツテはタイプが違うっていうか真反対だけど）

まあいつか、と、ファルマは資料をロツテに手渡す。パツレにも見せているが、パツレは何か別のことを考えているようだった。今日は少し様子が変だ。

父上に絞られたのかな、とファルマはあまり触れないようにしておく。

「メレネーはロツテと年が近いから、ロツテの意見を聞きたいんだ。兄上も意見があつたら何でも言つてよ」

メレネーは十三歳だと聞いたので、ファルマの一つ上、ロツテの二つ上だ。

天真爛漫な子供の心を忘れた、ファルマであるから、ロツテが喜ぶプランにすればメレネーウケも間違いなさそう、という目論見だ。一日目は自宅で出迎え、昼食は貸し切りレストランでランチ、午

後は帝都を散策、宮殿へ招待、川辺でオープンパーティー、ド・メ  
デシス家で一泊。

二日目は薬学校を視察、あとはお買い物と自由行動につきあう。  
ロツテはファルマのプランに目を通し、恍惚とした笑顔を向けた。  
その反応に手応えを感じたファルマはほっとする。

「これならばつちりだと思います！ 私がこのプランに参加したい  
ぐらいです」

「買い物なんてするか？」

「これでも足りないぐらいだと思うよ」

タイムテーブルを見ていたパツレが買い物タイムが異様に長いの  
を疑問に思っているようだが、ファルマは長時間の買い物すると  
踏んでいる。

「ちなみにこのお客様って、どんな方なんですか？」

面識のない人物なので、そういう反応にもなる。

「実は、新大陸の、霊や呪術を操る呪術師の人たちで……」

「ひいひい！ 霊を操るんですかーっ！ 神術陣を書かなければー  
っ！」

しまった、これでは印象が最悪だ。とファルマは渋い顔になる。

「怖いだけじゃなくて、絵を実体化することもできるよ」

「えっ！ 絵ですか！？」

宮廷画家のロツテは、絵と聞くと心が躍るのだろう。声にも艶が  
戻る。

「もしかして、私が描いた絵も動きます」

（あつ、そうか。アニメーション！ しかも3D！）

ファルマはメレネーとのコラボで新たな芸術の幕開けの可能性に気付いてしまった。

翌々日。

彼女と呪術師の一族は、マーセイルのアダムの手配があったのだろつ、帝国の装いでやってきた。メレネーは仕立ての良いドレスを着た、育ちの良いレディに見える。

彼女に随行している呪術師らも、上等のスーツや、女性二人もパンスタイルのスーツを準備してもらっていた。

彼女を知るクララも、会いたいかは別として、関係者としてド・メディシス家に呼んでいた。ファルマが不在なので、エレンに薬局を任せている。

迎えの馬車から降り立ったメレネーと随行者五人は、ファルマに気付くと笑顔を見せた

（ええと、男性三人、メレネー含めて女性三人か）

ファルマは初対面の人物もいるな、と把握する。

「久しぶり、メレネー。帝都にようこそ」

ファルマは朗らかに声をかける。わだかまりはあったが、お互いに水に流すべきだろう。

「出迎えご苦労。お前も変わっていないな、ファルマ」

ファルマが手を差し出すと、メレネーは強く握り返してくる。

その力強さから、メレネーが完全にファルマに気を許したわけではない、という強い意思を読み取る。ファルマも緊張感を取り戻す。

「そっちの人たちを紹介してもらっても？」

「こちらは私の一番目の兄のアイパ、同じく二番目の兄のレベパ、三番目の兄のボンパ、次期村長のミナ、ミナの妹のベナだ」

似たような顔立ちなので、あとで写真を撮って覚えよう、とファルマは計画する。

十代から二十代といった年齢層。メレネーが一番年下のようにだった。

スカーレット・ハリスの日記の記述にあったように、年功序列制ではなく、呪力が強い者順に地位が高いという社会なのだろう。

「よろしく。ファルマと、こっちがクララ」

「いらつしゃいメレネー、船酔いは平気だった？」

クララがおそろおそろ挨拶をするが、どんなに取り繕っても腰がひけていた。

ロツテやブランシュ、ド・メデイス家の者も出迎えに出てきたものの、メレネーは彼らを脅威とも思っていないようで、一瞥もしない。ミナとベナがロツテに注目していた。

「まあ、私は興味ないのだが。家族が観光に行きたいということで、私は引率だ。それに貿易でたくさん帝国通貨が手に入ったが、せっかくならば帝国で使ってしまいたい。本当に価値があるものな



「のかも確かめたいしな」

貨幣価値の確認も兼ねているとは、抜け目がない。

「そのドレス、似合っていますー」

話題に困ったクララがとりあえず装いを褒める。

「アダムという男が準備してくれた帝国の服は生地がしなやかで、家族たちも気に入っている、ほかの家族にも買って帰りたいが……」  
「価格がお手頃で仕立てのいい洋品店、知っていますよ！」

クララが耳よりな情報を出してきた。メレネーは満更でもなさそうだ。

「では後でそこに連れて行ってくれ」

ファルマはたと気付くが、そういえばメレネーはクララと肉声で話している。

「そうだね。たくさんお買い物して帰ったらいいよ。メレネー、帝国の言葉、どうやって喋ってるの？」

「祖霊を私の頭の中に宿し、単純に通訳をさせている。帝国人は臆病で、霊を嫌悪していると聞いた。霊の姿が見えないほうが都合がいいのだろう」

一応、彼女なりに気遣いをしているようだった。

「そんなことできるんだ」

ファルマはメレネーの呪術師としての能力に恐れ入る。

「何？ ファルマにはできないのか？」

少し勝ち誇ったような顔をするのが、小憎らしくもあり、かわいらしい。

「できないから素直にすごいと思う。こっちの言葉に合わせてくれてありがとう」

「そうそう、その前に。もしかしたらこれを取りにきたのかと思って」

「なんだ？」

ファルマはメレネーに、美しい装丁を施したノートを手渡した。

「スカーレット・ハリスの日記だよ」

マイラカ語には翻訳できなかったが、帝国語に翻訳しておいたものだ。

「来年までと言っていたから、もっと遅いと思っていた。こんなに分厚い日記を……優先してやってくれていたのか」

「たいした作業じゃないよ」

ファルマは英語ならば読むのと同じスピードで翻訳できる。

翻訳中、懐かしすぎて泣けてきたぐらいだ。地球言語の活字に飢えている今、日本語書籍でも差し入れされたら嬉しくて朗読してしまうかもしれない。

「なんだかんだで、一日でできたよ」

何なら帝国の禁書の言語よりも簡単だ。地球の情報は極力伏せて、メレネーが知りたそうな内容を時系列に沿ってまとめなおした。

「帝国語なら霊が読めるんだろ？」

「そのはずだ。ああ、問題ないようだ」

メレネーは毒気の抜けたような顔をしていた。彼らにとっては聖典のようなものなだろう。

「最初に言っておくけど、ただの日記だったよ。ただ、君らにとっての偉人の人物観が変わってしまうかもしれない」

「わかった。心を落ち着けて、大陸に戻ってから皆で読むことにする」

「それがいいと思うよ」

ファルマは何も言うまいと思った。

少なからず、彼女らにとっては痛みを伴う内容だ。

だって、彼女らが仰いだ偉大な呪術師は、地球に帰りがつていた。

「それはそれとして、食事でもどうかと思ってレストランの予約をしているんだけど。そういえば、食べられないものってある？」

メレネーは随行の四人にマイラ力語で話しかけたが、向き直る。

「ちょうど私たちも腹がすいていたところだ。お前たちが食べるものなら、何でも食べる。我々はカタナが好きだ」

「魚のことですね！」

マイラカ語を覚えていたクララがすかさず通訳する。

「それはよかった。魚介が美味しいお店なのでね」

ファルマはゾエのチョイスが間違っていなかったとほっとした。

貸し切りにしておいた帝都の人気シーフードレストランで、ファルマにクララ、マイラカ族一行は舌鼓をうつ。カトラリーを使わなくても簡単に食べられるように、一口料理を中心にメニューを工夫してもらっていた。

どうやら貝料理<sup>コキヤージュ</sup>は特にお口に合ったらしく、たくさんおかわりをしていた。

「たくさん食べてしまったが、住血吸虫はいないだろうな？」

メレネーがどぎつい冗談を放つ。

「淡水の貝ではないし、全部加熱してあるでしょ。ノロウイルスの心配はゼロではないけど」

ファルマは聞き流しながらホタテ貝に手を伸ばす。

メレネーは手を止めて、ファルマに向き直る。

「住血吸虫症だったか。あれにかかった者たちはどうなった？」

ファルマはメレネーの意外な気遣いに驚く。

「薬を飲んで、みんな快復しているよ。心配ありがとう」  
「そうか」

メレネーはそれ以上踏み入っては何も言わないが、どこかほつとしたようでもあった。

船員たちが住血吸虫症にかかったことに関して、メレネーの責任はいささかもない。

ピチカ力湖に入るのを止めなかったということはあるかもしれないが、判断をしたのは船員たちだ。ファルマは話題を変える。

「帝都の食事はどうか」

「帝国の料理は、調理方法が多彩だな。気に入った。同じ食材でも美味しく感じる」

「それはよかった。調味料とレシピ本を買って帰ったらいいよ」

メレネーたちが立ち寄る予定の店が増えてゆく。

ファルマは「シヨップピングの時間を長めにとったのは正解だった」と思うほかになかった。

## 8章4話 帝都観覧

全員がレストランでの食事を終えたところで、「じゃあ、移動しようか」とファルマが声をかけると、メレネーが財布を出した。帝国で買ったものとうかがえる。

ファルマが目をまるくすると、メレネーはどうだとばかりの得意げな態度だ。

「店に入ったら料金というものがいるのだろう？　いくらだ。航海の間に、帝国の文化風習についての話を船員らに聞いてきた。財布はマーセイルの漁港で買った」

「へえー」

予習はばっちりというわけだ。だが、ファルマは受け取らない。

「今日は歓迎会を兼ねて、こちらがもてなすから気にしないでよ。気楽にしている」

「それは恩に着る。次、お前がきたらこちらで精一杯もてなす」

「それは楽しみだな」

「たくさん食べたので腹ごなしがしたい」

メレネーはレストランの外に出ると、そういつてその場で屈伸運動をはじめた。

随行者たちもメレネーにならって運動が始まる。ほかの五人もじつとしてはいられないようだった。

「ここで食後のエクササイズはやめて。あと、食後すぐ運動はよくないよ、胃痛になったり」

自由すぎる一行に、ファルマとクララは困り果てる。

「満腹になると眠気を誘う。そうならないように、体を動かしたいのだ」

ダイエットという概念はないようだが、満腹になるのは嫌なのだろう。

メレネー以外のマイラ族の随行者たちは翻訳用の霊を連れてきていないようで、帝国語を話せない。なので、ファルマがメレネーに伝えて、メレネーが窓口となって彼らに通訳をする。

「じゃあ、散策がてら、エリザベス聖下のところに歩いて行ってみる？」

「それがいい。エリザベスというのは、あの偉そうな女のことだな」

通行人がぎょつとした顔で振り返る。

「ふええ、実際にこの大陸で一番偉い人なんですよ」

それを聞いたクララが不敬にならないかと慌て始めた。誰かに聞かなくてもすれば大変だ。

どっちが偉そうなんだ、とファルマは内心想うが、口には出さない理性を持っていた。

メレネーたち一行には往来の人々の好奇のまなざしがそそがれるが、ファルマの姿をみると、安心したように見なかったふりをした。ファルマはこの時点では、異世界薬局の店主兼宮廷薬師として、それなりの知名度を持っていた。今回はそれが幸いした。

一行は徒歩で帝都を観覧しながら、帝都の人々の生活にふれつつ、宮殿に到着する。

「ここが聖帝エリザベス聖下の住まう宮殿で、広大な庭園と離宮をもつ、華やかなバロック建築様式と内装が特徴の王宮。のべ五万人の職人さんが先帝の命令で何十年とかけて建築、造園したそうだよ。内部の様式は……」

ファルマも観光ガイドの様相を呈してきた。宮殿が勤務先ということもあり、迎賓などの行事があるときには、筆頭宮廷薬師として国内外からの賓客から詳しく宮殿の説明を求められる。

「何という建築物だ。これは人間が造ったものなのか？ 空から見てもいいか？」

メレネーが絵を具現化した怪鳥を呼び出そうとしているので、ファルマは慌てて止めた。

「飛行はだめ、帝都の人たちひっくり返るから」  
「お前も飛べるではないか。何が珍しいものか」

そうだけでも！ と思いながらも、何か違う気がする。ファルマは一応、帝都市民からは見えないうちに雲間に隠れるということをしている。

「俺は人に見えるようには飛ばないよ！ 飛ぶときにはマナーを守って。普通のことだよ！」

ファルマはメレネーの気ままなペースにもついていかれてしまう。通行人の耳も気になるので、ファルマたちは詰所を顔パスで通り抜け、聖帝との待ち合わせ場所を目指す。クララは特別に宮殿への立ち入りを許されているので随行する。



「普通、人って飛ばないんですけど、自信がなくなってきましたあ……」

クララの突っ込みもいまいちキレがない。

この場のメンツの中では、クララだけが飛ばない少数派だ。

聖帝がメレネーたちを招いたのは、宮殿の敷地内にある隠れ家的な別荘であり、彼女が最近造営させた離宮だった。

迎賓館としての機能もある。

他の五人は宮廷内ガイドツアーに行くといって別行動となってしまうたので、メレネー一人での面会だ。

（わー、これが。聖下が建造させていた迎賓館、初公開だな）

マリー・アントワネットが愛したプチ・トリアノンみたいだなとファルマは懐かしく地球の建造物を思い出す。

ロココ様式の優美かつ緻密な内装とは対照的に、離宮の正面には人工湖を配し、自然と調和した田園風の中庭も堪能できる。

そんな帝国の威光を思わせる風光明媚な場所の雰囲気似つかわしくない、ふてぶてしい態度の少女が一人。

「足労をかけたな。メレネー」

聖帝が友好的な笑顔を見せると、メレネーは何とも言えない渋い顔をした。

「わざわざ顔を見せに来てやったぞエリザベス。お前、でかい家に住んでいるのだな！」

メレネーの挑発に、聖帝の側近が戦闘になるのではと警戒して慌てている。

「よい、親しき友人のただの冗句だ。外で控えておれ」

聖帝はそのお節介がわずらわしいと思ったのか、側近を下がらせた。

「友人と言った覚えはないけれどな」

「まあ固いことを言うな。ここは余の家ではあるが、ただの家ではない、行政の中心であり、立法、司法の中枢でもある。いわば小さな国家ともいえよう」

聖帝は中庭を眺めながら、蜂のようにくびれた腰に両手を当てている。

どうだと言わんばかりの態度に、メレネーは呆れているようにも見えた。

「一つ疑問なのだが、このような富を独占し、同じ国の人間には分け与えるつもりはないのか？ 我らは一族の誰かが得た富は等しく分配する。分配は大切だ、将来に禍根を残さない」

エリザベスはメレネーの言葉をどこか嬉しそうに受け止める。  
彼女をテーブルにつかせ、喉を潤す飲み物をすすめる。

「そこで突っ立っているのもなんだ、飲み物でも？」  
「いたどころ」

搾りたてのフルーツジュースがふるまわれた。  
もう一杯すすめながら、聖帝は彼女に説明する。

「大規模公共工事というものを知っているか？ 宮殿の造営は帝都で仕事を求める種々の職人に十分な仕事と報酬を与える。職人は家族を養い、子弟らは技術を継ぎ、他業種を潤す。これもまた、持続可能な富の再分配のひとつだ」

「いいや、知らん。我が部族では職種が固定化されていないので」

メレネーは子供っぽく首を横に振る。そんな彼女に、聖帝が「老婆心ながら」と歩み寄る。

「そなたがこれから一大帝国を築くやもしれぬから教えておくと、集落が拡大すれば村や町となり、さらに大きくなれば国となる。そうなる頃には、人々は役割分担をするようになる。各地に勢力が生まれ、統治も一筋縄ではいかん」

「ふむ」

納得がいかないながらも、メレネーはひとまずは聞き入れる様子だ。

「人気取りに走るなら、市民らに贅沢をさせることはもつとも容易だ。富をばらまき、消費させればよい。だが、そんな帝国は一代限りで終わる。国家を百年、千年と繁栄させるためには、大きな人々の営みの円環を作らねばなんのだ。また、国家の財力と宮殿の威容を示すことは、不幸な武力衝突を回避するにも役立つ。現に余が即位してより一度も、サン・フルーヴ帝国は国家侵略を受けてはいない。反乱も、武装蜂起も」

聖帝はインペリアルズム制における彼女の政治観を要約する。

「力で押さえつけているだけだろうか？」

「まあそうともいうが、皇帝は世襲でもなく、終身制でもないのだよ。みなが在位中の余の行いを監視し、世論という名の刃を研いでいる。皇帝の力が衰えれば世論を味方につけた若獅子に帝位争奪の決闘をしかけられて討取られる。代替わりの決闘中に弑逆されたとて罪には問われぬ。退位後の安寧な生活を望むならば、わざわざ暴君になろうとする者はいない。そこで最善の行動とは、民の幸福を第一とすること」

「……意外と大変だな、この国の皇帝。なりた奴なんていないだろ」

メレネーは振り上げた拳をどこにおろしてよいかわからない。そうだったのか、とファルマは彼女の考えを知った思いだ。彼女の政治哲学について尋ねたこともなかったし、それはファルマの仕事ではないと考えていた。

「いかにも。逃げを打てぬよう、皇帝の器たるものに聖印という名の呪いが刻まれている。そういうそなたこそ、歳のわりには随分と重いものを背負っているように見えるが？」

「そうだったが、それは全部ファルマに押し付けた」

突然名前を出されたファルマは、きよんとする。

「ピチカカ湖の呪いも解けたし、晴れやかな気分だ。よく寝れるようにもなった。ルタレカを失った今、私の宿命とやらもどこかへ行った。これからはもっと面白おかしく、情性で生きてゆく」

メレネーには出会ったころの怨恨に満ちた、殺気立った気配はもうない。

彼女を苦しめていた問題がすべて解決してしまって、牙を抜かれたというのが正しいだろう。

二人のやりとりに、ファルマは複雑な心境になっていた。  
だが、誰かが背負った荷を下ろせるならば、ファルマも多少は「これでよかったのだろう」と感じる。

騒々しいやりとりを察したのか、隣の部屋からルイが顔を出す。  
いいタイミングだ、とファルマはルイの登場を歓迎する。

「ははうえー、誰かきたのか？ その人誰？」

ルイはビリヤードのキューを振り回していた。

「客人だ」

「母上？ なんとお前！ 子持ちだったのか！」

メレネーがエリザベスとルイを交互に指をさして驚いている。

「そつだが？」

するとメレネーは気が抜けたようにのけぞった。

「子持ちで長ができるものなのか！」

「できるが？」

メレネーはカルチャーショックを受けたようだ。

「長に子供などいたら、他部族からすぐに狙われるか殺されてしま  
う」

だから、長は在位中は必ず独身なのだと彼女は説明する。

「世襲ではないからルイを狙ったとて意味がない」

聖帝からそう言われてファルマが地球の日本史や世界史を思い出すに、世継ぎの暗殺はあるあるな話だが、それは世襲だからだ。

（王族の子は暗殺や毒殺が相次いだりするけど、大統領の子が狙われるのは身代金目的ぐらいだもんな）

ファルマもそんなことを思う。

「そうなのか。意外と考えられた、すぐれた仕組みだな」

メレネーは苦虫をかみつぶしたような顔で称賛を送る。

「最善とは思わんが、国の民のことを思えば悪くはないと思っているよ。何しろ、臣民にとって皇帝とは武力であり兵器だ。安心して担ぎ上げ、身を寄せられる者でなければ、退けたくもなるだろう」

聖帝は自らの立場をどこか割り切ってとらえていた。

「なるほど。大国の王は、大量の反逆者に怯えているのだな」

「寝首をかかれぬようにはしておるつもりだがな」

聖帝は何もかも含んだようにふふつと笑う。

「みたことのない髪の色だな。ビリヤードするか？」

先ほどから突っ立っていたルイが、空気を読まずメレネーをビリヤードに誘う。

背後から現れたノアが「マジ今は空気読んでください」とルイを引っ張っていこうとするが、メレネーは霊が翻訳できない言葉を物

珍しく思ったのか、首をかしげる。

「なんだそのビリヤードというものは。翻訳がでкин」

「杖と玉を使って、どちらが狙い通りに玉を打てるかの真剣勝負だ」

ルイは羽交い絞めで連行されながら説明を続ける。

この空気の中で平気な顔をしているルイの度胸もなかなかのものだった。

「はいはい、こちらへ行きましようね、殿下！ 私がお相手しましよう」

ノアがルイの背中をぐいぐい押してはけさせようとしていると、メレネーもついてきた

「おもしろい、受けて立つ！」

「えええっ？」

ファルマとノアは思わぬ展開に顔を見合わせる。

エリザベスはメレネーにそっとビリヤードのキューを渡す。

「余の愛用のキューだ」

< i 5 6 6 8 9 8 — 2 4 9 6 >

しばしの後、メレネーが皇子に挑みかかってはボロ負けを喫しているの、それを見守るファルマは気まずい思いだ。

「残念だけど、暫く勝てないと思うよ」

三連敗になってしまったところで、ファルマはメレネーに降参を促す。

「他の人たちも戻ってきたし、次の予定が」

宮廷ガイドツアーから戻ってきた随行者たちも、面白そうに眺めている。

「何を言っている！ 勝てるまでやる！」

「殿下は一日三時間もビリヤードを練習なさっているので、厳しいと思う」

更に敗北を喫したところで、ルイが「弱すぎて退屈」といつて打ち止めになった。

「次に来たときは叩きのめしてやるからな！」

メレネーが吠えるが、ルイは真に受けていないようだった。

「ええと。ビリヤード台一式、持って帰る？」

うちにある台を一台プレゼントしてもいいかな、とファルマが気を利かせる。

「殿下はビリヤードがお強いから、仕方ないよ」

ルイは神術訓練が大嫌いなので、彼が神術の腕を上げて皇帝になる可能性は低そうだ。聖帝も「あやつは神力量も頭も足りぬから鍛えても無駄」という見解で、息子の怠慢についてとやかくいわないというのもある。



神術についてはからつきしな代わりに、ここ最近でビリヤードのコーチをつけて熱心に練習しているところを見ると、プロハスラーにでもなるんじゃないかな、とファルマは予想している。

「ファルマはあの子に勝てたことがあるのか？」

「何年か前はともかく、勝てなくなったよ。やっぱり、日ごろのトレーニングがものをいうよ」

接待ビリヤードなので、もともと本気を出してはならないのだが、最近はお気を出しても勝てなくなった。

「まだ子供なのに凄いな」

「それに乗っているのも凄いと思うけど」

メレネーは聖帝が「庭内見学用に」と貸し出したライオンに乗って宮殿内を散策している。

ファルマが感想を述べると、メレネーはライオンの鬣をくしけずってやる。

「何となく乗ってみたが、なんの動物なんだろうな、これ」

ライオンだった。

ファルマとクララ、そしてマイラカ族の者たちはライオンを断って徒歩でついていく。

メレネーは霊を通じてライオンに指示を出しているようで、ライオンはエリザベスよりも従順に指示を聞いている。

（聖下のライオンとなじんでんなー、飼い主みたいだ）

ファルマは何の躊躇もなく、いとも簡単にライオンを操るメレネ

一の度胸に感心してしまう。メレネーはというと、目の前の光景に目を輝かせていた。

「いいものをみた。特にこれ」

メレネーは大噴水の前でライオンの足を止めた。

「噴水か」

宮殿の大噴水は一見の価値がある。

皇帝を模した彫像を中心に、幾重にも噴水が立ち上る。

「これ、よかつたら」

まめな男、ファルマは宮殿の名所とエリザベスを写真におさめたポストカードを事前に買っておいたので、メレネーと随行者に渡す。帰国してからの土産話にも役立つし、インテリアにも最適だ。

「やあ、これは嬉しい」

メレネーと随行者らは素直に喜んでいた。

「ところで、どうして水が低い方から高いほうへ流れている？ 神術というものを使っているのか？」

「これはただの物理現象だ。水が高いほうから低いほうへと流れるしくみを利用して、貯水槽から噴水の高低差で水压をかけて、水が噴きあがっているように見える」

「へえ……私がこれをやろうと思えば、霊の力を借りるしかないけれどな」

宮庭庭園の美しさに見とれているメレネーに、ファルマが念のため忠告をしておく。

「ええと、この地の霊を呼び出さないように気を付けてよ。このあたりには悪霊しかいないから。マジで、やばいのがいるから」

近場でいうと、目の前に現れるであろう納期に遅れて庭園の噴水で自殺したという造園家。ファルマの前には現れたことはないが、宮廷人たちから話を聞くに、グロテスクな容貌をしているらしい。

「この地には縁もゆかりもないから、そもそもこの地の祖霊を呼ぶことはしていない。祖霊には日々に手を合わせ、彼らの功績と恩義を語り継ぎ、祖先に感謝をたやさない。そういうものだ」

（日本人みたいなこと言うなこの人……）

ファルマはどこか懐かしい気分になる。

「それにしても、お前ら基準で悪霊しかいないとは呪われた大陸だな。お前たちが祖霊を粗末にしたのだろう」

ファルマは帝国の暗部を突かれてぐうの音もでない。

確かに、この大陸の人々は守護神を信奉しているが、死者が霊として現れるのを恐れていた。

霊を大切に崇め、手厚く祀っていればあるいは、悪霊に怯える暮らしをする必要もなかったのだろうか、この大陸の辿りえた別の可能性に思いを馳せる。

（いや、それで何とかなる感じじゃないんだよな。こっちの大陸の霊は性質が違う気がすんだよね。でもそれって、もしかして守護神

にも責任がある？)

あるいはファルマの存在そのものが、霊を挑発しているのかもしれない。確かに、神力を駆使して霊をその場所から退けたなら、反発も起こるかもしれないという気もしてくる。

「もしかして、霊を鎮めたりするの得意だったりする？」

「ん？ できるが？ 何か頼みたそうな顔をしているな？」

ファルマは思わず活路を見つけたように思った。

「きちんと依頼案をまとめてからにするよ」

「まあ、そのくらいはお互い様だ」

そんなにあるのか、とメレネーはいったん驚いた顔をするが、メレネーは朝飯前だといわんばかりに請け負う。

(もしかして、メレネーって霊のいざこざに関してはすごく頼りになります？)

クララが思わぬ展開に驚き、ファルマに「よかったですね」とこそこそと耳打ちをした。

その夜は計画通り、ド・メディシス家で歓迎パーティーを開催した。

せっかくの機会だからということで、異世界薬局の職員たち、帝国薬学校のゾエ、ジヨセフィーヌ、エメリツヒらも招いている。

エメリツヒは明らかにメレネーらが帝国とは異なる人種だとみる

や、興味津々でDNAをとりたがった。

「もう俺我慢できません」

「いったん落ち着こう」

会話もそこに試験管を出そうとしていた彼の手首を、ファルマがよいタイミングでがしっとおさえる。

「歓迎パーティーで客人のルーツ解析をしようとするのはやめて」

「いやでも、彼らと俺たちと共通の祖先なのかどうか気になりませんか。しかも、呪力ってどんな遺伝子制御で動いてるんでしょうか」

「気にはなるけれども」

「もしかしたら、神脈に対する呪脈のようなものが、俺たちの体に眠っているかもしれないですよ。今日を逃せばいつ会えるっていうんですか。そう思うといてもたってもいらなくて。ちょっとだけ口の中こすらせてほしくて。同意説明していいですか？」

キリツとした顔でファルマに伺いを立てるエメリツヒは好奇心の塊だ。

口腔上皮細胞のスワブ用の綿棒を取り出そうとしていたので即没収した。

「早い、早いよ！ やるとしても今じゃないし、得られた情報はすべて相手に提供するんだよ。あと、未成年の検査はだめだ」

ファルマがエメリツヒに提供していた遺伝子提供の同意文書は厳密なもので、被験者が完全に理解したうえで、同意して採取されなければならぬ。

「遺伝子検査のガイドラインにはそうでしたよね」

「藪から棒はだめでしょ。君は初対面の相手にいきなり告白してしまうタイプなの？」

「え？ はい。失敗したことありませんし」

ファルマは前につんのめりそうになった。

「そうなんだ」

ファルマがちらりとロツテやエレン、ジョセフィーヌらを見ると、コミュ強の彼女らは凄まじい打ち解け方である。

メレネーらはエレンにすすめられて初めてワインを嗜み、ほろよい気分になってきた。

「ちょ、ちよつと！ メレネーはお酒、飲んだことあるの？」

ファルマが急性アルコール中毒の対応をしなければならぬかと、気を回していると、

「果実酒を作って飲んでいたぞ。適当にまぜたら何かできた」

「たしかにそれでできるけれども！ 初めてじゃないの？ ならいいか。よくないけど……」

未成年は飲酒すべきでない。というのはファルマの持論であり、未成年の自身もそれを守っている。

「このワインというものは不純物がなくて面白い味がある」

メレネーはお気に入りだ。

「買って帰ったら」

「そうする」

宴もたけなわで、本日の目玉の宮廷楽団の演奏が始まった。よりすぐりの熟練者の宮廷楽団の、メデイシス家への私的派遣は、聖帝の心遣いだ。

帝国語を解する霊を脳裏に住ませるメレネー以外の随行者は帝国民と会話ができないながら、音楽には国境がないらしく、ボディランゲージで薬局職員らと踊り始めた者もいた。

打楽器が得意な者がオーケストラのティンパニやスネアを借りて、メレネーはアカペラで手足を打ち鳴らし、マイラカ族らの打楽器のパーカッションがはじまる。

彼らに触発された宮廷楽団も、負けじと即興セッションをたちあげる。

数分後には民族音楽のセッションが成立するのは、さすがに貴族たちの我儘にアドリブで即応してきた宮廷楽団といったところだ。

「今の、新しくいい感じじゃなかったですか？ 新時代、きてますよ！」

「ほんと！ 聴いたこともない音楽！」

エレンやロットらは頬を紅潮させて感動している。

ファルマの反応はというと、ビルボードでなじみのあるフュージヨンミュージックかなあという感じで新しくは聞こえないが、興奮さめやらぬコンサートマスターにとっては革命的なセッションだったようだ。

「こうしちゃられない、譜おこししてきます！」

コンサートマスターはペンと紙を持って、走ってどこかにいってしまった。

異文化交流、大いに結構だと思う。

その後、テーブルゲームやボウリングなどを楽しむ。

メレネーたちはもてなしの礼にと、ド・メディシス家の絵画に霊を通じて干渉し、絵を動かしたり額縁から出してみせた。

（これは屏風から虎も出せそうだし、4DXの映画館ができそうな勢いだな）

久々に見た4DXアニメーションに、これにはファルマも喝采を送る。

「この、絵を動かすのつてもものすごく需要があるんじゃない？」

エレンが恐ろしいものを見たといった具合にコメントする。

「も、もう一回やってくださあい」

宮廷画家のロットはコラボしたい気持ちが昂ぶりすぎて、過呼吸になったりもした。

ファルマはロットに紙袋を差し出す。

「息、吸いすぎだよロット」

「これが吸わずにいられましょうか」

紙袋の中から声が聞こえてきた。

「たとえば故人や恋人のポートレートが、生きているかのように動きだしたら……ほしい人は沢山いるだろうな」



と、ファルマは実用化への想像を巡らせる。

「もしかして、恋人同士のちよっぴりエッチな絵なんかも……動くんですか？」

何かのスイッチの入ったレベツカの妄想が止まらない。

なにやら帝国民が盛り上がっているのに気付いたメレネーが、ぴしゃりと言った。

「呪力を持った術者がいないと絵はうごかんぞ  
「ですよー」

ここまでの構想があれば、きっと映画館ができるのもすぐだろうな、とファルマは予想する。

メイシス家のバルコニーに、酔い覚ましに出てきたメレネーをファルマが介抱する。

「やっぱり、とめればよかったよ」

「気持ちいいのだが、どうしてよいかわからん」

メレネーはファルマにしなだれかかると、前後不覚になったかすつとりと腕を回してきた。

（これは、誰かにみられたら終わるやつだぞ）

酔っ払いにはつきあいきれない。

スキヤンダルもごめんだ、そう思ったファルマはメレネーに右手をかざす。

メレネーは目を閉じるとファルマに唇を寄せてきて危うい雰囲気になってきたので、

「誰とまちがえてるの。抜くよ」

ファルマは物質消去でエタノールを抜いてメレネーの酔いを醒ます。

「な、なにをしている！ まさか私を手籠めにしようと！」

「ええっ！ 処置しただけだって！」

理不尽ながら、正気に戻ったメレネーに叱られるほかなかった。

## 8章4話 帝都観覧（後書き）

次回更新は9月5日0時です。

【お知らせ】

異世界薬局関連作品      T O K Y O    I N V E R S E    - 東京反転  
世界 -

<https://ncode.syosetu.com/n0736ha/>

を連載しています。

この世界では落雷で死亡したファルマ・ド・メディシスのもう一つのストーリーが読めます。

## 8章5話 巨人を食らうとき

翌日は予定通りに、帝国医薬大の見学にメレネーを連れ出した。クララを一日つき合わせるのも気が引けたので、ファルマは一人でいいよと断ってツアコンする。

随行者らは薬学校より帝国貴族らの神術訓練の様子が見たいというので、ド・メディシス家の所有する神術訓練場に行つて、家付きの騎士らの神術訓練の見学をすることになった。

というわけで、ファルマとメレネーは二人だけの学校見学となった。

メレネーは医薬大正門にある教授陣の肖像画に気付いて足を止める。

「なんだこれは」

「この薬学校の教授の絵だよ。伝統的に、教授の肖像画が飾られているんだ」

「ファルマもいるな。ひとりだけ子供なのだな。何年前の絵だこれ？」

「一年ちよい前だよ。もう少し成長したら描きなおしてもらおうかな」

就任当時に描いてもらったものなので、既にずいぶん若く見えてしまう。

童顔に見えてしまうと、当初のエメリツヒのような血気盛んな学生になめられるのでよくない、とファルマは痛感する。

究極、大学に入学してからなめられても講義や試験で勝手に返り討ちになるだけなのでかまわないのだが、ファルマの外見によって国外からの入学希望者が聴講を諦めたり別の大学に行かれると、ま

ずまずの機会損失ではある。

メレネーはエレンとブリュノに目をとめた。

「この二人も知っている」

「実は、父がこの大学の総長なんだ」

「家族と知人で経営しているのか、人手不足なのだな」

「……っていうか」

帝国医薬大総長の権威も台無しだ。

異文化交流も難しいな、とファルマは気まずい。

「それにしても動かない絵をみていると、どうも落ち着かん。少しにぎやかしていいか」

「にぎやかにしないでよ！ 帝国には今のところ、絵を動かす技術なんてないんだ」

メレネーにとって、絵は動画でなければならぬもののようなのだ。逆にそれが、ファルマにとってはカルチャーショックでもあったりする。

メレネーは挨拶代わりとばかりに教授陣の肖像画を呪術で動かしたので、学生たちからは悲鳴があがったり、大喜びだ。

「絵が生きているみたいです！」

「すごい、ド・メデイス教授の神術ですか？」

メレネーは学生らのリアクションのよさに気をよくして、ふふつと笑っている。

大迷惑だとは思いながらも、普通の女の子だな、とファルマは彼女の素朴な一面を垣間見た。

「インパクトはすごいけどさ……」

そう思いながらファルマは変な顔をした自分の動く肖像画を眺める。

「もう止めてもいいだろう？ 俺にあんな顔させないで。あと、父上の顔だけは動かさないでくれ」

「いやだね、ささやかないたずらだ」

メレネーはまるで子供のようないたずらでファルマを困らせるが、彼女の本心はよくわからない。まあ、お互いに子供なのだから仕方がないか、とファルマは「諸般の事情で今、絵が動きます」と掲示板に書いて諦める。

「ド・メデイシス教授！ ちょっと！ なにやってるんですか！」

大学の事務長らが騒動を聞きつけて執務室からわらわらと出てきた。

事務長は動く絵を見るなり混乱しながらも抗議してくるが、ファルマにもどうしようもない。

「いえ私の仕業じゃないので戻せなくて」

「ご同行者がやったとしてもです。どうするんですかこれ、医薬大の品格というものが！」

引率者責任のようで、ファルマは割り食らっている。メレネーは腹をかかえて笑っていたが、そろそろ許してやるかといって事務長の希望を聞く。

「では、来訪者を視線で追ってほほ笑んだり、不審者を睨んだり、

道案内をしたり、夜間は寝るぐらいにするか？」

「おや、それは結構」

「余計怖いから！　いつまで動くのこれ」

「私がいいというまでだな」

ファルマのつつこみもむなく、事務長が気に入ってしまったのでそのままということになる。夜間大学に来た学生が寝る肖像を目撃して卒倒するに違いない、などと思うとファルマは胸が痛い。

のっけから大暴走のメレネーだが、次に案内したのは薬草園だ。

ここをどうしても見たいといっていたので、薬草や薬花の咲き乱れる薬草園の附属温室に彼女を招き入れる。薬草園には世界各地の薬草や毒草、果樹などが栽培され、薬草調合実習などでも活用される。

メレネーは顔を手ではたばたとおおきながら胸元のボタンを勢いよく外していくので、ファルマはとどめる。

「つと、それ以上は外さないことになっているんだ」

「なぜ帝国の作法にしたがう必要がある」

大陸では薄着で生活していたので、帝国の服装では暑いのだろう。過激な肌の露出があったとしても、それは彼らの文化なのだ。

ファルマがそれを恥ずかしいものとして、とやかく言うことは間違っている。

困ったな、と思っていると、ファルマの名を呼ぶ声が温室の外から聞こえてきた。

「ここにファルマ・ド・メディシス教授はおいですか！」

「はい、ここですけど」

「おお！　私は帝国美術大学（École impériale

d'art)の総長です」

「ええと……私に御用ですか？」

正直、美術大学の教授がわざわざ、薬草園までファルマを探しに来る理由が思い浮かばない。

ファルマを訪ねてきたのは長い青髪を個性的なアレンジでまとめている、美術大の女性教授だ。たしか一度、宮殿で見かけたことがある。

「たまたま貴校の前を通っておりましたら、正門に動く絵画があるではありませんか！ 通りすがりの学生に問い詰めましたらド・メデシス教授の神術だろうと！ 私はもう、いてもたってもいられず！ 魂が揺さぶられましたわ！」

情熱的なポーズでメレネーの呪術を絶賛する教授を、ファルマは止められない。

メレネーの演出が芸術家の琴線に響いてしまったらしいので、誤解は早いうちに解く。

「実は、私ではなく彼女の術なんです。彼女はメレネーといって、新大陸より観光にきました」

「素晴らしい(Très bien)ですわ！ ぜひわが校で教鞭をとっていただけませんか！ 報酬は弾みますことよ！」

「すみません、彼女は大陸に住んでいませので、ちょっとそういうお話は困ります」

ファルマが止めに入るが、メレネーは教授に無理やり両手を握られて、圧の強さに引いている。

「どういうことだ？」



埒が明かないと思ったファルマは、メレネーに質問をする。

「この方は画家で、芸術を教える学校をひらいている。メレネーの絵を動かす呪術を教えてほしいみたいだ。だけど、呪術は無理だろ？」

思わぬところからきたスカウトに、ファルマがメレネーに「断れ」と目配せする。

ファルマの言葉に、頷いてくれるだけでいい。メレネーはしばらく考えて結論を出した。

「断る、教えられない」

「そ、そんなあ！」

教授は取り付く島もないが、ファルマは内心ほつとした。

「また後程、正式に当家より使いを送ってお返しますから」

ファルマはそういつて教授をひとまず追い返す。

メレネーは肩を落として帰ってゆく教授に手を振っていた。

「適当に断っておくよ、メレネーたちが祖先から代々受け継いできたマイラカ族の呪術は、そう簡単に人に教えていいもんじゃない。だろ？」

「なぜそう思う？ お前たちは洗いざらい知りたいのではないか？ ファルマがハリスの言葉を翻訳してくれたり、薬草や薬のことを熱心に教えてくれる代わりに、こちらも何か帝国人に教えられるものがあるか考えたが、無理そうだ。呪力がないのに、教えても意味がない」

一応でもお返しを検討してくれたというのはファルマにとっては意外だった。歩み寄りをしてきている。教授の申し出は、メレネーが帝国貴族の神術を学ばせてほしいと言ってくるようなものだとファルマは想像する。

（呪術は使えなくても、霊を操る技術を神殿は重宝しそうだけだな。それでも）

メレネーがこれほど無防備では、少し心配になってしまう。  
彼女は一度信頼した相手には、あまり警戒心をみせないようだ。

「あのね。これは裏のない言葉として受け取ってほしいんだけど、武力以外の交渉カードは、そう簡単に切ったらだめだよ。国際交渉の基本だ」

「お前と話していると、よくわからなくなる。なぜ、他国の人間を利するような真似をしているんだ」

「俺はサン・フルーヴにいるけど、帝国の人々にのみ与しない。どこかの国だけでなく、できれば多くの人々が幸せでいてほしいと思う。メレネーたちの子孫に、百年後も大陸で笑っていてほしいからメレネーらの呪術のことを教えてしまったら、悪用だってされかねないんだよ？」

そう言ってしまうは嘘くさくなるが、それはアメリカ力開拓史を知っているファルマの本心だった。今は帝国の庇護があったところで、今後侵略者に狙われないとも限らない。

「今、サン・フルーヴ帝国は世界一の帝国で、エリザベス聖下はメレネーたちのことを尊重して大陸から手を引こうとしている。だけど、相手が知りたいと思うことこそ、伏せておくべきなんだ。メレ

ネーたちの呪術は、もし帝国やほかの国と事を構えることになっても互角以上に戦える戦力になるよ。その軍事力の要を、たとえば使えなかったとしても相手に教えてはいけない」

「エリザベスが仕掛けてこなくても、次の長はわからない、というわけか」

薬草園にはファルマとメレネーの二人きりだ。周囲に人の気配はない。

二人は薬草園内のベンチに腰掛けて会話を続ける。

「忠告をありがとう。せっかく二人きりなので、それはそれとしてお前とはもつと情報交換をしておきたい」

「いや、だから帝国の人間に呪術のことを言ったらだめなんだよ」

今説明したじゃん、とファルマはつつこみたくなるが、メレネーは黙って首を横に振った。

「お前、薬の神なんだろう？」

「え？」

「私の霊が夜の間に調べてきた。私の大陸には祖霊パラルという、賢き霊がいる。その霊がお前のことを“霊の王”と呼んで恐れていた。そしてこの国に来て神官という者たちを調べたらすぐ、お前が何と呼ばれているかわかった」

メレネーはたった一夜の間に、使役霊を駆使してサン・フルーヴの帝都を調べ、ファルマの正体をつきとめていた。メレネーがこちらの大陸にきたのは、ファルマの素性の調査という一面もあったのかもしれない。

しまったと思ったが、メレネーはファルマの反応を見て正解を確信した様子だ。

「私の大陸には偉大なる霊はいても、神というものがいない。それがどんな存在なのかわからない。しかし薬の神は、霊の敵ではあっても人間の味方のようにみえた。なぜならお前は、海を越えて私たちの一族も生かそうとし、ピチカ力湖の呪いを解いて、私たちから何も奪わずに帰って行つた。ハリスの日記を翻訳してくれたり、昨日と今日の様子を見るに、我々を歓迎しようとして心をくだいている。たぶん、薬の神とは人をわけへだてなく慈しむのだ。違うか？」

メレネーはファルマに無垢な笑顔を見せた。

こんな風に笑えるんだな、とファルマは新鮮に思う。

「……なんだろう、うまく返事はできないけど」

「お前は大陸の呪術や霊のことを知らないようなので伝えておく。ちなみに私は敵国の人間に内情を暴露しているのではない、薬の神に打ち明け話をしているつもりだ。同じ内容がハリスの日記にも書いてあるかもしれない。たぶん書いていないのだろう」

「わかった。そのつもりで聞く」

マイラ力族が呪術を使えるようになるためには、子供のうちに祖<sup>マ</sup>霊<sup>アテ</sup>たちの審判を受ける。審判に受かったものが、その資質に応じて呪力を与えられ呪術師となる。神脈に対応する呪脈というものはない。霊に選ばれた者が呪術師なのだから、霊の敵にはなりえない。もちろん、悪霊などというものはいない。そんなシステムを、メレネーはファルマに淀みなく話して聞かせた。

（神術体系と呪術体系って全然違うな……ルタレカは同じなのに）

共通点があつたのはルタレカぐらいで、コンセプトもまったく異なっている。

まるで、地理的に孤立させた大陸間で、それぞれ超常の力の運用を変えてみたかのような……。

（こっちの大陸は、本当に墓守の管轄なんだろうか？）

そんな疑問が出てくる。

「少しずつ分かってきた。呪術体系の中には、巨人とか巨大な霊の伝承がある？」

「誰もそういった話を聞いたことがない。巨人とはなんだ？」

「そっか、知らないか……ありがとう」

メレネーは首をかしげていたが、ファルマに打ち明けてすっきりしたと言った。

「では、こちらからの質問だ。薬の神には何ができる？」

「薬師と同じだよ。薬を創って、人を治す。それがどんな人であっても」

「そのためにこういった植物を育てているのか。たしかにこの温室にあるものは見慣れない植物ばかりだ」

「この大陸の植物とはきつと植生が違うからね。似たものはあるかもしれないけど、メレネーのいる大陸にあるものとは違うかもしれない。植物から取れる薬はわずかだから、薬の成分だけを純粹に精製したものを使うといいよ」

「では、私の住んでいる大陸の植物は薬としては利用できないというのか？」

たとえこの大陸の薬用植物についての知識を向こうへ持って帰っても、使えないのでは意味がない、とメレネーは落胆する。

どうしたものかな、と思案したファルマはあることを思い出す。

「そういえばハリスさんの日記には、薬用植物やハーブのことが書いてあったよ。メレネーが住んでいる大陸にも、確かに原料はあるんだけど」

「それを参考にすればいいのか？」

「効果は一つ一つ確かめていくしかない。そのまま鵜呑みにするのは危険だ」

ファルマはメレネーと共にハリスの日記を調べてみる。

Gravel Plant（アメリカイワナシ：利尿作用がある）

Box Tree（ハナミズキ：頭痛に効く）、

Blue cohosh（ルイヨウボタン：鎮痛や陣痛促進）、

Hydrangea（ハイドランジア：膀胱炎に効く）

などなど、ハリスが記録した薬用植物は存在する。

「これらは薬として使えそうか？」

メレネーが期待を込めたまなざしで見てくるので、ファルマは心苦しい。

（ちなみに、これらの植物の効能は全部おまじないの域を出ないな）

それもそのはず、ハリスの知識は20世紀初頭のものであり、その有効性については現代地球薬学では否定されているものもあり勧められない。メレネーが真に受けてはいけけないので、「使えないよ」としつかりとくぎをさしておく。

「使えないのか……偉大なる呪術師の記録だったのに」

メレネーがわかりやすくしよげるので、ファルマは悪かったなと  
気まずくなる。

「この薬草園にある薬用植物の中で、効果を持つものを大陸に持って帰って栽培すれば、そこから新たな薬をつくることができる。うちの関連薬局の店舗を一店大陸に出店して、そこに薬師を派遣してもいいけど。どう？」

メレネーが希望するなら、異世界薬局大陸支店の出店を検討してもいい。

新大陸への赴任に興味のある薬師はたくさんいるだろう。

「それではだめだ、それではその薬屋が撤退したら何も残らない。我々は便利だった薬の記憶を懐かしみながら病に苦しむことになる。借り物の知識ではだめなんだ。本物でなくては。我々が賢くならなければ」

メレネーがこう言うのは、ハリスのもたらした銃の現物を紛失したあと、マイラ族は自力で護身用の銃を作ることができなかったからだという。

だから、ハリスの技術は一代限りのものとなった。

マイラ族では銃の原理も理解できなければ、火薬の成分も、火薬を作る方法も突き止めることができなかった。

ハリスが直接教育をした者は呪術にかまけ、部族抗争によって死に絶え、後世に伝わらず、技術は続かなかった。メレネーはそれを痛恨に思っていたようだ。

「わかった。本格的にこの大陸の薬学をはじめとした科学技術を学びたいってことだね。でも、一朝一夕では無理だ、ある日急に技術が身につくなんて、そんな奇跡はない。たぶん何を学ぼうにもマイ

ラカ族の誰も基礎学力が足りてない。何年もここで学んで学問をおさめるつもりがあるなら、喜んで受け入れるよ。エリザベス聖下に留学のご許可をいただこう」

いい話になった、とファルマはわがことのように喜ぶ。

教育を受けたいという者を拒む人間は、この医薬大学校の教授陣に一人もいない。

「メレネーが留学するの？」

「それは一族の中でやる気があつて見込みのありそうな者、ということになる」

「またそういう話になったら教えて」

「世界のしくみを学べば、我々は呪術を手放すこともできるのかもしれない」

「メレネーは呪術を手放したいの？ でも、どうしてそう思うの？」

「お前もうすうす、わかっているのではないか？」

呪力や呪術に長けていても、いつかはその力を使い果たす。

力を失ったものは、暗殺に怯えなければならない。

呪術の才能は個人の特性によるものが大きく、後世に伝わらない。

呪術師の寿命は短く、戦闘により真つ先に犠牲になる。

それを何とかしたいと思っているようだった。

ファルマを脅かすほどの呪術の腕を持ち、マイラカ族の長としての地位を得ながら、彼女が胸に秘めていたのはささやかな願いだった。

「マイラカ族全員が呪術を手放すことは、間違っていると思うか？」

「思わない。神術使いも同じような葛藤を抱えているから」

神術使いも同じだ。



神力の有無がこの国ではすべてを決めてしまっている。

同じ人間なのに、貴族と平民との間には分断があり、平民は国の枢要に取り立てられることもない。

貴族は、神力を得たことを責任と感じ、義務を果たすために日々激しい鍛錬を積んで己をすり潰す。

本当にそれでいいのだろうか。

ファルマとメレネーの思いは同じようだ。

もし、世の中が平和で、悪霊も発生しない状態になったら。

悪霊さえいなくなったら、神術を使わなくても誰でも普通に暮らしていける日々が来ればいいと思っている、技術の継承については、神術よりも科学のほうが優れていると思っている。

地球人として漠然と感じていたことだが、ファルマがこの世界に来てから貴族に囲まれていたために、誰にも話したことがなかった。貴族たちが享受している特権を、使わなくてもよい状態にすることにほかならないからだ。

「だから俺は、限られた人ではなく皆が使える、役に立つ技術を誰もが学べるようになってほしい。しかし、悪霊が闊歩している現状で、この国の神術使いたちが神術を捨ててしまうことはまだ難しいな」

「先日も言ったが、この国の人々を脅かしているものが悪霊だというならば、私たちマイラカ族が、霊と争わず鎮めることができるかもしれない」

「それはありがたい。でも悪霊だけじゃない。霊よりもっとでかいのがいる」

「なんだと？」

次元のはざまに潜む巨人、この世界の管理者であろう「墓守」。  
その墓守が駆動させ、世界の崩壊を食い止めているという謎の歯

車。

異界から現れ続ける守護神の降臨もまた、神術依存の社会を強固なものにしている。

道のりは果てしなく遠い。

それでも、一つずつ歩みを進めることに意味はあるだろうか。暗中模索ながら、メレネーという理解者を得た気がする。

「さつき、巨人といていたものか？」

「そうだ」

「ところでお前、大きさは変わらないのか？」

メレネーはファルマの全身を眺めるようにしてみた。

「俺のこと？ 変わらないけど」

「霊の大きさは自在だが、薬の神は肉体に縛られてもいないのにその大きさにしかなれないのか？ 自分が小さいと思うのなら、大きくなって相手を食らえばいい。霊は共食いをする。薬の神はどうだ？」

思ってもみなかった視点だった。

思い起こせば、薬神杖が伸縮自在だったのは、薬神がどの大きさを顕現しても使えるように。

そんな機能があつたのかもしれない。

ファルマ自身が自己の大きさを縛って、人間のように規定してしまっていた。

「でも……あの巨人の力は強大で、仮に大きくなる方法を持っていたとしても、まったく勝てる気がしなかったよ」

「霊を強くするのは人間の祈りだ。神を強くするものはないのか？」

メレナーが次々に放つ怜悯な言葉が、ファルマの存在の根本を揺るがすかのようだ。

ファルマは思い出した。

人々が薬神に祈るたび、この世界のなにがしかのシステムが、ファルマに力を集めていたことに。

そしてまた、思い出す。

薄れてゆく前世の記憶の中で、彼の前世の学友、中嶋へぶつけた疑問を。

「もし、その類の”神”に出会ったら、俺たちは降伏するしかないのか？」

たしか中嶋は同じ時空に”神”を降ろせば、反撃は不可能ではないといったはずだ。

世界中の人々の祈りと神力を集め、ファルマが十分に力を蓄えたとき。

はたして異なる世界より呼び込んだ幾多の守護神を思つさま食らってきた暴虐の巨人、

「墓守」を次元の隙間から引きずり出して、

それに打ち勝ち、世界の管理者に成り代わるチャンスがあるのだろうか？

その後、自らの存在はどうなってしまうのだろうか？

## 8章5話 巨人を食らうとき（後書き）

### 【謝辞】

本項の薬草に関する部分は、薬剤師の兎島 悠史先生にご指導いただきました。  
ありがとうございました。

### 【参照HP】

「健康食品」の安全性・有効性情報

<https://hfnetwork.net/nibiohn.go.jp/content/individual.html>

### 【お知らせ】

異世界薬局関連作品 TOKYO INVERSE - 東京反転世界 -

<https://ncode.syosetu.com/n0736ha/>

を連載しています。

この世界では落雷で死亡したファルマ・ド・メディシスのもう一つのストーリーが読めます。

## 8章6話 薬谷完治とファルマ・ド・メディシス

薬草園での密談を終えたファルマは、メレネーを教授室に招き入れて、ソファをすすめた。

秘書のゾエには今日は外してくれと言っておいたので、二人きりだ。

当然ながら、エメリツヒにも来るなど言っている。来るなどいっても納得しなかったので、あとでファルマが彼の実験を代行する段取りになっている。

「ここが教授室。適当に座って。何飲む？」

「お前の別荘の部屋か。水でいい」

メレネーは教授室の飾り棚の置物などを珍しそうに触り倒している。

「仕事場だよ。ここで仕事をしているんだ」

「薬屋もやっていると言っていないかったか？ 仕事が多すぎなのでは？」

「経営者と店主をね。今は結構ほかの人にも任せてる」

メレネーとのやりとりにおいて、彼女たちの呪術体系の基本構造や社会システムを知ったことは大いにファルマに刺激を与え、一気に世界に対する解像度が上がった気がした。

ファルマの頭の中に、一つのアイデアが宿る。

メレネーのヒントから、ファルマが人々の信仰と祈りの力を蓄えて、神術や呪術の力を預かる。この世界の管理者、「墓守」と比肩するほどの存在となり、墓守の支配を覆す。

そして、世界を破綻させる力である神力や呪術を使わなくても人々が平穏に暮らして行ける世界に変えてゆく。

「納得せん者も多いだろうが、方向性は間違っていないと思う」

「同意見だ。でも順序通りにやらないと、ただ悪霊や墓守に蹂躪されて終わる」

「薬の神はその墓守という巨人をみたのだな」

「ごめん、名前で呼んで。落ち着かないし」

こう、うまく言えないがそわそわする。

神聖国では公式に人間をやめはしたが、せめて個体名で呼んでほしい。

つけてほしくないあだ名をつけられて冷やかされている気分だ。

メレネーは首をひねる。

「ん？ 神殿は薬の神と呼んでいるようだが」

「あそこはそういう宗教だから事情が違って……なんかもう、諦めてる」

「わかった。私は称号で呼ばれると誇りに思うが、お前はそう思わないのだな。では個人名で呼ぶ。ファルマは巨人を見たのだろうか、どんな奴だった？」

「ありがとう。半物質の杖で攻撃してみたけど、次元をずらされたよ」

ファルマが墓守を目撃したのは一度だけ。

帝都が悪霊によって襲撃されたときだ。

「次元？」

メレネーは当然ながら知らない用語だ。

「なんだろうな。杖が届かないところに逃げられた」

つまり、墓守は上位次元の存在なのだろう。

ファルマはこの神力や呪力という、ファルマのいた地球においては到底説明のできない力が、どのようにこの世界の維持に寄与しているのか理解できない。

理解できなければ先入観を取り払い、観測から始めるのが科学的のだが……。

エネルギー保存の法則を破ってうまくいくとはどうも思えない。

「なぜ、地球に似た世界にしたかったんだろうか」

ファルマはこの世界に来てからずっと疑問に思っていた。

この世界の歴史は浅く、墓守は確実に地球史を参考にしてこの世界を作った。

神力や呪力、わずかな地理の相違を除けば、この世界は地球環境のそれに酷似している。

そうまでして、墓守は何をしたかったのだろうか。

農神の少女は地球出身ではなかったが、地球とよく似た場所から来た。

しかし薬谷の学友、物理学者の中嶋は「仮に別の宇宙に知的生命体がいたとして、地球に似た文明をたどることはありえない」と断定していた。

となると、物理学者ではない薬谷にも思いつくのは、

（この世界は地球とは異なり、地球文明をコピーして育成ゲームみたいに動かしている世界なんだろう……そんなの、うまくいくわけがない）

分子進化学の観点からみても、地球史が土台に存在しない状態で地球文明をコピーをしたとしても、同じようにはならない。

しかも、化石燃料や土壌資源までコピーするのを忘れているし、なぜか極東アジア大陸がない。火山活動も弱い。

少しでも初期値が異なっていれば同じ結果にはたどり着かない。

しかも、地球史を完全に巻き戻したって、また同じような生物進化の歴史を辿るとも限らないのだ。

コピーが雑！

管理が未熟！

45億年分を省くな！

創世期に四つの力が決まり、鉱石の分布なども決まるというのに、そこを省くな！

ビッグバンからやり直せ！

あと、太陽系の動きはもちろん、隕石の衝突まで計算して完コピーしろ！

未熟者のくせしてオリジナリティを出すな！

アニメ、漫画、小説等、映画、ゲーム等のフィクション内の「魔法」という概念を真に受けるな！

薬谷が墓守の地球育成ゲームのプレイを見ていたら、横からそんな言葉を投げたくなる。

それでうまくいかなかった部分を取り繕うために、神力や呪力などのチートで辻褄を合わせようと頑張っているのだろう。

（まあ言い過ぎだけど、やるからにはちゃんとやってくれ。頼むから。この世界の人々の命運を握ってるんだから）

ただ一つはつきりしていることは……この世界の管理者は、世界の管理がヘタクソなくせにこの世界への愛着が強すぎる。

ファルマはメレネーに、遠からぬ未来に起こるであろう確定事項を告げる。



「結局墓守は、この世界の運営に失敗している。どれだけ銕の歯車で延命をはかっても、遅かれ早かれこの世界は終わる」

破綻を繕うための存在を拉致してきて守護神とし、この世界のためにすり潰している。

拉致されるほうも、たまったものではない。

それに、自分はもう死んでいるからいいとしても、地球のある空間が巻き添えを食らうのは看過できない、とファルマは嘆く。

ファルマは、この世界を破綻から立て直すまでの道筋を考えた。

1 悪霊のいない世界を作る。

2 神力、呪力を使うことをやめ、物理学による整合をとる。

3 銕の歯車を寄生先の世界から引き抜いて、この世界を自立させ安定化させる。

4 1、2、3の状態が保たれているか、信頼できる管理者が監視し続ける。

墓守の支配を覆す、などと威勢のいいことを考えてみても、一介の人間であったファルマに、ひとつの世界の運営などできそうにない。

だから、墓守をそそのかすか、説得するか、意思決定を司る領域に介入する。

「ほかの世界を巻き込まず、自分で独り立ちできるように整合性のとれた自然法則に切り替えていきましょう。経験を積み、きつとうまくいくから」

これを守らせるのが最低ラインだ。

素直に聞き分けてくれればいいのだが。

「もう一つ方法がある気がする」

メレネーがファルマに提案する。

「壊れていない、鎧の歯車と繋がっている向こう側の世界に行く」  
「え？」

メレネーの発想はぶっ飛んでいた。

つまり、薬谷完治が存在していた世界。

地球。

日本。

東京。

そこへ行くとメレネーは言っている。

懐かしすぎる地名だが、もうあまり向こう側の記憶を思い出すことができない。

記憶を侵す禁術に踏み込み、霊薬や神薬を創りすぎた。それよりも、

「あの、それは異世界への侵略っていうんだけど」

これはさすがにまずい。

B級パニック映画に発展する。

「あちら側の世界は壊れていないんだらう？」

「知らないけど、たぶん壊れてない」

「こちらが侵略しなければいい。お前が私たちの大陸においてそうさせたように」

「丸腰で行ったとしても、普通に向こうの人類にやられるし普通に権力者に怒られる」

謎の齒車にすり潰されるルートを克服して異世界への通路を開いたとして、その先の世界へと突き進むと、薬谷 完治のいた研究室へとつながる。

研究室から出た瞬間、その気がなかったとしても地球への侵攻ということになる。

地球側の立場で考えると、異星人の侵入など許されるわけがない。

「誰に怒られる？ 人の王か？」

NASAとかかな、とファルマは真顔になる。

あとは、SETI（地球外知的生命体探査）という機構がある。

電波望遠鏡を利用して地球外生命の電波を受信したり、探査機を探している。

東京の某大学の研究室からワラワラと異世界人が出てきたら、地球人一丸となって殲滅作戦をとられてしまうだろう。

怒られが発生する、どころの騒ぎではない。

「そうだね、色々ある。普通に攻撃されて謎の齒車ごと破壊されて終わりだと思う」

「ファルマは向こう側の世界から来たのだな。ハリスがそうだったように」

「そうだよ」

「向こうの世界のことをもっと教えてくれ」

ファルマは教授室の鍵付き棚に置いていたPCを出してきてデスクの上に置き、開いてみる。

PCはこの世界の人々には見えないし触れられないので、盗難は起こりえない。

地球の写真ならば、大量に持っていたはずだ。

それをフィルムにトレースして、メレネーに見せてあげることができる。

見えれば、だが。

「ん。なんだその箱は」

メレネーはそう言いながら、透明化しているノートPCの輪郭にそって指でなぞっている。

「メレネーにも液晶部分が見えるのか。エレンもそういえば見えていたよな。もしかしてこの写真も見える？」

「いや、輪郭はわかってもらえただけ。それ以上は見えない」

「残念だ。見れたら一目瞭然なんだけど……」

しかし、それを見せてしまったらいいよ大々的に地球の文明を目撃させてしまうことになる。

メレネーは地球文明に興味津々だ。ファルマは何枚かトレースをして地球の風景をメレネーに見せる。

「この箱の群れ、見てみたいな」

「高層ビルのそびえる街だよ。この一番高いビルの頂上は雲がかかっていたりする」

「なるほど。そっち側に行ったらどうなる？ 向こうの世界には、墓守のような管理者はいるのか？」

「さあ……宗教の問題になってくるな。少なくとも、会ったことはないし、向こうの世界の人間はその証明すらできてないな」

「なんだ、ファルマ。お前は向こうの世界の仕組みを全くわかっていなかったのだな」

言われてみれば、とファルマは反省する。

「うん、まあ……でも、それらしき伝承や聖遺物は世界各地に残っているけど。事実ではないと思う」

「ファルマ、お前はハリスの日記を事実ではないと思うか？」

「いや、事実だと思うけど。現物も残ってるし」

何しろ日記という現物が残っている。

「なぜ、お前の世界の各地に存在した伝承は事実ではないと思った」「反論しにくいことを言うなあ……」

何故、神話や伝承を創作物だと思ってしまふのだろう。

ファルマはただこの世界より進んだ知識と神力こそ持っているが、脳内は普通に地球における一般人なので、地球上でさらに上位存在がいるかどうかわからない。

メレネーは鋭い突っ込みを放ってくる。

メレネーはファルマの目を見て断定した。

「いると思う」

「いないと思うけど」

「いいや、いる」

「いないよ」

「“見えない” ことはいないことではない。私は霊の世界を知っている。現に、お前の言っている墓守という巨人は、お前にしか見えないのだろう？」

「そうだけとさあ……」

子供の喧嘩のような言い合いになっていて見苦しいところだ。

地球で大々的に「造物主などいない」と言ってしまうと、世界各地の宗教家から狙われて大変なことになる気がする。

そして物理学者であり薬谷の学友である中嶋のいうように、大統一理論が完成したとき、地球の存在する時空における神の存在は希薄化し、地球人は神を殺す。

「では、鎡の齒車というものの先に行つて向こうの世界に出て、向こうの造物主に少し間借りしていいか聞いてみよう」  
「いやいやいや……勘弁して」

もはやメレネーの発想についていけない。

「鎡の齒車ってどんなものだと思う？ 人をすり潰す形してるし近づいただけで死ぬるよ。現に、何人もの人間や守護神を食らってるんだ」

「私は入らないが？」

え、どうということ？ とファルマは自分を指差す。

「俺？ 俺も行きたくないよ。まだこの世界で思い残してるんことがたくさんある」

「そうは言つてない。死んだ者、つまり私の霊を行かせればいい。霊なら通れるし、霊は私の心に見た映像を伝えられる」

「向こうの世界に霊の偵察を送るってことか……」

ありかもしれない。

ファルマはメレネーの意見に乗ってみることにした。  
となると、メレネーの滞在中に試してみたい。しかし、鎡の齒車に近づくのは危険すぎる。

また蓋が抜けて何かが解放されてしまったら、もう対処できそうにない。

どうしたものかと思案して、そういえばと思い出す。

「待つて。鎡の齒車經由ではなく、ほかに異界に繋がっているかもしれない場所がある」

「それはいい。今から行こう。今から行けるのか？」

メレネーは先ほど供された「ファルマのおいしい水」を飲み干して席を立った。

鎡の齒車より比較的安全に立ち入れる異界。

つまり、聖泉から入れる異界の研究室だ。

「でも、少し装備を整えてからのほうがいいと思うな。思いついて即行動ではちょっと。しかも、あの研究室に入るには回数制限があるんだよ」

「二人きりで行動できる日がほかにあるのか？」

ファルマは相変わらず真っ黒なスケジュール帳に目を落とす。

「ごめん、スケジュールがいつぱいだった」

「どうせそんなことだろう。では、私の絵鳥に乗っていこう。その薬学校の庭に絵を描いていいか？」

「芝生を荒らしたら怒られるよ。それよりもっと速い方法がある」

ファルマは「寒くなるから」といつて自分の厚手のコートをメレネーに着せ、窓を開け、手慣れた様子でリュックに手早く色々なものを突っ込んで背負う。

窓の下と周囲を見渡すが、人目はないようだ。

「お前に乗っていくのか。神の使う飛翔方法には興味がある」  
「俺のことを乗り物みたいに言わないでよ」

ファルマが彼女をエスコートするように手を差し伸べると、メレナーはにこっとして手を取る。

ファルマはメレナーの手を取ると、彼女の体に自らの神力を含ませる。

パツレがパラダイムシフトを起こした結果色々と挑戦的な神術の使い方に取り組んでいるので、それに刺激を受けてファルマも人体を物として扱うことにした。

位相幾何学的には、ファルマが杖を持って飛ぼうが、杖を腰に差したまま飛ぼうが、メレナーと手を繋いでいようがまったく相同なのだ。

ファルマが杖といえば「乗らなくてはならない」、という先入観にとらわれていた。

魔女がほうきに乗って飛ぶ姿のイメージが強すぎた。

つまり、杖は帯びてさえいれば乗らなくてもいい。

さらに、コアさえあれば杖を持たなくてもいい。

「なるほど、私の体を自分の一部にしたな。お前は人をモノのように扱うのだな」

「もうちょっと、言い方がさ……容赦ないというか」

たじたじになりつつファルマは窓を蹴り、二人で空へと飛び立った。

「兄のおかげで、いろいろ学ぶことも多くてね」

「兄とはあの銀髪の奴か」

「尊敬できる兄だよ。新旧の神術にも詳しい」

雲を抜け、急激に気温が下がってくる。

メレナーの息が凍り付く。



「加速するよ。寒いからしっかりくつついてて」

ファルマはメレネーを抱き込んで神体と一体化させると、空気の層でメレネーを守りながら、空気の薄い高高度へ脱出し、空気抵抗を避けながら音速に達する。

かつて、目的地までは一時間ほどかかっていたが、この状況では十分もすれば到達できる。

メレネーは何も言わずファルマの邪魔をしないように身を寄せていた。

目指すは帝都より遠く離れた場所に位置する、人を寄せ付けない断崖絶壁の切り立った台地。

そこは雲に覆われて、人が立ち入ることができない。

ファルマとメレネーは寂寥とした大地の上に降り立つ。

「どうした？」

「あの距離をこの短時間で飛べるとは」

「メレネー一人なら運べるよ」

「お前、つくづく人間が齒向かつてはいけない存在だな……」

「メレネーにはかなり追いつめられてたけど。ルタレ力を取られたときには終わったって思ったし。実際、尻尾巻いて逃げただろ？」

「はは、お前も焦っていたのか」

「日和って逃げたのはたぶんあれが初めてだよ」

それは痛快だ、とメレネーは少し得意げになる。

「ファルマが神術を手放すと、こういったこともできなくなる。ここには二度と来れないがいいのか？」

「この世界が滅びるよりましだし。それにその時はまた、飛行機で来るよ。今俺がやっていることは、科学技術の進歩で達成できることばかりだ。人間は神術を使わなくなつて宇宙にだつて行けるんだ

よ」

「そうなのか……ではなおさら、なくしてしまったほうがいいな」

メレネーは決意を固めるようにそう呟く。

このあたりにあったはずだ、と予想をつけながらファルマは聖泉へと近づく。

「ここには本当に、お前以外には誰も来たことがないのだな」

メレネーが呪術を使い、霊を駆使して地形の分析する。

「そういうのわかる？」

「人や動物が死んだ痕跡がない」

「へえ……すごいよ。メレネーって長になるまでにどれだけ訓練を積んだの？」

「まあ、長となるまでには色々あった。それでもこうやって誰かの役に立っているなら、努力も報われるというものだ」

「尊敬する」

「お前もそうなのではないか？」

「俺は、この世界に來た時に何も知らずに力を持たされていた。神力を得るために努力なんてしてない。借り物の力感がずっとある」

この世界で落雷で死んでしまったファルマ少年は、血反吐を吐くようなトレーニングを積んでいたに違いないが、薬谷 完治にとつて、神力とは貰い物なのだ。

だからこそ、彼がこの世界でしかたつたであろうことに尽力する。ファルマは霧の大地の中を歩き、水を消去せずに目視で探す。しばらく探すと、窪地に小さな聖泉が見つかった。

「あつた！」

少し離れて探していたメレネーが駆け寄ってくる。

「この泉の底に異界があるのか」

「結構複雑でね……泉の中に飛び込んで、水の中から水面だけ凍らせる。そこに、裏側から体をつ突っ込むと、何も無い空間に出る。その先に、異界へとつながる研究室がある。その研究室の奥に進むと、真つ暗な窓がある。向こう側に脱出できるとしたら、たぶんその先だ」

「全然わからん。ファルマと一緒に聖泉に飛び込んでみなければ」「じゃあ、その作戦で行こう。水の中では話せないから研究室の間取りを教えるね」

ファルマは手帳に図面を書き、メレネーに解説する。

< i 5 8 0 7 1 7 — 2 4 9 6 >

薬谷研は薬学研究棟の301、305、321に居室を持っている。

聖泉から入れる入口は、廊下から准教授室の301号室に対して一方向のみだ。

地球世界側には存在するはずのほかの入口は聖泉側からみると存在しておらず、開かない。

おそらく、実体であるメレネーはこの空間に入れないし、入るべきでない。

この異界の研究室に滞在できる時間は、だんだんと短くなってきている。一定の時間になると、研究室の外に締め出される。

ファルマが研究室の扉を開くので、彼女の霊に制限時間内に向こう側へ突破してもらうしかない。

301号室では薬谷がソファの上で仮眠をとっており、生死の境

をさ迷っている。

それを無視して、研究室302を経由し、304の培養室に進む。そこから見える窓の外にはあるはずの廊下がなく、虚無の深淵がある。

異世界への脱出口があるとすれば、その先だ。出入りを繰り返すたび、段々と異界は広くなっている。

ひよつとすると、廊下側に出来るかもしれない。

メレネーには事前にそんな情報を伝えておく。

「わかった？」

「わかった」

「時計が何時何分になってるか見てきてほしいんだけど」

異界の研究室は、3時30分から4時30分までの時間を繰り返す、薬谷完治の生死の結果が重なり合っている。

そして、そこを何度も往復をしたために、研究室に入っている時間が短くなっている。

タイムリミットとなる4時30分まであと何分あるのか、知っておきたい。

前回は、3時50分まで進んでいた。

「時計とやらの読み方がわからん」

時計のある場所を教えて、デジタル時計の時刻のうち、右側の二つの図形を覚えてきてほしいと伝える。

それならわかった、とメレネーは渋々頷く。

「その、異界の部屋で寝ているという男は何者なんだ？」

「それが本当の俺だ。たぶん、たまたま異世界への入口が発生した場所で死んだ、だからこっちに連れてこられた。放っておいたらそ

のうち死ぬから何もしなくていい」

ファルマは秘宝化しているT大学の職員証を見せる。  
30歳の時の写真だが、すでに顔色が悪い。そりゃ、死ぬよなと  
今になって思う。

メレネーは職員証を眺めて、ぷつと笑った。

「人の顔を見て笑わないでよ」

「いや、そうじゃない。お前、子供じゃなかったのか。道理で言う  
ことが子供らしくないわけだ」

「老けてるってこと？」

「落ち着いているというか、達観しているというか。違和感があつ  
たのだが、大人だと思えば納得がいく。子供の体に大人の精神。ご  
まかすのも大変だろう？」

「大人の体に子供の精神よりはましかな」

かけあいもそこそこに、ファルマとメレネーは上着を脱いでタオ  
ルを用意し、聖泉へと飛び込む。

ファルマが聖泉の裏側から神術で水面を凍らせると、メレネーは  
氷の中に手を突っ込もうとする。

しかし、メレネーの手は氷の表面で弾かれてしまった。メレネー  
の息が水中で続かなくなっただので、ファルマは物質創造で彼女の周  
囲に酸素をまとわせる。

ファルマは手を伸ばして氷を貫通させ、向こう側の空間に出る。

メレネーに手を伸ばして、異空間越しに掌を合わせる。

メレネーはファルマの体を貫通させて異界に霊を送り込む。  
准教授室への入口のカードリーダーはほぼ壊れかけている。

それでも、職員証を押し付けると、数秒の間のあと、認証を受け  
付けてくれた。

ピツと音がして、准教授室への扉を開く。

准教授室のうち開きの扉はもう、人が入れるほどの隙間はない。腕が一本、やっと通るくらいだ。

ファルマがドアの内側に腕を差し入れていると、腕を伝ってメレネーの霊が異界へと侵入した。

中を見ようとすると、内部が暗くなっていてよくわからない。

しかし、一分もしないうちに研究室のドアが閉まり、聖泉の外にはじき出された。

ファルマは危うく腕を挟まれるところだった。

（あぶねー……腕がなくなるところだった）

放心状態になったまま二人で聖泉の水面を漂う。霧がわたっていて、空も見えない。

今回は異界の研究室に侵入していないので、ファルマの神力量に変化はない。

体が透明化するという現象も起こらない。

「お疲れ様、メレネー。はじき出されるまで早かったけど……何かわかった？」

「一回外に出よう。少し時間をくれ」

メレネーは状況を整理しつつ、考え込んでいるようだった。

ファルマはメレネーを助け起こして聖泉の外に出る。

二人ともすっかり水浸しになってしまったので、タオルを頭からすっばりかぶり水分を拭う。

「ええと、着替えあるよ」

聖泉で何が起こるかわかっていたので、ファルマも準備は万端だ。メレネーは着替えはいらないといってタオルドライで水気を切った。

「話せそう？」

「ああ。気を取り直した。順繰りに話していこう」

まず、メレネーの霊は研究室に入り、時計を確認した。

時計は、12を指していたらしい。

デジタル時計なので、4時12分しかない。

やはり以前きたときより進んでいる。

次に、メレネーの霊はファルマが薬谷 完治が寝ていると言っていたソファを確認したが、誰もいなかった。

不審に思ったが、301室を通り過ぎ、302室を通過、303室を通り抜けようとしたとき、303室のドアが外側から開いて、誰かが入ってきた。

そして、ファルマやエレン、パツレの使うものと同じ神術と思しき術でやられたというのだ。

「は？ あの空間は神術は使えないはず……」

メレネーの霊はオタマジャクシのように霊体を細長く展開していたので、303室に入っていた部分はやられてしまったが、302室側にいた体部は無事だった。

霊が301室に逃げ帰ると、303室から誰かが追ってきたという。

霊がその正体を見極めようとしたが、ぼんやりとしかわからなかった。

「はつきりと断定はできないが、お前だった。そのカードの人物が、霊を殺した」

「もとの世界の俺、薬谷 完治には神術は使えないよ……それに、神杖も持っていないし、神技は打てない。不可能だ」

「杖はなかったが、小さな黒い棒を持っていた。左胸から取り出して構えて、その先から神術を放った」

「胸ポケットから取り出したのはペンのこと？ 単なる筆記用具だよ？ 神杖じゃない」

「私に言われても知るか」

メレネーはむすつとしている。彼女からすれば大切な霊をやられたのだ。

しかし、腹を立てることもできないというところだろう。

「そうだね、ごめん。それを向けて神術を使ったの？ 俺が？」

「何か話しかけてきたが、言葉が翻訳できなかった」

「そいつ、本当に俺？」

「もう一回行って覗いてくるか？」

「いや、もう入れたとしても指一本ぐらいしか入らないと思う。本当に入れなくなっていると困るから、あとの一回はまだとっておいたほうがいい」

（向こう側にいるのは、誰だ？）

確か、異界の研究室の中で、一度だけ心筋梗塞から生還して元の世界に戻ったであろう薬谷 完治が存在するのはファルマ自身が目撃した。

彼なのだろうか。

（生還した影響で……？）

もし、メレネーの霊を浄化した何者かがこちらの世界の神術使いなら、メレネーの霊が東京側に出ようとしているのを侵入ととらえ、悪霊だと認識した。



異界の向こう、東京側から分析室のドアを開けて入ってきて、霊を認識し、浄化神術を使ったのは何者だ？

「向こう側の世界、変わってるのか？ 俺が神術を使えるようになってる？」

インターネットで情報を確認しなければ。

何か変わってれば情報の更新があるはずだ。

ファルマは向こう側の薬谷が何を考えているのか、そして本当に薬谷なのか、もはやわからなかった。

ただ、こちら側の世界にとってはまずいことになった。それだけは飲み込めた。

（もし、俺のことが見える俺と異界の研究室で鉢合わせしたら……どうなったんだろう？）

即死だったかもしれない。

そんな可能性に思い至った。

（なんてこった。異界の外に待ち受けるのは自分なのか……）

## 8章7話 全遺伝子疾患治療薬：SOMA

ファルマとメレネーは聖泉から帝国医薬大の教授室に戻る。

濡れた服で飛ぶと体温を奪われるので、綿毛布をかぶせて帰ってきた。

内側からしっかりと鍵をかけて窓を開けていたので、教授室の中へは誰も立ち入ってはいなかった。今回はゾエにエレンと二人でいるところを目撃されて誤解に誤解を重ね大変なことになってしまったので、同じ失敗は繰り返したくない。

「風邪ひくから着替えて」

くしゃみをしかけていたので、今度こそメレネーに濡れた服を着替えてもらって、薬学校の制服を着てもらおう。

「ありがとう、付き合ってくれて。メレネーの体調と霊の調子はどう？」

ファルマは薬谷 完治と思しき人物に神術で浄化された、メレネーの持ち霊のことも心配する。

「私は平気だ。だが私の霊に関しては頭の中にわずかに残していたもの以外は殺されてしまった。もう戻らん」

メレネーはむすつとして、納得がいかないといった顔をしている。彼女にとっては家族も同然の霊だ。彼女は数体の霊を使えるようだが、失われた霊は戻ってこない。

彼女の霊はファルマと薬谷 完治の双方に殺されたということに

なる。

「だが、ファルマが悪いのでもない。仕方がない、あいつが強かったのだし」

「ごめん、ほんとに。まさか襲撃されるとは思わなくて」

「もし、制限時間となって強制的にあの部屋の外に排出されなかったら、あの男は扉を通じてこちら側に出てこれたんだろうか。いや、それ以前にあいつがこちら側に出てきて追ってくる可能性はないかなんならその辺に來ているのではないか」

メレネーが恐ろしい疑問を口にする。

「いや、それはないでしょ。俺たちに気付かれずに飛んで追ってきたことになるよ？」

「お前にできることなら、向こうにもできるだろう。お前なんだから」

「たしかに、特殊な杖を持っていたらね。そして仮に俺が向こうに行けるなら、向こうの俺もこっちにも来れるということだ。しかし俺は向こう側にはまだ到達していないから、こちら側に来れるかはわからない」

（向こう側の薬谷がこっちに出てきたら。今ここにいる俺はどうなるんだろう？）

自分がこの世界に二人いる、という矛盾が発生することになる。どちらかが消えるか、統合されるのだろうか。

あるいは対消滅のように完全に消えるのだろうか。考えるだけでもぞっとする。

こちらは研究室から繋がる異界の構造すら把握していないが、向

ここの薬谷はとつくに調査を終えていて、異世界へのゲートの安定化方法も心得ているかもしれない。

自分が敵だった場合は厄介だ。

思考回路が同じなので、行動が読まれてしまう。

さらに薬谷以外のほかの神術使いもいるのなら、向こうには世界的な科学者、技術者、軍事専門家等も大勢いるだろうし設備も武装もすべてがこちらの文明より上だ。

こちらが神術を駆使して迎撃しても、一日に使える神力量に上限があるために、一般神術使いたちは大規模空爆などを防ぎきれない。科学文明の差で一方的な展開となる。

二つの世界の生存競争へともつれ込んだ場合、大義名分を得た地球人はどれだけでも残酷になれる。

ファルマは軍事には詳しくないが、ドローンを用いた無人爆撃機、大量殺戮の使用も躊躇しないだろう。

（核兵器を使われたら……）

物質消去があるので防御は簡単だが、では防御できるかというと現実的ではない。

（一瞬で核分裂反応を起こす核種を特定できなければ終わりだし、どれがそうなのかも見分けがつかない。大陸各地に複数打ち込まれたら対応できない。生物兵器、化学兵器、放射線兵器、とりそろえてる。現代地球と全面戦争になったとしても勝ち目なんてない。一か月もあればこっちが大陸ごと消し飛んでるぞ）

地球人って……残忍！

と三年あまりの滞在ですっかり異世界人側の立場になってしまったファルマである。

神術や呪術に利用価値を見出すかもしれないが、それが地球人には使えないとわかると、それを攻撃に使われるリスクをわざわざ放置しておく理由もないだろう。

何故、薬谷があそこにいたのか。  
ファルマはそこに立ち返る。

（普通に考えれば実験の途中だった、だ。もし、異世界人の襲撃を予測していて待ち伏せしていたなら、主戦力の中に装備も不十分な俺が入っているわけがない。やはり実験をしていたら偶然、廊下側から室内に悪霊が見えたのでドアを開けて撃った、そんな感じか？）

「いや、でも……もし、俺の中に入っているのが俺ではないのなら」「なぜそう思う」

悶々していると独り言になっていて、メレネーの存在を忘れていた。

（だって、こっちのファルマは俺に意識の大部分をとられてるんだからな。向こうの薬谷だって……中に俺以外の誰かがいないとも限らない）

「向こうの世界の俺は水の神術は使えないから。神力もない」  
「その仕組みがわからないんだが、水の神術が使えるのはどういう人間なんだ」

マイラカ族たちの呪術の中には、属性は存在しない。  
神術属性や守護神、正と負の概念は理解しにくいようだ。

「この国のうち、水属性とよばれる貴族なら使える……。もう少し

技名なんかの特徴がわかればいいんだけど。あれ、メレネー？ そいつ、どっちの手で撃ってきた？」

はたと、ファルマは重要な確認方法を思い出した。

薬谷 完治は左利きだ。

「こっちの手だ。マイラカ族の中でもこっちの手を使う者が多いが、何か参考になるのか」

メレネーは身振りで、右手だったと教えてくれる。

左胸のポケットから、右手で筆記用具を取り出して、そのまま撃ってきた。

「いや、大きなヒントになった。中にいるのは俺じゃない。俺は筆記用具は左手でとっていた」

考えたくないが……ファルマは一つの可能性に思い至る。

あの、サン・フルーヴ中心部でファルマ少年が落雷に遭った日。

こちらの世界の薬谷 完治の意識の中にとけていなくなってしまうたと錯覚していた彼。

（向こう側の俺の中にいたのは、ファルマ少年ではないのか？）

ファルマが怖いとすると、メレネーがソファの上にねそべって、眠気に耐えられなくなったらしくやすやすと寝始めた。

戻ってくる途中、呪力を消費すると眠たくなってしまうのだと聞いていた。

異界の研究室への侵入、薬谷 完治からの襲撃への対応で呪力を使い、ついに力尽きたといったところだろう。

そのあたりはパッレが神力を使いすぎて倒れるのに似ている。

ファルマは寝入ってしまった彼女の体温を確認して少し体が冷えていたので毛布をしっかりと着せ込んで、そのまま寝てもらったことにした。

メレネーの頭の中に少し霊を残していたからこそ、まだファルマと意思疎通がはかれる。

長旅のあと、帝都観光、慣れない文化風俗に取り囲まれ、そして聖泉への突撃といった弾丸ツアーは、13歳の少女にはハードだったことだろう。

「ありがとう、メレネー……」

寝顔を見ると幼く見えて、ファルマは感謝する。  
ファルマは意を決しPCを開く。

（むこうの世界は今、どうなっている？）

聖泉から戻るたびに向こうの世界の因果関係が少しずつ変わっているかもしれない、というのはこれまでも気付いていた。

だが、今回の侵入では初めて外からドアが開いて中に誰かが入ってきた。

明らかに、これまでとは違うことが起こっている。

薬谷 完治。

向こうにいるのはたしかに自分のはずなのに、彼が何者なのかわからない。

インターネットにつながと、ヘッドラインのニュースをみてゆく。そこには全く知らない世界が広がっていた。  
トップに見えたのは、首相会見の動画だ。

「え？ いきなり首相が変わらないか？」

見慣れない首相がうつっていた。

名前を見ても、全く知らない。そんな国会議員いたっけなというレベルだ。

「ちょっとまって、令和って？ 今年は2048年で、令和30年！？ 向こうの世界の元号は万保ではなく令和になったのか？」

まだ薬谷の生まれる前の話だが、元号からしてファルマの知っている元号と違う。

ファルマの知る世界では、

明治 大正 昭和 平成 万保となっている。

そして、現在は、

明治 大正 昭和 平成 令和と元号がつながれている。

令和はファルマの知らない元号で、200年ぶりの譲位によって元号が変わったというのも驚きだった。そんなシステムがあったことすら知らなかった。

「れいわ……れいわ……かなり違和感があるな」

前回、異界の研究室に入った後のネットで確認した元号は万保だったことを思い起こせば、かなりダイナミックな変化が起こっている。

ファルマは飛び跳ねそうになる心臓の鼓動をおさえつけながら、過去数十年にわたって起こった出来事を探す。

近代史のまとめサイトのほかに、新聞、報道各社には、各年の出来事をまとめたアーカイブが存在する。

20XXの出来事、などのように大きなニュースがまとめてある。2019年からその後数年にかけて、薬谷の知らない大きな相違



点があった。

分岐点になったのはこのあたりだ。

「COVID-19ってなんだ？ SARS-CoV-2ウイルスによるパンデミック……？ 21世紀の地球でか？ 東京オリンピックは一年延期……オリンピック延期レベルで流行した？」

ファルマの知る限り、東京オリンピックは2020年に開催され、たし、小規模な鳥インフルエンザウイルスの流行はあったが、そんなウイルスの発生も流行もなかった。

ファルマは頭を抱えそうになりながら、何があったのかとWHO、CDC、厚生労働省、国立感染症研究所などの総括の報告を読む。

ファルマが現代において医学情報を収集するときは、適切なデータを取り扱い適切な方法で評価され、学説の検証、相互批判が担保された研究者や専門家のコミュニティでの査読を経た学術論文や、それらをまとめた国際機関、公的機関の情報にあたる。

民間で作成された陰謀論じみたサイト、非専門家の意見、専門家であっても検証の不十分な個人の意見にとどまるものには注意が必要だ。

インターネット上では2000年初頭より深刻な医学・薬学情報の汚染がおこっており、容易に疑似科学や、医学的根拠のない極端な意見のサイト、詐欺まがいの業者のページにたどり着いてしまう。

もしくは、学術論文のフリーアクセス化にともない一般の人々が論文にアクセスできる機会は増えたが、雑に機械翻訳をかけて書かれている文脈を理解できず、あるいはデータを読み解く力がないばかりに適切な解釈ができず「ここに書いてあった」と、書かれてもいない誤情報を発信したり、疾患のリスクや標準治療を受けないリスクを過小評価したり、陰謀論にとらわれたり、多くの人々が誤情報に迷わされ適切な治療の機会を失ったりした。

それは、ファルマのいた世界でも日常的に起こっていた。

2019年末に初めて発症が報告され、流行が拡大した新型コロナウイルス感染症は、史上最悪クラスのパンデミックであり、全世界の人々を感染症の脅威の中に巻き込んだ。

世界各地でロックダウン、緊急事態宣言、入国制限や行動制限が繰り返され、イベントの中止や縮小、公共サービス、経済活動、学業などの制限にまで及び、医療資源の逼迫や医療崩壊を起こした時期もあった。

「スペイン風邪を彷彿とさせる流行だったのか……信じられない」

疫学的な知見や医療技術を積み重ね続けているにもかかわらず、人類の歴史において、感染症の流行は繰り返される。それは理解できていたが、世界で3億人近く感染し、数百万人に迫るまで死者数が増えるものかと驚愕する。

結局この感染症はmRNAワクチンをはじめとする、世界各国で迅速に開発承認されたワクチンの継続的な投与と、世界的に発生する変異株とのいたちごっここの末、集団免疫を形成し、ようやくのことで終息を迎えた。

ファルマはこちらの世界ではほぼチートともいえるニューキノロン系の抗菌薬、レボフロキサシンを、濫用と言われても申し開きできない、薬剤耐性のリスクを無視し薬剤師の判断としては好ましくないレベルで（もちろん厳密に用法容量を指定してはいたが）用い、こちらの世界で黒死病の世界的な拡大を抑え込むことに成功したが、地球ではCOVID-19が世界的な流行となり、多くの死者を抱えていた。

二つの世界には、疫学的にも大きな出来事が起こっていた。

かつて薬谷が在籍していた大学のHPを訪れる。

これほど歴史が変わってしまったという状況証拠から推測するに、職位や常勤、非常勤の別はどうなっているかわからないが大学に在籍はしているはずだ。部外者が電子認証付きの研究室に入ってくるのは難しい。自分が在籍しているかどうか、こんなに不安になるなんて……とファルマはいつにない緊張感をもつ。

検索： 薬谷 完治

所属：

職名：

所属と職名をフリーにして検索する。

名前が変わっていたらもう打つ手がないが……

薬谷 完治

所属： 大学院薬学系研究科

職名： 教授

「ん……？」

ファルマは思わず二度見した。

薬谷 完治は31歳時点で准教授だったが、同じ研究室の教授になっちゃっている。

「31歳で？ 何をやってたらそんなことになるんだよ」

フィクションにしても設定盛りすぎかと突っ込みたくなる。  
ファルマは業績欄を確認する。

すると、業績はそれほど多くはなく、たった一つの薬剤の開発に  
集約されていた。

2045年。

3年前にSOMAという遺伝子治療薬を開発していた。

「SOMAって……なんの略だ？」

SOMAといえば、リグ・ヴェーダにも記載があり、インド神話  
に登場する不老不死の霊薬の名でもある。こちらの世界でいうとこ  
ろの、エリクシールという神薬にコンセプトが似ている。ファルマ  
少年はエレンの弟子だったから、禁術について聞いたことがあつた  
かもしれない。あるいは、禁書を読んだことだってあるかもしれない。  
い。

（まさか……神薬を再現した？ 禁書でも持って行ったか、神術薬  
をむこうに持ち込んだ？）

ファルマはあることに気付いて、嫌な予感がしてくる。

相手は神術使いだということは確定しているのだ、この世界では  
めったにないが、神殿以外の宗教があるとすればそれは異端として  
扱われる。

異端の宗教に登場する霊薬の名を名付けたということは、もうそ  
れは直截的に神殿への背信行為になる。

（こんなに堂々と異世界で神殿への背信行為ができるとすれば、信  
仰を捨てたか、守護神の正体を知って信じる気をなくしたか……）

薬谷完治がSOMAを発表した論文のリンクをあたる。

「メンテ中だど？」

発表元の雑誌のサイトが、ちょうどメンテナンス中になって閲覧できなかった。

ネットで検索してみるが、ことごとく原文にアクセスできない。関連論文もリンク切れになる。

まるで、ファルマに“カンニング”をさせないように故意に情報を遮断されているかのような。臨床研究情報ポータルサイトなどもあたってみるが、こちらにも、臨床試験を実施中だという情報はあるが、どんな薬剤なのか詳細が見えない。

「すごい……徹底的に妨害されてる。邪魔してくるのが墓守なのか誰か知らないけど、この情報を絶対俺に見せないぞって気概を感じる。俺がああ時点で持ち出した以上の知識をこっち側に持ち出すのは禁忌なのか」

SNSの反応や個人サイト、ブログ、ニュースサイト、各種バイオインフォマティクス系のデータベースなどから、読める部分を断片的に拾い読みすると、どうやら疾患治療関連酵素群、染色体維持ユニット、DNA修復関連酵素群からなる、遺伝子異常を徹底的に修正する、個別化医療を用いた複数の遺伝子治療薬のようだった。要するに、自己複製機能を持ちながら遺伝子異常を修正し、生涯にわたって治療してゆく、という薬剤のようだ。

「てかそれどんな構造してんだよ！ 何種類あるんだよ、見せろよそれを！」

さすがに興奮してしまう。

気の早い一般人からは「夢の万能薬」との期待も高く、人類の寿命は大幅に伸びるだろうと予期されていた。

こちらのファルマが考えるに、万能薬というコンセプトは、はっ

きりいつて無駄だと思う。

そして、すべての疾患を治療するというコンセプトも意味がわからない。

WHOの定義では、健康とは「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」であることをいう。予防医学は大切だが、健康とは将来疾患になるリスクを徹底的に取り除いたり、懸念される遺伝子異常がない、ということではない。

ヒポクラテスだって「良いことをするか、できなければ少なくとも悪いことをするな」というコンセプトだったのに、わざわざその時代以前の考えに戻ってしまうのか、とファルマは絶句する。

ただ、その薬剤のポテンシャルは途方もない。

エメリッヒの一族の遺伝性疾患だって一発で治る。

ナタリー・ブロンデルも脳腫瘍から解放される。

パツレも白血病の再発はなくなる。

（向こうの俺、めちゃくちゃピーキーなもの作ってるけど、こんな薬作って承認通っていいのかよ）

少なくとも、SOMAなどと名付けたりするネーミングセンスはファルマにはなかった。

趣向が変わってしまったか、薬剤名の頭文字をとるとたまたまそういう略称になったかだが。

（俺が喋ってる動画はないのか）

SOMAの詳細を話していると思しき講演動画などはかたつぱしから見れなくなっていたが、一つだけ閲覧できるものがあった。

薬谷 完治がその道のプロに密着取材をするというテレビ番組で特集を組まれていたときの動画があったので目を通す。SOMAの

発表の時期に注目され、特集が組まれたらしい。薬谷教授の生い立ちにも触れられていた。

ファルマは自分自身をこれほどさん臭く、険しい顔をして見つめるとは思わなかった。

（いや、なんかイケメンだな。肌つやもいいし、体も鍛えてそうだし、外見が健康的すぎる。研究者っていうよりスポーツインストラクターじゃないか？ アスリートみたいな体つきしてるし。こりや、効率よく仕事して家に帰って普通にジムとか私生活も楽しんでる勝ち組パターンだな。話し方が俺と全然違うし、話の間合いのとりかたや目線の配り方、イントネーションも微妙に違う。言葉の抑揚が少ない。えっと。中にいるのは、俺じゃない）

ファルマは動画を見て確信を深めつつ、雑談まじりの会話の中で、プロデューサーの質問に答えた薬谷に耳を疑った。

『薬谷先生は幼少期に不思議な体験をされたとか』

『はい、一時的な記憶の混乱や脳機能障害だったのかもしれないのですが……』

彼は10歳のころに意識不明で救急搬送をされたことがあり、それを境に目が覚めると人格が変わったかのような錯覚を覚えたそうだった。

その後、それまで全く興味を持っていなかった医学や薬学に興味を持ち始めたという。

（10歳……）

ファルマは思い返してみるが、自身が薬谷完治であった人生のなかで、10歳時点で強烈なエピソードを経験してはいない。

緊急搬送されたことも、自分を異世界人だと思ったこともない。それはもう、何も考えず、悩みもなく部活にあけていた。

動画を視聴していると、驚くべきことに、向こうの世界の薬谷完治は一度覚えた情報を一文一句まで決して忘れることができない状態になっていたという。

『え、一言一句ですか？』

台本はあつたのだろうが、プロデューサーは大げさに驚いてみせる。

薬谷は照れくさそうに笑う。

『そうなんです』

『えっ、それ見たいです。今これ、私が読んてる推理小説なんですけど、これ数ページ読んでもらっていいですか？』

プロデューサーがページをペラペラめくって、ランダムに選びましたといわんばかり目を閉じて指をはさみこむ。

薬谷 完治は受け取って、そこから数ページ目を通す。

『彼女が警察署に戻ったのはいつですか？』

『127ページの3行目、“午後八時、彼女は上司に予定を変更する旨を告げ、捜査協力をはねつけた香川の件を洗いなおすとして帰署した”です』

『うわーほんとだー、すごいですねー』

「すごい、あいつ。記憶力無駄に使ってないか？」

わがことではないかのように、ファルマは面食らった。



そしてファルマは思い出した。

薬谷 完治、現ファルマがこの世界にきたとき。ロッテは、もとのファルマ・ド・メディシスはド・メディシス家にあった書物の内容をすべて覚えていたと言っていた。

覚えているのレベルを見誤っていたが、一言一句だったのかもしれない。

現ファルマも化学構造式や薬学関連については覚えているが、それはもちろん努力のたまものであって、知識も専門分野に限定される。

（間違いない、ファルマ・ド・メディシスだ。21年もそっちにいたのか）

ファルマは彼が異世界、東京で過ごした時間に思いをはせる。

10歳のファルマ・ド・メディシスの魂と31歳の薬谷 完治の魂が交換されたとき、片方は31歳が10歳に入り、10歳はタイムリープして10歳に入った。

動画を流しっぱなしにしていると、妹が脳腫瘍をわずらったが治療に参加してそれが奏功したことに感銘を受け、薬学の道を目指すようになったというエピソードを話していた。

（ん？ 奏功？ 一時的に腫瘍が縮小したのか？ ちゆは死んでるんだよな？ でもこれだとまるで、一命をとりとめたかのような）

ファルマは息をとめて、検索してしまった。

薬谷 ちゆという名前を。

一般人だった場合、出てくるかどうかかわからない。

しかし……無防備なのか肝がすわっているのか、SNSを实名でやっていた。

（危ないんだからもつと警戒しなよ）

そこには大人になった薬谷ちゆの写真や動画が数多くアップロードされていた。

あまりにも頻繁に動画をあげているので、微妙な気分になっている。

（ちゆ、前からそうだったけど自分大好きなタイプだな……）

ファルマの知る限り、絶対にみることでできなかったちゆの未来がそこにあふれている。

情報に溺れそうになる。彼女は証券会社に就職したようで、同期会にあけくれていた。

時折家族の話題もでていることから、向こうの世界ではまだ両親が健在であることにも驚く。交通事故で二人とも亡くなった歴史も覆ったらしい。

「ああ……こうなったのか。元気そうだ」

<i582320—2496>

「どんな方法であれ、相当な苦勞をしたらろうな、ファルマ少年は」

繋がれたちゆと家族の命。

誰一人、本人も含めて、悲惨な境遇に陥っていない。

「よかったなあ……」

耐えられず、涙がこみあげてくる。

ファルマ少年は21年の歳月の中で、それが適切な方法であるのかはともかく、地上から疾患を駆逐しようとしている。

あたかも天より舞い降りた薬神のように。

それはまさに、薬谷 完治が究極、地球世界でなしとげたかったが叶わなかったことであつた。

（俺たちは、お互いがやりたかつたであろうことをしていたんだな）

ちゆのSNSの最新の投稿をみて、ファルマは絶句する。

「今年の夏はお兄ちゃんとフランス旅行に行きます！ マルセイユのプラド・ビーチ（Plages du Prado）、楽しみです！ ビーチに大きな観覧車が出るらしいんですよ！」

（い、いきてー！ ちゆとフランス旅行いきてー！ お前けしからん、代われ！ 成果出して息抜きに妹と二人で行く旅行はさぞかし楽しいだろうよ！）

こちらのファルマにダメージが突き刺さつて悶絶した。

まあでもマーセイルでエレン、ブランシュ、ロットとバカンスをしていたと知ったら「おまえけしからん代われ」と言われるかもな、とファルマも拳をおさめる。

そしてファルマは「彼も故郷を思い出すことがあるのかな」と、十歳で家族と引き裂かれ遠く故郷を離れたファルマ少年の心境も慮る。

ファルマが画面をみながらもだましていたら、メレネーが起きて不審そうな顔をしているので、ざつと説明する。

「なるほど。お前の中にもともといた人格が、あの男の中に入って

いたのかもしれない。そして、彼は向こうの世界に神薬を再現した……と」

「そんな薬剤が承認されるのも意味がわからないし、俺には理解できないんだけど。不思議な力が働いている気がする」

「それは、お前の世界の造物主がもう一人のお前を受け入れてくれたのかもしれないぞ」

「いや、いないでしょ」

そこだけはどうしても譲りたくないのが、地球育ちの科学者というものである。

「また先入観にとらわれたな。見えないことはいないことではない。墓守が存在するのだから、同じようにその世界を育成している存在がいるかもしれないだろう？」

「……そうかなあ」

「しかし不思議な造物主だ。墓守がお前を守護神に仕立て上げてお前の世界の知識や技術にただ乗りして一方的に奪おうとしていたとき、お前の世界の造物主は敵地からやってきた人間を殺さず、10歳時点のお前に憑依させた」

「百歩譲ってそういうのがいたとして、なんで10歳の俺にしたんだろ」

「さっき言っていたではないか、大人の体に子供の頭脳でなくてよかった、って」

「確かに……」

「そればかりでなく、31歳になるまで安全に育つことを許して、向こうの世界でも、この世界の崩壊の原因となっている神術を使わせてやった。そして薬をつくる環境を用意して名声まで与えるとは至れり尽くせりだ」

「向こうの世界に神術を持ち込まれて、向こうは壊れないんだろうか」

「神術を持ち込まれることで世界が壊れるなら、受け入れなければいい。そうしない、手厚く育てるということは、その造物主には受け入れる余裕があるということだろう。もしくは、何かをやらせたかったか」

（造物主を信じているメレネーと話していると調子くるってくるな…  
…単にすべて偶然の産物なんだと思うけど。たしかに10歳にタイムリープしてるのは意味わかんないな）

胡散臭い話になってるのは自覚しつつも、しかしメレネーから鋭い指摘が飛んでくるので、ファルマはメレネーの話に「そっか…」と相槌をうつて合わせる。

「あくまで私の一族ではだが、部族抗争中、敵地からなわばりに侵入してきた人間は皆殺しにするか捕虜にしておくものだ。自由に行動などさせはしない、名声を与えるなどもってのほかだ」

（サン・フルーヴや各国が国際法を遵守してるってありがたいもんなんだなあ……）

ルール無用の部族抗争だと当然そうなる。やるか、やられるかだ。この世界では神殿が幅を利かせていて、全世界の神術使いの神力を握って国際法を守らせているため、神術使いが政府の枢要に存在する国々ではそういったことは起こりにくい。

誰もがみな、神力をはく奪されることを恐れている。

「異世界人の知識にも利用価値があると踏んだのだろう、だとしたら向こうの造物主の方が上手かもしれない」

墓守の存在を知覚してしまった以上、上位存在の存在を否定しな

いのが科学的態度というものだが、ファルマの感情は抵抗してくる。

「利用価値か……」

「ところで、むこうのお前はなんの薬を創ったのだ？」

「ざっと簡単にいえば、どんな病気にも効くという薬だ」

ファルマは手放しでそれを歓迎することはできない。

遺伝子疾患を遺伝子治療で治療して、生殖系列にまで影響を及ぼすということは、遺伝的多様性を手放すことになる。極端な話、アフリカにおいて鎌形赤血球貧血症を治してしまったら、マラリアへの抵抗性が低くなる。

遺伝子変異を悉く正常化させ、染色体の安定化に全振りするということとは、進化をやめるということにもつながりかねない。

「その万能薬は、向こうの世界の人間には作れなかったのではないか？ 例えば、神術を使って作ったとか」

「……科学的根拠を示してデータを提示し、世界中のどの研究室でも再現がとれないと薬剤にはならないから、それはないと思うけど……神術が使えることが何かに関係はしていたのかもしれないな」

ファルマは参考までに尋ねてみた。

「もし、万能薬があるといわれたら、メレネーは飲みたいと思う？」

メレネーは乱れた髪の毛を布で編み込んでいきながらしばし考えていた。

「私は、一族の大人を半数にわけろ。そして、くじをひかせて半数に飲ませる」

「何で大人で、何で半数なの？」

「かりに、あらゆる病を治す素晴らしい薬だったでしょう。しかし、予想外の出来事が起こるかもしれない」

「それは薬剤そのもののリスクのため？ 仮に、副作用も長期的な影響も全くない薬であっても？」

「たとえばだが、それを飲むと呪力がなくなるなど、特定の人種には効かないなど。そうなったとき、全員で飲んでしまっていたら取り返しがつかない。そして、子供に飲ませないことで、わずか1世代で個体数を回復することができる。だから飲んでも飲まなくても一族の繁栄に影響のない方法をとる」

（真田父子の犬伏の別れかな？）

生物としては、様々な生存戦略が考えられる。どんなに安全で便利で画期的な発明が生まれたとしても、全員が使っべきではないというのがメレネーの考え方だ。

（だよな。懐疑的なものにはそういう反応になる。でもたぶん、このSOMAという薬剤の安全性が長期的に裏付けられたら、人類の殆どが一気にのっかる。SOMAには寿命を1.5倍ほど延ばす可能性を秘めている。老化による肉体の衰えからも解放され、健康寿命も最長になる、若返りと生病老死のうちの病、老、死から解放されるメリットに抗える人間はほとんどいない）

人類のほとんどが、SOMAを受け入れてしまったら。

人類という種の遺伝子の多様性は一気に乏しくなり、人類という種の生存と環境への適応においてのアドバンテージを損ねる。

人類の遠い未来に思いをはせると、SOMAを使うべきではないと思う。

SOMA、それが穏やかに人類を滅ぼすとしたら。

ファルマ少年は人類にとっての救世主などではなく、  
災厄の神、人類を終わらせる邪神ともいえる存在になるのかもしれない。

地球にもし造物主がいるとしたら、  
知恵をつけ進化をやめた人類は最適解となりうるのだろうか？  
これまでの実績からふりかえるに、地球の造物主は延々と進化ゲームを続けている。

6500万年前、メキシコのユカタン半島に小惑星が衝突し陸生  
および海生生物の大半が死滅したときに代表される、ビッグファイ  
ブと呼ばれる五度の大量絶滅をも繰り返し許容したように。

（気づけ！ そっちのファルマ！ 無数の分岐点があるのなら、そ  
の道は”正解”じゃない！）

（その造物主はお前を守っていない！）

人類の絶滅のあと、新たな生物が適応放散し空席となったニッチ  
（生態的地位）を奪い合い

新たな生態系を築き上げることを望み、進化ゲームの継続を楽し  
むだろう。



## 8章8話 終わりのための計画

ファルマはしばらく放心状態になって、何もやる気が起きなかった。

（鎧の歯車によってこっちの異世界も終わるかもしれないけど、このままだと地球人類も遠からず終わる）

地球世界にいるファルマ少年がSOMAを作ってしまったなら、薬谷 完治の責任において、地球に戻ってSOMAを修正しないといけないかもしれない。元の世界に戻る気もしなかったが、ファルマはそんなことを考え始める。

（俺が向こうに戻るのも現実的ではないから、何とかSOMAの欠点に気付いてくれたらいいんだけど。というか、何でそんなものが承認されたんだ……？）

自問自答してみたが、いくらでもそれらしき理由はあった。

彼が薬谷 完治として過ごした時期にも、それが歓迎されそうな土壌は醸成されていた。

毎年のように生み出される革新的な治療薬や医療技術、それを支え高騰し続ける医療費。

日本や世界各国で急速に進んでいた少子高齢化により、医療費の伸びは国民所得を上回るものとなっていた。

患者負担を上げても上げても、財政支出は追いつかない。

希少疾患や難治性がんの治療の決め手にも欠いていた。

そんなとき、若返りや長寿命化をも実現する夢の万能薬、SOM

Aが日本の薬学者によって開発され、有害な事象が起こらず、ベネフィットがリスクを上回ってしまったら。

適応疾患を最大に見積もって、それぞれの疾患の治療薬として厚労省にスピード承認されるかもしれない。

SOMAは膨らみ続けていた医療費を大幅に抑制し、健康寿命を伸長し、生殖可能年齢をも大幅に引き上げ、七十歳を超えても妊娠できるとあれば、少子化問題や労働力の問題も当面の間先送りにすることができる。

日本における失われた数十年。

年々と際立つ日本の科学力の凋落の責任を擦り付け合っていた政財界からも、これで何もなかったことにできるとばかり、喝采をもつてその誕生を迎えられただろう。

長期的なリスクを慎重に評価するための法整備は追いついていなかった。

誰もSOMAの承認を止めることはできなかったのだろう。

死を恐れ若返りを望む人類のほとんどが、万能薬なるものに飛びついてしまう気持ちはわからないでもない。

ファルマも同じ穴のムジナだ。

そうやってこの世界で、数々のチートを使いながら身近な人々の死に小手先の手段で抗ってきた。

（俺もきつと同じだ……俺も向こうの世界にいたら、ただ歓迎したに決まっている）

メレネーは地球世界に思いをはせ、沈み込むファルマに言葉をかける。

「何を落ち込んでいる」

「……故郷が滅びるかもしれないと思って」

声が震えてしまったことに気付く。

「お前の思っているようなことは、向こうの世界の人々も思いつくのではないか。そうそう心配することはないのかもしれないぞ。お前が来た世界の人間は、お前と同じように賢いのだろう?」

「俺なんて、大して賢いうちにも入らないよ……」

地球上の優れた人々と比較して、自身には何も強みがない。

空っぽのまま、ただ突っ走って死んでしまった。

地球人の一人として、地球の人々と、彼らが積み上げてきた科学の叡智を信じたい。

だが、地球人の一人だからこそ、ファルマは彼らの弱さも知っている。

「とはいえっても、そのソーマだとかいう薬を飲むのをやめたらもとは戻れるのだろうか? 何をそんなに悩んでいるんだ?」

「戻らないから悩んでるんだ」

このSOMAという薬は、ひとたび効果を発揮しはじめたら、永遠に遺伝子異常を修正し続ける。

あるうことか、生殖系列のゲノムも修正してしまう。

人類は本当に老いや病死から解放されてしまう。

SOMAの投与をやめたとしてもだ。

安全装置のようなものが組み込まれていたら話は変わってくるが、果たして人類は、自身の健康を損ねてまで、病苦を受け入れるだろうか。

そうは思えない。

「メレネー、向こうに行く案はなしになりそうだ」

考えれば考えるほど、やはり何かがおかしい。  
メレネーのいうように、それが地球の造物主か何かわからないが、  
何者かの介入が入っている気がする。

SOMAの存在する地球に行くべきではない。

ファルマはそう判断した。

鎧の齒車に寄生されているからか、向こうの世界でも異常が起きている。

向こうの地球はファルマの知らない世界だ。

「こつちの世界を正常化させることが先決だ。そうすれば、向こうも寄生が解けて元に戻ると思う」

「わかった。向こうの世界のことは向こうのお前や、分別のある者に任せよう。こつちの世界に残ると決めたなら、向こうの心配をしている余裕はないぞ」

13歳のメレネーの言葉は、年齢に似つかわしくなく頼もしい。

「ファルマの第一の目標は悪霊のいない世界を作る、だったな。それであれば、この大陸に住まう悪霊を一体一体お前が浄化したり私たちが鎮めるのではなく、呪器をすべて集めて私の住む大陸に持つてくるといい。それで、この大陸の霊がどうなるかを一度観察してみよう」

現存する呪器のマップは、サロモンら神官が作ってくれていたはずだ。

それを一つずつ集めて、ファルマが回収しメレネーたちに渡せば、大陸における霊の出現を防げるとも言いたげだ。

彼女の提案には一考の余地がありそうだったが、ファルマはそれでいいのかと疑問に思う。

「でも、予想に反して悪霊を呼び込んで、メレネーのいる大陸も汚染されてしまったら？」

「そのときは通常の対応をすればいい。もともとお前がやるうとしているように」

浄化をする前に試せることがあるならば、一度やってみたらいい。メレネーはそういつている。

「わかった。では少しずつやってみよう」

ちょうどその日、大神殿の定例会がサン・フルーヴ宮殿内神殿で行われているのを知っていたので、ファルマとメレネーは宮殿へ赴き、エリザベスと主要な神官らと合流した。

サロモンや各地の守護神殿の神官らも集まっていた。

聖帝エリザベス1世の代になってからというもの、鎧の齒車に対する警戒と交通の利便性から神聖国の機能をサン・フルーヴ宮殿内神殿へ移し、主要な行事や会議もそこで催されることが増えてきた。大陸各地から帝都へ向かう道はふんだんに予算をかけて整備されているため、帝都宮殿内神殿に大神殿の機能が集約することは、神官たちからも概ね歓迎されている。

ファルマの口添えとエリザベスの許可を得て、本来神官のみが参加する定例会に今日に限り、メレネーの参加も認められることになった。

ファルマは大聖堂に募った彼らを前に今後の方針を述べて、率直な意見を募ることにした。

しかしそうとは知らない神官たちは、久々に守護神が臨席すると聞いてそわそわとしている。

「守護神様から我々にお話しがあるとか」

新たな仕事を言いつけられるのではないかと怯える者もちらほら。

「定例会の前に、薬神よりお言葉があるそうだ。心して聞くがよい」

エリザベスは大聖堂の中央部の大神官の席に座している。

メレネーは客人としてその隣に席を用意された。

ファルマは祭壇前に立つて、慣例にしたがって神官らの祈りにこたえ加護を与えたあと、おもむろに語り始めた。

「これからお話しすることは受け入れがたいと思いますが、意見を聞かせてください」

彼が伝えたのは、鎧の歯車問題の最終解決を図る覚悟を決めたこと。

メレネーの協力のもとに悪霊のない世界を作りあげ、大陸中の信仰と神力をファルマに集約し、墓守と同格の存在になって要求をのませる。

墓守につきつける要求とは、鎧の歯車と地球との連結を切り、世界を正常化させることだ。

墓守が要求をのまない場合は墓守の意思伝達系統に侵入し、洗脳を試みる。

それも失敗したら世界は終わりだ、と。

「私が最後の守護神となります。どうか、皆さんの力を貸してください」

この世界の正常化のためには、この世界の因果を破綻させている

神術と呪術を手放し、科学を基本とする新たな理のもとに世界の発展を目指してゆく必要がある。

ということも明確に伝えた。

定例会には神殿関係者しかいなかったが、神官らの間に動揺が広がる。

神術を手放すということは、貴族階級の特権を失うことだ。

神官はともかく、世俗の貴族らにとってもそうやすやすと受け入れられるものではない。

彼らはファルマの言葉を真つ向から否定するわけにもいかず、あれやこれやと理屈を並べ始める。

「しかし、神術を使うなど言われても、こっそり使おうとする者があとをたたないと思います」

「我々が神術を手放したとして、子孫にまでそれを守らせるのは現実的ではなく」

「神脈の開閉をつかさどる詠唱が外部に漏洩してしまった場合は……？」

もつともらしい言い訳を考えては、神術使いの誇りを手放したくない神官たちが口々に述べ立てる。

しかしファルマは冷静に否定する。

「心配はいりません。私があなたがたの神術を根こそぎ使えなくしますので」

「ほう、それはどのようにして」

エリザベスは挑戦的な表情で、椅子に肩肘をもたせかけるようにしながらファルマに問いかける。

「皆さんの同意を得てからにしますが、私は世界中の神術使いの神

術関連遺伝子群をいちどきに破壊しようと思っています」

「すみません、おっしゃる意味がよく」

「簡単に言うと、神脈を不可逆的に破壊します」

ファルマはできるだけ感情を込めないように、無表情のまま伝える。

ここに席を連ねる全員の心を折る行為だ。

憎まれ役となるが、買わなければならない。

「聖泉の水涸をかけるということですか？」

「違います。神脈そのものをなくします」

神官たちは驚愕し、顔に恐れの色を張り付けた。

「あなた様は、私どもの体を作り変えることができるのですか」

「はい。あなた方の体を構成している全てを作り変えることができます」

ファルマは俯き気味に肯定した。

「神術使いの素養は子孫に遺伝しません、神脈はなくなります。私の目をあざむいて隠れたり、逃げたり、回避することは事実上不可能です」

ファルマは物質消去を使って、見渡す限りの領域に対し、あるいはこの惑星全域を指定して、術関連遺伝子群を消し去ることができる。

そうなればこの世界から神術使いは一人としていなくなり、ファルマは神術使いらに分け与えられていた世界中の神力を一人で独占することができる。



その力は、私利私欲のために用いるのではなく、墓守と対等にわたりあうために利用される。

この世界をこれからも末永く維持してゆくために、神力を没収する。

目的と意図を伝えてもなお、神官らの動揺はおさまらない。

「世界中どこにいても……？　ですか」

「地の果て、海の果てであつてもですか」

「逃げられないと思います。その時が来たら、一人も逃さず潰すつもりです」

彼らを守るために、彼らから神力を取り上げる。

「こんな方法しか思いつかなくて、申し訳なく思っています」

あまりにも無慈悲かつ一方的な手段を告げられて、神官らは恐怖に顔をひきつらせている。

はったりではないと気づいたからだろう。

「あの、潰すといつても痛みなどはありません。私が術を使つても知覚できないと思います。ある日突然神力が枯れ、神術が使えなくなる。神術陣に蓄えられていた神力もやがて尽きる。穏やかに、この世界から神術が消えてゆく。それだけです」

信仰を試されているように感じるかもしれない。

「同様に、我々の呪力も破壊してもらうつもりだ。神力も呪力も、両方なくなる」

メレネーはファルマの案を支持する姿勢をみせた。

「そういうことであれば、拝承しました。ファルマ様がお決めになったことですから、我々神官は受け入れて平民へと身を落とします。守護神様からお預かりした神力は、守護神様へとお返しするのが道理。神脈の破壊はいつ実施なさるのですか」

サロモンはなんの拘泥もなく神脈の破壊に応じ、具体的な日取りをファルマに伺う。

「今から五年後と定めたいと思います」

「では、この世界で神術を使えるのは守護神のみ、という情勢になるのか？」

エリザベスの質問だ。

彼らはファルマだけが知っている新たな世界へと踏み出す。

「一時的にはそうなりますが、それもすぐに終わります」

「そなたはどうなる」

エリザベスはファルマの歯切れが悪いので、安否を気にしているようだ。

ファルマはその質問をやりすごすこともできたが、包み隠さず伝えることにした。

「私は墓守とともに消えるか、鎧の歯車を破壊したときに巻き込まれて消滅するでしょう。実は、私の体は少しずつ消えかけています。しかしうまくいけば、ただ消えるだけでなくこの世界の正常化を見守ってゆくことになります。せめてこの世界の役にたてるなら、私にはそれで充分です」

ファルマの固い決意を聞いたサロモンは口惜しそうだが、反対する様子はない。彼は守護神の決定には従うと言ったばかりだ。ファルマの言葉を、神官らは受け入れるほかになかった。

「ファルマ。お前の父親、母親、兄妹たちには話したのか？」

メレネーも一応、ファルマの決意を聞いておく。

家族の話をされると、ファルマも少し決意がゆるぐ。

ああ、ブランシユは泣くだろっなあ、とか。

パツレやブリユノ、ベアトリスに伝えるのはしんどいな、など。

この体は、ファルマ・ド・メディシス少年の生きた証でもある。家族から彼を奪うことになってしまう。

「悲しんでくれるかもしれませんが、私はもともとこの世の人間ではありません。この地の医療や科学の未来を見届けたいという未練はありますが、自然界の理を曲げて、誰かの生きる場所を押しつけてまで生にすぎる道理は、最初からありません。私は死者で、死者は無にかえるべきです。消える時は潔く、それは私の美学でもあります」

そう、霊は現世にとどまってはならない。

自分にだけ特例を適用してはならない。

本当はもう戻るべき肉体もない、自分の時間は終わっていたのだから。

この世界の霊をすべて滅ぼしたら、最後に浄化されるべき霊は自分だ。

見るべきものは見て、

やるべきことはやった。

話すべきことは話した。

あとはもう、誰かがやってくれる。  
自分でなくてもいい。

メレネーとそういう話をしていたではないか。  
あと五年もあれば、それはもう十分に時間を延長してもらったと  
いっていい。

（俺がこの世界で経験したことは、長い長い走馬灯のようなものだ  
ったのかもしれない）

ファルマは神官たちの、まるで異物を見るような視線を受けなが  
ら、

じんわりとそんな感覚を懷いていた。

「全員で滅びるより、私以外の全員を生かす道をとります。神力を  
奪うことと引き換えにはなりますが」

「一つ、お伺いしたいのですが、なぜ五年後なのですか。今年の閏  
日食の脅威がありますが」

感情をかみ殺すかのように話を聞いていたサロモンが、どうして  
も咀嚼できなかったらしく疑問を投げかける。

「鎧の齒車に私の神力を注ぎ込んでいたので、今年の閏日食までは  
もつと思います。次の閏日食の予定日をリアさんに調べてもらっ  
て、五年後と特定しました。それだけの時間があれば、大陸中の呪  
器を回収することもできましょし、悪霊が本当に消えたのか確認  
する時間も、私の持ちうる知識や技能を後進に、最低限伝えること  
ができます。科学の礎が築かれたのを見届けてからこの世を去るこ  
とができます。とはいっても、鎧の齒車や私の体が五年ももつかわ

かりませんので、最短半年から最長五年ということになります」

大まかにそんな道筋をたてていると、ファルマは神官らに伝えた。計画実現の足掛かりとしては、メレネーたちの協力を得て呪器を運んで大陸に移し無害化しようと思う、と伝える。

エリザベスはファルマとメレネーの計画を受け入れた。

呪器を収集し、直接ファルマのもとに持つてくるという算段をたてる。

もちろんファルマも取りに行くつもりだが、一人では体が足りないので手分けをする。

「この大陸にある呪器をマイラ族がすべて引き受けてくれるのであれば、手前どもにとってはありがたいですが」

神官らにとっても、教区の安全を脅かす呪器の厄介払いができるのは悪くない話だ。

だが、厄介をかけるメレネーの手前、彼らも神妙な顔つきをしている。

「メレネー、本当によいのか？　それがそなたの利益になるのか？」

エリザベスは押し付けになっていないかどうか、メレネーの真意を知ろうと彼女の黒い双眸を覗き込む。メレネーはエリザベスに冷やかに言い放つ。

「受け入れてよいとは言ったが、状況をみて対応する」  
「それが妥当であろう。では、ファルマの提案に従って各々準備をすすめてゆこう」

この会議は大荒れになるかと予想していたが、メレネーと聖帝のおかげで話をまとめることができそうだ。ファルマはほっと胸をなでおろす。

「賛同いただきありがとうございます。ただ、私の案が最善だとは思っていません。異論や別案があれば受け付けています」

ファルマが深々と頭をさげ、退席をし聖堂内では通常の議題に移ろうとしていたとき、一人の女神官が勢いよく席を立つ。

「まっってください！」

ジュリアナが発言を求め、その場は騒然とする。

ジュリアナは周囲に取り押さえられそうになったのを振り切つて、祭壇を駆けあがり、ファルマの前に駆け込んで、転がり込むようにひざまづいた。

「ジュリアナさん？」

「おかしいと思います！！！！」

ジュリアナの絶叫は大聖堂に響き渡った。

「私はファルマ様に命を救っていただきました。生きることが諦めた私を、死のうとしていた私を、あなたはこの世界にとどめてくださった」

ジュリアナは無礼もわきまえず、這いつくばったままエリザベスに詰め寄る。

「聖下も、それでいいのですか？」

ジュリアナはエリザベスに食って掛からんばかりの勢いだ。

「この方は、この世界に生きる人々のために一生懸命で、諦めないで命をつないでくださいました。それなのに、神殿はファルマ様一人を犠牲にして、それで私たちは助かったのうのと生きようとしているのですか？ 守護神様にお仕える神官とは、あなた方の信仰とは、そんなものだったのですか？」

ジュリアナは涙を流しながら悔しそうに体を震わせる。

彼女がこれほどに感情を爆発させたのは、初めてのことだった。

「守護神様は人間を守ってくださいなのに、人間は守護神様を守ろうともしないんですか？！」

枢機神官であつた彼女は呪いによって支配され、神聖国よりファルマへの刺客として送り込まれたが、彼の許しを得て命を救われ、手厚い庇護を受けた。

その恩を、彼女はかたときも忘れたことがなかった。

何とも言えない空気が流れ始めたところを、ファルマは腰をおとしてジュリアナと視線を合わせ、彼女に言葉をかける。

「ジュリアナさん、庇ってくださいありがとうございます。私はもう人間ではないので、人間のように思わなくて構いません。もともと死んでいて霊のようなものなのに、人と関わりたくて、ここまできてしまいました」

「よくないですっ！ やめてください。こんなときだけ達観したふりをするのは。あなたは守護神様ですが、人間の心を持っていると仰せでしたよ！ 私は臆病な人間なので、私がもしあなたの立場なら、怖いと思います。たともう死んでいたとしても二度も死にたくないし、消えたくないと思います。でも、あなたは強くて優しいから、私たちに罪悪感を植え付けないために……」

ジュリアナは嗚咽して言葉が出てこなくなった。

それでも服の裾で涙をすすり、まさぐるように言葉を続ける。

「……私は忘れていません。私を助けてくださったのは特別なことではなくて、人間同士の助け合いだからと仰せでした。だったら、こんなの！ 絶対間違っています！ 神殿は今まで、守護神様を鎧の歯車の生贄にささげて、その断末魔の悲鳴に耳をふさぎながら生きながらえてきました。それと今回の何が違うんですか？ もうみんなのやめましょう……でないと、また延々同じことが続くんです」

ジュリアナは床に身を投げ出しても抵抗することに決めたらしい。

彼女のなりふり構わない具申を、エリザベスは目を閉じて聞いていた。

そして、宙をさまよわせていた扇をパチンと閉じる。

「そうだな……よくぞ申した、ジュリアナ。世界のため、仕方ないと言ひ聞かせて、彼の提案を鵜呑みにして諦めるところだった。余も、彼が“諦められなかった一人”であつたのにな……二度も余を救ってくれた恩神に、なんと薄情なものよ」

エリザベスの瞳に、希望を取り戻したかのような淡い光が戻る。  
白死病の際に一度、融解陣からもう一度。



彼女はそれぞれファルマと、エメリツヒに命を救われている。

「そなたはそなたの計画を進めるがいい。余は邪魔せず、そなたを生還させる方法を考える」

「目標がぶれれば、それだけ失敗する確率を高めます」

ファルマは困ったように首を横に振る。  
優先すべきことは、自分の命ではない。

「勝手に考える」

「……」

「ファルマ」

定例会が終わって、メレネーは聖堂内の椅子にかけてジュリアナを慰めていたファルマの隣に腰を下ろし、ぽつりと告げる。

「私もだ、お前に滅んでほしくない」

ファルマは何とも言えない気持ちになりながらも、  
各々がそう思ってくれたことに対して、感謝を胸に刻んでおこう  
と思った。

## 8章8話 終わりのための計画（後書き）

本項の東京世界側を知りたい場合は、エピソード3をご覧ください。  
異世界薬局に関しては話が独立していますので、他シリーズを読まなくても全く問題ありません。

同一シリーズのご案内（時系列順）

現時点で第五エピソードまでの関係を図解しています（ネタバレあり）

シリーズ全体図 [V1.1   
 https://2496.mitemin.net/i579462/](http://2496.mitemin.net/i579462/)

エピソード1：INVISIBLE（SF）

Lead character：藤堂 恒

Observer：INVISIBLE/XERO

Age：since A.D. 2007

Caption：完結済・続編はVISIBLEWORLDにて連載中。

エピソード2：VISIBLEWORLD（SF）

Lead character：藤堂 恒

Observer：the Fourth Genesis  
elegated by XERO

Age：since A.D. 2023

Caption：INVISIBLE続編・更新中。

エピソード3：TOKYO INVERSE - 東京反転世界 -  
（FT/SF）

Lead character: Falma de Médic  
is  
Observer: 藤堂 恒 delegated by the  
Fourth GENESIS  
Age: since A.D. 2027  
Caption: 更新中。異世界薬局前日譚。東京異界。

エピソード4:異世界薬局(FT/SF)

Lead character: 薬谷 完治 / Falma  
de Médicis  
Observer: 薬谷 完治 / Falma de Méd  
icis delegated by 藤堂 恒 or GENE  
SIS-X

Age: since A.D. 20XX

Caption: 毎週更新中。書籍化/コミカライズ/アニメ化。  
異世界X。

エピソード5:Heavens Under Construc  
tion(SF)

Lead character: 神坂 桔平 as 赤井

Observer: 厚生労働省日本アガルタ機構第27管区

Age: since A.D. 2133

Caption: 更新中。書籍化。厚生労働省管轄の仮想死後世  
界。

## 8章9話 薬神 VS . 異世界有識者会議

1148年6月28日。

サン・フルーヴ宮殿内に、聖帝エリザベスの招きで神術使いらが極秘裏に集められた。

大神殿禁書庫番、神学者リアラ・アベニウス。

宮廷薬師ブリュノ・ド・メディシス。

その息子、一級薬師パツレ・ド・メディシス。

一級薬師にして異世界薬局主任薬師、エレオノール・ボヌフォワ。ファルマの直系の教え子、一級薬師エメリツヒ・バウアー。

同じく宮廷獣医、ジョセフィーヌ・バリエ。

エリザベスは書面で口止めをしたうえで、神殿内のみで秘密保持されていたファルマの計画を共有する。

ブリュノ以外の全員、動揺を隠しきれなかったが、ジョセフィーヌは声を震わせながらも素直な感想を述べた。

「教授が薬神様かもしれないというのは、医薬大に通うものであれば一度は疑ったことがあります。しかし、ご本人も否定されてしまったし、まさか本当だったとは……道理で。私たちは守護神様に教えを授けていただいていたのですね」

ファルマを師と仰ぐエメリツヒのショックも大きかったようだ。

「私の守護神は薬神なんです。私の一族は遺伝性の死病にとりつかれ、薬神に呪われたと思っていました、しかしそうではないと励まし、弟を癒してくださったのは教授でした。あれは薬神固有の神術を使われたのですね。言葉にならないです……教授を超える案を出

すのは難しいですが、教授の計画にほころびがないか、批判的吟味を行ってみます。権威の説を鵜呑みにしないこと、科学の世界に上下はないこと、それは教授に教えていただいたことです」

顔面蒼白で答えるエメリツヒは特に、ファルマを除いてこの世界で最も遺伝子操作技術に詳しく、なおかつ手技にも習熟した学生である。

彼は一分もかからないうちに、目を輝かせた。

「早速なのですが、崩せそうな部分があります」

「早いな！」

「聖下、教授は本当に不可逆的に神脈を破壊する。とおっしゃいましたか？」

「ああ、確かにそう言った。のう、アベニウス」

エリザベスが肯定し、リアラ・アベニウスも促されて頷く。

エメリツヒは深刻な顔つきで考え込む。

「……何か見逃しているのでしょうか。教授が実行されようとしている遺伝子操作は不可逆的ではありません」

「私も同じく考えていました。もとに戻せます」

パツレが、先に言われたとばかりに後に続く。

パツレはエメリツヒのように手を動かして実験をしてはいないのに、詳しい部分は理解できていないが、ファルマと共著で教科書を書いた彼は、原理的な部分は完全に理解できている。やや遅れてエレンとジョセフィーヌもあつという顔をする。

「確かに全身遺伝子操作ができる教授ほど簡単にはありませんが、局所的には神力を生成するメカニズムは残されており、我々にも扱

える技術です。なので、この世から神術を消し去るという計画に抜け道があるように思うのですが」

エメリツヒはパツレとブリュノの顔色をうかがいながら、何か間違っているのではないかという疑いを抱きつつファルマの計画の甘い部分を指摘する。

「それはどのようにして？　ちなみに、あまり難しい話はいらんぞ」

理解できないことを確信したらしい聖帝は堂々と予防線をはっておく。パツレがエメリツヒに説明を譲ったので、エメリツヒは起立して説明する。

「例えば、現在聖下の皮膚細胞を体外培養しているように、自身のリンパ球や骨芽細胞、皮膚細胞などを体外培養し、破壊された遺伝子を遺伝子組換え技術によって修復して自分の体に戻せば、少ないとはいえ神力を得ることは容易です。少ない神力でも使える神術はいくつかありますからね。それを足掛かりに、神術薬学や禁術を復活させることもできます」

エメリツヒはほぼファルマと同レベルに、実行力を伴う技術的立案ができるまでになっていた。なにより、ファルマが彼をそのように教育した。

「それに、不思議なのですが、神術遺伝子群の破壊はどうなさるのでしょうか。現実的かつ手数が少なくて済むのは、上方制御している遺伝子を変異させて神術遺伝子群の機能を止めてしまう、などでしょうか。素人意見で恐縮ですが、遺伝子配列をいじるにしても、DNA二本鎖を切断してしまえば染色体の不安定化につながり、教授は臨床でそのようなことはやらないと思います。平民化で起こる

ことと同じプロセスを実行しようとしているのですかね……?」

「たぶんハツタリだな。詳しいやつがないと思って説明を端折ってやる」

パツレが切って捨てると、

「ファルマ君はそういうことはしないと思うわ。何か意図があるのよ」

エレンがファルマの弁護に出た。

「そういうことをする弟だぞ?」

パツレとエレンは二人してどちらがファルマに詳しいかを争っている。二人はエリザベスの咳払いで、聖帝の御前だったことを思い出すと口をつぐんだ。

「私は難しいことはわかりませんが、晶石にため込んだ神力は減りませんよね。晶石の神力を使って神術を行うこともできます。晶石も使っていけばいつかは神力がなくなります。薬神様の思し召しの通りにはならないと思います。ある日突然、貴族全員の神脈が破壊されたとしても、何とかして神力を得ようとする者は後を絶たないかと。そのあたりの可能性も、見通しておられるのかもしれないが、素人目にはそのように見えます」

リアラ・アベニウスが申し訳なさそうに、神学者としての見解を付加する。

「世界各地に残された神秘原薬に含まれる神力もありますね、これはあと数百年はなくならないと思います。その数百年の間、神力は

存在するという判定になるのなら、世界の崩壊は止められないと思います。ファルマが気付いていないのか、敢えて触れなかったのかは不明ですが。この前提ですと、ファルマの案は崩れますね。彼が墓守と刺し違える必要はないわけです。意味がないことは、論理的に考えてするべきでない」

パツレも神術薬学的な側面から見解を加える。

「ファルマは薬学の専門家でこそあれ、神術や神力の知識については素人です。代案を出して諦めさせるしかなかるうかと」

ブリュノが断じた。

「しかし、ファルマ師は神術と呪術が存在するから、世界が破綻していると考えているのですよね。それなら、その力をなくす必要があるのではないでしょうか」

エレンが困ったように述べる。彼女はショックで何も意見が出せなくなるほど、ファルマの言葉を重く受け止めていた。

「小手先の技で神力を復活させられるなら、それはなくなっただとはいえない。その時点で存在しないことは、その力がなくなっただということではないんだ。ほかの方法を考えるべきだろう」

パツレがエレンに答えながら、全員に説いて聞かせる。

「面白くなってきた。やはり束になった専門家は言うことが違うの。彼の計画倒れか、想定範囲内か……。まあいずれにせよ、貴族全員を平民に落とすというのはかなりの混乱を生じる。ファルマの思惑通り、五年間の間に混乱なく貴族制度を解体、新体制に移行でき



るように準備しておく。最善の策としては、ただちに、彼よりすぐれた最終解決案をぶつける。ファルマのやり方では神力はなくならない。世界の破綻を繕う別解を考えねばならん」

エリザベスは彼らを前に、挑発的な口調で言い放つ。

「薬神との知恵比べだ！」

彼女は気持ちよく言い切ってから、ふらりとパツレに視線をくれる。

「ところで、神術なき世界では皇帝は何を基準に選ばれるのだろうか？ 人気投票か？」

「それでしたら私は逆にお役御免となつて歓迎なのですが」

次期皇帝の期待がかかっていたパツレは、肩の荷が下りた気分だ。

「私は薬師を続けたいもので」

ブリュノ以外の同席者はパツレが何を言っているのかわからず、顔を見合わせている。

「ともすれば、臣民を悪霊から守るという大義名分と統治の正当性が崩れて、皇帝自体が必要なくなるかもしれない。その場合、国の代表を選挙で選んで合議制になるのか？ そちらの方がいいような気がするな」

当代皇帝がそんな不謹慎なことを言い始めたのでブリュノは渋い顔をする。

そうなれば宮廷薬師も廃止だ。

「神力や呪力を打ち消すような力って、ないんじゃないか。例えば、物質に対して反物質のような」

頭をかかえていたエメリツヒが新たな側面から切り込んできた。

「反物質を作り出せばいいのではないか」

パツレがひらめいた。

そしてパツレは、もう一步で物質創造、物質消去を駆使する段階にまできている。そこまで究めた神術を手放さなければならぬというのは、彼にとっても葛藤は大きい。

「反神力、反呪力のような力を使わないと、結局神力を使って反物質を作っていることになりませんが」

「まいったな……反神力なんてのは、人智を超えるな」

パツレも考え込んでしまった。

「今日どうこうなるとは思わぬ。各自、案を練ってみてくれ。それから、ファルマにはこれまで通りの態度で接してやってほしい。動じないふりをしていても、心細い思いをしておるだろうから、決して敵視したりしないでやってくれ」

「敵視？ 教授は私の命の恩人でもあり、尊敬する師です。むしろ、神術を探求するためのいい機会をいただいたこと感謝します」

エメリツヒは迷いなく言い切る。この青年はファルマに対する報恩への思いが強すぎて、少し暑苦しいところがある。

その熱量に気おされたかのように、聖帝はふふつとほほ笑む。

「またしても命の恩人か。彼はこの世界にきてから、どれだけ人々の命を繋いだのだろうか」

「少なくとも黒死病の爆発的流行で世界が終わっていましたよね。それを考えれば、世界中の人々が教授に恩があるといっても過言ではないです」

「いや、世界中は過言だろ」

エメリツヒの言葉に、パツレが冷静につっこむ。

従来の方法では、黒死病におかされた都市ごと焼き払い、感染者もろとも皆殺しにするという対応になっていたはずだ。あの時、フアルマが抗菌薬レボフロキサシンをもたらしたことにより、ほぼ最小ともいえる犠牲者で済んだのは奇跡というほかにない。

「確かにな。薬神は疫病の流行る前年に現れ、疫病を鎮めて力を使い果たしては消えてゆく。だが、彼は薬神紋を二つ持っているだけあって、此度の守護神は滞在期間が長く、生ける伝説であるな。彼は自ら消えようとしているが、せつかなら長居したついでに、いつまでもこの世界でゆっくりしてほしいものだ」

こうして極秘裏に開催された第一回反駁会議は終わった。

「あの……」

皆が席を立ち慌ただしく退出してゆくなか、エレンが最後にエリザベスの許に跪いて上申する。

「聖下の大神官としてのお立場からは、先ほどのお言葉はご尤もだと思いますし、私もそう願います」

「フアルマには長らくこの世界に在ってほしいという話か？」

「はい。しかし彼はもう疲れてしまったのではないかと……最近、

近くで見ている感じがします」

「それは多忙であつたり、今後の不安のためだろう」

エレンはぎゅっと唇を引き結んでいたが、震えながら思いを伝える。

「本当にそうなのかなと思ひまして。今回、私たちが話し合っただけでも、彼の計画にはいくつもの綻びがありました。でも、用意周到な彼らしくありません。だいたい、私たちの誰かに先に相談すると思います」

ファルマの計画にミスはないというより、これまでの彼の行動からするとらしくないとエレンは伝えたかった。

「彼は回避する方法があることを知っていてなお、最終解決手段として伝えたのだと思います。彼は望み通りに死にたいのかもしれない。ですから……私たちの願いはともかく、最後は本人の願うとおりにしてほしいなど。彼を追いつめてしまったのは、私たちかもしれないので」

「……そうだな」

「差し出たことを申しました」

エレンは感情をおさえきれず、一礼して引き下がった。

1148年7月5日。

新大陸に三度たどり着いたファルマは持ってきた呪器「腐水珠」を、封印つきのままメレナーに、彼女の手に沿えるようにして手渡す。

この呪器はネデル国の湖底に沈んでいたもので、濁った水と悪霊を呼び込み続けていた。

からっと晴れた空と、白い浜辺に集まったマイラカ族の集落の一族と、祖霊たちは総勢百名以上だ。

彼女は大勢の人々と霊の見守る中、呪器を大切そうに受け取った。ファルマはやじ馬たちを眺めて危惧した。

「こんなにギャラリーがいて大丈夫かな？ 悪霊が出てくるかもしれないし。せめて子供たちは家に戻ったほうが」  
「なに、心配はいらん。悪霊は出んよ」

封印を解かれた腐水珠はメレネーの手に渡ると、メレネーの呪力を濾過して清らかな水を生み出し始めた。

ファルマはあまりの変貌に驚くが、メレネーは平静だった。

「すごい、浄化されてる」

「ほら。やはりこの大陸において、お前たちが呪器と名付けているものは悪しきものではない。これをマクタ（白い泉）と名付けよう」

メレネーが得意げにファルマに掲げて見せる。

マイラカ族の子供たちは大喜びで受け取って水遊びを始めた。

「海に落としてなくさないようにね」

言葉は通じないながら、ファルマが湖を浄化してからというもの、ファルマは子供たちにもなつかれている。

「丁寧に祖霊を供養しているこの大陸においては、悪しきものはいなくなるのだ」

「ほんとだね」

(n＝2だけど、今のところは)

ファルマは素直に同意する。メレネーの予想は正しかった。新大陸に呪器を持ってきても問題なさそうだということで、ファルマが呪器を少しずつ持つてくるということになった。

「闇日食まであと一か月と少し。少しでも呪器を減らしておきたい。また持ってきていいかな」

特に、鎡の歯車の存在する神聖国周囲の呪器は取り除いておきたかった。神聖国一帯で悪霊が出なくなることにいつて何かメリットがあるかという微妙だが、墓守が出現するときには悪霊が付き従っていた。であれば、墓守との直接対決になるかもしれない場面で、不安材料はなくしておくに限る。

「たしかにな。一気に持つてきてもいいぞ。みんな呪器を欲しがっている」

「呪器が歓迎されるなんて、ところ変わればだなあ……ずっとは持つていられないものだけだ」

メレネーはいくつでも持つてきてウェルカムといった様子だ。

「俺が運んでくるにも限度があるけど、数個ずつぐらい試してみようかな」

呪器の運搬は、大陸間を航空機より早い速度で往来できるファルマにしかできないことだった。ほかの神術使いが船などに積んで持つてこようとすると、約一か月ほど時間がかかるばかりか、大量に積載された呪器は呪力が相互作用してたちまち悪霊を引き寄せる呪われた大型装置と化す。そうなれば、安全な航海などできはしない。

たちまち遭難してしまう。

「それならマイラカ族が同乗していれば、霊が暴れ出しても対処できる。問題なかつた」

メレネーは次々とアイデアがひらめくようだ。

「あんまり一気に大陸間を往来しないほうがいいかもしれない。こゝう人の往来が活発になると……」

サン・フルーヴ帝国と交易船が行きかうようになれば、ファルマはひとつ懸念することがある。

「何か悪いことでもあるのか？」

メレネーの知見では人流が活発化するデメリットを実感できないだろうな、とファルマは推測する。これは地球人類史をみてきたファルマだからこそ予想ができることだ。

「ある。早めに対処しておかないといけない。人の往来が始まると感染症も往来を始めるんだよね。これまではマーセイルの検疫所の検査を受けて、俺がメレネーたちを直接見てたから感染症の持ち込み、持ち出しはないみたいだけど……。それに、こゝちに来るジャンさんたちの検査もしていたから」

有史以来、人類の移動には必ず感染症の移動も伴ってきた。

人類が誕生したそのときから、感染症は人類と切っても切り離せない関係にあった。

人の移動に伴って、感染症は旅をする。

地球史をふりかえれば、ローマ帝国ではシリアから天然痘が持ち

込まれ、アフリカからヨーロッパへマラリアが広がり、モンゴルからヨーロッパへはペストが流行した。

コロンブスのアメリカ大陸到達の後、イスパニョーラ島と名付けた先住民の島を天然痘によって全滅させたこともあった。

ヨーロッパからアメリカ大陸へは天然痘や麻疹、水疱瘡、おたふく風邪を運び、アステカ帝国に深刻なパンデミックを引き起こした。アメリカ大陸からヨーロッパへは梅毒が持ち込まれた。

1980年にワクチンによって天然痘を世界から根絶し、その後も世界的な取り組みとして感染制御を目指している地球世界とは異なり、この世界にはあらゆる感染症が保存されている。

（ほぼ確実に、マーセイル港の検疫をすり抜ける細菌やウイルスが現れる）

マーセイル検疫所の設備では、ウイルスの感染や、未知の感染症は検出できないからだ。

（渡航者には、天然痘、麻疹風疹、マラリア、ペスト、水疱瘡、破傷風をはじめ各種ワクチン接種を必須にし、出入国を管理しよう。それでも不十分だとは思うけど）

ファルマが感染症の恐ろしさを話すと、メレネーは腕組みをして唸った。

「この地を苛んでいた住血吸虫症を一瞬で駆逐したお前がそういうなら、備えておくべきなんだろうな」

「うん、予防できるものは予防しておこう。メレネーの言葉を借りれば、細菌やウイルスは見えなくても、存在しないわけじゃない」  
「わかった。予防のための薬はあるのか」



「全てには対応できないけど、いくつかはあるよ」

地球世界の知識と技術、人に対する臨床使用実績とその効果検証の蓄積の恩恵によって、この世界の多くの人々の命も守られるだろう。

ファルマは牛痘接種の方法を開発し、世に知らしめた人々を思い出す。ベンジャミン・ジェステイは妻子に牛痘接種を行い、エドワード・ジェンナーは使用人の息子に牛痘接種を行い、その後二十回以上も故意に天然痘を接種した。

現代に生きるファルマからすればそれは美談などではなく、目を覆いたくなるような話だが、地球世界では長らく、薬の開発には現在の医療倫理の原則に反する、人権や当人の意思や同意を置き去りにした非人道的な研究が行われていた。

1947年に、第二次世界大戦における戦争犯罪を裁く医師裁判の一環で、人間を被験者とする臨床研究に対してニュルンベルク要綱が制定され、インフォームド・コンセントと自発的な参加、科学的に評価すること、参加者に対する利益を提供することなどが定められた。

現在の地球世界では、新薬や新しい治療法の開発は臨床試験を経てその安全性と有効性が確かめられ、インフォームド・コンセントによる自発的同意を得た多くの被験者から、適切に得られたデータをもとに、過去の薬に対する優越性なども検討されたうえで、ごく一部の薬だけが承認されて世に送り出される。製品となった後もデータは市販後調査の名目で集められ、有効性と安全性の確認と、治験で得られなかった新たな副作用情報の収集が行われる。

このため、医薬品の添付文書を年を追って見れば、作用や副作用の情報が充実してゆく。

効果が不十分だった、あるいは有効性がなかったとして、再評価の承認取り消しや販売中止になり、ひっそりと消えていった医薬品もたくさんある。

地球世界で起こったことを、メレネーにだけはかいつまんで話しながら、ファルマは医薬品の歴史に思いをはせる。

「まあなんというか、血のにじむようなところか莫大な犠牲の上に得られたお前の世界の成果だけをもらうようで申し訳ないが。開発者や試験参加者の霊には礼をいっておく」

「人種が違うから、全部安全だとは思わずに、この世界の人たちに適した薬の在り方を検証していこう」

などと思いつつも、マイラカ族に対しては、感染症の流行の予防のため、渡航者には数種混合ワクチンの接種、隔離期間の実施を義務付ける、という話をした。

ワクチン生産については、ペストの流行を契機にすでに準備を終えていて、マーセイル工場でいくつか生産体制が確立しつつあった。

備えあれば憂いなし、とはいかないが、憂いは少なくなるはずだ。

七月下旬までには、ファルマは神聖国周辺の呪器をマイラカ族のもとへ運んで無害化し、同時に、貿易関係者の間ではワクチン接種も始まった。

8月18日付近とみられる日食の日は、刻一刻と迫ってきていた。

ファルマは聖帝を通じてサロモンへ指示を出し、神聖国からの神官の撤退と立ち入り制限区域を設けるようにと伝えた。聖帝の細胞を培養している平民技師に対しても、万が一に備えて、細胞の管理計画をたてて8月18日付近で培養場が無人であるよう命じた。

その先も世界が続くことを願い、万全の備えとともに日々の生活を送りながら、ファルマは今日も異世界薬局に立つ。

## 8章10話 薬神紋と雷について

1148年7月15日。

大学の勤務を終えて敷地内を出たファルマは、自身に杖を向けてきた大勢の武装覆面神官らを前に困惑していた。

エリザベスの下命でファルマ専属の護衛の聖騎士も何名かついていたのだが、いつのまにかいなくなっている。どこかで殺されていなければならないが、とファルマは気に掛ける。

数名の神官らが渾身の神力を込めて放ってきたであろう神封じの術を軽く弾いて、二十五名もの神官らの神術を物質消去を用いて同時に無効化する。

「私を封じれば神術は消えない、そう考える気持ちもわかりますが」

ファルマは杖も持っていない。

「この世界が安定するのと、わずかな期間神術をながらえて滅びるの、どちらが優先だと思っ……っ」

ファルマの言葉を遮るように、背後からフォーク状の巨大な杖で腹部に抜けるように刺されていた。

ファルマが肉体であれば致命傷になるが、物理攻撃を透過するため、彼は痛みすら感じない。

（これは……）

ファルマは自分の腹部から突き抜けた青い杖の先端を驚いて触り

ながら、凶器の正体を見極める。大神殿に伝わる邪神封じの秘宝だ、間違いない。実物を見たことがある。

まさか自分がそれで刺されるとは思ひもしなかったが。

この杖はジュリアナがファルマから神力を奪うために持ってきたものと類似している。

秘宝の管理は厳重に行われているため、それなりに権限のある神官がこの襲撃に絡んでいることが推測される。

ファルマが言葉を失った隙に、背後から邪神封じの拘束鎖をかけられてきつく縛られている。

邪神封じの鎖は霊体にも効く、つまりファルマを拘束することもできるのだが、ファルマの秘めた神力量が大きすぎるために、まったく神力を吸収しきれていない。

「っ……一体どうしたいのですか」

ファルマは拘束されたふりをしながら彼らの目的を聞き出す。

「悪霊と戦う唯一のすべである神術をこの世から消そうとするなど、ありえない。そんな存在は邪神に違いない。エリザベス聖下もサロモン殿下も、まんまと邪神に籠絡されてしまっている」

（そういう解釈か。とんでもない理屈だな）

そもそもが思い込みの激しい人物ばかり集まっていると噂の神殿という集団だ。

ファルマは嘆きつつ、どうしたものかと考える。

縛られたままノーモーションでその場にいた全員に聖泉の水涸をかける。

神力が消えたことに気付き、激昂して自刃しようとした者のナイフの刃を、物質消去で消す。

少なくとも、自分の見ている前で自殺者を出したくない。どう弁解しようと、ファルマが彼らを殺した、という構図だけは作りたくなかった。

「神封じ、邪神封じ、物理攻撃は私には効きません。頭が冷えるまで、神術は預かっておきます。大神官にも報告しません、そもそも私はあなた方の敵ではない」

憎悪に曇った瞳には何も映らず、もう何を言っても聞く耳を持たないのかもしれないが、とファルマは俯く。

「一時の気の迷いであることを願います。ほとぼりが冷めたら、後日会いにきてください」

ファルマは邪神封じの鎖をまるで糸くずを切るように引き裂いてその場に放り投げ、砂ぼこりで汚れた服をパンパンと手で払う。服に穴が開いてしまった。

神官らはほうほうのていでその場を立ち去って行った。

とはいえ、神術の使えなくなった神官はもう神殿には戻れない。

神殿組織では悪霊の侵入を防ぐため、朝と夕に一日二度、公然で神力量の確認をしなければならない。

聖泉の水涸をかけられていれば、神力量はゼロを表示する。すぐにバレてしまう。

造反者を処刑することはできるが、そこまで自暴自棄になっている神官が次々と現れている状態であれば、ほかの一団が報復に来るか、ファルマの身近な人々に攻撃が向かうだけだ。

毎回襲撃者のメンバーは違えど、とにかくファルマの思惑を止めたいという勢力が後から後から蠢いているのは想像できた。

エリザベスやサロモンに告げれば、彼らの性格から予想しても、裏切者の命はないだろう。だからファルマは一度もこの件を報告し

ていない。

ファルマの対応が甘いことがかえって、襲撃をエスカレートさせているような気もする。

（これで三度目の襲撃か。守護神と聖下の求心力は弱まり、神殿組織の統率に歯止めがきかなくなっている）

あの日、聖帝エリザベスの招集でファルマは神官らを集め、神術をこの世界からなくす予定だと宣告した時点で、神官らからいくらか造反が出ることはわかっていた。

神術を取り上げるということは、貴族らのアイデンティティにかかわる。

心の準備期間を与えるという意味合いもあるが、造反者をいぶり出すために早めに伝えていたともいえる。

（どうせ神力をはく奪されるなら、ワンチャン賭けようと思えるのかなあ……）

だがこうも頻繁に一人で大勢の神官に囲まれるのは想定外で、弄られているような気にもなるし、特に敵視してもいない大の大人にこれでもかと憎悪を向けられると単純に落ち込む。

神術を失ったあと神殿組織は解体されるのか、地球世界のように神術のない状態でも世界的宗教団体として存続するのか。

それはエリザベスの判断による。

大陸唯一の宗教として、世界各国への支配を維持することは難しいだろう。

神殿を後ろ盾に即位していた各国の王たちも、軒並み追放されてしまうかもしれない。

今、ファルマを襲撃してきている彼らも路頭に迷ってしまうかもしれないが、代書屋などをやって生計をたててゆくことはできるし、

退職金などを支払って生活を保障することはできるかもしれない。

（貴族や神官の生活保障もしないと、治安の悪化につながりそうだな……）

その制度を、エリザベスに早めに提案する必要がある。

場合によってはファルマの個人財産の殆どを充当してもかまわない。

ただ、元貴族優遇にしてしまうと平民との格差問題にもなる。

ファルマの排除を企てている神官たちもいる一方で、ジュリアナやリアラなどはファルマに対して逆恨みしている様子もないが、それに甘えるべきではない。

明日の生活が保障されなくなるなら、造反が出るのは当然なのだ。

ファルマは帝国医薬大学内の敷地に対して診眼をかける。

すると、病棟以外に青い光の反応が集まっている部分がある。

「屋上か」

ファルマは人目のない建物の影に隠れ、目的地にむけて跳び、ふわりと静かに屋上に着地する。

探していた護衛の聖騎士らはボコボコに殴られて屋上の鳩小屋の前に転がされていた。ファルマは致命傷がないことを確認して縄を切ってやり、救出する。

エリザベスが直々に選んだ聖騎士らの人選に間違いはないのだが、武装神官の技量はその上をゆき、神術使いの技能を制限する神術もある。

武装神官に襲われたら、聖騎士らもひとたまりもない。

「すみません、ファルマ様。屋上に呼び出されて何者かに襲われて



動けず。お怪我は」

「怪我はありません。あなたがたこそ外科医に治療してもらってください。今日は帰るだけなので、もう護衛はいりません」

「は……ファルマ様には何かございましたか？」

「ありません」

「は、それでは本日は失礼いたします」

護衛が怪我をする頻度のほうが高いので、もう放っておいてほしい。

ファルマは護衛らを帰宅させると、厩舎から馬を出しつつ思い悩む。

「よっ」

誰が声をかけてきたのかと思えば、エレンが馬上からファルマを見下ろしていた。

「ファルマ君。今から帰るところ？　ちょっと付き合ってよ」

「いいよ、一緒に帰ろう」

ファルマもシルヴェスタという自馬に騎乗する。

この馬にも危害を加えられるようなら、もう通勤に馬を使うべきではない。

帰宅途中の襲撃に遭わないよう、飛んで移動をすべきだろう。

護衛もいないというべきだ。不便なことが増えてゆく。

「お腹と背中、大丈夫だった？」

エレンは尋ねるのを迷ったようなそぶりを見せながらも、直撃してきた。

「そっか、さっきの見てたんだ？ 嫌なものの見せちゃったね」

「見ちゃった。助けようと思ったけど、あっという間に形勢逆転してたから出番なくて」

「全然平気だよ。服に穴があいたぐらい。背中側、目立つかな」

「コートを脱いで腰に巻いてたら見えないよ」

「ご指南ありがと」

ファルマは切なくなりながらその通りにする。

「あんなことされたのに、許しちゃうんだ」

「許すとか許さないじゃなくて、黙っておくだけだよ。エレンも黙っていてくれると嬉しい」

エレンの口は堅いが、念をおしておく。

「いいわ。でもあれ、ガチ神封じの神術で、刺されてたの秘宝だったでしょ。なんであんな状況に？」

「なんか、邪神に見えるんだってさ」

「へこむわね……」

「ね、でも気持ちはわからないこともないから」

エレンはどこまで聞いただろうか、とファルマは懸念するが、彼女の反応を伺うと、肝心な部分は聞いていないようにも思える。

「確かにファルマ君は強いし神力も切れないしどんな攻撃も通らないけど、だからってさすがに邪神扱いは酷いよね……そもそも邪な部分ある？」

エレンはかなり憤っている。

「聖下にバレてクビになっちゃえばいいのに！」

そろそろクビになった頃だろう、後で詫びに来れば神力を戻してもいいが、とファルマは他人事としてそう思う。

神官の行動原理も理解できるだけに、憤るほどの感情がわいてこないファルマに対し、エレンのほとばしる感情がまぶしい。

「そういえば、何に付き合えばいい？ 今日護衛がないから付き合えるよ」

「神術訓練！ ちょっとだけだから」

「なるほど、でも俺とエレンじゃ、あまりいい訓練相手にならないかもしれないな。怪我也させたくないし」

ファルマが攻撃をしなくても、エレンが自爆したりするということとはありえる。

怪我をされれば治すのはこちらなので、わざわざ傷つけない。

「なによー見くびらないでよー」

「実際、相手にならないよ」

ファルマは神籍に入ってより、模擬戦とはいえ対人戦闘を避けるようになっている。

新大陸でメレネーたちと戦った時に、対人戦闘はすべきではないと学んだ。

「ファルマ君と随分試合ってないから、たまにはいいでしょ」

「うーん」

「Voulez-vous danser ? (私と踊らない?)」

エレンはいたずらっぽくほほ笑む。

「Oui」

断りたい気もしたが、ダンスに誘うセリフで申し込まれると頷いてしまう。

三十分ほど馬を走らせて到着したのは、ボヌフォワ邸の所有する湖のほとりの神術訓練場だ。

二人で馬を繋いで、五メートルほどの距離をとって正対する。

「あれ、杖いらないの？ 命の次に大事な神杖は？」

ファルマはエレンが杖を外して荷物と一緒にベンチの上に置いていることに気付いた。

そういえば、ファルマがこちらの世界にきて初めてエレンの個人授業を受けた日、杖を持っていなくて怒られたな、と思い出す。

そのエレンが杖を手放すのはどういった心境だろう。

「今日はいいわ。みてて」

エレンは杖を持たず、指先に神力を集中しはじめる。

彼女の周囲に神力が漂い、大きなハンマー型の形状になってゆく。

「すごい！ 無杖、無詠唱の上位神技の水の大槌だ！ この短期間にすごいよ」

ファルマは素直に驚いたので惜しみなく褒める。

エレンはファルマの歓声に集中が切れて、術が解けた。

「ファルマ君やパツレ君のいうことがやっと分かってきたから、見

てほしくて」

エレンは照れたように髪をかき上げる。

「ちゃんとできてるよ」

「素手で撃つ神術、こんなに軽くて操作性が高いんだね。ファルマ君が杖を持たなくなったの、わかる気がする」

「フォーマルな場では持つてるけどね」

「私も君も、毎日何百回と杖を振ってきたでしょ。杖を握る手に血豆ができて潰れてさ。毎日杖を磨いてさ」

「エレンは杖が好きだったもんね。何本持つてるんだっけ」

「324本」

「……博物館が開けそう」

この世界の人々が杖を振るって悪霊から人々を守ってきたから、今の世界がある。

でも、これからは役割を終える。

ファルマが何とも言えず彼女を眺めていると、エレンは笑顔で振り返る。

「神術戦闘の前に、ファルマ君の神術も見せてくれる？」

（墓守との決戦を考えれば、もうあまり神力を使いたくないけど……）

ファルマは神力消費をおさえながら予備動作なしで湖面を凍てつかせ、表層に美しいフロストフラワーを形成する。エレンはきゃーっと言いながら湖に走り出す。

フロストフラワーはファルマが風を作り出すと空中を舞い散って太陽光を反射し、ダイヤモンドダストを伴った幻想的な光景を作り

出す。

「走ると滑るよ」

注意が遅かったか、既に滑って尻もちをついていた。

ファルマも湖面を踏みしめて、少し冷やされた空気に浸り、つかの間の癒しを得る。

「真夏の銀世界！ 夢を見ているみたい。こんな神技見たことないわ！」

「神術が描き出す光景を、たくさん写真に撮っておくといいね」

そしていつか、かつて存在した思い出として懐かしむといい。

異世界に根差し、異世界の人々を悪霊から守ってきたこの技術は、もうじき消える。

それぞれの胸に思い入れはあるだろうが、ファルマの心に躊躇いはなかった。

湖面の氷を溶かして、元の湖の姿に戻す。

「そろそろ神術戦闘してもいい？」

「エレンは思い切り打ち込んできてよ。俺は反撃はしないけど防御したり躲したりはする。それでよければ相手になるね」

「ファルマ君は神術に当たっても怪我しないんだっけ」

「しないよ。俺が怪我したの、三年前に落雷を受けたあの日から見たことないでしょ」

あの日からずっと、かすり傷ひとつない。

「そうだったんだ！」

意外と気付かれてなかったのだな、とファルマは目を丸くする。

「そう、的だと思って撃つてきてよ」

それでもサンドバック状態にならないのは、とにかく、神術に関しては攻撃を受け付けないからだ。

「わかった。胸を借りるね。お相手ねがいます」

エレンは杖を地面に置き、上着を脱いでトレーニングウェアになり、素手で構える。

ファルマはエレンの的になるために少し彼女から距離を取る。

エレンにとって、一方的に神術を打ち込むのにこれほど最適な相手はいない。

神術使いと試合をすれば、必ずどちらかが怪我をする。恨みつこなしが基本だとはいえ、やはりお互いの禍根を残す。ファルマはその心配がない。

無敵の守護神は、怪我をしない。

ありとあらゆるダメージが入らない。

「いつでもどうぞ」

エレンは一気に神力を練り上げる。

最初の攻撃は下位、「水の槍」を無杖、無詠唱、ノータイムで繰り出してくる。

速度、威力ともに、以前より格段に強化されている。

ファルマは襲い来る水柱を神術を使わず、よけもせず受け止める。ファルマの体に触れた水属性神術の攻撃は、水蒸気となって消えてしまう。

ファルマが攻撃を受けている間に、エレンは中位、「水の戯れ」

を無詠唱で立ち上げ、波状攻撃をしかけてきた。これもファルマは見切り、身をよじって水滴の弾丸をかわす。

地をえぐる攻撃をみるに、以前彼女の技を見たときより、水弾が加速している。

初めて出会った頃から既に上位神術使いであつたエレンは、紛れもなく帝国屈指の達人の域に達している。

無詠唱、無動作の神術は、相手に次の一手を読ませない。

術の展開速度はパツレより速い。彼女に勝てる神術使いは、そうそういないだろう。

エレンは脚先の動きを使って、上位、「水の精」を展開している。まるで自我を持ったかのように攻撃を仕掛けてくる水の巨人を、ファルマは指をはじいて消滅させる。

（速くなつてゐる。成長してゐる）

術の立ち上げと整形、安定化には目を見張る。

興味深い、ファルマはそう感じた。神術を磨き上げていたのはパツレだけではなかった。

エレンもまた、神術の改良と進歩を見せている。

エレンは出し惜しみをせず、変幻自在の攻撃を繰り出す。

脚に神力を凝縮させて湖の水面へとたたきつければ、湖面にステップを作ることができる。

エレンは湖を駆け、あらゆる角度から神術を撃ち込んでくる。湖上の戦闘においては、湖底から剣山が突き上げるかのような攻撃を受ける。

氷の剣山は、ファルマの頬をかすめた。生身であつたら即死していた。

「見たことのない神術だね、すごい」「ゾクゾクするでしょ？」



水、氷、熱水、水蒸気、すべての水属性神術を撃ち尽くして、これで十六連撃。

ファルマはわき目もふらず自分に向けて変幻自在の攻撃を放ってくる彼女に、躍動する美を見出した。

彼女の体にわずかに宿る薬神紋が神力を供給し続けているとはいっても、神力計で測定したエレンの一日の神力上限を超えている。ファルマはエレンの全力をみたことがない。これが初めての機会となる。

（エレンの持っている神力を使い果たしてしまいたいかなのような）

神力消費量には日内上限があるので、霊薬や禁術を使わない限り、短期間に神力を使い果たすことは難しい。それでも、エレンの神力消費のペース配分は、全力を思わせた。

「エレン、そろそろ神力の日内上限でしょ」

「やっと神力が空っぽになった。これを待っていたの。みて、ここからが本番だから」

エレンは両手を胸の前に出し、細心の注意を払いながら、ごくごく小さな水滴を作り出した。ファルマには殆ど見えない、拡大視を使ってようやく見える程度だ。

ただの神術水に見えるが、ファルマは感想を控えてじっとその様子を観察する。

エレンは小さな水滴に神力を込めてゆく。そして、ファルマに告げた。

「これ、何だと思う？」

「わからない」

眼鏡の奥のエレンの、青く涼やかな瞳とファルマの視線がぶつかりあう。

ファルマはエレンの瞳に宿った力の強さに惹かれる。

「それ、なに」

ファルマは真顔で尋ねる。

「ファルマ君に教えてもらったもので、ファルマ君がまだ造ったことがないもの」

エレンは妖艶な笑顔でなぞかけをしながら、回答をはぐらかす。彼女は作り上げたものを人差し指で湖面に放つ。

すると、その場で湖水はすべてを噴き上げるほどの大爆発を起こした。

大地は揺らぎ、鳥は湖畔から一斉に飛び立ち、爆風が木々をなぎ倒す。

ファルマは降り注いでくる湖水すべてを咄嗟に物質消去で消す。放っておけば、五秒後には周囲一帯大洪水になる。

何が起こったのか、ファルマは考えを巡らせる。

「超臨界水でも作った？ 核物質？」

「違うわ」

「反物質か」

反物質自体は安定なものだが、わずか1グラムの反物質を物質と衝突させただけで、対消滅が起きて核兵器にも匹敵するほどのエネルギーがその場に残される。

エレンは知っていたのだろう、あるいは計算したのだろう。

反物質創造を完全に制御して、何とか湖水と相殺できるほどのエネルギーにとどめた。

「反物質」を扱う人間は、人体のすべてを反物質で構成された「反人間」でなければならぬ。

エレンの体は物質でできているため、反物質に触れば致命的となる。

なんて危ない橋を渡ったんだ、とさすがにファルマは青くなる。

「空気中の水蒸気と反応してはいけなから周囲を真空にしていたの。見た？ 私ね、反神力を使ったのよ」

「反神力……」

ファルマは全く新しい概念の登場に戸惑う。

「神脈から神力を引き出すのではなく、神力の枯れた空っぽの体で、無のエネルギーを神脈に押し込むの。この世界に存在する神力を、自身の神脈の向こうに返すのよ。そして向こう側に送った力をもう一度薬神紋から引き出すの。その時に、反神力が発生し、反物質を作れるようになる」

「すごい……」

ファルマはお世辞ではなく、エレンの偉業に圧倒されていた。

神力と対になる力が見つかった。それで神力や呪力とつり合いがとれるのなら、神力と反神力のバランスを整えるだけで、神力や呪力をなくすことなしに、世界の調律をしていけるかもしれない。

エレンは神力切れを起こして起き上がれないようだった。

ファルマは神力を補充せず、エレンの背中に自身のコートを敷いてエレンと空を見上げる。

「大した発想力だよ」

「ファルマ君の物理学の講義を聞いていてよかったわ」

「発案と実験を同時にこなして、それに反物質をその場に固定するって、すごく難しいんだよ。そこまでのことを、無傷でできるようになっていたなんて」

ファルマはエレンが怪我らしい怪我をしていないことに驚く。

たった一度失敗しただけで、即死は免れ得ない。

地球においては、反物質の生成は素粒子衝突型加速器内での衝突によって行われる。

「エレンはやっぱ神術の専門家だよ」

「たまにはそう言われるのも悪くないわね」

「でも、何で反神力で反物質なんて作ろうと思ったの？」

「ファルマ君が私にくれた薬神紋のかけらがヒントになったんだよ」

エレンは恥ずかしそうに打ち明ける。

落雷によってファルマに宿った二つの薬神紋。

その欠片を、エレンは授かっている。

「雷は反物質を大量に作ってはすぐに対消滅している、ってファルマ君講義で前言ってたの、覚えてる？ 薬神紋は雷の形をかたどっているでしょう。変だよな？ 薬神の紋なのに。雷神じゃないんだよ。何で薬神が雷なんだろうって。だから、何かヒントをもらっているような気がして、色々と試しているうちに薬神紋を使ってみたの」

偶然だったのだろうか、なぜ雷を通して薬神紋が宿ったのか、薬神紋が雷のモチーフを用いているのか、ファルマにはずっと理解できなかったことだった。

彼の性格的に分らないで片づけることができず、これは雷では

なく薬用の樹木や藻類を模したフラクタル図形なのではという結論に落ち着いていた。

メレネーたちには根として認識されていた。

これは何かのヒントだったのだろうか、と今になって振り返る。

ファルマがそつと神力を注ぎ込んでエレンを助け起こすと、彼女はようやく歩けるようになった。日内上限を使い切らなければ発動できない、反神術。

まぎれもなく革新的アイデアだ。

「反神術、ファルマ君にもできるよ、きっと」

「俺には日内上限がないけど。もしかしてこれ、この世界でエレンにしか使えないんじゃないか？」

「でもファルマ君には薬神紋が二つもあるんだよ？ どっちかを入力ゲートにして、どっちかを出力ゲートにするんだよきっと。私とは違うやり方かもしれないけど、出来るはずだよ」

「んー……試すのも怖いな。この惑星上で練習するのはやめとく」

やるとしても、誰もいない場所、望ましくは真空中でやるべきだ。下手をすると、惑星一個分消えてなくなるかもしれない。

「宇宙に向けて練習したほうがいいかもね。ファルマ君らしいや」

「自分でも使ってみたほうがいいな、課題が増えた」

エレンはスケールの大きな話になってきた、とほほ笑む。

「ファルマ君の人生の課題の一つにしてもらって光栄だね。ところでこれまでの課題はこなせたの？」

「一つ目は薬局を開きたかったけど、それはもう叶った。もう一つは、この世界の医療が発展して、助かるはずの病気で亡くなる人が

減っていくことかな。これももう、叶いつつあるね。帝都の平均寿命を十歳引き上げるというのも叶った。俺が教えられることは限られている、種火はきつと灯せた。あとはこの世界の人々が引き受けてくれる」

「その他には、これといってやりたいことってないんだ？」

「ないよ。なんか底の浅い人間でごめん」

ファルマは申し訳なさそうに頭をかく。彼の妹、薬谷 ちゆが令和の時空で助かっていて、薬谷 完治と幸せそうにしていた。

それを一目見ることができたら、この世への未練のようなものはもうない。

あとは墓守とぶつかって、この世界の正常化へと舵を切らせる。こちらの世界から神術や呪術がなくなれば、向こうの世界への悪影響もなくなるだろう。

エレンがたった今提示したアイデアは、ファルマの作戦を変更させるかもしれない。だが、それでも使命を果たして、きちんと死ぬときが来たんだろうな、とファルマは思っている。

「そういう意味じゃなくって、自分自身の幸せは？」

「今、十分に幸せだよ」

「その答えは納得できない」

エレンはふくれたように眉をひそめる。

「エレンの人生の課題、っていうか夢はたくさんある？」

「あるわ。薬学をもっときわめて、異世界薬局がずっと続くようにして、おばあちゃんになっても薬を調合してきたいの」

詳しい話題は避けているが、エレンも誰かいい人と結ばれるんだろっな、とファルマは漠然と思う。ファルマ自身は、彼女の人生に

かわつてはならない。

パツレはあれでもいい人だしお似合いだと思うよ、と口添えをしたいところだが、お互いまったく眼中にないようなのでやめておく。

「それは楽しみだね。夢はたくさんあったほうがいいよ」

そのとき、ふいに湖から吹き上げてきた風が二人を大きく煽った。エレンはとっさにファルマの手をつなぎ、抱きしめるようにする。

「エレン？」

「ごめん、急に。ファルマ君、どっかに飛んで行っちゃうかと思つて」

「……飛んでいかない。ここにいるよ。今日も、明日も、来年も、三年後も」

でも、十年後とは言わない。  
できない約束はしない。

「エレンも俺も、ちゃんと人生を楽しんでる。今を生きてる。だから今日は、それでいいことにしよう」

「……うん」

エレンは溢れだした涙を隠すようにファルマの手をつかまえたまま、しがみつくようにして体を預ける。

ファルマの身長はエレンを追い越して、少し見下ろすほどになった。

体は大人になってゆくが、この存在はまがい物だ。

エレンの体温に触れながら、ファルマは静かに目を閉じた。

「さっきのエレンの技、かなりインパクトがあったよ」

まだファルマは先ほどの興奮が醒めやらない。

エレンはぎゅっと彼を抱きしめる。あまり強く触れると、ファルマの体を透過してしまう。

存在の輪郭をなぞるように、そっと触れた。

「人生設計、変わっちゃうぐらい？」

「……そうだね。そうなるかもしれない」

「ファルマ君の人生設計が、いい感じになることを願うよ」

彼女のアイデアは、まだ自分を地上につなぎとめるかもしれない。



## 8章10話 薬神紋と雷について（後書き）

同一シリーズのご案内（時系列順）

シリーズ全体図 V1.1

<https://ncode.syosetu.com/n87>

31hf/3/

主要キャラクター登場エピソード一覧 Version 1.0

<https://ncode.syosetu.com/n87>

31hf/2/

エピソード1：INVISIBLE（SF）

Lead character：藤堂 恒

Observer：INVISIBLE/XERO

Age：since A.D. 2007

Caption：完結済・続編はVISIBLEWORLDにて連載中。

エピソード2：VISIBLEWORLD（SF）

Lead character：藤堂 恒

Observer：the Fourth GENESIS d

elegated by XERO

Age：since A.D. 2023

Caption：INVISIBLE続編・更新中。

エピソード3：TOKYO INVERSE - 東京反転世界 -  
（FT/SF）

Lead character：Falma de Médic  
is

Observer: 藤堂 恒 delegated by the Fourth GENESIS

Age: since A.D. 2027

Caption: 更新中。異世界薬局前日譚。東京異界。

#### エピソード4:異世界薬局(FT/SF)

Lead character: 薬谷 完治 / Falma de Médicis

Observer: 薬谷 完治 / Falma de Médicis delegated by 藤堂 恒 or GENESIS-X

Age: since A.D. 20XX

Caption: 毎週更新中。書籍化/コミカライズ/アニメ化。異世界X。

#### エピソード5:Heavens Under Construction(SF)

Lead character: 神坂 桔平 as 赤井

Observer: 厚生労働省日本アガルタ機構第27管区

Age: since A.D. 2133

Caption: 更新中。書籍化。厚生労働省管轄の仮想死後世界。

## 8章11話 筆頭宮廷薬師の新人研修

1148年7月20日。

パツレがとうとう宮廷薬師の試験に合格した。

この抜擢は、宮廷薬師としては勿論異例の速さだ。

診療件数、論文、教科書の執筆、新たな神術の開発などの十分な功績、薬神を守護神に持つこと、そして侍医と宮廷薬師からの試問により、その知識と技能が宮廷薬師に相応しいと認められ、聖帝エリザベスより宮廷薬師のバッジと、認可証、辞令を拝受した。

「宮廷薬師の試験合格おめでとう。これからは仕事仲間だね」

ファルマはいち早く、宮殿内の彼に割り当てられた控室に駆け付けお祝いを述べる。

パツレは荷物をほどこしていたが、ファルマの顔を見て大きなため息をつく。

「なんでお祝いに来た弟にそんな露骨に嫌そうな顔を？」

「そういえばお前が上官なのか」

「何か言いたいことが？」

「ちっ、なーんか納得いかねーな……ま、連絡は楽でよさそうだが」

パツレは形ばかりふてくされたような顔をするが、ファルマを認めてくれてはいるようだった。同じバッジをつけた兄弟だが、ファルマが宮廷薬師たちを取り仕切る立場にあり、バッジもファルマのほうがサイズが大きい。

ファルマとしては、ブリュノがまだ宮廷薬師として現役だとはいえ、引継ぎが早くできそうではなかったという歓迎の思いだ。

「筆頭宮廷薬師 ファルマ・ド・メディシス閣下にはご指導とご鞭撻をお願いいたします」

宮廷薬師の真新しい制服に袖を通し、パツレは仰々しく一礼をする。

「こちらこそ。そうだ、関係各所の挨拶回りについていくよ」

「それは助かる。先ほど聖下にはご挨拶申し上げたところだ」

「名刺もらった？」

「支給品一式に名刺もあったが」

名刺はすでに、この世界の社交界において広く普及していた。

ファルマが最初に名刺を支給された時には「名刺あるんかい」と驚いたものだが、地球史においても、フランスではルイ14世の時代からすでに宮廷に浸透していたという。ファルマが写真を発明したことによって、宮廷薬師の名刺は写真付きの名刺になっている。

ファルマはパツレと名刺交換をすると、なかなかさまになっている。

「つつても、聖下ってご健勝だよな。お前、定期拝診以外に仕事あるのか？」

「宮廷薬師の仕事は聖下の診療だけじゃないよ。貴族の宮廷人は全員診療しないといけない。俺が筆頭宮廷薬師になってからは平民の使用人も診療することにしてるから、結構やることはあるよ」

「全員って？」

パツレは全員がどこまでなのかをイメージができないようだ。

「五千百五十人を、侍医団と薬師団で診てる」

「まじか！ そんなに多いってことは軍隊も入ってるのか？」

「入ってない、宮廷人だけでそれだけいる」

「一人何人もつんだ？」

パツレは予想外の人数に引いていた。皇帝の診療ができる皇帝付き宮廷薬師がパツレも含めて四名、その部下の、宮廷人たちを受け持つ一級薬師が十名程度常駐している。

「年に二回定期健診があつて、それ以外は随時診てもらいたい人が詰所に来る。次は今年の十月だね。修羅場になっていたから、宮廷薬師が増えて助かるよ」

「お前だったら神術を使つて一気に診れそうだが」

「まさか。ちゃんと一人ずつ対応するよ。医師や薬師に診てもらう機会がそこしかない人もいるんだ。健康相談だつて受けてる」

「へえーそれはカルテや薬歴の作成も死にそうだな……」

診眼を使つて集団検診をしたとしても見逃すことがあるし、紋切り型の対応はすべきでない。

ファルマの返答に、パツレは上ずった声を出した。パツレがお祝いに持ってきた花束を受け取らないので、ファルマは勝手に花瓶に生ける。

「引いてるとこ悪いんだけど、兄上が仕事に慣れたら、宮廷薬師の仕事はかなり割り振つてもいいかな。兄上は診療がしたいんだよね？」

「ああ。宮廷薬師になるのは俺の目標だったからな。筆頭宮廷薬師のお前は仕事をおろそかにして何がしたいんだ？」

疎かにするつもりはないが、ファルマとしては優先順位をつけてこれからの時間を使いたい。

ファルマはこの場を任せるのにパツレを適任者だと思っていた。

「今は臨床ではなくて、大学教育や研究に専念したい。ここだけの話、時期がきたら筆頭宮廷薬師も兄上に譲りたいと思ってる」

「……お前はつくづく名誉職に興味がないな。何ならそれも厄介ごとだと思っていそうだ」

パツレの口がすぎるので、誰かに聞かれていないかひやひやする。

「昔から、承認欲求だとか自己肯定感があまりないんだ。褒められてもあまりうれしくない。目立っていいこともあまりなかったしね」

「いい性格してんな。本心で褒めててもそう思うのか」

「単純に居心地が悪い」

「まあ、こじらせていそうではある。俺はお前をすごいやつだと思ってるぞ！」

「いいよそういうのは」

「ほら、そういうとこだぞ」

心理学を専攻していた友人に、インポスター症候群なのではないかと言われたこともある。

ファルマは自身のゴールを、誰もが健康で限られた生を謳歌できる社会の到来、と置いているので、自身の今の立場を成功と受け止めていない。

「功績を語り継がれるより、長期間現役で使える薬を残すほうがいい」

神官の襲撃を受けていると、そんな思いも強くなる。

前世で薬谷ちゆを失った彼が薬学者を志したのも、そんな理由だった。

よい医療者ではなく、よい薬があればよかったと考えた。  
少年の単純な心にはそう思えた。

今では、医師、薬師、医学者、薬学者、技術者、その誰もが欠けてはならないと思う。

臨床への思いはもう、この世界で叶えることができた。

あとは未来へ手を伸ばして、人々の助けになりたい。

「じゃあ引継ぎをしてくれ。俺は研究や教育には向いていない。新しい治療法を開発するより、目の前の患者が俺の手にかかってよくなつて、俺に感謝してくれることに喜びを覚える。その薬を使うのは任せてくれ」

パツレはファルマの意図を汲み取り、承諾をした。

「引継ぎは新人研修期間が終わったからね」

「まさかお前から新人研修を受けるのか？」

「それはそつだよ。半年ぐらいかな」

「なげーよ」

「俺も父上にずっとついていてもらってたんだよ。早く終わるようにするから」

ファルマ同伴で皇帝つき奉公人団にパツレの挨拶まわりをする。

パツレ専属の召使も新たに雇い入れられた。

パツレはすでにド・メデイス家の嫡男であること、教科書の執筆者として名が通っており、さして紹介をしなくても誰もが知っていた。

宮廷薬師詰所は、大きな診療部屋があてがわれている。

隣接する調合室に向かうと、宮廷薬師フランソワーズが神術薬を創っていた。

ファルマと目が合ったので、早口で伝える。

「作業が終わったら、少しご挨拶のお時間よろしいですか、フランソワズ様」

「ちょうど今キリがいいわ」

ファルマはパツレをフランソワズに紹介する。パツレは完璧な作法で礼をする。

「まあ。ご一緒に奉職できて光栄ですわ」

「至らない点も多いかと存じますが、何卒ご指導をお願いいたします」

そのままの流れでフランソワズの作業を見学させてもらう。

「何の薬を創っておられるのですか？ 見たことのない神術です」  
「これは宮廷に古くから伝わる、神力の回復を促す神術薬よ。これを飲めば、日内上限をわずかに超えて神術を使うことができるわ。聖騎士の方々がよくお求めになるのよ。ほらできた。味見してみるかしら？」

スプーン一杯いただくと、ファルマは甘いばかりで何も感じなかったが、パツレには効果があったようだ。神力計を確認して驚いていた。

フランソワズは青いポーションをアンプルに分注して、彼女の紋章の入ったシールで封をする。

神技を駆使する宮殿内の神術使いにとっては、こういった伝統薬に基づいたポーションも必要なのだろう。

神術薬の創出についてはブリュノとフランソワズが一手に引き受けていたのだが、ブリュノは霊薬の呪いによって神術薬を創れなくなっていたので、彼女に負担がかかっている。



そんな背景もあって、彼女は期待を込めて尋ねる。

「パツレ師は神術薬調合の心得はおありかしら？」

「は、ノバルート仕込みの神術薬でしたら何なりとお手伝いします」

「それは助かるわ！ 私もノバルート出身なのよ。ぶしつけながら、神力量もかなりおありかしら」

「必ずやご満足いただけるかと」

「まあ頼もしい！ではさっそくこの薬草に神力を加えていただけませんか。今日はもう、私の分の神力は使い果たしてしまつて」

「喜んで」

いつになく嬉しそうにパツレと作業をするフランソワーズを見て、ファルマは申し訳なくなる。

（なんかすみません、俺が役に立たないばかりに）

手伝わないというわけではないのだが、ファルマが神術薬を通常のレシピで作ると、何か予想外の作用を付加してしまうので、フランソワーズには「手を出さないで」と迷惑がられている。

フランソワーズから神術薬の作製方法を学ぶこともできるだろうが、神力が強すぎて必要以上の濃度になってしまい、レシピが使えなくなってしまう。

結局教えてもらうことができない。

調合室のガラス窓から、着飾ったメロディ尊爵がお付きの者を従え、ファルマらに気付かず通り過ぎて行くのが見えた。そつと診眼を使うと、彼女の体調も安定しているようだ。

作業が終わるまで脇に控えていたファルマが思い出して、ナタリー・ブロンデルの経過を母親のフランソワーズに伝える。

「それからナタリーさん、月一で診ていますが脳腫瘍の再発はして

いないようです」

「ありがとうございました。娘からもそのように伺っております。今期の成績もよかったようで、ほっとしております」

「そうですね、よく頑張っておられると思います。この分ですと、進級にも問題ないかと」

「まさか生還できるとは思いませんでしたわ」

脳腫瘍を摘出したナタリー・ブロンデルは、手術後も学業に差支えなく取り組んでいる。

運動機能に少し影響があるが、リハビリでだいぶよくなっている。ファルマがいつまで診れるものかと彼女の経過も気になるが、五年間再発を防ぐことができていれば、希望は持てるだろう。

ファルマは時計を見て、行先を決める。

「ロッテの仕事場に行ってみよう。今日は勤務日のはずだ」

「シャルロットまでいるのか」

「そりゃそうだよ」

ファルマはパツレを連れてアトリエへと向かう。

ロッテは制服を兼ねた作業用の白いエプロンに、宮廷画家のバッジをつけて働いている。

ちょうど、弟子たちの油彩の制作指導をしているところだった。

「シャルロットは弟子を持つているんだな」

先生、先生と呼ばれて慕われているロッテを見たパツレは、感慨深そうにしていた。

「ロッテのアートは国内外で人気だからね。弟子の申し込みが後を

絶たないって」

「立派なマエストロじゃないか！」

「そうだってば。若き巨匠だよ」

「口のきき方に気をつけんといかんか？」

パツレは悩ましそうに片目をつぶった。

ロツテはまだ十二歳ではあるが、聖帝の覚えもめでたく、宮廷画家としての名声も高まっていた。まだ筆頭の座を得てはいないが、それなりに実績を積んだら声がかかるのでは、という呼び声も高い。作業の邪魔をしないようにアトリエの隅に立っていると、ロツテが気付いた。

「まあ、パツレ様、ファルマ様。いらして良かったですね！」

「兄上が宮廷薬師に就任したんで、挨拶にね。よろしくね」

「まあなんだ、宮廷のことを色々と教えてくれ」

「もちろんでございます。喜んで！せっかく来て下さったのでショコラ召し上がりますか？ さきほどメロディ様にいただいたのです」

「いや、今はいい」

唐突にショコラの話になるあたり、いつものロツテだった。

宮殿の官職保有者には様々な職がある。

筆頭侍従、侍従、聖騎士、小姓、神杖番、侍医、宮廷薬師、宮廷画家、宮廷音楽家、宮廷庭師、宮廷料理人、食膳係、毒見係、宮廷獣医、大厩舎の馬丁、猟犬係、時計番、炭火担当係、扉番、靴磨き職人、ワイン調達係、神術訓練場職員……ファルマも把握していない。

大厩舎に赴くと、制服を着たジョセフィー又は真剣な面持ちで馬の診察をしていた。

気が遠くなるほどの役職があるが、ファルマもまだ彼らの顔を覚

えきれていない。入れ替わりも激しく、彼らは殆ど、カルティエという四分の一勤務形態で働いている。

三か月働き、九か月休む。彼らはみな、宮殿で宮仕えしていることを誇りにしていた。

「お前が担当だからか、みな健康そうだな」

「だいたいはね。治療中の人もいるよ」

ファルマが宮廷薬師となつてより、宮廷人たちは感染症にはかからなくなっていた。

そのうえどんな疾患であれ、ファルマの前で重症化することは難しい。

さらに悪霊由来の疾患も発生件数はゼロだ。

「しかしこんなに人員が必要なのか？ 財政の無駄だろう、兼任か官職廃止にできないのか」

迂闊なことを言ってしまったパツレの口をファルマがおさえる。それだけはシャレにならない提案だ。

「確かに財政のために歴代の皇帝が大ナタをふるおうとしたこともあったようだけど。廷臣たちの猛烈な反対に遭ってうまくいかなかった」

「まあ自分らがクビになるかもしれないからな」

「宮廷薬師、こんなにいらなんて言われたら？」

ファルマは声を潜める。

「それは辛いな」

「ああ、そうそう。廷内にはたまに一般人や泥棒が紛れ込んでいる

から気を付けて。明らかに怪しければ通報したほうがいい」

この前も、廷臣の部屋のタペストリーが何者かに盗まれたという話をする。

制服なども一部の職種しかないため、身なりにさえ気を付けていれば一般貴族が紛れ込んでしまえる。

「身分証を持つべきなんじゃないか？」

「だから門衛に名刺やバッジの提示が求められてるけど、結局名刺を持っていない客や観光客も来るから、あまり徹底してないね」

「存外適当なんだな、宮廷も」

「ワインの横流しなんかも頻発してるしね」

ファルマは生々しい事情も話しておく。

「そういえば、一つ不思議なことがある」

「なに？」

「聖下の愛人は宮殿にお住まいではないのか？ いい雰囲気のとくに鉢合わせしないよう、診療の時間に気を付けたほうがよさそうだ」

聖帝エリザベスは未亡人だ。

再婚しないにしても、皇帝ともなれば複数の愛人を持つのが普通だった。

パツレも当然、聖帝には愛人がいると思っている。

「まさか、個室に頻繁に出入りしておられる侍医長閣下か？ 侍医長閣下も独身だし」

「いや、朝から晩まで聖下に付き従っているのは、筆頭侍従閣下とともに侍医長閣下のもとものお役目だよ」

宮殿内に居を構えるクロード・ド・シヨールアックは毎朝聖帝エリザベスの傍へ侍り、起床の儀から就寝の儀まで、もっとも長く彼女のそばに待機している。

侍医長は外科医であるため、その日の体調に応じて、宮廷薬師が呼び出される。

ファルマも筆頭宮廷薬師であるからには、宮殿に住み込みで奉仕するのがスジというものだが、ブリュノの代より「余につき従うより、世のためになることをなせ」との聖帝の意向もあってあまりべつたり傍仕えをしていない。

「ちつ、勘違いだったか」

「聖下を狙っている……ではなく、お近づきになろうとしている大貴族はたくさんいる。でも聖下のお相手に釣り合うには見目麗しく、聖下と肩を並べるほどの神術使いでないと、という暗黙の了解があって、皇配陛下が戦死なさってからはお相手がいらっしやらない」

それに、ファルマとしては独身女性に異性の相手をあてがおうと周囲が強いること自体、失礼だと思う。ファルマもエリザベスに、貴族の務めとして子孫を残せと言われていたが、のらりくらりしつつ応じるつもりはない。

「確かに、釣り合う方が見当たらないな。そんじょそこらの貴族と付き合っていたきたくないしな」

「ひよつとすると廷臣たちが兄上を候補に入れようとしてくるかもしれないけど、耳を貸さなくていい」

「俺が？ 畏れ多いことを言うなよ」

パツレはまったく真に受けていない。

兄弟で軽口をたたきながら中央の回廊を通り過ぎていたとき、パツレが足を止めた。

「どうした？」

「ファルマ。外からすげー睨まれてるが。誰だ？」

パツレは視線をよこさずにファルマに尋ねる。ファルマが回廊の外をみると、赤髪の若い美女が二人、大勢の技官たちを従えてこちらにきつい視線をよこしていた。

ファルマはひえーと思いながら会釈をする。

「噴水担当官、フランシーヌ姉妹だよ」

彼女らはもともと、サン・フルーヴの街並みのなかに神術陣を用いない小規模な公共の飲用噴水を作ってきた。飲用噴水の水質は素晴らしく、神術水なみの清浄度を誇った。

さらに彼女らがパトロンの依頼されて庭園に作り出す噴水は独創性にすぐれ、巧みな仕掛けが施されており、まるで生き物のように水を操った。

その功績がサン・フルーヴの先帝の耳に入り、平民技官ながら宮廷人となり、宮殿の噴水の施工等を一手に引き受けている。

その作品には、エリザベスだけでなくメレネーも魅了されていた。

「何で睨まれてる？ お前何かやったか？」

基本的にモテる男であるパツレは特に、若い女性から敵意を向けられることに慣れていない。

珍しい弱点があったものだな、とファルマは意外に思う。

「何かやったかもしれないけど、そもそも彼女らは水の神術使いが嫌いだ。俺は筆頭宮廷薬師だから多分宮殿一嫌われてる」

「何とかしとけよ……診察もするんだろっつが」

「水属性全員嫌われてるからいいんじゃないかな。宮廷薬師なんて全員敵だし、彼女らは侍医にかかっている」

「そこまでか。水属性に何かされたことがあるのか？」

「簡単にきれいな水を出せる水属性神術使いと違って、噴水を作るには川から水をひかないといけない、工事やら仕掛けやらで色々と苦労してると思う」

あまり話したことがないので、何があったのかよくわからないのだ。

神術使いの属性は、外見や杖の種類でバレることはない。

ただ、宮廷薬師は必ず水属性であるため、水属性だとバレている。

「なるほどな。挨拶するぞ、紹介しろ」

ファルマは形ばかり先導して、パツレとフランシー又姉妹を引き合わせる。

「ごきげんよう。新しい宮廷薬師が任命されましたので、よろしく願います」

「パツレ・ド・メディスと申します」

「あらあ。こちらこそ、ド・メディス様。宮廷薬師様ということ、水属性の神術使いでいらして？同じ水を手なづける技能者として、以後お見知りおきを」

言葉は慇懃ながら、完全に挑発されて擦られている。パツレは珍しく挑発に乗らない。

「水属性の神術を使いますので、水に関わることであればお手伝いいたします」

「では早速、専門家としてのお知恵を拝借してよろしいのですか？」



「もちろんです」

「ではこちらにいらして」

ファルマとパツレは庭園を案内されて、姉妹の作品を見て歩く。宮廷内には千を超える噴水があり、そのうち半数ほどが姉妹の作品だ。

初代皇帝、水神や海神を模した彫刻の神像を彩るように、ファルマたちが通るかかると壮麗な水のショーが繰り広げられる。

「いつ拝見しても素晴らしい作品群ですね」

ファルマはお世辞ではなくそう言って褒める。

「それは光栄ですわ。皆さま、地上部分だけをお褒めくださるのですが、噴水は配管にこそ技術の真髄があります。配管敷設工事には二十年を要しましたの、ご存じないでしょ」

納期が遅れたために造園家が自殺したという話は知っているが、ファルマが知り得ているのはそのくらいの情報だ。フランシーヌ姉妹は古く大きな噴水の前で立ち止まった。噴水自体は大きなものが、止まっているように見える。

「これ、水が出ないんです。噴水に接続している配管に石灰が沈着しておりまして、困っておりますの。従来のやり方では配管の交換になるのですが、長期の工事になると思われますわ。その間、噴水で聖下のお目を楽しませることができないなんて、心苦しくて。私たち、どうすればよいかしら？」

これは無理難題を押し付けて試されているのだな、とファルマは合点した。

しかしパツレは少しも怯んでいない。

「石灰を取り除けばまだ使えるということですよね」

パツレは淡々と確認する。

「配管の径が細いので、中に入っただけの掃除はできませんよ？」

「私の神術を使えば取り除けます。ちなみに水道管の材質は何ですか？」

「銅ですわ」

「すみません、少し失礼いたします。兄上、ちょっと」

ファルマは少し離れた場所にパツレを連れてゆく。

「神術を使つてはだめだ」

「何で。コストゼロでできる、石灰なら消せるだろう」

この時点で、パツレは日ごろの鍛錬の成果もあり、物質消去に近い神術を意のままに使うことができた。それを使って解決すれば簡単だと主張している。

それで解決するのはわかっているが、ファルマは首を振る。

「彼女たちは兄上に神術を使ってくれと言ったわけじゃない。彼女たちでできる解決法を訊いている。神術で解決しましょう、では回答になっていない」

「なるほど」

「兄上が答えられないなら俺が答えるけど、どうする？」

「待て、考えさせろ」

ファルマは先に戻ってフランシー又姉妹らに合流する。

「すみません、少しお待たせします」

「次の予定もありますし、お答えは後日でも構わないわ」

「お待たせしました」

パツレは何か閃いたとわかる顔で戻ってきた。

「クエン酸で石灰を溶かせばよろしいかと」

「クエン酸というものはどうやって作ればいいの？ 酸をそんなに大量に作れないわ」

パツレは工業的なクエン酸の生産方法を伝える。

廃棄されたデンプンをもとに、コウジカビの発酵によってクエン酸を得る。

水流を止めて水道管内をクエン酸液で満たし、石灰を溶解させる。クエン酸は粉末であるため濃度を上げて強酸にできるので、長年蓄積した石灰も溶かせる。

最後に、中和が必要だ。

現代地球ではいわゆるスケール除去剤として販売されていた。

「よろしければ、クエン酸の工業生産方法については引き続き助言しますが」

姉妹はしばらく難しい顔をしていたが、やがて笑顔になった。

「その方法でうまくいくようでしたら、工事が不要になりますわ。帝国中の水道管を、取り換えなしで暫く維持することができますわね」

「それは費用の節約になりますね」

フランシーヌ姉妹はパツレのアイデアを受け入れるとした。

ファルマが介入するまでもなく解決しそうであった、とファルマはパツレの鮮やかな解決案の提示にほっとする。

「何とかできてよかったです」

「ド・メディシス兄弟でしたっけ。あなたがたは今までの神術使いとは違いますわ。私たちね、意外かもしれませんが水属性神術使いのおかげでひどい目に遭ったことがありますの」

（全然意外じゃないです）

ファルマとしては納得の理由だった。

水属性神術使いの技官が神術を前提とした無茶な噴水の設計を行ったせいで工事が行き詰まり、やり直しにやり直しを重ねて工期が大幅に遅れ、彼女らの父であった例の造園家が責任をとって自殺したというのだ。

その後も、フランシーヌ姉妹の手がけた噴水を見ては水属性神術使いたちがあれこれと品評したり、神術陣を使えだのなんだのと口出しをしたがった。

そうしたことが積み重なって、彼女らは水属性神術使いを見ると何か言われるのではと必要以上に警戒を強めるようになったり、彼らの知識を試すようになってしまったという。

（完全に逆恨みではあるけど……何とかマイナスをゼロぐらいに戻せてよかった）

言いつばなしのその場限りの約束にならないよう、パツレはクエン酸の工業生産のための準備の手配をしていた。

そうだった地道な仕事も宮廷薬師の仕事のうちだということを学んだようだった。

それから暫くも経たないうち、「噴水の清掃をします。噴水を順番に二日ほど止めます」という庭園に掲げられた看板をファルマは目にし、同時にパツレの裏方仕事にも思いをはせた。

8章11話 筆頭宮廷薬師の新人研修（後書き）

【参考文献】 ジャック・ルヴロン 著「ヴェルサイユ宮殿 影の主  
役たち」河出書房新社

## 8章12話 老いてゆくもの、置いてゆくもの

1148年7月26日。

その日、ファルマは異世界薬局に研修にきたブランシュの相手をしていた。

エレンに弟子入りをして薬師を目指しているブランシュは、エレンに連れられて時々異世界薬局にやってくる。見習いの身なので当然調剤に携わることはないが、店舗で学ぶことも多いということでエレンの後ろについてちょこまかと動き、客にawaiiがられている。午前中はエレンが診療に行ったので、異世界薬局の制服を着て、ファルマのあとについてくる。

彼女は貴族令嬢ではあるが、掃除や洗濯、雑用も薬師の修行のうちだ。

薬局の清掃は毎朝職員全員で行う。

清掃の手順、消毒の方法、薬局から出るごみの廃棄の方法、汚物処理の方法なども細かく決まっている。

臨時の清掃の方法も教える、今日は朝いちで薬局の床に盛大に嘔吐をしたノロウイルス患者がいたので、ファルマとブランシュはマスク、プラスチックエプロンで防御をして、次亜塩素酸ナトリウムで清拭、消毒をした。

汚染された手袋などはウイルスが付着しているものとして感染性廃棄物として処理する。

嘔吐物が乾燥すると汚染を拡大してしまう。  
など一つ一つ教えてゆく。

ちなみにブランシュは作業終了直後にもらい嘔吐をしていた。

「薬師になって調剤はできるかもしれないけど、血や嘔吐物のおおいに慣れられる自信がないのー……」

彼女はそう言いながら、しばらくバックヤードの流しの前でくの字になっていた。

一度ツボに入ったらもうだめなようで、自分の吐しゃ物のおいでまた吐くということを繰り返していた。

「そのうち順応すると思うよ。ちなみに吐しゃ物も観察材料だから、患者さんのそれはよく観察するんだよ」

「観察はできるけど、においがもうだめ」

「でもブランシュは家にあるかなり臭い薬草も平気じゃない」

ファルマはそういつて明後日の方向に励ましたりする。

「えっ、家にくさい薬草なんてあるっけ」

彼女の顔面が固まった。一時的に嘔気もおさまっているようだ。

「ブランシュの部屋で栽培している薬草なんて、相当くさいと思うけど」

ブランシュの部屋には食虫植物のような形状の薬草を窓辺に置いているが、かなりの悪臭を漂わせている。あれが平気なら薬師の才能があるのではないかな、とファルマは内心思っていた。

「知らなかった……いいにおいだと思ってた」

「ま、まあ。人の嗅覚はそれぞれだし。俺がそう思うだけで、ブランシュがそう思っていないならそれでいいから」

「えっ、私つてもしかしてにおいのセンスがおかしい？　もしかしていつも使っている香水もくさいとか？　でも母上も何もいってないし」



などと言い出して涙目で慌てているので、大丈夫だよとなだめる。

「母上がよく腰に貼っている湿布もいいにおいだと思ってた」

「それは人によるな……じゃあ、気分を変えるために庭で少し外の空気を吸おうか」

嘔吐が落ち着いて、少しげっそりした顔のブランシュを連れて、店舗の裏庭で栽培している薬草の管理に向かう。

「小さい兄上って、遺伝子組換え植物以外の薬草も店舗で取り扱ってるんだね」

「これまで伝統薬学の薬を使ってきた人の中には、現代医薬品に不信感や抵抗のある人がいる。そういう人がまず求める伝統薬を、薬草や伝統薬専門の薬師ギルド提携店だけでなくうちの店舗にも少しおいておけば、うちに足を運ぶきっかけにもなるし、カウンセリングを受けて現代医薬品を試してもいいかという気になってくれる人もいる」

「へえー……」

ブランシュは薬草にまんべんなく水やりをしながらファルマの話聞いています。

彼女はエレンについて、少しずつ薬草をはじめとする植物栽培にも挑戦している。

「あ。そっちは今日は水をあげてはだめ。もちろん、明らかに有害だとわかっている薬草はうちの店には置かないよ。そして薬師ギルド提携店でも、手に余ると思った患者はうちに送ってもらうようにしている」

「なんか……大変なんだね、小さい兄上も。お店にこない患者さん

のことまで考えてあの手この手で」

「それはもちろん。薬師は公衆衛生の向上や増進のために働いているからね。うちに来た客だけ助けます、あとは知りません。というのは違うよ」

「なんだろうな。そんな世のため人のためにとか考えながら生きてて疲れない？」

ブランシュは胡散臭いといったように白い目で見てくる。

これにはファルマもどう答えてよいやらと閉口する。

「ノブレス・オブリージュも、確かに父上とかからしつこく言われるけど、まず自分があつてこそでしょ」

最近ブランシュの口がたつようになってきたのは、エレンのおかげなのだろうか。

なぜか怒られ気味なファルマである。

「基本的には自分のやりたいことしかやってないよ」

「ふーん……。あつ、この薬草はたくさんとったから、挿し木を作つて増殖するんだよね。師匠に教わったよ」

ブランシュが葉を摘んだばかりの薬草を指さしてファルマに確認する。

株数が少なくなってきたところなので、ファルマも同じように考えていた。

エレンの指導が生きているな、とファルマは安心する。

「そうだね。これからの夏の暑さで株がいたんでしまうことも考えて、挿し木を作って増やしておいたほうがいい。それから、細い枝はいい葉がつかないから、思い切って切り戻しをしておく」

「じゃあ、挿し木用に切つとくね」

ブランシュがハサミを構えたので、ファルマはとめる。

「ほかの作業が終わってないけど今やるの？ 挿し木を作るなら切つてすぐ発根処置をして水にささないで。切り口から雑菌が入ってしまうと発根の確率が下がるよ」

「そっか。わかった、すぐやるのね」

「採取した植物はきちんと形状を確認して、数量を記録してね」

「えっ、でも植えたもの以外に生えてくるわけないじゃん、植えたときにちゃんと看板を作ってるからその通りに収穫すればいいでしょ」

「それが先入観なんだな。結構あるよ。似た形の雑草や有毒植物がどこからか侵入してきたりすること。それに、そもそも種を間違えて植えていたりすること」

「ええー。そっか」

「ここにこれを植えたはず、という思い込みはなくそうね。俺も一回、知らない雑草を見逃していて大変な目に遭ったことがある」

ファルマも、薬師たちも収穫時にはよく植物体を確認するようにしている。

風に乗って雑草の種が敷地内に入り込んでしまうということはまあある。

薬草に限らず植物の栽培で面倒なものひとつが、雑草とりだ。現代地球では除草機もあり、マーセイルの薬草園でも一部は利用されているが、薬局の敷地内の規模だと地道に手であってゆくしかない。

ブランシュは土まみれになりながら雑草とりに奮闘している。

二人していい汗をかいている、とファルマは思う。

「ブランシュ、種がついた雑草を見逃さないで。種が畑に落ちたらますます作業が増えるよ。それから、そっちの雑草はもう少し待ってから抜いたほうがいい。小さすぎて抜きづらいでしょ。雑草とりにも最適な時期があるんだよ」

「注意が多い。一個ずつ言って」

「多いか。まず、雑草の種を畑に落とさないで」

「わかった。おりゃー」

ブランシュは見逃してなるものとオクサリス（カタバミ）を抜いている。

「抜いた雑草はそこらへんに放り投げない。袋に入れて」

「なんで、ほうっておけば枯れるでしょ」

「茎は枯れるけど種が落ちる。これだけの種が落ちるとどうなる？」

「えらいことになる？」

「そう、えらいことにさせないで」

ファルマも軽く注意を促しながら、黙々と雑草を抜いてゆく。

こういう作業は嫌いではない、無心になってむしる。

「もー、雑草嫌いー！ 薬草育てるのか雑草育てるのかわからなくなるのー！ なんかない？ ぱぱと除草できる方法」

「除草剤を使ってもいいけど、結局生薬にするとき成分を除去しないといけないから、手で抜いちやうほうが早いね」

「やっぱりー」

ああだこうだ言うブランシュにファルマが薬草の管理方法を教えていると。

「ただいまー。あら、ここにいたの」

往診に出ていたエレンが戻ってきて、門衛に馬を預けて裏庭を通りがかる。

ファルマとブランシュが同時に振り向く。

「あつ、師匠！ おかえりなさいー！」

「ただいま。ファルマ君は店に出ていないのね」

「ブランシュに薬草の管理について教えていたんだ。エレンは今日は早かったね」

「今日はアガタ先生がいらっしゃるから、早めに帰ってきたのよ」

ファルマは朝礼のときにエレンがそう言っていたのを思い出した。

「そうだったね、エレンが対応できそう？」

「まかせて。準備も万端だから」

エレンは自信に満ちた顔でほほ笑む。

いい笑顔だ、とファルマもつられて笑顔になる。

「じゃあ、お願いするよ」

このところ、ファルマは薬局業務において、何もかも自分で引き受けるのではなく、できるだけ職員たちに対応を任せている。間違いは忌憚なく指摘するが、過剰な口出しも控えている。

自分がいなくてもやっていけるのが一番望ましい。

やり方を変えたいと言われれば、妥当性を検証したうえで、その薬師のやり方を採用したりもする。

少しずつ難しい疾患もエレンやほかの薬師に引き継いでいっている。

いつ、この風景の中から自分だけがなくなってもいいように。  
あと一年もすれば、エレンに店主の名義を譲るつもりでいた。

午後になって帝国医師ギルド長のアガタが、数名の平民医師を率いて異世界薬局に狂犬病ワクチンを取りに来た。

依頼をしたのは町医師のドナルドだが、狂犬病ワクチンの提供先は医師ギルド長アガタの名義になっている。

医師ギルドで一括して購入・管理し、必要があれば専用の配達便で各医院に届ける、という方式になっていた。そうすれば、温度・湿度・消費期限等の管理を厳密にしたり、各医院での管理コストを減らすことができる。

ファルマはこのシステムを、日本における医薬品管理センターのようなものかな、と解釈している。

アガタは帝国医師ギルドの紋章の入ったガウンを着てフォーマルないでたちだが、右目に黒い革の眼帯をしていた。ファルマは何かあったかと気になったが、ひとまず仕事の後で尋ねることにする。

「いらつしやいませ、ご注文通りのロットで狂犬病ワクチン用意しています」

最初に注文を受けたエレンが挨拶をし、店舗の個室へと招く。

ファルマも責任者として同席する。エレンもアガタの眼帯を見ていたが、アガタがまるで気にしていないので、今は尋ねないことにしたようだ。

「こちらにおかけください」

ファルマはエレンのサポートに回り、随行の医師らにも椅子を出す。お茶出しもファルマがする。

「いやあ、まさかもう狂犬病のワクチンが完成するとは。早く使ってみたいものですな」

ドナルドはファルマから見てもそれとわかるほど、そわそわとしていた。

「納期に関して、無理を言ってしまいましたか」

アガタが尋ねると、エレンは自信をもって答える。

「いいえ、弊社のマーセイル工場では納期に余裕をもって生産しておりますわ」

「ならばよかった。また継続的によろしく願います」

「それでは、納品書にサインと、弊社指定の銀行にお振込みをお願いいたします」

エレンが手際よく各種書類にサインを求める。

「ええ、もう入金は済ませてありますよ」

「恐れ入ります。補助金の手続きもされましたか」

「おかげさまで。公的手続きは得意でございますの」  
「さすがでございます」

もと貴族にして侍医長のアガタに抜かりはなかった。

「それでは薬剤の説明をしてちょうだい」

「はい、こちらはニワトリ胚の初代培養細胞に狂犬病ウイルスを感染させ不活化後、濃縮精製して安定化剤を加え、粉末化したものです」

エレンはバイアルの現物を一瞬見せて、アイスボックスの中に戻して保冷する。

温度管理の逸脱があつてはならない。

「犬に噛まれた時に投与すればよいのかしら」

「はい。野生の犬、猫、スカンク、アライグマ、キツネ、蝙蝠、肉食動物であれば基本的に狂犬病に感染しているものとして考えます。齧歯類に対しては特に対策はありません。投与の前にまず、噛まれた傷を石鹸と流水で15分以上洗い流してください。その後、塩化ベンザルコニウムで消毒し清潔にします」

「消毒薬も売ってくださいる？」

アガタが不安そうに尋ねるので、エレンは代替方法も提示する。

「ええ、先生方は何をお使いですか。ポビドンヨードなども使用できますよ、後でリストをお渡します。傷を洗浄した後、狂犬病免疫グロブリンをすぐに、狂犬病ワクチンを予防として投与します」

「狂犬病免疫グロブリンも一式の中に入っているかしら」

「もちろんです。望ましくは帝都市民全員に曝露前の予防接種をしておくことなのですが、ワクチンの生産体制と供給体制が整うまでは、現時点では受傷後の投与開始となります」

帝国と新大陸との往来に伴い、現在は貿易関係者のみに義務付けられている破傷風菌、黄熱、麻疹・風疹、水痘などのワクチンの、帝都市民に対する公費接種については、ファルマもエリザベスとともに準備を進めているところだ。とファルマは補足してアガタに伝えた。

「聖下のご英断に感謝するわ」

「まことに。いち臣民としてますます敬愛するばかりです」



「狂犬病ワクチンはいつ投与するの？」

「粉末のワクチンは遮光して、10度以下にて保存してください。被接種者には、問診、検温を行って体調を確認してください。使用する場合は1バイアルについて規定用量の注射用水で希釈し、受傷当日、3日後、一週間後、二週間後、一か月後、九十日目に皮下接種をします」

エレンは時間をかけて接種上の注意点などを説明する。

同席の医師らからいくつかの質問が飛び、エレンが答えられないものはファルマが答える。

「わかったわ。受傷後、狂犬病を発症するリスクを前もって評価できるかしら」

「もし、噛んだ動物を捕獲することができたならば、その動物が一週間から二週間以内に狂犬病を発症するかどうかを観察すれば前もってわかります」

「そう、人より発症が早いよね」

動物の場合は、初期のうちは食欲不振や異常行動がみられる。その後の経過は、

興奮症状、よだれ、恐水症状、咽頭部の痙攣を伴う狂躁型と、麻痺状態の続く麻痺型にわけられる。

いずれも発症すればほぼ100%死亡する人畜共通感染症である。などと、エレンはアガタらに説明する。

アガタもドナルドをはじめとする医師たちも、教科書を横に置き、メモを書き込んで真剣に聞いている。

「ちなみに、一度狂犬病を発症した患者を助ける方法はないのよね」「ゼロとは言いませんが、きわめて困難かと」

ファルマは地球の症例において、狂犬病から生還した例を数例知っている。

2004年、ミルウォーキーでコウモリに噛まれて一ヶ月後に狂犬病を発症した子供に対して、医師らは患児を昏睡状態にし、抗ウイルス薬リバビリンとアマンタジンを投与し、患児自身の免疫系によって生還した。

この治療法にはミルウォーキー・プロトコルと名付けられ、現代地球においては狂犬病患者数十名に対して実施され、わずかに数名が生還している。

ファルマはアガタに治療の可能性がゼロではないことを伝えるが、有効性についてはまだ明らかになっておらず、成功率は低いということも説明しておく。

「なるほど、それではやはり予防が全てということになりますね。狂犬病を発症した時点で咬傷歴があるかを聴取できるかも鍵となりそうです」

アガタは気を引き締めたかのように背筋を伸ばす。  
ファルマとエレンも全面的に同意する。

「まさにそうです。特に、曝露前の投与であればほぼ確実に防げますからね」

「では、むしろ外科医も狂犬病患者の治療をするからには、体液や血液に触れる可能性も考慮して、曝露前投与として狂犬病ワクチンを打った方がいいんですかのう？」

ドナルドが不安そうにファルマとエレンに尋ねるので、ファルマは強くお勧めしますと伝えておいた。

「失礼ですがアガタ先生、目にお怪我を？」

薬剤の受け渡しの前に、エレンが気になっていたことをアガタに尋ねる。

薬剤を渡してしまえば、温度管理のために長話ができなくなる。

「数日前にやりとりをしたときにはなかったものなので」とエレンが尋ねると、アガタは上品に笑った。

「いいえ、これはね。つい昨日白内障の手術を受けたの。きちんと見え方を確認してから成功の報告したかったのだけれど、やっぱり眼帯をしていたら気になるわよね」

「白内障の手術、ですか」

ファルマが半ば驚き、確認するように尋ねる。

昨日手術をして今日外出とはその行動力に恐れ入るが、

（一体どこで受けたんだ？ 白内障の手術はこの世界ではまだ確立していない。自分の手術はできないから、アガタ師ではない。帝国医薬大で受けたのでもない。帝国医薬大なら、俺に相談がくるはず）

アガタが白内障を患っていたことはファルマもちろん知っていた。

そしてそれが、外科医としてメスを置く原因となったことも把握はしていた。

アガタが現役として復帰し、手術を手掛けたと考えている。

そんな噂も聞いていたが、ファルマにはどうすることもできずにいた。

アガタが白内障の手術を受けたという話はファルマにとって驚愕だ。

白内障とは、本来透明な構造を維持している水晶体の大部分を構成するクリスタリンというタンパク質の構造が変化することによつ

て異常な凝集や変化を起こし、水晶体の透明性が維持できなくなり混濁する加齢性の疾患で、80歳以上の高齢者ほぼ全員に起こる。

白内障によって水晶体が混濁してくると、視界がかすんだり、視力が低下する。視力の低下は老眼によっても引き起こされるため、高齢者の視力低下については判別がつかないこともある。

加齢のみではなく、アトピー性の白内障などもある。

地球における白内障の手術の歴史は意外に古く、墜下法という術式で、古来よりインドで行われていたものが中国を経て日本へと伝来した。

その方法とは無麻酔下で針で白濁した水晶体を突き、硝子体内に脱落させるという単純なもので、病草紙などにも挿絵として記録されている。この処置により感染し、命を落とす者も多かったとされる。

さらに、水晶体を脱落させた後はレンズがない状態となるため、やはり分厚い眼鏡が必要となる。

現代地球においては、白内障の手術は比較的安全に、一般的に行われている。

白内障手術においては、点眼麻酔を使用し、1ミリから3ミリの非常に小さい切開創から水晶体前嚢を切開し、水晶体を破碎する。吸引によって水晶体を取り除き、折り畳み式の眼内レンズを挿入することによって屈折矯正を行う。

レーザーを使って切開する場合もある。

眼内レンズも、保険適用の単焦点や多焦点のレンズの選択肢がある。

ファルマが以前アガタの目をみたとき、右目は成熟白内障の状態で、左目は辺縁部に濁りがみられる皮質白内障だった。

その時にアガタに「何とか治らないかしら」と尋ねられたが「私には手が出せません」というほかになかった。

ファルマの手持ちの技術では精度の高い眼内レンズを作ることが

できないため、断念せざるをえなかった。それを少し、心苦しく思っていたのだが。

「水晶体はきちんと切除していただきましたよ」

アガタはいわゆる墜下式で水晶体を除去したのではないと説明する。

「水晶体を除去したその後はどうなさいましたか？」

「水晶体の代わりとなるレンズを入れました。さて、何の材料を使用したと思いますか？」

「……ガラスでしょうか」

ファルマはアガタの顔を伺いながら尋ねる。

もし、ガラスだとしたらファルマは残念な報告をせざるをえない。ガラス製のレンズは硝子体内に脱臼しやすく、さらにガラスを挿入する際に大きく切開をしただろうから、屈折が強く出てしまう。眼帯をとった頃には、期待した見え方にならない可能性が高い。すると、アガタはファルマを出し抜いたといった子供っぽい表情をする。

「いいえ。やはりガラスだと思いましたか。正解は、アクリル樹脂製の眼内レンズです」

「アクリル樹脂ですか！　すごい！」

ファルマは興奮と歓喜で目を見開く。

「ふふ。すごいでしょ」

アガタはファルマの反応に満足したかのように片目を細めた。

「ドナルド先生に入れていただいたのよ。ここの医院は感染症対策をしっかりとっているから、安心して任せられたわ」

「うまくいっているといいんですが」

老医師ドナルドは隣で恥ずかしそうに頭をかいている。

そんなドナルドに柔らかなまなざしを向けながら、アガタはファルマに説明する。

「私はこの一か月、技術局に通いつめまして。おそらくはあなたが登録された技術だと思いますが、多くの技術を参照させていただきました。アクリルポリマーの合成方法、その加工方法。すべて読んで実際に手を動かしました。そして、アクリル樹脂の造形を満足にすることができるようになったとき、思いついたのです。生体材料、たとえば私の水晶体に使ってみようかしらと」

眼内レンズの技術開発史のうえで、アクリル樹脂やシリコン製のレンズが用いられたこともあった。ファルマはアクリル樹脂の合成方法を技術局に登録していた。

アガタはその知識を学び、応用した。

しかしアガタはファルマの反応を奇妙に思ったようだ。

「その顔は、アクリルポリマーが水晶体たり得ると知っていたかのようですね」

「……ご想像にお任せします」

ファルマは口を濁す。

「この術式が確立しましたら、私も技術局へ登録しますよ」

「しかし、麻酔等はお体にご負担ではなかったですか？」

エレンがアガタの体を気遣う。

「局所麻酔ですもの、何ということはないわ。こんな老い先短い八十歳のおばあちゃんなのにわざわざ手術を？　もしかしてそう思ったかしら」

アガタは不敵な笑みを浮かべる。

「いえ……そのようなことは」

エレンは慌てて否定する。エレンがどうフォローすべきか困ってしまったようなので、アガタは寛容な笑みを見せる。

「逆です。八十歳だから手術をしたの。もう老い先短いだし、うまくいけば新たな術式を確立できるかもしれない。私にも大いに利点があつて、片目だけでも見えるようになるかもしれない。どちらにしても見えないのだし、失うものはない。やらなくて後悔はしたくないわ」

「眼内レンズは一体どんな形状を？」

ファルマが気になって仕方がなく尋ねる。するとアガタはこれですといって宝石箱に入った模型を取り出した。それは四本の支持部のついた水晶体で、特殊な形状をしている。

「解剖学的知見から、そのまま水晶体を入れるとずれたり落ちたりすると思いましたが、レンズの端に支持部を取り付けてみましたの」

「おお！　これならば落ちたりずれにくいですね」

ファルマは声を上げて感心する。

現代地球における眼内レンズと、少し異なるとはいえ似た形状をしている。

アガタや医師らが知恵を集めて編み出した形状なのだろう。

「よろしければ、抗菌点眼薬を出しましょうか」

「ご心配なく、すでに使っているわ。一日経ったし、眼帯を外してみようかしら」

アガタは自分で判断してゆつくりと眼帯を外す。

そして瞬きをすると、個室の窓から薬局の外の風景をうつとりと眺めた。

「あら、鮮やかなお花畑なこと。見え方は問題ありません、素晴らしいわ。どこも歪んでいませんし」

アガタの使用した眼内レンズは単焦点であるため、眼鏡が必要になるだろうが、少なくとも、視界の白濁はなくなっているはずだ。

「それに、待つて。空がやけに青く見えるわ！ 気のせいかしら」

「気のせいではありません。加齢によって水晶体は黄変してきますからね。白内障を患っておられなかったとしても、アガタ先生の風景は少しずつ黄色く見えていたはずです」

ファルマは、アガタがそう感じるからくりを伝える。

「ですので今は、お若いころと同じように空が鮮やかに見えるかもしれません。帝都を御覧になりますか」

「ええ、ぜひ」



ファルマはエレベーターで店舗の四階、研究室のある階の通路へと案内する。

異世界薬局四階正面の窓からは、帝都の街並みが一望できる。

ファルマとエレンは窓を開け放つと、風が吹き込んでくる。そして彼女は帝都をじっと眺めていた。ドナルドもアガタの隣で同じ風景を見ている。

アガタはハンカチを取り、そっと目元にあてた。

「ああ、なんて美しいこと。どこまでも見える気がするわ。私の人生を包んでいた霞が取り払われ、青い空を取り戻せてよかったわ」「それでは左目のほうも、やってみますか」

ドナルドがもったいぶった調子で尋ねる。

「ええ、ぜひ。できる限り早い日程で」

アガタははつきりと、近日中に左目の手術にもとりかかる意向をドナルドに伝えた。

「いくつになっても、挑戦を忘れてはいけないわね。そうでなければ、この景色は見えなかった」

ここに置いてゆく技術はきっと、世代を超えて一人一人の人生に寄り添うのだ。

ファルマはそんな思いを胸に留めた。

「今日はオレンジを食べてみてください。きっと、鮮やかで懐かしい色をしていますので」

昨日までは彼女にとって茶色に見えていたオレンジも、オレンジ

色を取り戻すはずだ。

## 8章13話 到達と邂逅

1148年8月3日になった。

アガタの率いる帝国医師会は、狂犬病感染の疑いのある野犬に噛まれた平民猟師の最初の一例に遭遇した。

咬傷事故を起こした野犬が狂犬病の症状を呈し、その後死亡していたことから、患者検体をアップデートした臨床検査で狂犬病ウイルスを検出し、狂犬病ワクチンの曝露後接種を開始した。

当該患者においては診眼でも狂犬病のウイルス感染は検出されており、拡大視によれば右手指の末梢神経にとどまっている。

潜伏感染期に狂犬病ウイルスが少しずつ神経内部に感染を広げ、やがて中枢神経を介して脳に達したとき、通常は発症する。

アガタら帝国医師ギルドは専用隔離施設を設置し、果たしてこの最初の接種患者が狂犬病を発症するかに注目している。

数か月後には答えが出るが、ファルマは緊張をもって経過を見守っている。

狂犬病感染拡大の報告を受けた聖帝エリザベスはやく、帝都内で飼育されている食肉目に順次ワクチンを接種することを義務付けた。

人に接種をするより、飼育動物に接種をするほうがコストがかからずに済むという目算からだ。

当然、宮殿で飼育されている聖帝のトラやライオンなどの大型ネコ科動物も対象になった。

宮廷獣医や街の獣医ら、咬傷事故などを受ける可能性のある職種にある者も優先して予防接種されることになった。

ファルマは宮殿の薬師控室で狂犬病ワクチンを準備をしている。

パツレとファルマは手分けをしてワクチン接種を担当することになった。

「狂犬病ワクチン、俺は動物に打ってくるから、兄上はここに来た人に順番に問診をして投与していつてよ」

「人は分かった。だが動物って、あの獰猛な番犬や猟犬、ライオンやトラ、ヒョウにも？」

大型動物相手だといくらか格闘する羽目になるかもしれないが、そこは獣医に保定を手伝ってもらうしかない。

「そう、少し緊張するけど」

結局物理無効なので、気持ちの問題でしかないのだが。

「一応お前もワクチンを打って行ったほうがいいんじゃないか？  
ワクチンを打ちに行つて噛まれましたじゃシャレにならねーぞ」

「そのつもり。兄上が打ってくれる？」

ファルマはこの世界においてはありとあらゆる感染症にかからな  
いため、今さら予防接種も無駄なのかもしれないが、他の接種者へ  
の啓発のためにパツレにワクチンを打ってもらう。

ファルマも問診と検温をしてパツレに投与をする。  
互いに接種後の経過観察をしながら会話を交わす。

「人間の接種予定者は何名いる？」

「宮廷獣医と飼育者、猟師、合わせて五十名ほどかな。これが最新  
のリスト。咬傷歴のある人をピックアップしておいてほしい」

ファルマは準備しておいたカルテ一式をパツレに手渡す。

少しずつ担当患者の引き継ぎをしているので、これもパツレの臨  
床経験となり、担当薬師として顔を覚えてもらう契機にもなる。そ  
んなことはプライドの高いパツレには伝える必要もないが。

「わかった。数か月前の咬傷歴の聴取も必要か？」

「潜伏期間が長い場合もあるから、必ず聴いてほしい。それから、  
ふせんをつけた三人ほど結構強烈な反ワクチンの人がいるから、対  
応は任せる」

「どうすんだよ。反ワクチンの職員には打たねーのか？ 無理やり  
打つわけにもいくまいに、曝露後接種でいいだろうって言い出した  
ら？」

患者自身が医療を選択できる現代地球とは異なり、勅令だからと  
いつて強制してしまってもいい世界なのだが、強制的な接種は不信  
感につながる。

「狂犬病ワクチンの曝露前接種と曝露後接種の違い、メリットとデ  
メリットをきちんと説明して選んでもらって」

曝露前接種を行っておけば投与回数が少なくて済むだけでなく、  
曝露後接種より生存確率が上がる。言葉を尽くし、丁寧に質問をく  
み取り、接種者の不安を和らげることができれば、命を守る行動を  
とってくれるはずだと諭す。

「針を刺すのが嫌いな人間もいるだろうしな」

「宮廷の人たちは月に一回行われていた瀉血を廃止したから感謝し  
てくれているよ。瀉血とは違うといって普通に話せばわかってくれ  
る」

瀉血嫌いの宮廷人は多く、ファルマはクロードを説得して瀉血を

廃止したため、多くの人々を味方につけている。

「ああ、瀉血は厄介なものなあ……全面禁止の流れになったのはよかった」

訪れた数人の専門職らのワクチン接種が終わったところで、宮廷獣医ジョセフィーヌが薬師詰所にやってきた。

ファルマにとってはいつも学生として接しているジョセフィーヌだが、宮廷獣医としての制服を着てバッジをつけた彼女は凛々しく見える。

ジョセフィーヌはファルマを見つけると、嬉しそうに駆け寄ってくる。

「あ、教授！ お疲れ様です。狂犬病ワクチンの接種に参りました。その後、動物への接種をお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。そういえばジョセフィーヌさんは咬傷歴はあると聞いていたよね。それは最近でも？」

以前聞いたときはあると聞いて傷を見せてくれたが、更に新しい傷が更新されていた。

「そんなの年がら年じゅう生傷だらけですよ。ほら、ここも。ここもです」

ジョセフィーヌは手足に勲章とも呼べるほどの咬傷痕を作っている。

あれもこれも今年の傷ですと見せてくれるので、ファルマは「改めて、獣医師って大変な仕事なんだな」と恐れ入る。

「咬傷対策って不可能なんだっけ」

こう、保定の前に動物を手なづけるコツなどがあるのではないかな。分厚いグローブなどを遣えば、と問うが、まさに素人は口をはさむべきではない。

ファルマとしては本格的に噛まれる動物としてマウスやラットの取り扱いぐらいしか経験がないため、獣医とはそういうものなのかと納得するほかにない。

「防御神術が間に合えば使いますが、そんなもの患畜の気分次第ですし、たいていは神術を立ち上げるより患畜の攻撃のほうが多いです」とのこと。

最近では保定技術が上がってあまり噛まれなくなってきたというが、それでも予想外の行動をする個体、急に機嫌が悪くなる個体はいるそう。

ちなみに、一番困ったのは毒蛇に噛まれたときだという。

「え、蛇？ 毒蛇？」

「いやあ、噛んだらどんどん牙が食い込んで放してくれなくてですね……決死の格闘を繰り広げましたよ」

誰も助けに来てくれなくて死ぬかと思いました。などと遠い目をしながら語るジョセフィーヌはタフすぎた。

（それ以前に宮殿で飼ってる動物がおかしい……）

さすがにファルマも、毒蛇を素手で触らないほうがいいのでは、そもそも毒蛇を飼育すべきではないのでは、というコメントしか出てこなかった。

「え、毒蛇はペットではなくて抗毒血清を作るために飼っているん

ですよ。いつもはカラツカラになるまで毒を絞っていたんですけど」

「あ、そうか！ 抗毒血清はどの動物で作っているの？」

「私は牛で作りますね、馬で作る獣医もいますけれど。持ち回りで作って規定の量を保存しています」

「へえー……」

「契約している獵師が結構毒蛇に噛まれるので、必需品ですよ。あとは聖下が狩獵にお出ましのときにもしものことがあつてはいけませんからね」

サン・フルーヴ帝国には鎖模様のついた毒蛇がいる。

いつかに備えて毒蛇の血清を取り揃えておくことも宮廷内のジョセフィーヌの仕事なのかと思うと、彼女も言わないだけで多忙な日々を過ごしているのだと感心する。

「抗毒血清を作るのは獣医師ではなく薬師の仕事ではないの？」

「えっ、教授がやってくださるなら大歓迎です」

「また分担については相談しよう。そういえば、蛇毒は動物を使わず人間に打って抗毒血清を得るという手もあるよ」

パツレがファルマの視線に気づいた。いわゆるミトリダート法である。

「は？ 俺がやんのか？ 牛馬でやるもんだろぅがよ！」

ファルマでもいいのだが、抗毒血清以外の何かも紛れ込んでしまいたいそうで避けたい。

地球には数十年にもわたって蛇毒を注入し続けて抗毒血清を作っているパンクロッカーなどがいた。

意味深な視線を向けてパツレを怖がらせてしまったが、もちろんそんな方法はファルマも推奨しない。



「何も言ってないよ」

「何故今のタイミングでこっちを見た。俺を殺す気が、元白血病患者でやるうとすな」

「そうだね」

ファルマは適当に流して問診を続ける。

「それで、過去はともかくとして、今は体調に問題は？」

「はい、私は宮殿で飼育されている動物にしか触れていませんので」

宮殿で飼育されているのは確かに血統や品種などはやんごとなき動物たちなのだろうが、感染症は別の話だ。

「それは何の担保にもならないよ。講義でもやったけど、人畜共通感染症もあるし」

「そういえばパストレラ症にかかって関節炎を起こしたことならありますよ。というか、帝国医薬大に入ってからあれがパストレラ症だったことを知りました。新しい知見を得ました」

「ほらー……」

ファルマがヒヤヒヤしながら診眼を使うが、ジョセフィーヌの体には今は特に異常はなさそうだ。

重篤なアナフィラキシーを起こしたことがあるか、発熱はないかなどの問診ののち、パツレがワクチンを希釈、調製して注射器に充填し、ファルマが監査と投与をする。

接種後、経過観察をして異常がなかったので今度は彼女と食肉目のワクチン接種に向かう。

ファルマがワクチンを調製し、ジョセフィーヌに保定をしてもらって投与してゆく予定だ。

「この子達からいきますか。大丈夫、檻から出さなければどうということはありません」

ジョセフィーヌとファルマはエリザベスの愛猫？ のトラの檻の前に立つ。

ふいにお尻を向けたのでファルマは何かを察して氷の壁を作っておくと、案の定スプレー行為を働いた。

「ふふ、さすが教授。おしっこを飛ばして来ると読み切るとは！」

ジョセフィーヌが興奮しているので、まさかと思い尋ねる。

「え、ジョセフィーヌさんはかぶるの？」

「まあ、今かと思ったときには来ないし、ほかの作業に夢中になっているともかぶりますね。最近では愛情表現かなと思える余裕も出てきました」

「かぶるんだ……」

本当に大変な仕事だ、とファルマは頭が下がる。

「マーキングの飛散防止に、檻の前面にガラスを張っておけばいいんじゃない？」

「まあまあ、そうしない理由は一目瞭然かと。さて、始めましょうか」

ファルマはジョセフィーヌに促されてワクチンを調製する。

ジョセフィーヌは生肉の入ったバケツを持ってきて肉でトラの気を引き、トラの体が檻に対して横向きになるように移動させる。その自然な誘導は見事だった。

「教授はこの隙に、横から檻に手を入れて皮膚をつまんで皮下注射してください。あ、肉というよりは毛を引っ張ると皮膚が盛り上がってやりやすいです」

ジョセフィーヌがトラに声をかけながら肉を食べさせ、ファルマがその隙に檻ごしに投与を済ませる。

トラは何も気づかず、美味しそうに生肉を貪っている。あっという間の仕事だった。

「すごい、こんなに簡単に終わるなんて。多少格闘になるのを覚悟してたのに」

「まさか格闘して投与しようとしていたんですか。教授も面白いところありますね」

ジョセフィーヌはぷぷつと吹き出す。

ジョセフィーヌはその調子で大小の食肉目のケージを回り、ファルマが皮下注射をしてゆく。

子ライオンはジョセフィーヌが首根っこを捕まえて保定したり、小動物は彼女自身が投与をしてゆく。

ジョセフィーヌは注射器を隠しながら投与のスピードも速い。

「投与完了かな」

「無事に終わって、というか無傷で終わってやれやれです。これで動物たちが聖下を噛んだとしても狂犬病に感染なさることはないんですね。獣医師としても一つリスクが減ってありがたいです」

「複数回投与が必要なので、私たちも含め抗体ができるまではまだなので油断はできないけど」

狂犬病ワクチンだけでなく、人畜共通感染症のうち、例えば人に

対する影響が大きいものから順にワクチンを開発、普及させてゆく必要性を感じている。

それがひいては、動物だけでなく帝都市民の保健衛生に繋がる。ジョセフィーヌにそんな話をしていると、

「教授」

ジョセフィーヌがふとファルマの目を覗き込む。

「これからもご指導ご鞭撻をお願いしますね？」

「もちろん」

ファルマもジョセフィーヌの真剣な口調に応えて頷いた。

「ジョセフィーヌさんは医薬大を卒業したら宮廷獣医に専念するんだっけ」

学生の進路相談はまだ実施していないが、何気なく尋ねてみる。確か、入学時はそう言っていたはずだと思い出す。

「そうですね、教育課程を終えて一級薬師の資格を得たら、宮廷獣医に奉職しつつ、大学院に進んで動物の感染症に関する研究を続けたいと思っています。エメリッヒ君とそんな話をしていたんです」

ファルマは総長のブリュノにかけあつて、来年にも帝国医薬大に世界初の大学院をサン・フルーヴ帝国医薬学校総合薬学大学院として設置する準備を進めている。

五年間の学部教育に引き続き、三年間の博士課程を設ける。

ほかの学部についても検討を進めているが、薬学研究拠点を先んじて設置する。

地球における大学院の歴史を振り返れば、意外に歴史は浅く、1876年、アメリカのジョンス・ホプキンス大学に最初の大学院が誕生したとされる。

エメリッヒは既に大学院入学への強い意向をファルマに伝えており、その準備手伝いまでしていた。エメリッヒはパツレとは違って臨床よりも研究、というタイプの薬学者になりそうだ。

ファルマは将来、彼に薬学研究の中心的な研究者になってほしいと考えている。

また、エメリッヒには内緒なのだが、ファルマは既に彼の致死性家族性不眠症にまつわる遺伝子を修復して、発症しない状態にしておいた。

仮にエメリッヒが致死性家族性不眠症の治療法を発見できなくとも、ファルマがいなくなった状態であってもエメリッヒが死亡することはない。

恐怖心に囚われたり、残り時間を気にせず研究に没頭してほしかった。

「教授はどう思われますか？」

「そっか、獣医をしながら研究を続けるんだね。もちろん、大歓迎だよ」

「両親には反対されたのですが」

「どうして」

「婚期を逃すから、だそうです」

「婚期か。別に研究が結婚の妨げになるとは思わないけどな」

「男性だからそう思うのかもしれませんが？」

この世界の因習として、女性薬師や女性研究者は結婚をして引退するか、もしくは生涯独身が普通のようなようだ。

だからこそファルマは逆に、メイークや関連薬局で既婚の優秀な女性薬師を大量に引き抜くことができた。

結婚、出産が女性研究者にとって大きな負担となることは、ファルマにも理解できているつもりだ。女性研究者が結婚や出産を諦めてしまわないよう、周囲のサポートが必要だ。

既婚女性も既婚男性と同じように活躍できる、それが普通となる社会にしなければならないと思う。

「そうかもしれないね。ジョセフィーヌさんは結婚をしたいと思っているの？　今、お付き合いをしている人がいるとかは」

「いえ、まったく。他人と暮らすのが嫌いなので、そう言われるのも鬱陶しくて」

それが本心なら、独身を貫くのは何ら非難される覚えはないとファルマは思う。

「私も一生独身のつもりだよ。独身仲間だね」

ファルマは何気なく伝える。

「教授もですか。そう言われると、気にならなくなってきました」

「どんな生き方があってもいい。学問の世界は自由だ。もし、何か研究の妨げや懸念になっているものがあるなら、指導教官として支援するからいつでも伝えて」

「はいっ、ありがとうございます」

ファルマはジョセフィーヌの意向を聞いて、彼らが快適に研究を続けて行けるように整備をしておかなければと強く思った。

「大学院に進学して、薬学の博士号というものをもって、立派に研

究者になれるよう頑張ります」

指導教官として彼らが学位をとるまで指導ができるかは分からないが、ファルマは筆頭宮廷薬師から大学研究者へと軸足を移し、最後の最後まで彼らの歩む道を支えてゆきたいと願っていた。

1148年8月7日になった。

ファルマは表面上、帝都の保健日常生活を送りながらも、墓守との最終決戦に備えて単身、あるいはメレネーと様々な考察や検討を続けていた。

その日、ファルマは地上から七百キロ以上離れた宇宙空間の中にいた。

地球の大气でいうといわゆる熱圏を抜け、真空の世界に身を浸す。なぜこんな遠くまで来ているかという、反物質を取り扱うには真空が望ましいからだ。

エレンの提案を受けて、独自に反神力と反物質の関係を調べていた。

ファルマは惑星の壮大な眺めと青い輝きを眼下に見下ろしながら、エレンから教わった方法、すなわち薬神紋に神力を押し込んで逆側から引き出す方法を試す。

宇宙空間、絶対真空ではないながらも真空に近い状況で左手をかざし、細心の注意を払いながら薬神紋から反神力を操り、反物質の水を創造する。

（反物質の水を消去）

どう念じていいものか分からないが、物質消去に成功した。

反物質は電氣的に安定で、一般的に物質とされるものと変わらないようだ。

ただ、物質に衝突すると莫大なエネルギーを放出することから、地上でそれを創るには危険すぎたし、ファルマも長時間の安定的な観察は憚られた。

ファルマは極寒の闇の中で考える。

（反神力で反物質を作れるとしても、使い道がない。ひたすら反神力を使って神力との調整をとったとしても、大量の反物質をこの世界に安定的に保管しておくことができない）

ファルマはエレンのアイデアが突破口となるには弱いと感じた。

（ただ……世界ごと全ての物質を反物質にすることができれば、物質と同じように安定化はする）

神力や呪力を調律するための理論は成り立つ。決まった周期で反転し続ければいい。

呪力と神力、反呪力と反神力を交互に使い続ければ。

（ああ、もしかして墓守は拙いながらもそれを試みていたのか）

ファルマはこの惑星の歴史の浅さと関連づけて、墓守の意図を推測しようとする。

そして、この惑星がまるで地球をコピーしたかのような構造をしていて、極端に歴史が浅い理由にも思いをはせる。

（この世界では何度か、宇宙の構造物が物質ではなく反物質で構成され、反神力を用いていた時期があったのかもしれない）



打開策を得られないまま、研究室に戻ってインターネットで地球側の動向を調べる。

薬谷 完治の人生をネット上で掘り返していると、かつての自分とは全く異なる人生を送っていることに気づく。

かつての自分と出身高校が違う。ファルマ少年が通っていたのはスーパーサイエンスハイスクールのある、有名な公立高校だ。

彼は高校の時点から出身大学の研究室に出入りをしていたいし、部活の一環として国際科学オリンピックに出て入賞したりしていた。

そのころの薬谷は私立の進学校で大学受験勉強に明け暮れていたから、ファルマ少年は三年も早く研究生生活を始めて、大学へのコネを作っていたことになる。

彼の完全記憶能力をもつてすれば、受験など楽勝だったことだろう。

大学に入ってから学生馬術大会で連続優勝している。

（そりゃ、馬術も得意か……）

今さらになつてファルマは元のファルマ少年のスペックの高さを思い知る。

現代日本の生活に順応してただけではなく、しっかりとした目的意識をもって、彼は最先端の薬学者になっていた。

（どんだけ優秀なんだよ……ファルマ・ド・メディシス。大した取柄もない俺の体に憑依してただろうに）

まだ会ったこともないファルマ少年と比較して落ち込む。

ファルマ少年の記憶はファルマ・ド・メディシスの体にも残されている。

それでもこちら側に彼の自我がないのは、意識の本体部分が地球

側にあるからだろう。

それに対して、今のファルマ、すなわち薬谷 完治は逆にファルマ・ド・メディシスの肉体、頭脳の潜在的な性能を十全に引き出せているのだろうかと自問する。

もし、彼がこちらの世界で規格外の神力と完全記憶能力、現代薬学知識を手にしていたら、いったいどんな立ち回りをしただろう。あの疾患やあのパンデミックに対しても、最適解は別にあっただのではないか。そんな思いにも囚われる。

インターネットではどれだけ調べても薬谷 完治に入っているファルマ・ド・メディシスが神力を使っていると推測できる情報に当たすることはできなかった。

メレネーが見た、あちら側の薬谷 完治が白衣のポケットに挿していたという黒い神杖らしきもの。

メレネーから特徴を聞き取った限り、どうしてもそれは神杖ではなくペンだとは思えない。

ネット上の彼の写真や動画を見ても、胸ポケットには同一と思われる黒いペンを挿してはいた。メレネーの言っていた杖とはこのことだろうか。

薬谷 完治はもともとそのペンを使っていなかった。ただ、何の変哲もない形状でありながら、メーカーを検索しても出てこない。

確かに、ペンの内部に晶石などを仕込めば杖化は不可能ではないし、クロードも手術の際にはメス状の極小神杖を使っている。

（ペン型神杖であれば、携行していても不自然ではない……おそろくは、思い入れのある海外土産か、特注品のペンなどだろうか）

向こうにいるファルマに連絡をとることはできないだろうか。

それが一番手っ取り早い。向こうのファルマ少年は、こちらが知らない情報を知っている可能性がある。ネットを介して繋がること

ができれば、情報交換ができるかもしれないのに……そう思っ  
た疑問に思う。

（考えてみれば、HTTP通信ができているのに受信しかできない、アップロードができないってそもそもおかしいんだよな。通常の状態ではありえない。うやむやにすべき問題じゃなかった）

通信に関してはこちらの世界の管理者である墓守か、あちら側の何者かに干渉されて片側をブロックされているとみるべきだ。

（向こうのファルマ少年は、俺がネットを見ていることに気づいているのか？）

こちらの存在に気付いていれば、薬谷 完治宛に分かりやすいメッセージを出す気がする。

例えばSNSにサン・フルーヴ語で書かれたメッセージの写真などをあげればいい。

しかし、遡ってもそういったメッセージは発見できなかった。SOMAを調べようとしただけで情報がブロックされていることを鑑みれば、消されている、という見方も成り立つが。

通信を邪魔されずファルマ・ド・メデイスと直接接触できる機会が唯一あるとすれば、異界の研究室内で遭遇することだ。

（でも、ドアがもう、物理的に開かないんだよな……電子錠も開錠するかわからないし）

うまくいけばあと一回、指先一本ぐらいは入る隙間はあるだろうが。

（ドアをこじ開ける方法を探したほうがいいか。例えば外側から物

質消去をかければドアは消えるだろうか)

十分ほど教授室のドアを睨み据えながら頼杖をついて思案した挙句、ファルマはひらめいて思わず「あっ」と声が出た。

(普通に蝶番を開けてドア自体を外せばいい！ 荷物の搬入で外せるようになってるじゃん……)

思いついてみれば簡単な事だった。

聖泉に入るたび、ドアは錆びて経年劣化をしているようだった。つまり、研究室のドアは毎回新しくなっていない。

ということは、研究室の扉を一度取り外してしまえばその結果は固定され、地球への通路として使える！

(完全に取り外してしまうことで、向こう側から何か侵入して来るかもしれないけれど……。あつ、でも蝶番ってドアを開ききらなければ外せないんだっけ。そもそも何故、ドアが開かなくなってきたのかを考えるか……)

経年劣化による蝶番の緩み、などという理由であれば、ドアの下か上の隙間に物理的にパッキンを噛ませれば開くようになるはずだ。あと一回開錠してくれば、電子錠はラッチの部分をドライバーを使って取り外すことができる。いずれにしろ、ドアは開く。

研究室に自由に出入りができる状態になれば、あとは制限時間の問題をクリアするだけだ。

研究室内にいるのが死にかけの薬谷 完治ではなくファルマ・ド・メデイシスが研究室内にいるパターンも存在したことから、ファルマと話すことはできるはずだ。

(早めにドアを開放にしておいたほうがいいかもしれない)

もし、経年劣化だとすれば、一日も早く対処する必要がある。  
ファルマはそうかと気づいて工具を持って聖泉の研究室へと向かった。

聖泉へと飛び込み、泉の裏から水面を凍らせて虚無の空間へと出る。そして、さび付いた研究室301の扉の前に立った。扉は以前見た時より状態が悪くなっている。ファルマは手始めにスチール製のドアに対しアルミニウムと鉄で物質消去を使ってみたが、発動しなかった。

（神術が使えないのは室内だけではなかったのか）

ファルマは迷いなくドアの下部にスパーサーを噛ませて、電子錠を開錠する。

そして中にバールを突っ込んでドアをこじ開けると、ドアは全開した。

研究室には入らず、そのままドライバーでドアの蝶番のネジをとってしまふ。

（よし、ドアが外れた。これでまた出入りできるようになる）

ファルマは外したドアを聖泉側へと引き出して、「ドアを外した」という結果を空間へ固定した。

ドアの外れた301准教授室の内部を覗き込む。ソファの上は直接はパーテーションで見えないので、少し301室内の鏡を使って確認する。

ソファの上に横たわっているはずの薬谷 完治はいなかった。  
ファルマは息をのむ。

（ということは……どこかで行動している）

思わず身構えたそのとき、302号室、つまり研究室側から何者かがドアを開く音がした。

准教授室に入ってきたのは正真正銘、彼は動画で見ていた薬谷完治その人だった。

その彼と、厳密な意味で視線が合った。

「なるほど、ドアを外すとは考えましたね。初めまして、薬谷 完治さん。私のことはわかりますよね」

彼の第一声は、ファルマの行動に対して感心を含ませていた。

「ファルマ・ド・メディシスさんですね」

思わず近づこうとすると、待つてと手を突き出された。

「研究室に入らないください。二つの宇宙をショートカットするこの特異な空間は、私かあなたの片方しか存在を許容されていないのです」

「この空間についての構造解析が終わっているのですか？」

ファルマが片鱗すら把握できなかったこの空間についての解析を既に終えている。

それがどれほど心強く聞こえるだろうか。

広い大海で遭難中に、あたかも救援の船が来たかのような。

「ええ、とつくに。そちらにはあなたたった一人で、あなたは宇宙物理学者ではありませんが、地球にはご存じの通り、ありとあらゆる分野の専門家の助力を仰ぐことができます。得られる情報量が異なります。空間を挟んで今後の打ち合わせをしましょう。この空間

はどちらかが入ると、どちらかが締め出されます。あなたが機転を利かせて研究室に入らずにドアを開けたおかげで、あなたの持ち時間がなくなる代わりに、私は301号室側に到達することができました。私がここに滞在できるのも58分ほどしかないので、手短に打ち合わせをしましょう」

まさかの、今一番会いたかった人物との直接の対面が叶った。

「ああそうそう、いつ通信が切れてもいいようにデータを送ってきます。この研究室からだ通信妨害はされませんので。あなたも何か試みられたかもしれませんが、おそらく何もできなかったのではないでしょうが」

ドア向こうのファルマは、ファルマがスマホを胸ポケットに入れているのに気づくと、Bluetoothで画像や文章のデータを送ってきた。

彼の言葉で、やはり何者かによって通信妨害は行われていたのだなと確信する。

「薬谷 完治さん、これまでのあなたのご功労に敬意を表します。よく、そちらの世界で一人で苦難を乗り越えてこられましたね。あなたなしでは滅んでいたかもしれない私の故郷を救っていただいてありがとうございます。心から感謝します」

端末の操作をしながらかけられたのは、優しいねぎらいの言葉だ。ファルマ「少年」、という子供のイメージが強いが、彼は10歳の少年ではなく地球側に21年も暮らしている31歳の成熟した青年だ。

ファルマは彼の人格に触れ、殴られたような衝撃を受けた。そして、伝えなければと思っていたことを伝えておく。

「私も、決して一人ではありませんでしたよ。あなたの家族や、周囲の人々にたくさん助けていただきました。それからファルマさん、私の妹を救っていただいてありがとうございます」

ファルマは瞼を閉じて、これまでの出来事を噛みしめながら言葉を返した。

「ええ、私にとっても大切な妹です」

そう言われると、ファルマは複雑な気分になる。

「私とあなたは対となる存在で、対となる力を持っています」  
「……対？」

つまりそれは、人格と記憶の入れ替わりを指すのだろうか。  
そんな解釈ではないように思う。

「あなたが守護神であるならば、私は邪神と呼ばれる存在です」  
「つまり、神力と反神力を使う存在、物質と反物質で構成された存在ということですか」

「一般人にしては理解が早くて助かります。私たちが力を合わせれば、必ず二つの世界、そして私たち自身を救うことができます」

彼の言葉は穏やかながら、自信と希望に満ちていた。

彼は今、ファルマの前に一人で現れたが、彼は地球世界で大勢の協力者、助言を受けているに違いない。

そのうえで、この途方もない、宇宙を巻き込んだ辻褄合わせを可能とする最適解を見つけていたのだ、そう思わせるには十分だった。



## 8章13話 到達と邂逅（後書き）

東京側で何が起こっているかは

EP3 TOKYO INVERSE  
れていきます。

・東京反転世界・で明かさ

## 8章 14話 対談

西暦2048年5月24日 午前3時30分。

東京都文京区国立T大学 薬学系研究科教授、薬谷 完治が研究棟の廊下を歩いているとき、自身の帰属する空間が現空間から切離されたことを知覚した。

（きたか……）

薬谷教授は廊下側から培養室を兼ねている304号室の扉を開け、迷わず異界へと踏み出す。

そこは閉じられた空間に存在する、世界の分岐点上にある1時間を無限にループする世界だ。

地球側から異世界側への干渉はできず、異界化した研究室にファルマ・ド・メディシスが入った瞬間から、こちらの空間は閉じられ自由に行動をすることができない。

時空を開く主導権は完全に向こうが握っており、つまりファルマが欲したタイミングで薬谷教授は異界の研究室へ放り込まれる。

異界の研究室へは一方からしか入れず、ファルマ・ド・メディシスも301号室側からしかこちらへ侵入してこない。

記憶に残っている限り、これは薬谷教授にとって5度目の異界入りとなる。

（今回は、俺が先に向こう側へ走破して到達する）

既に何度か試行を行っているが、いつもファルマに先を越されてしまい、301号室に到達する前に陣取りゲームに競り負ける。

というのも、ファルマ・ド・メディシスが301号室を開錠した

瞬間からカウントダウンが始まるので、そもそもこちら側が不利なのだ。

回を重ねることにファルマ側の侵入範囲は狭まっているので、薬谷教授は301号室側へと歩みを進めることができる。

今回はスタートダッシュで出遅れまい。

（今回は303室で悪霊が出てきたが……今回は何も無いことを願う）

白衣のポケットからペン型の小型神杖を抜き、303分析室の電気をつけながら杖を構える。

悪霊の出現は伺えない。

警戒を緩めず歩調を速めて分析室を駆け抜け、302室のドアを開く。

遂に301室へ到達したとき、301号室の出入口、本来そこには廊下があったはずの空間から、眩い太陽光が差し込んできた。

眩しさに目を細める。

数秒間の明順応が終わると、境界の外にいたのは13歳の、いまだ見たことのない自分自身の姿だ。

ファルマ・ド・メディシスは異世界側から301室の扉と蝶番を破壊して呆然と立ち尽くしていた。

あまりの大胆な手口に笑ってしまいそうになる。

とはいえ、時空を超えた対面だ。

（さて、本物の薬谷 完治に会えた。話を通じる相手だといいいのだが……）

薬谷はそんな緊張は曖にも出さず、彼との対話を試みた。

切り立った台地の上、聖泉の裏側に存在する地球と異世界を繋ぐ通路、301准教授室。

准教授室ではなく教授室へと変更されているのだが、302室から姿を見せた薬谷 完治教授はファルマと邂逅するや、Bluetoothで複数のデータをファルマのスマホへ送付し、ファルマと対話を始めた。

彼はのっけから、異世界と地球、二つの世界を救う準備が整っていると伝えてきた。

ファルマは急な展開に戸惑う。

薬谷が救うと宣言した範囲に自分が含まれていることも、要点を得ない。

「お話を伺う前に、一つお伝えしておきたいのです」

「何か」

「私は自身の生死に拘泥していません。既に死んだ人間ですので、私の事は勘案しないでください」

ファルマが力なくそう伝えると、薬谷は驚いたように首を振った。

「薬谷さんの死は確定していません。あなたはこの部屋で薬谷 完治の死と遭遇したのかもしれませんが、あれは暫定的な状態です。過労をしていませんし、当然の帰結として健康に暮らしています」

確かに、薬谷 完治の妹、薬谷ちゆが救われたことで薬谷 完治が過労をする動機は消え、過労死するという結果は覆っているに違いない。

薬谷教授は見るからに健康そうだし、かつての不健康極まりなかったあの薬谷 完治とは体のつくりからして違う。

そもそも過労をしていないうえに基礎疾患もなく、自然発生的な突然死が起こりにくい状況だ。

「何せこちら側にいた私は普段は定時に帰宅しています」  
(定時ってなんだっけ)

前世では24時間研究室に住み込むほどの悲惨な生活を続けていたファルマには定時という概念もよく分からないが、定時とは一般職員と同じ17時30分のことをいうのだろう。

限られた時間で研究活動をこなし、世界的な業績を出しているからには、研究者としての能力の高さもあるのだろう。

それで自身の健康管理まで完璧だとは恐れ入る、とファルマは自虐ぎみに話を聞く。

(それにしても、何でこの時間に研究室にいたんだ?)

異界の研究室では、午前4時30分すぎのはずだ。

ファルマの疑問に気づいたのか、薬谷は補足する。

「ええと、あなたがこの研究室を訪れる日は3日前から予測できますので、その日だけ寝ずの番をしているのですよ」

「そうだったのですか」

ファルマは適当なタイミングで研究室を訪れていたが、薬谷 完治はいつファルマが来るか分かって対策も立てていた。

何もかも彼の得ている情報量が多く、先手を打っているように見える。

「前回接続時に、霊を迎撃したのはあなたですか」

「ああ、悪霊が一体侵入してきましたので応戦しましたが取り逃が

しました。あの霊について、何かご存じで」

薬谷がメレネーの霊を悪霊と認識して攻撃したようだ、ということとはファルマにも推測できる。

「あの霊は悪霊ではなく、私が友人に頼んで偵察に放ったものでした。もし、それを悪霊とみて警戒させてしまったら申し訳ありません」

「そうでしたか、悪霊にしては不思議な挙動をすると感じましたが。あなたのご友人は悪霊ではない霊を操ることができるのですね」

「彼女は呪術師なので」

「へえ。呪術師とは、私が帝都にいたころにはなかった概念ですね。では次から、類似のものを見ても攻撃しないことにしましょう。ご友人にもよろしく」

薬谷には悪気もなかったであろうから、メレネーの霊を傷つけられたことを非難すべきではない。

「地球にいても即応的に浄化神術が使えるとはさすがです。神術訓練は続けておられるんですね」

「特に訓練はしていません。鎡の歯車が存在する影響で、東京には時折悪霊が出るのです。そのたびに浄化神術で浄化を試みているので、慣れているだけです」

東京に悪霊が出るとは、どんな魔界になってしまったのだろうか、とファルマは懸念する。

家族や友人ら、地域の人々は無事なのだろうか、と心がざわつく。

「東京に、悪霊が出るんですか……私がそちらに行けたら、広域浄化できるのですが」

「安心して下さい。私や協力者が随時対応していますので、犠牲者は出ていませんよ」

「ファルマさんは疫滅聖域などを使えるのですか？」

「私には特別な加護がなく、そういった特殊能力は使えませんが、ごくごく一般的な浄化神術で対応しています」

「協力者とは、そちらにも神術使いがいるのですか」

「いえ、神術使いは私のみで、協力者というのは地球人です」

「ではたった一人で神術を駆使して悪霊と戦っておられたのですか。それは大変でしたね……」

薬谷も東京で悪霊相手に孤軍奮闘をしていたとみえ、苦勞が偲ばれる。

ファルマはこちらの世界で大勢の神術使いらの助力を得ていたし、神殿が世界各地に展開し悪霊を駆逐してくれていたため、悪霊にまけきりにならずに済んだのだが。

薬谷がどの程度の頻度で悪霊退治をしていたのか、想像を絶するものがある。

ファルマが沈痛な面持ちでいるのに気づいたか、薬谷は意外そうに眼を丸くした。

「ああでも、最近は悪霊の数がめっきり減ってきましたよ。あなたがそちら側で何かしていますか」

「こちらで出現する悪霊を減らしていますので、そちらにも影響しているでしょう」

ファルマがメレネーと協力して、大陸全体の悪霊の数を減らしてきたのは、地球側にも反映されているということなのだろう。

「ところでファルマさんは神杖もないのに神術が使えるのですか」

「薬谷さんだって神杖がなくても神術が使えるのではないですか？」

それに浄化神術を行使するために使う神杖ならここにありますよ」

薬谷はポケットからペンを抜いて見せた。

何の変哲もない黒いペンに見えるが、キャップをとると青い晶石が埋め込んである。

「ああ、それが神杖だったのですか」

「日本においては神杖の携行は目立ちますので、小型化を行いました。杖の大きさは神術の威力に比例しませんので。この晶石には、あなたの世界からみると反神力と呼ばれるものが蓄えられています。あなたが神力を使うと、この晶石に反神力として蓄えられます」

「私が神力を使うとそちらに反神力がたまるのですか」

「そういうことになります。話が長くなりますので、詳しくは先ほど送った資料を見てください」

何がどうなってそんな奇妙なことが起きているのかは分からないが、偶発的に起きているとは考えられないから、墓守が何かしたのだろう。ファルマはひとまずそんな理解に落ち着いた。

「あなたが必要であろうデータは、さきほどすべてBluetoothで送信しています。落ち着いた場所で資料を読んで状況を理解し、咀嚼してみてください」

送信したデータを何者かに書き換えられるかもしれないが、書き換えが起これば判別がつくように改竄検知プログラムも入れているとのこと。

「分かりました、確認します。ありがとうございます」

「今後もし、接触できる機会があれば連絡をとってゆきましょう」



ファルマは薬谷の言葉を心強く思う。

「それは助かります。あなたは地球側で反神力を使っているのですか」

「ええ、悪霊と対峙する際に用いますが、反神力は神力に転換して使っています」

薬谷 完治は地球側で、ファルマがこちらで使用した量と等量の反神力を大規模に消費する神術を使うことで二つの世界の神力消費のバランスをとっているとのことだった。

「少しずつ私とあなたで神力を相殺して、この世界に存在する神力を打ち消してゆくことが望ましいです」

双方の世界で神力を相殺しあい、神力量がいつかゼロになったら、二つの世界から神力はなくなるのだろうか。

ファルマは薬谷と対話し、二つの世界で起こった出来事の情報交換する。

ファルマもまた、スマホに記録しておいたメモや写真、データをBluetoothで薬谷に飛ばした。

「この世界において墓守と呼ばれている存在は、この世界の管理者、あるいは上位次元の存在なのでしょうか」

「上位存在であることは間違いありませんが、その正体を暴き出すことは難しいのです。それに、墓守の正体を探ることには意味がありません。私たちにできることは、鎡の歯車の破壊と墓守の制御、二つの世界の安全保障にとどまります。口頭では言いませんが、その方法は後ほど確認してください」

「わかりました」

「そのほかに質問はありますか」

上位存在に対してそれを可能とする方法が存在するのだろうか。  
そんな疑問を抱きながら、ファルマは残り時間でどうしても伝え  
ておくべきことを思い出す。

「質問というよりはファルマさん。あなたの作ったSOMAという  
治療ユニットに対して、重大な懸念を抱いています。遺伝子変異を  
悉く正常化させるSOMAを世界的に普及してゆくことは、遺伝的  
多様性を放棄し、人類進化を止めてしまうことにほかなりません。  
そればかりか、遺伝情報の修正はレジリエンスを乏しくさせ、特定  
の環境下においては人類絶滅の危機すらありえます」

「ええ、あなたの仰る通りです」

薬谷 完治は「言わずと知れたこと」とばかり、ファルマの指摘  
を意にも介していないようだった。

「想定範囲内だったんですね。何のために敢えてそんなことを」  
「あなたはすっかり異世界側の思考になってしまっていますが、地  
球における進化の目的は環境への適合です。それでは地球人が鋳の  
歯車の出現という環境の激変に対し、いかに適応しようとしたと考  
えますか？」

鋳の歯車の出現を認識していたとして、異世界からの侵略に備え、  
先制攻撃や、異世界人に対する情報収集を行っていただろうか。

そんな見通しを伝えると、薬谷は軽く失望したような顔をした。

「人類が異世界の出現に対して求めたのは、生存圏の拡張です。異  
世界の住民と戦争を何とかしないとか、そういう問題は後回しで  
す。地球外生命体が存在し、地球に狙いを定めて空間干渉まで行っ  
てきた。しかも異世界の住民たちは神術という未知の能力を手にし

ている」

地球人の視点で見るとそうなる。

「地球上が異世界との決戦の場になるかもしれないが、それ以前に鎧の歯車という空間の綻びから、地球が崩壊するかもしれない。できるだけ安全な場所に避難したい、そうは考えませんか？」

「たしかに……」

「地球世界の、事態を知りえたごく一部の人々は、もはや地球は安全ではないと考えました。出アフリカならぬ、出地球が始まったのです」

ネットから拾える世界情勢に表面上の変化はなかったが、それは大多数の人々の混乱を防ぐために情報を制限しているためだという。

「悠長なことを言っている場合ではありませんでした。現生人類は大きく、四つの方向に進もうとしています。」

一、人体を機械化しあらゆる環境に適応しようとする人々。

一、遺伝子工学によって人体を強化する人々。

一、記憶をデータとして仮想空間内に移植し、深宇宙へと脱出して永遠を生きようとする人々。

一、何もせず、地球で滅びを受け入れる人々です」

西暦2048年。

鎧の歯車の出現は既に十年以上前から観測されていた。

研究機関、政府機関、財界の人々の間に密かに知れ渡ることによって、地球の破滅から逃れるための避難先が求められた。

かくして地球からの脱出は大きな需要を持つに至る。

ビッグテックを上回る巨大資本を背景とした、巨大民間宇宙会社による火星への移住計画は急ピッチで展開していた。

しかし人類が地球外惑星、とりわけ火星へ移住するには宇宙環境はあまりに過酷で、持続可能で安定的な生活環境を手に入れるまでには多くの課題をクリアしなければならない。

例えば火星の大気はほぼ真空に近く、弱い磁気圏を持つ。

それらは宇宙から降り注ぐ高エネルギーの放射線や、太陽フレアの発する太陽風を防ぐのには不十分だ。

人体が放射線に晒されると遺伝子の損傷を引き起こし、その損傷によって細胞死や急速な老化へと至らしめる。

ホモ・サピエンスとしての人体は地球の外に出るにはあまりに脆弱で、惑星外に居住するには適さない。

遅々として進まない計画にしぶれを切らし、人体に適する環境を求めて惑星を改造するより、人体を機械化させたほうが早いと気づいた人々は、老齢に達し死を待つみの超富裕層、知識階層、専門職、何らかの身体障害や深刻な疾患を持つ人々から順に全身サイボーグ化を実現させ始めた。

機械化の流れは大々的に広報されることはなかったが、少しずつ、そのうねりは大きなものとなりつつあった。

人類の機械化は、病、老、死を過去のものにしようとしている。

こうして地球上には、機械化して火星に行けるだけの経済力がなく、変化を受け入れられない社会的弱者を中心とする人類のグループが残されてゆく。

機械化による身体強化や、脳の改造による情報処理能力の向上を行わない場合、進学、就労、生涯賃金、婚姻においても大きな不利益を被る見通しがたてられた。

このままでは、有機体としての人類は緩やかに絶滅の道をたどる。

「だからこそ私は、最悪のカードを切つても、SOMAによって有機体としての人類をこの世界に残したかったのです。それは、薬学者として最後の仕事でもあるように思えました」

薬谷は積年の懊悩を吐露するかのように告白した。

（そうか…… 見えないところで、機械化人類と有機生命体としての人類の生存競争に入ろうとしていたのか。そして、ホモ・サピエンスが老化や疾患などの弱点を抱える限り、人類進化の方向性として有機体を選ぶアドバンテージが全くなくなる）

「前言を撤回します。あなたの選択は、間違っていないかったような気がします」

ファルマは薬谷をいたわるように声をかける。

地球に残る人々も身体強化を受け入れないまま短い生を終えるか、SOMAの投与を受けるかの選択を迫られるのだが。

彼はSOMAによつて、人類に中長期の生存権を与えたのだ。その決断を下すまでに、どれだけの葛藤があっただろう。

安易に彼の行動を非難してしまったファルマは、正当な理由があったと気づき気がとがめた。

「ありがとう。ちなみに、SOMAにはいつでも遺伝子修復ユニットを切り離せるようにセーフガードが組み込まれていますよ」  
「そうだったんですね……」

つまり、SOMAが遺伝子に組み込まれてしまっているても、必要があれば元に戻る。

そこまで周到な準備を施して、SOMAは設計されていた。

「そろそろ時間です。また会えるかどうかはわかりませんが」

薬谷 完治は腕時計を見て時間切れと面会の終わりを悟る。

もう時間切れだ。まだ話したい、情報交換がしたい。

何より、彼が見てきたものや道のり、彼のこれまでの歩みを知りたい。

そんな思いは無残にも打ち碎かれる。

「最後にお尋ねしたいことがあります」

薬谷 完治はファルマに重大な判断を委ねようとしている。

「あなたは鎧の歯車が消えた後、どちらの世界で生きることを選びますか？」

一つの世界に二人が存在することはできないので、どちらがどちらを選ぶかという話をしているのだろう。

ファルマは困惑する。

もし、二つの世界の何れかを選ぶとして、彼はサン・フルーヴに帰りたいのではないのか。

「私の答えは、あなたの選択に影響しますか」

「ええ。私の答えは決まっていますが、あなたの希望を先に伺います」

ファルマは少し悩んで、答えを伝えた。

希望が一致しなかった場合はどうなるのだろう、そう考えていたが……二人の意向は同じ方向を向いていた。

「では、お互いに希望通りの選択ができそうですね」

どこかほっとしたような薬谷 完治の声が突然途切れると、ファルマは異界の研究室からはじき出されて聖泉に浮かんでいた。

時間切れになったのだ。

異界の研究室に入らなかったため、神力量には変化はない。

（果たして、本当にそれでよかったのだろうか）

そんな自問自答を重ねながら、ファルマはいつまでも鈍色の霧を眺めていた。

その日。

鮮やかな金髪に、青空色の瞳を持つ一人の青年が、サン・フルーヴ帝都の鐘楼の頂上に腰をかけて、活気あふれる街並みを静かに見下ろしていた。

往来の人々からの目につかないこの場所は、この世界で誰にも探されず、誰にも襲われず、一人になりたいときの彼の居場所なのは、4年前から変わらない。

輻射熱をはらんだ風に吹き煽られながら、鉱石ラジオで公共音楽放送を聞き流し、クラシックの音楽をかすかに口ずさむ。

ラジオが奏でる豊かなハーモニーに重なって、彼には世界の崩れゆく音が聞こえていた。

「そろそろか」

1152年5月9日、午前12時を告げる楼の鐘が大きく打ち鳴らされる。

「その日」は確かに近づいてきていた。

17歳の青年、ファルマ・ド・メーシスはラジオを止め、立ち上がる。

鐘楼の端を静かに蹴りその体を大気の中へと投げ出すと、彼の姿

は誰にも見えなくなつた。

< i 5 9 4 5 6 2 — 2 4 9 6 >



8章14話 対談（後書き）

8章本編終了です。

## 閑話 日常ごっこ

1152年5月18日。

午後八時を回った頃、17歳のファルマ・ド・メデイスと16歳のシャルロット・ソレルは宮殿のほぼ真向かいにあるアパルトマンの3階のベランダで落ち合った。

ファルマはバルコニーの鍵のかかっていない窓を三度ノックして、ロツテが嬉しそうに迎え入れる。

「わあ、ファルマ様。いらっしやいませこんばんは、お待ちしておりましたよ」

「こんばんは。少し遅くなってごめん」

「全然遅れてないです！ ちょうどお夕飯を作ったところで。もしまだでしたら召し上がってください」

「ありがとう、じゃあごちそうになろうかな。これ、お土産」

ファルマは買ってきたお菓子を渡す。

ここはファルマにとって殆どセカンドハウスと化しつつある、ロツテの家だ。

ロツテは彼女が16歳の誕生日を迎え成人となったのを契機に宮廷画家として独立した。

画家としての仕事量も増えてきて、夜遅くまで制作に取り組むために帰りが遅くなったり、ド・メデイス家での使用人としての奉公ができなくなっていることを気にして、彼女は母親と相談し、ブリュノに暇を乞った。

ブランシュはロツテと離れたくないと泣いたが、ブリュノは快く彼女を送り出し、幼少時から功劳に報いて退職金も弾んだ。ロツテはブリュノの不器用な思いやりを嬉しく思ったようだ。

ファルマはブランシュと同様、ロッテの独立を喜びながらも少しは寂しく感じたが、いつまでもド・メディシス家の使用人の立場ではないほうが彼女の将来のためにもよいだろうと慮る。

彼女は使用人の身分を外れたので、一般平民となった。

ロッテの異世界薬局での勤務は決まった曜日で、あとは宮廷画家としてアトリエを往復する毎日だ。防犯のこともあり、毎日の通勤にも便利だということで、宮殿にほど近いアパルトマンを借りている。宮殿の衛兵の警備範囲の目と鼻の先にロッテの家があるので、宮殿の警備ついでにロッテも警備をしてもらっている感覚だ。

おかげで、通勤時には一度も危ない目に遭ったことがないという。最高の物件を確保した彼女だが、物件探しには少し苦労した。

帝都には新築物件はほぼなく、歴史的価値を重んじる帝国民の国民性からか、築数百年の歴史ある建物が立ち並び、世界中から帝都を目指して集まる人々の需要によって慢性的な賃貸物件不足に陥っていた。

それに、女性の一人暮らしなので、一応の防犯もかねてフロアごと借りたい。

色々と苛烈な住宅事情の中、該当物件ゼロで窮していたところ、偶々親しい宮廷画家が一等地のアパルトマンからフロアごと引越したので、大家に話を通してロッテに快く譲ってくれることになった。

フロアまるごとリノベーションした結果、漆喰の白い壁に、ロッテの髪色にそろえたサーモンピンクの壁紙の対比が目には鮮やかだ。壁には、ロッテの作品であるウォールアートや、デザインを手がけたステンドグラスが並ぶ。そろそろ小さな美術館ができそうだな、とファルマはいつも思う。

使用人としての生活では叶わなかった念願の一人暮らしで、彼女なりに手に入れた自由を謳歌しているようにも見えた。

ロッテは独立したが、ロッテの母カトリーヌは引き続き上級使用人としてド・メディシス家に残ったので、ロッテも月2回ぐらいの

頻度で母を訪ねてド・メデイシス家に里帰りなどをして、そう会う機会も減らなかった。

住処が離れたので少し疎遠になるかと思いきや「おやつを作りました！ 食べきれないので一緒にませんか」などという口実でこまごまと家に招かれて、ファルマはなんだかんだロッテの新居によく通っている。

ファルマが宮殿に出勤した後は、ロッテの家へと足を延ばすのは習慣となりつつあった。

ファルマとロッテは同居家族から同年代の親友へと環境が変わり、同居していたときよりも少し距離を置くことで良好な関係を保っていた。

ファルマがロッテの家に通うときは、いつも飛翔を使ってバルコニーから入る。

というのは、ファルマは帝都ではさらに有名人になったので、外を出歩いていると何かと人に囲まれるからだ。

たいていは単なるファンや健康相談を持ち掛けてくる人々だが、ファルマが莫大な富を持っていることは周知の事実なので、彼を誘拐して身代金を要求したり、単純に金の無心をしようとする者もたまにいます。

これらのならず者を退けるためにぞろぞろと護衛を引き連れて歩くのも億劫で、最近、移動はもっぱら神力を消費せず、跳躍に近い飛翔に頼っていた。

うまく闇に紛れれば、そうそう人に目撃されることはない。

数年前は少し人気のない路地を歩くと神官に襲撃されるのが悩みの種であったものだが、いちいち神脈を封鎖して追放しているうちに、噂が広まったか、自然と狙われなくなった。

夜分に年頃の女の子の家に、（外見は）年頃の男が通っているの

だろうかとは思いながら、何もやましいことがないのだしと考え直してロツテの家にお邪魔する。

ロツテのことは「神籍に入ったから」といつて四年前にはつきりと振っているの、お互いに困るような関係にはならない。

しかし、心はすれ違つてはいても、何となくお互いがお互いの存在を心地よく思っている。

今日の彼女は薄い空色のドレスに、新しく買ったらしいフリルのついたエプロンをつけている。

彼女は以前の天真爛漫なあどけなさを残したまま、少し大人びた表情も時折見せる。

使用人服ではない彼女の毎日の私服を見るのは、ファルマは新鮮みを感じた。

彼女の今後の幸せを願いながら、ロツテの手料理の盛り付けや配膳を手伝う。

「今日はカラフル野菜のテリーヌとビシソワーズ、トマトのファルシーなんですよー」

「二時間前に帰つてもうそんなにできたの!？」

今にも歌いだしそうな弾んだ声でロツテが答える。

「えへへ、手際がいいと言っていただかないと！ ファルマ様をお誘いしたので、がんばっちゃいました」

「手際もいいし要領もいいし、さすがだよ」

二人分つて五人分のことなんだっけ、とファルマが思っているうちに、鮮やかでセンスのよい、目にも楽しい料理がこれでもかと食卓に並ぶ。

「ロツテは本当に料理がうまいよね。ごめんね、いつも食べるだけで」

「えへへ、キッチンが素敵なので、ついつい料理にも凝ってしまつて！ あ、でもいつもお皿洗ってくださるの、気にしなくていいんですよ。恐れ多くも帝都の人々の信仰を集める薬神様を家に呼び出してそんなことをさせているなんてバレたら、明日にでも家に火をつけられてしまいます。なんなら火炎瓶とか飛んできますよ」

「いやそんなおおげさな……いやあつたな、そういうこと」

ロツテはこうして子犬のようになっては、ファルマの立場を思い出して時折恐縮してしまうようだ。

それでもファルマと親しくしたい、時間を共有したいという気持ちは変わらないらしく、「好き」と「でもだめ」、の気持ちがバランスをとれず闘ぎあっているようでもあった。

ロツテがしゅんとなっているので、ファルマは、

「じゃあ今度、お返しに薬局でカーリをふるまうから。ロツテだけじゃない、みんなにだよ」

「わ、それでしたら楽しみです！」

ロツテも成人し、年頃なので縁談なども舞い込んでくる。

平民でありながら宮廷画家という申し分ないステータス、使用人出身で行儀が行き届いており、教養もあり見目麗しいとあれば、実業家や豪商を中心に結婚したいという若者は後をたたない。

ロツテはのらりくらりと「いい人がいたら！」と言って求婚をかわしている。

だから、彼らとの出会いの邪魔にならないようにあまりロツテと距離を詰めないほうがいいのかもしれないな、とファルマは考えていた。

それでも、気が付けば彼女に会いたいと思ってしまう。

ファルマは自分でも、どういう心境なのかよくわからない。

食事を終えると、ロツテとファルマはラジオを聴きながら二人で並んで夜景を眺める。

大通りに面した大きな窓からは、壮麗な夜の宮殿の中庭が見え、衛兵たちが頻繁に巡回している。

二人の職場だ。

「この時間にファルマ様とまったりしているの、夢みたいで」

「最近は休日には働かないようにしているから、時間的な余裕も増えたよ」

このところのファルマは多忙をやめてスケジュールをあけ、自分の人生を振り返る時間としてあてている。

そうでなければ、何より自分自身が後悔するような気がしたからだ。

「帝都にも大陸どこにいつてもすっかり悪霊が出なくなつて、夜の眺めもいいなと思うようになりました。いつまでもこんな日々が続けばいいのと思います」

「そうだね。もう悪霊は出ないといいんだけど」

この安寧がずっと続いてくれるだろうか。

果たして自分が去つたあとともそれは続くだろうか。

彼女たちの未来のために、それだけが心配だ。

人々は死に続けるし、この世界の人々の無念や悪意だけがこの地に募る。

墓守が記録し続けるこの世界の情報は、ただ時間の経過とともに増えてゆく。

いつまで降り積もったら、思いは消えるのだろう。

少し声のトーンが低くなったからか、ロツテが元気づけるように明るい声を出す。

いつもそうだ、彼女は太陽のようで、闇を抱えたファルマの心に光をくれる。

どちらが守護神なんだろうな、と思ったことも一度や二度ではない。

神官のように何もかもは知らなくて、かといって何も知らないわけではない。

ロツテと共に過ごす時間は、ファルマの救いとなっていた。そうなのかもしれない。

「ファルマ様が大陸を守っておられるからですね」

違う、そうじゃない。

自分は何も守れていない、誰一人。自分すらも。ファルマは心の中で否定する。

それでも、弱みは見せられない。

「最近悪霊が出ないからそんなに介入していないよ。主には神官やマイラ族のおかげだよ。悪霊が出ないだけで穏やかな気持ちになれるのかもね」

「夜になったら慌てて寝なきゃと思っていたんですが、最近はその恐怖もなくなりました。夜が好きになりました。創作意欲がわいてくるので」

ロツテは静かな夜間にデザイン案をまとめることが多いという。

ロツテの作品群は今、青系の落ち着いた配色を多用する「青の時代」を迎えていた。



芸術家としての成長を喜びながら、ファルマは体調を気遣う。

「夜更かしはしないようにね」

「もちろんです、夜１０時には寝ていますよ！」

なんならド・メデイシス家にいたときより健康的だった。

そうだったな、彼女は自身を毀損しない。と、ファルマは苦笑する。

ファルマはそういえばと思い出して、恥ずかしさを隠しながら口ツテを誘ってみる。

「あのね、映画のチケットがあるんだけど、二枚だけとれたんだ。明後日の夕方、何か予定ある？」

「ないです！」

「それはよかった。よかったら映画でもどうかな」

「何で映画のチケットがあるんですか？ 映画館のチケットなんて人気で倍率高いんですよ？」

ロツテは何故チケットをとれたのかといって驚いている。

今年の春から販売されはじめた映画館のチケットは枚数制限があり抽選制で、さらに一日の上映回数は二回と少ないため、どんなに手に入れたいと思ってもかなわない者が多かった。

それを二枚も手に入れているというのは、ロツテにとっては驚愕なのだろう。

「帝都初の映画館の筆頭出資者だからね。映画館に定期的に顔を出さないといけないんだよ」

「つ、強い……ファルマ様って薬局の経営者で大学教授で宮廷薬師でおまけに守護神様で、それだけでも設定多すぎるのにさらに映画館のオーナーなんですか？」

「はは……まあそう」

ファルマは買い求めるまでもなく毎月のようにチケットを送られてくるが、それは映画館の様子を見に来いという、映画館長からのプレッシャーだ。

映画監督からはファルマ自身を題材に映画を撮りたいとオファーを受けていたが、ことごとく断っていた。

（黒死病パンデミックものを撮りたいんだろうな……）

盛り上がるだろうし、なんとなく本人にオファーしたい気持ちはわかるが。

ただの薬師に演技力を期待しないでほしいし、映画スターになっている場合でもない。

映像で講義録を残してもらえればそれで満足だ。

「パティシエの立身出世ものなんだけど」

「何ですかそれめっちゃ面白そうです。借金だらけで首が回らなくなり、食うや食わずの若者が道で行き倒れていたところ、ふとそばを通りかかった優しい女王様に拾われ、小間使いから菓子作りの腕を認められて世間を席巻していくとな面白いです、もしかしてそういうお話です？」

やたら詳しいあたり、ロットは原作を読んでいるに違いなかった。

「まさにそう」

ロットは映画館に連れて行ってもらえると知って満面の笑みを浮かべていたが、はっと何かに気付いて肩をすくめる。

「やっぱり“幸せの宝箱”だったんですね。でもいいんですか？  
そんな貴重なチケットなのにブランシュ様やエレオノール様をお先に誘わなくて」

「一回の上映でもらえるチケットが二枚ずつだから、彼女らとは別の映画に行くよ。この内容、あの二人に興味あると思う？」

「あー、ちよつとお好みが違う感じですね。わかります、微妙なラインでご趣味と違います。それならば私めが喜んでお供します！」

エレンは恋愛ものが好きだし、ブランシュは喜劇が好きだ。  
それは普段、彼女らが読む小説本などを見ているとわかる。  
一応、二人には気を回すロッテだった。

地球での世界初の映画作品は、「リュミエール工場の出口」という、一分にも満たない記録映像、無声映画だったようだ。

しかしファルマはせっかく足を運ぶのなら秒で終わる作品よりそれなりに長いものを見たいと思って、技術局にいきなりサウンドシネマの技術を登録していた。

このため、帝都は新技術の発表にわきたち、映画スタジオが新しくでき、映画作品の制作が始まった。その熱気を、ファルマは好ましく思いながらも少し遠巻きに見ていた。

巨大エンタメ産業が生まれる瞬間を目撃しつつあった。

翌々日の夜、ファルマは約束通り帝都初の映画館にロッテと訪れていた。

新築の映画館は城を模した絢爛豪華な内装で、席数が少ないということもあって、庶民の娯楽というにはまだ敷居が高い。

彼は特等席のチケットを持っていたので、2階に設けられた専用ブースに案内される。

ロッテが原作を読み込んでいた例の映画はいわゆるトーキーと呼ばれる発声映画で、およそ30分間の上映を楽しんだ。

ロツテが感動で涙を拭きながら、感想を述べる。

そんな泣くところあったかな、とファルマは思うが、多感なロツテには満足のいく内容だったのだろう。

やはり感受性豊かなロツテと一緒にきて正解だったとファルマは思う。

それでまた、インスピレーションを得て創作に取り組んでくれたらしい。

「演劇と違ってスクリーンの画面が大きいから俳優の動きや表情がよく見えますし、音声や音楽もついていると盛り上がりますね。ストーリーも見ごたえ十分でした。シナリオは原作沿いで作っていましたよ。なんだか新しい娯楽って感じがします！ それにしても写真機からまさか数年で発声映画（cinéma sonore）にまで発展するとは思いませんでした。ばやばやしていると技術の進歩から取り残されてしまいます」

「そ、そうだね……」

（ちよつと時代を先取りしすぎたかな……）

ロツテがやたら感心しているので、ファルマは罪悪感も手伝って視線をそらす。

「消火器と書いた設備がたくさんあるのは？」

「火災が起こりやすいから」

「怖いこといわないでくださいよう」

先月の試写会でも、フィルムが摩擦熱で炎上してしまったという。幸い、ばやで食い止められたようだが、火気厳禁だ。

技術的な課題はまだ多く残っているが、少しずつ改良を加えて娯楽の一つになればいい。

「夜の映画館、素敵です。また連れてきてくださいね」

「そうだね、またロッテの好きそうなチケットが手に入ったら」

その約束は果たせるのだろうか。

その確率は7割ほどだ。

世界情勢は表面上、安定していた。

四年前の闇日食では有事に備えて神聖国に常駐していた神官らを周辺国に避難させ、周辺一帯の呪器をメレナーたちのいた大陸に移動させて無効化し、マイラ族の精鋭たちがやってきて神聖国周辺に悪霊が存在しない状態にした。

平民技師は神聖国に聖帝エリザベスの培養細胞を用意し、その時に備えた。

闇日食を迎えたのは1148年8月26日、鎡の齒車の聖呪印はエメリツヒやファルマたちの目論見通りに培養細胞シートから新たな培養細胞シートへと転写され、形式的には宿主を乗り換えたかたちとなった。

聖帝エリザベスは大神官の地位にありながら、聖呪印から永久に解放されることになった。

彼女自身の不安や、一人残される息子のルイのことを考えると、ファルマも彼女の解放には安堵したものだ。

エリザベス自身は大神官固有の神術を失ったが、それでも大神官の地位は守られた。

聖呪印の代替わりの方法が定められていなかったからだ。誰も犠牲にならず、闇日食を乗り越えたか……に見えた。

が、さすがにそれだけでは済まなかった。

闇日食から一週間後、ファルマらが神官らとともに神聖国まで鎡

の歯車の様子を確認に行くと、層状構造を持つドーム状の構造物が地表に露出していた。

ドップラーエコーなどの装置がない以上内部構造を推定することは難しいが、あれから四年、定点観測の結果、少しずつその構造物が肥大化しているということが明らかになった。

あたかも、生贄を求めて地表へさ迷い出たかのように。

次の闇日食までは三か月と少し。

地球側にいるファルマ・ド・メディススの本体、薬谷 完治とは、異界の研究室を通して何回か連絡を取っている。

二人で練った計画も大詰めを迎えていたが、回を重ねるごとに、ファルマが聖泉をくぐっても研究室の前に接続されないことが相次いだ。

薬谷の解析では、鋳の歯車がファルマの住む異世界側に偏在していることで、時空が不安定化しているためだという。

薬谷はあと一歩で、鋳の歯車の地球側への寄生を解くことができそうとのこと。

寄生が解けたら、あとは計画通りに進めるだけだ。

それまでは、指折り数えながら仮初の日常を積み重ねてゆく。

（明けない夜はないけれど、夜が明けるとまた少し近づく）

ファルマはロッテを送った帰り、

夜空を仰ぎ、冷たく輝く満月を覆い隠すように手を伸ばす。

それがどちらの結果であれ、早く楽になりたい。

そう思った。

## 9章1話 異世界とダイバーシティ

<i597991—2496>

1152年5月30日。

その日、ファルマはバスケットいっばいにおやつを持ってド・メデイス家の所有する裏庭の河の中州へ足を運んでいた。

ロッテとは物理的に距離ができたが、エレンはブランシュの家庭教師で頻繁に屋敷に来てくれるので、職場でも自宅でも顔を合わせていると、半ば家族のような感覚になる。

中州ではエレンがブランシュの個人トレーニングを行っていた。

真剣に取り組む彼女らを邪魔しないように、ファルマは区切りのよさそうな頃合いになるまで河のほとりのベンチで論文の添削で時間をつぶしてから声をかける。

「エレン、ブランシュ、そろそろ休憩どう？ おやつ持ってきたよ」

「あら、ファルマ君も見に来たの。そうね、もうちょっとしたら休憩してもいいわ！」

ファルマが二人を休憩に誘うと、エレンは額にさわやかな汗を浮かべて笑顔を向けた。

豊かな長い銀髪がふわりと揺れる、それは彼女のトレードマークでもあった。

ブランシュはバテてしまって、クローバーの原っぱの上に座り込んでいる。

「兄上ー、いいところに！」

11歳となったブランシュは、助け舟がきたかのような顔をしていた。

彼女もすくすくと身長が伸びて、成長期らしく手足がすらっと見える。

さすがに幼児語は卒業して、頭身が高くなり、甘えた性格も少しずつ変化してすっかりとしてきた。

彼女はパツレのかつらを作るためにばつさりと髪を切った以来ショートボブを気に入って、伸びたら切って、頭髪の少ない病気の子供たちにヘアドネーションするというスタイルを続けている。

ブランシュの手入れの行き届いた髪は、子供たちにも喜ばれた。

「今日は何やってたの？」

「今日は主に体幹とバランスの強化をしていたわ。ブランシュちゃんはまだ足腰が弱いから、しっかり体を作らないと」

「明日は筋肉痛間違いないしの」

「ええ？ そんなに厳しくしてないでしょ」

ブランシュは体力がないからということ、エレンの指導でフィジカルトレーニングを積み重ねている。神術のない世界でも対応してゆけるように、エレンは彼女の神術以外の個性を伸ばそうとしていた。もちろん、薬師としての修行も別に行っている。

エレンは二十三歳になって、以前にも増して筋肉をつけて体を絞っていた。

日ごろのトレーニングが功を奏してか、二人とも全身が引き締まったように見える。ブランシュは風呂あがりに鏡を見るのが日課だ。そして「今日も仕上がってきたわ」と独り言を言っているのを聞いたりもした。

「二人ともその新しいウェア、似合ってるね」



ファルマが何気なく話題を振る。  
彼女らは体にフィットする見慣れない服を着ていた。

「いいでしょ。私がデザインした高機能ウェアを仕立ててもらったの。せつかくだからブランシユちゃんの分も作ってたわ」

「これ動きやすいよ。兄上も着たら？　引き締め効果すごいの」

ブランシユにもおすすめされる。

体の各部位に圧力をかけることで、筋肉をサポートするコンプレッションウェアというものだ。

何故この世界にこういったものがあるのだろう、とファルマは訝る。

「ファルマ君もこういうのほしい？　筋トレにいいわよ。関節も痛めにくいの」

「筋トレしても筋肉がつかないからなあ……でも体を動かすときにはいいね」

ほどよい筋肉をつけて体を引き締めることには憧れるが、半実体のこの体には物理負荷をかけることができない。

痩せないし太らないし、筋肉もつかない。

殆どの物理攻撃を無効化する代わりに、そういった不便がある。

エレンはクールダウンにブランシユのストレッチを手伝っている。

ブランシユが開脚しているところをエレンに背中から押されて、

悲鳴を上げていた。

「そのうちブランシユちゃんのほうがムキムキになるかも」

「それは頼もしいなあ」

「師匠、それ以上押さないでもらっていい」

ブランシュの声が裏返っているが、エレンは全く悪気はなさそう  
だ。

「えっ、全然そんな押してないわよ。押すって言ったところ」

「そんなー股が割れるー！」

「股はもともと割れているでしょ」

何とかクールダウンも終わって、三人はガゼボの下のベンチでバ  
スケットの中のおやつを広げた。

以前はロッテがおやつ係だったのだが、それは特に決められた仕  
事でもなかったので、ロッテがいなくなってからというもの、時々  
ファルマが様子見がてら差し入れを届けている。

ブランシュは股の内側を押さえて涙目になっている。

「エレン、さっきの柔軟体操だけど、あれ以上開脚する必要はない  
かも。特に人間の股関節は90度しか開かないようになってる。1  
80度開脚は目指さなくていいよ」

ブランシュの肩を持つわけではないのだが、ファルマはブランシ  
ュの股関節を心配して注意を促しておく。

「あら、柔軟性を高めるのは必要ではなくて？」

「体が柔軟だと健康によさそうってイメージだけでトレーニングに  
組み込んでない？」

一見、健康によさそうだという印象で漫然と続けられているルー  
チンはある。

「そついわれると、昔からそう言われているからという以外に根拠  
がないわね」

「子供のころから過度に柔軟運動をしていると靱帯をいためたりするし、老後に筋肉量が落ちたら関節が不安定になったりするよ」

「それは問題ね。じゃあ、ほどほどにしましょう」

「うん、痛いと感じるまではやらなくていいと思う。エレン自身も気を付けた方がいいかもね」

ブランシュは「助かった」という顔をしながらすました顔でジュースを飲んでいた。

やや気まづくなってしまったので、ファルマは話を変える。

「そういえばエレンって、いつも先進的な服を着ているよね。そのトレーニングウェアにしても」

「そう見えるかしら。ファルマ君には初めて言われたわね」

「昔から、どこにも売ってなさそうな斬新な服ばかり着てるから」

「ああ、十代のころは露出も激しかったでしょう」

「うーん……そういえば」

この世界の女性たちはみな長いスカートを穿いて似たような格好をしているのに、エレンだけが以前は大胆なスリットや、胸の大きくあいた服を着ていたので、何ならオーパーツかと思うほど、周囲の人々との間に時代的なデザインの差があった。

ファルマは目のやり場に困っていた彼女の十代の頃を思い出して気恥ずかしくなる。

彼女の最近の普段着はパンツスタイルでスポーティーな装いをしており、露出も控えめになっている。

「最近、悪霊があまり出なくなったから戦闘の必要がなくなったのよ」

エレンは困ったような笑いを浮かべる。

その表情に少し複雑なものを感じたファルマは、理由を聞きたくなかった。

「悪霊がでなくなるのと服は関係あるの？」

「私は暑がりだね。多汗症ほどではないにしろ、すぐ汗をかいちゃうから薄着が好き。戦闘中は特に、感覚が鈍るから服を少しでも軽くしたいの。水属性神術で服が重くなるのも好きじゃない。コルセツトはつけずに、スカートは短いものか、動きやすいようスリットの入ったものがまし。でも男装はブカブカして私の体にフィットしないから着ないの」

（あ、あの格好はファッションじゃなくて戦闘服だったんだ）

意外と実用性を求めているという回答に、ファルマは地雷を踏みぬかなくてよかったと冷や汗をかく。

そして、彼女の悩みや葛藤を、お気楽にも何も分かっていなかったのだなと思い知る。

「でも、露出の高い格好をしていると、誘惑していると思う人がいるんだよね。年頃の女の子がはしたない、犯罪に巻き込まれるとか。私は誰かに見られるために服を選んでるんじゃないし、フォーマルな場ではちゃんとしてるでしょ。私服にまで制限をかけられる謂れはないんだけど、とやかくは言われたわね」

「結構大変なんだね……」

エレンはファルマを眺めて、ひとつため息をついた。

「ファルマ君は外見を常に人にとやかく言われることってある？」  
「ないかな……？」

寝ぐせがついていたら指摘されるぐらいか。  
髭は何故か生えてこないが。身だしなみには自分で気を付けている。

「女性にとつてね、身なりをちゃんとしたとしても人の視線に晒されて口だしされるのは日常なの」

「そーなのよ」

ブランシュも横で頷いていた。

「ブランシュもそんなに、言われることある？」

「しょっちゅうだよ、ああだこうだ言われるのは。太ったの痩せたの、髪が長い短い、日焼けするなどの、顔立ちがどうこう。胸がふくらんできたとか……」

「……そうなの？」

ファルマは絶句する。

元気いっぱい、わがままいっぱいに見えていた彼女も、そんな言葉に晒されてきたなんて。

「兄上、大人の女の人になるって嫌なことだね」

窮屈な思いをしていた女性が、こんなに身近にもいた。

(……自分の体が成長してゆくことを、恥ずかしく辛いことだと思つてほしくない……)

容姿を褒めたとしてもハラスメントになるというのは、現代地球の義務教育の中で叩き込まれていたので、ファルマは容姿に言及することは避けているが、そんなにも人から容姿ばかり評価される人

生は屈辱だろうと想像する。

この世界では神術というものがあるがために、貴族と平民の間の格差はあるが、男女の間に力の差がない。

だから、地上最強の神術使いが女帝でありうるし、威風堂々と頂点に君臨する女帝の姿は、この世界の持たざる女性をどれだけエンパワメントしてきたかしかない。

それでも女性は男に従順であるべき、という暗黙の了解がある。それは神術を使えず腕力がものをいう平民の間ではなおさらだった。

多様性に配慮された社会までには程遠く、この世界ではまだ問題提起すらされていない。

神術がなくなつて立場がフラットになる世界では特に、ダイバーシティへの配慮は必要だ。

「そつか。俺には見えてない世界だな。身だしなみ以上に容姿に気を遣わないといけないとしたら、ストレスだろうね」

「そうよ。ファルマ君の容姿は30点かな、とか知らない人から言われたらいやでしょう」

「たしかに。え、30点ってホント？ 何点中の？」

「たとえばよ」

「もやもやするね……言われたことないや」

「一体どの立場から言ってるの、じゃあ自分は評価されてもいいのってなるでしょ」

「わかる」

彼女の心情が、少しわかった気がした。

あの個性的な服は、彼女にとっては心やアイデンティティを守るための鎧だったのかもしれない。

「ファルマ君はね、少し変わっているのよ。とてもフラットで、人

を評価したり見下したりしない。だから一緒にいて嫌な思いをすることが少ないし、心地がいいわ」

彼女がそれを打ち明けてくれたのは、ファルマが彼女を尊敬しているからだろうか。

彼女にとつて対等で無害な存在であつたから、彼女の葛藤や不満、困りごとを話してもらえたのだ。

しかし「嫌な思いをすることが少ない」と言われたことに対しては、重く受け止めなければならない。

「今は戦闘が減ってきたから、エレンは服装を変えたんだね」

「そう。ただそれだけなの」

そういう話を、初めて聞いた。

彼女の考えをもっと早くに知っていればと思った。

「きちんと自分の考えを持って、新しいことを進めてゆくエレンを尊敬するよ」

「私は誰にでも優しいファルマ君を尊敬するけど。私もなかなかそうはなれないから」

「そんな風に見てくれてたんだ」

「老若男女、強者も弱者も誰でも優しくするでしょ。利害のある人にだけ手を差し伸べるなんて人、腐るほどみてきたわ。でもあなたは利害なんて関係なく人助けが好きで。打算的なものを感じたことがない」

皆各々に困りごとを抱えて生きているが、誰もが他者の痛みに鈍感だ。

地球でも異世界でも、少しずつ声があげられ始めて、価値観はアップデートされてゆく。

すべての人々の人権が守られはじめて、少しずつ意識は変わってゆく。

「誰もが枠にはめられずに、自由に生きることができたらいいね」  
「そうね」

エレンは爽やかな表情でフルーツをかじる。  
ブランシュも、こわばっていた表情がときほぐれていた。

「ファルマ君、また何か考えてる？」

「うん、アイデアがわいてきた。汗をかいてもさらっと涼しく着れる、肌に優しい下着やスポーツウェアを作ってみようよ。新しいブランドを立ち上げない？」  
「えっ、賛成。やりたい」

この世界には、スポーツウェアというものがない。

特に女性はスカートの代わりになるものがなく、体を動かす場合は男装でトレーニングをしている。そしてまた、それを「男のような恰好をして」と非難する者がいる。

エレンが着ているようなエレガントで機能性のあるウェアが普及すれば、女性たちの健康増進にも繋がるかもしれない。スポーツウェアだけでなく、作業着や、医療用、介護用の服などもあれば助かる人々も増えるだろう。

「一緒にやろうよ。老若男女誰が着ても快適に過ごせるものを」  
「なんか服を作るって、薬師の仕事を超えてない？」

ブランシュはそう言うが、エレンは乗り気だ。  
ファルマにはもう幾何と時間がないが、その道筋をつけておくということはできる。



「私たちはすでにランジェリーショップを立ち上げているのよ。そういったウェアが普及すれば、ファルマ君がいつも言っている、市民の健康増進につながるじゃない」

「そうだね、使う人の困りごとや、忌憚のない意見を集めよう」

当事者がモノ作りに参加して本当に欲するものを作る。

そんな誰かの快適のための仕事は、きつと世界を優しく変えてゆく。

「ブランシュ、大人になるって楽しみなことだよ」

「そうかな。そうだといいな」

「もしそう思えないなら、変えてゆかないとね。誰もつらい人がいない世の中は無理だけど、少しでも苦しさを取り除くことはできるかもしれないから」

ブランシュは弾けるような笑顔でにこつと笑った。

人種、性別、貧富の格差、貴族と平民、障害や疾患の有無、価値観の相違……問題や摩擦は数あれど。

多様性に満ちた世界で、一人一人が尊厳をもって自分らしく生きるために。

ファルマはいま一つアップデートを経験しながら、一つ一つときほぐしてゆけるようにと願う。

未来への不安や葛藤はあれど、皆に優しい世界は誰かにも優しい、そう思ったから。

ファルマは宮殿での勤務も続けている。

とはいえ一年前に筆頭宮廷薬師を勇退し、パツレが同職位に昇格

していた。

同時期に、ブリュノも宮廷薬師を退任した。

ブリュノは医薬大総長を務めながら世界保健機構を立ち上げ、その運営に尽力している。

現在、宮廷侍医の体制は、侍医長 クロード・ド・ショーリアック、次席 ブリジット・ル・ノール、マルタン・ムニエ。

宮廷薬師の体制は、筆頭宮廷薬師 パツレ・ド・メディシス、次席 ファルマ・ド・メディシス、フランソワーズ・ド・サヴォワ。その下に侍医団、薬師団を率いている。

三人続けてド・メディシス家の筆頭薬師への着任だが、エリザベスもそれでいいと言って、彼の仕事を認めた。

パツレは宮廷人たちに積極的に介入し、薬師たちの人心の掌握も早かったし、ファルマのようにあちこち掛け持ちの薬師ではなく、宮廷専従ということで宮廷人たちからの信頼も厚い。

彼自身も、念願でもあった職位を得ることができて、皇帝になるより性に合っていると話している。ちなみに、次期皇帝の選定は保留となっていた。

ファルマの役割といえば、パツレが見逃した疾患を見つけてそつと治療したり、セカンドオピニオンの相談などを受け付けていた。いわばパツレのサポート役だ。

いつものように宮殿の一角を歩いていたファルマは、あることに気づいてはたと足を止める。

大会議室の前には、秘密会議の看板が掲げられている。

（また今日も俺をはぶって何かやってるな）

まあ仕方ないな、と気まずい思いをしながら、こっそり大会議室

の前を迂回しようとする。

ファルマの宮殿での仕事は少しずつ減らしてパツレに任せていたので、参内する頻度も減っていたのだが、秘密会議に出くわしてしまった。

ファルマは宮廷で時折、ファルマには秘密の会議をしているのを薄々知っていた。

身近な薬師たちが不自然なほど一斉に、謎のスケジュールで埋まっている日が月に一度ほどあるからだ。そういう時は決まって、聖帝には謁見中止となる。

つまり聖帝も臨席しているということに他ならない。

まったく分かりやすいと思うのだが、あまり詮索しないようにしている。

何か謎の歯車に対しての対策を講じているのだろうか、ファルマには秘密なのだろう。

メンバーは聖帝、ブリュノ、パツレ、エメリッヒ、エレン、ジョセフィーヌ、侍医数名、あとは神殿関係者といったところか。

ファルマは診眼を使って内部のメンバーを推定する。今日は十五人の会議のようだ。見る限りは全員、健康だ。

ファルマが引き返えそうとしていると、

「みーたーなー」

ノアが背後からファルマに襲い掛かって羽交い絞めをしてくる。気配を消すことのできるノアの奇襲は、本気で接近がわからないから困る。

会議室の中を診たが、目視はしていない。ファルマは弁解する。

「何も見てないよ！ 秘密会議って看板が出てるから迂回しようとしただけだよ」

「まあ、秘密会議というか趣味のサークルだ」

ノアは冗談めかしてそんなことを言う。

「わかった。サークル活動の邪魔をしないように退散するよ」

ファルマがわざとらしく手を広げて撤退しようとする、

「分かってんだろ。中で誰が何を話してるか」

「……まあ大体は」

およそ四年以上も月一で数時間の会議とは、本気度は窺い知れる。何か進展があったのかどうかは分からないが、ファルマの耳には何も入ってこない。

「そんだけ、お前に恩義が何か知らんが、何か感じてるやつが多いんだよ」

「……ありがたいことだけどね。でも俺は」

「潔く死なせてくれって？ わかる、その気持ち」

そう言われてみると、ファルマは複雑な心境だ。

薬谷完治とファルマのシミュレーションでは、7割の確率でファルマは今後も生存できるという予測になっている。

これが恐らく、この秘密会議に参加している全員に喜んでもらえる結果だろう。

だが、残りの3割は、彼らが悲嘆にくれる結果になる。

「心配しないで」とも何とも言えないのだ。

「どうにもならないことだから、あまり時間を割かないでほしいかな」

ファルマは取り合わない。

「中の連中、既に墓守の居場所を突き止めてるぜ」

「え？ 墓守に接触したのか？ どうやって！」

「俺は会議に参加してないから分かん」

会議のメンバー全員が無事であることから、直接接触はしておらず動向を掴んでいるといったところか。ファルマは情報を探りたいが、ノアがファルマの口を割らせるためのハッタリという可能性もある。

「いいのか、そんなことを俺にばらして」

「俺は別にお前の敵でも味方でもねーもん。でも、あとちょっとは世界が滅ぶと困る」

ノアの言葉は信用できるのだろうか。

会議が終わって会議室からメンバーが出てくる気配がしたので、ファルマはノアとの話を切り上げてすっと立ち去った。

「まーたなー」

ノアの言葉が追いかけてきた。

ファルマは彼らが墓守にたどり着いたということに危機感を覚えていた。

もし、彼らが墓守を刺激すれば、薬谷 完治と進めている計画が根こそぎ狂う。

## 9章2話 「ハ（ウィグナーと友人）の箱」の箱」

「急速に成長しつつあるな。いつか本体が露出するんだろうか」

ファルマは薬神杖を使って旧神聖国へとやってきた。

鎧の齒車に近づくのは危険だが、最低限の調査は必要だ。

有識者会議が墓守の居場所を知っているということは、ファルマにとってかなりのインパクトだった。

ただ、彼らが神聖国へ赴いて調査はできないことから、直接居場所を見たのではなく、聖典や文献などから紐解いたと推測される。

誰の付き添いもいない。

ここに来るときにはいつも「今日で終わりがもしれない」と覚悟をしてやってくる。

ファルマはいつだって、恐怖より好奇心が勝っている。

そこに未知のものがあれば、近くで確かめてみたい。

思い残すことは、もうあまりない。

彼の地球での妹、薬谷 ちゆは、先月地球で結婚式を挙げた。

薬谷 完治に挙式の様子を動画で共有してもらったが、ウェディングドレス姿の彼女は、幼いころ手をつなぎあった妹と同一人物とは思えないほど、目も覚めるほどの美しい大人の女性に成長していた。

相手の男性は彼女の人生のパートナーにふさわしい好青年に見えた。

幸せそうな彼女と、それを見守る両親には幾多の幸せが降り注ぐだろう。

彼らの未来は暫定的に、最善の方向へと書き換えられた。

鎧の齒車が地球側から外れた今、彼らの未来は確定し、その命は

守られる。

彼らにとつてどこにも存在しない悲劇と、存在しない結末に思いを馳せることはなく、時空のはざまにとらわれた霊のような自分の存在を、彼らが思い出すこともなければ、会いたいと思う由もない。薬谷 完治の自我と地球との因縁はゆるやかに絶たれ、分かれたれようとしている。

神聖国国境および一帯にはぐもりと規制線が敷かれ、立ち入り禁止区域となっている。

中央を起点に、巨大な陥没穴が出現しはじめているからだ。神聖国および周囲の居住者は四年前の闇日食に備えて退去していて、神官や平民を含め、残っている人間はもういない。

時たま、神殿の秘宝の盗み目的に入って出られなくなった不屈者の遺体を見つけることはある。

かつてこの世界の中樞を担っていた聖地は無人となり、寂寥とした光景が広がっている。

地下部分の神殿は地下階が大規模に崩落して、瓦礫の下から地上へと成長する得体のしれない構造物が表出しているのが確認できる。この構造物の内部には鋸の歯車があると推測され、周囲では活発な地殻変化が起きている。

ファルマは空中から、地球側から持ち込んだドローンで録画をしながら、構造物に近づく。

映像は後日、薬谷 完治とデータを共有し解析を行う。

異界の研究室に入れるのは薬谷 完治だけだが、彼の協力者には多くの専門家と専門機関がついているので、画像解析を依頼している。

「30日前より約12パーセント体積増加か……ペースが加速している」

巨大構造物の表層のサンプルを持ち帰り、解析を地球側へ依頼して、すでに表層の素材解析完了している。

マグネシウムと鉄が主な組成だ。

つまり、いざとなったら構造物を物質消去で消してしまえる。

鋳の歯車本体の素材が分かれば同じように消せるかもしれないのだが、本体にまではまだ到達したことがない。

少しでも材料を持ち帰ることができればよいのだが……。

画像解析では、地球には存在しない未知の金属の可能性もあるとのこと。

ドローンで亀裂の隙間から地下へ潜入する。

地下5メートル、10メートル……視界が闇に閉ざされ、カメラが自動的に中遠赤外まで見える暗視に切り替わる。

地下300メートルを下降したところに、鋳の歯車は存在した。

(ここまでこれた。初めての撮影だ)

暗視スコープに捉えられた歯車は、ゆっくりと駆動している。

ドローンは歯車に最接近し、その表面を撮影した。

「前見た時より回転が遅い。地球との接続が切れたことで、回転速度が落ちている……これが止まったらどうなる？」

歯車の構造の内部を見てみたいが、この先に進めばドローンを失うことになる。

「ここまでか……」

墓守が現れる座標には、重力異常や空間歪曲が存在するようだ。悪霊が大量発生する地点も確率が高まる。

その条件を満たす場所が、この異世界には三ヶ所しかない。



一つは、聖泉。

一つは、神聖国。

そしてもう一つは、新大陸にあるラカンガ洞窟。

すべての地点を、ファルマは入念に調査済みだ。

ハリス・トーマスの死亡したラカンガ洞窟では、「光の渦」という異界への入口付近でドローンが三機ロストしてしまった。

その先がどこにつながっているのか、ファルマは確認できていない。

光の渦の周辺には人とも動物ともつかない、死体や死骸が折り重なっていた。

ラカンガ洞窟が怪しいが、聖帝らは近づけないため、墓守の居場所ではないと推測できる。

（一体、墓守の居場所はどこだと当て込んでいるんだ）

彼らに直接尋ねてしまえばいいのだが、教える気があるならとつくに教えてくれるだろう。

ドローンのバッテリーが少なくなってきたところで調査を終え、回収する。

地の底からは、生ぬるい風が吹きあげて不気味な音を立てていた。

ファルマは新大陸へと足を延ばす。

新大陸の情勢は安定していた。

マイラカ族の長メレネーは、サン・フルーヴ帝国との貿易の利を説き、帝国から持ちこんで浄化した呪器の貸与を取引材料に、新大陸東海岸の部族統一を無血で果たしつつあった。

メレネーが東海岸統一を急いだのには理由があった。

他国からの侵略に対する防衛力として機能していた呪術が今年を境に消えてしまいかもしれない。

そんな状況にあつては、一気に蹂躪される可能性も否定できない。一刻も早く部族間抗争を終わらせ、一つの国として国力を高める必要があつた。

メレネーの危機感は、長年不和の状態にあつた敵対部族の長たちにも伝わった。

メレネーがまとめた部族群を「東岸連邦」と名付け、一つの国家とした。

新大陸の中央は、急峻な山脈に隔てられている。

このため、西海岸側の部族たちとの和議は進んでいないが、西海岸側から新大陸に到達する航路はまだ発見されていないので、ひとまず時間稼ぎはできている。

ファルマが事前に何度か調べた限りでは、西海岸側の部族はアジア系に顔立ちの似た農耕民族のようだった。

彼らは呪術も神術も用いてはいなかった。

西海岸側の情報は、ファルマは敢えてメレネーには伝えていない。遠く距離の離れた西海岸側とも通じるとなると、鉄道の建設などが必要で、東側の統治や発展が脆弱になってしまう。

東岸連邦は共和制で、部族集団の長によつての統治形式をとった。東岸連邦とサン・フルーヴ帝国の間には、両国政府の公認のもと、活発に貿易船が行きかっている。

現在までのところ、国際社会に対する聖帝の監視がきいていることもあつて、東岸連邦は内政干渉されることもなく、安定的に旧大陸と交易と文化交流を続けている。

この流れの一環で東岸連邦の港には、貿易関係者が駐在する「プチ・フルーヴ」というサン・フルーヴ人街ができている。

診療所、薬局、雑貨屋、仕立て店、パン屋、学校、代書店、職業養成所などの変化に富んだ店舗が並んでいる。

プチ・フルーヴには異世界薬局の資本を受け、サン・フルーヴ帝国医薬大で学んだ現地人薬師がオーナーを務める「東岸薬局 第一号店」が出店している。

ファルマが時々研修に訪れたり、定期診療を行ったりする。ファルマは新大陸を訪れたついでに、東岸薬局に顔を出した。

「こんにちは、お久しぶりですハノンさん」  
「ファルマ師！ お早いお越しで！」

青い制服を着た店主の青年薬師が、患者に対応しながらカウンターの奥から手を振った。

ファルマはハノンという名の店主が相手をしている患者が途切れるまで、店舗内に陳列してある医薬品を見て回る。期限がきれていないか、適切にパッケージングされているか、直射日光に当たっていないか。成分表示はきちんとできているか。説明書きがあるか。抜き打ちチェックのようになってしまったが、必要な確認だ。

途中、現地住民の客がファルマを店員だと思って声をかけてきたので、薬の説明をする。

休憩時間となったので、ハノンが近づいてきた。

「すみません、お忙しい時に。定期訪問の予定より三日も早かったですね」

「いいんですよ、予定なんてあつてないようなもので」  
「薬局の運営はどうですか？」

ハノンは、サン・フルーヴ医薬大を飛び級で卒業したマイラカ族出身のファルマの教え子でもある。

呪術師ではないが記憶力が抜群で、早期卒業を可能とした。

卒業後薬師の資格を取得したハノンは、別の部族の二人の女性従業員を雇って店を持った。

彼は東岸連邦とサン・フルーヴ帝国の二つの一級薬師のバッジを胸につけて、帝国語を流暢に話す。ファルマも、スカーレット・ハリスの手記にある単語をもとにマイラ族言語の辞書を作成して部族言語はいくつか覚えたが、片言になってしまう。

それを思うと、ハノンの語学力は相当なものであった。

「この通り、おかげさまで大繁盛です。朝から晩まで、客足が途切れることはありません。連邦議員からの要請にこたえるべく、二号店の出店を計画しています。設計図を見ていただけますか」

「もちろんです」

ファルマは待ちかねていたように話を繰り出すハノンに相槌を打ちながら、出店計画を見守る。

「店舗を拡大するのは歓迎ですが、薬師の質の維持を忘れないようにしてください。現代医薬品を取り扱えるのは、サン・フルーヴ帝国医薬大を規定の要件を満たして卒業した薬師に限ります。連邦人の薬師が不足しているのならば、サン・フルーヴ帝国薬師を雇ってください。それ以外は、一般医薬品を販売する薬店と定めてくださいね」

新大陸での薬局運営は距離的な事情もありファルマの目が届きにくいので、信頼できる薬師に医薬品を適切に取り扱ってもらいたい。新大陸に限ったことではないが、僻地で開業する関連薬局に対しては、ファルマはそう願っている。

「もちろんです、ファルマ師のご助言のとおり。そういえば、マジョレーヌ師が少し手伝いに入ってくださるかもしれないとのこと

です」

「それは心強いですね」

薬師マジョレーヌは、たびたび新大陸に来て薬草を持って帰っているらしい。

「わからないこと、手に負えない症例があれば電信を使って私に連絡をください」

大陸間通信は、この四年で十分に整備されている。

「はい、先日も異世界薬局本店に数件、問い合わせをしました」

「それはよかった。私ではない薬師が対応したのですね。遠慮はいりませんので」

「それから、キャスパー教授にもご助言をいただいています」

「キャスパー教授もお元気ですか」

ファルマは懐かしい名前を聞いて目を細める。

キャスパー教授は、未知の薬用微生物を求めて新大陸に渡り、微生物医学研究所の所長に就任し、研究拠点を新大陸に移している。

彼女の単離した数々の抗菌剤は大規模生産、製品化され、世界中の薬局薬店に普及している。

彼女は平民となったが、職にあぶれることはなさそうだった。

「ええ、今日もうちの店にお見えになりましたよ。また新しい放線菌を見つけたんですって。今日は湿地帯の調査に行かれるようです」  
「それはなによりです。キャスパー教授によりしくお伝えください」

暫く会っていないな、と思いながらファルマや彼女のはつらつとした物言いや面影を懐かしむ。

「どうして、ファルマ師はキャスパ教授とお会いにならないの？」

「キャスパ教授と会うことはできるのですが、私自身が微生物研究室に行くことができません」

「はあ……？」

良かれと思って面会をすすめたらしいハノン是不思議そうに首をかしげる。

ファルマは空気中を漂う細菌やウイルスなどの病原体を退ける滅菌的聖域をパッシブに展開しているため、キャスパ教授の研究室に近づこうものなら、彼女の培養している有用細菌を根こそぎせん滅させてしまう。……ということは、ほとんど誰にも知られていない。また、同じ事情でパン屋にもあまり近づけない。

「ええと、その。お忙しいかと思ひまして」

そういうごまかし方でいつも切り抜けている。

「はあ、そういう」

ハノンは納得したようだった。

ともあれ、信頼できる医薬品を取り扱うことで、帝国人と現地の人々との信頼関係もある程度構築できてきたようにファルマは思う。

「ファルマ師、折り入って相談なのですが」

「なんでしょ」

「大陸から、生きたままの薬用植物を持って帰れないでしょうか。サン・フルーヴ医薬大の薬草園にあったあの素晴らしい薬用植物をこちらに持って帰って植えることができたらと願ってやみません。」

植物防疫や長い航海で傷むことを考えると、種や球根をこちらに持ち帰るのが一番ですが。わかってはいるのですが……種から育てるとなると収穫するまでに膨大な時間がかかりますし、せっかく持つて帰っても発芽しないことも多くて」

「いわれてみればそうですね。野菜や果樹なんかも、運びたいですよね」

新大陸での医療を支えるために化学合成薬が輸出され、薬師らも不便をうったえなかったため、そういった需要があったとは知らなかった。ファルマの想像力が足りていなかった。

「しかし、生の植物を鉢植えにしたまま運ぶと、海水や海風で枯れてしまいますし、甲板で日光を当てないとこれまた日照不足で枯れてしまいます」

ハノンは何度か試みたらしく、軒並み失敗に終わったといって肩を落としている。

「……それでしたら、いい方法がありますよ」

ファルマは思い出して、設計図を書き始めた。

「ガラス箱……ですか？」

ファルマが設計図を描いたものは、1829年にイギリス人のウオード医師が発明した、ウオードの箱というものだ。現在ではテラリウムとも言われるこの輸送用の小型温室で、ウオード医師はロンドンからシドニーにシダを送ったが、8か月もの間一度も水を与えずに植物を無事に運搬できたという。

密封したガラス箱の中に発芽後の苗と十分な用土を入れ、霧吹き

の水をかける。害虫の混入には気を付ける。

ファルマは三分ほどで書きあげた簡単な設計図と注意書きをハノンに見せた。

「えっ、これで運べるんですか？ 水やりは？ 肥料は？」

ハノンは半信半疑といったような表情を隠さない。

「最初に入ればそれ以上は必要ありません。日中は直射日光ではなく、適度な日差しのもとに置いてください。日中には葉の蒸散や用土から水分が蒸発してガラス箱の中は湿度で満たされます。夜になるとガラスが冷えて、ガラス箱の中の水蒸気は結露し、側面を伝ってまた土に吸収されます。なので、水やりは不要です。枯れた植物体をバクテリアが分解して肥料を作ります。このガラスの容器の中で生態系がつくられます」

全く中に手に触れずその状態を数十年も維持している愛好家も、地球にはいたはずだ。

「へえー！ さっそく試してみたいです。いいことをうかがいました」

「お役に立てたならよかったです。それから、出入国時には植物防疫は徹底してください」

ファルマは作製に付き合っ、一つ試作品を作り上げた。

「本当にこんなに簡単なもので運べるのですか？」

「そのはずです。いきなり運ばずに、陸上で試してからにしてくださいね」



害虫や植物有害な外来生物を運ぶことにならないよう、ファルマは注意を怠らなかつた。

ファルマは東岸薬局を出て区画整理のされはじめた集落の様子を視察して回り、メレネーのいる中央政府機関に顔を出した。

屈強な呪術師たちにメレネーとの面会を取り次いでもらうと、メレネーは応接室にパンツスーツ姿で現れた。

「おお、よくきたなファルマ。今日は私的な面会か」

現在、メレネーは推定１７歳から１８歳で、あの頃の少女の面影はもうあまりない。

口調は勇ましいが、東岸連邦議長としての佇まいは落ち着いている。

「私的な面会のもり。何か困っていることはないかと思って」

「何もないぞ。順調そのものだ。それよりお前は困っていないのか」  
「例の件以外はね」

メレネーはファルマの抱えている問題を思い出して、深いため息をつく。

「それはなるようになるしかないな。お前にもできることはないのだろうか？」

「おそらく。最後までがくけれども。今、墓守の居場所を突き止めようとしている」

「ファルマ、ならそれでいい。あまり思い悩むな。お前がしようとしていることに対して、お前の責任を問える者は誰もいないぞ」

メレネーはファルマを諭すように語り掛ける。

「我々は安全な水を手に入れ、病に苦しむこともなく、便利で豊かな暮らしの恩恵に浴している。それは何者でもない、お前のおかげだ。そしてお前たちの住む大陸からは悪霊が消え、夜は安眠できるようになった。どちらの世界もよりよくなった。間違っていない、これでいい」

「……それならよかった」

メレネーの言葉が重く胸に響く。

メレネーたちと接触して、彼女たちは救われたのだろうか。彼女たちの身を守っていた呪術を手放すことを、本当に受け入れてくれるのだろうか。

考えても考えても、最善には程遠いような気がする。

「ずっと、自分でなければ、誰かがもつとうまくやれたのではと自問自答しているのだな」

メレネーはファルマの内心を見透かしたかのようなまっすぐな瞳でファルマをとらえる。

「そうかもしれない」

「少なくとも、お前は私より適材で、私よりすべてにおいて秀でている。だからこそ、ルタレカをお前に託した」

「ありがとう。やれるだけやる」

ファルマは彼女を落胆させないように、穏やかに、しかし自信を滲ませた声で返す。

「人助けはあんなに必死にできるのに、お前にとっての自分助けは難しいのだな」

メレネーは少し涙ぐんで、そつとファルマの両肩に手を置いた。自分を顧みない生き方は簡単で、自分は死んでいると言い聞かせたらしい。

そう悲観的になることもない、空気のようなものだから。

でも、まだ死んではいない。

地球の薬谷 完治は生きているし、ファルマ・ド・メディシスも生きている。

そして、二人の状態は無数の可能性の中に重なり合っている。なぜなら、量子力学の世界では客観的な実在は存在せず、あらゆる可能性の重ね合わせの状態にすぎないから、共存不可能な結果ですら同時に成立しうる。

今度は、無数の可能性の中に置き去りにされようとしている、自分自身の人生を取り戻す番だ。

「お前抜き幸せな結末など、考えるなよ」

メレネーは力強い口調でファルマにたたみかけた。

ハッピーエンディングがあるとして、そこに死んだはずの自分がいてもいい。

## 9章3話 華燭

1152年6月20日。

ファルマとエレン、ロツテはクラシカルな正装で、いつもと違った賑わいを見せる帝都神殿へと馬車を乗り付けた。

バラの花で飾られた神殿入口の案内板にはエメリツヒ・バウアーとジョセフィーヌ・バリエの結婚式と書いてある。

「お天気がよくてよかったですね。お空もお二人を祝福しているかのようにですよ」

ロツテが嬉しそうにはしゃいでいる。

「そうだね」

ちょうど挙式時に雨が降りそうだったので、幸先が悪くてはいけないと気をまわしたファルマが周囲の天候を変えておいた。

「まさかこの二人が結婚するとはね……感慨深いものがあるわ」

彼らの指導教官でもあったエレンは感動して涙ぐんでいる。

「ここに漕ぎつけるまで大変だったよね」

ファルマは彼らの歩んできた道のりを思い出す。

「そうね。艱難辛苦の末に結ばれたのよね。駆け落ちにならなくてよかったわ」

「出席してくださるようでもよかった。そのうち、ご両親とも和解できるといいんだけどね」

彼らはどちらからということもなく、同じ研究室で時間を重ねるうち自然とよきパートナーとして一緒になろうという話になっていたようだ。

四年前には「他人と暮らすのが嫌い。結婚は全く考えていない」と話していたジョセフィーヌだが、その気持ちも少しずつ変わっていった。ラボメイトとは朝から晩まで一緒なので、相手の良いところも悪いところも見えて、彼となら一緒に暮らしてもいいかも、とイメージがついたようだ。

二人が医薬大卒業と博士課程一年生になったタイミングで、入籍する計画を立てていた。

二人の婚約の意向を聞いた時にはファルマもエレンも驚いたものだ。

本人たちがそう言っているとしても、貴族社会においては両親の同意と結婚証明書への署名は必須だ。

二人がジョセフィーヌの両親に結婚の許しをもらうまでが大変だった。

エメリッヒはこれまでの功績により個人でサン・フルーヴ帝国の男爵位を持っており、なおかつ元をたどればスパイン王国の大貴族という歴史ある家柄であって、メザリアンス（身分違いの結婚）ではなく身分もつりあうものではあったが、エメリッヒの遺伝病のことでジョセフィーヌの親族からの反対が根強かった。

エメリッヒの父親は既に遺伝病によって亡くなっていたし、母親は行方知れず。

脛をかじってくるかもしれない弟妹が五人もいる。

エメリッヒとジョセフィーヌの間に子孫は必要だが、遺伝病の子では困る、というのだ。

これにはファルマも驚いて説得に入ったが、ゴリゴリの貴族社会での立ち回りを要求する両親の反対は根強く、一筋縄ではいかなかった。

両親からは致死性家族性不眠症に対する治療法と、子孫に遺伝しない方法を打ち立てたなら結婚を認める、という条件を突き付けられ、話し合いは平行線を辿った。

致死性家族性不眠症は、常染色体顕性遺伝病だ。両親から受け継いだ常染色体の遺伝子のうちどちらかが正常でも、片方に異常があれば50%の確率で遺伝する。

一回の妊娠において子供が致死性家族性不眠症を発症する確率も50%だ。

子孫に遺伝する可能性があり、治療は可能であったとしても、子が発症した場合治療には大きな負担を伴う。さらにそれは彼らの孫にも遺伝する。

エメリツヒは、人工授精で胚盤胞まで培養した受精卵の着床前診断を行いPRP遺伝子の変異の有無を選別して、染色体異常を持つ子の出生率を下げることでできると気づいた。

ファルマは、診眼を使えば遺伝子異常を持つ胚を回避することは簡単だったが、今後の遺伝子技術の波及を考慮して、遺伝子検査での診断方法を確立するよう促した。

これらの検討を重ねている間に、ジョセフィーヌは両親の画策により、外国貴族に誘拐されてしまった。

このころ、男性が女性を誘拐して強引に結婚してしまう誘拐婚の因習があったものだが、聖帝エリザベスの法整備により、多くの国で両性の合意のない結婚は無効となり、神殿は二者の合意のない婚姻を認めないとされていた。

それで、まだ法の適用されていない外国に拉致されてしまったのだ。

エメリツヒから話を聞いたファルマが、驚いて一晩で見つけて救出してきた。

大神殿の諜報ネットワークを使えるファルマが、ジョセフィーヌを探しだすのは簡単だった。ジョセフィーヌの両親が外国貴族と結託して誘拐婚を企てたことを黙っておく代わりに、「二人の結婚を検討する」という言葉を引き出した。

そしてほどなく、エメリツヒは致死性家族性不眠症を克服する方法を自力で見出した。

彼が最初に言っていたように、異常のあるプリオンを分解する遺伝子治療ユニットを脳神経細胞の特定の場所に組込む遺伝子治療ウイルスを作成し、細胞実験、動物実験での検討において成功をおさめた。

あとは、発症の兆候がみられたらそれを自身に投与すればいい。治療のめどがたったことで、ジョセフィーヌの両親らも一転、結婚を認めた。

サン・フルーヴ帝国における結婚式は、宗教的側面を大切にすることは神殿、宗教色を出したくない場合はシビルウェディングとして市庁舎、裁判所で行うことができる。

二人は敢えて希望して神殿での挙式を選んだ。その理由をファルマははつきりとは教えてもらっていない。

かつて呪われた血族と忌まれていたエメリツヒが悲壮な運命と試練を克服したと先祖や守護神に報告したかったから。かもしれないし、彼らがことさらに結婚を急いだのは、まだ確実にファルマがこの世ににいるうちに、と考えたからかもしれない。ファルマは二人のそんな思いも汲んだ。

ファルマとしてもせっかくなら、教え子が幸せになるところを目に収めてもおきたかった。

定刻より随分早く着いたので、ファルマたちは神殿の控室で新郎のエメリツヒに会うことができた。ジョセフィーヌの装いも気になるが、新婦のドレスは誰も当日まで見ることはできないのだそうだ。

ファルマはそわそわとした様子のエメリツヒに声をかける。

「今日はおめでとう、よく似合ってるよ」

エメリツヒは新郎らしい純白の正装に身を包んでいた。

いつもは研究室で白衣を羽織ってざっくりとした格好をしているが、今日ばかりはばつちりと決めている。エメリツヒの傍にはカメラマンが一人帯同していた。

最近のサン・フルーヴの結婚式では、ファルマのもたらした写真技術の普及により、ウェディングフォトを撮るのが流行っている。ウェディングフォトをまとめたアルバムなども作るそうだから、どの世界もやることは同じだな、とファルマは感心したものだ。

「ありがとうございます。今日この日を迎えられたのは教授のおかげです。エレオノール先生も」

「いろいろあったけど、君自身の努力の比率がとても大きいよ」

それはファルマの本心でもある。

「とんでもないことです……時々、思い出すんです。あの、私が入学した時、教授が俺を引き留めてくださらなければ、私も家族も今はどうなっていたかわかりません。妻に会うこともなかったでしょうし、ゆくゆくは私の命ありませんでした」

（妻があ……ジョセフィーヌさんのことが。感慨深いな）

思えば、ファルマにとってエメリツヒとの出会いは印象的だった。ファルマはスピリチュアルな意味での運命のようなものを信じてはいない。

難病を患った人たちが、助けを求めてファルマの周りに集まって



くるのは自然なことだ。

それでも、彼との出会いは殊に、縁のようなものを感じる数奇なものだった。

着任早々いきなり敵意満々で挑発されて、退学届けをたたきつけ、試合を申し込まれたのには驚いたものだ。ファルマが大人げもなく試合を受けて大学の設備を破壊して、日本円に概算して6億程度の修理費が発生し、まるごとかぶる羽目になったのも今となってみればいい思い出だ。

「あの時、黙って退学せず最後に一発、教員をぶちのめそうと思っ  
てよかったよね」

「まったく、とんだ失礼を……でも、結果的には最善のものとなり  
ました」

「あなた、退学させろって乗り込んできたものね。びっくりしたわ  
よ」

あの時、その場にいたエレンも苦笑している。

エレンやロッテたちも、口々に祝福の言葉を述べ、祝儀を渡して  
いた。

サン・フルーヴには日本のようにご祝儀を包むというものがなく、  
リスト・ドウ・マリアージュという、現代風に言うとほしいものリ  
ストが事前に提示される。贈る人は、予算に合わせてプレゼントす  
る品を選んで贈るという仕組みだ。

高額商品が残ってしまった場合も、複数人で購入することもでき  
る。

エレンは「お皿」という項目を見つけて有名窯の銘品のカトラリ  
ー、ロッテは「絵画」という項目を選んだらしく、エメリツヒとジ  
ョセフィーヌをモデルにした華やかな印象画を贈っていた。

ファルマは「筆記用具」という項目を選んで、豪華な装飾のつい

たボールペンをペアで贈った。

ボールペンは、重要な契約書類にインクのしみを作って作り直しになってしまったファルマが恨めしく思って、最近技術局に登録したものだ。

「すごい！　これ、世界で教授しか使ってるの見たことないやつです」

「世界で二本目と三本目だよ。インクも充填できるようになっていくから」

「嬉しいです、妻と実験ノートの記載時に使います」

「それがいいね。書いた直後にこすっても後をひかないよ」

「嬉しいです！」

エメリッヒは実用的なものを貰ったからか、素直に喜んでいた。

ファルマはその様子を見届けて、懐から厳封した手紙を手渡す。

「それから、これはお祝いとは別なんだけど、実は君に渡そうと思っていた手紙がある。重大な内容だからあとで読んでもいいよ」

「はい……わかりました。気になるので今拝読しますね」

エメリッヒは緊張しながら開封して、ファルマからの手紙に目を通す。

ファルマがエメリッヒに送ったのは、エメリッヒ自身の致死性家族性遺伝病の治療記録だ。

「まさかこれは……」

ファルマは、エメリッヒが自力で難病の治療法を見つけられなかった場合、ファルマがこの世界にいないというケースに備えて、先手を打っていた。

彼は既に、エメリッヒに気づかれないうちに遺伝子治療を施していたのだった。

「教授が治してくださっていたのですか……」

「君の意思は知っていた。自力で治すだろうとも信じていたけど、確実な手をつておきたかった」

「いつだったんですか……全然気づきませんでした」

エメリッヒはいつ治療されたのかと動揺している。

「治療を施したのは二年前で、徹夜明けで研究室のソファで転がっていたときにしたからね。気づくわけがないよ」

「えーっ……そうだったのですね」

エメリッヒには治療への強い意思があつて、ファルマは安全な治療を提供できる。

それを知っていて、知らないふりはできなかった。

エメリッヒは悔しそうにぐつと唇をかみしめる。

「……教授、薬師としてはあるまじき行為ですね。患者の意思決定の権利を奪うのは重大な医療法違反行為であり、患者の人権を踏みにする暴挙です。あなたが教えてくださったことですが」

エメリッヒは糾弾するようにファルマに向き直る。

「そうだね。手が後ろに回るかな」

「……ですが。結果は同じです。生殖系列まで修復してくださったなら、文句のつけようありません」

「二年前ということは、私がさっさとしなかったから……今にも発症しないか、きつと見るに見かねてだったんですよね。不本意では

ありますが、本当にありがとうございました」  
「不義理なことをしてごめんね」

顛末を聞いたあとエメリツヒは、安堵とも落胆ともつかない大きなため息をついた。

達成感は半減したが、ファルマの気持ちも汲んでくれたのだろう。

「私だけ治さないください、治療法の開発には手を貸さないくださいと申し上げたのは、私の我儘でしたから。もし何年ももたっているようなら、教授が黙っておかないだろうとは思っていました」

「いや、それも君自身の意思決定だよ。それに、君が開発した治療法は無駄にはならない」

エレンも横でうんうんと頷いている。

ファルマもエレンも、彼とジョセフィーヌの血のにじむような努力を知っている。

エメリツヒは暫く考えこんでいたが、自分を納得させたようだ。

「そうですね。意味がなかったわけではないですね。教授の治療法は高度な神術を使うので、平民には使えないし後世に残りませんからね。私が開発した方法なら誰でも使えます、この技術は次の人のために生かしますね」

「そうしてほしい、薬師として君が正しいよ」

「妻も、妻の家族も、もちろん私の弟妹たちも喜んでくれると思います」

定刻となり、ファルマたち参列者は帝都の守護神殿内の最も大きな儀式用聖堂に移動して、神殿式の結婚式が執り行われた。

結婚式は市民の礼拝の邪魔にならないよう、神殿の一角のみ借り

切りになる。

夫婦となる者はまず、役所に行つて出生証明書を提出し、親族の許諾の有無の記載欄を含む婚姻証書を作成して身分吏（*officier de l'état civil*）に結婚をする旨を伝え、八日間結婚予告の告示を行つてもらふ。

新郎新婦はこの日のために、数か月前から神官長の結婚講座を聞いていたはずだ。

司式者は帝都神殿神官長のコームだ。

一時はファルマと敵対していた彼もすっかり丸くなって、街の顔役となっている。

新婦側の参列者の中にナタリー・ブロンデルを見つけて、ファルマは会釈をする。

四年半前、膠芽腫を摘出したナタリー・ブロンデルは、まだ再発なく日常生活を送っている。彼女もまた、一級薬師として免許を得し、母にして宮廷薬師のフランソワーズの顧客を引き継ぎ、自宅で開業する見込みだ。

ナタリー・ブロンデルの隣にはジョセフィーヌの親友であるステファニー・バルベも座っている。彼女もまた一級薬師を取得することができた。

現在、帝国では平民であっても、今年度より新規課程を卒業した場合は一級薬師となれる仕組みができた。

秘書のゾエ、教員らの大学関係者、学友たち。

エメリツヒの弟妹たち。遠い親族ということでロツテも呼ばれた。ジョセフィーヌの獣医仲間も駆けつけている。

エメリツヒに続いて聖堂入口から入堂したジョセフィーヌは、真珠とダイヤのあしらわれた純白のシルクサテンのドレスに身を包んでいた。

ドレスの後ろには大きな扇状の長いトレーンを引いた意匠になっている。

長いレースのベールをダウンして、少し涙ぐんだ父親にエスコートしてもらっている。

ウェディングドレスの歴史にも変遷があり、かつてはサン・フルーヴでも白だけではなく様々な色が着られており、赤は人気が高かった。

地球においては、19世紀の大英帝国ヴィクトリア女王が白いウェディングドレスに白いベールというスタイルだったことで、以降は白がトレンドになったとされる。

この世界において、ウェディングドレスに白を流行らせたのはエリザベート二世だった。

彼女は同時に、黒い喪服も流行らせた。

ジョセフィーヌの表情が少し硬いのは、緊張でガチガチになっているからだろう。

ファルマは彼女がゆっくりと自席の横を通り過ぎてゆくのを、複雑な思いで見送った。

数日前に研究室で進捗報告を聞きがてら彼女と雑談したときには、新居の準備で疲れた様子でもあったが、結婚生活を楽しみにしていると云っていた。

ジョセフィーヌはブランクなく研究に専念したいという気持ちは変わらず、自身のキャリアを大切にしたいという思いをエメリッヒとよく話し合ったようだ。

結婚後も女性が仕事を続けるというキャリアプランやロールモデルが存在しなかったこの世界において、かつて失業した既婚の女性薬師ばかりを雇い入れ、柔軟な働き方を提示し異世界薬局二号店であるメディークを立ち上げたファルマは、夫婦のどちらもが我慢したり諦めることなく、自己実現の一環としてのキャリアを積み重ねてゆくことの意義を、時間をかけて夫婦に説いた。

エメリッヒも彼女と切磋琢磨してゆくことを望んでおり、そのための家庭の負担は平等となるように配慮すると話していたことから、

よい研究者夫婦になりそうだ。

コームによる聖典朗読後、参列者全員でのアンセムの歌唱と続く。アンセムはパイプオルガンの伴奏で、荘厳な響きが堂内に広がる。

「それでは、誓いの言葉を」

貴族同士の結婚の場合、新郎と新婦の守護神が異なる場合、それぞれの守護神に対する誓約となる。エメリツヒは薬神に、ジョセフイー又は風神に、力強く誓いを立てた。

コームがちりとファルマのほうに視線をくれたが、ファルマは気づかないふりをした。

次に、定番の結婚指輪の交換を行う。

新郎から新婦には金の指輪を、新婦から新郎には銀の指輪を贈るのが一般的で、ジョセフイー又と親交のあったメロディ尊爵が指輪を作ってくれたそうだ。

この指輪をうまくはめることができないと結婚生活に暗雲がたちこめるとの言い伝えがあり、二人は緊張しながらもスムーズに通していた。

指輪は結婚を証明するもので、生涯外してはならない。

ベールアップをしてウェディングキスをするのかと思いきや、しないのでファルマはじれったく思うなどした。

コームからの祝福と説教を受けたあと、署名室で神殿原簿にサインをする。

ファルマも証人としてサインをする。

神殿の教義では基本的に離婚は認められていないが、不仲にならないことを祈る。

退堂後の祝福の鐘は三度鳴らされる。

一回目は新郎新婦自身のために、二回目は両親のために、三回目

は参列者のためにだ。

真つ赤なバラのフラワーシャワーを浴びながら神殿から退堂し、ジョセフィーヌは幸せそうにエメリツヒに寄り添って記念写真を撮ってもらっている。

エメリツヒの弟妹たちもジョセフィーヌの両親と何か言葉を交わしている。わだかまりはそのうち解けてゆくといひ。

大学関係者で一枚ということで、ファルマも集合写真に加わった。ファルマもウェディングアルバムに加わるのだらう。

ファルマは幸せそうな二人を目に収めながら、ほほえましく思う。ちゆの結婚式に披露宴も、こんなふうだったんだらうか。などと、ほろ苦い感情を胸の内におさめる。

「ジョセフィーヌさん、ご結婚おめでとう」

ファルマはこの日初めてジョセフィーヌと言葉を交わす。

純白のドレスを纏い、ティアラをつけた彼女は、今日は一段と輝いて見える。

「教授、本当に色々とありがとうございました。たくさん相談にも乗っていただいて」

「幸せな一日になってよかったね」

「これからご指導お願いいたしますね」

「それはもちろん。でも、暫くは新婚旅行に行つてゆっくりしておいでよ」

サン・フルーヴ帝国貴族は、結婚後一か月ほど、家事をせず働かずに結婚式に来ることのできなかった縁戚のもとを訪れる旅をする、という習慣がある。

「お土産買ってきます！ 二週間ほどお休みをいただいてよろしい



ですか」

「そんなに早く帰ってこようと思わなくていいよ。必要な実験は私がやっておくから」

「ありがとうございます！」

祝福も一通り終わったところで、未婚の女性が集められてブーケトスが行われていた。

ファルマは少し離れたところから、割と必死にキャッチしようとしているエレンとロッテをほほえましく見つめる。

この世界にもブーケトスがあるのかと思っていたが、以前は花嫁が身に着けているものは縁起物だとして、神殿から出たなりべールやらアクセサリーやら取られそうになって、ブーケをあげてしまおうという話になった点は、地球の歴史とよく似ている。

ブーケを獲得したのはエレンだ。

ヒールのある靴を脱いで参加してところを見ると、ガチな競争だったと思われる。

「すごい、あれだけ女性の貴族客いたのに取れたの？」

ファルマが尋ねると、エレンは一仕事終えたような顔をしていた。

「そりやもう、私を誰だと思ってるのよ、体幹の鍛え方と瞬発力が違うんだから。大学関係者にだって負けるわけにはいかないわ」

「エレオノール様、さすがでした。私も結構頑張ったんですが」

ロッテは身長とジャンプ力の差でエレンに完敗を喫していた。

「とってはみたものの、縁起にあやかれるかしら」

エレンはブーケを持ってポーズをとりながら、一人でつつこんで

いた。

「素敵だったわね、ジョセフィーヌさん」

「はい！ もともとお綺麗ですが！ 今日はとても幸せそうなお顔をしておられて。結婚かあ……いいものですねえ。結婚式に参列すると、結婚したいなって気持ちが高まります」

このたびの結婚をもって、ロツテとジョセフィーヌは遠い親戚になる。

おめでたい席なので笑顔は絶やさないが、ロツテの声はしんみりとして少し切なげでもあった。うつむき加減になったロツテの背中を、エレンが励ますように優しくぽんとたたく。

「あるある。花嫁さんを自分に置き換えてしまっんでしょ！」

「えっ、私はそんな具体的には！ だ、だいたい夫となる人の想像もつきませんし、私は平民なのでこんな豪華なお式にはならないですし」

ロツテは顔を真っ赤にして照れている。

「ロツテちゃん、彼氏いるの？」

「んっ、全然いないです。いないんですが、ゆくゆくは綺麗なドレス着たいとか色々。あ、でも母が作ってくれるって言っていました」

友人の結婚式やブライダルフェアに参加していると段々結婚したくなるというあれかな、とファルマは耳をそばだてている。

「ロツテちゃん、今日は朝までパーティーよ。踊り明かすでしょ？」

サン・フルーヴ帝国の披露宴は夜通し行われ、挙式から解散まで

ほぼまる一日費やす。眠気との闘い、体力のいるパーティーだ。

「はい！ ダンスも練習していますので披露するときですね！」

「いい人に会えるかもよ！」

「そうだといいんですけど」

「クロカンブッシュも食べなきゃだし」

「あれすごく楽しみです！ いただくのは初めてです」

「飴細工のパリパリがおいしいのよね」

披露宴は神殿にほど近い新しくできたばかりのレストランで行われる。

結婚式場というものはまだない。

最初にふるまわれる料理は立食式の、buffet形式で、手でつまめるアペタイザーやドリンクをいただく。

ファルマも参列者たちと話し込んだり、会話を楽しんだ。

披露宴には高砂のようなものはなく、エメリッヒとジョセフィーヌも各テーブルを回って話に花を咲かせる。立食パーティーが終わった後、そこから着席して、二、三時間かけて本格的なディナーとなり、余興などを見ながらゆっくりゆっくりと食事をする。

ディナーが終わると、伝統行事として新郎新婦が最初に社交ダンスを披露する。

絵になる新郎新婦が、実に優雅に、なおかつ情熱的に踊りを披露してみせる。

「やだ、二人ともダンスうますぎ。もっと練習してくればよかった」

エレンが密かに感心している。

その後、ゲストも交えて、参加者全員が総当たりで一通り踊るまで続く社交ダンスが始まる。

宴もたけなわというところで、ダンスフロアにピエスモンテの一つであるクロカンブッシュが運び込まれてくる。

側面には、カスタードクリームを入れた小さなシューが、煮詰めた飴で接着されている、サン・フルーヴ帝国の結婚式の際に、ウエディングケーキとしてよくふるまわれる伝統的な祝い菓子だ。

シューは子孫繁栄と豊穣を表しているという。

このシューを割りながら外して新郎新婦が踊りつかれた列席者に配る。ロツテほか、エメリツヒの妹たちはしれっと三回ほどおかわりに行っていた。甘党一族なのは相変わらずである。

レストランの中庭に設置されたシャンパンタワーのようなものも豪勢にふるまわれた。

（今日は少しだけなら飲んでもいいかなあ）

こちらの世界に来て以来、久しぶりのアルコールを解禁して嗜むことにした。

宴は朝まで続いて、ファルマは少し飲みすぎて翌朝起こされるまで休憩室に運ばれて寝てしまっていた。

エレンは眼鏡をなくしていた。

## 9 章 4 話 定時株主総会にて（前書き）

途中の図は2回クリックすると高解像度版になります。

## 9章4話 定時株主総会にて

1152年7月1日。

この日のファルマは正装し、少し緊張した面持ちで帝都のオペラハウス、オペラ・ガレニーの舞台袖にいた。

オペラハウスを借り切り、異世界薬局グループ定時株主総会を主催するためだ。

異世界薬局とその関連店舗は三年前、様々な方面から要請を受け、グループ会社としてサン・フルーヴ市場へ上場した。

総会会場はすでに満員で、招集通知を受けとり全世界から集まった投資家たちが熱い視線を送っている。MEDIQUEの石嶮セツトのお土産もありだ。

「株主の皆様、本日は会場にお越しいただき、誠にありがとうございます。最高経営責任者（D G）ファルマ・ド・メディシスと申します。これより、異世界薬局グループ、第4期定時株主総会を開催します。本日は取締役、監査役、執行役員全員が出席しております。事業報告ののち、質問を頂戴いたします」

ファルマはオペラハウスの舞台の中央でスポットライトを浴びながら挨拶に立ち、前もって配布した、招集通知と呼ばれるレジュメを示しながら話す。

「本日の総会における議決権の状況をご説明します。株主の皆様が行使可能な議決権の数は……」

異世界薬局グループは急速な成長を遂げ、その一挙一投足に注目が集まっていた。

レジュメには企業概要や店舗の展開状況、決算などの情報が掲載されている。

## 会社概要

Le groupe DIVERGIS MUNDI PHARMACY (異世界薬局グループ)

代表者/創立者： ファルマ・ド・メデイス (Falma De Médicis)

資本金： 4.5 Milliard Frune (4.5億フルン)

営業利益： 6.3 Milliard Frune (6.3億フルン)

総資産： 420 Milliard Frune (420億フルン)

単体従業員数： 214 employés (214名)

連結従業員数： 1538 employés (1538名)

発行済み株式： 3400万株

株主： 12536名

主要株主： Falma De Médicis (35%)  
Elisabeth I (33%)

8名の監査役から、監査結果に間違いがなく適正であり、指摘事項がないことを通知される。

連結計算書類の監査を受けたファルマは報告事項を告げる。

「事業の進捗と成果についてご報告します。異世界薬局グループは1145年にエリザベート二世皇帝陛下御勅許のもと、公合同企業として創立しました。創立以来、地域の保健医療を担う公共性の高い事業として店舗展開を進め、現在、世界各国の地域の皆様のご要望の声に支えられ、当期までの事業規模は国内直轄7店舗、ヘル

スケア部門4店舗、国内業務支援819店舗、国外パートナーシップを結んでいるのは136店舗にのびります」

上場以来、株価は常に高騰し続け、世界最大規模の製薬会社となった。

医薬品部門においては他社の追随を許さず、世界市場の寡占状態となったため、他国では独占禁止法に類する法律で排除措置命令を下されたこともある。

競合他社がなく、患者や顧客にほかの製薬会社から薬を買う選択肢がないことは、ファルマにとっても歓迎できる状況ではなかった。帝国医薬大の教え子たちが独立して競合他社にでもなってくれないかな、などと考えていたりもするが、薬師たちはこぞって異世界薬局関連会社に就職したがつているため、他社が育つのは暫く時間がかかりそうだ。

「現在は、中期成長戦略1150→1155に基づき、継続的事業拡大と、企業価値の向上、個別事業課題の克服を当面の重点課題と位置づけ取り組んでいます。医薬品事業は、各工場の稼働にともなう輸送費の縮小によって大幅に原価を押し下げ、薬価に反映することができました」

これほどの事業急拡大をみせたのは、異世界薬局の薬や、専属薬師らが提供する医療が、人々の健康を守り、かつてこの世界で不治であった病、例えば黒死病や結核、天然痘から、確実に人々を解放しているからだ。

世界中の人々が、まぐれ当たりではなく再現性のとれた薬の効果を実感し、質の高い医療の提供と医薬品の供給が続くことに期待を寄せているからだ。

そのためなら、王侯貴族はよろこんで財を投じ、庶民は評判を広めた。



異世界薬局が関連店舗に薬を求めに行けば、治癒を期待できるようになった。

世界中どの薬局薬店も異世界薬局の薬を店に置きたがり、なければ患者は店主に詰め寄り、入れてくれと懇願する。

もはや異世界薬局の薬がなければ、どの国も立ち行かないところまできていた。

異世界薬局は国内外の医療インフラの中枢を担っているため、利益のほとんどを設備再投資と研究開発、人材育成に回している。帝国の薬剤生産拠点として、マーセイル工場に加え、私費を投入してオクタシニー工場を建設し稼働させている。

その他、企業、個人を問わず献金としてファルマのもとに集まる莫大な資金は、ほとんど手元に残しておかない。

投資家や投機家にはなく患者に目を向け、患者に還元している。それがまた、更なる評判を呼んでいた。

それでも純利益は前期比26倍増、過去最高を記録している。ファルマの言葉に、陶醉に浸っているかのような表情で、人々が耳を傾けている。

「グループが大きくなっても、私たちの姿勢は変わるべきではありません。常に患者様のニーズとご満足を中心に置き、安全で質の高い医療と医薬品、一般用医薬品をお届けするべく、お客様本位の視点での品質の向上を目指してまいります。そしてもちろん、グループの持続的運営のためには、グループ構成員の *Being-être* (Wellbeing) の実現にも取り組んでまいります」

<i604644—2496>

その後は事業別の概況を説明する。

異世界薬局総本店の職員にも入れ替わりがあった。

現在の職員は、9名。

宮廷薬師（管理薬師）　ファルマ・ド・メディシス（Falma  
De Médicis）  
一級薬師（主任薬師）　エレオノール・ボヌフォワ（Eleon  
ora Bonnefoy）  
一級薬師　アメリ（Amélie）  
一級薬師　ラルフ・シエルテル（Ralf Schärtel）  
一般従事者　法務・事務　セドリック・リュノー（Cédric  
Luneau）  
一般従事者　庶務　ルネ（Renée）  
一般従事者　庶務（非常勤）　シャルロット・ソレル（Char  
lotte Sollier）  
連絡人　トム（Tom）

新たな薬師に加わったのは平民一級薬師アメリと、プロセン王国出身の一級薬師ラルフ・シエルテルだ。

彼、彼女らは帝国医薬大総合医薬学部卒のファルマの教え子であり、正規の教育を受け、サン・フルーヴ帝国の一級薬師の資格を持っている。

異世界薬局での就職を希望し、135倍にも上った採用試験の狭き門を突破して雇用された優秀な薬師たちだ。

22歳のアメリは完全記憶能力を持っており、卒業試験も筆記や実技では満点で優秀、人当たりもよく理想的な薬師だ。

金髪紫眼でスレンダー体形の美人なためか、常連客にも人気がある。

誰もが憧れる完璧人間と思いきや、一週間に一度はランダムで寝坊、遅刻する癖があり、時間に厳しい帝都内の薬局薬店の面接を受けられず、あるいは試用期間中に軒並み落ちたという逸話を持つ。

このため、本人の自己肯定感はすこぶる低い。

ファルマは「フレックスタイム制で雇うから、起きてから来てくれたら」と言って構わず採用した。

異世界薬局以外の就職は難しそうだったが、午後のシフトに回すことで今のところはつらつと就労している。エレンも彼女の遅刻癖についてはあまり気にしていない。

23歳のラルフはおっとりとした眼鏡の好青年で、紫髪紫眼で高身長のためか女性ファンも多い。

彼は成人してから患ったギラン・バレー症候群の後遺症で重いものが持てない。

ギラン・バレー症候群とは炎症性多発神経障害で、発症後8週間までに神経障害が起き、筋力低下、重症者では重度の呼吸麻痺、生命を脅かすほどの自律神経機能不全が生じる。

8割は治療もせず自然治癒で回復するが、2割程度は後遺症から回復しない場合がある。

彼はその2割のほうで、弛緩性筋力低下がまだ残っている。

ファルマも治療を試みたがまだ回復には至っていない。

日常業務でそんなに重いものをもつことはないから、ということを採用した。

ファルマは、優秀でさえあれば、就労に困難を抱えた薬師を優先して採用することになっている。

庶務のルネは、16歳。異世界薬局の近所で飴やウェハースを納入している菓子店の經理をしていたが、店主が高齢で店をたたむため路頭に迷いそうと言っていたので採用した。

ルネが常勤になったので、宮廷画家として多忙を極めていたロツテが、画業に本腰を入れるために異世界薬局では非常勤になった。

セドリックはアガタから人工関節の手術を受け、ついに変形性膝関節症から解放された。

最近リアルテニスとも呼ばれるジュ・ド・ポームにはまっていた、週末になるといそいそとコートに出かけてゆく。

遠征を通じてポーム仲間もできたらしく、夜遅くまでお茶をして帰ってくるのがいつものコースだ。仕事もますます充実しており、

異世界薬局グループの経理責任者として薬局の収支を統括している。相変わらずの堅実な仕事ぶりに、ファルマも頼もしく思っている。

ロジェ、セルスト、レベッカはそれぞれ異世界薬局直営店の店主としてのれん分けのような形で新店舗を持つて繁盛させている。

直営店はファルマから直接教育を受け、認定試験に合格した一級薬師の営む店で、屋号は本店と同じ「異世界薬局」が用いられる。

異世界薬局13区マーレ支店店主　ロジェ・デ・バツケル（Roger de Bakker）　従業員3名。

異世界薬局14区モンスーリ支店店主　セルスト・バイヤール（Céleste Baillard）　従業員4名。

異世界薬局18区レオン支店店主　レベッカ・デュトワ（Rébecca du Toit）　従業員3名。

異世界薬局のグループ企業としては、4つのブランドを持っている。

各ブランドの店主たちも株主総会ではかしこまった様子で前列の席に参集し、経営状況を説明するファルマの話を食い入るように聞いている。

化粧品ブランド：メディーク（MEDIQUE）

店主はキトリ・アルシェ（Quitterie Arche）、貴族出身の一級薬師。

出産を機に前雇用主から契約を切られた既婚薬師らを束ね、肌に優しい薬用化粧品の開発を行っている。メディークは帝都の化粧品の35%のシェアを誇っている。

オーラルケアブランド：8020（Quatre-vinghts vintgt）

店主 テランス（Terence）はファルマと出会った前から帝都で歯科専門の平民医師として開業していた青年で、抜歯や口腔外科手術を得意としていた。

ファルマと出会ってからはずぐに抜歯する方針を改め、詰め物での虫歯治療や、歯科予防を中心に行うようになった。

スポーツ・介護用品ブランド：ヴェティメンツ（Vêtements）。

店主はノエミ（Noémie）、もとはサン・フルーヴ・クチュール組合に在籍し、オートクチュールを手掛けていた人気のデザイナーだ。前衛的でかつ機能的なデザインを次々と生み出し、スポーツ用品に革命を起こしている。

下着ブランド：リヴィエレ・ドウ・マタン（Rivière du matin）

下着ブランドは、現在帝国内に14店舗を展開し、男性部門と女性部門に店舗ごと分かれている。

女性下着部門責任者デボラ（Déborah）は平民デザイナーで、高級下着から庶民の普段使いの下着まで、幅広く取り揃えている。

これまでにこの世界には存在しなかった生理用下着に加え、生理用ナプキンなどの生理用品を扱っている。

男性下着部門責任者 エタン（Ethan）はデボラの弟の服職人で、ファルマの意見をもとにそれまでシャツと一体化していた男性下着を独立させ、より付け心地のよいものへと改良した。

綿のインナーとボクサーパンツのような形状のものは売れに売れて、生産が追い付かないほどだ。鎧の下に着用できるアンダーウェアでヒットを飛ばしている。

異世界薬局本店と業務提携をしているのは、帝国医師ギルド、帝

国調剤薬局ギルド、帝国薬師ギルドだ。

帝国医師ギルドのギルド長はアガタ・メランション（Agathe Melanchon）。

84歳の外科医アガタは80歳で白内障を克服してからというもの、消化器、腫瘍外科を中心に年間平均50例の外科手術を行っており、その成功率の高さから、アガタのバラ屋敷には長蛇の列ができ、手術も半年待ちだ。

名実ともに帝都一の町医者として繁盛し、年齢による衰えを感じさせない。

彼女の周りには以前のように弟子たちが集まり、卓越した手技の継承を受けている。

帝国調剤薬局ギルドのギルド長は夜明け薬局のピエール（Pierre）。

ピエールは順調に調剤薬局ギルド長としてのキャリアを積んでおり、帝都のドラッグストアの支援や医薬品流通の管理を行っている。他国の薬師ギルドからも意見を求められたり、顧問のような役割を果たしている。

異世界薬局には週に二回ほど、ファルマの出勤日に現れ、ファルマと話し込んで安心したように帰ってゆく。人生の恩人と言ってはばからないファルマに対しては恩義を感じているらしく、その忠誠心はギルドのどの薬師より高い。

帝国薬師ギルドのギルド長はジュリエット（Juliette）。彼女は異世界薬局グループのパートナーの中でも異色の経歴を持つ。

前ギルド長ベロンの一番弟子で、トゥルーズに店舗を持っていた。ギルドの幹部らが黒死病に感染して亡くなったとき、帝都にいなかったために死を免れ、ギルド再建のために帝都に戻ってきた。

ジュリエットが帝都に戻ってみると、薬師ギルドから異世界薬局

への人材流出が相次ぎ、残った店も皇帝の勅令や神殿からの取り締まりで扱える生薬や伝統薬が激減していた。

売上は散々で、困窮から錬金術師へ転身した者も少なくなく、一時ギルドは存亡の危機に立たされていた。伝統あるギルドをつぶすぐらいならと、ジュリエットは異世界薬局の傘下に下る決断をした。ところが、店主ファルマは生薬や伝統薬の存続を望んでおり、有害な原料を廃止し、レシピを整理して効果のあるポーションなどの開発に協力した。

今では、昔ながらの伝統薬を愛用する人々の愛顧に支えられ、市民に必要とされる伝統薬店ギルドに生まれ変わっている。

薬師ギルドの紋章の一部には、異世界薬局と提携した証である紋章モチーフが存在する。

異世界薬局の提携店であることを確認して、安心して店に入ってくる客も少くない。

ジュリエットは今、新作ハーブティーの開発に力を入れている。

各事業の説明を終えた後、大喝采の中、彼らの興奮のただなかに、ファルマは重大決議を総会にはかった。

「続きまして、決議事項をご報告します。私、ファルマ・ド・メデイシスは本日をもちまして最高経営責任者を退き、後任として現CEO、エレオノール・ボヌフォワが最高経営責任者に就く人事案を報告し、決議を行いたいと思います」

ファルマの発表に拍手喝采を送っていた株主たちは突然、奈落の底にたたき落された。

何故だ、やめるな、困る、ふざけるな、殺す気か、などと怒号が飛び交う。

ファルマは押しも押されもせぬ、医薬業界のカリスマ経営者でもある。

ファルマがD Gを退けば、ファルマとエリザベスが市場に出回る発行株式全体の6割を売らなかつたとしても、株価は暴落、経営破綻、異世界薬局グループの株券は紙くずと化す可能性もある。

株主たちが承認するわけがない。

「私も引き続きC O Oとして取締役にとどまり、新D Gのバックアップをいたしますので」

人事案は反対多数ではあつたが、ファルマが株式を35%取得し、賛成に回つた聖帝エリザベスの代理人が33%を保有していたため、難なく可決された。聖帝にはあらかじめ根回しをしていたのだ。

怒号に交じつて、悲痛な声で質問が飛ぶ。

「なぜ、いま、おやめになるのですか！」

「私にとって大切な、ほかのことに集中したいからです。それは一時的なものなので、今後また状況が許せば復帰するかもしれません」

ファルマはそうとしか言えない。

「そんな無責任な！」

「かもしれないでは困ります。それは、異世界薬局の運営、ひいては世界の保健医療よりも大切なことなんですか」

「はい」

ファルマは大批判も覚悟で頷く。

それでも会衆は納得せず、株主総会は大混乱の解散となつた。

退任の話はグループ幹部にはすでに伝えていたことで、幹部は全員が納得している。

カーテンが下がつたあと、ピエールが舞台袖に下がってきたファルマに声をかける。



重苦しい雰囲気が漂っていた。

「案の定の大反対でしたが、私は支持しています。カリスマ経営者はすぐれた後継者を育てられない場合が多いのです。組織の安定化を図るなら、むしろ絶頂期のうちに後進を育てておくことは間違っていないと思います。私もギルド長に居座るのではなく、そのようにしようと思いました」

ピエールの目には涙が浮かんでいる。

「大丈夫かしら……」

新DGに就任したエレンはあまりの騒動を目の当たりにして青ざめている。

エレンは身の危険すら感じるであろう、株主たちの混乱ぶりだった。

ファルマは鳥肌がやまないエレンを落ち着かせるように声をかける。

「数日もたてば落ち着くよ。俺の予想なら、明後日には」

「あなたは責任感が強いから敢えて報告したのだろうけど、今日集まった人たちにはこの世の終わりのように聞こえたでしょうね」

「そうだろうね」

「復帰してくれることを信じているからね」

「そうだね。胸を張って戻ってくるよ」

ファルマはエレンの目を見て決意を伝えた。

エレンも深く頷いてその言葉にこたえる。

「では、それまでは任せて。みんなでしっかり守っておくから」

ファルマは交代の理由をエレン達にはつきり伝えたわけではない。それでも、エレンは理由を聞かなかった。

最大限に樂觀したとしても、身支度だけは整えておかねばならなかった。

どんな順番であれ、最後は全員いなくなる。

終わりに備えておくことは、決して悲しいことではない。

もしファルマが急にいなくなったら、せつかく築き上げたものが瓦解してしまいかねない。

だからこそ手続きは必要だ。

「今日、ファルマ様は頑張ったので、皆さんで打ち上げ行きませんか？」

ロッテが少し空気を読まない風の、その実空気を読みまくった提案をした。

「いいね。甘いものが食べたいな」

「賛成です！ お忍びがバレないように覆面していきましょ」  
「怪しすぎるでしょ」

翌日、異世界薬局グループの株価は創業者退任の速報を受け一時30%近く暴落し、関連株も軒並み下落し、サン・フルーヴ市場の恐怖指数は跳ね上がり、全面安となってサーキットブレーカーが発動する事態となり、暗黒の一日として帝都新聞の一面を飾った。

<i606664—2496>

ファルマのもとには殺害予告も届いたが、ファルマは気にしなかった。

翌日までにはファルマの目論見通り、エレンが最高経営責任者に

就任する人事案が大きく報道され、押し目買いをされて株価は元の価格に戻り、高値で引けた。

## 9章4話 定時株主総会にて（後書き）

D G : d i r e c t e u r   g e n e r a l ,   最高経営責任者。  
C E O と同意。

### 【謝辞】

北極28号様、株価の値動きにつきましての間違いを御指摘、修正案いただきありがとうございました。

### 【追記】 2021/12/13

・ E l i s a b e t h   I は I I ではと複数の方から誤字指摘をいただいています。サン・フルーヴ帝国皇帝時代はエリザベート二世で現在は神聖国大神官も兼ねた聖帝エリザベス一世ですのでこれであっています。スペルは同じです。

## 9章5話 エレンのオクタシニー工場視察

1152年7月11日。

ファルマとエレンはサン・フルーヴでの、マーセイル工場に続くもう一つの生産拠点、異世界薬局直系、オクタシニー工場の視察へと向いていた。

オクタシニーは南フルーヴに位置する、ファルマ個人に与えられた大封土だ。

避暑地や避寒地もある、山間部の穏やかな気候を利用したワインの名産地でもあり、温泉などにも恵まれる。

観光地も多く、水道橋や鍾乳洞、断崖絶壁の上に広がる古い村は人気だ。

オクタシニーの土壌成分は石灰質、砂岩など岩質だ。

岩肌に見える雄大な山脈を望むオクタシニー工場では、多くの専従の従業員を抱えて操業している。

オクタシニー工場では酒類原料アルコールの工業生産、食酢、エーテル、エステル、エチレングリコール、ポリエチレン、スチレン、溶剤などの生産が行われている。

なかでも重要なのは、共沸蒸留技術を利用した無水アルコールの生産だ。

すでにバイオマスを利用した無水エタノールの製造についてはマーセイルでの実績があったのだが、ワイン工場で選果に漏れた廃棄予定のブドウや、搾りかすなどを再利用したバイオマスの仕入れには事欠かなかった。また、封土内には老舗のワイナリーも多く、廃業して間もないワイン工場を利用して新工場へとリフォームすることができ、失業した従業員を雇用することができた。

その意味でも、工場の運営にはうってつけの土地柄だ。

「ワイナリーに寄ってもいいかしら」

ワインの蒐集に目がなく、チーズも好きな同行のエレンがそわそわしている。

ファルマもつられてしまいたかったが、正気に戻った。

「先に工場の視察だよ、ワイナリーはあとにしよう。最高経営責任者（D G）が酒臭い状態で視察に行ってはいけないからね」

「そ、そうだったわね……では後にしましょ」

エレンは残念そうだが、致し方ない。エレンはソフィもつれてきていた。

捨て子だったソフィは5歳となり、赤子だったところと同じ性格のまま、活発な令嬢となった。我儘放題だったブランシュとは違って、素直で聞き分けのよい子なのだが……。

無属性という珍しい属性でもあり雷の神術を使うが、興奮すると電撃を放ってしまう癖は相変わらずで、帝都のテルマエに一緒に行って興奮したところ、電気風呂にしまったとのこと。

本人は捨て子だという事実は知らされず、エレンの年の離れた妹だと思っている。

おおむね仲良し姉妹だが、喧嘩をしたときは別だ。

エレンは「ちよつと強く言ったり喧嘩すると、忍び寄ってきて後から電撃やられるのよ……しかも外出の直前に……髪の毛が爆発して大変なの」と悩んでいた。そんな妹は嫌だ、と思うファルマであるが、ファルマも相変わらずなつかれていた。

エレンには放電の仕方を教えておいた。

「ソフィちゃんはぶどうジュースかしらね」

「しろなの。しろぶどうがいいの、マスカットじゃないのよ」

ソフィにはこだわりがあるようだ。

ファルマにはマスカットと白ぶどうの味の区別はつかない。

「白なんだ。赤ぶどうはアントシアニンが少し苦く感じるのかな。

じゃあ後で白ぶどうジュース飲みに行こうね」

「じゃあ、いいことにしとく」

電撃は痛いけど、基本的には素直なので助かる。

「ようこそお越しくださいました。従業員一同、お待ちしておりますました！」

工場に到着し、エレンとファルマはオクタシニー工場従業員の歓迎を受ける。

「エレオノール様、D Gご就任おめでとうございます」

祝いの言葉を述べる工場長はキアラだ。

キアラはマーセイル工場をテオドル・バイヤールに譲り、オクタシニーに工場立ち上げのためにオクタシニーへ赴任した。

オクタシニー工場では神力ではなく、一から十まで電力を利用した設備の稼働を行っている。

マーセイルでは神術陣を利用した発電システムを利用しているが、オクタシニーではテートー川の水を利用した水力発電で、安定した電力を工場内に引き込んでいる。

「ありがとう！ 頼りないかもしれないけど、結果を出して頑張るわ」

ワイナリーに先に立ち寄ろうとしていたとは口が裂けても言えない。

「ええ、当方も全力でお支えます。オクタシニー工場の運営も軌道にのってきましたよ。医薬品原料も、製品も大幅増産しています。こちら、今季の生産実績報告書です」

「ありがとう、すごいじゃない。来季からと言っていた新しいラインも立ち上げたのね！」

「はい、最近の帝国の好況で建築原料が高騰しているため、工期は前倒しにしております」

キアラは淡々と報告する。

進捗通りどころか前倒しにしてくるあたり、彼女のマネジメント能力の高さを裏付けている。

「さすがね。新しいラインの電力は足りている？」

「現生産体制ですと夏場に少し不足しますが、そのぶん冬場の生産を管理して間に合わせることができます」

「バッテリーや非常用電源もうまく利用してね」

「かしこまりました」

ファルマはソフィの相手をしながら、エレンとキアラのやり取りに口を出さず聞いている。

DGを引き継いだので、意見を求められれば助言するが、できるだけ当事者本人たちでやってもらう。そうすることで、ファルマも今後の憂いが一つずつ解消できる。

暫くはエレンも戸惑うことが多いだろうが、これまでのファルマのやり方を覚えていて、それに新しいアイデアを足してくれればいいと思う。



キアラの案内で、工場内を見て回る。

プラント内部には豪快な音を立てて稼働する連続式蒸留装置がそびえたち、存在感を放っている。

巨大なタンクに貯めこまれた原料は、フィードポンプで連続蒸留塔へ下から上へと運ばれ、パイプを通って余熱をかけ、沸点の低いものから順に温度の差によって分離してゆく。異常検出器があるので、作業員はつきつきりではなくてよく、時折見回りにくるぐらいだ。蒸気を液体へと戻す過程で潜熱を奪うための大量の冷却水は大事な役割を果たしており、水の神術使いのかかわらない冷却システムが肝要だ。

温度管理の制御装置などは、新しく創設されたサン・フルーヴ工科大学と共同開発したものだ。あのキアラの濃かった錬金術師テオドルも、工場長となってからというものの、最近ではあまり爆発事故を起こさず、次々と画期的薬剤合成、生産方法を開発している。普通に安全な技師になってくれたので、ファルマも安心する。優秀な部下を複数抱えたことで睡眠不足もすっかり解消され、肌つやが良くなっている。

オクタシニー工場とマーセイル工場間でも、通信で緊密に連絡がとられている。

サン・フルーヴ工科大学の技術革新により、このころまでには通信手段はファクシミリへと発展していた。ファルマが特に何か入れ知恵をしたわけでもない。

基礎知識を学ぶ人口が増えれば、技術発展も自然と起こるものなのだろうとファルマは考える。何もかも教える必要はない、地球の文明に沿うことが正解とも限らないのだから。新たな発明が生まれ、ファルマも知らなかった知識や法則が異世界に普及してゆく。

工場見学視察のあと、オクタシニー工場でもまた従業員らと記念撮影を行った。

専従職員は180名、彼らもマーセイル工場職員のように誇りを持って好待遇で働いている。工場内の応接室でお茶をいただきながら、エレンはキアラと世間話をする。

話題はD G交代の時の話になる。

「でも交代のときは帝国中の株が暴落して、それが世界市場にも波及して暗黒の木曜日と言われる、異世界薬局のせいだって証券取引所に呼び出しをくらったのよ。ファルマ君は何か？　って開き直ってるし。私が平謝りよ」

「開き直ってないよ、ただ交代しただけです。経営体制に変更ありませんって説明したんだよ」

「それで済むわけないでしょー！　もう」

ファルマはソフィと手遊びをしながら話を聞き流している。

キアラは薄く微笑む。

「ふふ、経営陣も大変なのですね」

エレンがふと気づいてキアラに声をかける。

「キアラさんは何か心配事はないかしら、従業員の管理もうまくいってる？　補佐役はつけておいたけど」

「私は満足して働いておりますわ。しっかりお休みもいただいておりますし、秘書もつけていただいておりますがとうございます」

「キアラさん、違ったらごめんね。ちょっと疲れてない？」

「……ええ」

キアラは暫くためらったのち白状した。

「体調不良？」

「いえ、病気とかではないんです」

ファルマはそのやり取りに驚いて顔を上げる。そう言われてみれば、キアラは以前より痩せていた。病的というまでには痩せていないので気づかなかったが。

年二回の健康診断でも異常はなかったはずだ。

エレンはティーカップを置き、背筋をすっと伸ばして真剣な顔でキアラに向き合う。

「込み入った話は聞かないけど、人生いろいろなことがあるし、ずっと同じように働けるわけではないから、しんどかったら働いたり休んだりしていいからね。また戻るつもりがあれば、ポストはきちんとあけておくれ、無理だけは禁物よ。私はね、無理は嫌いだし、一緒に働く皆にはそうさせたくないの」

「ありがとうございます。私事なのですが……」

彼女はもと医療神官なので、その流れで生涯独身を貫くつもりで、伴侶はいない。

それでも天涯孤独ではなく母親はいて、一般的な神官の出自とは異なっている。

「母が、段々と弱っていてもう長くないかもしれないです。何も食べない日もあると聞いてオクタシニーに呼び寄せて同居しようとしているのですが、知らない土地には来たくないと言っていて。オクタシニーまでの旅もつらいのかもしれない」

キアラのわずかな表情の曇りと痩せから悩み事を読み取るのは、ファルマでは行き届かなかった部分だった。

キアラはいつも通りに見えたし、何か困っているようには見えなかった。

（エレンはすごいな。いい経営者になりそうだ）

ファルマはエレンの気配りに感心する。

「まあ、それはお気の毒に。お母さまはどちらにお住まいで？」

「マーセイルに住んでいます」

「あら、だったらマーセイル工場に戻る？」

「いいんですか！？」

キアラは驚き、声は明るくなる。

「でも、こちらの工場は……立ち上げまでと仰せつかったのですが」

「工場長のテオドルさんと配置転換になるかもしれないし、テオドルさんが来ないと言えば新たに代任をたててもいいわ。やりくりするのが私の仕事、代任のことは気にしないで」

「すみません、私の都合であなたやテオドルさんに迷惑をかけるかもしれない」

キアラは申し訳ないという表情をしている。

「いえ、転勤を命じたのは雇用者の都合なの。前からファルマ君が言ってるけど、人生が先、仕事はあとよ。お母さま、おいくつ？

何か病気をわずらっておられるのかしら？」

「59になります、体がだるく、息切れがして食が細くなつて段々と痩せているようなのでもう歳のせいなのかなと思いますが。医者にもかかりましたが、歳でしょうと」

地元の医師の経験に基づいた診断を疑うのは勇気があるが、エレ

ンには客観的な診断方法を持っている。

それはファルマの残した教科書の知識と、医薬学血液検査、生化学検査、生理機能検査などの臨床検査だ。

「ほかの症状はない？」

「汗をよくかくと……関係ないかもしれませんが」

「関係あるように思えるわ。一回、お母さまを診せてもらってもいい？」

エレンはキアラの手を取った。

「まだ、全然歳じゃないわよ」

「えっ」

「平均寿命が50代であつたかつての世界とは違う。寿命で考えないで」

80歳をこえたアガタだつてまだ現役で、この年齢になったらもう、という扱いをすべきではない。

「歳をとつたからといって、命の価値が減るわけではないわ。統計は統計、個人の命と向かいあふ必要があるでしょ」  
「……」

キアラは不意打ちを食らつたような顔をしていた。

エレンは優しく諭すように語り掛ける。

「常識を破つて、世界を変えていくの。私たちはそういう会社ですよ」

エレンがファルマに視線をくれるので、ファルマも力強く頷き返

す。

「エレンの言う通り、キアラさんのお母様のことは気になるよ」

世界は変わってゆく。

完全なる地球のコピーから脱して新たな世界を形作る、その道のりを応援したいとファルマは思った。

「そうなんですね……つい、以前の常識で、もう助からないものと見切りをつけてしまっていました」

「必ず治るとは言えないけど、もしかしたら何かできることがあるかもしれない」

ファルマが補足する。

やってみないことにはわからない。がっかりさせるかもしれない。キアラは「でも……」と躊躇していたが、決心がついたようだ。

「ありがとうございます、手配させていただきますね」

「急ぎましょう」

「わかりました、数日以内には」

「まずは仕事を休んで、マーセイルに戻りましょう。転属や後任関係はそれからしましょう、今はお母さまのことだけ考えて。そのほかは何も考えなくていいから」

血の通った経営はこういうものかもしれない。

社会貢献の前に、仕事に携わる人が幸せでなければならぬ。とファルマはエレンの姿を頼もしく見ていた。

「私はね、どんな素晴らしい知識も薬も、いざ身の回りの人が病に倒れた時、助けられなければ意味がないと思うのよ。身近な人を助

けられるような薬師になりたいの。薬の生産に携わる人が、辛い思いをしてはいけなわ」

ウエルビーイング（Bien-être）という概念を社是に取り入れようといったのはエレンだ。

「ファルマ君の背中を見ていたら、社員が勘違いして過労一直線になってしまいわ」と過労への戒めのためにもうけたいといった。エレンはそんなことを考えていたんだな、とファルマは反省するやら、感心するやらしたものだ。

工場の視察を終えて、その日のうちにキアラを帰宅させてエレンがその場で介護休暇の手続きをし、ファルマたちはエレンの楽しみにしていたワイナリーに到着した。

ソフィはすでに寝ていたが、エレンが「しろぶどう」と言って起こすと「どこどこ!？」と飛び起きて目を爛々と輝かせていた。

シャトーの主に歓待され、ファルマはにこやかに挨拶をする。

「新領主のファルマ・ド・メディシスと申します、本日はお時間をいただきありがとうございます」

「おお、あなたが領主様ですか。まだお若い！ 数々のご評判はかねがね。ご丁寧にお手紙もありがとうございました。どうぞわがシャトーをご覧ください、最高級のワインを取り揃えておりますよ」「恐縮です」

ワイン業界におけるシャトーとは城という意味だが、城ではなく、城のように大きなワイン醸造所の生産者を意味する。

広大なワインロードを散策しながら、生産者からぶどうの品種についての解説を受ける。

「ご存じの通り、高級な赤ワインは黒ブドウから生まれます。当シヤトーのブドウは温暖な気候のおかげで果粒が大きく、皮が薄いものをえりすぐって継代し、高級品種を育てています。このため、熟成期間が短くても苦みの少なく芳醇なワインが楽しめるのです」

「へえー……」

「このたび、我がシヤトーが、1の五大シヤトーに選ばれたのですよ」

ワインに対しての格付けは最近、輸出品が増えてきたため生まれただ。1と5とのランクにわけられ、1がすぐれている。1を得たシヤトーは世界でも五箇所しかないのだそうだ。

「それはおめでとうございます」

ファルマもエレンも興味深く聞いている。

ソフィだけは視察の際に馬車で昼寝して我慢していたぶん、「しろぶどうは？」「しろぶどうは？」とうるさかった。

「白ぶどうはですね、癖がなく、お子様にも優しい味わいの品種を取り揃えておりますよ。あとでぶどうジュースをふるまいましょう」  
「わあい」

醸造所でアンティークワインのテイスティングのち、チーズを中心とした郷土料理に、ワインをいただく。

「はー、最高！ 仕事のあとの一杯は体にしみるわ」

エレンはお目当てのものにありつけて恍惚としている。



「きゃー、これこれ」

ソフィも小さい手で大きなグラスを持って白ブドウジュースをいただく。

ファルマはソフィがグラスを割らないかとハラハラしながら見守りながら、サン・フルーヴの夏の風物詩でもあるロゼワインをいただいた。

このワインはブドウをつぶして、発酵途中で果皮を取り出すセニエ法という方法で作られているようだ。

赤ワインと白ワインをブレンドする方法もあるが、サン・フルーヴ帝国では禁止されている。ぶどうの果皮から得られる色をもってロゼワインとするべきであるという考えが根強く、伝統を守らない生産者には罰金が科されることもあるようだ。

製薬業界において効率化は美德なのだが、効率化がそぐわない、手間暇かけて作られるのが美德とされる領域もあるな、とファルマは思い知らされた一場面だった。

数日後、ファルマとエレンはマーセイルのキアラの実家に向かった。

キアラはすでに介護休暇に入っており、母親の身の回りの世話をしていた。

母親は寝たきりになっており、もう殆ど食事をとれない状態だ。エレンはキアラとキアラの兄に案内され、母の寝室に入る。

キアラの実家は地元の名士の家系で、かなり裕福な家だった。

豪華な刺繍の入った天蓋をかきわけてエレンが母親、ブノワトへ挨拶をする。

「はじめまして、ブノワトさん。エレオノールと申します、一級薬師です。キアラさんに取り次いでいただき、拝診します。お加減はいかがでしょうか」

「ああ……そう」

エレンが声をかけるも、ブノワトは反応に乏しいようだ。ブノワトは骨格が浮き出てみえるほど痩せていた。

キアラが命の心配をするのも無理はない。

「エレン、じゃあ俺は外にいるからね」

「うん、あとはまかせて」

貴族独特の事情であるが、肌をはだける可能性のある女性の診察の際には、ファルマは部屋から出て外から中の会話を聞いておく。エレンはキアラにブノワトの現在の食量と食事の内容、排尿、排便回数、睡眠の状況などを聞き、カルテに書きつけながら病状を把握する。

エレンも診眼を使えるが、使わない。

病歴の聴取に続き、血圧、心拍数、体温、採血を行う。

動くときと動悸がするので、日中はほぼ横になっているとのこと。

以前は気にならなかった小さな物音にも過敏になり、夜間はうなされてあまり眠れていないようだ。

食事は取れているのに、何故か徐々に痩せてきている。

エレンが脈をとるとやや速く、発汗とほてりがある。

「お母さまの目は昔からこのような感じですか？」

眼球突出があるようにみえたので、エレンはキアラに尋ねる。

「そういえば、痩せたからか少しぎょろっとしているような」

「そうなのね」

エレンはふとブノワトの喉のあたりに目をとめた。詰襟のボタンが外れていたからだ。

「あら？ 喉のあたりが苦しいですか？」

エレンは気になった。

「失礼します」

エレンはブノワトの喉元のあたりを探る。

甲状腺はびまん性に腫大あり、その表面にふれると平滑で、結節はふれない。

そして……、ほっとしたように一つ頷いた。

「甲状腺腫大と、総合的な症状から甲状腺機能亢進症を疑います。確定のためには、血液検査を待つ必要がありますが、半日ほどお待ちください」

ファルマが後から入室してきて確認し、見解は一致している。

エレンはマーセイル工場に戻り、テオドールに手伝ってもらって血液検査を行う。

甲状腺機能検査のため、FT3とFT4濃度の測定を行う。抗TSH受容体抗体（TRAb）と甲状腺刺激抗体（TSAb）も調べる。

ついでにテオドールにキアラの代打としてオクタシニー異動の打診をしたが「異動はむしろ僥倖」と言っていたので話はすぐにまとまった。

TSH値は低下、FT3とFT4は上昇。TRAbは陽性。予測通りだ。

全ての結果が出そろい、バセドウ病による甲状腺機能亢進症と診断し、すぐに治療薬を一式準備して屋敷に戻る。

「甲状腺機能亢進症のようです。治療の見込みは十分にありますよ」  
「まあ……まさか老衰ではなかったなんて」

キアラはエレンの手際のよさに感心し、母親の命を諦めてしまっていたことを恥じる。

「治療のため、チアマゾールの投与を開始します。チアマゾールは甲状腺ホルモンの生合成をブロックしますので、甲状腺ホルモンが過剰になった状態を抑えることができます」

「チアマゾールはマーセイル工場でも製造していたものですね」

キアラが薬剤名に聞き覚えがあるようで、反応する。

「そうよ、ロジェさんのお店にバセドウ病の患者さんがきたから、それを契機に生産を開始していたのよ。テオドルさんに借りてきたわ」

キアラは自らが製造に携わっていた薬を身内に使えると知って、感激したようだ。

「さあ、お母さまの病気が治るまで、暫く付き添ってあげていて。発熱や喉に痛みを感じたらすぐに言ってね。副作用が強く出ている可能性があるわ。薬の効果が出れば、症状もなくなってくると思うわ」

「ありがとうございます！」

エレンの落ち着いた説明に、キアラは安堵の涙を流していた。

「おつかれさま」

屋敷を出た後、ファルマはエレンをねぎらう。

「今回は俺の出番はなかったね、さすがだよ」

「ロジェさんのところで前例があったからこそよ」

「医学も薬学も、前例というデータと統計の積み重ねだ。臨床医学的データに基づいた診断は、診眼を使った診断よりよほど価値がある」

それでいいんだ、とファルマとエレンは馬を並べて歩く。

「診眼を使える人だけが診断できる、という状況は間違っているからね」

ファルマは自分に言い聞かせるように述べる。

「……」

エレンからの返事はなかった。

彼女も感じているのかもしれない。

少しずつ、ファルマがいなくても、だいたいがうまく回ってゆく状況が整っていることに。

## 9章5話 エレンのオクタシニー工場視察（後書き）

### 【謝辞】

本項は医師・医学博士のなゐが先生にご監修、ご指導いただきました。

ありがとうございました。

## 9章6話 一級薬師アメリの憂鬱

1152年8月1日。

その日の帝都は早朝から気温が上がり、猛暑日となる見通しだった。

異世界薬局本店には長蛇の列ができている。

彼らのお目当ては薬……でもあるが、店内冷房だ。

異世界薬局が採用しているのは神術を一切使わない、地下水のくみ上げを利用した水冷エアコンだ。

原理を教えて、忙しい中フランシーヌ姉妹に作ってもらった。

同様のものは宮殿にも聖帝の部屋や会議室に設置され、この猛暑日の続く帝都では好評だという。

氷の神術陣での冷房とは異なり、湿度を低くできるのもメリットだ。

「今日は特に並んでいるね」

ファルマが薬局の三階の窓から下を眺める。エレンもファルマの隣から覗き見している。

「暑いからかしらね……」

「ではミーンティングを早めに済ませて営業しようか」

DGはエレンに交代となったが、異世界薬局本店の店主はまだファルマなので、会議などはファルマが取り仕切る。

「ええと、アメリさんはまだ来てない……議事録は作っておくからいいよね」

「ミーティングがあるというと必ず寝坊しますよね。どういうことなんですかね。大切な業務にまつわる会議なのに、理解しかねます」

朝いちで鍵を開け、ファルマたちが来る頃には掃除まで済ませている同期入社のラルフ・シエルテルがつぶやく。嫌味を言っているのではなく、事実を述べている。彼は少し、思ったことをオブラートに包まずそのまま言ってしまう癖があった。

「起きないといけないと思うと逆にプレッシャーになるのかもしれないわ。そういうことってあるでしょ」

エレンは苦笑しつつアメリをフォローする。

「ありませんね。普通はないでしょう」

ラルフは信じられないといった様子で首を振る。

ファルマはアメリの普段の行動を見ていて注意欠陥・多動性障害なのかもしれないと考えている。それでも異世界薬局で働く限り、遅刻は問題とならないように周囲が配慮できる。

本人が困っておらず、社会生活を送るのに問題ないなら、治療も必要はないし障害とはいえない。

ファルマはそう考えているが、彼女の二倍働いているラルフが不満を持つ気持ちもわかる。

エレンはあまりよくない状況だと考えたのか、ラルフに向き直る。

「その普通という言い方はよくないわ。ラルフくん、朝は誰に起こしてもらったの？」

「使用人ですが」

住み込みの使用人に、何から何まで朝の支度をしてもらうのは貴



族にとつては当然のことだ。それが日常なので、特に何かしてもらっているとすら感じない。

「私は夜型だから、朝が弱くてね。使用人に文字通りたたき起こしてもらって、食事から身支度まであらゆる事をしてもらえらから出勤することができるの。もし一人暮らしなら、自分では起きられないし、だらだらしてしまいかもしれないわ。環境によってその人の能力も変わってくると思うの。アメリカちゃんは一人で寝起きして、洗濯も食事も全部自分で支度しているでしょう。私たち貴族より何倍も疲れているはず。だからちよつと朝は難しいのかもしれないわ」

アメリカは平民で、家族とは離れて暮らしており、誰も起こしてくれる人がいない。

目覚まし時計を持っているが、鳴つても気づかないのだという。本人の努力ではどうしようもないことだ、とファルマもそう思う。そして、科学技術によってそれらは克服できることだとも思う。

「そうなのかもしれませんね」

ラルフはエレンの言葉を飲み込むことにしたようだが、納得はいっていないようだった。

たとえ平民の出だとしても、自分だったら遅刻はしないといわんばかりだ。

エレンやアメリカと揉めないために、渋々ながら大人な対応をとつたともいえる。

「みなさん！ 朝といえば血糖値、あげたくありませんか？」

ロツテが空気を読んで朝からフルーツジュースを出してくれる。

「なるね。ありがとう、ロツテ」

ファルマもありがたくいただく。  
全員で小休憩をしていると、アメリカが血相を変えて駆け込んだ。  
た。

「おはようございます!」

「おはよう。今ミーティングが始まったばかりよ」

エレンがアメリカに着席を促し、議題を進める。ラルフは追及しないことに決めたのか、すました顔をしている。

誰も非難しない、淡々と進むミーティングに、アメリカは申し訳なさそうに末席で小さくなっていた。

「アメリカさん」

ファルマはミーティングの後でアメリカに声をかける。ファルマの顔を見るや、アメリカは青ざめた顔をしてファルマに謝る。

「ごめんなさい、今日も遅れてしまって。もうクビですよな」

「いやそうじゃないよ。ゆっくり来ていいという契約なのだから気にしないでください。これからミーティングは午後にしましょう、配慮不足でしたね。もっと早く気付くべきでした」

「店主様にそんなふうに言わせてしまうと申し訳なくて……悪いのは私なのに」

ファルマはますます縮こまってしまったアメリカに打つ手なしだ。

「できることは人によって違うから、できることをしてください」

「皆さんには何でもないことなのに。私は甘えているに違いありません」

せん」

涙目になっているアメリに、ファルマはどう声をかけていいものか困る。

彼女は自分自身が甘えているのだと思い込み、自責の念にかられてしまう。

「あの、ファルマ師、折り入ってご相談があるのですが。今月末で……」

アメリが何か重大な告白をしかけた、そんな時だった。

「アメリちゃん、一緒にストックの調剤や発注をしてしまいましょ。今日中にやってしまいたいの」

「えっ、はい！ ただいま！」

「あら、ファルマちゃんと込み入った話だった？」

「いえっ、また後ほど構いません」

絶妙なタイミングで、エレンが気を利かせてアメリを誘った。

ファルマは困ったように二人の後ろ姿を見送る。

エレンが彼女を庇ってくれるのがまだ救われるが、エレンが割り込んでこなければアメリは今月末付けで退職を申し出るところだったな、というのはファルマには察して取れた。

「エレオノール様、私……」

「これ終わってからにしてくれる？ 間違えちゃうから」

二人は在庫の確認を行い、原薬やストックの発注を行う。

エレンはリストと照らし合わせながら一つ一つ確認してゆく。しかしアメリカは表示を見ずにリストに消費期限を書きつけてゆく。

「ちょっとちょっと、アメリカちゃん。なんで見ないの？」

「一度見たら覚えていきますので」

「まさか、期限全部覚えているの？」

よほど驚いたのか、エレンの眼鏡がずりおちそうになっている。

「はい。ロットも覚えています」

「大した記憶力だけど、ちゃんと一つ一つ現物と照らし合わせて確認してね。記憶力の過信は禁物よ。それにほかの薬師が入れ替えているかもしれないわ」

「す、すみません」

何もかも空回りしている。うまくいかない。どうもやることなすこと、人とずれているような気がする。アメリカは居心地の悪さを感じていた。

在庫の整理を終え、店頭に出る。

ひっきりなしに押し寄せる患者を、一人一人対応してゆく。

アメリカはマルチタスクが苦手だ。すぐに気が散ってしまうし、仕事が増えるとパニックになってしまう。

商人の娘のような身なりの、若い女性客の番になった。

彼女は顔が赤くほてっているようだ。

（外が暑いからかしら。それとも熱があるのかしら？）

アメリカは少し注意して、彼女の様子をうかがう。帽子を目深にかぶった彼女は、アメリカの視線から逃れるようにうつむいた。

「このお薬をください」

彼女はアメリカに耳打ちするように告げる。

アメリカは差し出された封筒の封を切り、中に書かれた内容を見てはつとする。

「この薬は……」

「どうか声に出さないでください」

「承知しました。こちらでお話をお聞きます」

アメリカは彼女を個室ブースに通し、鍵をかけた。

異世界薬局に二室もつけられている個室ブースは、鍵をかけてしまえば密室となる。

以前は簡単な仕切りだけだったのだが、デリケートな相談などに適さないため、改装して個室になった。

「ご用件承知しました。詳しく聴取させてください。カルテを作成しますので、お名前等を頂戴しても？」

異世界薬局を訪れる患者の中には識字率の問題で、字をかけない人もいる。そのため、薬師が聞き取って書きつけるシステムになっている。

彼女が名前を名乗ると、アメリカのペンがぱたりと止まった。

アメリカは改めて帽子を脱ごうとしない彼女の顔を一瞥し、落ち着いて語り掛ける。

「あの……もし間違いだったら大変申し訳ありません。あなたはプロセン国のローザリンデ王妃様ですよ」

アメリカは彼女を一度しか見たことがない。

五年前、プロセン王のサン・フルーヴ帝国皇帝への表敬訪問の際、王妃の姿が馬車の窓から一瞬見えた。

しかし、完全記憶を持つアメリカは彼女の顔を忘れなかった。

正体を見破られた彼女は青い顔をして、扇子で顔を隠す。

「まあ……どうして。サン・フルーヴには一度しか来たことがないのよ」

「目のよさと記憶力には自信がありまして。五年前、街道よりパレードで、馬車のレースカーテン越しにですが拝見いたしました。その時のお召し物は緋色のドレスと白のお帽子です。御髪のお色が違うようですが、お顔立ちはそのままです」

「あなた……恐れ入るわ。わたくしは確かに、プロセン王妃ローザリンデと申します」

アメリカがあまりに鮮明に言い当てるので、ローザリンデは観念したようだ。

ぼつぼつと、絞り出すように話し始めた。

「詳しくは訊かないで、望まぬ妊娠をしたの。堕胎薬をいただけませんか。異世界薬局総本店でなら、きつと堕胎薬もあるとすぐる思いで来ました」

「詮索はいたしません、母体の健康にかかわることはお伺いしますね」

アメリカは妊娠の週数、月経歴、分娩回数、出産、流産の状況、現在の体調、アレルギーの有無などを聴取する。

（プロセン王国支店ではなく、変装をして一人でサン・フルーヴの総本店に来たということは……顔が割れていないのを期待しての

ことかしら)

妊娠週数は7週目。妊娠初期だ。すでにプロセン王との間に三人の子をもうけていた。

無事に出産すれば四人目ということになる。

「お薬はいつももらえます？ 今日飲んだらいつおろせるのかしら」  
「あの……おそれながら、堕胎薬は、簡単には出せないのです。神殿法的にも堕胎は重罪です」

堕胎薬は異世界薬局の一級薬師といえど、簡単にアクセスできないようになっている。

総本店を含む異世界薬局系列のどの店頭でも売っていない。ストックも存在しない。

調剤するためには、ファルマに報告する必要がある。

「知っております。それでも、何もなかったことにしなければなりません」

「……何か特別なご事情が？」

アメリカは狼狽するローザリンデに、恐る恐る尋ねる。

本来なら正妻である王妃様のご懐妊はおめでたいこと。

なのに、変装してまで堕胎したいといっているのだから一大事だ。神殿の教義では、堕胎は「子殺し」と結び付けられ、許されざる重罪だ。王妃の不貞は王宮追放もありうる。

薬師には守秘義務があれど、犯罪に与するわけにはいかない。

「おろせなければ……私は殺されてしまいます」

「差し出したことを申しますが、お相手は王様なのですよね？」

「いえ……、私に一方的に思いを寄せていた宰相に……脅されて無

理やり……」

宰相は特徴的な髪と目の色をしており、神術属性も守護神も王とはまったく異なるので、子供が生まれれば王の子でないことがばれる。

宰相に脅されたという証拠は残っていない。

不貞の発覚を恐れ、宰相の手回しで、王妃は口に入るありとあらゆるものに堕胎薬を盛られているようだ。おそらくは中毒による症状で、痙攣をしたことも数度。

王付きの宮廷薬師が毒見を強化したおかげで、もう堕胎薬は盛られていないようだ……依然として状況は最悪で、堕胎できなければ、出産前に王妃が暗殺されるかもしれないという状況だ。

堕胎が成功すれば、宰相の思惑通りではあるが、何もなかったことになる。

「なんてひどい……」

アメリカは口惜しさを噛み殺しながら、王妃に同情する。

「お願いします……あなたも同じ女ならば私の気持ちができるでしょう。おろしてください」

「ご心中お察し申し上げます。しかし堕胎薬を取り扱える薬師が、ここには二人しかいません。そして、それは私ではないのです」

「その二人は貴族の薬師？　あなたのほかは全員、貴族の薬師よね？」

「そうです」

「では、あなたにしか頼めないわ。何とかならないかしら」

異世界薬局の薬師の中でアメリカだけが腰に杖を挿していないので、平民薬師だとわかったのだろう。



貴族の情報ネットワークを通じて、ことが明るみになることを恐れているのだろうか、とアメリカは思考を巡らせる。

（確かにファルマ様は宮廷薬師……他国、プロセン王国の王妃の堕胎にかかわり、罪に手を染めることはできない。エレオノール様も高貴なお方……。異世界薬局には、平民の薬師が私しかない。でも……私には堕胎薬は取り扱えない、どうすればいいの？）

ファルマは堕胎薬草の密かな蔓延を憂い、「安全な経口妊娠中絶薬はある」としながらも、聖帝エリザベスの勅許店である異世界薬局にはまだ堕胎を希望する婦人が訪れず、一度も使ったことがない。堕胎を希望することはすなわち、罪に手を染めることだ。

神殿の影響下にある国々で合法的に堕胎薬を使えるのは、母体保護の目的が、「稽留流産」の場合のみ。

（ファルマ師の現代薬を使えなければ……伝統薬？）

伝統薬の中にも、中絶を誘発する処方はある。

サン・フルーヴ帝国医薬大に入学する前は三級薬師であったアメリカは勿論、それらの方法を知っている。

辺境で小さな薬店を営んでいた平民薬師であるアメリカの母から、かつて帝国に存在した哀れな売春婦たちを救うため、あるいは食糧難の際に子供の数をコントロールする方法として、平民女性薬師の間で代々伝わってきた処方を教えてもらった。

有名で、かつ古来より密かに用いられてきたのは、ペニーロイヤルミント、タンジー。

その他はイヌハッカ、セージ、ラベンダー……。

硫酸鉄、塩化鉄、水銀、アヘン、果ては蟻をすり潰したもの、ラクダの唾液。

妊娠後期に効くといわれる過激な方法では、ジャンプを繰り返す

方法。

だが、どれも有効性に乏しく、中には中毒を引き起こすものもあり、母体にも危険でファルマの教科書ではすべて禁止されている。中毒死のおそれもあることから、ローザリンデのような王妃の地位にある者に使えるものではない。

ファルマの教科書に第一選択とあるのは、「ミフェプリストン」と「ミソプロストール」。

妊娠の維持に必要なプロゲステロンの作用を阻害するミフェプリストンを先行して投与し、24〜48時間後に子宮収縮を引き起こすミソプロストールを投与する。

この二つの薬剤を併用使用することで、妊娠初期ならば90%以上の確率で妊娠中の中絶を引き起こす。妊娠期間が長くなれば、追加の対応が必要となり、中絶が不完全になる確率も高くなる。

（今、妊娠7週目なら……二剤の投与で中絶できるはず）

だが、二つの薬剤はアメリカには合成できない。さらに禁忌もある。子宮外妊娠の場合、使用すると卵管破裂のおそれがある。腎臓に障害がある場合。薬剤アレルギーのある場合など。

子宮外妊娠をしているかどうか、アメリカには判別がつかない。今日は出せない、方法を考えさせてくれと告げると、王妃は「明日も来るから」と逃げるように店を去っていった。

（今頃、プロセン王国では王妃が失踪して大変なことになっているのでは）

まだ新聞などでは報じられていないが、潜伏生活は長くは続かないだろう。

あまり待たせることもできそうにない。

アメリカは彼女を見送った後、茫洋として調剤室にあるファルマの教科書を繰る。

「先ほどの方、発熱しているように見えたが、いかがでしたか？」

必死の形相で教科書に目を落としていたアメリカに、ファルマがそつと声をかける。

「ファルマ師……あ、あの。大丈夫です、一人で対応できます。また明日来られるそうなので」

びくりとしてアメリカは竦む。

その慌てように何か気づいたのか、アメリカが何か言う前に、ファルマは忠告する。

「基本的なことです、処方と調剤薬監査には二人の薬師が必要です。アメリカさん一人での調剤はできませんので、情報は共有してください。婦人科の疾患で、患者さんが男性薬師の診察や監査を拒絶されているなら、エレオノール師に監査を依頼してください。そのために私は女性薬師を必ず二人同じシフトになるよう配置しています」

（だめ。エレオノール様をまきこめない。でも、この秘密は抱えきれない……）

アメリカはどうしてよいものか分からなくなった。

（王妃様にはお気の毒だけど……）

断ってしまうのがいい。

他国の王妃の墮胎に係わっても何ひとついいことはない。

王妃の立場や命を救うことはできるかもしれないが、アメリカに対する見返りは少なく、せつかく苦勞して取得した一級薬師の資格を失うことになるかもしれない。

しかし、断つたらどうなるのだろうか……？ 彼女の懸念する通り、宰相に殺されてしまうのだろうか。

あるいは彼女自身で危険な方法で墮胎を試みるのだろうか。

もしくは、腕の怪しい薬師にかかり、詐欺まがいの薬を飲むのだろうか。

アメリカは懊惱する。

「なるほど」

ファルマはアメリカが無造作に置いている教科書のページを見て頷いた。

「そうでしたか。経口中絶薬が必要なのですね」

「あの……」

ファルマは竦みあがったアメリカの懸念を飲み込む。

「一度お会いして色々と確認しなければなりませんが、私なら出せますよ、ミフェプリストンとミソプロストール」

「……っ」

アメリカは観念してファルマに経緯を説明した。

「事情はわかりました。現行法では、中絶は重罪ですよ。それは

神殿の教義に基づいています。三日後に神殿の定例会があるので、私が神殿とエリザベス聖下に奏上して中絶を合法化します。そのあとなら、全世界で合法的に中絶できます。今後同様のことがあっても、プロセン王国支店の薬師にも根回しができます」

ファルマは彼女のカルテを見ながらすらすらと今後の計画を述べる。

アメリカはファルマの言葉に光明を見出しつつも、疑問がわいてくる。

「神殿法を変えるなんて無茶です！ もう何百年も変わっていないんです。今年や来年のことにはなりません、その間に赤ちゃんは育つて……間に合わなくなります」

中絶の禁止は神殿の教義の中で何百年と変わらなかった伝統的な戒律だ。

改正を提案しただけで、異端審問を受ける可能性もある。

「変えられます。理不尽な法を変えられなければ、私がこの立場におさまっている意味ありませんからね」

「立場？ 宮廷薬師のお立場ということですか？」

アメリカがきよんとする。ファルマはそれには答えず、曖昧にほ笑んだ。

「まあ、少し待っていてください。妊娠週数は何週ですか」

「7週です」

「では三日で発令を要請してきます」

ファルマの予告通り、それから三日後、大神殿法の改正があった。

多くの改正事項とともに、避妊や妊娠中絶の合法化の条項も含まれていた。

改正は百か所以上と多岐にわたるため、妊娠中絶の項はそれほど目立たなかった。

「さ、変わりましたよ」と涼しい顔でアメリカに知らせるファルマに、アメリカは恐れをいだく。

「なぜ……、ファルマ師に神殿の法を変えられる権力が？」

「まあ、あまり気にしないでください。これでプロセン王国での処方ができますよ」

「どうやって王妃様に近づきます？」

「来週、サン・フルーヴとプロセン王国の両宮廷医師、薬師団での合同医薬研究会が予定されています。筆頭宮廷薬師として私の兄が参加する予定でしたが、代役を立ててもいいので、私が代わりに行つて王妃様に中絶の処置をしてきましょう。宮廷にはアメリカさんは入れないので、私が対応を引き継ぎます」

「さ……さすがです。ありがとうございます」

ファルマはまだあどけなさすら残る１７歳の少年だが、アメリカにとっては頼れる師匠であり、上司であった。ファルマに相談して、なんとかならなかったことはなかった。

「あなたは王妃様を守ろうとしたのでしょうが、医療従事者には守秘義務がありますから、私がどこかへ内通したりすることはありません。あまり疑わずに相談してくださいね。少なくとも、一人で対応しようとするのは患者さんの利益になりません」

ファルマは優しい口調ではあるが、それでもしつかりと念押しをしてくる。

「は、はい……でも意外でした。ファルマ師は、中絶を容認されるのですね」

「ええ。アメリカさんは母親の自己決定権と胎児の命、どちらを尊重すべきだと思いますか」

「今回は……王妃様に自己決定権があると思います」

アメリカは迷いながらも決断を出した。

「選択の優先、生命の優先、どちらをとるかは難しい問題です。きっと永遠に答えはでないでしょう。しかし今回に関しては、妊娠を継続することで王妃様の命が狙われていること、強姦による妊娠ということもあり、中絶が妥当かと思われます」

ファルマはパツレの代理としてプロセン王国へ赴き、アメリカに話して聞かせた通りのことをして戻ってきた。

王妃に薬を渡し、ミソプロストール投与4時間以内に流産が起った。

王にも、侍医団にも気づかれなかったという。王妃はほっとしていたとのことだった。

後日、アメリカに王妃から親書が届いた。

墮胎を行った時期に、宰相はある日突然神脈が閉じ、神力を失って問答無用で平民へ落とされたそうだ。宰相は神脈をあげてくれと神官に泣きついたが、神殿の秘術を用いてもどうにもならなかったとのこと。

王妃は王との関係は以前と変わらず良好で、出血もおさまり、体調も回復してきたようだ。

王妃は墮胎を行ったことで神罰を受けることも覚悟していたそうだが、神罰を受けたのはどうやら宰相のようだ、と締めくくられていた。

お世話になったからと、王妃から小切手が同封されており、かなりの金額が記載されていた。口止め料も入っているのだろう。

「ファルマ師にご相談したら、すべてがうまく回りました。守護神様はみておられるんですね」

アメリカはそう言って受け取った親書を握りしめ、薬局の庭から空を仰いだ。

「どうでしょうね」

ファルマはアメリカの言葉を流して大きく伸びをした。

「ところで以前、アメリカさんは何か私に相談があると言っていました。あれは何だったんです？」

「何でもないです！　もう少しだけ……頑張ってみることにしました」

「また何かあったらいつでも」

「はい」

アメリカの退職の話はひとまず白紙となった。



## 9章7話 別解

1152年8月12日。

エメリツヒとジョセフィーヌ夫妻が新婚旅行を終え帝都に戻ってきた。

教授室のテーブルにずらりと並べられたお土産を囲みながら研究室メンバーが土産話を聞く。

ファルマの研究室には現在、

教授 ファルマ・ド・メディシス（17）

准教授 ファビオラ・デ・メディチ（24）

大学院生 エメリツヒ・バウアー（30）

大学院生 ジョセフィーヌ・バリエ（27）

学部生 パトリシア・ニコ（18）

学部生 モルガン・ニコ（18）

秘書 ズエ・ド・デュノワ（26）

が在籍している。

相変わらず、それなりの大所帯だが教授のファルマが最も若いという風変わりな研究室である。

エレンは異世界薬局のDCに専念するため、講師を辞した。

ファルマは先々のことも見越して、二年前からノバルート医薬大薬学講師であった24歳のファビオラ・デ・メディチを准教授として受け入れていた。

ファルマがファビオラの採用を決めた時には彼女との面識などとはなかったものの、ド・メディシスとデ・メディチという姓が同じなので血縁なのではと調査した結果、はとこだということがわかった。ファビオラは学生の指導にも長けたバランス型の研究者で、水属性の負の神術使いで薬神を守護神に持つ。オーロラカラーの珍しい

髪と瞳の色で小柄な女性だ。だが顔立ちはド・メデイシス家の誰とも似ておらず、年齢のわりに童顔に見える。

研究特化のエメリツヒとともに、研究室の運営を続けてくれそう  
だ。

パトリシアとモルガンは今年研究室に入ってきた男女の双子で、異世界薬局関連会社であるメデイークの女薬師の子女にあたる。

二人とも若葉色の髪と瞳のよく似た顔立ちで、先端の医療を学び、研究者として世に成果を還元したいという意欲にあふれた才気煥発な学生だ。

彼らは新規抗体製剤の開発をテーマに研究に取り組んでいる。

「長々と休暇をいただいてしまい、申し訳ありませんでした。留守中に変わりありませんでしたか？」

エメリツヒとジョセフィーヌはさりげなく互いに寄り添ってソファにかけている。

なにげに縮まった距離に、新婚旅行で仲が深まったらしいなとフアルマはほほえましく思う。

ゾエはお茶を飲みながら面白そうに終始ニヤニヤしていた。

「こっちはいつも通りだったよ。二人とも楽しんできた？」

「ええ、思い切り羽根をのばしてきました」

この世界での新婚旅行は拳式後一か月間が通例だが、早めに戻ってきたのは研究のことが気になったからだという。

「そんなときに、研究のことは考えなくていいよ……なんで思い出すの。メリハリをつけなきゃ」

「それを教授には言われたくないですね」

エメリツヒが体裁わるそうに反論する。

研究室には独身メンバーばかりなので結婚生活がどういったものが誰もわからないのだが、少しは仕事のことを忘れてほしいとファルマは思う。新婚旅行中、エメリツヒはポストカードを出しすぎだ。「あの実験ちゃんとやってくれましたか！」という内容ばかりで、ファルマに手紙を取り次ぐゾエが若干引いていた。

「わたくしなんて休日の予定も何もないから研究室に来るしかないんです。新婚夫婦がいそいそ舞い戻って来る場所じゃありませんことよ」

ファビオラは聞かれてもいないのに悲しい告白をしていた。彼氏いない歴〃年齢らしい。

この容姿と知性でなぜモテないのかとファルマは疑問に思っていたが、キャラが濃いのと急に自虐を始めるのが理由だろうなと最近ではわかってきた。とはいってもうちの家系も大概だったなと振り返る。父は子にキラキラネームをつけるし、兄は有能だがナルシストだし、妹はあの調子で、どうしてこの家系はこんなクセが強いんだろう、とファルマは残念に思う。

ファビオラはデートを申し込まれること自体は多いが、二回以上続かないと悩んでいた。

「こんなわたくしを哀れに思ったら、素敵な殿方を紹介してくださいまし」

「う、うん……いい人がいたら」

ファルマは流すしかない。

ジョセフィーヌが空気を読んでお土産の紹介につつま。

「こちら、お土産です。まずは古都ドレドの名産の象嵌細工の小物入れて、木彫りに貝殻を埋め込んでいるんです」

一人一人にお土産を手渡しながら、ジョセフィーヌが説明する。

「かわいいデザイン！ 持ち運び用のアクセサリケースにしますわ！」

「まあ、まだ見ぬ殿方とのジュエリーを入れることにしますわ」

「私は記念切手を入れる箱にします」

ゾエは素直に絶賛し、ファビオラは重めの言葉を発し、パトリシアは素朴な用途を述べた。

ファルマとモルガンのは男性用小物ケースで、女性用とは少しデザインが違う。

それぞれの趣味に合わせて選んでくれたのがわかった。

「ありがとう。ネクタイピンを入れようかな」

ファルマもコメントを述べておく。

「それから、名産の薬草酒を。アップサンです」

「これ臭いけど好きなの！ スプーンの上の角砂糖にたらして飲むのよね。今日のアペロにいただくわ」

アペロというのは、夕食の前の軽食の時間だ。

ゾエが臭いけど好きと言っているので味の想像がつかないが、ファルマはいつもの癖でレシピを確認する。

「アップサンにはアップシンティム（ニガヨモギ）が入っているよね？」

帝国ではファルマの上奏によって、ニガヨモギを含むレシピには食料品、薬品、嗜好品すべてに禁令が出ている。禁令をもちかけておきながら、裏では禁制品を楽しんでいたなどという醜態をさらすわけにはいかない。

「さすが教授、つつこんでくださると思っていました」

ジョセフィーヌがくすりと笑う。

パトリシアとモルガンは要領を得ないらしく、顔を見合わせている。

「アブシンティムのツジヨンが入っているのでしょうか？ サン・フルーヴでは禁制品にあたらないかしら」

ファビオラもこんなときは薬師の顔つきになる。

とはいえ、サン・フルーヴ帝都で義務付けられた原材料表示は他国では徹底しておらず、原材料が書いてあるのは稀だ。

「アブサンの中にはアブシンティムに含まれるツジヨンが中毒を引き起こすことがあると、教授の講義でも取り上げておられましたね。これは地元の薬師が苦心して生み出した、アブシンティムは入っていないアブサン、名前こそ同じですが代用品です。味もさほど変わらずなかなか美味しくいただけだったので」

「へえ、それではいただくね。ありがとう」

ファルマは礼を述べて受け取った。

一から十まで確認しなくても、打てば響く、教え子二人の見識は頼もしい。

「そっちの二人はきょとんとしているけど」

ファビオラは見逃さない。

「復習しておきます！　まずアップサンに毒があるってことすら知らなかったです。そういえば最近売ってないなと思ってました」

パトリシアとモルガンは背筋を伸ばして元気に降参した。  
パトリシアは小さく舌を出していた。

そのほかにもお菓子などをいただきながら、ファルマが礼を述べる。

「たくさんお土産ありがとうね。お土産話もききたいかな」

故郷スパイン王国での滞在中、異世界薬局系列店の認証章を至る所でみかけたそうだ。

他国でも医療体制が整いはじめた様子を目の当たりにしたのと。と。

ファルマはその話を聞いて報われたように思う。

「異世界薬局の薬で、小規模な病原性大腸菌の流行を抑え込んだそうですね」

「都市全体の衛生向上に伴い、感染症の流行が劇的に抑えられているようです。スパインの旧友もそう言っていました」

世界中を俯瞰してみることができないが、ファルマの見えないところで誰かが助かっていたならそれは本望だ。

少しずつ、手の届く範囲から民間の力で改善していつてほしい。

「ですが……」

「どうしたの？」

異世界薬局系列店の大盛況の裏で、幼少期を過ごした町で伝統薬を取り扱う薬店がひっそりと廃業寸前に陥っており、店舗もみすばらしくなっていた。

それを見たエメリツヒは、これはまずいとスパインの薬師ギルドに新しいレシピを書き残して延命を図ってきたようだ。

（やはり以前の俺と同じことをしているな）

ファルマも悩んで、対応に苦慮していた。

よりすぐれた技術が打ち立てられたとき、そうでないものを途絶させるか保全するか。

自分のもたらした薬は人を救うかもしれないが、古いものを駆逐することは誰かを飢えさせたり不幸にしているのではないか。

「伝統薬はこのまま役に立たないものとして淘汰されて、すたれてしまうのでしょうか」

ジョセフィーヌは迷いながら尋ねる。

ファルマもこのことに関しては明確な答えを持っていない。

「それはないと思います。私たち医療者は、よりよい薬、より正確な情報、よりよいアウトカムを求めて患者さんに医療を提案しようとしています。しかしそれを懐疑的なものとして見ている人もいます。個人の特性として、どれだけ有効性を説いても新しいものを受け付けない人もいます」

「私の親がそうです。娘のいうことを聞かず、老舗のポーションを毎日のように飲んでいるんです。ああいう人たちですから、諦めています」

ジョセフィーヌは力なく笑う。

「私の父は、ファルマ教授の新しい医療を受けたかっと思いますね。教授と出会ったから、私と、妹弟全員の命が今あると思っています」

難病で尊敬する薬師の父を亡くし、壮絶な最期を見届けたエメリッヒは悔しそうに拳を固める。

「仮に、致命的な感染症の重症化を99・99%防ぐが、ごくわずかに副反応や副作用、有害事象を伴うとされる薬があったとしましょう。その薬を人々は全員飲みたがるでしょうか」

ファルマは声を抑えて尋ねてみる。

「そんなの、飲むに決まっています!」

エメリッヒは食いつかんばかりに勢いよく答える。

ジョセフィーヌは何か思うところがあるのか、微妙な顔をして首を傾けている。

「思いませんね。そう単純ではないのですよ」

ファビオラの瞳に暗い影が宿る。

ファルマはファビオラに同調するように、残念そうに頷く。

「実際には、全員は飲まないんです」

ファルマはなぜかと言うと、と一つ一つ指を折って説明する。



「感染症のリスクを低く見積もる人」

「薬のデメリットを過大に見積もる人」

「薬を飲んだ直後に起こった因果関係のない事象と、飲んだ薬との関連を疑う人」

「任意の誤情報を得て、薬を飲むのを躊躇う人」

「有効率が操作されているのではと疑う人」

「病気の存在を信じていない人」

「薬師の儲けのために、ありもしない病気をでっちあげているという人」

「不安が強すぎて飲めない人」

「急速な変化を受け入れられない人」

「飲むと子孫に悪影響が出るのではないかと恐れる人」

「感染症の流行地から遠い場所に住んでいる人」

「今は無事でも数年後に死ぬと思いついて入っている人」

「個人の信条や宗教に反するために飲みたくない人……」

指折り数えていたファルマの指が足りなくなりそうだと。

ファビオラも横で同意するように頷いている。

「そういった人たちの拒否感はある程度のものですわ。わたくしも会ったことがありますよ」

これまでの患者に思い当たる節があるのか、何とも言えない顔をしている。

エメリットは臨床経験に乏しいが、臨床現場に長くいるファビオラは特に経験があるのだろう。

「そんな、効くのですか？ 飲めば効くとわかるのに？ 生還した人がどれだけいて？」

エメリツヒの声が教授室内にむなしく響く。

エメリツヒの無力感を肌で感じ、ファルマもやるせなさがつる。

「そうです。割合に差はあれ、全員は飲まないんです。その人たちの心には、大多数の人々の“効いた”という声は届きません」

……ファルマは常々思っていることがある。

「薬師を信頼してくれる人を大切にするのは当然ながら、目の前からいなくなつた人をこそ、気に掛ける必要があると思います」

社会からの疎外感、孤独感、苦痛、不安を抱え、ファルマがもたらした医療に憎しみを抱えている彼らのことをいつも思う。

医療を受けるか否かの決定は任意で、強い言葉で単純化できるものではないために、とりわけコミュニケーションが難しい。

医療者が彼らの無知や間違いを責めたり、信頼できるデータを提示しても、彼らは救われることはない。

「ひるがえつてみると人類は分業によって、助け合つて社会生活を成り立たせています。だから私たちは衣食住全ての工面を自力で行わなくとも生きてゆくことができます」

「ずいぶん基本的なところに立ち返りましたわね」

ファビオラは脱線したように感じたのか失笑している。

「薬学の専門家たる薬師には技能の蓄積や合理的な知見があります。が、しばしばそれは人に正確に伝え、理解してもらうのは難しいのです。理解を得ることができなかった人々を相手にしない、それは可能かもしれません。ですが、その後彼らが薬師にかかることはなくなるでしょう。彼らは薬師は信用ならないのだと子孫に伝えます」

「そうやって、孤立して先鋭化して、助かるはずの人々が助からなくなってしまうのですね」

エメリツヒはコミュニケーションの難しさに悩んでいるようだ。

「顔が見えない人たちのことを忘れないで、敵視しないで、彼らの気持ちに寄り添うことを諦めてはいけません。そういった人々がもし、私たちの取り扱う新薬ではなく、住み慣れた町の何代も続く薬店で、顔なじみの薬師が出してくれる、よく知れた味の伝統薬ならば飲んでほしいと思ってそこに買いに来てくれるのなら、その繋がりを通ち切るべきではないと思います。その間は、人々の生活を支えてきた伝統薬は一定の役目を果たし続けるのだらうと思います」

「でも、もっと効く薬があるのに古いものに固執しても患者さんの利益につながりません。何とか説得できないものでしょうか。みなが高等教育を受けることができれば……」

ジョセフィーヌはもどかしそうにしている。

だが、解決策はそうではないとわかっているのだろう。尻すばみになった。そこでファルマが言葉をつなぐ。

「私たちにできる支援は、伝統薬のレシピの改善や、文化としての保全、有害なものとしてでないものの振り分け、平時は伝統薬で、緊急かつ重篤な場合は現代薬へ切り替える、などの柔軟な対応なのではないかと思います。世代が変われば、薬も知識も最適化されてゆくでしょう」

ファルマが薬師として彼らにできることはそう多くはない。

誰かの人生に対して、責任を持って正解を出すことができない。

ファルマにできることはただ、この世界を少しでも快適にさせて去ってゆく。

そんな、ちつぽけな存在でしかいられないのだと思う。

「私たちは互いに敵ではない、人類という群れです。みな社会の一端を担う仲間です。それを忘れないように、どうか見えない人たちのことを気にかけていてください」

「教授とお話ししていると、自分がいかに狭量かと思い知らされます」

エメリッヒが肩をすばめて恥いるように俯いたので、彼らからのお土産と引き換えに、ファルマは留守中にまとめておいたデータを渡した。

彼らが一番欲しがっていたものだ。

エメリッヒの仮説を補強するデータを提示しながら結果を説明する。

「こ、こんなにデータが！ 教授にお任せするとやはり進捗が段違いですね」

「二人の下準備がうまくいつているからこそだよ。ファビオラ先生にも手伝っていただきました」

「手があいた時間にやったのよ。新しい実験手法を学ぶのにつけてでしたわ」

二人はファルマとファビオラに礼を述べる。

「先生方、ありがとうございます。すぐにまとめに取り掛からなくては。わくわくしてきました」

エメリッヒは喜んでいる。

ファルマは喜ぶ二人を眺めながら、午後の作業にとりかかるために腰を上げ、大きく伸びをする。

「……果たして人が健康であるとはどんな状態なのか。そう問いかねながら、医薬の道に進んだ私たちは私たちの仕事をしましょう」

何が最適だったのかは、歴史が示してくれるだろう。

ファルマはエメリツヒたちが戻ったので、ファビオラを招き入れて丁寧な指導をしてゆく。

何年先もの展望を見据えて、抜かりのない研究計画を立てる。そこに自分がいてもいなくてもいいように。

聖帝エリザベートは宮殿の一室でブリュノとテーブルに向かい合って二人きりで密談をしていた。  
室内にいるのは二人だけで、侍従も含めて厳重に人払いがされている。

「ファルマの様子はどうか」

エリザベスは紅茶を飲みながらおもむろにブリュノに切り出す。  
そのエリザベスの前には資料の山が置かれている。

「表向き、これまでと変わらず過ごしています。少しずつ仕事の引継ぎを行ってフェードアウトを図っているようです」

「何を企んでいるのであろうな」

エリザベスは瞳を眇め、頬杖をつく。

「身辺整理というものでしょう。墓守と刺し違える気であるようですから」

「墓守……か」

エリザベスは「墓守」という言葉の出現とともに、忌々しそうな顔つきになり、口調も重みを増す。

「墓守とはあらゆる世界からの生者と死者の意識の集合体で、それらは緩く情報を共有し、共鳴しあつて集合自我を形成している概念のようなもの。そなたはそう申したな」

エリザベスは手元の報告書をもとにブリュノに確認する。

ブリュノは数年にもわたる神殿の文献研究のなかで、墓守の自我の操作方法の仮説検証を行っていた。

「御意。墓守とは、晶石の単位格子に閉じ込められた意識の集合体です。集合自我の結合様式を変えれば、巨視的には墓守の意識も変わります」

「ファルマの中に宿る薬神もまた、墓守の一部にすぎないというわけか」

「ひいては我々もその一部を成しているのです」

「我らも墓守の一部……余には難しい話よのう」

エリザベスはブリュノの言葉を反芻するように呟き、体をソファに沈めながらけだるそうに天井を仰ぐ。

「そなたは薬神の計画の裏をかき、世界の理を変えようとしておる。しかし不思議なものだ……晶石の作り出す単純な構造が、自我を持つということがあるのか」

「はい。類似例として、我々の脳を上げることができます。晶石記憶の情報網は、俯瞰的には人の脳の構造と精神活動に相似しております」

ファルマから脳の構造と機能を学んでいなければ得られなかった  
仮説だ、とブリュノは説明する。

多くのヒントをファルマから与えられてきた。

何故かファルマはその仮説に辿り着くことはなかったが。

「守護神にまつわる膨大な禁書群を解析しますと、墓とは晶析情報の番地を示します。墓の間で晶石を介して内部情報の交換が行われることで、情報の指向性ができます。その巨大な情報網の奔流から生じたのが墓守という、観測者の自我なのです」

「つまり、晶石の配列に干渉し意思決定にかかわる領域を変更すれば、墓守の意思を操れると？ あたかも脳の一部を破壊するかのようには？」

ブリュノはエリザベスに計画書と設計図を差し出す。

そこにはびつちりと図表が組み込まれた、何千ページにもわたる綿密な計画が記されている。

「はい。晶石を介して理<sup>こころ</sup>の一部を破壊することでこの世界から異能の力を消滅させますと、神力によって駆動していた鎧の歯車は副次的に崩壊します」

「歯車を止めれば？」

「この世界の破綻を食い止めることができますよ」

世界の至る所に散在する晶石の性状を取り寄せて一つ一つ分析し、神術と呪術を駆使した晶石のネットワーククラスターの設計には随分と時間がかかった。

その検証の過程には、数学者や神官、神術学者ら、呪術師、多くの研究者たちがかかわった。

試行錯誤は日夜繰り返され、ようやく一つの答えへとたどり着い

た。

「ファルマはどうか」

「私どもの計算では、彼は集合自我の中へ緩く組み込まれ、新たな理をつかさどる造物主となるのでしょう」

……つまり滅びを許さず、人工の神を造って永遠の生を授け、次の墓守にするのだ。

世界が終わるその日まで、この先何十、何百、何千、何億年も……。

生命の営みの輪から外れ、命あるものを俯瞰し、彼の傍らを無数の命が通りすぎてゆく。

（この世界の誰もが彼の消滅を受け入れられない。しかしファルマの存在を保全するこの別解は、果たして死という営みを肯定する生身のファルマの心を救うのだろうか）

エリザベスは懐疑の念を抱きながら、彼の胸中を案じた。

ファルマを救おうとして、彼の自由を篡奪し、新たな生贄を作り出そうとしてはいないか。

薬神と人類の知恵比べは、まだ終わっていない。



## 9章8話 さよなら

1152年8月14日。

サン・フルーヴ大市が例年通りに開催され、その影響で通りに面するサン・フルーヴ医薬大は祝日だった。

大市でにぎわう市民たちを微笑ましく眺めつつ、誰もいないだろうと思いつながらファルマが研究室にやってくると、研究室の鍵が空いている。

研究室に踏み込むと、ファビオラが研究室のカウチに寝そべってストッキングを脱いで裸足を投げ出していた。あまりにも無防備な体勢だったために、ファルマは声をかけていいものか躊躇する。

彼女は寝そべった状態で、映写機の映像を見ていた。

「あら」

ファビオラに先に気づかれてしまったので、ファルマは会釈をする。

「ファビオラ先生、おつかれさまです」

ファルマはなんと微妙な場面に居合わせたと思いながら頭をかく。ファビオラは頭をもたげたものの起き上がる労力を惜しんで、ソファに沈んだ。ふわりと酒気を感じた。

「ごきげんよう、教授もお疲れさまです。お菓子、一緒につまみま  
す？」

彼女はサイドテーブルの上にたくさん広げられたスイーツやスナ

ツク類を指さす。

ファルマは彼女に直面するように腰かけた。

「ちょうど小腹がすいていたので、いただきます。何をしておられたんですか？」

「教材研究ですわ。教授から引き継ぐ講義の映像記録を改めて見ていたんですの」

ファビオラの熱い視線は、フィルムの中の教壇のファルマにそそがれていた。

ああ、そうだったのかとファルマは少し気恥ずかしい。ファルマが担当したすべての講義は余さず映像と筆記で記録されていて、質疑応答集も完備している。

ファビオラはそれを参考に講義の引継ぎができるようにしている。

「お疲れ様です。今日は祝日ですので、お疲れのないようにしてくださいね」

それにしても、職員の労働量は各自の裁量に任せているとはいえ、ファビオラはいつ見ても働いているようなので、診眼では特に健康問題は検出されていないが彼女の健康が少し心配になってくる。

「家でも仕事をするしか趣味がないので、だらだらしているぐらいなら出勤したほうがましというものですわ。なにより、自宅は孤独を実感しますの。教授は何かご趣味などはありましたか？」

「最近は何もしていないですね。ファビオラ先生は何かありませんか」

「わたくし、趣味はドライフラワーづくりですの。数がまとまったら、市で売ったりしていますのよ」

ファビオラの居室に飾ってあるドライフラワーの見事なブーケは、確かに高品質な仕上がりがかった。あれは手作りだったのだなと感心してしまう。

「ファビオラ先生の神術ならきつと鮮やかな発色のドライフラワーができるでしょうね」

ドライフラワーは早く乾燥させるほど花卉の色が鮮やかに残る。ファビオラの水の負属性の神術で一気に脱水してしまえば、質の高いドライフラワーになるだろうなとファルマは納得した。

「今、サン・フルーヴ大市が開催されていますでしょ。ですから新鮮な花材が気になっておりまして」

「大市にはいかないんですか？」

「教え子に会ったらと思うと恥ずかしいですわ」

「では大市と一緒に見に行きますか。私は教え子と会っても特に気にしませんので、私の付き添いと言うと恥ずかしくないですか」

「まあ！ お付き合いいただいてありがとうございます。教授は何か御用はありますか？」

「知り合いや友人が出店しているので、見に行きたいと思っていますでした」

今回はロッテが雑貨店を出しているというので、立ち寄ると伝えていた。

研究室に立ち寄ったのはそのついでといってもいい。

「そういえば祝日の教授は研究室に何を？」

「資料を取りに来たんです」

「ふふ。休日にお仕事ですか。わたくしとあなた、働き癖はそう変わらないのではなくて？」

「おっしゃるとおりで」

なんか、似た者同士だなとファルマは苦笑する。  
異世界でのこととはいえ、何となく精神的にも血縁があるのでは  
思ってしまう。

「たまには外に出て気分転換もいいですわね」

「そうですね。日光を浴びると精神にもいい影響を及ぼします」

映写機を止め、スナックを片付けはじめたファビオラを手伝いながらファルマは相槌を打つ。

「自信をなくしていたところだったのです。こうして予習すればするほど、わたくしの生の講義より、あなたの映像音声そのまま流していたほうが有意義な気がしまして」

「そんなことはないと思いますが」

「うまく言えませんが、あなたとは何かが違いますの。熱量でしょうか。カリスマ性でしょうか。わたくしにはきつと代役がつかまらないでしょう」

「私が映像の中でお伝えした言葉、情報はすぐに古くなります。ですから、現時点での知識が通用しなくなった際には、適切な手続きに基づいて更新し続けてください」

ファルマはこの世界の未来の継続と、学問の発展の可能性を信じていた。

「あなたはその、更新してゆく現場にはいないんですか？ そのお若さですから、病気なども考えにくく。以前より気になっていたのですが、どこか遠くへ行かれるのですか？」

「そうですね……」

ファルマは言いよどむ。

「あーわかりましたわかりました」

ファビオラが手を打って急に分かったふうな顔をしはじめた。

「駆け落ちなさるのでしよう！」

「ち、違いますよ……誰ともお付き合いしていませんから」

ファルマはファビオラからの頓珍漢な嫌疑をどう躲せばよいのか分からない。

「あら、でもネタは上がっていますのよ。宮廷画家の若い娘と逢引きしているという噂が……」

彼女が言い含んでいるのはロツテのことだろう。そして、今から大市で立ち寄ろうとしている店にロツテがいるというのもタイミングが悪く、彼女の憶測を裏付ける形となる。

「そういった話はありません。彼女は私の家のもと使用人で、幼馴染です。時折近況を話したりはしますが、付き合ってはいませんしお互いに縁談ありません」

根も葉もない話ではないが、ファルマとロツテとは付き合っていない。

真っ向から否定するのも微妙な気がするが、はっきりと否定しておかなければロツテのためにもならない。軽薄な感情ではなく、もっと根本的な信頼関係で繋がっている。

彼女が支えてくれたから、ファルマはこの世界でファルマ・ド・

メデシスに擬態して生き延びることができた。

ロッテがファルマにどのような思いを抱いていようと、少なくともファルマはそう信じていた。

「そうなの……彼女とは軽くお伺いしてはいけない間柄だったかしら」

「どういう意味ですか」

「色恋の関係ではないようにお見受けしましたわ」

「しいていうなら、家族のようなものです」

「そうでしたか。では彼女ではないとして、教授はご結婚はどのようなつもり？」

返す刀でさらに切り込んできたので、ファルマは言葉に詰まる。

正直、恋愛や結婚を考えられる段階にないし、ファルマ自身ももうじきなくなる。

プライベートな話は控えてほしいと思うファルマだが、それはこの世界では通用しない。貴族階級の挨拶程度には聞いてくる。

場合によっては見合い話の約束も取り交わされる。

「少し、困難な旅に出る予定があるので、誰とも関係を持ちたくないのです」

「無責任なこととはできないというわけ？ 戻ってこないかもしれない旅ですの？」

「そうです」

ファビオラは半分ふてくされて、半分は困ったように頼杖をついた。ファルマを思いとどまらせるネタを考えているのだろう。

「そういうわけで、明日を私の最終講義にしようと思います」「ええっ！」

ファビオラはがばつとソファから起き上がって慌て始めたので、彼女の上着に引っかかって落ちたスナック類が床に散乱する。

「ああつ、すみません」

ファルマはさつと掃除道具箱から箒をとって掃除をはじめめる。  
ファビオラはまだモグモグしながらチリトリを構えた。

「最終講義つて、最後の講義ですよ。そんな告知が急すぎますわ！ 晴れ舞台なのですから、大々的に告知もしてできるだけ多くの学生教職員を集めなければ！ ああ、花束の支度もしなくちゃですし、祝電の受付も」

「特別な対応は不要で、告知もしないつもりです。普段と同じ心境で聴いてもらいたいの。夏休みを挟んで、引き継いでください」  
「断っても、いなくなるおつもりなんでしょう」

「ええ」

ファルマは涼やかに答えた。そのためにファビオラを後任にしているのだから。

「では仕方ありませんわね……後のことは、ご安心めされませ」

ファルマはファビオラに納得してもらうと、気分を変えて彼女とともにロッテの店を訪れた。

ロッテの店には長い列ができており、ファルマもファビオラも暫く待つことになった。

「まあ！ ファルマ様とファビオラ様。ようこそお越しくださいました」

接客をしていたロッテが先に気付いて会釈をする。

「こんにちは、ロッテ。繁盛しているね」

ファルマがそう言いながら品揃えを見ると、今回は宮廷画家としてではなく、ハンドメイド作家のような立ち位置で出品しているようで、庶民的なデザインの雑貨が多い。

小皿やカトラリー、ガラスのコップ。オリジナル刺しゅう入りハンカチ。コースター。ロッテの多才ぶりに、ファルマはいつも感心してしまう。

宮廷画家の安定した収入に加えて、画壇での成功、仮に帝政が解体したとしても、こういった副業で生計をたててゆくことは十分にできそうだ。ロッテの自立を目の当たりにして、ファルマの心残りが一つ消えた。

「はい！ 普段使いにできる雑貨をデザインしたくて」

「まあ。どれもこれも素敵ですわね。おすすめを聞かせてくださる？」

ファビオラはロッテのデザインしたガラスブローチを買ってその場でつけてもらっていた。

ファビオラの目当ての花材もたくさん仕入れて、ファルマは彼女の荷物を持って自宅に送った。

翌日。

これで本当に最後の講義になるかもしれない。  
心境の整理はできていると思っていたのに、予想に反して感傷的



な気分には戸惑いながら、ファルマは大講義室に入り、丁寧に黒板掛けをしておいた。

大講義室には何も知らない学生たちが集まってくる。

その中にはマイラカ族の学生の姿もあった。

現在、マイラカ族は三名が帝国医薬大に入学して、総合薬学科の正規課程で学んでいる。

彼の講義を引き継ぐファビオラも、ファビオラから何かを聞いたらしいラボメンバーも講義室の一番前に陣取っていた。

講義資料は映像とマニュアルを作成しておいたから、あとのことには彼女に託す。

第一期生の卒業を見送って、学生を送り出す道筋をつけられたから、講師は自分でなくてもいい。

むしろ、自分でなければいけないという状況を脱することができてほっとしている。

そのとき、講義室に入ってきたのは、エレンだ。

「ファルマくん」

「エレン！ どうしたの？」

こここのところエレンは大学内にはいなかったで、違和感がある。エレンは深紅のドレスを着て少しフォーマルな装いだ。

ファルマが意外そうな顔をしていたからか、エレンは気まずそうに微笑んだ。

「んー、今日はなんとなくね。ただの一般聴講者よ」

「そっか。久しぶりに聞いてってよ」

ファビオラがエレンに最終講義だと伝えたのかな、と詮索したが、エレンに直接は尋ねなかった。

講義の冒頭で夏休み前の定期試験のテストを返して、回答の解説

をする。

ここまでは私語もあり、学生たちもいつもの調子で聴講していた。ファルマが教科書を閉じ、次の言葉を黒板に書きつけるまでは。

『究極の医療について』

講堂の空気が数度冷えたかのようなだった。

ファルマは医療倫理の講義も受け持っていたが、これまでに医療者の倫理を説くことはあっても、こういった強い言葉、極論を学生に問いかけることはなかった。

何が始まるのだろうと訝しんだが、異様な雰囲気を感じ取ったのか。

学生たちは私語を慎んで口を閉ざす。

今日は学期末なので、少し思考実験をしようと思う。そう伝えたあと、ファルマは導入を始めた。

「私たちは今、患者さん個々の自己決定権を尊重し、限られた生の時間の中で、患者さんご自身の人生の質が保てるよう、希望に寄り添った医療を提供する。そんな医療従事者になれるよう日々努めていると思います。医療技術の力強い進歩によって、私たちは感染症を駆逐し、未知を克服して予測あるいは予防し、慢性疾患や希少疾患、悪性腫瘍に対する治療薬を手に入れ、健康寿命は伸長してゆくでしょう」

人類を病から解放したとしても、死からは逃れられない。しっかりと向かい合ってほしい。

究極を求め続けることは、人類に何をもたらすかを。

医療は、病気を治すという段階を踏み越えて、さらに人体を改造し高みを目指すのだろうか。

「それでは十年後、二十年後、百年後……そして究極の医療とはどのようなものでしょうか」

十分に考える時間を与えて、ファルマは手を挙げている学生たちを次々と当てて、黒板に書いてもらった。

- ・どんな外傷でも救命できる
- ・感染症にかからない
- ・何歳になっても健康に子供を出産できる
- ・薬を飲まなくても貼り薬で治療ができる
- ・老化しない体を手に入れる
- ・生殖系列遺伝子治療を可能にし、先天性遺伝子疾患を生じさせない
- ・平民も神力を使えるようになる
- ・万能薬を作る

この世界ではてんで実現不可能な、しかしある程度は実現可能な発想が口々に聞こえてくる。疾患治療の範囲を超えて、遺伝子ドーピングのような発想も出てくる。

ちなみに、生殖細胞系列遺伝子治療は、地球においては遺伝子プールのも様性を損なうとして倫理に反している。

- ・脳を他人に移植する
- ・脳の情報処理速度を向上させる
- ・体格、容姿、頭脳など、遺伝子操作によって思い通りの子供が生まれる
- ・人工子宮で出産から解放される

ファルマは彼らの意見を否定せず、彼らの着想に至った経緯を想像しながら、希望や野望をありのまま受け入れ、俯瞰する。

「意見をありがとう。では私達がテクノロジーの恩恵を得て手に入れ目指す医療の行きつく先は、誰も病気にならず、誰もが老いや死から逃れられ、理想的な子供を手に入れる、そんな未来なのでしょうか。その場合、私たちはどのような問題に直面するでしょうか」

ファルマは現実世界で起こった変革とその功罪を頭に浮かべながらさらなる問いを投げかける。

学生たちにはグループを作って、とことん話し合ってもらった。

不老長寿に対する問題も様々に提起される。

「誰もが健康で長生きできるなら、人口増加で食糧危機になってしまわないでしょうか」

「住む場所がなくなりますよね」

「もし誰も老いず、死ななければ、社会体制は永遠に変わらないです」

「権力者が代替わりをしないということになる？」

「失業者があふれて、治安も悪くなりそう」

「私はそんなに長生きしたくないです。孫の顔を見たら死んでもいいかな」

「ずっと働きたくないので、そこそこで死にたいです」

「多分そんなに生きてもやりたいことがない」

「自然に食べられなくなったらそこが寿命かなと思います」

最初は疾患治療のために用いられるはずの遺伝子工学技術にも運用や倫理上の懸念が出る。その疑問に、彼ら自ら直面してもらう。

「遺伝子操作の技術が悪用された場合は？ 遺伝子操作で敵国が強い兵士を創り出してしまったら」

「美醜に対するこだわりが強くなるかも」

「親が子供の遺伝子に出生前に手を加えて、子供の意見が親と違ったら」

「遺伝子操作を受けた人とそうでない人の間に社会格差が生まれるでしょうか。ああ、でもそれは神術関連遺伝子を持つ現在の貴族社会にもいえることが」

「では、生まれつき能力が優れた人なら特権階級を作っているの？」

「生まれつきなら仕方がないのでは？」

「生殖医療は許容されるのに？」

様々な意見が飛び交う。

学生たちにも千差万別の思想や懸念がある。

倫理的にどこまで許容できるかの線引きも個々に異なる。

ファルマはさらに意見を広げ、アンケートをとる。

不老、不死、極端な長寿を望んでいる者は少なかった。

日々の生活に不自由なく、適度に健康でいればいい。

病気になったとき、効果が確実に確立された治療法に経済的負担がなくアクセスできればそれでもいいという者は大多数だった。

身体強化を望む者、優生学的思想を持つ者も一部に限られた。

ただ、この講堂を出ればさらに多くの意見に直面するだろう。

学生たちは、答えの出ない問題を揉み合って、だんだんと疲弊してきた。

「他人の権利を侵害しない範囲で何をもって人生の満足とするか、百人百通りの答えがあるのです。人類の共存繁栄のためには、医療技術の運用に対して必ず倫理面での慎重な検討と取り決めが必要ですよ」

ファルマは総括する。

学生たちにファルマの思いが届いているか、今は分からない。

「私たちの医療はここまでできました。あなたがたは、誰もが自分らしく、よりよく生きることが出来る社会を目指しながら、テクノロジীর恩恵と脅威に思いを馳せ、これから目指すべき到達地点と、その先を見据えていてください」

ファルマは静かに滾る思いを少ない言葉に込めながら、そんな言葉で講義を終えた。

普段の講義とは趣が異なっていたからか、学生たちは怪訝な顔をしている。

今は分からなくても、そこへ到達しそうになったら、いつか思い返してくれたらいい。

「以上で本日の講義を終わります。ありがとうございました」

ファルマが告げるとファビオラが顔を真っ赤にして立ち上がり、一人で始めた大きな拍手は、少しずつ大講堂に広がってゆく。

傍聴していたエメリツヒやジョセフィーヌ、ラボメンバーたちは啞然としている様子だ。

これで終わりだ、と気づいたからだろう。

少し涙ぐんだエレンが、まっすぐにファルマを見つめていた。

ファルマはやりきれなくなって会釈をし、壇上から降りた。

「明日、ちょっと人手が足りなくて。お願い。午前中だけシフト入ってもらえない？」

最終講義のあと、エレンがファルマに異世界薬局への出勤を依頼してきた。

ファルマは終活に備えて少しずつシフトを減らしていたところだ。

不自然なタイミングだが、エレンらはファルマの身を案じて、鎧の歯車へ近づかせず、できるだけ帝都にとどませようとしているのだろう。

ファルマはエレンの配慮に感謝しながらも、彼女の気持ちには報いることができそうにない。

翌日、薬神杖で裏庭に降り立ち、朝いちに出勤して異世界薬局の裏口の鍵を開け、店舗へ入る。書類の整理や、薬剤のチェックをしていると、裏口からロッテが入ってきた。

「ロッテ、おはよう」

ファルマはいつものようにロッテに挨拶をする。

しかし彼女からの返事はなく、目の前を通り過ぎて行つた。

彼女は機嫌よく鼻歌を歌いながら更衣室で制服に着替えると、カーテンのタッセルを結んでいる。箒を持ち出してきた、掃き掃除をはじめた。さすがにおかしいと思い、ファルマは緊張しながらもう一度声をかける。

「ロッテ」

が、ロッテはすぐそこにいるファルマに、視線を合わせようともしない。

ふと、街路を吹き上げた風が調剤室の窓枠を揺らす。

彼女は箒を持つ手を止めてはたと顔を上げ、きよろきよろとあたりを見渡す。

「？ ファルマ様のお声が……聞こえたような」

ロッテはファルマを探すようなしぐさをしているが、ファルマと

は視線が合わない。

ロツテがほかの部屋に行ってしまうと、エレンが出勤してきた。ファルマはエレンに声をかけようとしたが……エレンはファルマの前を素通りしていった。

「おはよう、ロツテちゃん！ ファルマ君はもうきた？」

「おはようございますエレオノール様。私が来たとき裏口の鍵が置いていたのですが、まだ誰もきていないようです」

「あら、昨日の私、戸締りを忘れたのかしら。気をつけなきゃ。おかしいわね」

エレンは納得がいかないといったように、首をかしげている。エレンが戸締りを忘れるということは稀だった。

（ロツテ？ エレン？）

目の前に二人がいるのに、彼女らにはファルマが見えていない。

大きな声を出しても、声も聞こえていない。

ファルマはさすがのように目の前で手を振っていたが、やがてその手をおろした。

（そうか。そろそろ迎えがきているのか）

暫く、半分は立ち尽くしながら、まるで幽霊のように、彼女らのすることを見ていた。

少しは気づいてくれることを期待していた。

しかし、その時間は彼女らがファルマの存在に気づかないという事実が確定してゆくばかりだった。誰もファルマを気にしていない。

セドリックとルネがのんびりと出勤し、いつものように走ってき



たらしいトムが息を切らせて顔を出す。

シフト表を見るに、アメリカは午後からの勤務。ラルフ・シエルテ  
ルは非番のようだ。

「ファルマ君、どうしたのかしら」

「ファルマ様、今日はいらっしやるのですか？」

「きちんと引き受けてくれたから、約束をすっぱかすようなことは  
ないと思うのだけれど」

エレンとロッテがファルマの身を案じているというのが伝わって  
きた。

「いつもなら、そろそろ来ているはずなのに」

「どうなさったのでしょうか、先に出発されたと思うのですが」

セドリックやほかの従業員らも心配そうだ。

ファルマは彼らの表情を目に焼き付けながら、心の奥底からこみ  
上げてくるものを必死に押さえつけながら、静かに目を瞑った。

(……俺はもういないんだな)

声も姿もなくなっても、存在だけは覚えてくれている。

彼らの記憶の中に、ファルマはいる。

最後に、診眼で薬局内の全員を診る。

これまでと同じく、重篤な疾患の懸念はない。

みな、健やかに日々を生きている。

彼らにとっての日常はゆるぎないものだ。

カウンターのメモ用紙に、急用ができたのでシフトに入れなくな

った旨を記載し、ファルマが持っていた異世界薬局のマスターキーをメモの上に置いた。

創業7年目の薬局カウンターには少し風合いが出てきた。細かい傷もついていて、その由来も少しは覚えている。

（さよなら、異世界薬局のみんな。みんなに会えてよかった）

すぐに効果は消えてしまっただろうが、思いを込めて疫滅聖域を贈った。

存在が消えてしまっても、ファルマの神力はまだ生きている。

「今……」

店舗全域の空気が浄化されたのに気づいたエレンがはっと顔を上げる。

ファルマはもう振り返らない。

何も見えていないエレンを、そして異世界薬局にいる人々を直視できないから。

ファルマは誰にも発見されずに、異世界薬局の正門を透過して出てゆく。

自分で自分の姿は見えているのに、他人からは見えていない。

可視光はファルマを透過している。

屈折率はゼロになって。

（今日だったんだな、砂時計の砂が落ち切ったのは）

ファルマはそう実感した。

あたかも人々にとっての死がそうであるかのように、存在の断端

は突然やってきた。

いつかはこうなるとわかっていたのに、そうだと分かって全ての準備を整えてきたのに。

何も恐れることはない。

すべては計画通りだ。

それなのに、そうかと受け入れるには抵抗があった。

とてつもなく情けない顔をしているような気がするが、……かまうものか。

こんなに大勢の通行人の中にありながら、誰も見ていない。

この世界を名残惜しいと思っているのは、自分だけなのだろうか。目に映る光景の、この世界の何もかもがいと美しい。

門扉をすり抜けて、異世界薬局の敷地から一步外へ出る。

街路の陽光も、真夏の熱気も、人々の喧噪も肌になじまない。

ファルマは存在をこの世界から切り取られたように感じながら、大通りを歩く。

街路を照り返す蜃気楼に存在がゆらぐ。

何もかもほぐれて、溶けてゆくかのようにだった。

地を踏みしめて歩いていたのに、ついには足音も聞こえなくなっ

た。

そうして、ファルマはいなくなった。

帝都秘報 (Le secret de la Cité impériale)

1152年8月16日 号外。

宮廷薬師にして異世界薬局グループ創業者ファルマ・ド・メデイシス師（17）が、8月16日未明より失踪中とのこと。

近親者に遺書、勤務先へ辞表が届いたことから、帝国、神聖国大神殿合同で、事件と事故の両面から極秘捜索が行われている模様。

師は先月、異世界薬局グループ最高経営責任者を退いていた。

失踪の経緯や動機などは明らかになっていない。

同報には帝国および神聖国勅令による緘口令が敷かれている。

小紙では、師の功績を振り返る。

ファルマ・ド・メデイシス師は世界最大のシェアを誇る公私合同の製薬企業を立ち上げ、黒死病、結核、天然痘などのこれまで不治とされていた数々の病の治療薬を普及させ、世界保健医療に革新をもたらし、ある試算では、創業以来のべ数千万人もの人々の命を救ったと評されている。

1145年 帝国宮廷薬師就任

異世界薬局総本店創業

1146年 調剤薬局ギルド創立

黒死病の防疫と世界的流行の終息に甚大な役割を果たす

1147年 筆頭宮廷薬師就任

帝国医薬大学総合医薬学部教授就任

マーセイル工場稼働

1150年 東岸連邦樹立を仲介

1151年 尊爵位授与を辞退

1152年 筆頭宮廷薬師退任

異世界薬局グループD G退任

## 9章9話 喪失と波紋

神聖国の守護神、ファルマ・ド・メディシスが予告なく失踪した。シャルロット・ソレルは、宮廷を臨むアパルトマンからド・メディシス家の屋敷に一時戻ってきた。

そこは心の実家とも呼べる場所だ。

一見しては以前と様子は変わらないが、邸内の混乱はド・メディシス邸に灯る明かりがいつもより格段に少ないということところにも見て取れる。

「おかえりなさい、シャルロット。よく帰ってきてくれたわ」

「おかえり、ロッテ」

従前通りベアトリス付きのレイメイド、上級使用人を務める母カトリーヌや、使用人仲間らの出迎えに、ロッテは涙をこらえながら身を預けた。

シモン、セドリックの、疲れ切った顔も見える。

家族も同然に過ごした、使用人時代の仲間たちが懐かしい。

母の顔を見ると、様々な思いが押し寄せて胸が詰まり、膝がぐだけて体に力が入らない。

カトリーヌはあらら、と言って彼女の体をふわりと支える。

「……ちゃんと食べてる？ 食べられていないわね、お前らしくもない、お腹がすいていなくても食べるようにしなさい。皆が心配するわ」

「うん……ごめん、ごめんね。ちゃんと食べるようにする」

ロッテは無理やりにひきつった笑顔を張り付けて、そう返すので

精一杯だ。

今日はいつものようにカトリーヌや使用人仲間への手土産も持ってきていない。

そんなことに気づく余裕もないほど、精神的にボロボロだった。自分はひどい顔をしているに違いない、とロツテは自覚する。

ロツテの個室は引き払ってほかの使用人に譲っているので、当面の帰省にはカトリーヌの部屋を使う。

「明日は薬局の勤務が入っていたかしら」

「ううん。しばらくはないわ。エレオノール様が、ド・メディシス家をよろしくって」

「そう……エレオノール様にもお気を遣わせたわね。あの方は強いお方だわ」

ロツテは異世界薬局の現況を話す。

あの日を境にしても、異世界薬局グループは全店舗営業を続けている。

何より、ファルマが薬局の存続を望むだろうということで、エレンが気丈にも店を開けている。ファルマの失踪を織り込めず、大暴落している株価のことはもう知らない。

スタッフの不足と、ファルマの安否を問う問い合わせに対応する要員を補うために関連店舗から応援を呼んでいるが、ファルマの失踪の影響は計り知れない。

大げさな話でもなく、少しずつ広まりつつある悲報に、帝都市民全体が絶望に打ちひしがれている。

ロツテは常連客から彼の不在を問い詰められるたびに、感情を押し殺して応対するエレンの横顔を思い出す。

痛々しかった。

それでも、あの場にいた誰もが心の生傷からとめどなく血を流しながらでも、彼の望んだように薬局としての日常を続け、日々の患

者を癒してゆくほかにない。

担当薬師たちは私語を慎み、以前にもまして患者に向かい合い仕事に打ち込んでいた。難病患者の引継ぎも随分前から行われていて、エレンは「知らない間に軌道に乗せられていたよう」と口にするくらいだ。

忙しさに身を任せて奮闘する彼らをサポートしながら、薬局専従でもなく医学的な専門知識を持たないロッテの出る幕はなくなっている。

それどころか足手まといかもしれないと感じた。

沈んだ表情は、癒しと救いを求めて人々の訪れる薬局にはそぐわない。

ロッテの懊悩がピークに達していたとき、ファルマの書斎とその持ち物の保全にロッテの記憶が必要だとのことで、カトリーヌにド・メデイス家に呼ばれた。

この世界の慣習として、ファルマに限らず一定以上の地位にある貴族の安否が知れなくなったとき、その財産や権利、証書関連が散逸しないよう、ひとつ残らず記録する必要があった。

ファルマのいた時間を切り取って現実逃避し続けることは許されない。

いなくなった人物は、いなくなったものとして扱われる。

ド・メデイス家にも否応なく喪失は押し寄せて、それと向かい合うよう強いられていた。

俯きがちだったロッテを気遣って、エレンがそちらに行くよう促してくれたのだろうと思っている。

「お母さん、ブランシュ様のご様子は」

ロッテは身を竦めながら尋ねる。

ロッテですら日暮何も手に着かないのに、実妹のショックはいか

ばかりだろう。

「直接お会いするといいわ。ブランシュ様はファルマ様のお部屋にいらっしやるから。お食事の準備をしたのだけれど、今朝から何も召し上がっていないわ……」

ロッテと同じように、ブランシュも食欲が著しく減退しているようだ。

憂慮すべき状態なのだろうか、カトリーヌは言葉を濁す。  
時刻は夜八時を回っていた。

ロッテは荷物を置くと急いで身支度を整えて、ファルマの部屋に引きこもっているブランシュを尋ねた。

彼女はすでに独立してド・メディシス家の使用人ではないので、普段着でファルマの部屋の扉をノックする。

「ブランシュ様。シャルロットです。ただいま戻りました。軽食はいかがですか？」

ロッテがファルマの室内に入ると、明かりもつけずにベッドに倒れ伏していた。

ファルマのベッドに埋もれるようにして、ぴくりともせず平たくなっている。

ロッテは嫌な予感がして彼女の安否を確認する。

「ブランシュ様！ ご無事ですか？」

「ロッテ。私は大丈夫、ごめんね。大丈夫じゃないのは兄上のほう」

顔を枕に伏したまま、ブランシュは力なく答えた。ファルマのにおいが残っているだろうか。いや、彼は無臭だった。あたかもこの世界に最初から存在しないかのように、何の、生の痕跡といえるも



のがなかった。彼のおいがあるとすれば、彼がオフの日につけていた香水だ。

「ブランシュ様……」

「どうしてかな……兄上、いなくなっちゃったの」

ブランシュの声は艶を失いしわがれて、喉は乾ききっているようだ。

衰弱しているのだろうか、ベッドの上から起き上がる気力もないようだ。

ロッテは彼女の、実兄の喪失の深刻さを慮る。

何とかベッドの上に支え起こして、ロッテはブランシュの好きなフレーバーのお茶を供する。

水の神術使いが神力を帯びている間、常に自身の周囲の水分や湿度をコントロールしている。正属性の水の神術使いの脱水状態は特に危険だというのはド・メディシス家の使用人たちの常識だ。泣きすぎてはいけない。最悪意識障害につながる。

なんでもいいから、水分を取らせなくてはならない、とロッテは危機感を覚えている。

「これ、兄上が買ってきてくれたやつだね」

ブランシュはまたファルマを恋しがり、彼女の頬をとめどなく涙が伝う。

ロッテは彼女が目の下に大きなクマを作っているのをこの時初めて見た。

「遺書があるんだって。兄上はこの家にいる家族全員に手紙を残していたんだって。ロッテ宛てにもあるんだよ。もう読んだ？」

ブランシュは顔を覆った指の間から、恐る恐るロッテの顔をうかがう。

彼女の瞳には恐怖の色が色濃く表れている、ロッテはそう読み取った。

「そうだったのですね……まだ、拝読しておりません」

「でも、どうしてかな。兄上の最後の言葉なんて、読みたくないの。読んでしまったら、本当に兄上が死んじやったような気がして、事実が確定するような気がして嫌なの。母上も父上も家の皆ももう読んでしまつて、私とロッテがまだ読んでない」

カトリーヌからは遺書が存在すると聞かされていたが、ロッテはそれを読むのを後回しにしていた。

理由はブランシュと同じ心境だ。

「もう、何も考えなくていいかな。大好きな兄上なしに、私はこれからどうやって生きていけばいいんだろう。教えて、ロッテ……」

涙をこらえきれなくなったブランシュの肩に手を添えて、ロッテももらい泣きをして二人で抱き合つて悲しみを分かち合う。

「今、思えばしつくりくるんだ。兄上がどんなに頼んでも私を弟子にしなかったわけも、エレオノール師匠に店を譲ったわけも、これから何がしたいか訊いても答えなかったわけも、私の誕生日に何年先まで使える写真のアルバムに少しでも写真を入れてくれたわけも、勿忘草の押し花と一緒に作ったわけも、全部わかつてしまつたんだ」

あんなにヒントがあつたのに、私はなんて薄情なんだろう、とブランシュは嘆く。

「兄上は優しい人だったから、色々抱え込んでいたのに誰にも何も言えなかったんだ。それなのに私は……何も気づかなくて。兄上に何をしてあげられたんだろう」

「ブランシュ様、ご自分を責めないでくださいまし」

何もできなかったのは自分も同じだ、とロツテも胸をえぐられる。同じ思いをしているブランシュにかける言葉が見つからない。

ファルマなら泣きじゃくるブランシュに何というだろう。と考えるを巡らせる。

「あつ、ブランシュ様、明かりを消しているので、窓から星がたくさん見えますよ」

ロツテは無理やり元気な声を出して、裏庭に面した窓を勢いよく開け放つ。空気のだよんでいた室内に、新たな風が吹き込んでくる。生ぬるく乾燥した夜風が部屋に舞い込んできて、まっさらのカーテンが室内でふわりと揺れる。

窓の外には雲一つなく、晴れ上がった夜空に星が輝いてみえた。

ロツテは星空に気づいて「あつ」と思った。

「私は、俯きたくなったときは空を見上げることになっています。どんなに暗くても、暗ければ暗いほど明るい星が見えます。ファルマ様の存在は闇を照らす星のようでした。ファルマ様が悪霊を退けてくださったので、私たちはまた悪霊におびえず夜を好きになることができました」

ロツテはまだ、「その神力は大陸中に及んでいる」と言っていたファルマが生きているように思えてならない。何故ならこんなにもきれいな星空が広がっているから。

ファルマの神力は雲を払い、高気圧をもたらすと、彼自身が言っ

ていた。

「ファルマ様もきつと、どこかでこの星空を見ているに違いありません」

「そうかな……だいいいな」

ブランシュも泣き止んで、ロツテに寄り添って窓辺にたたずむ。

ロツテが薬神を見つけたあの夜に、宇宙の奥行を教えてくれた彼への祈りを込めながら、無事を信じている。

「ブランシュ様、チョコレート食べません？ 溶けかけですけど」

「食べる……頑張って元気だす」

ファルマと空の上で神術陣の絨毯に腰掛けて星空と地上の星を見ていたとき、信じられないような絶景の中でファルマがくれたとかけのチョコレートの、ほろ苦く甘い味を覚えている。

もう、あの星空は地上から見上げるほかにないけれど……と、二人でチョコレートを食べながら思い出がロツテの胸に詰まる。

「あれ……？」

ロツテは一瞬見間違いかと思った。

開け放った窓のガラスに、室内からの光源が反射している。

光といっても、ランプの光ではない。

もっと人工的な、長方形をした窓枠のような光が、ファルマのサイドテーブルの上に載っている。

「……なんだろう、これ」

職業柄、人一倍光源の位置や質感には敏感なロツテははやる気持

ちを抑えて振り向くが、サイドテーブルの上には何も無い。

「えっ」

窓ガラスには光源が映っているのに、実物は存在しない。

ロッテは幻を見ているかと錯覚し、思わず頬をつねってみる。

「ロッテ、どうしたの？」

ロッテは窓ガラスではらちが明かないとファルマの鏡を持って、サイドテーブルの上を映す。

鏡の中には、やはりはっきりと輪郭と質量を持つ光の板が存在していた。

光板の中には、見知らぬ建物群が映りこんでいる。

この光の質感を、ロッテは知らない。無理やり似ているものをこじつけようとすれば、小さなスクリーンの上に映画が投影されているかのように見える。

そういえば、映画館のスクリーンに投影する以外に映像を映す方法として液晶というものがある、そっちのほうが綺麗に見えるとファルマが言っていた。

何気なく聞いていて概念だけは知っている、ファルマの言っていたその液晶画面なのだろうか。

ロッテが思い切り戸惑っていると、光板の一部がさらに四角く切り取られて、その中に手書きのサン・フルーヴ帝国語が書きつけられてゆくのが見えた。

「えっ、えっ　鏡を見てくださいブランシユ様」

「えーっ　鏡の中に」

ブランシユもロッテに促されて鏡の中を覗き込んで驚く。

長方形の光板の中に現れたもの、それは……手紙だった。  
誰に宛てた手紙なのかは、すぐに分かった。

【ブランシュ、ロッテ。久しぶり。落雷の日以来だな】

ブランシュはチョコレートを取り落として息をのみ、ロッテは思わず呟いた。

液晶と思しき画面には、ファルマの正規表現でのサインが書かれていた。

「この筆跡……って」

ロッテはその、久しく見ていなかった特徴的な筆跡を覚えていた。  
あの落雷を境に失われてしまった懐かしい筆跡がそこにあった。

かつてのファルマ・ド・メデイスはどちらかというと角ばった文字を書いていたが、落雷後のファルマの字は癖が強く、まるっくなっていた。以前とは筆跡が異なっていたため、サインも公的に変更したはずだ。

すっかり新しい筆跡に慣れてしまっていたが、ロッテが元のファルマの筆跡を忘れたわけではない。

ロッテはファルマが幼少期に使っていたノートを取り出してきて、筆跡を見比べる。

ロッテはこちら側と意思疎通を図ろうとする何者かの正体に思い当たる。

「ファルマ様……？」

「待って、ロッテ。信じちゃだめ、偽物かも。そうでしょ！」

ブランシュがロッテをたしなめる。

そう言われて、ロッテも一理あると思いなおす。

危なかった、もし悪霊か何かの仕業であれば、まんまと術中にはまってしまうていた。

ブランシュは涙を引つ込めて腰の神杖を構えながら、いつでも神術を使えるようにしておく。

ブランシュの杖の先端が輝き始める。

「もしあなたが悪霊ではなくて前の兄上なら、今の兄上が忘れてしまった私のドゥードゥー（添い寝人形）の名前もわかるはず。答えて」

ブランシュは、元のファルマでなければ解けないクイズをしかけた。

ロツテも知っている。

ブランシュのドゥードゥーは小さなウサギのぬいぐるみで、ココと名付けていた。

紛失してしまって、今はもう屋敷にはない。

ブランシュは鏡の中ではなく、サイドテーブルの上の空間を狙うことにしたらしい。

< i 6 3 8 2 6 6 — 2 4 9 6 >

【三歳の時になくしたやつのか？ うさぎのココだ】

「ほんとだ。ちいさいあにうえだ……」

「ファルマ様です……」

何の引っかけりもなく回答されては、ロツテもブランシュも認めざるをえない。

異世界人のファルマいわく、元のファルマはまだ生きているものの、ロツテたちには近づけない場所にいるとのこと。

それが何故なのか、詳しく教えてくれなかった。

異世界人のファルマがいなくなったから、元のファルマが現れたのだろうか。

「一体、何が起きているの？ 元気？ どこにいるの？」

ブランシュは杖を放り出し、ロッテとともに鏡の中を覗き込む。

【心配はいらない。俺だけではなく、「彼」も今は無事だ。二人に手伝ってほしいことがある】

まるでこちらの答えが聞こえているかのように、鏡の中の世界を通じて筆談と対話のやりとりが始まった。まるで時間が巻き戻されたように、ロッテはかつてのファルマの記憶を取り戻す。

それを嬉しく思うと同時に、もの悲しくも思えてしまうのだ。

元のファルマの存在が濃くなればなるほど、ロッテが思いを寄せ、振られ、それでもなお慕っていた、あの異世界人のファルマとの別れがそこに迫っているように思えてならなかった。

【やってくれるか？】

彼の話聞き終えたブランシュは、大きく息を吸い込む。

直後、「絶対無理だってっ！」という悲鳴が中庭にこだました。

ド・メディシス家の庭に奇妙な悲鳴が聞こえたその翌日の朝。

ファルマが失踪して初めて、サン・フルーヴ宮殿にて有識者会議に緊急招集がかかった。

有識者会議はこの日までに神殿関係者、学術関係者、帝国関係者あわせて五十名ほどの規模となっていた。



会議室に集まった彼らは言葉も少なく、ショックを隠し切れない様子だ。

「ファルマの動向はつかめたか」

「いえ。依然として行方はしれません。闇日食までまだ日があるのですが、先を越されました。不覚でした」

声を絞って報告を上げるブリュノはもはや放心状態に近い。

「神殿の秘儀をもつてしても、神力探知が無効になっています。常に聖域と神力だまりを作っておられたファルマ様が帝都を去ったとて、大陸におわす限りはその所在は理論上検出できるのですが、大陸には反応がありません。そればかりか、東岸連邦守護神殿分院にも反応がないとの電報です」

サン・フルーヴ帝国には神力の痕跡もなくなっている。

完全なる消滅だったとジュリアナも報告書を手に補足する。

神官らも同席し、口々にエリザベスに報告する。

その場にサロモンの姿はない。

「ふむ……これまでとは事情が違うようだな」

エリザベスはつとめて冷静を保つように、声を低く抑えている。

「彼はこちらの計画を知っていたのか？」

「いえ、彼は知りえなかった情報であると考えします」

「では本人の意図せぬまま消えたのか」

ファルマに有識者会議の動向を密かに内通していたノアの表情には一片の曇りもない。

神妙な面持ちで立哨にあたっている。

「ファルマが神力を失ったという線はないか？」

「その可能性もありましようが、そうなると帝都から移動したかどうかすら把握できません。最速で移動しようにも透明化し神術を失った状態では薬神杖の飛翔も通常の交通手段も使えず、旧神聖国へ向かう馬車等を乗り継いでいくほかにありませんが。賢明な守護神様ですから、そんな原始的な移動手段ではないと思われます、過去の実績からすると、気球や航空機も視野に入ります」

応じるリアラ・アベニウスの声が細ってゆく。

ファルマを絡め捕ろうとしても、巻かれてしまう。

霞を掴むように、彼は手に負えない。

だから、ファルマを最後まで監視下に置いておけなかったのは大問題だ。

「失踪の当日、彼は異世界薬局店舗に出勤する予定でしたが……カウターに急用とのメモが残されていました。あのような書き方をするからには、何か予想外の出来事があったのかもしれませんが」

エレンがそう伝えて、悔しそうに齒を食いしばる。エリザベスのため息は深い。

「消滅を経験し、予定より早く旧神聖国へ向かったのだろうか……  
解せぬな」

順張りであれば、ファルマは旧神聖国に向かったのだろう。

だが、旧神聖国にはそれらしき神力だまりがないという報告だ。

この情報をどう解釈すればよいか、闇雲に搜索すれば永遠に彼は追い付けない。

エリザベスは瞳を閉じてファルマの足跡を辿ろうと思案する。

「旧神聖国は今、人が立ち入れぬようになっておるか」

「はい。常人ならば。ただファルマ様が神力を失っていないとすれば、空中から接近可能です。すでに旧神聖国に隣接する地域には、サロモン様らをはじめ精鋭の神官団が待機中です。鎡の歯車による周辺住民への被害を想定して救護所も立ち上げてございます。現時点でファルマ様の行方が知れずとも、必ず鎡の歯車の遺構を訪れるかと。我々も現地向かいますか、聖下」

ジュリアナがエリザベスの決断を促す。

「うむ、無論だ。とはいえ旧神聖国に至るまで数日。どれだけ急いでもファルマには追い付けぬだろう」

「闇日食までまだ時間があります。我々は陸路の最短距離で急行すべきです」

「出立は本日、遅くとも明日朝にでも」

ブリュノも賛同し立ち上がる。

「クララ・クルーエを随行させ、順路を定めよ」

例によって旅神を守護神に持ち、予知能力を持つクララに白羽の矢が立っていた。

「は。往路の選定をさせましょう」

「それがよい、急ぐぞ」

出立の打ち合わせで、議場が騒然としていたときだった。廊下から騒々しく複数名が駆け寄ってくる足音が近づいてきた。

聖帝も気づいて耳を傾ける。

一瞬の静寂ののち、扉番を吹き飛ばして鋼鉄製のドアをけ破り、議場に颯爽と現れたのは一人の少女だった。

「ここにエレオノールがいるだろう！ ファルマを空から追っぞ！」

東岸連邦・マイラカ族の長、メレネーの登場だ。

彼女を取り押さえようとする宮廷の侍従らを引きずりながら乱入してきた。

「メレネーか！ 東岸連邦にいたのでは」

エリザベスが驚いて叫ぶ。

「そうだ。一昨日まではな。一日かけて大陸を渡ってきた。呪力消費が著しいので私しかここまでは来れなかったがな」

「あの呪術、絵鳥を使ったのか」

「そうだ」

彼女は長らく封印してきたマイラカ族の呪術の粹、絵鳥に乗って空からきたのだ。

旧神聖国は、新大陸とサン・フルーヴ帝国の間にある。

最長距離を飛べるメレネーは旧神聖国に立ち寄らず、途中で飛べなくなった兄妹たちを旧神聖国に置いてファルマの搜索にあたらせ、まっすぐサン・フルーヴ帝国に来た。

大陸間を呪術で渡りきったあと、さらに神聖国まで往復など、メレネーでなければできない芸当だ。

さすがは一時的とはいえファルマを圧倒するほどの呪力を持ち、マイラカ族の長を務めているだけある。と議場のメンバーも舌を巻く。

メレネーは彼らには目もくれずかかと進んで、予告通りエレンを連行しようとする。

「エレオノール。時間がない、すぐ行くぞ」

「ええ。連れて行つて。メレネー」

エレンもメレネーの瞳をとらえて、真剣な面持ちで頷く。  
それをエリザベスが引き留める。

「待て、何をしようとしている！ ファルマを止めようとしているのか」

「ファルマのなすことを邪魔はしない。ただ、隙あらば救出しようとしている。お前たちも概ね同じ考えだろう」

「そのようだな。では余もつれていけ」

「は？ 断る。お前はいらん」

エリザベスも同行を申し入れたが、無碍に断られた。  
聖帝をして足手まといと吐き捨てるメレネーに、議場の面々は青くなる。

「私には大陸間を超えて旧神聖国まで、三人を乗せて飛べるだけの呪力の余力がない。今はエレオノールの特異な能力だけが必要なのだ」

「そうか。では我々はあとから追う。そなたら、ファルマを頼んだぞ」

「うるさい、私に指図をするな」

メレネーは気が立っているようだ。

エリザベスもそう言われては閉口してしまう。

「待つてメレネー、行くわ。すぐ荷物を取ってくるから」

エレンはファルマが持っていた救急カバンの中身を再度確認し、そのまま持つてくる。

（薬も効かない、怪我もしない彼には必要ないものかもしれないけれど、持っていないくて後悔したくないから）

エレンはメレネーの操る絵鳥に乗り、宮殿の庭園から大勢の人々に見送られて飛び立った。

後に残されたエリザベスが、大きく息を吐き、傍に控えるブリュノに問う。

「やれやれ。薬神との知恵比べは、薬神の勝ちか？」

「いえ。例の計画には聊かも影響はございません」

ブリュノは落ち着いた口調で応える。

「なるほど。それは頼もしいことだ」

ブリュノの毅然とした物言いに、エリザベスが挑発するように瞳を眇める。

「それではただちに計画を実行せよ」

「は、直ちに」

エリザベスの命を受けたブリュノはその足で、供もつけず宮廷内の守護神殿へ赴く。

一階部分の聖堂を通り抜け、地下へ至る通用口へと進む。通用口の扉の前で呼び止められる。

「これは尊爵。これより先は立ち入り禁止でございます。本日のご用向きは」

悪霊や不審者の侵入を防ぐため、神殿内の重要区画に至る要所要所や秘宝を祀っている宝物殿には、戦闘用神杖を持った門番の神官がいる。

ブリュノは門番に目配せをし、エリザベスから賜った勅書の表紙を見せる。

「どうぞ」

門番は扉を開いた。

悪霊はおろか守護神であるファルマをも通さない、最高レベルの対霊神術陣の回廊を通過し、目指すは神殿の地下施設だ。

ブリュノは地下室へ至る扉の前で立ち止まる。

照明すらない暗がりの中、神術によって施された封印を解き、床に敷き詰められた神術陣を踏んで密室へと足を踏み入れる。

「私の役目はようやく終わりそうだ」

最後の仕事として、七年間の計画を完遂させるときがきた。

墓守を操り、ファルマの計画を援けると同時に、彼の消滅を阻止する。

墓守の思考を形成する枢要となるインターフェイスは、これほどまでに近くに存在していた。

息もできないほど速度を上げるメレネーの腰に手をまわし、冷え切ったその背中にぴったり寄り添う。

メレネーの焦燥がエレンにも痛いほど伝わってくる。

「急ぐぞ。ファルマの存在が完全に消滅し、この世に神術と呪術なき世界が訪れてしまう前に。何もかも、この絵鳥すらも消えてしまふ。そうなれば我々も地上に真つ逆さまだ。呪力が弱まる前に兆候はあるだろうが、緊急着陸に失敗した場合、素直に命はない」

メレネーは余裕のない顔で絵鳥を操りながら、エレンにも覚悟を求めた。

呪力の出し惜しみはしない、とも言いつ添えた。

「承知の上よ。空気抵抗を減らせるから、できる限り高高度を全速力で飛んで」

エレンも即答する。

空気抵抗を軽減させるために、体を低くして絵鳥に添わせる。

メレネーが飛翔に全速力を出していれば、それだけ地上に激突するエネルギーも大きくなる。

「すまないな、巻き込んで」

「謝らないで。私を迎えに来てくれてありがとう」

「ああ、お前は連れていくべきだと思った」

メレネーはエレンの言葉にこたえて、少し口角を上げた。

「でもどうしてあなたはファルマ君が消滅したってわかったの？こちらの状況は戒厳令でまだ大陸には伝わっていないでしょう」

「ファルマが大陸に来たからだ。私には見えなかったが霊が教えて



くれた」

霊たちがファルマの訪れを告げるも、メレネーには見えなかったという。

「あなたにもファルマ君の存在は見えなかったの？」

「ああ、霊たちがそこにいるという場所には少し異様な感覚はあったが、彼はこれまでとは異なる状態になっていた。霊を仲介しても、意思疎通は図れなかった」

「……もしかして、私を連れに来たのは」

「お前にはファルマと同じ能力があるはずだ。以前から、私の霊がそういつていた」

「ああ……そうだった！」

エレンは腑に落ちたといった反応をする。

「ちなみに、まだ使えるのか？」

「使えるわ」

「そうか、ならば来た甲斐があったというものだ」

メレネーの言葉を聞いて、エレンはどうして気付かなかったのだろうと悔やむ。

初動がもつと早ければ。

存在は見えなくても、声は聞こえなくても、ファルマが消えた瞬間に、せめてその日のうちに、診眼を使って彼を探していれば。

帝都を去ろうとする彼を引き留めることができたかもしれないのに。

状況を受け入れられず、帝都をぼんやりと眺めていた躊躇いの時間だってあったのかもしれない。

（私たちがカウンターの上のメモと鍵を見つけてファルマ君のことを案じていたとき、彼は私たちのすぐ目の前にいたのかしら）

ファルマが薬局を去ったあと数日経ってメレネーたちのもとを訪れたのは、帝都の人間にはない特別な呪力を持っていたメレネーをたよって、彼女に最後の別れを告げるためだったのだろうか。

メレネーに存在を気付いてほしかったのだろうか。  
様々な思いがエレンの胸に交錯する。

そのメレネーが、ファルマを見つけられずにエレンを迎えに来た。

（私はあれだけの時間彼とともにいながら、彼の主治薬師にも理解者にもなれなかった。往くとわかっていたのに、止められなかった）

それはどこかで、彼は不死身で不滅の存在だと思って彼の終わりを信じなかったからかもしれない。と彼女は気付く。

最初から、そうではなかったのに。

悔しくて、とめどなく涙があふれる。

メレネーの集中を妨げぬよう、エレンは声を殺して涙を流す。

（それでもまだ、終わっていない。私にしかできないことがある。私の身にある薬神紋はまだ生きている。神術も呪術もまだ生きている。それは彼がまだ健在だという証。診眼なら、ファルマ君の居場所を特定できる……）

世界でただ一人、エレンがファルマから受け継いだ力がある。  
ファルマの存在は見えなくても、診眼は彼の位置を暴き出す。

（彼が私にくれた力。それを今度は、彼を救うために使っわ……！）

ファルマが見えなくなった前日、最終講義の日の記憶をたどる。

エレンが最後に診眼を通して診た壇上の彼は、普段のごと、血の  
ように赤い光に染まっていた。

（今度こそ、あなたを治してみせる）

## 9章10話 ファントジーの棄却と、センス・オブ・ワンダーへの の帰

ファルマはついに、旧神聖国中枢部の謎の歯車の上空に至る。

サン・フルーヴ帝国を出て見えない体で縁のある人々に別れを告げ、

サン・フルーヴの家族や使用人、宮廷人たち、大学関係者、聖帝、関連薬局、関連店舗にも郵送でメッセージを残した。

ド・メディシス家の中を歩いていて、寝起きのブランシュと視線が合ったような気がする。

マーセイルでは工場の稼働状況に異変がないこと、キアラと彼女の母親が健在であること、チアマゾールの生産体制に滞りがないことなどを確認し、スタッフラに感謝の言葉をつづった。

強制有給を取らされていたテオドルにも適切なアドバイスを書き残した。

新大陸への逗留では、東岸連邦の人々のために合成の難しい各種の原薬を作りおいた。

彼の持つ聖域で菌を殺してしまうため、キャスパ教授の研究室には近づけなかったが、手紙は書いた。

ファルマの存在はメレネーの使役する霊に気付かれてしまったようだが、何とか巻いて逃げてきた。

そのほかにも思いつく限り、彼は気がかりな人々のもとに立ち寄った。

もう思い残すことがないよう、誰も不利益を被ることがないよう放浪と回り道の果てに、それでも予定通りに自分の意思でこの場所へ到達した。

製品化の一步手前にあるものも含めれば、ファルマでなければ作

れない薬はもうない。

知識の継承は終わっていた。

実務上、体制上、ファルマの失踪への影響は最小に抑えたはずだ。

（この世への未練はもうない、俺の存在価値もなくなった。それでいいんだ……最後の仕事に集中しよう）

空中には誰もいないはずなのに、ふとした拍子に、誰かに見られているように錯覚する。

（ここから先は、本当に一人だ）

念のため、旧神聖国の規制線の内側に誰もいないことを、最後に診眼で確認する。

存在の抜け殻のような状態になっても、見えない体にはなお神力が充ちて、最後まで診眼が使えることに辟易としてしまう。

診眼を通して俯瞰すれば、人々の存在が青い光となって地上の星のように遥か地平線にともる。

（まだ誰がいるな。邪魔が入ると困る）

神聖国の外の集落に、人が不自然に集まりつつある。

それは現地住民かもしれないし、神聖国の関係者の可能性もある。誰であろうが、接近されると不都合だ。

彼らが興味本位に鎧の歯車へ接近してくると、これから起こる予測不可能な出来事から彼らの身の安全を保障できない。

近づかないでくれと伝える術もなく、近づかせないようにする。ファルマは仕方なく実力行使に出る。

（銅を創造）

（鉄を創造）

ファルマは無人の範囲を正確に見積もると、節約して蓄えておいた神力を惜しみなく用いて、神聖国一帯に高くそびえる銅の防壁をドーム状にし、三重に張り巡らせた。

防壁の素材に銅と鉄の層を用いたのは、人の侵入を防ぐと同時に、電磁シールドで霊の侵入を防ぐためだ。

メレネーたちの助けもあり、悪霊はこの大陸から一体残らず掃討したとはいえ、地殻変動によってまた悪霊のようなものが現れないとも限らない。

ひとたび鋸の歯車の内部で何か起これば、即席の防壁がどれほど持ちこたえるかは未知数だ。

この内部で何が起こつても、外の人々に巻き添えを出さないように。

彼はそう祈りながら念入りに準備を整える。

巣をつくろい整える親鳥のような心地だ。

地上に露出していたドーム状の構造物の深奥へ侵入するべく、範囲を絞ってその蓋を外す。

（鉄を消去）

（マグネシウムを消去）

ドームの天井部を覆っていた殆どの構造物は物質消去で消えてなくなつた。

ここまでは、地球の薬谷 完治より得ていた事前の情報の通りだ。

ファルマは瞑目し大きく息を吐くと、未知の領域への降下を開始する。

地下深くへと繋がる洞窟の中心を一つ一つの座標として結びなが

ら、瓦礫をすり抜けるようにして薬神杖で下へ下へと進んでゆく。

奈落に沈んで、闇に溶けてゆくかのようなだった。

その頃、複数の巨大飛翔物体が旧神聖国を目指して飛来していた。絵鳥に乗り、旧神聖国内に降り立とうとしていたのはメレネーの兄妹らだ。

「何が起こった。あの球状の構造物は一体」

彼らの呪力量ではサン・フルーヴ帝国までは到達することができなかった。旧神聖国で待機する予定だ。

そんなとき、鎡の齒車の周囲を覆い隠すように金属のドームが現れたのだ。

「神術だろうか、光の放散が見えたが」

「……たしかに神術の一種ではあるのだろうが、ただの神術ではない、範囲が大きすぎる」

「あの者の仕業だろう」

「接近するにつれ絵鳥の飛行が不安定になっている。あの球体に近づくな」

混乱のため空中で喧々諤々としている。

絵鳥を近づけようにも、電磁シールドが張り巡らされて近づけそうにない。

「これ以上は進めない。空から近づけないならば、地上に降りて近づくしかないな」

「いけそうだ」

「足場が悪い、気をつける」

メレネーの兄妹たちが地上に降り立つと、術を解かれて絵鳥は空中に消える。

大陸の地を踏んだ長兄アイパに続いて、次兄レベパが不安な心情を吐露する。

「何とかたどり着いたが、俺たちも呪力が切れそうだ」

「呪力の残量が分からない。我々にもサン・フルーヴの者たちが使う神力計のようなものがあればな」

マイラカ族の呪力の制御は感覚的なものでしかなく、定量化できないことの嘆きも出る。

「もうこれからは、呪力にまつわる道具は必要あるまい。何もかもが過去になる」

レベパが吹っ切れたように清々しく宣言する。

「そうだな。さて、これからどうする」

「周囲に人気はないが……帝国の者がいなければ我々で搜索するほかにないな」

「本当にここにいていいのか？ 呪力が消えた後はなんとする。この土地の周囲には人気ひとけがない。呪力が尽きた後、何日徒歩で移動する？ 最悪ここで孤立して餓死だ」

アイパが現実的な問題を提起する。

「怖いことを言わないでよ……」



「メレネーがしくじるわけがない」

妹たちはこわばった顔を長兄に向ける。

兄妹たちは最悪の結末を予期して沈黙するが、メレネーの存在に一縷の希望を見出す。

「メレネーは戻ってくるさ」

「間に合うのか？ エレオノールを連れに行ったメレネーは戻って来ることができるのか？」

メレネーはまだ存分に呪力を蓄えていると言っていたが、ただの強がりかもしれない。

絵鳥がサン・フルーヴまで届かないかもしれない。

さらに往復をしている間にファルマの仕業で呪力が消え果るという結末もありうる。

失敗した場合、メレネーとの通信手段は完全に途絶する……その彼女を、ここで餓死するまで待ち続けるのだろうか。

などと兄妹たちは口々に不安を口にする。

妹のミナとベナは、懸念を振り払うように頭を左右に振った。

「メレネーの呪力は簡単に尽きたりしない。あの子を信じて、我々ができる限りのことをしよう」

弱気になつていても埒が明かないということで、長兄アイパが咳払いをし、手持ちの霊を一体呼び出す。

「パラル」

祖霊パラルと呼ばれる霊は、メレネーが兄妹たちの情報収集のため置いていった。

メレネーは帝国語をすでに覚えているので、サン・フルーヴ帝都に乗り込んでも帝国人と意思疎通が図れる。

アイパは緊張した面持ちで鋭くパラルに問う。

「この大きな球体の中にファルマ、お前たちの言う霊の王がいるか」  
『おそらく、そのようだ。私にはよく見えないが、対面したときの質感が似ている。現在は地下に進んでいる』

祖霊パラルは少し浮いて、地下を透視して淡々と告げる。

兄妹たちは顔を見合わせて頷く。

マイラカ族がファルマの気配を感じることはできなくても、霊に聞けばわかる。

「やはり霊のことは霊にきけとはいったものだ。ファルマを追えそうか」

『これ以上近づけない。奴が霊を退ける結界を作っている。無理に侵入しようとすれば私は消えてしまう』

祖霊パラルが中に偵察に入るのを拒むので、アイパは下がらせた。

「では我々が」

「ああ。だがどうやってこの中に入れば……継ぎ目のようなものがあるか」

アイパがファルマのこしらえた鉄壁を力任せに杖で殴るが、びくともしない。

レベパが苛立ちのあまり地に杖を突きたてる。

霊も助言を与えられず、閉口してしまった。

『メレネーの持っていたルタレカならば、消せたかもしれないのだ』

がな。手放したものだから……そうやって壁を殴っているほかにない。愚かな』

パラルがちくりとメレネーの選択を誇る。

「ルタレカはメレネーがファルマに託した。……あれは我々にも、メレネーにも扱えないものだった。あれでよかったのだ。過去の選択は常に正しい」  
「わかつている」

アイパがたしなめ、ベナが頷く。  
彼らが無為に時を費やしていると、背後から騒々しい物音が聞こえてきた。

土煙を巻き上げて、轟音とともに何かが押し寄せてくる。数頭からなる馬の蹄の音だ。

「待て。何かくる」

「人か、獣か？」

「馬に乗った人間のような」

「まさか帝国人が追い討ちを？」

「やれやれ、帝国人のお出ました。ここで餓死することはなさそうだ」

「話がこじれて殺されてもか？ サン・フルーヴの者とは限らないだろう」

聖帝エリザベスの取り計らいもあり、東岸連邦と大陸諸国は敵対していないが、辺境では周知されていない可能性もある。

兄妹たちは戦闘となることも予期し、不安そうな表情で身構えた。

「東岸連邦の者だな！」

馬上から声をかけてきたのは、十名以上の武装した神官らのうちの一人の男だった。

眼光は鋭いが、杖を構えていないことから交戦の意思はないとうかがえる。

霊を呼び寄せることを許容しているように感じたので、アイパは大きく声を張って堂々と答える。

アイパの発言を祖霊パラルが同時通訳する。

『そうだ。東岸連邦マイラカ族の首長一族だ。この霊は無害だ』

「よく心得ている。大神殿麾下の神官、サロモンという者だ。争うつもりはない。ここで何があった」

『おそらくはお前たちも知る、霊の王の仕業だろう。ファルマと名乗っていた』

サロモンと名乗った帝国人は霊の通訳に耳を傾けている。

神聖国と東岸連邦は交流があり、神術と呪術の技術研究などが行われていた。

その折には霊を介しての通訳が行われ、神官らも東岸連邦の人々の文化の一形態として、霊の使役を容認していた。

言語や文化を異にする人々とやり取りができるのは、常日頃の地域間の交流の賜物だ。

「そうか。ではファルマ様の中に」

「中への侵入を試みるか」

神官らの声に動揺の色がにじむ。

侵入を躊躇う神官らを冷やかに眺めながら、パラルは分析を続けている。

『かの霊の気配はあるが、この奇妙な球体の出現によって視界が遮られ、まだ姿を確認していない。それらしきものが一定の速度で下へ遠ざかり続けている、その深度は、この地上の構造物の二倍以上に達している』

パラルは神官らにもわかりやすい比喻を心掛けているようだ。

「情報提供、感謝する。土属性の負の神術使いならばこの壁を削れるかもしれない。この世の金属は全て土属性神術が支配している」  
『待て、目的は同じだが、お前たちは壁を削ってどうしたい。壁と言っても一層ではない、三層もあるのだぞ』

マイラカ族と神官、両者の間に緊張が走る。

『ファルマを止めるのか』

彼らの膠着した空気を破って、遙か頭上から「おい」と呼ぶ声が聞こえる。

振り上げば、滑空してくる大きな鳥がいる。  
アイパが地上から歓声を上げる。

「見る！ メレネーだ！」

「もう戻ってきた。さすがは我らが長だ」

メレネーが操る絵鳥の上には、二人分のシルエットがある。  
約束通り、エレオノール・ボヌフォワを連れている。

「エレオノール、診よ！」

メレネーが鋭い声でエレオノールに促す。

「いる……！ ファルマ君がいるわ、地底深くに。まだ見えてる、見失わないわ……！」

地上へ降り立ちながら、彼女は診眼を発動していた。

「やはりいたか。いいぞ、パラルの透視と一致した」

メレネーと彼女の兄妹らも嘶く。

エレンの一言を聞いたサロモンが手短かに計画を告げる。

「ファルマ様のなさることを妨げない。ただ、ことが起こった後、ファルマ様を救出できるよう我々の神術が途絶える前に避難路を確保する」

『この壁を取り払えば周囲への被害は免れないがどうする、国の一つや二つは滅びてもいいか？』

アイパがパラルを通して尋ねる。

「すでにこの周囲に国はない。三層の壁、三つの入口のうち互いに真裏に避難路を確保すれば、衝撃吸収の機能を阻害するまい」  
『良案だ』

マイラカ族たちと神官らは合意し、高々と拳を掲げた。

「今日を惜しんでなんとする、神力は一片たりとも残すな」

「はっ！」

「急げ、もう時間がない！」

サロモンという神官が宣すれば、それにこたえて土の負属性を持

つ神官らが答える。

彼らは陣形を組み、聳え立つ金属壁に突き立てた。

「地殻の分解（Décomposition de la croûte）」

後先考えない、凄惨な出力の神力が幾重にも重なり合う。

周囲を光の海へと塗りつぶしてゆく。

ブリュノ・ド・メディシスは階段を降り、守護神殿のさらに地下へと進む。

地下神殿から、守護神殿の管理するサン・フルーヴの広大な地下墓所へと接続する通路を、彼の靴音が一定の間隔でこだまする。積み上げられた骸骨の中を行けば、いつかその中の一つに加わるのだろうと強く意識される。

螺旋階段を下り、今回の計画の要となる巨大な塔型装置のふもとへと近づく。

この装置は、有識者会議にかかわる者たちの間で、秘匿名「墓地の隙間（Écart du cimetière）」と呼ばれていた。

この装置の設計から開発までには多くの人々が携わっているが、最後の過程ではブリュノがたった一人で操作を行う。

たしかに複数名で確認や操作を行えばより正確性が担保できる。その反面、複数名の神力が紛れ込み、神術の純度が下がる。それを防ぎ、神力の純度を保つ。

装置の最下部に辿り着いたブリュノは、氷結した地底湖のような

氷床に降り立つ。

氷床には、「迅速融解」「完全融解」「氷の揮発」「再結晶」「神力の凝縮」を組み込んだ多数の神術陣が、逐次起動するよう組み上げられている。

ブリュノは神術陣の中心に聳え立つ装置「墓地の隙間」の、円柱を垂直に積層したような構造を見上げる。

各層の周囲には、特殊な晶石が氷の神術によって円を描くように固定されている。

神力を凝縮し神術陣を介して装置に通じれば、神術氷が融解し、下層から順に人の脳を模した神術陣へと落下して固定される。

すべての晶石が装置から落下し適切な位置へと配座されたとき、封印されていた墓守の集合自我へと繋がる晶石ネットワークが起動する。

集合自我が顕現する直前に、その要の役割を果たす晶石を特殊な神術で破壊する。

ブリュノは万感の思いで、ある種清々しい思いでネットワークのコンソールに立つ。

この数年、使うことのなかった自身の神杖を愛おしげな所作でひき抜く。

自らの手に世界の人々の存亡がかかっている、そう思えば肌は自然と粟立つ。

成功を確信しながら、ブリュノは自身に残された最後の神力を、神術陣へと惜しみなく注ぎ込んだ。

神術装置「墓地の隙間」は予期した通り神力を増幅し、晶石の輝きがほとばしる。

ブリュノは回路に満たされてゆく光跡の行方を、鋭い視線で追ってゆく。



「さて」

ブリュノが有識者会議に敢えて報告していなかったことが、たった一つだけある。

それは、この作戦が終わったとき、ブリュノは生還しないこと。この神術装置が役目を果たしたら、上層から降り注ぐ大量の水に溺れてしまう。

神術水はブリュノもろとも再結晶化するために、直後に訪れる神術のなくなった世界では、誰もブリュノを援けることができない。彼はここを死に場所と決めた。

「……これでよい。そういう約束だろう？ タイス、私はお前にそう誓った」

ブリュノは生まれることのできなかった長女の名を想う。

16年前のあの日、ブリュノは禁術の呪いの代償として、身代わりとせざるをえなかった。

娘の命よりも自身が生還する道を選んだ。

それは薬学の道を究め、誰よりも他者を病から救い命を繋ぐのは自身に他ならないと確信していたから。

そのような選択をしたからには、後からより優れたものが来たら、枉のようにその場を退かなくてはならない。

「ようやく……あの悪夢から楽になれそうだ」

一人の神術使いとしての最期を、恍惚として受け入れる。

（辺縁回路を一次から連合領域まで統合）

（中枢回路へ接続、統合回路へ接続）

（増幅経路を起動。冗長系を確認、全統神術陣へ連結）

もはや無我の心境で、それでも術の行方を見逃さない。  
融解をはじめた氷は神術水となり、その奔流は上段からブリュノに襲い掛かる。

衝撃に脳髓を揺さぶられながら、ブリュノは刮目する。

もう、最後まで見届けなくても神術の連鎖反応は止まらないが、その瞬間は目撃したい。

その時を待っていると、ふいに目の前を閃光が迸った。

「な……」

ブリュノの神力を凝縮し完璧に制御されていた筈の神術陣が、何者かによって絶たれた。

行き場をなくした神力は予測不可能な挙動を起こし、神術回路は壊滅的な損傷を受けている。

「……！？」

ブリュノらが七年もかけて緻密に積み重ねられた計画が、神術装置「墓地の隙間」もろとも瓦解してゆく。

わずかなずれも許さない、組み上げられた晶石のネットワーク。そのはずだった。

それが、ブリュノのまったく予期しない異質なものと書き換えられてゆく。

彼は動揺のため脱力し、神杖を取り落とす。

鈍い音を立てて床に転がった自身の神杖に目を向けた直後、目を見張る。

側面に輝く青い晶石の色が、ブリュノが使っていたものと僅かに異なっていることに気付いた。

ここ数年、ブリュノは神力を持ちながらも神術を使うことができなかった。杖に神力を通じたときの晶石の発する色を見誤った。

（まさか！ 何者かに晶石をすり替えられた）

ブリュノの神杖の外見はシンプルなもので、一見貴重なものに見えないが内部に神術陣を巡らせ、完全に透明な晶石を直列に連ねて神力を増幅する繊細な構造を持つ。

神杖を身に帯びていないときは、寝室の金庫に厳重に保管していた。

外部からの侵入はありえない。

そう断定できるのは、金庫の鍵が破られた場合には、侵入者を二度と外には出さない構造になっているからだ。

家族、使用人、弟子の誰一人にも開錠方法は教えていない。

（誰に、いつやられた）

犯人を突き止めたところで意味がない、万事手遅れだ。

杖の異常に気付かなかった自身の愚を恨む。

ブリュノが神術使いとして万全の状態であれば軌道修正は不可能ではないが、

ブリュノはもう、霊薬の呪いによりたった一度として神術を使えない。

ブリュノは最後の一回分をこの時のために温存していたが、今使い切った。

一度発動した神術を修正できないまま、破壊されてゆく。

これでは鎧の歯車を止められず、墓守を制御できない。

そう悟ったとき……ブリュノは全ての時間が止まったかのように

錯覚した。

目を瞑ったままのブリュノの脳内に、何者かからのメッセージが鏡文字で書きつけられてゆく。

ブリュノは記憶の糸を手繰り、あることを思い出した。

その筆跡は彼の息子、10歳以前のファルマ・ド・メディシスのものに他ならなかった。

ブリュノの理解が及んだとき、メッセージは父に届いた。

『お久しぶりです、父上』

少し遅れて、記憶の彼方にあるファルマの声が頭の中に反響して聞こえた。

ブリュノはもはや自身の正気を疑う。

この声は、自身が作り出した幻聴なのか、実際に鼓膜を通して聞こえている音波なのか。

どちらのようでもあって、真贋がわからない。

『動かないでくださいね』

「なっ、いかん！ 何をするつもりだ！」

ブリュノは声を振り払おうとするが、金縛りにかかったかのように体の自由がきかなくなっている。

脳内の「彼」の存在によるのだろうか。

いや、そもそも果たしてそれは『彼』なのだろうか。

認識の土台が揺らぎはじめた。

『この世界の破綻を回避するため、この時空をホログラフへと変換し、私たちの存在を一つ次元を引き上げて下位次元の現象として投影しようとしています』

ブリュノは思考が遅延して、もはや声が出ない。

「それは神術なのか……!？」

『神術のように見えるかもしれませんが、違います。私は科学の話をしています』

彼がとある異世界（地球）の人々と、その世界の科学を用いて導き出した最適解における空間解釈（１）だというが、ブリュノには理解が及ばなかった。

『任意の次元の量子の情報は、ひとつ下の次元の表面に全てを記載することができます。情報は本のページを改変するように書き換えることができ、何も破綻させず時空のふるまいを規定することができます。この世界が位置する領域を量子もつれで括って、スピンフォームから創発した枠組みの中で記述をすれば』

見えない力に操られたブリュノの杖が、流れるような軌跡を描く。

『例えば天類 万理の解も』

ブリュノの目の前に、拳大ほどの黄金の液滴が浮かぶ。

あらゆる呪いを無効化するという、ファルマでさえ創れなかった神薬が顕現したのだ。

『天類 神薬・千年聖界も』

その隣に、青白い水滴が細やかに結晶化する。

ブリュノは知っている、それは悪霊をこの世から千年駆逐すると言われている神薬だ。

『宙類 庇護の露も』

甘露を受けた者を一定期間回復させ続ける神薬、その芳香にブリユノは酔いしれる。

『地類 再誕の神薬も』

数日間、瀕死者の命をつなぎ止める神薬。

持ち主の手を離れたブリユノの杖を通して、異世界に由来するフアルマの到達できなかった最上級の、天類の神薬の数々がいとも簡単に顕界する。

幻のような目くるめく現象が、現実のものとして現れては消える。

『創り出すことは造作ありません』

それこそ、書籍の文言を簡単に書き換えているように。

『いわゆるタイプIEE文明（2）以上の科学技術の前には、いかなる空想物語も、科学の文脈の中に破綻なく回収できます』  
ファンタジー

「お前は……何を言っているのだ。実際には何をしている」

ブリユノは常識と信じていた前提が崩れ去る音を聞いた。

これが夢や幻であればどんなにましだったか、そう思いさえした。

『もっとも単純な説明では、私は本を書き換えています』

ブリユノを支配する声は躊躇いながらも言葉を繋ぐ。

高みへ至った者が、何を見ているのか。

理解のできない言葉が紡がれている。

打ちひしがれながら、ブリユノは耐えがたい痛みを覚えていた。

『空間の本質は情報であり、私は一人の異世界の青年とともに、情報の更新を果たそうとしています』

幻想だろうか、幻覚だろうか。

神力は途絶え、その記憶だけが神話の中に残る。

呪力は消え、民間伝承として語り継がれる。

霊は滅び、墓守は役目を終える。

世界は更新されるのだろうか。

『ですからセンス・オブ・ワンダー（3）なき虚構の世界は、これで終わりです』

ブリュノの脳裏には新たな地平が開ける予兆を得た。

形のない情報が、謎の概念が、これほどまでに絶対的に「場」を支配するとは。

幼き日の我が子に「知は力だ」と教えたら、

その究極の応用を見せつけられている。

教えられたのは、自分のほうだったのかもしれない。

それは世界が終わる数時間前。

地球側の薬谷 完治から受け取ったドローンが、ほのかな光を放ちながらファルマを先導する。

謎の歯車と地球側のつながりが切れたところから彼とはもう久しく連絡はとれないが、一方通行であっても彼の存在を心強く感じている。

次第に闇が深くなり、視界はきわめて不良だ。

自らの放つ青白い光も、闇に吸い込まれてゆく。

鎧の歯車が近づくにつれ、薬神紋が光を増し、脈うち疼きはじめる。

いったい何と共鳴しているのだろうか。

（静かだ……）

あらゆる音に耳を澄まし、空気の流れにすら全身の感覚が研ぎ澄まされる。

洞内の壁面に滴る水音、自らの呼吸音、ドローンの駆動音。

いつ何が現れてもおかしくない。

神力はまだ尽きない。

もし尽きれば奈落へと真つ逆さまだ。

二度と這い上がることはできないだろう。

助けは来ない。

何故ならこの、巨大な豎穴に来ることのできる人間はいないから。地底へと到達できるだけの神力量を片道分は残してあるが、帰還用ではない。

壁面伝いに降下し、地中深くなるにつれ、土壁にうつすらと地層が形成されているのが見えた。

（地層……異世界にはなかったものだ。ここは局所的に地球に繋がっている……？）

縦穴の地層に埋もれるようにして、人工物の一部が見える。

先行するドローンのライトが反射して、その居場所を示すように不自然に光っていた。

ファルマは思わず驚いて声を上げる。



「えっ？」

注意しながら人工物に触れてみる。

手で土を払い落としてみるとボロボロに朽ちたプラスチックのペットボトルだった。

ファルマはこれまで異界の研究室から異世界に数々の地球の人工物を持ち込んだが、異世界で地球の人工物が出土しているのを見たのは初めてだ。

「なぜ、これが？」

ミネラルウォーターのパッケージだ、質感が懐かしくもある。

印字は殆ど消えているが、かろうじて日本語が読み取れる表記がされている。

キャップを見ると、消費期限と窺える刻印が2027年3月と打刻されていた。

地層は粘土質……。

火山灰を含む、ということは火山活動がある証拠だ。

何の変哲もない秘宝化していない、地球のゴミだ。

ポリエチレンテレフタレートは分解されにくく、分解酵素を用いない場合、ペットボトルが分解されるのにかかる時間は四百年以上。そのペットボトルが朽ちている様子から、数十年から百年以上は経っている。

殆ど変形していないので、高熱や圧力には晒されていない。

ファルマはペットボトル一つを見て、そこから様々な情報を読み取る。

（ここに日本語のペットボトルがあるということは……ここはかつて、日本と繋がっていたんだろうか）

薬谷の職員証が神殿の秘宝として出土したのは、そこが東京と繋がっていたからなのだろうかと推測する。

（もしくは、俺は過去にここに来たことがある）

一体何が正しい情報なのか、今のファルマには確かめるすべはない。

さらに地下へ進むと、年代をさかのぼって異なる人工物が出土する。

（そしてこちらの地層は……地球のものですらない）

ファルマは地球文明だけでなく、未知の文明にも遭遇する。

この謎の歯車は数々の宇宙と接続しながら、今日まで駆動を続けてきたのだろう。

（それも、今日で終わらせる）

謎の歯車の入り組んだ構造の、内側へと入りこんでゆく。

緩急をつけて駆動し続ける歯車がファルマの進路を阻み、うっかりしていると切り刻まれそうになる。

かつてピウスがそうだったように、人が入り込めばあつという間に肉片と化すだろう。

物理的なダメージを受けないファルマだからこそ侵入できる。

（謎の歯車の素材を解析）

薬谷 完治の供与した、表面から非破壊的な検査方法で各種合金判別のできるハンドヘルド型の成分分析計を使って、表面素材の簡

易検査を行う。

既知の金属、合金とも一致せず。

隙間から隙間へ、歯車から歯車へと飛びうつって最下層を目指す。歯車のある階層を抜けると、ドローンが急に揚力を失って落下してゆく。

ドローンの光はあつという間に小さくなって奈落に消え、見えなくなった。

ファルマは早速道しるべを失った。

（なぜ落ちた？ クワッドローターは全て回転したままだった……）

そういえば、……かなりの速度で降りているのに、ファルマの髪がたなびかない。

肌には空気の流れを感じない。

（そうか、ここは真空なのか）

気付いてみれば、呼吸をすることも忘れていた。

もうとつくに、呼吸をしなくてもよい体になっていたのかもしれない。

宇宙空間へも往還できる薬神杖の飛翔性能が流体力学を利用したものではなくて助かった。

宇宙空間とも錯覚される闇の中を数キロほど下ると、ようやく底が見えてきた。

青白い光を湛えた、幾何学模様の描かれた床に足が触れる。

竪穴の底へと到達した。

人類の科学を凌駕した人工物の出現に、ファルマは最大限の警戒をする。

先に落ちたドローンが粉々になっていた。

薬谷 完治が予測していた、鎧の歯車の底だ。

（ここか）

地球側の協力者たちの奮闘により、鎧の歯車は地球との接続が切れた。

異世界側に残されたそれはひとたび閻日食が始まれば、守護神の残渣を貪食し尽くし、また新たな鎧の寄生先を探し広大な宇宙をさ迷おうとするだろうが、それも今回で最後だろう。

最後のチャンス閻日食のタイミングで、この異世界時空を正常化させる。

ファルマは時刻合わせをしておいたスマホの時計を見る。

閻日食までの時間はあとわずかばかりに迫った。

予定していた時刻になる。

「……ん？」

わずかな振動を検出した。

鎧の歯車は大きな振動を立てはじめ、軋みながら回転数を上げはじめる。

（きた……）

上階から順に下層へと、鎧の歯車の構造が変化し、空間が閉ざされてゆく。

ファルマは完全に闇に飲み込まれてしまった。

光源はというと自らの放つほのかな神力の光のみ。

無音の中で、鎧の歯車機構の最下層の底蓋が開いた。

（まだ、謎の歯車は駆動している……動いている間に最深部に入り込まなければ）

底蓋から放たれた閃光の中に飛び込むと、浮遊感とともに視界がホワイトアウトする。

ファルマは気付くと、見渡す限り無限に広がる硬質な人工物の平面上に倒れていた。

存在しない神経の接続を確かめながら体をもたげると、重力がある。

視界に入ったのは規則正しく並んでいる無数の石碑のようなもの。墓地のような場所だった。

広大無辺の墓地から天を見上げると、満天の星が広がっている。

（予定通り、世界の果てに辿り着いたんだろうか）

これが幻覚なのか、現実なのかファルマにはもう確かめるすべがない。

それでもまだ、薬谷 完治の筋書きの通りに事は運んでいる。

ファルマは彼の描いた計略を逐次思い出す。

【最下層に到達したら、墓地のような場所に辿り着くはずです。そこはいわゆる管理区画、歴代の守護神たちには別の名で、墓地と呼ばれていました】

異世界の管理者が、歴代の守護神たちに墓守と呼ばれてきた理由。その理由が、ファルマはこの空間に入るまで分からなかった。

しかし今なら一目瞭然だ。

たしかにここは、墓地のように見える。

ファルマは立ち上がり、墓石の一つに近づいてあらためる。

墓石のように見える台座型の建造物の側面に、透明な棒状の晶石が刺さっている。

その晶石が放つ燐光のような輝きはあまりに儂く、美しかった。しかし、見とれてはいられない。

【私の墓を見つけてください】

その墓地には守護神らに加え、全ての異世界人の「墓」があるという。

墓の内部に格納されている晶石には記憶データがリアルタイムに蓄えられていて、記録の終わった晶石は光を失う。

墓地といえば局所的に聞こえるが、莫大な広さで、一つの惑星に匹敵するほどの敷地がある。

過去数百年にもわたる死者の名を刻み続けてきた墓地の中からたったひとつの墓石を、何の情報もなく探すのは容易ではない。

だから、アドレスを聞いていた。

【私の墓は361区画22列15番にあります】

ファルマは空中に舞い上がり、361区画にある「ファルマ・ド・メディシス」の墓石を探す。

探し出すまでに小一時間ほどかかったが、薬谷が事前に区画わけの印を教えてくれていたために、薬神杖を使って上空から探すことができた。

「あつた」

ファルマの名が刻んである墓石を見つけた。

自分の名と対峙すると、死に場所を定められたようで、戦慄に心が崩れそうになる。

ファルマは斜め掛けにしていたバッグから、緩衝材に包まれた棒状の結晶を取り出す。

【その墓石の中に格納されている特殊な晶石がありますから、その一つをすり替えてください。これは管理者の権限を奪う修正プログラムのようなもので、地球側からの干渉が可能になります。もともと格納されている晶石は右に二回、左に二回、右に一回と回せば外せます】

ファルマが晶石に手をかけ、回そうとしたその時だった。

【ただ、それを試みた時点で、墓守も何らかの防御プログラムを発動させるかもしれません】

薬谷の言葉が頭をよぎったとき、墓地の内部が不安定化をはじめた。

空間が波うちはじめ、ファルマを襲うように衝撃波が吹き荒れる。墓石の位置が入れ替わりはじめ、表面の刻印がはがれ始めた。

（っ……やっぱりか！ 墓石の位置を攪乱させるつもりだ！）

ファルマは異世界薬局から持ち出していた糖尿病患者の血液をファルマ・ド・メディシスの墓石にバイアルごと投げつけてガラスを割り、付着させた。

こうしていればどこへ紛れようと、診眼がこのサンプルを見つける。

この空間にある限り診眼を使って位置を特定することができる。それを阻むように、小さな人影がファルマの目の前に現れた。

『にいに』

ファルマの目の間に手を広げて立ちはだかった少女は、幼き日の、それも健康だったころのちゆの姿をしていた。

ちゆの面影はその当時と何一つ変わることなく、ファルマの記憶を反映しているのだろうと予測がつく。

この空間では、記憶をもとに虚像を創り出せるのだろう。

【記憶という情報が蓄えられたその場所では、”不適切”な記憶を見るかもしれません】

(……死者の記憶はどっちなんだろうな)

あるいは自らも、ある世界では紛いものでしかない。

『ここ。暗くて寒いよ。はやくおうちかえろ。お母さんもお父さんも待ってるよ』

「ああ……」

ファルマは俯いて答える。

その答えに安心したかのように、ちゆの幻は嬉しそうに飛び跳ねる。

『今日の晩ごはんはハンバーグだといいな！ にいには何がいい？』

「そうだな……。でもお前はちゆじゃない」

ファルマは在りし日のちゆの姿にトラウマをえぐられながらも、辛い現実に向かい合う。

『なんでそんなこというの』



少し涙目で、怒ったときには口をとがらせる。

体を揺らすそのしぐさも表情も、イントネーションさえ、あの頃のちゆとそっくりだ。

ともすれば、場違いな追憶におぼれ、良心の呵責から逃れるためにその存在を肯定して認めてしまいそうになる。

しかしファルマの心は揺るがなかった。

「もう、脳腫瘍で亡くなった薬谷ちゆはいないんだ。新たな世界線で脳腫瘍を克服して成人し、新しい伴侶と幸せに暮らしている。その歴史が最適解となった。もう救われたんだ。不幸な少女はいなくなった。俺はその事実を受け入れる」

悔しさとやるせなさを噛みしめながら、彼女の幻に呼びかける。

『にいいにはちーちゃんのこと嫌いになったの？　ちいちゃんのこと、どうでもいいの？』

ちゆの幻はまさに悲痛な声を出し、ファルマにすぎる。

彼女の魂の絶叫はファルマの心にも届いている。

落ち着いて、彼女の声を聴く。

「嫌いになんてなるものか。だから、これ以上苦しまなくていい」

ファルマは決然として、ちゆの記憶を神力で薙ぎ払った。

「ファルマ様。今日、もしお時間があれば一緒に買い物に行きません？」

消滅したちゆの残渣を塗りつぶして入れ替わるように、ロッテの幻が現れる。

その幻もまた本物と見まがうほど、リアルな質感を伴っている。彼女の幻を消せないでいると、ファルマの躊躇に付けこむかのように、ロッテの隣にエレンの姿が現れる。

「ファルマ君、こんなところで何をやっているの。ね、薬の仕入れのことで相談があるんだけど……今年はグリップの型が流行りそうだから、ワクチンを多めに発注しようと思って」

エレンの口調はかつて耳にしたそれと同じ調子で、思わず返事をしてしまいそうになる。

何もかも元に戻ることができたなら、思い切り息抜きをしたかった。

「兄上、薬草園を野生化したノディフローラ（ヒメイワダレソウ）に襲われているんだけど、どうやって除草したらいい？ 手でとるにも限界があるの。あと、黒星病予防の農薬の作り方だけど……」

薬草園で作業中らしきブランシュがファルマに助けを求める。

「ファルマ、生物学的製剤を設計しているんだが、いつ予定があいている？」

パツレが資料を片手に楽しそうに話しかけてくる。

「ファルマ様、週末にジュ・ド・ポームでもいかがですか？ 私の所属するクラブが新規の会員を募集していました……ぜひにと」

背後から現れたセドリックが朗らかに誘う。

「ごめんね」

次々に背後から現れる幻像に、ファルマは神力を当てて彼らを消滅させ、振り払う。

全ての幻を消し去った後、さきほど探し当てた自分の墓石に標識として用いた血液の所在を探す。

ほどなく、目的の墓を見つけた。

ファルマは最短距離でそこへ到達する。

この場所は急速に神力を消耗してゆくのだろうか。  
自身の神力が底をつきそうだ。

残された最後の神力を駆動し、神術を繰り出す。

チカツ、と。

何かが閃いた。

ファルマの両腕の薬神紋は、組みひもがほぐれるように剥離し崩壊する。

（もつとだ……！）

飛来する光の束に襲われ、存在が摺り下ろされて寡くなってゆく。  
苦痛もおそれもない。

ただ、存在のすべてで不思議な感動を味わっている。  
それから先は、ファルマの意識の連続性は絶たれて、永遠の静寂が訪れたように感じた。

……。  
……。

大脳新皮質から少しずつ、意識に光が差し込んでくる。  
自己の認知がはじまる。

どれほど時間が経っただろう。

暗闇の中で、「彼」は意識を取り戻した。  
意識は混濁しているが、痛みは感じない。  
自発呼吸をしているか、確認できない。

脈拍は正常。

聴覚。

物音がわずかに聞こえている。

「彼」が肉体に宿っているのだと気付いたのは、角膜上皮に刺さった異物によってだ。

（今度は、どこにいる……俺は、どこに？）

恐る恐る瞼を開く。

周囲に光はなく、網膜に像を結ばない。

眼球運動の方向が垂直方向のみに限られていることにも気づいた。

（口も開かず、舌も動かせない。ということは、動眼神経、滑車神経までは正常……外転神経と顔面神経、舌下神経はだめかもしれない）

さらに状況確かめる。

発語ができない。

唾も飲み込めない。

呼吸はしているが、意識的には出来ない  
どうも脳幹の中枢に重大な損傷を負い、全身に麻痺があるらしい  
とは認識した。

幸いなことに呼吸中枢は無事なようだ。

全身状態がどうなっているのか。

それ以前にここがどこで、この意識が誰のものなのか、「彼」に  
は何もわからない。

少なくとも二つの人間の記憶が自身の中に残っている。

理解できるのは、この状況では助けすら呼べず、生還は極めて難  
しいということ。

（これはおそらく……閉じ込め症候群だ）

閉じ込め症候群とは、認知能力を残したほぼ完全な全身麻痺の状  
態だ。

眼球運動とまばたきのみ、自発的に動かすことができる。

助かりたいのだろうか。

このまま消えたいのだろうか。

ただ、少しの猶予があるのなら、ただ滅ぶのではなく変貌した世  
界を知りたいと思った。

何もかもうまくいったはずだ。

自分以外は。

この状況で、生還のためにできる努力は限りなくゼロに近い。

そもそも、自らの手で張り巡らせた防壁が救助を阻む。

もし仮に……幾重にも幸運が重なって発見されたとして、自身に

意識があることに気づく医療者がいるだろうか。

……難しいかもしれない。

はつきりとした意識の中で、彼は世界の再生を願っている。

鎡の歯車の崩壊によって異世界との連結は切断された。

この世界は物理法則に基づく神術なき世界へと更新を果たした。

それもまた一つの解であるこの時空に賭して、世界をよみがえらせるかもしれない。

人々は何度でも助け合って、異なる歴史を重ね、進化の解を導き出す。

知らない宇宙の片隅で、生命の営みを継承してゆくのだろう。

そこに自分がいてもいなくても。

（せめて、意識が続く限りは起きていよう。それが生還のための唯一の努力だ）

決して寝てはならぬ。

彼はそう、自らに課した。

## 9章10話 ファントジーの棄却と、センス・オブ・ワンダーへの の帰（後書き）

### 【謝辞】

本項の閉じ込め症候群の部分は、医師・医学博士のなかが先生にご指導いただきました。

### 【作中注】

1…超ひも理論、ループ量子重力理論、ホログラフィック理論における複合的な空間解釈。

2…タイプII文明は、カルダシェフ・スケールにおける4

×  $10^{37}W$ を消費する規模の文明。

プランクエネルギーを操ることができる。

3…新しい概念に直面したり、時間や空間における意識の拡大によって引き起こされる畏怖の感覚。サイエンスフィクションの要素のひとつ。自然現象に触れたときにも生じる。

9章11話 患者 ファルマ・ド・メディシス（前書き）

本日は二話同時更新です。次頁があります。



## 9章11話 患者 ファルマ・ド・メディシス

1152年8月22日。

旧神聖国では闇日食の日を迎えた。

誰もが危惧していたように、世界は終わらなかった。  
ファルマの張り巡らせていた三重の防壁のおかげで、人的・物的な被害は完全に防がれた。

翌日、遺構の崩落の危険もかえりみず、サン・フルーヴ帝国と神聖国の有志調査団が立ち上がり、鎡の歯車の遺構の調査がかつてない規模で始まった。

事前にサロモンら土属性神術を使う神官たちが抑えていた侵入経路から、三重の防壁の内部へ入ってみると、鎡の歯車の中心部は文字通り消滅して、あとには大きな穴が残されていた。

誰も知らないうちに、世界の更新は静かに終わってしまったのだろっ。

…… 搜索に参加した医療団の一人、エレオノール・ボヌフォワはそう思えてならない。

何故なら自身の体から神力が蒸発し、

診眼は使えなくなり、神術陣は絶え消滅した。

神杖はただのノスタルジックな骨董になり、

晶石は輝きを失い、宝石以下の石ころになった。

神術使いたちは神脈をねじ切られ、水や物質創造の操作ができなくなった。

そしてそれは、エレンだけに限らず全ての神術使いに起こった。

世界のあらゆる場所から神力と、神力から派生した神術は消えた。誰に尋ねても、神殿の神官ですらも、ただ一人の例外もなく、神力を残している者はなかった。

こうして、神力に依存していた社会は、守護神の庇護の外へ放り出された。

メレネーやマイラ族たちも呪力を失い、霊の声を聴くことはできなくなった。

祖霊たちはどうなったのか分からない、見えなくなった。

これからは心の中にいるのだと、メレネーはいう。

ファルマの安否はまだ分からない。

祖霊たちがそうなったように、ファルマの姿も存在も誰もが認識できなくなって、ファルマがこちらの世界に介入できなくなってしまうたら、それはもういないこととほぼ同義なのかもしれない。

（この世界が存在しているということは、ファルマ君の計画が成就したということ？）

彼が全部背負わなければならなかったのだろうか。

結局、彼の犠牲と引き換えに人々全員が助かった。

結果はそうなのだが、エレンはあまりにやるせなく、受け入れられない。

そうならないように防ごうとしていたのに。

彼を守ることができなかった。

罪滅ぼしのように、彼の痕跡を探している。

（私たちは、彼の何を探しているんだろう）

エレンは搜索しながら、やるせない気持ちを押し殺す。

生身で生きていてくれたら申し分ないが、見つかるのはせいぜいファルマの断片か、おそらくは何も見つからない、というのが現実だろう。

その事実を、自分を含めてここにいる全員が、果たして受け入れられるのだろうか。

「どこまで探しますか。もう少し下へ進みますか」

「お願いします。もう少し下なんです、彼が最後にいた場所。私人でも行きます」

エレンは最後にファルマがいた場所、深度を神官らに伝える。

エレンたちは巨大な竖穴に、命綱をつけて降下している。

命綱は地上部で巻き取り式になっているが、途中、瓦礫の層があるのでそれを取り除かなければならない。

「ふう……」

自身の筋力と体力だけを頼りに、瓦礫を除く肉体作業は気鬱する。昨日までの自分とは別人のようだ。

昨日までは神力を持っていたから、エレンは常人であることを自覚せずにいられた。

神力という優位性を失った体は重く、動きは鈍く、非力で、肉の塊のように感じる。

何もかもが、無価値になってしまったように錯覚される。彼女にとってある種の、遅すぎた挫折でもあった。

「この爆発では……生身で助かっているとは思いますが、あまり深くなると、崩落の危険性も」

神官が躊躇いながら告げる。

彼らもまた「凡人」となってしまった人間たちだ。

守護神を失った彼らは、一体何に仕えているのだろうか。

神力を失ったことにより、精神的な支えや、自尊心や勇気すらも失いかけているのかもしれない。

（皆、ギリギリなのね。私もそう……それでも）

そんな思いがエレンの胸に去来する。

アイデンティティの喪失は、希望をとりあげる。

「彼の顔を見るまでは、私は諦めたくありません」

それが無言の対面になるかもしれないということは、エレンにもわかつている。

「彼」が見つかるのではなく、その「一部」や「形見」という物質に還ったものかもしれない。

「もし、彼が生身の状態で生きているなら、すでに一日半が経ちました。人間が飲水なしで耐えられるのは、およそ3日間とされています……さらに、地下は体温を奪います。低体温症になってしまえば、一時間ともたないかもしれません。時間の経過は重大な意味を持ちます」

どのような状況になっているか想像もつかない、早く見つけるにこしたことはない。

少なくとも、最大限甘く見積もっても、ファルマの姿が地上に見えないということは、助けなしでは自力では上がって来ることができない状況にあるのは間違いない。

「で、ですが……地の底まで行くおつもりですか」

「ボヌフオワ師。もちろん、私どもは手掛かりが得られるまで探し続けるつもりですよ。ファルマ様がここにいらしたと、あなたが知っておられるのでしょうか」

若い神官の弱気な言葉を遮るように、サロモンが答えた。

「はい！」

エレンは深く頷く。

「この仕事が終わったら私どもは還俗しようとして決めておりまして。最後の務めとして、無手で帰るつもりはありませんので」

「……神官を辞めるということですか」

「神力を失うということは、召命が終わったということです」

サロモンはそう告げると、黙々と搜索を続けている。

陥没穴の、さらに地底深くまで進まなければファルマのいた場所にはたどり着けない。

彼らは躊躇をせず、地中深くへ身を投じてゆく。

エレンは一つの時代が終わったのだと感慨深く思った。

大神殿からの緊急召集を受けて後からやってきた神官らが、鎧の歯車の遺構の周囲にテントを設営した。

搜索人員全員が同じように搜索に繰り出しても命綱のロープが足りないのだ、数時間ずつ人員を入れ替える。マイラカ族のメレネーたちは、先に繰り出していったエレンたちの交代要員として休憩を

していた。

十分な水と食料も提供され、メレネーたちはほっとしたように一息ついていた。

そんな中で、メレネーだけは苛々としている。

「メレネー、どうした。食わんのか？ 食べる時に食っておけ」  
「腹が減っていない。それよりもだ」

メレネーはテント内の無人の空間を凝視している。

「パラル！ おい、パラル！ いるのだろうか？」

メレネーがパラルをなじるように呼ぶが、返事はない。  
当てが外れたメレネーは舌打ちをする。

「霊たちは本当に消えたのか？ 私にはそうは思えん」  
「消えたはずだ、諦めろ」

メレネーが現実逃避をしているので、アイパが否定する。

「ちょっと試したいことがある、手伝え」  
「何をするつもりだ」

メレネーはテーブルの上に載っていた皿をどけて作業スペースを確保すると、帝国神官が用意した雑記帳を手にして、何かを書きつけている。

「クララがやっていた、降霊術というものだ」  
「それは神術なのか？」

メレネーがじろりとレベパをにらむ。

「完全な神術でもないらしい、呪術に近い。だからやってみる」  
「呪術はなくなったと言っているだろう」

レベパがメレネーを諭すように述べる。  
メレネーはつつばねた。

「われらマイラカ族は呪術の申し子だ。古今東西、呪術ありと聞けばただ試行あるのみ」

「……勝手にしろ」  
「言われなくても」

メレネーはうろ覚えで降霊術の準備を始める。  
サン・フルーヴ帝国の文字を操り、クララのやって見せた通りに文字盤を描く。

メレネーは準備を整えると、深呼吸して文字盤のスタート位置に指を置く。

「パラル、いるか？」

メレネーの渾身の呼びかけに応じるように、すつ、とメレネーの指先が動いた。

「おおっ!？」

「うそでしょ」

「メレネー、お前やけになって自分で指を動かしているのではないだろうな」

「霊は見えないだけで存在するとなると、ファルマのしたことが無駄になるのでは」

兄妹たちも、騒然となりつつその動向に注目している。

「いや、だからそれを確認しているのだ兄者たち」

ファルマのしたことの何が成功していて、何が失敗しているのか、手掛かりを得たいというメレネーに賛同する。

「私の自己暗示的なものかもしれんがな。こういった試行を実験と  
いうらしい。パラル、ファルマは生きているのか？」

メレネーの指先が「肯定」の選択肢へと滑る。

メレネーは時間をかけて聞き取った。

見えなくなっても、パラルはそこにいるのかもしれない。

得た答えから、ファルマの居場所はエレンたちの予測からは決してたどり着けない場所に絞られた。

「いかん、エレオノールたちが探しているのは見当違いの場所だ。  
時間が無駄になる！」

「なんだと!？」

メレネーは血相を変えて単身テントの外に繰り出していった。

「エレオノール! 朗報だ!」

メレネーがロープを操って壁面を飛び降りるように軽やかに下り  
てきた。

それは熟練のサーカス演者のようで、エレンは感心してしまう。



「ファルマの位置が分かった、横穴の奥にいる。まだ生きているようだぞ。横穴への目印は小さな飛行機だ」

「飛行機……？ どうしてそれを知っているの？」

エレンはメレネーの言葉を半信半疑で眼鏡をかけなおす。

エレンはぴんときた。

ファルマが時折、動作確認のために庭で飛ばしていた、ドローンというもの。

精緻な構造物。

彼が異世界から持ち込んだものだ。

「降霊術だ。クララの真似をしてみたらできた。正解かどうかはこれから確かめにゆく」

「降霊術は知っているけど、霊がいなくなったのに降霊術が効くの？ 昨日までの、神術や呪術があった世界とはもう違うのよ？」

エレンは落胆とともに、迷信という言葉が喉から殆ど出かかっている。

メレネーはそんなエレンのことを何もかも理解したかのように、不敵な笑みを浮かべる。

「まあ、殆ど迷信が私の何か小難しい心理作用がそうさせるのかもしれないが、ファルマがバカみたいに無策で自爆をするとは思えんだ。念のため確かめる」

「飛行機って……四枚羽のおもちやみたいなドローンのことよね？」

何かに使ったと言っていたので、ここにあっても不思議ではないが……。

「名前は知らんが」

メレネーは適応に感じながらもどこも目星がついているらしく、場所を絞って発掘作業を始めた。

そして暫くすると、

「あつたぞ！ ファルマの持っていたのはこれのことか？ お前は見たことがあるのだろうか？」

メレネーの指さす先に、半壊したドローンのようなものが地層にめり込んでいる。

「え、うそ！ でもこれ！ ファルマ君のかわ！ 信じられない！」

エレンはメレネーにつられて叫んだ。

「見る！ パラルの言ったとおりだ。あるぞ、横穴が！ ここを崩してみる」

メレネーは降霊術の正しさを確信したのか、得意げに素手で掘り進めている。

「メレネー、ちょっと、スコップ持ってこなかったの？ ランプ持って入らないと何も見えないわよ」

「明かりは後ろから持ってきてくれ」

「もう……焦らないで」

メレネーを先頭に匍匐前進で進んでゆくと、横穴は人が腰をかかめて通れるほどの広さに達した。

やがて立って歩ける高さの空洞部へと出た。

「ファルマ君はどうしてこんなところに？」

「爆発をやり過ぎすために、横穴で衝撃に備えたのでは」

「そう……かも、だいいいな」

エレンはメレネーの楽観的な想像に救われる思いだ。  
攫われたのでは、という懸念はメレネーが否定してくれる。

エレンはにおいに気を付ける。有毒ガスなどが発生していたら危険だ。

そしてメレネーの予言した通り、横穴を暫くゆくと、そこには瓦礫に半身が埋まったファルマの姿があった。

「ファルマ君！ うそでしょ！？」

エレンはその姿を見て心臓が張り裂けそうな思いだ。

「これではもう……」

助からないのではないかと追い付いた神官の一人がうなだれた。  
彼らは 搬送用の担架を持ってきていたのだ。

「待ってね」

安全を確認しながら、エレンが注意深く接近する。

震える声で彼の名を呼ぶも、エレンの呼びかけに答えない。  
肩を叩いてみるも、反応はない。

意識なし、とエレンは判断する。  
眼に見える範囲に大きな出血はない。

（呼吸音の確認）

まずは耳を口元に近づける。  
胸の動きを注視しながら、呼吸の有無をみる。

（呼吸がある……！）

震える手でバッグから聴診器を取り出し、胸のあたりの瓦礫をどけて左右の呼吸音と心拍を聞く。呼吸はできている。  
心不全にもなっていない。

「呼吸も脈拍もある……死んでいません、生きています！」

全身状態によっては、もってあと数時間の命かもしれない。  
諦めてしまうことは簡単だ。

しかしファルマの身体は諦めていない。

呼吸回数は正常より多い。

胸から下が埋まっているので、頸動脈と橈骨動脈が触知できる。  
測ってみると、血圧 116 / 58 、脈拍86だった。

明かりを持って来てもらい、顔色を確認する。

チアノーゼも無く、酸素化も保たれているようだ。

体温計ではかると、体温は35度台。

ファルマのかつての平熱は36度台だったので、やや低い。

エレンは次に痛み刺激の有無を確認する。

反応がみられないことから、意識レベルのスケールにおいて300  
0であると見積もる。

（神経系はどうなっているの……？）

エレンはさらに瞳孔、両側の対光反射をみる。

「あれ？」

ライトに対して部分的に追視が行われているのか、視線が合った。そんな気がする。

はつきりと瞬きをした彼の瞳が、エレンをみつめているようにも思う。

「いた！」

エレンは彼の瞳の奥に、ついにファルマの意識を発見した。

「聞こえていたら、二度瞬きをして。できないなら、上下左右に視線を動かして」

エレンの予想通り、ファルマが開閉眼でエレンに反応した証拠を得た。

小さな小さな動きではあるが、ファルマはエレンと意思疎通を始めている。

どんなシグナルも見逃すまい。

「よかった。瞬きはできるのね。視線はどう？ ファルマ君、え？ 上下しか動かないの？」

エレンは反射の確認をすすめる。

土礫の中から掘り出した上肢の腱反射が亢進していることに気付く。

「ということは脳幹か脊髄に損傷があるのかしら？ どうしよう…  
…搬送の時に頸部を動かさないようにしないと。担架にうまく固定  
できるかしら」

考えるべきことは山ほどあるが、既に死亡していても何ら不思議  
ではない。

とにかく彼が生きていてくれてよかったと、束の間、喜びをかみ  
しめる。

「では直ちに瓦礫を除いてお助けしましょう」

メレネーやサロモンら神官が瓦礫を除く間、エレンは次の対応を  
考える。

「これで助かるな」

メレネーがエレンに同意を求めるようにほっとしたようにため息  
を吐くが、エレンは浮かない顔をしている。

「どうした？」

神経系の損傷だけでなく、挫滅症候群を予測しておかなければな  
らないからだ。

「まだ安心できない。さらにこれ以上の組織の損傷を防ぐために救  
出は急がなければならないけど、挫滅症候群を発症して救出してす  
ぐ心停止する可能性もあるわ」

「なんだその畏みたいなのは。医学のことは難しいな」

医療知識ゼロのメレネーはもどかしそうにぼやく。

エレンは挫滅症候群のリスクを見積もっている。

エレンたちが救助にくるまでに、ファルマはここに十時間以上挟まれていた可能性がある。

下半身を掘り出してみないと分らないが、圧迫により筋肉が挫滅している可能性が高く、挫滅症候群の恐れが高い。

挫滅症候群では、瓦礫や土砂で挫滅し壊死した筋肉から生じたカリウムやミオグロビン、乳酸などが、圧迫からの開放で挫滅部位に血液が還流することによって一気に全身に巡り、重篤な場合はショックや急性腎障害、高カリウム血症による心停止などから、死亡につながる。

エレンも、そしてファルマですらも、まだ挫滅症候群の症例に遭遇したことがない。

（脱水により既に、腎障害も生じている可能性が高いわ。あれこれ考えるより、点滴が先！）

エレンは脱水の補正と挫滅症候群を想定して、腎臓を保護するために生理食塩水の大量輸液を行う。

一本目は加温せずそのまま投与する。

加温しているにこしたことはないが、とにかく補液を急ぎたい。

復温のために輸液を加温するのは、二本目からでいい。

瓦礫の除去がまだで尿量の確認ができない間は、大量輸液の継続は心不全の恐れがある。

そこで、輸液の流速を落とす。

救出後に筋挫滅などにて腫脹が酷くコンパートメント症候群を呈する場合には、除圧するため筋膜切開をしなければならぬものかもしれないが、出血をコントロールできる自信がないので、外科系の

応援がほしい。エレンは外科のブリジットの顔を思い浮かべる。

「それから、すぐに血液浄化が出来るように用意しなきゃ……」

脱水や挫滅症候群による腎障害を予防するために、すでに補液を開始しているが、救出後に下肢の循環が再開したら、挫滅組織からミオグロビンなどが大量に溢れ出し腎障害が生じる可能性が高い。ミオグロビンの分子量は大きく、透析で積極的に除去することは難しいが、高カリウム血症やアシドーシスの補正は可能だ。すぐに透析が出来るように準備をしておきたい。

旧神聖国のほど近くに、聖帝の細胞培養を行っている医療、研究施設があり、透析が可能な状況にある。

エレンはその施設をファルマとともに訪れたことがあり、場所も、施設の状況も把握している。

人命救助に必要な医療機器、医療材料も、製造の難しい異世界薬局直系の透析用フィルターも、ファルマに気づかれないよう、事前に手配してある。

「ここから西部医療研究所までは馬車で一時間ほどかかりますか？」  
「急いでも、その二倍はかかるかと」

災害に巻き込まれないように、敢えて少し離れた場所にあるのだ。何時間以内に透析をとという基準はないが、できるだけ早く取り掛かりたい。

早ければ早いほどいい。

「では、現地スタッフにファルマ君を搬送する旨伝えてください。挫滅症候群に伴う腎障害に備えて、すぐに透析ができるようにしておきたいんです」



「はい、直ちに。急がせます」

「ここに留まっただけでは崩落が怖い、地上に戻るぞ。担架を使うか？」

やることなく、手持無沙汰のメレネーがエレンを促す。

皆がエレンに注目をして、良かれと思って質問攻めにされる。

彼らの期待が重いが、「何かしたい」という彼らの思いもエレンにはわかる。

「そうね……」

エレンの頭の中がぐちゃぐちゃになっていたとき、ふとファルマの存在を思い出した。

彼は確かに全身麻痺の患者だが、意思疎通ができて、まだある程度の認知機能を残しているかもしれない。

ずっと目の前にいたのに、意識の埒外においていた。

「ファルマ君、聞こえている？」

エレンはさすがのように彼に尋ねる。

ファルマが明瞭に肯定したのを確認し、いつもの彼に話すように言葉をかける。

もはや独り言ではない。彼は聞いてくれている。

「まだ断定はできないけれど、あなたは閉じ込め症候群を発症している可能性があるわ。この瓦礫の中から救出して、西部医療研究所に運んで治療をしたいの。でも、挫滅症候群を心配して、透析ができるように準備してる」

ファルマと話しているうちに、少しずつ落ち着いてくる。

エレンはファルマに傍にいてほしかったのだと気付いて、自らが  
いかに不安だったか思い知る。

「ね。それで、いいんだよね？」

じつとうかがう。

エレンの質問に対して、彼の瞬きは肯定を示した。  
師に褒められた子供のように、エレンはほっとする。

大丈夫だ。

まだやれる。

エレンは自らを奮い起こす。

「あなたが教えてくれていたから、次になすべきことがわかるわ」

ファルマはエレンの言葉を聞いてもう一つ肯定すると、力尽きた  
か、ゆるゆると瞼を閉じてしまった。

「寝た……」

無敵の守護神という存在から、エレンたちの手に命運を委ねた全  
身麻痺の人間に戻った生身の彼にふれ、感動と感謝がこみ上げてき  
て、泣き出しそうになる。

人体とは外的環境に対して、これほどまでにか弱く儚い。

彼の陥った状況は、身をもって課された難題なのかもしれない。

エレンはそう受け止めた。

ファルマを救出した後、西部医療研究所に到着し、エレンはファ  
ルマの教科書を広げる。

エレンは教科書の内容をほぼ一言一句記憶しているが、記憶違いないか見直して確認する。

外傷によると思われるが、やはり中脳、橋、延髄などの脳幹部のうち、橋の腹側のみをピンポイントに障害されたために、閉じ込め症候群を呈しているようだ。

この部位の障害はどこをとっても殆どが即死となるために、生きてくれたことは、まさしく奇跡だったと思う。

まずは、挫滅症候群を乗り越え、全身状態を安定させたい。

急性期を脱したら、誤嚥性肺炎の予防、栄養管理、廃用症候群の進行抑制など、出来るだけ状態を良く保ち、回復を期待したい。そのロードマップは詳細にファルマ自身が教科書に記載してくれている。

ファルマとは瞬きによって意思疎通がとれるから、分からないことがあれば彼に指導を仰いでもいい。

それでもファルマは手が動かせず図解などは難しいので、基本的にはエレンたちが治療計画を立てなければならぬ。

聖帝の細胞を培養していた研究拠点がまだ使えるので、彼の神経細胞を再生できる。

ファルマの齎した遺伝子工学がエメリツヒの難病を救ったように、今度はエメリツヒの研究が、ファルマを救うかもしれない。

あの日を境に、何もかもがなくなったわけではない。

神術はなくなっても、それ以前に神術により合成されていた物質は消えていない。

パッレやファルマの神術により合成されていた、ありとあらゆる医療材料がある。

道のりは険しいが、やるしかない。

その試行錯誤がまた、医療の新たな地平を作る。

この世界の医療はここまできた、ファルマは最終講義でそう告げた。

その先の道は、この世界の誰かが歩いた後にできる。

（私たちが力を尽くして、それでもファルマ君が回復する日はくるんだろうか）

また、過去の録音ではない彼の肉声を聴きたい。

彼の笑顔を見たい。

笑ってほしい。

そんなさやかな願いのために、エレンは頑張ることにした。

ファルマは旧神聖国の西部医療研究所へ運ばれ、急性期の治療を受けた。

数回の透析で全身状態を保つ間に腎障害も改善し、旧神聖国サン・フルーヴ帝国医薬大学の入院棟へと移送された。

詳しい検査の結果、エレンが予想していた通り、「閉じ込め症候群」の状態であることが判明した。

閉じ込め症候群に関しては、現在確立した治療法はない。

できることといえば、全身状態を維持しながら回復に期待するというのが、ファルマの教科書に書かれていた内容だ。

起き上がって歩けるようにはならないが、につこりとほほ笑んだり、会話など、簡単な意思表示ができるようになるかもしれない。

閉じ込め症候群の生命予後は、意外にも5年生存率は80%を超える。

死因は肺合併症が多く、早期のリハビリの開始が重要となる。

「今日はいいい天気よ。明日はパレードがあるからか、往来がせわしいわねえ」

その日も、エレンは病室のカーテンを開けながらファルマに語りかける。

自力で体位を変えられないファルマが外の風景を見ることができないので、エレンは独り言のように話して聞かせるが、彼はしっかりと聞いている。

今日は出勤前のロッテも一緒だ。

ファルマが事前に構築していた医療体制が功を奏して、彼は帝国医薬大付属病院入院棟に、患者の一人として入院している。

ほかの患者と同じく、24時間体制での看護が行われていた。見舞いや面会を希望する者が多いので、彼は個室で管理されている。

当初は末梢静脈を使って栄養していたが、血管炎を起こしたため、今は誤嚥性肺炎に注意しつつ経鼻胃栄養に切り替えている。

褥瘡の予防のため2〜3時間おきの体位交換も必要だ。

寝たきりの状態が続いているので、廃用性の筋萎縮のため筋肉量も急速に落ちている。

合併症予防やQOL向上のため、さらに関節の拘縮が起こらないようにエレンやパツレ、ファルマの教え子、一期生となった理学療法士らによって関節の可動域を保つためのリハビリが行われている。

EMSを使った筋肉量の維持も試みられている。

リハビリの実地と継続は必須だ。

「今日はチューブの交換をしましょうね」

エレンが経鼻チューブを用意し、鼻腔内に麻酔薬入りの潤滑剤を少し入れ、経鼻チューブにも塗布し、鼻腔から経鼻胃管を挿入する。胃管にシリンジで空気を入れて、聴診器で胃の上から音を聞き、胃液をシリンジで引いて誤嚥をしないか確かめる。

胃管から入れる栄養液は、ファルマが教科書で書いていた経管栄養剤ではなく、野菜スープや、ペーストしたパテをスープでのばしたものだ。

手技を間違えないか、不快な思いをさせないか、エレンは何度やっても緊張する。

ファルマはその舌で味わうことはできないが、せめてと普通の食材での調理を指定している。

毎日の作業なのでエレンはもう手慣れたものだが、ロッテは共感しているのか、鼻をおさえて顔をしかめている。

「何回見ても鼻がつーんとします。痛くないですか？ ファルマ様」  
「そう？ ちゃんと潤滑ゼリーで局所麻酔してるわよ」

エレンはロッテの素朴な感想に笑う。  
麻酔は気休めにしかないかもしれないが、それはロッテには言わない。

「ファルマ様、リハビリが終わったらあとで私の新作を見ていただけます？」

「あら、ファルマ君、リハビリを頑張らなきゃね」

ロッテは頻繁に風景画の新作を制作し、帝都や郊外の写真を撮ってファルマに見せに来る。

動けない彼に対する彼女のささやかな気配りや励ましは、ファルマの精神的な支えにもなっているかもしれない。

エレンはふとまじめな顔になって、ファルマに告げる。

「ファルマ君、今日の午後はエメリツヒ君たちが、同意説明文書を持って神経幹細胞を使った再生医療の詳しい説明に来るわ」

「もう準備ができたのですか？ いよいよですね！」

エレンの言葉が無邪気に受け入れて、ロッテの声が無邪気に弾む。ファルマはエメリツヒらが研究をすすめている、ファルマ自身の骨髓から作った自家細胞を利用した、橋腹側の障害を修復する再生医療に参加の意向を示していた。

その治療に進む前に、同意取得の手続きが必要だ。

ファルマとの意思疎通は、直接的には文字盤とまばたきを通して可能だ。

彼は無線通信の開発にかかわった経緯からモールス信号も完璧に使えるので、モールス通信を覚えたエレン、パツレ、ブリュノ、エメリツヒ、ブランシュらとはそれで高速かつ直接の非言語コミュニケーションを行っている。

ロッテはモールス通信はあまり得意ではないので、文字盤を使っている。

ファルマは誰かが問いかけた時以外、何か意思を発することは少ない。

要求もきわめて少ない。

ただ、医療スタッフの献身的な看護と介助に心から感謝をしているとは、折に触れて伝えていた。

そして、医療スタッフの負担を減らしたいとも。

「エメリツヒ君たちは、あなたの指導のもと、長年準備していたからね」

「まさかそのファルマ様が最初の被験者になるとはですね」

エレンとロツテは感慨深そうに頷く。

エレンはこの臨床試験のデメリットも危険性も理解しているので、楽観的ではられない。

動物実験では成功しているが、それが人間の患者でも有効なのかどうかは、彼が身をもって知ることになる。

臨床試験に参加するリスクとベネフィットを比較したうえで、たとえ失敗しようとも、人類の医療の発展と、そしてファルマ自身のQOLの向上のため、身体機能を取り戻すために、意欲的に参加しようとしている。

「同意説明のときには、ご家族もいらっしゃるからね。代筆をしてもらうわ」

臨床試験の同意説明と同意取得の手順は、彼が確立したものだっ  
た。

パツレもブリュノもブランシュも、それぞれの持ち場で精力的に働いている。

最先端医療に携わる多忙な日々を送っているが彼ら全員が、一日の始まりと終わりにはファルマの顔を見に来て会話することを忘れない。

ファルマも、彼らの思いに応えて離床したいのだろう。

エレンは時折、このような状況下にあってもファルマの精神が安定しすぎていて敬服する。

「それにしても……」

エレンは恐ろしくてファルマに直接尋ねていないが、疑問に思っていることがある。

（ここにいるのは誰……？）



橋腹側が広範囲に傷害された状態で、挫滅症候群をも乗り越えて生存しているのは奇跡だ。

闇日食のあの日、ブリュノはかつてのファルマと邂逅し、「この世界の情報を管理下に置いたから、何も心配しなくていい」と告げられたとのこと。

何もかもが、理解を超えている。

その言葉が真実ならば、敢えて受傷して閉じ込め症候群のような状態にはなっていないだろうとエレンは思う。

ではやはり、ブリュノの見た幻覚や夢なのか。

墓守はどうなったのか。

今、この世界を管理している存在がいるのかどうか。

謎ばかりが残る。

ここに存在するファルマは、守護神でも無敵の管理者でもなく、正しく人類であった。

神力は枯渇し、両腕にあった薬神紋もない。

注射針は彼に刺さるし、血液も流れている。

細菌感染を防ぐ聖域に守られることもなく、ほかの患者と同じように細菌感染もする。

おかげでエレンは久しぶりに風邪をひいた。

彼と出会ってから感染症を患うことがなかったので、すっかりと油断をしていた。

落雷に撃たれる以前のファルマが戻ってきたようできて、そうともいえない。

ファルマとの短いやり取りからは、彼の思考を窺い知ることができない。

彼の心の中に異世界の青年がいるのかどうかも、明かしてはくれ

ない。

そしてファルマも、真実を語ることを禁じられているかのように、誰にも何も話さない。

ただ、目の前に横たわり、エレンが触れることのできるファルマは、あまりにも泰然自若としている。

それは断固たる自らの回復を、もっといえばこれから自分を待ち受ける未来を、確定事項として知っているかのような。

## 9章11話 患者 ファルマ・ド・メディシス（後書き）

本日は二話同時更新です。次頁があります。

### 【謝辞】

本項の医療描写は医師・医学博士のなゐが先生にご監修、ご指導いただきました。

ありがとうございます。

終話

Deux épiques (前書き)

本日は二話同時更新です。前ページがあります。

## 終話      Deux é p i l o g u e s

すぐ耳元で、何かのアラームがけたたましく鳴る。

薬谷 完治は電子音を懐かしく感じながら、ソファの上で目覚めた。

急に体を動かしたので、勢い余って端末が腹から滑り落ちる。

「ん……まぶし」

意識は清明で、最初に目に入ってきたのは現代的な天井だった。

その、天井の模様までよく見える。

光を遮るように掲げた左腕はほどよく筋肉が添えられ、腕時計がおさまっている。

軽い空腹を覚えながら、状況の分析を始める。

「そついう……ことか。予告通りだな。皆は無事かな」

アシスタントAIに時刻とニュースを読み上げさせる。

『西暦2048年5月28日 午後8時45分です』

（ということは）

地球時間のループを抜け、時間が進んでいる。

超えられなかった時間の切断面、その先にいるようだ。

無数の試行の末に、現時空に生存を許される結果に行き当たった。

はつとして手首を見ると、左手首に無造作に書きつけられたメモがある。

文字は反転しておらず、そのまま読める。

「あれ？」

薬谷は大きく息を吐くと、時計を右手につけなおす。

「左利きから右利きになって、左利きに戻るか。前の身体の持ち主は右利きと」

何回、世界が反転したのだろう。

以前の感覚とは異なっていて、ひたすらに違和感がある。

感覚を確かめながら立ちあがり、顔を洗ってペーパータオルで拭く。

鏡で自分の顔を確認すると、なんだか見慣れない。

肌つやよく、精悍な顔つきで、眼鏡もコンタクトもつけていなかった。

「視力……悪くないんだな」

ファルマ少年の身体に入っていて、肉眼での生活に慣れている彼は得をした気分だ。

窓際のシートを上げ、窓の外を眺める。

空を飛び交う飛空車の群れ。

関東平野の空気の層が織りなす光のグラデーション。

漂ってくる生活音と喧噪、野鳥の鳴き声。

どれくらい時間が経っただろうか、ただ情報の洪水を五感で浴びて、安心して立ち尽くしていた。

地球文明をこれほど、咀嚼するように受容したことはない。喉の渴きを覚える。

いつもの棚からインスタントコーヒーを探したが、そこにあったのは、以前の生活では見たこともない高級そうなコーヒー豆だった。

（おお、さすが貴族。豆をけちつてないな）

フランネルもあつたので、ありがたくネルドリップでいただく。お湯をそそげば、ふわりと芳醇な香りがあたりに立ちこめる。たっぷりと堪能して、白衣の胸ポケットから、何の変哲もない黒いペンを取り出す。

彼はふとペンを前に向けて構えてみる。

「水の槍……」

何も起こらない。

自らの体内に神力が残されていないことを確認しながら、それをデスクに置いた。

小学生時分以来の、必殺技を叫んだ直後の気まずさを味わう。

「なんてね！」

そこに誰もいなかったことを確認しながら、彼はふっきれたかのように潔く呟く。

モニタ横の写真立てには、ちゆの結婚写真がおさめられている。彼女の隣には新しい伴侶と、両親もいる。

交通事故で亡くなっていた善治と良子は、この世界では健在のようだ。

「ファルマ・ド・メデシス」の言っていたとおり、「あの世界の続きの世界線」に接続していると知り、ひとまず安心する。

「さて、外はどうなっているのかな」

教授室のドアを開け放てば、廊下は外界へとつながっていた。構内は学生や職員が、ぱたぱたと足早に通り過ぎてゆく。

気分を切り替えて、この場所に関連する記憶を思い出す。

実験棟の間取り、教員の顔、事務員の顔。

彼の受け持っていた学生たちの顔と研究テーマ。

過去半年分の、メールのやりとりを確認。

端末を取り出し関係各所への連絡を始める。

猛烈な勢いで作業に没頭していると、視界の隅で端末が振動しているのに気づいた。

端末を手に取ってみると、自撮りの動画とともに、妹のちゆからメッセージが届いていた。

『おにいちゃん。今日の夜、ごはんいかない？ 今日はお父さんとお母さんも一緒！』

『いいね、家族団らんか。話すことも知りたいことも無限にある』

今日のところは両親に感謝を伝え、妹の結婚を祝福し、ゆっくりと食事をしよう。

念願叶うまで長い月日を要した。

そんな実感もあるが、昨日までの日常だったようにも錯覚する。

『ああ、そういえば合言葉を覚えている？』

ちゆは思い出したように付け加える。



『脱出ゲーム、やっと終わった？』

何かの符丁なのだろうか。

首をひねりながら、「さあ」と曖昧な返事を送る。

メッセージを送ってきているのは本当にちゆなのだろうか？

新たな深淵が現れたのだろうか。

……ともあれ、数十年越しの再会は、今日中に叶えられそうだが……。

開け放たれた扉を通って教授室である301号室へ若い女性が顔を出す。

「薬谷先生、おはようございます」

彼女から声をかけられて、薬谷は一瞬面くらった。

その彼女は、慣れた様子で入口のデスクにバッグを置く。

「おはようございます」

（この人とどこで会ったかな）

はじめましてなのか、違うのか。

彼女とは、面識がないような、あるような。

顔を思い出せず判然としない。

一つの記憶を、異なる世界にまたがる二つの人格が共有している。自我がどちらの世界に帰属しているのかを知覚するのは難しい。

もう一つの世界、あるいは複数の自分自身と共鳴し、たえず自覚している。

薬谷が戸惑いながら彼女を凝視しているからか、彼女は自身の身なりを見ていた。

彼女のネックストラップにぶら下げられたネームプレートをさりげなく確認する。

天野、なのだそうだ。

先ほどメールを読んでいたはずだが、まさか名前が違うとは思わなかった。

「薬谷先生？ あ、何かありましたか？」

「い、いえ」

「ぼーっとしておられましたけど、まるで昨日とは違う人みたいで、どうかなさいましたか？」

「何でもないです！ 私は元気です！ 今日はこれから休暇をいただきます」

「えっ、今日ですか！ でも今日はたしか怒涛のように予定が……あれ。ない？」

その天野は驚いて予定表を確認する。

「パンパンに詰まっていた予定が消えています、同期エラーでしょうか」

「いえ、すべてキャンセルしました。今週いっぱい休暇をいただくことにします」

「そんな、急に。ご出張やご家庭の事情などですか？」

訃報ですか、と天野の喉まで出かかっているのがわかる。

要するに、根回しなしに思いついて休暇をとるとというのがそれだけ珍しいことなのだろう。

「いえ。特に何もないのですが、さぼっちゃおうかと思ひまして」

本当に、子供みたいな口調でそう言ってしまった。  
かつては「さぼってしまおう」、という発想も語彙もなかった。  
でも、この世界は自分がたった一週間休んでも、必ずうまく回っ  
てゆく。

贖罪のように続けていた仕事から、一瞬だけ解放されてもいい。  
休暇の間に、頭の中をまるきりリセットしなければならない。  
新しいスタッフ、新しい交友関係……「彼」が維持していた環境  
を引き継がなければ。

「先生が、さぼり。先生、何か辛いことでもありましたか？」  
「全然ないです」  
「そうですか？」

天野は目をぱちくりとしていた。

「天野さんも、今日は予定がなければ半休とかで帰っちゃってくだ  
さい」  
「かしこまりました！ 段取りは任せてください！」

彼女は半休が嬉しかったのか、いい笑顔を向ける。

「それから先生、ご依頼のあった七年度の経費の報告、送っておき  
ました」

「七年度？」  
「はい。英弘七年度です」

天野は弾んだ声で、にこっと愛想よく笑う。  
薬谷は思わず口元をおさえる。

（今なんて言った？ 英弘、それは人名ではなく元号か？）

令和でも万保でもないこの元号を、彼は当然ながら知らない。  
明治、昭和、平成から、はてさてどの世界へ分岐したのだろうか？  
そこはSOMAのない世界なのだろうか。

「わかりました、ありがとうございます。ちなみにSOMA関連の  
予算はどうなっていますか？」

「そうまってなんですか？ 相馬市の新しいプロジェクトですか？」

全く何も知らないという顔をしている。

「つと……すみません、今のは忘れてください」

「はい……？ えっと、薬谷先生、しっかりフレッシュしてきて  
くださいね！」

天野は薬谷の言葉を不審がっているのか、愛想笑いで応じる。

薬谷はぬるんだコーヒーを無理やり飲み干して、ぽつりとこぼす。

（また知らない世界だ）

ここにはSOMAが存在せず、ファルマ・ド・メディシスの言っ  
ていたように、穏やかに滅びゆく世界ではないかもしれないし、何  
かを起点にそうなるのかもしれない。

既に固定されているこの世界の未来と命運を、薬谷はまだ知らな  
い。

それでもこれまでの経験をもとに、同じ轍を踏まないことはでき  
る。

だから、彼の行動はまた同じ。

「……天野さん、すみません、やっぱり五分だけ質問してもいいですか？」

「……？ はい！ 何なりと！」

また、知ることから始めよう。

サン・フルーヴ帝国語で「引継ぎ」と書かれた見知らぬ筆跡のメモに気づいて視線を落としながら、

彼は自らを鼓舞するように一つ頷いた。

自我と存在を分割しているので、一度眠るだけであの世界へ戻る。

今日はこちらの世界を生き、明日は向こうへ戻る。

これからはどちらも手放すことなく、二つの人生を同時に生きるのだ。

存在とは自由なものだ。

1158年4月12日。

サン・フルーヴ共和国のとある辺境の村が、謎の感染症におかされた。

診療にあたっていた村で唯一の医院を営む老医師が最初に死亡したとき、531名の村民を抱える無医村となった。

初動で感染制御に失敗し、人から人へ、死体から人へと瞬く間に村全体の流行に陥った。

日を追うごとに隣人が一人また一人と消えてゆく。

遠く離れた隣村へ救援を呼ぶすべもなく、家々の食糧は尽き、人々は病苦と飢餓に苛まれてゆく。

震えていた幼子が、策尽きて家の前に座り込んでいた。

彼女は落ちくぼんだ眼窩、やせこけて枯れ木のような腕で膝をかかえこんでいる。

助けを求めて軒先で倒れたきり、動かなくなつた母親の軀が、ゆっくりと朽ちてゆくのを見ていた。

カラスがじつと、少女を窺うように辛抱強く木立の上に佇んで、その村を飲み込んでゆく惨状をつぶらな双眸におさめていた。

水を飲むべきか、ここに横たわるべきか。

少女が思案していると、いつの間にか、正面から近づいてくる足音に気づいた。

座り込んでいた彼女の顔に影が落ち、影の主を見とめ顔を上げる。

「こんにちは」

挨拶をして帽子をとつたのは、金髪の青年だった。

彼女の見上げたその青年は、あまりに強い生氣を持っていた。

生のおふれる世界から、この村へ引き下ろされた緞帳を切つて死の渦巻く側へとやってきた一筋の光のよう、そんなふう感じた。

「エタン先生の診療所はどこにありますか」

「エタン先生は最初に死んだよ」

村人の命を守っていた、たった一人の医師が死んだ。

その直後に、堤防が決壊するように、おふれんばかりの死が村の外から押し寄せてきた。

「急いできたのだけど、遅かったようですね。大人の人はいますか」

少女は乾いた唇で、ブツブツと呪詛のような言葉を紡ぐ。

「……みんな逝っちゃったよ。あつという間に。村には動ける人はいない……まだ生きている人もいるかもしれないけど、誰も外に出てこないよ。食べものも腐ってなくなっちゃって……」

少女は茫洋とした視線で青年を見つめる。

「あなたも私を迎えにきたの？」

青年は彼女の視線に、「いいえ」と首を振る。

「誰かを迎えにきたのではなく、エタン先生に求められた薬を持ってきたんです」

彼はコートの下から、ネームプレートを取り出して提示する。

貴族みたいに長くて立派な名前だ、と彼女は思った。

「私は先遣としてサン・フルーヴ共和国の首都から来た薬剤師です」「やくざいし……？ やくしではなくて」

少女は聞き覚えのない「薬剤師」という職業に戸惑っている。

神術に依存した薬学体系を手放した薬師は、科学に根差した薬学を柱とする、薬剤師という新しい呼称に改称されたのだ、と彼は説明する。

「はい。そして私たちは、守護神が役割を終え奇跡が消えたこの世界の隅々に、人道援助の観点から必要な医療と薬を届けることを使命としています」

やがて彼が宣言した通り、彼が持ち込んだ薬と医療によって、死を待つのみだった大人たちが、子供たちが、すんでのところで命をつなぎとめた。

ほどなく村に医療の光が届き、隅々にまで医療支援が行われ始めた。

本体として合流した医療団を受け入れ、村人たちは彼らを歓迎する。

村から疫病が駆逐されるまでの間、その薬剤師の青年は村人たちを励ましなが、対等な関係を築きつつ献身的に働き続けた。

その青年が人々に手渡した薬袋には、これまでに少女の見知った薬局の紋章というものが見当たらず、代わりに世界言語で、

「世界薬局（PHARMACIES MUNDI）」

という文字と、人々が手をつなぎあふシンプルかつ力強いイラストレーションがのびのびと描かれていた。

<i653048—2496>

異世界薬局 完





## 終話      Deux épiques (後書き)

異世界薬局（EP4）、完結しました。

7年間、完結まで見届けていただきありがとうございました。

本作を執筆するにあたり、最後まで読んでくださった読者の方と、ご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

2022/6/23追記：

「薬谷完治とファルマはそれぞれ元の世界に戻ったのか」という質問、ご意見がいくつかありましたが、違います！

終話でも一応書いていますが、どうなったのか不明な場合は後日譚として世界薬局（EP4・1）で明確に記載していますので、ご確認ください。

後日譚を引き続きよろしくお願いいたします。

完結済みマークは保留にしておきます。

### 同一シリーズのご案内

本作品「異世界薬局」は、SF作品群、「Worlds under observation by XERO」のエピソード4にあたります。時系列は以下です。

EP1（A・D・2007）    INVISIBLE・インヴィジブル・

<https://ncode.syosetu.com/n8234j/>

<i670922—2496>

EP 2 (A・D・ 2023) VISIBLE WORLD  
- ヴィジブルワールド -

<https://ncode.syosetu.com/n2283hc/>

<i670923—2496>

EP 3 (A・D・ 2027) TOKYO INVERSE  
- 東京反転世界 -

<https://ncode.syosetu.com/n0736ha/>

<i670924—2496>

EP 4 (A・D・ 2048 / A・X・ 1145) 異  
世界薬局 (本作品)

<i670925—2496>

EP 4・1 (A・X・ 1153) PHARMACIES M  
UNDI INFINTUS - 世界薬局 - (後日譚)

<i674267—2496>

EP 5 (A・D・ 2133) Heavens Under  
Construction (書籍化) <https://ncode.syosetu.com/n3107n/>

<i670927—2496>

ウェブ拍手 (返信が必要な場合はなろつのDMよりメッセージください)

<http://clap.webclap.com/clap.php?id=Tliza@2>

をhtに変更してください

## ブローグ クロッカスのある病室にて（前書き）

本編は完結しましたが、後日譚を少し書いていこうと思います。

## ブローグ クロッカスのある病室にて

「あなたは鋹の歯車が消えた後、どちらの世界で生きることを選びますか？」

二つの世界にまたがる境界に、二人の青年が対峙している。

一人は異世界側にいて、薬谷 完治の記憶があるファルマ・ド・メデイス。

いま一人は地球側にいて、ファルマ・ド・メデイスの記憶がある薬谷 完治。

ファルマは薬谷からの問いに少し悩んで、希望を伝えた。

「あなたが選ばないほうにします」

消極的な選択だが、選択権は自らにはないと考えていた。

彼の人生を優先して、彼が選ばなかった方を選ぶ。

それでいいと思った。

すると薬谷は前もってファルマの答えを知っていたかのように告げる。

「私もそう伝えようとしていました。お互いが譲り合ってしまいましたね」

「ファルマさんはサン・フルーヴへ戻りたいのではないですか？」

「なかなかどうして、地球の行く末も気になりますし、案外こちらも快適なのですよ」

これは意外な答えだった。

彼はサン・フルーヴの肉親や係累に会いたくないのだろうか。

「あなたも同じなのではないですか？」

「実を言つと、はい」

それではどうしたものだろう、とファルマが思案していると、すかさず提案が差し込まれた。

「では、両方にしましょうか」

「両方？」

「私とあなたが、両方の世界に同時に存在できるようにしましょうか」

「どうやってですか？」

人格を分裂させるということなのだろうか。

ファルマには想像もつかない。

迂闊な選択によって、二度と薬谷 完治の自我を構成できなくなってしまうのは少し躊躇する。

それなら、どちらかのほうがマシというもののだが。

「理論物理学は専門外ですか？」

「はい」

「学んでおいて損はないと思います」

「浅学で恥ずかしい限りです」

「まあ、地球においてはジェネラリストは好まれないようですからね。何も難しく考えなくていい。あなたはあなたのままです。ともあれ、お互いに希望通りの選択ができそうですね」

本当に希望通り、なのだろうか？

ファルマは果てしない不安に襲われ、何か問いただそうとしたが、異界の研究室からはじき出されて聖泉に浮かんでいた。

時間切れになったのだ。

< i 6 5 2 5 1 8 — 2 4 9 6 >

「エレオノールお嬢様。ご起床のお時間ですよ！」

1153年3月。

エレオノール・ボヌフォワは、いつものように侍女に文字通り叩き起こされていた。

彼女は寝ぼけた顔で侍女に応じると、毛布にくるまり、広いベッドで寝返りを打つ。

「あと5分だけ！」

「お嬢様！ これで3回目の5分だけなのですが！」

侍女は呆れながら砂時計を転倒させる。

エレンは夜型なので朝に弱く一人では起きられないので、朝のひと時だけは醜態をさらしてしまう。

「ほら、15分経ちました。起きますよ！」

「いやー！」

口では嫌と言いながらも、洗顔し長い銀系のような髪を侍女に梳いてもらい、オートクチュールの服を着せてもらう。

完璧に整えられた身支度のあと、口を開かなければ誰が見ても良家の令嬢に見える。

「本日はどの眼鏡になさいます？」

侍女は何段にも重なったガラスのメガネケースを持ってきてエレンにうかがう。

「やっぱりこれかしら」

今日はファルマからプレゼントしてもらった眼鏡を選ぶ。

ここどころ、ずっとこれだ。

エレンが所有しているこの眼鏡に限らず、メロディ・ル・ルー作の割れないガラスを使った眼鏡は、以前にもまして高値で取引されている。

これから先、過去に神術で作られたものは、神術の効果がなくなつたとしても貴重品として重宝されるのだろう。

エレンは貯めに貯めた杖のコレクションも当分放すつもりはないが、今ではもう腰には何も帯びない。飾りの杖も挿さない。

1152年8月に全世界的な規模で発生した貴族階級の神力と神術の喪失で、世界情勢は激変した。

このときを境に、王権守護神授によって正当化されていた王侯貴族による封建制度は、旧体制（Ancien régime）として終わりを告げた。

神聖国聖帝エリザベスⅠ世は、この事態によって守護神より授かった絶対的権威の根拠を失ったとして、全財産と全権を民衆へ返還すると布告した。

さらに大神殿以下、神官、貴族階級の特権身分の停止と解体を行った。

神聖国の大神官の決定に叛く国王は存在せず、神聖国の後ろ盾を



失った各国の王も一斉に廃位せざるをえなかった。

今後は民衆の代表が選挙によって選出され、国民議会として統治を行い、各国は平和的に絶対王政から民主制へと移行するよう、エリザベスは聖帝として最後に求めた。

悪徳貴族の中には民衆の暴動をおそれ、聖騎士の代わりに銃火器で武装した私兵を雇って領地や財産を守らせたり、財産を持って逃亡したものもいた。

しかし大半は悪霊の脅威から民衆を守り、領民の食い扶持を維持してきたこれまでの実績を評価され、民衆に受け入れられ、変わらず領主として領地の経営にあたっていた。

受け入れられた理由はほかにもある。

膨大な予算を悪霊対策に費やす必要がなくなったことから、減税及び徴兵の廃止が行われたのだ。

かつてのサン・フルーヴ帝国の大貴族、ボヌフォワ伯爵家の生活はというと、以前とさほど変わらなかった。

ボヌフォワ伯は封土の半分を売却していたが、経済的には全く困窮していない。

投資家として目端が効いたので、成長著しい新興の国際商社に事業資金の出資をして、その利益は十分だった。

ボヌフォワ邸の使用人たちも働き場所を求めているし、十分な報酬が支払われていた。

言うまでもなく、エレンはボヌフォワ家から経済的に独立して異世界薬局改め世界薬局からのDGとしての収入を持っていた。

「異世界薬局」は、ファルマの了承もあり、エレンの提案で「世界薬局」に改称した。

もはやファルマにとって、この世界は「異世界」ではない。

現世界薬局というのも大層だし、シンプルなほうがいい。

「異」を取ったことによって、従業員の違和感もとれたようにエ

レンは思う。

薬局で勤務していると日に一度は必ず、客や患者から「異世界薬局の異世界とはどういう意味？」と質問されていたが、その対応も今後は必要なさそうだ。

「世界薬局」という名づけたことにより、改めて公共福祉と健康増進に貢献する世界企業として新たな出発をきった。

そのエレンは現在、帝国医薬大学附属病院、改めサン・フルーヴ医薬大学附属病院に薬剤師として勤務している。

彼女が今現在所持している資格は、「薬剤師」の一つだけだ。

神術という薬師の等級を規定する評価基準が消えたため、薬師間に差をつける必要がなくなった。

薬師から薬剤師への呼称の変更により、旧貴族、平民を問わず、新薬を取り扱う教育課程を経て薬剤師試験に合格したものは薬剤師を名乗ることになった。

薬剤師以外でも登録販売者の試験に合格した者は、登録販売者になった。

医師免許も同様に、医療用医薬品を取り扱うために基準が刷新された。

合格できない者も少なからずいた。

エレンは帝国医薬大学附属病院に出勤すると、準備を整えて最初にファルマの病室を訪れる。

彼女は一時的に世界薬局の勤務を外れて、ファルマを主な担当患者として受け持っていた。

ファルマはいつも起きてエレンを迎えてくれる。

彼の顔をみると、エレンはいつも奇跡の存在というものを実感する。

ファルマが橋腹側の障害により発症した閉じ込め症候群は、発症

から7か月が経過した。

今や遺伝子工学のエキスパート、エメリツヒ・バウアー率いる再生医療チームと、ブリジット・ル・ノワールの外科チームの連携により、自家細胞を用いた数度におよぶ再生医療が実施され、ファルマの身体機能は急速に改善をみせつつあった。

現在のファルマは、橋腹側へと移植された遺伝子改変神経幹細胞が分化し生着、神経の補填をはじめのを待っており、すでに全身麻痺の状態を脱しつつある。

依然として構音は不能だが、口唇は動かすことができる。

ぎこちないが、笑ったりもする。

垂直運動のみであった眼球の運動は、左右へ注視が可能になった。両手指にはわずかに随意筋収縮がみられる。

経鼻経管栄養で離床を開始し、全身状態はすでに安定していたため、ファルマは急性期における命の危険を脱したとして、回復期リハビリテーション病棟へと転棟していた。

この病棟ではリハビリ訓練、食事、着替え、衛生、整容、排せつなどの補助と看護が行われている。

エレンは一人で抱え込まず、各分野の専門家と連携をとっている。リハビリがうまくいったら、自宅に戻るか入院を続けるかはファルマの状態次第だ。

エレンは十分なケアを続けるためにも、そして急変に備えるためにも、ファルマには入院の継続を提案して、ファルマもそれを受け入れていた。

【来月には話せるようになるかもね】

ファルマはモールス符号を用いて瞬きでほぼ遅延なくエレンに伝える。エレンもリアルタイムで読み取ることができるので、エレンとのコミュニケーションには困っていない。

それが希望的観測を込めた言葉なのか、神経幹細胞の生着のスピ

ードから実際にそうなるの見積もっているのか、未来を知っているのか、エレンはいつも問い詰められずにいる。

「ほんと!？」

【それを目標にしたいね。その次は上半身が動くようになるかもしれない。上半身が動くようになったら、車いすが使える】

エレンを気遣ったのことだろう、ファルマは少しだけほほ笑んでいるようにも見える。

「車いすに乗れるようになったら、お散歩に行きましょうよ!」

【そうだね。連れて行ってよ】

(ファルマ君の言葉で、私が安心してしまっなんて……どっちが患者なんだか)

「ナタリーちゃんのクロツカスの水替えもしておくわね」

エレンは窓際に置かれた黄色いクロツカスの花瓶をとる。

これはナタリー・ブロンデルがファルマから以前もらったものを増やして、お見舞いとして持ってきたものだ。

今ではナタリーとファルマは逆の立場である。

エレンは彼と同じ時間を過ごすうちに、ファルマの中にいるのが何者なのか、ようやく理解が追い付いてきた。

最初は、異世界人の彼がいなくなっ、もとのファルマが帰ってきたのかと思っていた。

が、そうではないようだ。

両方いた。

一つの身体に人格が二つある。

異世界人の彼と、もとのファルマの人格が同時に重ね合っている。

異世界の量子技術で存在を分割して、異世界とこの世界に対になって同時に存在している、と言っていた。

だから彼はどの時間軸の話にしてもシームレスに理解を保っている。

幼少期のこと、落雷の後から闇日食までのこと、そして現在、あるいは未来の出来事まで。

もとのファルマは完全記憶を持っていたので、異世界への逗留を経て、異世界の知識を吸収して帰還した。もっとも簡単に言えば帰国子女のような状態になっている。

もとのファルマの知識は多岐に渡り、薬学領域に限られていた異世界の彼を遥かに上回っていて、神術こそ使えないがそのポテンシャルは計り知れない。

一つの身体に二つの人格がある。

一体どんな感じなのだろう、とエレンは想像もできない。

彼の胸中はどうなっているのだろう。

そして自分は、彼にどうなってほしかったのだろう。

ファルマはおるか、自分自身の思いにもまだ、エレンは辿り着くことができない。

たとえ二つの記憶があろうとも、ファルマは彼の人生を再開しようとしている。

今は担当薬剤師として、そのサポートに全力を尽くすべきだ。そう思うエレンだった。

ブローグ クロツカスのある病室にて（後書き）

ウェブ拍手（返信を希望される場合はなろうのDMよりメッセージください）

<http://clap.webclap.com/clap.php?id=Tliza@2>  
をhtに変更してください

## 1話 要塞 Bastille

両手の拳を注視する。

それをゆるくむすんで、ひらく。

生きている証を掴むように。

その手の下には影が色濃く落ちている。

たったこれだけが今の彼には難しく、動作はぎこちない。

この思考だって、無数の可能性の中からランダムに選ばれた条件に存在する、進む神経発火の集合体に過ぎない。

集合間のやりとりが絡まり合って人格を形成し、記憶として増強され、体験したりする。

ここから先は地球に似た全く知らない世界で、未知の困難に直面し、地球史を追跡しない歴史をたどる。

一時的に滅亡を回避したところで、結局は滅びが待ち受けているのかもしれない。

ファルマたちはこの世界の「観測者」として滞在する。

それはほぼ傍観者と同義で、人智を超える範囲で干渉してはならない。

「観測を続けるため」の知識は得ている。

カーテンコールを終えても、また誰かの物語は続く。

1153年5月。

サン・フルーヴ国国民議会は決選投票の末、平和裏に初代共和国大統領を選出した。

平民出身の第一統領をという民衆の強い希望から白羽の矢が立ったのは著名な歴史家にして弁護士、弁舌を得意とするマーセイル出

身のジュールだった。

ジュール大統領はサン・フルーヴ宮殿に大統領府を構え、旧体制からの脱却をスローガンに次々と自由主義改革を打ち出し、国民の信頼を手に入れていた。

それとは対象的に旧貴族階級への締付けは強まった。貴族階級は少数派であつたので、多数決の名のもとに合法的に重税を課され、領土返還を要求され、既得権益をそがれていった。

帝国医薬大総長ブリュノ・ド・メディシスとエレオノール・ボヌフォワが、総長室で事務長より忌まわしい報告を耳に入れたのは、そんな時世の折だった。

「ファルマの命を狙う者が？」

「はい、逆恨みと言いましょようか……今月に入ってもう三件目で、雇い主も一人や二人ではないようなんです」

長いひげをたくわえた事務長は調査結果を報告する。

「ふむ……ファルマが生存しているという話がどこから漏れたのか」

表向きは平穏であっても、神官や神術使い、生活を追われた大貴族の一部ではいまだにファルマに恨みを持っている人間は多い。

複数の情報筋から危険を察知していたブリュノは、神籍に入ったファルマの籍を復活させなかった。

そのためファルマはもう、戸籍上は死亡していた。

「彼を狙ったとしても詮無きこと。彼はもう薬神ではないのだから。しかし仇討ちで償わせようとする者は跡を絶たぬか」



ブリュノにとっても頭の痛い問題だった。

「そればかりでもありません……。いまだにファルマ様を神聖視している者たちもいます」

ファルマの体にはまだ守護神の神力が残っていると考える者もいて、文字通り彼の血肉を食らって力を得ようとする者もあとをたたない。

ファルマが死んでいたら死んでいたでそれは聖骸として、神秘原薬にしようとする。

彼らにとってはファルマの死体でも骨片でも髪の毛でもいいのだ。生きているならば、なおさらのこと。

「私は最小スケールの神力計において、ファルマの神力がゼロになっていることを確認した。彼は紛れもなく人間で、神術使いではない。そう……私達と同じな」

神術を奪われ、倫理の箍の外れた人間は恐ろしい。

本当に恐ろしいのは悪霊でも墓守でもなく、人間の悪意や欲望なのかもしれない。……というのはブリュノの持論だ。

「帝国医薬大には箝口令が敷かれているはずですが、どこから漏れているのかもしれませんが」

ファルマが回復期リハビリテーション病棟に移ってからというもの、一般患者と遭遇することがある。または集学的医療を実施するということは、数多くのスタッフが関わるということで、医療従事者が不用意に口外して情報が漏れたのかもしれない。

一度破られた秘密を守ることは難しい。

大穴のあいたバケツを塞ごうとするようなものだ。

「情報が漏れたとして、警備は万全ですが……それ以外ではご子息の安全を保証できません。警備に人員を割き続けることも難しく」

事務長は暗にファルマの転院を促していた。

「そうだな。帝国医薬大としての本来業務に差し支える。患者の安全も脅かすであろう」

「ご子息の葬儀を執り行い、死亡したとして国外に新たな名と籍を手配しますか」

しかし、ファルマの顔は広く国内外に知れ渡り、名や身元を偽ったところで隠し立てできそうにない。

犯罪や襲撃に巻き込まれたとき、神術を失い、四肢に麻痺のあるファルマでは対応できないのだ。戸籍上は死亡しているため、亡命も難しい。

それに、かつての尊爵、または宮廷薬師としてのブリュノの権勢も、身分制の廃止と大統領制への移行とともに衰えはじめていた。

「帝国医薬大が管理している療養施設は現在十二ある。サナトリウムサナトリウムの患者らは入れ替わりが頻繁であり、ファルマを知らぬ。ファルマの回復が見込まれるまで長期静養に出す……数年もすれば、ファルマの死亡説が信憑性を帯びてくるだろう。そうなれば、命の危機には及ぶまい」

あるいは、ブリュノがファルマを表向き匿うことができれば、最悪そこで生涯過ごしてもらうことになる。

ブリュノはその可能性を一顧だにしなかったわけではない。

サナトリウムとは、長期療養を必要とする人々のための療養所であり、主に結核治療用の施設として用いられていた。ところが近年

はファルマの普及させた抗菌薬によって、結核患者が激減、慢性疾患や神経疾患の療養者に置き換わりつつあった。

「あの、お師匠様。ファルマくんは神経幹細胞移植が奏功し、会話も少しずつできるようになりましたし、もう少し帝都での療養を続けることはできませんか」

じつと話を聞いていたエレンがたまらなくなって口を挟む。

「昨日会ったが、まだ歩ける見込みは立っていない。奇跡が起こったとしても、立って歩けるようになるまで、一年はかかりそうだと本人が言っていたがな」

ブリュノの見立ては確かだった。ファルマとも話したのだろう。自己申告をされてしまったなら、エレンは反論の余地もない。

「神術も使えないから、自力で防衛をすることもできない状況だ。そんな状態を襲われたらどうなる」

「私が彼に同行してもよろしいでしょうか。ファルマくんの主治薬剤師として……」

エレンは思い切ってブリュノに申し出た。

ブリュノは彼女を一瞥し、ため息をつく。

「お前はファルマの担当かもしれないが、世界薬局のDGでもある。そのお前が帝都を離れると薬局の経営はどうなる。ファルマからお前に交代したばかりで、まだ十分に業績を認められておらぬというに、さらに経営者の代理を立てるのか？ お前は責任者なのだ。ファルマがどうあれ責任を果たせ」

「……御意」

エレンは返答に窮し、承諾した。

「ファルマくんをどのサナトリウムへお連れしましょう。帝都内か、近郊は難しいでしょうか」

エレンは食い下がりつつ、ブリュノの言葉を待つ。

ファルマの身の安全を優先するならば遠隔地に送ったほうが安全なのかもしれないが、それはエレンには耐え難いことだった。何より、彼のそばにいたかった。

「ファルマに選ばせるといい。資料はここに用意してある」

エレンはブリュノから資料を受け取ると、暗澹たる気持ちでファルマの病室へと向かう。

通いなれたその場所へ向かう足取りは重い。

ファルマは今、リハビリ病棟の最上階の角部屋の個室にいる。いわゆる特別室で、ファルマの入院は病院患者からは知られていなかった。

「ファルマくん、ちょっといい？」

「どうしたの、エレン。回診の時間ではないけれど。顔色も悪いよ？」

春の爽やかな風に吹かれてベッドを起こして論文を読んでいるファルマの姿を見ると、エレンはぎゅっと胸を締め付けられるように思う。

彼は身体的不自由ななかにあっても、いつもエレンの身を思ってくれる。

過労をしていないか、仕事で行き詰まっていないか。

適切なアドバイスをしてくれていた。

ファルマは会話ができるようになったがほぼ囁声で、まだ普通の発声はできない。

穏やかな青年は、エレンの様子が普段と違うことを見抜いていた。

「実はね」

エレンが重い口調で先程のブリュノとのやりとりを話して聞かせる。

その話をファルマは困ったように聴いていた。

「なるほど……サナトリウムへ無期限でね……」

「そうなの。でも気を落とさないで。ファルマくんの身の安全のためでもあるの。あなたの体が動くようになって、ほとぼりが冷めたら帝都、じゃなくて首都に戻ってこれるわ……私も時間が許す限りそっちに行くし……」

励まそうとしても、エレンの語尾が段々とすぼんでくる。

ファルマに対しては、口にするのも躊躇われるほど非情な宣告だ。それでも、いつまでも隠し立てはできない。襲撃者の数が増えていくということは、彼の身に危険が迫っているということだ。

「そうだね、父上のおっしゃることもわかるよ。俺もここにいくべきではないと思う」

病院で警備を雇うにしても、他の患者に秘密でとなると現実的ではない。

何より病院内で特別な対応を迫られる。ド・メデイス家の屋敷であっても状況は同じ。

もう防犯のための神術陣が機能しないので、賊に入られてしまえ

ばそれまでだ。

最悪、ド・メディシス家を爆破することだって目的は遂げられる。

「仕方がなかったことなのに……あなたは世界を救ってくれたのに。どうしてあなたを狙う人間が出てくるのかしら」

「何も知らない一部の元貴族たちから見れば、俺は理由もなく神術を消し去った張本人だからな。歓迎される理由もないよ」

「……悔しいわ」

「そうだね。それで、サナトリウムはどこにあるの？」

エレンはファルマに促されてファルマに資料を掲げてみせる。

「帝国医薬大が所有する12の療養施設と病院とサナトリウムがあるの。お師匠様があなたの希望する場所を押さえるそうよ。希望はある？」

ファルマは真剣な眼差しで資料に目を通すが、興味を失ったかのように小さく息を吐く。

「サナトリウムでリハビリをすることには賛成だ。でも教え子たちの研究が佳境に差し掛かっているし手紙や電信のやり取りに差し支えるから、できるだけ帝都に近いほうがいいな」

「あなたその状態でまだ仕事してるの？」

どれだけ止めても、また知らない間に仕事をしこたまこしらえて……とエレンは呆れてしまう。

しかし、結局走り続けずにはいられない生き方なのだろう。

エレンも彼の伴走を続けて、いつの間にか走り続けているのだが、思えば随分遠くまできたものだ、とエレンは自らの人生を振り返

る。

「仕事も少しひかえるべきだわ」

「……わかった。少し考えてみるから、時間をくれないかな」

「お師匠様は一週間以内にはとおっしゃっているわ」

「夕方までには決めるよ、待たせはしない」

「そう、では夜勤のときにまた聞かせて。今日は薬局で会議があるの、行ってくるわね。それでは、またあとで」

エレンはぎこちない笑顔をつくり、ファルマに手をふって病室を出た。

このときファルマのもとを離れたことを、エレンは後悔することになった。

エレンは世界薬局の営業を終え、いつものように帝国医薬大附属病院に向かう。

更衣室で白衣に着替え廊下を歩いていると、なにやらいつもより慌ただしい。

「あら？」

すでに夜勤のスタッフと交代しているはずが、日勤のスタッフとすれ違った。

何気ないことであるが、エレンは胸騒ぎを覚える。

「ボヌフォワ師、大変です！」

顔見知りの看護師長がエレンの顔を見ると近づいてきて耳打ちを

した。

「どうしたの」

「ファルマ様が……」

帝国医薬大附属病院は表向き業務を続けながらも、水面下では大騒ぎだった。

ファルマの病室に向かうと、パツレがその場において、数人の医療従事者が集まり、ファルマはいなかった。

「エレオノール、ファルマが消えた」

「えっ……」

体位交換と検温のために看護師が病室を訪れると、病室はもぬけの殻だったという。

ファルマの部屋は特殊な錠前がつけられていたが、錠前は破壊されていた。

エレンは立ちすくむ。

「誘拐だろうな。外から錠前が壊されている」

パツレは職員の立ち入りを制限し、手がかりを求めて病室をあらためていた。

「ファルマくんは大きな声が出せず、指が少し自由になるだけ。自力では動けず、寝返りもうてない。助けを呼ぶこともできないわ」

今のファルマの状態は、無抵抗に等しい。

毎日適切なりハビリやケアをしなければ簡単に感染症を起こして死亡してしまうし、介助しなければ普通の食事もとれない。



「ファルマが失踪して半日も経っていない。においが強い今ならば追えるかもしれないな」

「どうするの？」

パツレは窓から外の様子をうかがう。いまにも迫ってきそうな分厚い雲が首都の空を覆い尽くしている。

「犬がいただろう。雨がふるぞ、急がせろ」

犯罪捜査に科学的手法を行う方針に切り替え、帝国医薬大が協力している。

訓練中の捜査犬が二頭いる。

深夜にもかかわらず、すぐに捜査犬が呼ばれた。

エレンはハンドラーにファルマの所持品を預ける。

……それから数時間後、パツレとエレンは帝国医薬大のハンドラーから第一報を受け取った。

二頭の捜査犬が確信を持ったかのように向かったのは……。

旧帝都最大の監獄要塞、バスティーユ監獄だったという。

「バスティーユ監獄……」

エレンは恐怖と憎悪の象徴であるその施設を脳裏に思い浮かべる。

「旧体制では政治犯や異端者を収容していたが、大統領の恩赦により全員釈放になった。凶悪犯は保安のために別の監獄に移送された。病床があいているから監獄病院も近隣の医院からの急患をとったりしているけど、実質あそこは今、職員や衛兵、傷病兵以外はもぬけのからだ」

「大統領恩赦なんてそんな、いつのニュース？」  
「昨日の朝刊だが」

政治情勢は旧貴族階級にある者たちにとっては重要な情報だ。  
パツレは日課として欠かさず新聞を読んで、情報屋からも情報を取り寄せていた。

「監房に入れられるのかしら」

バスティーユ監獄は監房も広いし、外の光も取り入れられる。  
着衣も食事も自由で、図書館や庭園、遊戯室もある。貴族の囚人であれば専属の料理人を雇うことすら可能だ、という話をエレンはサロンで聴いたことがある。

「正規の待遇をうけていればな……あそこは天井から吊るされる鉄の檻などもあって、待遇の差が著しい。それよりなにより、ひとたび監獄に収容されたら、収容者は番号で呼ばれ、名を名乗ることは禁止され、名を名乗れば即時射殺される。これにより囚人は完全に匿名になり、看守ですら囚人が何者なのか知らない」  
「つまり誰も、ファルマが収容されていると気づかないというわけ？」

「ああ……おそらく誘拐犯は看守を兼ねているだろうし、廃監獄の中で丁重に扱われるとは思えないな」

監獄の入り口は現在、主門の跳ね橋一箇所のみ。

神術のある世界ならば水や氷の神術を用いて侵入は簡単だが、神術を失った今、跳ね橋を上げた状態のバスティーユ監獄には堀を泳いで近づくしかない。

そして衛兵の監視の目を盗んで近づいたとしても、そびえ立つ高い城壁。

侵入は不可能で、脱出するにはファルマを運ばなければならない。大統領恩赦により囚人はなく、勅命逮捕状を発行できる者がいないため、今後囚人は追加されない。監獄の存続も決まってなければ、解体も決まっていない。

そんな中途半端な状況の中で、ファルマは表向き死亡した人間……世界中のファルマに恨みを持つ者が彼を狙っている。

大統領や国民議会に嘆願をうったえることもできない。

そんなことをすれば、ファルマが生存しているということが明らかに出てしまう。

もし、何者かが悪意を持ってファルマを幽閉し、彼を思うままにするとしたなら、

バスティーユ監獄ほど適した場所はないだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n8541cr/>

---

【完結済】異世界薬局（EP4） / 【連載中】世界薬局（EP4.1）

2022年10月18日00時04分発行